

うざい提督とブラック鎮守府

あばずれ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

言わずと知れたクソみたいなブラック鎮守府を蹂躪する提督の物語。

シリアスだろうとギャグだろうと全てぶっ壊す！

やられたらやり返す、やられなくてもやり返す、誰彼構わず八つ当たりだ!!

とまあこんなお話です。よろしくお願いします。

投稿不定期です。

7/6 やってみました

提督イメージ

摩耶イメージ

目次

Part 1. 縦横無尽のブルークオーツ

1. イライラの原因はカルシウム不足とは限らない | 1
2. 胸が大きいヤツはプライドも大きい | 7
3. シヤドーボクシングは地球に優しかったりする | 14
4. 頭を切断された鶏は二年間生き残るからしぶとい | 20
5. 防波堤で釣れるマグロはSSR | 27
6. しりとりで『ル』攻めする奴は人間じゃない | 35
7. 朝から声が大きいヤツは嫌われる | 41
8. 小さい女の子は適度に可愛がりましょう | 50
9. 予感 is 当たりたくない時に限って当たる | 59
10. 滝修行は見てるだけでいい | 65
11. 監視しているヤツはまた誰かに監視されている | 73
12. イケメンの歯が光るのは二次元だけ | 82
13. 国語のテストの問題は面倒くさい | 90
14. 校長先生の話は眠って聞くのが一番 | 99
15. 広辞苑で人は殺せる上に勉強できる | 105
16. たった一つの正義は存在しない | 112

Part 2. 万里一空のガーネット

17. 久しぶりに身体を動かした後の筋肉痛は凄まじい | 119
18. へそくりを隠した場所は大抵バレやすい | 128
19. 許す許さないを決めるのは被害者だけ | 134
20. 空に見放された二匹の龍 | 147
21. 嫌われ者は人気で忙しい | 155
22. 汚れた鉱石は磨くと輝きを見せる | 161

23.	蟹味噌は蟹の脳ミソじゃなくて臍臓と肝臓	168
24.	白髪長髪のセツト時間は約一時間	174
25.	デザートは食後に食べるもの	182
26.	概念	190
27.	アイスは溶けないうちに食べましょう	198
28.	砂の城は簡単に作れない	206
29.	戦闘中のお色気は程々に	213
30.	山水三千世界を万理一空に入れ、満天地とも攪る	220
31.	「友愛」	230
Part 3. 不撓不屈のダイヤモンド		
32.	オセロは角を取れば勝ち	239
33.	当たるか当たらないかは運次第	247
34.	破れない約束は何よりも堅い	254
35.	どちらも譲れないとしたら	263
36.	地下室は隠れるのに最適	272
37.	弱者だからこそ出来る事は無限大	281
38.	さらば希望の光よ、ようこそ魂の灯火よ	293
39.	黄昏に輝くその刀には	306
40.	宵の口で幽かに映る拳は	313
41.	逢魔ヶ刻に咲き誇る月は何処へ	321
42.	暮夜に苛まれる凶禍の再来	329
43.	地に落とされた龍は惨禍の過去を天に嘆く	337
44.	天が定めた運命とて龍は抗えず	346
45.	しかし龍は天をも断つ一閃にて運命を斬り伏せた	355
46.	五月闇に潜む卑劣な企み	365

47.	闇夜に変わる二つの一転攻勢	374
48.	朧夜に甦った惨憺(さんたん)たる走馬灯	383
49.	「不屈」	391
50.	朧月夜に映る、強く凛々しき月影に	399
51.	星月夜に戦う互いの信念に祝福を	408
52.	月夜に照らされる紅星と白影	417
53.	「純粹」	425

Part 4. 磨穿鉄硯のホークスアイ

54.	目の前にある二つの山は拝むべき	434
55.	アナログとデジタルは使いよう	441
56.	珈琲を淹れた後の抽出カスは意外に役立つ	449
57.	スムージーの飲み過ぎには注意しましょう	457
58.	馬鹿に感染る細菌は余程の馬鹿である	465
59.	短気な相手は煽れば案外チョロい	472
60.	胸を気にし過ぎるのはあまり良くない	478
61.	チャホヤされるのは猫だけでいい	485
62.	ドアの戸締まりには注意しよう	495
63.	一騎当千はまだまだ先である	502
64.	自由になるほど縛られる事もある	511
65.	本音と本音のぶつかり合い	518
66.	最初からあるモノと例えば	526
67.	鷹は夜空にて真鍮色の稲妻を纏う	533
68.	月下の海に駆ける二色の稲妻	540
69.	「愛情」	546

Part 5. 疾風勁草のアイアゲート

70.	人間は二つの変態で別れている	553
71.	姿は似てても性格は不一致	562
72.	馬鹿と気狂いは真実を言う、かもしれない	569
73.	田舎者は高層ビルを眺めたがる	577
74.	酒を飲む連中に毒を入れれば静かになる	585
75.	勘違いは程々にしましょう	594
76.	職場体験という名の社畜体験	602
77.	いいないいな、人間っていいな	610
78.	演じる最低最悪なヒーローを	619
79.	【このファイルから問題が検出されました】	627
80.	他人の不幸は蜜の味	636
81.	プライドが高い奴はロクなもんじやない	645
82.	悲哀の雨は風に揺らされ降り続ける	653
83.	口喧嘩も程々に	663
84.	過去、現在、未来でさえも	673
85.	後悔の水に打ち流されても	684
86.	人の心を持つモノ達へ	696
87.	気付いた事も気付いた上でやりました	710
88.	灰色の空に現れた蒼い水たまりの下で	717
89.	「自由」	729
Part 6. 捲土重来のバイオレットパール		
90.	深夜は右手を上下前後に動かす人が多い	739
91.	【このファイルに重大なエラーが発生しました】	750
92.	化け物同士の戦いはアメリカントークで	759
93.	空を自由に飛びたいな	767

94.	役者は揃いも揃って下手ばかり	776
95.	人生で一度は人の金で焼肉を食べたい	783
96.	狂気なる白銀は母の海にて憎悪を嘲け笑う	793
97.	勝手に写真を撮るのは肖像権の侵害	803
98.	さあ派手に狂って回って踊りましょう	811
99.	馬鹿って言った方が馬鹿というこの世の不条理	820
100.	コンプライアンスなどクソくらえ	827
101.	面倒臭い事はある日突然に	835
102.	頭痛が痛いとは日本語的におかしい	843
103.	ひみつ道具の使い方は人それぞれ	853
104.	永遠に続く悪夢の中で迷いなき復讐を	862
105.	臆病者は慎重過ぎても意味が無い	872
106.	誰かの掌で下手な役者は踊り続ける	880
107.	懺悔の暗海に兇気は舞い降りる	888
108.	本能の赴くままに鏢は輝き続ける	898
109.	「自尊心」	905
110.	恐れ舞え、あの輝く鏢鉄の狂涛を	915
111.	信じる心を穿け、戦う乙女よ	924
112.	いつか訪れるその日まで	933
Part 7.		
孤影悄然のアレクサンドライト		
113.	夏の暑い日に水着姿を	943
114.	肉は中まで火を通しましょう	950
115.	度重なる仕事は身体と精神に悪い	958
116.	悪辣なる孤立無援のヘルリークリーク	967
117.	さあ遂に戦端の幕は切って落とされた	977

1 1 8. 孤独な白い兔は縦横無尽に駆け回る

1 1 9. 真夜中に潜む狩人には要注意

1 2 0. 追い詰められた白い兔は激昂する

1 2 1. 不撓不屈の心を持つ白い兔よ

1 2 2. 磨穿鉄硯たる意志を持つて戦え

1 2 3. 最期に足掻く白い兔は疾風頸草の如く

1 2 4. 逆境の最中に輝くアルジエント

1 2 5. 約束されたトラディメントウオー

1 2 6. 墜ちた鉄鶴は偽（いつわ）りの白翼にて俯瞰す

1 2 7. 鬚鬚する龍は翠角を滾らせ空に舞う

1 2 8. 臆病たる者は戦欲を掻き立て海を駆ける

1 2 9. 海軍一の変わり者が貫き通した正義

1 3 0. 海軍一の減らず口が貫き通している恩義

1 3 1. 鋼鉄の戦人は最期まで足掻き続ける

1 3 2. 来たれ憎悪よ、剩る絶望は嘆きの空に

1 3 3. 紅黒い空に輝く双対の太陽、そして緋星流爛

1 3 4. 大海を啓迪（けいてき）するは、白金織り成す双光乱閃

1 3 5. 「秘めた思い」 1 / 6

1 3 6. 「秘めた思い」 2 / 6

1 3 7. 「秘めた思い」 3 / 6

1 3 8. 「秘めた思い」 4 / 6

1 3 9. 「秘めた思い」 5 / 6

1 4 0. 「秘めていた、変わらないはずの想い」 6 / 6

1 4 1. オプスキュリテは臆て晴れる

1 4 2. 身が朽ち果ててもソレは變わりゆく

1 4 3. 後悔 噬（ほぞ）を臍（か）むその先に

1 4 4. 誰にでもたまに甘えたい時はある

1 4 5. 洗い流されたアルジェントに更なる輝きを

1 4 6. 親が子を心配するのは当たり前、だと思いたい

1 4 7. 時代はこれから変わっていく

Part 8. 廻光返照のドロマイト

1 4 8. 夏の中でも残暑が一番暑い

1 4 9. 一度くらいは奉仕されてみたい

1 5 0. 鉄錆だらけなら重曹でも入れてみよう

1 5 1. 【このファイルの読み込みに失敗しました】

1 5 2. 病み上がりの身体はとても重い

1 5 3. どんな事もまずは真似る事から

1 5 4. 出る杭は打たれても壊れない

1 5 5. 大海ニ誕マレシ世界ヲ破壊スル七ツノ星

1 5 6. 朝の早起きが一番ツライ

1 5 7. エネルギーチャージはお早めに

1 5 8. 風吹く島は未だ日差しに照らされず

1 5 9. 滄海で輝く太陽は悩み続ける

1 6 0. 世界の果てまで行ってどうする

1 6 1. 狙うは一撃必中のカウンター

1 6 2. パソコンで調べものする時は気をつける

1 6 3. 行きたい気持ちをもっと押し通せ

1 6 4. 雲空の向こうに見えるのは

1 6 5. 黒雲に轟く碧色の稲妻（アストラファイ）

166.	レランパーゴは駆け抜ける	1522
167.	シャンディエンの苦悩は遙か彼方のモノ達へ	1533
168.	ザルニーツアは鳴り響いて	1546
169.	目覚めよ威禍津神、刹那は遅く	1558
170.	「前進する勇氣」	1569
Part. 9 鳳鳴朝陽のヘリオドール		
171.	山登りをする時は事前の準備を怠るな	1585
172.	社畜精神は身体を壊すモノ	1597
173.	可愛い女の子の膝枕は素直にされておけ	1606
174.	機会は見逃すな命短し恋せよ乙女	1621
175.	プールの中で尿をする奴は許してはいけない	1631
176.	世界のファッションセンスは訳分からない	1642
177.	ベッドの上で繰り広げられる色欲心理戦	1654
178.	汚れた鏝の轍はまだ見ぬ先へ	1664
179.	世界を憎めば	1679
180.	君に憎まれて	1696
181.	微かな光は未だ輝きを失わず	1709
182.	太陽の光は燦々と全てを照らす	1720
183.	残された点と点が線となり、光へ導く	1735
184.	鉄は叩けば叩くほど強くなる	1746
185.	地獄の島に降り立つ鋼鉄の天使達	1757
186.	都合のいい操り人形は使い捨て	1771
187.	希望の象徴となった金色の十字光	1783
188.	天魔の眷属は嘲りて	1792
189.	絶望と破壊を司る七つの星達の国墜とし	1803

199.	天魔の虚翼は全てを覆う	1919
198.	希望掻き消す殺意のメタモルフオーゼ	1909
197.	遭√? 諷取が縛ア縛薙? 譏溘 r 豸 医 ☆	1897
196.	戦場に運命は舞い降りる	1887
195.	犬や虎さえ屠る鐵の叡智	1875
194.	積もり積もった憎悪は鳴り止まず	1864
193.	片翼の鐵鶴 後編	1854
192.	片翼の鐵鶴 前編	1839
191.	勝つ為ならば手段は厭わない	1827
190.	揺らぐ戦場に邂逅を果たすのは	1815

Part 1. 縦横無尽のブルークオーツ

1. イライラの原因はカルシウム不足とは限らない

さてこれはとある鎮守府のお話だ。

その鎮守府はあまりにも有名、且つ凄惨な所だ。誰も行かない、行きたがらない。

なんでも前任の提督が夜逃げしたらしく、無法者と呼ばれた艦娘共が集まった所らしい。実際大本営も手をつけられないとの事。

「んーまあ正直そんな事俺には関係無いけどねー！ ってな訳で摩耶、これからあの鎮守府を襲撃——」「するかボケ」

「痛い」

冗談なのに殴られてしまった。よく触れば赤く腫れている。見事なたんこぶだ。それはさておき、どうやら辿り着いたようだ。

「予想通りと言えば予想通りだな」

まさに惨状。

窓ガラスが割れ、建物にはひび割れが残っている。随分とここの艦娘達はやってくれたようだ。提督は少し面白くなってきていた。

「二応警戒しとけよ？ アンタの事だから調子こいて殴られるなんて沙汰じゃないんだからな」

「二体それは誰のせいなのかなあ？ 分かってる分かっている。ノープログレ——行くか」

「言えないなら言うな!!」

摩耶にツッコまれた所で執務室まで向かう二人。鎮守府の広場が酷ければ中も酷い。掃除していない上に殺伐としている。内心ワクワクしていた。

「まるで廃墟じゃないか」

「そんな事言わずに……ほら行くぞ」

執務室の前まで来た二人。何か不安漂う雰囲気漂う。慎重して入った方が良さそうだ。

「ウワツ!!」

入ろうとした途端、大爆発。

目の前で摩耶が守ってくれたおかげで直撃は間逃れた提督。少し驚いたが、不安の原因はこれだろう。

「こりゃあ、熱烈歓迎大サービスだなあ——

——艦娘共」

執務室の中には艦娘が数名。砲口を提督に全て向けている。恐らくドアを開けた瞬間に砲撃をしたのだろう。余程提督は砲弾に愛されているらしい。

「摩耶、ありがとな」

「だから警戒しろとあれほど……」

「良いんだ良いんだ、さて……」

見れば分かる表情だ。怨みや憎しみが込み上げている。今すぐにも提督を殺したいようだ。ある者は砲口をこちらに向け、ある者は剣先を突き立てる。

「熱烈な歓迎どうもありがとう諸君。私はこの鎮守府に自ら配属した
■■■■だ。以後よろしく!」

「誰だろうがどうでもいい! ぶっ飛ばす!!」

「……殺伐としてるねえまるで第三次ソロモン沖海戦でも見てるような気分だよ摩耶君」

「まったく容赦が無いなこの鎮守府は……」

「まあまあキレるのはよしたまえ彼女らがいや、主に艦装が可哀想だ。それに惨めで醜く駄目な脳みそを持つてるんだ許してやってくれ」

「何様のつもりだてめえは!!」

「提督様のつもりですが何かイキリ眼帯君!!」

提督は早歩きで天龍の目の前に近づき、指を差す。

「私はわざわざ砲撃した君達を庇ってあげてるんだぞ何だその言い草は!! 君は先ず口の悪さを治したまえ、今から永平寺に行つて修行僧にでもなり、悟りを開いてからこの鎮守府に来るといい、少しはマシな口になるだろう」

「え……えっ?」

提督に指を差されながら壁まで追い込まれる天龍。場の空気を掴めず、困惑している。他の艦娘も同じ状態の様だ。しかし正気を取り戻した木曾が襲い掛かろうとする。が――、

「生意気だなコイツ、やっ――」「お前らの方がよっぽどの外道で生意気だけどなあゝ!! 己の不甲斐なさと愚かさを自覚したまえポンコツ兵器諸君」

「ポ、ポンコツ兵器って――」「当たり前前事を言ったまでだよ何か訂正する事でもあるのかね?」

「撤回しろ!」

「何が撤回だ本当の事だろう何を言っている、自覚すらないとは人間以下だ話す価値も無い。いいか? お前らは前任の提督に見捨てられた鉄屑だ、ロクに戦果を上げない、衛生環境は最低最悪、人間以下のポンコツ兵器共、数えれば数える程増えていく地獄のような場所だ、拳句の果てにはこうやって待ち構えて俺を殺そうとした! 笑止千万! クソ以下に匹敵する!!」

「チツ……」

「無意味で無価値で無能な艦娘はお前らを言うんだ、戦争の意味もロクに理解していない鉄屑がよくここまで生き残れたものだ他所の鎮守府の艦娘が風評被害で可哀想で仕方ないねゝこんな事をする暇があつたなら少しは遠征で足りない資材でも勝手に取ってくるがいい、最もその燃料は尽きてるだろうけどなああ!!!」

提督の言葉による弾幕に呆気にとられた艦娘達。何も言い返せず、ただ立ち尽くしていた。話している間、ほとんど指されながら自然に詰め寄せられ、後退りしている。

「提督、スツキリしたか?」

「二パーセント程。えーつと、木曾、最上、金剛、榛名、長門、天龍、時雨、電か。戦力は充分だなあ撃ってきたのは長門、天龍、木曾、榛名ねえ……何で摩耶生きてんだ?」

「運」

「ああそう」

「ちよつと待ってください!」

呼び止めたのは榛名だ。

何か言いたげそうな顔をしている。

「……今、貴方は自ら配属させたって……」

「ああそうだよ、陰気臭くてふしだらで臭くてどうしようもない大本営に色々言われてもんだから、仕方なくここを選んだんだ」

「……階級は？」

「中将。ほれ凄いだろ？ お前らの腐れきったプライドより雲泥の差だと思えポンコツ兵器共め」

艦娘達がどよめいている。中将と聞いて困惑しているようだ。無理もない、海軍一の減らず口と呼ばれた上、あまり姿を現さない事で有名だからだ。

「ほれほれ凄いだろ？」

「何故中将様がここにいんだ？」

「事情は言えないよ。そうだなー、君達が執務室を明け渡してくれたら話さない事も無い」

「……って何で座ってんだア!!」

「えっ!? 本当だ!!」

いつの間にか執務機の椅子に座っていた提督。

自身も無意識で座っていたようだ。

「ツ……てめえ……!」

「おいおいたかが人間如きに騙されたくらいで怒るなよ、カルシウム不足だぞイキリ眼帯君。毎日牛乳か煮干しでも食べて身体の中にカルシウム吸収した方がいいぞ、まあ胸に全吸収されそうだけど」

「ぶっ殺す——」「さつきから殺す殺すってなんなんだ失礼だぞ!!」

「散々指差してるお前も失礼だろがア!!」

「黙れ、俺は偉いんだ!」

「コイツツ……!」

執務机に上り詰め、提督は天龍に指差す。

殺すとしつこく言われてイラついたのか口論になった。

「よーし執務室は奪えやし、一ヶ月間ぐらいは何もしないから帰っていいよー、解散ー」

「ちよつと話を勝手に進めないでください！ 何故中将の貴方がこんな事……！」

「別にいいだろ本当の事言われたぐらい。悪い事をしたな天龍、その物騒な剣を持つてってさっさと部屋に戻り、体育座りで自分がやった愚かな行いを存在しない神に導いてもらうがいい」

「何だと……コイツ……!!」

「はいはいそこまで。一回落ち着こうか……天龍」

提督と天龍の間に摩耶が手を伸ばし、口喧嘩を仲裁する。天龍が提督共を嫌ってる理由は大体把握している。悔しくもこの艦娘達はそうなくてもおかしくない出来事を身をもって知っているのだ。だからと言って提督は優しい言葉で艦娘を懐柔するほど優しくは無い。「別にお前らを解体しようとして来た訳じゃない。この鎮守府が相当馬鹿の集まりの様だから俺が直々に来てやったんだありがたく思えこのっポンコツ兵器共オオオ!! 以上!! 解散!! 寝る!!」

「提督、ウザいからやめてくれ。あと寝るのはやめろ」

「あ、はい」

机の上に立ち上がり、提督は変なポーズで威嚇する。並ならぬテンションに困惑する艦娘達。最早怒る事すらおかしく感じた。

「先程話した通り、今日から一ヶ月間はマジで何もしない、っていうかしたくないので休みにします」

「アタシは摩耶だ。このクソ提督の秘書艦を務めてる。最初に言っておくけどクソ提督を傷つけても構わない……だが……」

「いやおかしいぞ摩耶。普通そこは命にかえてもまもツブフォ!!」

秘書艦の摩耶は提督を殴り、強制的に黙らせる。イライラしてたのか呼吸が荒い。というか摩耶自体、存在が少し歪だった。赤い目に白い肌、深海棲艦と少し似ている。

提督と名乗る人物も白髪長髪と深海棲艦を思わせる姿だ。

「……クソ提督を殺そうとするなら死ぬと思え」

誰もが思った。

(いや……あなたが先に殺しそうなんですけど……)

殺そうとした天龍も殺る気を失くしたらしく、手を下ろした。皆提

督のテンションについていけない。

「つてな訳で以後よろしく。解散かつこ三回目かつことじ!!」

不思議な雰囲気に含まれながら艦娘達は執務室を去っていった。執務室には提督と摩耶だけがいる。提督は鞆から書類を取り出し、一枚ずつ読み上げた。

「こりや相当酷いぞ摩耶。心が廃れてる」

殆どの艦娘が心に傷を負っている。その原因は分かりたくとも分かかってしまった。

「初代による罰という名の暴行、売春、捨て艦戦法、即時解体。こりやブラツクの典型的な例だな。全く、惨い事してくれる」

「これからどうするつもりだ提督」

「とりあえず鎮守府の状況からだな。艦娘のメンタルチェック、資材の確認、工廠の整備、各寮の掃除、治安の維持。やる事は沢山だ、ワクワクして堪らないな」

興奮が止まらない提督。常時このテンションなのが余計腹立つ。仕事は一人でこなせる様な量ではない。だから摩耶がいるのだ。

「……仕方ないな、アタシも協力するよ」

「言わなくてもやらせるつもりだったけどな」

「ああそうですか」

2. 胸が大きいヤツはプライドも大きい

鎮守府に辿り着いて一日が過ぎる。皮肉な事に太陽の光はこの鎮守府を見逃さないらしい。あれだけ闇を抱えた艦娘達がいながら希望となる太陽の光は目障りな事だろう。提督は早起きして、各寮の掃除へ向かっていた。何を隠そう、提督は大の潔癖症である。

「あームズムズするわあ」

天井に出来た蜘蛛の巣を払い、埃が溜まった窓縁を拭いていく。埃を全て拭き取った時の窓縁の美しさはまさに快感が走る。綺麗すぎて心が洗われそうさ。

「廊下の乱れは心の乱れ！ 部屋の乱れは心の乱れ！ フハハハハ！！」

テンションがおかしいだけに近寄れない。五月蠅く掃除する提督を覗く艦娘達は反応に困っていた。恐らく今は関わってはいけない。

「そこで覗いているお前らも手伝え！ 心が乱れておるぞ！！ 夕立、時雨エ！！」

「ヒエツ……！」

覗いていたのは夕立と時雨。常時ハイテンションな提督を確認してきたようだ。どうやら提督は気付いていたらしく突然振り向いて話し掛けてきた。

「あ、逃げられた。まあいいか、掃除だフハハハ！！」

笑いながら掃除をしていると遠くて砲撃音が聞こえた。割れた窓から覗き込む。そこには一部の艦娘達が勝手に許可無く出撃していた。

「あらまあ暴れたいお年頃なのかな。頑張ってもらわなきゃね。お、あれは……」

出撃しているのは天龍と摩耶。艀装を構えて海に浮かんでいる。

「摩耶かあ……摩耶ア!？」

——数十分前。

摩耶は提督に頼まれ、資材の状況を確認していた。予想通り資材は枯渇、出撃するにしてもあと二回程だろう。何より衛生面が酷い。提督であれば即座に掃除し兼ねない程だ。

「よお摩耶」

「……天龍か、何の用だ？」

「お前がアイツやお前自身の事を知ってるだろうから聞きに来た」

直接本人に聞けばいいのにと思いつつ仕事しながら答える摩耶。質問といつてもごく単純な事だ。

「アイツ、強いのか？」

「子供か天龍」

「んだとコラ」

「冗談だ。アタシ達の前では大して強くはない……だが人間の中じゃ頂点かもな」

「……どういう事だ」

「そのままだ。いいから早く行ってくれないか？ 情弱と話してる程暇じゃない」

「聞き捨てならねえな、誰が情弱だった？」

声に怒りが現れたのが分かる。悪口を言われて天龍はイラつき始めた。

「お前らの事だよ。もっと自身を見つめ直したらどうだ？」

「あ？ アイツが殺されてもいいのか？」

「愚問だな」

両者睨み合う。春の暖かい風が吹き通り過ぎていく。沈黙が走り続けた。するとお互い暗黙の了解で出撃工廠へ向かう。

海に出れば即、砲撃。

「はえー摩耶が戦ってるなんてなあ……」

遠くから窓越しに覗く提督。まるで野球観戦のようにそれぞれ応援していた。無邪気な子供のように面白がっている。すると途中歩いてきた長門が話し掛けてきた。

「む、提督か。ここで何をしている？」

「試合観戦」

「……成程試合観戦か。それよりもだ提督、あの時の砲撃は申し訳なかった」

「あ、うん全く気にしてないから。むしろめっちゃくちゃ面白かったよ。もつとやってくれ」

「……天龍と提督の摩耶か。資材が足りないのに何をやってるのだから……」

頭を悩ませる長門。そんな長門を見て提督は声を掛けた。

「心配無えよ、資材は何とかなる。それに——」

「ん？」

「——お前らが束になっても摩耶には絶対勝てない」

「っ……」

——鎮守府近海

「準備はいいか摩耶」

「そちらこそ負けた時の言い訳を思いついたか天龍」

「……言ってくれる」

穏やかな海に浮かびながら構える二人。どちらも勝気で一步も譲らない。

「一発で決めてやるよ!!」

「痛い」

勝利を勝ち取ったのは摩耶。傷は負ったものの平然としている。

一方で天龍は大破寸前の重傷者。艦装から煙をあげている。

「よく痛いですませるな天龍……あれだけ砲撃を食らっというて」

「うるせえ!! てめえが卑怯な手を使いやがったからだろア!!」

卑怯な手といってもただ単に移動位置を予測して砲撃を繰り返しただけである。ついに知能まで落ちてしまったかと摩耶は落胆した。

前任の提督が如何に無能なのかよく分かる。

「はあ……まあとにかくだ。アタシは内戦を好まない。さつさと入渠して身体を癒すんだ」

「チツ……」

天龍は舌打ちしながらドッグへ向かう。頭を掻きむしってその場を出ていった。何とも言えない態度に呆れる摩耶。中断された仕事の続きを始めた。

「ほらな、勝てない」

「恐ろしい強さだな、あの摩耶は。改装を二回しているだけある」

「だーろう？ 育てた俺を褒めて欲しいもんだね。あ、褒めていいよ？ 褒めまくって？」

「……残念ながらこれから私は用事がある、では」

長門も提督を置いて何処かへ行ってしまった。その顔は少し悩んでいる表情だ。提督はウザがられた時の反応が面白くてわざと言っている。だから長門の表情はまた面白いものだった。

「ああ面白い。さて、風呂の掃除でもするか」

提督が駆け足で着いたのは艦娘専用の入渠施設。

といつても簡単に言えば銭湯だ。艦娘達はこの場所で指定された時間を使い、汚れや傷を癒していく。高速修復材もあるがこれは貴重な物なのであまり使用は許可されない。

「酷えなオイ！ 入れるレベルじゃねーぞこんなの!!」

声を大にして嘆く提督。風呂は誰も清掃していないみたいだ。酷く廃れている。清掃員がいないので仕方ない事ではあるが、これは酷い。

「つたく……何て事しやがるんだあのクソ野郎は!! 俺の仕事量も考えろ！ あと水！ うめえ!!」

自身で持ち出した水筒の水を飲み干す提督。そしてバケツの水でモップを浸し、汚れた床を拭いていく。入れるレベルではないが風呂桶はまだ綺麗な状態であるのが幸いだ。

「いやー汚れを拭き取った後の床はピカピカで身体中から電気出ちやいそう。よっしや洗ったるわー!」

「おいどういふ事だよコレは！」

入口から人の声が聞こえた。聞き覚えのある声に提督は呆れながら振り向く。

予想通り天龍が自身の身体を癒しに入渠しに来たようだ。それなりに怪我はしている。

「何で俺らだけの場所にてめえがいんだクソ野郎！ セクハラしに来たのか!!」

「何でてめえのふざけた体目当てにここまで来なきやならないんだ。自惚れも胸だけにしてほしいねー」

「ツ……てめえ……!! 言わせておけばアア！」

「勝手に出撃しといてウチの摩耶にボロ負けした天龍さんがお怒りの模様だあ、さあこれは命令違反だなー、どーしよーかなー」

提督はあくまでこの鎮守府の責任者。艦娘達はそれに対し、命令は絶対尊守される。

事前に提督は出撃してはいけない事を伝えている。それを破った天龍は知りながら摩耶に喧嘩を売っていた。何故か命令違反と聞くとな龍は身体を小刻みに震わせ、酷く怯えている。

「……頼む、鞭打ちだけは……」

「ん？ まあとにかくだ——」

提督は怯える天龍に言葉を投げ掛ける。

「——自分で勝手に負った傷ぐらい自分で治せよ」

「は、はい……」

あるトラウマを思い出したのか天龍は深く座り込んでしまった。濡れた床が冷たく感じる。それを見て提督は罰を述べた。

「つてな訳で罰として天龍さんもーこの清掃を手伝ってもらいマース!! 異論はありません!!」

「……へ？」

誰かの口調を真似て喋る提督。その罰は提督と一緒に風呂を清掃する事。あまりにも奇抜な罰に天龍は思わず変な声をあげた。

「あ？ 清掃やるんだよ、ほら早く立つんだよ！ スタンドアップ、スタンドアップ!!」

「……」

一時放心状態の天龍。言葉を理解するのに時間を要した。しかし言葉を崩しつつその意味を理解する。

「スタンドアップ、スタンドアップ!!」

「うるせえ!!」

「あ痛いツ!!」

天龍に殴られ、尻餅をつく提督。スタンドアップ連呼にイラついた天龍は即座に立ち上がった。

そしてモツプを持ち出し、提督を呼び掛ける。

「やってやるよ、やりやあいんだろ!？」

「……え、何を?」

「お前がやれって言ったんだろア!!」

ツツコミが終わった後、黙って清掃する天龍。何を考えているか分からない提督の事を考えつつ、シャワーで洗い流す。常時ハイテンション、棘のある発言、時々感じる怖気。自身の中で提督の存在は謎に包まれた。

「ぶっは、何これ超笑えるんだけど!!」

その提督という人が今床に溜まった汚れで遊んでいる。いや、遊びながら掃除しているの方が正しいだろうか。風呂場は笑い声が絶えない。

一人だけで。

「よっしや、軽くこんなもんだろ」

「……終わりか?」

「終わりだよ。ほら入って身体を癒しな」

風呂桶に湯を沸かす提督。汚れでジメジメしていた風呂場は一気に綺麗で清潔な風呂場へ変貌した。

提督は満足した途端にその場を出て行くこうとする。

「お、おい……罰は……」

「あ? さっきので終わり。ほら念願の入渠だぞ、入れよ」

「……懐柔させたって無駄だぞ」

「え? 何? 懐柔させてほしいのオ?」

天龍の言葉にやけに食いつく提督。耳を被せて恰も聞こえないよ
うな素振りで聞き始めた。

「ち、違ッ…」

「えーでもお、そう言ったって事はあどこかでそう思ったって事だよ
ねええ!!」

「う、うるせえんだよ黙れ!!」

「悪いけど俺はお前達を懐柔させる程甘くはない。その胸みたいな無
駄に大きくて色気すら無くて碌な使い道も無いプライドを駆逐艦並
にボコボコに叩きのめして小さくしてから現実を見つめ直すように
調教してやる! ではバイビー!」

提督は吐き捨てる様に手を振りながら行ってしまった。その言葉
が冗談に聞こえなかった天龍。

あの時の目は前任の提督の目にそっくりだった。

「何なんだよ……アイツは……」

3. シャドーボクシングは地球に優しかったりする

夕方十六時。

そろそろ空が茜色に染まる頃だ。依然として提督は駆逐艦寮の掃除をしている。口笛を吹きつつ、窓縁を拭いていく。

現在駆逐艦は六人しかいない。殆どは度重なる出撃の疲労による轟沈、捨て艦戦法や解体による死刑。何十人といたはずの駆逐艦寮はとても静かだった。

「いやースツキリするなあ、掃除は心が洗われる。よし次！」
「ねえ」

誰も近寄り難い提督に声を掛ける。振り向くと時雨と夕立が怯えて待っていた。

「なんだ？」

「司令官は……その、悪い人なの？」

悪い人。

恐らく前任の提督の事でも思い出したのだろう。小学校中学校程度の身体を持つ駆逐艦達は大人より小さい事からよく痛めつけられたと聞いている。そのトラウマを抱えながらも時雨は勇気を持って話し掛けてきたのだ。

「……さあね分からん」

「そんな……」

「それはお前達が決める事だ、勝手に決めとけ。あ、でも俺有能だからア!! そこんとこよろしくウー！」

突然のハイテンションについていけない二人。本当は軽巡と重巡を集めてリンチする準備の為に呼びかけようとしたが、最早それをするのも失せてしまった。

「何が有能なんだか、聞いて呆れる」

遠くから聞こえたのは多くの艦娘を連れた木曾の声。前も後ろも取り囲まれ、脱出出来ない状態を作られた。空気がピリピリする。

皆殺気を放ち、手を握っていた。

「お前の馬鹿さ加減は最高級らしい」

「……」

「時雨、夕立、こっちに来るクマ」

球磨型姉妹の長女、球磨が時雨と夕立を誘導する。提督を取り囲むのは駆逐艦、軽巡洋艦と重巡洋艦の十二名。時雨、夕立、球磨、多摩、木曾、最上、鈴谷、青葉、加古、阿賀野、矢矧、那智。全員改装済みだ。

「これはこれは大所帯で……挨拶でもしに来たのかな？」

「は？ これから貴方はサンドバッグになるのよ？ 何言ってるの？」

「え？」

「えっ、て。察を掃除して優しいアピールしてるみたいだけど私達はそんなので何も影響しないよ？ 馬鹿なの？」

「お前らこそ馬鹿じゃね？ 駆逐艦察に入ってくるとか変態かよ」

「アア!? ぶっ飛ばされたいのアンタ!!」

提督を挟んで怒号が飛び交う。一部良く思っていない輩もいる。それよりも提督は余裕の表情で笑っている。

「まあサンドバッグにはなれないけど喧嘩相手にはなれるぜ」

「何が喧嘩相手だ、仲間に暴行したくせに」

「ん？」

恐らく木曾達は摩耶にボコられた天龍の事を知って来たのだろう。イラついた提督が摩耶を使って暴力をさせた的なシナリオでも思い込んだかもしれない。仲間思いも良いところだ。

「あーそんな事あったのかあー……」

「なに寝惚けて——」「晩飯は何？」

「カレーだ……って知るかア!!」

木曾のツッコミが炸裂。周辺の不思議な雰囲気、艦娘達は反応に困っている。

「とにかくだ！ お前をリンチしてやる！」

「……リンチねえ……別に殺さなきゃやられても構わないがそれ相応

の罰を受けてもらおうぞ」

「はっ。」

罰と言った途端、艦娘達が一斉に怖気ついた。

頭を抱えて身を守ろうとする者や涙を浮かべながら反抗の眼をする者が殆どだ。提督の予想通り、この鎮守府にいる艦娘達は全員、前任の提督による罰がトラウマ化している。故に罰を受ける前に提督を殺そうとする守衛本能だ。

その罰など反応からして容易に分かる。

「どうしたあ一斉に泣き出したぞ?」

「お前……分かってて地雷を踏みやがったな……!!」

「此方は一方的に殴られようとしたんだ。対策ぐらいチンパンジーでも考えるだろ」

「だからと言って……!」

「弱いなあ」

提督の声に皆圧倒された。外まで響いているのが分かる。

「弱い弱い弱い弱い弱いなだよお前達は。地雷? んなもん知るか現実逃避し過ぎだ。アイツに罵られた屈辱を、大切な仲間や友人、姉妹を奪われた痛みを、何も出来なかった自分を、その苦しみをお前達はその現実を変えようと思わなかったのか?」

一方的に喋り続けながら木曾に近づく提督。その言葉を聞いた艦娘が耳を塞ぎながら次第に腰を下ろしていく。

聞きたくない、嫌だ、やめたと嘆き始めた。しかし提督はそれぞれに指差しながら言い続けるのをやめない。

「お前らなんてどうせ使えもしなかった鉄屑だそんな事など思いつかなかったんだろう惨め過ぎてかける言葉すらない」

「やめてよ……!!」

懇願するのは最上。目に涙を浮かべ、こちらを見ている。必死な思いで口を開いた。

「わわわ私達だって……私達だって抵抗した!! でも……仲間を人質にされて抵抗出来なかったんだよ!? そんな事も知らない癖に知ったような口しないでよ!!」

「ああ!? だったら人質がいればお前らは反抗しなくなるのかあ!?
よくもまあこの状況で被害者ぶって考えたがるねえ口クに戦いもしないポンコツ兵器共が!! それに知りたくもないねこんなクソみたいな鎮守府の事情なんぞ。抵抗出来なかった? 違うね人間以上の力を持ったお前達が何であんなクズを俺みたいに殴ろうとしなかったのか、殺せなかったのか、答えは簡単だ……保身に走ったからだ」
「違う……!!」

「いや違わないねえ最上、前任に反抗すればその後の予想出来る人生に恐れをなして何もなかった、だから結果的にお前達は現実を変えようとしなかった、最終的には逃げられて何も出来ずにくたばるまで放置された、なーんて愚かで醜く卑劣なんだろうつくづく反吐が出る」

ついには多くの艦娘が泣き喚いた。執拗な提督の言葉の弾幕に屈してしまったのだ。耳を塞いでも聞こえるその叫びは艦娘のあらゆるプライドを崩していく。

「自分を道連れにしてもでも反抗しようと思わないポンコツ兵器共がよーくここまで生き残れたものだよ賞賛に値するねえ。お前らを残して沈んでいった仲間も生き延びてと祈って無様に沈んだのだろう、何て惨めな人生だこちらまで恥ずかしくなってくる馬鹿みたいに」

「黙れ!!」

「いいや黙らない!! いいかお前らの心情は一切聞かないし聞きたくもない、今俺に構う暇があるなら戦争という言葉の意味を空洞化した脳みそで愚かなポンコツ同士惨めに話し合いながら部屋に閉じこもつてろ、暇があればの話だな!!」

提督による言葉の弾幕が終わる。その声は外や他の寮まで聞こえるほど響いていた。廊下では泣き声が重なって聞こえる。

いつの間にか皆、床に座っていた。

「……俺がお前達を変えていく」

「え……?」

「何も出来なかったお前達を俺が変える。お前達がやりたい事、叶えたい事、何でも出来る範囲で聞いてやる。なんせ俺は有能だからな

!!

言った後に提督はこの場を脱出する為、窓縁に乗る。ここから飛び降りるつもりだ。とはいえここは駆逐艦寮の三階。人間では怪我を負ってしまふ。それを見た最上は思わず手を伸ばした。

「待って!!」

「あ、俺からもう一つ」

「え……?」

「強くあれ! じゃあな、また明日!」

そのまま提督は飛び降りる。必死になり窓から頭を出した。下を確認すると平然と歩いている提督の姿が見える。地面には着地した僅かな跡が。何とも理解し難い状況に最上はただ立ち尽くす事しか出来なかつた。

——夜

鎮守府の周辺は深い森林に囲まれている。少なからず虫の音が聞こえた。大体は割れた窓ガラスのせいでもある。

「あんな事言つて良かったのか提督」

「ん? タベの事か? 心配するな、じき面白い事になる」

「面白い事……つて一体何があつたんだか……」

「んーただのストレス発散だろ。結局は俺という提督を殴つて殺す事で過去に助けられなかつた仲間や姉妹の為に償おうとしてるだけの話。全く無駄で無意味で無価値な行動だ、まだ空気でも殴つてた方が遥かに世界に優しい、それにアイツらは戦争とは何かを勘違いしてる」

不気味な笑みを浮かべこれから起こる出来事に興奮する提督。摩耶は大きい溜息を吐き、不満を漏らす。

「何故私はこんな奴に惚れたんだか……」

「ウヒヤヒヤヒヤ、精々頑張ってくれよ摩耶君」

「はあ……で提督、資材の状況なんだけど——」

摩耶は書き上げた報告書を渡す。資材の枯渇状況、工廠の整備状況

など事細かく記されている。提督が珍しく静かに読んでいる中、補足を加えて説明した。

「なるほどな。まあある程度は予測してた事だ、別に慌てる様な事じゃない。既に手配はしてあるから資材は大丈夫だろ」

「そうだな、しかし工廠には明石も居たがどうするんだ?」

「あーいるのね、了解。んじゃ明日にでも色々話に行こうかな」

書類と報告書をまとめあげ、机の引き出しにしまおう。夜二十二時、消灯の時間だ。艦娘達にとってはだが。

「摩耶は重巡寮か?」

「ああ、荷物は既に届いてる。恐らく提督のも自室に届いてると思うぞ」

「おう了解。さすがはウチの摩耶」

「褒めて撫でたって何も出ねえよ、クソが」

「別に何か欲しいのとは一言も——グフェツ!!」

余計な一言で提督はまた殴られ、床に叩きつけられた。

「罰、ねえ……」

「何か分かった?」

「いや……下半身の社会の窓が開いててヤバ——」

4. 頭を切断された鶏は二年間生き残るからしぶとい

「ぎーて今日も一日張り切ってやりましょー!!」

大声を上げる提督。この鎮守府に来て一日が経過、依然として絶望的な状況に変わりはない。艦娘よりも先に起きた提督は広場へ向かった。

「窓ガラス百三十一枚、注文あざーした!!」

「こちらこそあざーした!!」

割れた窓ガラスの修復の為、大本営から送られた新品の窓ガラス百三十一枚。これから建物の修復に入るところだ。

「さて摩耶君、この運ばれた窓ガラスを使って全ての窓を補修します。

割ったら許しません！ 番号！ いち！」

「にー……」

「さん！」

「よーしいい声だ！ 三人合わせて頑張る……三人？」

広場には提督と半強制的に起こされた摩耶しかない。それに艦娘達はまだ寝ているはずだ。声が聞こえるはおかしい。すると手を伸ばしてピョンピョン跳ねている艦娘が一人増えている。

「朝潮型駆逐艦の一番艦、朝潮です！ 司令官、本日からよろしくお願
いします!!」

「おーおー朝潮か！ 元気のある奴はいいぞー！ んじゃ早速作業始
め!!」

三人でこの鎮守府全ての窓ガラスを補修する。古くなった窓を新品と取り替える形でスムーズ良くはめていく。何故朝潮が手伝ってくれたのか分からないが、これはこれで使えるので提督の中ではオーケーだった。

「よし、駆逐艦寮終わり！ 次は軽巡寮だ!!」

「はいー」

「……面倒くさい」

朝から威勢のいい提督と二人は次々に窓ガラスを補修していく。時には口笛を合わせながら仲良く補修作業を繰り返していた。並ならぬテンションに摩耶はついてはいけず、一人で作業をしている。

「よーし軽巡察終わり!! 次は重巡察だー! 行くぞー朝潮ー!!」

「はいー!!」

「……寝る」

「おいおい摩耶、まだ朝は始まったばかりだぞ!! 元気出せ、殴るゾ
ファッ!!」

遂には睡魔に耐えきれず、摩耶は重巡察に入るなり自分の部屋へ戻った。ウザい提督を殴り飛ばして。しかし二人はそんな事など全く気にせず作業に取りかかった。次々に音速並みの速さで窓を補修、やがて司令本部だけとなる。

「いやー楽しいなー! 誰かといると本当に楽しい!!」

提督であれど警戒はする。いきなり馴染み始めた朝潮の存在を考えていた。何故この時間に起きていたのか、何故か広場に集まる事を知っていたのか、何故警戒心が無いのだろうかといくつもの疑問が生じる。

試しに提督はある言葉を持ち掛けた。

「朝潮ー!!」

「はい! 何でしょうか?」

「えーっと……罰」

罰と言った瞬間に朝潮は光の速さで土下座。額を床につけ、何度も自分の存在について謝り続けた。恐るべき反応速度に驚かされる提督。対応に困ってしまう。やはりここの艦娘は罰という言葉に相当敏感らしい。

「はあ……朝潮?」

「ごめんなさいごめんなさいごめ——は、はい……」

「何で俺らと一緒に手伝ってくれたんだ?」

「それは……その……解体されない為に……」

「はっ」

思わず声が漏れてしまう。何故そこで解体という言葉が出てきた

のかよく分からない。

だが恐らく前任の提督から何かしらの処遇を受けてきたのだろう。「手伝う事で自分は優秀ですよだから捨てないでくださいアピールか」

「はい……妹達は全員轟沈か解体、私だけ生き残りました……」

「……オツケーじゃあ、手伝ってくれ」

「え？」

話も聞かずに提督は作業を続ける。

「俺はお前達の昔話を聞いているほど暇じゃないんだ。話す暇があるならほら、スタンドアップ！ スタンドアップ！」

天龍時にも見せたスタンドアップ連呼。両手で立つ事を促す様に上下に動かし、ジャンプしながら連呼している。

「は、はい……」

今まで騒がしく作業していた二人。提督は相変わらず口笛を吹いているが、朝潮は黙り込むままだ。気分はあまり落ち着かない。

「朝潮、お前は今後何がしたい？」

「え？」

提督は話し掛けるも作業は続けたままだ。話してる暇が無いと言いながら矛盾な行いだ。

何を考えているか全く分からない。

「何がしたいって聞いてるんだけど？」

「は、はい！ 私は……今後何もしたくない……です」

「そうか、分かった」

結局全ての窓の補修が終わるまで会話は続かず、最後の会話だった。朝潮は終わった後に食堂で朝礼する事を伝え、艦娘達を招集させる事を命じた。その間提督は使った工具や雑巾を工廠に放り投げ、身体を洗う。そして軍服に着替え、一足先に食堂へ向かった。

食堂の中はある程度綺麗な状態だった。艦娘達が食事をする場所として一応清掃はされているようだ。しかし大の潔癖症の提督、大きい溜息を吐いた。

「後で掃除しなきゃな……川内」

「……やあ提督、久しぶり」

「相変わらず目にクマが出来ていて安心したよ川内、さぞかしここは辛かっただろうに」

川内は提督と面識があるらしい。目にクマが出来ていて、酷く眠たそうだ。とはいえ川内自体も提督と出会えて嬉しかった。

「ごめん……本当に辛かった。抱きついてもいい？」

「……はあ……仕方ない、特別だ」

提督の許可を得て川内は涙を浮かべ抱きついた。川内自身も辛い思いをしていた、期待していた新たな生活が全て破壊され、精神が混濁しかけていた。面識のある提督と出会えたのは奇跡とも言える。

「さて泣きじやくる暇があるなら慣れない仕事だ川内」

「……提督も相変わらずだね」

「相変わらずで結構。頼むぞ川内、報酬は後で聞こう」

「これやれば寝る事も出来るの？」

「あの時まで夜戦バカと呼ばれたお前が寝るって相当な劣悪環境だなオイ！」

「ごめん……もう眠たくて仕方ないんだ夜戦は一日一回でいい」

「あ、一日一回になのね」

「でも分かった、やってみるよ」

「頼むぞ」

久しぶりに笑顔を見せ、姿を消す川内。

提督は二階に昇り、テーブルへ座る。太陽の光が差し込み、自然に食堂の内部を照らしていた。テーブルには掘られた文字で『死ぬ』と書かれていた。思わず笑いそうになりスマホで写真を撮る。すると扉から朝潮から連れ出された艦娘達が入ってきた。最後尾には摩耶がいる。

「よーしよく集まったなポンコツ兵器共！」

遠くでも聞こえる程の大声で呼ぶ提督。

上を見上げる艦娘達は陰口が止まらない。案の定、敵対心は普通の人間であれば怖気付く程恐ろしい。しかし提督には無意味だ。

「一回自己紹介したが改めて挨拶しよう！ 私は先日このクソのよう

な鎮守府に自ら配属させた■■■■だ!! 以後よろしく頼む!」

一部から軽蔑の視線を送られるも提督は全く気にしていない。むしろこの状況を面白がり、にやけが止まらない。

「お前らポンコツ兵器共を心身ともに鍛え上げると上からの通達でね、これから色々やっていこうかなー……いややっぱ面倒くさいな」

どっちだよと心の中で思いつつ、一人の艦娘が手を挙げた。

「先程からポンコツ兵器って耳障りなのだけど、私達も安く見られたものね」

落ち着いた口調に凜々しい瞳、加賀型航空母艦の加賀だ。正装に着替え、提督の言い方に反論を問いつける。

「当然だ、反抗も出来なかったポンコツ兵器共だぞ? 散々前任に反抗出来なかった癖に俺が着任したとなれば殺そうとするまさにポンコツの名に相応しい兵器共だ。スーパーの格安セールで売られてもおかしくないだろ」

「貴方は何も知らないでよくそんな事——」「シャラップ!!」

「……お前らの過去話を聞いたってインスタントラーメンが出来上がるぐらいだ。だったら黙ってその場で耳を澄ませ開かせこじ開^あけて俺の話をよくちゃーんと聞^きくがいい」

「ここにいる全員は貴方を提督とは思っておりません」

「思わなくて結構。お前らが思わなくても俺がここの鎮守府の提督にさせたんだ、なんとも言え氷河期」

全く怯むつもりもない提督に艦娘達はどよめく。徐々にイラついているのがよく分かる。しかし煽るのが大好きな提督にとっては都合のいい状況。

「殺していいか?」

「殺せるものなら殺してどうぞ。勿論俺は反抗するけどウチの摩耶が何するか分からないからなあ、気をつけたほうがいいぞ」

最後方に立っている摩耶を見る艦娘達。摩耶は臨時戦闘態勢に入っていた。艦装は展開していないが、出す動作をしている。そして敵視するように艦娘達を睨んでいた。

「どうせ人間なんてゴミクズしかないのよ」

「そういうお前らもゴミクズならぬ鉄屑だけどなあああ!!! 自覚すらしていないとは何ともおめでたい頭だ流石鳥頭だなあアングリーバードオオ!!」

「何よアイツ!!」

「今日の朝ごはんのおかずはー?」

「今日の朝ごはんのおかずはー、塩鮭でーす!!」

「好きな食べ物はー?」

「好きな食べ物はー、寿司でーす!!」

沈黙が走る食堂内。場違いな空気に艦娘達は困惑していた。提督が一人だけ笑っている。

「……話がズレたな。さてさて、お前達はこの先どうするんだ?」

上から見下ろす提督は狂うように言葉を投げかける。

「出撃したいか? 憎き深海棲艦をぶちのめしたいか? 憎き前任に復讐したいか? 俺を殺したいか? 整備したいか? 掃除したいか? 休みたいか? だらけていたいか? 決めるのはお前達だぞ?」

また不気味な笑みを浮かべる提督。まるでやりたい事を促すかの様に囁く提督。そして大声でまた喋り始めた。

「俺は大声で! 聞こえるように言ったはずだ!! お前達がやりたい事、叶えたい事、俺が出来る範囲で答えてやるつてな!!」

自身の真意を動かす為にわざと煽る提督。本当の言葉の意味に気付かせる為にここまで言っている。自分が今何をしたいのか、何をすべきかを考えさせるのだ。そうして初めて言葉の意味を知る。

「俺はヒントを与えたぞ!! よく考えるんだな!! つてな事で以上!

解散! おやすみ! 寝る!」

提督は駄々を捏ねるように身体を横にする。本当に眠ってしまったようだ。

提督の言葉で招集は終わり、朝食の時間を迎えた。他の艦娘達は二階を使わず、一階で食事をしている。提督は食べるつもりは毛頭なく、摩耶も同じだった。

「食べなよ」

「ん？」

摩耶に話し掛けたのは軽巡の阿賀野。一人で何もせずに壁に腰をかける摩耶を見て放っておけなかったのだろう。姉妹艦の長女故に面倒見はいいらしい。

「あの人と一緒に来た艦娘なんだろうと思うけど、別に差別はしないわ。皆新しい仲間だと思ってる。それに——」

阿賀野の視線は何も気にせず寝ている提督に向いている。あの朝礼で皆テンションについていけない状況だ。食堂の雰囲気はかなり不気味になっている。

「——貴方の苦勞が伺えるわ……」

「……おう、そうか……」

「ほら、一緒に食べましょ？」

「……それはありがたいがあたしはまだ食べるつもりは無い。じゃあな」

摩耶は阿賀野の誘いを断り、提督の元へ向かう。一部視線を感じるが摩耶もそれほど気にしていない。というよりも慣れてしまった。

二階に昇り、寝ている提督の前まで歩く。

「何寝てんださっさと起きろオ!!」

「ウメボシッ!!」

寝ている提督の頭を踏みつけ、強制的に起こす摩耶。その怒号に一階にいる艦娘達は驚いていた。

誰かは思っただろう、殺さなくても摩耶が殺しそう、と。

摩耶は気絶した提督を引き摺り、食堂から出ていった。

5. 防波堤で釣れるマグロはSSR

「いやあ酷いよ？ 摩耶君？」

「うるさい、黙って仕事しやがれ」

執務室では提督と摩耶が書類を作成している。提督は頭全体が包帯に覆われ、摩耶に見張られていた。明け渡してくれた執務室の掃除は既に終わっている。

朝九時二十五分。一ヶ月間何もしない状態の下、提督はある事を考えていた。

「しかし提督のやり方は少し横暴じゃねーか？」

「こうでもしなきゃアイツらは動かない」

提督は艦娘達にチャンスを与えている。提督に言えば出来る範囲で何でも出来る、と。それはある種の力を目覚めさせる為である。

「アイツらに無いのは自主性と行動力だ。自身で間違っているところについていながら何も行動を起こさなかったアイツらに原因がある」

「人質でも取られたんじゃないのか？」

「その話は何回もしてるんだけどなー分かってくれないんだよなー」

椅子に寄り掛かり、天井を見る提督。足を伸ばして休憩を取る事にしたようだ。関節音を鳴らし、身体の疲れを少し軽減させる。するとドアからノックする音が聞こえた。誰かが来たみたいだ。

「かかったな……入っていいよー」

ドアを開けて出てきたのは金剛だ。いつもは元気な姿を見せる艦娘と聞いている。が、その元気な姿には到底見えない。とても静かだ。

「あらあらあの時の金剛さんじゃないか。何の用だい？」

心の中でほくそ笑む提督。提督の狙いが当たれば大金星だ。金剛は何をしたのか、自らの口で聞かせて欲しい。

「……最初に答えてほしい事があります」

「なんだ？」

「テートクは信じられる人デスカ？」

それを聞いた提督は呆れて溜息を吐いた。

「あのな、そういうのは俺が決めるんじゃないやなくてお前らが決める事だぞ？」

「え……？」

「いやいや、え、じゃなくて。どうして俺の信用を俺が決めなきゃならないんだ？ それは金剛自身にしか分からない事だろ？」

「でも……」

「でもじゃない。いいか金剛、昔お前らの身に何があったのかは一切聞かないし聞いてやらないし聞きたくもない。だが俺を信じたければさっさと用件を言うんだ。それに信用つてのは時間を掛けて生まれるモンだよ？ お分かりこまり？」

早口で言ったおかげで息が続かず、息切れする提督。近くにあったペットボトルの水を飲む。まるでマラソンを走った後の選手のように息を吐いた。

「つてな訳で金剛、俺の言葉の意味が分かって来てるなら……どうぞ？」

金剛に手を差し伸べる。不気味な笑みを浮かべながら、提督はまた水を飲んだ。言葉の意味、自分達は何がしたいのか。自らの判断でこれから起こる事の全てが決まる。

「……もう……あの言葉を……言わないでください……」

「ほーん……」

耳の穴をほじくりながら金剛の願いを聞く。耳垢が取れた途端にどっかに放り捨てた。

あの言葉、『罰』だろうか。罰と言えば多くの艦娘は酷く怯えていた。どんな暴行を受けたかは知らない。だがそんな怯える仲間を見て、金剛はその姿を見たくないのだ。それを考えた提督は金剛に歩み寄る。

「もう怯える仲間を見るのが嫌か？」

「はい……」

「なんなら自分だけ言われてもいいとか思っていない？」

「はい……だからお願いしマス」

更に願いを聞いてもらう為に土下座までする金剛。自身のプライ

ドを捨ててまで提督にせがるようだ。

「……難しいかなー」

「え？ いやだって何でも叶えるってあの時……!!」

「確かに言ったよ？ けど出来る範囲での話だ。だって俺を殺そうとする連中がいるんだもん。自己防衛は必要だよね？」

「だ、だったら私が守るから……お願いしマス……」

身体は震えていた。

大本営から聞いた話では金剛は提督や仲間を愛する事が多い艦娘だと聞いている。後輩や部下達の中でも金剛達を愛でている者が多い。以前後輩の鎮守府を訪れた時、金剛が他の艦娘達と仲良くティータイムをした場面を見た事がある。恐らくとても仲間思いの艦娘なのだろう。

土下座する金剛を見て、提督は頭を撫でた。そして奇妙な笑い声を上げて、金剛の髪をわしゃわしゃにする。

「ヒヤヒヤヒヤヒヤ、分かった分かった！ いいだろう、お前の願い聞き入れた！」

「ほ、本当デスカ!？」

「ああ本当だ。俺は有能だからな!! その代わりどんな時でもお前には守ってもらおうぞ？ いいな？」

「は、はい！ 分かりまシタ！」

「はいじゃあ立ち上がって、ほらスタンドアップ、スタンドアップ！」
ジャンプする提督に促されるまま、金剛は立ち上がる。願いを聞いてくれたのか金剛は少し元気を取り戻していた。

「さて金剛、お前の勇氣とその行動力、実に見事だった。これからも続けてくれよ？ 頼むぜ？」

「ありがとう……ごきげいマス……」

「んじや行ってよし。あとは何も無いから」

金剛は執務室を出ていく。提督は机に座り、机の引き出しからある書類を取り出した。摩耶に叩かれながら。

「痛い痛い痛い！ いいだろ別に俺の机なんだから!!」

「行儀悪いつってんだよ!! ちゃんと椅子に座れ!!」

「痛い痛い痛い痛い！ 分かりました！ 分かりましたからア!!」
ちやんと机に座る提督。

それを摩耶は殴り飛ばす。

「——じゃあ、金剛か」

「そうだな、予想の姿とはかけ離れていた。前任の罰による影響か何かだろ」

「ご名答でございます摩耶様、流石摩耶様、凄いですね摩耶アアアア——」「うるせエ!!」

頭にいくつものたんこぶを作り、提督は金剛のプロファイルを読み上げていた。半泣きしながら、頭を摩耶に掴まれ作業している。

「えーっと過去に目の前で姉妹艦を解体された経験あり……うわあ……」

「惨い事を……」

「全くだ……美女が勿体ない」

「そこじゃねえだろ!!」

また頭を叩かれ、ツツコミをくらう提督。このプロフィールは摩耶が事前に調べて出てきた資料だ。ある程度の情報は確認出来ている。

「って事は今の姉妹艦達は別の姉妹艦って事か……複雑だろうな。あたしなら壊れかねない」

「……そっか」

するとドアをノックする音が聞こえた。また誰か来たようだ。

提督は許可を出して執務室の中に入れさせる。出てきたのは散々な目に会っているだろうの天龍と木曾だ。以前の様に殺気は感じられない。

「おーおー天龍さんと木曾さんかー。身体の調子は如何かな?」

「まあまあだ。それよりお前に聞きたい事がある」

「なんだ?」

「前任に復讐出来ないか?」

ニヤリと微笑む提督。

この艦娘達なら誰でも思うであろう復讐。金剛の願いは所詮序の口程度。提督自体願っているのは艦娘の奥に眠る戦闘本能を掻き出

す事。何かの為、誰かの為、国の為と戦ってきた艦娘達。

しかしこの鎮守府ではその戦闘本能は眠っている。提督は艦娘が自身で戦う理由を見つけ出し、戦闘本能を目覚めさせるのが狙いだ。それにより復讐という選択は何より嬉しい事だった。

「……やっぱ無理か。天龍、行くぞ——」「出来る」

「ッ!」

「今すぐとはいかないが近い内に出来ない事も無い」

「……ほ、本当なのか!？」

「ああ出来るぞ。お前らが望んでいた事なんだろう?」

「あ、ああそうだ! 散々暴れた分ぶん殴らなきゃ気がすまねえ!!」

まさにこの瞬間だ。

戦闘本能を締め出す蓋が開けかかっている。もつと言わせなければならぬ。もつと煽るしかない。

「お前らはどうする? 殴るか? 蹴るか? 骨を折るか? 四肢を

切断するか? 火炙りにするか? 何もかもお前らの自由だぞ?」

「ああそうだ! 殺すだけじゃ苦痛にはならねえ。長い時間を掛けて痛ぶってやる!!」

「同意見だ天龍。おいお前、本当に出来るんだろうな?」

それでよし。

天龍と木曾の戦闘本能は開花寸前だ。開花すれば爆発は間逃れないだろう。後はその戦闘本能を提督がどうコントロールしていくかによる。

「さつきから言ってるだろ? 出来るって。だが——」

その前任の提督が今何をしているか、この艦娘達は知らない。いや殆どの鎮守府の提督や艦娘も知りえないだろう。何故ならこの情報は大本営の中でも元帥や大将、そして提督と摩耶しか知らない超極秘情報だからだ。摩耶に心配されるも関係ない。

提督は鞆から紫色のファイルを取り出し、天龍と木曾にある写真を見せた。

「……んだよこれッ!!」

「……畜生……ふざけてやがる!!」

天龍と木曾が怒り狂う。そうなくてもおかしくないだろう。見せた写真が前任の提督が敵である深海棲艦の提督として活動している所だ。

「前任の提督はあの時夜逃げした後、深海棲艦とつるんでいたらしい。大量の資金と資材を奪い、今じゃ立派な俺達の敵だ」

「んなツ……!!」

「お前らは今俺を殺そうと必死だが、それをするほど時間は暇か？」

「……ッ！」

「さあどうする？ 有能な俺と手を組み、提督と認めて無能なアイツをぶっ飛ばすか、それとも今すぐ有能な俺を殺すか。決めるのはお前らだ」

提督の作戦指揮が無ければ艦娘達は容易に動けない。それは天龍と木曾、他の艦娘達も嫌な程理解している。

だが今は有能な提督と自称する人が居て、前任に復讐出来るチャンスがある。二人の脳では即座にその答えが出た。

「お前と手を組んで、アイツをぶっ飛ばす!! それしか無えだろ！」

「同じく、俺も天龍と同意見だ。散々俺達を辱めたこの恨み、この剣の錆にして晴らしてくれよう」

「交渉成立だ。仲良くやってこうじゃねーか」

手を差し伸べ、握手を求める提督。不思議と二人は抵抗は無く、自然に手を握ってくれた。ようやく一步前進と言ったところだ。

「んじゃ、て、提督。今まで殺そうとして……す、すまなかった……」

「……お、俺も摩耶に謝らなきゃならねえ、すまん」

「……？ あ、アツハツハツハツ!! 大丈夫だ、俺らは全く気にしてねえ!! なんせ俺は有能で寛大だからな!!」

素直に謝り始めた二人に提督は大笑いした。摩耶も少しだけ微笑んでいる。もう少し反抗してくれた方が此方としては面白かったのだが。やはりこの二人はチョロい。

それはさておき、極秘情報を伝えたので口封じしなければならぬ。

「あ、悪いんだけどこの情報、超極秘情報で本当はバラしちゃいけない

「んだよね！」

「えっそれやばくないか？」

「うん、だから周りに教えるなよ？ 教えたらアレな」

アレと聞いて二人は察してしまった。罰と言わないでと金剛に言われたが罰と言わなきゃいい話である。つまり別の言葉に置き換えれば何度でも使えるのだ。

それに気付いた摩耶はまた溜息を吐く。

「しかし何で教えないんだ？ 教えれば俺らみたいに手を組めるのに……」

「教えてあげてもいいんだけどー、自分から言ってくれなきゃー、教えられないんだよねえー」

急に女子高生風に喋り出す提督。少しイラつくが大体の言葉の意味は掴めた。

自身の言葉で何がしたいのかを伝え、復讐という言葉を使わなければ一切教えない仕組みだ。提督は自身の行動力を試している。あの時何も出来なかった、だが今は出来るチャンスがある。

他の艦娘達にも知らせたいところだ。

「あ、今のも他言無用で！ 自分から行動しなきゃ意味ないからね」

「ああ分かった。だが行動しろと急かす様な事はしてもいいのだろう？」

「ああ全力でやってくれて構わない……さて一日で気付いてくれた訳だし、出撃する日を決めようかな」

「え!?! 出撃出来んのか!?!」

出来ると断言する提督。もし天龍と木曾が行動しなければ一カ月過ぎた後でも出撃するつもりは無かったらしい。

まさにファインプレーと言えるだろう。

「つてな訳でこれからよろしくウ!!」

天龍と木曾は楽しそうにその場を出ていった。久しぶりにこの瞬間を味わえた提督はあの二人が居なくなった途端に騒ぎ始めた。

「よっしやああああああ!! 燃えてきたアアアアア!!」

「うるさいな!!」

「この状況で騒がない方がおかしかろう。あの言葉を聞いて一時間で狙いが来てくれたんだ、防波堤でマグロをやけくそで釣ってみようとしたら一時間後に釣れた様なモノなのだよ」

摩耶に優しく叩かれ、落ち着きを取り戻した提督。自身の行動を改め、反省した。

「提督、本当に見せて良かったのか？」

「ああ構わない。もし広めようものならば上から消されるからな。そんな青葉を見た事ある」

「まさか前任が敵の親玉とはねえ……出来すぎた話だな」

「フッフッフー、オールオツケーだ。散々大本営でも暴れてくれたんだ、この貸しは高くつくからな、二代目……」

海の水平線を眺める提督。恐らくこの海の先に奴はいるのだろう。この一步を前に提督は物語を考える。

「さて……第一章の開幕だ……」

6. しりとりで『ル』攻めする奴は人間じゃない

「暇だわ」

「分かる」

全ての書類を書き終え、提督と摩耶は暇を持て余していた。天龍と木曾の話以降、話に来る艦娘は全く来ない。一時はどうしようかと思んだが、結果オーライなのでどうでもいい状況だ。

「……しりとりする？」

「……」

暇を潰す為にしりとりを持ち掛けた提督。しかし摩耶は全く乗らない。執務室に沈黙が漂う。

「……冗談だ——」「りんご」

「やるのオ!？」

鐘が鳴り響き、昼食の時間を知らせた。提督と摩耶は事前に送ったインスタントラーメンを手に取り、お湯を入れる為に食堂へ向かった。

「何でお前、『ル』攻めしかしねえの!? もうちよい言葉のバリエーション揃えろよ!!」

「『ス』攻めで自爆した人に言われる筋合いは無え」

「違う! 偶然にも『ス』で終わる言葉が多かったただけだ!!」

「じゃあ、あたしも『ル』で終わる言葉が多かった」

「じゃあ、じゃねーよ!!」

口喧嘩しながら視線を集めた二人は食堂の厨房へ向かう。厨房では鳳翔と間宮が艦娘全員分の料理を作っていた。カレーの美味しそうな匂いが漂う。食物を何処で仕入れているのかは別だが。

「あ、あの! 中に入るのは困ります!」

「いやいやお湯貰ってくださいだからさ! すまんね!」

そう言っ二人はお湯を入れ、蓋をする。鳳翔と間宮はそれをただ見る事しか出来なかった。

「何だ反抗しないのか?」

「は、はい……」

「そうか、じゃあな。悪かったよ」

よく見れば二人共手を握り絞めている。反抗したい気持ちは無い訳では無さそうだ。ただ行動に移せないだけの話。勿論提督は何も言わない、何もしない。

そこに――、

「待つてください!!」

暖簾を潜ろうとしたその時、誰かが提督を呼び止めた。振り向くと呼び止めたのは軽空母の鳳翔。身体を震わせ、必死に話した。

「あ、あの！ もうこの鎮守府の食料の備蓄は……あと少しだけなんです！ だ、だから……」

「だから？」

「だから……しよ、食料の調達を……お、お願いします!!」

頭を下げた震えた声で必死に頼む鳳翔。間宮も深く頭を下げた。この鎮守府の食料は前任の提督の時に僅かながらに貯蓄していた。

提督が着任する前まではその貯蓄していた食料を使って生きながらえているのだろう。勿論、提督はこの事を把握済みである。

「……オツケー！ 有能な俺に任せときな!!」

親指をあげ、了解を得た鳳翔。不安から抜け出したのか腰を抜かしてしまった。間宮も駆け寄り、これで安心と安堵している。

「あ、言い忘れてたけどー！」

「は、はい!!」

「インスタントラーメンを食う時はここのお湯、貰うからー！ んじゃあねー！」

「は、はあ……」

執務室でインスタントラーメンを食べる提督と摩耶。書き終わった書類を端に寄せ、食べるスペースを作っている。

「仕事が増えたな提督」

「別に構わんぞ？ むしろ大歓迎だ、イヒヒヒヒ」

「そうか。では提督、あたしは午後からお先に抜け出すよ」

「はいよー……俺も休みたい」

「馬鹿か休めないだろ」

摩耶に断言され、少し残念な気持ちの提督。午後は工廠の訪問を予定している。少し面倒臭いと思っていた提督は抜け出したい気分だったらしい。それを知っている摩耶は敢えて提督の前で杭を打つ。

インスタントラーメンを食べ終え、摩耶は一足先に帰った。提督は一人で鳳翔に頼まれた食料の調達書類を高速で書いている。自分が必要な物だけ頼む事にした。やがて書類を書き終え、休憩した提督は工廠へ向かう。

「疲れたわー……身体中ポキポキ言いやがる。さて……工廠に到着！」

工廠に辿り着くも、固く扉が施錠されている。何しようとか全く開かないので提督は思いつ切り蹴り飛ばす事にした。

「ドーン!! オブ・ザ・デッドオ!! 誰がいるかー?」

工廠は少し暗くてあまりよく見えない。人の気配もしない。といっても妖精の声は聞こえた。

「アンタハダレナノネ?」

「ん? 俺か? 俺は有能な提督だ!!」

「ウザイノネ」

「ウルサイノネ」

「ヤバイノネ」

「ウザくて結構! それより妖精達よ、明石知らないか?」

「アカシ、ナノネ?」

「アソコニイルノネ」

「イヤアツチナノネ」

「コツチナノネ」

「どっちだよツ!!」

「あーすいませーん!!」

奥の方で声が聞こえた。走って駆けて来たのは少々煤まみれの明石。工具を持って現れた。

急いでいたのか汗が出ている。

「よう明石! 調子はどうだ?」

「まあまあと言ったところですよ!!」

「理由がふわふわしてるが元気があってよろしい!! ところで明石、工廠の整備は如何ほどか？」

見た限りだと内部は上手く片付けられている。資材が足りないのでも造る事は難しいが、今にでも造れそうではある。妖精達もやる気は充分だ。

「今からでも開発は出来ます! しかし……」

「資材だろ? 大丈夫だ、明日届く。なんせ俺は有能だからな!!」

「ほ、本当ですか!?! でも……」

一瞬喜びの目を向けたが、縮こまってしまう明石。

何故か身体が震えている。情報では開発はしていたものの、拷問器具を開発した経験があるらしい。恐らくそれがトラウマなのだろう。

「でも——」「でもじゃなあああああ!!」

「ウルサイノネ」

「スゴクウルサイノネ」

「スピーカーナノネ」

「お前は俺や艦娘から開発して欲しい物があつたら開発するの!!
それでいーいーのー!!」

「は、はあ……」

「だからお前の過去なんざ興味無え!! お前は自由だ! なんでも作れ!! 以上! 解散! 頑張れ!」

——重巡察

「ようこそこの鎮守府へ!」

摩耶は重巡の艦娘達による歓迎会に誘われていた。最上の部屋を使って催された歓迎会は盛り上がっている。テーブルにはつまみやお酒が無造作に置いてあり、各自食べたい時に食べる感じだ。

「アイツは別だが摩耶は大歓迎だな!」

「こら那智、少し飲み過ぎよ」

主役である摩耶は大注目の的だ。自身の事や提督との関係性など隙もなく質問してくる。少し嫌気がさすも同じ仲間がいる摩耶とし

ては少し居心地は良かった。

「ねえねえ、摩耶さん！ あの人って普段はどんな感じなの？」

「いつも通り、ウザい提督だ。暇さえあれば煽って来る。クソ野郎と呼ばれてもおかしくはないな」

「んじやあの人と何年関係続いているの？」

「んー八年ぐらいかなー、初めて会った時が大体その年月になる」

青葉が必死にメモを取っている。恐らくこの調子だと提督の弱みや嫌いな物でも聞いてくるだろう。本当は言いたくないが、色々不満があるので言ってみよう。

「じゃあその初めて会った時のエピソードとかない？」

エピソード、あるにはある。だがあまり言いたくはない。提督からも何回注意されている。

これは二人だけの秘密なのだ。

「ごめんな、よく覚えてねえんだ」

そう言っただけで摩耶はお酒を少し飲む。酒を飲むのは久しぶりだ。

「あの人の弱みとか嫌いな物とかある？」

「提督は……確か肉をあまり好まないな。魚しか食べていない」

「それでそれで？」

「あと白黒つけない人が嫌いだったりする。それに力があるのに何もしない人は大嫌いだな。大本営にいる大将が主だったりする」

あとここにいる艦娘達。とは伏せておいて摩耶は思いつく限り、全て話した。あのクソ提督に報いを。

しかし前まで聞いていた酷い鎮守府とは何だったのか、艦娘達から笑顔が伺える。本当に前任は酷い事をしたのだろうか。それともただ艦娘達が無理して笑顔を作っているのだろうか。あとで提督に聞いてみれば早い話だ。

「……アイツの朝礼は何だったのか……完全にイってるよなあアレ」
「そうよそうよ、なにが反抗も出来なかったポンコツ兵器共よ。私達の事何も知らないでイイ気になって……」

「まあまあ加古さん、今は歓迎会ですから……」

「そうだぞ加古？ ここは愚痴る所ではない」

皆和気あいあいとしている。前任の事もあつてか仲間との絆はかなり深い。どんな艦娘でも仲良くやつていけそうだ。

「いやーしかし……摩耶は何だか、深海棲艦に見える……あつ」

その時全ての重巡に電撃が走る。摩耶も思わず昔の癖で殺気を放ってしまった。どうやら艦娘達は摩耶が深海棲艦に似てる事を禁句として黙っていたらしい。

正直この姿でそう見られてもおかしくはないだろう。慣れているはずが少しだけ精神的に来ていた。

「ごめんなさい、どうやら那智が飲み過ぎて酔っちゃったみたいで

……アハハ……」

「いや良いんだ、大丈夫。もう慣れてる」

「そ、そう？ ごめんね……」

「んじや、あたしはこれ食べようかなー」

「あ、それは私が残しておいた物だ！ よこせ！」

摩耶が自ら空気を変えた事でこの場は丸く収まった。またあの時のテンションと同じ様に皆楽しんでいる。しかし摩耶の心の中では少し複雑な気持ちだった。

一方、提督は――、

「暇だな……――」

――よっしゃ摩耶がいない内に飲むであろう水に下痢剤入れておこう」

7. 朝から声が大きいヤツは嫌われる

「ああそうだな……お、分かってくれるか！ オーケー明日行くわ！
うん明日ー、うんいいよー、じゃーねー」

誰かと電話していたらしい提督。何か約束事を作ったようだ。夜二十三時。消灯時間は既に経過、提督は執務室で一人、仕事をしていた。

「どうぞー」

ドアをノックする音が聞こえた提督は入室の許可を出す。入ってきたのは朝潮だ。部屋着にも着替えず、正装のままである。

朝潮は恐る恐る提督に近づいた。

「どうした朝潮、もう消灯の時間は過ぎてるはずだぞ？ 子供はおやすみの時間だ。って言うか俺も眠い」

「そ、そうですが……司令官は叶えたい事を出来る範囲で答えてやるって……言っていました……よね？」

「ああ言ったな。それで？」

「であれば、その……妹達を呼ぶ事とか出来ますか？」

朝潮は過去に四人の姉妹を失っている。主に前任の提督による解体と捨て艦戦法での轟沈。優秀だった朝潮は抜擢される事は無かったが、それでも姉妹艦を目の前で失っている。

「お前は何かしたくないって言わなかったか？」

「は、はい！ た、確かに答えましたが……あの時は……」

上手く説明が出来ない。確かに朝潮は何もしたくないと言った。姉妹を守れなかった自分を酷く追い込んだのだろう。

「……仮にその姉妹艦を着任させたとして、お前の本当の妹達とは限らないぞ？」

「そ、それは重々承知しています！」

「そうか、じゃあ姉妹艦を呼んでお前は どうするつもりだ？」

「戦います！」

「何の為に？」

「強くなる為に！」

「何故妹達を呼んで強くなれると思ったあ？ 自分が強くなる為の道具にするのかあ？」

「違います！ 私達朝潮型が本当は強い駆逐艦である事を他の皆さんに証明させる為です!!」

「またその妹達を失うかもしれないのに？」

「今度は私が絶対守ります……例え司令官の手で脅かされようとも！」

「それが間違った選択だとしても？」

「間違っています！ わたしが選んだ選択です！」

質疑応答を繰り返す。

恐らく提督は朝潮の度胸を試している。朝潮の中では既に決心していた。今度は下を見ない、前だけ見て進む。朝潮は顔を上げた。

「……よし、いいだろう！ やってやる！ キシキシキシ」

「ほ、本当ですか!？」

「俺を誰だと思ってるやがる！ 有能な俺だぞ!! あ、時間は遅くなるけどね」

今まで緊張していた朝潮。緊張から解き放たれ、腰を抜かしてしまった。自ら起こした行動でやりたい事が決まったのだ。

とても嬉しかった。それを見た提督は朝潮の方まで歩み寄り、頭をくしくしくしゃに散らかす。

「別に緊張しなくていいんだよ忠犬娘！ まあ有能な俺だから仕方ないか!!」

「う、えっ……ちよ、ちよつと、司令官!？」

「キシキシキシ……今度は上手くやれると良いな」

「っ！ はい……」

何故だろうか、涙が出てしまった。まるでこの言葉を待っていたよな、そんな気がする。たった一つの言葉なのに何故か心の底から優しく感じた。肩の力も自然と抜け、抵抗するはずの腕も気力を無くしている。頭を撫でられた事など初めてだ。

「おいおい何泣いてんだ忠犬娘？ まだ泣く時間は何光年も先だぞ？ っってもう泣いてるけどな——」

「すつ、すみませんっ……！ つ、つい涙がつ！」

「泣きたい時に泣きやあいいんだ！ さっきの言葉と矛盾してるけどなー!! キシキシキシ」

「……そうですねー」

涙をこぼして笑顔を見せる朝潮。提督も笑顔で返す。朝潮が泣き止むまで傍に居続けた。

「さて俺も眠いし、さっさと寝るぞ朝潮!!」

「は、はい！」

執務室の明かりを消し、提督は朝潮を連れてその場を後にした。朝潮を送り、自部屋に戻る提督。

まだ片付けが済んだ訳ではなく、足の踏み場もない程だった。

「あー疲れたー……誰？ お前？」

「榛名です！ 夜のご奉仕に——」「はいさっさと出ていけー」

榛名の身体を持ち上げ、部屋に追い出そうとする提督。勿論榛名は抵抗し、部屋の奥に逃げ込む。

「お前は猫か!!」

「いえ艦娘です!!」

「んな事は分かってんだよさっさと出ていけ!!」

「断ります!!」

「じゃあ俺が出ていくウ!!!」

ドアを突き飛ばし、自部屋から出ていく提督。突然の家出宣言に榛名は呆気にと取られていた。

朝八時。起床時間である。

提督は摩耶の部屋で一足先に早く目を覚まし、執務室でまた仕事をしていた。多くの艦娘達が起床し、世間話をしている声がする。

「おはよう……提督……」

「おはようさん……随分と飲んだみたいだな。くっそ笑える」

歓迎会で飲み過ぎた摩耶は二日酔いに悩まされていた。頭を抱えて、頭痛を訴えてくる。更には下痢まで起こした、今後飲むのは控え

た方が良さそうだ。

「なんとでも言え……はあ……」

「……おはよおおおお!!」「うるせエ!!」

突然の大声に驚いた摩耶は提督を殴り飛ばす。提督のいき過ぎたちよつかいは日常であり、付き添う摩耶も理解している。なので摩耶は全力で提督を殴っているのだ。

「朝から一々バカでかい大声出してくんじゃねえよ!! 響くだろうがア!!」

「いやでも摩耶さん、俺はね? まだ寝惚けてるのかと思って気遣いでやろうと……」

「だから大声出す事はねえだろ!!」

「と思って全力でちよつかいしてやったぜ、ざまあみろ」

「殺す!!」

「ああああお前が殺したら本末転倒だろオ!!」

自分が味わってる頭痛の分だけ提督の頭に数回殴った摩耶。目覚めは最悪だ。惚れた自分が馬鹿馬鹿しく思える。だが作戦指揮やカウンセリング、仕事の速さなどは完璧だ。

性格以外は。

「摩耶、午後から呉鎮守府の方へ訪問する。その頭痛は治しておけよ?」

「お前もその頭を治しとけ」

「えーこの類まれなる俺の性格にケチつけ——ごめんなさい……」

今凄く恐ろしい目で睨まれた気がした。

「分かればよろしい。午後か、分かっ——悪い提督、あたしはついていけない」

「……予感か。念の為に空母寮に伝えておけ」

摩耶が生まれながら持つ『予感』は大体八割の確率で深海棲艦が空襲する可能性が高い。何度かこの目で見た覚えがある。『予感』で奇襲に備える事も出来た。しかし今度の『予感』は不吉なものらしい。

「胸騒ぎがする……割とガちなパターンかもな」

「姫か鬼クラスか……気をつけろおお前は余裕だと思いがここの艦娘

達は別だ」

「ああ分かつてるさ」

「んーしかしどうしようか、予感当たってほしく無いところだが……」

午後には後輩と会談の予定がある。しかもあまり逃したくない会談だ。外すわけにはいかない。どうにか出来ないだろうか。

「心配しないで行ってきな提督、その時はあたし達に任せろ」

「んーまあお前に任せれば大丈夫か」

摩耶も連絡用にスマートフォンを手渡している。といっても本人は完全に私用目的で使っているが。

とりあえず今はある事を調査しなければならない。

「ん？ その資料……営倉か？」

「ああ前任がフルで使ってたところだ。一回探したんだがどこにも無くてな、今日も調査しようと思ってる」

営倉。

簡単に言えば刑務所という懲罰房である。罪を犯した人間、艦娘を拘束するといった目的がある。時たまに鹵獲した深海棲艦を捕らえる為にも使われるようだ。普通営倉は地下に建てられているはずだがそれらしき場所は確認出来なかった。

そして――、

「明石が前任に無理矢理開発された拷問器具、何処に隠してるのか把握出来ていないんだわ。バレない為に壊したのか、よく分からねえ」「あたしも手伝おう、手掛かりが掴めるかもしれない」

「ああ頼む。だがここの艦娘達には内密な」

そんな事など分かっている。罰と聞くだけで身体を震えさせる艦娘達は営倉の場所など早く忘れたはずだ。余計にトラウマを掘り出せば精神崩壊しかねない。

何気に無意識で提督はこの艦娘達に気遣っているのだ。

「よし探すか、摩耶は工廠と倉庫を頼む。俺はこの司令本部を探索する。ちびるなよっ」

「するかボケ。でも分かった、何かあれば連絡する」

提督と摩耶は二手に別れて営倉を探す事にした。なるべく可能性の高い司令本部と工廠、倉庫を視点到隅々まで調べていく。

「あれ司令官、どうされました？」

「ん、朝潮か。いやまあ探し物だよ」

「探し物、ですか？ 朝潮もお手伝いさせていただきます！」

「いやいや大丈夫。そんな大した事じゃねーから、部屋で昼寝でもしてな忠犬娘」

「そういう訳にもいきません！ 願いのお返しとして私もお手伝いさせていただきます！」

まあ理屈はまかり通つてはいる。しかし提督としてもあまりこの事は内密にしておきたいところ。

もしバレたら艦娘達が泣き出して面倒臭いからだ。上手く騙せないだろうか。というよりも一人で探したい。

「あー、んじやお前は駆逐艦寮を頼むわ」

「はい！ 分かりました！ ところで司令官、何をお探しですか？」

「んーまあ本かなー、確か寮内か司令本部に落とした気がするんだよなー」

「ではこの朝潮、全力で探させていただきます！」

「おう頼むぞー」

朝潮が探し物の内容を聞いた途端、変な音が聞こえた。まるで電車の線路レバーを変えるようなしつかりとした重い音。

それは提督が階段の手摺を弄り回した事による変化だった。

「へ？」

「そ、それは、司令官……」

「はいシヤラアアアアアップ朝潮オ!!」

朝潮が腰を抜かす。それは艦娘にとつて絶望的な絶望を意味する。今まで地下に繋がる手掛かりは確認出来なかった。しかし今の音により、ようやくその手掛かりを掴む事が出来たのだ。

「まさか地下に繋がる階段が隠されたとはな……いいか落ち着いてよく聞け、朝潮」

「は、はい……」

「今俺らはある重大な任務を請け負っている。それはこの鎮守府の営倉の存在だ。お前らがアレによって散々な目にあつてるのはよく分かる。この事は誰だろうと忘れたいはずだ」

「はい……」

「だからこれは無かった事にしてくれ。お前は俺と探し物をしていただけ、大丈夫だ別に怪しまれやしない」

これ以上トラウマを思い出させるのも面倒だ。隠蔽とは言わないが精神崩壊を防ぐ為、隠しておかなければならない。

「わ、分かりました……」

「分かればよろしい。この有能な俺に任せときな！」

朝潮は複雑な心境の下、司令本部を後にした。それを見届けた提督は摩耶に連絡をする。すると偶然にも摩耶は調べ終わった途中で戻るところだったらしい。これはまた都合が良い状況だ。

「さて、隠された営倉へ向かおうか……」

コツ、コツ、と革靴の音が響く。

地下に続く階段はコンクリートで固められており、壁は堅く冷たい。階段を降りると目の前には大きな鉄の扉が現れた。

「まあ嚴重に管理されてるようで……鍵も掛かってんな。オリヤア！！」

鉄の扉を蹴る提督。しかし少し凹んだ程度で開けるには至っていない。提督は反動で足が一気に痺れ、悶えている。そこで摩耶は溜息を吐きながら仕方無く鉄の扉を無理矢理蹴り飛ばした。

「おー流石は摩耶さんだ」

「立ち直り早いなオイ」

「YO！ YO！ 摩耶さんそれってYO！ 褒めて言——」

「行くぞ」

「ふあい……」

照明器具は無く、とても暗い。そしてなんとも言えぬ腐臭が漂う。衛生環境は最悪、気温湿度共に高い。今すぐにでも抜け出したいところだ。構図は左右に牢屋が奥まで続き、一本道が続くのみ。鉄の扉の

手前にそれぞれの部屋の鍵が掛けてある。

もし提督の予測が正しければこの場所に拷問器具が置いてある可能性が高い。

「酷い腐臭だ……それに血生臭い……」

「摩耶、念の為にマスクしろ。衛生環境は最悪だ」

提督にマスクを渡される。急いでマスクをするも腐臭は抑えられない。一体この場所で何が起きたのか、全く想像がつかなかった。むしろ想像したくもない。知らない方が幸せだとはまさにこの事だ。

「使ってる牢屋と使ってない牢屋があるな……」

「……ああ」

一部の牢屋には深海棲艦の遺体と思わしき物があった。顔や身体は原型を留めておらず、腐って内部が見えている。

恐らく周辺に漂う腐臭はこれが原因だろう。

「気持ちは分かるが抑え込め摩耶。今はキレてる場合じゃない」

「分かってる……分かってるよ……」

奥まで進んでいくとまた鉄の扉が見えた。無数の南京錠で施錠され、簡単には開けられない。仕方無く提督は拳銃を使い、南京錠を壊していく。鎖は外れたものの扉本体にも施錠されていた。

「摩耶、頼む」

「あたしは見ないからな、これ以上見たら……おかしくなる」

「分かってる、俺だけが入るから摩耶は見張りを頼むよ」

堅く閉じられた扉をまた蹴り飛ばす。懐中電灯で辺りを照らすと、提督はその惨状を目の当たりにする。

「やっぱりだ……ここに隠してやがったか、あの野郎め」

奥に閉ざされた部屋の中は様々な拷問器具が所狭しと設置されていた。

鉄の処女、苦悩の梨、ファラリスの雄牛、異端者のフォーク、ユダのゆりかご、がみがみ女のバイオリン、など非人道的な物ばかりだった。

しかもどれも使用済みである。

「これがアレの正体だ、奴はこれらを使って艦娘や深海棲艦を陥れ、陵

辱の類でもやったんだろうポンコツ共があまり反抗してこないのも頷ける。流石は敵の親玉になれただけあるな」

今でも渴き切った血の跡が残っている。殆どの拷問器具には工夫が施され、死なない程度に作られていた。開発した本人である明石が怯えていた原因だろう。まさか自分が開発した物が艦娘や人間を苦しませる物だとはどれだけ夢でありたかつた事か。

「苦しかっただろうに……摩耶がキレるのも当然と言えば当然だな」

「おい提督!!」

8. 小さい女の子は適度に可愛がりましたよう

「おい提督!!」

「どうしたー?」

「緊張事態だ! 早く来てくれ!」

摩耶に急かされ、部屋を出る提督。すると摩耶が慌てた様子である部屋を指差していた。小走りで向かう提督。

余程の緊張事態なのか摩耶は提督の腕をいきなり引つ張りあげた。

「これだよこれ! まだ生きてんじゃねーか!」

摩耶が指差す部屋には体型からして駆逐艦である艦娘が二人、横たわっていた。ギリギリ息をしている状態で身体は全く動いていない。声もか細く、途切れ途切れだ。

「だったら助けてやれ摩耶」

「言われなくても、邪魔だどけエ!!」

摩耶は部屋の扉を無理矢理蹴り飛ばす。提督が今にも消えそうな二人の安否をすぐに確かめた。

「大丈夫だ、まだ脈がある。摩耶、医務室に連れていくぞ」

「分かった!!」

「何をしている」

二人をそれぞれ抱え、医療室へ向かう提督達。しかし廊下に出た途端に誰かに道を塞がれた。前にいるのは長門だ。長門の後方では朝潮含めた多くの艦娘がとても冷たい目で睨んでいる。

「提督、ここは私達にとつて禁忌の場所とぐらい分かるだろう? 何故掘り起こすような真似を——」「うるせえ!!」

「今はそれどころじゃないぐらいてめえらの腐った脳みそでも分かるだろがアアア!!」

——医務室。

「何とか命は繋げたらしい……だがいつ壊れてもおかしくはないって……」

摩耶が状況報告をする。念の為に提督は医務室の前で待機する事にした。艦娘達の手によって二名の駆逐艦の命は繋がるも、意識不明の重体。衰弱死寸前の事。前任の提督が逃げて約一ヶ月、よく生き延びたものだ。

「……そか。川内、二名の駆逐艦の名前は？」

「雷と暁だよ」

「だと思った。あの体型は第六駆逐隊ぐらいだからな、後で響に聞いてみよう……であればだ川内」

「何だい？」

「依頼だ、これを頼む」

「了解したよ」

摩耶と川内と提督が廊下で話している途中、急いだ響が横を通り過ぎた。向かっているのは医務室。

さりげなく二人は響の後を追い掛けた。

「長門さん!!」

「響か!? 今は部屋に……ッ!」

医務室のドアを勢いよく開け、中に入る響。長門からこっぴどく部屋に居るよう言われたらしい。が、いてもたっても居られず慌てて走ってきたようだ。

「ああ……そんな……嘘だ、違うアレは……!」

顔を歪ませ、目の前の状況を否定する響。過呼吸を起こし、

今にも発狂寸前だ。叫び声をあげるかと思いきや提督が後首を叩き、意識を失ってしまった。

「提督は引き下がれとあれ程……!」

「シー……患者が寝てんだ、静かにしろポンコツ兵器共。あ、天龍は来い」

口に指を当て静かにと合図する提督。医務室内で騒ぐのはあまり好ましくない。提督は意識の無い響と天龍を連れ、医務室を出ていった。

「……ここは……?」

目を覚ます響。

見えるのはあの忌まわしき前任の執務室の天井。嫌な思い出が甦る。

「目を覚ましたようだな」

新しい声が聞こえた。

新任の提督だろうか、一昨日の昼に一度会っている。

摩耶と一緒にいたはずだ。

「おーい大丈夫かー？ 大丈夫じゃないなら言ってくれー？」
うるさい。

とにかく起き上がる他ないようだ。

「おっ、起き上がったな？」

自分は応接間のソファに寝ていたようだ。目の前には摩耶がいる。横を振り向くと新任の提督が目映った。自分と同じく白髪長髪で少し微笑んでいる。

「俺はここの提督だ、つってももう知ってるか」

握手を求められた。

だが響は提督の手を叩き、拒否されてしまう。

「何の真似だ？ 私はお前と仲良くなつたつもりなど無いぞ!!」

「何当然の事言ってるんだ？ バカなのか？」

「ツ!! ふざけ——っ!？」

襲い掛かろうとするも隣の摩耶にやむなく止められる響。仕方無く響も我を取り戻し、ソファに座る。

「……何の用だ？」

「面倒臭いから単刀直入に聞く。響、アレってなんだ？」

それは響が医務室に入った時の事。発狂寸前に響は『違うアレは』と言っていた。それを聞いた提督は響に興味が湧き、連れ出したという。

「……教えない」

「んー困るなあ、教えてもらわなきゃ前に進めないんだけど」

「お前に教える事なんてない!」

ドアの方を振り向くと天龍が居座っていた。剣を突き刺し、ただ立ち尽くしている。

「天龍さん、どいてよ」

「……無理だ」

「何で!? まさかこの男に手懐けられたって言うのかい!？」

「違うな、俺は手を組んだだけだ」

扱いやすいと心の中で思いつつ、摩耶にアイコンタクトを送る提督。響を再び連れ戻し、ソファに座らせる。

「何なんだ!? ここの人達はいいつの犬とでも言うのか!？」

「落ち着け響、違うあたし達は——」「うるさい!」

「摩耶は歓迎されたかもしれないけど心の中では皆この男の娼婦で紛れもない深海棲艦って思ってる!! 知った口を聞かないでくれ!!」

「んなツ……!」

「黙れ! 触るな! 近づくなあ!!」

「はーい、響くーん!! 大声出してー!!」

提督の大声で一瞬静まり返る執務室。突然の体操お兄さんの様なテンションに反応に困っていた。

「嫌だああああああ!!」

突然叫び始める提督。

圧倒された他の三人は呆気にとられていた。今の状況が上手く説明つかない、というよりも理解が出来ない。何故叫んだ、何故この状況で、何故今なのか。頭がパンクしそうだ。

「あれ、俺だけ?」

三人とも同時に頷く。どうやら全員叫んでいたと思ひ込んでいたらしい。長い沈黙が続く。立ち上がった提督は再びソファに座る。

「……しりとりするか」

突然のしりとり三人はずっこける。摩耶と響はソファをひっくり返して後方に倒れ、天龍は力が抜けたのか床に転び始める。

「おお、良い転びっぷり」

「本当にテンションが分からねえ奴だ……」

「こういうのは何かで誤魔化すに限るんだよ天龍さん」

摩耶と響はひっくり返したソファを元に戻し、再び座る。響にさつきまでの怒りの様子は殆ど無い。

「狂ってるにも程があるよ……キチガイじゃないか」

「さつきまで狂いそうな奴がよく言えたもんだな。残念ながら俺は自覚してる狂人なんでね。キチガイと呼ばれても何らおかしくはないけどな」

「はあ……」

「それで響君、ここは大丈夫かな？」

頭を指差す提督。それは狂ってるかどうかではなく落ち着いてるかどうかを指していた。もう落ち着いてるどころか呆れている。

何をしてもし出れそうにないので仕方無く話を聞く事にした。

「アレの事……教えてくれるかな？」

「……断る」

「どうしてかな？」

「お前に教える事な——」「まさか解体されたと聞いてた姉妹がまさか玩具にされて、放置されても尚まだ生きてたなんて夢にも思わなかったよな」

「ッ!？」

この男は知っている。自分達の事情を。そうだ、あの忌まわしき前任に言われた。

『暁と電はもう使い物にならないから解体に——』

思い出すだけでも腹立たしいあの顔と声。いつか殺してやると誓ったのに逃げられた。悔しいわけが無い、こんな事あっていいはずがない。亡き姉妹の為にも必ず復讐する。

そう決めていたのに——、

「俺も正直驚いたよ。捨てられた解体申請書のフォルダを見ていたら暁と雷の名前があったからな。まあ確認するのに時間を要したかな」「な、何で……全部知ってて……」

「ああ知っててお前に聞いた。けど何も聞かない、何も喋らない、拒絶するだけ。やっぱりダメだな」

全て川内に教えてもらった情報だ。事前に調べてもらっている。捨てられた解体申請書のフォルダを持ってきてくれたのだ。

「待つてくれ提督、チャンスを与えてくれ」

天龍が呼び止める。チャンスとは響に行動力があるかを試すきっかけだ。天龍は提督の手の内を把握している。

仲間を増やす為にもチャンスが欲しいのだ。

「……さて響君、君は……何がしたい？」

それは朝礼で聞いたあの言葉。叶えたい事、やりたい事を出来る範囲で答えるという胡散臭い言葉。

提督はまだ本気にしていたのだろうか、呆れてしまう。

「……」

「……何も無いのか、残念だな。まあそうなってもおかしくないか」

ああそうだ。勝手に言えばいい

「……いやーしかし前任も惨い事するなあ。本当に使えなくなった暁と雷を解体に見せかけて性奴隷させるとは……響も気付いていなかっただろうに……」

違う、本当は言われていたんだ！　けど見捨てたわけじゃない!!

「解体する前にその身体でも堪能しよう」と営倉に幽閉し、遊びたい時に遊んでただろうなあ」

違う私は……私は……！

「しかも逃げたとなればその場で放置。約一ヶ月の間、あそこに閉じ込められていたのか……悍ましいな……」

違う違う違う違う違う違う、私は……

「見捨ててなんかいない!!!」

耳を塞ぎ、怯える響。頭を下げて涙を流した。床には零れた涙が水たまりを作っている。

あの時前任に言われた言葉の続きは――、

『解体にはせず、営倉行きとして男共に共有しよう。響、お前はこの事

を黙っている、さもなければもう一人がどうなるか……』

あの時電は轟沈寸前の大破状態。資源が枯渇し、高速修復材は貴重だった。そこで前任は戦果を出せなかった暁と雷を使用不可と判断、整備員にせがまれ、解体する代わりに男達の性欲の捌け口として利用されてしまった。

「あの時は電の為……仕方無く……私は……!」
抗えなかった。

『響、知ってるか？ 今お前の姉妹、大人気だぞ？ 見捨てて良かったな!!』

私は何も出来ないクズだ。

「違う、私は……私は……見捨ててなんか……見捨ててなんか……!!」
もう死にたい。

『おいあの響知ってるか？ 自分の代わりに姉妹を見捨てたらしいぞ?』

この世から消えて無くなりしたい。

「違う違う違う違う違う違う違う!!!!」

死ねば許されるだろうか。

「響!」

彷徨う響を誰かが両頬を叩き、目を覚まさせた。響の顔は酷く疲れしている。頭の中から聞こえる声に苛まれながら必死になって生きていたのだろうか。

「目を覚まして! なのです!」

「う……い、電?」

両頬を叩いたのは共に居た電だ。いつの間にか執務室にいる。恐らく天龍が待機させていたのだろう。

「響、一人で追いつまないと欲しいのです!」

「ふえ……?」

「電、覚えてるのです! 営倉に行く前、暁と雷は言っていたのです!」

『諦めちゃ駄目よ? 響達は挫け過ぎな所あるんだからね! え?』

大丈夫なのかって？ ふっふーん、このレディに任せなさい！」

『必ず戻るから……響のせいにしちや駄目よ？ 必ず……生き残ってね……！』 四人揃って第六駆逐隊なんだからね!!』

「……！」

「忘れちや駄目なのです！ 響には皆がいるのです！ 今まで生き残って来たのです！」

「電……」

「今、電達がすべき事は何なのか……分かるはずなのです!!」

今私達がすべき事。そうだ、今までこの日まで生き抜いたんだ。もういないと思っていた暁と雷もあの中で必死に生き抜いていた。

今も尚、その命は鼓動を増している。それなのに私ときたら——、
「……そうだね電、忘れちゃ……駄目だよね」

「絶対に……！ 絶対に！ 絶対に忘れちや駄目なのです!!」
抱きしめ合う響と電。

辛い時代を生き抜いた理由は姉妹との絆にあった。どんな時もお互いを支え合いながら戦った。苦しくても、何かを失っても、決して諦めてはいけなないと暁に教えられ、ここまで生き抜いたのだ。必ず戻ると信じて。

肝心な所を忘れて響はずっと自分を責め続けていた。一人の妹を置いていき、一人で考え、そして追い込み続けた。なんて私は愚かなのだろうか。今まで考え込んでいたのが馬鹿馬鹿しく思える。

「……えーっと、じゃあー、響」

「な、なんだい？」

「もう一度聞く、お前のやりたい事は何だ？」

提督がもう一度問い掛ける。先程は何もしたくないと答えた響。救われた自分を前に何を考えたのだろうか。

「私は……今は暁達の看病を……続けたい」

「……良いだろう。最大限手配しようじゃないか」

予測外の返答に驚く摩耶と天龍。あっさり承諾した提督に二人は違和感を感じていた。

「ほ、本当なのです!？」

「言つたらろ！出来る範囲なら何でも答えてやるってな!! この有能な俺に任せろ!! アツハツハツハツハツ!!」

「……」

「ほら、じゃあ早く行け。姉妹がお前達を待ってるぞ」

提督に誘導されるがまま響と電は執務室を出ていった。会話が聞こえなくなった辺りで天龍が物議を醸し出す。

「おい、前任の事言わなくて良かったのか？」

「ああ今はな」

「今？ この次に来るとでも?？」

「ああ来るよ。必ず、ね」

9. 予感は当たりたくない時に限って当たる

「んじや摩耶、この鎮守府はお前に任せた」

「ああ分かった。『予感』が来た次第に連絡する」

「あ、ちよつと待つて摩耶。渡すの忘れてた」

提督が鞆からある書類を取り出し、摩耶に手渡した。その書類は建造の依頼と機密情報のモノだった。

「建造艦は大潮、満潮、荒潮、霞、霞、鳥海だ。恐らく近日中に着任する、明石に把握してもらいたい。あとこの機密情報は秘密裏にな」

「分かっているさ、提督にとって一大事だからな」

「オーケー、頼むわ!!」

広場には一機の離陸直前のヘリコプター。これから提督は後輩の呉鎮守府へ向かう。付き添いとして朝潮を連れ、摩耶は『予感』の為にこの鎮守府に残る事になった。

「朝潮、苦勞するから気をつけてな」

「はい！ 分かりました！」

提督と朝潮を乗せたヘリコプターは離陸、呉鎮守府へ向かっていった。それを見届けた摩耶は工廠へ向かう。

「明石、いるか？」

「はい、居ますよ！」

「近日中に新しく艦娘が五人ほど着任するんだけど装備の手配は出来る？」

「出来るには出来ませんが……」

「資材は絶望的。装備を開発する以前の問題だ。」

「だからと思つて提督が近い頃に資材を持ってくるそうだ。その時で構わない」

「は、はい、了解しました！」

—— 呉鎮守府執務室応接間

「いやまさか白くんがあの鎮守府に配属されたと聞いて驚いたよ」

「なあに、大本営がクソ暇で真面目だったからちよつとした刺激が欲しくなっただけだよ」

後輩が任せている呉鎮守府。海軍の最大規模の鎮守府で軍事力はトップを争う。艦娘を従えている軍人は総勢五名、その上に立つのは紛れもないこの男、あの鎮守府の提督である。

「流石は海軍一の減らず口だね。そしてこの朝潮ちゃんが、あの鎮守府の艦娘なのかな？ 懐柔させるの早いね」

「懐柔なんてしてねえよ。俺がやりたい事に従えさせたらコイツが勝手に着いてきただけだ」

そういつて提督は朝潮の頭を撫でていく。

後輩達からは白くんと呼ばれているようだ。後輩と言っても四十後半の中年男性で、提督は二十代の若者。逆なのではないかと思いつつも余程人脈のある人なのだろうか。後輩も緊張するどころか気ままに話している。

後輩の隣に居るのは加賀だ。あまり会話には混ざらず、後輩が話している姿を見るだけだ。

「ところで白くん、話って何かな？」

「ああ早速本題に入るか、実はあの鎮守府の資源が枯渇状態でね？君のところから少し恵んでもらえないかなって話」

「ああそれだったら大丈夫だよ。決めた分だけそちらに送るね」

「お、そうか。それはありがたい。んでもう一つなんだけど医療品も少し分けてくれないか？」

第六駆逐隊の事情をある程度隠して話す。全て話すと秘密情報が漏洩する可能性がある為、慎重に話した。後輩は快く受け入れてもらい、資材と同時に運んできてくれるらしい。

「その……中将の調子はよろしくて？」

「ああバッチグーよ!!!」

「そちらの子が何もしてなければ良いのだけれど」

「あ、朝潮は何もしていませんー！」

どうやらこの加賀は提督と面識があるらしい。うちの鎮守府にいる加賀さんとは偉い違いだ。とても穏やかに顔を崩さずに笑ってい

る。

「大丈夫だ、お前が気にせずとも朝潮はいい子にしてる。前まではなー！」

「本当にお気楽な方だ……あ、そういえば白さん。この海域なんだけども……」

後輩と提督は作戦海域について突然語り始めた。こうなればこの二人は止められない。それを重々承知している加賀は朝潮と話す事にした。

「ねえそちらの鎮守府、私は上手くやってるかしら？」

「あー、えーっと目立った事は……無い……ですね」

「……やはりね。私も最初は釣り合わなかったわ」

提督と加賀が初めて出会ったのは演習時の事。当時旗艦である加賀の艦隊の演習相手は提督によって育てられた摩耶を旗艦とした艦隊。結果は摩耶の艦隊による大勝利。

損害を与える事が出来なかった加賀の艦隊は提督の監修の下、特訓を積み重ね、ようやく摩耶の艦隊に対し勝利を勝ち取る事が出来た。その事で加賀は提督に感謝しているらしい。

「ただ中将は正直者でウザくてバカで捻くれ者だけど心は真っ直ぐよ、だから少しでもいい……信じてあげて」

「おいさつき心情漏れてたぞ、バカとか言ったなオメー」

「あら何の事かしら、身に覚え無いわね」

「へーん何回も泣いてたくせによく言うゼブラア!!」

「朝潮、そう伝えておいてね」

「は、はい！」

加賀に殴られた提督のスマホの着信音が聞こえた。提督にとって最も来て欲しくない着信。勿論電話してきたのは摩耶だ。

「はいはいもしもし」

『予感的中だ。先程加賀が偵察機で深海棲艦を確認した』

「クラスは？ 種類は？ 数は？」

『クラスは姫、陸上型、数は一体』

「ネームは判別可能か？」

『ああ、飛行場姫だ』

クラスが姫なだけまだマシンな方か。しかも一体のみ。敵の拠点を前に単騎出撃とは自殺行為だ。余程自信のある奴なのか、死にたがりか、それとも囮又は作戦の罠だろうか。いずれにせよ警戒は怠つてはいけない。

「そうか。分かった、んじゃポンコツ兵器共らに知らせるようにマイクに近付けてくれ」

『分かった』

「あーえつと、聞こえてつかー？ 遠くから俺の綺麗な声をポンコツなお前達に届けちゃうぞ☆」

早速イラつきそうな言葉で艦娘達を煽る提督。聞かせている摩耶本人もスマホを握り潰しそうだったが落ち着いて話を聞く事にした。『あー何か深海棲艦が出たんだって？ 飛行場姫？ まあお前達ならやれるだろ』

「うるせえ……」

『てなわけで第一艦隊旗艦摩耶、加賀、長門、龍驤、利根、木曾。お前達に飛行場姫の討伐又は鹵獲を頼む。あー出来るだけ鹵獲の方向で頼むわ。なお現場の作戦指揮は摩耶に任命しよう』

「何故私達が……」

『うるせえ！ 俺が選んだんだ、さつさと出撃しろオ！ あ、後の艦娘達は鎮守府近海の哨戒な。響と電は出撃禁止。以上、摩耶いいぞー』
提督の声が聞こえなくなり、呼ばれた艦娘は仕方なく出撃する事にした。摩耶も執務室で準備している。

『言つとくが摩耶、あの力は禁止。いいな？』

「分かってるつーの。しかし提督、鹵獲もあてにしているのか？」

『話を通じればの話だ。通じなきゃ沈めて構わない』

「分かった。じゃあ切るぞ」

提督は摩耶との連絡を済ませ、通話を切った。現状あの鎮守府での戦力を考え、組まれた第一艦隊。恐らく下手な事でもしない限りは倒される事はないだろう。

「大丈夫なのかい？ 艦娘だけに任せておいて……」

「ああ大丈夫さ。摩耶なら何とかなる」

「そうですか……余程摩耶の事を信頼しているね」

「……まあな」

何年も一緒にいれば信頼は厚くなる。この提督についてきたのは摩耶一人だけ。あんな事が起こればお互い信頼するのも無理はない。

あんな事が起これば。

「し、司令官！ 摩耶さんに指揮を任せて大丈夫なのでしょうか？」

「大丈夫だ。摩耶は俺には劣るが賢いし、強い。それに——」

「それに？」

「アイツは色々怪し過ぎる。摩耶に任せた方が良い」

「??」

「主砲、放て！」

加賀や龍驤による艦載機の展開で制空権は簡単にも確保。飛行場姫が予め出していた敵艦載機は摩耶や利根の対空機銃により全滅、長門の砲撃と木曾の魚雷で飛行場姫を追いこんだ。

「敵はかなりの満身創痍だ、叩き込めば沈められる」

「待ッテ!!」

飛行場姫は怪我した右腕を抑え、海上をゆっくりと移動していた。額から青い血を流し、目は朦朧としている。必死にその掠れた声で訴えてきた。

「敵デアリナガラ、オコガマシイノハ分カッテイル……!」

「なんや……急に喋り出したで」

「デモ頼ム！ 私ヲ……鹵獲シテクレ!!」

戦闘態勢に入っていない飛行場姫。艦載機も飛ばしておらず、此方に攻撃の意思は無いと伝えてきた。更には自ら捕まえてくれと懇願している。

提督からは討伐か鹵獲かのどちらかを指示していた。だがしかし罨の可能性もある。容易に近づいてはいけない。

「どうするねん、作戦指揮を任された摩耶さん」

「……周辺は？」

「反応は無いのじゃ。逆に恐ろしいけどの」

加賀や龍驤、加賀達による索敵でこの海近辺に敵は確認出来なかった。本当に単騎でここの鎮守府に来た可能性が高い。

「……鹵獲するか」

「ちよ、ちよつとあなた本気で言ってるの!?!」

「私はどちらでも構わない」

「はあ……色々言われてねんけどって摩耶!?!」

索敵で敵がいらないとはいえ相手は姫級、そして満身創痍。沈む好機とも言えるだろう。摩耶は第一艦隊を置いていき、一人で飛行場姫に近づいた。

「何故ここに来た、飛行場姫」

「アノ人に……会ウ為……」

「お前のいうあの人はまだいない」

「……ツ!!」

「大人しく海の藻屑になつてもらおうじゃねーか」

「ヤメテ……マダ私ハ……!」

砲口を零距离で飛行場姫に向けた摩耶。飛行場姫は目に涙を浮かべ、死にたくないと懇願する。

摩耶はその姿に躊躇いながらも砲撃した。

10. 滝修行は見てるだけでいい

「じゃあな、また会おう！ 資材と医療品の件は明日よろしく頼む」
「うん分かってるよ……」

ヘリコプターに乗り、あの鎮守府に帰還する提督と朝潮。夕方十七時、空が茜色に染まっている。その空を背景に一つの黒い点が微かに消えていった。

「白くん、無理をしてはダメだよ……」

——鎮守府広場

ヘリコプターから降り、摩耶に迎えられる提督と朝潮。もう夜が空を支配しつつある。提督は執務室に向かい、報告書を目にした。

「摩耶、どうだった？」

「飛行場姫か？ 変な感じだったな」

「すまん説明が足りなかった。ポンコツ兵器共の調子はどうだった？」

「……個人の練度は高えが……戦闘はボロボロだな。皆一つの事しかやらない」

「ふーん」

案の定、前任から染み付いてしまった戦闘をそのまま引き継いでしまっている。前任から指示された事しか皆やっていなかった。砲撃の命中率が低い、艦載機を無駄に使う、周りを見ない。報告書にはそう書かれている。

「んで飛行場姫は鹵獲したんだな？」

「ああ今はとりあえず営倉で寝てもらっている」

「うわマジか、摩耶さん最低だ——いや何でもないです」

殴られる動作に気づいた提督は言い直す。あの時零距离で撃たれるもわざと外した摩耶。飛行場姫は失神し、その場で倒れてしまった。

そのまま身体を運ばれ、今は営倉で過ごしている。他の艦娘達に監

視をさせているようだ。

「さて……今のを聞いてて何かご質問でもあればどうぞ艦娘諸君」

執務室の奥で第一艦隊に指名された艦娘達。皆何か言いたげな表情を醸し出している。

「良かったなー抵抗しない飛行場姫相手に無傷で。これに敵艦隊でも来れば摩耶以外大破だったろうになあ？」

正直な話、資源が枯渇状態なので提督自身もめちやくちや消費せずに済んだと一安心している。摩耶がいるので姫一体に負ける事は無いが、他は別だ。確かに練度は高く、自分の役割、装備の性能などは把握している面、それぞれの素晴らしい所ではある。

しかし前任の無能な指図や意味の分からない指揮のおかげで陣形が組めていないのは初耳だ。砲雷撃戦、航空戦において陣形を知らないなど言語道断。前任の無能さに頭が追いやられる。

「何や、私らに文句あるんかいな」

「それはお前らもだろ？ お互い様だな龍驤」

「提督、何故鹵獲を範疇に入れたのか教えてもらいたい」

「ああ単純に何故飛行場姫が単騎でこんな所来たのかなって興味があっただけ。後から色々吐いてもらう予定だよ」

理由はただ興味があっただけ。いい加減な理由に拳を握る者もいた。ただ木曾は知らん顔して上の空である。

「では何故提督あの場に居なかった？」

「ああ呉鎮守府に行ってた。大事な話があったからな、午後から外出してた。つていうか聞かなかったのか？」

「聞いていないが？」

長門の即答を聞き、即座に摩耶を見る提督。ヤバいと思ったのか摩耶は別の方を見て口笛を吹いている。

全く呑気な奴め、後で散々からかってやろう。

「あーならすまないな。どうやらどこかの馬鹿による伝達不足だったらしい」

馬鹿という言葉を強調させ、誰かを指摘する提督。勿論誰とは言っていない。それに対して摩耶はとてつもなく動揺している。分かり

やす過ぎる。

「加賀は何か不服そうな顔だな」

「当然でしょ。敵を鹵獲するなんて結局はろくな事しかしないんだから」

「おやおや会って間もない人に偏った偏見とは些かお前も考える頭がオーバーヒートしてるようだあ一度滝に打たれて頭を直接冷やすといい」

「偏見を持たない方がおかしいわ。あなたとそこの摩耶だってあの敵と姿は変わらない」

「だから仲間なので助けたに違いない、とか間抜けな憶測もいかんよ加賀君。人を目で見て判断する前にまずその廃れた脳みそを先に診てもらいたまえ」

晩御飯の鐘が鳴り響く。多くの人がその鐘の音に惹き付けられ、窓を覗いていた。

「提督、俺は飯が食いたい。先に失礼する」

「おおいぞー」

木曾が飯を食いたいと願い、場の空気は少し変化。木曾に釣られて利根や龍驤、長門と加賀も執務室を出ていった。ドアが閉じるまで加賀はずっと睨んでいる。

やがてドアが閉まり、執務室が一気に静寂に包まれた。

「ブツハツハツハツハ!!! アイツ、あの時の加賀とまんま変わんねえ!!」

大声で吹き出す提督。あの時の加賀とは呉鎮守府で朝潮と話していた加賀の事だろう。最初別の加賀に会った当時もまさにこんな風だった。

「あーマジで変わらなくて笑いを堪えるのに必死だったわ!!」

「……提督」

「んー何だ摩耶ー!!」

「……すまない」

「気にすんな笑え!! ハツハツハツハ!!!」

気にしなくてもどこかでは気にしてしまう。それを摩耶は心の奥

にしまっておいた。だけどいつも思う、もう偏見は慣れているはずなのに。

「失礼します」

今度は翔鶴が入って来た。提督と同じ白髪長髪で五航戦と呼ばれた正規空母だ。お淑やかな性格で瑞鶴の姉として立派な艦娘を務めている。

「どうした白髪バーজন」

「最初から凄い悪口ですね……やりたい事が決まったので申し上げに来ました」

「ほう、じゃあ早速聞かせてもらおうか」

「はい、私はこの鎮守府の艦娘達を助けたいんです!!」

あまりの予想出来ない質問に目を丸くする提督。綺麗すぎる願いに鳥肌が立ってしまった。

「理由は？」

「皆精神的に追い込まれて弱くなってしまったんです。私はそれが見ていられなくなつて……」

「なるほどねえ俺が来るまでにやるべき事だったと思うけど抽象的過ぎる、詳しく言え」

「皆を励まして、慰めて、助けてください。悪口ばかりで皆苦しんでいます、だから励ましの一言でも……一回でもお願いします」

深々と頭を下げる翔鶴。全て本心で答えた。自分一人ではとても支えきれない、提督という存在がいればまた立ち直せると翔鶴は考えていた。

当然受け入れられるとは思っていない。それでも聞き入れてほしかった。

「……分かった、最大限努力しよう」

「あ、ありがとうございます！ 私も頑張ります！」

「あー頑張りたまえ」

「うわっ何!？」

突然の衝撃音に目を覚ました時雨。夕立は相変わらず寝惚けている。部屋を出てその衝撃音の正体を確かめた。

そこにあつたのは――、

「はいオーライオーライ! ああ弾薬はあっち、ボーキサイトはあそこだな」

広場で大多数の人達が何かトラックで運んでいるのが分かった。トラックの中には大量の資材。ざっと見積もって一万近くは存在する。いつの間にか獣道と化していた鎮守府に通ずる道は整備され、大型トラックが通れるまで拡張されていた。

「食料は食堂に置いてつてくれ。痛っ!! つておい誰だ今俺の崇高なる頭を殴った奴は!! 許す!! いややっぱ許さん!!」

提督を中心に多くの資材が運ばれていく。眠たそうな摩耶、朝潮も参加している。

時雨は思い切つて正装に着替え、広場に向かった。

「て、提督。な、何をしているんだい?」

「まず人に声を掛ける前に挨拶な。おはようさん、時雨」

「お、おはよう提督。で……」

「見りや分かんदार、資材運んでんだ」

提督曰く、摩耶は報告ミスで強制的に手伝わされているらしい。朝潮はいつの間にか手伝っていた様だ。

しかしこの鎮守府に人がこんなにがやがやしているのは初めて見た。

「これで色々仕事が捗るぞおー!」

――食堂内

「……これ全部ですか?」

食堂の半分を埋め尽くしたのは提督が注文した食料が入ったダンボール箱。あまりの量の多さに鳳翔と間宮は若干引いている。

「ああそうだ! ざっと見て一年分はあるだろ!! アツハツハツハツ

各寮の補修工事、入渠施設や司令本部の改築など一気に事を進めていった。摩耶が持つリストには色々と書かれている。

「行動力の化け物だな……」

「やあ摩耶、苦勞しているね」

声を掛けたのは響だ。提督の突然過ぎる奇行を耳にし、気になって外に出ていた。提督は今島風と追いかけてっことをしている。

ただ一方的に島風を追い詰めているだけだが。

「ああ響か。医療室を抜け出して大丈夫なのか？」

「今は大丈夫だよ……摩耶？」

「ん？ どうした？」

「あの時酷い事を言ってしまったってすまなかった。言い訳になってしまいが……私はどうかしていたようだ」

響は摩耶に娼婦やら深海棲艦やらと言葉で傷つけた事を謝った。自分がどうかしていた事、心に余裕が無かった事、嫌な過去含め自分に非があると思っている響。あれから気になっていたのだろう。

摩耶は響の頭に手を置き、優しく撫でた。

「……大丈夫だ、気にしてない」

「本当にすまない……」

「気にしないでいいって」

響の謝罪に対して笑顔で気にしてないと返す摩耶。こういう事は既に慣れている、はず。摩耶自身は気にしていないが提督はそうでもない。あの時提督は少しだけ響にキレていた。といっても叫び声に全て吹き飛んだが。

「中将殿オー!!」

「アイルビーバック……」

海に沈められる提督は右手の親指をあげる。駆けつけた憲兵達が引っ張り上げていた。

仕方なく摩耶はふざけている提督の頭を鷲掴み、そのまま広場に放り投げた。

「なあに遊んでんだ提督」

「いやーあの映画の真似したかったからつい、な」

「そんな遊んでる暇なんてねえだろ、これだけ鎮守府を改築しまくって予算は大丈夫なのか？」

「ああ予算はそもそも俺の金で払ってるので問題は無ああああい！」

「中将殿、予算は見積もってこれぐらいかと！」

「……あたしが見よう……は？」

「ゲツ」

ついさつき予算はすべて自身のお金ですましていると言った提督。しかし持ってきたリストには摩耶の持つリスト以外に提督が完全に私用目的で導入した部屋の改築やゲーム機、パソコンなどが含まれていた。更には一部の予算に摩耶の給料から引かれているのが分かる。

「おい……」

「いやーやつぱ俺にも休息が——」「何が問題無いだこの野郎ーツ!!」

理由も聞かずに黙って殴る摩耶。断末魔すらあげず提督は壁に激突し、現代アートのようになってしまった。

「……すいませーん。この壁の補修もお願いしまーす」

「はーい」

摩耶は提督の頭を掴み、地面を引きずって仕事に向かって行った。提督は既に気絶しており、白目を剥いている。

だが提督はすぐに目を覚まし、何か思い出した。

「あ、ソフトはス〇ブラにしよう」

11. 監視しているヤツはまた誰かに監視されている

「え？ 大本営に繋がらない？ なんですか？」

「分かりません……全て受け付けてくれないんです……」

「困ったわね……青葉は？」

「どこを探してもいない。はあ……何をやってる事やら……」

「何話してるんだ？」

偶然通りかかった摩耶と引き摺られた提督。陰で話していたのは長門、榛名、霧島、加賀、加古の五人。何か大事そうな会話をしていたようだ。

「いえいえ、ただの世間話です……提督は何があつたんですか？」

「うるさいから一回黙らせた」

「ああ……ええ……そうですか」

「んじゃあな」

若干顔を引きつらせる榛名達。気絶した提督を引き摺り、摩耶が向かった先は執務室。提督をもう一度起こし、椅子に座らせる。

「書類書き終えるまで見放さないからな提督」

「えーっ！ それってーまさかプロポーズウアア!!」

「いいからさっさと書け、あたしも手伝うから」

机に叩きつけられた提督はブラインドタッチで書類をまとめていく。何故だろうか煙が出ているようにも見える。何がプロポーズだ、馬鹿らしい。もう既にしているだろうに。面倒のかかる提督だ。

「摩耶さん」

「何？」

「耳貸して」

「嫌だ」

「いや本当に真面目な話」

溜息を吐く摩耶は警戒しながらも耳を差し出す。提督へ両手で覆い隠し、何かコソコソと伝えた。

それを聞いた摩耶は急に真面目な顔になり、書棚の方へ向かった。「ああやっぱりあったよ提督。隠しカメラ、そして——」

書棚をいきなり壊し、腕を奥まで入れる。何かを発見したのか摩耶は腕を引つ張る。書棚の奥から声が聞こえた。摩耶に頭を掴まれて出てきたのは——、

「やつぱこういう奴は一人ぐらい居るよなー、青葉」

「へへ……どうも提督……その……お疲れ様です」

重巡洋艦、青葉だ。

何かとカメラで写真を撮りたがる青葉は執務室に隠しカメラを仕掛け、提督の動向を監視していたようだ。バレたとなれば物凄い汗が吹き出ている。

「さーてお前が最初からここを見張っていたのは気付いていた。当然俺が狙ってる事も分かるだろう？」

「は、はい……大体は……」

「どうする？ お前は何がしたい？」

摩耶に頭を押し付けられ、到底脱出出来るような状況ではない。隠しカメラで監視してたとはいえ全ての情報を掴んでいた訳ではなかった。分かっている事は提督の行動力による艦娘の戦闘態勢の向上、そして前任の提督が深海棲艦の親玉である事。

今すぐ新聞にして広めたかった。しかし広めた本人は消されると聞いた青葉。冗談に聞こえなかった青葉は身体を竦めてしまった。

「本当に……アイツが……深海棲艦と手を……組んでいるんですか……？」

「お、聴いてたか。そうだぞ、広めなかったただけ賢明だな。広めてたらお前……本当にこの世から消えてたぞ」

背筋が凍る。声のトーンが急に低くなった事に青葉は身体を震わせた。

もしあと少しで自分が動いていたらと思うと考えるだけで恐ろしい。他の自分が消されたなんて聴いて怖気付かない方がおかしいはずだ。

「んで青葉。お前がやりたい事は？」

「私は……天龍さんや木曾さんと同じく……復讐がしたいです……！」

前任の所為で衣笠は死んだ。黙っていられる訳が無い。いつか話すタイミングを探していた分、今がその時だ。

「ほう……いいねえ……」

前任の話を聞いた途端に青葉の中で増大したのは憎悪。衣笠は度重なる罰と過度な出撃により、精神崩壊を起こして解体された。それ以来前任を憎み続けている。復讐の機会があるのであれば手を組まない他に何がある。

「んじや手を組もうか。摩耶、離せ」

「……はい、よろしくお願いします」

摩耶が手を離し、握手を求める提督。座り込む青葉の目線に合わせ、提督もしやがむ。青葉は手を握り、組む事に決めた。

「よっし青葉。分かっているとかがこれはシー……な？」

「分かっています。消されては意味がありません」

「キシキシキシ、ならばよし！ だが……」

書棚の奥には隠し部屋。部屋には四つのモニター、個人用の冷蔵庫、エアコンなどと監視するにはうってつけの部屋だった。

モニターには執務室はおろか、各艦娘の部屋や食堂、工廠が映っている。恐らく前任が監視する為に設置された部屋なのだろう。

「人を監視するのは関心しないなあー？ 監視だけに」

「……殴っていい？」

「何で第一声がそれなの摩耶君」

「私も同感です」

「いや何言ってるんのお前」

監視室らしき部屋は一時保留する形でまとまった。扉ごと書棚で隠し、入れないように扉に固定。もし侵入すれば提督のスマホから緊急アラームが鳴り響く。誰も悪用させない為の防止策だ。

「あ、そうだ青葉。お前は聞き取ってメモするの得意だろ？」

「は、はい！ そうですが……何か？」

「うん、早速役立ってもらおうか」

—— 営倉内第三牢屋

何モ見エナイ。

私ハ沈メラレタノカシラ。ソレニシテハ身体ガ酷ク重イシ、傷モ痛ム。

確カアノ時私ハ摩耶ニ沈メラレタハズ。ト言ウヨリモ此処ハドコダ。トテモ臭ウシ、冷タイ。

「おっ、お目覚めかな？ 飛行場姫」

男ノ声ガスル。恐ラクコノ鎮守府ノ提督ダロウカ。ソウナレバ私ハ完全ニ鹵獲サレタ事ニナル。

「自ら鹵獲されたいとはとんだDMも居たもんだな」

ドコダ、ドコニイル。コノ暗闇ノ中デ一人ハ嫌ダ。頼ム、誰カ私ニ触レテ。

「俺はこの鎮守府の提督だ。以後よろしく頼む。今お前がいる所は営倉でな？ 衛生環境が整っていないくて申し訳ない」

「……才願イ……誰カ私ヲ触ツテ……」

飛行場姫が辺りを探る様に手を伸ばす。カーンと鋼鉄製特有の音が営倉内で残響する。触れた途端に飛行場姫は頭を守り、酷く怯えていた。

普段の様子とあまりにも違う事に気がつく提督。仕方なく腕を伸ばして、飛行場姫の手に触れた。

「これでいいかー？」

「ハイ……アリガトウ……ゴザイマス……」

提督が触れた事で落ち着きを取り戻す飛行場姫。ただ触れていてもまだ暗闇で何も確認する事が出来ない。ましてや触れた相手の顔すら分からない状況に考え込む。

「あーすまないが、今お前に目隠ししてる。こちらの機密情報を奪われない為にね」

「目隠シ……？ ソコニイルノネ……？」

「……」

「ネエ……ソウデシヨ？ ネエ……」

「飛行場姫……」

「何……？」

「そこは……壁だ」

「……」

方向を指摘され、飛行場姫は恥ずかしがる。声の方向へちやんと顔を向け、話を進めた。それと同時に提督は合図して、青葉にメモを取る準備をさせていく。

「さて気を取り直して飛行場姫、君にはゲームをしてもらう」

そのゲームとは三問三答ゲーム。ルールは至って普通でお互いに質問し合うだけ。但し質問された人はした人の質問に必ず答えなければならぬ。

「いくらお前の頭でもよーく理解したはずだ。んじゃ例として俺から質問、飛行場姫は何処から来ましたか？ 五文字以内で答えなさい」

「……海カラ」

「だよねー!! そうだと思った!! しかも本当に五文字以内!! とまあこんな感じだ。じゃあお先にどうぞ」

「……アナタハ何者カシラ？ 三十字以内デ」

「俺か？ 俺はこの鎮守府の提督だ」

「……ソウ。アナタノ番ヨ」

おかしいと思った飛行場姫。何故なら今話しているこの男がまるで自分達の匂いと酷似しているからだ。

そんな男などこの世に一人しか存在しない。

「俺だな。んじゃ飛行場姫、何でお前はボロボロの状態でここに来た？ 四十五文字以内で答えなさい」

「アナタ達の攻撃デ追イ詰メラレテ……アイツノヤリ方ガ嫌ニナツ……テ、ドウシテモ生キ延ビタクテ航行シテイタラ……ココマデ来テ

イタ」

「まあ四十五文字以上だけ良いでしょう。はい、飛行場姫」

「アノ人ハ……!! アノ人ハ生キテルノカシラ!? 三十字以内デ」

「なあその何文字以内って必要なの？」

あの人。

日本で知らない人はいないであろう有名な人物。それは人間でありながら敵である深海棲艦をまとめていた司令官的存在。

通称初代深海提督総括、深海棲艦を使って日本や世界を陥れようとした大罪人。名前や素性は不明、生まれた経緯も一切不明という謎多き人物だ。姿を見せる事は殆ど無く、また非常に優れた作戦行動や圧倒的な軍勢力を有しており、長らく人類を苦戦させていた。

しかし日本が秘密裏に決行していた奇襲作戦により、初代深海提督は確保。そのまま連行され、行方は不明。深海棲艦達は力を失っていき、年月をたてて徐々に領海も取り戻していった。

しかしこの鎮守府を治めていた前任の提督が二代目として降臨、現在に至っている。

「……お前の言うあの方は、いないぞ」

「エツ……」

「もうウチらの方で処刑後に遺体を解剖、火葬させて骨しか残されていない。情報は俺が全て持っているがな。残念だ」

信じたくなかった。頭の中で何度も否定し続けた。

私達の大事な人が死んだ、そんな話は嘘に決まっている。でもそれを受け止めてしまう自分がいた。分からない、分かりたくもないそんな気持ちで胸が押し潰されそうだった。

「大丈夫かー? 目にゴミでも入ったかー?」

「嘘ダ……アノ人ハ……私達ノ……鍵ナノニ……」

「何かしら希望は持ってたんだろがこれは事実なんだ。今は受け止めてもらいたい」

涙が止まらない。目隠しが濡れていく。

ここまで苦しい思いをしてまで鹵獲されたのに酷い仕打ちだ。あの人に会いたい、そう思っていた。だが聞いてみればあの方は既に死

亡、骨しか残っていないと言う。そんな事など容易に信じられるはずがなかった。

「嫌ダ……アノ人ガイナイト……私ハ……」

「さて次は俺の番だ、飛行場姫。お前達の親玉はどこにいる？ 三十文字以内で」

「……今ハ言エナイ」

「今は、か。分かった、んじゃ次」

「……私ヲドウスルツモリカシラ？ 三十字以内デ」

「なあそれ流行ってんの？」

「んーそうだなー、まだ方針は決めていないし、取り敢えず大本営には報告せず保留、かな」

通常深海棲艦などを鹵獲した際は大本営に直接報告しなければならぬ。

もし報告を怠った場合は減給や降格などの罰が与えられる。それを知っているながら提督は飛行場姫を鹵獲した事は報告しないらしい。益々分らない男だ。

「……分カツタ。次ハアナタヨ」

「そうだな、んじゃこれが俺の最後の質問だ。飛行場姫、今お前は……何がしたい？」

飛行場姫の要求を聞いてきた提督。摩耶や青葉はその質問に驚いていた。提督は艦娘に聞くどころか敵である深海棲艦にさえ聞いてきたのだ。秘書艦である摩耶も狙いは分からなかった。

「何がシタイ……カ。ソウダナ……モウアノ人ガイナイ以上、モウ意味ハ無イ……イツソ一思イニ殺シテクレルカシラ？」

「それはお前の最期の質問として捉えていいんだな？」

「エエ……才願イ……」

「……いやそれは無理だな」

要求を拒否した提督。まるで意味が分からない。提督の狙いは何なのか知りたいところだ。謎が深過ぎる。

「ナ、ナンデ……」

「今ウチはお前に今みたいに構ってられるほど暇じゃない。ましてや

殺すなんて事は後処理が面倒くさくてたまつたもんじゃねえんだ。自殺してくれるならこちらでも手間が省ける。だから保留にしているの、パードウン？」

提督は檻越しに手を伸ばし、飛行場姫の額を指で突つついた。文節が来る度に額を突つつき、面倒臭い状況を説明する提督。

「ソ、ソソナ……死ネナイ……ナンテ……」

「だからしばらくの間はここで暮らしてくれ。食事は一日三回、仕事は……この営倉の清掃でもしてもらおうかな」

「殺シテ……クレナイノ……」

飛行場姫が捕らえられている営倉は提督によってある程度清掃はされている。資材調達時に遺体も回収し、呉鎮守府の遺体保管庫に収納させた。拷問器具に関しては人に見せられないので封印している。

「あーなんか奴隷みたいな事しちゃってるけど好きな時間に清掃しちゃって構わないから。暇になったら大きな声で呼んでくれ、娯楽とかあげるからさ。あ、自殺したいならそこに首吊り用の縄あるからやって構わないよ」

「エ……エツ？」

「あ、摩耶。コイツの手錠と足枷、外しちゃって。大丈夫だって、艤装は取り上げてるし、抵抗はしないし出来ないよ」

「……エツ？」

檻の扉が重く開いた。目隠しされて何も見えない飛行場姫は見えない不安に戸惑いながらも手錠と足枷を外されていく。

久しぶりに自由の身になった飛行場姫。ついでに目隠しも外され、ようやくその場を眺める事が出来た。

「アノ男は？」

「提督なら先に帰った、もういない」

「ソウ……」

最後に顔だけでも見たかった飛行場姫。どこか名残惜しい。そこから飛行場姫は摩耶に清掃のノウハウや、呼び掛ける際の注意と方法を教えてもらった。

「何……コノ状況……」

営倉にたった一人、飛行場姫は数十分の間、立ち尽くしていた。

12. イケメンの歯が光るのは二次元だけ

何も見えない。

ここはどこだろう。

ああそうだ、私は営倉に入れられてそれからずっと弄ばれて、誰も来なくなつて死ぬつもりだった。

響達は何て言えばいいのかな。

何て謝れば許してくれるかな。

必ず戻ってくるって言つたのに、情けないお姉ちゃんよね。

ごめんね、駄目なお姉ちゃんです。

もう私は……

「っ……」

光が眩しい。

白くて何も見えない。誰かに手を握られている。

握っているのは――、

「ひ……びき……っ？」

響だ。

徐々にこの場所がどこなのか分かってきた。ここは医療室だ。私は助けられたのか。

「目を覚ましたんだね、暁！」

とても嬉しそうな表情で名前を呼ぶ響。どうやら暁達は助けられたらしい。響の後ろには雷と電が見える。

「どう……なつて……るの？」

「説明は後だ暁、今は休んでて」

「う……ん」

取り敢えず今は休もう。そう思った暁は響に言われるまま、また眠りについた。提督が着任して一カ月と一週間、暁と雷が経験した最悪な時は終わりを告げた。

「提督、その手当はどうしたんだ？」

「あ、これか。少し躓いて転んだ」

「司令官!!」

「ドアは静かに開けましょう、響君。じゃないとドアさんが悲しんちやうぞ☆」

執務室に走りながら入る響。急いでいるのか息切れをしている。

「あ、暁達が目を覚ましたんだ!」

「ほーそりや良かった。今はどうしてる？」

提督はスマホをいじりながら響と会話している。摩耶はコーヒを飲みながら小説を読んでいた。仕事が一段落したのか落ち着いている。

「今は休んでもらってる。だから報告しに来たんだ!」

「おう報告ありがとなー」

「ああ!」

響は嬉しそうに執務室を後にした。クールな響にしては活発だ。やはり姉妹愛は素晴らしい。

「流石最新の医療器具は凄いなあ〜」

「関心してる場合か提督。会いに行かなくていいのか?」

「なーに言ってるんだ摩耶。俺が会いに行ったら俺の美し過ぎる美貌に目が眩んで失神してしまう。それにそうする時間がある程俺は暇じゃないんだバーカ」

「パ○ドラやってる奴がという言葉じゃねえだろ……」

「失礼します……」

執務室に入ってきたのは金剛四姉妹。全員を引き連れ、話がしたいと提督がわざわざ呼んでいたらしい。

「何の用なのデスカ、提督」

「ああお前らに少し聞きたい事があってね」

「聞きたい事……ですか」

「こそ。お前ら姉妹は前から優秀だと聞いていてな、それぞれ艦隊に配属させようかと思うんだけど、どうかな?」

今後の出撃の為、提督は艦隊の編成を考えていた。チームワークは

駄目でも各艦娘が持つ練度はとても高い。そこで提督は前任から重宝され、優遇な対応を受けていたらしい金剛四姉妹に相談を試してみたのだ。

「榛名は大丈夫です！」

「別に異論はありません」

「比叡は……多分大丈夫……です」

「そか。金剛は？」

「……考える時間が欲しいネ」

「いいよ、まだ時間は余分にあるからな。他の三人はオーケーって事で」

「あ、金剛。前の件なんだけどあまり無理しなくてもいいぞー」

金剛四姉妹はそのまま自分達の部屋に帰っていった。

何故だろうか、金剛が少し不安そうな表情を浮かべている。提督は知っていた。あの約束以降、金剛は影で提督の事を見守っている。それに気付いた提督は気遣いに金剛へ言ったのだ。

「大変だな金剛も」

「ああそうだな摩耶。だが本当に守ってくれると思っていなかったなあ」

「信じていなかったのか？」

「当然だ。何で信じられる人かどうか聞きに来る奴を俺が信じなくちゃならない」

スマホを弄るのをやめ、書類に手を出す提督。それぞれ艦娘の練習プランを考えていた。固有で高い練度を持つ艦娘達、何より足りないのは技術と知識だ。前任の指揮は何をしていたのか想像がつかない。「これでやるか」

——鎮守府近海

「さーてここで繰り広げられるはポンコツな艦娘共による無駄試合だ！ ルールは自由！ 相手を全員ぶっ飛ばせば勝ちだ！ あ、でもここから離れるなよ!!」

メガホンを使って海上を航行する艦娘達に伝える。提督が考えたのは取り敢えず戦わして見てみようという甘い考えだ。何故皆が提督に従順なのかは分からない。

「これがどこの有能なんだか……」

第一艦隊は旗艦長門改、榛名改二、加賀改、龍驤改、利根改二、木曾改二。

対する第二艦隊は旗艦霧島改二、比叡改二、瑞鶴改、隼鷹改二、天龍改、夕立改二。

燃費面だけ見れば最悪な編成である。

「勿論使用弾はペイント弾だ。着弾する度に色が変化して、その色で判定する」

黄色が小破、橙色は中破、赤色が大破、黒色で轟沈という判定になっている。これは艦娘の身体にしか反応しない特殊な液体を使用しており、海水では簡単に落とせない。必ず淡水で洗い流さなければならぬ物だ。

使用時はさながら戦場とは変わらない砲撃音だが着弾時に艦娘の身体に反応して破裂する。直接的な物理ダメージは無い。流星は妖精の力というべきだろう。

「ホメルノネー」

「ホメタタエロ、ナノネ」

「アガメタテマツレ、ナノネ」

「うるせえ！ 少し一回お口をチャック!! ってな訳でお前らの力を俺に見せつけてくれ」

「いやどういう訳？」

「始め!!」

提督のホイッスルが鳴り響くと同時に艦隊は一斉に動き出した。決められた海域は半径五キロメートル圏内。広大な鎮守府近海を使って盛大に行われた。

「私達がまず索敵して、制空権を確保するわ、龍驤」

「指図するなや」

第一艦隊の加賀と龍驤が戦闘機を展開、制空権を確保する。

第二艦隊の瑞鶴、隼鷹も同じ策を取ってきた。空中で演習用の戦闘機が激しく飛び交う。

お互いペイント弾で徐々に撃墜され、残ったのは――、
「やはり加賀か」

第一艦隊の加賀と龍驤だ。

制空権を一時確保した第一艦隊は更に前進。

長門は瑞鶴と隼鷹に向けて一斉砲撃。

海柱が立ち、身を屈める隼鷹。第二艦隊も続けて旗艦に向けて砲撃する。

「どうだ提督」

「……先に厄介な奴を戦闘不能にするべきなのは分かる。それぐらいアイツらの身に染みてるはずだからな」

第二艦隊の瑞鶴と隼鷹は制空権を取り返そうと無駄に戦闘機や攻撃機を繰り出している。しかし加賀達の対空能力は凄まじく、奪い返すのはとても至難だ。

すると第二艦隊の夕立が単身突撃、魚雷をナイフの様に指で挟み、激しい攻撃を繰り返す第一艦隊へ猛突進した。

「はあ!？」

「驚いたなこれは……」

砲弾と海柱を華麗に回避、魚雷を発射する。

そして自らの真下で砲撃、反動で大跳躍。

空中に跳ぶ夕立は第一艦隊目掛けて砲撃した。その顔は悪魔のように微笑んでいる。一方的な夕立の砲撃に榛名へ直撃するかに思えた。

しかし木曾が目の前にて砲弾を切断、前進して反撃する。

「カバーするのは構わないが砲撃中の戦艦の目の前に立つのは危険な上に行動が遅い。そしてまた単騎突撃、か」

「提督」

「ん？ なんだ翔鶴か」

「相変わらずですね」

「お前に幼馴染扱いされた覚えは無い」

翔鶴が提督に話し掛ける。艦隊に選ばれなかった翔鶴は戦う妹の勇姿を眺めていた。

「私の願い、聞き入れてくれますか？」

「ああ最大限努力してるよ、言う前に大体摩耶に殴られるからね」

「そうですか……ありがとうございます」

「妹が心配か？」

練度があまり足りない瑞鶴が心配だったのだろう。現に翔鶴はこの鎮守府では正規空母の中で最強に値する艦娘と言われていた。妹にも強くなつてもらいたいのだろう。

「皆、弱いんです。あの人の所為で何もかも壊れてしまった。私は瑞鶴達を救いたい」

涙を流して答える翔鶴。前任という絶望に追い込まれ、破壊された艦娘達は酷く脆い、弱い精神を持っている。翔鶴はそれを救いたいと思っていた。

「別に自由だ、お前のやりたい様にやれ。何かあったら俺に言えばいい」

「……は、はい！　ありがとうございます！」

「あれ、提督ー！　何やってるのー？」

翔鶴と話している途中に島風が提督に呼び掛けた。駆逐艦寮で寝坊していた島風はゆっくりとこちらまで急いで来たらしい。

島風は提督が言う前に隣に座り、演習を眺めていた。

「まあ演習だ。島風も出たかったか？」

「それなりにねー。ちよつと身体が鈍りそうだから動きたかったんだよねー」

「次、な」

島風はこの鎮守府の過去をよく知らない。

前任が夜逃げした一週間後、島風は何故かこの海に漂流していた。前の記憶を思い出せるわけもなく、自由な暮らしが出来れば何も気にしてはいない気楽な性格。とてもマイペースな艦娘だ。

「皆、とても怖いんだよ提督」

「だろうな」

「何があったのか分からないけど……皆悲しんでる」
「知ってる」

「だから……私も提督みたいに皆を支えたい」

孤独なのは悲しい。島風は身に染みて分かっている。ここの艦娘達は誰もが自分から孤立している事も。

それを見て島風は心が苦しかった。

夕立が一度艦隊に引き返し、陣形を再編成する

。隼鷹は躍起になって艦載機を全て使い果たしてしまった。残り砲弾も少ない。

第一艦隊は木曾と榛名が単騎で突撃、陣形が崩れてもなお長門達は魚雷を受けながら砲撃を続けている。

「悪いが島風、俺はアイツらを支えた覚えは無い」
「え？」

「何か勘違いしているのか分からないが、俺はアイツらと一度も仲良くした事もないし、懐柔させた記憶も無い。ただ単に提督という存在がいないと何も出来ないから、アイツらにとって都合良くいてもらってるだけに過ぎない」

「で、でも提督についていく艦娘もいるじゃん……！ 摩耶とか朝潮とか……」

「摩耶は俺が連れてきた秘書艦だし、朝潮は勝手についてきてるだけだ」

「で、でも……」

俯く島風。

期待外れな言動にショックを受けてしまった。怒りというよりも悲しみの方が先に出てしまう。優しくない提督を前に涙が出た。

第一艦隊の利根、龍驤が轟沈判定により退避。利根、木曾、榛名は中破判定、長門は無傷だ。

第二艦隊の夕立、隼鷹が轟沈判定により退避。天龍が大破判定、瑞鶴、霧島が中破判定、比叡は無傷だ。

「……島風、これだけは言っておく。アイツらは懐柔させようが、仲良くさせようが強くはならない。何せ自身の心の弱さが滲み出てる上

に戦うという言葉の意味を理解していないからな。それを克服しない限りはポンコツだ」

「ポン……コツ……?」

「そうだ。アイツらはダメなんだ」

自主性と行動力。それがこの鎮守府の最終課題。

自ら動き、自らの意思でこの先の運命を選択してほしい。提督はそう願っている。

出撃時は勿論提督が指揮をする、しかしそれだけでなく自ら作戦を考案する事や、戦況を如何に早く把握し、次の行動に判断する事。

これらを自立して考えてほしいのだ。

休憩時もそうだ、何かしたい事があれば自由にやってもらいたい、遊んだって構わない。

しかし今まで艦娘達は営倉の出来事とこれから起きるアレ以外、朝潮を除いて殆どそういう様子は見ていない。明らかに自分達の尊厳と自由を失っているのだ。

「だから俺はまだ支えられない。だが島風、お前が本当にアイツらを支えたいのなら最大限の助力はするぞ」

「ほ、本当?」

「男に二言はない。それにアイツらと話すのは艦娘が良いからな」

「う、うん! ありがとう提督!」

「おう。終了ー! 各自風呂に入り次第、執務室に集合だ!」

やがて演習は終了。ホイッスルが鳴り響いた。

13. 国語のテストの問題は面倒くさい

「で、どうだった？」

「……いや良いには良いんだが……」

まとめた報告書を顔に被せ、頭を悩ませる提督。机に足を乗せ、天井に被せた顔を向けている。提督が独自で決めた艦隊で行われた演習が終了し、演習に参加した艦娘が徐々に執務室に集まっていた。

「やばい悩み過ぎて寝ちゃいそう」

「寝るな。あたしが分析した報告書なんだ、ちゃんと読んでくれ」

確かに摩耶が分析したこの報告書は猿でも分かりやすくまとめられている。

各艦娘のステータスや基本行動、戦い方の手癖に意識の移り変わりなど事細かに記されている。やがて全員が集まり、提督は改めて話し始めた。

「なあ……お前らはソロプレイが好きなのか？ モ○ハンだったらリオ○ウスのワールドツアーにキレてもおかしくないぞ？」 特に夕立、

木曾、榛名、天龍」

名前を呼ばれた艦娘はいずれも単騎突撃による戦闘が目立っていた。本当の戦場では敵目前で突撃するなど自殺行為に値する。戦力を無駄にしたくない提督はこの単騎突撃を出来るだけやめさせたい。

「つ、つい……」

「つい、で済めば警察もいらさないし、憲兵もいらさない。モン○ンだったら一人でダラ・○マデユラに挑む様なもんだぞ。単騎突撃は一部例外を除いて危険、基本中の基本だ駄犬」

「は、はい……」

夕立は改二へ改装すると駆逐艦とは思えない恐るべき戦闘能力を発揮する。軽巡、重巡に引けを取らないその強さは大本営でも重宝される程。

一度会った事があるが、戦闘狂の目をしていたのを覚えている。恐らくこの夕立もその素質が眠っているのだろう。

「さて……」 々指摘してたらキリがない。手短かに言うぞー」

「はいまず長門、霧島。主砲の命中率が悪い、防衛を意識しすぎだ、旗艦でありながら統率出来なかったのははつきり言つてダメ。コミユ障は治しておきましょう」

「了解した」

「了解しました」

「で、隼鷹。集中力が無すぎだ、躍起になりすぎて艦載機全部飛ばすのも論外。一度北極圏で頭ごと身体を冷やしてこい」

「……分かった」

「夕立と天龍。相手との距離が一キロメートル以上の場合による接近戦はあまり推奨出来ない、あと魚雷発射のタイミングを逃しすぎだ」

「へいへい、分かった」

「分かったっぽい……」

「榛名、木曾。判断が鈍い所がある、息を合わせていない場面が見受けられた。別に周りに合わせろとは言われないが攻撃種類の選択を作り過ぎだ、せめて二つに絞れ」

「わ、分かりました……」

「……分かった」

「えーっと、加賀、瑞鶴、龍驤。言う事無いんでナシ」

「二ハア!?!」

「以上で」

「ちよつと待ちなさい!!」

報告書を机の引き出しにしまい、全艦娘の指摘を終えた提督。

しかし、瑞鶴が異議ありと訴えた。

「なーにー瑞鶴」

「何もナシって……何か言う事でもあるんじゃないの!?!」

「ちよつとずいか——」「えー?」

「何か言つてもらいたいのー?」

提督は椅子に座ろうとするも、瑞鶴の言葉を拾って歩み寄った。堂々と艦娘達の目の前まで近づいていく。

「散々俺を毛嫌いしてる癖に何かアドバイスが欲しいのかなー?」

「ち、違つ……」

「アドバイスが欲しければさっさと先程の自分を見つめ直して、何がいけなかったのか国語のテストに出てくる問題の感想を五十文字以内にまとめるようにA4用紙にありったけ五千文字以内に書き埋めてこい、そしたら二十五%の確率で何かしら言っやろう」

「ひっ……」

瑞鶴を指さし、言葉の弾幕で詰め寄る。壁まで詰め寄られ、圧倒される瑞鶴。

しかしその前に加賀がまるで瑞鶴を魔の手から守るように手を伸ばした。その目は完全に敵と見定める。

「これ以上近づいたら何するか分からないわ」

「何するか分からないなら動かないのが身の為だと思っなあー、先ず自分の未来の行動を予測出来ない時点で言われないのは妥当だと思っけど」

「近づくなっって言ってるのよ!!」

「だったらそう言えー！ 言葉端折りすぎて意味伝わらねーよ氷河期!! 今すぐその口をゴミ処理場に持ち出してリサイクルされてくるといい、少しはマシな口になるはずだ!」

「何なのよその言動……私達に対して悪意しかないのかしら……!!」
手をグツと握り、怒りを露わにする加賀。提督のこれまでの言動に不服の様だ。無理もない、一方的に罵倒されればキレるのもおかしくはないだろう。

「悪意? 違うなあ少なくとも俺を陥れようと悪質のある計画を考えているお前達よりはまーだいい方だろ」

「なんでそれを……!」

提督が目線に移す。その目線の先には青葉がカメラを持って怯えていた。勿論提督の方で把握済みである。

「いやー本当に悪質だねー。俺が大本営から金を横領したとほら話を吹き流し、世間に広めようとしたんだろうが残念ながらこの鎮守府に送り込ませた俺の艦娘がいるし、この青葉は俺の言葉の意味をちやーんと理解して俺と手を組んでる。しかもこの鎮守府は森に囲まれても他に連絡手段はあるだろうが大本営はそんな話など受け入れられ

なかつたみたいだな」

「何故そこまで……」

指さす先は摩耶。

実は艦娘達の策略に気付いた川内が提督に報告、摩耶に防止策の為に機密情報と称してこの鎮守府からの連絡は一切受け入れてはいけないと元帥直々に伝えていたのだ。提督が会談に行く前に摩耶に渡した書類はその為のものだった。

「あともう少し耐えれば自由だと思ってたかあ？ それはおめでたい脳みそだ、さぞかしその時間まで脳内お花畑だった事だろう。だーがお前らの話は全て筒抜けなんだよ。もうちよつと周辺を電探か偵察機で警戒するといい」

「プライバシーの欠片もないわな」

「お前らにプライバシーがあると思ったら大間違いだ！ 常に警戒しとく事だな、戦場だったらごく当たり前だ覚えておけ！」

「私達にプライバシーはあるはずです!!」

「自分が兵器だと思ってる奴らがよく言えたもんだな!! 分かってるぞ、お前らが前任に何回もしつこく洗脳されたってなあ、俺の前では隠してみたのだが筒抜けになってる以上、バレても何らおかしくはないんだ！ 兵器に人権があるわけなからう、だからお前らにはプライバシーが無いと言ったんだ!!!」

——空母寮瑞鶴部屋内

「何なのよあの男!!」

鉛筆を机に叩きつけ、怒り出す瑞鶴。実際A4用紙に反省文を書いていたようだ。隣にいた翔鶴が憤りを見せる瑞鶴を慰めようと駆け寄る。

「落ち着いて瑞鶴」

「落ち着いていられるかこんなの!!!」

「取り乱しては駄目、平常心を保って！」

翔鶴に抑えられ、徐々に落ち着きを取り戻す瑞鶴。座布団に座り込

み、鉛筆を手にとった。確かにあれだけ罵詈雑言を言われたら怒らない方がおかしいだろう。

「何よ兵器って……！ 私……私……私……」

「確かに私達兵器だけ……他の人に正面から言われたら苦しいわね……」

少なくとも提督の事は全て本当だ。

提督を陥れようとした計画も自らが人間ではなく兵器である事も。全て隠してもなおバレていた。何故バレたのかは分からない、だが中将故に巨大な権力を持ち合わせてる事を再確認出来た。

「絶対許さない!! つかぶん殴ってやる!!」

「ぶん殴るのは構わないが本当にやるとはバカ真面目もいいところだなー、瑞鶴」

忌まわしい声が部屋のドアから聞こえた。ドアの方向には境目に寄り掛かる提督と摩耶がいた。恐らく先程の会話を聞いていたに違いない。提督は勝手に部屋の中へ侵入、瑞鶴が書いた反省文を勝手に読み上げた。

「な、何読んでるのよ!」

「へえー制空権を取れなかった、調子が悪かった、根性を見せなければならなかった、って全部精神論の話じゃねえか!! 実力を書け、実力を!!」

「うう……だって……」

「だってもへったくれも無いんだよ! 加賀を意識しすぎて戦闘に集中できなかったとか判断が遅れたとか状況把握が出来ていなかったとか色々考える事があるだろおおおが!!」

「提督……」

「翔鶴! お前もだ!! 大事な妹ならちゃんと慰めろ!! 瑞鶴、ちよつと来い!!」

「えっ! ちよ、待って!! うわっ!」

提督に手を引っ張られ、強制的に連れていかれる瑞鶴。翔鶴は提督の言葉がショックだったのか放心状態で動かなかった。

それを見た摩耶はゆつくりと部屋のドアを閉めた。

——工廠内

無理矢理手を引っ張られて連れていかれたのは工廠。艀装が展開出来る演習場に瑞鶴を入らせた。

「何なのよ一体!」

「いいから艀装を出せ、早く!」

言われるがまま瑞鶴は艀装を繰り出し、その姿を提督に見せた。瑞鶴は一回改装を終えている。艀装は標準装備といったところだ。

「摩耶」

「分かった」

摩耶は瑞鶴の艀装に触れる。ガチツと鋼鉄音が響く、すると砲弾の破片が艀装の間に挟まっていた。

「お前の実力が発揮されなかったのは恐らくこれが原因だろう。よくもまあ、あの演習でよく出せたもんだな」

「で、でも私は入渠してちゃんと艀装は修復されたはず……」

「時たまあるんだこういう事が。これが原因で艀装が誤作動を起こし、いつもの調子が出ないって事がある。気をつけておく事だな。明石、瑞鶴の艀装を見てやってくれ」

「はい! 分かりました!」

駆けつけた明石が瑞鶴の艀装を外し、奥の部屋に持っていく。暇な妖精達も明石の後をついていった。

「んで瑞鶴、お前から聞きたい事がある」

「……何を……やりたいかって事?」

「それはあるなら後で聞く。瑞鶴、お前ら艦娘の中で差別意識はあるか?」

提督が睨んだのは艦娘の交友関係。普通どこの鎮守府でも艦娘同士では仲良くしている事が見受けられる。だが提督から見たこの鎮守府ではその仲の良さがまるで無い。

「……な、ないわ——」「よっしや摩耶、確認出来たぞ。調べてくれ」「了解した」

「ちよ、ちよつと待つて！ 無いつて言ったじゃない!!」

「無いなら無いでちゃんと俺の目を見て話せ！ 隠すの下手過ぎて一瞬でわかったぞ」

案の定、この鎮守府の艦娘達の間で亀裂が入っていたようだ。

原因は前任による戦果をあげた艦娘の優遇制度。優秀な戦果を収めたと判断された艦娘は優遇され、人並みの扱いを受けてきた。

一方で戦果は少ないが使えると判断された艦娘は人並みの生活など許されず、兵器としてその身にあまる待遇を受けていた。この制度が何年間も続いた事により、前任の洗脳もあつてか艦娘達の中で意識が分割、優遇される者は使えないと判断された艦娘達を差別していた。

「瑞鶴もその内の一人、と」

「私は元々こんな優遇なんて嫌だったのよ……それなのにアイツは」

「だったらどうして止めるよう説得しなかったんだ？ お前らの力だったら前任を振り伏せる事ぐらい出来たはずだろうそれなのに口クに行動もせずに一方的に差別し続けて嫌だった？ よーくそんな事が言えたもんだなあ大した根性だ」

「だ、だって……」

「だってじゃないんだあ優遇が嫌だった？ 違うね、お前は反対したら自分もあちら側に移されるのが怖くて何もしなかっただけだよ」

「違う……私は違う……」

耳を塞ぎ、今までの自分を否定する瑞鶴。今まで差別してきた自分が如何に愚かか、背筋が凍る程恐ろしく感じた。それは恐らく前任の洗脳が解かれた反動かもしれない。

提督の言う通り、あの側に戻されるのが怖くて仕方なく差別したと自分を必死に正当化していた。

ようやくこの鎮守府の全ての闇が姿を現した。艦娘の自主性と行動力の無さ、劣悪な衛生環境、枯渴した資材、罰による恐怖のトラウマ、そして艦娘内による異常なまでの差別意識。状況は想定したよりも深刻らしい。

提督は先の見えない不安に溜息を吐いた。

「ようやくその強情な間抜け面も崩れたようだなあ、さぞかし酷い差別をしてきたんだろう何て酷い奴なんだ」

「違うのよ……」

「良いじゃないかあ別に俺は瑞鶴の事を責めてるわけじゃない。お前らが思ってる様にロクに戦果もあげないポンコツ兵器共と違って優秀なんだ誇りに思え、私はお前らより強いんだお前らとは格も違うんだお前らと一緒にするなこの鉄屑がアアアア!!」

「やめて……私は……アイツの所為で……」

泣き崩れる瑞鶴。全ては前任が悪い、ここの艦娘達が逃げて辿り着く文句は全てこの言葉だろう。

「……瑞鶴。お前は前任が今でも憎くて仕方ないんだろう？ だった

らやる事は一つだ」

「やる事って……何を」

「分からないのか!? お前は前任はとてつもなく憎い、殺したいほど憎い。だが前任が逃げた以上何もすることが出来ない、だがもしその前任をぶつ飛ばせるチャンスがあるなら俺はとことん使うけどなあー」

「アイツが何処にいるか……知ってるの?」

「大体は」

「何をしているのかも?」

「知っている」

「……教えて、アイツを一回ぶん殴らないと……気が済まないわ……」

提督は摩耶が持っていた紫色のファイルを手に取り、あるページを見せた。それは天龍達同様、前任の提督が深海棲艦の提督として寝返っている内容だ。それを見て瑞鶴は怒りを露にする。

「許せない……あれだけ私達を侮辱しといて、今度は敵の親玉って……許せる訳が無いじゃない!」

「そうだ前任は深海棲艦の親玉だ、未だに場所は特定出来ないが存在は知っている。そしてお前には戦う力がある。だったらどうしたい?」

「当然……戦ってアイツを、ぶん殴るわ……!!」

「……正解だ。いいよ、叶えてやる。お前のやりたい事、全力で手を貸そう」

座り込む瑞鶴に手を伸ばす。文字通り手を貸した提督は笑っている。瑞鶴はその手を掴み、もう一度立ち上がった。零れる涙を拭い、提督の顔を見る。

「瑞鶴、お前のその願いはいずれ身内とでも戦う事になるだろう。それでも——」 「構わないわ」

「私はもう退かないって今決めたから。それに身内と戦う事になっても提督さんは私の味方でしょ？」

「……凶々しい女だ、精々足掻くといい」

「よろしくね提督さん」

「ああよろしく、そしてようこそ——」

——我々の世界へ」

14. 校長先生の話は眠って聞くのが一番

瑞鶴と手を組んで一日が経過。あの後前任の件については教えてはいけない事とその理由を手短に話し、その場は丸く収まった。

今は午前十一時二十五分、提督は書類を書き終え、暇を持て余していた。執務室には小説を読む摩耶と提督に呼ばれた朝潮と島風が遊んでいる。

「提督、新しく配属させた艦娘六人が着任した」

「おっそうか、通してやれ」

以前提督が摩耶に頼んだ艦娘六人が今着任したらしい。全て横須賀鎮守府の方で建造させてもらっている。執務室にぞろぞろと艦娘達が現れた。

「朝潮型駆逐艦の二番艦、大潮です！ よろしくお願いします！」

「駆逐艦の満潮よ」

「朝潮型駆逐艦の四番艦の荒潮です」

「朝潮型駆逐艦の……霞、です」

「……霞よ」

「高雄型四番艦の鳥海です！ よろしくお願いします！」

「ドイツ生まれの重巡、プリンツ・オイゲンです！ よろしくお願いしますーす！」

「長あああい!! 長過ぎて寝そうだったわ!!」

長く続く挨拶にツッコミを入れる提督。初対面から見れば机に足を乗せ、堂々としている人間など悪い印象しかないだろう。

「ってあれ、確か摩耶六人って言ったよな？」

「ああ言ったな」

「……Admiral、摩耶！ 久しぶり!!」

「お前かプリンツ!! 道理で一人多かったわけだ!!」

新しく着任した艦娘に紛れ込んでいたのはプリンツ・オイゲンだ。どうやら提督と面識があるらしい。現にとっても仲良く話している。

「提督……その方は……」

「あー鳥海、私から話すよ」

プリンツはまだ提督が無名の頃に別の鎮守府で育て鍛え上げ、共に戦った艦娘の一人。育てた他の艦娘は優秀故に提督が大本営に異動と同時に各地の鎮守府に配属されている。中でもプリンツは大本営直々に配属された優秀な艦娘だ。

「なるほど……」

摩耶の姿に少し違和感を感じたが、同じ高雄型の姉がいるだけでも嬉しかった。少し姿は違おうとも全く気にしてはいない。

「おっとプリンツ、話は後だ。さて新しく着任したお前らには感謝する。是非この鎮守府で頑張ってもらいたい……だがこの鎮守府は少し闇を抱えていてな、今は島風達と協力してもらいたい」

「聞いて何よ、噂に言うブラック鎮守府とか？ アンタの所為じゃないの？」

「俺の所為だったら島風や朝潮はここに来ないだろ。少しは考える頭を持つとかガキ」

「ハア!? 何なのアンタ!!」

「摩耶、朝潮、島風、案内よろしく」

「分かりました!」

「分かった」

「ちよ、ちよつと待ちなさい! 私はまだ話してる途中で——」

摩耶に誘導されるがまま着任にした艦娘達は執務室を去っていった。執務室に残ったのは提督とプリンツのみ。二人にとっては懐かしく思えた。

「二人きりになったなプリンツ、何か話す事があるんだろう?」

「流石 Admiral、これだよ」

プリンツが背中から出したのは最重要機密事項と称された紫色のファイル。中身の内容は深海棲艦の親玉である前任の敵艦隊がこの鎮守府に向かっている可能性がある事、新しく確認した深海棲艦のデータと行動記録などが記されていた。

「Admiral、あまり時間は残されていません。一刻も早くこの鎮守府近海の戦力強化を」

「分かってはいる、今はその為に色々手配はしてる所だ。恐らくお前

もこの鎮守府の戦力強化の為に異動したのだろうか?」

「Admiralは何でも分かっちゃいますね。そうですこのプリンツ・オイゲン、貴方とまた戦える事を光榮に思います! またよろしくお願いしますね!」

「ああよろしくなプリンツ」

「つていうかその傷どうしたの?」

「ん? これか、寝惚けて階段踏み外した」

「えー本当にー?」

「本当だ、川内」

突然執務室に現れた川内。川内も仲間のプリンツと再会を祝し、お互い抱きしめ合う。

「んで提督、何だい?」

「この件について調べて来てくれ、対価は休暇三日間」

「了解したよ、任せといて」

—— 駆逐艦寮

「ここが私達のお部屋です!」

朝潮が自分達の部屋に妹達を迎え入れた。朝潮型駆逐艦は総勢六人、人数が多い事もあって部屋はかなり大きい。

「皆の荷物も届いてるので自由にしちゃってください! 自由、これが私達朝潮型のルールです!」

健気に説明する朝潮。妹達が来たとなつて張り切っている。余程妹達が来たのが嬉しいのだろう。しかし妹達に敬語な事と初めて会った司令官の言葉が引つかかる。

『この鎮守府は少し闇を抱えている』

「……朝潮姉」

「どうしました満潮?」

「何か酷い事されたの? あつたら私達に言つて?」

もしかしたらと満潮が朝潮を呼び掛けた。

本当に闇を抱えているなら、私達の為に無理をしているのではないか。そういう不安が満潮達の頭に残っていた。あの司令官の所為で何か酷い事されているのかもしれない。皆心配だった。

「大丈夫ですよ！」

「えっ……」

「確かにあの司令官は少し口が悪くて自分勝手な人ですが……実はとても優しい人なんです」

朝潮はあの時言われた言葉を今でも忘れない。

『今度は上手くやれるといいな』

あの言葉だけ優しさが溢れていた。あれだけ口減らずで自己中心的な提督であつてもちゃんと自分達の事を理解して見てくれている。朝潮はその隠れた優しさに気付いたのだ。

「初対面であれだけ言われたら悪い印象を持たれてもおかしくはありません。ですが私は司令官を信じてます、満潮達のように」

朝潮の姿を見た満潮達はその言葉が嘘ではないという事を理解した。朝潮は本気で司令官を信じている。であれば問題は無いだろう。

「……何よ心配した私達が馬鹿みたいじゃない」

「……そうね、私達の姉がこう言ってるんだから」

「ありがとうございます！ 共に戦いましょう！ 私達でこの鎮守府の闇を祓うんです！」

「……それはあともう少し先にしてもらいたいかな」

朝潮達の部屋から久しぶりに和気あいあいとした話し声が聞こえた。いつからだろうか、駆逐艦寮にその声が廊下でよく聞こえる。

——重巡寮

「まあこれが私達の部屋だ。荷物も届いてる、好きにしてくれ」

摩耶が住んでいる部屋は二人専用の小さめの部屋。奥にダブル

ベッドが敷かれている。手前にテーブルと横に机、一般的な艦娘の部屋とそう変わらない。

「摩耶もあの提督の艦娘なの？」

「ああそうだよ。古い馴染みの縁さ」

額縁の写真には提督のツーショットが。とても仲が良いのだろう、あの提督が悪い人には見えない。現に摩耶は提督とケツコンカッコカリをしている。左手の薬指に指輪が見えた。

「……私も頑張らなきゃー！」

鐘の音が鳴る。昼食の時間のようなだ、皆部屋を出ていき、食堂へ向かっている。摩耶達もその食堂とやらへ向かって行った。

—— 営倉内

「うええ……何ですかこの中は」

「営倉だ、お前も知ってるだろう」

提督とプリンツは二人で営倉の中にいた。プリンツにはこの鎮守府の状況を把握してもらおうべく、提督が直々に案内をしていた。しかし何故か提督はカツラと般若の仮面を被っている。

「前よりはまだマシだぞ」

「ええ……嘘ですよね……」

「何ノ用カシラ？」

目の前に現れたのは鹵獲された飛行場姫。バンダナを頭に被り、モップを持っている。プリンツはすぐさま提督の前に出て、艤装展開した。

「あ、大丈夫だプリンツ。コイツは攻撃出来ないし俺に従順してる」

「え、そうなんですか？」

「何故カ此処ノ掃除ヲ頼マレタノヨ。攻撃スル意思ハ無イワ。ンデ貴方ハ何ノ用ナノ？」

確かに攻撃の意思は全く無い。艤装も展開しない上に提督に深く従順している。警戒する必要は無さそうだ。

「こちらに来てくれたプリンツに場所を案内しているだけだ」

「……貴方、結構物騒ナノネ」

「何とでも言え飛行場姫、奥に行かせてもらおうぞ」

「ハイハイ、ドウゾゴ自由ニ」

掃除する飛行場姫の横を通り過ぎ、二人が向かった先はあの拷問室。この鎮守府の艦娘達が最も恐れた部屋だ。あまりの凄惨さにプリンツも甲高い声が漏れる。

「これがあの敵の全貌ですか……?」

「そうだ。前任はこれらを使って艦娘を拷問又は脅迫、恐怖でこの鎮守府を支配していた」

「見るに耐えませんか……」

プリンツは隅に置かれた拷問器具を見て、如何にここの艦娘達がどんな目に会ってきたのか一瞬で理解出来た。それならば提督や他の人間を恨んでも何らおかしくはない。前任が深海棲艦の親玉になった事も納得がいく。

「まあ俺なんて前任に脅す為に色々やってたけどねー。ボイスレコーダーとか小型カメラとか使って脅迫してたし」

「……Admiral、私は日本が嫌いです」

「突然何を言い出すかと思えばそれか!? その台詞聞くの二十九回目だぞ?」

「私達にこんな酷い事をして逃げたと思えば今度は深海棲艦をまとめる提督……日本の人は嫌いです。ですがAdmiralだけは違う」「いや何かそれは違う気がする」

「これを見過ぎすわけにはいきません！ 必ず倒しましょう!!」

「……その意気が続くと良いな」

15. 広辞苑で人は殺せる上に勉強できる

午後の秘書艦がプリンツに代わり、いつも通り日常を過ごす二人。

摩耶は鳥海を引き入れ、また歓迎会をするそうだ。朝潮達は依然部屋でお喋りを続けている。提督は机に足を乗せ昼寝、プリンツは重要な前任についての資料をノートパソコンでまとめていた。

「いつまで昼寝するつもりですかーアドミラルー？」

「いつまでも寝ていたい」

「その気持ちは分かりますけどお仕事はー？」

「お前のゆるふわ頭の処理速度より早く終わってるので問題無し」

「その台詞五回目ですアドミラルー」

何気無い会話を続ける二人。

するとドアがゆっくりと開き、誰かがぞろぞろと引き連れてきた。とても小さい姿が四人、第六駆逐隊だ。

「司令官、暁達がお礼を言いたいと言ってて連れてきたよ」

「そーかそーか、お礼ねえ……」

暁と雷は執務机の前まで歩み寄り、提督の目の前まで近づく。少し怯えているのか、身体が小刻みに震えている。後方では響と電が見守っていた。

「そ、その……！ 司令官……あ、あり……ありが、あ……」

緊張して言葉が出ない暁に帽子を足で投げて被せる提督。何故自分が恐ろしいはずなのにわざわざ礼など言いに来たのか。理解し難い。

「上手く話せないのは嫌気がさすから今はやめたまえ」

「で、でも……」

「でもじゃないんだ暁。俺はお前と話してる時間があるほど暇じゃない。だったらさっさと自分達の部屋に入ってぐちゃぐちゃに書いたカンペを何度も練習するがいい、この帽子を練習台にでもしとけ」

「わ、分かりました……」

礼を言う事が出来ず、暁達は残念そうな表情で執務室を出ていった。

「いつもの Admiral で安心しましたー」

「そりゃあ良かったあ」

「提督ー」

ドアが突然開き、瑞鶴が現れた。どこか急いでいる様子だ、何かま
ずい事が起きたのだろうか。

「ちよつと来て！ 食堂で鳳翔達が暴れてるの!!」

どうやら食堂内で摩耶と鳳翔が口喧嘩になったとか。仕方なく提
督は身体を動かし、食堂へ向かった。

—— 食堂内

「うめーな!! これ！ マジでうめえよ！」

「流石日本の食事は凄いですね！」

「ああそうだな、じゃなアアアアい!!」

隅のテーブルを借りて提督とプリンツ、瑞鶴が出された料理をガツ
ガツと食べていた。ふと我に返った提督がツツコミを入れる。

「おい瑞鶴、お前暴れてるって言ったよな？」

「言っただけでもう終わったみたいね」

「いや終わったじゃねえんだよ何で俺ら試食してるんだ、お前でいい
だろ!!」

「だって鳳翔さんが提督に食べてもらいたいって言ってたから」

「だから最初からそう言えて言ってるんだよ！ 前に言っただろ!!」

「言っても行かなかったでしょ!!」

「ああ行かなかったよ、暇じゃないからなア!!」

テーブルを叩き、口論になる瑞鶴と提督。プリンツは黙って食べて
いる。

「机に足乗せて寝てる奴がよく暇だって言えたわね！」

「俺の暇とお前の暇じゃ意味が違うんだよ!! 俺は不細工に寝っ転
がってるお前らと違って大量の報告書と資材や深海棲艦に関する資
料や書類を書き終え、その後スマホ弄ってゲームするっていう日課が
あるんだよ!!」

「後半殆ど暇じゃないのよ!!」

「暇じゃない日課だ!! 俺が暇じゃないと言ったら暇じゃないんだよ!!」

「……次に! 肉じゃがです……」

提督と瑞鶴の口喧嘩を遮るように鳳翔が手料理を出してくれた。その二人は口喧嘩をやめ、静かに座り、出された料理を食べる。一時沈黙が走った。

「ねえ確か貴方は提督さんの艦娘なのよね?」

「はいそうですよ、どうかされましたか?」

「提督さんはいつもこの調子なの?」

「はい! いつもこんな感じですよ!」

笑顔で答えるプリンツ。最早プリンツにとっては口喧嘩など日常でしかないのだろう。実際止めもせず静かに食べていた。

「残念だったなヒステリーツインテ、俺は何が何だろうと口喧嘩では絶対負けない男だお前のその軽い口など恐るるに足らん。せめて小学校から国語の授業で辞書か広辞苑に出てくる言葉を十回暗記してテストで百点でも取ってくるがいい、少しはマシな頭になるだろう。集中力が切れなければねええええ!!」

「ゴツの……!」

「流石Admiralです!」

「アンタまで助長させてんじゃないわよ!!」

何だかんだ文句を言いつつも出された料理を食べる提督。食べる事に関しては嫌ではなさそうだ。美味しく食べてる様子が伺える。

「ごちそうさま」

「て、提督さん、その……料理はどうでしたか?」

「悪くない。飯に出しても構わないだろう」

「そうですか、分かりました。検討してみます!」

どうやら鳳翔達は作った料理を出してもいいのか提督に許可をもらいたかったらしい。

反応は上々のようだ。許可を貰えて鳳翔達はほっとしている。

「さてゲームして昼寝しよ」

「あ、私は仕事があるので見るだけにします」

「おう分かった、瑞鶴は？」

「……えっ？」

まさか誘われるとは夢にも思わなかった瑞鶴。突然の誘いに理解するのが数秒遅れた。

「いやえっ、じゃなくて。来るか来ないかの話をしてんだけど」

「……行く」

「よし、ボコボコに出来る」

「何か言ったア？」

「知りませーん」

三人は早めの夕食を済ませ、執務室に戻る。提督が持ってきたニン○ンドース○ツチで遊ぶ事になった。

「お前弱くて笑う」

「仕方ないでしょ初心者だからア!! あ、またその技ツぶっ飛ばす!!」

「アヒヤヒヤヒヤヒヤ!!! ダメだめちやくちや笑って操作出来なくなる!!」

負けず嫌いの瑞鶴を知つての事かタイマンで一方的に攻撃を仕掛ける提督。ゲームといえど瑞鶴はやめようともしない。

「お元気ですねえお二人は……」

「失礼……します」

二人が馬鹿騒ぎしている中、入って来たのは第六駆逐隊。余程練習したのか少し声が枯れている。ただ一回目とは違って怯えている表情は無い。

「あ、お前らか。もう少し、っってお前見てない隙に切り札取りやがったなア!!」

「見てない方が悪いのよ、喰らえツ!!」

「暁さん達はこっちでちよつと待っててくださいーい」

プリンツに誘導され、向かい側のソファに座る第六駆逐隊。四人にしては異様な光景だろう。瑞鶴と司令官が見た事の無い機械で遊んでいるのだから。仕舞いにはお互い殴り合っている。

「……瑞鶴、一回ここは休憩だ」

「分かったわ……」

「さて第六駆逐隊、何か言いたい事でもあるのかな？」

お互い落ち着かせ休戦協定に入る二人。提督は摩耶を呼び出し、暁達と対面させる。目線を暁と雷に向けて発言を誘った。

勿論言いたい事は分かっている。それをちゃんと伝える事が出来るのが重要だ。提督はそれを見定めている。

「はい！ 私暁と雷はあの、絶望的な状況からず、救っていただきか、感謝しています!! 本来にありがとうございます!!」

「んで？」

「私達第六駆逐隊は司令官の為に戦いたいと思っています！ だから……これからよ、よろしくお願い致します!!」

それは暁と雷が必死に考えた謝礼文。何回練習してもなお噛んでいたが提督はそれ程気にはしていない。だが――、

「んーまあ……五十点」

「え……」

「敬語ばかりで畏まり過ぎだ。本心を言ってくれなきや全く響かない」

「そ、そんな……」

「本心を言ってくれ……あたしは聞いているから」

足を組み、腕で頭を支える提督。

今の謝礼文は本心ではないと悟られた。そんな事は分かっている、だからこそ本心を言いたい。だが言おうとすると涙が止まらなかった。

「……私達は……辛かった……」

「身体を見れば分かる」

「怖かった……苦しかった……」

「苦労したな」

「生きる、事ずら……諦めでた……」

「頑張ったな」

「でも司令官が、助けで……くれた……」

「あの時のお前らは酷かったな」

「嬉し……がった……」

涙を零しながらも必死に答える暁と雷。それを提督は適当に返す。あの時まで地獄の様な日々だった。黽られ穢され陵辱される毎日、そして突然として誰も来ない毎日。最早生きる事すら諦めていた。このまま死ねば楽なのかもしれない、苦しくないかもしれない。

そう思っていた時一つの光が暁と雷を差した。それは決してあの人達ではなく誰でもない白く美しい人。

いつの間にか自分達は医療室で看病されていた。助かったのだ。

「そりゃ良かった」

「助けてくれて……ありがとうございます……ごじます……司令官……」

心の底から救われた。それだけでこの司令官は信じるに値する。今までの呪縛から解き放たれ、初めて優しくしてもらった。

端から見れば自分達の勘違いなのかもしれない、それでも司令官は本気で自分達を救おうとしてくれた。

「……悪いが俺は助けてない。摩耶が助けたいって思ったからお前らは助かったんだ。言うなら摩耶だ」

「……摩耶さん……」

暁達の視線が摩耶に移る。

「……どういたしましたして、お前達が助かってあたしも嬉しい」

「……!」

「よく言えたな、おかえりだ」

暁が手に持つ提督の軍帽子を暁に被せ、むしゃくしゃに雷同様撫でる。力任せではあるがどこか優しさが感じられた。

そこで目に溜まっていた涙のダムは崩壊、服が濡れるほど涙を流した。思わず暁は摩耶に抱き着き、雷が提督に抱き着く。

「……よしよし頑張った頑張った」

「おいおい意外だな……ったく一人前のレディと艦娘一の任せ役がボロ泣きしたら格好つかないだろうに、ほら——」「ダメ……提督さん、泣かせてあげて」

「……」

離れない雷を引き離そうとするも瑞鶴に止められてしまう。今二人は救ってくれた提督と摩耶に泣きつきたい気持ちなのだ。こんな事はあまり好まない提督。かといって瑞鶴は今の状況で引き離す訳にもいかない。

「はあ……分かったよ……」

「(Admiralは大体無意識なんですけどね……何考えてるのかなー……)」

「(あつ……今凄くトイレ行きたい……)」

16. たった一つの正義は存在しない

やがて泣き止む暁と雷。落ち着いた二人はまた向かい側のソファに座る。提督は濡れた軍服を脱ぎ捨て、Tシャツ姿で執務機の椅子に座った。机に足を乗せ、堂々と構える。

「さて、第六駆逐隊。俺から聞きたい事がある」

「聞きたい事？」

「そうだ。電と響は知っているが俺はお前らのやりたい事、叶えたい事を聞いている。俺が出来る範囲でその願いに応える所存だ。だから今聞こう、第六駆逐隊がやりたい事はなんだ？」

机に乗せた足を下ろし、指を組む提督。狙いは勿論、戦うか戦わないか。

この状況で聞く事は第六駆逐隊にとって精神的に追い込むような事だが、そんな事を思ってるほど提督は甘くない。ましてや時間が押している以上、気持ちを汲み取る暇すらないのだ。

「やりたい……事……」

「なのです……」

「私は……」

「……戦う」

と言ったのは暁だ。

あまりにも意外過ぎて提督が僅かながら目を開かせた。

通常この状況ならば平和に暮らしたいや何もしたくないなどとうつつを抜かすはずだ。しかし一番の被害者である響は代表して答えた。それは自分は兵器だと思い込んでいる故なのか、それとも提督の恩を返す為か。

「私達は戦うわ。もう二度と鉄屑なんて呼ばれないようにね！」

「暁、それはお前個人の願いだろう。他の三人は？」

「わ、私も暁と同じよ！」

「電も同じ、なのです！」

「私も、大丈夫」

「本当かあ？ ただでさえ俺に怯えてたんだろ？ それで深海棲艦な

んてぶっ飛ばせるのかあ?」

「私達は艦娘よ! 戦う事が私達のやりたい事なの!」

「暁の意見は尤もだ、だがお前に聞いているんじゃない。雷、電、響に聞いているんだ。どうなんだ?」

暁はやる気満々のようだが提督が聞きたいのは他の三人である。怯えじまいで言いたい事をハッキリさせない艦娘達は初めに誰かが言った意見に同調されやすい。一番上の姉である暁の意見に同調したのがいい例だ。

「この際お前らだけにハッキリ言わせてもらうがこの鎮守府の艦娘達はどうも自主性と行動力が皆無だ。恐ろしく皆無だ。何もしようもない、己の危機感を悟らない、指示を待つだけの指示待ち人形ではない。今のように何も無ければ部屋に閉じこもり、飯の時間だけ食べなくてもいいのに身体を動かす。後は……まあそれは言わないとしてそれ以外は有り得ないほど何もしない。正直ふざけてんのかと言いたいくらいだ」

「っ……」

「それを知らずに自分達は人間だと言い張る。別に構わないさ、自分の存在をどう決めようが自分の勝手だからねえ。だが第三者から見てもその一日を見たらどう感じると思う?」

これは提督が本当に思った本音である。ごく身近に思ったたった一言。

「本当に人間なのか? ……ってな」

響が反論する。

「……確かに私達は司令官に怯えていた。自分の事ばかり優先してろくに戦えなかった、鉄屑だ」

「そうだ、よく自分達の事を知っているようでなによりだ」

「でも……それでも私達は意思がある、心がある、考える頭もある。司令官が私達の事をどう思ってるかなんて分からない。だが誰かの為に何かをしたいというのは間違いなのか!!?」

「間違いじゃない。だがその誰かの為にと行った事が例え他人を滅ぼす結果でもお前はそれを誰かの為と言い切れるのか?」

あの時響が電を救う為に他の姉妹を見捨てたように、響は後悔に悔やんでいた。人間は脆く弱い、艦娘といえどそれは容易ではない。

「いいか第六駆逐隊。自分のその言葉で起きてしまった過去とこれから起きる未来を考えるんだ。周りに流されてはいけない、ちゃんと自分の口で、言葉で、お前らの本心を言つて欲しい。そしてその言葉に責任を持ち、決して揺るがせはしないという信念を持つんだ」

「信念……」

「これだけは絶対に正しい、間違つていないという強い信念を掲げ、誰かに疑問を思われるまで暴走しろ。その時までのお前はとても愚かだが……強い艦娘になれているはずだ」

「でも愚かつて、そんなの……悪い事になんじや……」

信念を掲げる。簡単に決められる事ではないが、簡単に思う事は出来るはずだ。いつの時代も人はそれぞれ違った信念を持っている。

警察官や軍人、スーパーの店員に身の回りにいる知らない人でさえも小さな信念を知らずに持つて生きている。それが正しい事なのか、悪い事なのかはその人の人生次第だ。

「確かにこれは所詮、正義に反している事だ。傍から見れば悪者に見えるても何らおかしくはない。だが全てが全て正義が正しいとは限らないんだ。正義つてのは人が持つただの個人的価値観でしかないからね。だから今、雷が悪いつて言った事は実はそれもまた正義なんだ。今が俺が言つてる事も、雷が違うつて言った事も、皆それぞれ違った正義の価値観を持つてる。如何にその正義を何があろうと貫き通す事が大切なんだ」

「貫き……通す……」

「これだけ言えば分かるだろう？ お前らが俺の為に恩を返し、戦う事は構わない。だがそれを最後まで貫き通す事が出来るのかが俺は知りたい。どうだ？」

提督は第六駆逐隊の前まで歩み寄り、視線を合わせる為に座る。提督の目は自分達を見定めていた。本当にやりたい事なのか、やりたい事として最後まで貫き通せるか。その覚悟を提督は見定めている。

「……やっつてやるヤ」

「何を？」

「司令官の為に戦う！ もう私達は逃げないわ！」

「口だけじゃ何度でも言えるぞ？」

「だ、だったら納得させるまで何回でも言ってもいいのです！」

「その選択が間違っていない？」

「間違っていないんかないわ！」

「本当にか？」

「「絶対！！」」

声を揃えて答える。以前の第六駆逐隊とはまるで覇気が違っていった。まるで離れ離れになっていた船が誰かの掛け声で一つの場所に集合するかのよう。

「……であればこれを見せる権利が初めて与えられたな」

提督がプリントに合図を送る。プリントは紫色のファイルを取り出し、暁達に見せた。勿論内容は前任の恐るべき全貌である。

「それでも間違っていないと言えるか？」

よく見れば身体が少し震えている。無理もない、忌まわしき前任が深海棲艦の親玉となれば怒るのも当然だ。

提督は第六駆逐隊の反応を確かめている。

「……面白いじゃない。皆で力を合わせればこんな奴なんて一捻りよ！」

「散々痛めつけてくれた分、ボコボコにしてやるのです！」

「ああそうだね」

意外にも戦闘意欲はあった。復讐とまではいかないが戦おうとする意思があれば仕上がりは上々と見える。

「ねえ司令官。前の司令官の場所は分かっているの？」

「さあてそれが分からないんだあ何せこの鎮守府じゃろくに動かないへっぽこぴーしかいないからねえ、あー誰か手を組んでくれる艦娘はいないもんかなー」

「はい！ はい！ 私達がいるわ！」

「このプリントも同じです！」

「し、仕方ないわね、手伝ってあげるわ」

「いやお前らはもう手を組んでるだろ」

提督は第六駆逐隊に手を差し伸べす。瑞鶴達と同じようによく自分達の世界へ入って来た第六駆逐隊を歓迎する握手だ。

「さて第六駆逐隊、手を組もうか」

大きな手に小さな四つの手が乗せられる。暖かく柔らかいその四つの手を両手で握りしめた。これで初めて第六駆逐隊は手を組んだ事になる。

「これからお前らには過酷な日々が待ち受けているだろう。それでもこの未来を選択したお前らが間違っていないと言うのなら貫き通してみせるんだ。いいな?」

「二はい!!」

元気に答え、満足そうに第六駆逐隊は執務室を去って行った。こうしてまた四人、自ら行動を起こす者を確保する事に成功。とはいえ半分以上の艦娘からやりたい事を聞いていない。

「珍しいのかな? 提督さんがまともな事を言ってるなんて」

「馬鹿め、アレはあのチビ共を慰めるだけの虚言だ。しかしあんな臭い芝居してたら鳥肌が立つところだったよ、我ながら上手く出来た論文だとは思わないかねプリンツ」

「はい、私も臭い芝居を見てうずうずしてました!」

「うわっ、二人して性格悪っ」

「何を言っている当然の事を言ったまでだ。戦争に正義も悪もクソもないんだ、正義などという甘ったれた個人的価値観に同調されて動かされる馬鹿共同士がただ単に虐殺を繰り返してるだけなのだよ。正義なんてこの世に存在しないんだ! 所詮は弱肉強食、弱ければ死に強ければ生きる単純明快で阿呆たらしい世界なんだ。お前もその世界の一人だと自覚したまえ、ヒステリーツインテェ!!」

「えー……」

息絶えない言葉の弾幕にただただ引く瑞鶴。元からこの性格の悪さであれば折り紙付きだ。プリンツでさえその性格に影響されつつある。

「ってな訳でゲームの続きだぶっ飛ばす!!」

「望むところだこの、白髪ジジイ!!」

——四時間後

「残念だったなヒステリーツインテエ！俺に勝とうなんざ百万年早いわアー！」

「クソがア……!!」

「イエーイ!! フウウウウウウ!! フオオオオオオ!!」

全試合全勝した提督は喜びの舞で執務室内をグルグルと回る。瑞鶴を煽るように聞こえる声で騒ぎ始めた。

「いやあまさかお前が成長しないなんて驚いたなあ三時間もあれば操作の一つ覚えるだろうに、なーんて間抜けな艦娘なんだー!!」

「アンタがセコい手でぶっ飛ばすからでしょ!!」

「なあにがセコい手だ、ただ単に復帰阻止しただけだ少しは学ぶという言葉を知りたまえポンコツ兵器ー！」

「誰がポンコツ兵器ですって……?」

「お前以外にだアレがいる!」

「頭にきた、リアルでぶっ飛ばす!!」

「やれるものならやってみろポンコツウ!!」

「なあこれどういう状況?」

瑞鶴と提督の会話を遮り、荒れた執務室に入ってきたのは摩耶だ。歓迎会は終わったらしく、暇故に執務室に来たらしい。前の事を振り返ってか酒は飲んでいないようだった。

「……お帰り摩耶、身体の調子はどうかね?」

「そんな格好良く言ったってもう遅エだろ」

「実はアドミラルと瑞鶴がずっとゲームしていて、今からリアルファイトに入るところでした!」

「オイ何を言っているんだプリンツ君、私がそんな事をす——」「ああゲームね」

摩耶は瑞鶴に視線を移した。瑞鶴は既にこちら側に手を組んでいる。何も問題は無い。が提督の事だろう、恐らくゲームで全敗した瑞

鶴を煽り続けたに違いない。一瞬でその場の状況を理解出来た。

「んで提督、明日のスケジュールはどうなんだ？」

「まずその手を離していただけないかな……イタタタタ」

「あつ悪い」

提督の顔を無意識で鷲掴みしていた摩耶は手を離す。自由の身となった提督の顔には赤く摩耶の指の跡がついていた。

「……明日はそれぞれの課題を解消させる為に個別訓練をさせる。運動神経向上や戦術の基本と応用、学ばせる事は沢山あるぞ。勿論瑞鶴、お前もだ」

「私達はどうしますかアドミラル」

「あー摩耶は運動神経向上の為にトレーニングの監督をしてもらおう。プリンツは模擬訓練の監督、俺が戦術の基本と応用の監督だ。把握したか？」

「了解した、あまり時間は無いんだろ？」

「その話はナシだ摩耶」

「おつとごめんな提督。んじゃあたしは先に寝るわ」

「寝坊すんなよー」

摩耶とプリンツは明日に備え、自部屋に戻った。しかし瑞鶴は何故か帰らない。何故なら摩耶に止めたあの話が気になるからだ。

「ほらどうしたポンコツ、さっさと寝ろ」

「寝れるわけないでしょ、何よあの話って」

荒らされた執務室の机を元に戻していく提督。散らばった書類をまとめ、机の四隅に置く。

「近々深海棲艦がここを攻めてくる」

「えっ……それって本当？」

「本当だ、聞いたならさっさと寝ろ。この話は誰かには禁物だ」
「わ、分かったわ……」

Part 2. 万里一空のガーネット

17. 久しぶりに身体を動かした後の筋肉痛は凄まじい

「はいおはよう諸君！ お前らに集合してもらったのは理由がある！」

鎮守府内の広場に一齐に集められた艦娘達。朝早く起こされ、不機嫌な者も少なくはない。ましてやイライラの対象が提督であれば怒るのも無理はない。

その艦娘達の前に置かれた台に立っているのは提督を中央とした摩耶とプリンツだ。

「あの演習でお前らの練度がどれくらいかよく分かった。正直言っても可もなく不可もなくだ。だから俺と摩耶とプリンツがお前らの指導監視官としてビシバシ鍛え上げる事にした、覚悟しておけこのっポンコツ兵器共オ!!」

メガホンで全員に聞こえるような大きな声で知らせる提督。大きな声を出さなくてもうるさく聞こえる為に艦娘のストレスは増している。

勿論提督は知っていてやっている。実際提督も深夜に榛名や翔鶴に性交渉を仕掛けられ、鎮守府内を追い掛け回されており、そのおかげで一睡もしていない。故に提督もイラついている。

「却下よ、やってらんないわ」

「相変わらずの氷河期だな加賀は。まア別に強制参加じゃない。やりたくなければやらなくて結構。それはお前らの自由だあだがしかし!!」

くだらないと艦娘達は自部屋に戻ろうしている。聞いている暇があるなら寝ていようと全く興味を示さない。

そこで提督はある言葉を投げ掛けた。

「差別した奴らを見返せるチャンスはもう無エぞ？」

一部の艦娘達が足を止めた。その反応からみて差別している側と

差別された側がどちらか容易に分かる。

そして一番知られたくない事実を知られ、キレる寸前までストレスが限界を迎えていた。

「あつごめーん、別にそんな事はあ良いんだっけかお前らはあ。差別なんて無いもんねーちゃんと呼びよごっこしてるもんねー？」

「寝言は寝て言いやがれ、クズ野郎。そんな事している訳がねエだろ」
「そ、そうよ私達同士でそんな酷い事なんてしてるわけないでしょ」

「俺は奴らと言っただけだ別にお前ら艦娘同士で差別してるなんて一言も言っていないぞー」

鈴谷の言葉により地雷を踏んだ事で艦娘同士での差別という知られたくない状況を明確にされてしまった。艦娘の表情が一気に絶望しているのが分かる。

自ら地雷を踏みに来るとは愚かな艦娘達だ。だからこそ教育させる必要がある。自分達が今どんな状況下にいるのかを。

「ようやくそれらしい顔になってるじゃないかあ愚かな兵器共。さあ散々いじめてくれたんだ二度とないチャンス逃したくはないだろ？ 今こそ見返す時だあ俺らと学べば練度は十以上成長する。こんなありがたいことなんて早々無いと思うけどなあ」

一部の艦娘達が提督の元へ戻っていく。多くは差別された側の艦娘達だ、その場を離れようとする艦娘は差別した側。これでようやく目星がつけるはずだ。

「……………本当に、やれるのか？」

「さあそれは木曾君いやお前らの努力次第だあ見返したければついてこい」

「フツ……………面白い……………！」

「勿論差別してる側も大歓迎だあ散々見下してた鉄屑に見返されたくなければ混ざってくるといい、尤もそのくだらないプライドを捨てられたら話だがなあ……………さあ下克上の始まりだ！ 己が欲の為に相手を追い抜けここに居る誰もが敵だ、自分が最強だと相手に示せ頂点を目指してみろ!!」

——司令本部内中庭

「つてな訳であたしがお前達の監督って事でよろしく」

運動神経向上の為に集まったのは駆逐艦から戦艦まで選り取りみどりだ。

「ここで学ぶのは主に緊急時の近接格闘術の訓練だ。敵に接近された、弾薬が無いが燃料はある、そんな状況が多くあつたはずだからな。だから万が一に備え、戦う術を身に付ける。質問は？」

夕立が手を上げる。あの演習で単騎行動が目立った問題児だ。ただ底知れない程の運動神経を有している。

「その近接……格闘術っていうのは自由に動いていい……の？」

「提督と旗艦の許可が降りればそれも構わない。だが未熟な近接格闘術じゃ深海棲艦どころか提督さえ倒せないぞ」

摩耶の言葉を聞いた時、一部の艦娘から笑みが零れた。自分達より力が劣る提督が倒せないと聞いて冗談だと思つたのだろう。

「まあ無理もないか、見せた方が早いな。ていと——」「何だね摩耶よ」「いや早エよ、名前呼ぶ途中だったろ」

中庭にあるベンチにいつの間にか座っていた提督。

今はあるテストをしていて暇だったらしい。

「この内の誰かを蹴り飛ばしてくれ」

「何でだよ」

「提督の事を舐め腐ってるからちようどいい見せしめとして」

「はア？　んな事する訳……いや摩耶、誰蹴り飛ばせばいい」

「乗り気だなオイ」

「俺が受けるぜ！」

自ら受け役として天龍が名乗り出た。手を組んでいるとはいえ提督の力に興味を持ったらしい。摩耶さえ凌駕するその力を見てみたのだ。

「えーお前ー？　気が乗らねー」

「んだよ悪いかア!!」

「はあ……んじや本気で行くぞー」

「つたく……ああドンと来い!!」

右足を上げて蹴る準備をする提督。

天龍は腕を交差して防御体勢に入る。

皆が催しのように見てる中、提督は思いつ切り右足を蹴り突き出す。

「うわッ!!」

直後天龍は後方へ一気に吹き飛ばされた。

土煙が舞い、衝撃波が発生する。

まるで岩が破壊されるような音が響く。

天龍は寮内の壁を突き抜け、広場まで蹴り飛ばされた。提督は蹴った足を抱えて痛みに悶えている。

「……という訳で理解出来たら嬉しい。ごめんな提督」

「痛って、痛ってえ……まじで痛い!! 久しぶりに力入れたら足攣った、やばい奴だこれ痛った!!! 痛い痛い痛い!! 天龍は?」

「天龍はギリギリ意識を保っているな、まあ大丈夫だろ」

「だあれが大丈夫だゴラァ!! 危うく気絶しかけるところだったぞ!!」

蹴り飛ばされた天龍が起き上がり、提督にキレでした。有り得ない力に驚いたせいかわずか戸惑っている。それは他の艦娘達も同じだった。

「あー悪い天龍。提督は今医療室に向かった。お前も少し治療した方がいい」

「チツ……別に構わねえ今度会ったら仕返してやる」

「……いつでもどうぞ。さて訓練を始めよう、まずは力試しだ」

——鎮守府近海

「はーい模擬訓練の監督になりましたあプリンツ・オイゲンでーす! よろしくお願いしまーす! ficken!」

鎮守府に接する港で多くの艦娘達が航行している。海外艦とだけ

あつて物珍しい目で見ていた。

この鎮守府に海外艦はいなかったので初めて見るだけに興味津々だ。

「ここでは主に命中率や回避率など、を上げる為に予め設置された標的をペイント弾で当ててもらいまーす！　また実際の模擬演習、シミュレーションに合わせた行動作戦などやりますのでついてきてくださいねー！　質問はありますかー！」

ぴよんぴよんと跳ねるプリンツ。自ら監督を務めるのが嬉しいのかやる気を隠せていない。

質問する者はいなく、そのまま模擬訓練が始まった。百以上ある標的をそれぞれ違った色のペイント弾が直撃する。

「朝潮、と言いますかー？」

「は、はい！　朝潮型駆逐艦一番艦の朝潮です！」

「少し狙いを左上にするといいかもしれませんね！　頑張ってくださいー！」

「はい！　ありがとうございます！」

艦娘達に個人的なアドバイスを与えていく。

実際プリンツのアドバイスは的を得ていた。何が悪いのか、どこがダメなのか見ただけで判断出来るプリンツの才能はこういう場で力を発揮する。

現にプリンツは大本営にて海外艦の教育係として多くの艦娘達を先導させている。

「気に入らんな……」

海外艦に教えられるのが不服なのか興味本位で参加していた那智がプリンツの背中に狙いを定め、砲撃。

しかしプリンツはペイント弾を察知してそれを回避する。

そして一気に那智の前まで接近、那智の喉元を鷲掴みした。その間、僅か五秒である。

「あまり躰が良くないと……沈めちゃいますよ？　それは嫌ですよね？」

「やつ……めろッ……!!」

「一体何の為に参加したんですか？ そんなに私達を見下したければ帰ってください。提督は止めるでしょうが……私は貴方達には容赦しません」

「分かつ……た……から！」

驚掴みしていた手を離すプリンツ。那智を危うく絞死しかけるところだった。思わず那智は座り込んでしまう。

「分かっていたいただき感謝します！」

——鎮守府内司令本部多目的室

「つて事でテスト終わったでしょ、前の人に渡して俺に頂戴」

「……すまないが提督、先程の砲撃音とその足の怪我はどうしたんだ？」

「あれ砲撃音と聞いたならお前の耳は余程節穴だな長門。アレは……まあ俺がはしやぎすぎただけだ」

「そ、そうか……」

提督が監督を務める戦術の基本と応用の授業は案の定艦娘が少ない。い。

大体は旗艦を務めた艦娘や空母群、戦艦が殆どだ。提督はまず知識量を確認る為にテストを行った。内容は至って簡単、戦闘中に起こる様々なシチュエーションからどう動くかという問題だ。

「えーっとテストの結果のなんだが……お前らもうちよつと捻りだせよオ!!」

用紙を机に叩きつけ、嘆く提督。

テストに書かれた答えは大体が反撃するなどといった脳筋が答える内容ばかりだった。違う、そうだけどそうじゃないと頭を抱えた。

「反撃するつたつてその場の判断で全て変わるんだ、どう動いて反撃するのかを書けば点数は良かったのによお……」

「大体そのテストの内容が抽象的過ぎるのがいけないと思うのだけだ」

「どこが抽象的だお前の理解力が足りないだけだ氷河期イ……まあい

いこれから教えていくから覚悟しろよ。んじやまず姫クラスの空母棲姫からだ」

提督はホワイトボードに対空母棲姫戦についてありとあらゆるデータを公開する。

相手がどんな手で攻撃するのか、耐久力や装備の内容などどう戦えば倒せるか順調に教えていく。艦娘達は予め配布されたノートにまとめ、記憶に留めていった。

「質問だ提督」

「ん？ 何だ長門」

「何故我々の間で差別があると分かったんだ？」

「今は勉強しろ」

「だが——」「だがじゃない！」

「今は俺が馬鹿みたいに戦わないようにお前らに教えてあげてるんだ。差別なんてどうでもいいお前ら同士で勝手に醜く無駄にやってる、そして黙ってノート取れ」

何も言わずに艦娘達はノートに書き記していく。仲間同士の差別に関しては誰も言えないようだ。提督の声だけが多目的室内に響く。

「……あのな、こういう時こそ俺に言うべきなんじゃないのか？」

「何を？」

「いや何でもない」

沈黙が走る中、誰かが口が開いた。

「……差別、無くせないの」

その言葉にだれもが驚いた。一斉に声が聞こえた方向へ顔を向ける。

口を開いたのは鈴谷だ。今ここに来たらしい。先程の会話を聞いていたようだ。

「俺は出来る範囲で答えると言ったはずだ」

「なら……！」

「無理だ」

「……えっ……？」

「何で艦娘同士の差別を関係ない俺が無くさなきゃならない。醜く愚

かなお前らの人間関係なんてどうでもいいねー。そもそも差別つてのは差別し合ってる同士が分かり合えない限り一生続くんだ、ましてや関係の無い俺が介入する余地は無い」

「何でもしてくれるって言った癖に……」

「言葉を勝手に改変させるなエセJK！俺は出来る範囲で答えると何度も言ったはずだ、何でも叶うと思つたらそれは大間違いだ俺は有能だけど神でも何でも無い!! 大体兵器同士が差別なんてしてんだよ、それは人間様のする事だお前らが勝手に真似してんじゃねえ!!」

「ちよつと貴方またツ——」「と言いたいが」

加賀が止めようと席を立つも提督の言葉で遮られてしまう。

それを聞いて帰ろうとした鈴谷が歩みを止めた。

「……何」

「……鈴谷、本当にこの差別を無くしたいと本気で思うなら……手伝つてやらん事も無い」

差別は艦娘同士で起こっている事、提督はその艦娘同士の軋轢の回復を如何に手伝うかが重要だ。提督自身が丸く収めてもいつか必ず起こる。艦娘自身が持つ価値観をそれぞれ見つめ直さなければならぬのだ。

「本当に本気で差別を無くしたいなら……の話だ、後で執務室に俺がいる時に来るがいい」

「……分かった」

それを聞いた鈴谷は多目的室を出ていく。

提督は気にせずそのまま授業を始めた。

重巡寮の廊下で窓から見える風景を眺める鈴谷。港付近で模擬演習している仲間を見ていて心が苦しくなってきた。何度自分を責めなくても無駄だ、自分は差別した側の艦娘でしかない、ただの屑だ。

そう考えていると前から最上と熊野が話し合いながらこちらに向かってきていた。鈴谷は目の前で立ち止まり、頭を下げる。

「最上姉……熊野……本当に、ごめんね」

「……うん大丈夫だよ信じてたから」

「行きましょう……」

何度謝っても鈴谷の心の隙間は埋まらない。

18. へそくりを隠した場所は大抵バレやすい

「うーんまだ夜の殴られた傷痕が痛むかあ」

「何言ってるんだ提督？」

「いやいやこちらの話」

提督達のスパルタ教育が三日間続いた。一日八時間ずつローテーションで艦娘達を厳しく育て上げていく。まさに地獄のような日々が続き始めていた。

「マジで休みないのか!？」

「馬鹿言えサラリーマンなんてこれ以上働いてんだぞ甘ったれるな、ほら立て」

「っ……分かったよ……!」

天龍はまだ疑問に思っていた。初めて提督に蹴られた時、まるで鬼クラスの深海棲艦に殴られた様な衝撃がまだ身体に残っている。人間であればまずあんな威力を出す事など有り得ない。それは今も同じだった。

「何で提督はあんな強いんだ？」

「愚問だな。俺はお前らより過酷な戦場を渡り歩いて来たんだレベルが違う」

「レベルかあ……」

「提督」

天龍と手合わせしていた提督。

時間は十六時、空が茜色に染まっている。提督を呼んだのは鈴谷と他の艦娘達。最上、加賀、金剛の三人だ。恐らく連れてきた要員は差別された側の艦娘という事だろうか。

「今はダメ？」

「俺が執務室にいる時に来いと言ったはずだ。だがしかし一々面倒臭い状況に呼び出されるのは腹立つから私の寛大な心に免じてここで言う事を許可するさあ言いたまえ」

「じゃあお言葉に甘えて、提督。差別を無くしたい、手伝って」

「人に物を頼む時は敬語だと幼き時代に習わなかったのかあ、まして

や俺はお前の上官だ敬語で言いたまえ」

「っ……差別を無くしたいんです、手伝ってください」

「敬意が籠っていないやり直し。敬愛なる提督様、愚かな差別という行為をこの世から抹消したく存じますのでどうか心許ない私達に救いの手を差し伸べてくださいお願いしますと言いたまえ」

「チツ……!! 敬愛なる提督様、愚かな差別という行為を……この世から抹消したく存じますので、どうか心許ない私達に救いの手を差し伸べてください……お願いします……ッ!!」

「仕方ないなあこうも言われちゃ手伝う他ないだろう」

「ねえぶん殴ってもいい?」

「いいぞ」

許可したのは近くを通った摩耶だ。一連の流れを見て、自身も殴りたくなったらしい。

「お前が許可してどうする」

「茶番はやめて、早くしてくれないかしら」

「だったら俺の頼み事を聞いてくれ、差別している側と差別された側にいる艦娘達をそれぞれ書類にまとめて別けるんだ。提出は今日から一ヶ月内、俺が執務室にいる時だ、分かったか?」

まずどの艦娘がどちら側にいるかを先に把握しなければならぬ。今もその差別事情が続いているのであれば前任以外に続けさせている人物か艦娘が存在する。

だがこの鎮守府に居たはずの整備士や工兵、憲兵や清掃員は前任逃走後に元帥が全員異動。一部は犯罪に手を染めており、刑務所行きになっっている。人すらいないこの状況であれば狙いは艦娘だ。

「全員だ、全員調べろ! 本当の闇は奥深くに潜んでいる、探って探って探りまくれ! 誰かの紐パンが出ようが誰かのへそくりが出ようが誰かの宝物が出ようが探すんだ、いいな?」

「は、はい……」

「よーし下克上の準備を始めるぞ! 本能寺の変を起こすまで時間はコップに水が溢れる程余っている、本気でやれ!!」

「はいー!」

提督の目は本気だ。差別を無くそうとする自分達に最大限の手配をしてくれる。思わず勢いよく返事してしまった。だが少し悪くない気分だ。

「お、来たか」

すると遠くからヘリコプターが飛ぶ音が聞こえた。ヘリコプターはこの鎮守府の広場に着陸、誰かが降りてくる。白い軍服姿の男と目つきの悪いどこかで見た艦娘。

「ここがああ噂の鎮守府ですね白さん、お久しぶりです」

「久しぶりだなあ調子はどうかね■中尉、相変わらぬのポーカーフェイスで安心したよ」

「白さんこそ相変わらぬの減らず口で安心しましたよ、それに貴方がここに配属されたと聞いた時は驚きました」

「話は執務室でしよう、ここだと機密漏れだ」

——執務室応接間

「さて私を呼んだのは演習の申し込みと打ち合わせですね」

「如何にも！あの調子づいてるポンコツ兵器共を完膚なきまでに蹴散らしてくれ」

応接間を使って提督と中尉、それぞれの秘書艦を引き連れ話し合っていた。

それは演習の申し込みと打ち合わせをする為の会議。訓練で練度を上げた艦娘達を力を発揮する演習でそれ以上の練度を持つ相手にぶつけさせる。そして完膚なきまでに敗北させる事でくだらないプライドをぶち壊すという卑屈な計画だ。

中尉を選んだのも理由がある。

「分かりました、では遠慮なく破壊させていただきます。後悔は無いんですね？」

「当然だ、だからお前を選んだんだ。連帯責任や報酬、過酷な訓練のよくな厳しいルールでついてきた艦娘を鍛え上げたと言われているお前の艦娘共なら容赦なく叩きのめしてくれるはずだ。頼んだぞ」

中尉は誰にも容赦ない冷酷な軍人として有名だ。戦意の無い艦娘を戦場に引きずり出したり、敵に対しては見敵必殺。戦意喪失した艦娘を連帯責任と称して艦隊ごと解体するという噂まで広がる、まさに冷酷な人物である。

何より凄いのは過酷な状況下についてこれない艦娘がいない為に解体や轟沈の報告が一回も無いという事実。その結果、南方の鎮守府にて防衛ラインを維持し続ける大事な役割を全うしている。道理で秘書艦の目つきが悪いわけだ。

「ええお任せ下さい。あと白さん、あの件についてですが……」

「大体内容は把握している。奴がこの日本のどこかではなく何処かの鎮守府に潜入している可能性がある事だろう」

紫色のファイルを取り出し、内容を読み上げる。それはこの鎮守府の前任が日本の鎮守府に潜入している可能性がある事だ。一般人から各地でその発見情報が発生している。もう隠し切れないと悟ったのか大本営は各地の鎮守府の責任者のみ知る事ができ、口外禁止となっている。

「この鎮守府にも可能性は無くはありません。だからこうして訓練を積んでいる様で安心しました。警戒を強めた方が良いかもしれません」

「ご忠告どうもありがたく参考にさせていただきます。君のその綾波も相当練度が高いようです」

「ええうちの最高戦力の一人です、私と同じく容赦がありません。どうか楽しみにしてください」

「ああ楽しみだ……つてな訳で会議も終わった事だし時間ある限りゲームしようぜえ!!」

「……良いでしょう」

提督はニンテンドースイッチを取り出し、ゲームをしようとして誘った。冷酷な中尉であろうと娯楽は大好きだ。暇さえあれば提督と同じゲームをやったりしている。快く中尉と綾波はマイコントローラーを見せびらかし、提督は摩耶を誘って四人でゲームをやった。

「何やってんだか」

開いたドアの隙間から艦娘二人が覗いていた。覗いていたのは木曾と青葉、訓練がちょうど良く終わり執務室まで報告しようと向かった時に偶然見ていたらしい。

「会話の内容とか聞こえました?」

「ああ俺が来た時はあの忌まわしい前任について話していた。どうやらこの国とこの鎮守府やどこかの鎮守府にも潜入している可能性があるあるらしい、俺達も気を付けないといけないな」

「そうですか……しかし提督は貶している様でちゃんと考えてくれているんですね、私達の事」

「ああそうだな、最初は殺意しかなかったが話せば案外良い奴だ。時々イラつくがな」

あれだけ自分達を罵っておいて考えてくれている提督に少し興味を持つ青葉。少しずつではあるがこの鎮守府も変わりつつある。あのまま提督が来なければ変わろうとは微塵にも思わなかっただろう。

「最初からアイツが……は無いな」

「そうですね、それは無いです」

ドアから覗く事を止めて、食堂へ向かう二人。訓練に参加している二人は少しばかり充実していた。

木曾は提督に剣術を教えてもらい、プリンツや摩耶に先制雷撃の重要さを教えてもらった。青葉は砲雷撃戦時の役割を教えてもらっている。あの三人のおかげで練度もすぐに上がっていく。正直認めざるを得ない。

「ん? お前どこに行くんだ?」

「あ、いや提督と話がしたくて……」

「そうか」

二人と翔鶴がすれ違う。何か気まずい空気が廊下を包み込む。何か亀裂がまた広がっているような気がした。

「何やってんだ? あの三人……」

その場面を奇遇にも覗いていた提督は翔鶴を一時待機させ、ゲームに戻った。

ちようどその時、夕飯の鐘が鳴る。多くの艦娘達が訓練を終え、食

堂へ向かっていた。加賀は一足先に食事を終え、二人分の食事を持って空母寮に戻っていく。そしてある部屋に入り、二人分の食事を机の上に置いた。

部屋には片隅でひたすら怯える飛龍と蒼龍が顔を隠して座っていた。

「飛龍、蒼龍……ご飯よ」

「……」

「私は本当にやってはいけないことをした……ごめんなさい」

「……だ、大丈夫です。だから早く出ていってください……」

「……分かったわ」

部屋を出ていく加賀。加賀はその姿をただ見る事しか出来なかった。

19. 許す許さないを決めるのは被害者だけ

訪問した中尉達を見届け、気づけば夜二十一時。消灯まであと二時間ある。書類は既に書き終え、後は風呂に入り、床に着くだけだ。

だがその前に予約している艦娘がいる。

「さて翔鶴、話ってなんだ？」

「何故……何故です!? 差別を終わらせるのではなく見返すんですか? あまりにも酷いです!」

「何が酷いんだ、行動もしないポンコツ兵器共を立派に動かしてるんじゃないか。むしろありがたく思ってた欲しいね〜」

「私達は鉄屑ではありません! 人間であり艦娘です、そんな醜い事をしたっていずれまた差別が起きます! 差別を終わらせるのは決して見返したり罵る貶す事じゃなくお互い良い所を分かり合って謝る事で初めて差別が無くなるんです!!」

翔鶴は執務室の机を叩き、異議を申し立てた。確かに翔鶴の言っている事も大体は間違いではない。

「だったらお前はそのケースを知ってるか? そんな事起きてたら差別なんて起きるはずが無い、夢見過ぎだ」

「それでも……仮に見返したとしてまた亀裂や差別が生まれます。無限に続いてしまうんです! もっと別の方法は無いんですか!？」

「俺のやり方が気に食わないならどうぞ参加しなくて結構。俺はそういう臭い方法は嫌いでねえ、俺はこの鎮守府の提督だ異論は認めない。俺がダメなら摩耶かプリンツ、もしくは自分で仲間を集めて存分に醜く反抗するといい、少しは楽しくなる」

何も言えなかった翔鶴は黙って執務室を出て行った。最後の表情からして怒りに震えていたんだろう。願いを聞き入れていたと思えば悪口は欠かせない提督に嫌気が差しているに違いない。

「摩耶、鈴谷達を使って翔鶴を調べろ」

「分かった、すぐに知らせる」

「いやー来週が楽しみだなー楽しみすぎて夜もぐっすり寝てしまいうな気分だ」

「結局寝るんじゃないか」

「寝過ぎて逆に不眠症になりそうだあ、あー早く来ないかなあー！」

「んで艦娘達の成長具合はどうだ？」

「まあまあ上々だ。このまま俺の思うがまま育ってくれる事を祈るよ」

「Admiral！ 起きてるー？」

プリンツが執務室に入ってきた。部屋着姿でどこかだらしない様子だ。その様子とは裏腹に元気な素振りを見せる。

「どうしたプリンツ」

「えーっと、あれ何を言おうとしたんだっけ……」

「おいおい記憶喪失は止めてくれよ、治療が面倒だからな」

「あつ、元帥から急な連絡があるそうで——」「それを先に言え馬鹿者!!」

急いでスマホを取り出し、元帥を電話で呼ぶ提督。やがて繋がり、ゆっくりと元帥が話し掛けた。

『やあ白君、調子は……どうかね』

「はい！ すこぶる快調で今にも時速三百キロで発車しそうです!!」

「提督、それ例えになってない」

『そうかそうか、元気そうで何よりだ。ところで白君、確か南方の
中尉の艦隊と演習をするんだって？』

「……何故それを……？」

『私も見てみたいなくダメかな？』

思わず心の声が漏れそうだった。取り敢えず理由を聞かない事には分からない。落ち着いて話を聞くことにした。

「何故……でしょうか？」

『いやあ君が育てた艦娘達はこの子も優秀だから今度はどうなってるのかなーって思ってる』

「そ、そうですか。そういうえば中尉の方には連絡はされたのですか？」

『したよー快く承諾してくれたから念の為に白君にも連絡しようかなーって』

「そうなんですね……」

『さぞ君が育てている艦娘だ、とても強いんだろ?』

「あー……まあはい、強くさせる為に心掛けております……」

『んじゃその日行くからーよろしくー』

ブツつと通話を着られ、会話を終える提督。汗を滝のように流し、慌てている。スマホを静かに机に置き、椅子に座った。

「あんのクソジジイめ!! 何がその日行くからー、だ! お前は休日
に映画誘ったら楽しみにしてる放課後帰りの女子高生か!! 断固拒
否するに決まってるだろ!!」

「でも承諾したよね Admiral」

「そこだプリンツ!! まずいぞあのクソジジイは俺が勝つのが当然だ
と思ってる、だが計画ではサイコパス中尉がボロクソに叩きのめすは
ずだったんだ畜生!!!」

元帥はとても穏やかな性格で部下は殆ど慕っている。何年か前の
大規模作戦で見事な戦果を残し、元帥に登り詰めた優秀な人物だ。減
らず口の提督も敬語になるほどの実力者である。

だがしかし元帥は穏やか故にガラスのハートの持ち主だ。あまり
期待を損なわれてはいけない。

「……こうなったら徹底的に戦うぞ! 摩耶、プリンツ!! 全力で叩
き教える! そして誰が強く優れているかピックアップするんだ!

あのサイコパス野郎に勝つ為だ、準備をしろ!!」

「了解した」

「了解しました Admiral」

「さて本物の下克上だ、一気に本能寺の変まで事を進めるぞ! やら
れる前に倍返しだ!! 例えやり返されても返されなくても倍返しだ
!!」

「それはただの迷惑だぞ」

——鎮守府内広場

朝を迎えた。

訓練に参加し、切磋琢磨する艦娘達。その中で提督が全員招集を呼

び掛けた。仕方なく艦娘達は話を聞きに広場まで集まっている。

よく見ると提督は所々湿布や絆創膏が貼られていた。

「ああ悪いが南方の中尉と演習する事になった。一部は中尉とその艦娘を見た事があるだろうがアイツが育てた艦娘は恐ろしく強い」

「演習？」

「そうだ、お前らが戦っても負ける可能性が高い。が、勝つ可能性だけである。それこそが見返せる大きなチャンスでもあるんだ。だから懸命に励めえ、自分が一番強いんだって事を俺に証明してみせろ。今まで見下した奴に目に物見せてやれ、第一艦隊のメンバーをこれから決めるからな」

「それはつまり……」

「今後の作戦にも大きく関わる。だから頼む……いや本当にマジで……」

提督が初めて公衆の面前で弱気になり始めた。余程の事なのか、本当に悩んでいる。

「急に弱気だがどうした提督よ」

「演習に元帥が来ると思うと胃が痛い」

「ああ……なるほど」

元帥の話は艦娘の間でも良く広まっている。かなり面倒臭い性格をしていると評判だ。会話はまるで子供のようにつくりと話し、部下にイタズラするなど遊び心は欠かせない。だが作戦指揮となると表情は一変、素早い指示も状況判断で瞬く間に作戦を終わらせる噂がある。

「あー！ あのジジイがいなければ順調に進んでいたのにいいクソがア!! 徹底的にやるぞ、いいなア!!」

「はい!!」

一斉に発せられた艦娘の声と同時に訓練はより激しさを増した。一日のスケジュールは変わらずとも、内容は全て新しくされた。

「因みに提督、相手の方からは？」

「電話して演習無しにしてくれと言ったら、嫌ですって切られた。だからぶっ飛ばす」

「ああ……そう……」

短気な提督に呆れる摩耶。実際提督の艦隊が演習で負けた事はあまり無い。恐らく絶対に勝つというプライドがあるのだろう。こうなったら提督は止まらない。

「Admiral、こちらは現在までにランキングづけに揃えた報告書です。ご確認ください!」

プリンツがまとめた報告書には各艦娘のスペックや基本の戦闘能力の高さが表された棒グラフなどがあった。模擬訓練のおかげで練度はかなり上がっている。成長しているのは確かだろう。

「長門や夕立、加古の伸び幅が良いな、悪くない」

「確かに私も加古は薦めたい。彼女は基礎の身体能力が高かった、模擬訓練でも想像以上に成績がいい。作戦でも提督の指揮があればその能力を発揮してくれるはずだ」

「加古ねえ……空母はどうだ?」

「空母であれば翔鶴と加賀がいい勝負をしてる、実戦に投入しても充——」「おい提督、私はどうだ?」

摩耶が健気に報告している中、話を遮ったのは木曾だ。自ら演習に参加したいと自分を薦めている。

「いつの間に入って来たんだ、気づかなかったぞ!!」

「うるさい黙れ、私が珍しく来てやったんだありがたく思え」

「お前こそ黙れ木曾、理由は知らんが実戦に出たければ訓練で精々無様にアピールする事だな! 何も薦めようが無駄だ、さっさと訓練に行ってこい!」

「私達もいけるわよ!!」

今度は第六駆逐隊全員が机の前で意思表示を仕掛ける。提督が気付かぬまま執務室に入って来たようだ。

「黙れチビ共オ! 行けるか行けないかじゃなく強いか強くないかだ、無駄な意思表示しようが強くなければ何も意味を持たないぞ、だったらさっさと訓練に行ってこい!!」

「提督、早く手合わせしてくれ!!」

「お前も何なんだ天龍?! 手合わせなら摩耶にしてくれ、俺は暇じゃ

ない!!」

「艦載機の開発まだなの？ 早くしてよ提督さん!!」

「それは明石に聞けエ!! 俺は知らん!!」

「Admiral、話聞いてますか!？」

「あああもおお次から次へと、うるさあああい!!! 全員、執務室から出ていけえええ!!」

提督の怒号が鳴って二時間が経過した。天気は次第に悪くなり、雨が降る。なお雨が降っても艦娘達は訓練を止めなかった。

何の為に提督が用意した訓練に参加したのかは見当がつく。理由は様々だ、提督が物言いするつもりは無い。

「出てけと言ったはずだ、何でずぶ濡れ状態で新品リニューアルさせてんだおかしいだろ!!」

摩耶やプリンツ、その他手を組んだ艦娘が出ていったと思えば今度は鈴谷と加賀、金剛が雨に濡れた状態で執務室に入ってきた。

「仕方ないじゃない。貴方の言う訓練に付き合っただけであげてるんだから、ありがたく思っただけじゃないな」

「だったら無理に参加しないでいいって言ったはずだ!! 何で俺の言った事が一々分からない！ お前らの脳みそは遂に宇宙へ到達したのかア!？」

「これ資料、全てじゃないけど」

「ありがたく貰っておこうだが俺は全てまとめろと言ったはずだ、何故ポテチの残りカスみたいな物しかよこさないんだ？」

「でもポテチの残りカスだって美味しい物でしょ？ ねえ？」

鈴谷が資料に指を差す。

そこには差別している艦娘のリーダー格、そして元秘書艦である艦娘を差していた。そこにある名前は――、

「ほお……悪くない味だ……」

「厳しいのネ」

「当たり前だ。ポテチの残りカスだろうと美味しいかどうかは食べた時による。例えばその残りカスが放置され湿気ていたらお前らは食べよ

うと思うか?」

「でもそれが好きな味でも?」

「俺は食べる。良くやった」

恐らく提督が今初めて褒めただろう言葉。その言葉に鈴谷達は驚いていた。あれだけ暴言を吐かれれば驚かない方がおかしいだろう。

「残念ながらお前とは何故か気が合いそうだ鈴谷、望みを聞こう」

「私も最悪な気持ちで泣きたくなるね。望み? 何でもいいの?」

「急に強気になったなあ面白い奴だ、何でもいい訳じゃない俺が出来る範囲での話だよ、人の話を聞こうか」

「はいはいしませんね、だったら……私達も仲間に加えてよ」

鈴谷の望みを聞いて目を丸くする提督。何を言ってるのか分からない、といった表情だ。

「何の?」

「貴方が摩耶やプリンツ、天龍達と何かしら手を組んでいるのは明白だからね。駄目かな?」

「知らないねー」

「そんな訳ないでしょ?」

「アイツらが勝手につるんで来てるだけだ。俺は仲良くしたつもりは一度も無い、むしろ迷惑してる」

机に足を乗せ、堂々と居座る提督。

何故か雨が降る音が集中して聞こえた。

「何でかしら、そうとは思えないのだけど。それこそ貴方が——」

鈴谷が手を広げ、加賀を止める。例え提督の前に言われようとも鈴谷は顔を一つも変えない。

「理由を聞こうかな?」

「俺は言ったはずだ、自ら考えた上でやりたい事を言えと。その金剛の様に行動力がある奴の言った事しか俺は聞かない。いいか?」

お前らに無いのは自主性と行動力だ、道具みたいに部屋の隅っこに佇んだまま何もしない上に阿呆らしく人間みたいな事するもんだから此方としては寒気がするね」

提督は立ち上がり、指を差しながら鈴谷達に近寄る。雨が降る静寂

の執務室に提督の声が響く。

「でも今やっと動くこうとしてるじゃないの？」

「違うね、俺に唆されて指示された事に従順なだけだ。所詮は指示を待っただけのポンコツ兵器に過ぎない」

「そうね、でも私達を動かさせたのは提督でしょ？」

「そう思ってるならお前の頭は土星の輪まで到達したようだ、一度JAXAに行つて小惑星探査機はやぶさ2に括り付けられた後に数年間関係の無い土星の輪にある小惑星を探査してくるといい、少しはマシになるだろう。成層圏で燃え尽きなければねえええ!!」

鈴谷達の周辺をグルグル歩き、言葉で黙らせる。想像以上のウザさに誰かが舌打ちをした。

「……望みつて何を言えばいいのかしら？」

「艦娘としての存在意義を忘れたか？ だったらお前らは道具以下だ、話す価値も無い」

「何か隠してるでしょ」

「いいや何も」

「何も無いわけ無いでしょ？ 提督は今最も秘密にしている情報を私達に隠してる。そしてそれを私は知ってる」

提督の目が微かに動いた。まさかあの状況において口を開いた艦娘がいるとでもいうのか。どの道、後で調べなければならぬ。青葉辺り狙ってやろう。

「……だったらどうする。その情報をお前はそこのポンコツ兵器共にばら撒くのか？」

「それもいいけど……やっぱり交換条件かな？」

「へえーだったら実は俺も知ってるんだ、鈴谷が前任の時に最上達を差別した事で愚かな自分を罪滅ぼしの為に差別を無くしたいという事をな」

鈴谷の顔が曇り始める。

それを聞いた金剛は驚く表情をしていた。雨はより一層激しさを増し、訓練が中止される。次々に艦娘達が建物へ退避していく。

「鈴谷、お前も実は前任に優遇されていた、このリストに書いてある艦

娘の様にね。一時期は前任に洗脳され、本気で姉達や仲間を蔑んだ。だが前任が消えればその洗脳は消え果て、今まで自分がやった愚かな事に罪悪感で押し潰された。姉達からは操られていたのが分かっていたのでから大丈夫と気を遣われ、更に心は傷を負い、自らの罪滅ぼしの為に差別を無くそうと俺に懇願したわけだ、そうだろう?」

「……」

「加賀もそうだ、お前も鈴谷と同じく目を覚まし、罪滅ぼしの為に協力した。散々俺に突っかかって来たのは無意識に助けてと心のどこかで俺に訴えていたからだ。直接話せばいいものを自身のプライドが許せなくて話すのを躊躇った」

「……そうよ、私達は謝っても許されない事をした。何をしてももう取り戻せない事ぐらい駄目な自分でも分かっている。提督の言う通りこれは私達の罪滅ぼしよ、生き残った皆に償う為にね」

それを聞いて提督はキレ気味で口を開く。

「くだらない」

「何?」

「くだらないと言ったんだ。確かにお前らは差別をしてしまった、償わなければならぬ。当然の考えだ、だがその償いに何故俺が利用されなきゃならない? 俺にメリットが無いんだが」

「何か……欲しいの?」

「いや別に。ただお前らの罪滅ぼしに関係の無い俺がまだ関わる必要は無いと言っているんだ」

「まだ……ってどういう……?」

「分からないのか、遂に冥王星まで到達したのかおめでたい脳みそだ。許されてもいないのにそんな事を良く言えたな」

「違う、私達はあの時の関係に戻したいから——」「それ以外にもつとやる事があるだろうツ!!」

鈴谷の言葉を遮り、突然怒鳴る提督。それと同時に外で雷が落ちた。青い光が窓から溢れ、執務室の中を一時的に照らす。

「償いたい? それで相手が満足するとも思っているのか? 許してくれると思ってるのか? 違うだろ、今お前らがやる事は自分が愚か

「だったと証明する事じゃないのか!!?」

「で、でも……!」

「確かに何度もお前らは謝った。だがお前らを前に被害者達は何て言ってたんだ?」

『うん大丈夫だよ……信じてたから……』

『……だ、大丈夫です。だから早く出ていってください……』

「……っ!」

「許しますの一言でもあったのかあ!? お前らはただ単に被害者達の言葉を都合良く解釈しただけに過ぎない、それに伴って元あった関係を修復させようと償いと称して差別を無くす事で更生した自分を見てもらいたいだけなんだ」

「……だけど」

「だけどじゃない! 差別を無くそうと心掛ける事は俺も少しだけ良いと認めよう。だがそれを実現した所で本当にお前らの関係が戻ると思ってるのか?」

「……それは」

二人とも俯いてしまう。確かに現状では関係は全く回復しておらず、気を遣われるままだ。まだ一度も繊密に話し合った事は無い。

「三文字しか言えない身体になったか偽善者共、だったらやる事は一つだろう!! 見返すんだ! 差別した奴らの前で自分は更生したんだと存在を示せ!! それ以外に方法は無いんだ!!」

一方的に話し続け、鈴谷に詰め寄る。後ろに引かされ、応接間のソファに座ってしまう。

「今度こそ許されるチャンスは無い。本気で被害者達に謝り、関係を戻したいと思うなら……やりたい事を言え」

「やりたい……事……?」

「そうだ鈴谷、お前が知ってる情報ってのは恐らく前任の事だろう?」

提督は出来ればそうであってほしいと心から願っている。もしそれ以外の情報であれば口を塞がなければならぬ。

「……そうよ、奴が深海棲艦のボスで日本のどこかにいるんでしょ？」
「ご名答、しかもその奴が近々この鎮守府を深海棲艦を使って攻めてくる。それほど時間も残されてるわけじゃない、戦う力があるお前らならどうする？」

ファイティングポーズを取り、内心安心する提督。シャドーボクシングをいきなり始めた。

「……勿論……ぶっ飛ばす……!!」

「加賀は？」

「……やるしかないわね」

「ならば話は早い！ 戦う他ない訳だ、だからお前らには今度の演習に参加させる、そこで勝つんだ。そして自分は強くなった、生まれ変わったと差別した奴らと被害者達の前で証明してみせる!!!」

雨が降りやみ、太陽の光が射し込む。まるで心の闇が晴れたように、太陽が姿を現した。提督は座る鈴谷に手を差し伸べる。

「どうだ、手を組むか？」

差し伸べた手を掴み、立ち上がる鈴谷。そして掴んだ鈴谷を思い切り引つ張り、加賀達の場所へ戻す。鈴谷は驚いた声で加賀に飛びついた。そして再度手を伸ばす。

「加賀、金剛、お前らは？」

無言で加賀は手を握る。

金剛は手を伸ばそうとするも、やめてしまった。

「金剛、お前は妹達に散々屈辱的な事をされた、それでもお前はどこかで信じている。優しく可愛い妹達が戻ってくる事を」

「そうね、馬鹿だよネ……ミーも」

「ああ本当に救いようの無い馬鹿だ、だがお前も戦う他は無い。前任による優遇制度は全て洗脳に過ぎないものだ、逃げた後はコイツらみたいに目を覚ます者と覚まさない者がいる。結局はこの差別なんてのは洗脳による支配なんだ、それを解放させるかどうかによる」

前任は優遇制度と称して艦娘達に洗脳を施した。強い洗脳に脅かされた艦娘達は仲間を激しく侮蔑、差別した。金剛四姉妹もその洗脳にかかり、比叡、榛名、霧島は戦果を出せなかった金剛を今も密かに

虐めている。

「戻りたいか？ もしお前が強くなり、妹達の前で演習に勝利して証明すればアイツらの自尊心はズタズタだ。今まで舐め腐った姉が強くなつて勝つたとなれば悔しがるに違いない、その悔しがる時に自分が如何に愚かを自覚させるのに畳み掛けられる。もしかしたら解放されるかもしれない、どうだ？」

「本当に出来るノ？」

「さあそれはお前次第だ」

金剛も提督の手を握る。これで二人は自らの存在を証明させる為に手を組んだ。金剛はかつての妹達に戻す為、強くなる事を決意し、手を組む事にした。

「さて我々の世界にようこそ、鈴谷、加賀、金剛。お前らはこれから過酷な現実を迎える事になるだろう。それでもお前らには犬死にさせるつもりだ」

「面白い事言うよね提督も、犬死にされるつもりは無いよ。提督だけでも道連れにしてあげる」

「やれるものならやってみろ、その銀河並に無駄に広い脳みそで出来たらなあー!!」

「お邪魔しまーす!!」

執務室に入つて来たのはプリンツと摩耶だ。訓練の報告に来たらしい。金剛と加賀、鈴谷が提督と話しているのを見て、珍しく思っている。

「喜べ摩耶、プリンツ。新たに加わつたよ、哀れな艦娘共だ」

「おーそうですかー！ よろしくお願いしますねー！」

「提督、これ報告書」

摩耶は自分がまとめた報告書とプリンツがまとめた報告書を渡した。それは今度の演習で編成する艦隊にピックアップする艦娘を紙に記したものだ。各艦娘の全データが載せられていた。

「成程ね、だが今度の演習には金剛、加賀、鈴谷を加える。編成を考えないとな」

「分かりましたアドミラル！ あ……」

「どうした?」

「元帥からお電話が来てま——」「それを早く言えエエエ!!!」

20. 空に見放された二匹の龍

「ご、ご要件はなんでしようか元帥殿」

プリンツが持つスマホを使って、元帥と話す提督。また迷惑事を持ち掛けられると不安で気が気ではない。話を合わせて速攻切った方がいいだろう。

『ごめんごめん。いやー実は演習前日に休暇が出来ちゃってねー、どうせなら君の所を拝見したいかなーって思うんだよ』

「お言葉ですが元帥殿、貴方が来ていただくと訓練中の艦娘達が気を遣いすぎて集中出来なくなる可能性がございます。演習が終わった後では難しいでしょうか？」

『んーでもどうせなら休暇中にやった方が効率いいじゃん？』

「そうですね……」

中々苦戦している提督に摩耶達もそわそわしていた。提督の言葉で大体察せる。厄介者とまではいかないものの、海軍一のお偉い人が来るのは艦娘達も気を遣う事がある為にあまり来て欲しくはないのだ。

「はい……それは存じております、はい……はい、分かりました……では」

ようやく電話を切った提督。反応はあまりよろしくないようだ。酷く落ち込んでいる。

「見たら分かるだろう？ 演習前日に元帥が来る事になった」

「はあ……マジか……」

「なあにが、んじゃその日に行くねーだ!! お前は気になった男子とデートの約束をして楽しみにしてる女子高生か! 断固拒否するに決まってるだろ!!」

「でも承諾したよねAdmiral」

「そこが問題だ! 今この鎮守府はマリアナ海溝並に深い闇を抱えている。元帥にそんな所見せてみる、俺どころかお前らだってどうなるか分からねえんだ!!」

ただでさえこの鎮守府は海軍にとってはお荷物状態。例え鎮守府

を失つても傷一つ付かない海軍にいつ見捨てられてもおかしくはないのだ。

「仕方あるまい、鈴谷、加賀、金剛！ 早速で悪いがお前らに頼んでいた差別艦娘リスト、あれを今週の金曜日までまとめて俺に出してこい！ 今火曜日、提出は時間、場所、状況関係無しだ！」

一ヶ月先に見送っていた差別した艦娘のリストの提出期限を急遽変更し、今週の金曜日に出す事となった。演習は来週の火曜日、元帥の訪問が来週の月曜日。それまでに全ての艦娘を把握しなければならぬ。

「今はもう十七時だ、訓練を終了とする。お前らには明日から強制参加してもらおうぞ、勝つ為にな」

「夜戦の場合はどうするつもりなの？」

「勿論やるとも」

提督はやる気満々だ。

演習時は昼戦と夜戦の二回で争われる。第一フェーズに昼戦、第二フェーズに夜戦という仕組みで昼戦に相手艦が全て轟沈判定になれば夜戦は行わない。が、もし相手艦が生き残っていたならば夜戦を続行させる。勿論提督の許可と旗艦の判断が揃わなければ続行は不可能。双方の意見に食い違いが発生した場合は妖精の羅針盤で決められる。川内にとっては事案案件だ。

「今日はお終いだ、各自部屋に行つて身体でも休めてくるといい。明日は厳しくなるからな」

「はい！！」

摩耶達が各自の部屋に戻っていく。夕食の時間までは少し余裕がある。昼寝しても構わないだろう。

「加賀、どうした早く——」「待って」

「何？」

「会つて欲しい艦娘がいるの」

加賀に頼まれ、ある場所へ連れていかれた。そこは空母寮のある部屋。中に入ると部屋の片隅で怯えている艦娘がいた。

「何だあのど〇ぶつの森の家の片隅に置いてあるトーテムポールは」

「トータルポールでは無いわ……飛龍と蒼龍よ」

「いやだって部屋の片隅で掘った穴から出てきた動かないハニワと同じだよ」

「ハニワでも無いわ……飛龍と蒼龍よ」

「んじやダル○ストーブとレト○なでんわ」

「どう○つの森の家具で例えるのはやめて!」

「違うわ……」

二人の会話を聞いていた飛龍が口を開いた。目は虚ろなまま、床を見続けている。

「だらしな○ソファよ……」

「あれ揃えるの面倒だった——」「今はそういう話じゃないでしょう!!」

加賀のツツコミが入る。殴られた提督は頬に手形を残していた。殴られた事が不服なのか頬を膨らませている。

「……この子達の事は知りたくなくても知ってるんでしょ?」

「さーてそれはどうかなー……」

勝手に部屋に上がり、飛龍達に近づく提督。部屋は酷く散らかっていた。畳は掻き筆られボロボロ、箆笥は飛び出て服類が散乱、寝具はまともに寝れない状態だ。

「さて馬鹿共、俺は何日か前にこの鎮守府に配属させた提督だ。以後お見知りおきを」

「……」

「あ、加賀、先に忠告しとくが俺は容赦しないぞ。黙って聞いておけ」「わ、分かったわ……」

「ではでは馬鹿共、多くの仲間を解体した気分はどうだ?」

提督の言葉を聞いて飛龍は激情。すぐさま立ち上がり、提督を押し倒す。馬乗りになり、首を絞めようとした。

「最初の言葉がそれなの……? ふふふぎけないでよ私達がどんな目に遭ったか知らないくせにツ!!!」

艦娘は人間以上の力を要する。人間の首など一捻りだ。だが提督は飛龍の腕を掴み、強制的に離そうと抵抗する。

「まーたそれか！ 新しく配属させた俺が知るはずが無いだろ、馬鹿を越えて大馬鹿だな!!」

「うるさい!! クズがああ——うわっ!!」

提督に頭突きを食らい、馬乗りから解放される。提督は立ち上がり、服の汚れを綺麗に払う。怯んだ飛龍はこちらを睨んでいた。

「つたくどいつもこいつも攻撃的だなあ……元解体執行艦、飛龍、蒼龍。」

解体執行艦。

工廠の奥深くに設置されている解体所。通常、解体執行時は担当された人間が三人でボタンを同時に押しして執行される。しかし、異常に暴れる艦娘が多く、傷つける事があった為に優遇制度を条件に艦娘が艦娘を解体するというまさに悪魔の所業とも言える事をやっていた。その時の解体執行艦に任命されたのが飛龍と蒼龍である。

「さぞかし凄まじい光景だっただろうなあ目の前で仲間が自らの手で解体されるんだから」

「違う……」

「どこが違うんだ、実際に何回も何回も見たんだろ？ 絶望に浸る艦娘達を」

「違う……」

「いや違うわいなね〜」

「違う!!」

「違わねええよ!! 保身の為に仲間を見殺しにしたんだ、どこにもいねええんだよ、全て現実だろうがアアア!!」

否定する飛龍達に暴言で追い詰める。あまりの提督の無鉄砲さに加賀は提督の腕を掴んだ。

「提督、いい加減に……!!」

「だから言っただろ、容赦しないって」

「だけど……!」

「こうでもしなきゃコイツらは顔すら向かない。分かっているなら黙って聞いておけ」

提督の言葉に押し退けられ、黙るしかない加賀。飛龍と蒼龍は蹲うずくま

り、耳を塞いでいた。

「さてお前ら、耳を塞いでいるようだが無駄だぞ、恐らく今も解体した艦娘の悲痛な声が幻聴となって聞こえてるはずだ」

忌まわしき過去が脳裏によぎる。泣き叫ぶ駆逐艦、助けてと嘆く軽巡、死にたくないと懇願する重巡。思い出したくもない過去だ。今でもその声と押さえ付けた腕の感覚が残っている。

「艦娘にとって解体は死を意味していた。艤装は剥ぎ取られ、母体は潰され別の艦娘の糧となる。全く皮肉な話だよなあ。異常に暴れる艦娘を強制的に押さえ付けて執行場所へ連行。扉を固く閉めて、実行ボタンを二人同時に押す。やがて叫び声が聞こえなくなるとそこには——」「やめてやめてやめてやめてやめてやめてよ!!!」

飛龍の連呼で話が遮られる。提督の話についていけず拒否反応を起こした。涙を零し、喚き出す。

「私達だって生きるので精一杯だった……無理な出撃を何度も繰り返し死線を潜って、何故か一方的に差別されて、食べ物はちぎったパンの一欠片……こんな事されて普通でいられる方がおかしいでしょ!!」「だから差別の対象から逃れる為に解体執行艦を請け負ったのか?」「違う! あの時はある任務だって唆されて……もう気付いた時には遅かった……」

久しぶりに前任から任務を課された。だが途中で意識を失い、目を覚ませたと思えばそこは解体所。駆逐艦がもう解体された後だった。絶望した飛龍達は自殺しようとするも憲兵に引き止められる。

そして任務の一連の正体が解体執行艦という最悪な役割と気付き、優遇制度で如何に自分達が生き残れているのかを再確認させられた。解体もしない、蒼龍にも手を出さない、今まで通りの生活を約束する、そう言われた。

生き残る、それが唯一の目標だった。

「もう今じゃ私達はこの鎮守府一の嫌われ者……お前より私達の方が嫌われてるわ……」

提督以上に嫌われていると自負する二人。だから今まで姿を現さずに引きこもっていたのかもしれない。何もせず暗い部屋の中で誰

とも接せず生きていた方が楽だったのだろう。

「……なあ飛龍、蒼龍。何故お前らが解体執行艦として任命されたか知ってるか？」

「え……？」

「大本営で言ってたぞ、元気でポジティブなアイツらがウザいから絶望に落として叩き潰す、ってな」

提督がボイスレコーダーを取り出し、年月日を探している。

それは提督が大本営にて階級が大佐の時の話。当時呉鎮守府の提督達による戦果報告書を提出しに大本営へ訪問した時の事。偶然前任とすれ違った際に聞こえた会話の内容だった。提督は以前から脅迫の材料にする為に何回も盗聴や録画などしている。ボイスレコーダーもその一部。提督が用意したボイスレコーダーから聞こえた。

「えーっと、いつだっけ……ああこの時だ、ほい」

『充分仕事してもらった、仲間殺してるのに平気でやってるから馬鹿なんだよな、蒼龍だって何回もやられてるのに飛龍は気付きもしない。今度美味しい飯でも食わせてやろうよ、その後に解体して絶望させてやる』

「……とまで言っていた。つまりお前らは最初から前任に弄ばれてたんだよ、そして飽きたら解体される所だった」

「ッ……」

加賀もあまりの非道さに声が出なかった。前任は飛龍達を暇を潰す為の道具でしかなかったのだ。心の底から湧き上がる憎悪に歯を食いしばった。

「更にはこの解体所、かなり古い物だな。少なくともお前らが解体した頃には設備されているはずだったと推測する」

「どういう……？」

「大本営に勤務する人権派の少将が新たな解体方法を開発してな？何でも装備だけ外し、身体の中にある核を取り除けば人間として生まれ変わる事が分かったんだ。何て時代遅れの大馬鹿共なんだろう、これだから高齢者は老人ホームで他の老害共と一緒にダンスでもしながらくたばってればいいものを。それを海軍は一斉に支持して義務

つけられているはずなんだが……ここは隠蔽してたみたいだな」

ボロボロの畳を巻る飛龍。手が震え、言葉に表せない怒りが溢れ出した。自分を殺してまで仲間を解体したのに、代わりに自分の身体を散々汚した癖に、蒼龍には手を出さないうって約束したのに。この仕打ちにはあまりにも酷い。

「……どこまで私達を黽れば気が済むのよ!!」

畳を何度も何度も殴り、口を震わせる。怒りと悲しみが混ざり、飛龍はその場で悶えた。

復讐したい、自分達が苦しんだ分まで苦痛を味あわせたい。そう思った。

「復讐したいって思った?」

「……!?!」

「その顔は何で分かったのって顔だな。そうだろ?」

二人は無言で頷く。であれば話は早い。

提督は飛龍と蒼龍を部屋から無理矢理連れ出し、執務室へ向かった。そして机の引き出しから紫色のファイルを取り出す。文面は勿論前任の事である。

「もしここで俺と手を組めば、復讐する為に最大限助力しよう。どうだ?」

「……でも私達皆に嫌われてる」

「なあにが嫌われてるだ! 俺なんて着任した同時に砲撃食らってんだぞ?」

「そうね、そうだったわ」

あの場になかった加賀でもその事は把握していたらしい。結局一緒にいた摩耶のおかげで作戦は失敗に終わったが。

「飛龍、蒼龍。嫌われ者なら嫌われ者らしく堂々としていればいい。開き直ったと思われるかもしれないが、所詮人のイメージなんてその人のやり方次第でコロコロ変わるもんなのさ。加賀みたいにな」

「私で例えるのはやめて」

「だから飛龍、蒼龍、俺達は嫌われ者だ。嫌われ者同士仲良くしていいぞ……よく生き延びたな、ご苦労さまだ」

提督は優しく飛龍と蒼龍の頭をそつと撫でた。嫌われ者同士、その言葉で少しだけ心に余裕が出来た。自分達に仲間がいる。それだけで安心出来た。自然と涙が零れる、拭いても拭いても止まらない。

「お前らがやられた事は俺も痛い程分かる。正直、同情する程な」

提督だつてこんな苦しみは幾度も経験している。今は言えないが、凄惨な過去だ。飛龍と蒼龍の過去に自分と照らし合わせると考えるものがある。

「その分、強くなれ！ 強くあれ!! 強くなったお前らの未来はきつと輝いてるぞ!!」

「はい……」

二人とも提督の手を握る。それは前任の復讐の為、と言っても本当は提督についていきたい。それだけだった。

勿論復讐をする事は変わらない、前任がとても憎くて仕方ない程に。だが飛龍と蒼龍にとって初めて仲間のような存在が見つかったのは何より嬉しかったのだ。

「私達、頑張ります！ もう……挫けません!!」

「おーおーそれはチョロくて頼もしい。では夕食の時間だ、そろそろ行こうか」

「はいー」

加賀は飛龍と蒼龍の姿を見て安心した。久しぶりに笑顔を見たような気がする。つくづく冷たい事を言ってしまう自分が恥ずかしく感じた。提督に頼った方がこの鎮守府は本当に良くなるかもしれない。

「必ず……」

そして——自分も飛龍達に存在を証明しなければならぬ。この先どんな事が起こるか予測は出来ないが、せめて許されるまで足掻き続けたい。

21. 嫌われ者は人気で忙しい

途中で摩耶と合流し、飛龍達は経緯を説明した。自分達も手を組んで仲間になった事を嬉しそうに話している。

「提督、頭撫でてくれたんだよねー!」

「そうか、それは良かったな……」

恐らく提督が飛龍と蒼龍に同調したのは初めてだろう。それも多分あの事件の所為でもある。提督はそれと自分を重ねて、自ら協力したはずだ。

「もう……嫌だもんな……」

「……」

「何かあったの?」

「えっ、いやいや何も問題は無いよ」

そうこう話している内に食堂へ着いた提督御一行。依然として多くの艦娘達が夕食を口に行っている。だが飛龍と蒼龍が入って来た途端、一気に静まり返った。ジロジロとこちらを物珍しそうに見つめ、ひそひそ話が聞こえる。

「気にするな、俺達は嫌われ者だ」

「はい……」

確かに何故提督と飛龍、蒼龍が一緒に居るのか疑問に思うはずだ。飛龍と蒼龍曰く、自分達は仲間を売った裏切り者らしく、嫌う艦娘が殆どだそうだ。

更には面倒臭い提督と共にいる。自分達にとって不都合過ぎる状況にイライラする者もいた。手を組んでいる艦娘でさえ驚愕している。

「鳳翔、今日は何だ?」

「きよ、今日はハヤシライスです……っ?」

「ほうそりゃいいねえ……ん? どうした?」

ただ呆然としている鳳翔。余程珍しい事なのか呆気に取られている。

「あ、いや……何でもありません」

「そか」

提督は二階のテーブル席を確保し、先に食べる。飛龍や蒼龍は恐る恐るお盆を持って提督の元へ向かった。摩耶や加賀も同じく向かう。一連の行動を黙って見られようが提督は気にしない。黙ってただ食べている。

「俺らを見てる暇があるならさっさと黙って食った方がいいぞーポンコツ兵器共、兵器に食べられるハヤシライスが可哀想だ」

提督の一言で止まっていた時間が動き出したかの様に再度食堂は賑わいを取り戻した。

「ごめんなさい……提督」

「気にするな、これが嫌われ者の第一歩だ」

「は、はいー!」

如何に嫌われ者を通していくかを伝授する提督。はつきりこれが良い事とは思えないが、飛龍と蒼龍の為だ。暖かい目で見るといい。

「……クソ提督」

「アア何だった加賀ア!!」

「思いつ切り気にしてんじゃない!!」

提督達の方も賑わいを見せる。それに釣られるかの様に他の艦娘達が提督達の元へ向かってきた。

「何やってるのー、提督ー?」

「なーに面白そうな話してるのかなあ?提督さん」

「アドミラルですから」

「暁達も参戦するわ!!」

「参戦しなくて結構!! お前らは下で惨めに食ってやがれポンコツ兵器共!!」

瑞鶴やプリンツ、第六駆逐隊が途中まで食べたハヤシライスをお盆ごと持ってきた。隣のテーブル席に座り、提督の反応を面白がっている。天龍や木曾、青葉達もいつの間にか二階で食べていた。

「飛龍さんと蒼龍さん……お元気ですか? ま、また司令官と共に頑張りますよー!」

「う、うん……そうだね」

「頑張ろうね……」

「はいー」

朝潮自身は笑顔で返事する。他の妹達は複雑な気持ちでこちらを見ていた。少し気まずい雰囲気になる飛龍と蒼龍。そこに瑞鶴が隣の席に座り、声をかけた。

「私も他人の事は言えないから何とも言えないんですけど、同じ嫌われ者同士頑張りましょう?」

「うん……ありがとう、瑞鶴」

「……まったくチョロくて哀れな生ぬるい連中だ、折角のハヤシライスが甘くなる」

「だったらコーヒーかけてあげようか提督」

「それは勘弁だ摩耶……まあこの二人が嬉しいのなら放っておこう。どうやら嫌われているのは馬鹿トカゲ二人の勘違い、かもな」

自然と笑顔になる飛龍と蒼龍。

皆と一緒に食べるのは久しぶりだ。今まで食さなかった料理が特別美味しく感じる。涙が止まらなくて仕方なかった。

「っていうか何でお前らここまで来た! 暑苦しいだろうがやめろ!!」

「そんなツンツンで退く私達じゃないよ?」

「ハア!? 気持ち悪いからやめろ!! お前らのそのヘラヘラしたクソ生意気な顔もそこまでだぞ、明日の訓練厳しめにしてやるからな!!」

後で後悔するがいい! 如何に自分が愚かだったか一瞬で解らせてやる!! 覚えておけ!!」

「いいから黙って食え!!」

摩耶に押さえつけられ、ブツブツと不満を吐く提督。やけくそに美味しいと口にしながらハヤシライスを食べている。提督の頬にはくつきりと手形が残っていた。

「何ブツブツ言ってるんだか……」

「やっぱ提督さん面白い」

「何が面白いだヒステリーツインテエ! 人を見て面白いとは失礼に

も程があるだろ!!」

「人をスプーンで指すやつが何言ってるのよ!!」

「うるさい!! 少なくともあの演習時のお前の方がよっぽど哀れ過ぎ
てお笑いだったぞー! 艦娘辞めてリアクション芸人になるといい、少
しは稼げるはずだ!!」

「提督さんこそ、軍人やめて批評家になった方が良いと思うけどなー
その減らず口で誰でも勝てそうだし天職じゃない?」

「そう思ってるならお前の頭はご飯粒一粒の小ささらしい、知能が無
すぎだもつと食べて脳みそを鍛えるよりその色気の無い貧弱な身
体を先に鍛えるといい、最も胸には行かないようだがなあああ!!」

「こんのツ……!!」

瑞鶴がテーブルを叩き、スプーンを握り潰す。口喧嘩に抗ってみた
が先にイライラが勝ってしまった様だ。その姿を見て提督はニヤニ
ヤしながらスプーンをグルグル回して煽っている。

「人気があると思ったら大間違いだ!! 自惚れも大概にしろ、夢見過
ぎだ!!」

「あたしは?」

「摩耶は別だ」

その後摩耶以外の誰もが提督を殴ったのは言うまでもない。

「なあ摩耶、前が見えない」

「……自業自得だ、受け止めろ」

殴られた痕だらけで顔は腫れており、目が全く見えていない。

「……何よアイツ」

「殺しておく必要がありますかね」

「やめなさい霧島、まだ生かしておく事よ」

「でもアイツは必ずやって来そうです。どうしましょう」

「取り敢えずは従順よ、従ったフリして親しくなった頃に一気に叩き
落とします。川内、頼むわ」

「……分かったよ」

川内は密かに微笑む。自分が提督の艦娘とさえ知らずに。面白い

艦娘達だ。

「ほらこんな辛気臭い所居たつてしようがないわ……オイ」

食堂に出た金剛の頭を無理矢理掴む榛名。まるで物の様に扱い、引き摺っていく。妹とは思えない行動だ、周辺の艦娘達は止めようともしない。

「や、やめっ……」

「たらたらしないで行きましようクズお姉様ー、ゴミ箱までレッツゴーですよー」

「今日はやめっ……テ!?!」

「少しぐらい黙って来てくださいよ」

首を絞め、あからさまに敵意を見せる榛名。最初の言動とは思えない口調だ。

「蹴ったり踏んだりでイライラしてるんです、サンドバッグになつてもらいますねクズお姉様」

「提督みたいに今度は何しますか？ 爪の間に釘入れますか？ 足の指の骨を一本ずつ折りますか？」

「そ、それだけはっ……!」

「大好きですね霧島！ 良いでしょう比叡お姉様、何か面白いもの持ってきていただけますか？」

「れ、冷酷だなあ……か、帰ってからや、やるね……」

「帰りましょう、では」

金剛四姉妹は物騒な会話で戦艦寮へ向かった。比叡、榛名、霧島は金剛に対してとてつもない憎悪と侮蔑を持っている。何かしら虐めなければ気が済まないのだ。

「やめて榛名っ——」

やがて妹達による暴行を終え、別の部屋で身体を休める金剛。結局爪の間に釘は入れられ、足の甲を何度も木槌で殴られた。これが前任の時まで続いている。

提督が来る前は耐える事でいつか目を覚ますと信じていた、だがその貫いていた希望も壊れそうだった。

「……もう……嫌だヨ……」

横になり、泣き叫ぶ金剛。

隣で楽しそうに会話する妹達の声を聞いて泣いた。何が正解で不正解か、どうすればよかったのか。死さえ考えた、でも可愛い妹達がいつか帰ってくるかと思うとナイフを持つ手は止まる。どうしても信じたかった。

「助けて……提督——」「ハイイ!! 助けてという声が聞こえたので勝手にドアをぶち破って来ました提督です、何かご用件が?」

突然現れた提督に戸惑う金剛。勝手に部屋の中に入り、摩耶と鈴谷と加賀に手当てさせる。

「え……どう、ちよつと……」

「ほら静かにして、医務室に行くよ」

2.2. 汚れた鉱石は磨くと輝きを見せる

——医務室

「多分これで治ると思う……」

摩耶達によって正式な治療が施され、ベッドに寝込む金剛。

「どうなったらお前の妹達は新たに発見された島の野蛮な原住民の処刑みたいな事するんだ？」

「これが毎日……何でそこまで……」

金剛が受けていた拷問のような傷痕は見ただけで想像を絶する物だった。見るだけでも背筋が凍る程だ。

「……だっ……て……信じたくて……」

「お前の不屈の信用も底無し沼の様だな金剛。さすがダイヤモンドと名付けられただけある」

「どう……すれば良かった、タノ？ 私は……どうす、れば……」

「前任を殺せば良い、それだけだ。だが仲間思いで妹思いのお前だあそんな事など出来るはずがないだろう信じ続けた結果がその始末だ」

「提督ー、これ頼まれたもの」

「おう川内、休暇は三日間だ」

「よっしやー」

提督が川内に依頼した内容。それは差別してる側が企んでいる事だ。読み上げると恐ろしい内容が書いてある。

「おーおー、物騒な事を考えるものだねえ考える暇があるだけ羨ましいよ」

「従順したフリをしながら、俺の行動パターンを予測して計画、毒殺は失敗。訓練時にミスと見せかけて朝潮に砲撃、これも失敗。俺が寝てる間に刃物で殺そうとするも摩耶によって失敗……マジかよ。天龍か木曾の剣を奪ってすれ違いざまに殺害、これも失敗。演習時に金剛が砲撃、俺を粉々にする、これがあるな」

「めちやくちや殺されかけてるじゃん提督」

「バ、バカめあんな分かりやすい罠があるか、わざわざ擬似釣り餌に引っ掛かる深海棲艦みたいな阿保とは違う」

「え、いたの？」

「いやそれより知らないのあつ——」「見事にな」

話を提督に遮られ、嘘のような話に鈴谷は引いている。提督は資料を摩耶に渡し、金剛の元へ近づいた。

「容赦なく言うが金剛、お前は全ての艦娘の事情を知っている大人しく吐いてもらおうか」

「……知らな——」「いいや知っている。何故ならお前は差別された鉄屑共から全てにおいて虐められていたからだ違うか？」

正解だ。

でも簡単には言えない。

「だがどこかで戻ってくる。そう馬鹿みたいに信じて耐え抜いた、だが結局は誰かに助けを求める始末だあもう抑えきれない、どうすればいい？ 何が悪かった？ 違う違う金剛、お前が信じてたのは妹達じゃない……■■だ」

「……」

「■■はこの鎮守府のリーダー格。大人しく従っていればいつしか戻ってくると言われてお前はまんまと信じこんだ。だがそれは真つ赤な嘘だ、結局は差別意識を継続させる為の道具でしかなかった、アイツらは優位だと思いつけたいからね」

川内が集めた資料に金剛の扱いが記されていた。これは金剛本人にも見せられない、残虐の限りを尽くした資料。如何に前任が恐ろしい人物か良く分かる。

「それにお前がいくら信じようとアイツらは帰ってこない、必ずな」

「そんな……」

「必ずだ。絶対に帰ってこない、無理だ」

「どう……して、も……？」

「どうしてもだ」

「待つ……ても？」

「犬死にだ」

「で、でも……」

「断言しよう！ 絶対に来ない！」

提督は見ていた。

比叡達が洗脳されているからではなく本当に金剛を嫌っている事を。あの目は洗脳と併用で着任したと同時に姉に対して何かしら悪い感情が芽生えていたのだろう。例え洗脳が解けてもその感情は残ったままだ。

「あんなクソみたいな鉄屑共の事など諦めるんだな!! お前が持つていたナノメートル程の希望も全て報われないんだあ、もう見返す他はないぞ、さつさと吐くんだ差別した鉄屑達の全貌を! そしてその怪我を高速修復剤で治すがいい」

「提督……裏もあるよ」

「裏?」

紙を裏返し、裏の記述を目にする提督。驚くべき内容に覗いた鈴谷達も思わず声が漏れる。

「……面白い事を考えるものだ背筋が凍る程ね」

裏に書かれたのは金剛とその他の艦娘に自爆装置をつけた事。

恐らくこれは前任が前もって装着させたものだろう。手を組んだ艦娘を使つて提督と接触、そして戦闘中に自爆で道連れする手段だ。提督もこの事は今初めて知った。

「自爆装置を装着した艦娘、朝潮、島風、白露、時雨、夕立、不知火、響、電、球磨、多磨、木曾、天龍、古鷹、加古、青葉、阿賀野、五十鈴、最上、熊野、鈴谷、足柄、羽黒、摩耶、金剛、比叡、霧島、長門、陸奥、日向、鳳翔、赤城、加賀、飛龍、蒼龍、雲龍、大鳳。いずれもこれは前任に判断が委ねられる。自爆スイッチは各艦娘ごとにスイッチが設置、今は■■■が所持している……か……川内よくまとめた、後で褒美をやる」

「やったー……って喜べる状況じゃないか……」

「私にも……」

自身も知らない事実鈴谷は腰が抜ける。いつでも死神の鎌が首にかけられていると思うと背筋が凍った。今、ここで死んでもおかしくはない状態だ。

だが少し腑に落ちない。この鎮守府に存在しない艦娘まで明記さ

れている。しかも殆どが轟沈、又は解体済みだ。自爆した後でも明記されているのか、それとも――、

「嫌だ……死にたくない……」

「おいおい鈴谷、今死ぬってわけじゃねえんだ。だが……鈴谷は仕方ないとして何でアタシに……?」

提督は黙ってボールペンを手で回し、医療室の奥まで歩く。そしてボールペンを真つ二つに破壊し、怒りを顕にした。

「提督……!」

「遠回しに脅迫とはやってくれるなあ……**■**。これだけ腹が立つのは久しぶりだよ鈴谷、お前らがどうなるうが構わないが摩耶に手を出すとはな……」

「いつ……やったん――」「いつやったかなんてどうでもいい!! 奴らがそこまで下種な手口を使うんだあ、追い込まれてるって事だ。だったらこちらだって奴らより引けを取ら汚い手なんて無数に知っている上に何回もやっている……川内、自爆装置とこの二つの事について調べてこい。あと青葉と協力してこれを作れ、いいな?」

「んまあ仕方ないね、報酬は倍だよ」

川内が資料を片手に闇へと消える。

提督は落ち着いているが、これはかなりの緊急事態だ。

「頼む。摩耶、鈴谷、金剛、お前らはこのまま普通の生活をしている。こちらも知らないフリをするんだ」

「でも突然誰かが提督と触れて爆発したら……」

「その点は問題無い。奴らは何故まだ自爆させないか知ってるか?」

「……そういえば従順したフリって」

「そうだ、恐らく奴らは俺を一番残酷且つ残忍に、最低で凄惨なやり口で惨殺するつもりだ。であれば考える方法は二つある、あまりお前らにはショッキングだから言わないでおこう……さあて!! 騙し騙さの泥沼試合だあどちらが本性を手玉に取るか、史上最低最悪のプレイボールと行こうじゃないかあ、なりふり構わず何がなんでもその極楽絶頂の楽園から俺らが作った絶望という名の軋轢地獄の淵に叩き落とすぞ!!!」

訓練が宣言通り、より厳しくなる。鈴谷、加賀は提督自身に教えられ、金剛は休養中だ。用意された体操着に着替えた鈴谷と加賀は汗だくになっている。

「提督……休んじやダメ？」

「何言ってるんだ始めてからまだ一時間も経ってねえぞポンコツ兵器共」

「えー……休んでいる金剛が羨ましく思えるよ……」

「何言ってるのちゃんとやるのよ……」

「そうだ加賀の言う通りちゃんとやれ、さもなくばその滝のような汗を集めて風呂の時のシャワーにしてやろうかあ？」

「気持ち悪い事言うのはやめて、悍ましいから」

鈴谷は昨日の事を思い出していた。度重なる暗殺を回避していた提督、自分達に爆弾がある事、そして――、

「……にしてもまさか送り込んだ艦娘が川内だなんて気づかなかったな」

「川内はここに配属される前は俺が育てた艦娘だからな。あ、言つとくが内緒だぞこれ」

そんな事は分かっている。バレたらそれこそ自分達もタダじゃすまない。

「鈴谷、お前は昼戦夜戦どちらもカバー出来る装備にした。この後、プリンツの元でしごかれるがいい」

「ん？ オーケー……」

「加賀、お前は制空権確保時にそれから起こす行動について教える。装備はそのままで大丈夫だろう」

「りよ、了解したわ……」

「提督ー！」

プリンツが提督を呼び掛けた。後ろには回復した金剛と青葉が居る。何やら急用のようだ。

「何だ」

「……これ」

「頼まれたもの、作りました！」

青葉のは川内と協力してまとめたこの鎮守府の艦娘が犯した失態の資料。

金剛が渡したのは艦娘の差別リスト。本来なら金曜日までに提出する筈が、依頼した二日後に金剛はまとめあげたのだ。綺麗に名前がまとめられている。

「これは本当か？」

「本当です！」

「間違いないんだな？」

「一番虐められてきたのは私だヨ？ もう分かるでシヨ？」

金剛の目は少しばかり輝いて見えた。

まるで綺麗に施されたダイヤモンドのように。

「……少しは輝きを見せたな」

資料を手に取り、早歩きでどこかへ向かう提督。向かった先は摩耶がいる司令本部内中庭。今は夕立と手合わせしている。

「おう、どうしたていと——」「少し来い」

摩耶の手を握り、引っ張り出す提督。訓練は一時中断し、昼休みとなった。そこで提督と摩耶は話をする為にある艦娘達を狙っていく。廊下で加古が自部屋に戻ろうとしていた。

「やあやあ加古君、調子は如何かな？」

「何だお前、話す事なんて無エよ」

「暁と雷を解体寸前まで追い込んだのに？」

「知るかそん——」「ここだけの話、君の過去は俺と摩耶しか知らない、周りに知られたらたまったもんじゃないだろう？ それに君が俺のインスタントラーメンに入れるお湯に毒を入れて殺そうとした件、実は大本営にバレてしまったんだ。今にも憲兵隊が動き出してる、このままだと君は殺害未遂容疑でこの後の人生は保証出来ない。けど自爆装置について教えてもらえれば過去については秘密にするし、この事は帳消しに出来る。君に取り付けられた自爆装置も解除出来る

んだ、更には君だけの給料が倍以上底上げされる、この事はまだ誰にも教えていない是非考えてくれたまえ、じゃ!!」

言い捨てるように加古を置いていく提督と摩耶。

次に向かったのは――、

「副砲の調子が悪いのかな？ 那智」

「黙れどっかに行つてゐるんだな」

「へえじゃあ君が隠して治療している羽黒がどうなつても構わないと？」

「脅しは通用しな――」「ここだけの話、その羽黒の様態なら大本営が持つ最新の医療器具で完全回復出来る。だが君には今俺の神聖な睡眠中に夜這いで刺し殺そうとした件が大本営にバレてしまった。憲兵隊が今でも動き出してる、君の殺害未遂容疑でこの後の人生は保証出来ない、羽黒に会う事も出来ない、それは嫌だろ？ 今これから俺の殺害計画を教えて貰えれば殺害未遂の件は帳消し出来るし、羽黒にもすぐ治療が出来る。更には給料も君だけは底上げだ、まだ誰にも教えていない、判断は君だ是非考えてくれたまえ、じゃ!!」

「流石は頼もしい相棒だ、それに……」

提督は摩耶の背中に取り付けられた盗聴器を摘み、口元に寄せる。恐らくこの盗聴器で会話を盗んでいたのだろう。どこで入手したのかわからないが悪質な手だ。廊下ですれ違いざまに取り付けられた可能性がある。

「フヒヒ……ッスウ……」

「ん？」

「アバズレ!!!」

盗聴器に向かつて大声で叫ぶ提督。摩耶でも耳を抑える程うるさく聞こえたその声は鎮守府内に響き渡った。それと同時に誰かの悲鳴が戦艦寮で聞こえた。

「はいービンゴー」

居場所を突き止め、盗聴器を握り潰す提督。急いで戦艦寮へ向かい、声の聞こえた部屋へ突入する。部屋には横に倒れた艦娘が白目を向いて失神していた。盗聴機器の類が置かれている。

「あらあらどうされましたか長門君、白目を向いて失神とは艦娘の風上にも置けないぞー」

「まさか長門とはねえ……」

ヘッドホンで聞いていたのか耳が壊れたのだろう。馬鹿でかい音量で騒がれたら誰でも驚く。

「……よし!!」

提督と摩耶は目を合わせて、失神した長門を拘束。長門を持ち帰り、ある場所へ連れていった。

「アタシの部屋でいいのか？ この部屋には鳥海もいるぞ？」

「構わない。全て事情を説明した後、世話はお前らがしてくれ、どんな事をしても構わない、川内でも青葉でも連れて情報を吐き出させろ、ここから一切出すな、外の状況など全てシャットダウンだ。分かったな？」

「ああ分かった、盗聴機器はどうする？」

「青葉に監視室まで回収させた。盗聴器と聞いて目を輝かせていたよ」

『うわー！　これ凄いですね！！　何でも聞き放題ですよ！！　あー！　テ
ンションあがるううう！！』

「……んまあこんなところだ」

「ああ……そう……」

「さて……訓練の続きだ戻りたまえ」

摩耶の部屋に長門を置いていき、訓練の続きへ戻った。

——夜

「……私は……？」

「あたしの部屋だよ」

長門が目を覚まし、起き上がる。しかし手足を拘束され、身動きが取れない。目の前には摩耶と着任したばかりの鳥海がこちらを見ていた。

「おはよう長門」

「貴様ら……！　何の真似を……！」

「貴方が摩耶と提督の会話を盗み聞きしたと聞いて拘束したようです。信じたくはありませんが……信じなければなりません」

鳥海は蔑んだ目で話した。

この鎮守府が如何に想像以上の黒い闇で包まれているかを知ってしまったのだ。艦娘達に失望し、激しく侮蔑している。

「……これからどうするつもりだ」

「提督の気が済むまでアタシ達の部屋にいてもらう。大丈夫だ、日に食事は三回、トイレはあたしか鳥海に頼んでくれ」

「まるで営倉だな……これが大本営にバレれば終わるぞ」

「それ以上の事をしているお前達が言える事か？」

呆れた顔で目線を逸らす長門。どうやら凶星のようだ。

「話す時はこちらの目を見て話そうか長門、あたし達の会話を聞いて情報を盗んでいたんだ。アタシもお前が知り得ている情報を洗いざらい吐いてもらう」

「ことわ——」「断るは無し、イエスかはいだ。答えなければ大事な妹

がどうなるかなんて言わなくても分かるだろう?」

資料には隠された場所で陸奥が寝込んでいる写真があった。同じく羽黒もその場所にいる。

「外道が……」

「自分の事を言つて何よりだよ」

「脅すつもりか?」

「勿論、現にお前達も脅してきただろ?」

「何の事だか……」

「私の自爆装置は陸奥に取り付けた」

「ッ!」

勿論嘘だがこの反応は自爆装置について知っているようだ。提督からは洗いざらい情報を吐き出せと言われていた。なら自分も容赦はしない。

「ほらな? 言わなくても分かるだろ? んじゃアタシから質問だ、

あの盗聴器いつから流してた?」

「……飛龍と蒼龍が食堂に来た日からだ」

「どこで手に入れた?」

「■■■■……から」

やはりリーダー格が手を回している。予想はしていたがあまり好ましくない。何せ金剛を助けた時の会話まで聞いている可能性があるからだ。だが提督はそれを踏まえてわざと情報を盗ませた。どこまで考えているか分からないが、恐らく誰かを誘き出す為だろう。

「あの会話は誰かに話した?」

「……まだ、だ」

長門をはあの部屋に閉じこもって重点的に盗聴していたという。それ故にあの部屋からは一度も出ていないらしい。嘘の可能性も高い、気を張らねばならない。考えている途中、長門が嫌味とばかりボソッと口を開いた。

「……提督は今までもどこかで暴行を受けている」

「……だろうな」

「貴様の知らない所で提督の部屋に押し入り、暴行の限りを尽くして

いる。正直清々しい気分だ」

「……そうか、分かった」

摩耶は資料を片付け、長門を再度気絶させる。動けないように柱に括りつけた。そのまま寝ようとベッドに横たわる。

「ちよ、摩耶!? 助けにいかないの!?!」

「……アタシも時たま提督の言動にイラついて殴る時はある。他人の事は言えない、提督が許してるから良いだなんて正当化した言い訳はしたくない。それにアタシは初めてここに来た時は傷つけても構わないって言ってる、殺されなきゃどうだっていい、それに——」

「それに……?」

「——提督は強いんだ」

「……摩耶……」

司令本部内廊下で歩く音が聞こえた。医務室に向かっているのは提督だ。摩耶の尋問と同時刻、得体の知れない艦娘に暴行を受けていた。身体中に傷という傷が至る所にある。

「つたく……アイツらも懲りないもんだ。逃げて正解だった……」

「提督……庇ってくれて……ありがとうネ」

「本来ならお前が庇うはずだったんだけどなー」

金剛の傷よりも提督は倍以上の暴行を受けている。普通の人間であれば身体が崩れたっておかしくはない。だが提督の傷は徐々に治りかけていた。

「傷が……」

「お前らポンコツ兵器共より有能だからな、高速修復剤を使わなくても傷が癒えるのも早い……ってお前、重い!!」

金剛を背負う提督は医務室へ向かう。医務室のベッドに金剛を投げ出し、消毒液やガーゼなど渡した。

「お前は眠り姫にでもなっている、俺にはやる事がある。青葉、盗聴機器の調子はどうだ?」

「いつでも使えますー!」

「よし、お前に監視室を使う許可を与える。何か怪しい事があった次第、俺に報告しろ」

「了解です！」

「さて■■■、次の手はどうする？ ドンと来い、お前らの舐め腐った
脳みそをカニ味噌スープと混ぜて燃料と一緒にぶち込んでやる!!
やられたらやり返す、それが俺の本業だ!! 覚悟しろ!!」

24. 白髪長髪のセツト時間は約一時間

『嫌だ、やめてまだ私はッ!!』

『違います提督!そんな事、嫌だ……』

『死にたくない!嫌だ、や待って、蒼龍さん!こんなっ……!!』

『まだ戦えます、身体も使えますから……司令官! あの中は嫌、死にたくない!! 嫌だ……』

『……貴様ら全員呪ってやる、覚えてろオオオオオ——』

『やめて!!』

朝七時。窓から太陽の光が漏れている。飛龍は悪夢から覚め、起き上がった。身体中汗だらけである。

「……はあ……」

未だにあの悪夢から離れない。少し意識が変わったとはいえ逃れる事はないだろう。どこかで自分に報いが来る、例えそれが来たとしても甘んじて受け入れよう、そう思っている。提督に言われたように自分達は嫌われ者らしく生きていく。だって提督がいるから。

「おはよー提督ー!」

「朝から馬鹿でかい声で挨拶するとはお前の喉はメガホンで出来ているのか飛龍」

「提督も人の事は言えないけどなー」

「バカめ、あれはお前が寝惚けてたから眠気覚ましに出したただけだ、むしろありがたく思っほしいね」

「はいはいありがとうございました。それで提督、この件んですけど……」

「何だ」

何故か白いマスクをした摩耶が渡してきたのは資材の謎の紛失。ここ数日、高速修復材や医療品が一つずつ消えていたのだ。誰かが秘密裏に使ったのだろうか、どちらにせよ調べなければならぬ。

「まあ別に高速修復材が一つ無くなった所で問題は無いけどなあ」

「念の為にあたしが調べておくよ」

「頼むわ」

三人が話してる中、ある艦娘が執務室に入ってきた。その艦娘の名は加古、ある紙を持ってきたようだ。何故か執務室の中が少し臭う。「どうしたんだく加古君く」

「……本当に秘密なんだな？」

「俺は約束は守ろう、んでその書類は？」

無言で提督の机の上に置く。それは自爆装置についての資料、トックシュークレットモノだ。事細かに記されている。

「すまないねく……摩耶、解析を頼む」

「分かった」

「解析……って、嘘じゃないぞその資料は!!」

「嘘か本当かは俺が判断する事だ、わざわざ喚くんじやない嘘だと思われるぞ」

摩耶は緑色のクリアファイルからある資料を取り出し、加古が持ってきた資料と見比べた。丁寧に一文字ずつ確認していく。

「……提督、嘘の資料だ」

「はいダウトだ加古、お前は俺らを騙そうとした。どちらが本物の資料かは分かんが騙そうした事に変わりはない」

「な、何故それを……!」

前から川内にコピーしてもらっている。とは言えないがこれで差別している艦娘の手口が分かった。わざと情報を盗ませて正解のようだ。

「お前はここに来る前から■■■に嘘の資料を手渡された。盗聴でアイツも俺の策略に気付いているはずだからな。当然嘘の情報を与える、だがこちらはもう手に入ってるんだ、わざわざご苦労だったな。交渉は決裂だ」

「んなツ……話が違うぞー!」

「何が違うんだお前は嘘の資料を持ってきた、言いふらさない事や憲兵隊が来る以前にお前が自らの助け舟である俺の話を裏切ったんだ、交渉決裂に決まってるだろ、ほらさっさと出ていけ。青葉に伝えなければ」

「ま、待ってくれそんな事したら——」「そんな事？ お前らにとつ

てはそんな事なのかい？ お前が暁と雷を営倉に送らせた事がそんな事で済むのか、それともそちら側では褒められる事なのか？ そんないきなり危機感を感じられてはこちらが困る、早く出ていけ」
「……そうなんだね加古さん」

後ろから声が聞こえた。振り向くと第六駆逐隊が敵を見るような目でこちらを睨んでいる。先程の話を聞いていたようだ。

「……黙れ、使えないガキ共が悪いんだ!! 一々喚くな目障りなんだよこのガキ!!」

暁と雷を殴り飛ばし、言葉を吐き捨てる。そのまま執務室を去る加古。差別した現場を見て、提督はニヤニヤしていた。

「本性を出させてくれて何よりだよ第六駆逐隊」

「いたた……こんなものよ、いつも……」

「青葉、見てたな？」

『はい見てました！ 加古さんは今部屋に向かっています！』

「記録しとけよ」

提督の許可を貰い、加古の真実を書き記す青葉。久しぶりに趣味に没頭出来るのか張り切っている。舌を出してメモを書き殴った。

「どういう事だお前」

廊下から入ってきたのは矢矧を始めた川内、利根、阿賀野、那智、比叡、榛名、霧島、龍驤、祥鳳、葛城と戦力で考えれば豪華なメンバーだ。

しかもこのメンバーは全員差別している側の艦娘である。飛龍も思わず提督の背中に隠れた。

「私達以外にも誑かして約束を破るなんてやはり人間はクズしかないようだ」

「……」

「何が憲兵隊だ何が給料アップだ、これら全て嘘だろう嵌めようとしやがって」

「それで？」

「貴様はいるだけで不快だから消えてくれ」

「へえーじゃあどうして俺がいると不快なのか教えてくれ」

机の前に立つ矢矧に近づく提督。一気に歩み寄り、団体の前まで喋り始めた。

「……教えなくても分かる——」「分からないんだなこれぐ！ 不快と思うならそれ相応の理由があるはずだ、言えば改善されるかもしれない。言ってみたまえ」

「っ……」

「お前は確か俺と話す時はあの会談しか無かったはずだ、別に俺はお前に過度に接した訳でも無いし、暴行もしていない。それなのに何故不快なのか分からないので教えてもらいたいだけなんだ」

手を差し伸べ、訳を聞こうとする。人を煽るような笑みがやけに腹立つ。

「あの時の誑たがひらかした話で過度なストレスが溜たまりまつてたんやろ？ なら仕方ない事やん」

「そ、そうだ、過度なストレスがあつてイライラするんだよ」

「では何故俺を暴行した時にストレスを発散しなかったのかな？」

「それじゃ物足りないんだよ」

聞いた途端に提督は机の資料を取り出す。そして大声ではつきりと読み上げた。

「お前は自分の部屋で過度な慰めをしている。一日五回もすればストレスなんて吹っ飛ばはずだ、無理に暴行しなくても慰めればストレスなんて無くなるので不快という理由には繋がらない、以上」

自分の秘密を暴かれ、赤面する矢矧。

何も言い返せず、顔を下に向けていた。他の艦娘達も思わず引きつった顔をしている。

「よくもまあこんな無防備で来れたもんだな、まだ暴行された時の方がやりがいがある」

「長門をどこへやった」

「知らないなあ道草でも食ってるんじゃないか？」

「嘘だ、あの大声でお前は場所が分かったはずだ」

「どこの？」

「どこって……長門の部屋に決まってるだろ」

「何で？ そんなに心配なら探せばいいじゃないか」

「探しても無いから言ってるんだろ!!」

「本当に探してたのかああ!? お前らの探り方は人を見つけるようには見えなかったぞ」

提督は見ていた。矢矧達が長門ではなく何かを探しているのかを。しかもその探し方は人を探すような方法ではなく大きな物を探すような方法だった。長門の名前は一度も呼んでいない。

「どういう事よ」

「お前らが探してるのは長門じゃなくてモノだ!!」

提督の大声で遮られた。探していない、今まで長門の事を話してははずだ。それなのに提督はそれを否定したのだ。長門ではない、では誰を探しているのか。

「何だと?」

「探していないんだよお前らは、長門? 違うねお前らが本当に探しているのは盗聴器だ」

「……っ」

「どこで仕入れたかは知らんが盗聴器具は破壊させてもらった、もう使えないようにね。それなのにお前らは何だ? 長門じゃなくて盗聴器を探してたんだ、良い心掛けじゃないかあ。アイツなんてどうでもいい、必要なのは盗聴器だ、所詮はただの駒に過ぎない見捨てても構わないって。兵器が道具を必要としているのは見てて滑稽だよ、吐き気がする」

矢矧達の顔が少し暗くなる。どうやら凶星のようだ。提督は矢矧達に指をさしながら、話し続ける。そして手持ちの拳銃を日の光に晒し、輝かせる。

「別にお前らがどうしようが俺は五千倍にして跳ね返す。今までお前らが俺を殺そうとした殺害計画書や■■■の経歴書、お前らの過去の履歴書なんて既に手中だフハハハ」

「どうやって……!」

「企業秘密だ、教えるわけないだろう。そして大本営にお前らの訴状を提出しといた。これはコピーだがじきに大規模の憲兵隊が本当に

来る、司令本部を施錠した、出撃ドックも閉場させた、艀装も展開不可能、摩耶は戦闘態勢……もう逃げ場は無いぞ?」

拳銃を向けられた。為す術は無い。全て塞がれてしまった、何故か艀装も出せない。

ドアは固く閉じ込められ、窓は鉄格子で塞がれている。暴れても摩耶が止めるだろう、太刀打ちは出来ない。

全身から恐怖が溢れだす。まるで深海棲艦のように冷たく、凍える殺気が艦娘達を襲った。

「提督……私は……?」

「あ、飛龍の事考えてなかった……取り敢えず摩耶の後ろにいた方がいい。そして俺も……摩耶に任せる」

「お前もかよ!!」

摩耶がツッコミを入れながら、艀装を展開させる。戦闘態勢に入り、マスクから白い息を吐いた。

この流れは本当に戦うつもりだ、こちらは何故か艀装が出せない。何故だ、何故展開できない。提督は自分達に何をしたのか、全く分からない。

「……というわけで、今のは嘘!!」

嘘。

提督の言葉は全て嘘だという。ここに来た哀れな艦娘達に思い知らせる為、わざと脅したのだ。嘘という言葉に少なからず安堵した者もいた。

「安心したようで何よりだ、これで分かっただろう簡単に歯向かえば倍返しされる事ぐらい、下手な行動はよした方がいいぞお」

指をグルグル回し、遠回しに忠告する提督。

びよんびよんと差別する艦娘達の周りをステップを踏む。

「まあ俺が思ってるほど差別してる側は行動力があると分かっただと同時に全員クズだと分かっただけ良かった良かった〜当たり前だけどね〜」

「貴様は……私達をどうするつもりだ……」

「お前らの冴えない腐った脳みそで考えたまえ、俺から言う事は無い!! さあ用が済んだら出ていきたまえ、ドアはもう開いてるよー」

提督に促され、艦娘達は黙って執務室を去っていく。殴り込みに行こうとしたのだろう、だが提督に倍返しされ、負けてしまった。彼女らにとって悔しい事はこれ以上無いだろう。

「怖かったです……」

「嫌われ者は人気で大変だよね〜」

飛龍が腰を下ろし、冷たい床に座る。あの圧倒的な緊張感で疲れたのだろう。提督の気迫は凄まじかった。相手にしたくないほどに。

「暴行とか言ってたけど大丈夫なのか？」

「殺されなきゃ問題無しだよ摩耶君。なに不安がらなくてもいい、俺の事は誰よりも摩耶が知ってるはずだろう？」

「フツ……確かにそうだな。妙に打たれ強い所とか性格が捻くれて減らず口な所とか!!」

「七十五点だ！ 優しい所とか有能な所とか顔が美しい所とか策略家な所とか色々あるだろ!!」

「どこがだ!!」

提督を叩きのめす。頬には真っ赤な手形が残っている。摩耶に殴られたのは何日かぶりだ。

「さてそろそろ朝食だ、行くぞ!」

「……なあ提督、そろそろマスクを外してもいいか？」

「ああ構わんよ」

何故摩耶だけマスクをしていたのか気になった飛龍は提督に聞いてみた。

「あー実はだな、執務室一体に薬を捲いといたんだわ」

「薬?」

「そぞ。一時的に艦装が展開出来なくなる吸引型の散布薬を、ね。即ち艦娘の身体に影響し、艦装を出させないようにする。本来は憲兵とかが悪い事をした艦娘に尋問をする為に開発されたんだが色々あつて今は禁止されている。まあバレなきゃいい話だ。だから摩耶には事前にマスクをしてもらった」

名前はそのまま、艦装展開不可散布薬。

と言っても、効果自体はかなり薄く出来ており、人間に対しては無

害とされている。艤装が展開出来ないにしても個人差があり、薄く改良されても数秒や数時間など極端な事が多い。更にはこの薬を悪用する者が現れる事から現在は薬の開発、製造、使用は固く禁じられている。

「なるほど……だからさつきは艤装が出せなかったのかあ……」

しかい追い返したとして問題は山積みだ。自爆装置を知っている事が■■にもバレている以上、早急に動かなければならない。何故奴が動かないのかが少し疑問だ。既に計画は始まって余裕でいるのか、とりあえずは自爆装置の解除が最優先になる。朝食を食べた後に始めよう。

食堂に向かう三人。日差しは窓から漏れ、廊下を照らしている。それと同時に提督の長い白髪もたなびいて輝いた。

「……提督、その長くて白い髪……毎日整えてるの？」

「そうだが何か？」

「ううん、いやとても綺麗だなーって思っただけ、まるで翔鶴さんや響ちゃんみたいな女の子っぽく見えるなー」

「この美しい白髪を分かってもらえるとは私は感激だよ飛龍、もつと褒めてくれたまえ、あと俺は男だ！」

「男でも美しいって言葉はあると思うよ、それに提督は優しいし」

「優しい、ねえ……」

「一回女装した事あるけどな」

「言ったな摩耶ぶっ飛ばしてやる!!!」

25. デザートは食後に食べるもの

「止めなくていいの?」

「日常茶飯事だ」

「だな」

「ええ……」

食堂で騒ぎが起きている。瑞鶴と加賀が口喧嘩、取っ組み合いになっっているようだ。両者共に手を握り、睨んでいる。

「何が鳥頭ですって? 青い方も随分と提督さんに似てきたようで……!!」

「そちらこそ……氷河期とかいう変なあだ名は止めなさい!」

「へっへーんだ!! お、どうやら一航戦の青い方はプリンがお嫌いのようにだ、私が食べ——」「殺すわよ」

プリンを取ろうとした手を掴む加賀。あからさまに瑞鶴を睨んだ。そして装った笑みでその場を誤魔化した。

「ごめんなさいね、とっておきは最後に残しとく派なの」

「それはそれはごめんなさい、てつきりお嫌いなのかと」

「誰かに似たのかなー」

「さーて誰だろう」

途中で蒼龍と合流し、塩鮭定食を注文、二階のテーブル席で食べる四人。瑞鶴と加賀の喧嘩を催しとして見ているようだ。朝から元気なのはよろしい事だがうるさいのはただの迷惑に過ぎない。

「まるで提督みたいだねー」

「似せられてもこちらが困るだけだ鈴谷、お前は一度南極圏に行つて地下世界に通ずる穴でも探しながら一週間ほど暮らしてくるといい」

「辛辣だねえ」

「当然の報いだ、俺の下についた事をあの世まで後悔させてやるから覚悟しろ!!」

「食べてる時にぺちやくちや喋るなア!!」

また一日が始まる。

元帥が遊びに来るまで後三日、演習は後四日。いつも通り提督が組

んだ訓練のローテーションを回していく。参加する者もいる他、参加せず見下す目で眺める者もいる。訓練は自由参加なので、決定権は艦娘達にある以上は提督は何も言わない。

「調子はどうかプリンツ」

「はい！ 相変わらず人数は少ないですが真面目に取り組んでくれて
います！」

「そうか……」

「あ、古鷹さん。少し距離を詰め過ぎですよ！」

プリンツが古鷹の艦装に触れ、射角を合わせて一歩後ろに下がる。

古鷹はされるがまま動き、もう一度砲撃。

「あ、当たった……！」

「古鷹さんは急ぎ過ぎて距離を詰め過ぎな所が見受けられます。落ちて
着いて様々なパターンを確実に処理していきましよう！」

「あ、ありがとうございます」

「とまあこんなものです」

「悪くない教え方だ、この後も頼む」

「V i e l e n D a n k ! 任せてください！」

九時から十二時までの訓練、後一時間休憩。十三時から十七時までの訓練。参加した艦娘の練度は成長がよく見られた。演習で挑む編成はまだ決めていない。鈴谷、金剛、加賀は決定しているが、他三名の席は埋まっていない。

「あーやっとな終わったー！」

「今日も見境なく言われたわ……」

「それは貴方が鳥頭だからでしょう」

「何か言いたいのか氷河期さん？」

「何ですって？」

「やってみる？」

「あー二人ともうるさいネー」

鈴谷と金剛、加賀と瑞鶴が訓練を終え、自部屋に戻ろうとしている。夕方十七時過ぎ、訓練が終わり、皆身体を休めていた。

「ご飯です、長門さん」

「……」

長門の食事を渡す鳥海。夕飯の時間と少し早い気遣いで持ってきてくれたようだ。手錠が外され、黙って食べる長門。出来ることから反抗して逃げ出したいが摩耶を前にそれは容易では無い。

「では私達も食べましょう、摩耶」

「ああ」

摩耶達も持ってきた定食を口にする。三人でテーブルを囲み、一緒に食べた。この二人は何がしたいのか分からない。

「……何の真似だ」

「鳥海がお前だけじゃ寂しいだろうからあたし達も一緒に食べようって誘ってきた」

「不快じゃないのか」

「別に」

「……バカバカしい」

沈黙が走る中、食事を終える三人。

長門は大人しく手錠をされ、部屋の片隅に居座った。鳥海が三人分の食事分を片付け、食堂まで運ぶ為に部屋を出る。部屋には摩耶と長門だけとなった。

「……」

「……なあ長門」

「何だ」

「楽しいのか？ あんな事やって」

「……楽しいわけが無いだろう」

手足を拘束されて長門は床を見つめた。艶のある黒髪がゆっくりとたなびく。床を見つめるその目はどこか哀しげだった。

「何故こうなってしまったのか理解が出来ない。私の理想はこんな地獄では無かった」

「まあこの鎮守府の噂は広まってたからなあ……気の毒だよ」

「同情はよせ……何回も反抗したさ、解体される覚悟で反抗した、だが全て無駄だった」

「一人でか？」

「いや反撃の狼煙をあげた艦娘は私と赤城しかない。解体されてもおかしくはなかったが奴がそれを許さなかった。何度も言っていたよ、ビッグセブンだから戦力になるし重宝するって。結局私も差別する側の仲間入りだ、もう抗う力すら無くなった。今になって響く、あの男の言う通りだよ、私達は何も出来ない力も無いポンコツ兵器だ」
「……」

赤城と共に前任に抗った長門。だが既に仲間を集めた前任を前に蹂躪され、拷問を何回も受ける。やがて戦力になると判断されれば途端に優遇され、赤城が行方不明と聞けば最早反抗する力は失ってしまった。もうどうでもよくなっていた、

自分には力が無い、陸奥を守る力も、仲間を救う力も、人を救う力も持ち合わせていない。何も出来ない鉄屑だ、提督の言っていた事は正解だった。何が世界が誇るビッグセブンだ、聞いて呆れる。

「私は……何の為に、生まれてきたのだろうか……」

「そこまで言ったらお前の価値は道具以下だぞー」

男の声が聞こえた。勿論この鎮守府に男はアイツしかいない。

提督だ。壁に寄りかかり、手を組んでこちらを見ている。驚く長門に提督はゆっくり歩み寄った。

「長門、お前が自ら前任に反抗した事は素晴らしい事だ。俺も事実を知った時は驚いたよ、だがそれと同時に失望もした」

「だろいな。今では■■■■に踊らされてる道具でしかない。笑うなら存分に笑ってくれ」

「ああ大いに笑ってやるよ、だが知ってるか？ 例え使えないと判断された道具でも存在意義を見つければ新たな道具として生まれ変わる」

「……何を言ってるんだか」

「お前の腐った脳みそじや理解出来なかったか？ お前はまだ使えらるって言ってんだよこのポンコツ兵器」

提督の言葉に目を見開く長門。自分はまだ使える、初めて言われた言葉だ。

「お前は誰よりも先に抗った、何言われようとも抗った。だが結果は

痛ましいモノだった、優遇制度で踊らされた、仲間も行方不明と聞けばその力も失ってしまった。この世界では失ったモノは二度と戻らないし帰らない、物も、人間も、艦娘も」

「……」

「だがお前は失ったわけじゃない、隠してしまったただけなんだ。優遇制度で失ってしまったその反抗する力は隠れて眠ってしまっただけなんだよ。あの時のお前が全力で抗った様に今お前にその意識があるのなら火山のようにマグマの如く燃え上がる……隠れて眠った力が」

提督は長門に近づき、顎をクイツと上げる。目と目を合わせ、話を続けた。

「長門、さつきお前は何の為に生まれたのかと自問したな？ だったらその姿や艦装はお前にとって何なんだ？」

「戦う……為……」

「そうだ戦う為だ、お前は戦う為に生まれた兵器なんだ。それなのに何で兵器がネガティブモードに入ってたんだ、んな事考える暇があるならさつきと訓練に参加して力を取り戻せ!! お前の力はこんな荒くれたクソだめの様な場所で発揮されるような力じゃないんだ、かつてはビッグセブンと呼ばれた最高の軍艦なんだろう!! だったらそれぐらいの意地を俺と差別した兵器共に証明して見せろ、ポンコツ兵器!!」

顎を上げられ、指で指される長門。顔の距離は五センチメートル程、目を合わせて怒鳴りつけた。

「……上等だ」

顎を上げる腕を掴み、遠ざける。その言葉はかつての自分のような勇ましい感じがした。力は眠っている、ならば目覚めるまで戦うべし。

更に提督の両腕を掴み、立ち上がった。お互い睨み合っている。

「提督の口車に乗ってやろうじゃないか……チカラを取り戻した私は恐ろしく強いぞ……!」

「やれるものならやってみろ!! 精々足掻くんだな、お前の身体が燃

え尽きて朽ち果てるまでこき使ってやる、俺に使われる事をあの世で後悔させてやるからなあああ!!」

「だったら私はその上で提督に恥をかかせてみよう、少しはその減らず口が治るかもしれんからなあ!!」

「上等だ、やってみる!!」

「はい、そこまで」

提督と長門が睨み合っている間に手を挟み、喧嘩を中断させる摩耶。しかし一向に収まらないので頭を殴って落ち着かせた。殴られた二人の頭にはたんこぶが出来ている。

「摩耶、拘束を外せ」

「え、外してもいいのか?」

「構わない、もう三人の件はバレてる訳だし隠す必要も無いからな」

「分かった……」

手足の拘束が外され、再び自由の身となった長門。腕をぐるぐると回し、自由を味わっている。

「さて長門、お前には訓練と演習に参加してもらおう」

「訓練は分かるが演習か?」

「そうだ、奴らの前で見返してみろ。そして陸奥を救え」

陸奥はどこか隠された場所にて治療を受けている。勿論提督は把握済みだが自爆装置が取り付けられている以上、下手には近づけない。

自爆装置は現在、摩耶、鈴谷、金剛、加賀のみ取り除かれている。まだ半数の艦娘が死と隣り合わせだ。

「任せろ……!」

——朝、演習まであと二日。

「もっと……もっとだ!!」

「まだ……立てる……!!」

港付近で海柱が立つ。いち早く起床していた鈴谷と加賀、金剛はプ

リンツと摩耶によって扱かれていた。この二人には何回か勝負を挑むも全て敗退。絶対的強さを誇る二人に鈴谷と加賀、金剛は誰よりも先に訓練に参加していた。

「朝から参加とは励むねえ〜お前も」
「うるせエ!!」

中庭では天龍が剣を何回も素振りしている。上半身裸で包帯を胸に巻き、汗を流しても腕を止めない。それを提督は二階の連絡通路の窓から眺めていた。

「つし……素振り千回終わった……次は……」

次に天龍は港付近の海へ向かう。鈴谷達と合流し、訓練に混ざった。

「……お前も懲りないねえ〜瑞鶴」

「うるさい、気が散るわ」

提督が向かった部屋は多目的ホール。そこで瑞鶴は弓道場として訓練を受けていた。勿論この後瑞鶴も港付近に合流する予定の様だ。暁達や木曾もいつの間にか参加している。

「なあ瑞鶴」

「何？ 集中出来ないんだけど」

「赤城は本当に行方不明なのか？」

提督は現在行方不明とされている赤城の存在について瑞鶴に問いかけた。解体や轟沈とかではなく行方不明という扱い。過去の報告書には深夜に誰かに襲われ、右腕の喪失、身体に複数の斬り傷を抱え、窓を突き破って逃走。その後行方不明と判断されており、今も生きてるか定かではない、と書かれている。

提督はこの文献がどうも不思議でしかなかった。

「……分からないわ。赤城さんは主力艦隊の中でも洗脳に支配されなかった、私達にとつて唯一の希望よ。でもあれだけの重傷を負えばもう生きてるかどうかすら……」

「……そうか、んまあ追々調べるとしよう……瑞鶴、そこまで演習に出たいのか？」

「いいえ、そこまで出たいとは思わないわ」

「んじや何でそんなに頑張ってる？」

「……分からない。けど何故か強くならなきゃいけない気がした、だから提督さんのいう訓練に参加してる。提督さんがこの鎮守府を変えようとしてる様に私達も……変わらなきゃいけない」

そう言つて瑞鶴は矢を放ち、的を少し左に外す。少し溜息を吐いた後、また弓を構えた。

「……そうかい、まあ精々くたばらない事を祈るよ」

「ええ、祈つてて頂戴」

港付近では長門も早く起きたのか、参加している。演習する仲間として真面目に取り組んでいるようだ。変わらなきゃいけない、提督を手を組んだ艦娘は少しずつ変わっているようだ。それに安心してしまふ自分がある。

「手の平返しも良い所だ……」

26. 概念

長門と手を組み、三日が過ぎた。今日は元帥が視察と称して遊びに来る日だ。正直、胃が重い。

「あー死にたい」

「気が重くなるからやめてくれ」

「えーだって来るのが元帥なんだよお、何言われるか怖いもん」

「何幼児退行してるんだ」

「あー嫌だー」

足を伸ばし、椅子でバランスを取る提督。軍帽で顔を隠し、嫌な表情をしているのは確かだ。演習は明日、艦娘達も気が貼っている。

「司令官！ そろそろ元帥が乗られたヘリが到着されるようですよ！」

「あー分かったよー今行くよー」

と言いながら机の中に縮こまる提督。

摩耶に強制的に引き摺られ、広場に連れていかれる。装備が物騒なヘリが広場内に着陸。中から秘書艦の鹿島と元帥がこの地に降りられた。

「やあ久しぶりだねー白くん！」

「これは元帥殿、わざわざ遙々この鎮守府に来訪していただき光栄でございいます」

「堅苦しい挨拶はあまり好きじゃないんだ、崩してくれるかな？」

「はい……失礼致しました。取り敢えず応接間にて少し世間話でも如何ですか？」

「うん、そうするー」

「では……（死ねばいいのに）」

提督は元帥と鹿島を応接間へ連れていく。元帥はこの鎮守府の建物を事細かに見ているようだ。恐らく問題は無い、目が赤くなるほど掃除したのだから。

「白くん、こんな所で良かったのかい？ まだ色んな場所があるのに」

「いえいえ私が決めた事です、後悔はしておりません」

「そっかそっか。摩耶君もプリンツ君も調子はどうか？ ちゃんと

白くんの支えになつてゐるかい？」

「はい！ 大丈夫です！」

「まあ一応手伝つてはいます……」

やけに元帥と鹿島がニコニコしているのが怪しい。何故か背筋が凍る。特に提督は元帥とこの鹿島が一番嫌いな組み合わせだ。その場で叫びたいほどに。

「■中将、少し肩を崩してもいいんですよ」

「いやいや偉大なる元帥の下では少しばかり難しいものがございます……申し訳ございません」

「いつもの減らず口はどこへ？」

「……はて、何の事でしょうか？」

「海軍一の減らず口と呼ばれた貴方がまさか治つてゐるわけじゃないですよ？ 提督？」

「……ああ上等だ……このクソアマ!!」

「ハハハハいつもの白くんだ!!」

「はあ……」

応接間が笑いに包まれる。

提督が鹿島を嫌う理由は二つ。一つは自分が偉い立場と知りながら嫌味を言ってくる事。二つ目は不遜な態度をとれば即座に報告されるから。傍迷惑もいゝ所だ。

「セクハラはダメですよ」

「こっの……!!」

「提督、落ち着いて！ 今は違うから!! な？ な？」

摩耶に取り押さえられ、怒りを落ち着かせる提督。

今すぐにも殴りたい所だがそれは出来ない。

「提督さんにもあんな場面があるのかあ……」

「どうやらあの鹿島には為す術はないようだぜ」

瑞鶴と天龍がドアの隙間から盗み見している。提督と元帥が会談しているのを見るのは初めてだ。

ましてやあまり姿を現さない事で有名の中将兼提督とお気楽な性格で海軍の要となる元帥。この組み合わせも非常に珍しい。

「にしても演習に向けて頑張ってるねーこの娘達も……というよりも何故君に従ってるかは分からないけどさ」

「様々な手段を尽くし、強制的に従えさせました。何も目立つ様な事は一つもしておりません」

「流石あの娘達を育て上げただけあるね白くんは。これならばこの娘達もじきに推薦されるのかな？」

「いえそれは絶対にありません」

提督が真面目な目で元帥の顔を見る。

先程の笑顔は消え、何やら深い事情があるような重い顔だ。

「あらら……何故かな？」

「この艦娘達は戦うとは何かを理解していないからです」

「……そっか。それじゃ仕方ないね、理解出来るまで優しく教えてあげなさいな」

「はい、お任せ下さい」

鹿島がメモを取っている。これまでの会話を記録しているのだろう。

それにドアの隙間から聞いている二人にも気付いているようだ。別に会話を聞かれようが構わないが鹿島が何をするか分からない。

「さて白くん、早速本題一つ目なんだけど……」

「はい、営倉の奥深くにある拷問器具についてですね。詳細は報告書にて説明されているかと思えます」

「ああ詳しくすぎて気分が悪かったよ。この娘達は苦労したんだね

……可哀想に……」

「やっぱり元帥さん優しい……」

「どこかの誰かさんとは大違いだな」

ボソボソと聞こえた声にイラつき、資料を握り潰しかける。

摩耶は一旦応接間を出入りし、プリンツは提督に平常心を保たせ、説明を続けさせた。

「……一部の艦娘達からもその拷問器具によって負われた消えない傷痕が見られます」

「ああしかもこの拷問器具によって殆どの艦娘達がトラウマと化して

いるのだろうか？」

「はい、更にはですが……仲間同士で差別をしている事が分かりました。前任が定めた優遇制度という決まりに艦娘達は洗脳され、差別意識が出来てしまいました……なので……」

またドアの隙間から覗く二人に気付いた提督は怒りが収まらない。それに配慮した元帥は覗く二人の入室を許可し、中に入らせた。念の為に二人はドアの門番をさせ、警備を強化する。

「翔鶴型航空母艦の二番艦、瑞鶴です！」

「天龍型一番艦の天龍だ、よろ——」 「敬語を使え馬鹿!!」

タメ口で話す天龍にお灸を据える。頭を叩いて、敬語を使うよう教え込んだ。元帥はその場面を微笑ましく眺めている。

「話を戻しましょう……先程話した様に一部の艦娘達に差別意識が出ています。正直な所、治療は困難を極めており、状態が悪ければ我々人類に反逆する可能性も否定出来ません。場合によっては大本営の協力も仰ぐ必要になる可能性も高いです」

「なるほど……事態はあまりよろしくない、と……おつと瑞鶴君と天龍君も差別されている側か……頑張ったね二人とも」

「あ、ありがとうございます！」

「やっぱいい人だよ」

「どこかの誰とは大違いだな」

「黙ってる……!!」

二人のコソコソ話に注意する提督。元帥はまた微笑ましい光景を愉快に見ているようだ。提督と艦娘の話し合いは和やかで好きな元帥。こうした絡みは笑って許してくれる、優しい人物でもある。

「アツハツハツハツハツハ!! 分かった、その時はその時だ。全力でそちらの援護に当てよう。予算も少し考えておく」

「……ありがとうございます」

「んじや二つ目……」

元帥が鹿島が出したファイルを開こうとした時、瑞鶴と天龍を何故か見た。取り出す前に手を止め、提督に問い掛ける。

「ここからは最重要秘密事項だ、悪いけどその二人は一時退席して

もらいたい」

「……失礼ながら元帥殿、この件に関しては二人は知っております」

「何故かな？」

元帥の殺気が応接間を包む。迫力ある殺気に瑞鶴と天龍の二人は完全に怖気ついてしまった。隣にいる鹿島や摩耶、プリンツでさえも汗を掻き始める。

しかし提督だけは怯まず、瑞鶴と天龍を指さし口を開いた。

「コイツらの為です」

「これは最重要秘密事項だ、何があつても例外は無いと話したはずだが？」

「はい、勿論知っております。それでもコイツらには知る権利があります」

「艦娘は人間じゃない、兵器だ。知る権利など無い」

艦娘は兵器だと一切考えを曲げない元帥は敵視する様な眼で提督を睨む。あれだけ提督に広めるなど口を酸っぱく言われた訳が身に染みて理解出来た。

それでも提督は怯まず、話を続ける。

「いいえあります。元帥殿、確かにこの件は世界に広まれば日本海軍は信用を失い、恥さらし軍隊として名を轟かせる事でしょう。ですが私が着任した時まで虐げられ、辱められ、貶められ、黜られたこの艦娘達はそれに値する程の事をその身を持って体験し、生き抜いていました」

「それでも例外は無いと言ったはずだ」

「日本海軍の信頼とこの艦娘達の悲劇を比べる事など烏滸がましいのは重々承知しています。何も艦娘達に人権が与えられるとは思っておりません。唯一深海棲艦に対抗出来る兵器は艦娘のみ、たまたま人間の形に似せただけに過ぎない。しかし姿は変われど、この日本を救ってくださり、二度も戦って頂いているのは紛れもないこの艦娘達です。私はその艦娘達の誇り高き強い魂を……再び灯す手伝いがしたい」

「……提督……！」

「……確かにこの鎮守府は廃棄寸前の粗大ゴミでしかありません。ロクに戦果もあげず、ただ自墮落に時を過ごす鉄屑です。職の無い二トの様に部屋に閉じこもり、バッテリーを失ったロボットの様に静止し続け、拳句の果てには害する者を排除しようとする本能のままに動き出す……そんな兵器です」

提督は立ち上がり、天龍達の背後に回る。そして頭をポンと優しく叩き、持論を語った。

「ですがそんな兵器でも誰かが手を貸せばたちまち生命が宿る様に動き出す。兵器は人がいなければ、ただの物となり遺物となつて草木に覆われ砂底に沈む。我々人間が必要なのです、我々も艦娘を必要としているように」

「……」

「貴方は先程その兵器に哀憐あいにんの情を抱いていましたね。もし本当に兵器だと思えば艦娘達の事を可哀そうだと思ふ必要なんてありませんし、貴方の傍にいる鹿島という兵器を連れ、ソファに座らせてメモを取らせる必要も無い。少し行動と言動が矛盾していませんか？」

余程悪い癖なのか元帥が溜息を吐く。何度か同じ経験をしているのだろう、ソファに寄り掛かる。

提督は応接間のソファに戻り、摩耶やプリンツの頭を優しく撫でた。そして真面目な眼と力強い声でハッキリと述べる。

「彼女達は兵器だ、人間だ。不毛な争いはここでは止めましょう……彼女達の概念を決めるのは我々人類ではない、彼女達自身が決める事だ。少なくとも私は、そう思います」

「……」

「ですので、この娘達の希望の火を……どうか消さないでください。誠に勝手ながら私の我儘ではありますが……お願いします」

提督は深く頭を下げる。白く長い髪が静かに揺れた。

提督の言葉に瑞鶴と天龍は顔を下に向けた。

何もショックを受けた訳では無い、自然と涙が頬を伝っていたのだ。今までポンコツ兵器と馬鹿にしておきながら提督は自分達の存

在を選ばせてくれた。いや選べる事を教えてくれた気がする。自分達が人間か兵器か、それを考え肯定するのは自由なんだ、と。

「……はあ、仕方ないね……許可するよ」

「……ありがとうございます」

再度深々と頭を下げる提督。自身の我儘を聞いてくれた元帥に感謝の意を示した。摩耶とプリンツも同じく頭を下げる。

「確かに前任に虐められて、復讐する機会があるとなれば私だって復讐する。……この艦娘達もそう思うなら、知つといた方がいいのかもね……あ、でもこれ本当に最重要秘密事項だからね!? 秘密にしといてよ!」

「その点については大丈夫です。青葉初め、この事を知っている艦娘達は全てこの事を受け止め、話さないよう最大限努力していますよ」

「本当なんだよね!? 大丈夫だよね!? ね!」

「は、はい! 絶対に誰にも話していません!!」

「お、俺も話していな、いません!!」

涙目に訴える元帥に思わず敬礼し、畏まる瑞鶴と天龍。前から提督に何度もしつこく言われている為、ちゃんとついには守っている。しかもこの鎮守府は森の中に囲まれている、余程の事が無い限りは広まる事は絶対に無いだろう。

「例外はこれだけだよ? 分かった白くん?」

「はい、ありがとうございます」

「であれば知っている前提で話を進めるよ。現在深海棲艦の動きが活発化しているのは把握してるね?」

「はい、こちらでもその報告が確認されています。あまり時間は残されていませんよ」

「ああそうみたいだね。そして……」

テーブルに置かれた写真には最強の深海棲艦と呼ばれた戦艦棲鬼、その深海棲艦の中枢を担う中枢棲姫、そしてそれを操る前任の姿が。どうやって撮ったのか分からないが遠くからの姿が確認されている。

「戦艦棲鬼と中枢棲姫か……」

「見事に組み合わせたくない奴らが写っている。こちらも黙って見過

「ごす訳にはいかない、近々大規模な作戦を考えている」

「確かにまずいかもしれないですね……作戦の立案を急ぎましょう」

「うん、そうだね。って事で話は終わり、遊びに来たから色々案内してー?」

「分かりました。では外へ行きましょう、プリントは資料をまとめた後に訓練に戻ってくれ。瑞鶴と天龍もだ」

「分かりました!」

「わ、分かったわよ……」

「わ、分かったよ……」

提督と摩耶は元帥達を連れていき、応接間を出ていった。

27. アイスは溶けないうちに食べましょう

「有言実行とは素晴らしいねえ〜」

「元帥殿、何故アイスなど持って来てるのですかそして何故今食べてるのですか」

「資材が山のように溢れているねえ〜」

「元帥殿、溶けたアイスの汁が滝のように流れてます」

「皆頑張ってるねえ〜」

「アイスを食べ尽くすのを先に頑張ってください元帥殿」

鎮守府の広場にてまるで視察の様に見回っていく提督と摩耶、元帥と鹿島。今日は青空で春の心地よい風が身体に触れる。何故かアイスを持ってきた元帥。ゆっくりと味わっている。

「今日は午前までしか休暇貰えなかったからねー、あともう少しだけどとりあえず白くんが無事なようでも何よりだよ」

「私は大丈夫ですよ。このような不埒な輩にやられるタマではありません。最もそれらを知っているのは元帥殿でしょう?」

「そうだね。今でも演習での無敗記録を残している君なら明日の演習にも必ず勝てるよね?」

「それは勿論。この場で言う事ではございません」

「その意気だよ白くん。そろそろ時間の様だし、大本営に帰るね」
「分かりました、途中まで見送らせていただきます」

「うん、ありがとう。おーい鹿島、そろそろ準備だよー」

「はい、分かりました!」

ヘリコプターに乗る元帥達を見送る提督と摩耶。午前のみ休暇だけと聞いて少し気は楽だった。これでやっと帰ってもらえる、また平和な日々が送られると思うと笑みが溢れそうだ。

「すいません!!」

元帥達がヘリコプターに乗り、着陸寸前に誰かが呼び止めた。後方に顔を向けると、そこには走って来る古鷹が。何か忙しそうである。「これを落としてました!!」

古鷹が握る手の中には特製の万年筆が。確かここに着陸時にも胸

ポケットにしまつてあつたものだ。恐らく案内中に落としてしまつたのだろう。正直褒めてやりたい所だ。

「あ、ああすまない、見落としていたようだ。ありがとう、古鷹君」

「い、いえ滅相もございませ——」

すると広場近くの港で突然海柱が立つた。

かなり近くにいたので提督と元帥以外の艦娘達は驚いている。

「元気に頑張つてるんだなあ、流れ弾が来るなんて、こりや運勢が良いかもね」

「はい……そのようですね。あまり流れ弾が来られると身の危険もございませ。早くお帰りになられた方が良いかもございませ。なんせ荒くれた鎮守府、なので」

「フフフそうだね、危ないからすぐにでも帰っちゃうよ。あ、演習については今夜三人で通話しようかと思う。いいかな？」

「はい、大丈夫ですよ」

「オーケー、じゃあ君達の武運長久を祈るよ!!」

元帥は提督達に敬礼。提督と摩耶、古鷹も敬礼を返す。ヘリコプターはすぐに離陸し、遙か彼方へ去っていった。それに合わせて提督は重い肩を下ろし、地面に座る。

「あ、ーやつ……と終わったー!! 本当クソ面倒臭い野郎だ、吐き気がする」

「お疲れ様だ提督。今夜は一緒に飲もう」

「ああそうするか……どうしたあ古鷹」

提督の隣にいた古鷹が身体をカタカタと震わせ、尻餅をついている。

「い、いや私……ここで……」

「んー何震えてんだ？ あの流れ弾にビビったのか？ まあとにかくだ——」

提督は立ち上がり、軍帽を整える。そして古鷹の頭に手を置き、耳元で囁く。

「——死ななくてよかつたな」

言葉を吐き捨て、提督と摩耶は司令本部へ向かつていった。その一

言で全て理解出来た、あの男はあの艦娘達の策略を知り尽くしている、と。

本来であれば自分はその場面で――、

「助けて……提督……」

涙が溢れて止まらない。身体の震えも止まらない。両手で押さえつけても余計震えてくる。過呼吸になりつつある、今頃の自分はどうなっているのか。想像しただけで寒気がする。

「ハアイじゃあ来おい!!」

「へ!?!」

いつの間にか提督が目の前にいた。気付かない古鷹は思わず変な声をあげる。

突然古鷹の頭を鷲掴みにして、地面に引き摺られたまま連行された。連れていかれたのは執務室。プリンツが手前のテーブルで資料を書きまとめていた。瑞鶴と天龍もコーヒーを飲んでくつろいでいる。

「何でお前らは訓練に行っていないんだ!」

「提督さんに少し言いたい事があって待ってた」

「別に待たなくても訓練が終わった後でいいだろ、早く外に行けポン
コツ兵器共オ!」

「いいじゃねーか……って何で古鷹がいるんだ?」

「何か……成り行きで……」

頭を鷲掴みされた古鷹はソファに放り投げられ、半ば強制的に座らせられる。提督はいつもの執務机の椅子に座り、軍帽で顔を隠す。

「あ、あの……」

「良かったなー今頃だと骨だけ拾われて海葬され、皆を悲しませ馬鹿にされている所だあ、しかもその後は救いも無い地獄で沈んだ仲間とご対面中だろう。命拾いしたな」

元帥が万年筆に触れた瞬間に目立っていた海柱。

実は古鷹に取り付けられていた自爆装置が起爆して出来たものだ。事前に元帥と接触し、誰かが自爆する計画は川内に報告されている。そこで提督は自爆する為だけに接触するだろうと元帥訪問二日前か

ら訓練で艦娘達の出入りを禁止。

そして一番警戒が緩いであろうプリンツの模擬訓練にて参加する一部の艦娘をピックアップ。計画の経過を見計らっていつも模擬訓練に参加している古鷹に絞り、プリンツに教え込まれながらも自爆装置を解除。海に廃棄し、何事も無かったかのように振る舞う。そして元帥訪問時に案の定、古鷹が接近。計画の阻止に成功したのである。「何で……分かったの……?」

「企業秘密。それよりもだ古鷹、何故俺に助けを求めた?」

古鷹が深く黙り込む。何か言えない状況なのか言っではいけない事でもあるのか口を開かない。余計怪しく見えてきた。

「人質か?」

「……違う」

「じゃあ何だ」

「……」

「俯くな、ちゃんと話せ」

「……から」

「喋る時は人の目を見て口を動かしハッキリ話せ!! 人間の常識だ」
「……」

「チツ……駄目だなー」

横に回転する椅子でグルグル回る提督。軍帽で顔を隠しながら上の空だ。執務室に沈黙が漂う。摩耶、瑞鶴や天龍、古鷹、全員が黙ってしまった。風の音と訓練に励む声がよく聞こえる。

「……古鷹」

沈黙を破ったのは瑞鶴だ。何としてもこの状況を打破するべく自ら口を開いた。古鷹の名前を呼び、話し掛ける。

「言って……提督さんなら手を尽くしてくれるわ……きつと……」

「さてそれはどうかなー」

「……あんな事言ってるけど必ずやってくれる」

「内容によるけどなー」

「提督さんは少し黙ってて……!!」

「黙れとは何だ上官に向かって失礼だぞ!!」

「私に指さしてる貴方も失礼でしょ!!」

「うるさい!! 俺は偉いんだ!!」

途中で口喧嘩に発展する。瑞鶴に指さした提督は机に足を乗せ、立ち上がった。瑞鶴も反論して言い返す。そこで天龍が話を続けた。「とにかくだけでも、話さない事には何も変わらねえと思うぞ?」

「……」

「古鷹……!」

「……から……!」

「ちゃんと言え!!」

「死ぬのが……怖いから……!! 助けてって……言ったんです!!」

本来であれば古鷹は元帥と接触し、自爆して死ぬはずだった。が、計画は失敗。誰も巻き込む事が出来ずに生き残ってしまった。といても古鷹は計画に巻き込まれただけであり犯人ではない。

「いっちょ前に死ぬのが怖いとかお前何なの?」

「……え」

「お前も訓練に参加していたようだが何故参加した? 死にたくないならわざわざ俺の訓練に参加しないでいいじゃないか、どうせ戦わないんだから」

「ち、違う……私は、■■に殺されるのが怖くて……!」

「よくそこまで艦娘をやっていけたもんだなあ、生き残れたのが不思議な位だあ」

皮肉な事を言われ、徐々に情が溢れ出す古鷹。手を握りしめ、執務机を叩いて怒りを顕にした。

「……何が言いたいんですか。死にたくないと思うぐらい良いじゃないですか……そんなに私達を兵器と呼びたいんですか……?」

「ああお前は兵器だ、何か間違いでもあるのか? 戦う事の意味も口々に理解してないこのポンコツ兵器が」

「誰もが死にたくないと思うのは仕方ない事で——」「戦争では常に死が付き物なんだよ!!」

突然椅子から立ち上がり、古鷹の目の前まで顔を寄せる提督。古鷹の話を遮り、怒鳴りつけた。そして指をさしながら話し続ける。

「確かにお前の思った事は正しい。誰しも余程の事が無い限りは死にたい、なんて早々思わないからな。だが戦争つてのはそんな事を思う暇なんて無い程過酷なモノなんだ!! 過去の戦場では常に鉛玉が交差し、血と泥が混ざった死屍累々の大地を突撃する兵士が走り駆けた!! この戦争だつて現在でも常日頃に赤い液体が流れ、海を真っ赤に染めていく、今もどこかで誰かが血を流し沈んでいるんだこのふざけた世界では!!」

提督の気迫に圧倒され、何も言い返せなかった。聞いていた瑞鶴と天龍も思わず動揺する。提督は迂回して古鷹の胸倉を掴み訴えた。

「最悪な事に哀れな俺達は別の荒事で醜く争っている。目の前の暗い事実を受け止めず、今更どうでもいい事を主張し始め、武器を持たずとも言葉という武器で人の心を串刺しにしている、まさにクソみたいな戦争なんだ!! 悲しくも今俺と■■■が争ってる様にこれも戦争になっっている!! 騙し騙され自分の欲の為に争い、挙句の果てには関係無い他人を無理矢理行使して残虐にその身を滅ぼさせるんだ!! お前はその醜い戦争から……■■■に駆り出された特攻隊に過ぎない」

「っ……!」

「お前は兵器だ! 深海棲艦に抗わないでどうする!! 国を護る為にお前達は生まれ変わったんじゃないのか!? 別に国の為に死んでこいとは言っていない、だが死に抗えるのは力だけだという事を自覚して欲しいだけなんだ! 死にたくないだつて? だったら自分の力で抗うしかないんだ、戦うしかないんだ!! 全て仕方の無い事で片付けるな!!」

決して死んで欲しいとは思わない。だがいつでも死ぬるこの世界で自分の命を大切にしたいだけなのだ。簡単に死にたい、死にたくないと言ってしまうこの時代に平和は有り得ない。過去も、今も、未来も。

「……常日頃から起きる口論や議会、些細な喧嘩でも全てが死を司る戦争だと思え……この時代に平和という時間は存在しない!! よく覚えておけ!!」

些細な事でも人間は争う。互いに納めた武器を使って相手を一方的に叩きのめす。死とは関係無くとも、いつの時代もそうしてきた。しかも皮肉な事に争った後は有象無象の利益を得てしまう。人は争わずに生きる事は不可能なのだ。

「……じゃあ私は……どうすれば……」

「これ聞くの何回目だろうか摩耶君」

「知るか」

「……どうすれば良いかなんて考えても無駄だ。せめて今の事から全てを考えろ、何をしようか何が出来るかその腐りきった脳みそをフル回転させ、マックシエイクみたいになるまで考えるがいい」

床に腰を下ろした古鷹は手を震わせ、床を殴った。そこには恨みや憎しみといった感情が湧き出ているのがよく分かる。

「……じゃあ……」

「ん？」

「■をぶっ飛ばす事は出来るの？」

予想外の返答に少し驚く提督。瞼を二度開き、ニヤリと笑う。面白い手を考える古鷹に視線を合わせた。

「面白い事を考えるじゃないかあ、今は難しい……が、必ず出来る」

「えっ!？」

「んなッ!？」

「何驚いている? 俺は既に計画を実行中だ、奴らはまだ始めていないと抜かしているだろうが俺の掌の上で綺麗に無様に踊らされているとも知らずに余裕ツラしているのだよ、全く馬鹿な奴らだあ笑いを堪えるのが大変だよ」

「そこまで……」

「■をぶっ飛ばす事など容易い事だ。だが■も相当の手練れだ、そう容易くぶっ飛ばされるほど弱くない、寧ろ認めたくなる程の鋼のような強者だ。だから俺は見返せと言っている、俺が組んだ訓練に参加し、奴らをも凌駕する力を持って全力で見返すんだよ」

再度提督は椅子に座り、机に足を乗せる。軍帽を指でグルグルと回し、余裕の表情だ。

「……だ、だったら私も……!」

「訓練に参加するなど当たり前だ! 問題は何の為に参加するかだ」

「……■■■■をぶっ飛ばして加古を助ける……!」

「そんな事出来るのかあ?! タダでさえ死ぬのが怖いんだろう?」

「確かに怖かった、今も怖い……! けど提督の言葉を聞いて目が覚めた……死ぬのが怖くても力が無ければ何も出来ない」

古鷹は立ち上がる。先程まで死ぬ事に怯えていた前の古鷹とはまるで違う。今は肝が据わった艦娘の姿だ。

「それこそ何も出来ずに死ぬのは何よりも嫌だって事に気付いた。だから私は命を賭けて戦う、私の目的の為に……!」

「……やってみろ、俺と■■■■の目の前で!!」

「……たけのこの里は味音痴が食うもんだぜ」

「よーし摩耶、戦争だ!! ぶち転がしてやる!!」

28. 砂の城は簡単に作れない

「であれば古鷹、お前も演習に参加してもらおう。拒否権は無い」
「勿論断るつもりはありません！」

「ならばさっさと訓練に参加しろ。演習は明日だ、お前専用の特別スケジュールを組んでやる。覚悟しろ古鷹」

「はいー！」

元気な挨拶で執務室を去る古鷹。駆け足で訓練へ向かっていった。まだ瑞鶴と天龍は居座ったままである。

「……で何故お前もそこにいるんだ、早く行け」

「言ったでしょ、私達は言いたい事があるって」

「なら早く言え、本当に俺は暇じゃない」

「分かったわ」

瑞鶴と天龍は畏まって机の前まで歩み寄る。

そして何故か頭を深く下げた。

「提督さん、これからよろしくお願いします」

「提督……よ、よろしく頼む……」

二人は感謝した上で改めて挨拶した。何故二人がいきなり挨拶をしたのか。それは元帥との会議中に聞いていた言葉だった。

『彼女達の問題を決めるのは我々人類ではない……彼女達自身だ』

あの言葉で二人は確信した。

提督の普段は艦娘を一方的に蔑み、暴力的な言葉で陥れる絶望的な人格破綻者。しかし隠れた本心はちゃんと自分達を大事に思っていて、優しい人だった。今までポンコツ兵器と罵つても結局は気付かない内に守ってくれている、励まそうとしてくれている。

「あの言葉でやっと気付けた。提督さんは心の底では優しい人だって事」

「散々ポンコツ兵器って言っておきながらあの時提督は俺達の存在を選ばせてくれた……正直嬉しかった」

「だから何だ、気味が悪いぞポンコツ兵器共」

「これからもよろしくって事！ 前任を全力で倒す為にこれからも一緒に戦ってほしい……だから!!」

「俺達も演習の編成に加えてくれ!!」

机を強く叩き、堂々と言う瑞鶴と天龍。演習の編成は後一人が残っている。これから決めようかと悩んでいたが自ら申し出てくれた。

「……確かにあの前任を倒す為には力がいるし経験も必要だ。良いだろう、編成に加えてやる、だがしかし……あと一人だけなんだ。叩いてかぶってジャンケンポンしろ」

「え……マジで?」

ヘルメットとピコピコハンマーを出されて目を丸くする二人。演習の編成メンバー決定権を争うのに決められたルールは叩いてかぶってジャンケンポンとなった。

「叩いてかぶってジャンケンポン!! 勝ったわ!!」

「負けるかア!!」

ドア手前のソファとテーブルを使って瑞鶴と天龍は必死に争う。勝負というものの二人は熾烈に争っていた。ピコピコハンマーは潰れかけ、ヘルメットは少しずつ凹んでいる。

「何後出ししてんだ!!」

「後出しじゃないしーちよつと出すの早かったただけだしー」

「瑞鶴か……」

勝敗は決まり、瑞鶴がメンバーとして加わる事になった。半分ずる勝ちだが。

「私の敵じゃないって事を見せてやあげるんだから!」

「畜生〜!」

瑞鶴は戦う気満々だ。今にでも腕を振るおうと躍起になっている。

他の艦娘や天龍には申し訳ないがこれで決定だ。

「はあ……まあいいよ譲ってやる。それに今日は提督がどんな人か分かったしな、提督は」

「そう私達は人間だからね!」

突然人間と言い出して提督は驚いた。早速自分達の概念を決めて

きたのだ。生意気な奴だ。

「そうか……やっぱお前ら馬鹿だなく!!」

提督は椅子から立ち上がり、机を叩いて全力で煽る。

「いいかー！ アレはあの平和ボケジジイを納得させる為の虚言だ、優しい言葉を一つや二つ、真面目に真剣なフリして訴えればまるで出来上がった砂の城を海の波に破壊されるが如く受け止めてしまう馬鹿なのだよ。お前らもその砂の城と同じなのだ、まんまと騙されおつて馬鹿共め〜!!」

「でも自由なんでしょ？ 自分の存在を決めるのは自分の勝手、提督さんは兵器って呼ぶだろうけど私達は人間だから！」

「ここぞとばかりに調子づく瑞鶴。言葉の意味が理解できていない馬鹿なのか、それとも単純な馬鹿なのか、よく分からない。

提督は頬を引き攣り、椅子に座った。

「……自分勝手過ぎて寒気がしてきたよ摩耶。早くコイツらを外に出してくれ、そして暖かいコーヒーを頼む」

「コーヒーは良いけど勝手に追い出す事は出来ないかなー」

「提督、本当は悔しかったりするだろ？」

「何故お前ら如きに悔しがらなければならない、馬鹿を通り越して大馬鹿に成り下がったか！ 一度南極大陸の周りを五周ほど航海するとい、少しは頭を冷やせてマシになるだろう、馬鹿！ ポンコツ！

イキリ眼帯！ ヒステリーツインテ!!」

「そんな愛情表現しなくてもめちゃんと分かってからさ！」

「ハートが強過ぎる!! 本当の事を言ってるんだ、一回明石に脳みその奥まで診てもらえ!!」

「提督……」

「ひよつとしたら私達、気に入られてるのかも！」

「気に入ってなあああああい!!!」

——十五時、演習まで後二十二時間。

「以上が演習での編成メンバーだ。選ばれなかった者は随時に頑張っ

てくれ」

演習の編成メンバーは鈴谷、加賀、金剛、長門、瑞鶴、古鷹。皆それぞれの目的を持って選ばれた艦娘達だ。

差別した奴らに見返す為、更生した自分を証明する為、■■■をぶん殴る為、そして前任を倒す為。これでこそ艦娘は初めて戦う意味を持ち、価値が与えられる。

「選ばれなかったからって訓練に参加しないでいいと思っただら大間違いだ。だがこれからも参加する者は気付いた時にはお前を置いていつて強くなっているぞ。以上だ、解散」

集まった艦娘達がバラけていく。訓練を続ける者、休憩する者、寮に帰る者と性格が別れている。演習は明日午後十五時、古鷹の為に特別なスケジュールを組んでいた提督。すると誰かに呼ばれた。

「提督」

「何だ長門」

「演習の編成なんだが……旗艦は私に任せてくれないだろうか」

自ら旗艦になりたいと申し出た長門。これには提督も少し驚いていた。確かに長門は実戦経験が豊富で、艦娘達をまとめるリーダーシップさもある。

「今度こそは必ず艦隊をまとめてみせる」

「……はーん、任せようじゃないかだったら全力でやれ、慢心は死だと思おう事だな」

「面白い、了解した」

「……よし古鷹!!」

提督は古鷹を呼び止め、スケジュール表を見せる。そのスケジュール表に古鷹は目を飛び出させた。何も特別に徹夜明けまで訓練をする訳ではなく、いつもの訓練とそう変わらない内容だ。

「あ、内容は厳しめだぞ☆」

「は、はあ……」

「俺は少なくとも十八時までには仕事を終えたい人でね。あー、お前らの言い方じゃヒトハチマルマルか。訓練は必ずヒトナナマルマル

に終わらせる。もしお前が物足りないっていうなら自主練しても構わない、だがしかし!! 身体を壊す様な事をするなら編成から外す、分かったな?」

「わ、分かりました!」

「つてな訳でプリンツ、全力で扱しどいてやれ」

「了解しました!」

隣にいたプリンツが敬礼し、古鷹を強制的に連れ込む。摩耶は通常通り近接格闘術を教えさせている。

そして提督は一人、工廠へ向かった。

「おい明石ーいるかー?」

「は、はい! 見ての通りここにいます!」

「見ても分からないから言葉で説明してくれ」

工廠は相変わらず暗闇で油臭い。これで本当に開発が出来るのか不安になるレベルだ。

「一番奥の机の下です!」

明石が手を振り、どこにいるかを教える。その場所へ向かう提督は明石の手を引っ張り、机の下から引きずり出した。明石は開発をしていたのか煤だらけである。

「何開発してたんだあ、せめて物騒なモノじゃないと良いんだが」

「い、いえいえそ、そんな物ではありません! 丁度加賀さんに頼まれていた流星ちゃんが出来る所なんですよ!」

「へえーにしては流星というよりも俺にはその奥にある液体つぽいモノが気になつて仕方ないんだがねえ」

「そ、そんな訳ないじゃないですか、流星ちゃんですよほら!」

明石の言った通り、艦載機流星とその妖精が出てきた。どうやら間違ではないらしい。色々言いたい所だが提督は話を続けた。

「……まあいい。それよりも明石、この改装設計図だが明日やつてもらいたい事がある。詳しくはメモに書いてある」

「分かりました……しかし提督、この改装設計図ってどこで入手したんですか?」

「ん? 俺の保管庫」

保管庫と答えられ、工廠を出ていく提督。改装設計図は通常、入手が困難な代物。提督はまるで依頼書のように手軽に持ってきたのだ。中将といえどそこまで権力があるのだろうか。

やがて夜になり、そろそろ就寝を迎える。その頃提督は南方の提督と元帥とで打ち合わせをしていた。

「演習開始時刻は午後十五時丁度、使用弾薬は演習用模擬弾薬、演習用艦載機。それ以外の弾薬、艦載機は禁止し、使用した場合は使用した方の負けとする。演習海域はこの■鎮守府近海、それぞれ第一艦隊を戦わせる事とする。間違いはありますか？」

『いえ、こちらは大丈夫です』

『大丈夫だよー』

「ありがとうございます。では演習開始直前なのですが、今回は鎮守府近海というよりも目視で簡単に確認出来る程の距離です。事故防止の為に私達は司令本部にて指揮を執り行います。そして艦娘達には司令本部の入室の一切を禁じ、広場にて観戦する形とさせていただきます。勿論貴方がたの艦娘を連れていただいても構いません」

演習に備え、スケジュールを確認する。ビデオ通話で話し合いは円滑に進んでいった。

『目視で簡単に確認出来るという事は近いですね……こちらでも注意をします』

「ありがとうございます ■中尉」

『私も司令本部という形かな？』

「はい、元帥殿は海軍をまとめるリーダーです。貴方の身に何かが起こる事は許されない、別室にてモニター越しに観戦していただけだと思います」

仮にも海軍のトップが演習の巻き込み事故で死亡したとなればビッグニュースだ。そうなればややこしい状況になるのは一目瞭然。基本、演習の観戦はあまり推奨されない。それ故に元帥は艦娘達の演習を指で数える程しか見ておらず、提督の演習を聞いては休暇を使つてでも観戦しようとしているのだ。

『分かった。承諾しよう』

「以上ですが何か質問はございますか？」

『ありません』

『無いよー』

「ではこれにて打ち合わせを終了とさせていただきます。皆さんのご健闘をお祈りします、地獄の果てというのを見せてやるから待ってい

ろ■■■中尉!!」

「喧嘩を売るな!!」

やっと打ち合わせが終了し、束の間の休憩をする提督。

夜二十一時。月の光が海を照らし、訓練に励む艦娘をシルエットで見えた。彼女達は今、何を考えているだろうか。

「さてこの演習が吉と出るか凶と出るか……見ものだ」

「気付いてくれるのか？」

「さあねそれはアイツら自身だ。まあ……期待する価値はある」

29. 戦闘中のお色気は程々に

演習当日。

雲一つない青空に迎えられ、青く澄み渡る海辺で艦隊が到着した。
十四時半、演習開始まであと三十分。

「どうよ提督」

「悪くない。だがもう少し露出を多めにするといい、相手の提督と元帥を悩殺す——」「やめろ!!」

相手側の判断を遅らせるために色仕掛けを仕掛けようとした提督。鈴谷もノリノリでスカートを短くしようとしたが摩耶によって中止となった。

「いやいや摩耶君、俺が勝つ為なら手段を選ばない事ぐらい分かるだろう?」

「ハア……演習当日なんだ、鈴谷達も緊張してる。あまり不安な事はしないでくれ提督」

「大丈夫だ死にやしねえ! 何かあったら俺が五百倍返しでぶちのめしてやる」

「はいはい分かったから」

提督はファイティングポーズを取り、威嚇する。

摩耶の言う通り、鈴谷を始め艦隊に選ばれた艦娘達は緊張している。何も初めてやるから緊張している訳では無い、皆それぞれの目的を果たせるかどうか不安だからだ。他の艦娘達には今日の訓練は中止、自由にさせている。

「提督さん……私は、大丈夫かな?」

「知るか。お前の実力はお前が知ってるはずだ、俺に聞くんじゃない鳥頭」

「提督、演習時は演習用模擬弾薬か?」

「ああそうだ。ペイント弾とは違うぞ慢心するなよポンコツ。あ、そうだ」

プリンツが台車で何かを持ってきた。その何かとは明石に施してもらった改装設計図や模擬用三式弾などの普段は見られない物。そ

れを提督は手渡しで金剛や加賀、鈴谷に渡した。

「使い方はお前ら次第だ、いいな？」

「これって……」

「司令官!!」

岸辺で戯れていた提督達を呼んだのは朝潮だ。どうやらこの反応は南方の中尉と艦隊が到着したらしい。朝潮の報告を受け、広場へ向かった。

「この日が来ましたね……」

「ああそうだな。計画じや秘密裏にボコって欲しかったが、そういう訳にもいかなくてなあ。こちらは全力でお前らを叩きのめす事にした。楽しみにするがいい」

「そういうと思つて私も最強の艦隊を連れてきましたよ」

中尉が引き連れた艦隊のメンバー。それは旗艦赤城改、武蔵改二、山城改二、北上改二、神通改二、綾波改二。昼戦夜戦共に優れた編成だ。火力の桁が倍以上過ぎる。

一方こちらは旗艦長門改、金剛改二、加賀改、瑞鶴改、鈴谷改二、古鷹改。天と地の差だ。

「やるからには、全力です……貴方だけには」

「面白いねえ……」

ニヤニヤしながらも不安でしかない提督。マジで負けそう、と心配でしかない。だが余裕の表情は絶対に変えない。両者とも睨み合う。すると到着した元帥が中を割って入ってきた。

「来たよー白くん、■■■くん！」

「元帥殿、よくここまで来てくださいました」

「いやいや南方からここまで来た君も凄いよ？」

「いえいえ私なんて……」

「……司令官だ!!」

更に元帥と提督達の話割って出てきたのは駆逐艦と軽空母、そして戦艦の艦娘。皇月、瑞鳳、ガングートが提督の目の前に出てきた。

「会いたかったよー司令官ー！」

「提督、大丈夫？ 嫌な事されてない？」

「私が直々に来てあげたぞ。感謝するんだな！」

「まだ話してるんだから静かにしてろ馬鹿共!! 摩耶ア!!」

「へいへい」

臯月達の対面を一時摩耶に任せ、大人だけで話し合う提督。といつても挨拶と世間話程度なので気休め程度だ。

だが元帥の前ではちゃんと正しくしていなければならない。

「それで白くんの艦隊は？」

「今は演習海域にて待機させています。いつでも演習は開始出来ますよ」

「それだったら私の艦隊も待機させましょう。綾波、皆を連れて待機場所へ」

「分かりました」

中尉の命令により、旗艦赤城の艦隊は待機場所へ向かっていった。元帥と提督達、そして引き連れた艦娘達が広場に残される。

「では話も進んだという事で……摩耶、プリンツ、二人を仮司令室にご案内させなさい」

「分かった」

「分かりました！ では元帥さん、こちらにご案内します！」

摩耶は中尉を、プリンツは元帥を特別に建てられた仮司令室へ案内した。司令本部にある複数の多目的室を改装して作られた仮司令室。作戦指揮の為に用意されたモニターやマイクなどが揃えられている。机や椅子も新品だ。

なお提督の自腹である。

「んでだ、何故にお前らが来た」

「もう一回司令官に会いたかったからー！」

「心配だったから、元帥に聞いたらちようどよくこの演習があるって来ちゃった」

「ビスマルクの奴が任務で行けないから代わりに行ってくれと言われ、私が来てやったのだ。全く……貴様がこの鎮守府に配属されたと聞いた時は驚いたものだ」

臯月、瑞鳳、ガングートも提督に育て上げられた艦娘の一人。彼女

らも大本営直轄の艦隊に属している優秀な艦娘達だ。

「とにかくだ、邪魔はするな。このポンコツ兵器共とどうしようがどうでもいいが騒ぎだけは起こすな、演習中は何もかも手出し無用だ、いいいな？」

「分かってるよ！　　この艦娘達より僕達の方が強いしねー」

「摩耶さんと北上さんには到底及ばないけどね……」

「フン、安心しろ。もし貴様の事を悪く言う奴がいたら銃殺刑だ」

「それがいけないって言ってんだよ!!」

司令本部では摩耶が中尉を仮司令室まで案内させていた。外ではこの艦娘達が徐々に集まってきている。余程演習が気になるのだろう。

恐らく白さんの命令だと思うが。

「摩耶が参加しないと……少し計算を見誤りましたね」

「そうだな、私は参加しない。あくまでもこの艦娘達を戦わせるんだ。提督は……それにしてもアンタも酷だな、北上を入れてくるなんて」

「摩耶を想定していた編成です。仕方のないことですよ」

「……そうか」

摩耶と北上。もし戦えば史上最大の戦闘になる。この二人はある関係にいるのだ。

やがて提督と元帥、中尉が司令室に辿り着き、旗艦赤城の艦隊も待機場所へ到着。

天気は良好、両者共に戦闘準備、開始の合図がなるまで待機する。

勿論両艦隊の艦娘達は相手が誰なのか知らない。これはあくまで演習、知り得ない敵に対処する為の特訓だ。部活という練習試合に過ぎない。

「演習開始の合図は元帥殿にお願い致します。なおこの声は元帥にか聞こえておりません。相手側の声は私には聞こえておらず、あちらも私の声は聞こえておりません。元帥殿だけが両者の声を聞いております。中尉にもご確認をお願いします」

『オツケー、■くん大丈夫？』

『大丈夫です』

『大丈夫だってー』

「ありがとうございます。では演習開始の合図をご自身のタイミングでお願いします」

それぞれ離れた司令室で会話をする三人。情報漏れを防ぐ為に提督が考えた策だ。それぞれ明確な指揮が取れるように配慮されている。

だがしかし勝つ為には手段を選ばない提督。南方提督からの音声はダダ漏れである。

「(相変わらず汚い……)」

「おーい聞こえてるかー?」

『こちらは大丈夫だ、いつでもいける』

「ならばよし」

演習開始の合図は元帥に委ねられた。

長門達はそれぞれの目的の為に今まで訓練を積んできた。最初は半信半疑で殺意とあったが今はその気持ちは自然と無い。提督は自分達に立ち直れるチャンスを与えてくれたのだ。

もし提督がいなければこんな事にはならなかっただろう。

強くなれる事も出来なかっただろう。

「(奴らを見返す為!)」

「(陸奥を救う為)」

「(■■■■をぶっ飛ばす為)」

「(前任に復讐する為!)」

『全力でやるぞお前らア!!!』

「二了解!!!」

『演習開始!!!』

「複縦陣、加賀瑞鶴は索敵と制空権確保、それと同時に他は北上に全艦砲撃」

「輪形陣、対空戦闘用意!! 赤城と山城は索敵と同時に制空を優勢に、

他は加賀を狙え！ 北上は先制雷撃!!」

元帥の合図と同時に提督と中尉は艦隊に命令する。それを聞いた各艦隊は一斉に動き出した。演習海域は判決約十キロメートル内の鎮守府近海。通常の戦闘と何ら変わりはない。

「敵確認！ 戦艦二隻、空母一隻、雷巡一隻、軽巡一隻、駆逐艦一隻！」

『魚雷に気をつける。奴の北上は甲標的を装備していた。気を張れ』

「敵確認しました。戦艦二隻、空母二隻、航巡一隻、重巡一隻です。制空権はあちら側に取られました」

『対空への意識を忘れるな、先制雷撃は済んでいる』

提督が一番懸念しているのは相手側にいる北上の存在。北上は重雷装巡洋艦、甲標的さえ持てば唯一雷撃を先制攻撃出来る。尚且つ夜戦においては最強と思わせる戦闘能力を持ち合わせており、昼戦だろうと油断してはいけない。

「鈴谷避けて!!」

「え」

古鷹が指示を促す。だが時すでに遅し、北上が発管した魚雷は恐るべき速度で鈴谷に直撃。

だが古鷹の判断により轟沈判定は間逃れた。

鈴谷は大破判定になる。

「やはり避けられないか……仕方ない。金剛、鈴谷を護衛しつつ単縦陣を変更だ」

『こちら長門。提督、相手側にも少々のダメージを確認。このまま接近しつつ対空に意識させようかと思う』

「成程いいだろう、やれ」

提督が頭を悩ませる。重雷装巡洋艦である北上は必ず最初にやっておかなければならない。何より提督がそれを一番理解していた。

何故ならあの北上は提督が育てた——摩耶と唯一並ぶ最強の艦娘だからだ。

「山城が小破判定かあ……やってくれるじゃん流石私の元提督……」

——少し本気出しても良さそうだね——

北上の細目が僅かに開き、光って見えた。それと同時に武蔵は空へ砲口を向ける。

「そして加賀と瑞鶴が繰り出した爆撃機や攻撃機を――、
「だ、そうだ提督」

『構わない。全力で叩き潰せ』

たった一回の砲撃で全て破壊した。

「全て……撃破……」

『怖気付くな、これぐらいのパターンは分かっているはずだ。今すぐ行動に移せ』

「りよ、了解！」

30. 山水三千世界を万理一空に入れ、満天地とも攪る

「やってくれるなあ北上、流石俺が育てただけある」

北上と摩耶は海軍最強と謳われた艦娘だ。

提督と二人が共にいた鎮守府では演習は必勝、狙いは百発百中、敵を完膚なきまでに全滅させる存在。唯一深海棲艦が最も危険視していたと言われている。対空は摩耶が制し、雷撃は北上が蹂躪する。全艦娘に匹敵するその力は味方である海軍さえも恐れた。

本人の希望により、北上は新しい提督と共に危険な南方の鎮守府へ、摩耶は提督の元に配属。その力を大いに発揮した。

そしてこの演習でも――、

「鈴谷が大破かあ……当たったみたいだねー、どうする赤城ー？」

「このまま普通通りにやるわ、行きましょう」

互いに距離を確認、射程距離まで接近する。空では戦闘機や攻撃機が航空戦を繰り広げていた。加賀と瑞鶴、赤城と山城は空に意識を向けている。依然制空権は加賀達が有利だ。

ようやく肉眼で確認出来た、互いに射程距離は充分にある。相手は殆ど格上、勝てる見込みは殆ど無い。それでも長門達は勝ちたい気持ちで溢れていた。

「鈴谷……！」

「加賀さん、頑張つて……」

広場では多くの艦娘達が観戦していた。選ばれた艦娘を見守る者や蔑む者、応援する者と大勢だ。そこには最上や天龍、飛龍と蒼龍と差別された側の艦娘達。そして皐月や瑞鳳、ガングートも眺めていた。

「負けたら承知しねえぞ……瑞鶴！」

「天龍、ジャンケンで負けたんだってな」

「選ばれなかった木曾には言われたくねえな」

「なあに次こそ選ばれてやるさ」

「同じく同意見だ」

「……頑張ってくれ、お前ら……!」

「……頑張ってるなあ、加賀さん」

「身体を休めて、あか——」「信じてますよ、大丈夫です。加賀さんならやれます」

「……」

砲弾が青い海を飛び交い、海柱が上がる。容赦ない砲撃の弾幕に怯みつつあった。

だがそんな悠長な事は言っていられない。

相手を見定め、移動地点を予測、砲撃。

必ずしも当たらない訳では無かった。訓練の成果は発揮出来ている。とはいえダメージはまだ低い。

「主砲、放て!!」

「第二次攻撃隊、発進」

「弾着観測射撃、始めるよ!!」

「っ!! 伏せて長門!!」

加賀の掛け声に反応する長門。だが目の前には幾数もの砲弾が。北上と赤城を狙い過ぎた余り、武蔵に集中出来ていなかった。もし喰らえば轟沈判定は間違えない。

万事休すか、そう思った。だが——、

「金剛!!」

長門の目の前に金剛が咄嗟に現れた。金剛は砲弾に向かって砲撃、砲弾同士を直撃させ相殺する。しかし中破判定を食らってしまった。

現在

旗艦長門、被弾ゼロ

加賀、被弾あり

瑞鶴、小破判定

金剛、中破判定

鈴谷、大破判定

古鷹、小破判定

旗艦赤城、被弾あり

武蔵、被弾ゼロ

山城、小破判定

北上、被弾ゼロ

神通、被弾あり

綾波、小破判定

「やはり高速戦艦……移動が素早いな。おかげでこちらの山城は貴様に翻弄され小破判定だ……だが!! これに耐え切れるかな?」

武蔵が身構える。砲弾を三式弾に切り替えた。一方で金剛も新しく装備した模擬用三式弾に切り替える。

『……本物か、アレは』

「ほう面白い!! そちらの金剛も持っているのだな!! だったらどちらが先に倒されるか我慢比べと行こうか!!!」

「艦隊、緊急回避!!」

「こちらも動きましよう!! 武蔵さん!!」

『やはり三式弾の使い方はどちらも特殊なようだ、白さん』

『……だろうな』

旗艦である長門と赤城が命令を出した。三式弾は元々敵艦載機を破壊する為や飛行場を破壊する為の物。本来は艦隊に向けるものは無い。

だがそんな事など本人はとうに知っている。それでも武蔵と金剛は艦隊に直撃すれば持続的にダメージを与える事を知っている。両艦隊ともそれは避けたいはずだ。

「勝つのは……」

「私だ!」

「私ネ!!」

互いに一斉砲撃。撃たれた三式弾は一気に展開、焼夷弾子がばら撒かれる。敵機諸共追撃し、やがて艦隊に辿り着く。

不幸な事に武蔵の三式弾の方向は長門達に真っ直ぐ直撃。金剛の三式弾は僅かに狙いを逸れた。

『旗艦長門小破、金剛大破、加賀小破、瑞鶴中破、鈴谷大破、古鷹中破

!!』

「よく耐えた……がそこで諦めるつもりは？」

『無い!!』

「よーしならば行くんだ。綾波に気をつける、お前らも分かっていると
は思うが正確に着弾させている。加賀に任せてみる、古鷹は加賀を守
りつつ距離を取って攻撃。長門はまだ損害が少ない、攻撃は最大の防
御だ。少しずつじわじわと相手の艦装を攻めてみる。瑞鶴は出来る
だけ艦載機の矢を加賀に渡しながら周辺を警戒、中破だったら出来る
事はそれくらいだ」

長門ではなく古鷹が答える。古鷹以外のメンバーも同じ気持ちだ。

大破した鈴谷を護った金剛は大破判定に。瑞鶴も中破判定、飛行甲
板がボロボロだ。古鷹も少々疲れが見えている。

だがこの六人はそんな事で諦めるバカでは無い。勝つ為に彼女ら
は戦っているのだ。

「瑞鶴が……!」

「あの三式弾の使い方は初めて見た……あれだけのダメージとは
……」

「チツ……」

「もう無理なはずだよ……何で終わらないの……?」

遠くて観戦していた最上達。こちら側の劣勢に焦りを感じていた。

実力は天と地の差、南方の艦隊の方が格上に決まっている。

それでも彼女達は諦めない。

「多分……長門さん達は何か目的があるんだよ」

「目的……?」

「分からないけど……きつとそうなんだと思う、そういう顔してる」

「だからよく見るといいゴミしかない鉄屑共、銃殺刑にされたくな
ければ彼女達の勇姿を見届けるんだ」

「加賀さん達の勇姿……!」

『旗艦赤城小破、武蔵被弾あり、山城小破、北上被弾ゼロ、神通小破、
綾波小破です』

「単縦陣に切り替え追い詰める、相手はかなりの深手だ……左から一気に畳み掛ける」

『了解です』

中尉の指示通りに赤城達は一気に攻め込んだ。それに気付いた提督は指示をする。

「奴らは一気に畳み掛けるつもりだ、恐らく正面からではなく右回りからT字戦有利に持ち込むはず。単横陣を維持、正面からの砲撃で迎え撃つ」

『了解!!』

「……さてどう動くか……鈴谷、加賀」

通常艦娘は側面からの攻撃に弱い。

何故なら艦娘の艦装の砲門はほぼ正面に向いているからだ。であればそこで単横陣に切り替えれば正面から全砲門を相手側に向けられる。それは相手も同じ事。

「大丈夫か鈴谷！ 金剛！」

「うん……大丈夫、まだ戦える……」

「大丈夫……まだ行けるネ……!」

「ごめんなさい加賀さん……私……」

「大丈夫よ、私に任せなさい……長門、提督の言う通りに相手艦隊が右回りから攻めてきたわ!」

「分かった、急ごう! 話している時間は無い! 主砲、撃て!!」

右回りから。つまりは相手は単縦陣か単横陣の可能性がある。そして未だに大破すら追い込めていない上に満身創痍な自分達を徹底的に畳み掛けるつもりだ。

依然こちら側は航空優勢、弾着観測射撃も可能。

「また撃破されたッ! あの武蔵……予想以上に厄介よ……つてまさか!!」

赤城が弓を構える。放つ矢の名は天山と彗星。加賀達の艦載機を撃破したのは武蔵達では無い、赤城の攻撃機と爆撃機だ。こちらに真っ直ぐ向かってくる。

『成程……お互い勝つ為ならどんな手段でも使おうってか……似た者同

士はキツいな』

「対空戦闘準備!!」

加賀の声に長門が全員に呼び掛けた。赤城が繰り出した艦載機を撃ち落とそうとする。精一杯の対空攻撃で何機か撃破するも発射された魚雷が直撃する。

「しかも通常戦闘に使われる本物だ、演習用じゃない。これがジジイにバレれば大本営で議会モノだあ、だがジジイもそれを分かって許している。何故かは分かんが……」

「ルール違反もいいとこだな」

「何を言う摩耶、俺だってルール違反の一つや二つやっている、だがそれは例外だ。恐らくジジイと中尉は敢えてわざと本物を使っているのだよ……アイツらを確かめる為に」

「確かめる、ねえ……」

提督が元帥や中尉を睨む。本物の三式弾、本物の天山や彗星。本来であれば演習はとっくに終わっているはずだ。勿論こちらの勝利となる。

だが元帥は演習終了の合図を出さず、悠々と観戦していた。実際長門達を確かめるのかも怪しい。自身が演習を観戦したいという欲の為に知らないフリをしているのか、はたまたボロボロの艦娘達を眺めるのが好きなの変態か。何を考えているのか分からない。だから提督は元帥の事が嫌いだ。

「敵艦隊確認、砲雷撃戦始め!!」

「主砲狙って……撃てッ!! ぐわッ……!!」

「私が肩代わりに……グッ!」

「瑞鶴!!」

「瑞鶴、大破判定。このまま雷撃戦に移るよー」

「トドメは任せます」

赤城達の一方的な砲雷撃戦により、更にダメージを負う長門達。長門と古鷹は中破判定、金剛と鈴谷と瑞鶴は大破判定、加賀は小破判定。砲弾と魚雷がこちらに向かってくる。

それに構っている暇も無い。

砲弾が頬を掠め、脚に直撃する。

飛行甲板もほぼ使用不可能、相手は容赦無く襲い掛かる。北上の魚雷が鈴谷と加賀に向かっていった。判断が遅れたのか鈴谷と加賀は

「鈴谷あああ!!!」

「加賀さん!!!」

——私達は馬鹿な艦娘だ。

——仲間を蔑み陥れ、何も出来なかった哀れなクズ。

——目が覚めても己の不甲斐なさに心が押し潰されそうだった。

——私達は今まで何をしていたの？ 友達を仲間を家族を、私は全て見下していたの？

——……そう、見下していた。私達は優秀だと思い込んで弱者を踏み躪り、強者として戦ってきた。所詮は弱肉強食、弱ければ死に、強ければ生きる。それが正義だと思い込んで。

——だけどそれは全て幻想に過ぎなかった。私達が目を覚ました時は地獄でしかなかった。特定の艦娘だけ私に怯え、姉妹である最上や熊野、仲間の飛龍達でさえも怯えていた。

——私達は全てを察した。そうか私はこの鎮守府ではあの悪魔共の仲間なんだと。二度とあの仲の良い関係は戻らないんだ、と。

——それでも私達は謝りたかった。自分のした行いに対して何度も何度も土下座して謝った。一回、大丈夫だと言われた事もある。その時は少し嬉しかった。でも提督が言うように私達は『許す』の一言すら聞いていない。

——だから今まで心の隙間が開いていたままなのかもしれない。嬉しくても悲しかったのかも知れない。被害者の本当の気持ちすら

理解していなかった馬鹿だ。提督にポンコツ兵器と呼ばれても何もおかしくない。

——愚かな事に私達は償う為に差別を無くそうと前に進もうとした。だけどその巨大な組織力と圧倒的な力を前にそんな事は出来なかった。

——何が償いよ、何が関係を戻したいよ。理想ばかり追い求めて現実を見ようとしな。目が覚めても結局は何も出来ないポンコツだ。提督の言っていた事は全て当たってる。

——だけど提督はそのポンコツ兵器である私達を支えてくれた、手伝ってくれた。今度こそ反抗出来る、戦える。だから——、

『お前らは何も出来ないポンコツ兵器だ』

「……何も……出来ない訳じゃない……!」

倒れた鈴谷と加賀が最後の力を振り絞り、立ち上がった。

血反吐を吐いてでも身体が悲鳴をあげても戦おうとする意志が彼女達を立ち上がらせたのだ。

「私達には私達なりの……!」

艦装を掴み、弓を握る。その痛ましい姿と勇気ある行動に皆注目していた。

「償いがあるんだから……!」

魚雷を受けてもなお立ち上がる鈴谷と加賀。轟沈判定に近い加賀、轟沈判定の鈴谷は立つことすらままならないはずだ。

提督のおかげで奴らに刃向かえる力がある。反抗出来る力がある、野望を叶える力がある。

「例え逆境に阻まれようとも……!」

「例え足を一本失ったとしても……!」

「例え誰かに馬鹿にされても!!」

「例え誰かに差別されようとも!!」

徐々に鈴谷と加賀の身体が淡く光り出す。

「私達は!!」

諦めていない。

「皆や熊野達に!!」

「赤城さんや飛龍達に!!」

命ある限り。

「謝らなきゃいけない!!!」

今度は本当の自分を曝け出して。

「だから……!!」

どうしても勝ちたいんだ。

「負ける訳には……!!」

目が覚めた自分を見て欲しいから。だから負ける訳には――、

「いかないんだアアアアアア!!!」

叫んだ途端に鈴谷と加賀が光に包まれる。

加賀の正装が一変し、飛行甲板が砲台へ変貌した。

砲撃や魚雷によってボロボロの服装は修復され、壊れかけた艤装は更に新しい装備に生まれ変わる。

艤装が変形し、幾つもの砲塔が出現。戦艦の様な艤装に生まれ変わった。

改装設計図が光となって消えていき、鈴谷と加賀の中へ取り込まれる。

「何あれ!! 鈴谷が光ってる!!」

「加賀さんも! なのです!!」

「まさかつ!!」

観戦していた艦娘達も驚いていた。突然の変化に目を輝かせている。一方で悔しがる者もいた。

「凄いよあの加賀さん!!」

「ガングートさん……あれは……」

「ああ……改装だ」

ガングートが最上達を見る。鈴谷と加賀の本心を聞いた彼女達は
何を思っただろうか。

「鈴谷……」

「加賀さん……」

「白さんまさかそこまで……っ!!」

「ほう……そう来たか白くん」

「……当たり前だ、まあ少し焦ったけどな」

光に包まれた鈴谷と加賀が光を放って再び現れた。改装設計図を
使った事で新たな艦娘として生まれ変わったのだ。

「改鈴谷型航空母艦、鈴谷……」

「加賀型戦艦、加賀……」

「「出撃」」

31. 「友愛」

『鈴谷は優しいね、安心させてくれる』

『そう言っ手伝ってくれる加賀さんはとても良い人だよ』

誰かの声が聞こえた。とても懐かしく、そして聞き覚えのある声。誰だかは分からない。でもその声を聞いて鈴谷達は――、

――立ち上がる。

「負けない……!!」

戦艦として一時的に生まれ変わった加賀と軽空母として生まれ変わった鈴谷。二人の存在感は全ての注目を集めた。

「戦闘中に改装だとツ!? 一体どうやって!!」

「驚いている暇はないわ武蔵! あの子二人を優先して!!」

「長門!!」

「ああ!!全艦、攻撃開始!!」

長門は二人を中心に戦闘を再開、護衛しつつ砲撃を開始する。赤城達も咄嗟に戦闘を再開させた。

『加賀、その改装は時間制限付きだ。効率良く使え』

「了解したわ……ありがとう」

『……構わない、全力でやれ』

加賀は重い艦装を展開し、全門斉射。砲撃の弾幕は赤城達を襲い掛かった。赤城が出した攻撃機によって損害を受けるも、絶え間ない砲撃で武蔵や綾波に直撃する。

「やはり隠し持っていましたか……そちらの加賀さんは……!!」

「とっておきは最後に残す派なのよ」

「行くよ……攻撃隊発艦!!」

クロスボウのような物で攻撃機を発艦する鈴谷。狙うは自分を大破まで追い詰めた北上、今度は外さない。やばいと思ったのか北上も冷や汗を流し跳躍、撃ち落としつつ魚雷を発射する。

しかしその魚雷は全て金剛によって防がれた。

「金剛!!」

「いいから早く!!」

それに合わせて長門達も砲撃。

同時に古鷹も主砲で砲撃、魚雷を発射する。

鈴谷が発艦させた攻撃隊により、気を取られてしまったおかげで無駄なダメージを負う神通、綾波。新たな戦艦である加賀の存在は脅威でしかない。鈴谷達の影響により戦況は変わりつつある。もう少しで押し込めば勝てる。

「このままでは押されてしまいます! 赤城さん!」

「対空攻撃をやめないで! 武蔵!」

「分かっている!!」

「……チツ……提督には悪いけど、面倒だから近づかせてもらおうわ!」

『ダメだ北上、戻れ!!』

しかし北上は単騎で長門達に突撃した。接近する北上に気付いた鈴谷と加賀は近づかれる前に倒そうと全力で止めにかかる。

『陣形は輪形陣を維持、北上を止めろ!!』

「了解!!」

『陣形はそのまま維持だ。加賀は北上に集中砲撃、その他は鈴谷と加賀を全力で護れ。ここが正念場だ』

「了解!!」

北上は単騎で海を駆け走っている。

次々に来る砲弾の雨を回避。魚雷を投げナイフのように持ち、海に発射させる。

軽やかな動きで迫り来る攻撃を華麗に回避していく。

中々攻撃が当たらない。北上一人で長門達を追い詰めていく。

砲撃も当たらない、魚雷も当たらない、一方的に蹂躪していく。北上の本領発揮だ。

「夜戦前に全員沈もうか!!」

夜戦をやるまでの相手ではないと言葉でさえも追い詰める。それでも鈴谷達は諦めない。

「……負ける訳にはいかないのよ……!! この海に立つ私達には……」

!! 成し遂げなければいけない野望がある!!」
負けたくない。

謝りたいんだ。

「大した野望だねえ」

新たな姿と力で。

更生した自分の姿で。

「私達は今まで醜く生き抜いた！ だから皆に謝らなきゃいけない!!」

勝ちたい。

存在を示す為に。

「醜いねえ」

勝たなきゃいけないんだ。

二度とあんな思いはしたくない。

「この姿を笑う奴がいるかもしれない！ それでも私達は前を向く、後ろには引かない!! ずっと!! この先もツツ!!」

全力で、力ある限り。

「……だったら……その姿を証明してみてよ!!!」

二人の勇姿に敬意を払い、北上が挑戦を受けた。雰囲気ガラリと変わり、細い目が開く。

初めて見せた瞳で鈴谷達を再確認した。

両腕を少し広げ、風を纏う。

水しぶきが上がる。本気を出すつもりだ。

そして鈴谷と加賀も背中を合わせる。

同じく風を纏い、艤装を構えた。真剣な眼で北上を睨んだ。

『まさか……』

『流石に止めないとまずい!! 赤城早くしろ!! このままではあの鈴谷達がどうなるか分からない!!』

提督が危険を察知し、中尉が慌てて命令する。こうなれば北上が止まらない事を二人は知っているからだ。殲滅するまで戦うのをやめ

ない北上。止められるのは、摩耶一人のみ。

先制攻撃は加賀。今持ちうる全ての弾薬を使い果たす。全門斉射された砲弾の雨が北上に一直線へ向かっていった。

北上は急発進、急加速。海上を低空飛行し、砲弾の雨を回避。加速したまま真つ直ぐ鈴谷達に接近する。

「(良いねえ……!! ありつたけを!! 全力でかかってきなッ!!!)」

次に鈴谷が艦載機を繰り出した。蝙蝠の集団の様に無数にある。

今までこんな事が出来るなんて夢にも思わなかった。醜い自分達が己自身の野望の為に戦っている。些細な事なのかもしれない。ちっぽけな勇気かもしれない。

それでも勝ちたい。

本心が震えていた。

血湧き肉躍る、と。

最後まで戦い続けてやる、と。

「提督……」

『ん?』

北上が魚雷を一斉に発射。左手を前に出し、右腕を引く。

艦載機を一斉発艦。北上に爆弾を落としていく。

「……ありがとね」

もう阻止は不可能か、そう思えた。

『演習終了!!』

元帥の声が響いた。その声に合わせて長門達や赤城達は攻撃をやめる。そして北上も殴る寸前でストップ。腕を構えたまま身体が止まり、一斉に水柱が上がる。

『演習は終了ね!! もう君達は充分に戦った、成長もした、もういいだろう!! 白くん、■くん、分かったね?』

『……分かりました』

『……分かりました。では元帥殿、勝敗をお願いします』

『勝敗は…… ■■■くんの艦隊、戦術的勝利!!』

「チツ……終わりか……っ?」

「……まだ終わってない……私はまだ……」

演習終了の合図と勝敗の有無を聞いて鈴谷は崩れ落ちた。どうしても戦わなければならなかった、どうしても勝たなければならなかった。だが演習は終わってしまった、夜戦もせずに。絶望に打ちひしがれる鈴谷と加賀に北上は言葉足らずの応援を送る。

「あー……その、鈴谷と加賀だっけか。強かったよ、正直面倒くさかった」

「でも私は……負けた……」

面倒な事が嫌いな北上。

深く溜息を吐いて、言葉を吐き捨てその場を去った。

「……そう思うのはまだ早いかもよ、んじゃ私はこれで」

座り込む鈴谷に寄り添う長門達。加賀もまた信じきれない顔をしていた。正規空母に戻り、艦装の負担で倒れ込む。瑞鶴と共に肩腕でお互い支え合った。顔は下を向いたまま、何も話さない。

皆放心状態だった。結果は誰もが分かる。勝ってみせると思っていたからだろうか、提督の期待にも応えられず、長門達にとって敗北の字を受け入れる事は簡単に出来なかった。

「ありがとうございます……また機会があればお願いします」

「白くん頑張ってるね」

「はい、ありがとうございます」

南方の中尉は艦隊を引き連れ、ヘリで帰投。元帥も送迎用のヘリで帰っていった。残ったのは何故か皐月と瑞鳳とガングートのみ。

「何故お前らは帰らない」

「元帥から三日間ぐらいならここに居てもいいって許可貰ったから、居残る事にしたの」

「あのクソジジイめ」

「これで司令官とまた一緒にいれるよ!」

「お前らが居て迷惑でしかなかったのを覚えてるか?」

「ありがたく思う事だな」

「残念な気持ちでしかないねー」

どうやら元帥の気まぐれで皐月と瑞鳳とガングートは三日間程滞在するらしい。こちらとしては凄い迷惑だ。派手な行動はよしでもらいたい。

「さて……」

プリンツに皐月達の案内を任せ、摩耶と二人で執務室に向かう。執務室に入れば見れば分かるほどの喪失感が漂っていた。

長門達が顔を俯いたまま、机の手前で立っている。提督はそれを確認し、椅子に座って長門達の顔を覗いた。

「見事にやられたな」

提督が摩耶が作った演習の報告書を読み上げる。

「……旗艦長門大破、金剛轟沈判定、加賀大破、瑞鶴轟沈判定、鈴谷被弾ゼロ、古鷹大破。色々あってこのザマだ」

報告書を机に投げ出し、足を組む提督。期待に応えられなかったのが苦しいのか目すら合わせない。

「……もう、反論の余地も無い」

「だろうなあ、だが行動自体は悪くなかった。もう少し強くなればアイツらの一人ぐらい大破に持ち込めただろう」

爪の間のゴミを取り除き、どこかへ弾き飛ばす提督。長門達の不穏な空気など気にせず、気楽に喋りだした。

「アイツら相手に善戦したんだ誇りに思え。他の奴らだったらワンパンKOだったんだ、ましてや最強の艦娘と呼ばれた北上相手によく戦えたもんだ」

最強の艦娘、北上。

本物の天山、彗星。

本物の三式弾。

イレギュラーをこじこじ尽く受けた長門達は善戦していた。本来であれば他の艦隊など塵と化していただろう。少なからずも小破まで追い込む事は出来た、訓練の成果はちゃんと出ていた。

「……何か不服そうだなあ鈴谷」

納得のいかない敗北に悔しがる鈴谷。今思っても反省点が山のように浮き上がる。ようやく新しい姿で戦況が変わりそうだったのに、今度こそ見返してやると思ったのに。こんな結果はあまりにも悲し過ぎる。

「勝てなかった……」

「そうだなあ、メツタメタのボッコボコだ」

「勝てなきゃ何も出来ない……のに……」

「そりゃあ残念だ」

「最上達にも謝れない……!」

目に溜めた涙を手で覆い、腰を下ろす鈴谷と加賀。あの惨めな姿を見て皆はどう思ったのだろうか。恐らくざまあみろと思ってるはず、いやそう思ってくれた方が良いのかもしれない。

どうせ自分達は誰一人倒せずに負けてしまった無能な鉄屑だから。

「……言っておくが……勝ってるぞこの演習」

「……え」

「アイツらは元々負けるつもりで戦っていた。あからさまにルール違反していたからな、恐らくお前らを確かめてたんだろう」

武蔵が本物の三式弾を使用していた辺りから既に勝敗は決していた。相手がルールに違反すれば自分達の勝利となるこの演習。恐らく南方の中尉は負ける事を前提で演習に挑んだのだろう。この鎮守府の艦娘達が立ち直れるように。恐らく元帥が後ろで糸を引いているに違いない。それを思わせる行動が密かに確認出来たからだ。

そして今、元帥はこの演習をわざと戦術的勝利と判断し、密かに処理させている。ただでさえ演習申請もせずに秘密裏に行われたこの演習、バレれば大目玉を食らうのは元帥なのだ。元帥自身も色々な事を含め、丸く収めて欲しかったのだろう。

「それにお前らの考えも少しは理解してくれたようだぞー」

執務室のドアから最上や熊野、飛龍や蒼龍、その他の差別された艦娘達がゾロゾロと入ってきた。

「鈴谷……その……」

「……」

「……本当はとても怖かった。目を覚ましたと聞いても信じられなかった。また何かやってくるんじゃないかと思ってた」

「私も同じでしたわ……姉である鈴谷に散々な目に合わせられて突然謝ってきたと思えば操られてたなんて言い訳、信じられるはずがありませんもの」

「……だよね」

提督の言う通りだ、自分達は全く許されていない。鉄屑が何をしようがもう無駄なんだ。

「でも……もう良いんだ、あの時の演習で聞いただけで分かったよ……本当は許せなかったけど、今なら言える……」

「許してもいいかな……って……」

「最上姉……熊野……」

「加賀さんのあの姿、とても格好良かったよ!! 凛々しい姿をした戦艦の加賀さん!!」

「加賀さんならまた倒せるよ!!」

「飛龍……蒼龍……」

「……はあ……もう……この辺にしておきましょうか」

悲しみの涙が嬉し涙と変わる。滝のように流れ出す涙。拭いても拭いても止まらない。

「鈴谷」

「なに……?」

「あの事は許します、また仲良くしよ?」

「加賀さん。貴方の事は許しますし、水に流しましょう。また私達の手を取ってくれますか?」

他の艦娘達も賛成していた。何も同調したから賛成した訳では無い。この二人が本当に謝りたいという気持ちを目の前で教えてくれたからこそ初めて許すという感情が芽生えた。決して態度や言葉でも無い、自分が起こした行動で自分を証明したのだ。

「うあ……あ……」

鈴谷と加賀は溜まっていた感情が爆発。

その場で泣き崩れ、艦娘達にしがみついた。その姿を見て皆励まし

ている。答えてくれなきや困ると笑いながら話していた。鈴谷と加賀は泣きながら何回もはい、と答えた。話せる限り、時間のある限り、答えた。

誰かが思う。

その光景はどこか、いつもの日常に見えた気がした。

「……さて、他の四名だが……」

「っ！」

「お前ら全然まだまだ訓練が足りないようだ！ 本当に俺らが教えた事を実践したのかあ？ どうせロクに成長もしないポンコツ兵器共だ、一度イギリス海峡に行つてロイヤルネイビーに扱かれてくとい
！ 以上だ馬鹿共オオ!!!」

長門達にありつたけの罵詈雑言を浴びせる。一人ずつ指をさしながら、嘲笑つた。それに対し、瑞鶴が反抗する。

「提督さんの指示が悪かつたんじゃない？」

「人に責任転嫁とは落ちる所まで落ちたようだな、頭の中が楽しそう
で何よりだよ!!」

「一々提督さんは煽らなきやいけない身体なのかな、今までの雰囲気
がぶち壊しなんだけど!!」

「黙れ、ここは俺が仕事をやる場所だ俺に主導権がある!!!」

提督と瑞鶴が取っ組み合いになる。お互い手の平を合わせ、口喧嘩
が勃発した。両者負けじ睨み合いながら力を入れる。

「何をやっても無駄だ！ 俺に勝つなんて上空五千メートルからピン
ポン玉をマンホールの穴の中に入れる事と等しい!!」

「入れてご覧にいれましょう、上空五千メートルからピンポン玉をマ
ンホールの穴の中に!!!」

「やれるものならやってみたまえ、このどぐされヒステリックアング
リーバードオオオ!!!」

Part 3. 不撓不屈のダイヤモンド

32. オセロは角を取れば勝ち

「……これで良かったのですか？」

「ああいい」

「それでは負けた私達は解体ですね」

「……何故主力である君達を解体しなければならないんだ？ルールに怯え過ぎだ」

「まあ提督が優しい事ぐらい分かっていますけどね」

「……うるさい」

演習が終了して一日が経過。朝の九時十五分、相も変わらず艦娘達は訓練に勤しんでいる。あの演習以降、鈴谷と加賀と艦娘達の関係は僅からながらに回復。

あの二人が望んだ関係が戻るのかもしれない。一方で――、
「何でコイツらを呼んだ瑞鶴」

瑞鶴が何故か長門、金剛、古鷹を連れて執務室に来ていた。理解出来ない行動に頭を悩ませる提督。

「言わなくても分かるでしょ」

「まあ大体は察せるなあ」

あの演習の事だろう。絶対に勝つという約束を提督と結んだこの三人。しかし勝利とは思えない敗北に不安な表情をしていた。

「ごめんなさい……勝てなかった……」

「何度言えば分かるのかなあ、確かに傍から見れば敗北だろうが相手がルール違反したと同時にあれは勝ってるんだ。クソジジイ共とあの奴らもそれに気付いている」

奴らとは差別している艦娘を指す。実際にリストに載ってある艦娘達は何とも言えない表情をしていた。影響は地味に広がっている。「各々納得はいかないだろうが良くやったんだ俺に褒められてる事ぐ

らい光栄に思え。それともまさかこれで終わりだとも思っていないだろうか？」

「え……またじゃあ……！」

「当然だ演習なんていつでも出来るし、出撃なんていくらでも出来る。あの演習が最後だと思っただらそれは大間違いだ！ お前らは何の為にここにいるんだ、戦う為じゃないのか？ 戦う意志を持って俺は言っただけだ。だったらさっさと訓練に参加して誰よりも強くなつて来い！ 見返したくなつたらいつでも俺に言え、お前らに相応しい最高の舞台を用意してやる」

両腕を広げ、言葉で言い殴る提督。勿論あの演習で全てが終わった訳では無い。まだこの先には強い艦娘や得体の知れない深海棲艦が待ち構えている。それに挑み、戦うのは艦娘達だ。

「コンティニューはいつでもという事か……残機は相当残っているようだな」

「わざわざ毒みたいな緑色をしたキノコを取らなくても亀の甲羅を少し蹴る事を繰り返すだけで残機が増える様な世の中だ、無限にあると思うがいい」

「計画は大丈夫なの？」

「依然快走中だ。逆に進み過ぎて怖いぐらいだよ」

再び椅子に座る提督。

計画が順調過ぎる事に警戒していた。

「奴らも何か考えがあるはずだ、慢心はしない。お前らも注意しろ、味方が常に味方とは限らない」

執務室を出ていき、広場の港に座る瑞鶴。提督の最後の言葉が少し気になっていた。

「味方が常に味方とは限らない、か……」

それはつまり自分達の中にスパイらしき人物がいるという事なのだろうか。いや、昨日の出来事があったのに突然裏切るなんて行為は出来ないはずだ。

かといってそう言える道理も無い。瑞鶴は深く溜息を吐いた。

「怖い事言うなあ提督さんは……」

「頑張ったわね瑞鶴」

広場の港で一人座る瑞鶴に姉の翔鶴が呼び掛けた。言葉からして翔鶴もあの演習を見ていたらしい。

「翔鶴姉見てたの？ 恥ずかしいなああまりいい成果は出せなかったし」

「いいえそんな事無いわ、あれだけ嫌ってた加賀さんと協力して戦ってたものとても素晴らしい事よ？」

確かに加賀と瑞鶴は四六時中口喧嘩をしていた。別に好きでやっている訳では無いが、加賀の事が嫌いなのかと言われれば嫌いとは言い切れない。

「まああれは成り行きというかそうならざるを得ない状況だったというか……」

「関係が戻ってきて私も嬉しいわ瑞鶴、提督もちゃんと考えてくれたのね……少しは信じてもいい人なのかも。そろそろお昼ご飯一緒に食べましょう？」

「うん……ありがとう、私もお腹空いた!!」

昼食の鐘が鳴り、艦娘達が食堂に集う。

一方提督は暇を潰す為にボードゲームをしていた。深く考え込む摩耶と提督。だが突然摩耶が驚く表情をする。

「っ!!」

「どうした摩耶ー。その顔は煽りとして受け止めていいのかあ、であればマジで不正するぞコノヤロー」

驚く摩耶を煽りだを見てイライラする提督。だがその驚き方は普段とは違った、何かを恐れているような表情だった。

「提督……マジでヤバい状況だ……」

「よっしや煽りだな、オセロで勝ってる摩耶が言う事じゃない」

「いや……予感が……!」

やっていたボードゲームはオセロ。摩耶が圧勝の中、突然『予感』が起きたようだ。しよっちゆう『予感』には振り回されている提督は摩耶が驚いても自分は驚かない。

「……はあ……んで規模は？」

「およそ、二百……鬼と姫クラスが十二体……」

堂々と不正しようとした途端、手を止める提督。聞き間違いだろうか、鬼と姫クラスが十二体。決戦にでも来たのかというレベルだ。

「それ本当に言ってるのか？」

「……ああ本当だ」

「……とうとう攻めてきたか……あー面倒くせえー……」

ソファに寄り掛かり、事の面倒さを嘆く。

久々の大仕事に頭を悩ませた。

「正直私が戦っても勝てる見込みは殆どない。提督、他の鎮守府の協力が become になる！」

「落ち着け摩耶、まだ来てるわけじゃないんだ冷静に対処するぞ」

口を動かしながら提督はオセロを片付ける。危機的状況に追い込まれるこの重大な時に提督は落ち着きながら命令を下した。

「さて……プリンツ、話は聞いていたな」

「はい Admiral」

「空母寮に伝達、偵察機を常時飛ばしとけてな。あといつの間にか居たのか分からないけど臯月達にも戦ってもらう、いいな？」

「了解したよ!!」

「分かりました」

「任せておけ」

臯月達がここに三日間残ってくれたのは不幸中の幸いとも言える。あの元帥もたまにはやってくれるようだ。正直摩耶とプリンツだけでは恐らく戦力が物足りない。

「奴らは摩耶の『予感』を知らない。恐らく奇襲を仕掛けてくるだろう、空襲か遠距離からの一斉砲撃……幸いにもここは街から五キロも離れている。とはいえ被害が出ないとは限らない、住民の避難を急ごう」

「こちららも奇襲を仕掛けるか？」

「いや下手にこちららも気付いた事がバレるのはあまりよろしくない、ある程度引き付けた後にこちららから先制爆撃が良いだろう」

深海棲艦達は奇襲が得意だ。他の鎮守府でも時たまに深海棲艦に

よる空襲がある。まるで戦前の日本の様に。

「恐らくこの戦闘も苦勞するだろうな」

「察しが良くて助かるよガングート、流石戦艦棲姫と一度殴り合っただけの事はある」

「フン……あれは私が勝っていたがな」

某連邦国弩級戦艦Gamma級一番艦ガングート。威勢のいい彼女は単騎で姫クラスを撃破する程の戦闘能力を有している。その所為かプライドも高い。

景気良く話している途中、ドタバタと執務室に向かう足音が聞こえた。入ったきたのは長門や鈴谷、瑞鶴などの前演習メンバー。

「提督、プリンツの件は本当なのか？」

「本当だ、面倒な事に近々深海棲艦もここを攻めてくる。お前らも知ってる通り、アイツが送ったんだろう」

たった一つの鎮守府、ましてやボロボロの鎮守府相手に決戦仕様の艦隊を出撃させるなど余程の事が無い限りは到底有り得ない。となれば深海棲艦の提督である前任が何か後ろめたい理由でこの鎮守府を破壊しに来た可能性がある。

もしこの鎮守府が破壊、突破されれば海域は奪取され、深海棲艦の侵入経路を作る事になる。それは提督でさえも避けたい事だ。

「戦う前に入念な準備が必要だ。加賀、瑞鶴、瑞鳳は偵察機を発艦、他の空母にも連絡して時間交代で常に警戒網を張れ」

「Admiral！ 大本営から通達です！ 只今和歌山県■■町の住民達に避難指示が発令、急ピッチで移動が開始しています！」

「ご苦勞プリンツ、この近くに人村は……一つだけあったな」

プリンツはすぐ大本営に伝達。決戦レベルの艦隊と聞いて動き出したようだ。呉鎮守府の後輩からもいくつか支援艦隊を出撃させるとの事。政府も事の重大さに気付き、近くの町に緊急避難指示を発令。着々と事は進んでいるようだ。

「今も住んでいる人がいるそうです。恐らく避難警報も届いていない可能性があります」

「だったら直接俺が行く。この海域を守る鎮守府の責任者だ、愚かな

国民共には避難してもらわなきゃこちらが困る」

「分かりました！ 随伴艦は如何がしますか？」

「そうだなー……臯月と古鷹と木曾を連れていく」

「分かりました、ではそのように手配しておきますね！」

臯月と木曾を連れて、近くの村に赴く提督。必要な物を揃え、鎮守府を出ていった。摩耶の『予感』は大体二日後から三日後にかけて起こる。今日は必ず来ないという確証は無いがこの鎮守府の責任者として一般人を戦争に巻き込むなど言語道断。住民の避難が最優先なのだ。

「んじや早速行くぞ臯月、木曾、古鷹」

「やったー！ お出掛けだー！」

「何で俺まで……」

木曾と古鷹は何故連れてこられたのか分からないまま途方に暮れていた。こんな事をする暇があるなら訓練がしたいと嘆いている。森の中にある一応整理された道を通り抜け、一般公道に出る三人。人影は無く、車が走る音はしない。

「誰も通らない田舎道ってやつかあ……」

「まあこの鎮守府を知らない方が多いからな、車は時々通るが人は滅多に通らない」

木曾はこの周辺の土地について良く知っているようだ。恐らく連れてこられた理由はこれだろう。何故なら木曾はこの鎮守府の古参の一人だからだ。道路の端を歩き、道なりに進む。

すると海岸線沿いに着き、遠くから村が見えた。

「もはや廃村だな」

「前任のミスでこの村に空爆を許してしまったのさ。おかげで死傷者は村の六十七パーセントを占め、生き残った多くの負傷者は前任の横暴な対応に呆れて引越したんだ。皮肉な事にまだ電気、水道、ガスはまだ通ってる」

「ふーん……」

興味無さそうに提督は歩く。臯月はステップを踏みながら楽しそうに走っている。木曾の言った通り、家は半壊状態で取り残され、草

木が這い出ていた。畑は全く耕されておらず、ただただ被害の惨状を物語っている。

「……あの提督」

「何だ」

「提督は……どうしてそんなに落ち着いていられるんですか？」

「慣れたから」

即答され、何も言えない古鷹。

村は一切都会の音を感じさせず、春風が吹く静かな音が周りの風景を綺麗に写した。田舎さながらの光景とも言えるだろう。とても心地が良いものだ。ここに住むのも良いかもしれない。

「……怖くないんですか？」

「怖いよ」

「んじや何で……？」

「別に慌てる様な事じゃないだろ、すぐ来るわけじゃあるまいし」

「……じゃあ提督は……どうして私達を助けてくれるんですか……？」

提督の歩幅が少しゆっくりになる。今まで早歩きだったのが海を眺めるようにゆっくりと歩き始めた。後ろにいる木曾と古鷹を見もせずに口を開く。

「……よくもまあ助けてくれたなんて綺麗事を言えるなあ古鷹。言つとくが……お前らを助けた覚えは一度も無い。俺はお前らがやりたい事を叶えただけだ」

「だがそのおかげで救われた艦娘もいる。助けたも同然じゃないのか」

「それは木曾、願いの内容に対する報酬がそれに近いものだったからだろ。結局はハッピーエンドがお好みなのだよポンコツ兵器共は」

大体の願いの内容による報酬は当人が求めた幸福。

提督はそれをあまり好まない。

「手を組んだからって馴れ馴れしく近寄ってくるのも俺は嫌いだ、やりたい事を聞くのは省いてな」

「であれば摩耶や皐月達は何故提督に懐いているんですか？ 以前は部下だったんですよね？」

「まるで尋問だなあ古鷹。懐いているのか分からないが、臯月達は本
当の意味を理解している。今のお前らはこれから関西へ向かうド田
舎の高校の修学旅行と同等だ、戦うという意味と全く区別出来ていな
い」

提督の言葉を聞いて、首を傾げる二人。

提督はその後何も言わなかった。

「……さて、人はいるかな？」

「恐らくあの赤い屋根の家にいるだろう」

木曾が指さす方向には至る所に修繕された跡の民家があった。他
の民家は半壊で内側が見えている状態だがあの家だけは何故か修繕
されている。

「じゃあ突撃隣の晩御飯でもしますか」

33. 当たるか当たらないかは運次第

提督か臯月達を連れて鎮守府を出ていった後、艦娘達はそれぞれ訓練や勉強に励んでいた。あの演習で鈴谷や加賀の成長ぶりに心打たれたのか、参加する者も増えてきていた。摩耶やプリンツ達の監修の元、それぞれの悪い点を徐々に見直している。

青葉はその風景を思い出したく、屋根に登って写真を撮りまくっていた。

「活気が戻ってきて何よりです……」

『彼女達の概念を決めるのは我々人類ではない、彼女達自身が決める事だ』

「概念……ですか……」

青葉は興味本位で元帥と提督との会話を聞いていた。監視室でサボって昼寝しており、偶然起きた時に聞いていたらしい。提督の口から出た言葉とは思えなかった。きっと元帥を納得させる為の虚言だろう。それでも青葉には嘘に聞こえなかった。

「兵器か、人間か。決めるのは私達の自由、という事ですか」

青葉は人の嘘が分かっってしまう艦娘だった。それは相手の口や声、言動だけで嘘か本当かを聞き分ける事が出来る特殊なモノ。所謂摩耶の『予感』と似たような生まれながらに持つ力だ。これで前任の言動が嘘か本当かで聞き分け、誰にもバレずに必死に隠して生き抜いてきた。

時には仲間を助けようとした。アレは嘘だ、貶めるつもりだ、と何回も忠告した。だが簡単には信じてくれなかった。その結果、信頼も仲間も失ってしまった。

「結局は宝の持ち腐れ、でしたね」

建物の屋根に寝そべり、青い空を見つめる青葉。

ここ一ヶ月間近く、空を見つめた事なんて無かった。見るのはいつも曇り空、闇が漂う黒い海、沈みゆく仲間。

楽しい時間なんて有り得ない、ただひたすらに戦うだけの毎日。兵器として扱われ、かつての仲間裏切られ、意味の無い性暴行を受け、身体がいくら死にかけても出撃する。

そんな日常だ。

「見せてあげたいですねー……この空」

今まで撮った写真にどれだけの仲間が沈み、消えたのだろうか。部屋に飾ってある写真を見る度に思い出す。あの笑顔が、あの表情が、あの時間が戻ってくる事は二度と無い。

何度も壁に縋り、部屋で泣き崩れた。あの時例え嫌がられても止めていけば、監禁してでも止めていけば、誰かの命を救えたはずなのに。誰一人止められなかった。何故大切な仲間が死んで、自分が生き残っているのだろうか。自問自答し続けた。むしゃくしゃに、がむしゃらに。

「何も出来なかった、確かにその点から言えば提督の言葉は間違っていないかったようです」

勿論提督の事を信じているわけではない。前任に復讐する為に手を組んだ、言わば休戦協定だ。自身の目的を果たせば、また違う形の敵同士。

なのだろうか。心のどこかでまた興味が湧いている。

提督の本性が知りたい、本音が知りたい、本心を知りたい。あの提督が一体何を考え、何をモットーに戦っているのか知りたい。私達の事をどう思っているのか知りたい。

と思っても提督は私達の事をポンコツ兵器、だとも言うのだろう。

でも、もし提督が言ったように自分達で存在意義を決めていいのなら、自分は人間だと思いたい。

そして人間だと思えたら、その時までには笑える様にしておこう。

「……おろっ？ あれは……」

屋根で寝ていた青葉はある艦娘達の怪しげな行動を発見した。工

廠の裏に行こうとしているのは那智と足柄だ。顎を触り、何か怪しいと感じた青葉は十八番のステルス行動を使つて、盗撮をしにいった。「な、何ですか……こんな所に呼び出して……」

工廠の裏は影でとても暗く、肌寒い。目の前には自分を差別し、虐め抜いた姉の那智がいる。また自分は殴られるのだろうか。那智は身体を少し動かした。それを見て足柄は防衛本能で身を守ろうとする。

「……今まで本当に……すみませんでした」

「……ふえ……？」

那智は地面に土下座する。その光景に足柄は思わず変な声をあげた。どういう事だろうか、自分の目の前で差別した姉が土下座で謝っているではないか。夢かと思つて頬を抓った。痛みはある、夢では無さそうだ。

「な、何で……？」

「……私も、目が覚めた……」

鈴谷達の演習を見て洗脳から目が醒めたという。涙ながらに自分の愚かな行動を語り、額を地面につけたまま謝り続けた。

「本当にすまないと思つている！ 許してくれとは言わない！ だが……一度だけ チャンスが欲しい……」

「チャ、チャンス……？」

「私も見返したいんだ！ 奴らの前で自分を証明したい……！」

拳を震わせ、悔しむ那智。鈴谷達同様、洗脳から解き放たれて自分の愚かな行動に絶望し、謝りたい気持ちで一杯だった。奇遇な事に他の艦娘達も徐々に目が覚めてきているという。実際足柄は皆がそういう話をしていたのを聞いた事があつた。皆も少しばかり気が引けている。

「だから……頼む！」

「だ、大丈夫よ那智……分かったわ、やってみて」

「……ほ、本当に？」

これ以上那智の事を許さずにあやふやな関係が続いても一向に何も始まらないだけだ。かと言って姉の那智の行動を許せる訳では無

い。他の皆は許してあげようと心優しく考えているが足柄は違う。那智自身が自ら証明したいと懇願しているのだ。

だったら足柄はそれを見定め、本当に証明出来たら許そう。そう思った。

「あ、ありがとう！ 頑張ってみせるぞ!!」

「……うん、頑張つて頂戴……」

屋根から見ていた青葉はいくつか写真に収める。最近あの演習の影響か目を覚ます者が現れ始めている。

だがそれは全て嘘だ。

「……」

青葉が持つ写真に写されたのは■■が鳳翔にある約束をしている場面。何をしているかは分からないがこの二人が繋がっている事は理解出来た。少し調べる必要がありそうだ。

「川内さーん、起きてますかー?」

「……うーん、何ー?」

部屋で寝籠もる川内を起こす青葉。ちょうど川内は提督から貰った休暇を存分に使っていた。太陽の光が入るなり、布団で顔を隠す。

「■■達の狙いを調べて欲しいのですが」

「……報酬はー?」

「ほ、報酬ですか。そうですね……今度一緒に夜戦、でどうです?」

「いいよー!」

夜戦と聞いていきなり起き上がり、布団を吹き飛ばす川内。夜戦してくれる仲間がいて興奮したのだろう。前任の時もあれだけ色んな夜戦をやつといて懲りないとは。正直羨ましい限りだ。

「差別してる側の策略を調べればいいのね! オツケー任しといて!」

川内は差別してる側の艦娘だ。だが何故か洗脳は効いておらず、提督に従順である。

最初は驚いたが、そのおかげか今じゃこちらのスパイとして送り込まれているようなモノだ。提督が持つ大体の情報は川内が担っている。川内の部屋を出た後はある場所へ向かった。

「あの演習の影響からか目覚める艦娘が多くなっています。この調子で共に認め合えばきつとこの差別関係は終わるはずですよ」

「そうなんだね……何だか嬉しいな、そう思わないかい夕立」

「嬉しいっぽい！」

差別された側の艦娘だけを集めた、言わば被害者の会。訓練の休憩時間を使って密かに話し合っている。先程謝られた足柄も参加していた。姉の謝罪を嬉しく報告している。

確かに差別してる側の艦娘が泣いて頭を垂れる事は嬉しい事だ。土下座して自分の過ちを反省し、謝る。それだけなら良いのだが簡単に許してしまうのはどうだろうか。鳳翔達はもう許そう、この関係はやめようと呼び掛けている。

だが青葉はそれが何故か気に食わなかった。

「一度提督に報告ですねー……」

念の為にカメラをプリンツに渡し、訓練に参加する青葉。

今回の模擬練習相手は最上だ。航空巡洋艦である最上は水上偵察機による先制攻撃や弾着観測射撃、水上爆撃機による対潜攻撃が可能な特殊な艦娘だ。とても厄介なのが最上が装備する瑞雲。索敵出来る上に爆撃可能な優れ物だ。

対してこちらは20・3cm連装砲と25mm連装機銃、四連装酸素魚雷。

「始め!!」

一斉に動き出す二人。距離は約百メートル。射程圏内、天候は好調。最上が早速瑞雲を駆り出した。

今は対空攻撃で凌ぐしかない。

「よく見えますねえ……ッ!」

突然砲撃を食らう青葉。仰け反りながらも綺麗に着地、急いで状況を確認する。よく見れば最上が砲台を構えて砲撃していたようだ。

成程、戦闘の概念を壊してきたか。であればこちらでも使うしかない。

「追撃しちゃいますか……!」

急降下爆撃を行う瑞雲を全て回避。自分が必ず当たると思う射程

圏内まで接近する。並ならぬ早さに最上も驚いているようだ。

「あの北上さんの動きを参考にして正解の様でしたッ！」

射程圏内に入ってすぐ砲撃。

それと同時に魚雷を発射。

そして右へ高速移動。

最上もすぐさま左に動き出し、弾着観測射撃を仕掛ける。お互い負けるつもりは無さそうだ。

「被弾した……でもッ！」

「グッ……!!」

弾着観測射撃で右肩辺りに直撃し、中破判定になる青葉。

25 m 連装機銃が使えない。更には最上の砲撃精度が極端に上がっている。訓練の成果は出ているようだ。

だがこちらも負けるつもりは無い。目の前には黒煙、だったら面白い方法で勝ってやる。

「トドメを……えっ!？」

黒煙の中から突如砲弾が。対応出来なかった最上は左脚と右腹に当たり、中破判定を食らう。衝撃で軽く飛ばされる最上。

「一か八かの賭け、ですか」

プリンツが冷静に分析する。

青葉は見えない黒煙の中で砲撃。勘で最上に直撃させたのだ。勿論当たるとは思っていない。賭けに出ていたのだ。

「トドメは、私です……!」

既に最上の居る位置は射程圏内だ。必ず当たる。魚雷も発射した。最上は弱点だったのか未だに怯んでいる。

今しかない。

何も特別強い訳では無い、ただ単に運が良いだけの旧型だ。それは自分も嫌なほど熟知している。自分が他人より劣っているなんて事はもう何度も体験した。

だからこそあの日、衣笠を救えなかった無様な弱い自分は捨てる、今の私は強いんだという事をこれから証明するのだ。

「私のッ！ 勝ちです!!」

砲撃音が響く。

今回の模擬練習、勝ったのは――、

「青葉さんの勝ちですー!」

青葉の勝利だ。青葉の砲撃と魚雷で最上は吹き飛ばされ、岸辺で壁に打ち付けられていた。意識はあるものの、立ち上がる事が出来ない。模擬演習用の砲弾にしてはかなりリアルに再現されている。痛みも本物だ。青葉は立てない最上に近付き、手を伸ばす。

「ありがとうございます……ごいまして……先制攻撃は見事でしたよ」

「……こちらこそ、ありがとね。アレは凄かった、また反省点が見つかったよ」

青葉の手を掴み、支えられる最上。お互い励まし合い、それぞれの反省点を見つけた。

周りから見れば小さな一歩かもしれない。それでも青葉にとってはこちらから自分を証明する上で最高の材料になるだろう。もっと強くなる為に。

「あららAdmiralがお帰りになられたようですね。青葉さん、呼ばれていますよ」

「あ、え、そ、そうですか。分かりましたすぐ行きます」

最上をプリンツに任せ、渡したカメラを返してもらおう青葉。提督の呼び出しをくらい、そのまま司令部へ向かっていった。

「どうしたの、プリンツさん」

「……青葉さん、少し笑っていたような気が……いや気のせいですね」

「あ、最上さん」

「うん? 何?」

「下着見えています――」 「それを早く言って!!!」

34. 破れない約束は何よりも堅い

「よくここまでこの村に住みたがるねえ……」

遡る事数十分前、提督御一行はようやく住民が住んでいそうな民家へ辿り着く。遠くから見ればさほど補修はされていないように見えるが近くから見ると空襲が如何に恐ろしいものかを物語っていた。屋根は幾度となく補修され、窓ガラスはガムテープで無理矢理貼り付けられている。

「凄……補修された跡が至る所に……」

「例え屋根に穴が開こうと窓ガラスが割れようとこの家に住みたがる人間は二通りある。余程のケチな馬鹿かボケた老害だろう、俺が大嫌いなタイプだ」

敷地内へ勝手に入り、玄関まで歩く。

見た感じは人の気配はまるで無い。

「ごめんくださーい！ 誰かいますかー？」

臯月が元気よく声をかける。しかし反応は無い。

「すいませーん！ この村に避難警報が入っています！ 今すぐ避難してくださいーい!!」

「誰がするかア!!」

玄関がガラリと突然開き、猟銃を撃つ老人。いち早く察した木曾が提督を無理矢理引っ張る。弾は提督の髪の毛に当たり、地面に散乱した。一連の行動に提督は理解するのが少し遅れてしまう。

「……死ぬかと思った……あー俺の大事な髪の毛が」

「このクズめ！ 死にたくなきやさっさと出ていけ!!」

「それはごっちの台詞でもあるんだけどねえ、どうやらボケた老害が正解だったようだ」

提督は散乱した髪の毛を眺める。すぐさま立ち上がり、老人の目の前まで近寄る。すると臯月も目の前に庇うように現れた。

「黙れ!! ワシは絶対にここから引かんぞ……!」

「だけでももうすぐ深海棲艦がこの近くを攻めてくるんだよ!? 早く避難しないと!」

「ガキの言う事なんて信じたま——」「まあまあまあ落ち着いてください貴方の言い分も分かります。私としては古ぼけた老人なんて大っ嫌いなんで勝手に野垂れ死にしてもらっても構わないのですが海軍のトップであられる元帥殿が避難しろと仰るのでこうして貴方直々に呼び掛けているんです、どうかお分かりいただけましたか?」「何一つ分かるわけないだろ!! 　　どうか貴様があの鎮守府の責任者か殺してやる!!」

「あ、やばい奴だこれ」

身の危険を察知した提督。思わず屈み、木曾達が老人達を抑えた。古鷹が猟銃を取り上げ、撃てないように安全装置を入れる。力の強い艦娘達に抑えられても藻掻く老人。これだから老害は嫌いだ。

「貴様らの所為で……貴様らの所為で!! 　　この村は滅んだんだああ!!」

「勝手に罪を擦り付けないで頂きたい! 　　あの件は前の責任者がやった事だ、新しく着任したこの俺ではない」

「黙れええ!!」

「ちよつと■■■!」

玄関の奥から慌てて出てきたのは老人の妻と思わしき人物。暴れる主人を見て急いで来たようだ。提督を見るなり敵視している。

「何の御用があつてここに来たんだい……」

「この村に避難警報が来てるんだよ! 　　早く避難しよ!!」

「……悪いけど私達は逃げないよ」

「どうして……?」

「この村を離れたら本当に村は滅びる。アンタ達が戦争に勝つて海を取り戻すまで私達はここに住み続けるよ……」

老爺を支える老婆は語る。戦争に勝つまで自分達はここに住み続けるという。もし村人が帰ってきたら笑顔で迎える為に。

「お前の言った通り私達は死んでも構わないよ……だけど私達には意地ってもんがあるのさ。アンタ達が勝つまでここに住む、それが私達の余生の過ごし方よ!」

「どうしてもなのか?」

「こんな事は前に経験してるんだ、生き残る術はいくらでもある。だから今度は勝ってくれ、頼んだよ!! ほら■ ■!」

提督を指さす老婆。年齢は既に八十を越えているだろう、大した生命力だ。老爺は落ち着きを見せ、ゆっくり腰をあげる。

「アンタ達の事は死んでも許さん。ここに来るようならば殺してやるからな。例えお前らが殺されようとも最後まで足掻き続けてやるクソ共」

「何言ってるんだい!」

老爺は頭を叩かれながら言葉を吐き捨て、玄関のドアを閉じる。玄関先で取り残された四人。提督は先に帰ろうとした。

「……伊達に戦中を生き延びただけあるなあ、勝手にしたまえ」

「え、いいんですか提督?」

「構わん、何せ空襲を受けようとも怯まずに住み続け、地下深くに防空壕を作るぐらいだ。心配しなくてもいい」

「だけど……」

「だけどじゃない! あの老害共は最後まで戦うと言ってるんだ、俺達に関わる必要は無い!」

「分かり……ました……」

住民の避難誘導に失敗し、帰宅する四人。提督の指示通り、海岸沿いでは空母達が警戒網を張っていた。

古鷹は訓練に戻って別れ、途中で青葉とガングートと合流した提督と臯月と木曾は営倉へ向かった。

「ガングートはここを見張っててくれ」

「了解だ」

地下にある営倉へ入る提督、臯月、木曾。提督は仮面とカツラを被り、髪を結んで飛行場姫の元へ向かう。

「それ何の仮面?」

「遊園地にいるネズミの仮面」

「ああそう……いやダメだろ!!」

「……貴方が提督……?」

仮面で顔を隠しても軍服で提督と分かったようだ。黒髪長髪に白

い軍服が目立つ、一瞬女性のように思えた。

「そうだ飛行場姫。お前も薄々感じているだろうが近々深海棲艦の大艦隊がこの鎮守府を攻めてくる。何かしら分かった情報があるなら聞いておこうと思つてな」

「えっ飛行場姫!?!」

敵の大艦隊を送り込む程、前任が後ろめたい何かがあるのは可能性として存在している。

しかしもう一つの考えとして前任と深海棲艦達が艦隊を回してまで飛行場姫を救助しに来た場合、飛行場姫本人に何かしら理由があるはずだ。その理由さえ掴めば少なくともこちらは有利になる。

「……無イワ」

「いいやあるはずだ。何故ならお前は俺の質問に答えた時アイツと鍵と言つていたから」

「ねえ司令官どういう事!?!」

飛行場姫は言っていた。アイツのやり方が嫌だった、と。

そして鍵とも言っていた。

「アイツとは正しく俺達で言う前任の事だろう。前任のやり方が嫌だったからお前は抜け出した、前任もひ弱なお前なんぞ死ねばいいと思つて見放したのだから艦娘共が沈めてくれると。だがお前は生き残った、俺らに鹵獲されてね。それを何故か知った前任はあるミスをしてしまった、お前が重要な情報を隠し持っていた事を」

「……妄想ヨ」

「ああ確かにこれは妄想だ、今俺が考えた創作だからな」

「司令官? おーい、しれーかーん?」

「何モ持ツテナンカイナイワ」

「なら良いんだがお前は殺してやりたいほど前任のやり方が嫌になつていたんだな? だったら居場所を言えば俺達が代わりにぶつ飛ばしてくれるかもしれないのに何故あの時前任の居場所を言わなかった? 何故自ら死ぬ事を選んだ?」

「ソレハ……仲間ガ殺サレルカモシレナイシ、提督ガ死ンダツテ聞イタカラ……」

「だったら何で今ここで生きてる」

飛行場姫の身体がピクリと動く。

「死にたかったんじゃないのか？ 死ねば居場所を教える事なく仲間が殺される事も無くなるし、前任に怯えずに済むんだあ。折角自殺用の縄も用意してあげたのにも関わらず何で今まで生きてるんだ？ 苦しいのが嫌か？ だったら刃物や銃火器で死んでみるか今ここで」

提督が拳銃と木曾の剣を取り出し、目の前まで投げる。首吊りが嫌なら他の手段だ、と強引にけしかけてきた。

木曾は勝手に剣を取られ、少しキレそうになるも落ち着きを取り戻す。

「……連れてきた理由がこれか」

「そうだ、さあ死ぬ手段はいくらでもあるぞ？」

目の前にある武器に目もくれず、飛行場姫は地面を見たまま何もしない。口を開こうともしない。

「今更保身に走ったか？ いいやお前はあの人が死んだと聞いても自殺するはずだ、相当希望を持っていたようだからね。だがお前は何故か死のうとしない、誰かを待っているように俺達に従順だあ。おかしいと思わないか？」

青葉が監視室で営倉内の映像を見ていた時の事だった。そこには一点をただずつと見つめる飛行場姫。不審な動きを見た青葉は提督に報告し、プリンツの案内も兼ねて営倉に向かった。

「そこで一回俺はプリンツと一緒に営倉でお前の姿を直接確認した。そこで自殺していたら何とも思わないがお前は何食わぬ顔で生きていた、死ぬ事すら考えもしない顔で」

「……」

「これはあくまで俺の推測だが……お前の艦装に発信機、身体に盗聴器が取り付けられている。前任は後ろめたい理由を消す為にこの鎮守府の破壊作戦にお前を送り込んだ。そしてわざと鹵獲する様に頼み、まんまと鹵獲された。俺と接触し、何かしら情報を得ようと試みた結果、情報は大体掴み出せた。艦装に発信機が取り付けられている、鎮守府の場所が特定出来た。情報も掴めたし盗聴器の意味も無

い、自分は御役御免だ、死ぬ以外に方法はない訳だ。だからお前は死ぬ事を懇願した」

「……」

「だが前任はお前に居続けろと命令された。何故なら作戦を遂行させる為に俺とお前が必要になったから。そして現在に至り、計画がバレてしまった。どうだ？ 出来すぎた推測だろ？」

「……ソウネ面白イ推測ネ」

「ねえ誰か僕に気付いて!!」

「あ、皐月か。つい夢中になっちゃった」

涙目の皐月が訴える。話に夢中だった提督は声に気付いて、皐月の頭を撫でた。後で摩耶に事情を説明させるとしよう。そう思いつつ提督は話を続ける。

「さて話を戻そう。俺は最初から罠の可能性もあるとみてわざとお前を鹵獲した。そして尋問時に三つの質問をしたんだ。一、何故ここに来たのか。二、前任の居場所はどこか。三、今後何をしたいか。お前はこう答えた、海から、今は言えない、死にたい、と」

確かに飛行場姫は提督が言ったように答えた。だがそれと何が関係があるのか今聞いた木曾には分からない。

「今は言えない……この時点で前任の居場所を知っている事は理解出来た。だがあの人の存在有無を聞き、いないと聞いた途端にお前は絶望したと同時に鍵と言った。普通あの状況で私達の鍵と言えば希望の鍵みたいな甘っちょろい腑抜けた望みとでも思うだろうが俺と前任は違う考えをしたんだ。もしかしたら、何かを秘めた鍵なんじゃないかってね」

「……」

「更にその前にわざと俺はあの人の情報を持っていると言った。それを前任は考えたのだろう、新たな秘密があるんじゃないかと」

「ワザト……嘘ダトイウノ？」

「いいや全て本当だ、俺が所有する保管庫にバッチリ残してる。記憶が正しければ鍵と思わしき資料もあるだろう……鍵って何だ？ 飛行場姫」

鍵。

何かの暗号だろうか、何かの印だろうか、それとも鍵そのものか。本体は謎だ。それがもし重要な情報を隠しているならば逃さない手は無い。

「今白状してもらえればお前の命の安全の保証はしよう」

白状する代わりに命を守る事を約束する提督。自分の命が本当に大切なのであれば言ってもいい頃だ。

「……言えない」

「何故だ」

「言ツタラ……アイツにバレてしまウ……」

「俺達を守ると言ってるんだ、今アイツが聞いてようが関係ない。こちらが依然有利だからな」

「仲間ガ……」

「人質にされてるのか？ だったら俺達が助けてやろう」

「提督二顔向ケ出来ナイ……!」

「死者がお前を見てるとでも思ってるのかバアアカアア!! んな超常現象あるわけないだろ、寧ろお前らが超常現象だア!!」

「……でも……約束しタの……」

『飛行場姫……頼んだよ……例え僕が死んでも守るんだ。これは危ない事だからね……!』

「約束を……破りたくない……!」

「……飛行場姫」

約束を破りたくない。それ程あの人は深海棲艦に信頼される人物なのだろうか。よく分からない。

涙を流す飛行場姫に提督は近くまで歩み寄り、目の前で話した。

「お前が思うあの人は約束を破ったくらいで縁を切るような奴なのか？ 俺達からしたら世界を仇なした残酷非道の大罪者だあ、そんな事など平気でする奴だと思ってる。だがお前のその言いぶりはまるで信頼される優しい心の持ち主と見受けられるんだがどうなんだ？」

「……提督ハ、優シイノヨ……貴方ガ思ウ以上ニ……」

「俺が思う以上に優しいなら約束の一つや二つ破った所で笑って許してくれる奴なんだろう、何せ俺以上に優しい奴なんていないからな」

実際、一部を除いて艦娘や深海棲艦を人として見ない者は多い。海軍の大体は兵器だ怪物だと思っ込んでる。提督は勿論兵器だと言っているがこれは個人的な価値観であり、他人が決めた価値観など別にどうでもいい。

それこそ提督が言ったように艦娘の概念を決めるのは人類ではなく艦娘が決める事だと提督なりの持論ではあるが。

「そこまで破りたくないか？」

「コレダケハ……本当ニ……！」

「……だったら交換条件だ……現在どこかにいるアイツの居場所を言え。それならば鍵について、今は追求しない」

何かしら約束をしたのだろう。破らせるのは非常に面倒だ。

であれば提督は交換条件に前任の居場所を教える事を要求する。

「……本当ニ……？」

「本当だ。命も守ってやろう、仲間も助けてやろう、どうだ良い交換条件だと思わないか？」

飛行場姫の命も守る、仲間が脅されているかどうか分からないけどとりあえず救う。全て提督の憶測に過ぎないがそれだけの仕打ちをされているなら可能性はある。

「……ル」

「何て言った」

「……ニイル」

「ハツキリ言え!!」

「アイツは……呉トカイウ場所ニイル……」

「発信機と盗聴器は？」

「全テ事実ヨ……コノ拠点全体と横須賀、東京ニ大規模爆撃ヲ行ウ為ニ私ト……モウ一人ガ囷トシテ送り込マレタ……」

「作戦日時は？」

「明日……マルロクマルマル……」

35. どちらでも譲れないとしたら

急いで執務室へ向かう提督。これからの危機を全て回避する為、作戦を練り上げる。それと同時に呉鎮守府にいる後輩と連絡を繋いだ。

「青葉、俺が代わろう」

「は、はい！」

「もしもし私が代わりました」

『どうしたんだい白くん、慌てて連絡してきて』

「現在の前任の居場所を特定しました」

『……詳しく話を聞こうか』

元帥の声が明らかに本気になったのが分かる。いつも軽々しく平和ボケしておじいさんの様な声がドスの効いたヤクザの長の声と早変わりだ。提督は何故前任の居場所が特定出来たのかその経緯を詳しく説明。深海棲艦を鹵獲した件を報告しなかった事も順次教えていく。

「奴は今、呉鎮守府にいる可能性がかなり高いです。今すぐ艦娘以外の従業員を全員調べる必要があります」

『成程……分かった、許可しよう。呉鎮守府に憲兵隊を送る。それから君が深海棲艦を鹵獲した件についてはこの件にて帳消ししておく』

「ありがとうございます」

『あと君の鎮守府が襲撃される可能性もある。作戦は？』

「現在計画中です、奴が考えた作戦ではこの鎮守府を襲撃する作戦日時は明日の午前六時。ちようど朝日が昇る頃に始まるかと思えます」

『一度緊急会議を開く、ビデオ通話にしてくれ』

不測の事態に元帥が各鎮守府の軍人達を緊急招集。モニター越しに緊急会議が開かれた。

元帥は前任と深海棲艦の関係を説明、提督は仮面を被ったまま事の説明をする。

『この呉鎮守府にですか!?!』

「そうだ。全て嘘のように聞こえるが全て本当だ。君の呉鎮守府にい

る可能性が高い。すぐさま憲兵や清掃員、整備士など徹底的に調べ尽くせ！」

『わ、分かりました！ おい、今すぐリストを用意しろ……すいません、こちららは機密情報漏洩を防ぐ為、席を外させて頂きます。作戦の立案は他の皆様に任せたいと思います』

『分かった、武運を祈る』

呉鎮守府の後輩が念の為に会議を離席。モニターに各鎮守府の軍人達が顔を出して、会議を続ける。

「■■少尉、最近横須賀鎮守府にて鹵獲した深海棲艦はいるか？」

『は、はい！ 五月二十五日午後十四時頃、自ら鹵獲を頼んできた深海棲艦、港湾棲姫を鹵獲し、しました……』

「何か尋問はしたか？ 何か聞かれた事はあつたか？」

『はい……敵勢力の詳細と何故ここに来たのかを吐いてもらいましたが、聞かれた事と言っても私個人の事と初代深海提督の存在有無、そして自殺を懇願してきた事ぐらいです』

「港湾棲姫の処遇は？ 艦装はどこにある」

『現在は艦娘の監視下の中で保留、艦装は特別倉庫にて保管してあります』

実は摩耶が飛行場姫を鹵獲した時、遙か遠くの横須賀鎮守府でも港湾棲姫が鹵獲されていた。鹵獲した港湾棲姫の責任者である■■少尉が細かく説明していく。

「であれば港湾棲姫の身体に盗聴器、艦装に発信機が取り付けられている可能性がある。即座に調査してくれ」

『りよ、了解しました！』

『その発信機と盗聴器は一体どうやって入手したんだ』

『いや深海棲艦が作った可能性があるだろう。今はそんな事を考えている暇は無い』

『そうだぞ、んで作戦提案はどれくらい考えてるんだ？』

軍人達が画面越しに話し合う。北方海域を務める者や南方海域を務める者、各地方の鎮守府を纏める司令官、舞鶴や佐世保の司令長官など曲者揃いだ。

「先手を打てる奇襲作戦を考えています。現在、この鎮守府で空母達が警戒網を張っておりますので姿が確認されるのも時間の問題でしょう。あちらが大規模爆撃を行うのであればこちらもその手を使うまでです」

『ちよつと待った』

『どうしました■少佐』

『前任が元いた鎮守府を破壊してくる理由は分かるわ。だが何故東京と横須賀を狙いにいったのよ?』

珍しい女性の提督が疑問を口にする。確かに鎮守府を破壊したいだけなら何故東京や横須賀を巻き込む様な真似をするのだろうか。

それを考えた本部にいる■大将が閃く。

『それさえも囷……』

『……っ!!』

「……そうです」

『どちらが被害の規模が大きいかは明白だ、もし囷だと分からなければ誰しも戦力をこちらに移すからな。だから奴はそれを逆手に取るうとした、わざとここを範疇に入れる事で大幅の戦力を移動させ、数少ない戦力を残した君が受け持つ鎮守府を速やかに破壊する……』

「(一)名答です、■大将」

『なあに君が気付いてくれたおかげだよ。かと言って、こちらに攻撃が来ないとは限らない。逆という可能性もある、それ相応の防衛戦が必要になるだろう。君の鎮守府はそれ以上にだ』

大将は元帥と同じく大規模作戦においての功労者。体格は凄まじく、身長も高い。優れた戦闘指揮と賢い頭脳の持ち主だ。

「恐らく私の予想では、姫や鬼クラスは総勢十二名。その他の深海棲艦は二百匹の可能性があります」

『白君の摩耶による『予感』か、とても役に立つ力だ……さて、そろそろ決めよう』

会議は順調に進むも、行先は不安だ。久しぶりの大規模な作戦になりつつある。深海棲艦の親玉である前任の愚行をどう制止させるか、慎重に事を進めなければならない。

「こちらとしては戦力は不足しています。出来るだけ多くの戦力が必要です」

『であれば呉鎮守府と駿河鎮守府は全面、白くんの鎮守府の援軍に行かせよう。我々は横須賀鎮守府を中心に警戒網を貼る。もし敵艦隊が確認された場合は構わず戦闘だ』

『了解しました』

『了解です』

『南方海域の君達は防衛線を維持してくれて構わない。持ち場には君達が必要だからね』

『了解しました』

『では解散だ。皆、武運を祈るよ』

元帥が作戦指揮の元、会議が終わる。モニターでの会議を終えた提督は足を机に乗せ、帽子を顔に被せた。

「……」

「これ程大規模とは思いたくなかったなー」

「まさか大本営まで絡んでくるとは夢にも思わなかったからな……勝てる見込みは？」

「あるにはある。だがそれはあくまでアイツら次第の話だ」

優秀な指揮官がいてもひ弱な兵士であれば作戦を成功させるのはとても難しい事だ。その逆もまた然り。

「作戦は既に考えている。かつてないほどの奇襲戦であり、防衛戦、消耗戦だ。資材は余るほど残っている、相手を一方的に殲滅するまで蹂躪するぞ!!」

急いで艦隊の編成と艦娘達の戦闘能力を確かめる提督。プリンツと摩耶がまとめたデータを元に思考を張り巡らせる。今回に至っては演習ではない、戦争だ。下手な気持ちで戦闘に挑んではいけない。プリンツ、各ポンコツ兵器共の成長具合を具体的に手短かに言ってくれ」

「凄い無茶振りだね Admiral……まあでも皆さんの命中精度は上がっていますし、鈴谷さんなんか他の空母と張り合ってもおかしくないほど戦闘能力は上昇しています」

「翔鶴、榛名辺りはどうだ摩耶」

「元から強かったおかげか成長した艦娘達よりも強くなってきている。主力艦隊にいれても問題ないだろう」

「把握した。空母機動部隊が必要だ、飛龍と蒼龍はどうだ加賀」

「即時戦闘可能よ、充分に戦えるわ」

「ならばよろしい、空母機動部隊の旗艦は加賀に任せる。編成のメンバーもお前に一任しよう」

「分かったわ」

「提督！ ■■■町の住民の避難が完了しました！」

青葉が執務室のドアを勢いよく開き、報告する。どうやら町の住民達による避難が終わったらしい。

「逃げ足だけは無駄に早いからな我々国民は。さーて手加減する理由は無くなったわけだ、全力で戦えるぞお前ら」

「Admiral、呉鎮守府から伝達です！ その人物らしき映像を入手したとの事、現在解析中のようなです！ 更に呉鎮守府の第二倉庫の管理室で意識不明の男性が発見されました！ いずれも重体で、名前は……■■■中尉……これって!!」

「その報告は本当かプリンツ」

呉鎮守府からの伝達を疑う提督。プリンツが持つ報告書を無理矢理奪い、自分で読んでいく。この中尉は提督の後輩だ、まさかとは思えない。

「……別にプリンツを疑ってる訳じゃないが、疑問しかないんでね」

「でもAdmiral……写真が……」

プリンツが持つノートパソコンに写された写真。そこには刃物で刺された後輩が写っていた。それを見て提督は机を叩き、齒軋りする。

「手口が雑なだけに面倒な事をしてくれたなあアノ無能野郎……」

「もしかしたら……あの会議の内容も聞いている可能性がある……かなりまずいぞ提督」

「……分かっている、だから偽造工作の可能性も高い。調べてくれプリンツ」

落ち着きを取り戻した提督は再度まとめられた艦娘の戦闘能力を見定める。何十名いる艦娘達をそれぞれの能力が発揮出来る艦隊に再編成させなければならぬ。

「あの場で作戦内容を言わなくて良かった、話をずらして正解だったようだ」

「だが奴らの作戦時間はバレているのは聞かれているぞ提督。今回の作戦は？」

「挟み撃ち。まず飛行場姫の艦装に取り付けられた発信機を確認する筈だ。それを破壊し、警戒させて敵偵察機を誘き出し、鎮守府を索敵させる。だが鎮守府は生命反応が確認されない、そして不思議がる敵空母群は敵主力艦隊に躊躇無く攻撃を開始させるはずだ。そこで両側から敵勢力を挟むようにお前らが奇襲、重雷装巡洋艦や空母機動部隊の攻撃隊で敵空母群を錯乱、殲滅する。そして次にこちらの第一、第二、第三主力艦隊が前方、右方、左方から攻撃だ。そして呉鎮守府の援軍艦隊が到着、敵艦隊の後方を塞いでジ・エンドって作戦だ」

「その……上手くいくんですか？」

「いけるのかじゃない！ 上手くいかせるんだよ、俺の指揮とお前らの単純馬鹿な戦闘能力さえあれば申し分無い。失敗は考えるな、成功する事だけを考えろ」

応接間を使ってわざと危険な作戦内容を教える提督。隣のホワイトボードにはこの鎮守府全体の地図と大量の矢印、前任の写真や深海棲艦のデータなど事細かに貼られている。艦娘達に囲まれながら提督は今のやるべき事を一つずつこなしにいった。

「飛行場姫はどうする」

「知らん」

「知らんって護衛するつもりじゃなかったんですか!？」

「んじや青葉、お前は前任や深海棲艦共が本気で飛行場姫を殺しにくるんでも思ってたのか？」

「でもあれだけの情報を吐いていたらまず殺しに来てもおかしくないですよー」

「不正解、飛行場姫とは鍵と言った。前任はその鍵の謎を解く為に飛

行場姫が必要になる、当然攫うしかないわけだ。だから簡単には殺せない。作戦中に必ずどこかに現れるはずだ」

「であれば提督——」

加賀が手を挙げ、意見を述べる。

「わざと飛行場姫を目の前に出してみるのは？」

「具体的に理由と作戦経緯を言え」

「飛行場姫を殺さない、攫いに来ると言うのならわざと鎮守府の港前で姿を晒すのよ。そうすれば仲間は警戒しながらも近寄るはず、勿論前任も現れる」

「不安がるだけだと思うぞ、むしろ罠にしか見えない」

「でも誰かが殺すと脅せばどうかしら？」

飛行場姫は今、誰もが喉から手が出る程必要としている存在だ。もし前任が飛行場姫を欲しているならば敵艦隊もその情報を知っている可能性がある。鎮守府を破壊し、飛行場姫を取り返せ、と。容易に踏み込めないはずだ。

「成程。わざと脅す事で俺らと敵艦隊の間に膠着状態を作り、そのまま奇襲作戦に移る、と」

「だが加賀よ。飛行場姫が暴れる可能性もある上に情報が行き渡っているとあまり思えない。実用的ではないぞ」

「そうだな……って長門、お前はいつから執務室に入ってきた」

作戦会議中に長門が乱入。

話に夢中になっていた提督は気づかなかったようだ。

「偽装工作の下りからだな」

「この事はあまり広めたくないんだ、参加したからには最後まで付き合ってもらおうぞ」

「私もそのつもりだ」

「生意気で頭が冴えている分、とても腹立つが今は許そう。んで長門は何か考えがあるのか？」

「私としては先手必勝だな。空母達が確認したと同時に出撃、戦闘を開始する。先ず航空戦による奇襲である程度敵の陣形を崩し、一時的に制空権を先に確保。弾着観測射撃で姫や鬼などの体力を減らす。

そして第一、第二、第三主力艦隊が三方向から攻め込み、砲雷撃戦を始める。そして提督が言っていたように呉鎮守府の援護艦隊が到着し、一気に殲滅させる。不用意にこの地に近付かせるのは危険だからな。それに提督は誰かに作戦を提案させる為にわざと言ったのだろうか?」

「さーそれはどうかナー……」

あの村のように先手で空襲を受けるのはこちらとしても不利だ。いつ襲われてもおかしくないこの状況下で鎮守府に接近させるのはあまりにも危険性が高い。そう考えた長門は自らの頭で考え、作戦を提案した。わざわざ危険な作戦内容を伝えといて正解のようだ。

「そんなにあの村の事が気になるのか長門」

「当然だ、この鎮守府の艦娘でありながらこの周辺地域を守れなかったのは軍の恥でしかないからな。最も、アイツはあの不祥事を権力を使って揉み消していた様だが」

長門から若干殺気が伝わって来た。守る事の出来た地域を前任の無能な指揮によって全て崩れた事に憤りを感じているのだろう。実際あの老夫婦の様にこの鎮守府は既に地域の人達の信頼を失っている。信頼の回復は見込めない。

「話を戻すぞ。お前らの事だ、仕方ない。飛行場姫の護衛は守りたい奴に守らせる。順次俺に言え」

「でもそんな艦娘なんていないわ」

「ああいらないだろうなあだが言っとくぞー、飛行場姫の護衛を任せられた場合、前任に会う確率は一気に高まる」

提督の言葉を聞いた加賀や長門、青葉がピクつと身体を動かした。加賀達は前任に復讐したくて提督と手を組んでいる。誰よりもその気持ちは溢れているはずだ。提督はそこを狙ったのだろうか。

「だがお前らはあくまで主力に選ばれる艦娘だ。復讐させる手伝いをしてあげたいがこの鎮守府も守らなければならない。正直悩み難い所だろう、よく考えてくれたまえ……自らの欲である前任の復讐を望むか、これから希望を掴むこの鎮守府の未来を望むか……選ぶのはお前らの自由だ」

前任の復讐を望む加賀達にとってはこの上ない機会だろう。だがそれと同時にこの鎮守府も守らなければならぬ。

この二つの選択を選ぶのはとても難しい事だ。

「さて、一時全員食堂に集合させろ。大まかな作戦内容を伝える……どうした長門」

「……すまない提督、その前に提督に見せたいものがある」

36. 地下室は隠れるのに最適

「すみません提督！」

「何だ青葉、監視してなんかあったのか？」

「いえ、そういう訳じゃないんですが……この写真を見ていただきましたくて」

それは■と鳳翔が密かに話し合っている場面の写真。そして川内がまとめてくれた策略の内容。一度提督に見てもらいたかった青葉は急いでいた。

「なるほどねえ……プリンツ、お前に預ける」

「分かりました」

「青葉、よくやったな。後は任せろ」

「は、はい！ ありがとうございます！」

長門に見せたい物があると言われ、黙ってついていく提督。提督の後ろには摩耶や加賀、プリンツ、皐月達までついてきている。何故来ているかは知らないが。

医療室に入り、一番奥の倉庫に向かう。すると長門が身を屈め、床の重い扉を開けた。

「……なあこの鎮守府は地下に籠るのが大好きなのか？ この先に巨人の真実とか書かれてない？」

「ないぞ」

扉を開けると地下に入れる階段があった。皐月達を医療室で警備と言わせて待機させ、中に入る。地下の中は薄暗いが自然と埃っぽくは無かった。綺麗に管理されているのかよく分からない。階段を降りると少し小さい部屋に辿り着き、目の前に扉が見えた。長門が扉をノック、そして合言葉を言う。

すると鍵が開く音が聞こえ、扉が開いた。その中には――、

「これは驚いたな……」

奥まで続く広い部屋、両脇にベッドがズラリと並び、一部の艦娘が寝ている。白い蛍光灯に壁は一面真っ白、目が痛くなる光景だ。とはいえ衛生環境は最高だ、これには提督もご満悦である。

「医師さん、連れてきました」

一番奥の机に座っているのは見た事の無い白い服を来た女性。金髪が目立ち、眼鏡をかけている。二十代中間あたりだろうか、若い女性だ。

「……初めまして。貴方の話は聞いているわ」

「お前は誰だ」

「私は■■■■。この鎮守府の医師よ」

「お前は死亡したとこちらで報告されているはずだが？」

「死亡したと見せかけたの。ここに残る為にね」

若干声に敵意を感じる。警戒されているという事だろう。となれば前任を目の敵しているはずだ。

「何故ここに残った？」

「この娘達の治療を続ける為よ、高速修復材が使えないから治療してる。医師として見過ごせないわ」

「その言い方じゃあ、相当前任に恨みがありそうだなあ」

「前任だけじゃない、貴方達海軍が許せないのよ。この娘達を物として扱っていい様にして、こんなのおかしいじゃない……!」

前任の悪行を嘆く医師。艦娘を人として仲良く接していたようだ。長門との仲の良さから伺える。親身になって相談に乗っていたのだろう、艦娘のメンタルケアも医師の仕事だ。

「だらうなあ」

「貴方の話も酷いものばかりよ。ポンコツ兵器だとか無能だとか艦娘達を馬鹿にして、コケにしてるんでしょ。どうせ貴方も艦娘を物として見てるクズだわ」

「……偏見もいいところだな」

「どこが偏見よ。この娘達がどんなに苦しい思いで戦ってきたかわかる。」

頬が引き攣る提督。

悲しむ艦娘を人間としてみる者の常套句だ、正直言って腹が立つ。「いいや分かりたくないねー、兵器共の事情なんて。いいかー？ こいつらは救いようの無い馬鹿なんだ。人間以上の力を持っているの

に何一つ反抗も出来なかった愚かな兵器なのだよ」

「貴方それでも上に立つ人なの!!?」

「ああそうだけど何か?」

「貴方の様な人間がいるからこの娘達が不幸な目に会うのよ、分からないの!?!」

「分かってたまるか!! 他の兵器の境遇なんて知った事じゃない!!」

「何で俺が兵器共の境遇を把握しなければならない! 全ては保身に走った己の自業自得だ、それを甘んじて受けないお前らがダメなんだよ。それにお前もこいつら同様だ! 悪い事だと分かっているながら何もせずにただ正気を失う兵器共を治すだけ、ただでさえ外に行き来できるのに何もしなかったお前にも原因がある!!」

医師に指さし、言葉で責め立てる提督。確かに医師は自宅勤め、伝える手段はいくらでもあつたはずだ。実際■医師もメディアや知り合いの政府関係者、海軍に直接訴えた。だが誰も相手にしてくれなかった。

「仕方ないじゃない……誰も信じてくれなかったのよ……」

「してたんかい。まあそうだろうなあ前任は色んな手を使って黙秘させてたし」

「何よ……分かっていたの? この鎮守府の悪事」

「全て把握済みだ」

ボイスレコーダーや盗撮なので脅迫材料は揃いに揃っている。前任の噂は大本営でも広がっていた。姿をあまり現さないと言われていた提督でさえもその事は聞いている。

「何で……何で助けに来てくれなかったのよ……! 把握してるなら何とかしなさいよ、中将なんですよ!!?」

「ただでさえ本拠地での勤務がクソみたいなのに忙しいのに他の鎮守府の事情なんて耳に入れるわけないだろ、余程の馬鹿だなお前は!!」

「貴方って人はア……!」

「はいそこまで、■医師」

「提督も一回ストップ」

これ以上口論になっても何も始まらないので長門と摩耶が間に入

る。二人を落ち着かせ、話を続けた。

「長門さん、何で連れてきたの？」

「一度この状況を把握してもらいたくて来てもらった」

「もっと早くにして欲しかったな」

「つ……とにかくだ。ここにいるのは前任の迫害から逃れる為に保護された艦娘達だ。医師達がこの地下施設を秘密裏に改造して今まで守ってきた」

「まるで実写映画宇宙戦艦ヤマトの地下都市シーンだな」

「私達が分かりにくい例えはやめて」

ここで寝ているのは赤城、雲龍、飛鷹、扶桑、陸奥、日向、羽黒、阿武隈、神通、不知火、白露。かつて轟沈、又は事故死扱いされた艦娘達だ。皆、前任の苛烈な迫害を受け、医師に匿われたらしい。艦娘は高速修復材を使えば大体の重傷は完治するが、当時は勝手に使う事は許されておらず、医師の治療によって生き長らえていた。

だが提督が着任し、資材が調達された時は黙って高速修復材を盗み、寝込む艦娘達を治療。これで高速修復材の紛失の謎が解明された。更に自爆装置の書類に何故いない艦娘が明記されていたのかよく分かる。

「んじや早速だ。摩耶、プリンツ、やれ」

「分かった」

「分かりました！」

「ちよつと貴方達何を——」「やらせてあげてくれ」

提督は摩耶とプリンツに指示を出す。それは奴らが脅す為に仕掛けられた自爆装置。身体のどこかに配置されている為、入念に探していく。

「ありましたよAdmiral。計七つです」

「よし、海に捨てる。念の為に無線機は壊しておけ」

「分かりました」

「何よ……それ……」

「自爆装置だ。前任はこれを仕掛けてポンコツ兵器共を脅していた。勤めていたお前なら把握済みだと思うんだがー？」

「し、知らないわよ……そんなの……」

「貴方が……新しい提督、ですか……」

突然提督を呼ぶ声が聞こえた。声の方向には頭以外を包帯で保護され、腕を失っている赤城だ。ベッドで寝ており、白い天井をずっと見続けている。

「その声は赤城か。そうだ、俺がこの鎮守府に配属させた提督だ。以後よろしく」

提督が手を伸ばそうとする。しかし右腕を失い、左腕をあまり動かさない赤城にとっては嫌味でしかない。

「また私達を……脅しますか……?」

「場合によつてはな。だが脅す程お前らには材料が無い、脅しても無意味だ」

「そう……ですか。提督」

「何だ」

「私達の過去話を聞いていただけませんか?」

「却下。時間の無駄だ」

「私が着任した時——」「あ、勝手に始めるのね」

赤城。

彼女はかつて有名な一航戦であり、加賀と肩を並べる実力派の艦娘。着任当時から出撃した赤城単体での殲滅力ほどの空母より引けを取らず、加賀と組めば生き残れる敵艦隊はいないと言われている。勿論前任にも気に入られ、第一艦隊のエースとしてその力を力の限り発揮する。

だが彼女には唯一の欠点があった。

「前の提督は私達を洗脳していきました。洗脳された艦娘は他の艦娘を侮蔑し、差別して蔑んだのです。私はそれが許せませんでした」

当然優秀な赤城も前任の洗脳にかかっている、はずだった。だが赤城だけはその洗脳にかからず、差別された艦娘達の唯一の希望として前任に反抗を企んでいた。

理由は分からない。元々そういう類いに強いのだろう、それでも自分が特別だとは思わない。仲間の為、友の為に赤城はわざと洗脳され

たフリをして戦ってきた。

だがその事に気付いた前任は赤城の存在を邪魔に思い、差別している艦娘達を使ってわざと轟沈させるという作戦を計画。その事に気付いた当時の■■■医師は赤城にそれを伝え、ここに来るまで沈む運命を回避していた。

あまりにも上手くいかない事に前任は怒り出し、とうとう赤城を殺そうと差別している艦娘達に軍刀を渡して暗殺を試みる。流石の赤城も軍刀を持つ艦娘に動揺を隠せず、右腕の切断と重度の外傷を受けながらも窓から逃亡。見つけた医師によって匿われ、今まで治療を受けていた。

「もう弓を持つ事すら……出来ません。でも私は戦わなければ、ならない……」

あまり動かせない左腕が無意識に動き、白い天井に手を伸ばす。仲間を守る為、上に立つ者として戦わなければならない。だが意志はあっても身体は動かせない、もう戦えない。それでも赤城は手を伸ばし続ける。

「艦娘達の為にも……私が戦わなければ……」

「赤城さん……!」

加賀が伸ばした手を握り、赤城に寄り添う。涙を流す加賀に赤城は手を頬に当てる。

「加賀さん……見てましたよ、加賀さんの勇姿……とつても格好良かったです……」

「ごめんなさい……私の所為でこんな事に……」

「大丈夫です……もう最初から許してますよ。元氣出してください加賀さん」

「本当に……ごめん、なさい……」

赤城は最初から許していた。洗脳され差別していた事も、自分の右腕を切り落としたのも。最初は疑問でしかなかった、何故互いに思っている仲なのにそこまで敵視し、そして泣いているのか。しばらくしてその原因が前任の洗脳と気付いた時、赤城は涙を流した。皆操られている、だからやりたくない事だと思っても身体が勝手に動いてし

まう。原因に気付いた赤城は操られていた加賀を許す事にした。

加賀は悪くない、全ては前任が悪いんだと。これ以上加賀に責任を負わせない為、心が潰れないように。

徐々に体温が低くなる身体に頬を寄せる加賀。分かっていた事だ、自分の所為で大切な人を失う事ぐらい。当然憎んでるはずだと思っただ。

でも赤城は許していた。あの演習を見ていたからかもしれない、もしくは他の理由かもしれない。赤城の心の底から湧き上がる優しさに加賀は救われたのか、いやそれは分からない。

「新しい提督の方、もう私に残された時間は少ないです……だから、ここで約束して、いただけませんか？」

残念ながら赤城の状態はあまり芳しくはなく、高速修復材を使っても治らず身体が崩壊しつつある状態。医師によると身体の中にある核が既に崩れかけ、生命維持状態が難しい、人間でいうなら脳死に近い。

核を治す方法は現在開発されたどの方法も確率が雀の涙であり、仮に治せたとしても副作用が重すぎて逆に身体に影響を及ぼす事が殆ど。助かる見込みはゼロに等しい。

「何をだ？」

「この娘達を絶対に見捨てない、と今ここで宣言し……約束してください……」

赤城が強く訴える声で提督に言う。この提督が艦娘達にとってどういう存在になるのかはこの先分からない。でも長門や加賀が共にいるという事はきつと悪くない人なのだろうと思う。であればその思いに賭けるだけだ。

「……良いだろう。このポンコツ兵器共は絶対に見捨てないと宣言する。最後の最後まで俺がこき使ってやるからありがたく見え、赤城」その言葉を聞いて安心したのか赤城は少しだけ微笑みを見せる。

「……もし何かやらかしたら……殴ってあげます」

「お前にその手があったららの話だがな、とはいえ二度とお前に殴られるのは流石に勘弁して欲しいのでその面については安心したまえ」

「その嫌な面も、これで終わりだと……清々しますね」

「あの時お前が旗艦を務めていたら俺はしくじっていたところだ、良かったな」

まるで面識があるかのように話す二人。提督がしくじるといふ事は赤城は提督にとって認められた存在かもしれない。

「他の艦娘の様態は？」 ■■ 医師」

「……今のところ赤城さん以外は一命を取り留めているわ。他の艦娘は……」

「行けます」

口を開いたのは不知火だ。起き上がって提督に話しかける。

「私達は戦えますよ、兵器ですから」

「自分の事を分かっててなによりだ。他は？」

「……ならばよし。全員正装に着替え次第、食堂に集まれ。俺からは以上だ」

「え!? 皆大丈夫なの!？」

「どうした■■■ 医師、何かこいつらにドクターストップでもあるのか？」

「多ありよ！ 確かに治療は済んでいるし、完治はしてるけど……病み上がりよ!?! 出撃するにしたって一ヶ月間もろくに戦っていないの!?!」

「こいつらが戦いたいと自らの意志で示したんだ。だったら俺はこいつらを先導し、指揮する義務がある」

皆ベッドから立ち上がり、提督を見る。艦娘達の中には戦うという誓れの意志が魂となって燃えていた。どうやら戦闘意欲は充分らしい。

「陸奥、大丈夫なのか？」

「ええ大丈夫よ長門。私はもう治ったわ」

「ちようどりハビリが欲しかった所だ問題無い。航空戦艦の意地つてのをお前に見せなければならぬからな」

「そんな……」

提督の事を信じるつもりは無いが、この鎮守府が破壊されるのはこちらが困る。自分達を助けてくれた赤城や医師を守る為、

「赤城さん、■■さん……今まで私達を匿っていただきありがとうございますございました。この恩は一生忘れません」

「貴方達に救われたように私達も貴方達を助けたい。この提督の話が本当ならばこの鎮守府に攻めてくる深海棲艦を私達が倒さなければなりません。だから待っててください、また一緒に外でお話ししましょう」

寝ていた艦娘達は提督達の後を追い、地上へ戻っていく。その背中を医師は見届ける事しか出来なかった。

「ハア……どう言っただって無駄、か。赤城さん」

「大丈夫ですよ、彼女達なら必ず……やってくれます……」

「……そう……かも、ね……」

「心配しなくても大丈夫……——」

「どうしましたか……赤城さん!？」

37. 弱者だからこそ出来る事は無限大

「集まったかポンコツ兵器共」

食堂に全ての艦娘が集められる。警戒中の空母を除き、訓練を受けていた者や部屋で閉じこもる者も全て呼び出され、ガヤガヤとしていた。食堂の窓のカーテンは全て開かれ、外は見えない。二階で見下ろす提督は艦娘達を確認して伝える。

「お前らの噂通り、明日朝六時……あーマルロクマルマルにこの鎮守府に決戦レベルの深海棲艦の大艦隊が攻めてくる」

艦娘達の前にプロジェクターで説明する提督。作戦の内容を馬鹿でも分かりやすく伝える為、細心の注意を払って説明した。

「――以上だ。俺が考えた奇襲作戦と長門が考える作戦と二つある。選ぶのはお前らだ、別に俺の方を支持しろなんてのは強制しない、自由になんと良く考えてから選べ。質問は？」

作戦内容に手を挙げる艦娘が複数。順に提督は質問に答える事にした。

「はい天龍」

「奇襲作戦の方が、本当に上手くいくのか？」

「それはお前らの実力次第だ、これは俺が考えた仮想の未来でしかない。こう上手くいってほしいという考えでいてもらいたい。はい夕立」

「姫や鬼が十二体って……本当っぽい？」

「恐らくだ。この鎮守府を破壊したいくらいだ、これぐらい必要なんだろう」

今では新たに確認された深海棲艦もいる。空母棲姫や戦艦棲姫など従来から確認されている個体。集積地棲姫や護衛棲水姫、改造された戦艦棲姫改に深海雨雲姫などの新個体も確認されている。日々日々深海棲艦は力を増してきているのだ。

「姫や鬼クラスの個体のパターンは判別出来ない。その場の状況で対処する事になるだろう、だが言っておく。慢心しようものなら死ぬと思え」

タダならぬプレッシャーに食堂の中が沈黙に包まれる。そんな中、一人の艦娘が手を挙げた。

手を挙げたのは時雨だ。

「……僕は……提督の作戦が良いと思う……」

「俺も提督の方がいいかなー」

「長門さんの方に……したいかな……」

「でも長門の方も悪くないわよ」

どちらの作戦が良いか悩み始める艦娘達。確かにどちらの作戦も効率良く敵を倒せるモノだ。更に艦娘達は騒ぎ始める。

摩耶やプリンツ、長門は提督の表情を確かめようと顔を覗く。通常なら提督はガミガミ言うはずが、その光景をただ真顔で眺めているだけだった。

その中、一つの挙手と大声が艦娘達の騒ぎを静止させる。手を挙げたのは古鷹だ。

「どうした古鷹」

「……私は長門さんの作戦を推奨します」

「どうしてかな?」

「……私は……長門さんの作戦が私にとって一番戦える作戦だと思いました。訓練で培った知識と技術で深海棲艦を倒し、奴らに見返したいと思っています。なので私は長門さんの作戦を推奨します」
「ほう……」

それに便乗して木曾も手を挙げる。

「俺は提督の方を支持する。奇襲作戦は俺の先制雷撃もかなり有効的だ。もし長門の考えた作戦が空母機動部隊だけでなく俺みたいな重装装巡洋艦を範疇に入れた奇襲を考えているならばそちらを支持するが、どうなんだ長門」

「……それも考えよう」

「なら長門の方を支持する」

古鷹や木曾に合わせて他の艦娘達も長門の作戦を支持し始めた。周りに同調するように、空気を読むように合わせる艦娘達。一方で差別している側の艦娘達は提督の方を支持している。

「長門よりお前の考えた作戦の方がよっぽど良い、実力を最大限に発揮出来るからな」

「この鉄屑達よりも私達が戦った方が作戦を成功させる確率は百分かと」

「榛名はこの鎮守府で深海棲艦は邪魔なので排除させてもらいます、なので貴方の作戦を支持します」

差別する側と差別された側で対立する艦娘達。と言っても差別された側が一方的に怯えているだけだが。

「……すまない提督」

「何だ那智」

「この場を借りて皆に言いたい事がある。発言を許可してもらいたい」

「……」自由

手を挙げた那智が差別された側の艦娘達に言いたい事があるらしい。提督はそれを認め、黙ってみる事にした。すると那智を初めとした加古、阿賀野、祥鳳、龍驤、比叡、葛城が立ち上がる。思いもしない行動に他の艦娘達も驚いているようだ。

「皆、本当にすいませんでした!!」

一斉に頭を下げる。それは心からの謝罪だった。差別というやつてはいけない事を洗脳という呪縛でやってしまった那智達は仲間を集めて謝りたかったのだ。それを見て艦娘達は戸惑っている。

「何も許してくれとは言わない。だが鈴谷達のようにコイツら見返したいと思っている!」

「何だ那智、私達に喧嘩売るのか?」

「ああそうだ。お前達とはもう関わらない、私達は今からお前達と敵だ」

差別している側の方で亀裂が出来始めた。睨み合うも那智達の顔は決心している。沈黙が走り始めた。

「どうか償いをさせてくれ!!」

「……」

「あの演習で私達は目が覚めたんだ……私達も見返したい。どうか頼

む！」

「そんな事急に言われても……」

「馴れ合いは嫌ですわ……」

勿論差別された側の艦娘は否定する。突然見返したいと言われてもこちらが困るだけだ。かといって矢作達も苦しんでいるはず。何とも言えない気持ちだ。そんな中、鳳翔が手を挙げ、急に話し始めた。「……どうでしょうか皆さん、ここでもう争うのは」

「えっ？」

「この娘達の誠意はよく伝わってるわ。皆も何回か経験してるでしょう？この娘達は謝り続けてる、もう良いんじゃないかしら」

「な、何を言ってるの鳳翔さん？」

「……んまあでも……」

鳳翔の言葉に否定する古鷹、共感する時雨。確かに何度も謝って、見返したいと言われた。許されるまで強くなって更生した自分を見てもらいたいんだと言っていた。鈴谷や加賀のようになりたい、と。あの演習が無ければ鈴谷と加賀のイメージは差別した側の艦娘としてずっと頭にこびりついていただろう。だが鈴谷や加賀の様に謝りたい艦娘もいるのではないか、そう思い始めていた。

「それに提督についても瑞鶴から聞きました。貴方は私達の事をちゃんと考えてくれていて、と。あれだけの罵詈雑言は凹んだ私達を励ます為、あの演習や訓練も私達の為なんですよ？正直信じられませんでしたが……提督は優しい人です」

「そうなのか……」

「知らなかった……」

「ですからこの娘達の事もお願い出来ますか提督」

「お願いします!!」

「そうか……」

——んな事こちらから願い下げだボケエエエ!!」

突然罵倒した提督は机を叩き合図する。するとプロジェクトか

ら映されたのは■■と鳳翔が話し合っている場面。何枚もの写真が画像として張り出されていた。それを見て全員が驚愕する。

「鳳翔」

「っ…………」

「■■と一体何を話し合ったんだ？」

「…………ごめんなさい…………間宮さんが人質にされて…………」

「…………チツ」

舌打ちする那智。

鳳翔はその場で泣き崩れている。

どうやらこれは作戦だったようだ。

「皆さん、これは相手側の策略です。わざと目覚めたフリをして Admiral の前で貶めるつもりでした」

「そ、そんな…………」

「残念だったなあ那智」

「…………出直しましょう」

「あ、作戦は後で紙に記しておくよ。ばいばーい」

全て暴かれた那智達は食堂を出ていった。差別してる側の艦娘も溜息を吐いたり、頭を抱えたりと悩みながら出ていく。

食堂は差別された側の艦娘だけが残ってしまった。場の状況についていけず困惑している。

出ていった那智達はそれぞれ不満残しながら寮に帰っていった。

その中那智は廊下で■■■と出会う。

「…………すまない■■■」

「大丈夫ですよ」

「これで良いのか？」

「…………ええ良いんです。上手くバレずに済みましたので…………」

一方、食堂では皆沈黙していた。突然の鳳翔の裏切りに今までの嘘の謝罪。二度裏切られた艦娘達は何を言えばいいのか分からなかつ

た。

この場にいるのは朝潮型全員、第六駆逐隊、島風、白露、時雨、夕立、不知火、神通、阿武隈、天龍、球磨、多摩、木曾、五十鈴、古鷹、最上、熊野、足柄、羽黒、鈴谷、鳳翔、日向、扶桑、陸奥、金剛、大鳳、飛龍、蒼龍、加賀。全員差別された側の艦娘であり更生した艦娘。そして長門、青葉、皐月、瑞鳳、ガンゴート、プリンツ、摩耶、提督。鳳翔さん、泣かないで……」

「鳳翔さんは大切な友人を人質に取られていたんです、仕方の無い事ですよ」

「鳳翔さん！」

鳳翔の名を呼び、駆けつけてきたのは間宮だ。どうやら人質は提督側の方で救出済みだったらしい。間宮は鳳翔を抱きしめ、慰め合った。

「……この写真は青葉が取ったんだよね？」

「はい、そうですか……？」

「つまりはこんな状況が何回も来るって事だよね……皆！ 騙されちゃいけない！ アイツらは色んな手でやってくるはずだよ!! 気を引き締めて!!」

「……あのー……」

古鷹が呼び掛ける中、五十鈴が手を挙げた。何か言いたげらしい。

「どうしたの五十鈴？」

「私は……もうこのままでいいんじゃないかなって思ってるんだけど、ねえ球磨」

「……うん、そうだと思うクマー」

「……待って待って、どうして？ 奴らはまだ私達を見下してるんだよ!?!」

「だってもうアイツらと関わりたくないし、アイツらを気にしない今の生活の方が何より充実してるし、それに提督が守ってくれてるし……」

五十鈴や最上達がこのままで良いと言う。確かに気にしなければ楽かもしれない。でも折角提督が手伝ってくれてるのにその考え方

はいけないんじゃないか。古鷹は焦っていた。同情出来てしまう為に心が揺らぐ。

「何言ってるの!? これ以上見返せるチャンスなんて無いんだよ!? 提督に言えば何だって出来るのに!!」

「そんな事言っても、ねえ……時雨」

「僕達はさ提督にいいように使われる方がいいんだよ。提督が何とかしてくれるし、実際に直そうとしてくれているし……それに僕達でも仲間同士の絆を見せればきつとアイツらも何か変わってくるんじゃないかな?」

「そうだね、絆があれば何とかなるっぽい」

「絆があれば大丈夫よ、古鷹」

足柄や夕立が時雨の言葉に共感した。絆さえあれば大丈夫、そういった自信が彼女達の心の中で芽吹いたのだろう。今まで地獄を味わってきたからこそその結束した絆。これさえあれば大丈夫と言う。

「……素晴らしい!! お前らの考えにとっても感服した。長門、お前の作戦を採用する、後で作戦内容の書類を全艦娘分作っておけ。摩耶、ここを出る準備だ。作戦が終わった後に出ていくぞ」

「ちよ、ちよつと待って提督! 出ていっちゃうの? まだやりたい事があるのに!」

「だって要するに俺がいてもいなくても自分達で何とか出来るって話だろう? なら大丈夫だ、俺がここに優しい提督を配属させてやる。俺がいる必要は無くなった、行くぞ。解散だ」

「でも提督!」

「彼女らが良いと言ってるんだ、そうだろ?」

「うん……提督のおかげで前に進めそうだよ。力よりも大事な物があるから、ね?」

皆納得しつつある。

そこで提督は嫌味を言うように笑顔で話し始めた。

「見たまえ彼女らの満足そうな表情を、関西修学旅行の帰りの新幹線に乗る前の高校生そのものじゃないかあ。摩耶や古鷹君、よく覚えときたまえ。これが人の心を持ってしまった兵器の成れの果てだ、兵器

は人の心を持つとかくも寄生虫のような生き物になるのだよ」

「寄生虫って？ 私達の事を言ってるの？」

「他に誰がいるのかな？ 自覚すら無いとは本当に羨ましい、コケにされているまま気付かずに海に沈められるなんて幸せな一生だ」

「それは流石に言い過ぎじゃないの!？」

物議を醸す五十鈴達に近付き、言わんばかりの罵詈雑言を並べる提督。提督も負けじと言い放つ。

「すまないね、君達のような力があるのに動かない人達が大っ嫌いなんだわ」

「その力がある私達が貴方達の代わりに戦ってるのよ？ 少しは感謝でもしたらどうなの？」

「戦ってあげてるのにも関わらず今まで俺の言った言葉の意味が理解出来てないようだから教えて差し上げてるんだ。いいかー？ お前らはこの国の為に生まれた兵器だ。国を守らせる為にご機嫌を取らせて、鎮守府というシェアハウスで何不自由ない生活させて黙らせてる。提督がいなきや何も出来ない道具、人間に寄生する虫、それがお前らだ」

「提督、それぐらいにしといたほうがいい」

摩耶が暴走する提督を止めようとする。しかし提督は止まることを知らない。

「お前だって深海棲艦を倒せないから私達に頼る寄生する虫じゃないの!？」

「提督は私達の何が受け入れられないんですか!？」

「かつてこの国はある戦争にて敗北したと言う。世界最強と謳われた国にある爆撃で宣戦布告、そして二回も爆弾を落とされ、敗戦したからだ。戦争が終わった後、戦勝国の監視下の元で様々な産業が衰退していったんだ。戦後のインフレや安定恐慌のおかげでね。だが隣で戦争が始まった時にこの国は高度経済成長期に入ってオリンピックや万博まで開かれ、瞬く間に発展していった。だがそこから成長期は右肩下がり、衰退しつつあるその時に十二年前に突如として現れた謎の敵、深海棲艦とお前ら艦娘が現れたんだったな。深海棲艦を倒した

ら国民から讃えられた、多くの者は艦娘になりたいとまで言い出した」

語り出した提督は食堂を広々と眺める。

「鎮守府とかいう古き汚れたシエアハウスも建ててもらった。使いもしないお金も貰えた、いいご身分だよな。自分達の活躍が世間に広められ、評価され、更に注目の的になった。なんてハッピーでグレートでワンダフルなんだろうか。そして今、裏では存在を否定され、概念を拒絶され、立場は逆転して味方同士で醜く争い、かつての関係はもう戻らない可能性だってあるけれど、でも俺の考えた訓練のおかげで身も心も強くなれたし、俺の優しさや仲間同士の絆も感じられた。有難いことだよ、本当に良かった良かった！これで自分達は強くなるんだろう、海もいずれ取り返せるんだろう、差別した奴らの事なんて別に気にしなきゃ気持ちちは軽いし、仲の良さを見せつけなければきつと何か変わってくるんだろう!! だって絆があるからああああ!!!」

「ちよ、ちよつと五十鈴!? 落ち着いて!! 提督!!」

激情した五十鈴が提督の前まで近づく。そして胸倉を挿んで提督の頬を叩いた。流石に上官に手を出すのはまずいと思っただのか周りの艦娘達が五十鈴を抑える。

古鷹は倒れ込む提督を支えようとするも拒まれ、自力で立ち上がった。

「どうしていつもそんな酷い事が言えるの!? 貴方は悪魔よ!!」

「貴方なんか私達の苦しみが分かってたまるもんですか……私達だって貴方の言ってる事ぐらい嫌という程分かってる……そんな事ぐらい私達が一番分かっているのよ!! だけど……貴方達が何度も使えない鉄屑とかポンコツ兵器だって言うから!! 今こうやって納得しようとしてるんじゃないの!!」

「何故?」

「な、何故?」

「鉄屑だポンコツ兵器だと言われ続けて何故否定しないんだ?」

艦娘達が俯く。

「私達は弱いから……」

「弱いから何なんだ？」

「弱い者なりに頑張つて来たんだアア!!」

「だから何だつてんだアアアア!!!」

提督の怒号に気圧された五十鈴達。一瞬の表情の豹変ぶりに少し後ずさりをしてしまう。

提督がポンコツ兵器だと罵つてから、一部を除いた艦娘達は一度も否定してくれなかった。否定してもすぐに諦めてしまう、自分は弱いと思ひ込んでいる故に自信が無い。

「だから同情して欲しいのか？　だから慰めて欲しいのか？　だから優しくされたらすぐ嬉しくなってしまうのか!?　幾万の英霊達や国民達に申し訳ないとは思わないのか？　何がポンコツ兵器だ……!　お前らはどんな兵器よりも遥かに素晴らしく強い兵器であり人間だどうして思わないんだ!!」

だから訓練をさせる事で、艦娘達の自信を取り戻そうとした。提督から自信を出せと言ったところで艦娘達はそう簡単に自信を取り戻さない上に成長もしない。誰よりも強くなって行動で示す事で自分は強くなったんだと己の成長に気づかせる。提督の持論ではあるが、成長を実感しなければ人は自信が芽生えない。

だが提督はまるで成長していないように訴える。誰もその言葉に對抗する事が出来なかった。

「誰にも責任を取らせず、見たくないものを見ず、皆仲良く暮らしていけば楽かもしれない。しかし!　誇りある兵器であり人間だと思ひ返したいなら!!　お前らの目指すべき理想の存在が人間だと言うのなら!!　見たくない現実を見なければならぬ、誰かに苛まれ非難されようとも立ち向かわなくてはならない、深い傷を負う覚悟で前に進まなければならぬ!!　戦うという事はそういう事だ、愚痴なら海底で吐けばいい!!　力が全てじゃない?　力なんだよ……!　お前らが相手に一矢報い意気地を見せつけ、己の存在を証明する方法は!　奪われた物と踏みにじられた尊厳と自由に相応しい対価を勝ち取る事だけなんだ、それ以外にないんだ!!!」

時々我慢ならずと言ってしまいう事もあった。教えなければ分かってくれない事もあった。

提督は本心を伝えるのが下手だ。それを摩耶は熟知している。自分達の今までの境遇を分かっているからこそ提督はこの鎮守府の艦娘達の事も理解している。

二度とあんな目には合わせない為に。

提督はわざと近寄る。

そして艦娘達にある事を伝えた。

「鳳翔、お前は体を張った空母達の為に前線を維持し続け、撤退する空母機動部隊をその身を持って護衛し最後まで守り抜いた!!」

「最上、お前は敵に潜水艦がいるといち早く察知し、第三艦隊旗艦として他の艦隊の道を多く作りサポートに徹底した!!」

「時雨は大規模作戦においての連日MVPの最高記録保持者!! 足柄は単騎で敵の連合艦隊を殲滅させ、この鎮守府で初めて艦娘として勲章を授かった!!」

「熊野や筑摩は殿となって第一主力艦隊を撤退させ、何回も何回も敵艦隊を返り討ちにしてやった!!」

「夕立は命令違反をしながらも敵を殲滅し続け、あの港湾棲姫を単騎で瀕死にまで追い込んだ事がある!!」

「五十鈴は球磨や多摩と一緒に水雷戦隊の要となり、合計十五人の駆逐艦を育て上げた!!」

皆が昔に上げた戦果をそれぞれ並べる提督。あれだけ知りたくもないと言っていた提督が艦娘達の過去を知っていた。

何の為かは分からない、だが涙がどうしても止まらなかった。そして提督は指をさして震えた声で訴える。

「あの日本の窮地から……我々国民を救い、今の日本を守り続けている他のお前らは……敵を恐れぬ勇氣ある意志を持ち! その身を持って戦場を駆ける身体と!! 仲間を愛し、慈しみ、励まし合う人間が持つ心と!! 決して落ちぶれる事のない気高き誇りと!! 最後まで

で諦めずに戦い続ける不撓不屈の魂を持っている!! だからこそ今まで全てにおいて虐げられ、貶められ、生き抜く為に戦い続けていた貴方達なら……!! これら全てが繋がった曇りなき魂を、きつとどこかに残してるツツツ!!!」

何も言えなかった。

怯えて口を開けなかった訳では無い。

初めて提督が自ら本心を口にした事に驚き、そして泣いていた。皆の戦果を称え、苦しみも理解していた提督。青葉は既に本心だと分かっても、涙が出ていた。

「……はずだと思って期待していた俺が馬鹿だった。いいかー? 二度とそんな減らず口を叩くのはよしてもらいたい、ポンコツな鉄屑同士お互い傷を舐め合いながら穏やかに健やかにどーぞあの海でくたばってくれ!! 以上解散だツ!!!」

最後に見捨てる様に言葉を吐き捨て、食堂を出ていこうとする提督。摩耶は何も言わずに提督の後を追った。その時――、

「皆……」

38. さらば希望の光よ、ようこそ魂の灯火よ

「皆……」

久しぶりに地上へ出た医師が不安な表情を浮かべ、食堂に入ってきた。この表情を見て一部の艦娘は事の状態を察する。

「赤城さんが……息を引き取りました……」

「え……」

「……」

一航戦赤城が死亡。体内の壊れかけていた核が完全に崩壊。それに伴い身体も光となって消えていく。

「出来る限りの事をしましたが……もう身体が崩壊を始めていて……どうにも、出来ませんで——」「加賀さん!!」

赤城の訃報にいてもたってもいられない加賀は医務室の地下へ向かおうとした。だが医師が腕を伸ばし、行く手を阻む。

「どいてください……私は——」「話はまだあります」

「っ……」

「赤城さんが……死んじゃった……の……?」

「そんな……」

差別された艦娘達にとって唯一の希望だった赤城。親身になって相談に乗り、誰に対しても友好的に接してくれた彼女がたつた今亡くなられた。それは生き残った艦娘達にとって辛い事ではない。

「瑞鳳、赤城って……あの赤城か?」

「そうガングート。貴方をボコボコにした艦娘よ」

「……そうか」

ガングートは一度この鎮守府との演習で赤城と戦った事がある。獲物を削ぎ落とす一航戦の眼光にそれに似合う戦闘能力。艦娘の中で摩耶以外に苦戦した相手だ。流石のガングートも堪えたのだろう。深く帽子を下げ、顔を隠した。

「赤城さんの遺言、ここで打ち明けますね……」

■ 医師が赤城から預かった手紙を取り出した。それは事前に死期を悟った赤城が一人で書いたもの。 ■ 医師が若干震えた声で読

み上げた。

『拝啓皆さんへ。』

まず先に、ごめんなさい。

貴方達と共に戦う事は、出来そうにありません。

私は貴方達の希望として、■■先生と共に親身になって共に励まし合い、慰め合い、戦ってきました。

これから先は苦しい事ばかりかもしれませんが、それでも戦う事をやめないでください。運命に抗えるのは戦いだけです。

それに貴方達はとても美しく、強い艦娘なんですよ？ 誰にも負けない心を持っていて、誰にも負けない優しい心を持っている。それだけあればどんな困難な状況でも打破出来るはずですよ。私達が兵器であろうと、人間であろうと、そのどちらでもなくても、艦娘である事を忘れないでください。

新しい提督の方はとても苦勞すると思われませんが、きっと貴方達の方になってくれるはずですよ。また加賀さんや他の艦娘達の事を責めではダメですよ。皆同じ艦娘、同じ心を持っている。

では最期は皆さんに一言だけ、、、こんな私を慕ってくれてありがとう。

赤城

型航空戦艦、一航戦赤城より』

文字は決して綺麗に書き並べてあるのではなく、読み取れるのがやっとの程歪んでいた。恐らく赤城が毎晩隠れて、慣れない左手で書いたのだろう。自分の死期を悟っていた赤城は自分が思う事だけを精一杯に文字に記した。涙を流しながら書いていたのか、所々文字が淡く滲んでいいる。

赤城の心温まる一つ一つの言葉に涙を流す艦娘達。彼女達にとって赤城は希望の存在だった。この闇深い鎮守府の唯一の光。赤城にどれだけ助けられた事だろうか、感謝を言えなかった自分が悔しい。

加賀は泣き崩れ、声を漏らしていた。加賀がこれほど感情的なのは

珍しい事だ、それだけ赤城の事を大切に思っているのだろう。

「加賀さん!!」

加賀は立ち上がり、医師の腕を振りほどいて地下の医療室へ走る。医師は止めもせず、ただその背中を見届けるだけだった。

「……頑張ってくれたな……赤城さん」

「あ……あ……」

「提督!!」

食堂で重い空気が流れる中、誰かが提督を呼んだ。提督が振り向く先には廊下を急いで走る瑞鶴。確か瑞鶴は鎮守府近海警戒中の番のはずだ。急いでいる顔からして理由は分かる。

「敵艦隊を複数確認したわ! 真っ直ぐこっちに向かって来てる!!」

「パターンは判別出来たか瑞鶴」

「ある程度は……確認出来たのは駆逐棲姫、重巡棲姫、空母水鬼、空母棲姫、防空棲姫、戦艦水鬼、そして多分……敵艦隊旗艦は——」

「——あの戦艦棲鬼……」

長年海軍が頭を悩ませ、苦戦している存在、戦艦棲鬼。

突如深海棲艦が現れ、陸地侵攻時にその恐怖の象徴として君臨していた。連合艦隊を単騎突撃で軽々と薙ぎ倒し、あらゆる手段で艦隊を蹂躪する。凄まじい威力を發揮する主砲に相手を寄せ付けない剛腕の艤装。深海棲艦の中枢と知られている中枢棲姫以上に厄介でまず戦いに備えければ勝ち目は殆ど無い。

「やはりか……」

「ええ……つてこのムードは一体……」

「つい先程……赤城さんが息を引き取りました」

「えっ……」

瑞鶴も予想だにしない報告に耳を疑う。しかし皆の反応からして本当のようだ。自然と力が抜けてしまう。先程加賀が涙を流して走っていたのこの訳か。

「……せない……」

「……?」

「許せない……!」

古鷹が手を握り、怒りをあらわにする。

「許せる訳が無い……!」

「一度殴らなきや……気が済まないよ、もう……!」

「抗えるのは……力だけ……」

五十鈴や時雨、鳳翔までも立ち上がる。皆の不満が爆発しつつあった。

今まで虐げられた自分に納得した事がおかしかった。

前任がいなくなった事による苦しみの解放で気が緩んでいた。

嫌な状況から逃避していた。

それでも赤城は戦っていた。

だったら自分達も――、

「……殺意が漏れてる、な……?」

艦娘達の雰囲気突然変貌した。まるで身体の底から湧き上がるような殺意が溢れ出し、空気がピリピリし始める。最初に天龍が動き出し、それについていく艦娘達。そして提督の前に近付いてきた。

「ふえ!? どうした、うわッおい!」

突然天龍に両腕を掴まれ、戸惑う提督。普段の姿とはまるで違う。

「……くれ」

「……何だった」

「戦わせてくれ!!」

天龍が憎しみの目で訴える。その声は廊下の奥まで響き渡った。他の艦娘達も同じ目をしている。皆戦うつもりのようなのだ。

「敵は想像以上に巨大だぞ?」

「だったらアンタが言ったようにぶっ飛ばすだけだ! アンタがいれば絶対に勝てるんだろ?」

「それはお前ら次第だ! 好きに戦いたまえ、俺が全力で指揮してやろう」

「勝てなかったら責任取れんのか?」

「取るわけないだろ？ 馬鹿なのか!？」

「……そういうと思ったぜ、提督」

提督がほくそ笑む。天龍達も若干笑みを浮かべ、提督の暴言を受け止めた。皆いい目をしている。

つい先程のクソみたいな生温い目とは大違いだ。

「……少しはマシな目になれたようだな」

提督は天龍の腕を振りほどき、食堂に入る。一番手前の長机に右手を置き、持ち前の拳銃で手の甲を貫いた。銃声が響き、一連の行動に驚く艦娘達。あれだけ痛みに敏感だった提督が声も上げずに艦娘達を睨んだ。

それは同じ痛みを持つ者としての証。差別された側の艦娘が受けた痛みを少しでも理解する為に手の甲を貫かせた。摩耶や皐月達はその行動を理解し、同じく手の甲を貫く。

共に戦う「仲間」として。

「赤城さん……」

地下の医療室で加賀は見守っていた。赤城の身体から少しずつ、欠片が光となって消えていく。今はもう、両足も、両腕も、消えている。だが死後の彼女の顔はとても穏やかで優しそうな笑みを浮かべていた。

その笑みを見て加賀は決心する

「加賀さん……?」

「■先生、後はお願ひします……」

「……分かりました。任せてください」

「では……」

加賀は黙って地下の医療室を出ていく。

今まで色んな事があった。

どうしようもなく無様に扱われ続ける日々。

到底拭い切れない悪夢の数々。

そして、再来する日常。憎むべき敵との邂逅。

幾千もの地獄を潜り抜け、立ち塞がる壁を貫き、まだ見ぬ暗闇の先へ向かう彼女の魂は――、

「……また、見ててください――」

――私達のかつての雄姿を……復活させてみせます……!!」

――その暗闇をも照らす灯火ともしびとなって燃え滾る。

「提督、艦隊の編成を。あと治療もだ」

「分かっている、だがお前らもだ。編成に関しては長門に詳しく書類にまとめさせた、じきに届く。■先生に伝えてくれ、後で医務室にて治療を頼むと」

「分かった」

「何故長門の作戦にしたんだ？」

「分からないかガングート。敵の作戦時間がバレているのは既に敵も把握済みだ。であれば作戦時間を早めてくるのは必然。今はちやうど十八時、日が暮れる直前だ、空母機動部隊の奇襲でまずは先制攻撃、制空権を確保させる」

日が沈みかける時間帯だ。夜戦になれば夜戦工作員を持つ瑞鳳以外の空母の攻撃は無意味になる。出来れば日が沈む前に作戦を開始

しておきたいところだ。それ以前に自らの意思を持って作戦を立案した長門の為でもある。

「そこから長門の作戦が始まるのだな」

「そうだ、そして夜戦に突入させる。加賀、編成は決まったか？」

「やったああ!!! 待ちに待った夜戦だああ——」

どこからともなく川内が夜戦と聞いて飛び出してきた。それを摩耶は川内の頭を掴んで床にめり込ませる。流星に堪えたのか川内は静かになった。

「……ええちようどよく決まったわ」

「ならばよし。明石、探照灯と照明弾は出来てるんだろうな？」

「はい！ 念の為に準備しておきました!!」

「よくやった。川内、夜戦の指揮はお前に一任する、存分に暴れろ」

「任せといて!!」

床にめり込みながら返事する川内。右手で親指を立てた。夜戦においては川内が一番詳しく、そして強い。何より夜戦が大好きな夜戦バカだ。作戦指揮は任せた方がいいだろう。

「すいません……」

廊下で摩耶達と話し合う途中に影が見えた。影の先には差別している側の艦娘のリーダー格。前任の元秘書艦であり、この鎮守府の闇の主体とされている艦娘だ。

「■■……何の用だ」

「今この鎮守府は絶望的な状況、今は休戦協定を結びませんか？」

■■が手を伸ばす。それは今回の作戦についての休戦協定。現在、提督と■■は騙し騙されの争いを起こしている。しかし今は東京や横須賀、この鎮守府まで巻き込む深海棲艦の戦争を控えている。争っている場合ではないと判断したのだろうか。

「珍しいな。お前の事だ、深海棲艦と手を組んで裏切るとでも思っていたよ」

「いいえ私達は艦娘です、そんな事など私は絶対にしません。それを言うなら貴方達だってそう思われてもおかしくないですよ？」

「人を見た目で判断するなど全体で忠告したはずだ。まあ確かに今は

互いに争ってる暇は無さそうだ……良いだろう、休戦協定を結ぼうじゃないか」

■が伸ばした手を左手で握る提督。

互いに睨み合い、怖気つかない。

「こちらとしても鎮守府が破壊されると聞いて、黙って見る訳にはいかないのです」

「そうかそうか……後で書類にて艦隊メンバーが決められる。しばし待ってもらおうか」

「分かりました。では」

■は闇に溶け込むように姿を消した。これで一時休戦協定を結ぶ事が出来た。少なくとも今は面倒な事はしないだろう。

「本当に良いのか？」

「アイツらも流星に分が悪いと判断したんだろう。とはいえどちらも信じるつもりは毛頭無さそうだがな」

「騙し合いつてわけか、この先不安でしかないな」

勿論提督は警戒している。この圧倒的自由な状況で何か仕掛けてくる可能性は否定出来ない。

執務室に着いた提督は机からモニターを展開させ、司令部を設置させる。マイクを取り出し、出撃準備をする艦娘達に話し掛ける。

『いいかお前ら……これから俺達は互いの存在を賭け、信念の為に戦う!! いずれも俺はお前らが一騎当千の強者に育て上げたつもりだ、馬鹿な行動や慢心は死ぬ事と思え! この鎮守府を最後まで守衛し、亡き者の遺志と己の信念を貫くんだ! いいな!!!』

血塗れの右手を握り、艦娘達を鼓舞する。提督は本気だ、その声からして戦闘に入っているのが良く分かる。

『以上、全員出撃だッ!!』

「はい!!!」

第一主力艦隊

旗艦霧島改二

榛名改二

利根改二

プリンツ・オイゲン改

加古改二

矢矧改

第二主力艦隊

旗艦摩耶改二

陸奥改

金剛改二

比叡改二

鳥海改

鈴谷航改二

第三主力艦隊

旗艦 Г а н г у т Д в а

那智改二

扶桑改

瑞鳳改二

日向改

木曾改二・羽黒改

第一空母機動部隊

旗艦加賀改・瑞鶴改

飛龍改二

蒼龍改二

鳳翔改

大鳳改

雲龍改

第二空母機動部隊

旗艦翔鶴改二

龍驤改二

祥鳳改

飛鷹改

隼鷹改

葛城改

第一護衛艦隊（第一空母機動部隊）

旗艦古鷹改

熊野改

多摩改

滿潮改

霞改

霰改

第一水雷戰隊

旗艦川内改二

球磨改

時雨改二・白露改二

夕立改二

皐月改二

不知火改

第二水雷戰隊

旗艦神通改二

阿武隈改

最上改

島風改

雷改

電改

第三水雷戰隊

旗艦五十鈴改

阿賀野改

天龍改・朝潮改

荒潮改

大潮改

滿潮改

飛行場姫護衛部隊

旗艦長門改

青葉改

響改

暁改

(加賀改)

(木曾改二)

(天龍改)

「提督!」

「何だ青葉」

「お伝えしたい事が……」

急に駆けつけてきた青葉が提督の歩みを止める。急ぎ足だったのか少し息切れだ。何か伝えたい事があるらしい。

「何だ」

「……私は!!」

伝えなければ。

もしこのタイミングを逃したら後は無い。

今しかないんだ。

だから、口よ、動いてくれ。

「私は……人の嘘が見ただけで分かってしまうんです!!」

震えた声で自分の力を白状する青葉。これまで誰にも教えなかったこの力を提督にだけ教えた。言っただけなのに緊張で汗が止まらない。身体が熱くなるのがじかに分かる。

「……んじゃ青葉」

「はい……」

「俺は信じてるぞ」

嘘だ。

ハッキリとは分からないが提督の言い方に少し違和感を感じた。いつもなら流暢に話すが、何か躓いて喋っている。コンマ単位で特定出来た。青葉にとっては一番分かりやすい方法である。

「嘘、ですね。こんな馬鹿みたいな力、信じる方がおかしいです」

「ならばよし、信じてやろう」

今のは本当だ。コンマ単位で測っても言葉が流暢に聞こえる。本

当に信じてもらえたようだ。少しだけ嬉しい。

執務室へ向かう提督の後をスキップ歩きで青葉は追う。どんな表情をしているか顔を覗くと、提督は不気味な笑みを浮かべていた。

「何故主力に近いお前らが残るんだ？」

執務室には長門、暁と響が待ち構えていた。一番に復讐したいと言っていた木曾と天龍の姿が無い。高確率でいると予想していた提督の勘は外れてしまった。

恐らく天龍や木曾は悩んだだろう。どちらか最良の選択なのか。長門曰く二人は悩まず、声を揃えてこう言った。

『アイツが出てきたら撤退して向かう』

「なに、問題は無い。加賀は奇襲攻撃が終了次第、こちらに帰還する。木曾や天龍も同じく。それに私も前任に復讐に加担する所存だ。作戦立案時に黙って聞き過ぎしたが、要するに前任が深海棲艦とつるんでいたんだろう？ ならば私も参加する」

あ、と声を漏らす提督。そういえばあの時は長門以外の艦娘は全員前任の事を知っている。提督はそれを前提にそのまま話してしまった。

提督、一生の不覚である。

「あー……そっか、お前には教えていなかったか。しくじったなーと思っただけどいずればバレる事だ、隠しても意味ないな。っていうか外にはバラすなよ」

「安心しろ。私は口だけは堅いからな」

「……なるほど。まあ俺が勝手に決めろと言ったからな、何も言いやしない。まあ俺の仕事が一つ増えたぐらいだな。木曾と天龍の代わりを考えなければ」

「編成は……」

「少々反則じみた編成だが戦力不足の現状はこうするしかあるまい。夜戦になるなら瑞鳳以外の空母共は引き下がらなければいけない上に全員が戦いたいと言うんだ、否が応でもゴリ押しでいくしかない。

さて……」

『偵察機瑞雲にて敵連合艦隊を確認しました。いつでも開始出来ます』

「分かった……じゃあやろうじゃないかあ、近年稀に見ない戦争を始めるぞ——、

——作戦、開始だ」

39. 黄昏に輝くその刀には

「提督から作戦開始の合図が出ました!」

「分かったわ。第一次攻撃隊、発艦!!」

二つの空母機動部隊から一斉に艦載機が発艦。その数、約七十二機。まるで鳥の行進のように列に並び、敵連合艦隊へ飛行する。茜色に染まる空を背景に黒い鳥が雲の中へ消えていく。艦載機の中には妖精さんが操縦しており、艦娘と直接映像が共有出来るシステムだ。

「イツチョアバレテヤルノネー!!」

「ヒサシブリノコウクウセン、ナノネー!」

「ウデガナルノネー!!」

妖精達が久しぶりの戦闘に浮き足立っている。約一ヶ月ぶりの敵との戦闘。妖精は皆、戦闘意志が余りに余っていた。やがて白い雲の壁を越え、海を見下ろすとそこには――、

「テキレンゴウウカンタイ、ハツケンナノネー!!」

「こちら飛龍。提督、敵連合艦隊を確認しました。映像をそちらにお送りします」

『分かった』

飛龍達の航空機が敵連合艦隊を発見。机に置いてあるデュアルモニターの内の一つに映像が映し出された。

「駆逐艦が約五十四体、軽巡と雷巡が約四十三体、重巡が約二十七体、その内重巡ネ級。空母が十九体、戦艦が十七体、その内戦艦夕級、戦艦レ級。姫や鬼クラスは駆逐棲姫、防空棲姫、軽巡棲鬼が二匹、重巡棲姫、空母棲姫、空母水鬼、南方棲鬼、戦艦水鬼、そして戦艦棲鬼……か。泣きたくなる敵編成だな、まるで舩坂弘の特攻を分かせてくれるような場面だよ。つか何で南の奴がこっち来てんの?」

『それ鹵獲した飛行場姫にも言える事?』

『どうしますか提督、このまま作戦に移りますか?』

「そうだな。よし、狙いをなるべく雑魚の空母と戦艦に定めるんだ。あと防空棲姫や空母棲姫にも集中攻撃、奴ら対空に長けている、制空権確保の為に奴らには決定的なダメージを与える必要があるから

な」

『了解しました！』

「ネゴトイッテナイデ、サツサトセントウジュンビ、ナノネ!!」

「イクゾオオ!!」

敵連合艦隊の真下に辿り着いた妖精達。いきなり急降下し始め、攻撃を開始した。

「……………」

「敵航空機ヲ確認、数は約七十……………」

「敵直上……………急降下ツ!!」

「防空棲姫ツ!!」

「分カツテルヨ!!」

提督の言う通り、妖精達は空母や戦艦に突撃。急降下爆撃で敵空母を蹴散らしていく。咄嗟の奇襲爆撃に遅れをとった防空棲姫と空母水鬼は損害を受けてしまった。

「グツ……………コチラノ作戦時間ヲ早メタノガバレテイタヨウダ……………」

ナラバコチラモ!!」

おびただしい数の艦載機が繰り出される。通常の黒い艦載機と球体型の艦載機が駆り出され、宙に浮かぶ。

「全テヲ沈メテアゲルワツ!!」

敵艦載機が発艦。その数、約百二十機。それを確認した妖精と加賀達は作戦段階の航空戦を開始した。以前制空権は維持出来ている。

『防空棲姫と空母水鬼の損害を確認！ また敵駆逐艦や敵軽巡、敵空母の撃滅を確認しました！』

「分かった。第一、第二、第三主力艦隊は単横陣に陣形を編成、前進せよ。偵察機を発艦し、敵影確認時に弾着観測射撃だ」

『了解!!』

「第一水雷戦隊は第一主力艦隊の支援を、他の水雷戦隊も数字と同じ艦隊の支援砲撃だ。その後の戦闘は各自旗艦の指揮に任せる。何かあればすぐに俺に伝えろ、分かったな?」

『了解だよ!!』

『了解しました』

「とりあえず奇襲攻撃は成功……つと」

「いよいよ始まったね司令官……加賀さんはまだ帰還出来なさそう
だ」

「このまま都合が良くない方にしてもらいたいところだ……戦艦棲鬼
が何かしてくる不安の可能性がこの戦闘において重要になってくる。
慢心は禁物だ、呉鎮守府の支援艦隊もそろそろ到着する予定だから
な」

「提督、連れてきたぞ」

長門が執務室に飛行場姫を連れてきた。手錠で自由を奪い、提督の
傍へ座らせる。飛行場姫は軽く提督に怯えていた。

「よう飛行場姫、随分と泣いていたようだなあ」

「何デ……ココニ……?」

「お前を護衛すると約束した以上、守らなければならなくてね。俺と
残った艦娘の近くにいれば殺される事はないだろう。近くにいたま
え」

「ワ、分かつたワ……」

黒髪にミ○キーの仮面を被っている提督。不気味過ぎて近寄り難
い。とはいえ何故か護つてくれるのは少しだけ安心した。

「あ、そうだお前ら。これを渡すの忘れた」

「……提督、これは?」

提督は口に指を当て、秘密事だと訴える。渡されたメモ用紙にはあ
る奇襲作戦の内容だった。皆同じ内容らしいが暁は頭にはてなマー
クを浮かべている。

「ん……なにこれ?」

「全主砲、斉射! 撃て——ツツ!!」

日が沈み、海が茜色に染まる。アウトレンジで敵影を確認した長門
の掛け声と同時に主力艦隊の艦娘達の主砲が一斉射撃。砲撃音が重
なり、重い音を響かせながら砲弾が敵連合艦隊に直撃する。

だがその攻撃に気付いた戦艦棲鬼が周りの護衛駆逐艦を掴んで投擲。砲弾を直撃させ、回避した。そして各艦隊旗艦に伝達、作戦行動を促す。それぞれ姫クラスについていく駆逐艦や軽巡、空母達。左右に別れ始め、何かを狙い始めた。

「こちら第一主力艦隊旗艦、霧島。提督！　どうやら私達の作戦もバテていたようです。敵連合艦隊がそれぞれ左右に別れ始めました！」
「やっぱバレてたか……第一主力艦隊はそのまま前進。第二、第三も作戦通り左右に展開しろ」

『待つて提督!!』

『川内か、何だ』

『少しおかしいよ！　左右に別れているのはいいけど明らかに敵主力が右全体に流れ込んでる!!』

既に右側へ回り込んだ第二主力艦隊の方へ敵主力艦隊が集結していると言う。確認出来たのは空母棲姫と空母水鬼、戦艦棲鬼の姫や鬼クラス。その他の深海棲艦が三十八体。

『つて事はあたし達第二主力艦隊だな。多分私を見つけたんだろうと思う。提督、第一水雷戦隊を支援に欲しい』

『分かった。川内、聞いていたな？　今すぐ第二水雷戦隊と合流だ。第一護衛艦隊は第一主力艦隊と合流、そのまま砲雷撃戦に移行、敵艦隊を殲滅しろ』

『了解!』

『了解しました!』

提督の指示を受け、川内率いる第一水雷戦隊が摩耶達の元へ向かう。それを確認した旗艦霧島はそのまま敵艦隊に接近。目の前には戦艦水鬼と重巡棲姫、防空棲姫に空母が七体。戦艦五体、軽巡が八体、駆逐艦が十五体。とても立ち向かえる相手とは思えない。だが数々の修羅場を乗り越え、優秀と謳われ続けた第一主力艦隊にとっては戦いがいのある戦力だ。

「さあ皆さん、砲撃戦を開始するわよ!」

場面は変わり、第三主力艦隊と第三水雷戦隊はある深海棲艦と相手と砲雷撃戦を行っていた。

「敵潜水艦を確認！ 提督！」

『何だ五十鈴』

「敵潜水艦を確認したわ！ こちらにいるのは潜水棲姫と駆逐棲姫、軽巡棲鬼と——」「何よあの戦艦ツ……！ ありえない機動力よ、こちらの攻撃が全く当たらないわ！」

「フハハハハ!! 当テテミナア!!」

ありえない速度で海面を走行する南方棲鬼。何回も接近しようとした隙を見れば突撃してくる。よく見れば足に特殊な艀装をしているのが分かった。不気味な笑みを浮かべ、こちらを睨んでいる。

「ただでさえ他のやつの精一杯なのに!!」

「狼狽えるな！ まだ倒せないと決まった訳では無い！ 瑞鳳、日向！」

「分かってるわ！ だけど他の敵空母が邪魔してくるのよ!!」

「駆逐棲姫に雷撃で損害をかなり与えたぞ、ガングート！」

「了解した！ まず周りから攻め込むぞ！ 五十鈴、私達が南方棲鬼を惹きつける。その間に邪魔な潜水艦や敵を薙ぎ倒せ！」

「分かったわ！」

ガングートの指示で動き始めようとしたその時だった。仲間の天龍が立ち止まったまま、ただ前を見ていた。名前を呼んでも返事が無い。

「!? どうしたの天龍!!」

「……提督、南方棲鬼と一対一で戦わせてくれ」

「んなっ!？」

天龍が南方棲鬼との一対一を希望した。ありえない行動に驚くガングート。五十鈴や朝潮達も驚いていた。あの南方棲鬼に一人で戦うなど無謀過ぎると皆が止めに入る。

『……何でだ天龍』

「奴は……俺が殺さなきゃいけないんだ……!! 頼む!!」

天龍が真面目な声で提督に訴える。声は若干震えていた。怯えて

いるのか復讐心に燃えているのか、全く意志を変えようとしな

『……へへっ、まあ言うと思ったよ天龍。いいぞ、殺す気で戦え』

「すまねえな……恩に着る」

天龍の事情を知っている提督は許可を出した。提督との通信を切り、一人で南方棲鬼の元へ向かう。だが五十鈴が止めに入った。

「何だよ天龍！ 確かに私達とって南方棲鬼は敵討ちしなければならぬけど一人じゃ太刀打ち出来ない!! それは天龍が一番分かってる——」

五十鈴の言葉を遮る天龍。手は僅かに震えていた。

「んな事ぐらい馬鹿な俺でも分かる。それでも奴は俺が殺さなきゃいけないんだ、この……刀で!!」

助けられなかった駆逐艦達の為、そして身代わりになった龍田の為。悔やみに悔やんだ天龍がどうしても倒さなければならぬ相手。無茶な事ぐらい自分でも嫌な程分かってる。このまま奴に会わなければいいとまで思っていた。

だが提督の言葉を聞いて、赤城の遺言を聞いて、如何に自分が情けなかったのかを思い知った。生き残った自分に何が出来るのか、戦う事だ。

戦って、戦って、戦って、戦う。そしていつか奴を殺し、助けられなかった皆に謝る。天龍が考えたもう一つの目標だ。

「……南方棲鬼!!」

「フハハハハ!! ンツ?」

「俺とサシで勝負しろ!! 今! ここで!!」

天龍が誰よりも前に立ち、刀を突き出す。南方棲鬼の名前を呼び、一対一を申し込んだ。南方棲鬼も見覚えのある艦娘に笑みを浮かべ、一回攻撃を中止させた。

「上等ダ!! 来イ!!」

「悪い、五十鈴……あとは任せた」

「ツ……天龍、あなた!!」

こんな台詞を聞く時は大体戻ってこない。その言葉を言った艦娘が沈んだ事など何回も見ている五十鈴。止めに入ろうとした、でも止

めることは出来なかった。それでも――、

「ちよつと待ちなさい!!」

「……何だ?」

「……死んだら承知しないわよ!!」

五十鈴の言葉に天龍は笑顔で答えた。

「……任せとけ!」

天龍は背中を見せ、単騎で突撃。

高速接近し、南方棲鬼の間合いまで近づいた。

「南方棲鬼イイイ!!」

「フハハハハ!!」

40. 宵の口で幽かに映る拳は

「クソツ……主力なだけ強いなツ!!」

「でもこちらがまだ有利よ!!」

摩耶率いる第二主力艦隊と神通率いる第二水雷戦隊は苦戦を強いられていた。敵連合艦隊の主力三体が血眼で沈めようと猛攻を仕掛けてくる。

だがこちらも負けるつもりなどない。摩耶は駆り出された幾数もの敵の艦載機を全て破壊していく。

「アツノ紛イ物オオ……!! 一々艦載機ブツ壊シヤガツテエエ!!」

「ホントアイツ大嫌イ!!」

「タダデサエ奥ノ空母共ガウザイノニイイ!!」

空母棲姫や空母水鬼が摩耶の存在を邪魔に思い、無作為に暴れ出す。今に始まった事ではないが、空母達にとってこの摩耶が一番危険な存在。だからこそ戦艦棲鬼が向かってきたのだ。

「落着キナサイ、マダ負けタワケデハワナ——!!」

取り乱す空母達を落ち着かせようと言葉をかける戦艦棲鬼。この戦闘に置いて冷静でいられるのは戦艦棲鬼だけだった。流石初期の頃から恐怖の象徴として描かれているだけ余裕そうだ。

「余所見してる場合じゃないでしょう?」

「鉄屑ガ……ヨクヤツテクレタナ……殺ス!!」

「イヤ、戦艦棲鬼ガ先ニ落着イテ!」

空母達以上に戦艦棲鬼が怒りを露わにする。予想以上に感情的で空母水鬼が思わずツツコミを入れた。

「第一水雷戦隊、突撃いい!!」

そこに川内率いる第一水雷戦隊が突撃。通常の戦闘とは程遠い蛇行スタイルで敵に接近し、第二主力艦隊の支援を行う。

「ついてこれるかなー?」

「どうかなクマー!」

「何でこんだけトリッキーなんですかね!!」

川内達の特異な動きに不知火が思わず苦言を叫んだ。久しぶりと

はいえ戦闘経験は豊富だがそれ以上に川内のトリツキーな動きに翻弄されつつあった。ギリギリついていけるのがやつとである。

とは言え川内の戦闘スタイルは敵の行動パターンと良く噛み合っていた。川内が走行しているルートは全て敵の砲撃や魚雷を完璧に回避しており、川内の指示通り魚雷を発射すれば本当に当たる。流石は夜戦バカと褒めるべきだろう。

「スバシツコイ!! 航空機、魚雷一斉発射!!」

戦艦棲鬼の傍にいた戦艦レ級が航空機と魚雷を一斉展開。前方位百八十度内に約五十二本の魚雷が発射。空には空母ヲ級の艦載機を合わせた約三十機が発艦。

「えっ!? そんなのアリ!? 退避、退避!!」

「退避だクマー!」

「もう嫌だこの水雷戦隊……!」

相手の無差別攻撃に川内が退避命令を促す。急いで旋回し、第二主力艦隊の元へ合流した。空の艦載機は摩耶達が全て撃ち落としてくれている。

しかし魚雷は回避出来ず、球磨と時雨と不知火が小破してしまった。

「川内、陣形を再編成する。目標は戦艦棲鬼とその空母達だ。正直言ってあたしの対空戦闘じゃ艦載機全てを撃ち落とす事はあまり出来ない。だから各自、空の攻撃には気を付ける事。そして戦艦棲鬼を近付かせない、これが最優先事項だぞ。分かった?」

「了解! 皆行くよ!!」

戦艦棲鬼まで距離三百メートル。

右回りに移動して後退する。

「川内、照明弾を!!」

「了解!!」

摩耶の指示に合わせて、川内が照明弾を放つ。照明弾は戦艦棲鬼の頭上を照らし、その姿を見せた。いつ見ても悍ましい艦装だ、あの六つの砲台と巨大な剛腕で何百、何千もの艦娘や人間を殺したのだろう。もしかしたらその番が自分達かもしれない。

「さて、私の対空戦闘がどこまで持つかな……」

「砲雷撃戦始めましょう!!」

空母棲姫達が艦載機を艀装の口らしき場所から出現させた。白い球体の敵水上爆撃機と攻撃機が一斉展開する。

「オチロツ!! 紛イ物メツ!!」

「全員砲撃開始……!」

戦艦棲鬼の合図で地獄の砲雷撃戦が始まった。水柱が森の樹木のように立ち、着水の衝撃が身体に直に伝わる。互いの砲弾が交差し、曳光弾が列をなして黒い雲へ吸い込まれていく。発射された魚雷が黒い海に隠れ、互いの恐怖を募らせた。硝煙の匂いが鼻にこびりつき、砲撃音や爆音が耳の鼓膜を揺らす。

「激し過ぎる!! 当たれツ!!」

「グツ……何のこれしきツ!!」

戦艦棲鬼の砲撃が直撃、陸奥が小破してしまう。だからといって倒れる陸奥ではない。相手もかなりの損害を受けている。空母水鬼に閉してはあともう少した。陸奥は砲口を一齐に揃え、狙いを定めて反撃。敵駆逐艦や空母ヲ級を撃沈させ、空母棲姫に損害を与えた。

「ツ……相手ガ倒レルマデ撃チ続ケロツ!!」

「艦載機ナンテ、イクラデモアルンダカラネ!!」

「沈メツ!!」

『無茶はするな陸奥。いつも通りにやればいい』

「分かってるわツ、大丈夫よ!」

『摩耶、そろそろだ』

「了解! 金剛! 三式弾に切り替えて!! 比叡は徹甲弾に!!」

『金剛は摩耶の補助だ、余った三式弾は水上で使っても構わない。比叡、戦艦棲鬼の艀装の腕だ、そこを狙え』

「わ、分かったネ!」

「りよ、了解しました!!」

提督と摩耶の指示で金剛達は通常弾から特殊弾に変更。金剛は雲空に向けて三式弾を放ち、比叡は徹甲弾で戦艦棲鬼の巨大な剛腕を照

準に定めて砲撃。照明弾の灯りが消えてかけている。

「マタ私ニ……シカモ徹甲弾ヲ……！」

主砲と合わせた徹甲弾が戦艦棲鬼の艀装に着弾。直撃したせいか戦艦棲鬼は少し怯んだ。やはりや徹甲弾には効果があるらしい。

「報告、戦艦棲鬼に少しの損害を確認！」

「何テ愚カナ……」

『少しか……比叡、そのまま徹甲弾で狙うんだ。数で押ししてみる』
「分かりました！」

「鉄屑ガツツ!!」

戦艦棲鬼がとうとう動き出した。

高速で摩耶達に最接近。

あつという間の速さで戦艦棲鬼は――、

「金剛!!」

摩耶と比叡を庇い、金剛が巨大な剛腕の攻撃を受け止めた。

あまりの衝撃に金剛は水しぶきを上げながら後退。

足を踏ん張って勢いを止める。

直後に金剛の周りで巨大な水柱が立つ。

殴打の衝撃の恐ろしさが目にとれて分かった。

「ヤハリ庇ツタカ……」

「グハツ……！」

「コンゴウ……」

戦艦棲鬼の恐るべき力の一つとして艀装と一体化している事が挙げられる。通常戦艦棲姫や戦艦水鬼などといった姫や鬼クラスの深海棲艦は艀装と母体が別の意志を持っている事が殆どだった。

だがこの戦艦棲鬼だけは違っていた。彼女は艀装と自分の身体を結合し、感覚を共有することで艀装の力を最大まで引き出していた。恐怖の象徴の理由として艀装の巨大な剛腕が取り上げられるが、彼女はそれを意のままに操る事が出来、尚且つ砲撃も可能。走行の際も艀装を操っているので想像以上の速度で走る事が出来る。

まさに特殊な深海棲艦なのだ。

『近づかれたか。川内』

「分かつてるよ!! 球磨、旗艦お願い!!」

「分かったクマ!!」

『球磨、恐れても構わない、無理に突撃はするな。慎重に動いて且つ、敵の動きを見るんだ。摩耶はそのまま対空に目を向ける。お前が助けに向かったら比叡達にダメージが及ぶ』

「了解クマ!」

「了解した!」

金剛との距離は約二百メートル。あの近接攻撃だけで二百メートル以上離れている。通常の間人であれば死んでいてもおかしくない、艦娘でさえも。

「金剛……!!」

暗い夜の中へ金剛を救助する第一水雷戦隊。全速力で金剛の元へ向かった。

「コノママ殴レバ、才前ハ沈ムカ?」

「……」

「……何故庇ツタ?」

「大切な……仲間と妹……だから……!!」

艦装の剛腕を片腕で受け止め、海面に膝を着く金剛。凄まじい衝撃で意識が飛びそうだ。受け止めた右腕全体が悲鳴をあげている。意識を保つのがやつとな金剛に戦艦棲鬼は突然語りだした。

「馬鹿馬鹿シイ……戦争ニ私情ヲ挟ムナド愚カナ者ガスル事ダ……」

「だったら……お前は何だっけ言うの?」

「戦争トハ殺シ合イダ! 互イニ武器ヲ持ツテ、相手ガ死ヌマデ戦イ続ケル! ゴク一般的ナ事ジャナイカ!!」

「……」

「私ハ一生懸命戦ツテル人間ヤ艦娘ト死ヌマデ戦ウノガ大好きナンダ……戦ウ事コソガ我々ノ本能!!」

「だから私達の妹を叩き潰したのもお前のその趣味の為なの……?」

「ソウダ。ソウ言エバソソナノイタナア……トテモ良カッタゾ? アノ絶望的ナ状況デ戦ウアイツラハ最高ダツタ!!」

お前の所為で妹達がボロボロにされた。

趣味だと聞いて、許される訳が無い。

「もう良い……喋るな」

「何ヲダア？」

「……決めた……お前をぶつ殺す!!!」

艀装の剛腕を右拳で弾き飛ばす。

そして母体の前まで接近。

再度右手を握った。

「何ッ!？」

「オツリアアアアア!!!」

「クソ生意気ナアアア!!!」

剛腕が金剛を鷲掴みにする。

金剛の身体を頭上に放り投げ、戦艦棲鬼は大跳躍。

両手を握って投げられた金剛を下の海面に叩きつけた。

巨大な水柱が立ち、二人の姿を隠す。

「金剛!!」

「……私ニ勝テルト思ツタラ大間違イダ！ 私ハ最強ノ深海棲艦、戦

艦棲鬼ダゾ!! 勝テルワケガナイ！ 倒セルワケガナイ!!」

「くっ……ガ、く……ガ……ッ！」

吐血する金剛。先程の殴打とは比べ物にならない程の衝撃で立ち上がれない。まだ身体の中を衝撃が循環している。意識はもう途切れ途切れだ。

「生意気ナ小娘メ……モウ分カツタ。ソコマデ戦イタイナラ、アイツヲト同ジク、オ前モソノ戦意ヲ見セテクレ!!」

倒れ込む金剛に再度振りかぶる戦艦棲鬼。しかし駆けつけた川内の魚雷で邪魔をされ、惹き付けられた後に金剛を回収された。

「金剛！ 大丈夫か!？」

「なん……とか……」

「損害は……大破ぐらいか。提督！」

『金剛の様子は?』

「およそ大破状態、意識は辛うじて保ってるけど戦えるかどうか……!」

「戦わせて……」

金剛がか弱い声で戦闘続行を願う。しかし川内から見ても戦えるような身体では無かった。両腕に力がない、大量に血を吐き、目は虚ろ。明らかに大破状態だ。それでも金剛は戦闘続行を願っている。

「お願い……提督……」

『……分かった。川内、金剛を置いて摩耶達の元へ合流しろ。戦艦棲鬼が躍起になって向かってきてるはずだ……金剛』

川内が背後を確認すると血眼で戦艦棲鬼が追いかけてきていた。このままでは直に追いつかれ、追撃を食らう事になる。

『今戦艦棲鬼はお前の事を躊躇なく叩き潰そうとしか来てる。このまま艦隊に戻れば、味方を巻き込む事になるんだ。これは出来るだけ避けたい。苦しい決断だが……増援が出来るだけ持ち堪えろ。摩耶達が空母共を殲滅するまで持ち堪えるんだ、いいな?』

「……へッ……任せてよネ……!」

『俺だって出来るだけこんな事はさせたくない。だがお前が蒔いてしまった種だ、最後まで……耐え続ける』

「分かったヨ……!」

川内の腕を振りほどく。一人、戦艦棲鬼の前で立ち上がり、合流する川内を見届けた。

「金剛!!」

『川内、今は摩耶達と合流だ! 振り返るな!!』

「ッ……ぶめん!!」

『第一護衛艦隊は戦況を把握次第、金剛の援護に入れ。その際熊野は第二主力艦隊に合流、金剛と交代だ』

『了解しました!』

川内を逃がした金剛が目の前に立っている。金剛は満身創痍、後何回か攻撃すれば沈むだろう。この状況で戦闘に挑むとは愚かな艦娘だ。

「何? 覚悟ヲ決メタノカシラ?」

「……決めたヨ……お前と戦う覚悟を!!」

「イイジヤナイカア!!」

両者一斉に高速走行。
右腕を後方へ引き、一気に接近。そして――、

41. 逢魔ヶ刻に咲き誇る月は何処へ

「皆、大丈夫かしら……」

「大丈夫だよ、きつと大鳳さんが何とかしてくれる」

「ええ……そうね……」

「私達じゃ夜戦作業員がいないとまともに動けないからな……ただ見守らなきゃいけないのがとても、嫌だな」

空母機動部隊のメンバー達が夜の雲空を眺める。曳光弾が空にたなびき、照明弾や探索灯が輝いている。瑞鶴はそれを見守る事しか出来なかった。

「第二次攻撃隊、発艦!!」

瑞鳳が夜になりかけた雲空に航空機を発艦させる。唯一夜戦で航空機を発艦出来る夜戦作業員を装備している瑞鳳はこの作戦において重要な役割を担っていた。制空権維持に水上艦の殲滅、全ての行動を考えるだけで精一杯だ。

「全艦突撃してください!!」

「捉えたぞ駆逐棲姫!・これが最後だ!・畳み掛けろ!!」

大破状態の駆逐棲姫を照準に定め、ガングートと日向、扶桑が主砲を放つ。砲弾はまっすぐ駆逐棲姫の元へ――、

「ヤ、ヤメッ……!!」

手を伸ばし、何か言い出した駆逐棲姫。断末魔だろうか、直後に大爆発。砲弾が全て直撃し、駆逐棲姫は腕や身体の一部を飛ばされたまま吹き飛ばされた。

「月ガ……見エ、な……イ……終わル……のか……」

黒い雲が広がる夜空を眺める。月の光は全く感じず、身体を吹き飛ばされた痛みだけが残った。

爆煙の中から艦娘達を目に収める。その瞬間、自分は何者なのかを悟った。

「……アア私は……て……き……」

海の中へ静かに沈む。感覚を失い、海という液体に包まれた駆逐棲姫はゆっくりと永遠の眠りについた。

「駆逐棲姫の撃破を確認しました！」

「次は軽巡棲鬼と雑魚共だ！ 気合入れろ!!」

「分かっている!! 天龍は!？」

金属音が海に響く。

刀と艤装が触れる度に火花が散った。

壁のような水柱、吹き荒れる猛風、余韻が残る衝撃波。

広大な海で、ある艦娘とある深海棲艦が激闘を繰り広げていた。

「ッ!!」

南方棲鬼が位置を予測して全門斉射。天龍は正面から高速走行。

雨のような砲弾を次々に回避、そして刀を突き出した。

砲弾が真つ二つに割れ、天龍を避ける様に海へ着弾。その風圧をスタートダッシュ代わりに再度海を走る。

南方棲鬼は近接攻撃に移行、急発進する。

高速走行する天龍の背後に回った。

それに気付いた天龍が跳躍、南方棲鬼の殴打を回避。逆さまに飛んだ天龍は再度刀を振り下ろす。

しかしもう一方の右手の艤装で防がれた。火花が散り、金属音が響く。

直後に綺麗に着地する天龍。着地狩りを狙った南方棲鬼が砲撃する。回避は出来ず、ダメージを受けた。

南方棲鬼も事前に発射された魚雷で損害を受ける。

「クソッ……!!」

「フハハハ!!」

笑い声を上げながら至近距離で全門斉射。

迫り来る砲弾の雨に天龍は刀で答える。

砲弾の弾道を刀の樋でずらし、更には弾き返した。天龍の背後で水

柱が一気に立つ。

「ウウウオラアアア!!!」

南方棲鬼が咆哮をあげ高速接近。右腕を後方へ引き、殴り掛かった。

天龍も刀で弾き返し、応戦する。

剣と鉄拳のぶつかり合いが始まった。まるで剣戟の様にお互い隙を与えぬ猛攻が続く。一言も発さず、ただ雄叫びを上げながら目の前の敵を倒す事に集中していた。

零距离の砲撃を躲し、刀を突き出す。鋭い刀先を回避し、再度殴り掛かる。

二人だけの苛烈する戦闘に誰も援護する事は出来ず、他の敵に集中する事しか出来なかった。

「隙アリダツ!!」

回避した際に一瞬隙を見せた天龍。

南方棲鬼の右鉄拳が左脇腹に直撃。凄まじい衝撃が身体の中へ襲い掛かる。

直後天龍は殴り飛ばされるも、受け身を取って着地。血反吐を吐いて立ち上がる。

「……クソツ……」

「随分ト息ガ上ガツテイル様ダナ、天龍」

「……うるせえ」

微かに刀を持つ手が震える。武者震いだろうか、それともこの戦闘に興奮しているのか。

いや、違う。

憎むべき深海棲艦をこの刀で倒せるチャンスがある事に喜んでい
るのだ。あの不気味な笑顔が憎たらしくて堪らない。純粹に心の底
から殺意を湧き上がらせてくれる。

「シカシオ前ガ、コンナニ強クナツテルトハ驚イタナア……」

「てめえに……計られてるのが癪でしかねえよ……」

「アノ時コレグライ強カッタラ、アンナ事ニハナラズニ済ンダダロウニ……」

「黙れクズ野郎が……とつと俺に殺される……!」

「ソー、ソレハ無理♪」

場面が変わる。

正面から戦闘をしていた第一主力艦隊は若干余裕の表情を見せていた。

『霧島、状況報告を』

「はい！ 今のところ順調に殲滅は進んでいます。しかし新たに増援が確認されました」

『詳しく教えろ、こちらも把握しなければならぬ』

「了解です……敵増援部隊、装甲空母鬼、駆逐古鬼、空母ヲ級 elite、戦艦夕級 elite、雷巡チ級が五体、重巡ネ級が二体……ですね」

『いけそうか?』

「……見くびらないで頂けますか？ あの鉄屑達とは違います」

『ならばいい。第一主力艦隊は今の敵艦隊殲滅後に増援部隊の相手を頼む。だが増援部隊と同時に護衛部隊も来るはずだ、空からの攻撃に注意しろ』

「了解しました」

出来れば指示には一切従いたくないが休戦協定は結ばれている。我儘は言っていられない。自分達の家が壊されるのは最も嫌な事だ。

「流石にアイツに構ってる暇は無いですからね……仕方ない事に、しておきましょう!!」

不意打ちの砲撃を回避し、倒れ込む重巡ネ級の頭を殴る霧島。ストレス発散の様に全力で戦闘を開始させた。

「……戦況はあまりよろしくないな」

一方で鎮守府の司令本部、執務室で艦隊を指示していた提督。芳しくない戦況に頭を悩ませた。

「飛行場姫、敵の情報とか分かったりする？」

「……分カルワケナイデシヨ」

「だろうな」

とても静かな夜だ。遠くで爆音や砲撃音が聞こえるがさほど気にならない。窓は全てカーテンで閉じられ外の状況は分からない。蠟燭の灯りで執務室を明るくしていた。

「……ネエ」

「何だ？」

「何故貴方ハ……ソソナニ冷静ナノカシラ……？」

飛行場姫は見ていた。提督が常に冷静な対応をしていた事を。特に金剛が危険な目にあつた時も即座に指示を促していた。

「指揮する人間が慌てるのは馬鹿のやる事だ。指揮する者は常に戦況を把握しなければならぬ、故に冷静でなければ艦隊に指示すら与える事は出来ない」

スマホで時間を確認する提督。持論なのか続々と語り出した。

「他の平和ボケした哀れで気色悪い怠けた連中と違って俺は常に冷静なのだよ。一々変化する事の状態に驚いてどうする、そんな奴らは軍人失格だ。軍を辞めて電波も繋がらないド田舎で稲作でもしてるといい、と思ってる」

「……ソレデ？」

「妖精を見る事が出来る者が提督になれてしまう世の中だ。艦娘は大體惚れ惚れする程の美少女ばかりだからな、まるで夢の様な職に思われてるがそれは違う。これは戦争だ、戦えない人間の代わりに戦ってくれている艦娘の命と護らなければならぬ国民の命を操っている。それを知らずにノコノコと提督になり、勝手に馴れ合って日常だとほざいたり、平気で肉体関係を作る様なヘラヘラしてる奴が一番大嫌いだ。これを聞いてお前は何と戦っているか馬鹿らしくなってきただ

ろう?」

簡単になる事は出来るが簡単に務められる仕事では無い。軍人になったからには国民を護るといふ使命が与えられる。だが残念な事にそう思う者は限りなく少ない。権力に目が暗み、自分の思うがままに行動する輩が殆どだ。提督はそういう平和ボケした連中が大嫌いなのだ。

「……エエソウネ。本当ニ……馬鹿ミタイ……」

「——ああ、お前も馬鹿だけどな」

「……ッ!？」

「……来たか」

衝撃で海水が空に舞う。風圧で硝煙が掻き消され、何かを殴打する重い音が聞こえた。水柱が幾つも立ち、赤い液体が海水に混じる。

「イツマデ耐エル? モウ限界ハトツクニ来テルハズダゾ?」

戦艦棲鬼の前に立つは満身創痕の金剛。防御した両腕は震えて既に感覚が途切れ途切れ、正装はボロボロに引き裂かれている。頭の怪我で流れた血が目に入り、片目は見えていない。骨も何本か折っている。動く度に身体中に響く激痛のおかげで自分が生きている事を再確認できた。

「生憎……私はしぶつ、とくてネ……周りからもそう、言われるんだヨ……」

「……気ニ入ラナイナア、ソノ目。カツテノアイツヲ思イ出ス」

「思い出に……浸ってる、場合? ピークでも過ぎタ?」

「何ガピークガ過ぎタ、ダ。マダマダ私ハ強クナルツ……ナンダ?」

「よっし、魚雷が当たった!」

古鷹率いる第一護衛艦隊が援護に来てくれた。魚雷で先制攻撃を食らってしまう。金剛ばかり構っていてはいけないと咄嗟に思い出

した戦艦棲鬼は金剛を置いて去ろうとした。

「少シ羽目ヲ外シ過ギタカ……今ハ辞メヨウ。才前ヲ相手シテイル程暇デハナイ」

「……逃がすかッ!!」

金剛がすかさず反撃に出るも、また身体を掴まれる。

そして海面に叩きつけられ、零距离の砲撃を食らった。金剛は白目を開き、意識を失う。

「ソコデユックリト沈ムトイイ」

戦艦棲鬼に見放され、海に浮かぶ金剛。このまま沈むかに思えた。が、意識を取り戻し、ボロボロの身体で立ち上がる金剛。必死に痛みを堪え、立ち去る戦艦棲鬼を見る。

「殺スツッ!!」

金剛は急発進。海上を低空飛行し、一気に戦艦棲鬼に接近する。殺気に気付いた戦艦棲鬼が振り向く。

金剛の右脚が戦艦棲鬼の母体の左頬に直撃。戦艦棲鬼の母体の左腕が金剛の右頬に直撃。クロスカウンターが炸裂する。

衝撃波が広がり、海を斬るように水しぶきをあげた。

「グッ……!!」

「才前ッ……!!」

戦艦棲鬼の母体まで接近し、初めて殴った金剛。

お互い殴られても怯まず、次の攻撃に移る。

両拳を使つての連続殴打。相手が倒れるまで殴り続ける。艤装の剛腕が間合いで使えない以上、母体で戦う他は無い。戦艦棲鬼も自らの身体を使つて金剛を殴り続けた。

両者一歩たりとも引かない。ただただ殴るだけ。第一護衛艦隊も近付けるはずはなく、見守る事しか出来ない。

金剛が隙を見定め、左頬を強く殴る。

怯んで攻撃をやめた戦艦棲鬼。

すかさず金剛は右脚で戦艦棲鬼を蹴り落とす。

戦艦棲鬼が強く海面に叩きつけられた。

「古鷹ッ!!」

「任せて!」

金剛の指示に合わせ第一護衛艦隊が動きを合わせる。古鷹達は主砲と魚雷で同時に攻撃した。

「初めての戦闘がコレなんて本っ当に最悪っ!!」

「あのクズに言いつけてやる!!」

「……ん」

あの鎮守府に着任して以来、訓練ばかりで練度を上げてきた満潮、霞、霰にとつては地獄だろう。初めての戦闘が姫や鬼クラスといった化け物ばかりの戦争なのだから。

「小癩ナ真似ヲ……いー フザケルナッ!!」

魚雷を食らい続ける戦艦棲鬼。何故か正確に当ててくる魚雷や砲撃にイラついていた。

両腕両脚を使つてうつつ伏せのまま跳躍。

身体の正面を金剛に向け、全門斉射。零距离で砲撃を食らった金剛は後方へ吹き飛ばされる。

姿勢を変えて、海面に着地。すぐさま古鷹達に標的を変更し、主砲で砲撃。

「皆! 踏ん張って!!」

「沈メ雑魚共ガッ!!」

古鷹達に集中している間に接近する金剛。咆哮を上げながら戦艦棲鬼に突進した。

「ウオオオアアアア!!!」

「コノッ……いー クタバリ損ナイガアア!!!」

4.2. 暮夜に苛まれる凶禍の再来

「ああ、お前も馬鹿だけどなあ……」

「ッ!？」

「……来たか」

誰かの声が聞こえた。それはこの鎮守府の艦娘達にとって憎むべき存在。今は黒い軍服に目を赤く光らせている。

「■■■■鎮守府責任者、■■■少尉。いや、今は深海棲艦のボス、とでも言うのかな？」

「貴様らの情報ではそうだろうなあ。おかげでこちらは楽しくやらせてもらってるよ」

「提督……ッ！」

飛行場姫が酷く怯えている。無理もないだろう。自らの保身の為に作戦を密告し、命を狙われているのだから。前任は見下す目で飛行場姫を蔑む。

「気安く呼ぶなゴミ。作戦バラシやがって……とキレたい所だが無しにしよう」

「エッ……?？」

「ゴミが必要になる時代とは優しくなったもんだな。初めてゴミが欲しくなった——」「ゴミがゴミ求めているとか笑えてくるなあ」

「……」

飛行場姫と前任の会話に無理矢理侵入する提督。罵倒を加えて会話に参加した。椅子から立ち上がり、前任の元まで歩み寄る。

「お前のおかげでこちらは翻弄されっぱなしだ。さぞかし良い作戦でも考えたのだろう、お前じゃないけど」

「ああそうだ。だから何だと言うのだ。作戦が成功しつつある事に変わりはない」

「へえー成功する気満々でいるのかあ、つくづくおめでたい頭だなあ」
「その減らず口もそれが最後だぞ……何故変装してるか知らんが貴様

とこのゴミは持って帰れば作戦は終了する。更には——」

前任が指を鳴らす。すると深海棲艦が窓を突き破って現れた。戦

艦夕級、戦艦レ級 elite、軽巡棲姫、駆逐水鬼、離島棲鬼と豪華な深海棲艦を揃え、一斉に戦闘態勢へ入る。

「ちゃんとした護衛艦隊が来てくれてる。例えお前だろうとこれは切り抜けまい」

執務室には提督と飛行場姫のみ。前任は多くの深海棲艦を連れて戦闘態勢。どうみても絶望的な状況である。その中で提督は冷静に前任へ質問をした。

「……お前の野望は何だ？」

「今更命乞いか？ 良いだろう、冥土の土産に持っていくがいい。俺はこの世界を支配する事にした!! この深海棲艦を使って人類を蹂躪し、残虐の限りを尽くし、そして支配する!! お前らゴミ共を矯正させ、新たな世界を作るんだ!!」

「そ、そうか」

あまりにも壮大且つ無謀な野望に素の反応で戸惑う提督。それも気にせず前任は憎しみを込めて語り出した。

「その為には色々と準備が必要だったんだ。それなのに貴様が尽く俺の邪魔をする!! あらゆる手で俺を脅し、行動を制限させやがって!!

計画予定日から大分遅れちゃったよ、てめえの所為でなア!!」

「無防備にチャラチャラ話すお前が悪い、自覚無しとはまさに馬鹿に相応しい人間だ。どうだー？ 新しく名前を変えて、馬鹿沼 馬鹿太郎って名前にするのは」

「黙れ下等種族がツ!! 貴様は絶対に許さん!! 情報を吐き出すまで身体の中からありとあらゆる臓物を生きたまま引きちぎり、苦痛という苦痛を味わせてやるツ!!」

提督に指さし、怒りを訴える。前任は逃走前から提督に脅されていた。バラさない代わりに大人しい行動を心掛けるように計画を知られたかのように迫られ、苦痛な日々を送っていた。

これほど屈辱的な事は無い。いつか殺してやると誓っていた。

「やっばお前、馬鹿だな」

この絶望的な状況下で提督は前任をコケにしていくな。前任をほくそ笑みながら近付いた。

「ベラベラベラベラどうでもいい事口走って……偉くなったつもりか木偶の坊。俺がこの時の為までに何もしてこなかったとも思っているのか？ 愚か過ぎて爆笑しそうだよ■小尉。相変わらずの無能ぶりは賞賛に値するねえ」

「何が言いたいんだ、減らず口もそこまで言ったはずだツ！」

「お前に俺の話を遮る権限は無ーい!! いいかー？ お前が最高級ステーキ定食を雑に残した様にこの鎮守府の後片付けをわざわざ受けてやっているんだ。お前の所為でロクに戦いもしないポンコツ兵器共を育て上げ、残ったおかずを平らげるように残飯処理をしてあげてるのだよ！ 感謝したまえ!!」

提督は後ろで構える深海棲艦達の表情を確認する。その表情を見て提督は更に話を続けた。

「その連れてきた深海棲艦の表情じゃあお前を良く思ってなさそうだなあ。人間にも艦娘にも深海棲艦にも慕われていないとは何とも醜い存在だ!! 笑い過ぎて涙が出る!! 一度お笑い芸人になったらどうだ？ 全世界で社会的に笑われて皆ハッピーだ!! 良かったなアアア!!!」

「グギギギグッ……殺せエ!!!」

深海棲艦達が一齐に襲い掛かろうとした。しかし提督は指を弾き、余裕な顔をしている。

その時、床や天井からある艦娘が現れた。

「何ツ!？」

長門、加賀、青葉、響、朝潮が艤装を展開した状態で奇襲したのだ。突然の攻撃に対応出来るはずがなく、近接格闘術で深海棲艦達を仰け反らせた。提督の前に立つは前任に復讐する為に残った強き艦娘達。前任に会えて嬉しいようだ。

「誰が俺一人でコイツを護ると言ったんだあ？ 哀れすぎてかける言葉すらないよ■小尉」

「な、何故ツ……!!」

「無能な事にお前はこの執務室の異変にすら気づかなかつた。何故護衛が一人もいないんだってな」

確かに先程まで雰囲気が変わっていた。しかし殆どの艦娘達は出撃しているはずだ。この執務室には忌まわしい中将と飛行場姫しかない。憲兵もいない、警備は手薄なはずだと思い込んでいた。

だが中将は自分達が深海棲艦を連れて来る事を見込んでわざと侵入させた。人をイラつかせるのが得意なようだ。

「これからだぞ……本番は……!」

「いや今のが本番だと思うけどー」

「いい気になりやがって……だがその気もそこまでだ!!」

戦艦レ級がある艦娘に砲口を向け、現れた。

恐らく誰かを捕まえて人質にしたのだろう。砲口を向けられているのは暁だ。出撃した状態で捕らえられたのだろう。

「司令官……」

「暁……お前……」

「ひぐつ……ごめん、なさい……」

首を激しく掴まれ、自由を奪われている。自分の失態に涙を流した。戦艦レ級は暁の頭を殴り、何回も騙される。しかし暁は怯えるだけ泣き喚いた。

「暁!!」

「ハア……面倒な事してくれたなあ……」

「どうだ! これでも手は出せまい!」

「そうだなー……」

悩む様に考えながら、提督は拳銃を取り出す。

そして――、

「寝てる、暁」

暁に発砲した。

「提督何を?!」

「暁ッ!!」

撃たれた暁はビクともしない。血が出ているのが分かった。

思わず長門は提督の胸ぐらを掴み、怒り出した。何故こんな事をしたのか、何故暁を殺したのか、力任せに提督を殴る。

「何故こんな事をした! 言え!!」

「あーうるさいなあ……別に邪魔だから殺したただけだろ、尊い犠牲だあ」

「んな訳ないだろう!! 今までの言葉は全て嘘だと言うのか!!?」

「嘘だったらお前はどうすんだー?」

前任や深海棲艦でさえも有り得ない行動に戸惑っていた。捕まえた人質を躊躇いもなく射殺したのだ。訳が分からない、何がしたいのか理解できない。

「何て野郎だよ……殺しやがった……!」

「ダメだ響!! 殺されるぞ!!」

「そんなことなんてどうでもいい!! 暁が——えッ!?!」
響は目の前の光景に目を疑った。よく見れば暁が——

——立っている。

「何驚いてツブファ!!」

前任が突然吹き飛ばされた。何故だ、場の状況が二転三転し過ぎて頭の理解が追いつかない。

誰が前任を蹴り飛ばした。誰がこんな状況にさせた。

前任が提督を見る。

提督は無様な姿を嘲笑っていた。そして何故か撃たれたはずの暁が隣で元気に立っている。

「嫌なアイツを蹴り飛ばしてやったわ司令官! 成功よ!」

「おーおーよくやった暁、後でご褒美だ」

「えっへん!」

元氣な暁の立ち姿に長門達も呆然としていた。響は暁を抱き締める。

「提督、これは……!?!」

「説明は後、まあ言えるのは敵を欺くのはまず味方からって事かな。って訳で全員戦闘開始、好きにぶん殴れ」

「りよ、了解!!」

メモ用紙には戦闘開始という合図で攻撃しろ、と書かれていた。正しくこれが本当の戦闘開始なのだろう。急に我に返った長門達は一斉に深海棲艦達に襲い掛かった。

「グッ……面倒クサッガア!!」

それぞれ深海棲艦を狙い外へ追い出す。執務室に残ったのは提督と飛行場姫、そして前任。大所帯と化していた執務室も静かになっていた。倒れる前任に提督は拳銃を巧みに指で振り回し、歩み寄る。

「さて……スッキリした訳だが、前任の。少しお話しようか?」

「……クソが……ッ!!」

——鎮守府近海

「天龍!!」

誰かが呼んでいる。耳が遠くて誰の声か分からない。

「おい！ 応答しろ天龍！」

駄目だ。通信機が壊れてる。何も良く聞こえない。

「死ネエエエ!!」

だがコイツの声は鮮明に聞こえる。前任と同じく復讐したい深海棲艦、南方棲鬼。奴が今、自分の目の前で襲い掛かろうとしている。

「チツ……!!」

南方棲鬼の鉄拳を刀で防ぐ天龍。しかし力が上手く入らず、海面に膝をつく。勝負は圧倒的に南方棲鬼が勝っていた。

天龍は頭から血を流し、両腕が激しく痙攣、両脚は立っているのがやっとの状態。意識は朦朧としていて、片耳は鼓膜が破れて良く聞こえていない。

それに対し南方棲鬼は顔にいくつかの切り傷、艦装の一部炎上、片腕に深い斬り傷がある状態。

「死なねえよ……俺はッ!!」

刀で防御した鉄拳を下の海面に受け流す。

水柱が立ち、姿が確認出来ない。

しかし天龍が刀を全力で振る。

水の壁を斬るように南方棲鬼の腹を浅く斬った。

「グッ……!!」

思わぬ攻撃に一步後退する南方棲鬼。腹を抱え、流れ出る血を確認した。傷は浅いものの血は止まらない。昔の刺された古傷が開いたようだ。

少し苛立ちを見せた南方棲鬼は所構わず天龍に殴り掛かった。

だが——、

「ナニッ!？」

「こちら戦艦ガンゴート、第三主力艦隊を一時離脱。南方棲鬼との戦

闘に移る。旗艦は瑞鳳に任せた」

ガングートが助太刀する。南方棲鬼を横から全力で殴り飛ばした。すかさず五十鈴達が天龍を保護する。誰から見ても天龍の状態は酷かった。

「天龍!! 目を覚まして天龍!!」

意識が無い。まさかと思った五十鈴がガングートに貰った物を天龍に施した。

「天龍!!」

——ああ、俺は……

目を開くとそこにあるのは、

あの鎮守府だった。

43. 地に落とされた龍は惨禍の過去を天に嘆く

天龍型軽巡洋艦一番艦、天龍。

彼女の記憶ではあの鎮守府の初期に建造された最古参の艦娘らしい。二番艦である龍田と共に建造され、久しぶりに会った二人は喜びを共感した。しかしこの鎮守府の闇深さに天龍達は地獄を見る事になる。

最初は提督、いや前任と顔を合わせた。無愛想で愛嬌という字が似合う顔。秘書艦だった吹雪は傷だらけでやたら悲しげな表情をしていた。

全てはここで気付くべきだったのかもしれない。

第一に天龍と龍田は遠征組として駆逐艦を引き連れ、多くの資材を運んだ。別に苦しい任務ではなかった。

勿論最前線で戦っていたかっただのもあるが鎮守府を強化させる為、皆の戦力強化の為に勤しんでいた。時に水雷戦隊旗艦として出撃もさせてくれた。これほど嬉しいものはない。だが天龍以外の艦娘達は全員笑っていなかった。

「遠征から戻ったぜー」

ある日いつものように水雷戦隊で遠征に出掛けて、帰還した。今回の遠征はスコールもあつてか運んだ資材が少なかった。

だがまた行けばいい話だ、別に問題じゃない。そう思つて天龍は報告書を前任に渡した。

「なんなんだこれは……」

「あーすまねえ、スコールがあつて資材があんま取れなかったわ。でもよ次——」「罰を与えろ」

「……は？」

前任が何て言ったのか一瞬理解出来なかった。罰と聞こえたが本当なのだろうか。いや嘘に違いない。

そんな事前任が言うわけ――、

「連れていけ」

「ちよ、ちよつと待て提督!! 何でこんな事で罰、おいやめろ! 何だよ罰って、別に取れた資材が少なかつただけじゃねーか!!」

「黙れ、言い訳ばかり言いやがって。重い罰を与えろ、連れていけ!!」
「んだよどういふ事だよやめ――」

急に意識を失った。何をされたのか分からない。何故あんな事で罰の分からない罰とやらを受けなきゃならないのか。また取り返せばいい話じゃないのか。そう思って目を覚ますとそこは暗い部屋が広がっていた。

「……は……?」

とても暗い。

天井の明かりが蛍光灯二本。壁は血塗られ、生臭い。

しかも何故か自分は腕を拘束され、吊るされている。そして服を脱がされ全裸だ。

「何だよこれ……ヴツ!!」

背中がとても痛い。まるで火傷しているような熱さと痛みが天龍を襲う。何が起きた、何をされた、全く理解が追いつかない。

「やあやあやあ天龍ちゃん。お目覚めかな?」

「……何の真似だ……憲兵の野郎……!」

「いやいや提督殿から罰の実行を任されていてねえ……何でも天龍ちゃんは提督殿に反抗したらしいじゃないか」

ニヤニヤと自分の身体を嘗めるように眺める憲兵達。気持ち悪くて堪らない、何でこんな事になったのだろうか。

「んなの……してねーよアアッ ツ!!!」

「うるせえ口答えするなよ。とにかく貴様には罰が与えられた。よつて鞭打ち五百回を始める!」

「ハア!? 知ら——グアアア!!」

正直、罰が下される最中の事はよく覚えていない。

全身からヒリヒリとした熱さと痛さだけが感覚として残っていた。背中、胸、顔、両腕、腹、太腿、両足。事細かに何本もの鞭で打たれた。どれだけ時間がたったのかも分からない。

「よし罰を終了とする! 後片付けは駆逐艦に任せよう、行くぞ」

「はい!」

やがて罰が終了し、憲兵達は去っていく。代わりに秘書艦の吹雪が入ってきた。医療道具などで天龍の身体を治療する。

「ごめんなさい……何も出来なくて……」

「吹雪……か……」

吹雪の目は涙で溜まっていた。手も僅かながらに震えている。そして全身に所々ある包帯。何故あの時吹雪が笑っていなかったのか、何故他の艦娘が笑っていなかった、ようやく理解出来た。

全てはあの傲慢な前任の所為なのだ。

「クソが……」

天龍は目に出る涙を腕で隠す。これからこんな日々が続くと思うと心が折れそうだった。しかし自分には龍田がいる。まだ龍田は無事だ、この事を教えれば龍田は守れるかもしれない。であれば折れる訳にも、死ぬ訳にもいかない。

それからの日々はまさに地獄だった。あの罰以降、本性を隠さなくていいと思ったのか前任は天龍達にきつく当たってきた。口答えすれば暴行され、罰を執行させる。少しでもおかしい態度を見せれば倉に閉じ込められ、貧困な生活を強いられる。一度も休憩の無い遠征任務に損害ありの状態での出撃任務。どれほど自分の死を悟ったか数えるだけキリがない。

それは同じく龍田にも言えた事だった。龍田もまた天龍と同じような愚行を何回も受けていた。しかも罰が鞭打ちでは無く、挿入した物の中で無理矢理広げるといった女性専用の拷問をされていたのだ。

「私は大丈夫……だから……」

「グッ……あの野郎ッ……!!」

天龍は許せなかった。何故自分達をここまで弄ぶのか。憎むばかりにその復讐心は激しさを増す。

殺してやる、ズタズタに斬り裂いてやる。そう思って天龍は刀を持ち出し、執務室に入ろうとした。が――、

「……ッ……!」

「またまたお目覚めかな?」

何故だ。

何故自分と龍田が全裸の状態で吊るされている。執務室に入ろうとした時何があったのか理解が追いつかない。意識を失っていた、だったらどうやってやったのか。

しかもその実行犯が目の前にいる。

「急ですまないが君達は私に齒向かった反逆者だ、よってそれ相応の罰を受けてもらう」

「ふざけんなア!! 何しやがったてめえ!!」

「なーにちよつと眠ってもらったただけだよ」

また罰を受けてしまう。

だが自分の事は構わない、龍田は関係ないから見逃してくれと提言した。

だがその提言は却下され、背中を鞭で何回も打たれる。だがその痛みにはもう慣れた、鞭で打たれようが耐えてやる。すると前任の隣で憲兵二人が話し掛けていた。まるで聞かせるかのように言ったその内容は――、

「お前が狙ってた艦娘だ、存分に味わいたまえ」

「マジっすか? あぎーっす!」

憲兵達は服を脱ぎ、龍田の元へ向かう。その最悪の事態を察した天龍は必死に訴えた。

「おいバ、バカ、バカやめろツ!!」

両腕が枷で拘束され、天井に鎖で吊るされている龍田。何も抵抗は出来ず、憲兵達にその身体を弄ばれた。悲鳴や喘ぎ声が重なって聞こえる。複数の男にたらい回しにされ、身体中を鞭で叩かれる。いくつもの男を相手にしながらその身体が汚れていくのを見る事しか出来なかった。

あまりにも凄惨、屈辱で残酷。

この世とは思えない光景に背筋が凍った。目の前で大事な妹が汚い男共に弄ばれている。自然と涙が頬を伝う。そんな地獄のような罰が執行される中、ある憲兵の一人が天龍に気付いた。

「確か自分の事はどうなってもいいとか言ってたな？」

「やめ……！」

「嫌だね」

今度は自分も同じく身体を弄ばれた。何時間続いたか分からない。男共の欲が絶えない限り、罰は続いた。

自分達に飽きたのか男達が去っていく。ようやく地獄から解放された自分と龍田は全てを失った。執務室で眠らされた時は確かヒトサンマルマル。そして吹雪に介抱され、外に出た時は――、

――既に三日も時が進んでいた。

「……」

久しぶりに風呂に入れた。高速修復材入りの風呂に浸かり、汚された身体を洗う。男共の嫌な臭いが肌にこびりついて消えない。石鹸を使って一生懸命洗った。久しぶりに風呂に浸かった自分と龍田は放心状態だった。

「ごめんね天龍ちゃん……」

「違う俺の所為だ……」

前任には歯向かえばこんな罰を受けると半分脅しで言われた。今度また歯向かえば地獄を受ける。

もうあんな屈辱的な事はされたくない。

しばらく前任の言う事に従った。気分を損なわないように遠征任務や出撃任務を頑張り、一切怪しい行動を見せないよう心掛けた。

「すいません……天龍さん……」

「な、何があつたんだ睦月!？」

「皐月と文月、望月が……」

あの地獄から何ヶ月か経ち、水雷戦隊として駆逐艦の教育係をしていた自分と龍田は睦月の報告に絶望する。睦月は泣きながら報告した。

「先程の出撃任務で……全員、沈みました……」

「んなツ……!？」

必死に教育した皐月達が初めての出撃任務で沈んだ。何故だ、そこまで皐月達が弱いわけがない。確か最初の出撃任務は鎮守府近海の哨戒任務だったはずだ。余程の事が無い限りはそんな事など有り得ない。

「……まさかッ!!」

別の違う出撃任務だったとしたら。急いで睦月に質問した。

「なあ睦月、お前らの艦隊編成は!？」

「霧島さんと榛名さん、わ、私と皐月と文月と望月……です」

「じゃあその出撃任務ってのは鎮守府近海の哨戒任務……だよな!？」

「い、いえ違います! 敵勢力が一番強い海域の……出撃任務でした」

その言葉を聞いて天龍は絶望した。

ある噂で聞いた事がある。練度の低い駆逐艦を使って戦艦を守る戦術がある事を。怒りのあまり壁を殴った。歯を噛み締め、ぶつけようのない怒りに苛まれる。怒りで我を忘れた天龍はすぐさま刀を持ち、執務室へ向かった。

「やはり来たか天龍」

「てめえをぶつ殺す!!」

二度目の反抗も虚しく失敗。罰として営倉で一週間を過ごす事になり、男共に身体を弄ばれた。ようやく解放された天龍の精神は崩壊寸前だった。

更には前任が施した優遇制度により、天龍諸共艦娘達に追い討ちを仕掛ける。

今まで支え合ってきた艦娘達が豹変し、まるでゴミを見るかのように差別してきたのだ。その差は何なのかは一目瞭然、優秀な戦果を出した艦娘達とそれが出来なかった艦娘達とで別れていた。天龍と龍田は出来なかった艦娘として一方的に差別された。毎日すれ違う度に罵られ、トイレ中には水をかけられ、食事はパン一つ。深夜の度重なる艦娘の暴行、部屋のイタズラや嫌がらせ。

毎日が地獄だった。

それでも天龍は挫けなかった。何故なら龍田がいるから。お互いの励まし合いは心身ともに癒してくれた。龍田がいるなら大丈夫。いつしか自分達の事だけを考えるようになってしまった。

更に月日は流れる。

依然として駆逐艦の教育係をしていた天龍と龍田。苛烈する艦娘達のイジメと理不尽な罰に耐え続けていた。育てた駆逐艦は半数を下回り、同じ軽巡は差別する艦娘達にこき使われ、度重なる出撃任務で精神崩壊を起こし、飛龍と蒼龍によって解体。この鎮守府はまさに地獄絵図だ。

「天龍、水雷戦隊旗艦として遠征任務に出て欲しい。ハマしたら……分かってるよな?」

「分かり、ました……」

また同じく遠征任務を任された天龍。今回の遠征任務は南方にある鎮守府との資材の交換。艦隊は旗艦天龍、龍田、電、若葉、曙、子日。いつもと何ら変わらない水雷戦隊編成だ。

身体は少し疲れているが別に動けないわけじゃない。いつものように龍田や電達を引き連れ、資材を運んで遠征任務へ出掛けた。

4.4. 天が定めた運命とて龍は抗えず

「いつもありがとね」

「いえいえ、仕事ですから」

「これはオマケよ」

「あ、ありがとうございます！」

南方の鎮守府で司令長官を務める■大佐。彼女は年老いた老婆でありながら鬼の大佐と呼ばれた威厳ある軍人だ。だが艦娘達にはとても優しく、今もこうして資材を少しだけ多めに分けてくれる。

勿論、あの鎮守府の出来事は知らない。南方の鎮守府を去り、鎮守府へ帰還する事になった。

「うっし、いつも以上に資材が調達出来たぞ」

「後はこのまま帰るだけね」

「ああでも油断は禁物だ。警戒しながら行くぞ」

いつものようにあの忌まわしき鎮守府へ帰還する天龍達。南方まで赴いたおかげか少し遠く感じる。

「ねえ……やっ——」「何の事かなー」

曙が口を開く事を提言する。天龍がそれを阻止した。通信機によつて場所は明白、会話も盗聴されている。全て経験済みだ。

「ハア……」

確かにあの大佐に言えば状況は変わるかもしれない。あの地獄から脱出出来る可能性だつてある。

だが前任がそれを許さない。あらゆる手で艦娘達の口を封じてい

る。もし、刺し違えてでも前任を殺す事が出来たのなら、自分達の世界は変わるだろうか。自分が犠牲になって皆を助ける事が出来れば良いのかもしれない。

そう考えながらも南方海域を抜け出す天龍達。だが一発の砲弾が龍田の頭に直撃した。

「龍田ッ!!」

「龍田さん!!」

多くの資材を落とし、倒れる龍田。頭の犠装は跡形もなく破壊され、頭から大量の血を流している。大破以前の問題じゃない。早急に応急処置しなければ致命傷になる負傷だ。

「アラアラ迷ッチャッタノカナー?」

「その声は……!」

南方海域にて暴君と呼ばれたその深海棲艦の名前は南方棲鬼。鬼クラスの戦艦型深海棲艦。

と言いながらも艦載機や魚雷を装備している反則もいいところのオールマイティな敵だ。

「警戒シテタ癖ニ、マンマト攻撃サレチャッタネー?」

「子曰、最悪な日だよー!」

「畜生、運が悪かったかッ……!」

即座に天龍は前任に報告。いつもなら自分達でやれと言うはずだが何と今回に至っては救助隊を出してくれた。意外な行動に驚くも落ち着いて申請する。

「……分かりました、お願いします」

「何カ伝エテルヨウデ悪イケド、ソノ資材ヲ奪イニキタノ。提督カラノゴ命令デネ?」

「ふぎけるな! 誰がためえなんかに!!」

戦える力はまだ残っている。相手が艦隊ではなく南方棲鬼一人ならまだ持ち堪えられる可能性は高い。電達を逃がして救助隊が来るまで時間稼ぎすればまだ勝機はある。

「電、龍田を抱えて先に逃げろ。俺が戦ってる間に……！」

「でもそんな事したら天龍さんがあ!!」

「大丈夫だ、俺は勝てる」

天龍の言葉を受け止め、電達が龍田を背負い、この場から離れる。
だが――、

「行カセル訳ナイデショウ？ 馬鹿ナノ？」

「逃がすつもりは無いつてか……！」

天龍達を囲む様に深海棲艦が海から現れた。

軽巡ト級五体、雷巡チ級三体、重巡リ級四体、重巡ネ級二体、戦艦ル級五体、戦艦夕級二体、戦艦レ級一体、そして南方棲鬼一体。どうみても勝てるような相手ではない。歯向かえばそこで死亡だ。

であれば――、

「……分かった、資材はやる。その代わりに、俺達を見逃してほしい」

取り敢えずは自分達の命が最優先だ。資材に関しては前任が怒り狂うだろうが、責任は全部自分が負えばいい。罰だろうが拷問だろうが解体だろうが全て受けてやる。

「ソーソレハ……無理♪」

「……何でだ」

「ダツテー未来ノ危険因子ヲ潰サナイ理由ガ無いデショウ？」

「俺達がお前らの危険因子だとも？」

「ソウソウ。ツト言ツテモ本当ハ……」

突然南方棲鬼が砲撃。

それを天龍は刀で一刀両断。

斬れた砲弾は二つに別れ、天龍達を避けるように後方で着弾する。

南方棲鬼は天龍の姿をみてニヤリと笑った。

「一方的ニ殺シテミタイダケナンダヨネー!!」

「性格悪い……奴だな……てめえ……」

「ツテナ訳デ、ココデ今カラ沈ンデモライマース」

南方棲鬼と同じく他の深海棲艦も主砲を構える。逃げ場は無い、まさに四面楚歌だ。龍田は負傷で倒れ込んでいる。龍田と電達を外へ投げ出して逃がそうとしても他の深海棲艦が追い掛けるだろう。ただでさえこちらは南方棲鬼で手一杯だ。手負いの艦娘を運びながら戦うなど無理がある。練度が低ければ尚更だ。

「クソ……やるしかないか……!!」

援軍が来るまであと十二分。その時間まで持ちこたえれば援軍と救助隊が来る。

その時間まで耐えれば――、

「電！ 曙！ 若葉！ 子曰！ いつも通りの攻撃をすればいい、全力で自分と龍田を守れ！」

「りよ、了解!!」

「沈メエ!!」

南方棲鬼と天龍の掛け声で同時に攻撃が開始。他の深海棲艦と電達も一斉に砲撃する。

——だがそれは悲劇と化す。

電達の攻撃は虚しく、あまり当たらない。それに比べ軽巡ト級や戦艦夕級の攻撃は全て着弾する。

天龍も砲弾を跳ね返し、弾き返したりと防御で精一杯だ。

後ろにいる電達の悲鳴を聞いて、援護に出る。

砲弾の雨が鳴り止まない。確実に沈めようと容赦なく攻めてくる。最早自分の事しか考えられなくなっていた。

ただ一方的に、慈悲など無く電達を蹂躪する。いくら泣き喚こうとも、いくら怯んでも、いくら謝っても、深海棲艦達は砲撃をやめない。腹を抉られ、腕をへし折られ、足を落とされても深海棲艦は砲撃をやめない。

悲鳴すら聞こえなくなったその時、南方棲鬼は他の深海棲艦の砲撃に合わせ、全門斉射でトドメをうった。

爆煙と水柱で天龍達の姿が見えない。圧倒的な力を前に沈んだか。試しに砲撃で爆煙を払い、姿を確認する。そこには傷だらけで前に立つ天龍と龍田と同じく倒れる電達がいた。

「へエ〜マダ戦エルンダ。関心〜」

身体中から血を流し、震えながらもその場に立つ天龍。電達は容赦ない砲弾の弾幕の餌食となり、大破状態になる。意識はあるもの、もう立つことはままならない。

「ク……ソがッ……!!」

「……ネエ、貴方コツチニ来ナイ?」

諦めず戦おうとする天龍を南方棲鬼は誘い出す。この状況で誘い出すとは余程暇らしい。

「今ノ貴方ニ少シ興味ヲ持ツチャツタ。ドウ？」

どうやら天龍の事に少し興味を持ったのだろう。あれだけ砲撃の餌食になりながら味方を護り、自分も守る。到底他の艦娘には出来ない高等な技術だ。それを見て南方棲鬼は判断した。

「そつちに……行けば、こいつらは……見逃して……くれる、のか？」
「ソーソレモ無理。危険因子ハ全テ排除ダヨ」

「なら……断る。仲間の、敵に……なるような事はしたく、ない。てめえ………みたいなこんなふざけた事、をッ！ する………ぐらいなら、尚更だ」

どのみち断るのは知っていた。知っていて尚、南方棲鬼は誘ったのだ。

出来るだけこの時間に居られるように。
ただの愉悦だ。

「ソウカ……ンジャ死ネッ!!」

南方棲鬼が腕を伸ばし、手を広げる。

それは一斉砲撃の合図。電達諸共天龍を殺すつもりだ。二度目の弾幕がやってくる。

今度は自分一人だ。背中を任せる仲間もいない。電達は意識不明の大破状態だ。それでも狙ってくるだろう。

一斉砲撃が開始された。

それに合わせ天龍は身構える。

そして悟った、ここが自分の墓場だと。

それでも構わない。龍田や電達を守れるなら死んでも本望だ。

この先どんな結果になっても、絶対に――、

「コレガ最後ノ攻撃ダア!! 才前ハ最後ニドウ踊ルノカナ!!!」

もう刀を、それを持つ腕すら無い。弾薬も無い、燃料も底を尽きた。意識も朦朧としてきた。流れ出る血が視界を邪魔をする。

万事休すか。

だがその時――、

「グッ……うわッ!!」

急に背中を引っ張られ、深海棲艦の包囲網から脱出する天龍と電達。何が起こったのか一瞬理解が出来なかった。

包囲網にいるのは――、

「龍田アアア!!」

叫んだ直後、大爆発。

意識を取り戻していた龍田は天龍達を投げ飛ばし、一斉砲撃の身代わりになった。投げられた電達を抱え、海面に着地する天龍。足の骨が折れようとも自力で立ち上がった。

大爆発する前の一瞬、龍田がこう言っていた気がする。

『生きて』

「龍田ア!! た、たつ……何でッ……! そんなッ……嘘だろ……なア!!」

必死に龍田の安否を確かめる天龍。だが艤装の故障と足の怪我で動く事すら出来なかった。深海棲艦の包囲網の中は爆煙に包まれて

いる。

「成程……ソウ来タカ。マア面白い物ヲ見セテクレテツ——」

南方棲鬼が龍田の轟沈を確認する。あれだけの砲撃を食らって生きていくはずがない。そう思っていた。

が、何故だろうか腹に違和感を感じる。恐る恐る顔を下に向けると一本の槍が南方棲鬼の腹に突き刺さっていた。思わず爆煙の中を見る。

そこには沈みながら命尽きていく龍田の姿が。右脚と左腕を喪失し、頭部と左胸が無い。

「クソガアア!!! ツ!？」

諦めの悪い龍田に苛立つ南方棲鬼は外の天龍達を狙おうとする。

だが天龍が呼んだ支援艦隊と救助隊が向かってきていた。流石に弾薬を使った今の状況では戦うのは少し分が悪い。撤退する必要がある。

「チツ……撤退スルゾ！」

南方棲鬼は深海棲艦に資材を持たせ、撤退する。支援艦隊に攻撃されながらも力づくで去っていく。天龍達は救助隊に保護され、深海棲艦による一歩的な蹂躪の地獄は終焉を告げた。

45. しかし龍は天をも断つ一閃にて運命を斬り伏せた

あのもう一つの地獄から一週間が過ぎた。救助された天龍達はすぐ近くの南方の鎮守府にて治療され、二ヶ月間の入院を強いられた。高速修復材を使うには体力と精神が戻った後で使われる。

前任には大佐の方で説得してもらい、何とか了承をもらった。この頃から前任の悪い噂は流れていく。

南方の鎮守府で入院していた天龍は窓に映る青空を眺めていた。目に光は無く、上の空だ。

「やあやあ」

「……」

「……って無視かい」

南方の鎮守府の大佐が声を掛けてきた。だが全く反応が無い。

「……まあ、災難だね」

「……」

「その目を見ればお前の辛さが良く分かる。空でも見てなきや生きる意味なんて考えなくて済むものね」

「……」

「きつとお前の鎮守府も酷い所なんだろう？ 噂は広がっているからねえ、よく頑張ったよ」

虚ろな天龍を慰めるかのように大佐は話しかける。天龍の綺麗な髪を整え、目を見る。

「……なあ」

「なんだい？」

「俺は……死ぬべきなのか？」

天龍が初めて口を開いた。だがその最初の言葉は死ぬべきなのかどうか。人に死の選択の悩みを言い出したのだ。

「……どうしてかな？」

「守れなかった、共に生きた仲間を、龍田を、守れな……かった……」

泣きながら後悔に悩まされる天龍。腕で目を隠し、涙を拭う。それを大佐は黙って天龍を撫でた。

「……そちらの龍田ちゃんに何か言われた事はあるのかい？」

勿論ある。絶望的な状況で投げ飛ばされた自分に聞こえるように言っていた言葉。

それは――、

『生きて』

「もし何かしら希望を持って言ったなら、その言葉を守れば良いんじゃないかしら？」

「守る……？」

「そちらの龍田ちゃんが何言っていないなくなっちゃったのかは知らない。けど、天龍ちゃんが捨て身の覚悟で龍田ちゃん達を護りたいと思つたように龍田ちゃんも例え自分が死んでも護りたいと願つたはずだよ」

大佐の優しい声に涙が止まらない。天龍の手を握り、一生懸命訴えた。

「逃げちゃ駄目だよ天龍ちゃん。いつまでも逃げちゃダメ、まず目の前の事から始めなきゃ」

「目の前の……」

「いきなり山頂を目指したら疲れて登れなくなっちゃうでしょう？」

まずは下準備が大事、山を登る為に体力をつけて、登頂に必要な物を買って集めて、リュックバックに入れるの。そして山登りの開始だよ。でも山頂まで登る道は険しくて果てしない道。半端な体力と物じゃ到底辿り着けない。だけど登る前につけた体力と山登りに必要な物があれば難なく乗り越えられる」

山を登るには相当な体力とそれに似合った物が必要だ。多くの登山家が事前に情報を集め、身体を鍛えているように。準備不足では何も出来ない上に始まらないのだ。

「そして諦めちゃうのもダメ。諦めるのは自分に負けたなによりの証拠だよ。下準備を諦めず取り組んで、山を登る時も諦めない事を軸にして頑張るんだ」

「諦めない事……」

「そう。だからまずは下準備だよ。何事も準備があつたから色々出来たんじゃないかい？」

「……」

「焦りは禁物。大丈夫、必ず導いてくれる人がいるから。きっと天龍ちゃんを強くしてくれる指導者が——」

それを聞いても天龍は興味さえ示さなかった。話を聞いても受け流していただけ。その後の事はあまり思い出したくない。

今思えばこの事は自分の人生の中で一番大事な事かもしれない。いや一番大事な事だ。

そうだ、まずは目の前の事から始めるべきなんだ。

まずは力をつけて強くならなきゃいけないかった。

それなのに自分はその話を受け流して無視していた。とても大事な話のはずなのに、何故今まで気づかなかつたんだろう。

今までの自分は醜かった。いつも焦ってばっかで、人の気持ちを考えずに突っ走って、後先考えない馬鹿野郎だ。だから今の提督もそれを含めて暴言を吐いたのかもしれない。

提督がやりたい事を聞いたのは明確な目標を見出す為、前の訓練も自分達を強くする為。全ての下準備は完了していた。あとは南方棲鬼とあの前任に復讐するだけだった。

提督に復讐出来ると聞いた時は嬉しかった。でもそれは後先考えないで言った事。早く前任を見つけることが出来て復讐も早く出来ると思っていた。

でもそれは間違いだった。未だに自分は弱かった。それこそ南方棲鬼に勝てるような力は無くて龍田や皆を救える力すら無かった。ましてや前任に刃向かえる力も無かった。

『峰を使え!! それで敵をぶん殴るんだよ!!』

『馬鹿言えサラリーマンなんてこれ以上働いてんだぞ甘ったれるな、ほら立て』

『天龍、砲弾を斬るような高等技術はお前ぐらいだ。だからあたしの訓練を受ければ更に洗練されるぞ』

『その刀を照準にして砲撃した方がいいですよー!』

でも今は違う。自分は強くなれた。今まで険しくて果てしない道だった。自分を導いてくれる提督もいる。

下準備はもう済んだ。もう顔を下に向けない。前と後ろだけ見て生きていく。

「……………」は

白い空間に一人、立ち尽くす天龍。

感覚が無い、音も無い、誰もいない。辺りを見渡しても白い背景が

ずっと続いている。不思議な感じだ、天国なのかと思った。

天龍はひたすら歩いた。道らしき道も、影を作る光も、何もなくて
もひたすらに歩み続ける。恐らくこの空間は虚無、死んだ者が来る場
所なのだろう。天龍は自分の死を悟った。

「■龍さ■……」

「っ!？」

後方で誰かを呼ぶ声があった。

思わず天龍は振り向く。

天龍を呼んだのは仲良くしていた駆逐艦、そして龍田。皆笑顔でこ
ちらを見ている。ノイズばかりであり聞き取れないが言ってる事
は理解出来た。

「皆……龍田……」

涙を流す天龍に龍田達は何かを言った。それは希望を混ぜ、これか
らの天龍を励ますようなただの一言。

「頑■って、生き■」

ノイズが混じりつつも、明確にその言葉は聞こえた。その言葉を聞
いて天龍は涙を拭い、後ろを向く。

そして一直線に走った。

白い背景がやがて闇のような黒い空間に包まれる。後ろを見ると
龍田達が笑顔で見届けていた。

この黒い空間は虚無と現実を繋ぐ通路だ。段々と感覚が戻ってく
る。自分が歩むべき道も、影を映し出す光も徐々に戻ってきた。する
と前に悍ましい雰囲気を出し続ける何かがある。

その何かとは南方棲鬼や前任の姿。天龍達を陥れた元凶だ。前の自分だったら怖気ついていたかもしれない。だが今の天龍は違う。

天龍は傍にあった自分の刀を持ち、堂々と身構える。

「ああ……頑張るぜ……!!」

それが悪い道でも、醜い道でも、他人に笑われるような道でも、例え正しくない道でも。

皆は望んでいないのかもしれない。

それでも、これだけは自分にとって最良の選択である事を信じていたい。

だから頼む。

戦うチャンスを。

俺に蓄えた全ての力を。

解放させてくれ。

「……ありがとな」

そう言って天龍は高速で南方棲鬼の元へ向かった。

五十鈴達を置いて。

「何テ、バカ力ナノカシラ……」

「それは……お前もだろう……」

ガングートと南方棲鬼が膠着状態に入っている。戦艦同士の殴り合いは凄まじく、周辺を巻き込むほどだった。

二人とも息は上がっており、相手の出方を探っている。

「次こそトドメ——」「オラアアア!!」

「ッ!」

謎の攻撃が南方棲鬼を襲う。殴ろうと右腕を引いた瞬間、誰かに硬い物で殴られた。南方棲鬼は海面に叩きつけられながらも態勢を変えて受身を取る。

「天龍!? 何故……!」

「ナニ天龍ダト!」

「……や、やったわ!」

「天龍さん!!」

南方棲鬼を吹き飛ばしたのは天龍だ。挫けながらもゆっくりと立ち上がるその姿はまさに龍そのものだった。

勇ましき龍の眼光が闇夜に輝く。

南方棲鬼を睨み、静かに刀を構えた。

「戻ってきたぜ、南方棲鬼……!」

風を纏い、刀を肩で支える天龍。前の姿とは大違いだ。微かに身体も光っている。怪我も少しばかり治っていた。

天龍は刀を構え、戦闘態勢に入る。

同じく南方棲鬼も戦闘態勢に入った。

膠着状態が続く。

しかし天龍が先手を撃った。

突然、高速移動。

目の前で刀を突き出し、砲撃する。

着弾の衝撃で思い切り吹き飛ばされる南方棲鬼。転がるように海に打ちつけられる。

あまりの速さと衝撃で思わず怯んでしまった。

だが南方棲鬼はすぐに大跳躍。

天龍の後方に周り、勢いよく回転、右拳で殴る。

それを天龍は高速で回避。

急いで距離を取り、南方棲鬼の横に回り込む。

「クソ野郎ガアアア!!!」

南方棲鬼はやけくそだ。移動地点を予測して全門斉射。砲弾の嵐が天龍を襲う。

しかし天龍は自ら嵐の中へ。

目に見えぬ速さで砲弾を斬り落とし、南方棲鬼の目の前まで接近。

身体を斬り上げ、零距离砲撃を食らわせる。

その戦姿を見ていた深海棲艦とガングート達は圧倒されていた。

「凄い……!」

「何テ力ダ……」

「天龍さんが、強くなった……?」

「いや違う。アレは天龍に元あった潜在的な力だ。アイツの訓練もあつてか動きやタイミングが洗練されている」

「チツ……こんな時に何の用だ」

提督は銃を構え、前任と話をしていた。しかし途中で呉鎮守府から連絡が来る。仕方なく提督は連絡の内容を聞くことにした。

「駿河鎮守府と呉鎮守府の支援艦隊が現在交戦中? 何でだ?」

何とそろそろ来るはずの支援艦隊が謎の敵艦隊によって足止めされているという。更には横須賀鎮守府近海でも戦闘が始まっていると報告された。あまりにも都合が良すぎる展開に提督はある事を察知する。

「まさか……」

その時、前任は僅かにほくそ笑む。

「フザケルナアアア!!!」

南方棲鬼が跳躍し、天龍に殴り掛かる。

天龍は拳を紙一重で回避。

身体を横にした事で一撃は間逃れた。

だが着地したと同時に足を踏み外す。

膝を着き、海面に手の平を乗せる。まだダメージは残っていたよう
だ。

「ソウダロオ!! マダ、ダメージハ残ツテルハズダ!! ウ
オオオオアアアア!!!」

「ウオオオオオオオ!!!」

南方棲鬼は再度殴り掛かる。

それに合わせ天龍も刀の峰で殴った。すかさず次の攻撃に移る。

息する間もない激しい猛攻が始まった。刀、鉄拳、砲撃、鉄拳、刀、
鉄拳、砲撃と次々に攻撃を仕掛けていく。

お互い一步も譲らず、咆哮を上げながら無茶苦茶に殴り合ってい
る。

だが天龍の刀の峰が南方棲鬼の顔に直撃。

怯み声を上げながら殴り飛ばされた南方棲鬼。今までのダメージ
が今になって襲ってきた。思わず血を吐いてしまう。

だがそんな事を言っていられない――、

「これで、終わりだ……!!」

天龍が刀を構え、高速で接近してきた。

まずい、立ち直らなければ。

相手はすぐに向かってくる。

反撃態勢を――、

「ヤ、ヤメッ――」

光輝く一閃が南方棲鬼の身体を斬り裂く。血飛沫を上げることな
く、断末魔すらなく、南方棲鬼の身体は静かに朽ちていった。

水しぶきが遅れて飛び、衝撃波が周囲に広がる。

そこにはたった一匹の龍がいた。

「感謝するぜ……南方棲鬼。お前のおかげで俺は——

——まだまだ……強くなれる」

46. 五月闇に潜む卑劣な企み

『ガングートだ！ 第三水雷戦隊、天龍が南方棲鬼を撃破した！ その他駆逐棲姫、軽巡棲鬼、潜水棲姫の撃沈を確認済みだ！』

天龍が旗艦の南方棲鬼を撃破。第三主力艦隊旗艦のガングートが提督や他の艦隊に朗報を知らせる。今の指揮は摩耶と川内に任せられているはずだ。

「分かった！ んじゃガングート達は金剛の援護に行つて!! うわッ！ 私達はまだ目が離せないの!!」

『了解した、金剛の援護へ向かう。しかし天龍は大破状態だから第三水雷戦隊に帰還させてもらった。我々第三主力艦隊もすぐに移動しよう』

『こちら霧島です。貴方達より早く重巡棲姫を撃破しました。これから敵増援部隊と接敵、殲滅します』

「霧島もオーケー！ 把握したよ！ 皆、魚雷発射して!! 提督とは繋がったの？ 摩耶!!」

『いいや駄目だ繋がらない!! 恐らく例の前任と出会ったんだろ!! 誰か通信機から会話が聞こえないか!?!』

摩耶と川内の通信から空母棲姫達の戦鬪が如何に激しいものかよく分かる。話すだけでも精一杯のようだ。

『こちら古鷹！ 確かに少しだけ聞こえるよ！ 空母機動部隊の人達はどうかなの!?!』

『瑞鶴よ。摩耶の言う通り、今じゃ鎮守府も戦場になつて!!』
「な、何でっ!?!」

『奴が連れてきた深海棲艦と飛行場姫護衛部隊の長門達が戦つてんのよ！ おかげで私達も巻き込まれて凄い事にッ——うわッ!!』

瑞鶴の報告によると、前任が連れてきた深海棲艦と長門達で戦鬪が始まつたらしい。港付近や鎮守府内広場で暴れ回つてるとか。

「だったら第三水雷戦隊を援護に向かわせよう！」

『長門だ。その件については大丈夫だ、安心しろ』

「長門!?! どういう事?」

『先程深海棲艦と戦闘に入った。私は戦艦レ級を倒し、これから他の援護にあたる。空母機動部隊の援護もあるのでこちらは大丈夫だ。提督からの伝言により、木曾と筑摩を交代させる。今は戦艦棲姫に集中してくれ。との事だ』

「……わ、分かった！ んじゃ天龍と木曾はそのまま帰還して！ 第三水雷戦隊は私達の援護を!!」
『分かったわ！ すぐ向かう!』

執務室では戦争が始まったとは思えないほど静かだった。近くで爆音や建物が崩れる音が響き渡るも気にしない。壁にはヒビがはいり、埃や欠片がパラパラと落ちていく。大本営からの通信を切断し、提督は応接間へ向かう。

「まあいいだろう。戦況は優勢のようだし……さて前任の。お互い利益のある会話をしようじゃないか」

「何がしたいんだ……貴様は」
「なに、ただの世間話だよ。俺も大本営に引き籠った身だからねえ、色々話が聞きたいんだ」

戦場の中とはいえ応接間のソファで堂々と寛ぐ提督。命の危険に晒されてもなお、余裕の表情だ。

「なあどうやってあの馬鹿共強い洗脳を施した？ 玄人だろうとあそこまでの強い洗脳を施したのは滅多に無いぞ?」

「私の類まれなる力だ。実に容易かったよ、あの兵器共を操れるのは」
「俺が聞いているのはどうやって洗脳を施したかだ、方法を聞いているんだよ。別にお前の力なんぞ聞いてない。どうやったんだ?」

提督は拳銃を後ろの飛行場姫に向け、脅すように仕掛けた。何がなんでも話は聞きたいらしい。

「……ッ!! 脅しか……!」
「ああそうだ」

言った途端にまた発砲。銃弾は飛行場姫の腹を掠め、壁に当たっ

た。提督の目は赤黒く、そして光が無い。

「ヒイイ……!!」

「早く言え、次は無いぞ」

先程の暁のように例え作戦だろうと見境無く撃つ男だ。断れば本当に飛行場姫を射殺しかねない。今は大人しく従った方がよさそう
だ。

「チツ……あの洗脳は元々明石に作らせたある液体だ」

「液体？ 艦装展開不可薬とかか？」

「それに近いモノだ。それらの類は艦娘の脳や核に強い作用が掛かる。例えば貴様が言っていた艦装展開不可薬は脳に直接暗示をかける、言わば洗脳に近い作用をしていた。他の薬や戦闘能力増進剤も同等だ、だから私は考えた」

艦娘は身体の構造や内部を含め、一般的な女性と変わらない。脳や消化器、性器も存在しており、人間と同じだ。

しかし艦装を持てば話が違う。旧大日本帝国海軍の軍艦の主砲などを模した艦装は通常の間人ではまともに扱う事は出来ない。艦娘は身体の中に核を有しており、この核によって艦装が展開可能。砲撃や魚雷など攻撃を行えるのだ。

核は様々な役目を果たしており、戦前の艦としての記憶や人間の身体の維持、身体能力の超人的な向上。また非戦闘時と戦闘時に不必要な機能の制限など。艦娘の唯一の弱点であり、生命源とも言える。場所は胸の鳩尾辺りにあり、肉体と骨によって保護されている。核があれば大体の砲撃やその他の攻撃にも耐え、主砲の凄まじい反動にも順応。また艦載機の発艦や索敵もお手の物である。

だが弱点故に、核自体はかなり脆い。成人男性が少し力を入れて握り潰せる程柔く、簡単に破壊出来る。その為か超人的な身体能力や砲撃に耐える防御力で守る様になっているのだろう。

つい近年では核を取り除く事で人間に生まれ変わる事が判明した。艦装を外した状態で身体を仮死状態にし、拒絶反応を起さないように丁寧に速やかに取り除く。そして蘇生する事で新たな人間として生まれ変わる。妖精との協力で全自動化され、今現在の解体の方法とし

て馴染んでいた。

核は命に等しいもの。

だがその核を利用して人類はある物を生み出した。妖精との協力で生み出されたのは、高速修復材のような似たモノ。

艦娘の戦闘意欲を向上させる戦闘意欲増進剤。

艦娘の身体能力を一時的に向上させる身体能力向上薬。

艦娘の艦装を展開不可能にする艦装展開不可薬。

艦娘の身体を一時的に自動で修理する応急処置薬。妖精が修理する応急修理女神とは少し違う。

その他も多く作られ、戦闘効率は大幅な成長を見せていた。

しかし一方でこの薬を悪用する者も現れた。それぞれの増進剤や薬の構造を無理矢理改造し、自分の良い様にさせる。戦闘には関係ない様な他人の好嫌の関係を変える薬やそもそも肉体を変えてしまうような薬、性欲を増進させる増進剤が開発されてしまった。

例句の果てにはこれらに関した傷害事件も発生した為、薬や増進剤の使用や製造又は開発等の行為は今後一切禁止とされている。現在は大本営が全て押収し、厳重に保管されている。

「戦闘意欲増進剤の構成組織図を一部改良したんだ。艦娘の中枢を担う核には人間の言う事を聞くプログラムのようなものが存在していた。そのプログラムのようなものを強制的に発動させ、常時実行されるような組織図を戦闘意欲増進剤の構成組織図に挿入。そして艦娘に飲み込ませ、私に深く従順するようになった」

「成程。その為今でも差別している奴らがいる、と。流石敵の親玉になれただけの事はある」

「いや既に終わってるんじゃないのか？」

「……は？」

頭にはなマークを浮かべる。前任は差別意識は既に終わっていると言った。それはおかしい、であれば何故今でも艦娘達が差別しているのか。

矛盾が発生した。

「は？… って……私達人間の言う事しか聞かないようにしてるはずだ

ぞ？ 何故貴様しかないこの鎮守府でまだそんな事が起きているんだ？」

確かに人間の命令に従順なら艦娘の命令など聞かないはずだ。それこそこの鎮守府に人間は提督と医師しかない。

あまりにも辻褄が合わない、提督はてつきり前任の元秘書艦が操っていると思っていた。

「お前の元秘書艦である■■■にはこの事を教えているのか？」

「極秘情報だ。教えるわけなからう」

「……嘘はついてないようだ」

監視室から覗く青葉からの返事はイエス。嘘はついていないらしい。

しかしどうしてだ。あまりにも不自然過ぎる。差別意識が生まれたのはこの前任による優遇制度。その優遇制度は洗脳によるもの。そして洗脳は一部改造された戦闘意欲増進剤を使用した事。

何かがおかしい。一つ抜けている様な気がする。

艦娘を操っているのは■■■では無い。

とすればあの時まで地下に引き籠っていた■■■医師だろうか。いやあれだけ感情的ならその可能性は低い。が、そうとも言い切れない。

どこかで生き残っている別の人間の可能性。■■■医師がしたように死亡に見せかけ、この鎮守府のどこかに隠れている。

もしくは自分が無意識にやっている可能性。人間の命令に従順であれば、特定じゃなければ自分が意識させている可能性も否定出来ない。そうすれば――、

——いや待て。

前任は最初に何て言った。

『元々明石に作らせた液体から——』

「……まさかッ……!!」

「どうした貴様、うわッ！」

提督は鬼の形相で前任を睨む。無意識で軍刀を前任の左肩に刺していた。力のあまり、ソファが真つ二つに破壊。前任は床に叩きつけられた。

「……おい前任の。お前は改造した戦闘意欲増進剤を使ったと言っ
たな？」

「ああそうだが」

「その改造した戦闘意欲増進剤を作ったのは誰だ？」

もし提督が予測した事態なら一番最悪だ。

「開発員と……明石だが」

やはりだ。何故洗脳が今でも続いているのかようやく分かった。

明石が全ての元凶に近い存在だ。唯一改造した戦闘意欲増進剤の製造方法を知り得ている。前任が考えたように艦娘が艦娘の命令に

従順させるのも難しいことじゃない。幾らでも方法はあるはずだ。

更には自分も差別された側の艦娘として皮を被っていた。言動や行動が不自然だったのが今になって説明がつく。

だが全て明石が元凶とは限らない。何らかの方法で知ってしまった元秘書艦の■■■がそう促した可能性もある。これは大規模な調査が必要だ。

そう考えてる中、突然倉庫が爆発。爆煙を上げ、炎が燃え盛った。

「畜生しくじった!! やりやがったな明石!! 青葉ア!!」

「はい何でしょうか提督!!」

「今すぐ長門と一緒に工廠へ行け、そして明石を捕らえろ!! 金剛がマジで危険だ!!」

「了解しました!」

監視室から急いで来た青葉が駆けつける。長門も執務室を通して倉庫に向かっていた。今すぐ明石を捕らえろと命令する。

初めて提督が焦っている。これは緊急事態だ。

「さて、そろそろ頃合いですかね」

工廠でただ一人佇む。明石がある物を手に持ち、出撃ハッチを眺めていた。工廠と出撃ハッチが同時に設備されているこの場所でニヤリと微笑む。

「流石に分からなかったでしょう。私もその一部だと」

今までの行動は全てバレていない。提督は改造した戦闘意欲増進剤の存在を知らなかった。つまりは何故差別意識が生まれたのかも知らない。この事さえ隠せば明石はいつでも提督の事を騙す事が出来た。

「後は金剛を殺せば□□さんと■■■さんの安寧は保たれる……全て上

手く行くと思つたら大間違いですよ……提督」

「開けエエツ!!」

鍵で閉めた工廠の扉を無理矢理蹴り飛ばす青葉。艦装を構え、中に入る。すると出撃ハッチの方で明石が海を眺めていた。明石の手には何らかのスイッチ装置。

恐らく自爆装置を作動させる物だろう。今すぐ止めなければいけない。

「青葉さんでしたか。急いでいるって事は私達の計画に気付いたようですね! ですがもう残念、そろそろスイッチを押しちゃいま——」
「させるかッ!」

性格が豹変する明石。ゲス笑いで青葉を見下した。スイッチを押そうとしたその時、後方から長門が明石を奇襲する。

しかし帰還した空母機動部隊が行く手を阻んだ。

「あつぶな……! ありがとうございます皆さん」

「いえいえ計画の為ですよ」

明石の周りを龍驤、祥鳳、葛城、飛鷹、隼鷹が守るように囲む。飛鷹と隼鷹以外は長門達を差別する艦娘達だ。飛鷹や隼鷹は見るからに怯えている。恐らく脅されて無理矢理やらされているのだろう。

膠着状態に入り、それぞれ身構える。

「邪魔するな祥鳳!! これがどんな事か分かっているだろう!!」

「そちらこそ私達の邪魔はしないでいただきたいですね」

「何故こんな事を!? 貴方達はそこまで私達が気に入らないんですか!?!」

「気に入らへんからまず手始めに金剛を殺すんやで。あ、このスイッチにはあの提督の指紋がついているんや、言い逃れは出来へんようにな」

スイッチを指さす龍驤。明石は手袋をしている。後で提督に罪を擦り付ける為に指紋を付けたのだろう。それを見て長門達は激昂する。

「どこまで弄べば気が済むんだッ!!!」

「同じ艦娘として恥ずかしくないですかッ!!!」

「ほら聞いてないで明石さん、早く押してくださいな」

「了解です！」

長門達は明石達を挟んで止めようとする。しかし人数の多い軽空母達を前に抵抗は虚しく、身体を床に抑えられた。

「スイッチを押させるなアアア!!!」

「うわああああ!! くっそオオオオ!!!」

抵抗も無意味。

もう間に合わない。

スイッチ押す親指が近付いてきてる。

金剛が殺されてしまう。

そんなのは嫌だ。

誰か止めてくれ。

誰か、誰か——、

「残念で——したアアアア!!! ……あれ?」

手の感覚が無い。スイッチは押せたのか分からない。明石はスイッチを持つ左手を恐る恐る見た。そこにはスイッチを持つ左手が無い。血飛沫を上げ、痛みが急激に腕から込み上げる。

皆、明石の手が無い姿に驚いていた。

何故だ、何故左手が無い。誰がこんな事をした。誰が腕ごと手を斬っ——、

「まさかッ——」

47. 闇夜に変わる二つの一転攻勢

「まさかッ——」

明石が振り向いた次の瞬間、顔面に左拳が直撃、そのまま殴り飛ばされた。鼻血を出し、白目を向く明石。後ろにいたのは——、「悪い。あまりにもうるせエから、腕斬ってやった」

満身創痍の天龍を抱えた木曾だ。

「木曾っ!？」

「遅かったか……!」

「なななな何でこんな事を……!! て、木曾……お、おお前、なん——」「うるッせエんだよ!!」

騒ごうとする葛城を殴り飛ばし、気絶させる木曾。

ちようどこの時第三水雷戦隊と木曾が一時帰還していたらしく、この現場に急いで来たらしい。木曾は斬った明石の左手を五十鈴に渡し、蛮行を阻止した。五十鈴は思わず気味悪がってしまう。

「これでいいか? 長門」

「ああ……すまない木曾」

「チッ……!」

計画が失敗し、軽空母が後退る。明石と龍驤が殴られた。スイッチは五十鈴が持っている。全て失敗に終わってしまった。

「形勢逆転だ!!」

木曾が剣を突き出し、堂々と身構える。まさに形勢逆転。周辺には長門と青葉、第三水雷戦隊が囲んでいる。

何故今になって反抗してきたのか理解できない。自分達より劣っているゴミ同然の鉄屑の癖に生意気だ。頭がおかしくなる。変な頭痛に襲われ、髪を掻き毟った。

「提督、明石の犯行は阻止した」

「あー……あつぶねえー……気付いてよかったわー」

「止めた俺に感謝するんだな」

『ああ木曾には後で褒美をやる。倉庫の鎮火も頼むわ、すまないな』
「了解した」

明石の反謀を阻止した木曾に心の底から感謝する提督。これだけ肝を冷やしたのは何年ぶりだろうか。

「……まあ結果オーライか。んで話を続けようか」
「今それ言う流れじゃなくね？」

「んなわけないだろ。色々あつたが話は続けるぞ」

まるで他人事の様に見える舞う前任。左肩を軍刀で刺されているのにこの余裕の表情。戦争中だというのに場を弁えない男だ。

「……苦勞してん——」「元はと言えばてめえの所為でこうなつてんだよ、分かつてんのかああ……!?!」

「貴様のその顔を拜めてこちらは清々してるぞ」

「ほおー減らず口が叩けると余程余裕らしい。だったら……」

拳銃を前任の額に当てる。殺意丸出しで拳銃を押し付けた。

「その減らず口が叩けなくなるまで徹底的に吐き出させてやる。覚悟しろ」

「果たしてそう出来るかな？」

「は？ 何言つて——」

直後提督は何かを刺され、机の方まで蹴り飛ばされる。机は粉々になり、土煙が上がった。提督を蹴り飛ばしたのは離島棲鬼。艤装を構え、前任の前に出る。

「ツタク貴方も災難ネ……」

「遅いんだよお前」

「黙ッテクレルカシラ」

提督はぐつたりとしている。机の破片が身体に突き刺さっていた。だが提督はゆっくりと立ち上がる。

「痛つてー……久しぶりに効いたなこれは……」

「何故……死ンデナイ、ンダ!? 何デ……」

土煙からその姿を現す提督。机の破片を取り除き、怪我を治す。軍帽の埃を振り払い、もう一度被った。

その姿に離島棲鬼と飛行場姫は驚きの表情を隠せていない。

「昔から打たれ強くてごめんな」

「嘘ダ……アリエナイ……!」

「提督!!」

外から飛龍と蒼龍が慌てて駆けつけてきた。執務室は二階、流石艦娘の超人的な力だ。悠々と跳躍して入り込んできた。

「大丈夫で——」「どこが大丈夫ですか、だゴリア!! 危うく死にかけたんだよ、見りや分かんたらろおおが!!」

「ごめんなさい! ごめんなさい!」

「はあ……まあいい。今はキレてる場合じゃない」

飛龍と蒼龍は目の前の前任と深海棲艦に気付き、弓を構える。飛龍達は練習用の矢を使っているようだ。充分殺傷能力はある。

「飛龍と蒼龍か……」

「もうお前は敵だ、容赦しない」

「えーつと……あらら仮面も少し歪んだな、あれカツラは……あつたあつた」

「白い長髪とは……まるで深海棲艦じゃないか」

「これが俺の趣味なんだ、何とでも言いたまえ。さて……」

提督は飛龍達の前に出る。目の前には離島棲鬼と前任、そして飛行場姫。膠着状態だ、どちらかが先に手を出せばまた戦闘が始まる。前任は抜いてもらった軍刀を持ち、提督に突き出す。

「その軍刀を持ってどうする気かな?」

「邪魔なお前を殺す。それだけだ」

「物騒だなあく何故自分が馬鹿だと気付かない。俺を殺した所で第二、第三の俺がやつ——」

突然倒れ込む提督。

まるで糸が切れた人形のように床に伏せた。

「提督!!」

蒼龍か提督を支え、声を掛ける。

「毒が回ったようだな貴様……」

「何を……した……」

「それは自分の背中を触れば分かる」

提督の背中にはじわじわと血で赤く染まっていた。提督が前に出た時は何も無かったはずだ、何故今になって血が流れているのか。

視力が霞む、鼻血や吐血が止まらない。仮面が血で染まり、手足も麻痺してきた。

「私ガ蹴ル前二刺シタノヨ」

「そうだ。それは即効性且つじわじわと貴様の中を破壊していく毒薬だ。通常の人間であれば数秒と持たない……だが何故か貴様だけは生きている。正直焦ったよ、毒に対する耐性でもあるのか分からんが効いてくれてよかった」

毒に耐えきれずまた血を吐く。床に血の水溜まりが出来た。提督は床に膝を付け、喉を抑える。呼吸困難で息は乏しく、身体全体から震えが止まらない。

「提督！ しっかりして!!」

「やれ」

「了解」

提督を心配する飛龍達を前に離島棲鬼が襲い掛かる。咄嗟の攻撃で飛龍達は外へ殴り飛ばされた。執務室には提督と飛行場姫、前任しかいない。

「フハハハハ!! これから貴様を殺せると思うと心が躍るぞ!! 散々踏み躪られたんだ、最期まで痛めつけ、苦しませてから殺してやるよッ!!」

前任は馬乗りになり、軍刀を提督の左胸に突き刺す。そして提督の顔を何回も殴打した。時々聞こえる断末魔など気にせず、笑いながら殴りつける。

「そんな……提督!!」

今すぐにも助けたい。

だが離島棲鬼が邪魔をしてくる。

このままでは本当に提督が殺されてしまう。長門達からの連絡が来ない。通信も繋がらない。

「フハハハハ!! どうだ、死ね！ 死ね！ 死ねエ!! 一度は殴ってみたかったんだ、その生意気な顔をなア！ まだガキのてめえが軍人なんかになつてんじゃねーよ!! 何か言えよ、仮面外してやるから、堂々と晒せこのクソ生意気なガキがア!!」

殴る、殴る、殴る、殴る、殴る、殴り続ける。提督の事など気にしない、死んでいるかどうかも気にしない。満足するまで殴り続けた。足で何回も蹴り、そしてゴミのように踏み付ける。今まで恨みを込めて全力で暴力を振るった。

「ッ……………」

その状況を飛行場姫はただ見ていた。凄惨な光景に驚いて怯えていた訳では無い、ある事を見て驚いていた。

「…………ヤメロ……………」

手をグツと握り、身体を震わせる。

助けたい。

でもダメだ、手を出せば殺される。

だけど手を出さなければ殺されてしまう。

自分にそんな力は無い。

無理だ、身体が動かない。

でも——、

『飛行場姫は優しいね。いつも僕の傍で励ましてくれる』

『…………監視よ。自惚れないで』

『そっかそっか監視か…………それでもありがたいよ。僕には寄り添う仲間がいないからね』

『…………寂しいの?』

『うん、寂しい』

『…………馬鹿みたい。これだから他の奴らや人間は嫌いなものよ』

『そう言っって仲間の事を心配したり、傷ついた仲間を助けに向かったり、沈んだ仲間の為に涙を流したり、戦う為に稽古をやらせたりしてる』

『…………何故そこまで私の事を知ってるの?』

『ん? だって君は——』

——誰でも助けたいと思う、優しい子じゃないか』

——助けなきや、いけない気がした。

「ッ……ヤメロッ!!」

飛行場姫は思い立って、暴力を振るう前任を押し飛ばす。前任は壁に打ち付けられ、仰け反った。すぐに飛行場姫は軍刀を抜き、身体を持ち上げ抱きしめる。

「お願い……お願いダカラ……」

涙を流し、提督の安否を確認する。息はしていた、まだ心臓の音は聞こえる。だがいつ死ぬか分からない状態だ。飛行場姫は心から願う。

「モウ……誰も死なないで……」

その願いは誰の為なのか。それは飛行場姫にしか分からない。

「死ぬかよボケ……！」

声に反応し、苦し紛れに答える提督。肺に溜まった血を吐き、咳込む。飛行場姫に支えられ、提督は立ち上がった。身体中の血管から青い筋が浮き出ている。

「ソナナ……モウ立タナイデ！ 立ツチャ駄目!!」

血反吐を吐いても尚、提督は立ち続ける。白い軍服が血に塗れ、顔は紅く腫れている。

「クソツ！ 邪魔しやがってエエ!!」

傍に落ちていた拳銃を拾い、提督に銃口を向ける。何発か発砲し、左肩と右太腿に当たる。

提督は手に持つ拳銃を蹴り飛ばし、前任の胸倉を掴む。

そして執務室のドアまで放り投げた。テーブルに叩きつけられ、ドアを破壊する。土煙を上げ、埃が宙に舞う。

「……グツ……ハアハア……よく聞けお前ら……！」

提督は壊れた執務机に戻り、無事だったマイクを口に寄せる。今戦っている艦娘達に必死な声で呼び掛けた。

「戻るな……今は戦え……！」

『でも提督がッ!!』

「……ヒヒツ……兵器が、人を……心配してんじやねーよ……」

今までの会話を全ての艦娘達に聞かせていた。マイクをオンにした状態で艦娘達へ伝えていたのだ。提督の異常事態に鎮守府へ戻る者さえいた。長門達も戻ろうとしたが、深海棲艦が行く手を阻まれている。

「前に……言ったよなあ……俺はっゴホツゴホツ……俺は……戦え

と、言っただろ……?」

『でも!!』

「馬鹿な事を……したら死ぬ、事と思えとも……言った、はずだ……」
『……っ!!』

「これよりお前ら……いや君達に、最終命令を下す……! 全員……暴れる……! 容赦はするな!! 相手が一方的に、ひれ伏すまで!! 戦え!!」

自身の安全よりも戦況の事を優先した。

弱く震えた声で艦娘達を鼓舞する。

「よくも……やって、くれたなあ……クソ野郎……」

「シツカリシテ……」

「ハッ……こんなもん、アイツらのリンチと比べれば……ちよろい、もんだ」

壁に寄り掛かり、左胸を抑える提督。微かに笑いながら、床に座った。壁には赤い液体がこびりついている。飛行場姫が肩に触れ、提督の事を心配した。

「クソが……全員戻れ!!」

放り投げられた前任はすぐさまに立ち上がり、深海棲艦達を招集させる。今ここで飛行場姫をねじ伏せ、自分を殺せばいい物を。やはり馬鹿で無能な男だ。

「提督!!」

「おい大丈夫か!? 早く手当を!!」

「司令官!!」

長門達が二階の執務室に飛び込み、提督の元へ向かう。当たり前のように跳躍で飛んできた。加賀が■ ■ 医師を抱え、提督の様態を診ようとした。

が――、

「待ってください!!」

「いいから……退け……」

医師の応急処置を拒み、再度立ち上がる。

そしてニヤリと微笑んだ。

「さて……第三幕の大勝負と……行こうじゃないか」

48. 朧夜に甦った惨憺（さんたん）たる走馬灯

「提督の命令だよ!! 全員戦って……勝つんだよ!!」
『了解!!』

戦場では熾烈を極め、地獄とも言える戦闘が繰り広げられていた。大破状態の艦娘は計十一名、中破状態は計二十五名、小破状態は計二名、損害ありは三名。天龍は一時帰還。

対する敵は戦艦棲鬼、空母棲姫、空母水鬼、装甲空母鬼、戦艦が十体、空母が約十二体、重巡や軽巡が三十二体、駆逐艦が四十体。あまり戦況はよろしくない。

「摩耶!! 畳み掛けるよ!!」
「任せろ!!」

第二主力艦隊と第一水雷戦隊が同時攻撃を仕掛ける。まず第一水雷戦隊の一斉発射した魚雷で牽制、敵艦載機を摩耶と鈴谷がカバー。そして陸奥と比叡の全門斉射で空母水鬼を撃破した。

「クソツ……空母水鬼ガヤラレタ……!! ツハアアア!!」

空母水鬼の沈みゆく姿を見て、激昂する空母棲姫。両手を重ね、絞り出すように無数の艦載機を繰り出した。総勢七十五以上はある。しかも全部がエリート級。いくら摩耶といえど防げるかどうか分からない。

「コレガ最後ノ攻撃ダ……食ラエ——ツ!」

空母棲姫が艦載機を発艦、しようとした。

だがその手を止め、驚くような表情をしている。

「何故止めた……?」

「そんな事はどうでもいいわ、早く——」
「摩耶アア!!」

陸奥が空母棲姫に意識を配らせたその時だった。名前を叫ぶ声が陸奥の声を遮る。すると背後から摩耶が黒い巨大な腕に殴り飛ばされた。

「摩耶ツ!!」

「まさかツ!!」

背後に気配を感じる。

恐る恐る背後を確認するとそこには――、

――敗れた金剛を巨大な拳で握る戦艦棲姫がいた。

「グッ……皆主砲構えて――」「黙レ」

「グハッ!!」

我に戻った陸奥が艦隊に命令を下す。だがそうする暇もなく、戦艦棲鬼は第二主力艦隊を蹂躪する。

「まずい第二主力艦隊が崩れた!! ガングート、早く来て!! 摩耶達が本当に危ない!!」

『分かっている!!』

「空母棲姫……ヤレ……」

「言ワレナクテモツ!!」

空母棲姫は艦載機を一斉発艦。容赦なく崩れた艦隊を攻撃する。第三主力艦隊や第一水雷戦隊がすぐに援護へ向かった。第一護衛艦隊がボロボロの状態で向かって来ている。

『ごめん……止めれなかった……』

「善戦したよ皆! ありがとう! 今は早く援護を!!」

「元カラ、コウスレバ良カッタノダ……ダガシブトイ金剛ガイタモノダカラ、ツイ手間取ツテシマッタ……」

戦闘が楽し過ぎるあまり、時間を忘れかけていた。

「グッ……!!」

「何度ヤツテモ同ジダ馬鹿者!!」

巨大な拳の拘束を振りほどき、金剛は母体に殴り掛かる。だがもう一方の巨大な手に掴まれ、海面に叩きつけられた。

「何故分カラナイ!! 圧倒的ナカノ差ハ分カツテイルダロウ!! 馬鹿ナノカ才前ハ!!」

「馬鹿……だヨ……」

「ッ!？」

金剛は即座に自分を馬鹿と認めた。即答する金剛に驚く戦艦棲鬼。金剛は小さな細い手で巨大な腕を掴み、震えた声で話す。

「私は……誰もが認める……救いようの無い馬鹿……でも、その馬鹿でも……」

金剛は少しばかり笑みを見せた。

「いい所……見せたいじゃん……?」

「ッ……!! クダラナイ!! ソンナ事ヲ口走ッテルカラオ前ハ弱インダ!! 弱者ナラ弱者ラシク、部屋ノ隅デ泣イテイレバイイ!!」

何か癪に障ったのか戦艦棲鬼は金剛を海面に叩きつける。大きな水柱が立ち、打ち上げられた海水が雨となって降り注ぐ。戦艦棲鬼は少し焦りながらも摩耶に近づき、殺そうと巨大な右拳を握り締めた。

しかし――、

「邪魔ヲ……! フン……面白い。ドコマデ足搔ケルカ、我慢比べダ!!」

摩耶の前に金剛が立っていた。血だらけの姿でなお、震えもせず立ち向かっている。

「金……剛……!」

「待ってて……今、倒すカラ……!」

振り向きもせず金剛は両腕を構える。先程の戦闘で金剛は大破状態だ。次こそまともに攻撃を食らえば本当に沈んでしまう。摩耶は止めようと声を出すも、上手く喋れない。

「金剛オオオオオオオ!!」

「ッ!!」

水しぶきを上げ、戦艦棲鬼の全力攻撃に耐える金剛。巨大な二つの拳を両手で殴り、足に力を入れる。

腕の骨が折れる音がした。

腕を支える肩の骨が粉々になる痛みを感じた。

涙が滝のように出た。
衝撃が身体を巡っている。

痛い。

とても痛い。

泣き叫びたいくらい痛い。

死にたいくらい痛い。

「潰レロオオオオ!!!」

遂に力の差に抗えず、海面に叩き潰される。二つの巨大な拳が今すぐにも金剛を沈めようと必死だ。その拳を金剛は自分の拳で支える。腕が血で赤く染まり、複雑に変形しかけている。

ごめん。

皆を助けられないや。

勇気を持って立ち向かってみたけど、もう駄目みたい。
もうどこが怪我してるとか分からない。

比叡、榛名、霧島、提督、摩耶、長門、皆。

ごめんね。

不甲斐ない姉で。

仲間を見捨てるような艦娘で。

嫌われるような艦娘で。

最弱の艦娘で。

こんな姉なんて嫌いに決まってる。もういない方がいいに決まってる。

馬鹿で、間抜けで、愚かで、未熟で、単純で、何も出来ない、哀れな鉄屑。

自分の了承で妹達を解体して、新しい妹達がその話を聞いたら、一

気に仲が悪くなつて、差別して、侮蔑して、蹴つてきた。

それが当然だ。禁忌を犯したから。

最愛の妹達を自分の都合で殺して、新しい妹達がそれを聞けば、怒るのも当然だ。

私は許されない事をしたんだ。

報いは受けるべきだ。

報いは、受けるべきなんだ。

報いは――、

「えっ？ 何で解体なんてするんデスカ提督!!」

「お前の妹達は戦艦棲鬼に対する力を持つていながら見事に惨敗した。ノコノコと帰還して来やがって……いつそ沈んでもらった方が良かったんだ」

「そんなのは間違つてマス！ 即刻撤回してクダサイ!!」

「まあまあ話は続きがあるんだ落ち着け金剛。とりあえず紅茶を飲んで落ち着いてくれ」

出された紅茶を飲まされ、落ち着き出す金剛。確かに話の続きを聞かなければいけない。解体はまだ先だ、何とか言つて食い止める必要がある。

「んで、続きつてのは何デスカ？」

「ああ話の続きだが、解体とは言っているがもし君が今日の夜に来てくれるなら考えてやらん事もない」

「……夜枷、デスカ。私が行けば解体は見直してくれるノ？」

「ああ考えよう。どうだ？ いい条件だと思わないか？」

「……分かりマシタ。受け入れるネ」

そして夜になり、前任の部屋に向かう。部屋に入ると窓際のテーブルと椅子に前任は紅茶を飲みながら待っていた。

「いやー金剛。よく来てくれたよ」

金剛はさっさと始めようと服を脱ごうとする。しかし――、

「いやいや待ってくれ。すぐじゃない、夜は長いんだ。まずは妹達の話し合いの為にちよつとしたティーパーティーでもやろうじゃないか」

「……分かりマシタ」

窓の近くに用意されたテーブルと紅茶セット。妹達の話し合いと聞いて、一応話を聞く事にした。紅茶セットは自分の物を使う事を提案、前任は快く受け入れてくれた。

話の内容は驚くべき事にどうすれば妹達が強くなれるか、といったものだった。金剛は一生懸命に答えた。最愛の妹達を生き永らえさせる為に様々な提案をした。だが途中で――、

「うっ……」

「! どうした金剛?」

「いや眠気が……」

やはり紅茶に何か仕掛けていた。急激に眠気が襲ってきた。何故だ、紅茶は入れ替えたはずだ。自分の物に睡眠薬など入れるはずがない。

何故――、

その場で金剛は倒れてしまった。目が覚めるまでの記憶は無い。だがハッキリとされた感覚がある。下に何か液体が落ちていくのが分かった。そして目を覚ました金剛は――、

「金剛、目覚めはどうかい?」

「いえ……まあ色々……」

「そうか。じゃあ話し合いの件だが……妹達は解体でいいよな?」

朝を迎え、起き上がる金剛。いつの間にか全裸でタオルをかけられていた。軍服を来た提督が金剛を呼ぶ。解体でいいか、と質問した。普通なら話が違うと否定するだろう。

だが金剛は――、

「はい！　お願いしマス!!」

――狂ってしまった。

「何故ですかお姉様!!　私達を助けると……約束したじゃないですッやめて!」

「目を覚ましてくださいお姉様!　お姉様は操られています!!」

「そんな、金剛お姉様……違いますよね……?　比叡達を見捨てたり……しないですよね……?」

縄で拘束された比叡達は解体所へ、飛龍や蒼龍に連れていかれる。提督と金剛、憲兵達に囲まれながら見送られた。そこに比叡が金剛に縋り付く。だが金剛は悪魔の言葉を言い放った。

「悪いけど使えない鉄屑は解体行きなノ。バイバイ」

別れの挨拶を軽々とする金剛。手を振り、その顔は笑っていた。それと同時に涙を流していた。

「そんな……!」

「っ……やらせてたまるもんですかッ!!」

絶望する比叡、霧島。最早抵抗する力を無くし、解体執行部屋の中に入れられていく。

だが榛名は違った。

狂った金剛を前に榛名は事前に持っていた刃物で縄を解く。拘束しようとする飛龍と蒼龍を殴り飛ばし、すぐさま外へ向かった。出来れば比叡や霧島も助けたい。だが今はそれが出来ない。抑えようと

する憲兵達を薙ぎ払い、外へ逃げ出す。慌てて提督は金剛と憲兵を捕獲に向かわせた。

「こんなのは……間違ってます……!」

金剛や憲兵から逃れる為、鎮守府外の森へ姿を隠す。ガサガサと憲兵が探しているのが聞こえた。もうじき見つかってしまう。逃げた方が懸命だ。

「恐らくお姉様は提督に操られている……その操り方さえ知れば……!」

「何してるノ?」

「ヒツ……お姉様っ!」

金剛に首を掴まれ、捕まってしまう。艦装展開の金剛に立ち向かう術は無い。もう終わりだ、そう思えた。

「何故……」

榛名の頬に一雫の水が落ちる。その水は次第に量を増し、榛名の頬を濡らした。何故か金剛は泣いていた。

「何故……死なせたくないって、思うノ?」

「金剛お姉様……!」

「嫌だ……皆を死なせたくない……! やめて私は、違う!」
暴れ狂う金剛。

両手で頭を抱え、叫んだ。自分を殴り、頭を掻きむしる。

「榛名ッ!!」

「は、はい……!」

「お願いダカラ……私に殺させないデ……」

金剛は涙ながらに訴えた。このまま妹達を殺してしまう自分を晒したくないと榛名に逃げる事を薦める。息は上がり、腕が榛名を捕まえようと必死だ。いつ襲いに来るかも分からない。

「……いつか……助けに来ます……!!」

榛名は蹲る金剛を置いていき、一人森の中へ消えていった。

49. 「不屈」

あの日榛名は逃走後、行方不明。比叡や霧島は洗脳された金剛により解体。自らの手で妹達を死に追いやった。

目を覚ました時にはもう遅かった。

部屋には自分一人だけ、思い出の写真や物は全て破壊され、部屋で金剛は泣き叫んだ。あの日の事は鮮明に覚えている。洗脳された自分は榛名を逃がし、妹達を解体させ、自ら微笑んでいた。

断末魔が今でも聞こえる。

自分に縋る妹達が呆気なく押し潰されていく様を。

肉片と化した妹達を。

この目で記憶してしまった。

死にたい。

とてつもなく死にたい。

だが手錠と足枷がそれをさせてくれない。口轡もされ、舌も噛めな
い。

泣いた。涙が枯れるまで泣いた。

金剛は一週間、部屋に閉じこもった。

やがて数週間が経ち、金剛が鎮守府内で呼び出された。勝手に部屋へ押し入れられ、憲兵達に連れていかれる。執務室に入った金剛は手足の拘束、口轡から解放された。瞼の下にクマが出来ており、目は虚ろ。精神状態は崩壊寸前だった。

前任に強制的で入渠させられた。数週間ぶりの風呂だ、だが金剛は何も浮かばない。表情は一切顔に出る事は無く、無感情のまま入渠を終わらせた。用意された正装を身にまとい、再び執務室に入る。

「あ、お姉様だ!!」

「金剛お姉様!!」

「お姉様がいてくれて良かったわ」

目の前にはかつて自分が逃がして殺した妹達が。突然の事に理解が追いつかない。何故妹達を呼んだのか意図が不明過ぎる。前任から戦力強化の為だと言われた。

あまりにも理不尽だった。だが感情を失った金剛は妹達を前に何も表せなかった。

金剛は妹達の教育艦として任命された。感情の無い金剛に少しは疑問を持つもそんな事などは気にせず、背中についていった。

最初は少しだけ良かったのかもしれない。元気そうな妹達を見て、何も表せる事は出来なくても少しだけ良いと思ってしまう。感情が無くて、どこかで夢を見てしまう。

だがその思いが金剛の事をより苦しめる。あの笑顔や仕草、言葉までもが心を苦しませた。

この鎮守府の闇を、自らの手で妹達を解体した罪を、知ってほしくなかった。このまま平和なままでいてほしかった。

守りたいと思った。

罪を償いたいだけかもしれない、それでも金剛は次こそは守りたいと思った。かつての妹達の様にならない為に、厳しく鍛え上げた。時には反感も買われたが、それでも妹達はついていく。

いつしか金剛のように妹達は改二になり、大きな戦力として迎え入れられた。

心なしか、少しだけ嬉しかった。これなら解体されるような事もされない。妹達ならどんな敵でも倒してみせる。そう思っただけで出るはずのない涙を流し、妹達に抱きつかれた。

だがすぐにその感情は消え去る。

「近寄らないでいただけますか?」

改二に改装され、数日経ったある夕方の頃だった。突然金剛を蹴

り、ゴミのような扱いをする妹達。

原因は簡単だった。

前任が妹達に金剛の愚行を教え込み、その後に洗脳を施していたのだ。まるで正気のある金剛が自分達を殺したかの様に伝えられ、前任が操っていた事は何一つ伝えられていなかった。

金剛は上手く利用されていたのだ。妹達の練度強化の為に教育艦を任せ、金剛を差別させる事で自分達は強いんだと思わせ続ける為に。全てはこれを実行させる為に金剛は利用された。

だが金剛は不思議と驚かなかった。元々感情を失っていた事もあがるが、それ以前に自分への報いとして受け入れていた。のうのうと前任に操られた自分が悪い、妹達を殺した自分が悪いんだと思い込み続けた。

それからの日々は地獄だった。常日頃にストレス発散としての暴行は当たり前、イタズラに服を汚され、嫌がらせに食事に生ゴミを入れられたり、面白半分で爪の間に釘を入れたり、足の指を丁寧に一本ずつ折られたりと凄惨だった。誰も手を出せず、ただ見るだけ。日に日に妹達の蛮行はエスカレートしていった。

それでも自分は報いだと信じて受け入れた。今まで自分が犯してきた罪の代償として。

前任が夜逃げした後も、妹達の蛮行は止まる事を知らない。鈴谷や加賀の様に何故か目を覚ます艦娘がいた。もしそのように妹達も目を覚ますのかと思ひ、■■■に言われて信じ込んだがそれは元々無理だった。あの話を聞いて嫌う様になったのだ、提督の言う通り、例え洗脳から解放されたとしても当然妹達は嫌うだろう。

結局自分は利用されるまま利用されるだけの無能な鉄屑だ。妹達を見殺しにして、新しい妹達を育てた結果、更に虐められ、差別意識を継続させる為だけの道具。

これは報いなんだ。受けるべき罰なんだ。

そう思い続けた。自分が身をもって反省すればいつか必ず何とかなる。

馬鹿正直に思い込み、今まで生き抜いてきた。

きつと比叡達は自分が前任に操られていた事なんて知る由もないだろう。言ったところで言い訳だと思つて聞かないはずだ。

前任に操られていた、なんて言い訳を信じる馬鹿なんていない。

こんな惨めで愚かな自分を助けてくれる妹達はいない。

自業自得なのだから仕方ない。

だって私は――、

――死んでも当然だから。

「ん？ 何ダ？」

一つの砲撃が戦艦棲鬼の巨大な腕に着弾した。痛くも痒くもない攻撃に戦艦棲鬼は物が当たったような感覚で確かめる。

「や、やめろオオ!!」

「……ひ、比叡お姉様……!?!」

砲撃したのは比叡だ。目に涙を浮かべ、必死に叫んでいた。壊れ掛の艦装で、ぐにやぐにやに曲がった砲身で、最後の一撃と思える攻撃をやっていた。

比叡は迫真の声で訴える。

「私は金剛お姉様が……かつての私達を見殺しにする人には、見えません!!」

自然と手が震える。今まで自分は何をしていたのか、今自分が何をしているかちゃんと理解しているからこそその震え。周辺の仲間の反感を買い、戦闘に関係の無い言葉を並べ、空気を変えてしまった。

震える手をもう一方の手で抑える。涙を零し、話を続けた。

「だって……前任に操られていたって聞いたから……あの時私を、庇ったから……!」

それは提督が着任して、差別意識の正体を耳にした時だった。洗脳、そんな言葉など初めて聞いた。そんなはずが無い、何故なら過去の姉の話を受けば誰だって憎悪を持つからだ。かつての自分達を見殺しにした。そんな事を聞いて、信じられる訳が無い。比叡の心の中に不安の種が出てしまった。嘘だ、そんな訳ないと自分を言い聞かせて。

だが心の奥のどこかでその不安の種は芽を出した。今までの姉の行動を見て、本当にそう思える確信が掴めるのだろうか。自分達の一方向的な虐めに黙って耐え続け、すれ違いざまに謝って、自分達に何一つ反抗してこないその姿を見て姉が、かつての自分達を見殺しにした悪逆非道の鉄屑に思えるのだろうか。

本当は違うんじゃないのか。

聞けばあの男は自分達が操られているという。戦闘意欲促進剤とかいう訳の分からない物を飲まされ、自分達を操っていた。それこそ信じられなかった、でも当たる節があるのも事実だった。確かに前任に何かを飲まされた記憶が今でも残っている。不安の芽は成長し、蕾が出来ていく。

だからこそ確信したのかもしれない。今まで自分達を操っていた

と言うのなら、自分達を見殺しにした姉が操られていた可能性もあるからだ。

そう思っていた時、姉が演習に参加する日の前日。部屋にある手紙が置いてあった。妹達のお手書きか、そう思ってた開くとそこには衝撃の内容が書かれていた。

『姉は前任の洗脳によって操られ、姉妹を解体してしまった。もし貴方達に心が残っているのなら今すぐにも暴行をやめてほしい』

最初は嘘の様に思えた。

でも嘘だと思いたくなかった。

姉は確かにかつての自分達を解体、見殺しにした。

だがそれはかつての自分達だ。姉は今の自分達に何か酷い事をしたのだろうか。いいや何もしていない。むしろ教えられる事ばかりだった。自分達を改二まで厳しく育て上げ、改装時は感情は無くとも自分の事のように抱きしめてくれた。

そんな聖母の様な姉が――、

「比叡……」

——そんな姉が私達を見殺しにする訳が無い。

「私は!!.. それでも差別に加担してしまいました!! 何を言っても信じられないかもしれませんけど!! 私は……!! 金剛お姉様を、心の底から尊敬しています!!」

比叡は堂々と金剛へ伝わる様に叫んだ。自分が犯した過ちと尊敬の意を赤裸々に伝え、差別の意識を完全に無くした。

周囲の艦娘達は驚いていた。今まで差別してきた艦娘として恐れられていた比叡が初めて差別された側の艦娘である姉の金剛に初めて話したのだ。鈴谷や加賀のように洗脳から目覚めた者がまた一人

現れた。

「何ヲ訳ノ分カラナイ事ヲ……戦闘中ニ邪魔トハココノ連中ハ横ヤリガ好キナノカ……ソレトモ死ニタガリカ……ドチラニセヨ全員金剛ノヨウニ沈メテ……ン?」

真下で違和感を感じる。上へ上へと押し上げられるこの感覚。まさかと思ひ、無理矢理力を入れる。艤装の巨大な拳に押し潰されようとも、その力は抵抗を増していった。

「沈……ませて……ッ!!」

「何ダコノ力ハ!? ドンドン大キク……!!」

海面と巨大な拳との狭間である艦娘が抗っていた。両足だけで身体を持ち上げ、巨大な拳を両手で押し上げる。衝撃で周囲にいくつもの水柱が上がった。

「たまるかアアアア!!」

瀕死の金剛が血を吐き、吼えながら、折れた両腕で巨大な拳を持ち上げる。次第に立ち上がり、血塗れの姿を晒した。水しぶきが止まらない、衝撃波が広がる。

「ナニイイ!!」

予想外の馬鹿力に困惑する戦艦棲鬼。圧倒的な威力を誇る艤装の巨大な拳が両腕骨折の瀕死寸前の艦娘にまんまと持ち上げられたのだ。ここに来て火事場の馬鹿力と言うべきか。

金剛は巨大な拳を両方に放り投げる。

母体が丸見えになった。ガードする暇も与えない。

すぐさま母体の前まで近づき、頬に右拳の一撃を食らわせた。

「どわりやアアアアアア!!」

雄叫びを上げ、戦艦棲鬼を殴り飛ばす。

味わった事の無い殴打に戦艦棲鬼は怯み、何百メートル先かで留まった。頭がクラクラする、視界もあまり見えない。思わず頭を抱え、膝をついた。

そして金剛は再度叫ぶ。

「……私は死なない!!」

決して壊れない。

「どんな事があっても!!」

決して壊させはしない。

「決して諦めない!!」

誰にも壊せやしない。

「例え逆境の最中だろうと!!」

不屈を意味する金剛の名を――、

「立ち向かい続ける!!」

――背負う者として。

「私は……!! 不屈だアアア!!!」

50. 朧月夜に映る、強く凜々しき月影に

『金剛、もし君が挫けそうになった時、こう唱え続けてほしい』
『私は不屈だ、ってね……ってやめろ■■!』

『——確かにカツコ悪いね……でも、僕は——』

『——君には諦めてほしくないんだ』

誰もが注目していた。

ダイヤモンドの様な輝きを放つ姿を。

誰もが圧倒されていた。

その凜々しく気高き艦娘の姿を。

金剛が咆哮を上げる。

その咆哮は海域に響き渡り、この場にいる生きとし生けるものへの
絶望と希望の鐘として鳴らした。

他の艦娘達も雄叫びをあげ、戦闘意欲を高める。そして再び戦闘が
始まった。

「何ダ、何が起コツタ、奴ニ何が……」

金剛は満身創痕の姿でゆっくりと戦艦棲鬼に接近する。光を纏い、
風が周りを漂う。金剛までの距離は約五百六十二メートル。

「フザケルナツ!! ソレデ強クナツタツモリカツ!!」

身体中から危険信号が発せられた。この金剛は将来最悪の敵にな

る。ここで倒さねば未来は無い。

戦艦棲鬼は照準を定め、全門斉射。

薄らぐ光る砲弾の雨は金剛に直進。

直撃するかに思えた。だが――、

「何ッッ!!?!」

今、何が起きた。

砲弾が一齐に金剛を避けるように逸れた？

そんな事など有り得ない。有り得るはずがない！

確かに狙ったはずだ、それなのに何故砲撃が全て当たっていない!!

変な重力場でも発生しているのか!?

「ッ……」

金剛は身を屈め、両手を海面につける。まるでリレーのクラウチングスタートの様な姿勢になった。

そして急発進。

あまりの速さに水柱が遅れて上がった。

「速イッ……!! ダガ、マダマダアア!!」

急加速する金剛に迎撃する戦艦棲鬼。頭をフルで考え、移動地点や速度計算などを即座に処理。出来る限りの砲撃で金剛を撃ち落とそうとした。

砲弾の雨を回避し続ける。

走行速度は衰えず、更に加速。

水柱を回避、迂回、突破していく。

金剛の背後では巨大な水しぶきが上がっていた。ソニックブームを発生させながら接近してくる。

「(マズイ、近ヅカレタ!!)」

いつの間にか目の前まで来ている。

だが接近戦ではこちらが有利だ。

咆哮を上げながら艦装の巨大な腕を思い切り横に振る。至近距離

からの近接攻撃。当たらない訳が無い。

だが金剛は跳躍して回避。

高く飛び越え、空中に逆さまの状態で砲撃する。

戦艦棲鬼の背後に着弾、少しばかりダメージを受けた。

「グッ……!!」

その後金剛は綺麗に着地。

しかし着地狩りを狙った戦艦棲鬼はすかさず砲撃する。

金剛の地点で大きな水柱が上がった。

水柱の中から金剛が姿を現す。

また戦艦棲鬼に接近。

背後に周り、右拳で母体を殴った。

本物の腕で受け止め、痛みを噛み締める戦艦棲鬼。

もう一方の艀装の巨大な拳で金剛を殴る。

それを金剛は片手で受け止めた。

しかし戦艦棲鬼は受け止めた金剛の片手を握る。母体から離れさ

せて海面に叩きつけた。

空中に浮かぶ金剛。受身を取れず、吐血する。

再度戦艦棲鬼は金剛を殴り潰す。

金剛は両腕で受け止め、海面に何とか踏ん張る。

衝撃で海水が空に舞い、衝撃波が海水を斬った。

「調子ニイ……乗ルナアアア!!」

空いた艀装の巨大な拳で殴り潰した。

だが金剛はまた片手で受け止める。

隙を見逃さない金剛は受け止めたと同時に砲撃。母体に直撃する。

思わず怯みそうになり、吐血した戦艦棲鬼。

しかし激痛を堪え、戦艦棲鬼は金剛の身体を鷲掴み。

再度海面に叩きつけ、空の彼方へ殴り飛ばした。

空中に浮遊する金剛。雲の位置まで飛ばされたようだ。血のアーチを作り、身体の正面を雲夜空に向けている。

「金剛お姉様!!」

「金剛!!」

皆が声を掛けた。

少し強くなっているとはいえ先程の戦闘でのダメージは計り知れない。不屈の金剛と言えど意識を失ってもおかしくはないのだ。

だが金剛はすぐ意識を取り戻す。

そして――、

「何ッ!？」

雲夜空に向かって砲撃、砲撃、砲撃。

砲撃の反動で軌道を修正、空中を移動していく。そのまま重力の落下で加速し、戦艦棲鬼の元へ向かった。

途中航空戦を繰り返している敵艦載機をついでに破壊し、爆発の衝撃で更に加速する。

そして身体を回転させ、右腕を引く。左手を前に出し、殴る体勢に入った。

血が流れる必死な顔で咆哮を上げる金剛。

戦艦棲鬼も迎撃体勢、殴る動作に入った。

両者共に叫び、そして衝突。

――鎮守府執務室

「ゴホッゴホッ……さあ話し合いに戻るとしよう」

一方で鎮守府の執務室内では膠着状態が続いていた。艦娘と深海棲艦が艤装を構えている。一部の軽空母と空母はおらず、木曾が天龍を抱えている状況だ。明石は腕の止血後に縄で拘束、スイッチは破壊

され、安全な場所にて眠っている。倉庫の鎮火はまだ済んでおらず、燃え盛る炎が執務室の中を照らす。

それさえ気にせぬ提督と前任がそれぞれ前に出た。

「お前の企みも、分かった……洗脳の仕組みも、理解出来た。後は……鍵の内容だけだな」

「何て生命力の高い野郎だよ、そりゃ手こずるわけだ」

「こちらとしては……お前の無能さに敬意を表したいくらいだよ。こうやってまた、集めてくれた事に感謝している」

前任が危機感を察し、外で戦っている深海棲艦達を集合させなければ提督は本当に死亡していた可能性があった。今は医師の懸命な治療により、何とか生命を繋げているが口はまだ達者のようだ。動かないでと怒鳴られるも提督は気にしない。

「でもここにダラダラと居ていいのか？　じきに大規模の警察や憲兵隊、艦隊がここに来るぞ？　お前を捕まえようと己の昇級目当てに躍起な連中がゴロゴロという」

「その前に澄ませばいい話だ。少しトラブルはあったが作戦に支障は無い。むしろ予想内の事だ……そのゴミ共もいずれは片付けてやる」

前任が以前の部下である長門達を睨む。長門達も前任を睨み返した。復讐心は更に燃え滾る。

「黙れ、もう貴様に慈悲は無い。ここで捕まえて復讐する。それだけだ」

「フン……所詮は俺に操られていた人形であり兵器なんだよ。兵器が人並みの感情を得ていい気になるなよ鉄屑が」

「その鉄屑にお前は射抜かれる事を知らないの？　言っとくけど簡単に死ねると思ったら大間違いだからね」

「おーおー鉄屑が良く騒ぐ。このクソみたいな男に唆されたか。こいつが今までどんな事をやってきたか知らない癖に呑気に慕っているのか？」

確かに提督の事は何も知らない。

階級は中将、底を知らない権力と軍事力、徹底的な調査力など果て

しない力を有している。一方で弱点はあるもののそれを他人に見せようとはしない。そして理不尽な言動に相手を罵り続け、屁理屈を並べる捻くれ者だ。

こんな人を慕う者などいないだろう。

「別に慕ってなんかいないですよ。ただ私達の目的を果たす為に手伝ってくれる人です。信じてる訳でもありませんし、優しい人だとは思ってません。ただの駒に過ぎませんよ……多分」

「生憎俺もコイツらを利用してる所だね。折角だから駒になってあげようとなんの優しい心遣いでやってあげてるのだよ。そうとも知らずにコイツらが駒とか出しゃばって調子に乗っているだけだ。勘違いも甚だしいところだ、このクソガキのヒステリックアングリーバードで氷河期馬鹿トカゲのポンコツ兵器共!!」

「それを言うなら提督だって頭のおかしい滅らさず口のアホ丸出し白髪クソジジイでしょうが!!」

「という訳で俺らはお前に復讐したい限りだから全力で抗う所存だよ。覚悟したまごほつごほつ」

「だから動くなって言ったでしょ!!」

「あーあーあーあー……」

喋り過ぎて喉に血が流れ、咳込む提督。医師に怒号を投げられ、艦娘達に心配させられる。それでも提督は瀕死状態、軍刀で刺された左胸の傷は治りかけているが毒はまだ身体を巡っていた。前任に何度も顔を殴られ、各所が腫れているが仮面で隠れている。

「何仲良くしてるんだか……兵器に情が移ったか」

「いいや、全くしてないんだなこれが。コイツらが勝手に馴れ初めてくるだけだ、俺は寧ろ迷惑している」

「鉄屑がクズに懐くのも仕方ないか」

「お前に艦娘達を屑だと言う権利は無いぞ ■■少尉!!」
「ッ!？」

提督が突然大声で怒鳴る。表情の豹変ぶりに思わず前任は驚いた。場の空気が一気に変わり、提督が話し続ける。

「……お前の言う通り、コイツらは何も出来なかった鉄屑だ。お前が

課した様々な制度によって友情は引き裂かれ、仲間との軋轢が絶えず、感情や大切な者を失った。この鎮守府の環境は最悪だった、最早放棄する為に全ての艦娘を旧式解体する案さえ出る程だった」

旧式解体、つまりは艦娘の処刑、死を意味する。もし提督が来なければここの艦娘達は今、この世に存在していない。初めて聞いた情報に艦娘達が揺らいだ。

「……賢明だな」

「だがその鎮守府の状況を見て面白そうと思った俺が直々にここへ赴いた。予想以上にこの鎮守府は廃れており、矯正不可能と言われてもおかしくなかった。だから俺は考えた……野望を持たせよう」と

「野望?」

「そう、野望だ。どうせコイツらは欲すらない鉄屑だ、だったらその欲を掻き出すしかこの先、生き残る道は無い。欲は万物を動かす、最高の材料なんだ」

皆を安心させる為、前任に復讐する為、自分達の強さを証明する為、己の愚かさを証明する為。皆は欲の為に動いていた。それぞれ欲しいと思う何かを求める為、身体を動かし、その何かを得た。

「そしてその欲に駆り回され、立ち上がったのがこの艦娘達だ。コイツらはまだポンコツだが、少なくとも鉄屑ではない。私利私欲の為にこの鎮守府を捨てたお前がコイツらを鉄屑という権利は無い」

「お前がそれを一方的に決めつけるか。そういうのは傲慢だと知らないのか? なあ?」

「傲慢の塊の様な奴がよく言えたもんだな、クソ無能が」

前任が提督の左頬を殴る。

提督は前任の腹を蹴り倒した。

怯んだ提督は艦娘達に支えられる。盛大に血を吐き、軍服が赤く染まっていく。

「提督!!」

「提督ガ……ッ!」

「ゴホッゴホッ……あーやっぱり毒が効いてんなあ……」

「チツ……ふざけた仮面しやがって……!」

お互い怯み、再度立ち上がる。提督は顔面を殴られた事により仮面が崩壊。仮面は粉々になり、初めて前任と深海棲艦に顔を見せる。

「……何デ……ココニ……!」

「嘘ダ……アリエナイ!!」

「ヤツパリ……ソウ、ナノカ……」

その顔を見て深海棲艦は驚いていた。あまりにも有り得ない事に皆、動揺している。提督の苦渋な表情が真剣な表情に変わり、息が続くまで話した。

「……コイツらは何の為に戦ってるのか知ってるか？ 国の為？ 人の為？ 仲間の為？ 理由は様々だ……」

ゆっくりと提督は立ち上がる。医師や艦娘達の差し伸べた手を振り解き、前任を睨んだ。身体は震えながらもゆっくりと動き始める。

「生物はいずれも何かの為に戦っている。国の為や人の為と唱え続け、戦い続けたらいつの間にか己自身の為に戦ってた奴もいる。戦ってきた中で何かを知り、記憶に植え付けられ、何かの為と言っていた」

戦闘は何かの為と言う原動力から動いている。何かを失い、何かを求め、何かを得る。ごく単純で当たり前の行動だ。痛い目に合っただけから気付かない事もある。

「今までお前に虐げられたから苦しい思いや悲しい思いを全て経験している。だから色んな思いを持つてる……!」

「ほざけ……」

前任も軍服を整え、ゆっくりと前に出る。口から僅かに血が出ている。提督のあの蹴りで多大なダメージを受けていた前任。意識が飛びそうだった。右腕を引く提督と前任。

再度殴るつもりだ。

「それぞれ思いがあるからこそ……! 海で戦ってるアイツらやここに居るコイツらは……! 必死になって頑張ってたんだよ!!」

「黙れ……」

初めて感情論で言い放つ。前任以外の深海棲艦、艦娘達が聞き入っていた。

提督は自身の銃で貫いた右手を握り締める。包帯が赤く染まり、血

が漏れた。互いに左足を踏み込み、殴る体勢に入る。

「それを何も知らないお前が……!!」

「黙れエエエ!!」

前任が怒りに身を任せ、先に殴った。だが提督は毒で重く感じる身体を動かして回避。左に身体を大きく反る。

そして――、

「彼女達の尊厳を……踏み躪るなよツツ!!!」

血が流れ出る右拳を思い切り振り下ろし、全力で前任を床に叩き殴った。

51. 星月夜に戦う互いの信念に祝福を

深海棲艦の戦闘から約三時間が経過。

戦艦棲鬼と金剛の戦闘はそろそろ終盤に近付いていた。血を流し、咆哮を上げ、拳を握る。周辺の事など一切気にせず、ただただ戦っていた。

攻撃を受けた摩耶、陸奥は第一水雷戦隊によって救助。左脇腹を殴られた摩耶は左腕の複雑骨折、肋骨の数本骨折と重症かつ大破状態。陸奥は正面から殴打を受け、両前腕の骨折、右肩の脱臼とこちらも重症かつ大破状態。

第三主力艦隊も到着し、その他の雑魚と空母棲姫を相手にしている。第二主力艦隊は一時後退。戦況は徐々に傾いてきた。

「ソロソロ死ネヨ……何ナンダ、オ前ハア!!」

「グツ……!!」

艦装の巨大な拳を片手で受け止めた金剛。あれだけ攻撃を食らっていないが一向に死ぬ気がしない。何度殴っても、何度砲撃しても立ち上がってくる。不死身とも思えるその姿を不気味に感じた。

「アレダメノダメージデ何故戦エル!? アマリニモ馬鹿過ギルダロ!!」

もう一方の巨大な腕で正面から殴る。

金剛は片手でまた受け止めた。少々衝撃で後退るも踏みとどまる。

「死ぬ訳には……いかない……!」

「ツ!!」

「私がこんな所で死ぬ訳には……いかないんだ!!」

徐々に巨大な拳が押されていく。

再度力を入れても僅かながらに反抗してきた。

「私は……少し耐久力があるだけの……大馬鹿ネ……ツ!!」

金剛は巨大な拳を再度放り投げる。

しかしそこで戦艦棲鬼が零距离で砲撃。

金剛は撃ち飛ばされ、海面を引き摺った。膝を着き、血を吐く。

戦闘による興奮で一時的に身体能力が向上しているとはいえダ

メージは積み重なっている。金剛であろうと耐え切れる訳ではなかった。意識は朦朧としており、片目は見えていない。

「金剛、大丈夫!？」

「川……内……」

「酷い傷……後は私達に任せて!! 鈴谷!!」

第一護衛部隊と第二水雷戦隊が援護に来てくれた。第二主力艦隊の鈴谷も駆けつけてくれたようだ。

正直な所、もう戦いたくはない。戦艦棲鬼のダメージに比べ、こちらは瀕死状態。戦えているのが不思議なくらいな程だ。

それでも金剛の中では戦艦棲鬼を自分の手で倒さなければならぬという使命があった。その使命で今の金剛は動いている。仲間の為に、姉妹の為に。

だがもう手足共に身体が限界だと嘆いていた。このまま戦闘が続けば本当に死ぬかもしれない。川内達に任せれば、痛い目に会わずに済む。だが――、

『お前に艦娘達を屑だと言う権利は無いぞ ■■少尉!!』

提督の声が聞こえた。恐らくまた自分達に聞こえるようにしたのだろう。前任と会話をしているのが分かる。

提督がまるで自分達の事を指しているように語り出した。何かの為に生物は戦うと口論を述べる。

――何かの為。

――自分は何の為に戦っているのか。

――姉妹の為、仲間の為、理由がありすぎて分からない。

――……でもそれで良いんだろうな。

——理由があればある程、私は戦える。前を向ける。

「ウグツ……!!」

——骨が折れた。物凄く痛い。泣きたい程痛い。

——もう無理だ。

——もう静かにしていたい。

——もう無理をしなくていい。

——私は今までよくやった。褒められるほど戦った。

——もう戦わなくていい……

『今までお前に虐げられたから苦しい思いや悲しい思いを全て経験している。だから色んな思いを持つてる……!!』

——……!!

金剛は立ち上がる。骨が軋み、血が傷から流れ出ても。必死に歯を食いしばり、瞼近くの血を腕で拭う。二本の足で重い身体を支え、空気を掴むように両手をグツと握る。

僅かな呼吸で酸素を取り込み、雄叫びを上げる。

『それぞれ思いがあるからこそ……!! 海で戦ってるアイツらやここに居るコイツらは……!! 必死になって頑張ってるんだよ!!』

——提督も頑張ってるんだ。

「ウオオオオアアア!!」

——こんな所で挫ける訳にはいかない。

雄叫びを上げた後に戦艦棲鬼の位置を確認。

直後に急発進、急加速。少々転びながらも海面を滑っていく。

水しぶきを上げながら、方向を定め、駆け抜ける。既に方向感覚は失っていた。だが金剛は火事場の馬鹿力と勘で真っ直ぐ直進。

『それを何も知らないお前が……!!』

「何ッ!？」

——自分が決めた大事な事だから。

「へへっ……捕まえろ……!」

一気に母体まで接近。母体に抱き着き、足で腕の自由を奪う。両手で母体の頭を掴んだ。

そしてニヤリと微笑む。

『彼女達の尊厳を……』

「マサカツ!？」

「うああああアアア!!!」

『踏み躪るなよ!!!』

金剛の渾身の頭突きが炸裂。

鉄と鉄が衝突するような音が響き渡る。

衝撃波が広がり、水柱が上がった。

「ガハッ……!!」

「ッ……!!」

戦艦棲鬼はフラフラと立ちくらみ、後退する。頭を抱え、血を吐いた。頭から大量の血を流し、海面に膝を着く。

衝撃で頭が揺れ、意識を失いかけた。まだ意識は保っているが、いつ失いかけてもおかしくない。

立ち上がれない。痛くて痛くて立ち上がれない。前を向く事が出来ない。

「ッ……!?!」

誰かの足が見えた。誰だなんて考えなくても容易に判断出来る。赤い液体が少しずつ海に溶けていく。

「ハア……ハア……」

「金剛……ッ!!」

金剛が目の前で立っている。恐らく次の攻撃を仕掛けるつもりだ。早く立ち上がらなければならぬ。

「私ガ……私ガ……オ前ナンカニ……ヤラレルハズガナインダアアア!!!」

「ッ!!」

母体の細長い右腕で金剛に殴り掛かる。金剛も壊れかけの右腕で顔を殴った。お互い殴り飛ばされ、後退する。

「私ハ……私ハ……強インダ……強インダ……アノ人ノ為ニ、強クナラナキヤ……」

自分に念じるよう唱える戦艦棲鬼。必死に自らの腕で起き上がり、重い艀装に支えられる。まだ視界が霞み、歪む。これだけの負傷を負ったのは久々だった。今まで傷を負う事すらなかった。

「強クナラナキヤイケナインダ……!!」

『君が噂の最強の深海棲艦かあ！ 凄いな、艀装がとても逞しいよ！』

褒めてくれた。

敵味方共に怯えられたその艤装と姿で戦艦棲姫は孤独だった。別に寂しかった訳では無い。ただどこかで頼れる存在が欲しかった。心の隙間を埋めてくれる存在が欲しかった。その存在が唯一褒めてくれたが今は亡きあの人。警戒していた自分でも直ぐにその心は解けてしまった。

『君はとても強いからね。その強さで人類に目に物見せてやるんだ！一緒に強くなろう！』

自分が強いからあの方は共に居てくれる。

強いから一緒にいる。強いから頑張ってくれる。

もっと強くなっていい所を見せれば、もっと興味を示してくれる。

今の自分がいるのも全て自分の強さとあの人のおかげだった。

だから強くならなきゃならない。

強くならなきゃあの方は戻ってこない。

自分が最強の存在になって世界に広まればどこかであの方は気付いてくれる。

きっと何かが起きるはず。

そう思っって各海域を暴れ回った。

敵艦隊を薙ぎ払い、輸送船を破壊し、巨大な偵察機を撃ち落とした。

どこかであの方が居ると信じて。

「死ンデ……タマルカアアアア!!!」

咆哮を上げ、立ち上がる戦艦棲鬼。赤黒い稲妻が周辺に発生。空気が揺れ、海面がざわめく。風を纏いながら、ゆっくりと構えた。

「起き上がった!? まだ体力が残ってるというの!?!」

「まずいな……更にパワーアップしたと見える。例え我々でも倒せるかどうか分からんぞ……アレは」

戦艦棲鬼のおぞましく、恐怖を戦慄させる姿に圧倒された。金剛に致命傷を負わせられたのにも関わらず、艀装を展開し、近接戦闘体勢に入る。

「金剛……!! 才前ノ気持チガ漸ク理解出来タ様ナ気ガスル……才互イ、死又訳ニハイカナイヨウダ……!!」

「グツ……!」

「ソレゾレ満身創痕、戦ウカハ残ツテイルカドウカスラ分カラナイ……! ダガ金剛ハ……私ヲ殺シタイノダロウ?」

金剛も警戒し、再度構える。とはいえ既に身体は限界を迎えていた。到底戦えるような相手では無い。たださえ一方的に蹂躪された位だ。パワーアップしたとなれば戦況は絶望的と思える。だが金剛は引かなかった。

「……今決メタ……ココデ才前ヲ殺ス……! ココニイル全員デカカツテコイ!! ソレゾレノ存亡ヲ決メル、決戦ダ!!」

戦艦棲鬼は全艦隊を敵に回した。全ての艦隊、艦娘を相手にするという。ガングートや川内が軽く微笑む。

面白い、やってみると。

金剛も静かに笑みを浮かべた。

死ぬ訳にはいかない者同士、覚悟を決めているようだ。

「戦ウ前ニ聞イテオキタイ……金剛、才前ハ何ノ為ニ戦ウ」

「……姉妹ノ為……ツ!」

「ソウカ……私ハアノ人ノ為ニ戦ウ。才互イ……悔イノナイ戦闘ヲ、シヨウ……」

二人とも息は上がっている。今だに衝撃は身体を巡っている上に常に激痛が迸るような状態。死ぬのは簡単だろう。だが死ぬつもりは毛頭無い。

自分はもう駄目かもしれない。

何故なら――、

「戦艦棲鬼イイイイアアアア!!!」

「金剛オオオオアアアア!!!」

――この戦闘をどこかで楽しんでいる自分がいるからだ。

「オラアアアア――」「ソコマデダ」

「ッ!？」

戦艦棲鬼と金剛の間合いに突如現れた。現れた深海棲艦の名は戦艦水鬼。巨大な艤装の腕で二人の拳を軽く受け止め、衝撃を流す。

何故か誰も気付かなかった。索敵範囲内にいるはずが誰もその存在を把握出来ていなかった。金剛やガングート、その他の艦娘が感じた。全身から危険信号が発している事を。

戦艦水鬼は金剛を投げ飛ばし、艤装で戦艦棲鬼を掴ませる。そして急いで撤退していった。すると突然戦艦水鬼の艤装に砲撃が当たる。

「来たか……!？」

「すいません遅れてしまいました!! 援護に来ました呉鎮守府第一主力艦隊、第二前衛部隊到着です! 戦闘を開始します!」

何時間か遅れて駿河鎮守府と呉鎮守府の援護部隊が到着した。旗艦大和が率いる総勢二十四名の強者が援護に入る。流星に分が悪いと察したのか戦艦水鬼は周辺の深海棲艦の撤退を告げた。

「……何ヲスル戦艦水鬼!! 勝負ハマダ終ワツテナイゾ!!」

「アイツカラ撤退シロ、トノ命令ダ。作戦ハ失敗ニ終ワツタ。帰還スル……無駄ナ戦闘ハ避ケルンダ」

「ヤメロ! 何ヲシテイル! ヤメ――!!」

深海棲艦が海の奥に姿を消していく。空母棲姫や敵増援部隊は砲撃しながら逃げていく。霧島率いる第一主力艦隊は追いかけた。

「こちら霧島。敵艦隊が撤退していきます、援護部隊も到着しました。

「深追いしますか？」

『……………いい。援護部隊に、任せろ……………戦闘は終……………了だ……………、それぞれ……………帰還——』『提督!!』

提督の声が突然消える。周辺から心配する声が聞こえた。ガチャガチャとマイクを手取るような音と共に長門が先に答える。

『長門だ。提督からの命令により、後始末は援護部隊に任せろ、各艦隊は海域を掃討後に帰還。との事だ』

「提督は!? 提督は大丈夫なのか!？」

『大丈夫……………とは言えない。今■■■医師が懸命な治療を——』『提督! しっかりして!!』

提督の様態が急変したようだ。皆としてはいち早く向かいたい所。摩耶自身も焦っている。

「提督が危ない! 早く帰還しよう摩耶!!」

「あ、ああ……………」

「では大和さん、後はお願いします……………!」

「後は私達に任せてください!」

52. 月夜に照らされる紅星と白影

フローリングの床に倒れるのは前任。

その前に達は鋭い目をした提督。

提督の渾身の一撃が前任に直撃。余す事無く力を振り絞った右拳は前任の左頬に当たり、食い込むように床に叩きつけられた。地震のように建物が揺れる。

目の前にはまるで死神とも思える提督が立ち尽くしていた。

「提督……！」

一言も発さず提督は深海棲艦を睨みつける。前任がやられたと なって少しばかり怖気ついていた。提督は右腕を伸ばし、深海棲艦達に指をさす。

「……やれ」

「ッ!!」

「聞いたか！ 戦闘に入るぞ、かかれ——」「それは無理力なく」

「何っ!？」

夜空の見える壊れた天井から深海棲艦が現れた。天使の様にゆつくりと落ちていき、執務室の床に立つ。その姿はとても歪で、身体所々が紅くひび割れ、長い白髪。紅いオーラを放ち、その場に君臨した。

「まだこれを死なセル訳にはいかなイノ。だから撤退させてモラうよ」

「っ!?! そんな事……」

「させるわけないだろ!!」

深海棲艦の中枢を担う、人類の敵をまとめるボスとして君臨する中 枢棲姫。わざわざこの鎮守府まで赴いてきたらしい。

前任を逃さないと木曾と加賀が前に出ようとした。しかし——、

「提督ッ!？」

「何故止める!!」

「動くな……死ぬぞ……」

提督が腕を広げ、木曾と加賀を止めた。

どこかの国で聞いた事がある。戦艦五隻、艦娘六十隻の大艦隊が中枢棲姫討伐の為に戦闘に入り、全て殲滅されたという報告を受けた話を。

底知れぬ強さと恐怖が提督と艦娘達を包んだ。

「……まアちよつと下見、かな。あ、安心シて？ 戦ウツもりはないし、私はココを襲うつもりもないから」

中枢棲姫は倒れる前任を抱え、フランクに話し掛ける。どうも不気味で手が出しづらい。紅いオーラが空気をピリピリとさせる。この場にいるだけで息苦しくなりそうだ。もし手を出せば提督ごと全員殺されるような気がする。中枢棲姫は立ち尽くす提督に接近し、身体に触れながら耳元に口を寄せた。

「……頑張って」

そう言い捨てた中枢棲姫は深海棲艦と共に海の中へ姿を消していった。自ら深海棲艦が撤退した事により、鎮守府内での戦闘は終わりを告げる。

提督は黙ったまま、壊れた机に向かい、マイクを拾った。

『こちら霧島。敵艦隊が撤退していきます、援護部隊も到着しました。深追いしますか？』

「……いい。援護部隊に、任せろ……戦闘は終……了だ……、それぞれ……帰還——」

「提督!!」

霧島達に指示を出した途端、提督は口から大量に血を吐いて倒れる。仰向けになり、意識を失ってしまった。すぐに■■■医師が救命処置に入る。

「加賀さん！ 医務室からAEDを！ 後、医療器具、輸血パックも持ってきて!! 暁ちゃん達はお風呂から洗面器を！」

「分かりました……！」

「わかったわ!!」

提督の口に耳を当てる。呼吸をしていない。心肺停止状態だ、非常にまずい。医務室か病院で適切な治療がしたいが無理に身体を動かせば負担が大きくなる。ここで命を繋ぐしか方法は無い。

「左胸の傷は……治ってる。なら心肺蘇生法は出来るか……」

■ 医師が軍服を脱がせ、上半身を裸にさせる。提督の裸を見て
■ 医師は驚いた。全身傷だらけだったのだ。刀や鞭、ありとあらゆる武器で怪我を負ったような古傷が斑にあった。

だが驚いている場合では無い。人の命が掛かっている。人工呼吸は難しい、胸骨圧迫をさせるしか無い。

「死ぬんじゃないわよ……!!」

時々夢を見る。

得体の知れない何かに虐められる自分を誰かが助ける夢。

誰かに助けられた。誰だか分からないけど、美しい女性のような気がする。

夢であればありがたいが、何故かその感覚が手に残っていた。

戦闘から帰還した艦娘達はすぐ様に執務室に向かっていた。鎮守府は崩壊し、瓦礫は散乱、倉庫は一部焦土と化している。食堂や風呂は埃や瓦礫で汚れ、廊下の窓ガラスは殆ど割れていた。如何にこの鎮守府でも激しい戦闘があったのかを物語っている。摩耶達は急いで走って、執務室のドアを開けた。

「提督!!」

「死なないで提督!!」

飛龍達や暁達が必死に訴えている。■ 医師がAEDを使いながら、心肺蘇生法で救命処置を施していた。洗面器には大量の血、絶望的な状況に摩耶は恐れた。

提督は執務机の前で倒れていた。口から大量の血を吐き、顔や頭に複数の殴打跡。目を瞑り、身体に力が感じられない。

「何やってんのよ!! 貴方がここを仕切るんじゃないの!! こんな所でくたばってんじゃないわよ!!」

必死に胸骨圧迫で命を繋ごうとする。感情的になりながらも懸命に胸骨圧迫をした。皆涙を浮かべている。古鷹や鈴谷がすぐに駆けつけた。

「提督! 嫌だ、死んじゃ駄目!! 提督が死んだら前任に復讐出来ないじゃんか!!」

「やりたい事を手伝ってくれるんじゃないんですか!? このまま死ぬつもりですか!? そんなの私は許しません!!」

摩耶はその光景を見て、かつての事を思い出す。

あの時、提督が死ぬまで暴行の限りを尽くされていた事を。何も言わずに、自分を庇ってくれた事を。死にかけても自分の事を心配してくれたあの地獄の事を。

過呼吸を起こしてしまふ。提督を失うという現実を認めきれなかった。

自分を認めてくれる、愛してくれるたった一人の存在を失いたくない。

自分の為に戦ってくれた提督を失いたくない。

「……ツ……ツ……ツ……ツ……ツ……！」

何分か経ち、**■**医師が心肺蘇生法を止める。止めた**■**医師に摩耶が叫ぶ。

「ややや止めるなよ……！ まだ生きてるんだからさ……！！」

「……摩耶」

「ツ………だったらあたしがやる。退けよ邪魔だ！」

摩耶が見様見真似で胸骨圧迫を施す。皆は黙ってその姿を見ていた。沈黙が重くなる一方だった。

「摩耶」

「うるさい！ 止めないでくれ！！ 提督は——」「摩耶ツ！！」「うるさい黙ってる！！」

「もう………確認したわ……」

「ツ………！！ うう………」

■医師に肩を掴まれる。手は明らかに震えていた。

初めて弱い姿を見せる摩耶。涙を流し、手を止めてしまった。プリンツと鳥海が傍に寄り添い、摩耶を抱き締める。

「………二十二時四十九分」

■医師が腕時計で時間を確認する。作戦開始から約五時間が経過していた。戦う意志を持った艦娘は戦った。成長した艦娘もいた。得る物は多かった。

その分、失った物はとても大きかった。

「そんな……」

「嘘、でしょ……」

悲しみに打ちひしがれた。認めたくない提督の死に。

自分達の為に強くしてくれた提督が死んだ。戦う意志をくれた提督が死んだ。捻くれ者で減らず口で艦娘をポンコツ兵器呼ばわりしてくる口クでなしだった。悪い印象しかないはずがこれまでの行動や言動から考えてからは良い印象もあった。

今度も何も出来なかった。戦う事は出来ても、刃向かえる力は出来ても、人は救えない。あの時のように己の無力さに嫌気がさす。改めて理解出来た。

何も出来ないのはどれだけの後悔を生むのかを。

「……つたく、そう焦んなよ」

「ッ!？」

「えっ!？」

男の声が聞こえた。その声に誰もが驚く。摩耶が恐る恐る提督を見ると、提督は目を開いていた。夜空を眺め、静かにしている。

「はあ……あー死ぬ所だった」

ゆっくりと起き上がり、軍服の汚れを払う。近くにいた■ ■ 医師の白い衣装で口周りの血を拭い、手足が動くかどうか確認する。

「提督……っ?」

「ああお前ら所望の有能な提督様だあ、何かご用件が?」

提督がいつも通りの口調で声を聞かせる。そこには何も変わらな
い提督の姿が。艦娘達は一斉に安堵し、中には抱き締める艦娘もい
た。

「提督っ!!」

「ンボゲエ!! やめッ死ぬッ、殺す気かお前らアア!!」

「あ、ごめん」

最初に提督に抱き着いてきたのは摩耶だ。その次に暁や響、鈴谷に

押し倒される。首を苦しめられ、本当に死にそうになった。暁達は一
旦、そばを離れる。

「提督……」

「……すまんな摩耶。少し時間掛かっちゃった」

心配してくれた摩耶の頭を撫でた。提督自身も摩耶がどれだけ大
切に想ってくれているか分かる。摩耶も提督がどれだけ大切なのか、
お互い理解している。あの惨劇を乗り越えたからこそこの二人は支
え合う関係にいるのだ。

「ど、毒は大丈夫なのか提督？」

「ああもう慣れた。今は順応しているよ……それ以前に……!!」

若干嘘混じりのように聞こえたが提督が言っているのだから大丈
夫なのだろう。提督は■ ■ 医師の頭を鷲掴み、高く持ち上げた。

「何勝手に人の事殺してくれてんのお前エエ……!!」

「痛い痛い痛い痛い！ だってあの状態じゃ死亡してるとしか思えな
いでしょ!!」

「うるさい!! 勝手に人の服を脱がせ、勝手に電気ショックで心臓を
動かそうとして勝手に心肺蘇生法をやりやがって!! こちとら迷惑
でゴホツゴホツ!!」

「あーあーあーあー……」

喋り過ぎたのかまた咳き込む提督。血溜まりの洗面器を借りて、血
を吐いた。またやっちゃったと暁と響が提督の背中を摩る。

「提督……その、大丈夫なの？」

「んなわけないだろ飛龍!! 後でコイツに適切な治療を受けるつもり
だ、勿論タダでなあ〜!」

■ ■ 医師をコイツ呼ばわりし、無料で治療を受けると提督が宣言し
た。無料有料以前に治療しなければならぬ義務がある以上は治療
を施すのが医師の役目だ。一応仕方の無い事である。

「さて……お前ら、ちゃんと命令をこなしたんだろうなあ？」

「も、勿論だ!」

「……まあ結局、前任は途中のトラブルや邪魔があつて捕まえられな
かったし、戦艦棲鬼にもあと一歩で逃げられた……だがそれを覆す程

の戦果があるのも事実。更には敵の作戦が失敗し、撤退したという事は俺達が如何に強かったのかを証明出来る最高のチャンスだったという訳だ……誇りに思え、馬鹿共」

通信では援護部隊がこの鎮守府近海海域を見張ってくれている。当分攻めてくる事は無いだろう。

「大成功、大勝利とは言えないが……とりあえず……今は盛大に喜べ!!!」

皆腕を上げ、歓声が外に響いた。

深海棲艦の大艦隊による鎮守府襲撃。それを迎え撃った提督と艦娘達はその壁を見事に貫き破った。

53. 「純粹」

あの鎮守府襲撃から四日が経った。提督は医務室にて治療が施され、歩けるまでには回復している。とはいえ完全に回復した訳ではなく、まだ顔の腫れや撃たれた銃弾の痕は癒えていない。毒に関しては何故か身体には残っておらず、背中に刺された傷からも確認はされなかった。

横須賀鎮守府や東京では実際に深海棲艦の大規模爆撃が行われ、提督の助言と事前に備えた迎撃態勢のおかげにより、被害は最小限に抑えられた。その後に敵艦隊強襲もあり、横浜や東京の安寧は横須賀鎮守府の艦娘達によって守られている。

鎮守府襲撃の件は日本全国に知れ渡り、深海棲艦の上陸阻止や最強の深海棲艦を瀕死に追い込んだ事が評価された。新聞の見出しには『荒くれ鎮守府、日本を守る！』。前任の事は何も書いておらず、未だに隠蔽しているようだ。何とも語彙力の無い馬鹿馬鹿しい一面である。

この事を受け、大本営は提督や艦娘達を高く評価。その報酬として提督の治療費免除、鎮守府の改築工事の全額負担、各艦娘の給料上昇、資材の贈呈、勲章の贈呈など目白押しだ。近々鬼の大佐が下見に来るという。こちらとしてはありがた迷惑な話だが。

艦娘達の心境にも大きい変化が見受けられた。差別する側と差別された側で徹底抗戦。史上類を見ない睨み合いがそこかしこで勃発している。いつか内戦が起きてもおかしくないだろう。また計画の実行者である明石は地下営倉に収容。差別された側の艦娘が一人ずつ見張りをしている。鎮守府襲撃以降は■■■■達に動きはない。

赤城は戦闘終了後に多くの艦娘に見守られながら天国へ旅立った。最後まで彼女は穏やかな笑みを浮かべ、光となって幽かに消えていったという。後に葬儀が開かれ、彼女の冥福を祈った。

飛行場姫についてはこの鎮守府で管理する事となった。謎多きあの人の情報模索の為、元帥が特別に許可を与えている。また以前の様に営倉で過ごす事は無くなり、艦娘達が提督を救ってくれたお礼とし

て今はちゃんとした部屋が割り当てられ、大人しく食堂で働いている。時々建設業者から驚かれてる事もしばしば。後で色々情報を聞き出さなければならぬ。

「んで金剛、何の用かな」

医務室のベッドでコーヒーを飲む提督。隣に座っているのは金剛だ。怪我は高速修復材にて全て完治しており、改装可能な艦娘として提督が持ってきた改装設計図により生まれ変わった。

金剛改二丙、三回目の改装により更に強化された艦娘だ。

「……お礼が言いたくて」

「何のお礼か、ハッキリと言いたまえ」

「提督はムードブレイカーだネエ。もう少し余韻とかないノ？」

「悪いが金剛、俺は暇じゃないんだ」

窓から暖かい風が吹いていく。太陽の光が漏れ、医務室を明るく照らした。その光は金剛の頭飾を輝かせる。顔は少しばかり笑っていた。提督はお見舞いで出されたショートケーキを丁寧に食べている。

「気味が悪いな」

「ふへへ……ごめんネ。それでもこの時間がとても居心地が良いノ」

「……お礼を言いに来たんじゃないのか？」

「それはもうちよつと後かな」

とは言つたものの、本当は緊張で上手く言えなかった。

一言だけ感謝を言うだけなのに何故か緊張してしまう。自分を励ましても手が震えて止まらない。心の鼓動音が良く聞こえる。暖かいはずの気温がとても暑く感じた。

「……緊張してんのか分からないが、言いたい事があるなら今のうちだぞー」

「っ……」

「まあ……俺がお前になんて言つたかなんてのはどうでもいいが、良い方面に受け止めてくれたならこちらとしても都合が良い」

提督は自分に立ち上がる勇気をくれた。まるで自分の事のように考え、何かの為に戦っているんだと訴えてくれた。自信を失った自分に、生きる勇気すらなかった自分に、初めて戦う意志を教えてくれた。

最初はとても怖くて、近寄り難くて、関わりたくないと思っていた。横暴で、理不尽で、すぐに言葉で振じ伏せて、自分達を兵器呼ばわり。拳句の果てには相手の過去を貪り、脅しに使って、強制的に黙らせる最低最悪の人間。

そんな人間——だった。

今は少しだけ印象が違う。確かに性格は破綻してて、どうしようもない人。でも心の奥では私達の事をちゃんと見てくれている。そんな気がする。

大した確証は得られていない。でも少なくとも私の中ではそう思いたい。この提督が信じられる人かどうか。そう思うのは自由で自分の勝手だ。

今思えば摩耶やプリンツが提督の後をついていく理由が分かる気がする。

「金剛、この先感謝を言える事なんて早々無いと思うぞ？ 前に言ったようにお前自身なにかあったのかは知らないしどうでもいい。お前の心境変化なんて興味も無い。過去や未来がどうであれ、今を生きなきや無理だろこの世界じゃ」

「今を……生きるノ？」

「金剛、お前は過去に生き囚われすぎだ。確かに酷いものかもしれないが、それはあくまで過去なんだよ。過去は過去、今は今で生きるしかこの先やっていけないんだ。それをぺちやくちやと言ってくる奴がいるならばっ飛ばせ。関わってもない他人が人の過去にあーだこーだ言うのはおかしいんだよ」

私の過去は決して許されるモノでは無い。

全てが残酷な日々だった。暴行は何回も受けたし、涙は何回も枯れた。今更この過去を消し去りたいとは思わない。記憶から消したいと思った事は何回もある。しかし、今は頭の片隅に残しておきたかった。これから立ち向かう為に。

「まあ今までお前が比叡達に酷い事をしてたんなら話は別だけだな。とにかくだ、そんな事は前任の所為にして気にするな。お前はお前らしく生きて、俺が死ぬまでこき使われるべきなんだよ」

「っ……い。だよネ。そうだよ……ネ」

出ないはずの涙がまた出てしまった。何度も拭いても瞼から流れ出る。

何故だろう、心が少しだけ軽くなった。いつからだだろうか。笑いながら涙が出たのは。涙はダイヤモンドのように輝き、光が屈折する。

「提督……い！」

金剛は思い切って提督の手を握る。そしてとびきりの笑顔で言った。

「Thank you！」

「……フン、You're welcomeだっ！」

「痛っ！」

金剛の額に頭突きする提督。キシキシと変な声で笑った。金剛も微笑み返した。

いつまでもこういった関係が続けばいいな。

私はそう思っている。

好きになれるような人では無いけれど、今は確かに貴方をやっと信じられる。

いつかダイヤモンドの様に輝けたなら、貴方に相応しい艦娘でありたい。

この感情をどう表せばいいか。

いや、簡単だったな。

——心の底から嬉しい。

ただ、それだけ。

「あ、そうだ金剛」
「何？」

「会ってみるか？ お前が逃がしたかつての榛名に」
「……え？」

かつての榛名が生きている。理解するのに時間が掛かった。金剛はすつとぼけた顔で提督を見つめる。

何故自分が逃がしたかつての榛名を知っているのか。理由は知らないが恐らく偶然なのだろう。

「えっ、て会ってみるかどうかの話をしてるんだが、どうなんだー？」
ニヤニヤと聞いてくる提督は指を回して、金剛を煽っていく。そこに不快感は無かった。金剛は一度俯き、右手を広げる。そして右手を握り、提督を見た。

「……もう少し後カナ。会いに行きたい時にするヨ」

かつての榛名に会っていいのか自分の中では分からない。まだ罪の意識がある以上は会ってはいけない気がする。今は自分のやるべき事があるのだ。どうしてもやらなくてはならない事が。それが終わるまでは会えない。もしその時が来るのなら、恐らく自分は元の自分に戻っているのだろう。

それまでは自分を縛る。

「……そか。やりたい事として受け止めておくと……俺はいつでも待ってるぞ」

「うん……いつか待っててネ」

意味を含んだ様な言い方で金剛は医務室を去る。提督はまたベッドに寝込み、天井を眺めた。すると医務室の奥影から摩耶と一人の艦娘が現れる。医務室の奥で待機していたようだ。

「これでいいのか提督」

「金剛がそう決めたんだ、俺が言う事は何も無い」

「折角本人を連れてきたのにな」

一人の艦娘とはまさにかつての榛名。あの鎮守府襲撃の件を受け、この場へ赴いたのだ。

「どうだ榛名。姉の成長ぶりは？」

「……ありがとうございます、■中将。本当に……ありがとうございます、ございます……」

榛名は逃走後、途方に暮れていた。逃げ出したのはいいものの土地勘は悪く、初めて来た場所ばかりで迷ってしまう。しかし地元の人達が協力してくれたおかげで大本営まで到着。前任の横暴を訴えたが全て却下、逃走したと憲兵隊に拘束された。何も出来ずにまたあの鎮守府に戻るのには榛名にとつて死を意味する。全てに絶望していたその時、ある男と艦娘が牢屋の前に立った。

『お、ちょうどいい奴いんじゃないん』

般若の面を被り、長い黒髪の男が指さした。

彼曰く、舞鶴鎮守府に新しく着任する司令官の初期秘書艦が足りないから自分を採用する、と言ってきた。補足にその男の秘書艦であろう摩耶が説明してくれた。それを聞いて榛名は激昂する。

『私はあの鎮守府の愚行を訴える為に来たんです！ こんな所で黙っているわけにはいけませんよ!!?』

『だから初期秘書艦になれば外出れるだろ？ 大丈夫だ、手続きは済んでるし、コンタクトも取ってる』

『それでも……私は……!』

『んなもんアイツの権力で揉み消されるに決まってるだろ。第一、何も証拠も持たずにアイツは悪い奴だーって訴えた所で早々信じる馬鹿はいないし、例え信じる奴がいたとしても口封じされるのがオチだ』

『そ、そんな……』

確かに訴えても軍人達は全く相手にしてくれなかった。聞く耳も持たない、ただ相槌を打つだけ何もしない。あまりにも不遇な対応に榛名は暴れるも憲兵隊に抑えられ、営倉に閉じ込められている。男の言う事は全て当たっている。

『という訳で榛名、お前は舞鶴鎮守府の新米司令官の秘書艦を命ずる。アイツは甘ったるい艦娘を人としてみる愚か者だ。地獄を見てきた』

お前ならより良いものに変えられるはずだぞ？ 何かあつたら新たな司令官と俺に言え。出来る限り助力しよう。それにあの地獄に戻るよりは新たな場所で行動した方が懸命だとは思わないか？』

その男は唆すように誘い出す。確かにあの鎮守府に戻るくらいなら別の鎮守府で働き、自分が出来る事をすればいい。後ろにはこの男と新しい司令官がいる。メリットがいいのはどちらかは明白だ。

『本当に助けてくれるんですか？』

『折角今からお前を助けようとしているのにそれを俺に聞くか？』

『……確かに、そうですね。お願いします……！』

『ようこそ、新たな……世界へ』

後にこの男が中将、この鎮守府の提督だとは知る由もない。

「姉はもう少し余裕が出来たらお前に会いたいそうさ。どうする？ 舞鶴の方で出張という形でここにいますか？」

「そうさせていただけます……どうしても、あの私達は許せませんので」

「まあお前の勝手だ、自由にしたまえ。だがお前の存在はこの鎮守府だとタブーだ、派手な行動はやめてもらいたい」

榛名は摩耶同様、提督の事を信用しているようだ。こちらとしては扱いやすくありがたい限りだが。

とはいえこの鎮守府に榛名が二人いるのは後々面倒な事になる。出来るだけ隠密に過ごしてもらいたいところだ。

「ステルスで行動しろ、との事ですね？ 分かりました、全力でやらせていただきます」

「いや変装という手もある。自由にしたまえ……さて、この先どんな地獄があるのか、楽しみだ……」

医務室の窓から広場を覗く。そして提督は企むように微笑んだ。

「第四幕の始まりだ……地獄へようこそ——」

——馬鹿共」

「因みにあの時榛名を選んだ理由は？」

「早く仕事を終わらせてサボりたかったから」

Part 4. 磨穿鉄硯のHOOKスアイ

54. 目の前にある二つの山は拝むべき

「いや何やってんの提督」

鎮守府襲撃から一週間が経過。昼十一時、戦線に復帰した提督は貯まりまくった書類の山を現在進行形で埋めていた。

とはいえ一日で終わるはずもなく、息抜きにとソファで横になっていた。

「うるさい黙れー、俺はとても疲れてるんだー。だからこうやって癒されてるのだよ。口答えするようならぶん殴るぞコノヤロー」

雲龍の膝枕に布団と化した朝潮。二人とも乗り気なのが夕チが悪い。雲龍の膝枕で時たま撫でられ、朝潮が提督の上に乗る、上機嫌に寝ている。

「そうです！ 司令官は疲れているんです！ 司令官を癒すのも艦娘の務め、司令官が布団になれと命令したので全力で布団を演じています！」

「それを妹達に見られたら勘違いされてもおかしくないぞ？」

「大丈夫です！ 何もやましい事は起きていません！」

「いやそういう事を言ってるんじゃないよ」

「遠征から帰ったわよーって何やってんの朝潮姉!?!」

遠征任務から帰還した朝潮型の艦娘達が一斉に驚く。無理もないだろう、提督の上に朝潮が気持ちよく寝転がっているのだから。普通この状況を見て勘違いされてもおかしくはない。摩耶が額に手を当て、呆れてしまう。

「ほら言わんこつちやない……」

「離れて、こんなクズ司令官の言う事なんか聞いちゃダメ!!」

「いいなあ、私もやりたーい！」

「やめなさい大潮！」

「いいえ、ここは譲れません!!」

「ここボケるとこじやないよ朝潮姉」

「私も混ざろうかしら〜」

「騒ぐな頭に響くだろうがア!!」

周りで騒ぐ朝潮型に怒鳴る提督。先程まで快適に寝ていたはずが騒音のおかげで目を覚ました。自分の休憩時間を邪魔されて怒っている。その後口喧嘩は一時間ほど続き、朝潮型はプリンツに連れてかれてしまった。

空が茜色に染まる。夕方の十七時まで提督は休眠を取っていた。すやすやと静かに寝ている。

「本当に寝ちゃった……」

雲龍が提督の頭を優しく撫でる。雲龍は医務室の地下部屋で治療を受けていた艦娘。それ故に提督の事や、周りの状況などはよく分かっている。雲龍自身、とてもマイペースなのであまり気にしてはいなさそうだ。

「まあ疲れてるのは事実だから仕方ないか。すまねえな雲龍」

「いいえ……大丈夫よ」

「ちやつかり朝潮も眠ってるからな。ゆっくりさせてやってくれ」

「ええそうさせてもらうわ。でも静かにしてると……本当に女性みたい……」

「俺は男だぞー」

突然声を出したのは提督だ。流石に驚いたのか雲龍はビクツと身体を少し跳ね上がらせる。

「起きてたのか提督」

「今まで目を瞑ってたただけだ。ただの休憩だよ。しかし……凄まじい光景だな、目の前に山が二つあ——」

摩耶がすかさず、提督の両目を潰す。提督にあるまじき発言を止める為にわざとやった。提督は目を潰され、手で覆って悶絶する。

「アッアッアッアッアッアッアッアッアッアッ!!!」

「堂々とセクハラするのね……この提督は……」

「まあそういう奴だ、提督は」

「しよ、正直者と、言ってくれ雲龍……俺は言いたい事は何がなんでも言いまくる主義でね」

提督は起き上がり、寝ている朝潮をソファに乗せる。軽く背伸びして関節を鳴らした。休憩はちゃんと取れたようで摩耶も少し安心する。

「あら……もう良いの？」

「ああ充分な程だ。またよろしく頼む」

「分かったわ、また呼んで頂戴」

雲龍は感情一つ変えずその場を去った。提督は椅子に座り、山のよ
うな報告書類を書き潰していく。その途中で提督はある事を考えた。

「なあ摩耶、あの戦闘から考えたんだが……」

「何だ？」

「どう考えても艦娘足りないよな」

「それな」

鎮守府襲撃と戦闘でどれだけ戦力が不足しているかを身に染みて理解出来た。今いる艦娘で穴を埋めて艦隊を編成したが、少しばかり足りなく感じていた。本来なら潜水艦や駆逐艦などいてほしい艦娘が艦隊に編入するはずだった。だが前任の無謀な出撃や解体で欲しい艦娘はいない。提督は頭を悩ませた。

「とはいえ工廠は使えないし、資材はあまり無駄にしたくない。また横須賀か呉の所で頼もうかなー」

「潜水艦とか駆逐艦とか重雷装巡洋艦とか欲しい」

「だよな。今後の戦力強化の為に色々必要な事が増えてくる。そして……」

「今の■■■達とどう戦うか、だろ？」

明石の犯行に気づかなければ今頃金剛は海の底だ。一応休戦協定を結んでおり、多少の裏切りも範疇に入れていた。が、まさか明石が差別している側とは提督でも予想出来なかった。あの時前任が話していなければ明石の犯行にも気付いていない。奇跡とも言えるだろう。

「この件で奴らの手段が潰えたようなもんだ。こちらとしては依然有利、負けてはいないが勝ててはいない」

「また何か仕出かしてくると」

「当然だ。さて尋問といこうか」

提督と摩耶は営倉に向かった。明石は長門達に捕らえられ、今は一時地下営倉に収容中。牢屋の前には木曾が見張っていた。

「提督か」

「見張りとは勤勉でよろしい、木曾」

「フン、明石の犯行を止めたんだ。褒美はいつくれるんだ？」

「追々考えているよ、まあ待ちたまえ。お前には本当に感謝してるんだ……さて、よお明石。調子はどうだー？」

牢屋の中には座って黙り込む明石の姿が。手錠と足枷で自由は奪われ、まともに身動きは出来ない。明石は提督を睨みつけた。

「作戦が失敗して悔しいか？ だろうなあ、自身が完璧だと豪語していた作戦が成功する直前で失敗して、■■■らに見離されたもんなあ」

「焦ってた癖に……」

「焦ってたなんて過去の事はどうでもいい。今はその結果が良ければ問題無いんだマッドサイエンティスト」

狂科学者とあだ名を付けられた。確かに様々な物を開発したからにはそう呼ばれても納得はいく。明石は気にせず黙り込んだ。

「さて明石、何故お前が金剛を殺そうとしたのか、そして艦娘を操っているのはお前かそれとも■■■か、色々と経緯を教えてくださいかな」

「この状況で言うと思う？ 馬鹿じゃないの」

「まあ言う方がおかしいよな。だから徹底的に吐かせる為に色々用意した」

摩耶が持っているのは艦娘専用の正直薬。黙秘する艦娘に使う尋問用に使われる薬だ。人間用と違って痛みは無く、身体の核が反応。脳に情報が伝達され、思わず話してしまうというメカニズムらしい。メカニズムはどうかであれ本当の事を話せるのならどう使おうが構わない。

「……拷問ですよ」

「拷問器具を楽しそうに開発していたお前がそんな事を言っているのか？」

「チツ……」

初めて会った際は拷問器具を開発した事に怯えていた。だが化けの皮が剥がれた事でその事実は否定され、本当は自ら進んで開発する狂人だった。後にこの事を知っていた鈴谷や加賀が恐ろしい表情で話した事により発覚している。もっと早くに言って欲しかったが。

「まあ推測するなら操ってるのはお前じゃなくて■■■■であり、作戦はあの□□に頼まれたんだろ？ 金剛を殺す為に再度自爆装置を取り付け、戦艦棲鬼と戦っている最中に爆殺。どうだ？」

「結局知ってるんじゃないのよ」

「お、凶星か？ ならありがたいたのだが、何せ俺が考えた創作だし」

明石はイラツときたのか頬を引き攣る。まんまと罠にはまった自分を殴りたい気持ちだった。提督がここぞとばかりに不気味な笑みで煽ってくる。

自爆装置の解除も順調だ。まだ全てとは言えないが自爆装置の種類も潰えた以上は仕掛けてくる事も無いだろう。

「……まあ気長に待つとしよう。お前に構ってられるほど俺は暇じゃないんでね」

「これからどうするつもりよ」

「そうだなー……」

提督が顎に指を当て、上を向く。そして思いついたのか明石に言い放つ。

「二波乱、起こそうかな」

その表情はまるで全てを見下す悪魔のような笑みを浮かべていた。木曾と明石はその笑みを見てゾツとする。目は全く笑っておらず、虚ろでニヤニヤとしていた。

「あ、木曾。もう見張らなくていいぞー、自由にしておけ」

「は!? いいのか!? 誰かが逃げ出す手伝いでもするぞ?」

「んな事分かってるっつーの。だから自由にしておけと俺は言ったんだ。言葉の意味が分かりましたか?」

「わ、分かった……」

少し腑に落ちないが、提督がいいと言うなら木曾も引き下がった。恐らく提督は誘き出している、助けに来てくれる艦娘を。つまり明石は罠の中にあるエサなのだ。摩耶はそう察して、木曾を引っ張った。

「提督……」

「何だ木曾」

「一波乱起こすってのは本当、なのか？」

「……ああ本当だ」

前に提督は計画を実行中と言っていた。その計画の中に一波乱を起こすという目的でもあるのだろうか。提督が何を考えているのかよく分からない。ただ敵に回したら必ず勝てないと心の中で察した。これが所謂提督の、本性なのだろうか。

「摩耶、今は何時だ」

「十八時三十分近く」

「ならそろそろ飯だ、食堂へ行こう。木曾も来るだろう？」

「当たり前だ」

夜十八時。晩飯の鐘が鳴り、艦娘達が食堂に集まる。中は前とは違っていつも騒がしく、そして日常のような光景が広がっていた。提督に挨拶する者まで現れ、活気は徐々に戻りつつある。

「司令官！ おはようございます！」

「あ、そういえば朝潮を執務室に置いて行ってたな」

「私は気にしておりません！ またいつでもお呼びください！」

「朝潮姉！ こっちよ！」

明石に尋問する前、執務室に朝潮を置いてしまっていた提督と摩耶。思わず手をポンと叩き、思い出した。意味の分からない忠誠心で許されたが妹達には嫌悪の眼差しで見られている。そんな中、鈴谷が最上達を連れて提督を誘ってきた。

「提督、一緒に食べよう？」

「断る。それに先約があるんだ、また今度な」

「ちえ〜分かったよ、次ね？」

「気が向いたらな」

提督と摩耶はいつも通り二階のテーブル席で食べている。木曾も

向かい席に座り、一緒に食べた。二階から見下ろした賑わいを見て、木曾はボーツとする。

「賑やかになってきたな……ここも……」

「感傷に浸る暇があるならお前のおかずを今すぐ奪うぞー」

「つて結局奪ってんじやないか!! 返せ、俺の唐揚げ!!」

「誰が返すか、既に俺の胃の中だ!」

「だったら腸斬り裂いてでも取り返す!!」

「あああサーベルは卑怯だぞ!! 勝手に艤装を展開するなア!!」

木曾が怒り任せに艤装を展開。大きなサーベルで提督に斬りかかった。白刃取りでサーベルを抑え、対抗する。

「うるさい!!!」

食堂に甲高い声が響き渡る。一階で古鷹と加古が口喧嘩をしていたようだ。怒る加古はテーブルを殴り、イライラを募らせながら食堂を出ていく。食堂の空気は静かに重くなってしまった。

「あ、ごめんね……空気悪くしちゃって……アハハ……」

古鷹が空気を悪くした事を謝り、加古の後を追いかける。食堂はまた賑わいを取り戻すも話題が古鷹と加古の話で持ち切りになった。二階から眺めていた提督はニヤニヤとしている。

「本当に騒がしかったな、傍迷惑もいい所だ」

「返せ俺の唐揚げ!!!」

「まだお前根に持ってんのか! いい加減にしろ!!」

55. アナログとデジタルは使いよう

数分前、食堂で古鷹は加古の元へ向かっていた。提督と天龍のバカ騒ぎを気にしながらも、勇気を持って加古の向かい席へ座る。そこで定食を食べていた加古は不機嫌な表情で古鷹を無視した。

「……ねえ加古」

「……」

「加古は今、私達の事をどう思ってる？」

反応は無い。黙々と食べている。

余程嫌いなのか見向きもしなかった。

「……強くなって助けるよ。加古の事も含めて、全部……！」

「……」

「馬鹿馬鹿しいと思うだろうけど、嫌われても虐められても私は貴方の姉なんだ。だから今までも、これからも加古の味方だよ」

艦娘達の差別意識が洗脳ならば、その洗脳から解放される方法もあるはずだ。

「……気持ち悪い。近寄んな」

「そう言われても私は諦めないよ」

「今度近寄ったらぶっ飛ばすぞ」

「今度なの？ 今じゃなくて？」

「ツ!! うるさい!!」

テーブルを殴り、怒鳴る加古。食堂が一気に沈黙になる。それに気付いた加古は髪を掻き毟り、その場を去った。古鷹は空気を悪くしてしまった事を謝り、加古の後を追う。

食堂を出ていき、重巡寮の前で古鷹に止められた。加古はすぐに乗せられた肩の手を振りほどく。

「加古……！」

「……うるせえんだよ!! 一々一々イラつく事ばつか言いやがって……何が助けるだよ、生温い言葉並べてんじゃねエ!! 一度も勝った事無い癖に出しやばるなよ!! あたしはお前より強いんだ!! 調子に乗ってるとその頭ぶっ飛ばすからな!!」

思う限りの暴言を吐き、加古は重巡察の中に入る。古鷹と加古の部屋はそれぞれ別々。姉妹艦でありながら一度も一緒に寝た事が無く、まともに話した事が無い。姉妹らしい事すらやっていない。

前任が生んだ優遇制度とその制度の中核となる洗脳による差別意識を助長させる■。■。これらが原因で加古や他の艦娘は変わってしまった、そして続いている。洗脳の仕組みを提督は理解しているはずだ。解放させるまで時間はそう長くない。

「……加古……」

——朝九時過ぎ。

「ここが新しい職場かあ……嬉しいのやら、悲しいのやら……」

鎮守府の門の前に立つ一人の艦娘。数日前に建造された彼女はこの荒くれ鎮守府の工作艦に任命されていた。呉鎮守府から送迎車で約八時間。流石に腰が痛い、その艦娘は満足するまで背伸びをした。「ニユースでは荒くれ鎮守府の艦娘達が深海棲艦の大艦隊に大打撃を与えたくとか何とか言ってきましたね。襲撃の跡が物語ってますねえ」

鎮守府の改修工事は着々と進んでいた。瓦礫は隅に寄せられ、組み立てられた鉄骨の上を人が歩いて作業している。広場では艦娘達が訓練を受けていた。荒くれ鎮守府と言うのだから艦娘も荒れているのだろうかと思っていたが、そう思える雰囲気は感じられない。

「あ、貴方が今日この鎮守府に着任する、明石さん？」

「は、はいそうです！ 工作艦の明石です。よろしくお願ひしますー！」「私は鳥海と申します。提督から執務室までのご案内役を任せられました」

目の前に現れるは鳥海。高雄型四番艦の末っ子と聞く。風紀乱れぬ凛々しい姿だ。とても礼儀正しく、本当にこの鎮守府の艦娘か疑わしく思える。

「ではご案内しますね」

「は、はいー」

優しい笑顔に見蕩れそうになるも明石は元気な返事をする。司令本部に入るとブルーシートで隠されている場所がある。中でも戦ったのだろうか、解析班が調査している。

「失礼します提督」

「し、失礼しますー！」

明石は恐る恐る執務室に入る。執務室には提督と思わしき人物と鳥海の姉である摩耶が待っていた。提督は机に足を乗せ、明石を睨んでいる。

正直とても怖い。

「よう明石。俺がこの鎮守府の提督だ、以後よろしく頼む」

「は、はい！ よろしくお願いしますー！」

提督にしてはとても異質で白い肌白い長髪。摩耶も片目が赤く、一部の皮膚が白い。深海棲艦を思わせる二人に明石は緊張で汗が流れ出る。

「お前は工作艦としてここに着任してもらった。なあに緊張する事は無い。いつも通りにやれば充分だ」

「あ、ありがとうございます！」

「……鳥海、明石に工廠を案内させろ。そして現在の状況を事細かに説明するんだ」

「分かりました」

簡単に挨拶を済ませ、鳥海と明石は工廠へ向かう。提督と摩耶の事がどうしても気になる明石は思い切って聞いてみた。

「すみません……」

「はい、何でしょうか？」

「失礼な事を言うようで申し訳ないんですけど……提督と摩耶さんって、何かに似てるとか言われたり……しません？」

あの姿を見て誰もが不審に思うのは当たり前だ。明石自身も少し不安がっている。それを見て鳥海は少し微笑みながら返答した。

「そんな畏まらなくても大丈夫ですよ。確かに提督と姉は少し深海棲艦に似ていますがちゃんとした私達の味方です。心配する事はありませんよ」

「そ、そうですか……」

笑顔で答える鳥海に明石は少しばかり安心を得る。摩耶の妹が言うのだから問題は無いのだろう。提督も無愛想だったが悪い印象は無い。やがて工廠へ辿り着くと妖精達が出迎えてくれた。

「ヨウコソナノネー!!」

「ヨロシクナノネー!!」

「よろしくお願いします!・ それにしても凄い設備ですね……呉と同じくらいの最新の物がある……!」

「提督が戦力強化の為に工廠を新しくしたんですよ。開発なら今すぐにでも出来ちゃうくらい」

確かこの鎮守府に着く前に提督の情報を少しだけ教えてもらった。階級は中將で普段から姿を現す事があまり無いと言われる希少な存在らしい。姿を現さないと聞いていた明石はその理由が分かるような気がした。更に中將となれば多少の権力も持ち合わせているはずだ。最新の設備も説明がつく。

「凄いですね……ん、何これ?」

中に入り、これからの生活にワクワクしていた明石。工具類を拝見している時に名前が掘ってあった。名前は明石、そして見知らぬ人の名前。提督の名前だろうか、綺麗に掘ってある。

「私が来る前に別の私が居たんですか?」

先程まで笑顔だった鳥海の様子が一変する。鳥海は深刻そうにこの鎮守府の実態を細かく説明した。艦娘達の差別意識や犯罪とも思える他の自分の行為、提督が計画している事など全て隠さず話し続ける。

「え……洗脳?・ さ、差別意識?」

「信じられないかもしれませんが全て本当です。明石さん、この鎮守府は今深い闇に覆われています」

「深い……闇……?」

「はい。ですのでくれぐれも甘い誘惑には乗らない事をオススメします……部屋は工廠の中にあるので確認していただけたらと思います。もし何かあれば提督に言ってください。では私はこれで失礼します

ね！」

鳥海はまた笑顔に戻り、工廠を出ていく。一人残された明石はブーツとしていた。あまりにも複雑し過ぎて理解するのに時間がかかっている。少しを頭を掻き、苦笑いをした。

「あー……やっぱりブラックに近いのかな」

「ブラックダゾ!! ナノネ!!」

「チガウノネ!!」

「ソジャホワイトナノネ!!」

「ソレモチガウノネ!!」

「うーん……どっち？」

「ワカラナイノネ!!」

「ですよー……でもワクワクしちゃうんだよなあ、正義の味方みたいで」

本当に鳥海の言っていた事が真実ならば、提督の為になれると思うとやる気が湧いてきた。自分は頼られている、それだけで原動力になった。

「……試しに三式弾開発してみよ!!」

「明石の状態はどうだ鳥海」

「信じてはくれています。ですがまだ完全に信じてる訳では無さそうです」

「そうか、まあ実際に見てもらった方が早いからな。追々監視してくとしよう」

監視室にいる青葉によって艦娘達の不審な行動は筒抜けだ。とはいえプライバシーがある以上は青葉も配慮している。今回は明石を監視する任務を与えられる。自由な時に監視していいと提督に言われた。

「明石の補充完了、と。後は戦力強化だな。北上、大井、潜水艦共の着任はいっ頃になる？」

「早くて六日後との事だ」

「六日か、まあ構わない。大和や武蔵、駆逐艦共は四日後着任予定だ。」

大幅な戦力強化だぞ、心が踊っちゃうねえ」

指で帽子をグルグルと回し、提督はニヤニヤとする。書類を早く書き留めろと摩耶に注意され、頬を膨らませながらペンを握った。

「色んな所から集まって来るのですね……」

「こつちじゃまともに建造出来ないんだ。他に頼るしかないだろう」

「何故建造は不可能なんでしょうか？」

「襲撃後に業者から報告されたんだが……工場にある建造施設は細工がされているんだ。前の明石が製作した洗脳を促す戦闘意欲促進剤を建造途中に身体へ挿入、差別意識を持った艦娘が出来上がる仕組みだよ。恐らく前任が考えたのだろう、何も知らずに建造すればこちらが不利だったという訳だ」

出来ればその仕組みを破壊したい所だがそうもいかなかった。建造途中に挿入される為に予め部品を取り除いた場合、建造が失敗になる可能性がある。更にはその部品自体に細工がされており、妖精達でも今は無理だと言われた。

「でもこんなに呼んで大丈夫なんですか？ ■■■達がまた何か仕掛けてきますよ」

「まあ何かしらやってくるだろうなあ。洗脳させる手段だった前明石が一時使用不可能とはいえ黙ってる奴らじゃない」

「対策のしようがない、という事でしょうか」

「そうだ。俺は艦娘や人間を完全に操れる訳じゃない。事前に誘惑してくるぞと注意しても100%、これからは大丈夫だとは限らないんだ。生物は欲を原動力にその生を歩む、上に立つ生物が下にいる生物を完璧に操る事は出来ない。必ずボロが出るんだ」

艦娘もその中に含まれる。兵器でありながら人の心を持つ艦娘という存在も生物に近い。例えば提督だろうと完璧に思い通りには出来ないのだ。

「全ては私達次第だと……少し不安です……」

「なあに不安になる事じゃない。対策出来ないのなら対策させればいい。奴らの思い通りにいかないように罠を仕掛けて厄介事を起こし、対策させる」

「大元を叩くのはダメなんですか？」

「一番はそれだ。洗脳の原因が改造された戦闘意欲促進剤と分かれれば、解放させる方法はある。だが現在じゃ薬の製造や使用は固く禁じられているんだ。使用する場合はバレなきや問題ないんだが製造は材料調達、妖精の技術とかで特に目立ちやすい。バレたら流石に俺もまずいんだ」

薬に関する規則や法律はとても厳しく、例え元帥だろうと罰は間違えない。使用、製造、所持しただけでも重い罰が下される。薬は今、大本営によつて厳しく取り締まれており、安易に所持する事は出来ない。

「八方塞がりだな」

「とは限らんど摩耶。俺の保管庫には色々な薬がある。こちらに持ち込めば簡単だ」

「問題はどうかやってバレずに持ち込むかって言いたいんだろ？」

「流石だ摩耶。そう、本題はそこだ。如何に薬を誰にもバレずにこの鎮守府まで持ち込むかが重要になる。面倒だが考えなければならぬ」

提督の保管庫には将来大切になるような資料や個人の脅迫材料、海軍の汚職歴書、初代深海提督の資料などトップシークレット並の物が保管されている。その中には取り締まった薬も保管されており、提督はあらゆる効果を消す薬を持ち込みたいと考えていた。

「つか何で書類がアナログなんだよ!! パソコンのWordで作成すればこんなの一々書かなくて済むはずなのに!!」

「後半分だから提督。私も手伝ってるんだから弱音吐くな」

「わ、私も手伝いましょうか？」

「いやいや、鳥海はい——」「是非頼む」

提督は真剣な眼差しで鳥海の手を握る。いつになく真剣で息が上がっていた。若干引き気味の鳥海は摩耶の隣に座り、書類の手伝いをする。

「後でノーパソ買つとこ」

「また金の無駄遣いになるぜ、提督」

「何が無駄遣いだ、ちゃんと有効的に使ってるじゃないか」

「へえ、提督が購入して以降一度も使っていない自家用ヘリやいつか使うとか言って二回ほどしか使っていないデスクトップパソコン、ロクに掃除もしていない高級別荘とかは有効的に使ってるのかな？」

「さて鳥海、これがお前の書——」「なアに話を逸らそうとしてんだよ……!!」

キレ気味に摩耶は提督の頭を鷲掴みにする。頭を握り潰そうと力が入っていく。提督は摩耶の手を抑え、悶絶する。

「拳句の果てにはあたしの金まで使ってたよなあ……!!」

「うるさい！ あの時はお前の自業自得だ、むしろありがたく思っ
てほしいもんだね!!」

「ぶっ殺す!!」

「ア、ア、ア、ア、ア、お前艤装展開は卑怯だぞオオオ!!!」

56. 珈琲を淹れた後の抽出カスは意外に役立つ

——朝、九時半。

「司令官、荷物が届いているよ」

「重いのです……!」

「響も手伝って〜!」

「こんなものへっちゃらよ!」

第六駆逐隊が大きなダンボール箱を力を合わせて持つてきた。感情豊かな第六駆逐隊は手前のテーブルに置く。提督は溜まった書類をそろそろ終わらせる所だった。

「……朝から騒がしい連中だな、頭が痛くなる。ここの艦娘共は朝から騒ぎましようキャンペーンでもやってるのか?」

「ラジオ体操とかやったら面白そう」

「俺も少しだけ思ったぞ摩耶。つか何送ってきたんだ大本営の奴らは」

テーブルに置かれたダンボール箱を確認する提督。周りの第六駆逐隊が物珍しそうにダンボール箱を眺めている。伝票には何も書いておらず、大本営の住所しかない。中を雑に開くと、艦娘の名前が書かれた茶封筒が隙間無く埋めれていた。茶封筒は分厚い物から少し薄めの物まで多様である。茶封筒の中にはお金が入っていた。

「これもしかして給料か? なんで茶封筒に入ってたんだよ、手渡ししろってか?」

「らしいな。全員分、用意されてある」

ダンボール箱の中身は艦娘達の給料だった。前の鎮守府襲撃、深海棲艦との戦闘を確認した大本営はそれに見合った報酬を送ってきたのだ。しかし何故茶封筒で渡さなければいけないのかが分からない。「ったく、こんな事しなくても金は入るだろ……何やってんだ大本営は」

「司令官……」

「んー何だ、雷」

「きゆうりようって、何?」

雷の質問に凍りつく提督。摩耶も驚きの余り、身体が静止する。

はて、今なんと云ったこのガキは。本当の馬鹿なのか。

「すまん雷……もう一度言ってくれ?」

「いいわ。きゆうりようつて何かしら?」

その言葉を聞いて提督は頭を抱え、ソファに寄り掛かる。頭痛が再発し、状況を嘆いた。

「嘘だろー……」

「まあ……仕方ないさ、提督」

「え!? 何か私、酷い事言ったの? ごめんなさい!!」

「あーいや謝る事じゃないんだ雷。ただ単に提督は——」「ああ酷過ぎる言葉に表せない程絶句している。お前らがこれほどまでに馬鹿だとは思わなかった」

摩耶の言葉を遮り、暴言を放つ提督。提督の様子に雷はアタフタしている。暁達も給料の意味は理解していないようだ。この様子だと他の艦娘も知らない可能性がある。

「摩耶、緊急招集」

「分かった」

食堂に全艦娘が集まり、ガヤガヤとしている。提督からの緊急招集と聞いて不安がっているようだ。一部の艦娘は警戒すらしている。提督は二階から見下ろし、その様子を眺めた。

「はい集まったな馬鹿共」

「緊急招集とは何事だ提督、また襲撃か?」

「いやそういうのではない。個人的にお前らに聞きたい事があってだな」

戦闘や厄介事とかでは無く、提督が個人的に聞きたい事。それを聞いて艦娘達は少し安心する。

「聞きたい事?」

「そうだ。これからお前らにはある質問に答えてもらう。青葉、嘘ついている奴がいたら指をさせ」

「了解しました！」

二階からは提督と摩耶、そして青葉が見下ろしていた。青葉は嘘と本当が分かる艦娘な為、呼び出されたのだろう。

「この中で給料って言葉の意味、知ってる奴は手を挙げてー？」

手を挙げたのは川内と不知火、プリンツのみ。信じたくない光景に頬を引き攣った。

「青葉」

「手を挙げた者以外本当です提督」

「青葉」

「いや本当です信じてください」

「青葉」

「だから本当ですって！ やめてくださいよ、その目は!!」

青葉を蔑むような目で睨む。思わず青葉はカメラで顔を隠した。提督は頭を抱え、溜息を吐く。青葉が言うのなら本当なのだろう。

「提督……」

「何だ多摩」

「給料って何？」

その言葉を聞いて提督はその場で後方に滑って転げ落ちる。床にめり込み、天井を見つめた。

「あー給料も知らないのか……この艦娘共は……」

「立ち上がれるか提督」

「無理だから摩耶ー、立ち上がらせてくれー」

「はあ……」

摩耶が溜息を吐きながら提督の腕を引っ張る。柵に寄り掛かり、空気の無い風船のようにだらけた。摩耶は提督の頭にチョップし、両脇を掴まれる。猫のように持ち上げられ、立ち上がった。

「あー……お前ら、お金は知ってるよな」

艦娘達が首を縦に振る。

「お金は何の為に使うのかも知ってるよな？」

再度艦娘達は首を縦に振る。

「それがお金⇨給料だ」

艦娘は一斉に驚く。初めて知ったような表情に提督と摩耶も驚いた。

川内や不知火、プリンツならまだしも差別している側の艦娘が知らないのは今初めて知った。成程、金に関しては前任が支配していたと言ふ事らしい。

「何でお金は知ってて給料は知らねえんだ!! おかしいだろ!!」

「恐ろくだが提督……前任が最初から全員分の給料を奪っていたのかもしれない。建造された時から一度も給料を貰ってないんだと思う」

「はあ……まああの野郎ならやる事か……仕方ない。摩耶、後で全員分を用意するぞ」

給料が入ったダンボール箱を摩耶に持たせ、一階へ下りる。一斉に摩耶の元へ集まり出し、提督が邪魔だと大声で怒鳴った。

「つたく……すまないが最初は手渡しだ、各自金庫とかに保管して誰かに盗まれないようにしろよ。全ては自己責任だ、俺は何言われても動かないからな。プリンツ、手伝え」

「了解です Admiral」

傍にいたプリンツを呼び出し、給料の配りを手伝う。名前が呼ばれた者から順に渡し、各自注意するように呼び掛けた。時たまに他の鎮守府で艦娘による金絡みの厄介事がある為である。

「ほい天龍、お前は特別厚いな」

「当たり前だろ?」

「まあ南方棲鬼を単騎で撃破したからそれなりの報酬なのもおかしくはないな。次も頑張れ」

「ああ任せときな!」

天龍は南方棲鬼を単騎撃破している。そのおかげか改装で天龍改二として生まれ変わった。といっても仲間の協力が無ければ今の自分はいないだろう。その分の見合った報酬として茶封筒がとても厚い。

「ほい金剛、お前も特別厚いな」

「えへへ……」

「戦艦棲鬼を単騎で瀕死に追い込むぐらいだからな。それに見合った

戦果として報酬も多めなんだろう。注意する事だな」

「分かってるヨ」

次に金剛。金剛は最強と呼ばれた戦艦棲鬼を単独で瀕死に追い込ませた戦果がある。それに見合った報酬として天龍のより少し厚い。

「何買おっかなー、ビスマルク姉さまにお土産買おうかなー」

「んー新しい小説を買うのもアリだな」

「後で俺も確かめよ」

やがて全員分の給料が配り終わり、金額を確かめる摩耶とプリンツ。この二人は常に貰ってる分、少し余裕だ。提督も後で確認しようと思いつながら食堂を出ていく。執務室へ行こうとしたその時、誰かに声を掛けられた。

「提督さん、ちよつといいかしら」

「何だエセ医師」

「……まあ悪口は置いといて、少し話に付き合っただけ」

「断る。お前の話なんてろくなもんじゃない」

「薬について、の話よ」

通り過ぎろうとした途端に気になる事を言い出した。薬について何か知っているようだ。鎮守府襲撃の際には一番安全な地下医療室に避難していた■ ■ ■ 医師。勿論提督と前任の話も聞いていた。■ ■ ■ 医師は提督を倉庫裏まで連れ出し、日陰の所で話をする。

「洗脳の原因が改造された戦闘意欲促進剤なら私にも心当たりがあるわ」

「何でそれを早く言わない」

「心当たりよ？ 本当に原因が薬だなんて分かるはずないじゃない」

「まあいい、んで本題は？」

「あの改造された戦闘意欲促進剤は艦娘が人間の命令に忠実になるもの。今は艦娘が特定の艦娘の命令を聞くように作り替えられている」

■ ■ ■ 医師の言う通り、洗脳の原因は改造された戦闘意欲促進剤。本来なら人間の命令を聞くはずが今は艦娘がある艦娘の命令だけ聞いている。それを作ったのは開発者である前の明石。だが開発書類は全て火災によって消し炭になってしまった。しかも彼女だけがその

開発方法を知っている。してやられたと言うべきか。

「だけどそれには穴があった」

「穴？ お前には三つも、ブファ!!」

「……話を戻して、その穴っていうのは時間制限があるという事」

頬を叩かれ、赤い手形が出来る提督。咳き込みした後**■■**医師は話を続けた。

「だけど前任や**■**■ならあるペースに合わせて摂取させていた可能性がある。だけど前明石はいなくなって、使えなくなってしまった……言いたい事が分かるでしょ?」

「つまりは時間が経てばいずれは戻ると言いたいんだろう? まあ確かにどの薬にも時間制限は付き物だ、それは俺も最初思った。だが……」

「だが?」

「もし改造されているのなら時間を引き伸ばす事だつて出来るはずだ。もしくは永続か。その可能性があるのなら俺は計画を実行しなきゃならない」

確かに**■■**医師の推測は正解だ。提督もそれは何回か考えている。

だが艦娘が人間の命令に忠実になると言った無茶苦茶な薬が開発出来るのであれば効果時間を引き伸ばす事など有り得る話だ。もし

■■が時間を考えて、摂取させているとしたらまだ希望はある。

だが効果が永続となれば話は別だ。

「計画? 何の?」

提督が口に指を当て、視線を上に向ける。それは誰かに聞かれているかもしれないと言う警戒の合図だった。**■**■医師は少しヒヤツとするも落ち着きを取り戻す。事の状態を察知し、取り敢えず頷いた。「そういう事ね……ま、取り敢えず私が持つてる情報としてはこれくらいよ」

「まるで珈琲を淹れた後の抽出カスみたいな情報だなあ、何がしたいんだ?」

「そんな睨まなくても、私は元の鎮守府に戻したいだけよ……そう、元の……」

「ん？」

意味が含まれたような言い方をする ■ 医師。とても悔しい表情で手を握っていた。何か思いついたのか、提督に詰め寄る。

「因みになんだけど記憶関係を操れる薬とか無いのかしら？」

「あるにはあるが最重要危険薬だ、今は使えない」

「そう……」

記憶関係の薬は改造されて出来た物であり、最も危険視されている。発覚時は大本営が一斉に取り締まり、火による完全撲滅で荒事は終わっている。現在は誰も開発方法を知り得ていない。

「あ、これも教えとくわ……前任が来る前には——

——もう一人、いたのよ」

「……そうかい。情報提供どうも」

「んじや私はこれで」

■ 医師との話が終わり、提督は執務室に戻る。いつもは書類など早く終わるはずが時々手が止まっていた。ペンを机に何回も突いたりと落ち着いていない様子だ。

「どうしたんだ提督」

「いや、少しイラついているだけだ」

提督がイラつくぐらいの出来事だ。また何かあったのだろう。摩耶は提督の書類を少し持つていき、書きながら話し掛ける。

「イラついているって何があったんだ」

「少々引つ掛かる事があってだね……」

トントントントンとペンを何回も突く。静かな執務室が少しうるさく思えた。すると突然提督が突くのをやめる。

「……どうやら摩耶、俺らはまだ闇の深淵には辿り着けていないようだ」

「まだヤバい事があったのか？」

「ヤバい所の話じゃない。この鎮守府の全ての事情を、いや大本営ごとひっくり返す様な話だ」

提督はニヤついた顔しながらも焦っている。額から汗が流れているのが見えた。これだけ提督を焦らすぐらいだ、大事なだろう。現に手が震えている。

「前任は元々提督じゃなかった可能性がある」

57. スムージーの飲み過ぎには注意しましょう

「……」

朝七時半。

提督は昨日の■■■医師の言葉を考えていた。それは前任は元々この鎮守府の提督では無い説。■■■医師が言っていた、もう一人の誰かがいたという言葉に対して色々考察していた。

もし本当にもう一人の誰か、つまり提督がいたとするならば海軍のリストに乗っているはずだ。だが記録ではこの鎮守府の提督は前任という事になっている。しかも謎な事に何故か誰もそれに関する事を言っていない。仮に上手く騙せたにしても完璧過ぎる。

「提督！」

「何だ島風」

「いいからこっち来て！」

廊下を歩いている最中、島風が物凄い速度で近付いてきた。急ブレーキで風が吹く。突然手を掴まれ、ある場所に連れていかれた。

「来たわねクス」

「あらく司令官じゃない」

「早く来なさいよ、これだからクスは」

「初手から暴言を吐くとは些かお前らの頭も腐ったトマトのようだあ、一度ミキサで限界まで粉碎されて主婦お手製のスムージーになるといい。少しは窮屈な頭も栄養が染み渡って周りを見渡せる事だろう。んで島風、何故この部屋に連れ出した」

「実は摩耶に頼まれて……」

ある場所とは朝潮型の部屋。二段ベッドが複数置いてあり、手前には全員が寛げる広いスペースだ。早速暴言を吐かれるも部屋には入れてくれるらしい。

「マスコミが提督の写真を撮ろうと躍起になってるらしくて、提督を匿う為にこの部屋にいらつて、って摩耶に頼まれたの」

「貴方、神出鬼没で顔すら公表しないレア者なんだってね。朝潮姉に頼まれたから仕方なくいさせてあげるけど何かしたらすぐに追い出

すから」

「俺もマナーのなっていない暴言吐くガキとは死んでも一緒に居たくないんだが、摩耶や朝潮がどうしても言うんだ。仕方なくここにいてやろう。島風、摩耶に変装セット持ってくるように言ってくれ」

「アア!?… 何て言ったこのクズ!!」

提督はあまり表には出たくない。致し方なく朝潮型の部屋に閉じこもる事にした。マスコミが過ぎ去るまで、待機しているもどこか落ち着きがない提督。提督がいるのが気まずいのか、霞達の会話が無い。

思い切って霞が近付き、話しかけてみた。

「……」

「どうしたの……落ち着いていなさそう……だけど……」

提督は壁に寄り掛かり、腕を組んでいた。そして指を動かしながら一線をずっと見ている。

「考え事だ。お前らには関係無い」

「どうせロクでもない事考えてるわ」

「……まあそうかもな」

満潮の言葉を提督は否定しなかった。思わず満潮も少し揺らぐ。張り合いが無いのか、テーブルに腕を掛け、溜息を吐いた。

勿論考え事は前任と存在しない提督の事だ。疑問点が多過ぎて、あまり整理が覚束無い。ある意味この鎮守府は提督が思っている以上に厄介なのかもしれない。

「……司令官は何で髪が白いの?」

「ん? ああ地毛なんだわ。というよりもその質問は何で艦娘の髪の色はそれぞれ違うの、と質問しているようなものだ。以後気を付けろー」

「分かった……んじゃ司令官は神出鬼没なの?」

霞が躊躇いなく提督の脚に寄り掛かる。抱きつくように離れない。振り払おうとするも周りに厳しい目で見られる提督。騒がれても面倒だ、仕方なく提督は許す事にした。

「俺は前は後方勤務でな、裏の仕事が殆どだった。理由としては表に

は出たくないと面倒臭いから」

「有名人気取りなんて随分と偉いのね」

「ああその通り俺は偉いんだ、何度でも言いたまえ。よく考えてみる、知らない奴に突然許可なく写真取られて全国に知れ渡るんだぞ？ 嫌じゃないか？ それと同じだ」

妙に納得がいく答えだ。霞や満潮自身もそう考えてる為、納得しかない。

「提督！」

「おお持ってきたか摩耶」

「いや持ってきては無いんだ。けど……」

「お邪魔するよ」

老いた女性の声が聞こえた。提督や霞達が扉の方向を見る。そこには軍服をマントのように来た老婆がいた。思わず提督が嫌な顔をする。

「ゲツ」

「この人は……？」

「私や南方のこの軍人でね……ここだと初めましてだねこりゃ」

「南方海域の鎮守府を纏める司令長官、■■大佐だ」

南方海域の鎮守府を纏める最高責任者、■■大佐。かつては鬼の大佐と呼ばれ、厳しくも艦娘や憲兵に慕われている。以前演習の相手だった南方中尉の上司だ。摩耶曰く、門を突き破ろうとしたマスコミを止めてくれたらしい。

「マスコミは全部■■大佐が追っ払ってくれた。提督、もう大丈夫だぞ」

「いや俺が大丈夫じゃない!!」

大佐の登場に提督が嘆く。それを聞いて■■大佐は提督を睨みつける。

「久しぶりだね、■■中將。上手くやれているかい？」

「ま、まあ……」

「え……司令官が縮こまっている……？」

あの司令官が反抗する事なく畏まっている。普通ならば暴言の一

つや二つ、言うはずが震えたまま座っていた。畳の上に正座で俯いている。

「摩耶ちゃんに迷惑掛けてないだろうね？ 鎮守府が襲撃されたって言うから驚いたよ。この惨めでノロマでグズで馬鹿で阿呆で口が達者なお調子者の臆病者がちゃんとやっていけるか心配なのさ」

「黙れやクソババア……！」

「何だい、義親に向かってその言い方は!! 本当の事だ、反論する口なんて無いだろう!! 元はと言えばアンタが臆病者だからマスコミが大勢駆けつけて来たんじゃないのかい!! 私が来なかつたらアンタは今頃日本に顔を晒してたんだよ!!」

■大佐が提督の胸倉を掴み、暴言を吐く。提督も少なからず反抗に出た。その様子を見ていつもの司令官だと少し安心する。

「うっせーなクソババア!! 元はと言えばお前の育て方が悪かったんだよ!! 何が軍人の育て方だ、半端な育て方でまともに育つと思うか!?! これだから老害は対応に困る、老害は老害らしく老人ホームで一日中横たわってればいいんだよ!!」

「私の育て方に順応しなかったアンタが悪いんだ!! もう一回うちに来て厳しく育ててやる、来な!!」

「絶対行ってやるもんか!! お前に育てられるくらいなら死んだ方がマシだ!!」

「二人とも」

「一旦ストップ」

摩耶と■大佐の秘書艦である浜風が二人の口喧嘩の仲裁に入った。二人とも息が上がりながらも落ち着きを取り戻す。提督は壁に寄り掛かり、頭を掻いた。

「つか何の用で来たんだクソババア」

「アンタの見舞いとこの鎮守府の下見だよ。ほれ、お土産だ」

お土産にココナッツミルクを投げ渡される。しかし提督はそれを叩き、満潮の顔面に直撃。満潮が白目を向いて倒れ込んだ。霞達が傍に寄り添う。

提督と■大佐は一度朝潮型の部屋を出て、執務室へ向かった。

「はあ……今はそれどころじゃないんだ。早く帰ってくれ」

「何かあったのかい？」

「んまあ少しな……なあクソババア」

「さつきからその悪口やめな!!」

「痛い痛い!! 取り敢えず応接間で話したい……お願い出来ますか？」

「……いいよ。案内しな」

執務室内にある応接間で互いに座り込む。いつになく提督が緊張していた。

「急に畏まってどうしたんだい？ 私の偉さに怖気ついたか？」

「んな訳ねえだろ……この鎮守府が建てられたのはいつなのか分かりますか？」

「そうだねえ……確かこの鎮守府は八年前に緊急として建てられたんだった気がするよ」

深海棲艦と艦娘の出現から約十二年。日本は至る所に鎮守府を設置し、深海棲艦と戦ってきた。提督が正式に軍人として務めるようになったのは四年前。和歌山県にあるこの鎮守府は約八年前に建てられたものらしい。

「そうですか……ではこの鎮守府の最初の提督は■少尉で間違い無いのですか？」

「……違うね。だけど100%、そうとは言い切れない」

「やはり……何故、でしょうか」

「アンタが着任する前の事さ。確かにこの鎮守府には前任が来る前にもう一人、軍人がいた」

やはりもう一人の提督は存在していた。

ならば話は早い。このまま原因を突き止めれば――、

「だが突然姿を消した」

「……は？」

「まあ疑問に思うだろうけど私が言える情報はこれくらいだ。後はアンタが探しな」

「知ってるなら話してください！ 何故勿体ぶるような事を……！」

大佐が立ち上がり、応接間を去ろうとする。

提督が慌てるように大佐に問いただした。中将という身分でありながら義親に対するマナーはちゃんとあるようだ。

「……この先の真実を知りたければ生半可な気持ちで挑んじゃいけないよ。相当な覚悟が無ければ歩く事すら出来やしない」

「誰もが関わりたくない、話したくないって事ですか」

「まあそうなるね。この事に関わった連中やマスコミは何故か謎の失踪を遂げている。私はそれぐらいしか知らないし、安定した暮らしさえありや気にしないけどさ、この事に関してはごめんだよ」

大佐が真剣な眼差しで提督を見る。例え義理の息子だろうと心配はしているようだ。提督は事の状態を上手く察する。もしかすればこの事は本当に大本営ごとひっくり返し兼ねない事になる、と。

「大本営……あれは闇より深い暗黒の世界だ……気をつけな」

「分かり……ました……」

「んじや私は天龍ちゃんと少し話した後に帰るとするよ。摩耶ちゃん、案内出来るかい？」

「は、はい。こちらです」

「貴方も臆病者ですね……」

「……頑張りな」

すれ違いざまに罵る提督。大佐はただ一言、励ましの言葉でその場を去った。摩耶は天龍の場所まで案内する為、執務室を抜ける。提督は一人、執務室で考えた。

「天龍ちゃん、元気かい？」

「あ、あの時の婆さんか……？」

見覚えのある声と顔。間違いない、あの時自分を助けてくれた恩人だ。天龍は嬉しい顔で大佐の手を握る。

「ありがとう……アンタのおかげで、俺は強くなれた……！」

「聞いた時はビックリしたよ。南方棲鬼を単独撃破したんだって？ 凄いじゃないか！」

「ああ……！」

久しぶりに出会えて天龍も嬉しそうだ。とても手が暖かく感じられる。

「……良かったね、とてもよく頑張ったよ！ あ、ちゃんと準備は怠ってないだろうね？」

「勿論！ 提督にバシバシ鍛え上げられてるぜ！」

「なら良い。言っただろ？ 強くしてくれる指導者がいるって」

「ああ全部アンタのおかげなんだよ、本当に……！」

天龍は手を握ったまま、涙を零した。大佐の言葉を思い出せなかったら今の自分はいないだろう。南方棲鬼も倒せなかっただろう。目の前の恐怖に立ち向かえなかっただろう。大佐には感謝してもしきれないほど恩がある。

「あの馬鹿はこれからも調子乗って色んな事してくるだろうけど、頑張りなさいな」

「ああ頑張ってやるぜ！」

やがて大佐が帰り、摩耶は執務室へ戻る。中に入って提督がいるかどうか呼び掛けた。提督はまだ応接間で座っていた。

「提督ーってまだここにいたのか」

「まあな。少し資料をまとめてたところだ」

応接間のテーブルには白紙にズラつと文字や図が書かれていた。

全部で計十二枚、裏表共に事細かに考察が述べられている。

「クソババアの言葉で確信した事が一つある」

「何か分かったのか提督」

「ああ……恐らく大本営はこの事件を隠蔽したんだ」

提督がスマホの画面を見せる。そこにはグーグルで検索され、出たキーワード。キーワードの名前は■■■■鎮守府憲兵殺害事件。六年前にこの鎮守府で憲兵が殺害された事件である。

■■■■鎮守府憲兵殺害事件……四年前に何者かに憲兵が一人殺されたって事件か……嫌な事件だな……」

「お前が起こした事件よりは百倍マシだけどな」

「うっ……で、でも憲兵なんだろ？」

「違う。これは表向きに作られた偽の事件の可能性がある。俺の推測ではあるが……殺されたのは憲兵じゃない。この鎮守府のもう一人の提督だ」

提督が自身で書き留めた資料を並べる。描かれた図を元に提督は推測を読み上げた。

「この際もう一人の提督は言うのが長いし面倒臭いから？α？と呼ぼう。？α？は元々この鎮守府の提督だった、だが突然誰かの手によって殺害。面倒な事に殺人犯は艦娘だった。それを大本営は国民の信頼に関わるとして表沙汰には憲兵の殺害事件と呼称。艦娘は処分決定のはずだったがある男によって止められた。それは当時提督候補生だった前任。前任はその艦娘に何かしらの保護を約束したのだから、その身を庇った前任は瞬く間に提督として着任した」

考えうるシナリオとしてはこの程度だろう。前任がもし提督じゃないと言うのならこの推測は罷り通っている。

「そして地獄が生まれ、その艦娘がこの鎮守府に今もいる、と……」
「恐ろくな。だがこれはあくまでも俺の推測だ、必ずしもこれだとは限りにくい」

提督が資料を掴み、テーブルに投げつける。あの鬼の大佐が関わりたいくない理由が今になって分かった。再び頭を悩ませ、溜息を吐く。

「推測が正しければ嫌でも大本営の汚職ぶりを目にする羽目になる」
事件なんて知れば嫌でも大本営の汚職ぶりを目にする羽目になる」

「汚すぎる……あまりにも、屈辱的だ……！」

「従える艦娘達にとっては最悪だろうなあ。本当ならば俺も心底ゲスすぎて吐き気がする。だがこれは推測だ、そう真に受けるな」

「これは激しくなりそうだ……」

58. 馬鹿に感染る細菌は余程の馬鹿である

不確かなまま、また一日が始まった。早めに起きた古鷹は洗面所で顔を洗っている。鏡の前に立ち、少し考え事をしていた。

「また変な夢見たなあ……」

それはこの鎮守府とは程遠い、自分達の日常の風景。皆楽しそうに時間を過ごしていた。加古も、自分も。少しばかり涙が出そうだった。もしこんな日常が手に入るのなら何としてでもやり遂げたい。涙を拭って鏡に精一杯の笑顔を見せ、古鷹は部屋を出る。

「ああ」

部屋を出た途端、加古と目が合ってしまった。同じタイミングで部屋を出たようだ。流石に少し気まずい。

「……加古、おはよ……」

「……チツ」

気安く挨拶する古鷹を無視し、加古は別の場所へ行く。ここ数日間、何回も話しかけているが食堂の件以外は話し合えていない。

「はあ……ダメダメ挫けてちゃ！ 元気を出すのよ古鷹！」

古鷹は両頬を叩き、自分を励ます。何回も続けると自分で決めた。まだ挫けてはいけない。古鷹は加古とは反対方向の執務室へ向かった。

「提督！ おはようございます！」

「何でコイツらは朝からうるさいんだ、頭が痛くなる」

「元気になった証拠だろ。んで、どうしたんだ古鷹？」

「いえ！ 挨拶がしたかっただけです！」

えらく上機嫌な古鷹に惚ける提督と摩耶。流石に提督も手が止まってしまった。ペンが転がり、床に落ちる。

「……何か気持ち悪いな」

「何でそう否定的に捉えるのかあたしには理解出来ないね」

「うるさい、今日分の書類を書き終えたらやる事があるんだ。さっさと終わらせるぞ」

遠征の報告書や改修工事のリスト、申請書など書類は山ほどある。

それを終わらせて提督は？α？に関する事件について調べたかった。
「あー疲れた……」

午前が過ぎ、書類を粗方終わらせた提督は広場で背を伸ばしていた。気分転換に外に出てみたがこれもまた一興だ。摩耶からはマスコミが張っているかもしれないから変装しろと注意されている。提督は整備兵の格好で西騎士の仮面を被り、長い黒髪のカツラを被った。そのおかげか凄いが楽だ、ベンチに堂々と横になれる。

「そんな所で寝ていたら風邪引きますよ司令」

「うるさい黙れー、俺は寝たい時に寝るんだー。邪魔するなー」

「折角話し掛けてあげたのにその言い分は理解しかねます」

「つて言いながら何故隣に座る不知火。訓練はどうした」

不知火が訓練を抜け出し、提督に話し掛けてきた。

提督が寝ているベンチに座る。

「休憩です。少し休みたい気分なので」

「落ち度があり過ぎて頭も相当おじやんのようだ。後で医師にもう一度脳みその奥まで顕微鏡でしか確認出来ない間抜け専用の細菌をレーザー治療で駆除してもらおうといい」

「勝手にそうさせていただきます、元司令」

元司令官。

不知火は提督の元部下のようだ。川内や摩耶と同じく提督に育てられた艦娘。道理で馴れ馴れしいはずだ。

「流石に私が居なかつたのは堪えましたか？」

「別に、何とも思わなかつたな」

「そうですか。まあそう言うと思いました。膝枕でもどうです？」

「ぜひ頼む」

掌を枕代わりにしていた提督は即座に頼んだ。不知火はいつもの司令官だと微笑みながら太腿に司令官の頭を乗せる。司令官は嘘が得意だ、話した時少しばかり声が震えている。

内心寂しかったはずだ。だが司令官は声には出さない。この時間が不知火とつては懐かしく思えた。

「相変わらずですね、司令官は」

「お前も相変わらずの氷河期だなあ、そんな奴をどこかで見た事がある」

懐かしいあだ名だ。表情を表に出さないままクール気取りの艦娘として一時期そう呼ばれた事がある。恐らくこの鎮守府の加賀も呼ばれているのだろう。

司令官と話すだけ、あの時の思い出が甦る。当時の自分達と共に戦ってくれた事や司令官の過去の真実を聞いて驚いた事。時々暴言を吐かれてイラつくような事もあったが、司令官は絶対に自分達を見捨てたりしなかった。自分達が間違いを犯しても司令官は必死に庇ってくれた事もある。とても楽しい毎日だった。仲間と共に過ごし、共に戦い、互いに笑い、互いに励まし合ういつしかの日常。

だがその日常は司令官が大本営に勤務する事なった日に崩れ去る。

「地獄……でした……」

不知火は泣きながら語る。自分達を兵器としてぞんざいに扱い、非人道的な罰を受け、仲間同士が罵倒し合う思い出したくない地獄。川内と共に改めて戦う鎮守府は深海棲艦以上に残酷だった。

「常識が何も通じなくて……ルールも関係無くて……非人道的で……最悪でした」

「だろうなあ」

「あの時はいつも思っていました……私がこの世に生まれた意味は何なのか、と……」

不知火は優遇制度により前任に迎えられたが、洗脳は効いていなかった。それに気付いた前任は不知火を殺そうと追い掛け回され、**■**医師によって匿われた。大した外傷は無くとも心に精神的なダメージを受けてしまう。川内はどうなっているのか分からない。何度も悪夢に苛まれ、自分は何なのか精神崩壊をした事もある。

「でも司令は言ってくれましたよね？ 私達が存在意義を自身に問い掛けたら兵器でも人間でも無くなってしまおう、と。その言葉を思い出したから私は、今まで生き残る事が出来たのかもしれない」

「まさかまた問い掛けていないだろうか？」

「まさか。大丈夫です、私は誇りある名を持つ兵器であり気高き人間

です。もう揺るぎません」

「……ならいい」

「……でも、もし私の中に司令がいなかったら……私は、自殺してました……」

あの言葉を思い出さなかったら不知火は自暴自棄で自殺していた。姉妹は全員沈んだ、自分は何故生き残った、何故こんな事になった、訳が分からない、何の為に自分は生きているのか。精神を脅かされ、何度も自問自答し続けた。

「貴方のおかげです。本当に……」

「そりゃ良かったあ」

不知火は改めて司令官に感謝した。司令官のおかげで立ち直れた事、そして再び出会えた事に。もうこの人がいれば百人力だ、この鎮守府なんて敵ではない。

「あ、皐月達と久しぶりに話しました。相変わらず元気で良かったです。北上さんもまた強くなって驚きました」

「やっぱ観てたんだな、あの演習」

「はい、観てました」

■に匿われていた不知火はテレビ越しに演習を観戦していた。早く司令官に会いたいと思いつつも敵の北上や味方の加賀や鈴谷の事を密かに応援していたのは秘密である。

「あれ不知火、何してるの？」

古鷹が傍を通り、不知火と提督に話し掛ける。古鷹も訓練が終わりに、休憩の為に来ているらしい。珍しい二人の組み合わせが気になったようだ。

「司令が疲れてたらしいので少し膝枕を」

「コイツが頼んできた事だ、俺は悪くないぞ古鷹」

「分かってますよ。提督、後で話があるので夜にお時間いただけますか？」

「口くでもない話なら速攻追い出すからな」

「大丈夫ですよ、ありがとうございます！」

古鷹は提督と約束した後、訓練に戻っていった。古鷹の後ろ姿を見

て、不知火が気付く。他の艦娘とはただならぬオーラのようなものを感じた。

「古鷹さん、強くなってますね……」

「やっぱお前でも分かる？」

「はい。身体中から物凄い戦闘意欲が溢れ出ています」

あの雰囲気はあの北上と少し似ている。実力はまだまだというものの潜在能力は無限大の可能性を秘めているようだ。提督もその事は少しばかり気付いていた。

「……そうか」

時間が流れ、夜となる。古鷹と約束していた提督は古鷹が来るまで？α？に関する資料を纏めていた。摩耶には先に終わらせて部屋で休ませている。机のライトだけ照らした暗い執務室には提督一人しかいない。その中で古鷹が執務室に入ってきた。

「んで古鷹、話つてのは？」

「はい、近日中に演習を申し込みたく思っています！」

古鷹が演習の申し込みを要請してきた。自信満々に話すその表情は活気に溢れている。確かに訓練とあの戦闘で経験値は稼げている事だろう。それを聞いて提督はニヤリと微かに笑った。

「ほう……そうか。演習メニューは決まったのか？」

「いえまだ私と加古、長門さんと雲龍さんしか決まっています！」

「……なるほど。分かった、こちらで埋め合わせはしておこう。演習相手も選ばせてもらおう。いいな？」

「はい！ お願います！」

元気に古鷹は執務室を去る。提督は執務室でまた一人、資料を纏めた。深夜一時まで黙々と書き写していく中、物音が聞こえた。

「……聞いてたろ……□□」

ドアの向こう側から声が聞こえる。だが■■■の声ではない。もう一人の別の存在だ。

「よくお気付きで」

「わざと気付くようにしてたのはどこのどいつだと思ってる」

流暢に会話する二人。提督は事前に□□の気配を感じていた。少し物音を立てて気付かせるように面倒臭い真似までしている。

「あら分かっていただけましたか？ それはありがたい限りです」

「早く本題を言え」

「せっかちですね貴方は……まあ前置きはもういいでしょう……明石の事なんですが——」

「——別に殺しても構いません。もう必要では無くなったので」
「……」

前明石を助ける気もなく、殺しても構わないという。流石は提督を一度欺いただけの事はある。前明石を助けるような奴がいたら捕まえるつもりだった。分かりやすい罠には引っかけられないようだ。

「分かった。こちらで処理しておこう、まあお前も慈悲が無いな。明石をトカゲのしっぽ切りにしたか」

「それは勿論、失態を犯した艦娘は裏切り者として処理するのがルールですので」

「殺伐としてるねえ」

「……では、お願いしますね」

足音が徐々に遠くなって聞こえる。話が済んだのか帰っていったようだ。提督は別の存在□□との話で警戒する。

「……仕掛けてきたか」

提督との話が終わり、暗い夜の寮の裏道を進む□□。月の光は影が出来るほど輝いており、広場を照らしている。艦娘達は就寝し、見回りする者は誰もいない。

すると裏道の闇影から青白い目が光った。

「計画はドウダ、□□」

「■■や提督にはバレていませんよ。大丈夫です」

「……ソウカ」

謎の存在と会話をする□□。静かに話す二人は誰も気付かれてい

ない。

「貴方達はまだ潜伏を続けて下さい。合図次第向かってもらいたいと思います」

「分かつた」

「……思い通りに行くと思ったら大間違いですよ……■、提督」

59. 短気な相手は煽れば案外チヨロイ

「テイートークー助けてー」

「何やってんだお前ら」

朝十時丁度。

金剛が執務室に入ってきた。よく見ると様子が変だ。どこか疲れ
てるように見える。

「島風と比叡がくっついて離れないんデース」

「知るか。お前らで処理しろ」

金剛の両脇に比叡と島風がくっついていて、蟬のように全く動じ
ない。ただ黙って抱きついている。面倒臭い事に巻き込まれるのは
嫌なので金剛に投げ出した。

「つか比叡とはもう仲が直ったのな」

「はい！ ですがこれで許されたつもりはありません！ 全力で見返
すつもりです！」

「あ、ああ……まあやる気になってるのならこちらとしては文句は無
いが……金剛はいいのか？」

比叡は目が覚めるまで姉の金剛を蔑んだ記憶がある。あの戦闘後、
比叡は金剛に必死に謝り続けた。金剛自身は許しているが、比叡
はそう思っておらず、鈴谷や加賀のように見返したいと心意気を語っ
ている。妹の榛名や霧島とは完全に孤立し、今は部屋に一人で過ごし
ているとか。いつしか金剛と一緒の部屋になりたいという。

「大丈夫デース。問題ありませんヨ」

「なら構わん。というよりも島風、何故お前は金剛から離れない」

比叡は良いとして島風が何故か離れない。頬を膨らませ、ずっと抱
き締めている。

「速いから!!」

「ああ……そう……」

「速いから!!」

「はいはい分かったから」

島風の中では金剛はとても速い艦娘の仲間だと思っている。戦艦

棲鬼との戦闘で圧倒的な速度で海を駆けていた金剛を見て興奮したのだろう。実際島風の目はキラキラとしている。

「速いから!!」

「分かったからさっさと早く出ていけェ!!」

金剛達を執務室から追い出し、仕事を続ける提督。朝からうるさい艦娘達に頭を悩ませた。ここ最近やたらと艦娘が元気というか慣れ親しんでくる。正直面倒な所だ。

「提督も馴染んできたな、ここに」

「馬鹿言え、侵されているだけだ。自然と取り戻すよ」

「ま、あたしとしては提督が楽しければ何でも良いんだけどさ」

「楽しそうとかやめてくれ摩耶。俺はアイツらと馴染む気は一切無い」

馴れ合うつもりも無い。必要な会話以外話す事は何も無いと提督は思っている。しかし摩耶にとってはあの時の日常が戻ってきたようで少し安心していた。馴染む気は無いと何回も言ってはいるが無意識に近いだろう。

「はい、こちら■■■鎮守府」

『あーもしもし、お前がここの責任者?』

提督は通信環境を新しくしていた。執務机に電話機を設置。食堂にはテレビを設置し、外の世界に関心を持たせている。

しかし■■■の対策として艦娘にはインターネットの使用禁止。外出も容易には認めておらず、欲しい物があれば提督に申請され次第、許可が降りるように整備している。

「そうだが、何の用だ?」

『私は駿河鎮守府の■■■少尉です。お前の艦隊と演習がしたいんですけど』

駿河鎮守府の提督が電話で話し掛けてきた。提督が中将なのを知らないのか少し馴れ馴れしいところが分かる。敬語すらまともに使わない。

「……………いいでしょう。日時は?」

『あー決めてなかったな……………まあ勝手にそっちが決めてくれ。決ま

り次第連絡よろしくー』

勝手に物事を決められ、勝手に切られる。提督は受話器をゆつくりと元の場所に戻し、静かに指を組んだ。

あまりの失礼ぶりに摩耶は言葉を失う。恐る恐る提督の反応を確かめた。提督はマナーがなつてない輩がこの世で一番大嫌いだ。このせいで何回か人を殴った事がある。

「……凄いマナーがなつてなかったな、今の」

「あそこのクソ馬鹿は■■大将の馬鹿息子だ。馬鹿みたいに甘やかされて馬鹿みたいに世間の広さも知らずに馬鹿のように生きていたのだらう。マナーもなつていないとは馬鹿なのに随分とお偉くなったものだあ、馬鹿なのに」

「演習は受けるのか？」

「全力で叩き潰す!! あの身の程知らずのクソガキを息の根も無く完膚無きまでにぶちのめすぞ!!」

「だと思つてたよ」

提督の案の定の行動に摩耶は笑う。

こうなれば提督は止まらない。嫌いな相手を容赦なく叩き潰すのが大好きな性格だ。ありとあらゆる手段を使って勝ちにいくだろう。先程まで古鷹の演習の編成に悩んでいたが即刻決めたようだ。

決まった艦娘を呼び出し、執務室に入らせる。呼ばれたのは古鷹、

加古、長門、雲龍、摩耶、翔鶴。

「って事で演習は古鷹、加古、長門、雲龍、摩耶、翔鶴になったからよろしくー」

「ふざけんな! 何で私まで入つてんだよ!!」

勝手に演習のメンバーに決められ、物議を醸す加古。話なんて聞いてないと怒っている。提督からは古鷹が言っていたが実際はどうなのか。

「古鷹から許可が降りたと聞いているが？」

古鷹に視線を移す。

加古は古鷹を敵視し、鬼のように睨む。

古鷹は目を逸らしつつ、手の平で顔を隠した。笑っているのか何考

えているか分からない古鷹に加古は反対する。

「私は演習なんか出ねえぞ!! コイツと組むなんて真つ平ごめんだ!!」

「と言ってるが古鷹」

「別に構いませんよ。だって私に越えられるのが怖い……みたいなので……」

「(???)」

古鷹は何故か涙を流して泣いていた。しかも今、若干煽ったような気がする。古鷹と加古以外の提督と摩耶達は頭の中ではなマークを浮かべた。加古の反応を確かめる為、目線を加古に移す。

「……ちよつと待てよ……何つった今ア!!」

「うっわ、チョロい」

案の定加古は激怒する。古鷹の胸倉を掴んで睨みつけた。圧倒的チョロさに思わず提督が口を開いてしまう。

「そこまで言うなら格の違いを見せてやるよ!! 私が如何に強いって事をなア!!」

勢いよく執務室を出ていく加古。取り残された長門達と提督は惚けていた。

「なあ長門。アイツ、あんなに扱いやすかったか?」

「いや、ただ単に古鷹がずる賢く……なっただけのような気がするぞ」

「……あー確かに、こりゃ計画通りって顔してるわ」

「勝手に人の顔を見ないでください!!」

提督は古鷹の顔を覗き、どんな表情かを確かめる。古鷹は少しばかりニヤついていた。これは確信犯に近い。提督は頬を引き攣った。

「ま、取り敢えずだ。演習に関する情報は後で渡しておく。しばらく待っていてくれ」

「分かりました!」

摩耶以外の艦娘達は執務室を去る。静かになったと落ち着き出した時、鳥海がある艦娘達を連れて執務室に入ってきた。

「提督、新たに艦娘が着任しました」

入ってきたのは大和型戦艦の大和と武蔵。かつての戦争で日本海

軍の切り札、世界最大の超弩級戦艦として君臨した最強の軍艦だ。艦娘としての戦闘能力も凄まじく、海軍から信頼されている存在。だがその戦闘能力故に資材消費も凄まじい。

「大和型戦艦、大和です！ よろしくお願いします！」

「武蔵だ、よろしく頼む」

身長は百九十近くはあるだろうか。提督より身長が高い。巨人を思わせる姿に普段は圧倒されやすいが提督は何の表情も変えずに近づき、握手を求めた。

「おーこちらこそよろしく頼むよお。何せ戦力が足りなかつたからなあ」

「この鎮守府は前に襲撃され、深海棲艦を追い返したと聞いていたが本当なのか？」

「ああ本当だ。建物の瓦礫を見て分かるだろう？」
「確かにな」

この二人も鎮守府襲撃の件については聞いているようだ。少し不安に思っているらしい。こちらとしてはどうでもいい事だが。

「あ、大和。艤装展開出来る？」

「は、はい、勿論……」

何も無いところから重量感のある艤装が展開された。艤装に装備されている46cm砲が凛々しく見える。流星は大和型戦艦と言えるだろう。提督は大和の艤装の上に座り、心地良さを確かめた。

「うーむ良い座り心地だあ。大和は重くないか？」

「いえ、重くありませんよ」

「ならばよし。移動する際に大和に乗っていけばめっちゃめっちゃ楽になるぞ……キシキシ……」

変な笑い声を上げ、何か企んでいる。大和はニコニコと睦まじく眺めているが武蔵が少し驚いた表情をしていた。

「あーすまん大和。コイツ、少し頭がイカれてんだ」

「イカれてるとは聞き捨てならんな!! 賢明な提督と言いたまえ!!
こちららここ数日間寝ていないんだ!! 少しぐらい楽しかったっていいだろう!!」

提督は？α？について調べており、何日間か寝ていない。自身の所為じゃないのかと心の中で思いつつも武蔵は摩耶に問い掛ける。

「提督の言い分は通ってるが実際どうなんだ摩耶？」

「あーまあ本当の事だよ。賢明な提督以外は」

「だったら提督よ、私の艀装に乗っても構わんど。少しは楽になれる」
「おーマジか！ んじゃありがたく乗らせて……あれ？」

大和が艀装を動かし、乗るのを避けるようにする。艀装に乗られたのが良かったのか独り占めしたいそうさだ。

「私でも良いんですよ？ 提督？」

「んーそうだな。じゃあこっちにするわ。武蔵は後で頼む」

「大和が言うなら仕方あるまい、提督の言う通りにしよう」

「提督、新しい艦娘がまた着任しました！」

60. 胸を気にし過ぎるのはあまり良くない

「秋月型駆逐艦、秋月、照月、涼月、初月、着任しました！」

「磯風、浦風、谷風、浜風もいます！」

「そろそろ来たな、駆逐艦共」

提督が呉鎮守府で建造させた駆逐艦御一行が着任した。申請した通りの望みの艦娘が来てくれたようだ。後輩には後で褒美をあげよう。

「ようこそ我が荒くれ鎮守府へ。俺はこの鎮守府の提督だ、以後よろしく頼む」

提督は大和の艦装に座りながら挨拶をした。違和感ある光景に駆逐艦御一行は困惑している。随分と態度がデカイ提督だ。

「お前らはもう聞いているだろうがこの鎮守府は以前深海棲艦の襲撃を受けている。だがこの有能な俺とここの艦娘共によって追いついた」

着任する前にその話を聞かされた事がある。荒くれ鎮守府が深海棲艦の襲撃を阻止し、追いついたと。荒くれと聞いて浜風は不安に思っている、手を挙げた。

「何だ浜風」

「この鎮守府は以前まで環境が最悪だったと聞いていました。今はどうなんでしょうか？」

「あーそうだなー……まあその通りだ。お前らは期待に胸膨らませてこの鎮守府に来た事だろう。実際胸デカいやツア、ア、ア、ア、ア」

息を吸う様にセクハラする提督を殴る摩耶。先程まで大和の艦装に乗り、大和の肩に寄り掛かっていた。舌を噛んだ提督は痛みに悶絶する。

「舌噛んだクソがッ!! はあ……話を戻すぞ。先程言ったようにこの鎮守府での生活を楽しみにしてた奴もいるだろう。これは大和や武蔵に言っただけでなかったな」

この鎮守府にとっての最大ともいえる課題。試練、又は目標とも言

えるだろう。

「この鎮守府は深い闇に包まれている」

「深い……闇……」

「厨二病か？」

「アア!? んだと磯風!!」

怪しがる磯風に提督は怒鳴る。感情豊かな提督に良い印象は持てていない。自分達の中で不思議というイメージが膨れ上がっている。ようやく落ち着いた提督は話を戻した。

「違う違う、この鎮守府は前任によつて……あーもう面倒臭えな。摩耶、頼むわ」

「へいへい」

面倒くさがった提督は説明を摩耶に任せた。机の資料を取り出し、分かりやすい所から説明していく。

「私はコイツの秘書艦を務めてる摩耶だ、よろしくな。早速だけどこの鎮守府は浜風の言う通り、元々環境は最悪だったんだ」

「私達を人として見ない的事でしょうか？」

頭の良い浜風が質問する。理解しているだけこちらも話しやすい。摩耶はこの鎮守府について細かく説明した。

「ざーっとこんなもんだな。前任によつてこの鎮守府の艦娘達は酷く心に傷を負つてる。実際に仲間同士で蔑み合うなんてしよつちゅうなんだ」

「信じられないな……」

「だろ? 谷風。原因は前任による優遇制度、艦娘が艦娘を差別する、差別意識が出来てるんだ。だからこの鎮守府で生きていくならある事を守って欲しい」

新しく着任した艦娘が眨められないように。これは摩耶が自身で考えた注意策だ。これからこの鎮守府を戻す為に。

「差別している艦娘達に無闇に歯向かわない事。そして差別された艦娘の味方になって欲しい事。この二つを出来るだけ守って欲しい」

「複雑、なんですわ……」

「悪いけど秋月達が思っている日常はまだ来ない。ただでさえ提督が

ここまで持ち上げて来たんだ、まだ始まったばかりなんだよ」

提督から聞いた話では、まだ始まったばかりらしい。最終目標に向けて、様々な事をしてきたがまだ課題がいくつか残っている。未だに最終目標までの道は明確に出来ていない。

「だからといって闇に立ち向かう意志も忘れちゃいけない。もし秋月達が望む日常に戻りたいなら提督の為に手伝って欲しい。この鎮守府をより良い場所にする為に……戦ってほしい……」

摩耶自身が頼む誠心誠意の願い。この艦娘達の苦しみをよく理解しているからこそその願いだ。この鎮守府再建の為に摩耶は頭を下げた。

「分かりました。皆仲良くなければ戦う上でも支障が出ますからね。私は手伝いますよ、提督」

他の艦娘もその意見に賛同のようだ。提督としてはこちら側に来てくれるなら何も文句は言わない。同調しようがしまいが結果が良ければそんな事など考えるつもりは無い。

「……なら構わん。大和と武蔵は？」

「勿論手伝いますよ♪」

「大和と同意見だ」

「上々だ。何か質問あるかー？」

提督が手を挙げ、質問があるかと問い掛ける。その中で磯風がふと疑問に思った事を口にした。

「はい磯風」

「失礼な事を聞くようですまないんだが、何故司令と摩耶はあの敵に似ているんだ？」

新しく着任した駆逐艦御一行が感じていた違和感はまさにこれだ。大和や武蔵も思っていたが気を使って問わないようにしていた。確かに提督と摩耶は深海棲艦に似ている。磯風はどうしてもその訳を知りたかった。

「それ聞いちゃう？」

「質問として、だ」

「うーん、そうだなー……」

提督が上を向き、考え始める。腕を組みながらどうしようか悩んだ。大体こういう時の策は考えてある。

「全てやる事終わらせたなら教えてやるよ」

「やる事となると……この鎮守府の闇の祓いか……」

「そう。ついでに他の艦娘に教えてやれ、全ての闇を祓いたら……俺や摩耶がここに理由を教えてやるってな」

提督がここにいる理由、提督の過去、摩耶の過去、本当の真実を全て話すという。若干無茶振りに近い条件ではあるが達成出来ない訳では無い。

「まあ興味あろうが無かろうがお前らの自由だ、好きにやりたまえ。だが……俺に楯突こうものなら全力で叩き潰すから、そこんとこよろしくー」

敵になれば容赦なく叩き潰すと忠告する。摩耶以外の艦娘はそれが冗談に言っているようには聞こえなかった。摩耶は何度もその場面を見てる為、平然としている。

「さて話は終わり。それぞれ部屋にご案内だ。摩耶、鳥海、案内してやってくれ」

「分かった」

「分かりました」

執務室がまた静かになった。新しく着任した艦娘達を見届け、提督は机に座る。先程から手から違和感を感じていた。あまり思うように動かなくなってきた。

「……手が疼くな……」

部屋を案内され、一息ついた磯風達は鎮守府を探索していた。早く鎮守府の生活に慣れる為、それぞれの場所を把握していく。鎮守府襲撃の一件後、建設業者が着々と食堂や倉庫を建て替えている。浜風は提督の言っていた事が少し気に掛かっていた。

「仲間同士で蔑み合うって本当なのでしょうか……」

「でもそんな雰囲気は無かったな」

「直接見た方がええ言うもったいで」

「でもそんな場面……あ」

軽巡察の廊下を通りかかっている途中、谷風がその場面を偶然見つけてしまった。姿がバレないように壁に身を隠す。四人でトーテムポールのように顔を重ね、場面を覗く。

「何か用か？ 矢矧」

「別に通りかかったただけだ。話し掛けるな」

「釣れないな、今まで殺気を溢れ出したというのに」

木曾と矢矧が互いの顔すら見ずに話している。それぞれの気迫が殺気立ち、膠着状態が続く。谷風が少しばかり怯えた。

「貴様らに関わってる暇は無い」

「だろうな。今はそれどころじゃないもんな、普段から見下していた鉄屑に煽られてイライラしてるようだ」

「……は？」

「凶星か？」

ようやく目を合わせ、関節を鳴らす木曾と矢矧。腕を回したり、指を動かしたりと準備万端のようだ。白い息を吐き、血管を浮かばせる。

「いい度胸してるな、褒めてやる」

「上から目線で調子乗ってるのも今のうちだぞ」

「あーこれは確かに酷い……」

「矢矧と木曾が戦闘準備状態……」

「お、摩耶が来たぞ」

「止める気なんじゃろうか？」

膠着状態が続く木曾と矢矧の間に摩耶がその中に入る。そしてそれぞれ頭を掴んで、額を衝突させた。木曾と矢矧は意識を失い、互いに倒れ込む。

「いがみ合っていないでさっさと訓練戻れ!!」

摩耶が怒号を放ち、木曾と矢矧を抱えてどこかへ行ってしまった。何とも言えない場面に磯風達は言葉を失う。

「……」

「何か……母親みたいだな……」

「まあ……気にせず行きましょう」

一方、秋月達は部屋で身体を休めていた。部屋は四人部屋でとても広く、二段ベッドが二つ置いてある。提督が言っていた事とは裏腹に少しも不安は感じない。

「秋月姉、どこ行くの？」

「少し鎮守府を探検しようかなと思ってるの。皆行く？」

「そうですね。把握しなければならぬ事もありますし」

「僕も行くぞ」

姉の秋月に着いてくるように照月達もその後を追う。駆逐艦寮は殺伐としており、人の気配は全く感じない。外に出た秋月達は広場へ向かった。

「古鷹と加古だ」

「何か話し合ってるぞ」

「姉妹だから仲良い……」

仲睦まじそうに見えた古鷹と加古。だが加古が古鷹を殴り、その場を去った。仲間同士の仲が悪いという場面を偶然見してしまう。想像以上の出来事に照月は驚いた。

「あれ!？」

「殴ってしまいましたね……」

「……提督の言う通りらしい」

「あーまた殴られちゃったな……ん？」

偶然見ってしまった秋月達に気づいた古鷹。古鷹は立ち上がり、土埃を払う。秋月達に近づき、笑顔で謝った。

「あーごめんね。見苦しい所見せちゃったね……」

「本当に仲が悪いのだな」

「そうだね。多分提督から聞いてるだろうけど私達はあまり仲が良くないんだ……あ、私は古鷹。これからよろしくね!」

古鷹は手を伸ばし、それぞれ握手する。妹に殴られたとはいえ笑顔なのが少し不気味だ。それだけ慣れてしまったのだろうか。

「悪い事を言うようでごめんんだけど古鷹は差別された側の艦娘で

間違いはないー……んだよね?」
「そうなっちゃうかな……あ、ごめんね。プリンツさんに呼ばれ
ちゃった。また後で話そうね」

「思ったんだが瑞鶴……」

「何? 提督さん」

「最近の駆逐艦の胸デカくね?」

「嫌味なの? ぶち転がすよ?」

61. チヤホヤされるのは猫だけでいい

「ただいまより点呼を取る！」

「はい！」

「準備はいいか！」

「はい！」

「番号！」

「いちから——」「よーん」

「横着すんなアア!!」

古鷹と雲龍がふざけ始め、提督がツツコミを入れる。今日は駿河鎮守府との演習当日、時間は昼十二時。岸边沿いで古鷹達は待機していた。

「さて出発だ。プリンツ、俺がいない間はお前に任せる」

「分かりました！ 行ってらっしゃいませ！」

仕事の処理をプリンツに任せ、提督達は駿河鎮守府へ向かう。荒くれ鎮守府から駿河鎮守府まではそう遠くない。艦娘達が通常走行すれば約二時間で到着する距離だ。提督は大和の艤装に乗り、悠々自適に過ごしている。

「大丈夫ですか？ 提督」

「問題無い。清々しい気分だあ」

「呼んだのは移動の為では無いのだろうか？」

「まあねー。実際に演習を見てもらってレベルを感じてほしいから呼んだのもある」

「一番は？」

「移動に金を掛けたくなかった」

提督のケチっぷりに困惑する古鷹達。途中道草を食った後、二時間半に駿河鎮守府へ到着した。港では直々に提督が歓迎してくれている。

「ようこそ我が駿河鎮守府へ。俺はここの責任者である ■■■少尉、まあよろしくな」

「……よろしく」

相手を尊重しない、無作法な人間だ。流石の提督も言葉を失っている。例え演習相手が下であろうと互いを敬うマナーがある。だがこの少尉にはそれが無い。

「申請は通ってんの？」

「既に大本営も把握しているので問題はありません」

「ならやろうか」

古鷹達を演習海域に向かわせ、提督は司令室に案内された。鈴谷達の演習のようにそれぞれ司令室を借りて行われる。今回は大和と武蔵を入れて、指揮をする事にした。

「……だろいな」

提督が机の周りをうろちよろと見る。提督は机の中に入り、ある部品を取り除いた。

「つあれ？ 聞こえねー」

「俺が使う手を俺が嵌る訳ないだろう。さてボコボコにしてやれ、馬鹿共」

以前提督が使用していたズルを見破ったようだ。これで相手からはこちらの音声は聞こえない。それぞれ演習開始のホイッスルを上げ、演習が始まった。

「演習開始だつてー！」

「……相手艦隊確認しました。戦艦四隻、重巡二隻。艦名は日向、大和、武蔵、長門、足柄、愛宕です」

『大艦巨砲主義の典型的な例だ。アウトレンジ戦法は不可能に近い。まずは空から物量で押し潰せ。対空能力があるなら制空権だけでも維持しろ。場合によっては近接戦闘をしても構わない』

「分かりましたつて加古!?!」

加古が一人で海を突っ走った。単騎で戦おうとしている。古鷹はその後を追い掛けた。長門達はその場で置いてけぼりにされる。

「待つて加古!!」

「……仕方あるまい」

「ついていくの?」

「行くしかないだろ、置いていけない」

「今はそうしましょう」

仕方なく古鷹と加古の元を追い掛ける。一人で海を駆ける加古を止めようとした。

「待ってよ加古!! これは演習だよ!? 単騎出撃とかじゃなくて、艦隊で戦わなきゃ!!」

「うるせえ!!」

肩に触れた瞬間、古鷹を殴る加古。憎しみありきの眼差しで古鷹を睨む。手は震え、怒り心頭だ。

「私一人が戦えばあんな奴ら一捻りだ!! お前は指くわえて見てりやいいんだよ!!」

「加古……ッ!? 危ない!!」

砲撃に気付いた古鷹が加古を引っ張る。直撃は間逃れ、近くで水柱が上がった。よく見れば相手艦隊が目視で確認出来る。

「敵影が見えたようだ。始めるぞ!」

「制空権確保! 足柄に大損害を与えたわ!」

「偵察機は全て撃ち落としたぞ」

「チッ!!」

加古は舌打ちしながらも反撃に出る。古鷹の手を振りほどき、見境なく相手艦隊に目掛けて砲撃。長門達もそれに合わせた。

「全艦砲撃、撃てーッ!!」

砲雷撃戦が開始。目標に合わせ、弾着観測射撃を仕掛ける。かと言って相手は大和と武蔵がいる。並大抵の攻撃ではまともにダメージは与えられない。だが――、

「ッ!」

古鷹の発射した魚雷が全て直撃した。砲撃と魚雷の同時攻撃に相手の大和も怯む。それを見て加古は驚いた表情をしていた。

――何で。

「愛宕を大破状態にさせたよ! 加古!」

加古は咆哮を上げ、相手艦隊に近接戦闘を仕掛けた。相手艦隊の旗艦だった日向は加古の姿を見て、こう証言したという。

それはまるで、蒼白い稲妻が憤怒と嫉妬で暴れ狂い、悲惨に震えているようだった、と。

『演習は終了!! 俺らの勝利だ!!』

演習が終了した。相手艦隊は全員轟沈状態。対する提督の艦隊は加古が損害あり、その他無傷という大勝利を収めた。加古は倒れ込む相手艦隊の中心で立ち尽くしている。顔は俯き、白い息を吐いていた。

……。

——悲しい。

「演習ありがとうございますございました。では私達はこれで」

「ちよつと待て!!」

演習が終わり、提督は挨拶だけして帰ろうとする。しかし少尉が物議を醸しだした。原因は大体把握出来ている。加古の目立った戦闘の事だろう。

「あんなの反則じゃないのか!! 艦娘共が近接戦闘なんて敵ならまだしも演習は駄目だろ!!」

「おや、貴方は私に演習を申し込んだ際に言いましたよね?」

少尉は面倒臭がつて演習の申請を提督に任せている。だが少尉が任せたのは日時であり、ルールは任せていない。

「それは日時を……」

「ええ確かに日時はこちらで決めさせてもらいました。ですがその他のルールについては何か決まり事でもありましたか?」

演習時のルールは通常、申請した側が決める。予め決められた最低限のルールからそこに様々な内容を足していく仕様だ。そして決められた演習内容は書類かデータにて渡される。少尉はその申請書を作らなかった為にわざわざ提督が申請し、ルールを改定させた。渡されたはずの演習内容の中にはちゃんと近接戦闘可能と書かれている。「何も決まっていますませんでしたよね? 演習申請時にはルールの規定も申し込む側が決めるはずです。ですが貴方は私に勝手に決めると仰った。だから私は最低限のルールの元、申請時にこちらで決めさせてもらいました」

「でもそんなルールは書いてなかったぞ!!」

「それは貴方の確認不足です。私は確かに貴方へ演習の書類を送りました。貴方は書いていなかったのではなく面倒くさがって確認をしなかったんです。仕事を怠慢するとは同じ軍人と情けない限りだあ、

反吐が出る」

「あ」

摩耶が思わず声を出す。どうやら提督のスイッチが入ってしまったようだ。口喧嘩となると提督は絶対に止まらない。相手がねじ伏せられるまで喋り尽くす。

「何だと……！」

「それ以前に貴方は提督に向いてるのでしょいか？ 大艦巨砲主義もいい所ですが各艦娘が新しい装備に慣れていない。という事はつまり、変化した環境に対応しきれていないんです。一度訓練でもして確かめては？ とはいえ仕事を怠慢するような馬鹿で愚かで間抜けな人なんでしょう。こんな面倒臭い事などやるはずがない。もう一度ママの子宮からやり直すといい、その生意気な口も、態度も全てだ!!」

「俺を誰だと思ってるんだ！ ■ 大将の息子だぞ!! 俺が言えばお前なんてどうなるか——」

「俺は中将だ!! お前の大将なんて敵じゃない!! そうやって権力に頼ってるからこんな事言われんだ!! 分かるか？ お前みたいなクソガキを相手にしてるほどこちらは暇じゃないんだよ！ もう少し周りを見渡す事も出来ないのかあー？ 小学校で道徳を学んできたのかも怪しいな!! どうせお前の事だ、随分とチャホヤされて生きてきたのかも怪しいな!! 少しはその腐った頭をお得意のお医者さんにも診てもらえ!! 最も、腐ってる時点でお前の価値なんてダニみたいにくソ以下なのが丸分かりだけだな!! このクソお坊ちやま!!!」

最後にありつただけの悪口を言って提督と摩耶達は去る。提督は余程イラついていたのか小走りだ。大和に乗って即座に駿河鎮守府を出ていった。

「何か少し……スッキリした、な……」

「あの野郎……!!」

軍帽を地面に投げつけ、怒りをあらわにする少尉。傍にいた秘書艦の吹雪は少しだけ満足していた。

「あー疲れたー……」

「スッキリしたか？ 提督」

「二パーセント程。演習に大勝利したんだ、奴の悔しがる顔が目に見えかね」

「(それはどちらの方だろうか……)」

誰もがそう思い、長門や雲龍が加古の反応を見る。加古は黙ったまま前を見ていた。何とも言えない空気になるも、大和が思い切つて質問する。

「提督はお風呂入ってるんですか？」

「何故そんな事を聞くんだ大和」

「いや少しばかり臭うなうなんて思いました」

大和に言われ、提督は臭いを確かめる。腕や胸、足などを嗅いでいくと確かに少しばかり臭う。荒くれ鎮守府に着任してから風呂は全く入っていない事を思い出した。

「あーそうかー……ココ最近忙しくてまともに風呂入っていないなー……」

「でしたら私と一緒に入りませんか？ 親睦も兼ねて」

「!？」

摩耶が無意識に驚く。声には出なかったものの顔を動かした。大和の早めのスキンシップに武蔵が止める。

「大和、それはいくらなんでも……」

「あら、良いじゃないの。別にやましい気持ちは無いし、ただ単純に提督の事が知りたいだけよ？」

「まあ確かにそれはそれでありがたいんだがなー……これからやらなきゃいけない事があるし、うーん……かと言って大和の悩殺ボディを見逃すのも惜しい……」

「煩惱と義務の狭間で揺れるな」

仕事と欲が同時に重なり、重大な事のように悩み出す提督。頭を抱え、腕を組み、必死に考える。

「うーん……悪いが今は出来ないな。次にしてくれ、大和」

「分かりました。いつでもお待ちしております」

「お、そろそろ我が鎮守府に到着か」

62. ドアの戸締まりには注意しよう

「演習はどうでしたか？ Admiral」

「完膚無きまでの大勝利だ。古鷹、後で報告書を作っておけ」
「分かりました」

鎮守府に帰還すると、プリンツが出迎えてくれた。夕方十八時、訓練は既に終わり、建設工事も終了している。帰還した艦娘達は出撃ハッチを通り、通常の姿に戻った。加古は既に寮に戻っている。

「……各自この後は自由にして構わない。喋りなり、寝るなり、風呂入るなり、食べるなりしててくれ。じゃ」

——食堂内厨房

食堂の厨房では鳳翔と間宮、そして飛行場姫が料理を作っていた。

「飛行場姫さん……猫の手ですよ」

「ネ、猫ノ手……？」

「こうです。そしてそのまま合わせて……」

鳳翔が飛行場姫に包丁の扱い方を優しく教えていた。慣れない作業に飛行場姫は戸惑う。

「成程……何回モ申シ訳ナイ」

「大丈夫ですよ。慣れないのは仕方ないです。少しずつですよ」

飛行場姫を気遣い、分け隔てなく鳳翔は接する。何故か敵の艦娘達から優しくされる事に飛行場姫は違和感を感じていた。

何故ここにいるのか、場違いじゃないだろうか。色々と悩んでいた。

「私ナンカガコンナ所ニ居テ良イノダロウカ……」

「……確かに不安に思うところはありますよね。実際私も少し、緊張しちゃってます」

例え鳳翔と言えど強大な敵とされた飛行場姫と接するのは緊張するらしい。艦娘からすれば血肉を争い、沈めるまで戦い続ける敵だ。コミュニケーションが取れるとはいえ、直接話すのはお互い怖い。

「とはいえ貴方には提督を助けてもらった借りがあります。無碍にする事は出来ません」

「……」

飛行場姫は提督を殺そうとした前任を突き飛ばした事があった。その事は無線で全艦娘に知られていたらしい。敵とはいえ助けてくれた事には感謝したい艦娘達は飛行場姫を敵視する事はないようだ。

しかし助けた飛行場姫本人は複雑な気持ちを抱えていた。

「お互い慣れるのは大変かと思えます。頑張りましょう。あ、それは……」

「エ?」

味噌汁に塩ではなく砂糖を入れてしまった。見分けがつかない故によくあるミスだ。鳳翔が念の為に味見を試してみる。

「塩と砂糖を間違えちゃいましたね……でも少しだけですし、味はそれほど変わってないと思います」

「ゴメンナサイ……」

「大丈夫ですよ」

その後黙々と鳳翔の手伝いをする。飛行場姫にとって『料理』という言葉は初めて聞いた。何でも人間に必要な行為で他の動物の血肉や草、生えた実などを加工して食べるらしい。水を飲むならまだしも、食べるという行為は初めてだった。

「何故艦娘が料理してるのか気になりますか?」

「マ、マア……」

「そうですね……元々私達はこんな料理、食べれなかつたんですよ」

前任が提督の時は艦娘は食べ物をしていなかった。

当時艦娘は専用の固形食が用意され、それで腹を満たしていた。固形食は主に艦娘のエネルギー効率を更に良くする為に作られた物。艦娘が固形食を食べる事は世の中では当たり前とされていた。

「私達は味のない固形食ばかりで、人間達は美味しいものを食べている。そんな日々がずっと続いていました」

艦娘もそれが当たり前だと思っていた。

誰しも疑問には思わなかった。

だがその事を理解していた提督は艦娘に嫌味や嫌がらせとしてわざと美味そうな料理を見せつけていた。その影響で艦娘達に謎の不安感を持たせてしまう。

ある日、艦娘を研究していた海軍はある事を発見した。

「私達は食べ物を食べなくても生きていく事が出来るんです。艦娘の身体の中にあるエネルギーは核の中で生成され、循環する。固形食はあくまでエネルギー効率を良くする為のもの。食べ物以外の物を食べても何も実害は生まない。それを知った前任は私達に食べ物とは似つかない固形食は勿論の事、面白半分で鉄屑や生ゴミ、そこら辺の石や草を食べさせてきたんです」

前任は艦娘は物と考えている常識外れの男だ。拒む艦娘に食べ物とは思えない物を食べさせ、その姿を嘲笑った。

例え艦娘といえど味覚はある。どの物が食べてはいけなくらいは分かっているはずだ。だが前任はそんな事など一切気にせずに遊ぶ。ゴミ箱と呼ばれ、実際にゴミを食べる事を強要された艦娘もいた。

「しかしある日突然鬼の大佐と呼ばれた軍人が来訪し、雑な福利厚生などが指摘され、料理を作る為に私と間宮さんが選ばれました。何故か私達の料理の腕はとても良かったらしく、幾つもの教科書を見ながら丁寧に作り上げ、鬼の大佐や前任に褒められた事もありません」

作られた料理は前任にも程よく気に入られ、毎日の料理は鳳翔と間宮に任された。料理人と共に作り上げたものは憲兵にも気に入られるほどに。

だが艦娘にはその料理を与えさせてはくれなかった。与えれば解体させるなどといった脅迫で許可は降りず、前任が夜逃げするその日まで鳳翔や間宮を含めた艦娘達が料理を口にする事は一度も無かった。

前任が夜逃げした後、関係者は全員解雇か異動。人が過ぎ去ったこの鎮守府で鳳翔達は途方に暮れていた。これから何をすればいいのか分からない。命令主を失った艦娘達は心に深い傷を負ったまま、部屋に閉じこもるようになっていった。

艦娘は食べなくても生きていける。それを初めて実感した。お腹が空いても艦装を展開すれば食べたような満腹感が膨れ上がる。そこでトドメを刺すかのように自分達は人間でない事を知ってしまった。

絶望に打ちひしがれる中、鳳翔と間宮はある事を考える。

「私達は食べれないのではなく食べていけないだけ。どうせ誰もいないのなら作ってしまおうと。誰にも縛られず、自由に食べてしまおうと私達は考えたんです。そこで私は間宮さんと協力して、艦娘達に隔てなく料理を食べさせてきました。有り余った食材を節約しながら使い何とか食べさせてきました」

初めて食べた料理はとても美味しかった。涙が出る程、幸せを感じられた。艦娘達は少しだけ活気を取り戻してきた。差別された側はそれが唯一の楽しみとなるように。

そして提督が着任し、今に至る。提督が鳳翔や間宮に対して何も言わなかったのはこの事だろうか。それは分からない。

「……私達モ同ジク食べナクテモ生キテイケル生キ物ダ。ダカラソノ気持チハ分カラナクモナイ……デモ……」

「でもっ」

「……コンナ嬉シクナルヨウナ事ガアルナンテ……知ラナカツタ……」

飛行場姫も一回、鳳翔の料理を食べてみた。あの時は鳳翔に泣きつきたくなるほど美味しかった。今まで口にした事のない絶頂が身体全体に染み渡り、不思議な感情を湧き上がらせてくれる。

「……そうですか……あの時の私達も——」

——同じ気持ちでした……」

飛鷹と隼鷹が荒れた部屋で片付けをしていた。ここは元々飛鷹と隼鷹の部屋。しかし飛鷹が消えてから、隼鷹は狂ったように暴れ回った。小物は散乱、畳はザラザラに筆られている。初めて入った時は更に酷く、寝れるかどうかすら分からないほどゴミ屋敷と化していた。

「隼鷹、大丈夫だった？」

「え、何が？」

「こんな部屋の生活してて怖くない？」

「あー……」

飛鷹は差別する側に虐められ、部屋を荒らされたと勘違いしていた。一人で頼る人もなく悲しい思いをさせてしまった事を重荷に感じたのだろう。隼鷹は言葉が詰まったように話す。

「あれは私が暴れた跡……」

「……は？」

「いやー何か壊してないとやってらんなくてさー！ お酒も禁止されてるし、こうやってストレス発散しないと……あれ？」

怒られるか覚悟していた隼鷹。

しかしそれとは真反対に抱き締められた。思いがけない行動に隼鷹も涙が出てしまう。

「ごめんね……一人にしちやって……」

「な、何泣いてんのさ！ あたしや大丈夫だよ！」

「何泣いてるの？」

「っ!？」

誰かの声が聞こえた。声の方向はドア、振り向くと雲龍が不思議そうに眺めていた。ドアはちゃんと閉めたはずだ。それなのに何故雲龍がそこにいるのか分からない。

「あれ、ドア開いてた？」

「開いたら何か泣いてた」

「……」

雲龍は話かしたい為に飛鷹達の部屋を向かっていた。

だが中に入れば二人は何故か抱き締めあっている。恥ずかしい場面を見られ、二人は一旦離れた。

「ま、まあ、と、取り敢えず部屋は後で何とかしよ!? ね、隼鷹!」
「そ、そうだそうだ……っ?」

この状況をやり過ぎそうと慌てて言葉を合わせた飛鷹と隼鷹。服を整え、髪を触る。すると雲龍から笑い声が聞こえた。

「……ふへへ」

「——待ちなさい!!」

「人の部屋と感動シーン見て何笑ってんだゴラア!!」

全力で逃げる雲龍を飛鷹と隼鷹は全力で追い掛ける。空母寮から戦艦寮、戦艦寮から重巡寮、重巡寮から軽巡寮、軽巡寮から駆逐艦寮と連絡通路を使って逃げていく。雲龍は無言で一階へ降りていった。飛鷹と隼鷹も負けじと追いかける。

「雲龍さんのマイペースぶりが発揮されてるね……」

「しかも逃げ足早いっぽい……」

「そろそろ夜だから静かにしてほしいけどね」

様子を見に来た白露、夕立、時雨がドアから覗いている。とても騒がしく、賑やかだ。そろそろ晩御飯の為、部屋を出る。

「どうだい白露、もう生活には慣れた?」

「一番に慣れたよ! もう大丈夫!」

「なら良かったっぽい!」

白露は■ ■ 医師に匿われ、治療の日々を受けていた。それ故に提督の事はよく知らない。思い切って時雨に聞いてみた。

「あの提督はどんな人なの?」

「そうだね……一言で言うなら、人格破綻者……かな」

「何それ」

「いやまあ結構性格が捻くれててさ、隙あらば罵ってくるし、私達の事ポンコツ兵器だとか駄犬とかあだ名つけてくるし、子供っぽいし、大気ない人なんだけど……」

聞いたら聞いたただけ印象が悪い。前任とはまた違ったタチ悪さがある。それでいて大丈夫なのかと心配するほどだ。だが時雨の言い方からして恨みは無い。

「少しだけ、今は違う……のかな」

「……ならいい人、かもね」

やがて食堂に辿り着き、配膳場所まで並ぶ。周りを見渡すと提督の姿が無い。

「あれ提督は？」

「司令官は一人で執務室に籠ってます！ 誰も入るなと張り紙がありました！」

「そうなんだ……」

あの提督が珍しいと思いつつ、定食を運ぶ。提督の秘書艦である摩耶も二階で烏海と食べていた。信頼されている摩耶さえ退けるとなると余程重要な事なのか。

「今日は二階で食べてみない？」

「いいね、行こう」

二階に上り、摩耶の近くへ座る時雨達。二階には天龍や瑞鶴がいる。緊張しながらも時雨は摩耶に声をかけた。

「摩耶さん」

「ん？ どうした？」

「その……提督は一人で何してるの？」

「あー……まあ瞑想みたいなもんだよ。提督はたまにあんな時間が必要なのさ」

「瞑想？」

「こそ。時々一人になりたい時ってあるだろ？ それと同じでああやって集中してんのさ」

瞑想をしている。あの提督のイメージとはかけ離れた行為だ。神でも信じてるのだろうか。

「大丈夫だって、怪しい事はしてねーよ」

「そ、そう。ありがとう」

「どういたしまして」

63. 一騎当千はまだまだ先である

——痛い。

——頭が痛い。

——ムカつく。

——ムカつくんだよ。

——ボロクソに弱かった奴が調子乗ってんなよ。

——強いのはあたしだ。

——お前より上なんだよ。

——……。

——……。

——……悲しい。

「……」

不確かなまま、また嫌な今日が始まる。起き上がった加古は顔を洗い、髪を整え、鏡で自分の顔を見る。表情が固く、暗い顔でも加古は気にしない。いつもの薬を飲んで食堂へ向かう為にドアを開ける。

「あ」

また古鷹とタイミングが合ってしまった。最早確信犯かと思える行動に早朝から苛立つ加古。軽く舌打ちし、古鷹を避けるように反対

側の階段から下りようとした。

「……チツ」

「ま、待って加古!!」

遠ざかる加古を呼ぶ。

無視したらキリがないので一応は聞く。不本意ではあるが。

「……んだよ」

「どうかな? 私……強くなれたかな?」

「ツ!!」

やはり話を聞いてもイラつく事ばかりだ。早朝から胸糞悪い事ばかりで限界が来るといいうのにこの古鷹は容赦が無い。殴ってやろうかと考えるも、怒りを抑える。

「うつせえんだよ。黙れよ分かんないのか!? この反応見りやわかんたる!! あたしはお前が物凄く嫌いだ! 話しかけんなって言ったよな!」

「加古……」

「一々人の神経逆撫でしやがって……あの時まで何も使えなかったゴミクズが調子乗ってんじやねーよ!!」

「加古……待っ——」「ついてくんなア!!」

古鷹はそのまま廊下に取り残された。違う、加古を怒らせたかったんじゃない。

ただ私は——、

「今日も訓練始めますよー!」

プリンツの模擬訓練は人気だ。今日もまた多くの艦娘が来てくれている。初めてやった時とは比べ物にならない。

「今日は特別に摩耶さんが相手してくれまーす!」

「そのスペシャルゲストみたいな扱いやめてくれプリンツ」

艦装を展開した摩耶がウォーミングアップをしている。提督お墨付きの艦娘、そして認められている艦娘の一人。あの鎮守府襲撃時にも空母棲姫達の艦載機を幾度となく破壊した。どれだけ強いのかは見ても分かる。

「えー実際そうじゃありませんか?」

「んなわけないだろ。あたしは提督に出す報告書に練度を確認しなきゃいけないからこうして相手するんだ……あ、何人でも相手になるぞ」

調子づいて複数相手でも大丈夫だと豪語する摩耶。集まって来た艦娘達は摩耶の強さを図る為に話し合う。

「じゃあこの人数で……!」

「……」

合計二十一人。時雨、夕立、白露、磯風、浜風、秋月、涼月、球磨、多摩、木曾、天龍、阿武隈、最上、熊野、金剛、比叡、武蔵、大和、雲龍、飛鷹、隼鷹。

火力が桁違いな連中ばかりだ。

「……プリンツ、お前も来い」

「へ? いやさつき摩耶、何人でもって——」「馬鹿言え、この数を無傷でこなせると思うか!」

「何で無傷でいる事が前提なんですか……」

流石に相手し切れないと判断したのかプリンツに助けを求める。胸倉を掴んで小声で訴えた。

「あれだけ期待されてる眼差しされて応えない他は無くいくだろろ!!」

「いやそれ摩耶の自業——じーとーくー」

前後に振り回されるプリンツ。調子に乗った摩耶の自業自得だと話を受け流す。プリンツが殺気を感じて、摩耶の顔を見た。

「とにかくだ、お前も来い」

「だからそれは貴方の……やめてやめて、その、眼が殺す気なのやめてください! 分かりました、やりますから!!」

「よっしゃー! 全力で来ーい!!」

「はあ……何故こんな事に……」

プリンツも艀装を展開し、摩耶の横暴っぷりに頭を抱える。一体誰に似たのやらと困り気味だ。

「んじゃ始め!」

お互い距離を取ったところでプリンツがホイッスルで開始の合図

を送る。一齐に艦娘達は動き出し、射程距離まで詰めていく。

「(それぞれ左右に展開……あたしが対空に強いってのが分かっているのか一向に出さないな……)」

「戦力がちゃんと分散されてますね……更に移動地点を予測した砲撃……教えた甲斐があつたようです)」

「少し本気出してもよさそうだ、プリンツ！」

「ええ！ そのようですね！」

摩耶とプリンツが互いに見つめ、直後に急発進。同じくそれぞれ左右に展開し、間合いを詰める。

「川内のような蛇行走行！」

「少しトリッキーだな!!」

大和や武蔵も参加している以上、アウトレンジ戦法は使えない。飛鷹達はプリンツに向けて艦載機を発艦している。一方で摩耶には戦艦や駆逐艦が迫ってきている。

「見境なくやるぞ……!!」

「海外艦の恐ろしさをとくとご覧あれ！」

「負けたー」

「あーやっぱ強い……」

勝負は摩耶達の勝利。

艦娘達は大破や中破状態が多く、摩耶とプリンツは共に損害ありと被害が少ない。出撃ハッチから出てきた後は皆、身体を休めている。地面に寝そべる者や壁に寄り掛かる者と疲れているようだ。

「やはり提督の妻だけあつて底知れぬ強さだ……」

「妻はやめろ」

「痛っ！」

磯風が摩耶に頭を軽く叩かれる。いつも提督の傍にいる艦娘としてそう思われていたようだ。摩耶本人は満更でもない様子になっているが。

「そろそろお昼ですね、休憩にしましょう！」

プリンツの掛け声により、訓練は一時終わり休憩に入る。皆がお腹

を抑えて食堂を向かっていった。摩耶とプリンツもその後を追う。しかし海で二人の艦娘が立ち尽くしていた。

「あれは古鷹と加古……」

「勝手に始めるのか」

「まあいいじゃないですか。別に強制されている訳では無いので」

休憩するとは言ったがそれをするのは艦娘の自由だ。休憩しなくても訓練をしたければ自由にやって構わない方針でいる。プリンツが笛を加え、開始の合図を準備する。

「……」

「加古……」

「始め!!」

「ッ！ 行くよ!!」

笛の音とプリンツの声により、模擬訓練が開始。古鷹と加古は鳴った瞬間に瞳孔を開かせて突撃。互いに引いた右拳の殴打を直撃させる。

「いきなり近接戦闘ですか……」

「武闘派だな、あそこまでいくと」

お互い表情を変えずに攻撃を繰り返す。殴打や蹴りを受け流し、次の手を出していく。

単なる殴り合いに見えるが、とても高度な近接戦闘だ。

加古は蹴りを躲して、殴ると同時に零距离砲撃。

古鷹は身を屈めて砲撃を回避。右腕を蹴り上げ、零距离砲撃。

——ふざけるな。

互いに躊躇いなく猛攻を仕掛ける。

拳を腕で防御し掴む、足で蹴り飛ばした。

だが蹴り飛ばそうとした足を手の平で受け止め、空いた拳で殴り掛かる。

——お願い、加古……。

一旦距離を離れ、左右に動き出す。加古は相手の移動地点を予測、砲撃。

古鷹は魚雷を発射し、砲撃を回避する。

発射された魚雷を跳躍で回避、古鷹に接近した。

互いに拳が衝突、直後に砲撃。海がざわつき、爆煙が二人を包む。

風で黒い爆煙が消え去る。古鷹と加古は拳を衝突させたまま、じつとしていた。

——クソがツ!!

——目を覚まして!!

拳を離れた瞬間に二人は後ろ回し蹴りを始めた。互いの頬に踵がめり込み、怯んで退ける。

二人共息は上がっており、目の前の相手を倒す事に必死だ。同じ戦闘スタイル、同じ攻撃、同じ戦闘能力。

全て同等な事に加古は激昂した。

「ッ!!」

「待って加古——」

古鷹の顔を掴み、砲撃。吹き飛ばされた古鷹は一瞬意識を失いかけた。

加古は急発進し、一気に古鷹の懐へ接近。

鳩尾を殴り、古鷹は空へ殴り飛ばされる。

古鷹は反撃に出ようと、跳躍した加古の蹴りを空中で躲した。

だが加古は空いた左腕を使って古鷹の首を掴む。

その瞬間に砲撃の反動で急降下。水柱が上がり、古鷹は海面に叩きつけられた。

「カハッ……!」

「……分かったかよ、これで……! ——これでお前は——」「諦めるわけがないでしょッ!!」

古鷹は両足を揃え、加古の顎を蹴り上げる。

加古は咄嗟の攻撃に怯み、何歩か後退した。意識を失いかけ、口から出た血を拭う。立ち上がった古鷹を敵視するように睨んだ。

「弱いだって……？ そつちこそふざけないで!! さつきから私の攻撃が通用してんじやんか!!」

「……れ」

——痛い。

「加古より強い艦娘なんて腐るほどいる！ あそこにいる摩耶やプリンツだって加古の何億倍も強いよツ!!」

「黙れ……!」

——頭が痛い。

「確かに加古は強いよ!! 姉の私だって憧れる程に強いよ!! だけど今の加古は確実に弱くなってきたよ!!」

「黙れよ……!」

——叫びたい程痛い。

「私と加古が戦って一度でも私に勝った時なんてあった!? 一度も勝負なんてしてないのに勝ち誇った気なんてしないでよ!! 自分だけ見て誇らないでよ!!」

「黙れよ……!!」

「私より強いんだって、そうやって何回も自分に問い掛けてるんだつたら!! この勝負で勝って見せてよツ!!! 加古の馬鹿アアア!!」

「ツ……! 黙れエエエエ!!!」

両者、激昂。同時に急発進。

互いに右拳を後方へ引き、左足を前に出す。

右腕の砲台は装填完了。砲撃準備、共に良し。

咆哮を上げ、右拳を互いの左頬へ殴り向ける。

古鷹が初めて見せた怒り、それは単なる感情任せに言ったのかもしれない。自分をくだらないと笑って見下す加古に限界が来たのかもしれない。

所詮は勝負だ。

だが二人にとってこの勝負は――、

「二人共、そこまです！」

摩耶とプリンツが止めに掛る。本物の弾薬を使っている事に気付いたのか、とても必死だ。古鷹と加古の砲台を空に向け、砲撃させる。それでも殴り合おうとする古鷹と加古。摩耶とプリンツが中間に入り、阻止させる。

「訓練するのは大いに結構だが……本物の弾薬を使うのは少し違うぞ、古鷹」

「加古さんも仲間を沈めるつもりですか？ 別に貴方達がどう争うが構いませんが……仲間同士の殺害は重罪です」

模擬訓練で使用しているのは模擬弾薬。当たってもダメージは無く、ダメージを受けた様な状態に見せる物だ。数時間後には自動で回復する。

だが古鷹と加古が使用していたのは深海棲艦との戦闘時に使用する本物の弾薬。それは艦娘といえど慈悲無く、ダメージを与える。

「……す、すいません」

「お互い一時的に謹慎させます。一回頭を冷やすように。あと提督にも報告、入渠の許可を貰ってください。二人ですよー？」

「……チツ」

流石に本物の弾薬を使用した事が重かったのか古鷹と加古は謹慎処分を受けた。提督に報告するよう、即座に帰ろうとする加古に向けて話すプリンツ。

そこに岸边沿いである艦娘達が演習を観戦していた。

「……相当ヤバいねえ、この鎮守府」

「提督から耳にしましたけどここまでは……北上さん、どうします？」

「んー今は昼でも食べてゆっくりしよー。考えるのダルいし」

「あ、そんなお腹空いてないや」

「もう！ 北上さんのお茶目!!」

64. 自由になるほど縛られる事もある

——数時間前。

「ここが噂の鎮守府かあくボロボロだねえ」

「何でも前に鎮守府が襲撃されたようですよ」

「新しい鎮守府なの！」

「こら、まだ正装になっちゃだめよ」

「司令官はどんな人でち？」

「さあ……行ってみないと分かんないわねえ」

鎮守府の門前で着任した艦娘達が騒いでいた。迎え役の鳥海に迎えられ、提督がいる執務室に連れていかれる。執務室の中に入ると提督が机に座ったまま待ち構えていた。

「来たな艦娘共。ようこそ、この荒くれ鎮守府へ。俺はこのクソみたいな鎮守府を仕切る提督だ、以後よろしく」

隣には秘書艦と思われる青葉がいる。青葉は提督に指示され、ある書類を渡された。その書類はこの鎮守府の闇について。一々教えるのが面倒になったのか書類にて読ませるようだ。

「書類の通りだ、各自注意するように。だが一つだけ忠告しとくぞー、俺に楯突こうものなら全力で叩き潰すからそのつもりで」

「ええ……」

「つて事で鳥海、部屋に案内させてやれ。今日一日は自由にしておかない」

「分かりました、では行きましょう」

鳥海は北上達を連れていき、執務室を出ていく。各寮の連絡通路を辿りながら順に部屋の場所とこれからの事について教えた。北上は提督を見て素朴な疑問をする。

「あの提督っていつもあんな感じ？」

「いえそうではありませんよ。確かに印象は悪い方ではありますが何気に優しい方でもあります。心配する必要は無いと思いますよ」

「ふーん……」

窓から外の風景を眺め、北上は興味無さそうに返事をする。鳥海の様子だと悪い人では無いのだろう。だが悪い印象しかない上に信じるにはまだ早い気がする。そう考える中、先程部屋へ案内した潜水艦達が走って傍を過ぎた。

「探索なの〜!」

「鎮守府を探索でち〜!」

「あ、こら伊19、伊58! 待ちなさい!」

「騒がしいなあ……」

潜水艦達は楽しそうに鎮守府を探索している。これから新しい生活に胸が弾んでいるのだろう。文字通りに。

「ま、私は戦えれば何でもいいんだけどね。ねー大井っち」

「そうですね。私としては少し苛立ちましたが」

「そう思っても仕方ありませんね。あの提督がどうであれ、どんな感情を持つのがここでは自由です。嫌悪に思い、警戒する事も必要だと私は思います」

大井は感情に素直な艦娘だ。顔から体の動きまで感情豊か、分かりやすい一面もある。大井は複雑な気持ちのようだ。

「鳥海は提督の事どう思ってるの?」

「そうですね……不器用な優しさを持つ反面教師、と言ったところでしょうか」

「なにそれ、まあでも思うのは自由か。私は少し好感持てるね〜」

「何言ってるんですか北上さん!」

自由に戦えれば何でもいいと考えている北上。大井が否定に入るも、怒りはない。話している内に球磨型の部屋にいたらしい。

「では貴方達の部屋はこちらです。後はご自由に」

「ありがとね〜」

部屋には姉の球磨と球磨、妹の木曾がいない。そういえば提督に挨拶する前、艦娘達が訓練していたのを見た事がある。

「大井っち、球磨姉達が訓練やってるようだし、少し見ていかない?」

「そうですね。探索途中に見て行きましょう」

そして時間は進み、昼十三時。

古鷹と加古が模擬訓練で戦い、摩耶とプリンツに止めに入られた。プリンツからこっぴどく怒られた古鷹と加古は恐る恐る執務室に入り、提督に説教をされている。

「……まあ随分と暴れたもんだなあ」

「ご、ごめんなさい……」

「……」

提督が机に足を乗せ、摩耶とプリンツからもらった報告書を机に投げる。提督は深く溜息を吐いて、雑に処分について説明した。

「摩耶とプリンツから大体の情報は預かってる。お前らは一回頭を冷やした方がいいようだ……一週間の出撃、遠征、演習、訓練の謹慎。入渠施設の使用禁止な」

「入渠も……駄目、なんででしょうか……?」

「当然だ。何故勝手に本物の弾薬を使用した奴の修復をしなければならぬ。全ては己の自業自得だ。自分で勝手に負った傷ぐらい、自分で治せ! 他の力は頼るな!!」

資材は減っている上に身内同士の傷つけ合い。模擬弾薬であれば問題は無いが、本物の弾薬となれば話は別だ。死に繋がる可能性がある。と分かっているながら使用した事が主な謹慎処分の理由になる。

「分かり……ました……」

「……チッ」

古鷹と加古はゆっくりと執務室を出ていく。その姿を見届けた提督は古鷹と加古の資料を机の引き出しから取り出し、ニヤニヤと不気味な笑みを浮かべた。

「……と言ってどうなるかな」

重巡察の廊下で二人は距離を離し、黙々と歩く。謹慎処分を食らい、古鷹は少し責任感を感じていた。勝負を仕掛けたのは自分だ。本物の弾薬を使おうとしたのも自分の所為でもある。

「加古……その……」

「……」

古鷹は距離を詰め、加古に近付く。ここで何かしら言うのかと少し緊張したが、加古は何も言わず歩いていった。顔は見向きもせず、ただずっと前を向いている。

「ごめんね……」

「……」

それぞれ部屋に着く二人。ドアを開け、部屋に入ろうとする。その時、加古が小さい声で呼び掛けた。

「……今夜マルヒトマルマル、第二訓練海域に來い。一人でだ」

「えっ……っ？」

マルヒトマルマルに訓練海域に來い。初めて加古から誘われた気がする。何かしら理由があるのだろうか、少し不安だ。しかも一人で來いと言う。一体、何をするつもりなのだろうか。

「……一人で？」

やがて夕飯の鐘が鳴り、食堂に艦娘達が集う。新しく着任した艦娘も多く、食堂は一層と賑やかだ。一階のテーブル席で一人、食べていた古鷹は誰かに呼び掛けられる。

「やあ、謹慎貰った重巡さん」

「ひ、響？」

「響だよ。皆と一緒に大丈夫かい？　ちょうどいい席が無くて」

「う、うん。大丈夫だよ」

第六駆逐隊がお盆を持って、待っている。席がほぼ満席だったのか、古鷹と共に食べる事にしたようだ。暁や雷が楽しそうに話している。何気なく楽しそうに喋り、笑顔で語り合う会話。古鷹にとって、それがどこか羨ましく思えた。

「何か悩んでるのかい」

「ん？　あ、いや何でもないよ。大丈夫」

何とも言えない表情に気付いた響が声を掛ける。今の古鷹の顔は少し哀しい表情をしていた。楽しそうに話す自分達を羨ましく思い、それが出来ないという現実を悔しそうに受け入れている表情。涙が出そうなその表情に響は話をした。

「……大丈夫だと思うよ」

「ん？」

「同じ姉妹なら何とかかなると思う」

「恥ずかしいね……あんな場面、見せちゃって」

「恥ずかしくないよ」

堂々と明言する響。

箸を持つ手を止め、響なりの必死な顔で訴える。

「……え？」

「恥ずかしくない。姉妹が喧嘩してるなんて当たり前前の事じゃないか」

「でも喧嘩のレベルが違うような……」

「それでもさ。私達だって時には喧嘩する。お互い譲れない物があるこそその争いだよ、古鷹達もきつと譲れない物があるからだとは思う」

どちらかが譲ればいいものを、お互いはそれを許さない。どうしても貫き通したい、譲りたくない物があるからこそ争いは始まる。些細な喧嘩や会議、戦争でも。

「私が簡単に言える事じゃないし、一緒にしないでって思うだろうけど、姉妹同士ならきつと……キツカケがあるはずだよ」

「キツカケ……」

「だからその場面を私達は見たって何も笑ったりはしない、憐れんだりしない。ちっとも恥ずかしくない事だよ」

「寧ろ私達は頑張ってほしいわー！」

「古鷹さんなら何とかなるのです！」

「そうよ！ 自分に無理しない程度で信じて、それから頑張るのが一番！ それがレデイへの一歩なんだから！」

第六駆逐隊の優しい励ましに涙が出る古鷹。皆それぞれやるべき事があるからこそ嘲笑はしない。例え本人が恥ずかしいと思っても、周りは大事な事だと受け止めてくれている。それが古鷹にとっては嬉しかった。

「……うん、ありがとね。皆」

「「どういたしまして！」」」

夕飯の時間が過ぎ、執務室の明かりが消えた。古鷹は静かに出撃ハッチに向かい、艦装を展開する。加古は既に海で待っていた。加古は古鷹を確認し、首をクイツと動かす。二人は黙って第二訓練海域に向かった。第二訓練海域は鎮守府から北東に七キロメートルにある。深海棲艦が駆逐され、安全とされている海域だ。

「……何でここに連れて来たの」

何故出撃した状態でここに連れてきたのか。何かの罠なのか、それとも話があるのか。古鷹は緊張しながらも、冷静に問い掛ける。加古は古鷹の方へ振り向き、睨みながら答えた。

「……あの時まで……何も出来なかった奴が、何の取り柄も無かった鉄屑が……」

——ムカつく。

「アイツに唆されたのか知らないが、訓練に参加して……救うとかふざけた事言つて調子に乗り出して……!」

——腹立つ。

「あの鎮守府襲撃からずっと考えてた。今まで見下してた奴が何でいつまでもあたしに突っかかってくるのか……」

——イライラする。

「ようやく理解出来た、お前はあたしと戦って勝ちたいんだよ。お前の言う通りだ……あたし達は一回も勝負していない。だから——」

「——今、ここで決着をつける」

— 悲しい。

65. 本音と本音のぶつかり合い

「——今、ここで決着をつける」

直後、加古は古鷹に急接近。大きく右拳を振るった。

古鷹は右の大振りを跳躍で回避する。水柱が立ち、騒音が響き渡った。

「待つてよ……!!」

「何が待つてだ!! お前が望んだ勝負だろうがア!!」

空中で無防備の古鷹の服を掴み、岸辺の崖まで投げ飛ばす。

崖に叩きつけられた古鷹は暴れる加古を止めようと必死で物言いをする。だが——、

「いくらなんでも突発的過ぎ——」「知るかッ!!」

「待つてっばア!!」

崖に寄り掛かる古鷹目掛けて殴って砲撃。古鷹は回避しつつ、無意識で反撃態勢に入る。

「何で戦わねえんだよ!! お前が望んだ勝負だろ!!」

加古が崖に埋まった腕を抜き、怒りを訴える。眼から僅かに青白い稲妻が出ている。これは本気の加古だ。

「でも私達謹慎中だよ!? 別に今じゃなくてもいいじゃんか!!」

「本気でやったらアイツらに止められんだろうがア!!」

躊躇いもなく古鷹に攻撃を仕掛ける。何故か戦わない古鷹を加古は睨み続けた。加古は古鷹の脚を掴み、海面に叩きつける。

そして右腕を引き——、

「ッ!!」

「……」

□□が窓から月を眺めている。雲一つない夜空と月。月の光が部屋を薄く照らす。その光に映らないよう、□□は影で立っていた。

「寝ましたか……」

艦娘達がすやすやと寝ている。この時間帯は誰も起きないだろう。そう思う中、窓の光がある人影によって邪魔された。その人影を見ずに□□は司令を与える。

「来ましたね。では——」「ええ来ましたよ」

「……?」

聞き覚えのある声だ。仲間のような片言口調ではない。おかしいと□□は振り返った。

そこにいたのは何とも珍しい——、

「貴方は……」

「榛名です。とぼけないでください」

舞鶴鎮守府の榛名が窓の縁で待ち構えていた。月の光で装飾が輝き、正装が風でたなびく。□□を恨むような表情で睨んだ。

「ようやく突き止めました。貴方が犯人ですね……別の私、いや榛名……!!」

□□の正体。それは金剛型戦艦の三番艦、榛名。

彼女は表情を変えずに舞鶴の榛名を見つめる。

いつしか、戦う事が怖いと感じるようになった事がある。

死にゆく仲間を何度もその目に納め、思い出す度に背筋が凍った。

臆病者。周りからは隠してそう呼ばれている。

別に否定はしない。それが事実だから。

でもどこかで私が惨めなのは理解していた。

誰も助けられない。

誰も救えない。

私は非力だ。力不足だ。そんな風に思っていた。

だけどあの提督が全てを吹き飛ばしてくれた。

それは些細な事かもしれない。単に悲劇のヒロインを演じた私が助けてもらいたかっただけかもしれない。

それでも私にとっては唯一の救いだった。

死に抗えるのは力だけ。今でもこの言葉は私の中で響いている。

全てを諦め、■■■達に操られる憐れでゴミみたいな私にあの提督は手を差し伸べてくれた。

そこからだろうか、私は強くなる事を決意した。

私の目標の為、強くなりたいと願った。

そう今でも――、

「避けんなア!!」

「無理言わないで!!」

加古の猛攻を回避し続ける古鷹。荒々しくも正確無比な砲撃や近接戦闘に苦戦していた。回避していくのが精一杯である。

「いつまでも見下すあたしを見返したいんだろ!! だったら隠れてないでさっさとやれよ!! 何なんだよ、本当に!!」

腕を振るい、怒り心頭に訴える加古。激しく怒鳴りつけ、悲しく掠れた声。加古の表情を見て古鷹は気づく。

「……違う、私は加古に戦って勝ちたいんじゃない。私は加古を救いたいだけなんだ……!」

「その救うって言葉が腹立つんだよ……! 何の計画も方法も考えていない癖に、どうやってあたしを救うのか全く予想出来ていない癖に、言葉だけで約束して、何もしてないだろ!! 寧ろイラつく事ばかりだ!! 何が救うだよ!! あたしをイラつかせるのが救う事なのか!?! なア!!」

確かに加古の言う通り、救う算段はついていない。洗脳の原因が■
■達が開発した改造された戦闘意欲増進剤である以上、提督に頼る他

は無かった。だからと言って何もしない訳では無い。古鷹は今自分が最大限でやれる事を探し、それを見つけた。強くなって加古を助け、■■を殴る。その目標の為に出来る事だけをした。

「違うよ加古!! 私には■■に操られてる貴方を救いたいんだ!!」

「あたしは操られてなんかいない!!」

「だったら何でそんなに泣いてるんだよ!!」

「ッ!」

気付けば加古は涙を流していた。無意識だったのか頬に伝う液体を確かめている。加古自身は自分の身に何が起こっているのか理解出来なかった。

「おかしいよ……! 言動と言葉が矛盾してる……そんなに泣いていて、何でそんな事が言えるの……? 本当は加古だって辛いんだよね……?」

「……黙れエ……エ!!」

指に濡れた涙を握り、加古はまた殴り掛かる。

古鷹は殴打を回避した。

「戦え!!」

回避した古鷹に合わせ、砲撃。

古鷹も砲撃し、砲弾同士を衝突させる。

「戦えよ!!」

爆煙を掻き分け、加古が回し蹴りをする。

蹴りを防御した古鷹は蹴った脚を受け流した。

「戦えよ……! 何だよ……! あの時の演習でお前が強くなってのを認めちまったあたしがいる……! 昨日の勝負であたしと同等の力があつたのがより一層腹立つ……! 何も出来やしなかった奴が途端で強くなって、あたしを倒そうとしてる……!」

頭を抱え、悲しい声で語る加古。下を向き、海面に映る自分の顔は涙を流し、歪んでいた。今までの古鷹の急成長を感じて、どこかに危機感を感じたのだろうか。

「ふざけんなよ……!! だったらあたしをさっさと殺せばいいだろうがア!!」

「何で……そんな事……」

「お前を見る度にいつも起きる……頭痛が止まらないし、何故か悲しい気持ちばっか出てきやがる……！ あんな奴らなんかどうでもいいと思ってるはずなのに不意に身体が動いちまう……！ 訳の分からない事ばかりで吐きそうになる……もうどうすればいいのかわかんないんだよ!!」

加古は彷徨っていた。元の自分ともう一人の自分の狭間で。加古にとって強い者は正義、弱い者は悪、或いはクズだと思いついてきた。自分は強い、選ばれた者だ、最強だ。もう誰にも盾突く者はいない。弱い奴なんかのたうちまったらばいい。

強い奴が弱い奴をどうするかなんて自由だ。それが当たり前だと思っていた。

だがあの提督が来た事によって、それは崩れ去った。自分の上には更に強い奴がいる事をその身を持って知ってしまったからだ。どんな事してもバレて対策されてしまふ、悪口を言えば百倍で返されてしまふ、戦おうとすれば返り討ちにあふ。拳句の果てには弱かった奴らをももの見事に強くさせてしまった。

古鷹もその一人だ。あの時まで弱かった奴が今は深海棲艦と勇敢に戦い、演習ではその能力を存分に発揮し、成長していた。

それを機に加古の中で何かが膨れ上がった。やめてくれと頭の中で誰かが叫び続ける。気にせずにも、ふとした瞬間に頭の中で響き始める。古鷹を見れば何故か悲しい気持ちになってしまう。自然と手が震える、足がかくつく。

時々夢にもう一人の自分が出てくる事がある。
会う度に彼女は迷わずこう言い続けた。

——もう……やめてくれ、と。

「加古……」

この戦闘に恐らく、意味は無い。昨日の勝負で摩耶達に引き止められ、互いに不完全燃焼。故にそのモヤモヤした気持ちを払う為の憂さ晴らしなのかもしれない。所詮は価値観の違った敵同士だ。相容れる存在では無くなってしまった。

古鷹と加古。差別された側と差別している側で引き裂かれた姉妹の絆はもう戻らない。失ったモノは二度とこの世には戻らない。それが自然の摂理だ。

だがまた新たに創る事は出来る。

古鷹は悩んでいた。

加古自身も悩んでいた。

それぞれの想いがあるからこそその悩み。

今、加古は■達の洗脳という呪縛に縛られ、そして抜け出そうと必死に足掻いている。

加古が無意識に助けてと訴えている以上、古鷹は戦わずにはいられなかった。

「何とか言え——」

加古が古鷹に突進する。

しかし古鷹の蹴りによって止められてしまう。

「……そこまで言うなら、加古に勝ってやる。ここから全身全霊で加古を倒すよ……！ 覚悟して……加古!!」

加古は敵視するように睨みつける。古鷹も戦闘態勢になり、本気で戦うようだ。

昨日の勝負で決着をつけるだけが、いつの間にか互いの本音を聞くような大事な戦闘になるとはどちらも思っていなかった。

差別する者と差別された者。姉妹であったはずが今は他人同士。だからこそ心置きなく戦えるのかもしれない。もしそうだとした場合、そう否定する事は出来なかった。

もし洗脳という呪縛がこんな戦闘混じりの姉妹喧嘩で解き放たれるなら喜んで実践したい。

現に加古は今、心が揺らいでいる。
戦えば何かしら変わるかもしれない。
かといって本当に目が醒めるといふ確証は無く、現実是非情だ。
でも、もしその可能性が0・1%でもあるのならば信じてみたい。

それぞれの覚悟と魂を。

66. 最初からあるモノと言え

「よく気付きましたね。この艦娘達にはバレていないのに」

「貴方の行動を今まで監視していました。まさか貴方があの前任や深海棲艦と繋がってたなんて思いたくありませんでしたよ」

舞鶴の榛名が艤装を展開し、この鎮守府の榛名を脅す。彼女は着任当時から前任に気に入られ、■■■■達と共に君臨する支配者の一人だ。

だが実際は艦娘でありながら前任に選ばれた深海棲艦のスパイ。密かにこの鎮守府で暮らし、息を潜んでいた。主な仕事は大本営の情報提供や作戦内容の密告。

「鎮守府襲撃の際、こちら側の作戦を密告した事。そしてこの鎮守府に前任と深海棲艦を上陸させる為に影で手配していた事。金剛お姉様を殺害しようと計画した理由は作戦の邪魔になる金剛お姉様を消す為。全て確証が得られます」

「……それで？ 貴方は私をどうするつもりですか？」

彼女は余裕な表情で舞鶴の榛名を見つめる。深海棲艦のスパイとバレた以上、ここには住めないはずだ。捕まえた後に情報を吐いてもらわなければいけない。

「貴方を捕縛し、洗いざらい吐いてもらいます。既に憲兵隊や特殊艦娘部隊が到着していますのでご降伏をお勧めしますよ」

廊下に通ずるドアの向こうには摩耶とプリンツが潜んでいる。逃げ出そうとしても無駄だ。既に捕まえる準備は整っている。

「……一つ、いいでしょうか」

「何を、ですか？」

「確かに貴方の言う通り、私は深海棲艦の密告者です。それは紛れもない事実……」

彼女は思い出に浸る様に部屋を歩いた。テーブルや本棚、ベットに触れる。表情一つ変えない彼女は深刻そうに語り始めた。

「……ですが私は裏切らなければいけなかった」

「どういう……事ですか」

「確か貴方はこの鎮守府で最初の榛名、ですよ？ そして私は二代

目の榛名……」

舞鶴の榛名は前任に解体寸前まで追い込まれ、金剛の協力もあつて脱出。大本営まで逃げ出し、あの提督によって助けられた艦娘。

彼女は榛名が逃げ出した後に建造され、これからの生活に胸を膨らませていた。しかしある事を知ってしまった彼女は金剛の過去を知ると同時に洗脳されてしまう。

「貴方達はある記憶を消されている、そして改竄されている」「っ!?!」

「その事を知ってしまった私は洗脳を施された。操られてしまった」「怪しい行動はやめてください!!」

舞鶴の榛名は警戒を強め、艤装を構えた。このまま語り出せば時間稼ぎに使われている可能性がある。不本意ではあるが、強制的に連行するしか手段は無いようだ。

しかし何故だろうか、彼女は何故か悲しげな表情をしていた。

「やはり憶えていらっしやらないのですね……」

「何が言いたいんですか!!」

「……私から忠告させていただきます。この事を知りたければ私のようになる覚悟を……」

「ッ? まさか——」

そのままかだった。警戒を強めていたはずが後方の窓から深海棲艦が覗いているとは思わなかった。急いで振り向いた舞鶴の榛名は――、

闇夜の暗海に輝く火花。

青白い稲妻が暗海を駆ける。

砲煙が影となり、水柱が行く手を阻む。

砲撃音が直に耳へ響く。衝撃が身体を巡る。

互いに怯み声を漏らし、相手を睨みつける。

加古は大跳躍。空に砲撃し、その反動で古鷹に殴り掛かる。

古鷹は殴打を回避。着水した加古に狙いを定め、砲撃する。

水柱が立ち、加古の姿が確認出来なくなった。

がしかし、水柱を潜り抜けた加古が急加速。

「早い……!! 以前より速度が上がってる!! まず——」

古鷹は無意識に左脚で蹴ろうと迎撃。

加古は左脚の蹴りを軽々と回避。身体を回転させ、古鷹の死角に入る。

そして古鷹の脇腹を思い切り殴り、そのまま殴り飛ばした。

古鷹は岸辺の壁に叩きつけられ、胃のものを吐いてしまう。

加古はすかさず攻撃、怯む古鷹を殴りながら砲撃。

古鷹は回避するも加古に服の袖を掴まれた。

勢いよく投げ飛ばされ、古鷹は態勢を整え、着水。

「ダメだ……!! あまりにも早すぎる……!!」

加古は荒々しくも冷静さを見出している。古鷹の戦闘パターンを見極め、弱点を探していた。勿論古鷹もそれは実践している。だが圧倒的に加古の方が早い。

「……加古……!」

「何笑ってんだアア!!」

古鷹は自然と笑みを浮かべた。加古は元々強い、だがその強さを再確認出来て喜んでいようだ。加古は気に入らないのか突進し、殴りながら砲撃する。

「あたしを倒すんじゃないのかア!?」

「倒すけど……加古も救う!!」

咄嗟の攻撃に回避するも、海面に尻餅をつく古鷹。加古に煽られ、古鷹も突撃する。

「訳の分からない事をツ!!」

加古はわざと至近距離で海に砲撃。水柱で自分の姿を隠した。水柱の中へ古鷹は突進する。しかし加古はそれさえも読んで、古鷹を殴った。

「何でこんなに悲しいんだよ!! 全部、お前の所為だ!!」

怯んだ古鷹を殴り飛ばし、砲撃する。古鷹は空中高く飛ばされ、爆煙がアーチとなった。

「お前が立ち直らなきゃこんな事になんてなりはしなかった!! あのクソ提督が来なきゃお前が強くなるなんて絶対に無かった!! 嫌な思いしたくなければ関わらなければいい話なのに!! 今まで部屋に閉じこもってた様な奴が!! 強くなってあたしを救うなんて戯言をほざいて!! その癖弱いのに一々突つかかって来て!! 変に頭が痛くなるんだ!! 変に悲しくなるんだ!! 初めからあたし達に感情なんてなければ! こんな悲しむ気持ちなんてなかったのに!!」

加古の言葉はまるで兵器であり人間である私達艦娘の存在を恨んでいるかのようだった。艦娘は深海棲艦に対抗できる唯一の兵器。人間の身体をした兵器が戦っているだけに過ぎない。

だが、それと同時に人間が持つ感情と心が存在している。仲間を想い、互いに分かち合えるモノだ。

思えば歪だ。

感情が無ければ深海棲艦なんて躊躇いもなく倒せる上にこんないざざざが起きる事なんて無い。ましてや強くなりたいと思う向上心すら無かっただろう。

「……確かに今までの事を考えれば関わりたくないって思うよ……！
だけど………どういいう経緯で変わってしまったのかが分かった以上
……！ 姉として………救わなきゃいけないんだ!!」
「ッ………」

古鷹の身体が徐々に光り出す。黄色い稲妻が周囲に放たれ、身体に纏っていく。手を再度握り、加古を睨んだ。

「加古………私達はもう他人同士じゃないッ!!」
叫んだ古鷹は突如、急発進。黄色い稲妻が遅れて古鷹を追い掛けた。

凄まじい速度に加古は圧倒される。古鷹は跳躍、右腕を後方へ引き、左足を前に出す。

「(早ッ………ガードをッ!!)」
腕を交差させ、防御する加古。反撃が出来ない以上はこうするしかない。

古鷹は加古の防御を崩そうと交差した腕に目掛けて殴った。
「私達は初めから………姉妹なんだッ!!」

「うわッ!!」
「どうした榛名——ッ!!」

背後の窓から押し寄せた深海棲艦によって舞鶴の榛名は拘束されてしまった。摩耶達も慌ててドアを無理矢理蹴り飛ばし、中に入るも軽巡棲鬼に砲口を突きつけられる。例え艦装を展開している摩耶達と言えど、零距离で構えられたら無事ではいられない。

「私である貴方であれば何か思い出せるかもしれない……」
彼女は窓から脱出しようと試みる。深海棲艦達に匿われるように

彼女は窓の縁に立った。この部屋は地上三階、艦娘ならば余裕で降りる事が出来る。プリンツは先回りしようと部屋を出た。軽巡棲鬼が追い掛けようとするも摩耶が庇う。

「待て榛名!!」

「待ちなさい!! こんな事をしてただで済むと思わないで!!」

「……さようなら」

別れの一言を残して、彼女は飛び降りた。軽巡棲鬼がその場面を確認し、背後に顔を向ける。その瞬間に摩耶は軽巡棲鬼を部屋の外まで蹴り飛ばした。空中で怯んだ軽巡棲鬼。すかさず摩耶は足で顔面を踏み、地面に叩きつける。そして周囲を確認した。

が、彼女や深海棲艦の姿が見当たらない。

「摩耶!! 榛名は!?!」

「それがどこにもいないんだ!」

あの短時間でどうやって逃げたのか。まさかもう撤退したのか、いやその可能性は低い。不測の事態だ、仕方なく摩耶は遠隔操作で警報を鳴らす。

「どうした摩耶!!」

「長門か! 緊急事態だ、今すぐ榛名を探してくれ!!」

「榛名か、了解した!!」

「摩耶さん!!」

警報で起床し、不知火が駆けつけてきた。既に艤装を展開している。

「■■先生が見当たりません! 医務室で荒らされた跡がありました!」

「んなッ……!!」

この鎮守府の専属医師である■■■医師が行方不明となった。医務室では誰かに荒らされ、連れていかれたような痕跡が残されている。事態は更に悪化しているようだ。

「こちらコードネーム、HN。対象の交渉と捕獲に失敗しました」

『こちら■■■。構わない、お前の良心故に行った作戦だ。このまま作戦Bに以降する、A地点にて特殊艦娘部隊と合流してくれ』

「了解しました」

壁に大穴が空いた部屋で舞鶴の榛名が憲兵隊と特殊艦娘部隊と連絡していた。本当であれば突入して捕獲、又は殺害する作戦のはずが舞鶴の榛名自身が捕獲するという作戦に切り替わっていた。連絡を取り合い、舞鶴の榛名は手を握り締める。

「このまま引き下がる訳にはいきませんよ……！」

67. 鷹は夜空にて真鍮色の稲妻を纏う

「私達は初めから……姉妹なんだッ!!」

腕を交差した防御でも直に伝わってくるこの衝撃。今まで受けてきた攻撃の中で最も威力の高い一撃だった。交差した腕が悲鳴を上げている。流石に加古でも耐え切れなかった。

「(ガードがッ!!)」

防御を崩され、身体がガラ空気になる加古。古鷹は躊躇いもなく砲撃し、加古を仰け反らせた。勢いよく吹き飛ばされ、加古は受身を取る。

『初めから……姉妹なんだッ!』

「今更姉ぶんのかよッ……!! ツオラアアア!!!」

「ウオオオオアアア!!!」

青白い稲妻と黄色い稲妻が衝突。

互いに急発進し、互いの殴打が直撃する。

「ッ!!?」

先手を打ったのは古鷹。加古の殴打を受け流し、跳躍。

回転しながら加古の脳天を狙う様に蹴り落とす。

加古も負けじとその蹴りを紙一重で回避。蹴った後の隙が出来た古鷹を砲撃で吹き飛ばす。

「クソッ!! 当たり所が悪かった、急に考えやがっ——ッ!？」

加古は思わず息を飲む。

古鷹は海面に打ちつけられた直後、一直線に急発進した。黄色い稲妻が追い掛けるのに精一杯。有り得ない速度に古鷹は気付いていない。

「絶対に救うんだアアア!!!」

今まで散々な事しか無かった。誰も救われず、虚しく、悲しい日々。蔑まれた、殴られた、蹴られた、貶められた、辱められた。思い出したくもない事ばかりだ。

友達も、仲間も、妹も、誰も自分の手で救う事が出来なかった。

救いような無い馬鹿なのかもしれない。今思えばあの時の自分が

恥ずかしく思える。

何も出来ない事がどれだけの後悔を生むかなんて分かり切っていたはずだ。

古鷹と加古は互いに急接近。

二人とも自身が持ち合わせる最大の火力を乗せた一撃を使うつもりだ。

使用しているのは本物の弾薬。どちらも受ければ沈む可能性すらある。

真鍮色の稲妻が身体を纏い、艀装に集中する。

探照灯から発せられる紺碧の稲妻が変形する艀装全体に収束した。

——今更どうしようが関係無い。

——この先の決められた未来なんて知った事じゃない。

——未来や過去がどうであれ、今を生きていたいんだ。

——この勝負も誰かが決めた運命じゃない。

——私達が勝手に作った運命なんだ。

——私の人生は私が決める。もう誰にも狂わせはしない。

——いつまでも過去を貪る私とはおさらばだ。

——例えそれが自身の破滅を呼ぶ結果だとしても。

——もう二度と後悔はしたくない。

——あたしは……

——助けてもらいたかったんだ。

海面がざわつく。

水柱が立った事で海水が雨となって降り注いだ。

空には風に流される砲煙の跡、岸辺の壁にはひび割れた跡。

古鷹と加古がどれだけ本気の勝負をしたかを物語っている。

その戦場の中央では仰向けに倒れる加古と立ち尽くす古鷹がいた。

両者共に息が上がり、戦闘続行不可。

やっとの思いで立っていた古鷹も座り込んだ。加古は乱れた髪で顔を隠し、沈黙としている。

古鷹と加古によって行われた姉妹喧嘩、もとい勝負は古鷹の勝利によって幕を閉じた。

「もう気は済んだかー？」

聞き覚えのある声が聞こえた。声の方向に振り向くと、提督がニヤニヤと砂浜でシートを引きながら座っていた。そこに何故か武蔵もいる。

「て、いとく……？」

「何で……ここに……！」

「……まあそれはさておき、帰るぞ武蔵」

「了解した」

シートを片付け、武蔵の艤装に乗る提督。少し違和感を感じた二人だが、気にせず鎮守府へ向かった。月の光が海面に映る。古鷹と加古は一言も発せず、走行していた。

「どちらとも本音が聞けてスツキリしただろうなあ」

「……いつから居たんですか」

「お前らが出撃ハッチに行った時から」

「……」

一番最初から覗いていた提督は武蔵に頼み、わざわざここまで来たという。何故武蔵が乗り気なのかはよく分からない。あの戦闘を見られて少し恥ずかしくなってきた。

「で、提督よ。目を覚ましたのか？ 加古は」

「さあね……」

提督は俯く加古に視線を移す。古鷹と一騎打ちの勝負に出て、互いに本音を言い合い、倒れるまで戦った加古。目の敵にしていた古鷹に敗れた本人はどう思っているのだろうか。すると加古は俯いたまま口を開いた。

「……分からない」

「何で？」

「分からないけど……今までやってきた事は、申し訳ないと……思ってる」

「ふーん……」

興味無さそうに提督は月を眺める。加古からの言葉を聞いて武蔵は少し口が緩んだ。罪の意識を感じているという事は少なくとも加古の心境に変化が起きている。薬に縛られているながらも何かしら変化があるのはとてもいい収穫だ。資料として視野に残しておこう。

「古鷹……」

「何？」

「姉でいてくれて……ありがと……う……」

「っ……！ うん……」

妹の加古から初めて聞いた感謝の言葉。思わず古鷹は涙ぐむ。

関係は変わっていないかもしれない。変わったとしてもミリメートル程度の変化かもしれない。

それでも古鷹にとっては大きな変化だった。

まだ大した事ではないけれど、これから先は少しずつ加古と話してみたいな。

そう、私達は姉妹。

血が繋がった姉妹。

艦娘が姉妹と呼んで、他の人達は違和感を感じるかもしれない。

それでも私は姉妹だと胸を張りたい。

所詮は馴れ合いでしかないと言われても。

烏澁がましい事だと言われても。

それでも私は言い続ける。

だって一番大切な人が目の前にいるから。

「あ、お前ら謹慎二週間な」

「えっ!？」

「当たり前だろ。謹慎処分中に無断で出撃して、あんなだけ暴れて、怪我までしといて重大な命令違反だ」

「確かに……」

「……ッ」

古鷹と加古は現在、一週間の謹慎処分中だ。それなのにも関わらず、無断出撃、弾薬の無断消費、全治必要な損害。あらゆる違反を繰り返してきた。当然長引くのも無理はない。

「だが入渠だけは許可してやる。流石にその状態はまずいからな。特別だ、ありがたく思え！」

「ッ痛!!」

提督にデコピンされ、額を隠す古鷹。キシキシと変な笑い声をあげ、武蔵の艀装から落ちそうになる。

加古は馬鹿らしいと溜息を吐くも、その光景がどこか懐かしく感じた。

「提督危ないって!! っ?」

「警報か？」

「鎮守府で警報が鳴っているらしいな提督」

「あの様子だとさては逃がしたな? 急いで向かうぞ」

「了解!」

68. 月下の海に駆ける二色の稲妻

「何があつたの摩耶!!」

「榛名がこの鎮守府のどこかに隠れたんだ!! 今すぐ捕まえてくれ!!」

「捕まえてくれて、榛名が何をしたの?」

「アイツは深海棲艦と手を組んでいた。提督に言われて確証は無いが、とにかく本人の口から聞くしかない! 急いで手分けして探してくれ!」

「分かったわ!」

一方で鎮守府では一刻を争う事態が発生していた。深海棲艦の密告者である榛名の逃走。全艦娘が急いでその跡を追っていた。

「■■先生はどうだ!!」

『現在捜索中! 痕跡があまりにも少なく、どこにいるか……』

更には■■医師の行方不明。恐らく深海棲艦が攫っている可能性がある。もしくは殺されている可能性すらある。一秒たりとも時間は無駄に出来ない。

『おい摩耶、広場に来い!!』

無線で長門に呼び出され、多くの艦娘が広場に集まる。先に集まっていた艦娘はある一定の方向に顔を向けていた。

「どうした長門!!」

「あれを見ろ」

長門が指さす方向は海。その先には大軍と思える深海棲艦の数が。その後ろには戦艦水鬼や泊地棲姫、装甲空母鬼に空母棲姫。そしてその深海棲艦の上に立つはこの鎮守府の榛名。その数、約二百近く。

「榛名ツ!!」

「……随分とこの鎮守府にはお世話になりました……ですがもうお別れです」

「待って榛名! 何でこんな事を!!」

「……貴方に言われる筋合いはありません」

金剛が榛名に近づこうとするも摩耶達に止められる。あの大軍で

単騎突撃は自殺行為だ。簡単に行かせる訳には行かない。

「■■先生はどうした!!」

「あの人は一回眠ってもらいました。心配しなくとも、今頃営倉で寝ています」

「何故このような裏切りを……!」

「それはそこにいる私に聞けば早いですよ」

後方の門から憲兵隊と特殊艦娘部隊が身構えていた。銃器や艦装を構え、警戒している。そして舞鶴の榛名も艦装を展開し、他同様構えていた。

「尋問は終わりですか? ではこれにて私は失礼します……」

「待てッ——」

深海棲艦が上陸していく。この数は圧倒的にこちらが不利だ。住民の避難が終わっていない上に■■■医師の生存確保、また榛名の捕獲などやる事が多過ぎる。まだ提督は古鷹と加古の件で来ていない。こんな状況にて不在とは腹が立つ。

だが——、

「逃がす訳ないでしょ!!」

「オラアアア!!」

深海棲艦の艦隊の中央を二色の稲妻が駆け走る。戦艦ル級や重巡り級、軽巡ト級が空へ殴り飛ばされた。それと同時に砲弾の嵐が深海棲艦の艦隊を襲う。一気に水の壁が出来上がり、海水が二色の稲妻の周囲を囲む様に分散する。

その中にいるのは——、

「古鷹!・加古!」

「あーやっとなついたらー!」

「提督、今までどこに……!」

「おー長門か……ちよつと散歩してた。さて……」

提督が広場にいつの間にかいた。提督は背伸びしながら、状況を確認していく。やはり榛名捕獲は失敗したようだ。

「古鷹、加古、お前らに榛名を任せる。■■■医師と明石は着任した艦娘共に搜索させる。あの大軍は襲撃時の艦隊で殲滅。殲滅後に古鷹達

と合流だ、一々艦隊を決める暇なんてないからな」

「了解!!」

今海にいるのは古鷹と加古、武蔵のみ。即戦闘可能な艦娘に任せるしかない。雑魚共粗方片付け、その後に出撃した方が良いらしい。

何より古鷹と加古の意見を尊重したのもある。

即座に命令し、艦娘を動かしていく。命令を聞いた艦娘達はそれぞれ自分の役割を果たす為に走った。

「ソナ行カセル訳ナイダロ!!」

「残ラズ全員沈メエ!!」

古鷹と加古に目掛けて深海棲艦が複数人で襲い掛かる。しかし二人は息を合わせ、近接と砲撃で薙ぎ倒した。

「榛名は私達が時間を稼ぐ!!」

「深海棲艦や明石、■■先生は任せた!!」

二人は肩を合わせ、艤装を構える。それはまるでかつての姉妹の姿を見ているかのようだった。秋月達や第六駆逐隊は思わず喜んでしまう。きつと仲直りしたんだ、そう思っている。

「お前ら武闘派二人の晴れ舞台だ、存分に暴れろ。戦闘開始だ!」

「倒セエ!!」

逃げゆく榛名と戦艦水鬼達を古鷹と加古は全速力で追い掛けた。

しかし深海棲艦の艦隊が一齐に行く手を阻む。

古鷹はわざと接近、軽巡へ級に砲撃させて蹴り飛ばす。

仰け反ったへ級の腕を掴んで回転、空母ヲ級の艤装まで投げ飛ばした。

加古は重巡り級の頭に乗って跳躍。

軽巡ツ級や雷巡チ級の脳天に砲撃、駆逐イ級を踏み台にして着水。

また跳躍した。

逃げゆく榛名達をまだ二人は必死に追い掛ける。

空母棲姫が白く丸い艦載機を繰り出した。その数、約七十機。爆弾の雨が降り注ぐも、二人は稲妻の如く回避する。

古鷹は目の前の敵を薙ぎ払いながら突撃。重巡り級を傘替わりに敵の攻撃を回避し、リ級を投げ飛ばす。

加古は空中で白く丸い艦載機を素手で直に破壊。

「ハア!!？」

徐々に降下しながら艦載機を破壊し、古鷹のいる地点まで砲撃の反動で移動し、着水。目の前に立つ空母ヲ級、軽母ヌ級を殴打と同時に砲撃し、それぞれを殴り飛ばす。

「(中々ノ強サダ……一回戦ツテミルノモ悪クナイ……)」

艦隊を抜け出し、重巡ネ級が単騎突撃してきた。

咄嗟の攻撃に二人は離れ離れになる。態勢を整えながらも榛名を追い掛けるをやめない。

二人の間には重巡ネ級がいる。

古鷹と加古は互いに視線を合わせ、先に重巡ネ級を倒す事にした。

重巡ネ級は先に古鷹に接近。回し蹴りで古鷹を蹴るも腕で防御される。

背後に加古が現れ、ガラ空きの背中目掛けて砲撃。

重巡ネ級は大跳躍し、態勢を整え着水。そしてまた突撃、砲撃と殴打を重ねる。

高速移動しながらの近接戦闘が始まる。

重巡ネ級の近接戦闘は予想以上に強く、全く怯まない。腹に別れた艤装の砲撃が回避した二人に追い討ちを与えた。

「古鷹ツ!!」

古鷹が砲撃で怯んでしまった。海面に打ちつけられ、加古に置いていかれてしまう。

重巡ネ級は左拳を握り締め、加古に殴りかかった。

加古はその拳を無意識で受け止める。水しぶきが更に上がり、衝撃波が広がった。

「任せて!!」

立ち直った古鷹が全速力で追い掛けてきた。重巡ネ級の腹を蹴り飛ばし、加古と距離を離す。

海面にゴロゴロと回転しながらも立ち上がる古鷹。重巡ネ級の膝の裏を蹴り、加古は左腕を弾いた。

そして二人は息を合わせて回し蹴り。重巡ネ級の頭に直撃し、同時

に食らった事で頭が回転。首ごと捻じ切れ、重巡ネ級は人形のように倒れる。海面に打ちつけられながら沈んでいった。

「砲雷撃戦始め!!」

霧島や摩耶、長門率いる主力艦隊が到着した。後方で残した深海棲艦を倒してくれている。

「よくやってくれた、古鷹、加古!!」

「後はあたし達に任せな!!」

『古鷹と加古は帰還しろ。充分な程、時間稼ぎはしてくれた。後は摩耶達と……特殊艦娘部隊に任せろ』

「分かりました……加古ツ!!」

「なに!? 古鷹!!」

古鷹と加古が背中を合わせる。二人共、先程の戦いと今の戦闘で疲れきっている。息も上がり、艦装が悲鳴を上げていた。提督が命令するも二人はまだ諦めない。深海棲艦に囲まれる中、二人は話し始めた。

「こういうの……いつ以来かな……!」

「さあ……だが、こつち側で必死に足掻くのも……悪くないねえ……!!」

二人は肩を合わせながら腕を上げる。二人が指さす方向は榛名。肩に付けられた艦装を向け、堂々と口を開く。榛名は表情一つ崩さず、冷酷な目で古鷹と加古を見下ろす。風で髪が靡き、そのまま立ち尽くしていた。

「今までの榛名達の行動は許さない!!」

「あたし達は全力で足掻いていく!!」

——諦めたりはしない。

「例え困難に苛まれようと!!」

「決して後ろには振り向かない!!」

——二度と屈しはしない。

「今まで私達の努力は無駄じゃなかった!!」

「数え切れない悪夢の中でもあたし達はまだ灯火が残ってる!!」

——どれだけの災難だろうと超えてみせる。

「だからこの先覚悟しておく事だな!!」

「んじゃ後は任せてそろそろ帰還だよ!!」

古鷹と加古の傍を異様な姿の叢雲と龍田が高速で通り過ぎる。そして異様な姿の金剛が二人の間を跳躍し、飛び越えた。叢雲と龍田は一斉砲撃で牽制、爆煙で姿を隠す。

そこに金剛が爆煙を掻き分け、榛名を素早く攫った。

「何ッ!？」

「連レテイカレタ!!」

榛名は抵抗する事なく捕らえられ、金剛に運ばれるがまだまだ。金剛は着水時に回転し、方向転換。艦隊と合流した。

「榛名、捕獲完了デース」

「任務完了ね……」

「ッ……分カッタ、撤退ヨ……!!」

「チッ……!!」

攫われた榛名を置いていき、戦艦水鬼達が撤退していく。残った深海棲艦達も海の中へ消えていった。

69. 「愛情」

深海棲艦の密告者として捕らえられた榛名はその後憲兵隊と特殊艦娘部隊によって確保。本拠地である大本営まで連行される事になった。身体検査後に尋問が繰り返される事だろう。前任との繋がりや深海棲艦の情報など有しているはずだ。

意外にも彼女は表情を一つも変えず、ましてや抵抗もせずに憲兵隊に従順だった。提督が着任した頃は不気味な笑顔だったが鎮守府襲撃以降は何故か大人しくなっている。恐らく鎮守府襲撃時に前任と何かあったのだろう。

またその場で倒された深海棲艦も何人か鹵獲し、彼女同様に大本営の収容施設へ連行された。鹵獲された深海棲艦は約六人。軽巡ツ級、雷巡千級、戦艦夕級、空母ヲ級、重巡リ級、軽巡棲鬼。いずれも尋問予定だ。

攫われたと思われていた■■■医師は営倉にて拘束されており、駆逐艦達に無事に救助された。だが前明石が深海棲艦に暴行を受けたのか、酷い外傷を受けていた為に今は拘束器具で自由を奪い、艦娘の監視下の元で■■■医師の治療を受けている。

また舞鶴の榛名は元の舞鶴鎮守府へ帰還。それと同時に彼女の事について調べに行くらしい。

彼女に裏切られた■■■達は依然、何ら変わらない生活を送っている。裏切り者には厳しいという意味の分からないルールなのか彼女の話題は一切耳にしていない。

金剛や比叡、霧島は彼女の反抗をあまり受け止められずにいる。特に金剛に至っては話が聞きたいと遠征許可申請書を出す程に。霧島は状況についていけず、部屋に閉じこもっている。金剛の急成長に比叡の意識の移り変わり、そして彼女の裏切りの犯行。金剛型戦艦の末っ子として頭の理解が追いついていないようだ。無理もないと言える。

古鷹と加古は未だに差別意識は消えていないものの、加古本人は罪の意識を感じている。今は部屋に閉じこもり、意識を抑える練習をし

ているという。古鷹やその他の艦娘を見ると自然と差別意識が出てきてしまう為、彼女の件以降ら誰とも接していない。

「あー疲れたー……!!」

「お疲れ様だ、提督」

今日の仕事を終え、背伸びをする提督。今回は密告者の件、古鷹と加古の件で書類は山のようなようだったが何とか一日を使って終わらせたようだ。関節を回し、パキパキと音を鳴らす。

「また事件解決か？」

「だと良いんだけどな。まだ不安の種は残っている、油断は禁物だ」

「まさか榛名が前任と繋がっていたとはな……あながち■大将の意見も間違いじゃないみたいだ」

「失礼します」

執務室に舞鶴の榛名が来てくれた。ここの彼女かと少し思っただけに提督と摩耶はビクツと身体を動かす。

「舞鶴の榛名か、少しだけビビった」

「あたしもだ」

「……まあそれは仕方ないです。あの件に協力してくださったのでそのお礼に参りました」

舞鶴の榛名の手には様々な地元の名産物が。恐らく協力した憲兵隊のお礼だろう。正直言っていらない。

「いやお礼なんていらさないから。金ならまだしも一回しか食わずに倉庫に放置するようなその土地の名産物とかだったら俺は——」「勿論お金も弾ませてもらいます」

「よーし!! ありがたくもらおうー!!」

提督はお金が貰えると聞いて椅子から立ち上がる。溜息を吐き、やれやれと摩耶が呟いた。

「では改めまして……この度、深海棲艦密告者捕獲の件に協力してくださりありがとうございます」

「そりや良かったあ」

「また個人の事を含め、私を異動させていただいた事、金剛お姉様の事、貴方には数え切れない感謝の恩がございます」

舞鶴への異動、金剛を救ってくれた事、彼女の捕獲。感謝してもし切れない程、提督には感謝しかない。舞鶴の榛名にとって提督は命の恩人のような存在だ。しかし提督はそんな事など感じ取ってすらない。

「何だこの空気を壊しちゃいけない感じは」

「黙って聞いてろ」

再度椅子に座り、あからさまに落ち込む提督。摩耶に抑えられ、バタバタとしている。

「本当に……ありがとうございます……！　全て貴方のおかげです……！」

「……そうかい。それじゃあ……お金の件についてなんだけど、俺としては最低でも五千万、いや六千万近く欲しいな。だから今月六月末日までに振り込んでおいてくれ。また物とかはこの艦娘達に食べさせる。俺はいらん」

涙を流しながらの感謝を差し置き、提督はお金の案件を提示した。指で欲しい金額を述べ、自分のメモ帳に欲しい報酬の内容を書いていく。メモ帳の紙を破り、舞鶴の榛名に渡した。

「はい！　分かりました！　即日によらせていただきます！」

「話分かるようで頼もしい限りだよ。では早速高級マンションの予約購入しよう!!　後は液晶テレビやゲーム機など買って万々歳だ!!　いやー楽しみで仕方ないね〜!!　あ、鎮守府内にプールを作ろう!!　休む時に優雅な暮らしが出来る!!　今すぐ大本営と建設業者に連絡だ!!　そうしよう、そうしよう!!!」

「あ、もう一つ伝えたい事が――」

「古鷹、ちょっと来て」

「う、うん……」

部屋から出てきた加古に誘われる。自然と声は柔らかかった。以前のように棘があるような言い方ではない。加古に言われるがまま、古鷹はその後を追っていった。

「……こうやってさ、二人で行くなんて無かったよね」

「そうだね……」

前のように訓練海域ではなく、鎮守府の敷地を抜けた先の浜辺。岩がゴツゴツと並び、波の音が静かに聞こえている。水平線に夕日が沈み、海を茜色に染めていた。

「悪いけどあたしはまだ完璧に古鷹達と仲良くなれる訳じゃない。未だに手は震えるんだ」

古鷹に会っても尚、差別意識は出てしまう。訳の分からない感情で無性に苛立ち、古鷹を殴りそうになるほどだ。今は抑えられているとはいえ、いつ暴れ出すか分からない。

「……大丈夫だよ、加古。ちよつとずつでいいからさ」

「ああ……そうする……」

加古は複雑な気持ちを抱えながらも、一生懸命に答える。砂浜を歩きながら加古は震えた声で話し掛けた。

「……多分さ、あたしは古鷹に助けを求めてたんだと思う」

「助け……？」

「うん。助けてほしかったんだと無意識で言ってたんだと思ってる。不確かなままだけだね……」

「そっか……嬉しい……」

古鷹に初めて本気で殴られた時に気付いた。どこかで自分は助けを求めていたんだと。そんな事など言ってもりのないはずが、無意識に訴えていた。恐らく自分の中にいるもう一人の自分が賭けた抵抗なのだろう。そのおかげか今まで考えもしなかった罪の意識が芽生えてきていた。如何に自分は愚かだったのか。しかしそれを悪くない事だと正当化する自分もいる。

「本当は謝りたいけどまだ謝れない。全て終わったら本当の事を伝えようと思う。だからあのクソ提督に言つといて、出来る限りは協力するって」

「うん、分かった。説得しておくよ」

加古は古鷹の方へ身体を向け、正直に話す。あの勝負で互いに分か
り合えた、何が大事なのかも分かった。

しかし加古は完全に目覚めた訳ではなく、今まで自分がしてきた事
が何なのかを再確認しただけである。まだ■■■■達の洗脳から解き放
たれていない。それ故にいつでも敵になってしまいう事もあるだろう。
加古はこの事が全て終わったら謝るつもりでいる。

古鷹は勿論、貶めてしまった雷や暁の事も。その他の皆にも謝りた
い。

「ねえ加古」

「何？」

「抱き締めてもいい？」

古鷹が優しい声で問い掛ける。通常の加古なら激情し、抱擁を拒む
はずだろう。

しかし今の加古は――、

「……うん、いいよ」

古鷹の抱擁をすんなりと受け入れてくれた。古鷹は身体が震える
加古を包み込むように抱き締める。お互い肩に顔を近づかせた。

「私は信じてる。加古が優しい艦娘である事をね。今まで色んな事が
あったけど私は全て許してるよ」

「っ……………」

何故だろうか、いきなり涙が出ってしまった。泣くような気持ちでは
ないのに何故か無意識に涙が出してしまう。いや、きつと泣くべきなの
だろう。

「加古が一人でどんな思いを背負ってたのか私にはよく分かる。今の
加古にとっては怒っちゃうような事だけど、私も色々辛かったから
さ」

「…………ごめん……………」

「何泣いてるの加古。私は許してるって言ったでしょ？ 加古は一人
で何もかも背負う癖があるからね、仕方ない所だけど……大丈夫、い
つか必ず全てが晴れるよ。ゴールまで長い道のりだけど、そしたらさ

……」

古鷹は一度抱き締めるのをやめ、泣き出す加古の顔を見る。そして古鷹は笑顔で話した。

「またこうやって話そう？」

どうしようもない事かもしれない。

ただ当てずっぽうに言っただけかもしれない。

未だに洗脳を解放させる手段は無く、永遠に続くような道に思えても。

不確かなままでもどこかで確信はしている。

また仲良く過ごせる日々が来る事を。

理由も無い、確証も無い、ましてやそうなるとも限らない。

いつか悲劇になるような事があるかもしれない。

今はまだ敵同士、差別している側と差別された側での不毛な争いだ。

それでも私は信じていたい。

殴り合って少しだけ目覚めるような物騒なやり方ではあるけれど、その少しだけの力が私達の道を一步だけ照らしてくれた。

その一步こそが大事だと思っている。

私はその一步を誇りに思いたい。

「また別れる事にはなっちゃうけどさ。その時までお互い頑張ろうね、加古」

「う……っうん……！」

「私達は姉妹なんだから。お互いいれば必ず頑張れるよ……きつと」

お互いに額を合わせ、共に笑う。二人の間に挟まれた赤い夕日が輝

いた。

まだ二人の仲は完全に治った訳では無い。
初めの一步を歩みだしたに過ぎないのだ。
だがそれでいい。

その一步こそが二人の希望でもある。

今は未完成でも構わない。

いずれは仲良く話せるだろうあの日々とその絆を――、

「苦勞……する、かもね……!」

「そうだね……だから……」

「……頑張らなきゃ……!」

――取り戻す為に二人は戦い続ける。

「あ!?! ウォーターライダー言うの忘れてた!!」

「んな事どうでもいいだろ!!」

Part 5. 疾風勁草のエアゲート
70. 人間は二つの変態で別れている

「ビスマルク」

「グーテンターク。私はビスマルク型の戦艦のネームシップ、ビスマルク。よおく覚えておくのよ」

「サラトガ」

「ハーロー！ 航空母艦、サラトガです。提督殿、サラとお呼び下さいね。よろしくお願い致します」

「ローマ」

「ヴィットリオ・ヴェツ……出来ない！」

「ウォースパイト」

「もつと無理!! っていうか何なのこれ!!?」

「お前、意外と何でもやるんだな」

執務室にて提督と摩耶、瑞鶴が暇を持て余していた。提督は椅子に座りながら机に足を乗せている。瑞鶴は提督に言われた海外艦の真似をさせられていた。途中で嘸んでしまい、我慢ならずに不満を訴えている。

「提督さんがやれって言ったんでしょ!？」

「やっぱお前芸人の才能があるなあ。どうだー? その物真似を活かして海外艦に成り済ますのは」

「何の為なのよ」

「兼ねてから夜戦出来る空母が欲しい所だったんだ。そこで海外艦を誘致してもらいたい。作戦指揮の時に私がやりやすくなる」

提督は立ち上がり、手前の応接間のソファに寄り掛かる。予め用意

されていたコーヒーカップを手に取り、淹れたての珈琲を飲む。摩耶も同様に珈琲を飲んでいた。

「くだらない。一人でやってよ、そんな事。あ！海軍一の減らず口さんはやらないよね？」

「お前ぐらいならグラーフ・ツエツペリンあたり成りすませるだろう。今度某独国に赴いて元帥に尻の一つでも触らせれば異動なんて簡単だ。今度改装設計図でも作ってみよう」

「私は海外なんて絶対嫌だけどね。日本の方がまだ安心出来るし」

瑞鶴が摩耶の隣に座り、舞鶴の榛名から貰った土地のお土産を一つ頬張った。摩耶や提督も珈琲の休憩に食べていく。

「ヒステリックなお前なら簡易な感情表現でも伝わる上、複数の敵艦隊を殲滅出来る最適な場所だと思おうが？　なあ摩耶ー？」

「それはさておき、そのグラーフが海軍で一騒動を起こしてるみたいだけどな」

「あーそうらしいなー」

提督はリモコンを持ってテレビをつけた。テレビのチャンネルを回し、昼のニュース番組を珈琲を飲みながら見ている。未だにニュースにはなっていないが、海外艦であるグラーフ・ツエツペリンが数々の軍人と肉体関係を持ってしまい、寝取られた軍人が怒りをあらわにしている。こんな戦争中によくも馬鹿な事をやれるものだ。

「多くの軍人と肉体関係を持ち、軍人同士がいざこざを起こすっていうね……」

「どんな考え方したらあんなドスケベサキユバスみたいな事出来るんだ……」

「そこじゃないだろ（でしょ）!!」

「はい、今日の仕事終わりー!!」

「お疲れ様だ、提督」

二人にツッコまれた後に提督は今日分の仕事を終えた。夕方十六

時、鎮守府襲撃以降に破壊された寮や司令本部は徐々に補修されていた。

「いやー梅雨が来る前に補修が間に合って良かったよお。雨漏りでもすればこの偉い俺の顔にキズがつく」

「確かに間に合って良かったな。各寮の補修も終わったようだし、後は……ん？」

「どうした摩耶」

「いや、これ……」

リストに載せられていたのは憲兵や整備士などの寮建設。この鎮守府の補修工事は元々大本営が賄っている。その為建設については任せていた。

「ちよつと待て、俺が知らない所で何やったあのクソジジイ」

「憲兵や整備士の寮の建設って……」

「何て仕打ちだあ、今までやってきた事は全て他の人間が干渉していない事から始まっていたと言うのに。馬鹿共の意見すら聞かずに建設かあ、相変わらず大本営の横暴ぶりには反吐が出るな」

「失礼します」

執務室に鳥海が入ってきた。手には何か手紙のようなものを持っている。少し不吉な予感がしたが、仕方なく提督は受け入れた。

「何だ鳥海」

「大本営からお手紙が来ています」

「はあ……摩耶」

「はいはい」

手紙を摩耶に取らせて読ませる。不吉な事が予感している以上、提督自身は読みたくない一心だ。鳥海も気になったのか摩耶と一緒に読み始める。

「つたく、今度は何の厄介事を持ってきた？」

「……司令官候補生の面倒だって」

「ふざけるなア!! 何故新人の面倒を俺が見なければならぬ!! ただでさえこの鎮守府の面倒事が多いというのに、また更に面倒事を持ってきてやがって!! あのクソジジイ……!!!」

あまりの理不尽さに提督は激昂する。司令官候補生の指導など真つ平御免だ。鎮守府の闇がまだ被えていないというのは、何故このタイミングで教育なのか。今はそれどころではないというのに。

「しかもこのタイミングでか……」

「あー本当に最悪だー……」

最も提督が警戒しているのは憲兵や整備士、司令官候補生がこの鎮守府に来た場合、敵になる恐れがある事。敵とはつまり、■■■の味方になる可能性だ。人間は欲に忠実である以上、■■■に唆れて提督達を貶める手段を投じてくる。それは新しく着任した艦娘にも言える事だが、艦娘ならまだ何とか出来る。

しかし人間は艦娘以上に厄介な存在だ、例え提督だろうと一筋縄ではいかない。更にはこの鎮守府の艦娘は人間に対して臆病でもある。前任の優遇制度により差別された側の艦娘はその他の人間に弄ばれた事がある為、トラウマを呼び寄せて騒がれたらそれこそ本当に面倒だ。

「んで、引き受けるのか？」

「100%断りたい所だがあのクソジジイに逆らうのはこれより面倒だ。引き受ける他は無いだろう」

「権力って怖エな」

「全くだなあ」

「提督の事も言ってるんだけどな」

権力は欲に忠実な人間の中で最高の武器だ。権力のある者は無い者を淘汰し、ぞんざいに扱う。例え権力のある者が優しい心の持ち主だろうといつかは必ず豹変する。提督はその前者に例えられるだろう。摩耶に指摘されながらも提督はある事を考えていた。

『私達はある記憶を失っている、そして改竄されている』

舞鶴の榛名から聞いた彼女の意味が含まれた言葉。記憶を失っている、つまりは？α？に関しての記憶が都合良く消え、前任が元々提督だったという改竄を仕掛けたのだろうか。

しかし色々と不明点が残る。何故αを存在ごと抹消させたのか。何故他の人間ではなく艦娘達だけの記憶から消し去って改竄したのか。色々あの■■■■医師に聞かなければならない。あの女は明らかに何かを隠している。

「……さーて仕事終わったし、何しよーかなー!!」

「風呂にでも入ったら?」

「あーそういえば入ってねーなあ……」

この鎮守府に着任してから提督は一度も風呂に入っていない。身だしなみは整えているも、少し臭うと大和から言われた。確かに風呂に入って時間を潰すのも悪くない。

「はあく極楽極楽」

入渠施設もとい、風呂に浸かる提督と摩耶。久しぶりに風呂に浸かる提督は溶けるバターのように蕩け出した。疲れを癒やせる事が出来たのか緊張が解けた声を出している。

「何ヶ月ぶりの風呂だ?」

「恐らく一年」

「覚えてないだけだろ……」

摩耶が考えるには約二ヶ月前だ。久しぶりなのか浸かる際も少しだけビビっていた。長い白髪をポニーテールでまとめ、腰にタオルを巻き、最低限のマナーは守ってくれている。とはいえ最初は全裸で入り、摩耶に殴られたが。

「つか提督と入るのも久しぶりだな」

「大本営の後方勤務からはシャワー室だからな。お前の身体を見るのも久しぶりだ」

「……それあたし以外に言ったらセクハラだぞ。いやあたしのもセクハラだけどき」

「だとしてもお前の身体を見れるのは俺くらいだあ。その逆も然り、お互い苦労してるな」

提督の身体は全身傷だらけだ。刀や鞭、鈍器などでやられた痕が隙間無く残っている。初めて見ようものなら引かれてもおかしくはないだろう。摩耶も同然、傷が残っている。そして深海棲艦のような白い肌が各所にある為、タオルでその場所を隠していた。この事を知っているのは提督しか知らない。それ以前に誰にも教えていない。

「まあ提督の身体は一度見られてるけどな」

「アレは応急処置だ、仕方あるまい」

「許してんのか？ ■■先生の事」

「許してはないが人命救助の為だ、不本意だが見られても仕方あるまい」

提督は風呂の端を顎で支え、お湯で身体を浮かすようにしている。誰もいないから出来る事ではあるが、見た方からすればマナーは最悪だろう。

「やはり風呂という物は人を癒してくれる万物の行動だ。これを考えた人間を神として崇めたいね」

「行儀悪いなオイ」

「今日も疲れたよね」

「ゲツ」

風呂に鈴谷、最上、熊野が現れた。提督がいないのが普通のこの場所ですべて入ってきたようだ。三人は何のリアクションもなく、洗面台で髪を洗っている。

「おっ、響じゃん。摩耶と一緒にするのは珍しいね」

「やあ」

「(裏声で答えてる……)」

どうやら提督の事を響だと勘違いしているようだ。実際風呂のお湯は緑色で底が見えない為に提督の頭しか見えていない。更には白髪と誰かに成り済ましやすい色だ。バレれば騒がれるのは当然なので、提督は面倒そうな表情になりながら裏声で答える。

「しかし珍しいですわね、お二人さんが一緒なのは」

「本当だね。仲良くなったのかな」

「どうやらお前らの目は節穴のようだー、一度公共の水道水で目の奥

まで洗い流してくると良いー。少しは視界が澄み渡り、周りを見渡せるだろうー」

「何々？ 提督の真似かな？」

「いや真似にしては上手すぎるような……」

三人が一斉に顔を背後に向ける。そこには――、

「えっ提督?!」

「バレたか……」

「いやバレるだろ」

我慢ならず裏声で特徴ある言い回しを言ったのでバレてしまった。三人は裸を見られたのか赤面している。提督は嫌そうな顔で反応した。

「覗くなア!!」

「それは場面が違う台詞だゾファツ!!」

鈴谷が叫びながら風呂桶を投げ飛ばした。提督は立ち上がった注意するも風呂桶が額に直撃。風呂の中で水しぶきが上がる。仕方なく摩耶は溜息を吐きながらも説明に入った。

「あーだからこの時間帯に入ってたのね。気付かなかったわー」

「確かに提督がお風呂に入ってるイメージってないね」

「とはいえ裸を見られたのは嫌ですわ」

最上達は訓練で汗を流し、身体を洗う為に来たらしい。額に赤く腫れが出来た提督はまた身体を浮かせている。気分は最高から最悪まで落とされたようだ。

「うるさい黙れー、お前らの所為で気分が最悪だー」

「そりゃどーも」

身体を洗い終えた最上達が摩耶と提督がいる一番広い風呂の中に入る。鈴谷はニヤニヤしながら提督の横に座った。

「何で俺の近くに来るんだ!! 暑苦しいだろ!!」

「えー何く? 提督、恥ずかしがってるのく?」

「んな訳ないだろ!! 暑苦しいから邪魔だと言ってんだ!!」

「提督! 何故勝手に風呂へ入ってるんですか!!」

——五分後。

「何故だ摩耶」

「何が？」

「何故先程まで静かだった風呂がこうも騒がしいんだ」

「さあねー……」

風呂に提督がいると聞いて、興味本位に来た艦娘が集まってきていた。この時間帯は余程の事が無い限りは絶対に来ない。がその余程の事がちようどよく的中したようだ。提督は嫌々な顔をしながらも大和に肩を揉んでもらっている。

「うわあ……本当に提督がいる……」

「人を見世物みたいに見えるんじゃない。さもなくばお前ら全員逆セクハラで訴えてやる、覚悟しろー」

「それ提督がまずいんじゃない……」

「何を言っている大和。俺はあらゆる手段で人の上に立つ男だ。お前らの証言なんぞ不明瞭にして、俺の証言を確立あるものにし、お前らに慰謝料を請求してやる。あ、そこいいじゃん」

「うわ汚い」

この入渠施設及び風呂にいるのは提督と摩耶、最上達、大和と武蔵、蒼龍と飛龍。何故ここに来たのかよく分からない。

「お前らの所為で広々と足を伸ばす事も出来ないとは不便利な世の中だあ」

「ね、提督」

「何だ鈴谷」

「言いくいんだけどさ……その身体の傷痕は、何？」

提督が瀕死になり、意識を失った際に心肺蘇生法をしていた時だ。提督の身体には見るに堪えない程の傷痕がついている。鈴谷はその事が気になっていた。

「あーこれか。まあ……そういう危ない事してアレ受けちゃったって所かな」

「あー……」

妙に納得出来てしまうのが悔しい。この提督ならあらゆる手段を使うはずだ。例えば危ない事だろうと必ず手に触れ、やり遂げてしまうだろう。提督ならやりかねない。

「でもその危ない事って何？」

「うーん……そうだなー……」

腑抜けた声で考える提督。蕩けそうな表情で答えた。

「禁忌を犯した……代償かな」

「禁忌？」

「後は全て片付いたら教えてやるよ、エセJK」

「あ！ 司令官だ！」

今度は第六駆逐隊と古鷹が入ってきた。提督がいる事には驚かず、当たり前のように接してくる。後ろに朝潮型の連中が来た。提督は更に嫌な予感に苛まれる。

「司令官も来てたのですね！」

「あらく司令官。い、いたのね」

「え？ 何でここにクズがいるのよ!! この変態!!」

提督は聞き捨てならないといきなり立ち上がり、朝潮型に指を指した。

「黙れ!! 人の恥部を先に覗きながら変態と叫んでるお前らが一番の変態だ!! 胴体や身体を見ればいいものを恥部が気になって仕方なく見てしまい、それは相手も見てるだろうと勝手に勘違いしている愚か者なんだよ!! お前らはその変態そのものだ!! この薄ら馬鹿共め!!」

「んじや提督は気にしないんですか？」

「気にしない訳がないだ——」

直後に全員から殴られたのは言うまでもない。

「殴る事ねーじゃん……」

「当然の報いだ」

71. 姿は似てても性格は不一致

「あー最悪だー……」

「まあまあそんな事言わずに。スキンシップだと思ってください、提督」

気分が最悪だと愚痴をこぼす提督を大和が微笑みながら励ましていた。提督は風呂の端に顎を乗せ、大和に肩を揉んでもらいながら座っている。

「こんな嫌なスキンシップは久しぶりだあ、あの時の事を思い出す」

「え？ 以前は別の鎮守府にいらしたのですか？」

「まあ昔だけどねー」

提督が無名の頃の話だ。川内や不知火が所属していた少数精鋭の鎮守府をまとめていた事がある。その時に風呂でやたらと騒がしかったのを思い出したようだ。

「司令官、髪を纏めるならポニーテールよりタオルで巻いた方がいいよ」

「出来る事ならそうしたいがこの状況で人の恥部を晒せというのか響。少しは周りを見る事だあ。最もその小さな身体では周りどころか自分すら見えていないようだから牛乳でも飲んで身長を伸ばすといい、少しは周囲も見渡せてマシになるだろう」

風呂は三つに仕切られている。その内の一つに響が提督に助言した。仕切り越しから提督の事を覗いている。提督は白い長髪をポニーテールにしてまとめていた。髪が濡れない為にゴムを使っているが、長い故に風呂の湯に浸かりそうだ。

「何か提督と響って親子みたい」

「……はア!？」

艦娘の言葉を全て聞き過ごしていた提督。鈴谷の発言に二度見し、異議を申し立てた。

「いやだって同じ白い長髪だし、白い肌だし、何となく似てない？」

「ふざけるな!! こんなガキと親子関係などこちらから契約破棄してやる!!」

「いやでも二人並べたら……」

鈴谷が響を猫のように持ち上げ、提督の背中に座らせる。その姿を見て鈴谷が涙を浮かべながら笑った。

「やっぱ親子じゃん……!」

「鈴谷お前エ!! 人の背中に響を乗せるなア!!」

提督が暑苦しいと激昂する。しかし鈴谷と響本人は面白がっているようだ。提督は無理矢理暴れて、響を強制的に降ろす。響は情の籠らない声で驚き、風呂の中へダイブ。流石に逆上せたのか提督は風呂の端に寝転んだ。

「つかお前らは俺がいて平気なのかよ」

「え? 何が?」

「別に」

暁達が頭にはてなマークを浮かべる。摩耶は面白半分でコソコソと暁達に話した。提督は罵られた暁と雷を心配して問い掛けたらしく、近くにいた朝潮達もその理由に納得する。

「あーそういう事……」

「何気に気遣ってるのね〜」

「変な事で優しい所ありますね、司令官」

「そこ何喋ってるんだ!! うるさいぞ!!」

艦娘達のコソコソ話が癪に障ったのか提督が朝潮達を怒鳴りつける。満潮や霞は逆ギレし、提督と口喧嘩になった。

といっても満潮と霞が一方的に提督の頭を何度も踏みつけているが。暁と雷は理由を聞いて、提督に近づく。

「大丈夫よ司令官。確かに今も人間は怖いけど司令官は別だもの」

「そうよ! 命の恩人だものね!」

「あーあー聞こえない。俺はそんな事など知らな〜い!!」

理由を知られて提督は耳を塞ぎながら知らないフリをしている。提督からは見栄を張るなど大声で言いたい。近くに来ながら身体が震えているのが目視で確認出来たからだ。何故ついてくるのか分からない。

「それに何か、女性っぽいし」

「よし鈴谷。お前は滅給だ」

「はあ!? そんなの無くない!?!」

提督は男でありながら女性の様にやせ細った姿なりをしている。それと合わせた身体中の傷痕。そして白い長髪。傍から見れば女性と見られてもおかしくはない。女性である事を好まない提督は不機嫌になり、発言した鈴谷に罰を与えた。

「自業自得だあ、己の愚かさに打ちひしがれるがいい」

「うっわ……汚い」

「セナカオシテヤル、ノネ!!」

「ピョンピョンナノネ!!」

「キズダラケナノネ!!」

提督の背中の上で妖精達が楽しく跳ねている。更には風呂の中で浮き輪に揺られながらのんびりと湯に浸かる妖精までいた。

「何で妖精までいるんだよ!!」

「ナントモシツレイナ、ナノネ!!」

「ワレワレモ、フログライ、ハイルノネ!!」

「ウキワデ、ウカブノサイコウ、ナノネ!!」

「いつもの事ですよ?」

「クソツ……久しぶり過ぎて俺の記憶が曖昧だ……!!」

提督は頭を抱え、馴れ初めに侵されていくのを実感した。ここにいたらまずいと即座に風呂から上がる。部屋着に着替え、執務室に向かった。何故か最上達と木曾が後を追い掛けてくる。

「あー最悪だった」

「あれ提督、いつもの服は?」

「……あのな、俺が軍服しか着ないと思ったら大間違いだぞ。お前ら馬鹿共と違って俺は色んな服を持つてる。何故お前らはいつも正装なのかこちらとしては寒気がするね」

「いやだって正装しかないし」

その言葉を聞いて提督が身体を跳ねらせる。そういえばこの鎮守府の艦娘達が外の世界に興味すら持たない事を思い出した。貰ったお金も全く使っていないだろう。

「……ああそうか。金が無いんじや服も買えない訳で……いい気味——」

「それは仕方ないだろ。提督、外出許可かインターネットの環境を許可するしかない」

摩耶に殴られた提督は頭を大事そうに摩っている。途中で嫌味を言いそびれた。

「久しぶりに殴られた……まーそうしてあげたい所だが、計画に影響するから嫌なんだよなあ」

「何で？」

「何故相手側が有利になるような事を自ら進んでやらなければならぬ。自分で墓穴を掘るようなものだ、簡単には許可出来ない。だから事前に申請書を出せと言っているんだ」

欲しい物があれば簡単な申請書を書けば摩耶かプリンツの監視下の元で買う事を許されている。全ては■との戦争において有利に立つ為。回りくどい方法ではあるが、前のように盗聴器を仕掛けられたらこちらが不利だ。不幸中の幸いとして土地勘が無いのがあるが、たいが。

「なら提督と一緒に行けばいいじゃん」

「嫌だね、そんな面倒な事などこちらからお断りだ」

「ならインター……ネット？　みたいなのは？」

「断る。変なの購入されて仕掛けられたらたまったもんじやない。それか申請書を書いてこい」

八方塞がりだ。鈴谷が頬を膨らませる。どの方法も全て否定され、苦言を申し立てた。最上と熊野もやれやれとお手上げ状態。

「んじやどうすればいいの!!」

「提督」

「何だ木曾、ゲツ」

後をついてきた木曾が提督の肩を掴む。嫌な予感がした提督は思わず声が漏れる。恐る恐る背後に顔を向ける提督。木曾はニヤニヤとやけに笑っていた。

「褒美の件、俺達の買い物に付き合う事にして使わせてくれ」

「……」

全身の汗腺から滝のように汗が流れていく。提督は目を逸らして、知らぬ顔をしている。徐々に顔が青ざめていった。

「まさか忘れたとは言わないよな？」

「いやー……忘れたッ！」

忘れたと行った途端、提督は全力疾走。木曾達も慌てて追い掛ける。

「待て!! 何が忘れただ、勝手に約束しといて一方的に破ってんじやねーぞゴラア!!」

「んな事知るか!! お前は言っただろうが俺は覚えてねえんだ馬鹿共め!!! ウキヤキヤキヤキヤキヤ!!!」

提督は屁理屈を並べて木曾達を小馬鹿にする。提督の走る速度が何故か早い。このまま追いつけるか分からない状況だ。

「くそッ……!! なんて逃げ足の早い野郎だ……!!」

「いや木曾、剣投げればいいんじゃないやね？」

「ああ成程」

摩耶の助言通り、木曾は剣を鞘に納める。そして提督目掛けて投擲した。

そしてその剣は――、

「ケツガアアアアアアア!!!」

提督の尻に直撃した。

「お前……投げるのは無しだろ……」

「自業自得だ、己の不甲斐なさを恨め」

提督は声を上げるにはいられず、その場で悶えている。何度も身体を伸び縮みさせ、木曾達に追い詰められた。さりげなく提督は木曾の剣を抜き、堂々と座っている。

「……分かった。万が一にも逃げ出した事は仕方ないとして……」

「いや仕方ないじゃねーから」

「上官のケツにサーベルを投げて刺すのはどうかと思うんだ」

「いやだって全力で逃げようとするからじゃん」

「ほらよく見ろ、俺の下半身からク○吹き散らかしたみたいになってるじゃないか」

「もうちよつと言ひ方なかったのか、会話が一気に汚くなつたぞ!!」

「はあ……」

「あ！ あそこにUFOがー!!」

「「え!?!」」

「今だッ!」

提督が窓の空に指さした。木曾達はつられて空を見る。目を離れた瞬間、提督はまた逃げ出した。

「何がUFOだ!! ただ空を飛んでる鳥じゃねーか!! ちよつと期待した俺らの純情を返せこの野郎!!」

「うるさい黙れ!! 騙されるお前らが悪いんだ!! もう少し知識を養え馬鹿共!! ウキヤキヤキヤキヤキヤキヤ!!」

先程は剣を投げたから止められた。しかし今はその剣が無い。走っている提督に奪われてしまった。

「くっそー!! 剣があったら必ず止められるのに!!」

「あ、でも木曾。艀装展開し直せば戻ってくるんじゃない?」

「ああそうだった」

艀装を一回収納させ、もう一度展開。すると提督が持っていた剣が木曾の手元に戻ってきた。そしてまた投擲。

「ケツガアアアアア!!」

またまた提督の尻に直撃した。そのまま執務室へ衝突する。

「……お前……それズルくない?」

「仕様だ、さあ観念してもらおうか」

「つか何で二回もケツなんだよ……」

提督ら床に寝転び、再度悶える。木曾達に囲まれ、逃げ場を失った。摩耶に介抱してもらい、何とか椅子に座る。天井を眺めて上の空だ。「結局どうするの?」

「……あー!! もう分かった! 考えるから待ってろ!」

木曾達の喜ぶ声が聞こえた。これにより提督と艦娘の買い物付き合いが約束される。提督は頭を抱えて先を思いやられた。

「あー本当に面倒だ」

「どうやらお前ら二人は何か隠してるようだなあ」

「……趣味悪いですね」

「今に始まった事じゃないだろう」

提督は近くの椅子を持ち歩き、反対側にして座る。少しばかり苛立つ前明石。ここに居たという事は先程の会話も聞かれているだろう。

「大方お前ら脅されてるだろ。■■■か、かつての上に」

「……だから何なんですか。あの事に触れれば貴方だろうと無事では済みませんよ」

「だろうなあ。あの鬼の大佐も怯えるほどだ、だが俺は知ったこつちやない。例え自分の身がどうなるうが真実を知ればこちらの勝ちだ」

前明石はだんまりとしている。この様子から見て余程の事があつたと見える。人が話している中、黙り込むのは一番の面倒だ。不本意だが別の話題にするしかない。

「……はあ……話すのは中々しぶとそうだから今はやめておく。んじや別の話題に切り替えるとして。明石、お前は改造した戦闘意欲増進剤を開発した張本人だ、艦娘を洗脳させ、差別意識を続けさせたのはお前か？」

前任の話で艦娘達の洗脳及び差別の原因が前明石が開発した戦闘意欲増進剤なのは既に分かっている。だがどうやってそれを実行させ、継続させて来たのか。■■■ではという予想もしているが、本当とは限らない。それが唯一知りたいところだ。

「……知りませんよ」

「知らないかどうかを聞いてるんじゃない。差別意識を続けさせたのはお前か■■■なのかと聞いてるんだ、早く言え」

「……」

また前明石は黙り込む。余程教えたくないのか口を開こうともしない。提督はあまりの沈黙に呆れてしまった。頭を抱えて溜息を吐く。

「……これは教えとくが……■■■や榛名に裏切られた拳句、お前はトカゲのしっぽ切りだ。お前をどうしてもいいとアイツらから処分を

言われている」

「そう……ですよね」

分かり切っていた事だ。作戦に失敗した挙句、提督に囚われた。前明石自身はどうでも良くなっていた。この世に未練は無い、生きる意味すら無い。ただ自分は縛られたまま道具として扱われるだけの存在だ。

もう自分は必要とされていない。

「そして今お前は自由の身になり、それと同時に道具として扱われる身となった。皮肉な話だよなあ、道具を扱っていた奴が道具に成り果てるんだから」

「うるさい……！」

「何がうるさいだあ、本当の事だろう。洗脳の為に薬を開発し続け、仲間を道具として扱い、更には自ら拷問器具を開発し、道具を調教させるようにしたのは他の誰でもないお前なんだから」

「黙れ……！」

明石を追い詰めるように提督が言い詰めた。歯を食い縛り、拳を強く握る。どう悔しがろうが無関係ない。提督は明石の気持ちを代弁して話し続けた。

「さぞかし気分が良かった事だろう、自分が必死に開発した物がありがたく使用され、その都度に幸福感と同時に自分は必要とされているんだと心の底から実感した。更に開発はエスカレートしていき、拷問器具もありがたく開発した。道具がどう嘆いていようが構わない！ どう金切り声を上げようが構いやしない！ だってそのおかげで自分は優位な立場にいるんだから!!」

「黙れッ!!」

激昂する明石が提督の首を絞めようと起き上がる。拘束された両腕で掴もうとするも ■■■ 医師とプリンツに止められた。ベッドの上で暴れ出し、何度も襲い掛かる。

「貴方に……私達の気持ちがあつてたまるか!! 脅されて何も出来

なかつた私達の……苦しみを……理解すらしてないくせに!!」

「当たり前前の事を何言ってるんだお前は」

「言わせておけばアア!!」

明石の叫びが医務室に響く。暴れ出す明石を抑えるだけプリンツ達は精一杯だ。その顔は提督を、いや人間そのものを恨み憎むような表情だった。涙も頬を伝い、唇を噛んで血が出ても気にしていない。「やっとそれらしい顔してるじゃないかあ、前明石君。その憎悪に溢れた顔がまさに人間そのものだ……そのお前と話したかった」

提督はわざと明石の前に近づき、顔を寄せる。ニヤニヤしながら明石の表情を見詰めた。随分と何かに恨みがあるようだ。

「前明石、脅されてるんだろ？ 誰にだ？」

「言える訳が無いでしょう!!」

「言ってくれたら俺が何とかしてやる……と言ったら？」

「ッ!」

一瞬、明石は戸惑った。

確かに提督はそれを出来るだけの権力と実績、行動力がある。認めたくはないがその強さは本物だ。■■側でも一番手を煩わせている存在になっている。

「分かってるんですか!? 例え中将の貴方だろうと死ぬかもしれないませんよ!」

「何の話をしているんだ？ 俺は洗脳を続けたのは誰かを知りたいんだが」

「しまっ……!!」

思わず口が滑ってしまった。また罠に嵌められた明石。今提督が聞いていたのは洗脳を続けたのは自分か■■か。だが前明石は興奮し過ぎてあの事を答えてしまった。

「実にいい顔だあ明石。ああ確かにロクな目には合わないだろうなあ。だが生憎俺はしぶとい人間でねえ、そこら辺の拷問された所で別に何とも思わない。それに俺はくだらない事で死ぬつもりは無いのだよ」

親指と人差し指を擦りながらニヤニヤと笑う提督。何か仕掛けよ

うと企むような表情だ。言葉に説得力がある故に反論が難しい。

「本当に……手を染めるつもりですか……？」

「ああ勿論」

「失敗したらお終いですよ、責任取れるんですか？」

「取るわけないだろ？ 馬鹿なのか？」

何故なら失敗しないからだ。提督の仕掛けた作戦は尽く成功している。多大な情報網に権力行使と手段は多種多様だ。それ故に自信は満ち溢れているのだろう。

「……もし」

「ん？」

「もし本気で私達が覚えているあの事を解明しようとしているなら…… ■■さんの事も助けてくれますか？」

■■を助けてくれるか。思い切って明石は問い掛けた。提督は少し驚いた表情をしている。だが先程までの笑みは消え、口角は下がっていた。

「……考えよう」

そう言葉を呟き、提督とプリンツは医務室を去る。代わりに球磨と多摩が監視に入ってきた。医務室を出た提督とプリンツは医務室のドアの横で待ち伏せしていた摩耶と出会う。

「提督」

「分かっている。心配しなくても大丈夫だ、摩耶がいるからな」

「またアレはもう二度とごめんなんだけど」

「別にやれって言ってるわけじゃない。ただ……俺がそうなるかもしれないって事だ、よく覚えておけ」

「……分かった」

少し不穏な表情の摩耶。時間を置いて考えた後に仕方なく了承した。摩耶自身は正直言ってアレは起こしたくない。自身が暴れた事により、たった一人で横須賀鎮守府と大本営を壊滅寸前に追いやったあの事件を思い出してしまうからだ。少し複雑な気持ちになるも摩耶は提督に黙ってついていく。

「さーて今日は色々なローテーション決めるかあ」

執務室に戻り、提督と摩耶とプリンツは日頃のローテーションを決める会議をしていた。日常的な生活でもある洗濯、掃除、調理、深夜の見回りや出撃任務や遠征任務の役決めを未だに決めていない。その為、艦娘達は生活習慣に慣れておらず、今後の為にと提督が考えた。だが決めた本人である提督が物議を醸し出す。

「おいちよつと待て。何故秘書艦も範囲に加えられるんだ」

「だって摩耶だけじゃ苦勞が重なると思いますし、一日ずつで決めた方が効率良くないですか？」

「摩耶とお前だけいけば充分だ」

この鎮守府に着任してから日頃の秘書艦は摩耶が九割、プリンツが一割を務めている。殆ど摩耶が秘書艦だったため、提督との交流やビジネス関係を学ばせる為にプリンツが考えた。だが提督は摩耶が良いと駄々を捏ねる。

「提督、頼りにしてくれてるのはありがたい嬉しいけど……あたしも少しは外れてみたいかな……なんて」

摩耶は少し恥ずかしながらも何とか提督に頼んでいる。目線を逸らし、顔が赤い。提督は頬を引き攣りながらも摩耶の事を考えた。確かに働かせ過ぎな所もある。

「……はあ……分かった。許可する、プリンツ達で決めておけ」

「分かりました！」

プリンツが敬礼しながら笑顔で応える。溜息を吐きながらも自由に決めさせる事にした。どちらにせよこれが来る事は分かっていた事だ。来る時間が少し早くなっただけに過ぎない。提督は予定帳を取り出し、明日の確認をする。

「えーつと……明日は午前十三時で大本営にての某独国との会議か……面白い真似してくれるな」

「提督、新幹線の切符は買っておいだぞ。今回は送迎のバスは出せるけど送迎の船と交通費は出せないって言われたからな」

「あ、そこまで進めてるのか。交通費出さないとかどんだけケチなんだ大本営は」

「提督も人の事は言えないけどな」

明日は某独国との会議が予定されている。地方の鎮守府では通常、ビデオ通話で会議する事が多い。しかし海外との会議をする場合、一度南方や北方を除く日本にいる全員が大本営か横須賀鎮守府に集まり、執り行う事が殆どな為にわざわざ出向かわなければいけない。その際交通費を免除してくれる事があるが今回に至っては無いらしい。どうも不自然だ。

「それで？ 連れていく艦娘は決まったのか？」

「一応決まっている。あたしは行けないけど、代わりにプリンツが行くから。それぞれ代表で決めたらしい」

「あーやっぱ面倒だああ……」

「机の中に縮こまろうとすーるーなー」

これから艦娘共に付き合わされると思うと身体が震えてしまう提督。机の中に潜り込み、体育座りで籠っている。だが摩耶に強制的に引きずり出され、椅子に座らせる。

「泊まる場所も決めておいた。あたしに感謝するんだな」

「まさか俺の金で払ったのか？」

「当然だ」

「……最悪だな」

「別にいいだろう？ 有り余るほど持ってんだからさ」

貯金は腐るほどある。それこそ島一つ買える程の額だ。実際鎮守府襲撃や深海棲艦の密告者の件でかなり稼げている。しかし本人は例外を除いて自分の為にしか使わない。

「それにそろそろ記念日だし特別な物が欲しいかなー？」

「……考えておこう」

記念日はケツコンカッコカリした日の事だ。そろそろその日が迫ってきている。摩耶はちょうどいいと提督におねだりした。仕方なく提督もそのおねだりを受け入れる。

「ところで摩耶。確認なんだが新幹線の切符は自由席か？」

「とりあえずはそうしてある」

「そうか……んじゃ送迎バスの時間、予定より五時間早くしてくれ」

「何でだ……？ あっ、成程な。分かった」

摩耶は書類を見て、途端に納得した。プリンツは首を傾げて、頭にはてなマークを浮かべている。何の事か、提督に問い掛けた。

「Admiral、何で時間早めたんですか？」

「これを見ろ」

書類の内容に書かれた時間。午前十三時と表記されている。しかも十と時の間に無理矢理三を付け足している様に見えた。明らかに訂正したような痕跡がある。

「これは嘘の時間が表記されている。前に臯月達から貰った書類には午前十時と表記されているが、先程貰った書類だけには午前十三時と表記されている。あまりにも不自然だ」

「まさか……わざと時間を早めて……？」

「だろうなあ。俺がいたら会議なんてすぐ終わる上に自分達にとって不都合な事しか起こらないからな」

提督が書類を机に投げつけ、足を乗せる。どうやら提督にだけ何か隠したい事があるらしい。臯月や瑞鳳、ガングートに連絡させて正解のようだ。この書類はつい先程送られてきた物。本来なら会議を始める際は数日前に送られる。

だが日付は会議が開かれる日は明日、全員が出席しなければいけない会議に提督だけが遅く送られ、更に遅い時間に呼ばれている。

「さーて……面白くなってきたぞー……」

「あ、すまん提督。新幹線の切符も提督の金だったわ」

「よーしぶん殴ってやるから覚悟しろ!!!」

73. 田舎者は高層ビルを眺めたがる

「はい、全員揃いましたかー」

荒くれ鎮守府の門前に提督と艦娘達が集合していた。時間は早朝五時、白い雲に覆われ、小雨が降っている。提督は変装を施し、長い黒髪のカツラに黒いサングラス、右頬の古傷を化粧で隠していた。

「私は大丈夫です」

「大丈夫だクマー」

「行けますー！」

「いつでも行けますー！」

「行けるネ」

「大丈夫よ」

「よーしうるさい黙れー、行くぞー」

門前に集合したのはプリンツ、不知火、第六駆逐隊、球磨、木曾、伊168、羽黒、鈴谷、金剛、瑞鶴、加賀。プリンツと不知火以外、持つ荷物が無いのでそれぞれ軽装だ。プリンツに至っては私服に着替えている。

「外行くの初めて……」

「ドキドキするクマー」

「お出かけ楽しみだなー」

初めて送迎バスに乗り、騒ぎ始める艦娘達。まるで小学生の遠足のような騒ぎようだ。随分と楽しみにしているのだろう。

「うるさくてすまない」

「いえいえ大丈夫ですよ」

「急遽時間を早めて来てくれるのはこちらとしてもありがたい」

「いえ私は元々この時間帯に来る予定でしたよ」

送迎バスの運転手とは仲が良い。幾度か様々な場所やここへ送ってもらった事があった。提督の過去を唯一知っている外部の人間で、それ故に提督の性格や考えも少し分かってくれている所がある。

「……？ ああ成程、世話が焼けるな」

「ふふっ……そうですね」

荒くれ鎮守府から新大阪駅まで約何時間。ここから新幹線に乗り換える。都会に初めて来た艦娘達は上京したての田舎者のように、並んだ高層ビルを眺めていた。都会に艦娘がいる事はそう決して珍しくはなく、それほど目立ってはいない。一番目立っているのは変装した提督だけだ。傍から見れば不審者と間違ってもおかしくはないだろう。提督とプリンツは遠足の引率のように艦娘達を引っ張っている。

「早く来ーい」

駅構内へ入り、プリンツがそれぞれ切符を渡して優しく教える。提督は駅務員と手続きを終わらせ、艦娘達はオドオドしながらも改札口を通っていく。そして東京行きのホームをエスカレーターで登った。勝手に動くゲートや勝手に動く階段、シュワシュワする飲み物や甘いお菓子を目を光らせている。

「自由席だが固まって乗るようー」

「はーい」

無事新幹線に乗り込む提督御一行。初めて乗る新幹線に艦娘達は緊張でソワソワしている。次第に動き出し、時速三百キロメートルで走行する新幹線の窓から眺める景色に夢中だ。小さな窓に張り付いたまま離れるのをやめない。天候が悪いとはいえ艦娘達にとっては思い出に残る物だろう。

「はい着きました東京」

新東京駅に降りた提督御一行は送迎バスで大本営に向かう。東京は深海棲艦強襲に常時備える為、一日中艦娘が海を見張っている。商業施設には空襲対策用で地下に核シェルターが用意され、歩道や車道にはある程度の爆発の衝撃にも耐える透明型のトンネルが配備されていた。軍港には護衛艦が停泊しており、妖精達が整備士と話し合っている。

「プリンツ、不知火。今日はお前に任せる。来い瑞鶴」

「わ、分かったわ……」

「分かりました！ 頑張ってくださいーい」

提督と瑞鶴、プリンツと不知火達に別れて行動する。提督と瑞鶴は

会議の出席、プリンツと不知火達は洋服や欲しい物のお買い物。別れた提督と瑞鶴は大本營の門前まで歩き、近くの憲兵と視線を合わせる。

「今日って何の会議なの？」

「さー何の会議かなー」

「ねー何なのよー?!」

「……えーっと、独国元帥との会議ですね、ご案内致します」

「えっ」

突然固まる瑞鶴。某独国元帥と聞いて、提督の話を思い出した。いやしかしアレは提督が冗談半分で言った事だ。真に受ける方がおかしい。内面心配だった瑞鶴は恐る恐る提督に聞いてみた。

「元帥ってあの？」

「その」

「……え、嫌だよ!? 成り済まさないし異動なんてしないから!! 尻なんて触らせないからね!」

「ただの話し合いだバーカバーカバーカ」

小馬鹿にしながら提督は駆け足で大本營の敷地へ入る。頬を引き攣りながらも瑞鶴はその後を追った。流石この戦争の最終拠点だ、最新設備が整っている。荒くれ鎮守府には無いものばかりだ。途中で提督と別れた瑞鶴は憲兵にある場所へ連れていかれた。

「秘書艦の方はこちらへ」

「は、はい……」

提督は大会議室にコソコソと泥棒のように入り、壁を伝っていく。大会議室はとても暗く、奥のプロジェクターで某独国海軍元帥が国際テレビ通話で話していた。

「——こちらの艦娘を何名かを独国への異動先へ……」

「六名程送るとしよう。どの鎮守府で決めようか」

既に会議は始まっているようだ。書かれた書類には会議の開始時間は午後十三時。しかし今は昼の十時だ。本当に十三時にいけば会議はとづくに終わっていた事だろう。

「Ich will Schlachtschiffe, gro-

e Kreuzer, Zerstörer」(こちらは戦艦、大型巡洋艦、駆逐艦が欲しいかな)

「成程……」

「あの荒くれ鎮守府とかで良いんじゃないか？」

異動する艦娘を荒くれ鎮守府から選ぼうと言う意見が出た。他の軍人達は首を縦に頷き、賛成している。どうやら提督を呼ばなかったのはこの為らしい。正直な所、反吐が出る。

「いやー俺がいない間に勝手に決めるとは些か海軍の知能指数も低下したようだ、ハッキリ言つて反吐が出る」

「っ!？」

提督が堂々と名乗り出た。元帥と大将の中間にパイプ椅子で座り、長机に堂々と足を乗せている。突然の提督の登場に大会議室が驚きの声で埋まった。

「おや何を驚いてるのでしようか。会議を続けて頂いて結構ですよ」

「Wer bist du?」(貴方は誰だ?)

「久々に会えて光栄です■■■元帥閣下、私はあの白と申します。

この仮面を見ていただければお分かり頂けるかと」

提督は机の上に乗り上がる。般若の仮面を被り、自分が何者かを証明した。それを見て独国元帥ら手をポンと叩き、何かを思い出す。

「Wei! Es war schön, sich zu treffen!」(白か! 会えて良かった!)

「Es ist schön, dich zu sehen」(こちらこそお会いできて嬉しいです)

独語で返事する提督。発音はまだまだだが独国元帥には伝わったようだ。提督は長机に降りて、パイプ椅子に再度座る。

「さて……はい、続けてどうぞ」

提督が会議を進めるように促すも他の軍人達は沈黙状態だ。提督がいる事が不都合なのか、視線を逸らして周りを見ている。ため息を吐きながらも提督が自ら進行させた。

「……今回は欧州棲姫討伐の件でこちらの日本艦を独国に援軍へ行か

せるといった会議ではなくて?」

「ああ……そうだが……」

「そしてその異動先を我が鎮守府にすると……つくづく日本海軍も落ちたものだ。まだ矯正すらしていない艦娘を送るなど、余程自分の戦力を引き渡したくないらしい。あ、これは翻訳無しで」

と言ったものの、独国元帥の隣にいる翻訳者のビスマルクが困惑している。途中まで伝えてしまったのかオロオロとしていた。独国元帥は全く気にしておらずに真剣な表情だ。

「貴方の手でも矯正は出来ないと?」

「それは議会とは関係ありません。今は別のお話です、ちゃんとお話を聞きましょうか」

頭の横で指を動かし、ニヤニヤとする提督。頭は大丈夫ですかーと遠回しに言ってきた。その表情にイラついたのか舌打ちする音が聞こえる。そこで提督は机にまた乗り、ある提案する。

「であれば私個人の意見として横須賀鎮守府の長門、陸奥、利根、筑摩、天津風、島風を援軍に向かわせる事をおすすめします。何故なら横須賀鎮守府では今絶大な軍事強化を行っており、歴戦の艦娘がゴロゴロというわけです! ええくええく素晴らしいと思いませんか? この艦娘達が入れば欧州棲姫など恐るるに足りません。海域に出撃すれば目視した敵艦隊をばったばったと薙ぎ倒し、そこら辺の中ボスなんて人捻り、欧州棲姫もひえくと泣き叫び、いずれ海を平和な海にする事でしょう!! 素晴らしい! 素晴らしい! ブラボ!!」

机の上で堂々と歩く提督は一人拍手で歓声をあげた。大会議室が提督の拍手する音で響き渡る。他の軍人達はだんまりだ。

「というわけで私の意見を参考にして頂ければと思います。以上」

「……何か他に提案は?」

気を取り戻したのか提督は拍手をやめて、自分の位置に戻る。日本元帥が他に提案を求めた。すかさず横須賀鎮守府に務めている中佐が書類を持ち出し、言葉を並べる。

「白中将殿は以前、最強の深海棲艦と呼ばれた戦艦棲鬼を金剛という艦娘が単騎で瀕死に追い込み、また天龍が暴君と呼ばれた南方棲鬼を

討伐しています。その他の艦娘も並ならぬ戦果を納めている為、援軍としては充分かと」

「白くんは？」

「■■中佐、残念ながらうちの鎮守府の艦娘達はまだまだ弱いのですよ。それこそ表沙汰に聞けば確かに素晴らしい戦果です。しかしその時の金剛や天龍はどちらも満身創痍、とても有利に戦っていたとは思えず、戦艦棲鬼の方は逃しております。欧州棲姫を討伐するならこれくらいは損害無しの状態でどちらも討伐出来なければいけません……ですがですが!! 横須賀鎮守府の先程六名であれば最近発見された未曾有の新個体や単騎で攻めてきた港湾棲姫を無傷で討伐又は鹵獲している戦果がございます!! これほど優秀な艦娘がかつてこの世にいたでしょうか? いいやいません!! 彼女らには申し訳ないですが、あの六名の他はいないでしょう!!!」

提督はまたまた机の上を堂々と歩き、納得出来る理由をネットショッピング風に紹介した。荒くれ鎮守府と横須賀鎮守府の違いをハッキリと述べ、格差をつけていく。

「Es gibt sicherlich einen Grund
……Lass es uns tun!」（確かに理由があるね……
それにしよう!）

「決まったようだな……」
「んなッ!」

提督のプレゼンがお気に召したのか、提案を受け入れてくれた。独
国元帥も乗り気になってニコニコとしている。他の軍人達は異議を
唱えた。

だが――、

「ちよつと待ってく——」「ありがとうございます!! 私の意見を参考
にして頂き誠に恐悦至極! 頭が下がる他ありません! 後日正式
な手続きを済ませた後に援軍を送らせて頂きます! 必ずや貴方達
の力となるでしょう!! では会議はこれにて以上とさせていただきます!!
ありがとうございますー!!」

独国元帥との通話が終わり、大会議室が蛍光灯で明るく照らされ

る。カーテンを開けて、太陽の光が差し込んだ。提督の一方的な話の進め方に他の軍人達は茫然としていた。

「……派手に暴れたね……白くん」

「お褒めの言葉、ありがたく受け取らせていただきます」

「ふざけるなツ!!」

「こんな事が通つていいのですか元帥殿!!」

「そうですよ!! こんな男の意見をなど罷り通つていいわけが無い!!」

他の軍人達が怒りをあらわにし、異議を唱えた。こんなのは間違つている、横暴だと提督に訴えた。元帥は顎髭を触り、困り果てている。「うーん……と言われてもあちらの人達が決めちゃった事だし……もう変えれないんだよねー」

「おやおやそれは仕方ないですねえ」

「何故だ……あまりにもこれはおかしすぎる!!」

「へーだったら何故俺に送られた書類だけ会議の時間がおかしいんだが、どういう事が教えてもらおうかー?」

「ツ!!」

一部の軍人が驚いた表情をしながら俯いた。しかし■中佐だけは敵視するような目で提督を睨んでいる。どうやら首謀者は■中佐だったらしい。

「大方、俺がいると邪魔だからこんな事をしたんだろう■中佐。俺を一番目の敵にしているのはお前だもんなあ〜」

「何が言いたい……!」

「別に。セコい手使うぐらいならもうちよつと技術を上げてもらいたいかなー? だとしても分かつちやうけどねー」

提督は耳の穴をほじくりながら丁寧な話を続ける。■中佐は何も言えずに齒軋りしていた。余程嫌いなのか机を叩き、自身を落ち着かせている。

「第一に君達はある失態を犯した事を言わなかった私に感謝したまえ。あのまま強行採決に出ようものなら力づくで公表していた所だ。私が喋ってる時は、それはそれは緊張したものでしょう」

「それは今の議会と関係ないだろ……!!」

「まあその議会の話題は既に終わってるけどねー」

会議は口喧嘩に勃発し、外の廊下まで聞こえる程になる。誰もいない廊下にただ一人、艦娘がある場所へ向かっていた。

「……………こね」

74. 酒を飲む連中に毒を入れれば静かになる

『瑞鶴、お前に重要な任務を言い渡す』

『大本営の資料室に潜入し、ある書類を見て欲しい』

『見るだけだ。事実確認だけすればこちらが有利になる』

『言っておくが失敗は許されない。普段資料室に艦娘は入れない、許可証が無い限りは無理だ』

『しかもその許可証は一ヶ月ほどかかる。もしあの事を知った俺を把握しているなら、大本営が許可してくれるかどうか怪しい上に俺が入れるかどうか分からない』

『だから俺が惹き付ける。その間に資料室に潜入し、黒色のファイルを開け。俺の記憶が正しければ黒か赤だ』

『潜入ルートまでは臯月達が案内する。その時に瑞鶴の事も手伝ってくれるだろう……いいか——』

『——書かれた事実が本当だとしても感情的にはなるな。絶対だ』

「……ね……」

憲兵に案内され、臯月達と出会った瑞鶴は資料室に侵入していた。臯月が見つけた裏ルートから瑞鶴と瑞鳳が潜入し、見張りにはガングート。

「私も手伝うよ、瑞鶴」

「ええありがとうございます。提督さんは黒か赤のファイルって言った」

「黒か赤、これね……待って」

それぞれ種類別に別れた金具棚から黒か赤のファイルを取り出す瑞鳳。しかし色々取り出そうとしている瑞鶴を抱え、積まれたダンボール箱の陰に隠れた。瑞鳳が隠れながら見る先には監視カメラ。先程潜入した裏ルートからは見えないようになっていたが、それでも資料室全体を見渡せるように工夫されている。

「監視カメラがある。だけど今は臯月が気を引いてくれているわ、読みましょう」

一方臯月とはいうと――、

「ね〜ね〜憲兵さん！」

「ん〜何だい臯月ちゃん」

「一緒にゲームしよ！」

ニンテンドースイッチとプロコントローラーを持ってきた臯月は監視室にいる憲兵達を誘っていた。憲兵達は忙しいので出来れば他の人達に任せたいがサボりたいのも事実。可愛すぎる臯月のお断りを拒否するのも気が引ける。憲兵達は頭を悩ませていた。

「うーん……まあいいか。少しくらい」

「ちようどサボりたかつたし、ここならバレないでしょ」

「ありがとうございます！」

『おっけーだよ』

スマホのLINEから臯月の了解を受け、瑞鳳と瑞鶴はまた動き出す。物音を立てないように静かに関係のある書類を読んでいく。

「……無いわね」

「もしあの事が本当だとすれば、この戦争を揺るがしかねない事になる」

「そこまで……一体何が……」

「秘密のメールで送られて来たんだけどね……提督は貴方達の前任が深海棲艦の提督になったのは大本営が薦めたから、という推測をしている」

瑞鳳が言うあの事とは瑞鶴が所属する鎮守府にかつて提督として務めていた存在？ α ?はそれに気付き、存在ごと前任に消された可能性がある事。提督の推測でありながら、身の毛がよだつほど恐ろしいものだった。あまりにも信憑性の無い虚空の出来事だと思っていた。

「えっ……?」

「確かに聞いただけじゃ信じられないよね。でもこの前■大将に許可を貰って資料室に入ったの。その時に確信したわ」

それは鎮守府襲撃から約一週間ほどが経ち、提督からメール送られた時の事。海域攻略の為に海域図を持ってこいと言われ、特別に資料室へ入る事を許可された瑞鳳。■大将は時折艦娘を資料室に入らせてくれる時がある。偶然入室出来た瑞鳳はその時に少しだけ緑色のファイル、数々の海軍が起こした事件簿を覗いた。そこには世間に公表された事件や事故などが詳しく表記されている。

しかしあの荒くれ鎮守府が唯一起こした憲兵殺害事件のページは破られていた。そしてパソコンの中にあるその存在？ α ?についてのデータも全て削除されていた。

あまりにも不自然だったのだ。

「そんな……」

「私と同じ口癖ね。でも事実だった、つくづくおかしいとは思ってたのよね。本当に何も無かったら艦娘は資料室の出入りを禁止だなんて面倒な真似はしないわ。艦娘だって敵の情報を知る必要があるのに、大本営側はそれらの行為を一切許してくれない。大本営は何かを隠しているに違いない」

瑞鳳は真剣な目で身構える。恐らく瑞鳳が思っている以上に大本営は闇を抱えているに違いない。考えたくはないがそう考えざるを得ないのが嫌になる。

「無いなあ……」

「やはり揉み消されたかな……」

指示通り黒と赤のファイルを開いたがそれらしき資料は見当たらない。提督の記憶が正しければだったがどうやら違うようだ。完全に証拠隠滅された可能性がある。希望は薄いものの、二人は諦めずに

時間がある限り探し続けた。

「ん？ 何だこれ」

瑞鶴が何かないかと棚の奥を調べる。

すると元々黒のファイルが収納されていた棚の奥に見た事の無い、黒く薄い箱が隠されていた。南京錠で固く鎖されている。

「ちよつと見て、瑞鳳！」

「何？」

鎖を少しずらし、鎖された箱の中身をギリギリ開ける。開けた隙間をライトで照らしながら目を凝らした。

そこには――、

「……やつと見つけた……！ 大本營の本当の目的を……！」

『もう限界だよ（汗）』

「そろそろね、急ぎましょう」

瑞鳳の携帯の通知からLINEで送られてきた。憲兵達を惹き付ける時間もどうやら限界らしい。

「あっ」

外の廊下から話し声が聞こえた。どうやら資料室に入るようだ。ここにははまずい。すぐさま二人は何事も無かったかのようにファイルを棚にしまい、裏ルートに入る。入った途端に軍人達が入室してきた。間一髪といえるだろう。

「危なかった……」

「ここまで来れば問題は無いわ。ガングートの所まで行きましょう」

部屋の中にはガングートが立って見張っていた。ずっと見張っていたのか少し頭をコクコクとしている。瑞鳳に肩を叩かれ、目を覚ました。

「お、来たな瑞鳳」

「なに寝てるのよ……大丈夫よバレてはいないわ。瑞鶴はさっきの場所に戻っていて。後は私達が何とかするから」

「わ、分かった……！」

瑞鶴は秘書艦待機室に向かい、部屋を出る。しかし途中でトイレに行きたくなってしまう。今まで緊張していたのか全く気にしていなかったらしい。周りをキョロキョロと探すもそれらしき物はない。初めて来る大本営に瑞鶴は迷ってしまった。

「むむ、貴方は■■■■鎮守府の秘書艦ですね。私はこの大本営に務める憲兵長、■■■■と云う者です。一応階級は大佐、好きな食べ物は何ですか？　こんな所で何をしてるのですか？」

「は、はい……ちよつとトイレがどこなのか分からなくて迷ってました……」

「むむむ、あー確かにここは迷いますからね。ご案内致します」

「ありがとね」

「いえいえ大丈夫ですよ」

やがて会議のような口喧嘩が終了し、大本営を去る提督と瑞鶴。提督は大本営を出るなり背伸びして関節を鳴らしている。あれだけ罵詈雑言を言ったら■■■■中佐が涙目をしていたのでまた何かしらやってくるだろう。

「あー長い会議が終わったー……」

「お疲れ様ね、そういえば提督さん！　あの——」「そっちこそな」

口に指を当て、シーと静かに言う提督。無言で秘密にしろと言われた気がする。確かに大本営の門前であの事を言うのは危ない。思わず瑞鶴は口を手のひらで隠した。キシキシと変な笑い声を上げた提督はスマホでプリントを呼び掛ける。

「プリント、今どこにいる？」

『これから東京駅に向かうところですよー』

「ちようどいい、俺らも終わったところだ。東京駅で集合するとしてよう」

送迎車で東京駅まで送ってもらい、無事プリント達と合流する。この一日で何があったのか全員私服な上に両肩に大量の買い物袋を持っている。劇的な艦娘達の変貌ぶりに提督と瑞鶴は頬を引き攣った。それはさておき、提督御一行は泊まるホテルに辿り着き、無事にチェックインする。

「ここは何?」

「泊まる場所です、宿みたいなものですよ」

部屋割りは提督が一人部屋、第六駆逐隊と不知火が五人部屋、球磨と筑摩と羽黒とプリンツが四人部屋、鈴谷と金剛と瑞鶴と加賀が四人部屋になっていると摩耶から聞いた。

はずだった――、

「何故だ。何故こうなった」

ベッドに座り、足を組んで悪態つく提督。指をトントンと動かし、苛立っている。無理もない、チェックイン時に名も知らない人間に一人部屋を無理矢理取られ、急遽鈴谷達の部屋に泊まる事になったのだから。

「仕方ありません。不本意ですが同じ部屋にならざるを得ないかと」

「まあ私は別にどっちでもいいんですけどさ」

「俺が嫌なんだよ!!」

一人部屋で静かに過ごしたかった提督。しかしその幻想は潰れ、うるさい艦娘達の部屋に寝泊まりだ。快適に過ごす事すら出来ない。

何故なら――、

「何でよ」

「お前らがいると少しも静かに出来ないだろうが。例えば……」

「ねー提督ー、これどうやって使うノー?」

「これがいい例だ」

「……」

ホテルに泊まる際のマナーを全く知らないからだ。教えるにしても一々呼ばれて言うのも面倒が過ぎる。元々知っているプリンツや不知火にやつてもらってはさすが提督が教える羽目になってしまった。

「まあ大して今は気分も悪くない。今回は瑞鶴に免じて許してや――」
「わあー街の景色綺麗ー……」

「人の話を聞けエ!!」

「Admiral! お酒持ってきましたよー!」

不知火やプリンツ達が早速買ってきた部屋着を着て、お酒を持ってきた。学生の深夜テンションのようにはしゃぎたいようだ。と言うよりも既にプリンツは酔っている。

「ほら来たぞ。騒ぐ事にしか頭が回らない酒飲み大好き感情爆発寸前騒音被害不可避の馬鹿共だあ、ここは何故か防音壁になっている。今まで騒がしかったカラオケのような部屋がライブ会場になって合いの手でも取っている事だろう」

——二時間後。

「ハイ！ ハイ！」

一時間でライブ会場になる提督達の部屋。

騒ぎたいように騒いでいる。

「って提督が合いの手しちやってるよ……完全に酔ってるなあ、アレは」

「羽黒は完全に酔い潰れて昏睡状態。暁達は楽しく不知火とお話してるわね」

「そして瑞鶴や金剛、球磨に伊168は提督と騒いでる」

加賀と鈴谷が椅子に座り、騒がしい光景を眺めている。元々酒に強かったのかそれほど酔っていない。二人ともだらけた部屋着でゆっくりにしている。

「加賀と私が最後の砦と言うわけよ」

「ええそうね。誰か一人は冷静沈着でいなければ」

「おーい鈴谷！」

「何なの？」

鈴谷が振り向いた先には天龍の真似をした木曾。

そして鈴谷は——、

「フッフ、怖いかな？」

「ギャハハハハハハ!!!」

あつさり木曾達の仲間になり、笑い転げながら騒いでいる。加賀は鈴谷の裏切りにため息を吐いて頭を抱えた。

「はあ……」

「あー少しばかり酔ってしまったようだあ、つい楽しくなっちゃった」

「いや既にかなり酔ってると思うのだけれど」

「馬鹿言え、俺がハメを外しすぎて周りに醜態を晒すわけなからう」

「いや既に晒してる様な気がするのだけれど……それに私達とは馴れ合うつもりは無いんじゃないの？」

提督は急に無口になり、真剣な表情になっていた。酔っているおかげで少し頬が赤く見えるも、いつも鎮守府で見る顔。騒がしい光景を見て、提督は口を開く。

「……少し酔い過ぎたようだ。加賀、水をくれ」

「はいはい」

加賀は少し微笑みながらも自分のミネラルウォーターを提督に渡す。提督は気にせず全てを飲み干した。少し酔いが醒めたのか落ち着いている。

「あ、そういえばらあてえとくう……あたし、しろーしちゆでえ……しゆごいもの、みちやつたのお……」

「……ほう何があった」

「ききたいかあ……クソてえとくう？」

「クソ……？」

「ききたいかってきててんだよお!!」

ソファのクッションを投げつけ、乱暴になる瑞鶴。どうやら瑞鶴は酔うと凶暴な性格になるらしい。近づきたくはないところだがそういう訳にもいかない。何か知っているなら聞く必要はある。

「聞かせてもらおう……!」

「それがひとにものをたのむたいどかあ……? おしえてくだしやいだろ?」

「提督、ここは怒りを抑えて」

「言いたいようですから、許してあげてください司令官」

加賀と不知火に怒りを抑えられる。拳が震え、今にでも言葉でぶん殴ってやろうかと思つた提督。苛立ちながらも瑞鶴の言う通りにし

た。

「……教えて下さい」

「おねがいしましゅ、じゅいかくしやま。このむのうなわたしにおしえてくだしや——」「調子に乗るなよ、このヒステリーツインテェ!!」

提督は立ち上がり、激高する。また加賀や不知火に抑えられ、第六駆逐隊に説得させられた。加賀や鈴谷、金剛にとっては過去の提督を思い出し、少しだけ笑っている。提督は本当であれば死んでも言いたくないが仕方ないと椅子に座り、慎重に言った。

「……瑞鶴様。この無能な私に教えて下さい」

「Zzz」

「ふざけるなこの鳥頭ア!!」

殴り掛かろうとする提督を加賀と不知火達が止める。瑞鶴は気持ちよくソファで寝ていた。遂に不遜な態度に耐え切れず、ワインボトルを逆手に持って大声を上げている。

「ちよつと落ち着いて提督!」

「仕方ないって!! お酒で酔ってるんだから!!」

「鈴谷達も抑えて!!」

流石に危ないと鈴谷や球磨達も止めに入る。部屋がまた騒がしくなり、提督の荒声が響き渡った。

「絶対許さんからなア!! 覚えてろオオ!!」

75. 勘違いは程々にしましょう

「寝ちやったわね……」

「そうみたい」

馬鹿騒ぎは約二時間半続き、プリンツ達や不知火達は部屋に戻っていった。今まで騒がしかった部屋が静かになり、静寂が訪れる。

「つていうか瑞鶴はアレで良かったノ？」

「……まあ暴れるし、ああした方がいいと思うよ」

瑞鶴は酔うと暴れるのでロープで身体を縛り、ソファに寝かせている。提督は中央よベッドに堂々と身体を大の字にして寝ていた。

「片付けも私達か……」

「世話が焼けるわね、本当に」

飲み干したビール缶の山を片付け、おつまみの包装紙をまとめる。鈴谷や金剛も酔っているとはいえ多少は理性があるようだ。片付けがようやく終了し、一つのベッドに三人が座る。

「……加賀達は提督の事をどう思ってるノ？」

「えっ……うーん、そうだなあ……」

「改めて言われると考えるわね」

金剛が純粹に問い掛けてきた。提督の事をどう思っているか、あまり考えた事はない。ここ三週間近く、様々な事があつてかそう考えている余裕は無かった。

「因みに金剛は？」

「私？ 私信用してるヨ」

「そう……まあ私も金剛みたいに信じられる、かな。性格は最低だけど、面白い人だと思ってる」

「同調する訳では無いけれど私も信じてはいるわ。馴れ合うつもりは無いって本人は言ってるけど、どこかではちゃんと私達の事を見てくれている様な気がする」

この三人には自身の目的の為に手伝ってくれた恩がある。提督がいなければ、今の自分達はいないだろう。提督にはとても感謝している上、その分慕っている。この三人にとっては信用出来る人物だ。

性格は最低だが。

「今思っただけどさ……」

「何？ 鈴谷」

「今なら提督、無防備だし……アレじゃない？」

その時、金剛や加賀に電撃が走る。

「でもそれ難しくないかしら」

「私達にリスクがあるヨ？」

「問題無いわ。服を隠せばいいだけだもの」

「……」

しかし三人はそれぞれ違う考えをしていた。

金剛は提督が裏のまま着ている服を表に返そうとしている。

加賀は既成事実に見せかけた写真を取ろうとしている。

鈴谷は提督のバラバラになった白い長髪をまとめようとしていた。

そうとも気付かず三人は大の字に寝ている提督のベッドにゆっくりと近づく。

「ほ、本当にやるノ？」

「やややややるしかない、で、でしょ」

「ななな何緊張してるのよ、男のかかか身体ぐらい、見た事あ、あるでしょう」

「なにやってんらあ!!」

「ッ!？」

一斉に三人が声の方向に振り向く。ソファてわ縛られた瑞鶴が寝言を言っていたようだ。三人は取り敢えず安堵する。

「何だ瑞鶴か……」

「はあ……心臓止まるかと思ったわ……」

「死ぬかと思っタ……」

「さて……本番ね」

「まずは服を脱がさないと……」

「脱がすの!？」

鈴谷がいきなり驚く。

金剛の脱がす発言に思わず言ってしまったようだ。

「え、だって服を脱がさなきゃ出来ないじゃん」

「いや脱がさなくても出来るよ!?!」

「そうなの!?!」

「金剛の言う通り、脱がした方がいいわね……そうしましょう」
「え?」

取り敢えず提督の服を脱がす事が決定した。しかし提督は大の字にして寝ている。眠っている提督をどうやって眠らせたまま起き上がらせるか考えていた。

「でもどうやって立たせてあげようかな……」

「そうね……」

「うーん……」

もし提督を起こせば、まずガミガミ言われるのは確実だ。ありったけの罵詈雑言を言ってくる事だろう。慎重にいかねばならない。

「触れたりしたら、勃つかしら」

「……加賀さん、触れなきゃ立てないよ? 何を今更初ってるのさ、私

は何度か見た事あるから大丈夫だけど」

「見た事あるの!?! しかも何度も!?!」

「え? いや、だってあの鎮守府の全員見てるよ?」

「全員!?! 嘘でしょう!?!」

まさかあの鎮守府にいる全員が提督の反り上がった逸物を目撃しているとも言うのか。何をすればそんな事が出来るのか、何故誰もそれについて言っていないのか全く意味が分からない。

「立たせるよりもまず上半身だけ起こしたらドウ?」

「何で金剛?」

「だってその方が効率良いヨ。後は二人が支えてくれれば大丈夫デシヨ?」

加賀は抱きながらやるという考え、鈴谷は上半身だけ起こして髪をまとめる考えをしていた。

「え? 金剛がやるの?」

「うんやるヨ。だから二人が支えてくれれば問題無いデシヨ、提督の苦勞しそうだし」

「そこまで!？」

提督の反り上がった逸物は女性が苦勞するほど大きいのか。だとしたら摩耶やプリンツはどうやって乗り越えたのか、というよりも何故金剛も見ているのか理解が追いつかない。

「だって腰まで大きいじゃん」

「そこまで大きい!？」

「いや見れば分かるじゃん」

「分からないわよ!! どこ見れば分かるのよ!!」

取り敢えず落ち着いた三人は提督の上半身だけを起こし、丁寧に服だけを脱がす。金剛が裏返った服を元に戻していた。

だが――、

「いつ見ても……凄いい傷痕ね……」

「見てるだけでもこっちがキツくなってくる……」

身体の至る所にある古傷に三人は圧巻された。一体何をしでかせばこれだけの傷を負うのか。その恐怖はあまり想像したくない。そんな中、加賀がある事を思いついた。

「……私が脱いだ方がいいかしら」

「いや何で加賀が脱ぐノ?! 加賀は大丈夫だから!!」

「いやでも脱がなければ信憑性無いじゃない」

「目視で見ても分かるヨ!! 大丈夫ダツテ!!」

「そ、そう……」

服を脱ぐ事を止められ、加賀は何か納得出来ていない。金剛は首を傾け、溜息を吐いている。鈴谷が辺りをキョロキョロとしていた。

「あ、ゴム忘れた」

鈴谷の発言に加賀が嫌そうな反応を見せる。そんな加賀に鈴谷は困惑した。因みに加賀はコンドーム、鈴谷は髪留めのゴムの事を考えている。

「貴方も……やるつもり……?」

「当たり前じゃん。ゴムなきや危ないでしょ? こんな常識じゃ

ん、私はお風呂入ってる時にいつもやってるよ?」

「やってるの!? 人目のつく場所で!」

「他の皆もやってるよ? 金剛や加賀さんもやってるじゃん」

「いや、やってないわよ!! 何言ってるの!!」

鈴谷のあるまじき発言に加賀は血相を変えて否定した。自分の知らない間に提督の逸物を見た事があるどころかもうやっているという事実。金剛が裏返った服を表に返した時、ある事に気付く。

「あ、提督ってMなんだネ」

「Mなの!!」

「うん、よく見てたらそうらしいネ」

金剛は提督が着ていた服のサイズを指している。しかし二人は提督がマゾであると勘違いしているようだ。

「ま、まあ確かにそう思える所はあったわね……」

「いつも摩耶が言ってたからね……」

「あ、私も因みにMだよ」

「金剛もオ!!」

まさかの性癖暴露に二人は目玉が飛び出る。しかしそう思い当たる節がある事を思い出した。散々妹達に虐められて、何もかも変わってしまったに違いない。

「本当に……ゴメン……」

「ごめんなさい……金剛」

「いや何でMってだけで私謝られてるノ」

二人は頭を下げて、金剛に謝った。何故謝罪したのか金剛は理解出来ていないらしい。

「そっかー……提督、Mなんだ……」

「少し幻滅しました」

「何デ!」

今度は金剛の目玉が飛び出た。提督の服のサイズがMなだけでそこまで失望するのだろうか。

「いや当たり前でしょう。上官がMだなんて」

「いやM着てる男性だってこの世にいるデショ!」

「いないよ。せめてあのままSでいてほしかつたなー」
「え!? 小さい方がいいノ!? 大きい方じゃなくテ!?」

「……ちよつと待って金剛、何の話をしてるの?」

とうとう違和感を感じた鈴谷が聞き出した。金剛は何気なく普通に答える。

「え? てつきり私は裏に着ていた服を表に戻すのかと……」

「いや、私は既成事実みたいな写真撮って提督を脅すのかと……」

「え、いや私は提督の髪をまとめたいだけ……」

「「……え?」」

「……朝か」

朝の午前七時。カーテンの隙間から太陽の光が差し込んでいる。酔い潰れて寝ていた提督はゆっくりと立ち上がった。

「あー頭がクラックラするわー……やっぱ飲み過ぎたか……」

首の関節を鳴らし、額に指を当てる。相当飲んだのかあまり記憶が定かではない。周りを見渡すと鈴谷達が顔を隠しながら、布団を崩さずに寝ていた。

「……何だ律儀に崩さず寝てんのか。流石は艦娘だな……つたく、後でしばいてやろう。クソ面倒だが」

提督はベッドから立ち上がり、背伸びする。

そして洗面台へ向かっていった。

「顔洗って、水飲もう……」

一方で鈴谷達はあの後あまりの恥ずかしさに一睡も出来ず、布団で顔を隠してただただ縮こまっていた。

「はい二日目東京です」

ホテルでのチェックアウトを済ませ、それぞれ荷物を抱える提督御一行。瑞鶴以外はキャリーケースやリュックサックなどを買ってまとめている。そして生意気にも大層なファッションをしていた。

「今日は特別に俺がお前らの買い物に付き合っただけだからありがたく思え」

今日は摩耶に特別な物が欲しいと頼まれている。不本意だが艦娘達の買い物に付き合った方が集合するより効率がいい。早速提督御一行は送迎バスである場所へ向かった。

「ココの方が近いし、何でも揃ってる」

ある場所とは渋谷〇カリエ。渋谷を象徴するランドマークの一つでショッピングや飲食店は勿論の事、ミュージカル施設まである巨大商業施設だ。新幹線の時間までは充分にある。各自解散し、集合時刻まで買い物する事となった。

「て、提督さん……な、何を選んでるんですか？」

「羽黒か。いや摩耶に特別な物を買ってこいって言われてるから何にしようかなーって考えてた」

「だからと言って……雑貨屋さんはどうかと……」

雑貨屋で商品を見て悩んでいた提督。興味本位でついでにきた羽黒に言われてしまった。

「……やっぱ駄目か」

「駄目だろ。どう考えても」

隣の木曾も否定する。仮にも結婚している摩耶にそんな安い物は渡してはいけないと羽黒、木曾はある場所へ連れていく。そこはネットワークスや指輪などを扱っている店だ。

「大事な相手に渡す物ってのはこういうもんじゃないのか？」

「ひえ〜……どれも高いなあ〜」

丸が何個もつく値段に頭を抱える提督。あまり金を無駄にしたく

ないが、かといって特別な物を買わなければ摩耶に失礼だ。摩耶の事は愛している上、お互い分かり合っている関係。確かにこういう物が特別なものかもしれない。

「うーん……仕方ない、これにするか」

「分かりました」

「早いなオイ」

提督は即断して紫色の鉱石がはめられたネックレスを選ぶ。あまりの決断力の早さに本当に悩んで買ったのか、羽黒と木曾は口を開けばなしで困惑していた。

「はいじゃあ帰るぞ」

「えー……」

「えーじゃねえんだよ!! 帰るぞ馬鹿共!」

あまりにも楽しかったのか名残惜しく駄々をこねる艦娘達。皆、姉妹分の服や雑貨物、欲しい物を買って満足しているようだ。早速お金は使い果たしている馬鹿もいるが、提督は気にしない。東京駅で新幹線の切符をそれぞれに渡して乗車。東京に別れを告げ、新大阪駅に到着する。帰りの送迎バスで荒くれ鎮守府まで向かった。

「あーやっとな着いた……」

「あ、鈴谷、金剛、加賀」

「何……?」

「昨日の夜の出来事、録画済みなんでよろ——」「ちよつと待てエエエ!!」「」

76. 職場体験という名の社畜体験

青年はヒーローになりたかった。

困った人を助けるヒーローに。

悪い奴らをぶっ飛ばすヒーローに。

誰もが頼れるヒーローに、なりたかった。

でもそれは妄想という名の夢でしかなかった。

周りに否定され、嘲笑され、馬鹿にされた。

それでも青年はヒーローに――

――多くの人を救える、正義のヒーローになりたかった。

「あージメジメするー……」

「見事に梅雨の季節だな」

季節は夏、そして梅雨の時期を迎えていた。連日から雨がずっと降り続けている。こうなっては気分も落ちる事だろう。そして提督がなにより気にしているのは――、

「そして今日は一番の面倒な日だ」

「確か今日だったな。司令官候補生の来日は」

「まったく、何で俺がわざわざ駆け出しヒョっ子の面倒を見なければな

らない。横須賀とか呉でやればいいのに」

今日は司令官候補生が研修に来る日だ。一年間の間に様々な仕事を体験してもらう。提督にとっては面倒事ではない。するとドアの奥でノックする音が聞こえた。

「来たようだぞ、提督」

「はあ……どうぞー……」

「失礼します!!」

提督と同じ新調された白い軍服をまとい、大きな声で執務室の中に入る。髪を剃りあげた野球部のような髪型だ。恐らくかなりの真面目者と見える。

「海軍士官学校を卒業し、この度司令官候補生としてこの鎮守府に着任しました、灰■■■■です!! これからご迷惑をお掛けしますが、何卒よろしく願います!!」

「はい、どうもー。んじゃ挨拶も兼ねて少しお話しようか。そこに座ってくれ」

「は、はい！ 失礼します！」

応接間のソファに対面に座る提督と司令官候補生。まるで面接のようだ、候補生は緊張している。

「えーつと俺はこの鎮守府の最高責任者の中將だ。悪いが名前については色々あつて教えない趣味でね、偽名として白と呼ばせてる。これから人の面前では白さんと呼ぶように」

「分かりました！」

「まあ大体お前の情報は把握してるよ。正直可もなく不可もなくだ、成績は普通、体術や剣術もそれなり。少しばかりは感謝しなければな」

「いえー！ こちらこそ褒めて頂き感謝しています！」

「いや別に褒めてる訳じゃないんだけど」

候補生のデータは一応は把握している。学校では目立つような事はなく、成績普通、体術や剣術も普通。普通だらけの少し頭がいい一般人のようなものだ。提督としては普通でいてくれた方が色々扱いやすい。

「うーん……まあ候補生だし、期間は約一年間……やり方次第じゃそのまま配属も有り得る、と。お前はどうしたい？ 知ってるだろ、この鎮守府の……闇を」

提督の言う通り、初めて元帥に呼び出され、その事実を知った。この鎮守府は通称、荒くれ鎮守府。前任の非人道的な支配に脅かされ、悪逆非道の限りを尽くしたと聞いている。

そして何故かその前任は多くの金と資材を持ち出し夜逃げ。そのまま一ヶ月間放置されていた。しかしそこに中將が現れ、この荒くれ鎮守府を立ち直している。

「はい、教えられた限りは知っております。ならば私は……艦娘達も出来るだけ、救いたいと思っています」

考え方が提督とはどうやら合わないらしい。

当然と言えば当然だろう。今まで配属された親米司令官の大体は、艦娘を人間だと思っている。提督は勿論兵器だと思っているが、これはあくまで提督の価値観。本来それを決めるのは艦娘であり、誰が別に個人の価値観までとやかく押し付ける事やわざわざ言う必要はないと思っっている。

「ふーん……因みに軍に入ったキツカケとかある？」

「はい。私はヒ、ヒーローになりたいと思ったので軍に入りました」

ヒーローになりたい。それが候補生のキツカケ。

提督は一瞬理解出来ずに首を捻った。摩耶に起こされ、正気を取り戻しながらも話を続ける。

「……まあ英雄志望も結構だが、そうヒーローになれる程容易い世界じゃない事ぐらい腐りかけた頭でも分かるだろ？」

「は、はい。存じております」

覚悟は承知の上というわけか。この先どんな困難だろうと立ち向かってやるという意志が見て取れる。とても真面目な分、意志の強さは硬そうだ。このまま誘惑しても答えは変わらないだろう。

「そうか……まあ一々考えるのも面倒だ。んじゃこれからよろしく頼

むよ、灰君」

「灰君、とは？」

「あだ名だ。名前呼ぶのも面倒だから名前から漢字一文字抜き取った、これからは艦娘達やその他の人間にもそう呼ばせる。文句あるか？ ヒーロー候補生」

「いえ！ ありません！」

提督は立ち上がり、執務机の上に座る。候補生は拒否もせずに簡単に受け入れてくれた。立ち上がって提督の機嫌を確かめている。

「ならよろしい。あ、そうだな……秘書艦がいなかったな、誰にしよう」

「失礼するよ提督」

候補生がいる事を知らなかった時雨が入ってきた。手元には購買申請書とお金が入った茶封筒がある。時雨は提督と候補生がいる場面を見て硬直した。まずい、これでは提督に怒られてしまう。そう思った時雨は身体を震わせたままドアノブを握る。

「あ、お取り込み中だったかな……ごめ——」「よーし!! お前に決定ー!!」

「ふえ!?!」

突然何かを決められ、困惑する時雨。事情を摩耶に説明してもらい、何とか納得してもらった。

「そういう事なんだね……僕は白露型の時雨だよ。よ、よろしくね」

「は、はい。よろしくお願いします」

「敬語じゃなくていいよ灰さん。これからは僕達の上官なんだから」「分かりま……いや分かった。ありがとう時雨」

敬語を改め、灰色は普通に話す。少し違和感を感じるが、いずれは慣れるだろう。互いに握手して、パートナー関係が成立した。

だが何故だろうか、握った時雨の手は怯えるように震えていた。「さて今日も書類を片付けるとしよう。あ、早束手伝ってもらおうかなキシシシ」

「あ……」

嫌な予感がした摩耶と時雨が声を零した。何とか楽したい提督は

今日の書く書類を全て灰色と時雨に手渡したのだ。今はそのノウハウを摩耶が忙しく教えている。

一方で提督は執務室に訪れた木曾の購買申請書を貰い受け、札束を数えていた。

「で、仕事を全て丸投げとは……えげつない事をするな、提督は」

「なあに教育だ。一度は忙しさを体験してもらった方がいい」

「まあその忙しさを体験してるのは摩耶だがな」

「寝てないで手伝え!! クソ提督!!」「グオア!!」

ボールペンを提督に投げ、見事的中させる。額に直撃し、椅子から転げ落ちた。なら提督は仕方ないとプリンツを呼び出す。

「んで殴られても尚、プリンツを呼んだ、と」

「いやーこれで摩耶も楽に——」「なる訳無エだろ提督が教えろやア!!」

「アババツ!!」

自分のスマホを提督に投げつける。また額に直撃し、椅子から転げ落ちた。その時昼飯の鐘が鳴る。

「昼飯か。一旦休憩としようー!!」

提督が喜ぶように飛び上がり、急に元気を取り戻す。摩耶達も一旦仕事を中止させ、食堂へ向かう。提督の何とも言えない不気味な印象に灰色は違和感を感じていた。

「白さんはいつもあんな感じなのですか?」

「あーまあ、あんな感じだよ」

「あんな感じだね」

「ええ……」

二人が即座に答える。いつもの光景だと二人は口を並べて言う。あのテンションがずっと続くのか、灰色は少しこの先の未来に不安を感じた。

するとその提督が何かを思いついたのか急に振り向き出す。

「あ、ちようどいい。一度、艦娘達の前で自己紹介したらどうだ?」

「え?」

提督達は食堂へ向かい、いつものように二階のテーブル席で食べ

る。

しかしその前に新しい司令官候補生の紹介を始めた。何も知らぬ艦娘達は新たな存在に驚き始める。

「あれ、新しい司令官さん？」

「あ、本当だ！」

二階の一番目立つ場所に向かい、一階を見下ろす。下には物珍しうに艦娘達が見つめている。

少しばかり緊張する。大勢の前で話すのは久しぶりだ。落ち着く必要がある。

「わ、私は灰と名付けられた司令官候補生です。皆さん、これから一年間の間、お世話になります。よろしくお願いします！」

元気な声でハツラツと。誰もが聞こえるように自己紹介する。艦娘達は何気なく拍手して迎えた。真下にいる鳳翔や間宮も拍手している。飛行場姫は不思議そうに首を傾げているが。

「中々良い人そうじゃない？」

「見た目で惑わされてはダメよ瑞鶴」

「全くもって同感だ」

瑞鶴は受け入れているが、加賀や木曾は警戒している。飛龍と蒼龍は少しはしやぎながらも拍手して落ち着いていた。

「提督より優しそう」

「提督より話しやすそう」

「ちよつとカッコいいかも」

駆逐艦や潜水艦達が正直な気持ちを言葉にする。

捻くれた提督より好印象を持っているようだ。

「第一印象は抜群だな」

「その分提督の言われようも酷いけどな」

「構わん。俺は馴れ合うつもりはないからどう思われようが知った事じゃない」

「だろうな。心配しなくても私は提督の味方だぜ？」

「はいはい、ありがとさん」

自己紹介が終わり、提督と摩耶と時雨とで初めて食堂のご飯を食べ

る。今までの鎮守府のイメージでは衛生環境に不安だったが、意外にもその不安は消え去った。ご飯はとても美味しい、掃除や片付けもちゃんと行われている。これも提督がやってきた事なのだろうか。

「灰君、これから鎮守府の案内がある。君の秘書艦である時雨に教えてもらいたまえ」

「わ、分かりました！」

「任せといて、提督、灰さん」

昼食が終わり、午後は鎮守府の案内。地方の鎮守府とはいえ設備はかなり整っており、呉や横須賀に引けを取らない。今でも改築工事は進んでいるが、最悪の状況が思いつかないほど見違えていた。

「ここが入渠施設もとい、お風呂。であそこが工廠と出撃ハッチ。んでその隣が近い順に第一倉庫から第六倉庫。そして今ここが駆逐艦寮。どうだい？ 把握出来た？」

「……」

一気に説明され、理解が一瞬遅れる灰色。何回もメモ書きして覚えていくが、覚えられる気がしない。

「んーちよつと難しいかな……」

「仕方ないね。ここは少し広くなったし……それに……」

「それに？」

「少しだけ……楽しくなったしね」

楽しくなった。

元帥からはこの鎮守府は最低最悪の環境だったと言われている。艦娘を人として扱わない、数多の恐ろしいやり方で貶めていた。提督が配属されるまで、時雨達はどんな心境だったのか。どれだけ提督が手を尽くしたのかも分からない。恐らく立ち直っても尚、心の傷は完全に癒えていないだろう。

「……時雨も苦しかったのか？」

「そうだね……この鎮守府が襲撃されるまでは辛かったな。でもね今は少し違うよ？」

「違う……ってのは？」

「今はやつと前を向けそうなんだ。まだまだ茨の道ではあるけれど、

立ち向かえる気がする……多分……」
「……そっか。良かったね時雨」

「川内」

「なに？」

「久しぶりの仕事だ、報酬は休暇二日間」
「……了解」

77. いいないいな、人間っていいな

「今日の仕事は編成についてだ」

灰色が着任して三日が経過。今まで書類の片付けをしていた灰色。初めて司令官らしい仕事に来て、少し喜んでいた。提督はホワイトボードを使ってダラダラと説明していく。

「ただのハーレムを夢見る腐れ切った暴走族の学校で学んできた通り、提督になった者は艦隊を一つ持つ事になる。だからヒーロー志望のお前にも艦隊を持たせてやる、編成については分かってるな？」

「は、はいー」

海軍兵学校で一通りの事は学んできている。成績が普通とはいえ、自分なりに努力はしてきた。何度か演習もした事がある。

「ならばよし。うちの艦娘を使って自由に編成したまえ、そして今回の出撃任務で勝利で勝ち取るんだ。失敗したらドラム缶にコンクリートを敷きつめ、バケツの中にいれた味噌汁の池で溺れさせてやる」

「わ、分かりました！」

脅迫まがいな事を言われ、少し緊張する灰色。しかし提督としては自分の部下を預けている身だ、蔑ろには出来ない。失敗して沈んでしまいましたでは話にならないだろう。

「えーっと……旗艦が時雨で……」

「扶桑とかどうかかな？」

「緊張してるな」

「だろうなあ」

「初めての出撃任務が鎮守府近海海域とはいえ、大丈夫なのか？」

「なあに駆逐艦ぐらいだろう。何せ、わざと警戒を緩くして確認したからな」

艦娘達の警戒網をわざと緩くし、迷い込んだ深海棲艦を誘っていたようだ。予めこの事は計画していたらしい。摩耶は驚きながらもため息を吐いた。

「はあ……そのまさかかよ」

「キシキシシ……」

艦隊が決まり、司令塔を展開させる。いつも提督が座っていた席を譲ってもらった。

「え!? 使ってもよろしいのですか!？」

「当然だ。君が決めた艦隊は君が指揮する権利がある。君がこの司令塔を使いこなし、無事に勝利を勝ち取りたまえ。あ、壊したら弁償な」
灰色が決めた艦隊は旗艦時雨改二、夕立改二、五十鈴改二、球磨改、霞改、照月改。典型的な水雷戦隊編成だ、初心者にはうってつけだろう。

——二時間後。

「お、終わった……」

「疲れただろう、だが次の仕事だ。書類を書いてもらうぞ」

「は、はい……」

やっと戦闘指揮が終了し、艦隊が帰還する。今回の戦果は勝利したが、夕立と照月が小破状態になってしまった。提督は休む時間すら与えず、出撃の報告書と各艦娘の成長記録書をまとめさせる。

「はい次は掃除」

「はい……」

書類を書かせた後は執務室の掃除。箒とちりとりを渡され、時雨と一緒に部屋を掃除する。

「次は夜の見回り」

深夜の見回りを任せられ、各寮で動きがないか懐中電灯で確認する。時雨と交代して、色んな場所を回った。こんな日が二日続いていく。

「なんだかんだで司令官も面倒見がいいですね」

「散々嫌だと言っておきながらちやっぴり教えてる辺り、抜けてるよな」

「いや私は少し違うと思います」

涼月と天龍が講堂で提督の対応について話していた。散々人前で嫌だと言っておきながら何かと指示を与える提督に少し安心感を感じ

じる。

しかし不知火は違うと否定した。

「何かあるのか？ 不知火」

「はい。指令は底知れぬ何かに警戒しています。 ■■■よりも底知れぬ……何かに」

優遇制度や差別意識よりも特別な何かに警戒しているという。 ■

■達がやってる事よりも遥かに超えた何かを。

「不知火さん……口にご飯粒ついてます……」

「気の所為です」

「背中にガムテープついてるぞ」

「ファッションです」

即答して帰る不知火。

あまりの屁理屈に二人は言葉を無くした。

「どんなファッションだよ……」

「天龍さん……背中にゼロハンテープがくっついてます……」

「ファッションだ」

「いや違いますよね」

「次は遠征任務の報告書作成だ」

「……すみません……白さん」

「何だね？」

「何故こんなにも手を尽くしてくださるのでしょうか……？」

暇さえあれば指示をしてくれる提督に灰色は少し違和感を感じていた。他ではまだ手伝いぐらいしか出来ていないと聞いている。

しかしこの鎮守府では手伝い以上の仕事をこなしている灰色。別に忙し過ぎて、休みが欲しい故に言っている訳では無い。提督が何故そこまで手を尽くしてくれるのか、ただの疑問だった。

「他ではこんなの聞いていないと？」

「……はい」

「機密情報共有は犯罪だぞ」

「うっ、すみません……仲の良い友人と話してました……」

スマホのLINEで仲の良い友達と休憩時間に話していた灰色。うっかり気が緩んで鎮守府の状況を伝えてしまった。提督が言うには鎮守府での全ての仕事は機密情報として扱われている。その為、一般人は鎮守府で提督と艦娘達が何をしているのか、戦っている事以外は全く知らない。逆に知らせてはいけないので簡単に外へ漏らせば重罪に問われる可能性があるのだ。

「話した事は全てこちらで記録させてもらった。まあどれも他愛のない会話だ、別に機密情報は漏らしてないから罪とはならないだろう」「いつの間にも……いやでも……すみません……」

「謝るだけまだマシな方だ、許してやろう」

事前に川内から灰色がスマホをいじっている所を勝手に隠し撮りしてもらっている。青葉のカメラにて記録されており、プライベートなど関係ない。

「……白さんがこの鎮守府に着任した時、どういう環境でしたか？」

「君の想像を遥かに超える程の凄惨さだ。各寮や広場は大荒れ、入渠施設や工廠はボロボロ、艦娘同士の関係の軋轢は絶えず、オマケに着任当日から俺を殺そうとした。もしお前が着任してたらそこでゲームオーバーだぞ」

執務室のドアを開ければ即砲撃され、幾度も性交渉を仕掛けられては艦娘達のリンチに会い、自爆装置で脅されながらも深海棲艦と前任に立ち向かってきた。今思えば波乱万丈な日々である。摩耶がいなければここまで来る事は無かつただろう。

「……そこまで酷いものだったんですね……白さんはどうやってここまで立ち直したのですか？」

「簡単だ、欲を掻き立てた」

「欲？」

「そうだ欲だ。最初コイツらは野望すら持たない部屋の隅で縮こまるだけのアホ丸出し指示待ちポンコツ兵器だった。コイツらを動かせる為には欲を掻き立てる必要がある。だから俺は最初に来る限り

やりたい事を叶えてやると言ったんだ」

尚、そのやりたい事は今でも続いている。時々艦娘達が言いに来るので、暇さえあれば手伝っている。暇さえあればの話だが。

「今お前がヒーローになりたいという欲があるようにコイツらにもその何かをやりたいという欲がある。俺はそれを手伝っただけに過ぎない。後は勝手に馴れ合ってくるだけだ」

「そう……ですか……」

提督に倉庫の資材確認を頼まれ、灰色と時雨は第一倉庫から順に確認していた。新しく建てられた倉庫は強度が高められ、壁や天井に防火素材が使われている。二階の管理室には多くの妖精が仕事をしていた。

「……はあ」

「どうしたんだい、灰さん」

「いや、どうしても白さんが優しい人には見えなくて……」

初めて会った時から少しだけ違和感を感じていた灰色。最低最悪の環境だったこの鎮守府で艦娘達は心に傷を負っているはずだ。もし提督が何かしら行動して艦娘達を懐柔させたのかもしれない。しかし提督の行動や言動からして、そう思える印象が全く無かった。

「仕方ないさ。僕達も嫌いだったもの」

「嫌っ……何で？」

「だって僕達の事をポンコツ兵器だとか罵って、口答えすれば百倍にして返してくるし、最早いつも話す時は罵詈雑言は当たり前。屁理屈並べて徹底的に振じ伏せてくる……最低最悪の提督だった。前よりはマシだけど」

前任がやってきた事よりはまだ良い方だと思っている。恐らく別ベクトルで嫌がられる上官ではあるが。

だが今はその印象はあまりない。

「だった……て事は、今は違うのか？」

「うん。鎮守府襲撃の時に僕達は遠い海で戦ってたんだけどね……少しだけ嬉しかったんだ」

『今海で戦ってるアイツらやここにいるコイツらは、必死になって頑張ってるんだよ!!』

『自分勝手に彼女達の尊厳を……踏み躪るなよ!!』

「あれだけ悪口を言っても、心のどこかでは僕達の事を思ってくれている。提督の言ってる事は全て本当だし、今まで僕達が如何に駄目な艦娘だったかも再確認出来たんだ。悪い印象は変わらないし、嫌いで気持ちちは薄れてきたけど……信じてもいいかなって思ってる」

「……そっか」

提督から何かしら恩は感じているようだ。印象は悪くとも信頼しようとしている。ある意味提督が思っている一番理想的な関係かもしれない。

だが灰色にとつては少し腑に落ちなかった。

「どこで道草食ってたんだー?」

「すみません……少し時間がかかりました」

「そか、なら書類を手伝ってくれ。摩耶」

倉庫の確認が終わり、提督の書類を手伝う事になった。ドアから正面奥にある執務室で提督と摩耶は黙々と書類を書き潰し、その横の窓際に急に設置された仮の机で灰色と時雨も黙々と書類を書き終える。

「……白さん」

「何だね」

「時雨から聞いたのですが……前は艦娘達の事を罵り尽くしていたのですか?」

「ああしてるよ」

現在進行形で答える提督。

つまりは今も艦娘達を馬鹿にしている、という事だろうか。

「何故……馬鹿にするのですか」

「簡単だろ、ロクに戦争の意味も知らなかったポンコツ兵器共だ。本当の事を言ったら何が悪い」

「艦娘達の心を癒そうとは思わなかったのですか?」

「ちつとも」

提督は迷いなく灰色の質問に答える。気楽な声で答える提督に灰色は憤りを感じた。

「何故ですか……!! 何故、艦娘達を救わないのですか!？」

「感情的だなあ灰君。何故俺がそんな事をしなければならぬ、一々兵器の感情まで考えて行動する時間が勿体無いじゃないか」

「艦娘は兵器ではありません!! 私達と同じ人間です!!」

「どうしてー?」

「何故なら私達と同じ身体があり、感情があり、心があるからです!!」

灰色が立ち上がり、提督の執務机を強く叩いた。

「どうやら灰色も■医師と同じく、艦娘を人間として見ているようだ。別に予想出来なかった事ではない、いずれはぶつかると察知していた。だがどうしようもないほどの常套句に腹が立つ。」

「……ああそう。お前はそう思ってるのね」

「いえそうあるべきです!! 我々と同じ物を持っているのであれば、それは正しく人間です!!」

「やっぱ君は愚かだなあ〜」

「何がですか、白さんは兵器だと仰るのですか?」

「当然だ。艦装を瞬時に展開、超人的な身体能力、砲弾や爆弾が直撃しても服が破れる程度、食べなくても永久的に生きていけるエネルギー機関。数えれば数えるほど兵器らしいじゃないかあ」

提督は椅子から立ち上がり、灰色の元まで近づく。思い付く限りでの理由を述べ、艦娘が兵器である事を証明した。

しかし灰色は納得せずに反論する。

「ですが感情を持つ兵器など……!」

「いたらダメなのか?」

「そういう訳では……」

「人間になるのがそんなに偉い事なのか? この世に嫌になるほど愚かな人間なんて無数にいるのに? 愚かな人間に成り下がるのか?」

兵器でいたらダメなのかな?」

「それは……」

全てがそうだと肯定出来る程、灰色は馬鹿では無い。逆に否定する

事も出来ない。人間が自身を優位な存在だと思い込んでいる故に気付かない事だ。誰もがその事に気付いていない。

「兵器だって格好良いし可愛いじゃないかあ、強く逞しい艦装に戦場を駆ける美しい戦乙女の姿。惚れ惚れする程だあ、何で艦娘を貶める理由になるんだ？ 悪いが俺は素晴らしく強い誇り高き兵器だと思っっている。だがこれはあくまで一つの価値観だ、誰もがそう思っっているとは限らない。だが……」

提督は艦娘が兵器だと思い込んでいる事に意味は無い。必ずしも艦娘に対してそれぞれ違った価値観がある。その価値観をどう構築しようが人間の自由だ。人間だと思うのもよし、兵器だと思うのもよし、はたまたま新生物だとして思うのもよし。考えるのは自由だ。

「お前が言っっているのは個人的な価値観の押し付けだ。この世の誰もがそう思っっていると信じて疑わず、感情や心を持つているなどといった元々持っている人間からの上から目線による同情で元々兵器であつた艦娘達を哀れんでいるだけに過ぎない」

「っ……」

「勝手に他人の存在をお前が決めるな。誰かが勝手に決めるから艦娘達に自由と尊厳が無くなる」

知らず知らずに誰かが決めてしまうから艦娘達の居場所が無くなる。だから提督は艦娘の価値観を艦娘自身で決めてほしいと思っっているのだ。押し付けてくる他人の価値観を否定し、自分が考えた価値観に自信を持つてほしい。誰にも囚われやしないように、自由に生きていけるように。

「……とは言え、結局この事も俺の個人的な価値観の押し付けになつてしまっている。いくら押し付け合つたってキリがなく、話し合った所で時間の無駄なんだよ。それが愚かな人間の自由さなんだから」

「ではどうすれば……」

「どうしようもない。これが人間だ、本能のままに生き、欲望のままに死ぬ。ならば徹底的に自身の価値観を押し付け合い、相手を振じ伏せるまで、ありとあらゆる手段を用いて自身の価値観に他人を馴染ませる。生憎人類はこうしてきたんだ、俺とお前が今さつき押し付け合っ

た様にね。酷く言えば洗脳と何ら変わりないんだよ……今日はもういい、休め」

78. 演じる最低最悪なヒーローを

「……」

夜の二十三時。いつもと違って見回りは任されず、灰色は廊下の窓際に寄りかかっていた。艦娘は人間だ、その考えは覆らない。だがその考えを灰色は他の人や艦娘に押し付けてしまった。誰もがそう考えているだろうと思ひ込み、仮にも上司である提督に反抗。そして返り討ち。

提督は決して灰色の艦娘に対する価値観を否定していない。それも一つの考えだと肯定してくれていた。だが他にもこんな価値観があるんだと教えてくれた。

誰かが人間や兵器だと勝手に決めるから艦娘達に居場所が無くなる。自由にそう決める権利も、素晴らしい尊厳も。本来決めるのは自分達では無い、艦娘達が決める事なのだ。

今になって自分の愚かさが身に染みる。艦娘達を救おうと人間だと決めつけ庇おうとしたはずが、それは逆に居場所を無くすような事だった。

「提督にこっぴどく叱られたな」

「……摩耶さん」

夜の見回りをしていた摩耶が話し掛けてきた。窓から漏れる月の光で廊下は薄く照らされている。摩耶は懐中電灯で廊下を照らし、ゆっくりと歩み寄った。

「提督は少し特殊なんだ、許してやってくれ」

「……摩耶さんは何とも思わないのですか？　白さんの考えについて」

摩耶が立ち止まり、顔を上に向ける。

そして灰色の顔を再度見た。

「んー……別に一度も否定的に思った事は無いなー……何せ提督はああいう人間だし」

「摩耶さんは自身の事をどう考えてるのですか？」

「兵器だな」

「えっ?」

自身を兵器だと即答する。この摩耶は提督と一番親密度が高い艦娘だ。提督と共に居てその価値観に何も疑わないのだろうか。

「えっ、て……兵器だぞ? あたし達は。でもそれと同時に人間だとも思ってる」

「同時に、ですか?」

「そう。あたし達の事は自由にあたし達が決める。だからあたしは兵器であると同時に人間だと自由に思ってるぜ。提督とあたしは何より自由が好きなんだ」

微笑みながら摩耶は灰色とすれ違う。すれ違いざまに肩を叩かれた灰色。自由、成程そういう事か。

「自由に、ですか……凄いな考え方ですね。全くそんな事など範疇に無かった」

「自由って案外面白いもんなんだ。アンタも少しは自由に考えてみてもいいんじゃない? んじゃあたしはこれで、ゆっくり休みな」

「自由に、か……」

——朝八時半、執務室。

「んで挨拶早々に何頭下げてんの?」

「昨日の事について、謝りたく思っております……! 数々の無礼、本当に申し訳ございませんでした!!」

朝を迎え、執務室に入るなり提督に頭を下げる灰色。あの後一人で考えを改め、人間にはそれぞれ違った価値観がある事を学んだ。決して人間が一番偉いとは限らない事、艦娘達の存在を勝手に決めない事。

灰色は改めて考え方を変えたが、艦娘が人間だという考えは絶対に変わらない。もし悩んでいるような艦娘がいるのなら積極的に以前より元気そうだなによりだ。

「俺はあの馬鹿共を馴れ合うつもりはない。だからお前が馬鹿共のヒーローになってやれ、その方がこちらとしても都合がいい」

つまりは自分が艦娘達の心を癒してやれ、という命令だ。提督は自ら進んでやるつもりはない。ならばとヒーロー志望の灰色に任せたのだ。提督としては計画を進める上でちょうどいい存在になっている。早く仕事を教えたのもこの為だ、後は――、

「は、はい！ 分かりました！ ありがとうございます!!」

「……摩耶、苦労するぞ」

「分かってる、容赦はしない」

「何で憲兵が……」

「怖いなあ……」

「チツ……邪魔が入ったな」

「落ち着いて矢矧。それはあちらも同じ事よ」

憲兵隊が来た事により多くの艦娘達に不穏な空気が生まれていく。元々人間人間に対して良いイメージを持たない艦娘達にとつてストレスが溜まるような出来事だ。差別している側や差別された側など関係無く、憲兵隊を目の敵にしている。

「提督さん！ 提督さん！ 憲兵がいるっばい！ 何でっばい!?!」

「候補生の所為だ、俺は知らん」

「夕立、怖い〜！ 何とかして〜!!」

突然現れては執務机で駄々をこねる夕立。首を掴まれ、前後に身体を揺らされた。提督は馴れ馴れしい夕立に苛立ち、逆に夕立の身体を掴む。

「断る、てか出来ない!! 俺だつて欲しくて呼んでる訳じゃねえんだ!! あのクソジジイが無駄な心配をするから、こんな面倒な事になつてんだよ!! 分〜か〜る〜か〜!!? こ〜の〜大根役者がアアア!!」

「あ〜あ〜あ〜あ〜」

今度は夕立が身体を前後左右に揺らされ、思うがままにされている。本当であれば提督だつてこんな事はしたくなかった。計画にお

いて一番邪魔となる他人の存在は提督と■■との戦争において第三勢力を意味する。如何にその第三勢力を味方に惹き付けるかが勝利の為に重要になるだろう。

「憲兵隊が来たおかげでトラウマ持ちの艦娘はまた部屋に閉じこもり、整備士の方は明石と意気投合して仲良し状態。んーハチャメチャだな」

「こつちも仕事に悪影響。最悪だ、前より動きずらくなった」

「動きずらくなった……とは？」

「あーそっぴい色々あつて教えてなかったな。摩耶」

摩耶はある資料を取り出し、灰色に全てを見せる。それは前任の事や■■の事、そして鎮守府の現状などだった。身の毛がよだつ程恐ろしい事が記されている。

「まさか……そんな事が……！　ここで……!!」

「信じられないようだが全て事実だ。前任は今や深海棲艦のボス、艦娘同士の仲は過去最悪」

「そこまで……全く分からなかった……」

「やつと色々手を尽くしてここまで持ち直してきたんだ。言つとくが

■■達と戦いながら犯罪紛いの事をしてまでだぞ？　憲兵が来れば難しいと思わないか？」

提督が今までやってきた事なども書かれてある。自爆装置や差別意識、洗脳の正体。読むだけで途方に暮れそうな内容だった。何をすればいいのか分からない、どうやって立ち向かうのか。自分がその立場にいるビジョンが思いつかない。

「確かに……これからどう戦うおつもりですか？」

「お、協力してくれるのか？」

「当然です！　艦娘達を救うならば、どんな事で——」「例えそれが正義に反している事でもか？」

「っ……!!」

灰色の言葉を遮って提督が忠告する。これは■■との戦争だ、どんな手だろうとこちらが有利になるのなら何がなんでも使い果たす。生き残りを賭けた戦争なのだ。その戦争に灰色も加わる事になる。

汚い手だろうと、罪に近い手だろうと。生き残らなければならぬのだ。

「いいか？　もう一度言うぞ？　■■達はありとあらゆる手で俺達に仕掛けてきた。だから俺もありとあらゆる手段で対抗したんだ。犯罪に近いような事でも、非人道的な事でも。お前はそれを喜んでやる事になるんだぞ？　いいのか？」

「も、勿論……!!　やって……みせます……!!」

「もう二度とヒーローにはなれないかもしれないぞ？」

「それでも……!　艦娘達のヒーローになれるなら本望です……!!」

「……ならいい。手伝わせてやろう」

艦娘達のヒーロー、悪くない考えだ。世間から褒め称えられるヒーローでは無く、身近な艦娘達の小さなヒーローになる事を選んだ灰色。その目に迷いは無かった。

「あ、ありがとうございます!!」

「これからは厳しく過酷な道だ、覚悟しておけ」

「は、はい！」

「では早速仕事だ。その書類を書き終えた後に川内と一緒に仕事をしってもらう、いいな？」

「了解しました！」

提督は仕事内容を灰色に渡し、傘を取り出す。今は梅雨の季節、雨はずっと降っている。

「んじや俺は一時、執務室を離れる。書き終わったなら別の仕事に移って構わない」

「はい！　分かりました！」

——工廠

「さてさて……工廠に到着だ」

「おや、お前がここの責任者かい？」

工廠の前に辿り着き、入ろうとすると誰かに声を掛けられた。横に目線移すとドアの陰に鋭い目をした老人が寄りかかっている。細

身でありながら腕や脚の筋肉が素晴らしい。

「儂はこの整備士をまとめているリーダーだ。まあ気軽にどうとでも呼んでくれ」

「では私は白髭と呼びます、私の事は白とお呼びください。それで工廠では今何をやっていますか?」

「今は工廠の設備を明石に教えてもらったり。あの娘は凄いいねえ、何でも簡単に教えちゃう」

整備士達は明石と仲良く開発関係の話を楽しそうに話している。弄れた妖精達とも打ち解けたようだ。

「仲はどうですか?」

「大丈夫さ、すぐに打ち解けたよ!!」

あるある話で盛り上がっている。関係は良い方向に進んでいるようだ。見たところ怪しそうな奴らはいなさそうにも見える。だが警戒は怠らない。

「なら構いません。今日は少し挨拶に参りました、これからよろしくお願ひ致します」

「こちらこそよろしく頼むよ、白提督殿!!」

「早速呼んで頂き感謝します。では失礼しますね」

「おうよ! 開発は儂らに任せな!!」

適当に挨拶を済ませ、次に向かうは憲兵寮。本日付で配属された憲兵隊が到着し、荷物を整えた後に寮の講堂で集まっていた。

「――以上が指示された配置だ。それぞれ忠義を持って行動するよう」

「はい!!」

「元気がいいねえ」

突然の提督登場に憲兵達は驚き出す。気配も無く登場した提督にどよめいている。長い白髪に白い肌、とても異質だ。

「て、提督殿! こんな所までご足労いただき感謝します!」

「あーはいはい、大丈夫だから。えーっと、お前らがこの鎮守府の警備する憲兵達だな? 改めて歓迎しよう、一部の者は知っているだろうが私の名は白、白と呼んでくれて構わない」

全体的に白いのか白と呼ぶように言われた。確か大本営で白と呼ばれた軍人が暴れているという噂を聞いた事がある。まさかその軍人が提督だとは思わなかっただろう。

「んじや警備は任せたまよ。私は失礼する」

「お任せ下さい、白殿!!」

「はあ……」

——まだ何も考えていないのに本当に一混乱起きそう」

79. 【このファイルから問題が検出されました】

「あの……初めてこういう所来たんですけど……」

「何だ？ 後輩」

「艦娘つてめっちゃめっちゃ可愛いっすね」

「それな」

初めて鎮守府の警護を任された憲兵達は艦娘達の美貌に見蕩れていた。この鎮守府に来てからというもの、艦娘を初めて見て少し浮かれていた。

「いいなー……少し憧れてしまいます」

「止めといた方が無難だぜ。過酷過ぎる仕事ナンバーワンってどの雑誌やテレビでも言われてるんだぞ？ バラエティ番組に軍関係者の特集でどれだけ面倒に伝えられたか知ってるだろ」

「ですよー……」

艦娘という存在を操りながら深海棲艦と戦う。国の為に戦い続けている軍人達は命を失くす覚悟で働いている。艦娘達とのコミュニケーション、深海棲艦討伐の為の作戦考案、艦隊の作戦指揮や戦闘指揮、数々の報告書作成。それ以外にもやる仕事はいくらでもある。

「結局俺らはこうやって警戒を怠らず、艦娘達の仲睦まじい光景を見守ってればそれでいいのさ」

「それが一番ですわねー」

倉庫の裏や広場中央、司令本部の中庭などを徘徊する。歩きながら憲兵達は世間話をしていった。艦娘達は戦闘に備えて、訓練をしている。艦娘達からは避けられるようになってきている状態だ。

「まあどこかの鎮守府では艦娘と交際している奴もいるらしい。憧れちゃうね」

「まあそれを白さんが許してくれるかどうかですけどね」

「それが出来るかも分からないけどなー」

「……えっ?」

恐る恐る後ろを振り向くと提督と摩耶がゆっくりと歩いていた。いつの間にか背後にいた提督にサボっていたと勘違いされないよう

に慌てて敬礼する。

「す、すいません白さん!! サボっていた訳では——」「別にサボるなとは注意してないだろ。あ、うーんそうだなあ……まあ付き合っても構わんぞ」

「え!?! マジすか!?!」

「おいおい、聞いてなかったのか? 出来るかどうかも分からないだぞ!」

提督が先程話し掛けてきたように出来るかどうかすら分からない。ただでさえ距離を置かれているような気がする。そんな事など到底は無理だろう。

「その通り。お前らも知ってる通り、ここはブラック企業ならぬブラック鎮守府だ。艦娘達の心はズタズタに引き裂かれている」

「可哀想ですね……」

「だからなるべく今は艦娘達とは触れ合わないように。隊長にもそう言つといた、各自気をつけるように」

「二分かりました!!」

提督と摩耶が過ぎ去り、廊下に佇む憲兵達。避けられている理由が分かった気がした。ブラック鎮守府によって艦娘達は人間に対して怖がっている。それならば避けるのも仕方ない事だろう。

「ブラック鎮守府か……可哀想ですね、艦娘達が」

「仕方ないさ。俺達は少しずつやっていくしかないよ」

——執務室。

「仕事はどうかね、灰君」

「はい! 遠征任務の報告書をまとめ終わりました。後、頼まれた書類を提出しました」

「ほう……どれどれ……お前、意外にまとめるの上手いなあ」

「そ、そうですか!?! ありがとうございます!」

川内と一緒にした仕事。それは整備士や憲兵達の振る舞いだ。一人ずつ丁寧にとまとめている。誰がどんな性格でどんな趣味をしているのか、分かりやすく記されていた。

「性格はお気楽で仲間思い、趣味はサバゲーや国内旅行。性格はパリピ、趣味は合コン。まあ多種多様な奴らがいっぱいだあ、面倒臭くてやっつけられん」

「でも何故まとめさせたのですか？」

「分からないか？ ■■■達がもし憲兵を引き込むとしてどんな奴らが狙われるか、そして艦娘達に気安く触れてくるのか。それぞれ把握し、予測する必要がある」

憲兵や整備士と言えど人間だ、可能な限り艦娘達に触れてくるだろう。■■■達も然り。如何にその人間の本質を見抜き、これからどうしていくかが鍵になる。慢心は絶対にしてはいけない。

「艦娘達のメンタルケアの為もあるのですね……私にやらせてくださいー！」

「当然だ、俺がやれって言ったんだからな。メンタルケアとかそういう表なのはお前がやるんだ、俺は裏で計画を進める。分かったな？」

ヒーロー候補生」

「は、はいー！」

表の仕事は灰色、裏の仕事は提督が。互いに理にかなった関係が出来上がっている。通常の仕事も少し楽に感じた。

「見事に操ってるな」

「意外にも候補生が来た事が吉になるとは思わなかったなあ。こうも良く手駒を動かせるとは案外悪くはないらしい」

「灰さん、撫でて撫でてー！」

「どれどれ」

「白露が先だよー！」

灰色と白露達が仕事もせずじやれている。隣で気にせず騒いでいる灰色達に提督は嫌気が刺していた。

「つくづく棒演技に寒気がするよ」

「まあまあ。気にするな、提督」

「うーん、やっぱ執務室を別けるべきかなー……」

やがてこんな日々が一週間続く。

候補生の来訪は意外にも艦娘達に効果があり、艦娘達にとって親し

みやすい存在となった。

整備士達も明石や良い人柄のおかげで艦娘達と何気なく話しており、憲兵達とはまだ距離は遠いものの徐々にその距離は縮まりつつある。

「時雨、今日は大丈夫だよ。ゆっくり休んでね」

「うん、ありがとう灰さん」

今日も忙しい秘書艦の仕事が終わり、部屋に戻る時雨。とても忙しかったが充実はしていた。悪くない毎日が続いている。

「しーぐれー!!」

「うわっ、白露！ 夕立！ 倒れちゃうよ！」

「へへへ、どう？ 秘書艦としてちゃんと働けてる？」

「うん大丈夫だよ。灰さんは優しいからね」

「もしかして好きになつてたり〜？」

途中で白露と夕立に抱き着かれ、秘書艦としてちゃんと働けているかどうか聞かれた。灰色は皆にとっても優しく、皆から慕われている候補生だ。秘書艦としてどう思っているのか、夕立がからかって聞いてみた。

「いや……そんな事は……無いとは思いたい……けど……」

「いいねえ〜姉として嬉しいよ〜」

「灰さんは優しいっぽい！」

時雨は少し恥ずかしがりながらも否定はしない。少なからずそういう感情がある事は隠しておきたかった。灰色との距離はいつの間にか近くなっていたらしい。

正直、嫌いだ。

「あ、そういえば時雨。明石さんが装備について話し合いたいみたいよ。」

「あつ、そうなの？ 分かった。ありがとう夕立」

夕立の言う通りに一人で工廠に向かう。工廠には整備士達の話で賑わっていた。多くの人達がいる中で時雨は明石を探す。

「明石さーん……いるかーい？」

だが全く見当たらない。桃色の髪で目立つはずがどこにもいない。ジャンプしたり、キョロキョロする時雨に一人の整備士が話し掛けてきた。

「ん、どうしましたか時雨さん」

「いや明石さんに呼ばれて来たんだけど、知らないかい？」

「あー、明石さんでしたら第四倉庫に向かいましたよ」

「えっそうなの？ 教えてくれてありがとう」

明石は第四倉庫にいるという。人の事と呼んでおきながら別の場所にいるとは失礼な艦娘だ。そう思いながらも時雨は第四倉庫へ向かった。

「……作戦成功♪」

「明石さーん、ここにいるのー？」

第四倉庫の中に入り、明石の名を呼ぶ。声がエコーのように響き渡った。

ここにもいない。というか気配すら感じない。あるのは大量の資材だけだ、何も無い。

「あれ……いないなー……——ッ!？」

時雨はおかしいと首を傾げた途端、背後にから猿轡をされ、手錠のようなもので両腕を拘束された。腕が邪魔で艤装が展開出来ない。

「や、やめッ……誰か——」

「よし拘束器具をはめた。奥に連れて行け」

「了解」

動けなくなつた時雨を倉庫の奥に運ぶ。何事も無かつたかのように倉庫の扉は閉ざされた。

「時雨、捕獲完了」

「よっしや上玉じゃん」

奥まで運ばれるとゴミのように放り投げられる。小さな光で照らされると、周りには整備士や憲兵が拘束された時雨を囲んでいた。皆ニヤニヤしていて気持ち悪い。

「少尉からは来るまではヤってもいいって言われてるんだ。さーて楽しんでだなー……」

「っ!？」

男達が一斉に時雨の正装を脱がし始めた。時雨はそれを見て絶望する。

この男達は自分を襲う気だ、と。

「灰さんに頼まれて時雨に渡すのを忘れてたっぽい。工廠にいなかったから、恐らく倉庫にいるんだろうな〜」

時雨に灰色から忘れ物を届けて欲しいと頼まれ、時雨を探していた夕立。工廠にはいなかったたので辺りの倉庫を確認していた。一番遠い第四倉庫まで歩き、中に入るとそこには――、

「ぽーい、時雨ー! いる――」「嫌だ、やめっ、痛っ!」

「暴れんな!! ヤリずらいだろうが!!」

「おい! 早く抑えろ!!」

夕立の目には複数の男に襲われている時雨が写っていた。男達は下半身を露出し、暴れる時雨を抑えようとしている。

一方で時雨は襲われまいと必死に足掻いていた。その光景を見て夕立は絶望し、即座に艤装を展開する。

「何してるの?」

「ッ!？」

誰かの声に敏感に反応する男達。襲う前に邪魔が入ったようだ。男達の視線にいるのは禍々しい気を放った夕立がいた。艤装を展開させ、金色のまとめられた髪は逆立ち、紅く輝いた目が男達を睨みつ

ける。

「その手を離して……話さないと全員殺すよ……!!」

「チツ……大きかったか!!」

「離せツツ!!」

言った直後に夕立は急発進。

男達に急接近し、五人の男の顔を瞬時に殴打。

殴られた男達は意識を失い、人形のように倒れる。あまりの急加速に突風が夕立を追い掛けた。

「時雨!! 大丈夫!? 怪我はない?」

「うん……大丈夫だよ。助けてくれてありがとう……夕立」

「良かった……!!」

猿轡と手錠を外し、時雨の無事に安心する夕立。時雨は助けてくれた夕立にすぐに抱き締めた。身体が震えている、恐らく襲われた過去のトラウマが甦ったのだろう。夕立も抱き締め、時雨を安心させる。

しかし――、

「――ツ!!」

「どうしたの夕立?」

「……何か……いる」

「え?」

気配を感じたのか、倉庫の天井近くにある窓を見る。窓は全て閉まっており、誰もいない。

しかし夕立はある一線をずっと睨んでいた。まるで誰かに覗かれていたような、鋭い視線を感じたのだ。

「夕立?」

「……いや気の所為っばい」

「時雨さーん、ここにいますかー?」

明石の呼ぶ声が聞こえた。夕立が睨むのをやめたのも明石が来たからだろう。第四倉庫に入り、書類を持ったまま時雨を探している。

「明石さん……」

「あ、ここにいましたか……ってどうしたんですか!？」

「実は……」

数分後に提督と灰色、そして憲兵隊や整備士、艦娘などが駆けつけてくれた。夕立と時雨の周りには殴られた男達が手錠で拘束されている。早速の事件発生に提督は頭を悩ませた。

「はあ……襲われそうになったところを夕立が助けてくれた、と」
「うん……」

「青葉」

「時雨さんと夕立さんの言葉は本当です。嘘偽りはありません」
「ならお前らが被害者だ」

憲兵が拘束された男達を縛り付けている。憲兵が三人、整備士が二人。例え艦娘が被害者だろうと犯罪だ。強姦未遂は重い罪として、厳しい処罰が下される。提督は今にでもこの五人を殴りたい気持ち■った。

「白殿、この馬鹿共は」

「地下営倉にぶち込んでおけ。後、隊長と白髭にお前らは悪くないから気に病むなと伝えておくように」

「了解しました、わざわざありがとうございます」

拘束した犯人達を抱え、憲兵達は去っていく。倉庫の外では艦娘達が蔑んでいた。あれだけ憲兵隊長に言われていたのに配属されて一週間で事件を起こすとは、憲兵と整備士としては申し訳ない気持ちだった。

やっと信頼関係が結べ■うな気がしたというのに。提督も面倒事を起こさされ、流石に気が滅入る。倉庫の外に出る途中で灰色とすれ違った。

「ヒーロー■補生、お前の出番だ」

「……了解しました」

「今にも怒りで連中を殴りたいだ■うがやめておけ、自滅だぞ」
「分か■■ます……！」

これ■機に、■ずれ提督と■■達は知る事に■る。

—こ■鎮守■真実を。

—そ■世界を敵に回■結果■事を。

—……今■のは序■過ぎ■い。

—これは、信念■げ■者達■巨大な■に立■……

—語■い『戦争』だ。

80. 他人の不幸は蜜の味

あの事件後、犯人グループ五人は営倉に収容。提督は事件を隠蔽する為、憲兵や整備士に口外無用にした。時雨は過去のトラウマを呼び寄せた為、■■■医師の元で精神治療を受けている。灰色の秘書艦は白露が代わりに受けてくれた。また憲兵や整備士と艦娘の関係は悪化し、不穏な空気が漂っている。

「あーもう面倒事はやめてくれー……」

変な頭痛に苛まれ、軍帽で頭を隠す。椅子に寄り掛かり、机に足を乗せて休んでいる。憲兵や整備士、灰色が来るまでは順調だったはずの計画が数々の厄介事で大番狂わせだ。

正直泣きそうである。摩耶は提督を心配して、珈琲を出してくれた。

「お疲れ様だ、提督」

「本当だよ。マジで疲れるわ、ストレス溜まる」

「白さん……本当に申し訳ございません！」

灰色が突然立ち上がり、提督の目の前で頭を下げた。どうやら昨日の事件で時雨を危険な目に合わせたことに負い目を感じていたらしい。灰色の秘書艦とはいえ元は提督の部下だ。その部下を預かった責任があるのだろう。

「何でお前が謝るんだ」

「私が休んでいいと言ったばかりに……あんな事件が……！」

「別にお前は悪くないだろ。悪いのはあの五人だ、お前はただそれを予測出来なかっただけ」

「失礼します」

執務室に憲兵隊長、整備士のリーダー白髭が入室。入ってくるなり提督の前で土下座した。

「この度は本当に申し訳ございませんでした!!」

「お前らもか」

「あの事件は私達の管理不足にあります……！ 貴方の大事な部下を大変な目に会わせてしまった……！」

「あー大丈夫だつて。悪いのはあの五人だから、許してほしければさっさと持ち場に戻ってくれ」

「いや……もう一つ、謝らなければならない事がございます」

憲兵隊長が執務室に設置したテレビをつける。その光景に執務室にいる誰もが目を疑った。

「……はア!？」

そこには昨日の事件が一大ニュースとして報道されていた。出された新聞にも大きく見出しがついている。更には写真までが貼り付けられていた。その写真とははたかも夕立と時雨が憲兵と整備士を暴行したかのような絵面。

提督は慌ててスマホでSNSを確認する。キーワードで検索するとその写真がネット上で瞬く間に広められていた。

「どういう事だ……オイ……」

「私達の間で調べたのですが……誰もそんな事はやっていないと述べており……」

「儂の所も全員そうじゃ」

何故だ、何故こんな事になったのだろうか。全く理解が追いつかない。

あの場にいたのは全員この鎮守府の寮に住んでいる。艦娘達にはインターネット環境は常に遮断している上、外に情報を伝える事は不可能だ。■の犯行では無い。

憲兵や整備士達には機密情報漏洩を防ぐ為に誓約書で誓わせている。例外を除いては漏洩するなど絶対に有り得ない。それこそ憲兵隊長や白髭が証言しているように、そんな写真を取る奴などいないはずなのだ。

「チツ……あーもオオオオ!!! ふぎけんアア!!!」

次から次へと面倒事を負わせてくる。ぶつけようのない怒りに苛まれた。ただでさえ■との戦争が控えているのにこれ以上の面倒事など厄介でしかない。

「提督、一回落ち着こう? な?」

「……すまない摩耶。少し取り乱した……」

「どうされますか……白さん……」

摩耶に窘められ、落ち着きを取り戻す。数々の面倒事に抑えた怒りが限界にきたのだろう。一回椅子に座り、天井を見つめる。

「こうなったら徹底的に犯人を突き止めるぞ!! ヒーロー候補生、すぐに青葉と川内を呼び出せ! 隊長は全ての憲兵を集めろ! 白髭も同じだ!!」

「な、何をするのでしょうか?」

「尋問だ!! 一人一人じっくり問い詰めて吐かせた後にその腐った根性をボッコボコにしてやる!! 分かったら今すぐ動け!!」

「了解しました!!」

提督の指示通りに憲兵達や整備士達が廊下の奥まで並んでいる。執務室で提督と摩耶が一人ずつ呼び出し、あらゆる手段で聞き出した。背後には青葉がいる。簡単に嘘はつけないようにした。

「え、何? あの列は……」

「あれ大井っち、テレビ見てないの?」

「え?」

「昨日の事件がバレて、そのバラした犯人を探してるんだって」

憲兵や整備士を集める前に艦娘達を呼び寄せ、領地内の壁に五メートルの範囲で警戒させた。これは尋問前に犯人が逃げないようにする為の逃亡阻止柵になっている。警戒している艦娘達は差別された側と着任した艦娘が請け負っていた。

「凄い徹底ぶりだよねー」

「だから私達はここにいますか……」

「次で最後か……」

「……来ないな」

あつという間に昼が過ぎ、最後の整備士を一人残して全員に尋問した提督。しかし誰もそんな事はやっていないと証言していた。嘘かどうかは青葉が見抜いてくれる。青葉は全員本当の事を言っているようだ。

その最後の整備士は全く入室してこない。変に思った提督はドアの向こうにいる白髭に問い掛ける。

「白髭、最後の一人は？」

「それが……探してもいないんだ……」

「……は？ ツ……やられた!!!」

提督は憲兵や整備士の名簿を床にたたきつける。予測していた一番最悪な事態が本当に起こってしまった。

「提督!? どうしました!?!」

「恐らくコイツが犯人だ! だがコイツは俺が尋問するの予見して、その前に昨日の夜にここから逃げたんだよ!! ちくしょうがア!!!」

頭を掻きむしり、怒りをあらわにする提督。提督がこんなに怒るのは久しぶりだ。大体は冷静沈着にキレるが、今は焦っているような感情が表に出ている。その場にいた青葉は何も言い出せなかった。

「そんな……突き止めようがないって事か?」

「言いたくはないがそういう事だ……! チツ……!!」

為す術もなく、提督は執務室へ向かう。今までクレーム対策で通信環境を切断していた電話機を再接続。その途中にある人物から連絡が来た。

「はい、こちら■■■■鎮守府責任者、白と申します」

「一体どういう事かねこれは!?!」

「誠に申し訳ございません。私の不徳の致すところでございます」

元帥だ。

先程のニュースを見て、怒りより驚きが先に出ていた。今ではこのニュースを見た各社記者やマスコミが大本営に押し寄せている。受話器は止まることを知らず、毎秒鳴り続け放題だ。この鎮守府もいずればこの波がやってくるだろう。

『この報道は本当なのか?』

「いえ全くの偽造です。この事件の被害者はそもそも艦娘です。憲兵や整備士ではありません」

『でも写真では——』「それは偽造です! あたかも夕立が暴行した後写真に見えますが、彼女は男達から時雨を助けています!! この写

真は偏見させる為に撮られた偽造の写真です!! 第一にどうやってこのアングルからこの写真が取れるのですか!? それに夕立には男達を暴行する理由が無い!! 元帥殿、よくお考えに——」

元帥との通話はヒートアップし、話し終わるまで三十分が経過。電話機を下ろし、提督は頭を抱えた。

「提督……」

「……犯人グループ、時雨と夕立の連行が確定した」

「っ!?!」

「そんな……彼女達は被害者なのですか!?!」

「そうだ……詳しい話は大本営で聞くと言われた。クソがツ!!」

提督は椅子を蹴り飛ばし、執務室を出る。摩耶や灰色、憲兵隊隊長や白髭がその後を追った。提督は急ぎ足である場所へ向かう。

「提督?!? どこへ!?!」

「時間は無い。時雨達を尋問する」

「でも時雨は……!?!」

「トラウマで怯えていようが知ったこちやない。気を遣って時間を置かせるほど暇じゃないんだ。一刻を争う事態だ、青葉を呼べ。今すぐ行くぞ」

急いで医務室の扉を勢いよく開き、勝手に侵入する。提督の突然に

■ 医師が止めに入った。しかし提督はそれを無視して真つ直ぐ時雨の元へ向かう。時雨の傍には夕立、白露が見守っていた。

「ちよ、何やってるんですか貴方は!!」

「時雨、トラウマを思い出して怯えている所すまないが尋問だ。お前らもだぞ」

「何言ってるの!?! 時雨ちゃん達はまだ——」「んな事分かってんだよ!! この先時雨達を死なせたくなければ黙って聞いてろ!!」

■ 医師の胸倉を掴み、提督は怒鳴り吠える。一々艦娘の精神状態に構っていられるほど事態は一刻を争っている。出来る限り時間を無駄にしたいくないのだ。

「……分かった。受けるよ、提督」

「時雨ちゃん……」

「素直でよろしい、時間も無いからここで始めるぞ。いいな？」

医務室で尋問は行われた。時雨はベッドに座りながら、夕立は椅子に座りながらそれぞれ質問していく。

「では時雨、お前はどうかやってあの場に呼び出された？」

「昨日夕立が明石さんが呼んでるつてのを聞いて、工廠に行つたんだけど……明石さんはいなくて、整備士の人が第四倉庫にいるつて言うから、大人しく第四倉庫に行つたら……」

「よし、そこまでだ。夕立、お前はその明石が呼んでる事を誰に頼まれた？」

「……私も、その整備士に頼まれて……時雨に言った」

やはり昨日夜逃げした整備士が企てた事だ。

だが動機が不十分過ぎる。この鎮守府と全く関係の無い、ましてや配属されたばかりの整備士が艦娘を貶めようとする事など全うな理由が無ければ起こらないはずだ。

であれば考えられる事は二つ。

一つ目は裏で誰かが糸を引いている可能性。存在？ α ? について模索していた事が上にバレて、何かしらの方法で艦娘や提督を貶めようという理由があるからだ。

二つ目は■■の計画に嵌められた可能性。その配属されたばかりの憲兵や整備士に知っている顔が存在し、互いに利益の為に結託。差別された側の艦娘を捨て駒に夜逃げした整備士が写真をばらまいた。「じゃあ質問を変えるぞ。夕立が時雨を助けた時、何か違和感は無かったか？」

撮られた写真は夕立が時雨を助けた後の場面だ。

だが世間からは夕立が憲兵や整備士をストレス発散で暴行したかのような絵面になっている。だとしたらその場面を撮られる時に何か違和感があったはずだ。

「……そういえば、何か気配を感じたの」

「気配？」

「そう。助けた直後に何か視線を感じて……だけど気の所為だと思つて……」

青葉はコクつと首を傾け、本当だと証明する。助けた直後に視線を感じたという事はその視線が写真を撮った者となる。

となればやはり犯人は夜逃げした整備士か。

「……提督」

「何だ時雨」

「真犯人、分かったかもしれない」

時雨の発言に一同は驚く。被害者である時雨が真犯人を特定出来たようだ。ならば話は早い。

「誰だか分かるか？」

「あの……私が襲われる前に言ってたんだ……」

『少尉に来るまではやっていいって言われてるんだ』

「ツ!!!」

「多分その少尉って人が犯人だと……思う……」

少尉の存在が明白する。提督はそれを聞いて、拳を握った。成程、そういう事か。

「提督、これって……!」

「ああやつと分かってきた。事件の真相が……」

この事件を企てたのが誰なのかをようやく理解出来た提督。事件発生直後から初めて提督は笑みを浮かべる。この事件は全て個人の怨念によって発生した予め仕組まれたモノだった。

「時雨、夕立、これから話す事について受け止めてもらいたい」

提督は余裕が出来たのか、腕を伸ばして時雨と夕立の肩に触れる。これから二人が想像を絶する程の経験をする事を優しく伝えた。

「お前らはあの事件の重要人物として明日大本営直属の憲兵隊によって大本営まで連行される。この事が終わるまでお前らここには一生帰れない」

「そんな……」

「だがそこには証人尋問がある。その時に嘘偽りなく全てを話せ。何もかもだ、根掘り葉掘り聞かれようとも真実を話すんだ。大丈夫だ、

お前らは何一つ間違つてはいない。自分を信じろ」

大本営に捕まったが最後、事件が事晴れるまで鎮守府には一生帰れない。現に提督はその艦娘を日撃した事がある。本当の事を吐かせらるまで徹底的に痛めつけ、衛生環境や精神状態は最悪、正直薬を使つて本当の事を言つても、都合が悪ければ最後の最期まで尋問させる。拳句の果てにはその艦娘は自殺し、大本営からは解体を選んだと報告していた。

これは提督しか知らない事実だ。時雨達もいずれはそうなつてしまふ可能性がある。

「……はい……！」

「いいか？ これは俺が危ないから言つてる訳じゃない。お前らが死ぬ可能性があるから言つているんだ」

時雨達は涙を流し、震えた声で答える。身体は震えており、時々跳ね上がった。

「お前らが連行されたら必ず俺達も後を追う。心配するな、お前らは一人じゃない」

「……提督、灰さん……抱きしめてもいい？」

「構わない」

「うん、いいよ」

普段は嫌がるような提督がすんなりと抱擁を受け止めてくれた。時雨は灰色を抱き締め、夕立は提督を抱き締める。それぞれの男の抱擁はとても包容力のある優しい抱擁だった。

「お前らは俺の過酷な道に巻き込まれた一番の被害者だ。巻き込んでしまつて本当に申し訳ないと思つている」

「怖いよ……」

「寂しいよ……」

二人は提督の厄介事に巻き込まれた被害者だ。小さくてか弱い艦娘が大きな責任を負い、死ぬまで大本営と戦わなければならぬ。二人にとっては背負いきれない重く巨大な首枷だろう。

「だがお前らは幾つもの過去という名の障壁を越えてきた今がある。お前ら二人にとっては苦しく、悲しく、寂しい道だろう。だが俺はそん

な道だろうと乗り越えられる君達を信じてる。感情論になってしま
うが……きつと大丈夫だ」

「提督さん……ごめんなさい……」

「なあと謝る事じゃないぞ夕立。艦娘も人間と同じなら間違いの一つ
や二つ、起こしてしまうもんだ」

時雨と夕立は泣きじやくる。提督と灰色の優しさに涙が止まらな
い。この小さく震えた手にどれだけの想いがあるだろうか。提督は
夕立を包むように抱き締め、そして夕立の顔を見た。

「分かったか？ お前らなら必ず大丈夫だ。最後に一つ、忠告してお
く……」

「——絶対に自分が自分である事を見失うな」

「絶対にだ。いいな？」

「私達も後を追うから。負けちゃダメだよ、時雨」

「うん……ありがとう、灰さん、提督」

81. プライドが高い奴はロクなもんじやない

日が暮れ、朝を迎える。時雨達を連行する直属の憲兵隊が到着。地下営倉から犯人グループ五人、医務室から時雨と夕立が手錠をされて輸送艦に連行されていく。長女の白露と別れを告げた後、二人は複雑な表情をしていた。早起きしていた艦娘達は一連の光景に言葉を失っている。提督を中心に摩耶、灰色、憲兵隊長、白髭、白露は太陽の光に照らされ、影が並ぶ。

「……今まで受けた任務や仕事は全て破棄だ。急ぐぞ」

「了解」

早朝から会議が始まる。先程の六人でテーブルを囲み、事件の真相について話し合う。

「摩耶、まとめた書類の手配を」

「分かった」

提督は事前に揃えた書類にはこの鎮守府の悪事、前任の行動、艦娘の過去、これまでの計画など事細かに記されていた。時雨と夕立の経歴を知ってもらう為に用意したものだ。この際機密だろうが極秘だろうが関係ない、勝つ為ならばどんな手段でも投じる。

「これが俺が知りうるこの鎮守府の全てだ。そして一昨日の事件の首謀者は……あくまでも可能性だが駿河鎮守府の■■少尉だ」

「すいません白殿、何故■■少尉は白殿を狙ったのでしょうか？」

「その書類にも書いてある通り、以前ソイツと一度演習した事がある。勿論勝利は俺達、その時にだがあまりにもガキだから本当の事を二回ぐらい指摘してやった。恐らく馬鹿にされたのが悔しくて俺を貶めようとこんな事をしたんだろう」

大体首謀の動機は特定出来る。■■少尉は自身のプライドまで踏み躪られ、面子まで潰された提督に何かしらの恨みがあったのだろう。まさに子供だ、大人の成り方を忘れてしまっているらしい。

「成程……確か■■少尉は■■大将のご子息でしたね。とても性格が弄れているとよく耳にします」

「アイツは俺も苦手じゃったなあ……何かと自分の都合いい文句ばか

り吐きおつたわ」

隊長や白髭が愚痴を零す。どうやら■少尉の悪い噂は提督と同じく絶えないらしい。白髭にとつては自分勝手な性格に飽き飽きしていた。

「ですが■先輩が人を動かす程の権力を持つてるのでしようか？」

「■大将の愚息だぞ？ ありとあらゆる手段を持ち合わせてるはずだ。まさに虎の威を借る狐と言える」

■少尉は灰色の先輩だ。あまり良い印象は持つておらず、同期や他の先輩も一目置いていたとか。よく■大将の息子だぞと脅された事もあった。

「逃げた整備士の経歴は全て虚偽の内容だった。鼻からこの事件を起こす為に潜入したのだろう、綿密に計画は練っていたようだ」

夜逃げした整備士の経歴は全て嘘だった。経歴や名前、住所も全て他人の物だ。簡単に探して捕まえる事は出来ない。

「八方塞がりという訳か……」

「相手は見事にこちらの手を潰している。そう簡単に見破らせてはくれないらしい」

「外では多くのマスコミやメディア、デモ隊が出待ちしてて、いつ何されてもおかしくない状態。クレームの電話は鳴り止まる事を知らずに毎秒対応に追われてる」

「鎮守府襲撃から印象はガタ落ち、他鎮守府とも連絡つかずに孤立状態。孤影悄然だな」

「人つて凄いですね」

白露や摩耶の言う通り、外からの反応は凄まじいものだ。門前ではメディアやデモ隊の人混みで溢れて騒いでいる。憲兵達が必死に抑えてるも、勢いは止まらない。他の鎮守府とも連絡は拒否され、協力は頼められない状態だ。

「本当に関心ものなあ、全く関係の無いゴミ共が人の悪い所を見れば即座に追求してくる。人間の素晴らしい所だ」

「一応クレーム対応は憲兵達が対応してくれていますが……」

「気にするなと言っておけ。わざわざクレームを言いに来る奴は無能

故に暇を持て余していて、その癖無闇にプライドだけは高い嫉妬深いクズの様な人間だ。寧ろ言い返してやれ」

提督が堂々と言い張った。一々関係の無い人間のクレームを気にした所で何も変わりはない。時には無視するのも必要だ。

「白殿、私から提案なのですが……」

「何かね隊長君」

「私の友人に探偵をしている者がいます。掛け合ってみますか？」

会議が進む中、憲兵隊長が手を挙げて提案を申し出た。探偵をしている友人がいるらしい。ちょうどいい、駿河鎮守府について調べてもらえればこちらが有利になる可能性がある。

「ぜひ頼む。報酬は五千万下から言い値で払ってやると言っておけ」

「かしこまりました」

莫大な報酬を払う覚悟まで提督は出来ている。これは戦争だ、少尉と提督の互いの誇りを賭けた戦い。勝つ為ならばどんな手段でも使う。勝利を勝ち取る上で重要な事だ。

「時雨や夕立の討議は俺も出席予定だ。今度は律儀に時間を変えているが、瑞鳳達からは本当の開始時間を把握している。灰も来い」

「分かりました」

「その討議までに証拠を揃える必要がある。隊長君と白髭は周辺の整備士と憲兵から証言を全て取ってこい。また犯人グループの立ち振る舞いや印象、事件発生前と発生後のアリバイを取ってくるんだ。いいな？」

「任せてくださいー！」

「任せな!!」

それぞれ指示を与える。討議では時雨と夕立を弁護する事になるだろう。その前に明確な証拠と証言の提出がある。戦う為に武器は必要不可欠、本戦に備え武器を揃える必要があるのだ。

「馬鹿共には後で事情を説明した後、訓練を一定期間中止させる。摩耶は後で全員に部屋で大人しくするように呼び掛ける、尚やりたい事と購買申請書はいつでも受け取ると言っておけ」

「分かったぜ」

「灰は白露と行動し、馬鹿共から白髭達と同じ様に証言を取ってくるんだ。勿論全員分、時間は無いと思え」

「分かりました！」

全員に指示は与えた。

これからは熾烈な戦いになる。口論での手加減は必要ない。

「各自、信用という言葉に気をつけろ。時雨夕立奪還計画を実行に移す!! 計画始動だ!!」

全力で楯突く相手をぶつ潰す。それが提督の信条だ。

「——という訳だ。悪いが一時全ての任務を哨戒任務に限定する。訓練も全て中止、事が晴れるまでは部屋で静かに暮らしてるといい。私からは以上だ。摩耶、後は頼んだ」

「分かった」

突然の出来事に困惑している艦娘達に事情を説明した。時雨と夕立が連行され、事が終わるまで帰ってこない事。これから会議で忙しくなる事。いずれも艦娘達には把握してもらわなければならない。多少質問も出てきたが、提督は全て無視した。

「提督、なんで……」

「今はあまり触れない方がいい。提督は今……本気になってる」

「動け。着いたぞ」

連行された時雨と夕立は大本営に到着。嚴重な警備の元、輸送艦や輸送車に運ばれた。そして大本営の地下にある留置所に收容される。

「しばらくここで生活してもらう。後に尋問が予定されているので、事実を話すように」

「分かり………ました………」

鉄格子は艦娘専用設計され、簡単には破壊できない。また両腕は特殊な手錠で拘束され、艀装は展開不可能。畳二枚分の牢屋で時雨と

夕立は待機する事となった。

「寒いな……それに少し臭う……」

留置所は地下に設置されている為、陽の光は全く届かない。廊下と部屋は薄く蛍光灯で照らされている。心做しか肌寒く感じた。それに生臭く、鼻が振れる。

「自分が自分である事を見失うな……か」

提督に言われた言葉を思い出した。この先どんな事があるとも自分が自分である事を見失ってはいけない。提督に初めて励まされたような気がした。しかも自分達の為に。

何故だろうか、あんなに優しくされたのは初めてだった。複雑な感情が時雨の中で湧き出てくる。本当は人間なんて嫌いなのに。

「■■■■鎮守府所属、白露型駆逐艦二番艦時雨。早速ですまないが尋問の時間だ」

「はい……」

手錠をされた状態で牢屋を抜け、尋問室まで四人の憲兵と一人の艦娘、ガングートに監視されながら向かう。鎮守府襲撃の際に共に戦ってくれた仲間だが、時雨の事は全う思い出していないらしい。尋問室の中に入ると、まるで刑事ドラマのような取調室になっていた。既に尋問官が入室しており、憲兵達は一時廊下にて待機。尋問室ではガングートが監視する中で尋問が始まった。

「初めまして。貴方の尋問官を務める■■■■です。本日はよろしくお願ひします」

「よろしく……お願ひします……」

尋問官の人は女性だった。長い黒髪に黒眼鏡、見た事のない軍服をしている。とても礼儀正しく、真面目な姿だ。

「さて早速ですが、時雨さんは■■■■鎮守府の憲兵三名と整備士二名に対し、暴行を加えたという事になっていますが暴行の動機は何でしょうか？」

まず尋問官が聞いてきたのは暴行の動機について。尋問官は時雨と夕立が暴行した程で話を進めている。時雨は慌てて拒否の発言をした。

「ど、動機なんてありません！ 僕達はそもそも被害者なんです!!」
「被害者？ どういう事でしょうか？」

「僕はその五人に襲われそうになって、その時に忘れ物を届けてくれた夕立が助けてくれたんです!!」

本当の事を伝える時雨。嘘偽りなどなく、事実を必死に喋った。信じてほしいが為に何度でも言い続ける。時雨にとって夕立を救える唯一の手段でもあった。

「襲われそうになった、ですか……では何故そうなったのか供述してくださいますか？」

「はい……僕はあの事件が起こる前に明石さんが呼んでいると言われて、工場に向かいました。しかし工場には明石さんの姿が見えないので整備士の人に聞いたら第四倉庫にと言われ、そのまま第四倉庫に向かったんです。ですが第四倉庫にもいない為にドアから出ようとしたらいきなり手錠と猿轡をされて、倉庫の……お、奥……奥、まで……」

徐々に身体が震え、まともに喋れなくなる。過去のトラウマを思い出してしまい、時雨はパニック状態に陥る寸前だった。異変に気付いたガングートが傍に寄り添い、時雨の背中を手で擦る。

「どうしました？ 身体が震えていますか……」

「奥、まで連れて……いかれて……」

それでも時雨はトラウマに囚われようともしない。心で話を続ける。しかし簡単に抗える訳ではなく、身体が小刻みから暴れる程に震え出した。過呼吸を引き起こし、上手く呼吸が出来ない。

「わわわ分かりました！ 話さなくて大丈夫です、一回落ち着きましよう……ね？」

尋問官とガングートに窘められ、徐々に落ち着きを取り戻す。過呼吸も治まり、ガングートが抱き寄せて大丈夫だと親身になって寄ってくれた。まるで子供のように時雨はガングートに抱き着く。尋問官も仕方なく落ち着きを取り戻すまでは許可してくれた。

「……時雨さんの供述はどれも事件とは真逆の物ですね……しかもこの震えた様子は少し……」

「ご、ごめんなさい……」

「いいえ大丈夫ですよ。では少し話を切り替えましょう。夕立さんとは普段、仲は良いですよね?」

話を切り替え、尋問を続ける。今度は夕立の事を聞いてきた。夕立は襲われかけた時雨を助けてくれた大事な妹だ。夕立は何も悪くない。

「はい……」

「何か夕立さんから少し不可解な行動とかはありませんか?」

そんな行動など一つもない。夕立は憲兵や整備士に対して悪いイメージは持っていないかった。第一に夕立の暴行は正当防衛として認められていいはずだ。

「ありません……!」

「本当にですか?」

「絶対に……!」

尋問官からは時雨の顔には絶対の自信があった。口調や微かな声の震え、唇の動きなど見てきたが全てが嘘偽りなく思える。本当であればもっと調べたい事があるものの、気になる事が出来た為に尋問を終わらせざるを得なかった。

「……分かりました。では初回の尋問はこれぐらいにして終わらせていただきます。次回もあると思うのでその時はまたよろしく願いますね」

「待ってください!! 僕達は本当にやっていません!! 信じてください!!」

「……では」

「お願いします!! 信じて——っ?」

何も答えない尋問官に無実を訴えるもガングートに止められてしまう。その時に手に何かメモのようなものを隠して渡された。ドアから憲兵達が入ってくる。そしてガングートは時雨にしか聞こえない小さな声で伝えた。

「中で隠して読め」

「……っ!」

そのまま時雨は嚴重な警戒の元、牢屋の中に收容される。牢屋には一つずつ監視カメラが設置されていた。怪しい行動を取らせないよう監視する為だろう。時雨は監視カメラの方に背中を向け、ガングートから渡されたメモのようなものを読む。

「何か違和感を感じるのは気の所為かしら……」

尋問官は地上一階に登り、自らのオフィスへ戻る。時雨の供述をまとめあげ、報告書を作成していた。だが尋問官は少し疑問に思っていた。

「(質問に対して全てが事件とは真反対の供述……どういう事なの?)」

罪を犯した者には嘘をつく際に表情で区別出来る。目線の移動や瞬きの回数、手の動きや口の動き、汗の出方など方法は様々だ。

だがあの時雨にはその方法がどれも通じなかった。正確には全ての表情は変わらなかったのだ。そして供述した際の極端な身体の震え。パニック状態に陥るまでの何かに恐怖を感じていた。

しかもその時に供述していたのが――

『奥まで連れていかれて――』

「うーん……」

82. 悲哀の雨は風に揺らされ降り続ける

ガングートから貰ったメモのようなもの。隠してその中を開くと小さな文字が並べられていた。

「会った事もあるだろうが私はガングートだ、現在提督と話で繋がっている。だが無闇に手を出す事は出来ない。今提督は時雨と夕立の無実を証明している為に全力で動いている。私もそのつもりだ」

ガングートも時雨達の事は把握しているようだ。事件発覚後に時雨達が連行される前日、提督は瑞鳳達と連絡を取り合っていた。会議の開始時刻や大本営の対応などを知らせている。そしてガングートは時雨達の監視官を自ら務め、大本営の動向など探っていた。

「敵は予想以上に強大になりつつある。何故か君達を徹底的に貶めようと本気だ。だがこれだけは忘れないで欲しい——」

【希望を持たずに生きる事は、死ぬ事と等しい】

【我が国での格言だ、心に納めておくように。同志ガングート】

メモのようなものを隠し、小さい声で呟く。濡れ衣を着せられた時雨と夕立を救おうと提督や灰色、ガングート達までもが動いている。今更後には引けない。

「……」

「■■■鎮守府所属、白露型駆逐艦夕立。尋問の時間だ」

「分かり………ました………」

隣の牢屋にいる夕立が呼び出された。尋問に不安でオドオドとしている。四人の憲兵に囲まれ、ガングートが監視下の元で尋問室入室。何分か経ち、尋問官が入ってきた。

「本日の尋問官を務めさせていただきます、■■■と申します。よろしく願いますね」

「お願い………します………」

「そう畏まらずに話しやすい喋り方で大丈夫ですよ。緊張もしなくて大丈夫です」

尋問官は黒眼鏡に短髪、二十代後半の男だ。とても若く見える故に灰色に見えて仕方ない。尋問官は夕立を気遣い、話しやすくなれるように優しく話しかけてきた。

「あの薄暗い部屋の中で大変でしたね。体調は如何ですか？」

「あまり……良くないっばい……」

「少し寒いですがもんねあそこは。その姿では肌寒く感じるでしょう？」

ガングートが毛布を持ち出し、夕立の背中に掛ける。身体を覆うように優しく包まれた。

そして手に何かを持たせられる。ガングートは知らずに所定位置に戻った。

「今だけでも暖かくしていただければと思います」

「……ありがとうございますっばい……」

優しくしてもらえるのは嬉しい事だ。

だがこの場所は尋問室。普通は怪しむのが当然だろう。夕立は懐柔はされないと必死に抑え込み、尋問官を警戒する。

「いえいえ感謝されるような事ではありません。お互い仲良く話せなければ意味がありませんからね」

笑顔でフレンドリーに話し掛ける尋問官。怪し過ぎる故に何も言えない。余計な事を言えばそれこそ事実を信じてもらえないだろう。慎重にいく必要がある。

「ではこの事件の犯人として、犯行の動機を喋っていただけますか？」
「動機なんて無いっばい。時雨が男達に襲われそうになったから助けた」

「時雨さんを助ける為に被害者達を殴った、と言う事でしょうか？」

「うん……そもそも被害者は時雨だっばい」

尋問官は夕立の言う事を書いて簡単にまとめた。ボールペンを顎に当てて考えている。

すると次にファイルからあの写真を取り出し、夕立に見せた。

「ではこの写真は間違いであるか？」

「うん……だって私は時雨を助けただけっばい……」

それが事実だ。

何も隠す事は無い。

襲われそうになった時雨を助けただけ。それ以上の事は何も無い。「そうですね……では何故このような状況になったのか、経緯を説明出来ますか？」

「……私は時雨に忘れ物を届けて欲しいと灰さんに頼まれて、整備士の人から第四倉庫にいたと言われて第四倉庫まで向かいました。中に入ると複数人の男達が時雨を襲おうとしていたので、そこからですっばい」

男達とは時雨と夕立に暴行された被害者達だ。彼等はいずれも呼び出されてストレス発散で殴られたと供述している。

だが夕立の供述はそれとは全てが違うシチュエーションの話だった。通常なら被害者と被疑者の事件発生時の事は多少食い違いも発生する。しかしこの場合はそれぞれの供述に一貫性は無く、何もかもが違っていた。

「忘れ物とは何か覚えていますか？」

「はい。遠征任務の書類です。時雨が旗艦なので把握してほしくて、それを忘れた灰さんが届けて欲しいと言われたっばい」

「ではその灰さんとは時雨さんを夕立さん目線でどう思っていますか？」

「普通のパートナーだと思うっばい。毎日一緒にいるし、仲良くお喋りしてたっばい」

意外な質問で相手の出方を探る。しかし夕立は悩む事すら無く、流暢に答えた。考える動作も無く、思いのままを喋っているとしか思えない。やはり後輩の違和感は本当のようだ。

「……そうですね。分かりました、一旦尋問は中断とさせていただきます」

「ありがとうございます……ごさいました……」

尋問室を去り、自分のオフィスへ向かう。尋問が終わったのが分かったのか、時雨の尋問官である後輩が駆け寄ってきた。

「どうでしたか先輩」

「うーん……確かに君の言う通り、何か違和感を感じるね。嘘はついていないし」

「個人的には私……夕立さんの正当防衛になるのではと思うのですが……」

「それを決めるのは上だ。僕達は犯人に対して証言や供述を言わせる事。それ以上の介入は許されないよ」

時雨と夕立の尋問官を任されている二人は報告書をまとめる。もしかしてあの時雨と夕立は犯人では無いか。そういつた疑問がいくつも浮かび、頭から離れようとしな。そう考える中、皆が一斉にして頭を下げた。

「■■少尉ですね。確か駿河鎮守府の責任者で■■大将のご子息と聞いています」

「うんそうだね。僕はその人達と一度手続きがあるから、この書類は僕の机に置いていて」

「分かりました」

今日は■■少尉の訪問が予定されていた。あの事件を聞いて、時雨と夕立の事に興味を持っているらしい。応接間で堂々と寛ぐ少尉の前に挨拶を交わした。

「初めまして■■少尉。私は尋問官の■■■と申します」

「あーどうも。よろしく」

「今回は何故大本営に？」

「そうそう。ちよつとあの事件の犯人である時雨と夕立を少し拝見したくて来たんだわ。今すぐ出来るよな？」

少し言葉に棘を感じるのは気の所為だろうか。何かモヤモヤする気持ちを抑え、満面の笑みで尋問官は答えた。

「はい。出来ますよ、しばらくお待ちいただけますか？」

「早めにな」

『六月二十二日午後十七時未明、■■■鎮守府にて艦娘が憲兵と整備

士を暴行したとして、海軍は警察の取り調べを拒否し、こちらで処分
——
テレビのリモコンで電源を切り、提督は背筋を伸ばす。事件発覚後
と時雨達の連行から提督と摩耶は報告書をまとめていた。雨は少し
激しくなり、風が吹いている。

「あつという間に全国デビュードなあ」

「悪い方向にだけどな」

「デモ隊も懲りないですね。風が吹こうが雨降ろうがお構い無しで
す」

鎮守府の門前では各メディアからデモ隊に切り替わり、メガホンで
訴えかけてくる。天候が悪くてもデモ隊は時雨と夕立の事を攻め続
けているようだ。必死に抑えている憲兵達が可哀想で仕方ない。

「気にするだけ時間の無駄だ。こちらは身の潔白を証明させるのみ。
証言もある程度は整った、あのジジイにも提出済み。明日の会議で目
に物見せてやる」

「大本营直属の憲兵隊がこの鎮守府の憲兵や整備士共の証言を取りま
くっているぞ？ 大丈夫なのか？」

「大丈夫だ。どう言おうがこの事件の被害者は時雨と夕立、捏造しよ
うものなら何かしらボロが出るはずだ。心配はいらんよ」

かといって出ない可能性もある。もし■少尉が本当に提督を追
い詰めたくば捏造などの手段は容易い事だろう。ボロが出ない為の
対策もしているはずだ。問題は誰が■少尉の味方になっているか。
もし■大将であれば少し手間がかかる。不安の種としてはそこし
かない。

「あともう一つは……」

「時雨夕立奪還計画に伏せ、別の計画を実行に移す時が来た」

別の計画の実行。この騒ぎに乗じて、提督はある計画を練り上げて
いた。まだ誰も考えた事の無い、かつとても危険な計画。バレれば
提督といえど命が危ない程だ。

「別の計画とは？」

「悪いがこれはお前にも伝える事は出来ない。俺の命を賭けた計画

だ、後は……本人次第だな」

「……」

瑞鶴が雨に濡れる窓を複雑そうに見つめている。事件の事もあつて訓練は一時中止、哨戒任務は別の艦娘が行動中。何もする事が無い瑞鶴は途方に暮れていた。無理もない、何故なら提督に最重要な任務を与えられたからだ。

『もう一度資料室に侵入するの?』

『そうだ。あまり言いたくはないが今の状況はかなり好都合になっている。会議の際に全職員は待機、廊下には誰もいない』

『監視カメラはどうするの?』

『臯月達がやったように同じ作戦で実行する。また同じく資料室に侵入し、その南京錠で鎖された黒い箱を盗むんだ』

提督には鎖された黒い箱の事を伝えている。だがその箱の中身の事はまだ伝えていなかった。あまりにも幻想的過ぎる程、自分でも信じていいのか分からない。伝えるべきなのか瑞鶴はその事も悩んでいた。

「はあ……」

「どうしたの瑞鶴?」

「翔鶴姉! いや、少し提督に哨戒任務で旗艦に選ばれちゃってさ、リーダーって……気が重いなあ」

思わず姉である翔鶴に誤魔化してしまった。瑞鶴は手をアタフタとさせて、驚き出す。翔鶴は悩む瑞鶴を抱きかかえ、頭をそつと撫でた。

「落ち込む事は無いわ瑞鶴。貴方は立派な艦娘じゃない。何も恐れる事は無いわ」

「うゝ翔鶴姉えゝ、ごめんゝ」

「あらあら甘えちゃって、甘えん坊なんだから……本当に」

翔鶴が悲しげな表情を浮かべ、言葉を漏らす。瑞鶴は気にせず翔鶴の胸にうづくまっした。何度も顔を擦り付け、翔鶴に限界まで抱き締

められる。

——講堂内。

「今提督は時雨達を取り返そうと必死になっている。なら私達は出来るだけの事をするまでだ。邪魔になるような事はしてはいけない」

艦娘達との会話スペースとして新たに設置された講堂では暇を持って余した艦娘達が話していた。そこでは長門が必死に呼び掛けている。天龍や加賀が長門の意見に同調した。

「この鎮守府を任されたようなモンだからな。さつきから外の連中がうるさいが一々気にしてはいらねえ」

「同感です。提督が本気なら私達も関わってはいけないのは事実。鎮守府襲撃の際に身に染みて分かったはずよ。それに提督が気にするなど広めてるわ」

「ですがあの司令官が本気とは……どういった感じなのでしょう……？」

浜風達がふと疑問に思った事を問い掛けた。浜風達は鎮守府襲撃以降に着任し、提督の事についてはよく知らない。

「まあ……誰もが敵に回したくないって思うだろうな」

「私達がどんな策で立ち向かおうとも勝てるビジョンはない。ありとあらゆる手段で叩き潰しに来るからね」

「現に■■達もかつてないほど手こずってるからね」

■■達。

差別している側の艦娘達の事だろうか。確かに■■達からは動きは全く見られない。手も足も出せないのか、それとも何か企んでいるのか。いずれにせよ摩耶に言われた様に警戒しなくてはならない。艦娘同士で蔑むなど言語道断だ。

「一体何者なんでしょうか……」

「全てが晴れたら過去を教えると言われたが……いまいち想像がつかないな」

「元深海棲艦だったりして!？」

「いやそりゃ無い思うんじゃないけど」

浜風達が提督の話で盛り上がる。

一方で最上と鈴谷と熊野は雨に濡れた窓を眺めていた。

「それにしても……雨、やまないね」

「どんよりって感じ」

「梅雨の季節ですし、仕方ありませんわ」

その雨はまるで時雨と夕立の心境を表しているようだった。とても冷たく、寂しい雨。雨粒一つ一つが涙のように降り注ぎ、時に吹く風が雨を複雑にしていく。水たまりに映る鼠色の空が雨粒で大きく歪み、言葉に出来ない感情を訴える。一条の光さえ通す事は許されず、綺麗だったはずの海は黒く濁っていた。

今時雨と夕立は遠く離れた大本営で何をしているのだろうか。冤罪を晴らす為、尋問官と戦っている事だろう。とはいえ時雨と夕立は事件の犯人に貶められた被害者だ。必ず事件は暴かれるだろう。

「気になったのですが……時雨さんと夕立さんは過去に何かあったんですか？」

隣の席に座っていた秋月四姉妹が話しかけてきた。同じ駆逐艦である時雨と夕立について興味を持ったらしい。質問に対して、最上達是不穏な表情で口を開いた。

「時雨と夕立……あの二人はずっと救われなかった」

「えっ……」

今でもあの光景を思い出す。集積地棲姫討伐の為に出撃していたあの光景、あの瞬間を。

『最上、急いで時雨達を連れて帰還しなさい……私が時間を稼ぐから……!!』

『ちよ、何言ってるの山城!? そんな身体で戦える訳ないじゃんか!!
いくらなんでも時雨が許——』『もう二度とこの娘達に寂しい思いはさせる訳にはいかないのよ!! それも貴方なら分かっている事でしよう!!』

『ッ……!! でも……ッ……絶対に帰ってきてよ!!』

『……当然よ……!』

その後、山城が帰還する事は無く、集積地棲姫討伐は失敗に終わった。旗艦山城を失い、時雨と夕立と扶桑は大破状態、川内と最上が中破状態に。その他も大ダメージを食らい、前任の怒りを買ってしまった。

「……二人は■■先生の治療で起き上がるけど、時雨と扶桑は山城の喪失を受け付けられずに精神が崩壊。夕立は部屋に閉じこもったけど前任が怒っちゃって、二人は拷問を受ける事になるんだけど……その後も酷くて……」

「その後……」

「……あまりにも多過ぎて数え切れないんだ。本当に自分が情過ぎて見てられないよ。あの時自分が身代わりになれば少しは救えたのになって思うと凄く、恥ずかしい」

最上が言葉を伏せて、自身の手を握る。時雨がどういう事を受けてきたのか、それを察した秋月達は思わず身体を震わせた。言わなくても時雨や夕立が如何に凄惨な目にあつたのか、想像するだけでも恐ろしい。心の抛り所を喪失し、自身を弄ばれたのだから。

「そうなんですネ……」

「でも何であんなに提督や灰に親しいんだ？」

「親しいんじゃないよ。演技で誤魔化して無理に付き合ってたんだけど。元々提督や灰さんには何の感情も来ていないし、信じてもない。それを私達にも、ましてや姉である私にも隠して演技で誤魔化してる。まあ私や提督にはバレてるけどね」

白露が最上の隣に座り、扶桑が向かい席に座る。時雨と夕立の本性は既に知っていたようだ。流石時雨と夕立の姉をしているだけはある。だがその分だけ辛い思いもしているだろう。

「白露さん……扶桑さん……！」

「時雨達は普段は普通の自分を見せてるけど、本当は人間なんて大嫌いで一人でいるのが好きだったりするの……もう元から変わってしまったわ……」

時雨と夕立の人格は元から変わってしまった。白露や扶桑、他の艦娘や人間達の前では決して笑顔を絶やささない。

しかし一人となれば時雨と夕立は感情をすぐに殺し、まるで動力を失った機械のように佇む。目に光は無く、ひたすらに自傷行為を勤しんでいた。何度か白露も止めた事はあるが、目は笑っておらず、時々舌打ちが聞こえた事がある。

「白露さんは大変そうですね」

「そうだね、一番に苦勞してるよ。だからいつかは……」

報われてほしい。白露と扶桑は心からそう願っている。

83. 口喧嘩も程々に

『■■■■鎮守府の対応に今でも抗議の声が続いています。海軍ではこの事件を——』

「Admiral、気を付けてください」

「分かっている。完全にぶちのめしてやるから待っておけ」

「準備整いました。今すぐ行けます！」

「よし、行くぞ」

提督、摩耶、瑞鶴、灰色、白露を連れ、鎮守府を出ていく。だが門前にはデモ隊が待ち構えている。簡単に抜け出す事は出来ない。そこで提督は早朝から船を出し、摩耶達に護衛してもらおう作戦を考えた。岸边には会議に言った際の運転手が船に乗って待つてくれている。

「お待ちしております」

「時間は少ない。今すぐ行くぞ」

「かしこまりました」

予め停船許可を貰っている港に着き、マイクロバスで大本営まで移動する。朝からというものの、抗議隊が大本営の門前に集まり、時雨と夕立を批判していた。事件の現場である荒くれ鎮守府の変装した提督と灰色はそれを前に立っている。

「ここが大本営ですか……」

「別に緊張する事じゃないだろう。ただの会議だ」

「ただの会議じゃありませんよ！ 分かっているんですか!?!」

「こんな連中に何も権限は無い」

灰色は緊張しているのか、祈るように指を組んでいる。足を踏みながら、深呼吸をした。

「……何やってんだ」

「だって大本営の会議なんて初めてなんで……」

「ただ中年のおっさん共がテーブルを囲んで暇潰しに戦争を麻雀感覚でやっている老人ホームのような場所だ。蹴散らすぞ」

提督が抗議隊の中に押し入り、大本営の中へ入ろうとする。

しかし――、

「右手と右足一緒に出てますよ!!」

――大本営大会議室

「それでは■■■■鎮守府暴行事件について、白露型駆逐艦二番艦時雨、白露型駆逐艦四番艦夕立の処分を決めたいと思います」

長く大きい机を各軍人達が座って囲み、会議室奥には元帥と■■■大将が座り、扉の手前には証人台が設置されている。事前に尋問官が供述させた内容と■■■■鎮守府の憲兵や整備士達の証言がまとめられた書類が置いてあった。

「では先ず■■■■鎮守府最高責任者、白君から」

司会役は元帥が自ら務め、会議を進めていく。事件の発端として先に提督が指名された。

「六月二十二日午後十七時未明、■■■■鎮守府第四倉庫にて時雨と夕立が憲兵や整備士達に暴行を加えたとして拘束されました。そして暴行を加えた場面としてこの写真がSNS、またツイッターに拡散され、大ニュースとして全国に広まりました。ですが私としては少し不可解な事があるのです」

プリントされた写真を表に出し、説明する提督。勿論提督は時雨と夕立が被害者である事を知っている。

だがそれは提督と灰色しか知らない。事件の真相を暴く為に細かく教える必要があるのだ。

「この写真……どうやって撮ったのか。些か疑問に思います。他の方々はどう思われますか?」

「……確かに少しおかしいな」

「まあ不自然に見えるな」

「そう思うのが当然でしょう。そもそもこの写真にはいくつか不自然

な点があるのです!!」

プロジェクトに映された写真。

不自然な点を順に説明した。

「二つ目、何故時雨に手錠と猿轡がされているのか！ 二つ目、何故二人共カメラ目線では無いのか！ 三つ目、アングルが遠くから見たような俯瞰な図なのかア！」

各軍人達が目を開かせる。確かに提督の言っている事は本当だ。暴行事件のほずが何故時雨は拘束器具で拘束されている。疑問に思う軍人が出てきた。

「そこで我々は考えたのです！ これは違うのではないのかと」

「何が違うのかな？」

「これはあくまでも仮説ではありますが、これは時雨と夕立を貶めるように緻密に計画された事件だと私は推測しました」

「何故？」

仮説だと予防線を張り、確実な事ではないと言い張る。もし決めなければ疑いはしてくれても信じてはくれない。事細かに教える必要がある。

「憲兵隊の方達は以前に■■■■鎮守府の憲兵と整備士から事件発生時の状況を聞いています。しかしそこに不自然な証言がございました。事前に配られた資料にも記されているかと思えます」

案の定憲兵や整備士達の証言はどれもこちらに有利な事ばかりだった。暴行とは程遠い、事件発生前の状況が良く伝えられている。また時雨や夕立の供述も全てが本当だ。これを見て疑わない者はいないだろう。

「どれも証言が事件とはあまり関係無くないか？ 二人が憲兵や整備士を殴ったんだろ？ 予め計画された事なんじゃないのか？」

「■■■中佐、そう言うのであればはこちらをご覧ください。■■■■鎮守府所属整備士第三班■■■■、三十九歳。事件発生前に夕立が紙を持ちながら工廠を覗き、そのまま去るのを見た。この証言を見て何か思いませんか？」

「何をだ」

「もし時雨と夕立が本当に第四倉庫で暴行する計画を建てたと言うならば、工廠にはよらずそのまま時雨がいる第四倉庫へ向かうはずです。ですが証言では事件発生前に夕立は一度工廠へ来ている。夕立の証言からも時雨を探す為に工廠に行った事が書かれています。では何故時雨を探していたのか、そこで司令官候補生である灰君に言っていたかもしれません」

提督の指示通りに灰色は立ち上がる。軍人達が厳しい目で見てくるのは緊張モノだ。心臓の鼓動音が直に聞こえてくる、手や口の震えが止まらない。だが時雨と夕立の身の潔白を証明する為には越えなければいけない壁。

「私は■■■■鎮守府配属司令官候補生、灰と申します。よろしくお願います。私は事件発生前に夕立と遭遇し、時雨に遠征任務の書類を届けてもらいたく夕立に届け役を任せました。これが実際の遠征任務の書類です」

透明な袋に包まれたのは夕立が実際に届けた遠征任務の書類。夕立の握力でくしゃくしゃになり、ゴミのように見えるが立派な証拠だ。もし本当に計画していたのなら灰色が夕立に頼んだ事は計画上では二人にとってトラブルの一因になる。

「書類につけられた指紋も■■■■鎮守府の夕立と一致しております。よって夕立は時雨を探しに行っただけであり、予め暴行する計画を建てたとは考えにくいと思われれます」

提督が自ら立ち上がり、証言を元に推測をする。軍人達を疑問に思わせる為あらゆる手段を投じる。疑問は深めれば深まる程、怪しくなるものだ。

「それは時雨も同じ、という事なのかしら?」

女性軍人が問い掛ける。

畏にわざわざ引つかかってくれとありがたい。

「恐らく……同じく■■■■鎮守府所属整備士第一班■■■■、二十七歳。時雨が同じ第一班の■■■■と話している所を見た。この時点で時雨は第四倉庫へ故意に向かったのではなく、■■■■に誘われたという可能性も出てきます。よって私達は■■■■の証人尋問を要求し

ます」

時雨が工廠を訪ねた際に第四倉庫にいたと言った整備士。この人物が鍵になっている。事件を引き起こした実行犯だ。提督が一番探している人物でもある。

「■■■■という人物はどこへ？」

「知りません。だって事件発生の日の夜に逃げたから」

「逃げた？ 何故？」

「この男の履歴書は全てが嘘でした。名前、歳、住所、経歴、全てにおいて海軍の名簿には別人の物として書かれていたのです。■■■■■■という名前も別人であり、私としては警察の協力で指名手配をしてもraithたいと思っております」

不幸中の幸いというべきか、監視カメラには実行犯の顔が映されていた。履歴書の顔写真も入手し、顔の特定は出来ている。後は警察でも探偵でも探せばこちらの勝利に近づく。

「確かに……うーん、警察にも頼もうかなー……」

「いやこの問題は我々だけで解決出来ません。わざわざ警察の協力などいりませんよ元帥殿」

「我々だけで探すと？ ■■■大将」

「その方が良いだろう」

「搜索するなら我々より警察や探偵にでも調べれば見つけれられる時間は早くなります。何故外部の協力を拒むのですか？」

提督と■■■大将と唾み合う。この二人は数年近く口論で争い続けている。中将と大将という位から権力では■■■大将が勝っているが、提督は一度も口論で負けた事が無い。だがしかし提督と口論で張れる唯一の人物が■■■大将だけであり、提督が唯一認めている好敵手とも呼べる存在だ。

「機密情報漏洩を防ぐ為だ」

「ただの艦娘が起こした事件に何か重要な情報でも？」

「それは君が一番知っているんじゃないか？」

「その通り。ですが私には関係無いのでバレようがどうとも思いませんが？」

「自身の地位が地に陥っても構わないと？」

「私より地下の奥深くまで墜ちるのは隠し続けた貴方達では？」

会議室内の空気がピリピリとする。二人の口論に他の軍人達は焦っていた。何を話しているかは分からないが、この二人に関わってはいけない事ぐらいは誰にでも理解出来る。提督の隣にいる灰色は唾を飲んで緊張していた。

「……この場で関係無い事を争っても意味が無い。直接本人に聞いた方が早いだろう」

「その意見は私も同感です。さつきと聞いた方が早い」

■ 大将が話を切り替え、時雨の証人尋問を進めた。提督は再び座り、証人尋問に同意する。二人の口論が終わったのか他の軍人達は安堵した。灰色も胸を抑えて深く呼吸している。

■ 鎮守府所属白露型駆逐艦二番艦、時雨。前へ」

扉から手錠と足枷をされた時雨が入室。時雨の姿を見て提督と灰色は少し違和感を感じた。何故か身体の至る所に包帯が巻かれ、あまり元気がない。提督は最悪の事態を想定しつつも、有り得ないと否定しながら椅子から立ち上がった。

「白中将、質問を」

「時雨、お前は明石に呼ばれ工廠へ向かった。そしてそこで会った■ ■ ■に第四倉庫にいると誘導された。そこで質問だが、夕立と共に暴行する計画を建てた訳では無いんだよね？」

「いいえ」

「そうだよな、計画なんて建てて……っ？」

時雨の言葉に一瞬理解出来なかった提督。

普通は違いますと答えるはずが、全く別の言葉に聞こえた。

「……いいえ？」

「いいえ、僕達が計画しました」

「……」

「質問を続けて白君」

本当の事件とは真反対の事を答える時雨。真逆の答えに提督は身体が固まった。理解出来ずに言葉も失い、絶句している。

「……お前が計画したというのか？」

「はい」

「夕立と考えたのか？ 夕立と一緒に？ 夕立と自分の意思で？」

何故だ。

何故そう答えた。

本当の事件なら時雨は被害者なはずだ。トラウマを抱えているのにも関わらず汚い欲に塗れた連中に襲われた被害者だ。まさか本当に計画していたのか。だとしたら事件発生時の青葉が言った事の信用性は失う事になる。まさか本当に最悪の事態が既に発生していたというのか。

「先程から質問が重複しています、元帥殿」

「白君は次の質問を」

■ 大將が急かすように質問する事を進めてくる。提督は状況に理解出来ずに立ち尽くしていた。

「僕と夕立で暴行する計画を建てまし——」「まだ何も質問していないぞ、何を答えてる!!」

時雨が勝手に証言するも提督に怒鳴られ止められる。場の空気が一気に変わってしまった。今まで疑っていた軍人達が徐々に傾きつつある。

「質問を続けて白君」

「……」

「質問を続けるんだ」

「……無いようですので私から」

今まで以上に提督が慌てている。他の軍人達はその姿を初めて目に収めた。沈黙し続ける提督に ■ 大將が自ら立ち上がった。質問をするのが ■ 大將に切り替わり、書類を読み上げながら時雨に問い掛けた。

「間違いがあるのなら教えてもらいたい。 ■ 鎮守府所属白露型駆逐艦二番艦、時雨。お前は ■ 鎮守府に憲兵と整備士が配属された時に過去の事から嫌悪感を感じていた。いつしかお前は近付きたくない一心で人間達を遠ざけていた」

「何だこれは」

「そして時間が過ぎていくと同時にストレスが溜まり、発散する場所を失った」

「何の罠だ」

「白君、黙りなさい」

元帥に注意される。

だが提督は黙っていられない。

「お前はその事に苛まれ、人間達に深く憎悪を持ち始め、ストレス発散の為に憲兵や整備士達の暴行を計画。司令官候補生から口実を取り、六月二十二日——」

「何の茶番なんだこれは!!」
「黙りなさい!! 私に質問している……六月二十二日午後十七時未明、お前は第四倉庫に人を集め、共に来た夕立と暴行。間違いないかな?」

提督が ■■ 大将の質問を遮って大声で叫ぶ。しかし ■■ 大将が怒鳴り、提督を差し止める。互いに睨み合いながらも ■■ 大将が質問を続けた。

「……はい」

「暴行しようと思つて計画したのか?」

「はい……そうです……」

「……この証言により、私は時雨と夕立を旧式解体処分を求めます。以上」

仮に被疑者である時雨の証言はどんな証拠や証言よりも随一の有利性を持つ。証言次第で処分の方向性は一気に傾くのだ。

時雨は自ら夕立と計画したと証言。この言葉により、この事件の犯人は時雨と夕立である事が決まってしまった。他の軍人達もざわめき、ひそひそ話が始まる。

「な……何を言つてるんだ、時雨……そもそも君達は被害者じゃないか!!」

「候補生は静かに」

「元帥殿、今の証言は嘘です!! 元々この事件は時雨が襲われた事件であり、夕立は時雨を助けたんですよ!!」

「落ち着け灰」

灰色が居ても立ってもいられずに立ち上がり、事件の真相を訴えた。候補生という身分ながら元帥にも分かってもらえようように慌て話す。提督は焦る灰色を落ち着かせる。しかし灰色は思うままに時雨と夕立の無実を伝え続けた。

だが――、

「でしたら資料にある証言一覧の裏をご覧ください。そうとは思えない証言がいくつもございます」

裏には嘘の証言が書かれていた。しかもどの証言した者が存在しない憲兵や整備士の名前ばかり。これは完全に捏造された物だ。

「……で、ですが彼女達は無罪です!!」
■少尉に貶められ、濡れ衣を着せられただけなんです!! これは冤罪です!!」

「灰」

「それこそが冤罪とも言えるのではないかな? 仮に■少尉が貶めたとして動機が無い。それにどうやってやったかすら分からない。それを言うなら慌ててる君も怪しく見えるぞ?」

「そうだそうだ。一端の候補生が出しやばるなんて怪し過ぎる」

■大將が灰色を脅すように睨む。他の軍人達も呆れ顔で灰色を見ていた。■少尉はニヤニヤしながら静かに笑っている。一気に灰色を怪しむようになり始めた。

「っ……!! 私は――」「すみません、私の躰がなってなかったようだ。後で厳しく言っておきますので今の御無礼をどうかお許しいただきたい」

「まあ仕方ない。海軍一の減らず口となれば育て方も苦勞するだろうよ」

「いやはや困りましたねえ」

暴走する灰色の頭を鷲掴みにし、テーブルに叩き付ける。これ以上暴れたら灰色にも危険が及ぶ。少々強引なやり方ではあるが謝る他ない。それを見て■少尉が提督や灰色を貶していく。提督は流暢に言葉を返し、隠したスマホでトラブル発生と瑞鳳に知らせ、瑞鶴の作戦を中止させた。

「後日に処分を言い渡す。白君と候補生は大本営に来るように」

「分かりました」

「分かり……ました……」

会議が終わり、後日に処分が言い渡される事になった。提督と灰色は黙ったまま会議室を去り、荒くれ鎮守府へ帰る。摩耶と白露と瑞鶴は何も言わずに提督達の後を追った。

やがて荒くれ鎮守府に帰還し、結果が気になる艦娘達が集まるも提督は艦娘達を退ける。そのまま久しぶりに入る自分の部屋に閉じこもった。摩耶も提督の部屋に入り、ベッドの上に座る提督の隣に寄り添う。

「お疲れ様だ……提督」

「……すまん……摩耶」

「大丈夫、提督と灰は頑張ったよ」

摩耶が落ち込む提督を慰める。提督の頭を胸に寄せ、頭を優しく撫でた。

時雨と夕立を奪還する為の会議。

結果は時雨の裏切りにより、絶望的な終わりとなった。

84. 過去、現在、未来でさえも

会議から二日後、再び大本営を訪れた提督と灰色は元帥から時雨と夕立の処分を言い渡されていた。

「■■■■鎮守府所属白露型駆逐艦二番艦、時雨。また白露型駆逐艦四番艦、夕立。二人の処分は……」

「旧式解体に処す」

「なお処分の日には一週間後の七月二日とする。白君と候補生は――」

結果は分かり切っていた事だ。

被害者であるはずの時雨本人に裏切られ、嘘の証言が世間で本当の事となってしまい、無実の罪を着せられてしまった。時雨と夕立は人間に仇なした反势力的存在として語られ、大本営や荒くれ鎮守府の門前ではデモ隊が集まっている。この影響により各地の鎮守府に所属する時雨と夕立は反勢力のレッテルを貼られ、外出や出撃は一時不可能とされた。

また被害者として伝えられている憲兵や整備士達五人は病院にて治療を受けた後に釈放。各地の鎮守府へ異動となっている。

この事件は日本国民が持つ艦娘の考え方を根から変えてしまった。艦娘は兵器だと主張する者や人間だと主張する者。また時雨と夕立にだけ敵視する者や何かあったに違いないと弁護する者。その影響は政治家に及ぶまでに至った。

時雨と夕立の処分、自分達の処分を告げられた提督と灰色は荒くれ鎮守府に帰還。元気が無い二人に艦娘達は駆け寄る。

「提督……時雨と夕立は……」

「……後で伝える。訓練は再開して構わない。その後は自由にしたまえ……迷惑を掛けたな、すまなかった」

提督が無表情でその場を去った。灰色も軍帽で顔を隠し、提督の後を追う。二人の雰囲気から艦娘達は認めたくない事実を確信してしまった。

「集まったな」

提督が食堂に艦娘達を集める。提督のいつものものにやけ顔は見られず、真面目な表情をしていた。

「時雨と夕立は来週の七月二日に旧式解体処分となった。そして灰は危機管理不足として三ヶ月間の謹慎処分を受け、自宅にて謹慎する事になっている……質問は受け付けよう」

艦娘達の言いたげな表情を確認した提督は質問の時間を与えた。艦娘達は手も挙げずに知りたい事をそのまま声にする。

「何で時雨と夕立が旧式解体なんて……何とか止められなかったんですか!？」

「提督さんだったら蹴散らすんじゃないの!？」

「司令官!! もう一度話してみても如何ですか!? これはあまりにもおかしいです!!」

「納得のいく説明が欲しいわ」

「貴方と私達はこれからどうするのですか?」

艦娘達の怒涛の質問ラッシュに提督は指を鳴らして黙らせる。艦娘達は一斉に口を閉じ、提督を見つめた。

「順に答えよう。何故止められなかったのか、時雨本人が裏切ったからだ。時雨の証人尋問をするまでは普通に勝っていた。だが時雨本人が自ら暴行したと罪を認めたんだ、これ以上は庇いようがない。そしてもう一度話し合えないかだが、もう元帥が下した決定事項だ。何かあれば分らんが、変える事は出来ない。これから君達は何をするか、いつも通り訓練と遠征任務をこなしていればいい。他は?」

聞こえた限りの質問に答える提督。今まで過去に起こった事を正直に話した。被害者であるはずの時雨が自ら計画したと発言した事、処分は既に決定された事。希望の光すら無い状況に艦娘達は絶望感に打ちひしがれた。

「……以上だ。訓練を始めて良しとする」

提督は無言で食堂を去る。艦娘達は認めたくない結果が現実になつてしまい、頭の整理が追いついていない。時雨と夕立がいなくなる。大切な仲間が無実の罪で死んでしまうなど納得がいかなかった。が、提督からは時雨本人がその証言したという。そんな事など到底信じられるはずが無かった。それこそ二人の無実を証明した青葉は信じられずに床に座った。

「そんな……」

「もう無理なのかしら……」

「提督のあんな姿、初めて見た……」

——執務室

「三ヶ月間、静かになるな。 ■■中将……いや ■■少佐」

「……まあな」

摩耶に話し掛けられ、提督は机に足を乗せる。天井を見つめ、軍帽で顔を隠した。一番最悪な結果を出してしまった提督は階級は中將から少佐に降格、何故か謹慎処分は受けなかった。それでも活気を失い、自信喪失。仕事をする気力も無かった。

そしてつい先週まで騒がしかった執務室に静寂が訪れる。灰色がいた仮の机は放置され、椅子はガラ空きだ。

「今まで騒がしかったのが静かになって清々している。実に心地良い気分だ」

「そうだな」

灰色は自身の部屋で荷造りを済ませ、司令本部を出ていった。鎮守府の門前にはデモ隊がいる為、通る事は出来ない。裏にある獣道を通る事にした。

だが行く前に白露に止められる。白露の後ろには今まで慕っていた艦娘達もいた。

「ごめんね……皆。力不足で」

「本当に行っちゃうの？」

「これも決まりなんだ。三ヶ月の間は謹慎処分を受けているからね」

艦娘達と握手と抱擁を交わし、別れの言葉を告げる。仕方の無い事だ、自分は力不足だった。二人の駆逐艦すら救えない駄目な男。ヒーローを目指すはずがその夢は折れかかっていた。

「申し訳ありません。行かれる前に渡しておきたい物が」
「何ですか？」

憲兵隊長が手に持つ物を灰色に渡す。中身に気付いた灰色はその物を握った。

「また復帰されるのをお待ちしております」

「ありがとうございます。では」

灰色は裏の獣道を通り、荒くれ鎮守府から身を消した。鎮守府はかつての姿に戻り、提督一人と大勢の艦娘達。憲兵や整備士達が懸命に働いている。艦娘達は訓練など出来るはずが無く、講堂で空気を重くしていた。

初めて提督がしくじったこの件を受け、艦娘達はどう感じ取っただろうか。今まで全て成功していたはずが、時雨の裏切りにより失敗。毎日のデモ隊の喚声も普段は気に入らないはずがうるさく聞こえる。降り続ける雨は更に激しさを増していた。

「通常通りに戻れる訳ねえだろ……」

提督と同じく艦娘達も活気を失っていた。時雨と夕立の消失という到底受け入れ難い現実。報われるべきなのは二人のはずなのにそれすら運命は許してはくれない。例え訓練をしようとしても、あの二人の事で集中は出来ないだろう。

「どうぞー」

「失礼します」

ドアをノックされ、入る事を許可する。執務室に白露が入ってきた。来た理由は大体察知している。恨まれても仕方ない事をした。どうしようもない事だ。

「どうした白露。俺を殺しに来たか？」

「いやそんなんじゃないよ。でも……もう一度話し合えないのかな……？」

時雨と夕立の処分をどうにか止められないかと提案する白露。意

外にも提督に向けての殺意は無かった。むしろ時雨と夕立を助けた
い一心でいる。だが提督は非情にも目の前の現実を叩きつけた。

「無理だ。いい加減現実を見ろ、二人は戻ってこない」

「二度と……駄目なの……？」

「駄目だ。全てが潰された」

「もう時雨と夕立には会えないの……？」

白露の瞼に涙が少しずつ溜まっていく。もう二人に会えないのが
怖くて、そんな事など認めたくなかった。何であの二人が巻き込まれ
た、何であんな酷い目に合わなければいけないのか。過酷な運命に神
を呪いたい程だった。だからといって自分にそんな力など無い。む
しろ非力で脆弱な存在だ。

だからこそ白露は――、

「……お願いします……！ またもう一度……助けてください……
！」

「白露……」

上に立つ者に救う事を土下座して懇願するしか方法は無かった。
たった一人の艦娘の行動で運命が変わる可能性は低い。しかし可能
性は低くともその低い可能性に賭ける他は無い。精一杯の精神で提
督に懇願した。

「時雨と夕立は今まで嫌な過去を背負って生きていました……それな
のに今度は無実の罪を着せられて解体されちゃうなんて……いくら
なんでも可哀想過ぎます……」

「そうだろうな」

提督は淡白に言葉を返す。確かに時雨と夕立の過去と今回の事を
合わせば二人の人生は凄惨以上の言葉は無い程だ。前任に操られ、深
海棲艦と戦い、死を覚悟し続ける日々。大切な人を失い、男達に何十
回も弄ばれた挙句、解放されたと思えば事件に巻き込まれ、無実の罪
を着せられて解体され死亡。過去や今、未来でさえも二人を不幸の地
獄から離すつもりは毛頭無いらしい。最早死んだ方がマシとも思え
るだろう。

「お願いします……私をどうしたって構いません……時雨と夕立を助

けてください……!!」

「もう無理なんだ。いい加減諦めてくれ」

「お願いします……!!」

何回断れようとも地べたに縋り付き、額を床に擦り付ける。瞼に溜まる涙が床に濡れた。

とても愚かだ。

無力な自分に出来る事が土下座し、嘆願する事のみ。でもそれ以外に方法は無かった。問題に巻き込まれた妹を持つ姉として、最後の神頼み。自分はどうなっても構わない。妹達の為なら死んでも構わない。そう思つて提督に縋り付いた。

「……少し一人にさせてくれ。摩耶もすまないが白露を連れ出して何時間かここには入つてこないでほしい」

「分かった」

提督に指示され、摩耶は土下座する白露を抱える。白露は摩耶の腕を振りほどこうとするも簡単には抜け出せなかった。

「提督!! 何でもしますから、お願いします!! 時雨と夕立にこれ以上悲しい目には会わせたくないんです!! だから、だからア!!」

ドアが閉まり、執務室に提督だけが残る。雨はより激しくなり、窓が濡れる程に降り続けた。ポト、ポト、と雨粒が窓に落ちる音が聞こえる。

「……どうしようも無理なんだ。肝心の本人達が、そう望んでんだから」

提督は軍帽で顔を隠したまま、呟いた。

——大本営

「行かせてください!!」

「駄目だ!!」

休憩室である男女が騒いでいた。ドアを出ようとする女性を男性が止めに入る。女性は興奮状態で怒りを燃やしていた。

「行かせてください先輩!! 私はあんなのを見て居ても立ってもいら

れません!!」

「だからといって計画も無しに勝手に行動するな!! 私だってこれを見過ごす事は出来ない! だがこれ以上触れればお前だって命が危ないんだぞ!!」

「そんな事などどうでもいいです!! 行かせてください!!」
「ッ!!」

時雨と夕立の担当をしていた尋問官だ。どうしても落ち着かない後輩を先輩は両頬を叩き、一旦冷静にさせる。

「一回落ち着くんだ。私はまだ行くなどは言っていない」

「ですが……」

「もう一回確認しよう。それでお前がどうしても助けたいって言うんだったら、手を貸してやる」

「……分かりました」

それは大本営所属憲兵隊長 ■■■大佐に渡された録音テープ。中身を聴いた後輩は激昂し、 ■■■少尉を殴ろうとしていた。

しかし中身が本当なのか先輩は疑問に思っている。そこでもう一度聞き確かめ、信じるに値するかを決める事にした。

「やあやあ、荒くれ鎮守府の時雨君。私は駿河鎮守府の ■■■少尉だ」

「お前が……仕掛けたのか……?」

「ん、何を?」

「お前が…… 私達を貶めたのかって聞いてるんだ!!」

時雨の声に怒りを感じている。自分の時に聞いた穏やかな口調とは程遠い。明らかに ■■■少尉の事を疑っている。時雨の供述はもしかして本当なのかもしれない。と思っていた突然、殴る音が聞こえた。

『黙れよ兵器如きが人間様に楯突いてんじゃねー!! お前は兵器なんかじゃない、人間様に暴行した鉄屑だ! 鉄屑は鉄屑らしく地べたを嘗めてりや良いんだよ!!』

再度殴る音が聞こえ、椅子から転げ落ちる音が割れて響く。状況から察するに時雨は殴られて椅子から転落したのだろう。まるで尋問とは思えない。これではまるで拷問だ。

『ほら人間様が直々にやってあげてるんだ、ありがたく思え。鉄屑』
『黙れ……!! 僕達は——』『鉄屑なんだよ!! 人間様が! いないと
! 何も! 出来ない! 鉄屑!! 分かる? 鉄屑なの!!』
何回も踏みつけられ、床に叩きつけられる音が聞こえる。時々聞こえるグシャツという音が自身の身体を震わせた。しかも全く止めようともしない。

『お前は! 鉄屑だ!! 鉄屑は! 部屋の! 角で!! 無様に! いれば! いいんだよ!!』

ようやく踏みつけが終わり、時雨を罵る■少尉。残酷な拷問に思わず手を握りしめる。

『分かりましたか? 鉄屑君?』

『お前が……仕掛けた……んだ……!』

『まだ言うか』

何回踏みつけられようとも時雨は挫けてはいなかった。必死な声

で■少尉に歯向かう。だが喋るのがやつのように聞こえた。

『聞いたんだ……! 憲兵の一人が……少尉って言ってたんだよ!!』

『……チツ。少尉なんてどこら辺にもいるだろ。俺が襲わせたなんて

証拠は無いんだバーカ』

『僕はまだ……襲われたなんて一言も、言っていない!!』

『ツ!? つ……ここのクソガキがぁー!!』

苛立った■少尉は時雨を息が続く限り暴行し続けている。時々聞こえる怯み声など気にせず殴る蹴るの暴行をしているように聞こえた。

『■少尉、それ以上はどうかと』

『はあ……はあ……後で傷を手当しておけ。あとさっきの事は黙つとけよ、お前もあの白とかいうクソ野郎みたいに落としてもいいんだからな……! それにまだ言わなきゃいけない事があるんだツ!』

『う……あ……あ……あ……あ……あ……あ……!!』

時雨が初めて叫んだ。

何かされたのか喚声が割れて響く。

『聞こえてるかー? 鉄屑くーん?』

『ッ……グ……ッ……!!』

『証人尋問の時に前達計画したと言え。もし言えばお前だけは死んだ事にしてこっちで預かってやる』

『ッ……!!?』

『どうだ?』

■少尉は夕立を生贄にして時雨を助けようと交換条件を言い出した。鼻からこれが狙いなのかもしれない。

『……嫌だッ……!! 夕立を置いて……お前の所に、行くぐらいなら……!! 死んでやる!!』

『……まあまだ時間はある。たっぷり可愛がってやろうじゃないかッ!!』

録音はここで終了し、この事件の真相の片鱗を知ってしまった。後輩は既に感情を抑え切れずにいる。

「……先輩……!」

「分かってる……だが冷静を保つんだ」

「ですが……っ!?!」

先輩に物言いしようとしたがある物を差し出された。それは早退届と有給届の書類。

「私から訳は言っておく。お前はこのテープを■■■■鎮守府の白中將に渡すんだ」

「先輩……!!」

「これ限りだぞ。手を尽くすのは」

「……ありがとうございます!!」

書類と録音テープを持って、後輩は急いで休憩室を出ていく。休憩室に残された先輩は隣の喫煙室に向かい、煙草を吸った。長年尋問官を務めていた先輩は思う。

「……私も、回罪だな。なら……」

煙草の吸殻を潰し、箱ごとゴミ箱に捨て去る。先輩が向かったのは艦娘専用の留置所。多くの憲兵によって厳重に警備されている。一度憲兵に持ち物検査をされ、誓約書を書かされた。

するとあの録音テープを回した■■■■大佐と相見える。

「むむ、尋問官の方でしたか。これは失礼しました」

「いえいえ大丈夫ですよ。少し時雨と夕立の様子を見に來ただけです」

「むむむ、そうですか。では護衛は……必要ありませんでしたな」

「はい。お願いします」

牢屋に挟まれた廊下に靴音が響き渡る。留置所に入って手前の右側の牢屋に時雨と夕立は收容されていた。噂で聞けば深海棲艦のスパイとされた榛名は更に奥にいるらしい。

「……」

「……」

「時雨と……夕立だね？」

二人は声を掛けられても、先輩の事を見向きもせず床を見つめている。まるで電力を失ったロボットのよう静止し続けていた。先輩は無視した二人に気にせず話し掛ける。

「君達は自身の事をどう思っているんだい？」

「鉄屑」

あの■少尉にどんな目に合わされたかはよく分からない。

だが洗脳のように自身が鉄屑だと思ふ事を刷り込まれたようだ。

二人は息を合わせるように話を続ける。

「私達はどうしようもない鉄屑です」

「僕達は解体されるべき存在なんです」

「……そっか……でもどこかで生きていたい、とか思ったりしてないかい？」

先輩は俯く二人に気楽に話し掛ける。二人が自身の事をどう思うとも個人の勝手。だが先輩はそれでも知りたい事がいくつあった。

「無いです。鉄屑は生きるのではなく使われる為にいます」

「だから使えなくなったら解体されるのが当然なのです」

「でも痛いでしょう？」

「……」

言葉が詰まり、身体を跳ねらせる。時雨と夕立の身体はかなりボロボロで包帯で傷は隠されており、見るにも堪えない痛ましい姿になっ

ていた。

「鉄屑なのに痛覚があるっておかしくないかい？」

「何を言っているのか分からない」

「言葉の意味が理解できない」

「今そうやって分からない事だと思ってるのもおかしくないかい？」

君達は……本当に鉄屑なのかな？」

もし二人が自身を鉄屑だというなら何かを考えようとするは存在しない。所詮は詭弁でしかない事だ。先輩にとってはこれ以上何も言う事は無い。

「私達は……」

「僕達は……」

「一体何？」

「……私には分からないな。それは一番、君達が分かっている事なんじゃないかな。あ、でも私は人間だと思ってるよ。私達のように感情や心があるからね。それに……とつても可愛いじゃないか」

時雨と夕立を見て、先輩は二人を褒める。これ程可愛げがあり、愛らしく思える鉄屑がいるだろうか。こんなにも可愛げな少女が深海棲艦と戦い、日本を守ってくれている。非力な人間として申し訳ない気持ちだった。過去に日本を守ってくれた英雄達が、今ではどうしようもない人間達に上手く良い様に操られる奴隷にしか見えない。

「……ごめんね。どうしてもサボりたくてここに来ちゃった。君達の穏やかな来世を祈るよ」

85. 後悔の水に打ち流されても

「着いた……」

灰色は一度大阪駅のカプセルホテルに宿泊。夜を過ごした後に昼の新幹線で静岡駅に到着し、用宗駅まで電車で移動する。灰色の実家は駿河にあり、海を見渡せる場所に家があった。

「ただいま……と言っても今は仕事なか」

親は仕事で家には誰もいない。久しく家に帰った灰色は自分の部屋に戻り、ベッドに転がる。懐かしい匂いに眠くなりそうだったが灰色は――、

「……よしー」

『■■■■鎮守府暴行事件の容疑を認めた白露型駆逐艦二番艦時雨、その四番艦夕立は先日開かれた日本海軍の会議で解体処分に決定され、速やかに刑が執行すると報じられました。これを受け、各地の鎮守府では――』

テレビの電源をリモコンで消し、軍帽で顔を隠す。雨は小降りです。シトシトと静かに降っている。時雨と夕立の解体処分まで後六日。やる気も活気も無い提督は仕事に手を止めていた。

「……」

「寝てないだろ」

摩耶が珈琲を差し出し、話し掛けてくれた。提督の気持ちは摩耶が一番よく分かっている。軍帽で顔は隠されているが、雰囲気からしてあの日から全く寝ていない。

「分かるか」

「何年提督と一緒にいると思ってんだ」

仕事の書類をまとめ、別の書類を手に触れる。いつまのように摩耶は仕事を手伝った。提督は机に足を乗せたまま、軍帽で顔を隠し続けている。

「今日も仕事をしようぜ。アンタがへこたれてちや、この鎮守府の空気が重いままだ。それに……………」

「——形勢逆転の種は残しておいたんだろ？」

「だけどその種も未確定要素な上に可能性は塵一つ程度。到底芽生えるとは思えない。だから賭けてるんだよな……………自分の存在と、この鎮守府にいる艦娘達の事を」

「摩耶、それ以上喋るな。身の毛がよだつ」

「はいはい分かったよ」

「失礼するわ」

提督の許可すらなく加賀と鈴谷、白露に天龍や金剛、差別された艦娘や着任したばかりの艦娘達が一齐に執務室の中へ入ってきた。執務室が騒がしくなり、大所帯になる。

「まだ何も言っていないだろ、許可無しに入ってくるな」

「言ったところで入らせてはくれないでしょう。貴方の思惑なんて見え見えだわ」

「……………」

反論しない。

いつもの提督なら百倍にして悪口を返すだろう。だが沈黙し続けたまま顔を見せもしない。

「悪口を言わない辺り……………本当に負けてしまったのね」

「帰れ。お前らとは声も聞きたくない」

最低限の会話で返す提督。すると加賀は突然提督に駆け寄り、胸倉を掴む。そして提督の頬を思い切り叩き飛ばした。

「加賀っ!？」

「加賀さんっ!？」

壁に打ち付けられ、提督は怯む。一連の行動に加賀以外の艦娘達は名前を叫んで驚いた。初めて提督を殴った加賀。そこには感情を表に出さないとはいえずに思えない、怒りをあらわにする加賀がいた。加賀は怯む提督の胸倉を再び掴み、怒鳴りつける。

「何こんな所でへこたれてるのよ!! 貴方は楯突いた奴らを振り伏せるのが好きなんじゃないの!? 得意なんじゃないの!」

加賀の言葉に皆聞き入っていた。今まで提督がしてきた事を目の前で見えてきたからこそ言いたかった事だった。

「最後まで戦えと言ったのは貴方でしょう!! どんな可能性でもどんな窮地になっても抗い続けろと……私達に教えてくれたのは貴方でしょう!!」

加賀は必死な声で提督に訴える。悲しくも強く怒鳴る声に感情が溢れているのが分かった。これだけ感情を表に出さない加賀が溢れ出させているのは鎮守府襲撃以降だ。

「逆に振り伏せられて……恥ずかしくないのかしら!? ……貴方一人じゃないのよ!! 私達は——」

「——共に戦う、仲間でしょう!!!」

提督と艦娘達は鎮守府襲撃の時から共に戦う仲間として抗っていた。襲撃以降も古鷹の事や榛名の事、■■の事など必死に、一緒に戦っていた。

だからこそ今回の時雨と夕立の事も提督は一人ではない、自分達がいるのだと、共に戦う仲間だと訴えたのだ。提督が戦うなら自分達も戦う、命を投げ打つても構わないと。

「……偉そうに。そういうのはな、もう少し戦力になる奴が言う言葉なんだよ」

加賀がある物を差し出す。それはビニール袋に包まれた、ある録音テープ。加賀は袋を提督の顔に触れるほど近付け、目に収めるように

する。

「それは……?」

「時雨と■少尉の尋問時の録音テープ。先程ある女性から受け取ったわ、その女性も今ここで待っている。憲兵や整備士達とも手を組んで暴動を起こすつもりよ。少しは戦力になれるはずだと思うのだけれど」

それを聞いた提督は顔を隠すビニール袋を掴み、無理矢理証拠を奪う。そして提督は立ち上がり、落ちた軍帽を被った。活気を取り戻していく提督に艦娘達は次第に頬が緩む。塵一つの可能性だった種が芽生え、蕾が出来上がる。

「……やられたらやり返す、じゅ——」「ツヘーイ!! やられたらやり返す、やられなくてもやり返す、身に覚えのないやつにもやり返す、誰彼構わず八つ当たりだ!!」

「それはただの迷惑よ」

「成程ねえ……」

「あの男……!!」

「痛い目見なきや駄目なようね」

「一度ぶん殴らなきや気が済まねえ……!!」

「ステイスティ……お前らキレるのは最もだが、ここでは抑えるように。勝手に暴れてはこちらが困る」

執務室の応接間で録音テープの内容を聞いていた提督と艦娘達。目の前には尋問官と名乗る女性が座っていた。録音テープを聞いて艦娘達は腸が煮えくり返る程怒りをあらわにする。暴れては困ると提督が呼び掛けた。

「録音テープの内容は本当か?」

「はい、本当です。■■■■憲兵隊長から渡されました」

「え、あの人!？」

突然瑞鶴が驚き出す。それを提督と艦娘達は一斉に視線を瑞鶴に

向けた。どうやら瑞鶴にはこの男と面識があるらしい。後で聞く必要がある。

「あ、いや……何でもないです」

「瑞鶴の話は後で聞くとして、今時雨と夕立はどういう状態になっている?」

「今は旧式解体の処刑を待つばかりで自分達の事を鉄屑だと思ひ込んでいます」

■少尉の尋問後に様子を伺った女性尋問官は時雨に違和感を感じていたらしい。この録音テープを聞いて、違和感の正体が判明した。

「まあ拷問紛いの事をすれば、洗脳のように刷り込まれるのも難しい事じゃない。■尋問官、憲兵隊長■大佐とは連絡が取れるか?」

「は、はい。一応メールアドレスは交換してあります」

「よろしい。ではその大佐に今度の会議で証人として出てもらおう」

会議と聞いて艦娘達がざわめく。会議は開けないと提督自身が明言していた。天龍が不思議そうに問い掛ける。

「会議はもう無いんじゃないのか?」

「手段が無ければの話だ。あのクソジジイはわざと解体の日を一周間後にした、この意味が分かるか?」

「……もしかして、何か証拠が見つければ会議を開かせる猶予を作ったって事?」

「そういう事だ。クソジジイは表では時雨と夕立を旧式解体処分と発表しているが、本人自体は旧式解体を良く思っていないんだよ。だから少しでも処分を軽くさせる為にわざと猶予期間を作った」

元帥自身は旧式解体法を良く思っていない。解体にしては残酷で凄惨、非人道的な方法に頭を悩ませていた。何年か前に辞職した前元帥が提案した方法であり、その当時は艦娘については良く分からなかったという適当な理由でそういった方法が取られた。

しかし艦娘をぞんざいに扱う荒れたやり方として、国民から反対運動が活発化。新しく就いた今元帥が部下の考えにより新式解体法を

提案し、その方法を取るように義務づけている。

「あの元帥も良い所はあるのね」

「……かもな、感傷に浸る暇はない。時間は限られている。後は……」
提督は窓を見つめ、雨降る景色を眺める。もう一つの種の成長具合を確かめている。あんな風に艦娘達に言われたら、信じる他は無い。

「後は？」

「アイツ次第だ……灰。そして白露」

「な、なに？」

「今度こそ救えるぞ。だから今すぐ灰の元へ向かえ」

白露を急いで灰色の元へ向かわせた。時雨と夕立の為ならば自身を犠牲にしても救うような妹思いな艦娘だ。灰色とは相性もいい、必ず役に立てるはずだろう。白露は願いが届いたのか笑顔を零した。
「分かった！　ありがとう提督！」

——駿河鎮守府

「ここが駿河鎮守府……」

家から歩いて二十分。駿河鎮守府に辿り着いた灰色は建物を眺めていた。荒くれ鎮守府とほぼ同等の規模を誇り、静岡県海を護っている。

「地元が駿河なのも何かの縁かな」

荒くれ鎮守府を出ていく前に憲兵隊長にあるメモ書きを渡された。

その内容は――、

『私の友人からある情報を入手した。間に合わなくて申し訳ない、この鎮守府は警備が厳重で潜入と調査に時間がかかってしまったらしい。だが写真を撮った人物は特定出来たようだ。その人物の名は――』

「――駿河鎮守府所属青葉型重巡洋艦一番艦、青葉か。ん？」

スマホから通知音が鳴り、メッセージ内容を確かめる。それは摩耶のLINEから、白露が手伝いに来るとい内容だった。

「白露が来てくれるのか、ありがたいです……つと。さて……」

「やあ■■■、久しぶりだね」

駿河鎮守府の門前に立っていた灰色は昔お世話になった先輩と出会う約束をしていた。駿河鎮守府に潜入する為、本当の事は秘密にしたまま突然編成された新人の憲兵という名目で許可を貰っている。灰という名前は偽名なので疑問に思われる事は無い。服装も変更し、

■■■少尉にバレないように憲兵として工作している。

「せ、先輩！ ぐ無沙汰しております！」

「そんなかしこまらなくていいよ」

灰色の先輩はお人好しな性格で艦娘達からも慕われている。灰色もこの先輩に影響され、艦娘が人である事を肯定した。だがこの駿河鎮守府は■■■少尉が支配している。簡単に刃向かえる訳では無いらしく、いいように扱われているとか。

「それにしても散々な目にあったね……」

「先輩！ あの事件はそもそも……！」

「分かってるよ。工作された事件ぐらい、けどこの鎮守府は■■■少尉が支配しているようなもの。身勝手に行動する事は許されないし、この事件も関わるなってキツク言われてるんだ」

■■■少尉からは既に手が回っているようだ。この事件の真相を知っている以上は外に出る事も許されない。灰色と出会う事も■■■少尉には内密になっているのでバレれば先輩や灰色はどうなるか分からない。

「それでは……」

「でも大丈夫。うちの仲良い憲兵さんが新人として編入させてくれるよ。あ、連れている艦娘とかいるのかい？」

「後で白露が来るんですが……」

「分かった。だったら来た時に連絡してね」

灰色が駿河鎮守府に潜入し、五時間が経過。午前十三時、艦娘達は食堂に。■■■少尉は午後の会議で留守中だ。

「青葉さん、ですよね？」

「っ……何でしょうか」

重巡察の見回りをしていた灰色が青葉とすれ違う。そしてすれ違
いざまに問い掛ける。

「あの写真を撮ったのは貴方で間違いないですよね？」

「……何の事だかさっぱり」

「■少尉に脅迫され、■鎮守府に潜入し、あの写真を撮った事で
すよ」

「何を仰っているのか分かりません」

青葉は変装した灰色を無視して過ぎ去る。無関係の人間に話す事
は何も無い。話すだけ無駄だ。

「一応聞きますが……青葉さんは自身の事をどう思ってます？ 人間
？ それとも……兵器？」

「……当たり前じゃないですか。貴方が思うように……兵器です」

——二十三時間後。

部屋に出る青葉を白露は待ち構えていた。この駿河鎮守府に白露
は所属していない、明らかに他所の鎮守府の白露だ。となればあの事
件現場の鎮守府の所属だろう。時雨と夕立が旧式解体されると聞いて
写真を撮った青葉を問い詰めに変装した憲兵と共に来たと違いな
い。

呆れた青葉は見向きもせず過ぎ去ろうとした。

「……本当は苦しいんだよね？ このまま生きていくのが」

しかし白露の言葉を聞いて立ち止まった。思わず青葉は手を強く
握って噛み締める。自身の事を哀れみの目で見られているようで腹
が立った。すると今度は反対側からあの■鎮守府の者と思わし
き憲兵まで現れる。

「■少尉に脅されて保身に走るのとは分かります。でも無実の罪で解
体処分されたら、貴方は一生十字架を背負う事になるんですよ？」

「……」

「貴方が解体のボタンを押すんです。もしこの鎮守府に時雨と夕立が着任すれば、貴方は笑顔で迎えられるますか？」

立ち止まる青葉に歩み寄る白露と灰色。どう考えても逃げ去る術は無い。青葉は焦りながら二人を警戒する。そして灰色と白露は切り札を出してきた。

「もし協力してくだされれば、この鎮守府を支配する■少尉の権威を必ず落とす事が出来ます」

あの忌まわしき男を地に落とす事が出来る。瞼をより一層と開き、その可能性を目の当たりにした。確かに外部の二人ならあの男をどうにかしてくれるだろう。だがしかし青葉にとっては――、

「……戯言を!!」

青葉が怒鳴る。

その声は廊下全体に響いた。

「私が解体のボタンを押す!? そんな事私でも分かっていますよ!! あの男に脅迫されて! 一方的に余所の時雨と夕立を貶めるような真似をして! 周りからも疎遠になつて! 自分を守る為に、生き抜く為にあんな事をした!! それなのに!」

「っ……………」

「何で……………今を生きるのが……………! こんなにも苦しいんですか……………!!」

顔を俯き、胸に握った手を寄せる。頬から涙が曲線を描く様に伝っていた。保身の為に自身の愚かな行為で関係のない他人を傷付ける。全くもって最低最悪だ。生き抜く為にやった事だ、後悔はしないはずだった。だがその生きている今は死にたい程苦しい。自身が犯した罪の意識に耐えられなかった。

「こんな事をする為に……………! 私は生まれた訳じゃない……………!」

青葉の状況は荒くれ鎮守府の状況とほぼ一致していた。かつては自分やその他の艦娘達も保身の為に、仲間を蹴落としてまで生き抜いていた。この駿河鎮守府はあの荒くれ鎮守府の二の舞になりつつある。「所詮は何も出来ない兵器なんですよ……………ああやって人に使われる、どうしようもない兵器なんです」

「違う」

「っ？ 違うってどういう……？ 貴方だって私の事を何も出来ない

へ——」「違うよ」

「っ……！」

二度も否定され、青葉が後退る。

これだけ否定されたのは初めてでは無いのに、何故か動揺してしまつた。

「君はどこかで……人間でありたいと思つてるはずなんだ」

「そ、そんな訳……え……？」

無意識に涙が流れているのが分かつた。頬に指を寄せると液体が冷たく触れる。指が、手が、腕が震えていた。必死に抑えようとするも震えは止まらない、目から流れる涙も止まらない。

「違う……私は……!!」

『兵器が喚くなよ、うざつたい』

「ごめんなさい……！」

『今度泣きだしたら解体だからな。あ、勿論旧式だぞ？ 分かつてるよなっ…』

「嫌だ……出ないで……！」

『何回泣けば気が済むんだこの鉄屑がア!!』

止まらない。

涙が止まらない。

泣いては駄目なのに。泣いたら殺される。

嫌だ、死にたくない。まだ私は——、

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい——っ!？」

突然手を叩く音が耳の中で響いた。前を見ればあの男がいる。男は青葉の肩を掴み、必死そうに訴えた。

「君が目の前にいる男は!! あんなクズ野郎じゃない!! 君を救いたいと心の底から願ってる……!! 馬鹿正直な僕だ!!」

「……ッ……私を……!!?」

「ああそうだ! 笑いたければ笑え!! 嫌だというならこの手を払ってみせろ!! 僕は君に何度でも絶対に言い続ける!! 君が兵器か人間かなんて選ぶのは君の自由なんだ!! だけど僕は君の事を素晴らしい、最も誇るべき人間だと思ってる!!」

その手を青葉は払う事が出来なかった。それはどこかで人間になりたいと思っていた自分がいたから。何ヶ月間も苦しい日々を送り続けて、何度蔑まれていても思いたかった。たまに建物の窓から見た事がある。二人の女子高生が歩きながら楽しそうに話していたのを。憧れ続けた。自分もあの女子高生のように友達と楽しく話しながら過ごしてみたい、と。

でもそれは叶わない、何故なら自分達は兵器だから。兵器は人の心を持つべからず、生まれた時からそのルールが振じ込まれていた。自分達の存在は人間が決める事だと思い込んでいた。

だが――、

「本当に……思ってもいいんですか……!!」

「当たり前じゃないか」

「泣いてもいいんですか……!!」

「いいんだよ」

「でも……だと……!!」

「大丈夫さ、君がいればこんな地獄なんて一日で終わる」

青葉は膝から崩れ落ち、声を消しながら泣き出した。手で顔を隠して、溢れ出る涙を抑える。灰色と白露は傍に寄り添い、青葉を抱き締めめる。青葉も灰色の胸に縋り付き、泣きじやくる子供のよう^に身体を委ねた。

「だから……君の正直な気持ちを聞かせて？」

86. 人の心を持つモノ達へ

「これで何とかかなりそうだよ灰さん！」

「そうだね。んじゃ早速白さんに報告だ」

夜二十時半、駿河鎮守府から抜け出した灰色と白露は青葉の証人獲得に喜んでいた。交渉の末、駿河鎮守府の青葉は会議に証人として出席してくれる事になり、先輩と協力して当日は■少尉に隠して移動するらしい。

駿河鎮守府の青葉さえいればこちらの勝ちも取ったも同然。早速スマホで摩耶のLINEから朗報を伝えた。摩耶曰く、提督はニヤニヤと喜んでいるとか。

「白さん、喜んでたよ。よくやったね白露」

「ありがとう！」

後は青葉を駿河鎮守府から脱出させ、大本営に向かわせればいい。灰色の家まで歩いていった灰色と白露はスキップ歩きで感情をあらわにしている。

だが――、

「アイツらは俺らに仇なした兵器だ！ 解体じゃなきや意味ねーんだよ」

「そうだそうだ。兵器は兵器らしく軍人様に使われてればいいんだよな」

「まあ可愛いのが少し勿体なく感じるけど」

「兵器じゃなくて道具なら何でもなるな！」

艦娘を兵器として見るデモ隊が集団で灰色と白露の前に歩いてきた。自分達の存在を知らせない為に静かにを通過する。デモ隊の時雨と夕立の罵倒に白露は手を握った。

「……待てよ……！」

「っ?」

デモ隊の横を通り過ぎた時だった。白露の声が響き、一番灰色に近かったデモ隊の男が白露に気付く。振り返れば怒り震える白露が灰色を置いて立っていた。

「色々言つといて何も知らないくせに!! 勝手に人の事決めつけないでよ!」

「白露……」

「私達は道具なんかじゃない!! ちゃんとした人間だ!!」

「……んだとゴラア!!」

——荒くれ鎮守府門前。

「さつきからうるさいのよ、黙ってくれるかしら」

「本当だよねー。馬鹿みたいに騒いじやって」

「あ? 何だ兵器共」

「兵器じゃねえ……お前らと同じ人間だバーカ」

「言いたいことがあるならさつきと殴りかかってみては? 最も、人

間である私達を殴れば罪を被るのは貴方達ですけど」

「……やっちまえ」

静かな夜を迎える荒くれ鎮守府。雨は小降りでも思わず眠りそうな心地良い音がする。執務室にいた提督と摩耶は会議に向けて、事件の資料をまとめていた。

すると執務機の受話器が突然鳴り始める。お互い身体を跳ねらせた後に摩耶が受け取った。

「こちら■ ■鎮守府……っては何!? 灰と白露が!」

「何があった」

「提督!! 加賀さん達が!!」

「ッ!」

突然執務室に朝潮達が駆けつけてきた。皆焦燥で大変な事が起きたと表情で伝わってくる。提督と摩耶は急いで医務室に走って向かう。医務室には■ ■医師や隊長、白髭にプリンツが既に来ていた。

「集団で暴行を受けたようで……頭を強く打ってて、意識が戻らない……駿河の病院では灰君は意識不明の重体、白露ちゃんの方はもっと酷くて、下半身を中心に襲われた痕が……」

「何でそんな事を……犯人は?」

「はい、先程憲兵隊達に拘束されて生意気な兵器だからとか、灰達の方は兵器に同情する馬鹿な軍人だから、と……」

暴行を受けたのは加賀、長門、比叡、鈴谷、最上、熊野、球磨、天龍、不知火。

■ 医師が言うには全員共に鉄の棒で何十回も叩き殴られ、重度の外傷と意識不明。灰色は複数の殴打跡、刃物で斬られたような跡と何ヶ所の刺し傷。白露も複数の殴打跡、首を絞められた様な跡と性器の外傷。明らかに度を超えた暴行を受けていた。

「馬鹿な真似を……!!」

提督は静かに怒りに震える。加賀達が行った暴動の意味は理解出来ていた、今度の会議で僅かでも提督が有利になる為だ。自分達が酷い目に遭えば世間の価値観も変わるのではないかと思っただろう。確かに共に戦う仲間として戦ってくれるのはありがたいと思った。だが戦うからといって自分の命を天秤にかけるような真似をしろとは言っていない。無駄に自分の命を投げる様な事はしてほしくなかった。

提督は手を握り、歯を噛み締める。恐らく暴動のリーダーである加賀に近付き、傷痕だらけの頬に触れた。すると提督の目が蒼から紅へと変貌し、表情が無感情のように変わる。

「Admiral、駿河鎮守府の青葉さんからご連絡が」

「後で話す……マスコミに大々的に報じさせろ」

「どこに行かれるのですか……!!」

「反撃だ」

提督は医務室を素早く出ていく。

摩耶や ■ 医師達を置いて一人、廊下で呟いた。

「そこで待つてろ馬鹿共……!!」

——朝九時。

■■■■ 鎮守府暴行事件により二人の艦娘の処分が決まった中、処分の見直しをする為に大本営にて急遽会議が開かれました。つい先日

に静岡県駿河市と和歌山県串本町で数名の艦娘と人間一人が暴行の被害に会う事件が多発しており、世間では物議を醸しています。なお今回は会議の撮影許可が出ており、神出鬼没とされていた白中将の顔が見られると多くのマスコミが駆けつけていまおり、あ！ 白中将です！ 白中将が会議室に現れました！ 長い白髪に青年の顔、成人男性と何ら変わりはありません！』

「まさか提督……！」

「覚悟は既に決まっているという訳ね」

「顔を晒そうとも二人を救えるなら構わないという事か」

「頑張つて提督……！」

—— 大会議室。

「では始めようか」

一同席を立ち、礼をする。再び椅子に座り、会議を始めた。壁の周りには多くの記者やカメラマンが撮影機器を並べ、提督達を撮っている。中でも情報や顔公開が一切無く、不思議な存在として語られていた提督が顔を見せて現れたのは多くのマスコミの興味を引かせていた。カメラの殆どが提督に向けられている。この撮影は全国のテレビ中継、動画サイトの生放送で大きく注目されていた。

「大変異例にも関わらず新たな証人の尋問を許可して下さい、感謝を申し上げます元帥閣下」

「待て！ 二人の処分は決まったんじゃないのか!?!」

「■■少尉、確かに時雨と夕立の処分は決まりましたが、あまりにも重過ぎる為にこちらから新たな処分案を提示したく元帥閣下に許可を頂きました。どうか静かに聞いてくださればと思います」

「■■君、静かにね」

突然の会議に■■少尉が物申す。適当に嘘をついて、元帥が注意してくれた。とりあえずは会議は続けさせてくれるようだ。

「今回は最初に来てくださった方に尋問をしたいと思います。大本営

所属憲兵隊隊長、■■■■■さん。よろしく願います」

「よろしく願います」

「では最初にこの録音テープをお聴き下さい」

ラジカセから貰った録音テープを流す。■■■少尉の必要以上の攻撃的な尋問の内容が全国に知れ渡った。あまりにも残酷で卑劣、■■■少尉の本性が相見えた瞬間だった。やがてテープが流れ終わり、終始不穏な空気が流れる。

「……この録音テープを聞いて■■■少尉、何か心当たりは？」

「知るか!! こんな事私はしていない! 捏造だ!!」

「でしたら大本営所属憲兵隊隊長■■■■■さんに質問します。貴方は以前時雨の尋問の際、■■■少尉の護衛の為に共にいた事が記録されています。この録音テープに心当たりはございますか?」

全視線が扉の手前にある机の傍にいる大本営所属憲兵隊隊長■■■

■■■に向けてられる。緊張した空気の中、隊長は真面目に答えた。

「はい。私は■■■少尉が時雨の尋問時の護衛の為に尋問室にいました。ですがあまりにも■■■少尉の野蛮な行為に耐え切れず、証拠として録音させていただきました」

「お前まさか!!」

「何慌てているのですか■■■少尉。まだ私の質問が続いています……その野蛮な行為とは一体どんな行為でしょうか。可能な限りお話し願います」

絶えずカメラのシャッター音が鳴き喚く。カメラのフラッシュが提督と隊長、■■■少尉を照らし続けていた。大会議室で軍人同士の戦争は熾烈を極める。提督は一回も笑わず、本気の紅い眼をしていた。「はい。念の為、言葉は優しく包みますが……時雨や夕立に対しての暴行は勿論の事、二人を蔑むような言葉を並べていました」

「貴方はそれを野蛮な行為だと感じ、この録音テープを録ったという事で間違いありませんか?」

「はい。間違いありません」

各席に座る軍人達、壁に寄り添うメディア達が唸りの声をあげる。

■■■少尉の蛮行を記事にしようと、パソコンやメモ帳で書き殴っている

るようだ。提督はそんな事など気にせず、次の話に切り替えらせる。

「次に駿河鎮守府所属青葉型重巡洋艦一番艦、青葉さんです。彼女から証言したい事があると聞き、この場に立って頂きました」

「何故青葉がここにいらっしゃるんだ!？」

「■■君静かに!」

予想外の証人に■■少尉が大声をあげる。

■■少尉が反応する度に疑問の視線が移動した。

「では青葉さん。証言したい事を」

「……はい。わ、私があの時雨とゆ、夕立が暴行した写真を……ととと撮りました!!」

「おい青葉ア!!」

■■少尉が机を叩き、青葉に怒鳴りつける。しかし駿河鎮守府の青葉は怯えながらも震えた声で真実を明かした。

「■■少尉に殺すと脅され、し……白中将をおと、貶める為に■■鎮守府の艦娘の過激写真を……取るように強要されました……!! あの日は■■鎮守府に潜入し、時雨が襲われた場面から夕立が時雨を守る為に憲兵達を押し退けた場面を見て、ちようどその時に写真を……撮りました!!」

「何を嘘を並べている青葉! 恥ずかしくないのかア!!」

「恥ずかしくありません!!」

「ツ!？」

今度は駿河の青葉が叫んだ。甲高い声は大会議室に響き渡り、変貌ぶりにその場にいる全員が驚く。提督と■■大將は駿河の青葉をずっと眺めていた。

「こんな愚かな事をして黙っている事こそが恥ずかしいです!! 私はもうお前の言う事は聞かない!! もう私は……人間です!!」

「こっの……!!」

「私だって……! こんな事……したくなかった……!」

「青葉ア!!」

「静粛に!!」

暴れる■■少尉は憲兵隊に押さええられ、強制的に椅子に座らせられ

る。徐々に■少尉の犯行が見えてきた。泣き崩れる駿河の青葉に提督は気にせず質問を続ける。

「ちなみにこの写真は偽の物だと?」

「……はい。工作された、偽の写真です」

「工作された写真で時雨と夕立は暴行したという事実にはされていた様ですよ■大将閣下。真犯人はあの憲兵と整備士達であり、時雨と夕立は正当防衛になるのではありませんか?」

「どういう事かな白君。この写真は巧妙に作られた偽造で、本当の被害者は時雨、守ったのは夕立だったって事かな?」

元帥が途中で話を整理し、提督に問い掛ける。元帥は頭が無駄に良いだけに理解力は充分にある男だ。物分りが良くてとても助かる。

「そういう事です元帥閣下。つまりは■少尉は時雨と夕立を貶める為に青葉さんを利用し、この写真を撮った物と思われまます……青葉さん、ありがとうございます」

駿河の青葉に一礼する提督。同じく礼を交わした青葉は涙を拭きながらそのまま大会議室を去っていった。大会議室に重い空気が流れ込む。まさかの真実判明に皆、手が止まっていた。

元帥は会議を進める為に旧式解体案を提案した■少尉、及び■大将の話が始まった。

「事件発生前、現場付近では多くの人々から目撃されています。証拠と証言、総合的に考慮すれば疑う余地はありません」

■鎮守府所属憲兵隊第一分隊、■。重巡を徘徊中に夕立が第四倉庫に行くのが見えた。実験結果は提出した資料の通り、第四倉庫からは駆逐艦寮で見えません」

「憲兵隊との実験結果とは大きく異なりますし……信用性の高い目撃証言が実に多い」

「フン」

「何か?」

「多過ぎますよ」

両者共に睨む。

張り詰めた空気の中で提督と■大将は話を続けた。

「普通は目撃者などそうそういる訳では無い」

「恵まりましたな」

「■■■■鎮守府所属憲兵隊第三分隊、■■■■。休憩時間にふと広場を歩いていたら夕立が第四倉庫に向かうところを見た。■■■■鎮守府所属憲兵隊第一分隊、■■■■。トイレから出た後、ふと窓を除けば夕立が第四倉庫に行くところを見た。よくもまあピンポイントで夕立が行くところを見るものです。私の鎮守府には第四倉庫を憲兵が半径三メートルずつ見張らなければならぬ条約でもあるのでしようか?」

「憲兵達の証言は自信を持っており、嘘だとは考えにくい」

「そりゃあ自信に満ち溢れているでしょう。私の鎮守府で第四倉庫に向かっていたのが例え霊長類最強の吉田○保里でも夕立に見えたに違いない。皆がそれを望んでいるから……人は見たいように見て、聞きたいように聞き、信じたいように信じてるんです。大将閣下だってそうでしょう?」

「何が言いたいのかな?」

「教えてあげましょうか? 艦娘の為ではなく日本海軍の信頼の為にあの議会を開いたんです」

「我々は軍人だ。日本海軍の信頼を懸念するのも犯罪を犯した艦娘を判断するのも当然だろう」

「その日本海軍の信頼の為に敵か味方かも分からない艦娘を一方的に敵と決めつけるのがですか?」

「愚かかな？」

「ええ愚かで醜く、卑劣です」

「傲慢極まりない。海軍は信頼される機関であり、私は素晴らしく誇り高い軍人だと思っている」

「素晴らしい誇り高い軍人が普通、暴行しただけの艦娘を旧式解体という処遇にさせますか？」

「本来であれば艦娘は兵器と称されている。兵器であれば所有権を持つ我々がどうしようとして自由であり、我が軍では常識だ。その時雨と夕立は我々に歯向かった平和な未来の危険因子になりかねない」

「平和は一人一人が人間として確かな価値観を持たなければ一生なりえません。それは艦娘にも与えられる権利です」

「貴方が人間派とは意外だな」

「いいえ、元から人間だとは思ってませんよ。目には目を、歯には歯を、化け物には化け物を。素晴らしい考え方だ、ただ我々はその艦娘達の尊厳と自由を隠して縛り、何も知らない国民は兵器だとかこの国は平和だと呟く事が卑劣だと言っているだけです」

「白昼堂々と艦娘が戦う場面を見ると言うのか？」

「その通り、青空の下鎮守府オープン状態で艦娘達がどうやって戦っているのかを実際に見せた上でこの国の現状をその目に焼き付けてから思い知らせた方が遥かに健全だ。だが我が国の愚かな国民はこの世界を平和だと認識し続けたいんです……自分達は平和な所にい

て、誰かが死の海域で艦娘という名の兵器が深海棲艦を消し去ってくれるのを待つ。そうすればそれ以上怯えるなんて事は考えずに済み、この世界は平和であると思えるからだ。違いますか?」

「仮にそうだとしても、それもまた日本の平和だ」

「平和の為なら何もかも正しいんですか?」

「それが平和主義だ」

「そんな平和主義があるから戦争が起こるんだ!!!」

「果たしてそうかな?」

「そうに決まってるでしょう」

「些か古いな……人間は海上に浮かぶ敵、深海棲艦に対抗出来ない。誘導ミサイルや機関銃、迫撃砲を持つてしても討ち倒せなかった。だがその敵に対抗出来たのは……我々海軍、だよ。深海棲艦に対抗出来る兵器である艦娘、そしてそれを正式に扱えたのが海軍であり、日本を護る上で国民からの信頼は必要不可欠だからだ。日本という国の国民達を守り抜き、艦娘という唯一対抗出来る手段を使い、深海棲艦を倒す。その覆されない絶対的な信頼こそがこれからの平和な日本の未来を照らす。日本海軍はまさにその光だ。そして日本国民が考えた結論は、艦娘という兵器を使った軍人達が平和な日本を守ってくれている、というモノだった。愛する家族と、友人と、子供達の平和な未来の為に。艦娘は兵器だ」

周囲に座る軍人達が次々に拍手をする。それはまるで■大将の演説を拍手喝采するような応援の拍手だった。拍手をしないのは提督と権力の低い新米司令官。提督は机に足を乗せたまま無表情でい

た。

「いやー流石■大将閣下、素晴らしい演説だ……いいでしょう、解体にすればいい」

提督は立ち上がり、長机に並ぶ軍人達を見ながら話し掛ける。

「確かに夕立はこの国を鹵向かった反乱因子です。解体しなければならぬかもしれません。次に襲われるのは貴方の家族かもしれませんからね、貴方の友人かもしれない、貴方の恋人かもしれない、貴方の艦娘かもしれない、或いは貴方自身かもしれない」

一人ずつ指をさし、誰しもが襲われる可能性を喋った。

「解体にしましょう。現場の目撃証言はあやふやだけれど解体にしましょう。証拠の写真が本当なのかよく分からないけど解体にしましょう。本当は夕立の正当防衛なんじゃないかという証言もあるけれど気にしないで解体にしましょう。事件発生時の状況なんて関係ない。脅迫されていたのにも関わらず、ストレス発散の為に自ら計画しましたと言っていたのだから解体にしましょう。それが反逆した艦娘という名の兵器の正しい末路だ、それがこの国の平和なんだ、なんて素晴らしいんだ。平和の為に正しい、平和の為に何をしようが全て正しい。ならば……平和の為に言えば暴言や暴力も許されるわけだ。私の大切な部下である灰司令官や白露、加賀達がどんな苦勞をしてきたのか何も知らないのにも関わらず、今まで散々ボロクソに叩きのめしてきたのも平和の為に言えば問題無いわけだ……」

提督の語り声が全国に響く。家のテレビ、店の公共テレビ、街の大型街頭ビジョン、公共のラジオ放送、動画サイトの生放送。ありとあらゆる情報伝達手段が提督の姿、声、感情を世に発している。そして、

「……………ふざけるなよ……………」

「……………ふざけんのも大概にしろよツッ!!」

——ぶつけようのない怒りに提督は激しく怒鳴った。

「本当の平和は、人類がいる限り存在しない……架空の現実だよ。こんな会議で艦娘の存在を争っているようでは一生あり得ない。であれば私は何度でも言い続けよう……彼女達の存在を決めるのは我々人類ではない、彼女達自身が決める事だ」

何度でも提督は言い続ける。

兵器だ、人間だ、それを決めるのは自分達人間ではなく艦娘達が決める事。自分を人間だと決めて思い込んでるように、艦娘達も自身が何者なのかを決めて思い込む事こそが重要な事なのだ。周りに頼ってはいけない、周りに何を言われようとも自身を肯定し続ける。それこそが大事なことだと提督は思っていた。

「だが我々愚かな国民は艦娘を兵器だと信じて疑わず、人間らしい行動でもすれば兵器として感情を無くさせ、人である事を喪失させてしまふ……それが愚かな我々だ。だが世の中にはその人である事を喪失してしまった艦娘を支えようとする馬鹿達や自身の誇りを賭けて自らを人間だと証明しようとする馬鹿達もいる。己の信念だけを頼りに他者を救おうと自らを犠牲にする馬鹿達がね」

その馬鹿達とは誰の事だろうか。昨日暴行された灰色と白露の事か、それとも荒くれ鎮守府でわざと傷を負った艦娘達の事か。それは提督にしか分からない。だが荒くれ鎮守府の方で食堂のテレビで生放送を見ていた艦娘達は理解していた。

「その馬鹿達のおかげで今日、駿河鎮守府の青葉さんは人である事を取り戻し、時雨と夕立が無実であり冤罪である事を自らの意思で証言してくださいました。更には艦娘とはどういう存在かを世に知らしめる為に戦ってくれたモノ達もいます。それらは塵一つにも満たない行動かもしれませんが、確かに艦娘という常識と偏見を変えたので

す……………」

「……………私はその馬鹿達こそ……………褒め称えるべきだと思う……………！」

荒くれ鎮守府の憲兵や整備士達もテレビ中継をまじまじと見ていた。個室や講堂、医務室や食堂で見えていた彼等は艦娘達を見て驚く。元々この鎮守府にいた艦娘達は僅かに身体が震えていた。

秘書艦待機室で待機中の艦娘達も黙って会議の様子を見ている。提督の秘書艦である摩耶は微笑んで空を眺めた。

一方で連れていかれた瑞鶴は大本營の資料室で黒い箱を探し続けていた。提督が何の為に戦っているのかを摩耶に教えてもらっているからこそ、瑞鶴も揺るぎない信念で必死に頑張っている。人の心を持つモノとして抗わなければならない。

「信頼と平和の為とはいえ、反乱因子だと仰るならばどうぞ解体したって構いません。所詮この一連の議会の正体が貴方のご子息によるくだらない恨み晴らしでしかないのですから。単なる人生の暇潰しの為にね。そうでしょう■大将閣下」

提督と■大将がすれ違う。提督はこの事件の正体が息子である■少尉による犯行だと確信している。■少尉の親である■大將は息子にせがまれ、仕方なく名乗り出たのだろう。

「元帥閣下は何の為にその偉大な席に座っておられるのですか？兵器と決めつけるならあの場にいる艦娘達を秘書艦として連れていく事も待機室に用意されているベットやソファも必要ない。判決を下すのは断じて我々ではない……………我が国が誇る最強の海軍の頂点である貴方とこの日本を護り続けている彼女達だけなのです!!」

元帥の目の前に立ち、この国の元帥がどういう存在かを知らせる提督。艦娘は何者かというどうでもいい事で争っている暇があるなら、

深海棲艦を倒しに行った方が遥かに平和の道へ進むはずなのだ。誰もそんな単純な事を分かっていない、分かつようとしていない。如何にこの国が、国民が、意識が適当な物なのか、改めて確認出来た。

「……………どうか日本とその日本国民を護る者の矜恃を持つてご決断ください……………お願いします」

自ら頭を下げる姿を全国に晒す提督。元帥と共に大勢のカメラのフラッシュに照らされ、長い時間をかけて頭を下げた。提督にとって唯一の手段だろう、仮にも中将である提督が頭を下げる姿を全国に晒すなど自身のプライドを溝に捨てたも同然。それでも提督は一切の躊躇もなく、その軽い頭を大切な部下の為に下げたのだ。

「数々の無礼、お気を悪くされたかも知れませんが、所詮は海軍一の滅らざ口で嫌われ者の軍人の戯言です。どうかお聞き流し下さい……………以上です」

87. 気付いた事も気付いた上でやりました

あの会議から二日が経過。時雨と夕立の解体当日、提督と摩耶は元帥の部屋まで呼び出されていた。

今日この日、時雨と夕立の運命が左右される。提督は真面目な表情をしながらも内心は緊張していた。

■■■■鎮守府所属白露型駆逐艦二番艦、時雨。その四番艦、夕立。改めて二人の処分は……」

「——旧式解体を取り下げ、■■■■鎮守府にて六ヶ月の謹慎とする」

「……かしこまりました」

一言返して提督と摩耶は頭を下げる。元帥曰く、時雨と夕立が被害者である事を理解してくれたらしい。

「また白君と灰君の処遇については——」

——荒くれ鎮守府。

「提督……」

「……食堂に集合だ」

荒くれ鎮守府に帰還した提督と摩耶。帰ってきた二人に艦娘達が広場に集まりだす。提督の表情を伺い、時雨と夕立の処分を知りたがっているようだ。全員に知らせる為に一度食堂へ集まらせる。時雨と夕立の事を聞いて、殆どの艦娘達、憲兵隊や整備士達も集まってきた。

「さて集まったな馬鹿共」

食堂の二階で集まってきた者立ちを見下ろす。ざわざわと時雨と夕立の処分に緊張していた。

「時雨と夕立の処分だが……」

多くの艦娘達が唾を飲む。

提督の口から発せられる処分に身体が震えそうだった。

「旧式解体は取り下げ、俺の鎮守府で六ヶ月の謹慎となりました
イエエエエエイ!!!」

一気に食堂が歓声の声で包まれる。提督の声と同時に表情は緩み、
歓声を上げた。時雨と夕立の処分は荒くれ鎮守府にて六ヶ月の謹慎、
出撃任務や遠征任務の禁止となった。旧式解体処分は取り消され、後
日輸送艦にて帰還する。

「って事は……時雨と夕立が戻ってくるの!?!」

「そういう事だ。灰色と白露はこちらで治療する事になった、直にこ
ちらに戻ってくる。更には階級も元通り、中將である俺の完全勝利だ
フハハハ〜」

「とぼけないで」

提督ら階段を下りて一階で騒ぐ艦娘達を眺める。銃を舐めて自身
の完全勝利を不気味そうに喜んだ。だがしかし抗議の声が提督を邪
魔にする。

「私達、のでしょうか?」

「加賀さん! 皆!」

医務室で休養を受けていた加賀達が松葉杖をしながら歩いてきた。
提督の完全勝利を否定し、自分達の勝利だと提言する。提督は蒼い眼
で難しそうな表情をしながら加賀達を睨んだ。

「ちゃんと蹴散らしたんでしょね?」

「銀河系の彼方まで粉々になって、ブラックホールに吸い込ませて
やったよ。お前らの体当たり作戦に乗ってやった、ありがたく思え馬
鹿共」

「え? じゃ、じゃあわざと殴られに行っただの?」

加賀達がコクツと首を縦に振る。加賀達は暴行された訳ではなく、
わざと暴行されにいったのだ。仲間と協力し、覚悟を決めて殴られに
いく事で提督に頑張っただけだった。結果提督は本気を出し、時雨と
夕立を救う事が出来たはずだが――、

「逆にあたし達が殴られて全国に伝われば世間の風上が変わるかもし
れないって思っただらうな」

「少し煽っただけでこの始末だ」

「天上知らずの馬鹿だ、結局のところ何一つ世論は変わってはいない。ただの殴られ損だ、お前らは同情もされてないんだよバーカ」

「分かってるよ？ でも私達がわざと殴られに行かなかつたら提督は動けなかつたでしょ？ 騙されたよね」

提督と加賀達が互いに近寄り、目と目を合わせて睨み合う。火花を散らす提督達に摩耶や他の艦娘は傍でニヤニヤと微笑んだ。

「あれは会議を開かせる為の陽動作戦項目だったんだ。そうとも知らずに少しだけ唆したらまんまと騙されてたんだよ、馬鹿共め」

「気付いていましたよ。気付いた上で乗ってあげたんです、騙されませんでしたね」

「お前らが気付いていた事も気付いた上でやってあげたんだ馬鹿共め」

「提督が気付いている事に気付いている事も気付いた上で乗ってあげたのですわ」

「お前らが気付いている事に気付いている事も気付いて——」「はい、そこまで」

永遠に続く会話に歯止めをかける摩耶。提督に負けじと加賀達が踏ん張る。仲睦まじそうに周辺の艦娘達はその様子を眺めていた。提督は言う事を聞かない加賀の額に頭突きする。

「痛っ!!」

「ありがとうございます」

二日ほど時が過ぎ、荒くれ鎮守府の医務室まで送られる灰色と白露。二人とも重度の外傷を負い、意識は不明。集中治療室にて決死の治療が行われ、命を取り留める事に成功。そして会議の途中で目を覚ましたらしい。

後日、時雨と夕立の処分が言い渡され、摩耶から連絡を聞いた時は灰色は泣いて飛び上がったという。

安静の為に寝たきりで輸送車に乗る二人。一つの車両に灰色と白露が用意されたベッドに寝たまま、天井を見つめている。看護師に見守られながら荒くれ鎮守府まで移動した。不思議と自動車特有の揺れは殆ど感じず、車に乗っているのを忘れるほど心地が良かった。

「……白露」

顔を横に向け、白露を見る。灰色よりも白露の方が外傷や心傷が深く、複数人に弄ばれていた。外傷は治せても心の傷は簡単に癒せない。改めて自分の無力さを思い知らされた。あの時自分は縛られたまま、白露が犯されていく様を眺める事しか出来なかった。

何がヒーローになりたいだ、力も無しに誰一人守れていないじゃないか。

「ごめんな……不甲斐ない奴で……」

「……いいや大丈夫だよ」

「ッ!? 白露!？」

白露は灰色と目を合わせ、伸ばした腕で灰色の患者服を握る。その握った手はあからさまに震えていた。恐らく白露は無理して灰色に近付こうとしている。灰色としてはどうしてもやめてほしかった。

だが――、

「怖いよ……! 怖いけど、灰さんだと何故か安心出来る。だからもう少しこのままでいさせて……」

「……分かった。あの鎮守府に着くまでこうしていよう」

「ありがとう……」

荒くれ鎮守府に着くまで白露はずっと灰色の患者服を握っていた。やがて荒くれ鎮守府に辿り着き、医務室まで送られる二人。帰ってきた鎮守府を懐かしそうに眺めている。

「数日ぶりの鎮守府だな」

「白露ー!!」

「灰さーん!!」

送られるまでの途中に心配した艦娘達が迎えてきてくれた。寝たきりの二人を囲うように身を案じている。

「これは熱烈な歓迎だな……アハハ……」

「灰殿」

艦娘達に囲まれる中、憲兵隊隊長が話し掛けてきた。身長は大和や武蔵程だろうか、寝たきりでも艦娘達の後ろから顔がよく見える。

「よく帰ってこられました、どうですか？ 私の情報は役に立てたでしょうか？」

「はい。とても役に立ちましたよ。隊長さんがいなければ、こんな事にはならなかったと思います」

「ありがとうございます……この場にいるのは少々場違いなので、これにて退かせていただきます」

一瞬白露を覗いた隊長は風のようにその場を去った。艦娘達は一連の行動にはてなマークを浮かべている。白露は隊長が去った訳を理解しつつ、心の中で感謝した。

「提督が来ましたよ」

医務室での輸送が終わり、無事にベッドに辿り着いた二人。 ■ ■ 医師から治療が施され、また寝たきりの日々が続く事になる。そう思っている中、提督がわざわざ出向いて来てくれた。

「やつと帰ってきたか馬鹿共」

「はい。帰る事が出来ました。本当にありがとうございます」

「感謝の言葉はいらない。礼をしたければ行動で示せ、という訳で戻ってきて疲れているだろうが寝たきりのままで構わんから仕事だ。白露もだぞ」

「わ、分かりました……」

相変わらずの厳しさに心が折れそうになる。提督はこういう人だということのを思い出した。確かに余計な迷惑をかけてしまった分、罰は罰として受け入れる他は無い。

こうした日が三日程続いた。しかも何故か書類の間違いを尽く指摘され、何度も書き直させられた。面倒見がいいのかと摩耶に問い掛けたが、サボる口実が欲しかったらしく提督らしいと自然と微笑んだ。一方で隣の白露には一切近付かず、摩耶に世話をさせている。あの意味不器用な所で優しいのかもしれない。

「司令官！ 時雨さんと夕立さんを乗せた輸送艦が間もなく到着予定

になります！ 先程模擬訓練をしている妹達から聞きました！」

「素晴らしい報告だ朝潮、さて無残な姿でも目に納めるとしようじゃないか」

突然医務室の扉から朝潮が敬礼しながら報告してきた。なんでも時雨と夕立が戻ってくるらしい。それを聞いた提督はニヤニヤと企むように笑った。

「白露型駆逐艦二番艦、時雨。白露型駆逐艦四番艦、夕立。二人の輸送と護衛を完了しました」

「よし、下がっていいぞー」

「失礼します」

広場の港にて拘束器具を外された時雨と夕立が再びこの鎮守府に戻ってきた。船員との手続きを簡単に終わらせ、時雨と夕立に近寄る。一週間ぶりの鎮守府に彼女達は全く表情を出していなかった。というよりも表情が死んでいるように見える。

「二人とも医務室に來い」

「……分かり……ました」

提督の後を追うように時雨と夕立は鎮守府の廊下を歩く。連れていかれたのは医務室だ。大雑把に扉を開き、堂々と中へ入る。医務室には■医師、灰色と白露がいた。提督は用意された椅子を反対に座り、背もたれに組んだ腕を乗せる。そしてその上に顎を乗せて、棒立ちする時雨と夕立を眺めた。

「さて戻ってきて部屋に休みたい所だと思うが……その傷は■少尉にやられたんだろ？ 一体何をされた？」

「……頭を殴る……身体を蹴る……髪の毛を千切る……指の骨を折る……爪の間に錆びた釘を入れる……自慰の強要……裸体の撮影——」
「もういいです、やめてください」

■医師と灰色が無理矢理話を止めさせた。これ以上話せば二人の精神は崩壊しかねない。拷問とも思える境遇に灰色や■医師は耐え切れなかったようだ。だが提督はそんな事など気にせず話を続ける。

「それで？ お前らは自身を何だと思ってる」

「兵器です」

「理解してて何よりだ」

「人間様の命令は絶対尊守。命令される事は当たり前前、破れば罰が与えられます。なので命令を」

まるでロボットののように感情のこもらない声で話す時雨と夕立。如何に二人がどんな目に会ってきたのか容易に想像が出来る。灰色と■ ■ 医師は涙するほど怒りが溢れた。 ■ ■ 少尉に対する憎悪が止まらない。

「そうだなー……生憎俺はお前らの命令主じゃない。隣に寝ているガキに命令をもらいたまえ」

「……えっ!?!」

突然の振りに灰色は思わず声が漏れた。命令主は提督ではなく灰色だと吹っ掛ける。灰色は自分を指さし、提督に問い掛けた。

「私が……ですか……?」

「元はお前の秘書艦だろう。自由にしたまえ、お前自身の価値観を俺に押し付けたように二人を訴えてみる」

興味無さそうに提督はさりげなく灰色に課題を出す。以前に提督に艦娘は人間だと主張したように時雨と夕立にも押し付けて二人を救えと遠回しに言われてるような気がした。それに気付いた灰色は元気な声で答えた。

「……分かりました!」

やはり提督は不器用な所で優しい。提督の傍にいた摩耶は片目を瞬きし、灰色は改めて自由の意味を理解した。

「……やっと着いた……あの野郎……!! 絶対許さねエ……!!」

88. 灰色の空に現れた蒼い水たまりの下で

「時雨！ 夕立！ 私が君達の命令主だ！ これから君達に命令を下す」

「何なりと」

「それじゃあまずお風呂に入って！」

「……え？」

命令主の言う通り、入渠施設基い風呂に入る時雨と夕立。一週間ぶりの風呂は身に染みるほど暖かく、傷の痛みが癒されるほどだった。

「僕達なんかが……何故風呂に……」

「はい上がったね！ 今度は一緒にご飯を食べよう！ あ、勿論命令だからね」

「は、はい……」

風呂から上がった時雨と夕立を連れて、灰色は白露と共に食堂へ向かった。やがて食堂の前に辿り着き、扉の前に立つ四人。しかし時雨と夕立はその前で足を止めた。

「すいません、やはり無理があります」

「どうしたの夕立、ほら早く——」「兵器は人間の食べ物を口にしてはいけないからです」

「……」

夕立が兵器である意味を言葉にした。兵器だから食べてはいけない。恐らく■少尉に嫌という程思い込ませられたのだろう。しかしそんなルールなどこの鎮守府には無い。

「……そんな事、誰が決めたの？」

「人間様が決めました」

「私は名前を聞いているんだけど？」

「……■少尉から」

分かつてはいた事だ。

この二人が苦しい思いをして、兵器である事を強く頭に刷り込まれた事など。だからこそ提督は自分が救うように命令してくれた。な

らば灰色はこの二人を救わなければならない。夢を叶える為にも。

「そんなの■少尉が勝手に決めた事じゃないか。何で君達がそれに従う必要があるの？ 今の命令主は私じゃないの？」

「違います！ ですが……」

「やっぱりか」

「っ!？」

灰色の声が冷たく感じた。時雨と夕立は身体を跳ね上がらせ、顔が青ざめる。灰色は軍帽を外し、時雨と夕立を見つめた。

「君達……本当はそんな事、言いたくないんでしょ。本心が揺らぎつてるのが見え見えだよ」

「違います」

「いいや違わない。本当に君達が兵器だと言うのなら何故そんなにも悲しそうな顔をしてるの？」

「っ!？ す、すみません！」

夕立が慌てて灰色に謝る。しかし灰色は謝る理由が分からなかった。

「どうして謝るの？ 自然に出る事なら仕方ないじゃないか」

「知らずに勝手に表情を出したから……です」

「勝手に表情が出ちゃうんだ、仕方ないじゃないか。それでもそれを直せるようには出来るの？」

「はい、出来ます」

「どうやって？」

時雨と夕立は口籠る。出来ると言っても方法は分からないようだ。明らかに無理して答えている。

「……無いじゃないか。口先だけで根拠の無い事ばかり。何でそこまですいで兵器だと言わなきゃいけないと思うの？」

「すみません……」

「また謝ったね夕立。君も前は可愛らしい口調があったはずだよ、何で言わないの？」

「人間様の気分を害するから……」

「んじゃ前までの私達の気分はどうだったと思う？」

一週間もこの鎮守府に離れていたとはいえ、その前の記憶は残っている。今の発言とはまるで違う記憶が夕立の頭の中を巡った。

「私はとても可愛いと思っただけだね。ここには私と艦娘しかいないよ。艦娘でも気分を害するの？」

「いや全くだが」

「むしろ心地良いけど」

「夕立ちちゃんはあの口調じゃなきや落ち着かないかしら」

傍を通りかかった木曾、古鷹、足柄が証言する。そのまま三人は食堂の中へ入っていった。

「憲兵さんは？」

「こんな事を私が喋っていいのか分かりませが……私はとても睦まじく感じております。私個人としては貴方達には仲良くして頂けるとこちら働きのいがごございますので。では」

「それでも……出来ません。本当にすいま——」「謝るなよ!!」

灰色が突然怒鳴る。

「君達は何も悪い事はしていないのに何故謝るんだ!! 人の気分を伺うのがそんなに怖いのか!!」

時雨と夕立は反論出来なかった。

その通り、二人は命令主である灰色の表情をずっと伺っていた。嫌な目に会わないようにひたすらに気分稼ぎをしようとしていたのだろう。それだけ二人は■少尉にされた事が恐ろしく脳裏に焼き付いていた。

「……君達の事は白露から聞いている。秘書艦にされた時から無理してたんだろう。だったら何で言わなかったんだ!」

白露から時雨と夕立の本性はあの事件が起こった後に聞いていた。二人は無理して自分に近付いていた事、部屋では孤独に佇んでいる事。全てを知った灰色は何としてでも救わなければいけないと思った。

「嫌なら嫌だと言えればいいじゃないか!! 無理してまで俺に会い続けて、部屋では一人で泣いていて、苦しい思いをしてまで会わなかったいいんだよ……自由なんだからさ……!!」

自由という言葉を強く強調する灰色。それを聞いて時雨と夕立は身体を僅かに震わせる。灰色は少ばかり涙を流していた。

「本当にごめん……………君達の思いに気付かなかった……………！ 本当に謝るべきなのは……………俺なんだ……………！！」

「ツ!? 灰さん!?」

「やめてください!!」

「いいややめない!!」

時雨と夕立の前で土下座をする。自分が不甲斐ない所為で二人は酷い目に会ってしまった、会わせてしまった。今更許されるとは思っていない。

「……………嫌な思いをしながら一緒に仕事をして、あんな事に巻き込まれて、身体を傷つけられて……………俺の所為なんだよ……………全て……………！！」

「灰さん……………」

自身の所為で二人を苦しませてしまった事に負い目を感じていた。今まで気付かずに接していた自分を呪う程に。時雨と夕立と仲良く話していたはずがそれは逆効果であり、二人に嫌な思いをさせるだけだった。白露の事も合わせて一度謝りたい。己の無力さと不甲斐なさを痛感した上で謝りたかった。例え周りから自己満足だと思われるでも構わない。

「そんな……………！ 夕立……………？」

「助け——ツ!?」

「さっきの声……………夕立は!?」

「今さっき倉庫裏に誰かと……………」

確か聞こえた言葉は『助け』。誰かに助けを求めるような言い方だった。何か嫌な予感がする灰色は時雨と白露を連れて倉庫裏に向かう。するとそこに夕立を抱えた謎の男が走っていた。

「待て!! お前!!」

「チツ……………ガキは預かったア!! 一歩でも動いたら頭に風穴開くぞゴラア!!」

謎の男は夕立の頭に銃を向け、灰色達を脅した。フードを被っている顔がよく見えない。しかし声はどこかで聞いた事のある声だった。

次第に雨が振り、風が強くなる。フードで隠された顔が見えるようになった。

「お前は!?」

「ヒツ……!!」

駿河鎮守府の責任者、■少尉だ。

鼠色のパーカーに紺のジーンズを着ている。確か■少尉は大本営の留置所に囚われているはずだ。しかし何故かこの鎮守府にいる。更には銃まで所持していた。

「白露！早く提督を——」「させるかア!!」

提督に知らせようと白露が走ったその時、プシュツと掠れた音が鳴る。すると白露は突然転び、甲高い声を上げた。よく見れば白露の脛辺りに穴が出来ており、赤い血が流れ出ている。雨により出来た水溜まりが赤く染まった。

「消音筒か……!!」

「この銃弾は対艦娘用の徹甲弾が入っている……!! 例え艦娘だろうと命は無いぞ!!」

「ツ……!! 何が目的だ!!」

躊躇いもなく白露を撃った■少尉。どこまで性根が腐っているのか、人間以下だ。今すぐ夕立を助けたい、時雨と白露も助けたい。自由に動けるのは自分だけ。

「そこの時雨を寄越せ!! さもなくばコイツを殺す!!」

「させる訳無いだろ!! 夕立を解放しろ!!」

「するか馬鹿共!! 早くしないと殺すぞアア!？」

まさに一触即発。

ここにいるのは自分と時雨と白露、そして■少尉と夕立。提督を呼び出せば■少尉は何をするのか分からない。かといって自分が動けば時雨と白露、夕立が殺されるかもしれない。頭をフル活用し、今出来る事を精一杯考えた。どうしたら全員救えるか、■少尉を殴り飛ばせるか。

だがどれもデメリットが多過ぎてまともに考え切れない。すると灰色の前に時雨が現れた。すかさず灰色は時雨の肩を触れ、歩みを止

める。

「……灰さん。行かせて」

「駄目だ。もう二度とあの地獄に行かせる訳にはいかない」

「でも夕立が……」

「大丈夫、夕立も助ける」

勿論確証は無い。

それでもこの三人を救わなきゃいけない理由があった。例えそれが三人に対する償いだとしても、ただの自己満足だとしても。この困難に立ち向かわなくてはいけないと悟った。

「何でそこまで……？」

「……時雨。私、いや僕はね……多くの人を救えるヒーローになりたかったんだ」

小さい頃からひたすらに思い続けた。テレビで見た戦隊ヒーローや仮面ライダーを見ていつしか夢見る様になった。中学生でも、高校生でも、軍学校生でも、司令官候補生になっても。皆にその夢を隠して生きてきた。言えば馬鹿にされる事ぐらいは分かっている。所詮は子供の頃の陳腐な夢だと周りが言っていたように、自分もそんな風に考えていた。それでもその思いを断ち切れる事は出来なかった。

ならば振り返らずに目指してやろうと半自分暴自棄で海軍士官学校に入学した。必死に勉強し続け、東京大学を薦められるにまで頭が良くなるほど頑張った。ヒーローになる為ならどんな事でもしてやる。そう思い続け、いつしか自分も上に立つ者として敵と戦う事を待ち望んでいた。

「でもそんな事は出来なくて、ろくに艦娘一人も守れない。ヒーローにはなれない傍観者だった」

「ヒーローになりたかった!? おいおい笑わせるなよ!! お前みたいな権力も無い奴がヒーローだって!? いつまで小学生気分なんだバアアカアアア!!」

だがどこかで自分に才能が無い事は気付いていた。学校では自己より成績のいい人間が何十人も存在し、前の学校ではトップクラスの成績がこの場では中位程度。如何にこの世界で生き残るのが難しい

のかを思い知らされた。

時間が続く限り悩んでいた。自分はこんな事をしていいのか、ヒーローになりたくて入ったんじゃないのか。自問自答し続け、部屋で一人蹲っていた。

提督に選ばれる者は雀の涙程度。元々の才能はゲーム開始直後のステータス、更に才能を身に付けた者が提督として迎えられる。自分が司令官候補生になれたのは、駿河鎮守府にいる先輩の推薦だ。元々才能が開花していた訳では無い。ただのヒーローを夢見るだけのお子様だ。そのズルした結果がこれだ、今はこうして死との窮地に立たされている。

自分に力は無い。

人を助けるような力は無い。

僕はヒーローが助ける場面を見る傍観者だ。

あの提督と出会ってそう思ってしまった。

「……でも、もう傍観者でいるのはやめたいんだ。多くの人は救えるほど僕に力は無い……だけど君達を救えるヒーローにはなれるはずなんだ……」

「なアに戯言ほざいてんだア!!」

今度は時雨に銃口を向けて発砲。時雨を突き飛ばし、銃弾は灰色の右胸を貫いた。味わった事の無い痛みが灰色を襲う。初めて口から血を吐いた。右胸から迸るような熱さと痛みがじわじわと込み上げる。血が流れる右胸を手で抑え、灰色は■■■少尉を睨んだ。雨はより一層強くなり、軍服が赤く滲む。革靴が泥に塗れ、口から吐き出る血が雨と一緒に降り注いだ。

「グッ!!」

「灰さん!!」

自分が傍観者だって事は自分が一番良く分かっている。
どうせ力が無いのなら、自身を滅ぼしてでも人を救う。

自分が今最大限出来る事をするまでだ。この三人を相討ちで命を呈して守れるのなら、救えるのなら。喜んで神に差し出してやる。

「……例えば自分が自分が殺す運命だとしても!! 君達が望んでいない事だとしても!! 僕は!! 君達を救えるヒーローに!! なりたいんだ!!」

「ツ……!!」

灰色の必死の叫びに時雨と白露、夕立は目に涙を浮かべた。初めて心の底からヒーローになりたいと声に発した灰色。血を吐きながらも自身を指さし、堂々と訴える。

「だからお前なんか……!! ！ ここまでくたばる訳にはいかないんだよ……!!」

「ツ!」

銃撃を受けても尚、灰色はゆっくりと歩み寄る。血を地面に零しながら、精一杯の呼吸をしている。灰色の右胸は風が通れる程の半径二センチメートルの穴が空いていた。いくら人間といえど重傷では済まされない。それでも灰色は必死な目で■少尉に訴えた。

「ヘラヘラしながら艦娘達の自由を奪うお前なんか!! 負ける訳にはいかないんだよ!!」

「黙れ!! クソガキがア!!」

装弾数八発の銃弾が灰色の頬を掠め、左腕の肉を削り、太腿を貫く。三発が灰色の身体に命中し、灰色はその場でうつ伏せになって倒れた。銃弾を撃ち尽くした■少尉は息が荒れながらも銃を捨てる。

「ハアハアハア……手こずらせやがって……!! 来い!!」

「うつ……やめっ、うああ!!」

——嫌だ。

——またあんな地獄には会いたくない。

——初めて会うまで救いなんて要らなかったのに。

——初めて会うまで感情なんて芽生えなかったはずなのに。

——心が苦しい。とても悲しい。

——自分の人生に救いなんて絶対に無いと思っていた。

——無様に使用され、惨めに死ぬ。まともな死に方はしないと思っ
ていた。

——仲間も死んだ。妹達も死んだ。

——僕もその後を追い掛ける為に死にたかった。

——でもそんな度胸は無かった。

——何故、皆は僕を置いて先に行ってしまうのか。

——いつも一人になって残された。

——艦の頃の過去も、艦娘の頃の過去も。

——周りが居ても孤独感は全く消えなかった。

——例え仲間でも、姉妹だろうと、大切な人だったとしても。

——どうせ僕は惨めに死ぬ。

——そう思い続けていたはずなのに、提督と灰さんと出会って考え
てしまった。

——今まで必死に僕を救おうとしている。

——自身を犠牲にしてまで僕達を救おうとしている。

——こんな人がいるなんて夢にも思わなかった。

——だつたら僕だつて……！

「もう……逃げない!!」
「ッ!」

髪を掴まれたまま引き摺られる時雨は■少尉の足を両腕で抱く。片足を掴まれ、身動きが簡単に取れなくなった。夕立を抱えながらまず脱出する事は出来ないだろう。■少尉は泥に這い蹲る時雨を何回も蹴り飛ばす。頭や腕、背中や脇腹を泥まみれのスニーカーで蹴り続けた。

「クソッ……！ お前!! 離せ!!」

「……離す……もんか……!!」

「離せクソガキがアア!!」

壊れたくない。壊されたくない。もう壊れない。今まで不幸で凄惨な人生でも、僕の周りには救ってくれる人がいる。

もう嫌だつたんだ。

自分を苦しめる事なんて。

何も変わらない事ぐらい分かってた。

ただ逃げてたんだ。

でも……逃げてたから——生きたかつたんだ。

「絶対に……」 「ああそうだ……!! 絶対に離さない!!」
「ッ!」

死んでいたと思っていた灰色が泥に這い蹲りながら■少尉のもう片足を掴む。白く清らかな軍服は血と泥濘によって汚れ、右胸の風穴に泥が触れた。迸る激痛に耐えながら、灰色は決意を固める。

「絶対に……救うんだ……!! 死ぬ訳には……いかないんだアアア!!」

「足を!? うわッ!」

灰色は■少尉の足を掴みながら立ち上がる。足を掬われた■少尉は泥濘の地面に叩きつけられながらも、抱えた夕立をやめない。立ち上がった灰色は左手で■少尉の首を掴み、それと同時に右腕を後方へ引く。

「その手をオオオ……!!」

■少尉の首を持ち上げ、血に塗れた濁る声で灰色は叫んだ。

「離せエエエエエエエエ!!」

灰色の右拳が■少尉の顔面に直撃。地面に再度叩きつけられた

■少尉は白目を向いて、抱えた夕立の腕の拘束を解いた。

「灰さん……!」

いつの間にか雨が止んでいた。鼠色の雲から次第に太陽の光が差し込み、灰色達を照らす。灰色は殴った姿勢のまま、その場に佇んでいた。そして二人の名前を叫ぶ。

「時雨! 夕立! 白露!」

「っ!」

「君達は! 僕が……絶対に!! 守るッ!!」

光に照らされた灰色は苦しそうにしながらも訴えた。これ以上艦娘達のような悲しむ者が増えない様に。艦娘達を救えるヒーローになる為に。

「もう悲しい思いなんて流させやしない!! 君達は……自由なんだアアア!!」

鼠色の空からまるで水溜まりのような空が現れた。そこに太陽の光が満遍なく差し込み、灰色達を、荒くれ鎮守府を照らす。灰色の言葉に時雨達は目に溜めた涙を流した。

時雨達にとって初めてな事ばかりだった。初めて嬉しくて泣いた事、初めて救ってくれた人がいた事。抑えていた感情が一気に爆発し、盛大に咽び泣く。そして時雨は立ち尽くす灰色に答えた。

「うん……!!」

その言葉を聞いて灰色は笑顔を見せ、事切れる。しかしそこに摩耶が現れ、倒れ込む灰色を抱えた。そして提督や艦娘達が現れ、■■少尉を拘束している。灰色は重度の外傷で意識不明の重体だ。即刻に医務室で治療させる必要がある。灰色を抱えた摩耶は医務室に向かおうとした。その時提督はまだ意識がある灰色とすれ違いざまに伝える。

「よくやったな、ヒーロー」

そこで灰色の意識は完全に途切れた。

89. 「自由」

灰色と時雨達の件について、■少尉は憲兵達により拘束。大本営の留置所である人物と取引していた事から脱獄出来たらしい。一定期間は無縁の呉鎮守府で預かる事になり、常に厳戒態勢に入っている。また、■少尉の非人道的な行動の数々が世間に広められ、駿河鎮守府の責任者は灰色の先輩が担う事になった。

時雨と夕立を貶めた張本人である■少尉の供述により、駿河鎮守府に匿われていた経歴詐称の整備士、各鎮守府に異動していた憲兵三人と整備士二人は強姦未遂により逮捕。懲役六年が課せられ、刑務所にて服役している。そして写真を撮ったと証言した青葉は自ら解体を所望するも、青葉は利用されていただけだという声が多く解体は無かった事に。時雨と夕立と同じく六ヶ月の謹慎処分が言い渡された。

また大本営は駿河鎮守府に注目し、半年間は憲兵や整備士を監視するらしい。雑な福利厚生や最悪な衛生環境があらわになり、これから少しずつ直していくと先輩はインタビューで語っている。

灰色は■医師の集中治療により、命は取り留める事に成功。特に右胸の外傷は酷く、完全に治るまでは時間が掛かるとの事。まだ意識は回復しておらず、医務室のベッドにて眠り続けている。白露や時雨、夕立も外傷を抱えており、謹慎も兼ねてゆつくりと治療を受けるようだ。

「あー……朝なのに疲れた気分ってどういう事だか」

今日も面倒な一日が始まる。ここ最近は■達に動きが全く見られない。恐らくまた何か企んでいるのだろう。どちらにせよ何十倍にして返す必要がある。警戒は怠らない様にと憲兵隊に忠告した。

「提督、おはよー」

「おはようございます！ 司令官！」

「おっはー、提督」

「提督、おはようございます」

「……」

執務室までの歩く最中、今まで挨拶が全く無かった艦娘達が何事も

無かったかように元気に挨拶をしてきた。何か寒気がする。この艦娘達に一体何が起きたのか理解ができない。

「何か気持ち悪いな」

頬を引き攣りながら、腕を摩る提督。執務室に入ると秘書艦が手前で待機していた。今日から秘書艦が一人ずつ交代制になり、いつも通りなら摩耶がいたはずだが今日は違う艦娘だ。

「おはようございます提督。本日の秘書艦を務めます、神通です。よろしく願いますね」

「はいはい、よろしくよろしく」

適当に挨拶を交わし、椅子に座る。神通も提督の隣に座り、公務が始まった。神通から見て提督の書類解消の速度は凄まじく、一時間で既に半日分の書類を書き終えていた。

工廠の開発機構の改良依頼や他鎮守府から資材共有の受理、大本営からの遠征任務の報告書。また時雨と夕立の監視結果の報告書作成など真面目にこなしている。仕事中の提督は外見から見れば少し格好良く見えた。あの性格が感じられない程に真面目で、間違いがあればちゃんと指摘と訂正はしてくれる。

「神通、ここ間違ってるぞ。訂正しといたから、これ見て最初からやり直せ」

「す、すいません……」

「謝る暇があるなら手を動かすんだ」

「遠征から帰ってきたぜー!」

執務室からノックもせず天龍達が帰還してきた。ちょうど遠征任務から帰還し、報告書を作ってきてくれたようだ。

「報告書は作れたんだろうな」

「当たり前だっつーの!」

天龍は元気に答える。確かに報告書に間違いはなく、初めてにしては上出来だ。そのまま天龍は駆逐艦と一緒に執務室を出ていく。会話はドア越しでも聞こえるほど賑やかだった。

「……なあ神通」

「はい、何でしょうか」

「何か最近やたらと馬鹿共が親しく接してくるんだが、原因分かるか？」

馬鹿共とはつまり艦娘達の事だろう。以前よりも艦娘達が活き活きとしてる事について疑問に思っていたようだ。それを聞いて神通は驚く様な顔をする。

「え？ 〱自覚無いのですか？」

「いや無いけど」

思わず口を開きっぱなしにしていた神通。どうやら本当に自覚は無いらしい。

全国中継であるの言葉を言うのは勇気があるのに対して、提督は真面目に伝えていた。誰しもあの言葉に影響された事を提督は知らない。

「……それは恐らく提督に原因があるかと」

「俺は一体何をやらかしたんだ……」

提督は両手で頭を抱え、己の記憶を思い出させる。一体何があったらこんな事が起きるのか。記憶の棚を引きずり出して考えた。神通はその姿を睦まじく見ながらも、外の背景に視線を移す。

季節は既に夏、蟬の声が徐々に聞こえてくる。六月の梅雨は明け、太陽の光が地面を焦がした。海面は蒼く煌めき、雲一つない青空が広がっている。

「そういえば夏、ですな」

「ああそうだな。最悪の季節だ」

「これから暑くなるので、私のやりたい事として何か清涼器具とか設置してくれませんか？」

夏となれば気温が高くなる。梅雨では少し寒く感じたが、今では汗が出るほど暑く感じていた。勿論この執務室には完備しているが、艦娘達の部屋や講堂には無い。神通は自身の願いとして清涼器具を設置する事をお願いした。

「まあ考えてはいる。各部屋にエアコンを設置しようか検討中だ」

「ありがとうございます。電気代は大丈夫なのでしょうが……」

「その点については大丈夫だ。お前らの給料から引いてるので問題無い」

「提督！」

白露が慌てて執務室に入ってきた。提督の許可すらなく勝手に入室する艦娘達に提督はキレだす。

「何でノックもしないんだコイツらは!!」

「まあまあ……」

「灰さんが起きた!」

灰色が起きたと聞いて提督は目を丸くする。意識はしばらく不明だった灰色が目覚めたらしい。経過報告を聞いた提督は自ら進んで医務室へ向かった。

しかし医務室のドアの前で手摺に触れた時、動きを止める。

「……!」

「どうしたの提督」

何か感じたのだろうか。微動だにせずドアを開けようとしないう。何十秒かして提督は手をポンと叩き、何かを思い出したかのように声を上げた。

「そういえば明石達に電探が出来たと報告を受けていたのを忘れていた。神通、ついてこい」

「え? でも灰さんが……」

「いいから来い」

提督が半強制的に神通を連れていこうとする。何故か灰色に会わない提督に神通は首を傾げながらも後を追った。

すると医務室のドアから■■■医師が現れる。ちようど居合わせた提督と神通は足を止めた。

「あれ、■■■先生?」

「あら白露ちゃん、神通さんじゃない。それに提督まで」

「先生はどうしたの?」

白露に聞かれた■■■医師は医務室のドアを見たまま何かを考えた。言えない理由でもあるのか隠し事をしている様に思える。窓の空に視線を移した■■■医師は人差し指を上を指し、白露に答えた。

「……これから食堂に向かって早めのお夕食。邪魔しちやいけないからね」

「……え？ 何で？」

「それは入ったら分かるわ。白露ちゃん、貴方は入った方がいいと思うの」

「……？ 分かった……」

■ 医師に言われるがまま白露は医務室の中に入っていった。廊下に立つ提督と神通、■ 医師はそれぞれ目的の場所へ向かう。二人共に沈黙で会話すらず、お互いそっぽを向いている。肩を並べて黙り込む二人に神通は胃が痛くなりそうだった。

「……貴方が気を遣うなんて珍しいのかしら」

「随分と戯言も上手くなったようだあ、一度大型客船エスポワールに乗って金に目がない屑共に騙されてくるといい、少しは腐った頭も冴える事だろう」

「はいはいそうね。そうしとくわ」

「失礼……しまーす……」

「白露、白さんは？」

「何か用事があるってそっちに行っちゃった」

「そうか。あの人らしいな」

微笑みながら灰色は元気に喋っている。隣には時雨と夕立が座っていた。ベッドで上半身を起こしながら灰色は時雨と夕立と話を続ける。

「一週間も寝ていたみたいだね。心配させちゃったかな」

「そりゃ心配したよ。意識不明の重体だなんて聞いて心配しない方がおかしいじゃないか」

「そうだね。付きつきりで看病し続けたっぽい！ あ……！」

夕立がああの口調に戻り、思わず口を抑える。赤面しながら周りを見渡した。灰色と時雨達は頭にはてなマークを浮かべるも夕立の事に気付いてくれた。

「良いんだよ。ゆっくりで」

「う、うん……」

あまり会話が續かない。

お互い緊張しているのか目すら合わせなかった。

「皆、変わったね。初めて会った時よりも生き生きしてる」

「そうかな……」

「何か……照れちゃうな」

「まあそうかもね」

時雨達は初めて会った時よりも少しばかり雰囲気が変わっていた。光すら無かった目に輝きが戻り、笑顔も少しずつではあるが見れている。

「灰さんはいつ復帰出来そう?」

「んーまだ分からないかな。■■先生から絶対安静について口を酸っぱ

く言われたから」

「復帰したら……その……」

「どうしたの時雨」

時雨が顔を俯き、指を弄る。赤面している顔を見られたくないのか俯きながら話を続けた。

「僕が……秘書艦なのかな?」

「……かもね。私としてはとても嬉しいよ……あ! まだ嫌、かな?」

「い、嫌じゃないよ! そ、そっか……」

沈黙が續く。

そこに灰色はある事を時雨達に聞いてみた。

「……皆に……聞かせたい事があるんだ」

「え……何?」

「私の本心、聞いてくれるかな?」

灰色の本心。

聞くのは初めてだ。着任当時から皆に慕われ続け、時雨達の事を救ってくれた恩人の本心。時雨達は興味津々に答えた。

「うん……聞かせて」

「ありがとう……私はね子供の頃から多くの人を救えるヒーローになりたいって思ったんだ。でもそれは夢のまた夢で、私にそんな力なんて存在せず、夢は折れかけていた」

多くの人を救いたい。強大な敵に立ち向かい、人々から褒め称えられるヒーローに強い憧れを持っていた。決して人に褒められたいからヒーローになりたいのではなく、多くの人を救いたいのが為の憧れ。

しかし実際は人が創った幻想に過ぎず、力や才能が無ければ何も出来ない。自分は傍観者でしかなかった。

「だけど諦めたくはなかった。自身の未来を飾るヒーローを目指す為に色々な努力をしてきたんだ。でも世間から考えればいい歳した大人がヒーローになりたいだなんてそんな幼稚な夢は馬鹿にされて当然で、周りから隠して生きてきた」

「誰にも言わなかったの？」

「うん。白さんと出会うまではね。でもそんな調子じゃ変わらないと思っただけで白さんの前で本心を口にしたんだ」

初めてこの鎮守府に着任した時、提督の目の前でヒーローになりたと言ってみただけ。勿論緊張で汗は止まらず、馬鹿にされるのが恐怖だった。しかし予想とは真逆で提督は否定はしなかった。

「実はあの時嬉しかったんだ。否定はせずとも厳しい道だと覚悟しろと言われて、自分はやっと一歩を歩み出せたって喜んでた」

そしてその時はやってきた。時雨と夕立が無実の罪を着せられ、大本営に連行される時は本当に時雨と夕立を救いたかった。彼女達の精神状態や心の傷の深さを理解した灰色はどうしても動きたかった。

そして提督と灰色は負けてしまい、時雨と夕立を救う事は不可能に。謹慎処分を受けた灰色は地元の駿河に戻る羽目になり、時雨と夕立からより遠のいていく。

しかし灰色は諦めなかった。隊長から渡されたメモ書きと疑惑の駿河鎮守府を調査し、何とか原因突き止める事に成功。その後は提督の活躍により、時雨と夕立を救う事が出来た。

「あの■■■少尉が来て、夕立達が殺されそうになった時。私はそこで決心したんだ」

その遅めの決心は自身を揺るがせない大切なモノだ。多くの人を救えるヒーローになるのではなく艦娘達のヒーローになるという目的の移り変わりがあり、今自分に出来る事を精一杯に考えた。結果的

に夕立達を救う事は出来たが、本人達から自分はとうだったのか。改めて聞きたかった。

「どうかな……？ 私は君達の……ヒーローになれてるかな？」

救った本人から聞くのは野暮だろうか。それ以前に夕立達を救っていたのだろうか。何せ時雨の返事と提督の声を聞いた後は何も覚えていない。心臓の鼓動音が大きく聞こえるほど緊張した。

「……うん。灰さんは今も僕達の立派な……ヒーローだよ……！」

「そっか。ありがとう、嬉しい」

少し照れくさそうにしながらも笑顔は絶やさないう灰色。思った以上の答えに涙が出ていた。目に溜まっていた涙を拭い、笑って誤魔化す。

——良かった。

——自分は、ヒーローになれたんだ。

「はあく本心が言えて良かった！ とてもスッキリした気持ちだよ」

「……灰さん！」

突然夕立が椅子から立ち上がる。灰色の顔をずっと見つめ、右手で左胸を抑えた。灰色は何か世間話かと素直に話を聞く。

「ん、何？ 夕立」

「その……私も……本心……聞いてくれるかな……？」

「ぼ、僕も！」

灰色の影響か、時雨と夕立も本心を聞いてほしいと頼んできた。よく見れば二人とも緊張している。灰色が緊張で心臓の鼓動音が大きく聞こえたように時雨と夕立も身体が震えていた。

「本当はね……夕立は人間の事が嫌いだったの。今まで色んな事が

あつてどうしても信用が出来なかつたっぽい……でも今は違うの！
今は……提督さんと灰さんは……少し違う……っぽい……」

「ぼ、僕もね、夕立と同じで人間が嫌いだけど……今は違うんだ……！
今も少し怖いけど灰さんと提督は別だよ。秘書艦も続けたいし
……！　　いい一緒にいたいって思ってるよ！」

白露はその光景を驚きながらも見守った。本心を誰にも話さない
二人が人間の目の前で話している。緊張で声は途切れ途切れでも、二
人にとっては真剣だ。

「……そつか。でももつと聞きたいな、君達の事。愚痴でも何でもい
い、全てを言つてほしいな。君達の事、もつと大好きになれそうなん
だ」

大好きになれそうだ、そんな言葉を聞いたのは初めてだった。

思いがけない言葉に思わず二人は動揺する。澄んだ瞳から自然に
涙が零れ、咳が漏れそうになった。話すのが難しくなり、途切れなが
らも正直に今までの事を吐き出す。

「本当は……ほんつ、どうは……とでも……怖がつだ……！」
「辛かつたね」

「何も楽しくなくて……地獄のような……日々だったああ……！」
「ごめんね、傍にいられなくて」

時雨と夕立は灰色の胸に抱きついた。灰色は二人を優しく抱擁し、
それぞれ頭を撫でる。

今までこの二人が経験した事に凄惨以外の言葉は無い。

人にあらぬ扱いを受け続け、か弱い身体を弄ばれ、何度も痛めつけ
られた挙句、無実の罪を着せられ、死を彷徨う羽目になった。救いも
無ければ希望も無い。地獄から抜け出す蜘蛛の糸すら存在しない。

だがしかし、そんな二人にも光はあつた。

「でももう大丈夫、私がいるから。君達をもう酷い目に合わせはしな
いよ、絶対に」

「本当に……？」

「ああ本当さー！　だって私は皆のヒーローだからね」

その光は小さくも周りを照らし続け、どこまでも伸びていく。灰色

という存在が光となり、遂に時雨と夕立を照らしたのだ。

「よしよし……今まで辛かったよな。よく耐えてくれたね……君達は頑張った、とてもよく頑張った」

灰色は言葉が続く限り、二人を慰めた。

泣きじやくる二人はまさに子供のようだ。

「泣きたい時は泣いたって構わない。笑いたい時は笑っていい。君達は自由なんだから……」

自由。

意味がある様で抽象的な言葉。恐らく世界中の人間はこの言葉の意味を決める事は出来ないだろう。何故なら自由の定義を考えるのはその人の価値観によるものだからだ。正解など存在せず、一つだけとは限らない。時雨と夕立がこれからどんな自由を過ごすのか、それは二人にしか知らない。

「これから楽しい思い出をいっぱい残そう。悲しい過去なんか忘れるくらい、君達に最高の笑顔が見られるような日々が送れますように……君達の本心が聞けてよかった。ありがとう、時雨、夕立。そして

白露」

「っ……何？」

「来ていいんだよ」

白露も思わず涙ぐみ、二人同様灰色に抱きかかる。医務室に三人の泣き声が響いた。

今宵は満月、雲一つない夜空が広がっている。

しばらく雨は、降らないだろう。

Part 6. 捲土重来のバイオレットパール

90. 深夜は右手を上下前後に動かす人が多い

「今日はやけに空気が澄んでいると思ったら馬鹿共が二酸化炭素を排出していないからだったようだなあ摩耶。遅刻なのかな?」

「そんな所だろうな。提督にお礼がしたいって灰と時雨達が朝の食事を用意してくるって食堂に向かっていったぞ。まあ提督には内密に言わないでほしいって言われたけどな」

「もう言ってるんだが摩耶」

灰色達の隠し事を何気なく喋る摩耶。執務室には提督と摩耶が仕事をしていた。灰色と時雨は姿を見せず、今日の秘書艦である霞もいない。霞は寝坊して遅刻な為に代わりに摩耶が手伝ってくれている。

「言わないでほしいと言われた時には言っただけほしいという裏の考えがあるんじゃないかってあたしは解釈したけど」

「絶対に違うと思うけどな」

—— 食堂厨房内。

「えーつと……コレはコレで……」

「まずいよ! 提督さんが来ちやうつぽい!」

「はア!? マジで!? 早く用意しないと!!」

外を見張っていた夕立が知らせに来た。どうやら勘づいた提督が食堂に向かって来ているようだ。まだ用意が出来ていない灰色達は急いで手を動かす。

「どオコにいる馬鹿共!! 仕事を放ったらかして何食堂の調理房を彷徨ってるんだ!! さっさと持ち場に戻れ!! 作った奴を持って来ーい!!」

「イイ感じに作ってるからもう少しだけ……!」

「おーい灰、なアに人にも知らせずに隠れて調理してんだ? お前の仕事は事務処理だろうがあ、料理人になったつもりか!!」

堂々と一人席に座り、灰色に説教する。誰もいない朝の食堂に大声が響いた。

「どうしても白さんにはお礼がしたくて……時雨達の意見を尊重したんです。お願いします」

「本当は三ツ星レストランと鳳翔達以外の飯なんぞ熱帯林のぬかるんだ土より食いたくないが今は腹の虫が渴望していて仕事に集中出来ない、早く出したまえ」

「は、はい!!」

テーブルに足を乗せ、作った料理を持って来いと命令する。朝食の時間帯になり、そろそろと艦娘達が食堂に入ってきた。先に来ていた熊野、鈴谷、最上は提督と灰色の一部始終を目撃する。

「今日もまた提督が暴れてますわね」

「まあいつも通りだよね」

「もう慣れたような気がする」

「そこで犇めき合ってる馬鹿共はさっさと横須賀鎮守府のおつかいという名の遠征任務に行つてこい!! ドレミファソラシドの音楽を鳴らしながら、健気なクソガキを遠くから舐め回すされるうに見られてくるといい!!」

「出来ましたよ提督」

ようやく出来たのか白露達が作った料理を持ってきてくれた。机に乗せた足を降ろし、テーブルに並べられた定食を置かせる。見たところは一般的な朝食と相違ない。何か違和感を感じるも箸を持つ事にした。

「その……僕達のお礼として……これぐらいしか出来ないけど……食べてくれるかな?」

「何を作ったか詳しく言いたまえ」

「鮭の塩焼きと鮭フレーク、鮭のおにぎり二つに鮭の——」「鮭ばかりじゃないか!!」

鮭のバーゲンセールに嘆き、箸を投げる提督。突然の怒鳴り声に時雨達は身体を跳ねらせる。提督は箸を拾って、自身のハンカチで丁寧に拭いていく。

「もしかして……鮭が嫌いだった？」

「いや嫌いじゃない。だが少しばかりバリエーションは無いのかと思っただけだ」

「提督は魚が好きだって前に聞いたから、こういうのが良いのかなって思ったばい」

「食べてみなきゃ分からないよ提督」

「っ……いただきます」

提督は手を揃えて、用意された定食を食べる。黙々と何も喋らない提督に灰色と時雨達は思わず唾を飲む。性格が捻くれた提督だ、何を言ってくるか分からない。もしかしたら悪口が殆どになる可能性もある。やがて全て食べ終え、口を拭う。

「……不味かった」

「美味しそうに食べておいてその言い草!？」

「ご馳走様でした」

「さりげなく全て食べ尽くしちゃったよこの人!!」

提督の訳が分からない感想にツツコミを入れる時雨達。不味いとはいえ全て食べている提督に頬を引き攣る。素直なのか素直じゃないのかよく分からない。提督は素早く立ち上がり、軍帽を被る。

「さてエネルギー補填は完了だあ、仕事を始めるぞ」

「今日の秘書艦は？」

「私よ！ 見えないの!？」

「下にいたのか、気づかなかった。小さ過ぎて」

執務室に入った提督は霞を嘲笑うかのようにからかう。霞と同じ目線に合わせてほくそ笑んだ。霞は赤面しながら身体を震わせる。

「何よ!! もうちよっと周りを見渡したらどうなの!？」

「周りを見渡しても見つからなかったんだあ、それだけ小さいのだよ。もうちよっと頭の中を整理したらどうだー?」

「ごっのおお……!!」

「はいはいそこまで」

二人の唾み合いの途中で摩耶が止めに入る。提督と霞は執務机にそれぞれ座り、仕事を始める。執務室には提督と霞、灰色と時雨が書類を書き進め、摩耶と夕立は応接間のソファにて休憩していた。

「摩耶、霞は仕事手伝るのか？」

「一応読み書きは教えたし、流れも伝えてはいる」

「ったく……どんな性格してんのよ……本っ当に最悪だわ！」

「今更後悔しても無駄だー、さっさと手伝え年中反抗期の幼稚園児」

霞が書き終えた書類を無理矢理奪い、間違いが無いかな凝視する提督。頼んだ書類はどれも簡単なものだ、慣れない艦娘に相応しい。

「誰が幼稚園児よ!! 私だって仕事ぐらい出来るわよ、バカにしないで!!」

「へえ〜そうとは思わんがねえ〜」

霞が背中に隠していた教科書を奪い去り、人差し指である文字を指さす。そこには幼稚園から出来ると書かれた見出しが。提督の顔を見れば見下すように嘲笑っている。

「うるさい!! 早く貸しなさいよ!!」

「相変わらずですね、白さんは」

窓際の机には灰色と時雨が今日分の書類を書いていた。以前と違って時雨や夕立は活き活きしている。すっかり灰色を信用されているようだ。

「なアに睦まじく眺めてるんだ、手を動かせこの深夜アニメ主人公!!」

「し、深夜アニメ主人公？」

「あまり気にしなくていいと思うよ」

灰色は突然の罵倒に戸惑う。幾度となく罵倒された艦娘達を見てきている時雨達にとってはいつもの光景だと平然としている。

「しかし、ここも色々と変わりましたね」

「憲兵や整備士達の偏見は少しずつ解消されてる。ゆっくりではあるけどね」

「そう言いながらもベタバタとイチヤイチャしてるのは目障りだなー」

灰色と時雨の馴れ合いに提督は吐き気がしている。人間の艦娘の

イチャコラなど一番眼中に収めたくない光景だ。正直に言つてぶち
転がしたい程である。

「あれれ〜提督さん、嫉妬してるの〜?」

「黙れ駄目犬、さもなくば猿轡と首輪付けて犬小屋に閉じ込めさせるぞ」

「ちよつと! 仕事は!?!」

「お前より早く終わってるので問題無し。何だー? 手伝ってほしいのかー?」

「そ、そんな事言つてないわよ!!」

提督は仕事を先に終え、応接間のソファにて珈琲を飲む。忙しそうに霞が注意するも、提督に仕事を手伝わせられるのが癪なのかそっぽ向いた。

「何かと提督と霞つて相性良さそう」

「えーそうかなあ」

「提督ー入るぞー」

執務室に天龍が入ってきた。右手には指で挟んだ手紙を持っていく。天龍はソファに座り、さりげなくお菓子を食べた。

「大本営から手紙が来てたぞ」

「また厄介事だったらこの拳銃で蜂の巣にしてやる」

提督は腰の拳銃を持ち出し、舐めるように脅す。摩耶に注意されながらも手紙をゆっくりと開く。内容が気になるのか灰色や時雨達も提督の背後に回った。

「各鎮守府の戦力強化の為、練習巡洋艦の配属を決定。後日、練習巡洋艦鹿島を配属する……へえー……」

「練習巡洋艦、ですか? 良いじゃないですか! 訓練が更に充実しますよー!」

「かもな」

提督は手紙を机に放り投げ、足を乗せる。怒りもせず、ましてや苦言も言わない提督に灰色は違和感を感じた。何か怪しんでいるような、訳ありの表情をしている。

「かもつて……何かあるんですか?」

「多ありだ。このタイミングで練習巡洋艦を配属させるとしたら表向きには戦力強化の為と言えば騙せる事だろう」

「何よ……また怪しい事が起きるって言いたいのか？」

「お前らは一体何を見てきたんだ、先週にその馬鹿共が騒ぎを起こしたばかりなんだぞ。だとしたら考える手は一つ、監視と調査だ」

馬鹿共と言われて時雨と夕立が気まずい表情をしている。提督が言うには練習巡洋艦である鹿島が来るのは監視と調査が目的だと言う。

「監視と、調査……？」

「そうだ。各鎮守府内の治安状況、経営状況や艦娘同士のコミュニケーション、憲兵や整備士の行動監視、目的は様々だ」

「もしかして……何か問題があれば大本営が自ら動く、という訳でしようか？」

先週の事件を受け、大本営は各鎮守府の様子を警戒する様になった。時雨や夕立が襲われた様に艦娘を貶める者やその逆を把握し、取り締まる必要がある。万が一にでも艦娘に関する事件が全国に広渡れば海軍はまた信用を疑われる羽目になるだろう。これ以上面倒な事は嫌でも起こしたくないのだ。

「そういう事だ。そこにいる馬鹿共の様な事を未然に防ぐ為、予め調査しておくんだ。問題があれば解決の為に大本営直々に矯正される。場合によっては大本営直轄の憲兵隊が動く事もあるだろう」

「では何故表向きに言わないのですか？」

「もう少しは考える頭を持つ事だ、深ア二主人公。表向きに言ったとして問題がある鎮守府は来る前に必ず隠すだろ。それを防ぐ為だ」

調査しますと言われて隠し事をしている鎮守府は黙ってはいられない。何かしら手段を投じ、隠し通すだろう。そうなれば調べるのは不可能すら有り得る。

「提督、ここは大丈夫なの？」

「大丈夫な訳無い。つい最近まで騒ぎを起こした鎮守府だ、真っ先に目をつけられるに決まってる」

時雨と夕立の件以降、この鎮守府の印象は停滞している。真実が明

らかになっても尚、一度持ったイメージからは離れないようだ。以前の様にマスコミやメディアは来る事は無くなったが、また何か仕出かすのではないかと目をつけられている。

「また何か起こりそうですねー」

「他人事だと思つたら大間違いだぞー。君達はさつさとその書類を片付けたまえ、口を動かしてばかりで手を動かさないとはどういう見だ!! 大学生まで夜な夜な飽きる程動かしていた癖に、軍人になってからはやる暇無いから別の口を借りてやりますってか!! 子供の時代は終わったんだ!! 早く仕事を終わらせる深ア二主人公!!」

提督は机に置かれた軍帽を被り、執務室を出ようとする。途中で霞に止められ、歩みを止められた。

「ちよ、どこ行くのよ!!」

「憲兵寮だ、霞も来い!!」

「少しは待ちなさいよ!!」

ドアを強引に開き、提督と霞は執務室を出ていく。一気に静かになった執務室に灰色と時雨、夕立と摩耶と天龍は呆気ない表情をしている。思わず手に取ったお菓子を落としてしまった。

「八つ当たりだなありや」

「八つ当たりですね」

「うん、八つ当たりだね」

不器用な八つ当たりを目の当たりにした五人はそのまま気にせず、に持ち場へ戻っていった。

「ちよつと、待ちなさい!! 歩くの早いつてば!!」

「なら俺が抱える!!」

「えっ」

早歩きで提督に息切れそうだった霞は提督の軍服を引っ張って止めようとする。しかし提督は突然霞を抱きかかえ、左腕全体を使って掴まれた。このままでは提督の正面から自身の下着を見られてしまう。

「まままままだ私は何も言っていないでしょ!! ちよつと……!!」
この、離しなさいよクズ!! 誰かに見られたら勘違いされるでしょうが!!」

「いいから黙って来い幼稚園児!!」

「もう何も聞かないじゃない!! このクズどうにかしてよ!!」

無理矢理暴れて提督から離れようとするも何故か力が強くてまともには抜け出せない。強引な提督に霞は廊下で嘆いた。

「提督……つて、何してんのさ……」

「気にするな」

「いや気にするでしょ、どう考えても」

講堂を通っていた提督と霞は途中で飛龍と蒼龍に出会う。傍から見れば提督が霞を抱きかかえ、下着をチラつかせているようにしか見えぬ。霞に至つては無造作に暴れている。

「離しなさいよ!!」

「この幼稚園児が歩くの遅いから持ったら殴られた」

「誰が幼稚園児よ!!」

「持ったらつて……何もそんな持ち方は無いよ」

「なら何がいいんだ」

「これとかどうです?」

蒼龍は一旦提督と霞を離し、拘束を解く。そして背後に回り、提督の肩に霞を乗せた。これではまるで親と子供の肩車である。

「「これのどこがいい持ち方だ（よ）!!」」

「おおシンクロした」

「暑苦しい!! 落ちろ!!」

「こつちこそ願ひ下げよ!!」

提督達の光景を艦娘達はまじまじと見ている。講堂にら多くの艦娘達が楽しく話し合っていた。勿論■■■■達も奥で座っている。

「こんなんで秘書艦は務まってるのかプリンツ」

「大丈夫だと思いますよー」

「仲は相変わらず最悪のようだけど」

「霞さんは気難しい性格なので、人格破綻者の提督は唾み合うのは当

たり前かと」

長門と加賀が二人の様子を不安がる。あれだけ喧嘩していると仲も悪くなるだろう。いや提督ならば簡単な事かもしれない。そもそも提督は艦娘達とは馴れ合うつもりは無いと明言している。実際それが出来ているかと言われれば否定は出来ないが。いよいよ提督は霞の服を引っ張り、地面に引き摺らせている。

「引き摺るなあ〜!!」

「まあアレで暴行しない霞さんもまだまだですね」

「提督殿！ わざわざご足労いただきありがとうございます!!」

「隊長はどこにいる」

「■■隊長であればこちらに！」

憲兵に隊長室を案内され、中へ入る。奥に憲兵隊隊長■■大尉が待ち構えていた。珍しい提督と艦娘の登場に少々驚き気味である。

「むむ、どうしましたか白提督殿」

「これを読め」

霞が持ってきた手紙を取り出し、机に投げつける。勿論手紙の内容は練習巡洋艦の配属について。直接提督が呼び掛けるより、隊長に注意してもらった方が早い。隊長は手紙の内容を不思議そうに読んでいる。

「練習巡洋艦の配属……ですか。これが何か？」

「この練習巡洋艦が近々配属され、お前らを監視する。理由と原因は言わなくても分かるよな？」

「っ……確かに見張られてもおかしくはありませんね。部下達に知らせておきます」

「理解しただけなによりだ」

憲兵隊隊長は礼儀正しく真面目な人物だ。煩惱という言葉が見当たらないほどの真面目さで部下には厳しく、自分にも厳しくと熱血漢な所もある。また部下や艦娘、他人には優しい場面もあり部下からは慕われてる他、艦娘からは一部打ち解けている者もいるようだ。

続いて提督と霞が向かうのは工廠。金床同士が衝突する音が響き、

他人の声が届かないほどだ。今はどうやら電探を開発しているらしい、整備士であるはずなのに。

「白髭ー!! 話があるんだけどー!」

「はーいー!? 何て言ったんだー!」

「だーかーらー!! 話があーるーのー!!」

「大きな声で言ってくれい!!!」

「はーなーしーがー!!」

「こんなバカうるさい所で大声出しても無駄だ。あの老害は元から耳がやらレギヤツ!!」

「あーすまんすまん。つい手が滑ってしまったわ」

「最初から絶対聞こえてたろ」

「歳を取り過ぎると耳が遠くてな」

「んじゃ何で俺のは聞こえたんだよ」

提督の額には大きなたんこぶが出来ている。悪口を言った途端に金床を投げられ、提督の額に直撃したようだ。納得いかない提督はジト目で白髭を睨んでいる。

「んで話つてのはなんだい?」

「……霞」

今度は霞に手紙を差し出し、白髭に見せる。憲兵隊隊長と変わらず同じ内容を白髭に教えた。

「練習巡洋艦の配属か……これがどうしたんだ?」

「この練習巡洋艦がお前らを監視するんだ。理由と原因は言わなかったって分かるだろ?」

「……成程。分かった、注意しとこう」

——深夜二時。

「来たな瑞鶴」

「来たわよ」

「例の物は?」

「ちやんとここに」

「……よし。こじ開けるぞ、摩耶」

「了解」

「……やはり俺の予想は間違っていなかったらしい」

「これがこの鎮守府と大本営の……」

——……闇だ」

提督が手に持つは一枚の写真。

写真には、

大きく写された存在？ a ？と傍には秘書艦と思われる■ ■がいた。

91. 【このファイルに重大なエラーが発生しました】

「そ、そんなッ……」
「……」

黒い箱の中身を確認した一同は驚きの表情を隠せずにいた。提督でさえもその表情を浮かべ、そしてニヤリと口角を上げている。中に入っていたのは一枚の写真と一つの束ねられた書類。

「提督……」
「……この資料で全て把握出来た。この鎮守府には元々いたんだよ、軍人が」

提督は束ねられた書類を手に取る。ホツチキスでまとめられた書類には驚愕の真実が事細かに書かれていた。それがまるで幻想に思える程、提督は手を震わせる。

「何故前任が新たな深海棲艦の親玉になったのか、それはある目的からだった」
「目的？」

深海棲艦と艦娘が現れたその当時、解析不能とされていた技術を軍は一から解明しようとしていた。深海棲艦という存在、艦娘という存在、どちらも現実世界ではイレギュラーな存在であり、小型化された艦載機や艦装の仕組みは全く分からない。どれも女性の姿をしながら自身の意思で攻撃可能、海を駆ける事が出来る。現代の科学技術では到底追いつけない、遙か未来の技術が駆使されていた。

当然軍は恐れた。
遙か未来の技術を駆使した兵器に勝てる作戦は無い。今は深海棲艦という敵が存在し、人間を敵視する事は無いだろう。だがやがて深海棲艦という存在が消滅し、艦娘だけとなったこの世界で戦う為に生まれてきた自我のある兵器達は次に誰と戦うか。
誰もが簡単にその結果に辿り着いた。

「次の敵は……我々人間に違いない、と……」
「ッ!？」

何故当時の軍はそう思ったのか。

理由は明白だった為にそう思えざるを得なかったのだ。もし人類と艦娘が敵対すれば、人類に勝ち目は無い。圧倒的な機動力と戦闘力を前に人類は地にひれ伏す他は無かった。当時の軍の技術では深海棲艦は勝てない、つまりは艦娘にも勝てないという認識から生まれた物だった。

「そんなのでつちあげよ!! 私達が反抗するはずないじゃない!!」
「今のお前らはそう思って当然だ。だが昔のお前らはそれだけ俺らにとって脅威でしかなかったんだよ」

だからこそ軍は徹底的に艦娘を支配させた。偶然にも提督という存在を艦娘達は欲しており、支配する上ではこの上ない機会だった。そして兵器と決めつけて感情を無くす事で人間からの反抗意思を消失させ、将来深海棲艦が消えたとしても反抗する事が無いように軍は指示を出した。

これが後に続く艦娘兵器思想の始まりになる。

後は深海棲艦をどうするか。

艦娘達が戦っている相手として今は時間稼ぎをしてきているようなもの。いつ滅んでいくのか分からない。

生誕も謎でしかない連中だ、どうする事も出来なかった。しかしそこにちようによく深海棲艦の提督らしき人物の発見が目撃された。

そこで各国の軍は軍と通じる事が出来る者を深海棲艦の提督として着任させ、互いに情報を共有。お互いを戦わせる事で相討ちにさせ、この世から深海棲艦と艦娘を消滅させる計画を立案した。

その計画の名は『人造人間型生体兵器完全消滅計画』、通称『ABC計画』。

計画に基づき、各国の軍は艦娘達を使って深海棲艦の提督を徹底的に追い詰め、ようやく確保に至る。深海棲艦の提督という椅子が空き、誰が操るのかという国同士の会議で日本が選ばれた。

選ばれた日本海軍は誰が操るのかを決める為に一度、各鎮守府の提督達を招集。当時荒くれ鎮守府の提督だった存在？α？は何らかの方法でその事を知ってしまい、上層部に訴えてしまった。極秘情報だった為に世間に知られてはまずいと上層部は暗殺を計画。その暗殺を実行したのは存在？α？の部下であった前任だった。

前任は上層部から存在？α？の暗殺を承諾し、暗殺を試みる。しかし――、

「この資料を見た通り、暗殺は失敗している。だが……」

暗殺に失敗した前任は次に艦娘に殺させる様に計画した。どちらにせよ殺した所で隠蔽され、表沙汰には広まらない。上層部から保障されている以上、殺し方は自由だ。そこで前任は存在？α？の秘書艦だった■■■を利用し、■■■に事故の様にして殺害させる方法を考えた。結果、作戦は成功し、■■■は存在？α？を殺害。事件は上層部によって表沙汰には■■■■鎮守府憲兵殺害事件と呼称され、存在？α？や■■■、前任は表に出る事は無かった。

そして上層部の計画が始動。初め前任は荒くれ鎮守府の提督として着任し、深海棲艦と繋がるまでは自由にしていた。艦娘を兵器として蔑み、自身は神様だと思ひ込むような自尊心の塊で荒くれ鎮守府の艦娘達の精神は大きく歪み始める。元帥が変わっても尚、前任はその事を隠し続けた。ようやく深海棲艦と繋がる事が出来た前任は鎮守府を捨てる様に夜逃げ。この鎮守府に爪痕を残したまま、去っていった。

「だが上層部とはいえ必ずしもそう思える者はいなかった様だ」

黒い箱の中身には写真と計画書の他にメモ書きが内封されていた。メモに書かれていた言葉は、『これを見た者へ託す、この世界に抗え』。そして最後に現在は■大将の名前が。当時は中将だったのだろう、ならば上層部には詳しいはずだ。

「これはあの男の……」

「成程、これを残したのは■大将か。恐らく誰かに止めて欲しくて託したんだろう、次の後継者に」

「後継者って事は提督に？」

「かもな。アイツは元からのこの事情を知っていた、そしてその闇を暴く為に元帥と俺にだけ知らせたんだ。黒幕にバレない為にな」

黒幕にバレない様に隠した黒い箱。頑丈に施錠され、鎖で封じられたこの箱を■大将は資料室のどこかに隠したのだろう。次の確かな正義を持つ者へ託す為に。

「その黒幕ってのは……」

「この世界の“人間”だよ」

「ッ……!!」

この世界にいる人間を黒幕だと示唆する提督。あまりにも無謀且つ、詭弁過ぎる解答に摩耶でさえも疑問に思った。提督は黒い箱ごと応接間に持っていき、テーブルに置く。そのままソファに座り、リモコンでテレビをつける。今まで自分が纏めた資料と照らし合わせた。摩耶やプリンツ、瑞鶴もソファに座り提督の話聞く。

「人間の誰もがそう思ってしまった。一度思いついた思考からはそう簡単に抜け出せない。思考はやがて周辺に感染し、艦娘は脅威だと信じて疑わなくなってしまうた。何故ならそれを目の前でお前らが実践していたから」

深海棲艦に侵略されていた当時、突然現れた艦娘という存在は世界の在り方を大きく左右させた。今まで対抗出来なかった深海棲艦をいとも簡単に倒し、圧倒的な戦闘力や機動力で海域を制圧した艦娘は良くも悪くも人間からのイメージを変えてしまったのである。

「人間は他の人間の空気に流されやすい、故に思考の感染も早い。今でも艦娘は兵器だとか人間だとか言い争っているのも、違う思考の感染による衝突だ。誰かが最初に決めた事を否定もせず肯定し、違う事に気付いた時には既に遅く、対立しながら言い争うんだよ。愚かな人間達は」

『艦娘はどちらだと思いますか?』

『艦娘が兵器か人間か? 兵器に決まってるでしょう』

『ああいうのは兵器でいいんだよ』

『僕は人間でいいと思いますけどねー……』

『兵器じゃなかったら何なんですかアレは』

『人間の方がいいと思います。はい』

テレビではインタビュで艦娘は何なのかを問い掛けていた。艦娘は兵器か人間か意見が別れている。

「敵は人間って……これからどうすれば……」

「当時の上層部は殆ど病で死んでいるのに対して何故か計画は進んでいる。だとすればこの計画を進めているのは世界各国の軍にいる上層部の人間達。いくら立ち向かってた所で無理がある。しかもお前らに聞かなければならない事が出来た」

「聞かなければならない事?」

提督は神妙そうな顔で摩耶達を見る。

この計画書に今も躍らされている艦娘達の運命はもう決まっていた。いずれはこの世からいなくなる、つまりはこの世界から存在しなかった事になる。

愚かな人間達の憶測な思考によって理不尽に淘汰され、何事も無かったかのように世界はまた戻るのだ。自我を持つ兵器はこの事実を知り、どう思うのだろうか。

「もしこの計画を阻止したとして、お前らや深海棲艦はどうなるのか。当然各国の軍は黙っていられないだろう。どんな手段を投じてくる

か分からない、もしかすれば艦娘に対抗できる武器で殲滅されるのかもしれない。俺や元帥、■■大將は殺されるかもしれない。日本が非難されるかもしれない。そうなった場合でも、お前らはどうする？」

計画を阻止したという事は世界を敵に回すようなもの。例え力を持っていて提督や艦娘達でさえも、世界を相手に出来るのか。今までこの計画に触れたマスコミやメディアが消えた様に存在ごと抹消される可能性すらある。昔は艦娘に対抗できなくても今は対抗しうる武器がある。例え計画が頓挫しても一箇所に集めた所に新たな人類の叡智の兵器と炎で消される事だろう。

実際は深海棲艦や艦娘は滅ぶべきなのかもしれない。元々イレギュラー的な存在だ、自分達がいなくなれば世界はまた平和になる。世界は元通りの世界へと変わるのだ。

だがそこで自我を持っている艦娘はどう思うのだろうか。今まで国の為に戦い続けており、平和を心の底から願っている艦娘達が、この世界にいなくなる事で平和になるという真実。

全く皮肉でしかない。

当然摩耶達は葛藤した。このまま生きていきたい、だが死ねば平和になる。

仮に深海棲艦の親玉である前任を倒し、深海棲艦を絶滅出来たとしても生き残った艦娘や摩耶達は何らかの手段で殺されるだろう。逆に各国の軍が建てた計画が成功した時には艦娘や摩耶達は存在してないだろう。

所詮は早く死ぬか、遅く死ぬかの違いだ。

「……分からない。けど、そんな事考えた所では進めない。艦娘として生まれた自分を憎みたくはないんだ。なら最後まで抗い続けるよ、提督と一緒に」

「摩耶……」

「それにあの時約束しただろ？ 死ぬ時まで共に生きていくって」

そうだ、約束した。共に最後まで抗い、生きていくと。

あの地獄から抜け出す為に必死に生き抜いた二人が貫き通した決意。お互いに助け合い、励まし合い、戦い続けると決心した。

再度目を開いた提督は微笑み返す。

「……摩耶ならそう言うと思ったぜ、流石は俺が惚れた女だ」

「当たり前だぜ……提督……！」

互いに右手を振るって叩く。叩いた音が執務室中に響いた。

そして提督と摩耶はニヤリと笑う。今度もまた乗り越えてみせようと静かに決意した。それを見ていたプリンツが頬を膨らませて会話を乱入する。

「もー！ 二人でいい気分になるのは構いませんが、私達がいる事も忘れないでくださいよー!!」

「あ、ああそうだな。お前らは？」

「勿論！ 貴方についていきます！」

「……ッ——!! だったら私だって!! やってやろうじゃないの!!」

私達艦娘がどれだけ良いのかを思い知らせてやるんだから!!」

プリンツや瑞鶴も摩耶と同じく提督の手を叩き、共に戦う事を表明。この先どんな未来が来ようとも抗い続ける。皆の覚悟は決まっているようだ。

「ま、取り敢えずだ。前任を倒すしか方法は無いという訳だろ？ 提督」

「そうだ。唯一の可能性として前任を確保すれば何かしら変わるかもしれない。だがその前にお前らのイメージアップも必要だ」

「イメージ……アップ……？」

「まあ後々考えるところ。さて……もう一つの問題は……」

それは一枚の写真に写された二人の姿。計画を知り、口封じに消された存在？α？とその口封じに利用された■■■がいた。殺害方法についても前任が■■■を使って事故死に見せかけたと書かれている。

「存在？α？の殺害に■■■が利用されたのか……」

「存在？α？じゃなくて正式には■■■中尉。かつてのお前の提督だ、瑞鶴……瑞鶴？」

名前を聞いた途端に瑞鶴が頭を抱えてしゃがみ込む。唸り声を上げ、苦しそうだ。摩耶とプリンツが傍に駆け寄る。頭痛にしては叫びたい程の激痛に暴れたくなる。息が荒くなり、膝を床に着いた。

「痛い……！ 頭が……うっ……！」

「瑞鶴!? おい瑞鶴、しつかりしろ!!」

「記憶に何かしら響いたようだなあ、何が思い出したのかな？」

舞鶴の榛名が言っていた様にこの鎮守府の艦娘達は記憶障害を引き起こしている。存在？α？は記憶から抹消され、前任が提督だったと改竄されている以上、名前を聞けば何かを思い出すかもしれない。現に瑞鶴は変な頭痛に苛まれている。

「大丈夫か？ 瑞鶴。医務室行くか？」

「いや……大丈夫。続けて……！」

瑞鶴は最後まで話を聞けらしい。激しい頭痛に頭を抱え、汗を掻きながらも存在？α？について知りたいようだ。提督はその姿を見て、話を続ける。

「……蒼■■中尉を殺したのは前任であり■■■。もう存在αって呼ぶの面倒だし、色々危ないから蒼と呼ぼう。まあでも腑に落ちないなあ、であれば何故■■■は差別意識を続けさせるような事をしたのか、理由には全くならない」

「直接聞いてみますか？ ■■■に」

「まあそれが一番だ。だが■■■は容易に吐かないだろうな」

「だったら……私にやらせて……!!」

瑞鶴が自ら志願してきた。

確かに瑞鶴から聞いた方が早いかもしれない。以前■■■の仲間だった、艦娘同士という点も含めて最適だろう。

しかし問題もある。洗脳より目を覚ました瑞鶴を■■■達は扱うのか、下手をすれば怪我する可能性もある。

「瑞鶴……」

「お前がやるのか？」

「ええそうよ……！　これは私達の問題よ……私にやる権利がある……！！」

真剣な目で提督に訴える。必死になっているその表情はまさに人間そのものであり、本当に解決したいという意気込みが伝わってきた。

「だったらやってみろ。精々怪しまれないようにな、それにこの事は他言無用だぞ」

「分かったわ……」

答えた瑞鶴はプリンツに支えられ、執務室を出ていく。執務室に取り残された提督と摩耶は計画書の続きを見る事にした。

「瑞鶴は大変だろうな。これから先は」

「俺らも同じ事だ、こちらの計画を少し崩すぞ」

92. 化け物同士の戦いはアメリカントークで

「提督さん、お疲れ様、鹿島です。よろしくお願いします」
「……」

朝九時ちようど。

練習巡洋艦が配属され、着任する今日。執務室に練習巡洋艦である鹿島が来ていた。見た事のある表情に提督は突然嘆くように怒鳴る。

「よりにもよって何でお前なんだよ!!!」

「えっ、どういう事?」

窓際の机にて仕事をしていた時雨が不思議そうに問い掛けた。鹿島と対面して数秒で提督は頭を抱える。鹿島は不気味な笑顔を浮かべニコニコとしていた。

「久しぶりの対応にしては酷くありませんか? 元は貴方の艦娘だったのに」

「え!?! 摩耶さんやプリンツさんと同じく!?!」

「お、鹿島来てたのか」

提督の大声に駆けつけ、摩耶が執務室に入ってきた。面識があるのかフレンドリーに話しかけてきている。

「摩耶さん。お久しぶりです」

「確かに久しぶりだな」

「摩耶さん、提督と鹿島さんはどんな関係なの?」

「あー……提督と鹿島はあたしらと同じく一応元上司と部下の関係で、まあその……色々あったんだよ」

鹿島は提督が無名の頃に所属していた地方の鎮守府に異動してきた艦娘だ。

着任仕立てから鹿島の性格は常軌を逸しており、人を躡けるのが大好きなサディスト。周りからも引かれる程の捻くれた艦娘だった。

その性格になってしまった理由として前鎮守府で艦娘の躡をしていた鹿島は、長年艦娘を躡ける度に興奮を覚えてしまい、その行為は次第にエスカレートし始めた結果、人間にも手を出していた。

その為、当時から捻くれていた提督の元へ異動となり、化け物同士

をぶつけるような争いが始まったのである。上の思惑通りなのか提督と鹿島は熾烈を極める程の争いになり、ありとあらゆる手段で鹿島の性格を矯正しようとする提督と何がなんでも理由をつけて好きになつてしまつた提督を躡けたがる鹿島の醜く酷い争いが勃発。

提督が大本営に異動した際も鹿島は大本営直属の艦隊に無理矢理編入して付いてきたのだ。元帥に気に入られたのか、秘書艦を務めるようになり、争いはまた起きてしまつた。

「ええ……」

「また貴方と共に戦える事を光榮に思います」

「戦うの意味が間違つてないかー？ お前の意地汚さとずる賢さを考慮すれば、幾度となく人間を社会的地位に落とすなど容易い事だろう。だが俺は違う、お前みたいな腹黒女なんぞ敵ではない」

「減らず口で金遣いの荒い貴方の事がずつと好きでやつてきたのにそんな虚言は傷つきます」

「どこが虚言だあ、減らず口もそこまでだぞ」

「そつくりそのままお返し致します」

二人が顔を近づけ、互いに睨み合う。火花を散らし、一触即発だ。

口は笑っているが目は全く笑っていない。摩耶は面倒な事に巻き込まれると頭を抱えているようだ。

「うわあ……」

「相当やばいみたいだね……」

「何故お前がここに配属された」

「勿論戦力強化ですよ。この鎮守府の艦娘達の訓練艦として着任しました」

「でも本当は違うだろ？」

提督が怪しむ様に言葉で仕掛けてきた。

鹿島は目を細め、そつと溜息を吐いた。

「……あらバレてましたか。もうちよつと大本営も隠す技術が必要ですね」

「艦娘に監視されるのは癪だが、色々あって仕方ない事になっている。何も不自由に縛り付ける訳じゃない。それ以前にこの鎮守府の事は

事前に知っているんだろう?」

「はい。知っていますよ。その事は大本営には報告しません、元帥さんは把握してますし、報告すればするだけ色々と面倒になるので」
勿論この鎮守府の事情は既に把握済みの様だ。

というよりも把握してもらわなければこちらが不利でしかない。艦娘の激変的な性格や行動の理由が前任と関係している以上、下手に行動すれば怪しまれるのは当然だ。元帥には報告し、理由も説明しているので誤解は無い。

だがそれ以外の人物に知らればややこしい事になる。それは提督や元帥共に避けたい事実だ。また存在α、基い蒼色?に干渉している事がバレては何をされるか分からない。慎重にやっっていく必要がある。

「なら構わない。自由にしたまえ」

「提督の事もですか?」

「どうなったらそう解釈出来るんだ、馬鹿なのかお前は」

「えー本当に好きなのにー……」

「おいこの腹黒女をさっさと視界から消してくれエ!!」

摩耶が鹿島を連れていき、執務室を出ていく。鹿島が去るなり提督は椅子に寄り掛かり、軍帽で顔を隠した。

「また苦勞が重なる……のかな?」

「あの提督の様子だとそうみたいだね」
「最悪だ」

こうして提督と鹿島のどうでもいい醜く酷い戦争が始まる事となった。

「訓練艦として練習巡洋艦である鹿島が来てくれました。皆さん、仲良くしてくださいね!」

「鹿島です! よろしくお願いします!」

鹿島の着任により、艦娘達は歓迎の声で溢れた。練習巡洋艦と聞いて訓練がより良い物になると活気になっているようだ。遠くから眺

めていた憲兵や整備士達は鼻の下を伸ばしている。

「まあ可愛い子が入ってきましたね先輩」

「やめろ馬鹿。隊長に言われただろ、アイツは監視目的でこの鎮守府に来てるって」

「そりやそうですねけど巷では艦娘の中で人気なんですよ？ 見蕩れるなど言われるのが無理ありますぞぐへへ」

「だとしてもだ、ふざけるのも大概にしる後輩。俺達は真面目でいなければならぬ。警備を続けるぞ」

「何も冗談ですよ、了解っす！」

今日も一日、時が過ぎていく。

艦娘達は鹿島の指導の元へ訓練に。

憲兵隊は鎮守府の警備、整備士は明石と熱心に開発。

提督と灰色は書類の穴埋め。

「羽黒！・ここ間違ってるぞ、最初からやり直せ！」

「ご、ごめんなさい!! 今すぐやりますう……！」

今日の秘書艦は羽黒。

気が弱く臆病な艦娘だ。現に提督に叱られ、泣いて怯えている。

「羽黒！・それは灰の仕事だ、何やってる!!」

「ご、ごめんなさい!!」

「羽黒!! 判子押す所間違ってるぞ!!」

「すみません！ すいません！ すいません！ すいません！」

書類の間違いを何度も指摘され、幾度となく頭を下げる羽黒。

まるで会社の上司と新社会人の様な光景だ、ドラマでこういう場面を見た事がある。

「白さん、お疲れ様でした。先に終わらせていただきます」

「提督、お疲れ様ー」

「はいはい、お疲れお疲れー」

夕方十七時、灰色と時雨はさきき仕事と終えて執務室を出ていった。羽黒は一生懸命書類を書き直し、提督は羽黒が改めて書いた書類を添削している。

やがて夜になり、消灯時間が過ぎようとしていた。

「羽黒」

「は、はい!!」

「資材の件だが、鋼材が三千以下ってのは本当か？」

また叱られると思ったのか頭を守る様に腕を上げる。しかし午前の事とは違つて真剣に物事を聞いてきた。

「確認した時は……そうでした……」

「ならいい。後で駿河からボーキサイトと鋼材を交換するか」

提督はノートパソコンで何か仕事をしている。羽黒の報告を聞きなり画面を変えて、何かを作っていた。カタカタとキーボードを打つ音が静かな執務室で聞こえる。ディスプレイの画面に照らされた提督は一言も発さずに真剣な目だった。

「……提督は先に終わらない……んですか？」

「どうしてー？」

「い、いやー！ もう仕事なんて午前中で終わってるのに……こうして夜まで付き合ってくれるのが、よく分からなくて……」

とつくに提督が請け負った仕事は全て午前中に終えている。本来ならば暇を持て余していた所だが今日の提督はずっと執務室に籠るようになっていた。

羽黒の面倒を見ているのか、それとも別の仕事之急に入ったのか、羽黒には分からない。

「勘違いも甚だしい所だあ、別にお前の為に執務室に残ってる訳じゃない。俺は静かになった執務室でないと別の仕事に集中出来ないんだ。ただ単にお前は仕事が終わるまで馬鹿みたいに静かだから気にしていないだけだぞ臆病虫。分かたらさつきと終わらせて出ていけ」

「分かり……ました……」

静かな執務室でないと集中出来ない。羽黒は仕事はずっと静かなので虫同然と言われている気分だった。

それはつまり自身はここにいないも当然、という事だろうか。何故か心を抉られたような悲しい気持ちになってしまった。

「失礼しました……」

消灯時間が過ぎ、皆が眠りにつく二十二時。仕事をようやく終えた羽黒は執務室から脱出出来たようだ。しかしそこに仕事を終えた達成感は無く、提督に迷惑を掛けた申し訳ない気持ちで膨れ上がった。

「はあ……怒られちゃったな……」

「お疲れ様ね、羽黒」

部屋に戻り、溜息を吐く羽黒。まだ起きていた足柄が声を掛けてくれた。布団を用意しながらずっと待っていてくれたのだろう。羽黒は一気に気が緩み、足柄に飛びかかった。

「足柄姉さん〜」

「あらあら、この様子だとやられたわね」

「あの人怖いんですよ〜苦手です〜」

「まああの性格からして羽黒には少しキツすぎるのもあるから、仕方ないわよ」

「鹿島アアアア!!!」

突然提督の怒声が鎮守府中に響き渡る。思わず身体を跳ねさせた足柄と羽黒は廊下を覗いた。鹿島と名を叫んだ声だ、何かあったのだろうか。摩耶からこれから苦労するぞと警告されている。

「何よこの大声は!?!」

他の艦娘達も部屋のドアを開き、廊下を覗いていた。隣の部屋にいた最上達が窓を覗いては指をさす。足柄と羽黒も外の光景を目にした。

するとそこには――、

「またやってきたなこの常習犯め!! お前の所為で俺がどれだけ迷惑な思いしてるか分かってるのかアアア!!!」

「いいやー知りませーん!」

広場にて提督と鹿島が戯れていた。ニコニコとしている鹿島を激怒した提督が追い掛けている。

「これでお前が襲ってくるの百二十五回目だぞ!! どれだけやりやあ気が済むんだゴラアアア!!!」

「正確には二百二十五回ですよー」

「今度こそぶった切ってやる!!」

綺麗な青い海を背景に走るカップルとは程遠い、殺伐としている光景だ。女の子走りで逃げる鹿島を提督が軍刀で攻撃している。岸に追い詰められた鹿島は背後に振り向き、提督と対面。お互いに息切れ状態だ。

「ふふっ……今の不貞行為を大本営に報告すれば只では済みませんよ!!」

「そういうお前もこっちには証拠が残ってんだぞ!!　そう簡単に済ませると思うなア!!」

「ならば……戦争する他ない様ですね!!」

「望む所だ、腹黒女アア!!」

戦争という言葉に艦娘達は提督が戦うのかと目を光らせている。何故なら提督は軍刀を構えている。一方で鹿島は両腕を巧みに使い、訳の分からない拳法の構えをしていた。誰もが唾を飲み込む。

膠着状態である中、二人の殺気は尋常ではなかった。が――、

「……じゃんけんポン!!」

「え?」

「負けた……この私が……じゃんけん……じゃんけん如きに……!!」

「これで貴様の人生もバットエンドだあ、遺言書を書く時間をあげようか?」

「おいおい紙もペンも無いのにどうやって遺言書を書けっていうんだ?」

「身体の中に流れてるじゃないかあ、真っ赤なインクがいつぱいと」

突然意味の分からない会話をする二人。じゃんけんに負けた鹿島は手でジエスチャーしながら余裕そうに命乞いをしている。じゃんけんに勝った提督は本物の銃を構え、鹿島に向けていた。艦娘達は拍子抜けた顔をしている。

「オーケー分かった。そう焦るな、時間はたっぷりあるんだ。人生の最後ぐらい美しい月を拝ませてくれ」

「ならもつと美しくしてやってもいいんだぜ?　紅い花が咲き乱れて

月が更に美しく見える」

「おいおい落ち着け。お前の国の花見はそんなやり方なのか？ アジアンでもそんな事はしないぜ」

「バンー」

銃声の擬音語に艦娘達は目を瞑る。

しかし本物の銃声はせず、鹿島は地にひれ伏した。

「うっ……何だよこれ……俺の服にイチゴジャムがついてるじゃねえか……パンでも持ってくれば良かったぜ……」

「本来なら貴様の脳天をぶちまけたい所だが、生憎俺は慈悲深くてね……最後の頼みぐらい聞いてやるよ」

「そいつはありがてえ……なら最後に一つだけ……俺が貯めた金で貧しい子供達を……救ってやってくれ……！」

「敵である俺に未来を託すか……気に入った。殺すのは後にしてやる」

「あの二人、本当は仲良いんじゃないの？」

「まあ……否定は出来ないな」

「もしかして摩耶が言ってた事って……これ？」

「これ」

摩耶の言葉に足柄は思わず溜息を吐いた。成程、摩耶が苦勞する理由が分かる気がする。この二人のどうでもいい争いで関係の無い自分達が勝手に巻き込まれるという訳だ。摩耶やプリンツに至っては慣れたのか驚きもしていない。

「あ、因みに酷い時ではこれが一日に五回ありましたよ」

「……」

93. 空を自由に飛びたいな

「あ、そういえば灰」

今日も同じ一日が続く。同じように提督と今日の秘書艦である鈴谷は書類を片付け、灰色と時雨は遠征任務の書類を作成していた。すると提督から思い出したかのように灰色は呼ばれる。

「はい、何でしょうか」

「お前に一度会いたい奴がいるのを忘れる所だった。呼んでも構わないか？」

「大丈夫ですよ」

灰色の了承を得て、提督は手を二回叩く。執務室のドアからその会いたい人物が現れた。白い長髪に白い肌、その姿を見て灰色は目を丸くする。

「……え？」

「ん？ どうした？ ご対面だぞ？」

「え、いやその……白さん……この方って深海棲艦、ですよね？」

「そうだけど？ 一度お前に会いたかったそうだな」

「ええ……」

生まれて初めて深海棲艦を生で見た灰色。美しく華麗な姿に一瞬見蕩れそうになった。両頬を叩いて目を覚ますも、敵を目の前にして怖気付いてしまう。

「大丈夫だあ、安心したまえ。艦装は剥がしてあるし、そもそもそいつ自身に敵意は無い」

敵意は無いとはいえ、その姿は圧倒的なものだ。一般人なら怯えでも仕方ないレベルで恐怖を感じる取り敢えず飛行場姫と灰色は応接間のソファに座り、面と面で話す事になった。

「初メマシテ……飛行場姫ヨ……」

「ど、どうも……灰、です……」

沈黙が続く。

お互い緊張しているのか一言も話さない。

まるで初めての男女がお見合いしたら、恥ずかしくて何も話せない

様な雰囲気だ。沈黙は約十分続き、痺れを切らした提督が話し掛ける。

「お見合いじゃねーんだぞー、何か話したらどうだー？」

「……すいません、ちよつと席を離れますね。すぐ戻るので……」

「分かつたワ……」

灰色は一旦席を離れ、提督の元へ向かう。執務机の陰に隠れた灰色と提督は小さな声で話し合いをした。

「どうした灰」

「どうしたじゃないっすよ!! 最も危険な姫クラスじゃないっすか!! 安心しろと言われて安心しない方がおかしいっすよこれ!!」

「だから艤装は剥がしたし、敵意は無いつて言っただろうが。あれでも俺に怯えてんだぞ」

灰色がそくつと頭を上げ、ソファに座る飛行場姫を確認する。飛行場姫はただ何もせず下を向いたまま無表情だ。

「アレですか!?!」

「アレだよ」

「人をゴミの様にしてるような目ですよアレは!!」

「お前から見た飛行場姫は天空の城の末裔にでも見えてんのか」

灰色が迫真に訴える。

確かに灰色が怯えるのも無理はない。初めて深海棲艦を見た挙句、話したいと申し込まれたのだから。普通は敵対しているはずが何故かこの鎮守府で大人しくしており、手錠や足枷もなく自由にしている。訳の分からない状況に頭がパンクしそうだった。

「だって私、深海棲艦を見るの初めてですよ!? 敵意は無くとも緊張しちゃいますっつて!!」

「うるさいなあー!! つべこべ言わずにさっさと話してこい!!」

「うわっ!!」

執務机の陰で話していたが、提督に蹴られて飛行場姫の視界に飛び出される。気まづくなった空気を変える為、灰色はまたソファに座り、飛行場姫に話し掛けた。

「えーと……あのー……すいませんね。少し白さんと話してました

……」

「イイエ大丈夫ヨ……」

「話した方が楽だぜ!」

「灰さん頑張つて!」

「言つちやいなよ、男でしよー?」

「(あの人はああ……!!)」

外野から小さな声で話せと唆された。思わず拳を握って歯を噛み締める灰色。他人事だと思ってるのかニヤニヤとこの場面を楽しんでいる。

「モシカシテ……怖い、ノカシラ。私ノ事……」

「……っ! そうですね……失礼ながら少し怯えています。ごめんなさい」

「イイエ、仕方ナイワ。元々ハ敵同士ダモノ……怯エテ当然ヨネ……」

飛行場姫の言葉に灰色は考えた。確かに提督の言う通り、敵意は感じられない。ましてや敵同士である事を悲しんでいた。悲しげな表情で灰色に話し掛けている。

「デモ信ジテホシイノ……話ガシタイツテイウノハ、コウイウ事デ……エート……ソノ……ナ、仲良ク……ナリタイ、カナツテ……」

「仲良く、ですか……」

ただ単に飛行場姫は仲良く話したかっただけのようだ。敵でありながら仲良くという言葉を初めて聞いた。飛行場姫の様に人型の深海棲艦は存在している。

しかしどの個体も対話は不可能と教え込まれていた。何故なら対話をしようと接近を試みた軍人が裏切られ、殉死した記録があるからだ。その事も踏まえ灰色は怯えていたのだろう。

だがこの飛行場姫だけは提督が言っていた様に敵意は無い。本気で対話を望んでいる。折角緊張しながらも話し掛けてきている飛行場姫に対し、怯えていた自分が失礼に思えた。

「……分かりました。ではこれから仲良くなる為にも、お互いに握手しましょう」

「ソウネ……」

互いに手を差し伸べて握る。意外にも飛行場姫の体温は温かく、人間ときほど変わらない。白い肌の手はとても綺麗で、触り心地がいい程だった。二人とも照れながら優しく手を握っている。

「よろしくお願いします。飛行場姫さん」

「コチラコソヨロシク……灰サン……」

「何だろう……見ててイライラする」

「同感だ時雨、いっちよバズーカ砲でもぶち込んでやるか」

「提督、そのバズーカ砲にパイを入れてみようよ」

「名案だ、よし砲雷撃戦よーい」

「どこから持ってきてのか知らないけどやめなよ二人共。いい所なんだから——うわっ!!」

鈴谷の忠告を聞きもせずに提督はお手製のバズーカ砲で時雨が持ってきたパイを発射。灰色目掛けて直撃するかに思えた。

だが——、

「提督ー、明石から——」「あ——」

一同青ざめて声を揃える。

提督が撃ったパイは執務室に入ってきた摩耶の顔面に直撃。摩耶はそのまま立ち尽くしている。

「え？ どうしました白さー……ん……」

「エ……？ ア……」

灰色や飛行場姫も提督達の視線を辿って惨劇を目撃する。何とも言えない状況に二人は固まった。そして固まった首で提督を見つめる。

「時雨、鈴谷、今日の仕事は任せた」

「え？」

「あれ提督——」「最後のガラスをぶち破れエエエ!!」

「待てエエエ!!!」

提督は地上三階の窓から突き破って飛び立つ。その後を鬼の形相の摩耶が追い掛けた。数秒後に提督の断末魔が鎮守府内に響き渡る。時々ベチャグシャなどの悍ましい音があからさまに聞こえた。

「あれはやられたね」

「やられちゃったね」

「白さん……何であんな事を……」

「アア……提督方……」

「誰がパイを撃つなんて考えたのやら……」

「いや時雨だよね？」

昼が過ぎ、午後の時間になる。前に提督をボコボコにした摩耶に伝言を聞いた提督は天龍と一緒に工廠へ向かっていた。

「いらっしやいませー……って、どうしたんですか、アンパンマンみたいな顔して」

提督の顔は面影が無いほどにまで腫れていた。まるで蜂に刺されたようなあられもない姿に思わず明石は引いてしまう。何故か甘い匂いもする為、余計に奇妙だ。提督は渋々と落ち込んだ表情で説明する。

「摩耶にパイを投げられた挙句、殴られた」

「びっくりしたぜ。いきなり窓から提督と摩耶が出てくるからよ、それしたら今度は摩耶が馬乗りになって鬼の形相で——」「やめて天龍、それ以上俺の心を殴らないで」

やけに提督が弱気だ。流石に天龍も弱った提督を見て驚いている。どうやら摩耶と口が聞けなくなった事に落ち込んでいるらしい。

「ま、まあ取り敢えず、提督に報告したい事があって来てもらいました！」

「もう俺はパイを投げられ続ける運命なんだ……」

「まあまあ仕方ねえって！　こういう日もあるぜ提督！」

「うおおおおお天龍うううう！！　今初めて俺はお前にこんな事で感動させられたよ！！　やっぱパイがデカイ奴は心もデカイんだなああ〜！」

「褒めてんのか貶してんのかどっちかにしろ、ヒラメの五枚下ろしにして叩き殺すぞゴラア」

提督が天龍に縋り付き、無様にも涙や鼻水を流して喚いている。天龍は声を掛けて励ますも、提督の言葉に苛立ち、縋り付く提督を引き

離そうとしている。

しかし提督の握力は凄まじく、粘着テープの様に離れない。天龍は無理矢理提督を引き剥がそうとしていた。

「白髭さん……これ、話聞いてくれるんですかね」

「さあな」

——五分後。

「んで報告つてのは？」

「やっと落ち着いてくれた……はい！ 実は白髭さんと共同で、ある代物を開発しました！ これです！」

明石が出してきたのは前腕に装着する形をした長さ約三十センチメートル、半径約三センチメートルの筒の様な物。ドラム缶を小型化したようなその装備は少し重く、成人男性なら軽く持てる程だ。

「……これが？」

「はい！ 天龍さん！ 装備出来ますか？」

「おう、いいぜ」

明石の指示通りに天龍はその装備を左前腕に装着する。手首の長掌筋辺りに装着され、意外にも装着は簡単で艤装にある程度は邪魔をしない。しかも軽めに設計されているのか腕の負担も殆ど無かった。

「これは何なんだ明石」

「はい！ これはで——」「うわッ！ グヘッ！ バッ！ ギヤッ！

ヤッ！」

突然天龍が空を舞い、空気が抜ける途中の風船の様に工廠内を駆け回った。壁や天井に激突し、怯み声を出しながら地面に激突。上半身が地面の中に埋まった。反応が無い天龍に提督が近づくと。

「おーい天龍ー、大丈夫かー？ 下着見えるぞー？ あ、見えた。黒かよお前、誰狙って——」「殺すぞクソ野郎!!」

下着を見られたのが恥ずかしかったのかすぐさま起き上がり、提督を思い切り殴る天龍。寝転がった提督を足で抑え、刀を持ち出して提督に向ける。

「あの一……」

「あ、ああ腹空かして待つてろ明石、今すぐこのクソ野郎を三枚下ろしにするからよ！」

「いいえーご遠慮しておきますー」

流星に明石も提督を食べるなどといったカニバリズムでは無いので丁寧な断った。

「退け天龍！ んでこれは何なんだ？」

「はい！ これは艦娘でも一時的に空を飛ぶ事が出来る、その名も！

テツテテツテーテーテー！ 小型ジェット噴射機です！」

某青狸の曲を真似たような音程で装備を紹介した。更には決めポーズまで決めて自信満々な表情をしている。明石が言うには小型ジェット噴射機というらしい。

「小型ジェット噴射機ー？」

「はい！ 以前の古鷹さんと加古さんの模擬訓練を参考に、斬新な艦娘の戦闘スタイルとして開発しました！！ 予め圧縮した空気を内蔵し、噴射口から一気に空気を放出します！ これを装備すれば一時的に空を飛ぶ事は勿論！ 反動の応用で瞬間移動、なんて事も出来ちゃうんですよ！！」

「あーだからさつき天龍が空気が抜けていく風船みたいのあちらこちらに飛んでったのか」

「まあそれまだ試作型なんですけどね」

「それを早く言えエ！！」

被害を被った天龍が苦言を申し立てる。何も知らずにつけて教えられもせずに勝手に作動し、怪我を負わされれば怒るのも当然だろう。

「いやいやテストですよ、テストテスト」

「そうじゃよ、テストも兼ねてじゃ」

「そうだそうだ、テストなんだよバーカ」

「他人事みたいに言いやがって……！！ しかも最後悪口聞こえたぞコラア……！！」

明石や白髭がテストだと言い張る。提督も一部罵言を混ぜて仲間

になっていた。調子のいい提督に拳を握り、天龍は怒りをあらわにする。何分か経ち、四人は小型ジェット噴射機について色々と話し合っていた。

「うーん……確かに使い道はあるが、それ相応の訓練も必要になるな」
「飛んだ時の腕の反動が凄まじかったぜ……慣れないと無理あるぞ提督」

「だと思った。反動があるなら腕自体の衝撃も充分にある。使うにしても慣れがある訳だ」

「でもこれはまだ試作型なので完成型になれば多少の衝撃は中和出来ますし、出力の調整も操れると思います」

確かにまだ試作型だ。完成型になれば衝撃緩和や出力調整など意のままに操れるだろう。そうすれば本格的に実用も悪くは無い。

だが難点もいくつか存在する。その装備を扱う為に慣れる訓練が必要になる事だ。いくら試作型とはいえ完成型もそれ相応の衝撃は腕全体に響き渡る。順応しなければ到底は扱えない。

「……分かった。完成型はいつ出来る？」

「早くで一週間程かと」

「一週間か……まあ大丈夫だろう。完成したら報告するように」

「分かりました！」

完成型となれば実用性は充分だろう。使い方次第では艦娘の戦闘スタイルに革命を起こすかもしれない。熟練度が上がれば敵の不利な状況にさせる可能性すらある。提督は小型ジェット噴射機の開発を認め、完成型の開発を急がせた。

「なあ提督、これ使って訓練やつてもいいか？」

「構わないが医務室送りはやめろよ」

「よっしやあ!!」

「あ、天龍」

「何だ？」

「黒パン見えないようにしろよー」

「黒じやねえよ!!
紺だ!!」

94. 役者は揃いも揃って下手ばかり

「帰還したわらって、珍しいわね。アンタが私達を迎えるなんて」

「勘違いするな、たまたま居合わせただけだよ。もう少し頭を柔軟にしたまえ年中反抗期の幼稚園児」

「ハア!? 本当に何なのアンタ!!」

「まあまあ満潮さん落ち着いて……提督、ご報告があります。執務室にてお願い出来ますか?」

天龍が小型ジェット噴射機を装備して工廠を飛び出した後、遠征任務を終えた浜風率いる艦隊が帰還してきた。整備士達によって艀装のメンテナンスが始まり、話し合う場面を見れば艦隊との仲もそう悪くは無い。少しずつではあるが距離は少しずつ縮まっているように思える。

「んで何だ報告ってのは」

「はい。ある深海棲艦に動きが見られました」

旗艦浜風から報告があると執務室に戻された提督。執務室には秘書艦の鈴谷や、灰色と時雨がいつも通り仕事をしている。

「私達は遠征帰還途中に偶然遠くから確認しただけなので戦闘になる事はありませんでしたが、明らかに他の深海棲艦とは特殊な艀装をしており、強化された深海棲艦、軽巡棲鬼と私は推測しています」

浜風の報告ではその軽巡棲鬼は異様に感じたという。他の深海棲艦とは違って艀装の展開が珍しく、そして単騎行動で制圧海域外を徘徊しているらしい。

「特殊な艀装ってのは普通の軽巡棲鬼より何か違ったのか?」

「はい。艀装では無く足で海を立っており、軽巡棲鬼を囲うように艀装が浮いている様な感じでした」

「そうか……」

確かに通常の軽巡棲鬼とは異質だ。

特殊な艀装展開に謎の単騎行動、また何か企んでいるのかもしれない。制圧海域外というのがなお厄介だ。視察が目的か、はたまたそれ以上の目的か。どちらにせよ警戒は怠らない方が良さそうだ。

「この軽巡棲鬼は制圧海域に侵入していないので、例え侵入されたとしても他の鎮守府の艦隊が制圧すると思います。ですが様子が変わったので一応提督にも把握してもらいたく、報告しました」

「分かった、念の為に警戒レベルを上げておこう」

「ありがとうございます……しかしながら提督、少し質問があるのですが」

ずっと気になっていた事を質問した浜風。周りは何気ない表情で仕事をしているので自分だけおかしいのかと自問自答しかけていた。

「何だ？」

「そのアンパンマンみたいな顔はどうされたのですか？」

「鍼治療」

「……」

「矢矧、先に部屋戻ってるね」

「分かった。気をつけて」

「うん」

講堂の奥で話し合いをしていた■■■達の輪から外れ、一人で部屋へ戻る阿賀野。周囲から視線を感じたが、阿賀野は気にせずに部屋へ戻った。

「はあ……」

部屋の中に入り、ドアを閉めた途端に力が抜けた。阿賀野はその場に座り込み、溜息を吐く。もう一度立ち上がり、ベッドに身体を投げ込んだ。そして天井を見つめ、静かに呟く。

「悲しいなあ……」

阿賀野自身、どう考えても■■■側に非がある事は分かっていた。

差別意識の延長や徹底的な艦娘達の支配、日に日に弱っていく艦娘達を眺める事しか出来なかった。勿論差別された側の艦娘の気持ちも理解している。今まで自分がしてきた事も当然許される訳では無く、あの時まで罪の意識を心の底で抱えて生きていた。

「もう嫌……終わって……」

阿賀野は前任による優遇制度が始まって以降、差別意識は芽生えなかった上に元々無かった。前任が施したとされている薬の事は知らず、周りが豹変していくさまに怯えて過ごしていた。

今まで全て演技で誤魔化してきた。

周りが差別意識に芽生え、かつての仲間を蹴落としていくように、自分も差別した側として混ざるようになった。全ては自己保身の為、差別された側に混ざりたくないが為の行動。皆は何故仲間を貶めているのか分からない、何故そんな気軽に仲間を殴れるのか分からない。理解出来ない野蛮な行動の数々、阿賀野自身もそれを真似するか生きる道は無かった。

もし助ければ自分も差別された側の仲間入りだ。いや、差別した側とされた側に蔑まれ、ろくな事にはならないだろう。赤城や長門の様に反抗する艦娘も現れたが、前任を消す事は到底叶わなかった。■も何故その制度を進めたのか分からない。前任の秘書艦である■が、提督が来るまで進めていたのか分からなかった。

分からない事だらけだ。考えたところで時間の無駄、だが頭の中で強く引つ掛かる。もう気にしたくない、そんな気持ちでいっぱいだった阿賀野は両目を片腕で隠し、そのまま眠りについた。

「……寝てたわ」

「おはよう阿賀野姉、調子はどう？」

目を覚ませば隣に矢矧が居た。阿賀野が起きるまで待つてくれたいたらしい。窓を見れば空が赤く焦げている。そろそろ夕飯の時間に差し掛かっていた。

「大丈夫よ……そろそろ夕飯ね、行きましよう矢矧」

いつも通り食堂へ向かう阿賀野と矢矧。食堂内は通常運転で賑やかになっている。一部視線は感じるがお互いに無視し合っていた。

「待て鹿島ア!!」

食堂内に提督の怒声が響き渡る。賑やかさを一瞬掻き消す程の大声は二階からだ。提督は鈴谷、灰色や時雨と一緒に食べている。道を挟んだ隣の席には鹿島が座っていた。

「人の味噌汁にオレンジジュースを入れやがったな!! おかげで味噌汁が酸っぱい上に不味くなっただろうか!!」

「そっちこそ!! 牛乳を入れられた所為で味噌汁がシチューになっちゃいましたよ!! どうしてくれるんですか!!?」

また提督と鹿島が騒いでいる。どちらも似たような悪戯をして、苦言を申し立てたのだろうか。二人はまたジャンケンをして、変なアメリカン口調で話している。

「騒がしい連中ね」

「そ、そうね……」

あまり会話が続かない。

ここ最近では機密情報が漏れないように最低限の会話以外は何も話さない事になっている。阿賀野は仲間と話せなくなる事に少し不満を感じていた。

「矢矧……そ、その……調子はどうなの?」

「問題無い、直に■■■が行動を起こすみたい。奴が落ちるのも時間の問題かな」

「後は行動に移すだけ……か……」

「ん? 何か名残惜しい事でも?」

矢矧が阿賀野の表情を見て、未練はあるのかと問い掛けた。声を大にして未練はありありだと訴えたい。だがそんな事でもすれば怪しまれるのは必然だろう。また演技しなければいけない。

「い、いやただ単にそろそろ終わるのか……って思っただけ」

「そうだな……やつと終わるんだ……」

「終わる……」

終わる、という言葉がとても心に深く刺さった様な感覚がした。また■■■の支配が続く、自分達が死ぬまで一生続く。また自分を偽って演技し、自身を守らなければならぬ。途方に暮れる様な自分の無様な人生に無言を保つ他無かった。

このままでいいのだろうか。このまま何も知らずに終わらせればそれでいいのだろうか。

分からない。

結局自分は人を裏切る様な事は出来ないのだ。

裏切る勇気も、裏切る覚悟も。

自分の人生は誰かの為に存在し、いい様に扱われ、最後はゴミのよう
に棄てられる様な物。変わろうと思わない、変えようもしない。
差別された側と同じ、自分は周りに振り回されるだけの臆病者だ。

「……もしもの話、だけどき。もし私が提督側についてしまったら
……矢矧はどうする？」

「裏切るの？」

「いやいや……もしもの話よ」

心臓の鼓動音が聞こえてくる。裏切るの言葉で心が苦しくなった。
実際に裏切る訳では無い、だがもし裏切ったら妹の矢矧はどうするの
か。別に変な意味は無い、ただ率直に聞きたかった。

「そうね……その時は阿賀野姉についていく、かな」

「私に？」

「もう失う訳にはいかないからね。例えどんな事だろうと私は阿賀野
姉の味方だし、裏切ったとしてもついていくよ」

阿賀野達は過去に妹の能代も酒匂を失っている。前任の無茶な作
戦行動で深海棲艦から大打撃を受けた能代は航行不可能と宣告され、
危険海域にて放棄。酒匂は矢矧と同じ艦隊に所属していたが、深海棲
艦の襲撃を受け、酒匂が消息不明となっている。

「そう……」

「それにその話は冗談でしょ？」

「勿論よ」

阿賀野は流暢に言葉を返す。夕飯を食べ終え、矢矧は■■■と話し合
いがあると言われ解散。先に部屋に戻った阿賀野は部屋に着くなり、
感情をあらわにする。

「何が勿論、よ……そんな訳ないじゃない……」

先程誤魔化す為に勿論といった自分を殴りたい。

心の中では裏切るつもりでいた。これから■■■達がやる事を全て
提督に報告する。そうすれば■■■の支配を止めさせ、■■■は地に落と
されるだろう。やろうと思えば簡単だ、だがそう上手くいく訳では無

い。

裏切る勇気も覚悟も無い自分に出来るはずもない。所詮は臆病者だ、差別された側と同類に相違ない。自身の保身の為に仲間の艦娘を蹴落とし、演技で誤魔化し続けた。

「嫌だ……もう……嘘つきたくないよ……」

もしたった一つ、願いが叶えられるとしたら。

——どうか神様、私に感情を奪ってください。

「彼女達の存在を決めるのは我々人類ではない……彼女達自身が決める事だ。いい見出しだよな——」

朝九時。

太陽の光が暑く思える今日も、涼しい執務室で提督と今日の秘書艦である瑞鶴、灰色と時雨はいつものように仕事をしていた。

しかし途中でサボって新聞を読んでいた提督は時雨と夕立の会議で述べた自身の言葉を見出しに使われ、新聞に大きく取り上げられていたのを灰色達に見せびらかしていた。

「なアに自分にベタ惚れしちゃってるのかしら」

「提督がテレビに出た時から提督の人気は急上昇、この鎮守府のイメージも少しは良くなりつつあるね」

「いやーこれだから人気者は困っちゃうよー!! テレビに出たら俺の美貌に可哀想な子羊達が誘惑されてしまうからなあー!! だからテレビには出たくなかったんだー!! あー本当に困った困ったー!!」

随分とご機嫌な提督は椅子から立ち上がり、窓の景色を覗きながら体操をしている。神出鬼没だった理由が下らない事に時雨がため息を吐いた。

「まあでもこの提督の絶望的人格を知れば、誘惑された人達は幻滅だろうね」

「お前の本心見え見えの大根役者程じゃないがな」

時雨の嫌味を即座に反論する提督。また椅子に座って瑞鶴が書いた書類の添削を始めた。意外にも瑞鶴の仕事ぶりは悪くなく、提督からガミガミ言われる事は無かった。

「提督さん、戦力強化の為に建造任務書が届いてるわよ」

「却下、そこら辺のボロ鎮守府にでも食わせておけ……さーて、今日は少し出掛けてくる。灰、一旦はここをお前に任せるぞ」

「分かりました、お気をつけて」

95. 人生で一度は人の金で焼肉を食べたい

「元■■■■鎮守府所属金剛型戦艦、榛名。面会だ」

薄暗い廊下を一人の憲兵が艦娘の名前を冷たく呼ぶ。頑丈に作られた白い壁の中で艦娘専用の拘束具を身につけられたまま座っている榛名は憲兵が呼ぶ声に反応した。牢屋の中というよりかは実験施設に等しく、至る所から照明が榛名を照らし、眠る事すらままならない。

そして肌寒く、周辺の音は一切感じない無音の部屋。

時間の感覚は掴めず、鳴る音はジャラジャラと奏でる鎖の音。

まるで死刑囚の様な待遇に榛名は微塵も疑問に思わなかった。

「やあやあ榛名君、牢屋の住み心地は如何かな？」

連れていかれたのは面会室。榛名は拘束具で縛られたまま車椅子に乗り、憲兵に移動させてもらっていた。ようやく拘束用のマスクを外してもらい、久しぶりに新鮮な空気を吸えた榛名。何十枚もの強化ガラスの先にはあの提督がいた。直接話す事は許されず、お互い目の前のマイクで話す事になっている。

「何の用ですか」

「なアに、別に怪しい事はしないさ。久しぶりにお前と話したかっただけだよ」

あれほど過酷な環境下にいながら、榛名は血相一つ変わらない。目にクマは出来ておらず、如何にも健康に見える。榛名は真っ直ぐに提督の事を睨んでいた。

「何も話す事はありません」

「そうかなー？ わざと俺達にヒントを与える様な真似をしたのは演技だと言うのかい？」

「ええそうですよ……あんな事を言えば彼女は黙っていられない。動揺させる為の虚言です」

「んじや何で黙っていられないのかなー？」

黙っていられないのならそれなりの理由があるはずだ。それこそ舞鶴の榛名が動揺する程の事実であれば至極当然。明らかに存在？

α?と何かしら関係性はあるようだ。前任が暗殺を企てて■■が存在? α?を殺した事実をこの榛名は知ってしまった。その結果、前任に洗脳される羽目になっている。■■と結託した理由もただ■■の言いなりになっていた訳では無い。そうならざるを得ない理由があったはずだ。

「……知りませんよそんな事」

「いいやお前は知っている。全てな」

「勝手に思っただけでどうぞ。私は何も知りません」

「まあいいさ、時間はまだまだある。これからじっくりと話していこうじゃあないか」

「結構です」

潔く榛名は提督の返事を断り、憲兵に連れていかれていく。提督は当然の反応に何一つ表情を変えず、面会室を出ていった。提督は確かに見ていた、榛名が連れていかれた際の表情が明らかに悲しげな表情だったという事を。

面会室を出ると廊下には随伴艦の瑞鶴が待つてくれている。提督から借りたスマホゲームに熱中している。

「んで、どうだったの? 提督」

「クマムシ程度」

「何それ分かんないんだけど」

「ナノメートル程の小さな不死虫だ」

聞いた事のない虫の情報に困惑する瑞鶴。口を開けたまま、頬を引き攣っている。提督と瑞鶴が来た場所は大本営本拠地。榛名が収容されている地下施設に提督達は出向いていた。エレベーターで地上へ上がり、窓から溢れる太陽の光を浴びる。

「これはこれはごきげんよう、■■大将。調子は如何でしょうか?」

途中の廊下で■■大将とすれ違った。■■大将といえばあの中継で提督と言いつ争った軍人。厳格な雰囲気醸し出し、他人を寄せ付けないオーラを感じる。流石の瑞鶴も時雨と夕立を貶めた一員として警戒した。

「……すこぶる快調だよ。マラソン大会に出れる程にな」

「それは良かったです。私としても貴方がいなくなるのはとても心細い」

「お気遣い感謝する。こちらとしても君がいなくなるのは寂しくてね……何、この先の平和の為にも君は必要なのだよ」

互いに振り向かず、背中を向きながら話している。顔すら見ずに相手の気分を伺っているようだ。次第に緊張感が増してくる、空気が張り詰めてきた。

「そんな言葉を言ってくださるとはこちらでも戦い甲斐がございませぬ。お互い頑張らなければなりませんね」

「そうだな……そういえば、君に伝えたい事があった」

「何でしょうか」

「君の鎮守府に所属している、時雨と夕立の件……すまなかつた」

背中を向けながら ■■ 大将は提督に謝り始めた。それを聞いた瑞鶴は思わず声を漏らし、驚いてしまう。如何にも頭が硬そうな軍人が、目下の人に対して謝っている。提督は中将、ましてや ■■ は大将。簡単に出来る事ではない。

それこそ自分の面子が潰れたも同然だ。そんな事など絶対にしないと思つていた。

前任がいい例だからだ。

部下だった自分達に対して謝りもせずには除け者にし、偉い人が来れば必死に頭を下げている。幾度となくその場面を見た事があった。

「私とした事が少しばかり熱くなりすぎていた……本当であれば目に見えるような犯罪を息子の為にと、一方的に彼女達に押し付け、酷い目に合わせてしまった」

「……いえ、こちらでも貴方を愚弄する様な発言を幾度かしてしまいました。謝るなら私もです……本当に申し訳ない」

「お互い様だな……明日、暇があれば君の鎮守府を訪問させてくれ。彼女達の謝礼も合わせて、な」

提督も ■■ 大将を貶める様な数々の言動に謝罪した。提督といえ

ど罪の意識などは充分に感じている。時雨と夕立の為、灰色達の為とはいえ全国に醜態を晒す様な真似をした事は当然許される事ではない。

人が持つ他人に対するイメージの八割が第一印象で決まる。提督と■■■大将に対する全国民のイメージがどうなっているか分からない。

それでも二人はそんな事など気にしておらず、軽い謝罪でこの場を収める事にしたようだ。それに■■■大将は時雨と夕立に謝る為にも近々、荒くれ鎮守府を訪問したいと願っている。

「こちらは大喜びですよ■■■大将。貴方とまた会えるのが楽しみだ」
「……では失礼するよ」

■■■大将は一度も提督の顔を見ずにその場を去っていく。しかし提督が顔を背後に向け、大将の名前を呼んだ。

「■■■大将」

「……何かね？」

「貴方が思う平和な思想、とてもいい考え方です。また会う時にじっくりと話し合ってみたい……抗う為にも」

抗うと聞いた途端に■■■大将は顔を僅かに動かした。あの黒い箱の持ち主が当時の■■■大将ならば誰かが持つていったのかも確認しているはずだ。この反応は確信したに違いない。■■■大将は一言を言った後、その場を去った。

「……だろうか？」

「長門」

「何だ？」

「最近無理してないかしら。ずっと訓練に行っただけで休んでる所なんて見た事ないわ」

荒くれ鎮守府では艦娘達が訓練に励んでいた。ある者は近接戦闘術を、ある者は模擬演習を、ある者は休憩を。艦娘達は自由に過ごし

ている。長門も模擬演習と近接戦闘を休む暇なく交互に繰り返し、寮の建物の裏で密かに休憩していた。それに気付いていた陸奥は長門に話し掛ける。

「ちゃんと休んではいる」

「えー本当かしらー？ その休んでいる時間が数秒程度だったら休憩とは言わないわよ？」

「心配してくれるのか？」

長門の言葉に陸奥は目を丸くする。

ため息を吐きながらも陸奥は簡単に説明した。

「当然、貴方の妹よ？ 心配しない方がおかしいじゃない」

「それはすまない事をした。少しばかり焦っていてな」

「焦り？ 何かあったの？」

長門は焦っていた。

提督と摩耶が着任してから約一ヶ月半になる。深海棲艦が力をつけていく中で護る者の為に強くならなければならないと考えていた。

理由は簡単だ。

長門の中である存在が余計にその思いを焦らしていた。

「摩耶は知っているだろう？」

「ええ知ってるわよ」

「どうしてもあの摩耶の強さに辿り着けるビジョンが見当たらなくてだな。ひたすらに訓練を受けていた」

初めて艦隊として共に戦った時、模擬演習で敵として戦った時。摩耶の圧倒的な戦闘力を目の前で見ていた長門は摩耶の動きを参考に、様々な戦闘スタイルの応用を試していた。だがいくらやってもあの摩耶の強さに勝てる道筋が存在せず、辿り着けるかどうかすら悩み続ける羽目になっている。正直長門は少なからず憧れを持っていた。

「確かにあの摩耶は特別強いわね。やっぱ右眼が関係しているのかしら」

「第一に我々は提督と摩耶の事を何も知らない。過去や経緯、それまでの全てが不明だ」

「私は元深海棲艦説つてのを推すけど？」

それは誰もが思っても当然の理由だ。摩耶の右眼、右顔辺りは深海棲艦を思わせる容姿になっている。透き通った白い肌に暗闇でも紅く光る眼。紅い線の様なものが眼を中心に頬に刻まれている。傍から見れば深海棲艦だと思われてもおかしくはない。

「それは皆把握している。あの眼は重巡棲姫そのものだ。摩耶の前では誰も言わない事になっている。摩耶自身も嫌っているだろうからな」「んじゃ提督は?」

摩耶が元深海棲艦だとすれば提督は何なのだろうか。

摩耶同様に頬の傷と身体の斑な傷痕、白い肌に蒼く冷酷な眼。そしてあの性格。どのような境遇でこの地に来たのか分からない。それに暴行されても即時回復する程の自然治癒力、致死性の毒でも耐え切れる生命力。聞いた話では天龍を勢いよく蹴り飛ばしたとも聞いている。

全てが想像のつかない事ばかりだ。

「……分からない。全てが謎だ……」

よく思えば不気味だ。あの提督の方が遥かに人間を超越している。艦娘以上のハイスペックを兼ね備えているのに対し、それを周辺の者には行使しようとはしない。大体は暴力ではなく暴言で済まされている。

「とにかくだ、私はあの摩耶のように強くなりたい。今度こそ救える力を持つ為にも」

「目指す事に関しては何も言わないけど……時には休憩も必要よ。無理しないでね」

「ありがとう陸奥」

「あのお肉……食べてみたいな……」

「うっ……思わず涎が……」

「とても美味しそうですね」

「アレだと腹が減ってしまうな」

講堂にて休憩していた秋月達が設置されたテレビのバラエティ番組を視聴していた。グルメレポーターが美味しそうにステーキを食

べている。更には食欲をそそる様な言い方で秋月達を魅了していた。「たまにはガブって無造作に食べてみたいよね。こういうステーキとかさ、口に頬張ってガブっと」

「分かるくやってみたいよね」

「今度提督にお願いしてみようかな」

「案外頼めばやってくれるよー、あの提督は」

楽しそうに話している中、通りかかった川内に話し掛けられる。川内は正装に着替え、訓練から戻ってきていた。神通も川内の後を追っており、同じく訓練から戻ってきている。

「川内さん！」

「提督は自由が大好きだからねー。私達の自主性を重んじてるのさ、アレでもね」

「まさに自由奔放って感じですね。提督は」

「へーじゃあ、改二になりたいとか言ったらやってくれるかな」

「可能だと思いますよ北上さん。そろそろ練度も近いですし」

「頼めば買ってきてくれるクマー」

秋月達と川内の会話を遠くから聞いていたのは北上と大井、そして球磨。訓練をサボっていた北上と大井は怠そうに休憩している。姉の球磨は可愛らしい熊の恰好をした部屋着を着たまま講堂に来ていた。

「球磨姉さん、その恰好は……」

「前、東京行った時に買ったクマー。どう？ 似合ってるクマー？」

「まあ可愛いらしいですけど……」

「淡泊だなクマー！ もうちよつと褒めろクマー！ あ、因みに多摩もあるクマー」

「猫じゃないにやー」

多摩は可愛らしい猫の恰好した部屋着を着ている。北上と大井の対面席に座り、窓の光を浴びて気持ち良さそうに寝ていた。まるで猫のような姉の仕草に二人は言葉を失う。

「姉さん達は今日は休みか？」

「摩耶から訓練し過ぎて言われて強制的に休ませられてるクマ。後二日残ってるクマ」

「ゆっくりおやすみ出来て嬉しいけどねー」

木曾も合流し、球磨型が全員揃ったところで話は更に盛り上がる。部屋着を着たままの球磨と多摩は摩耶に訓練し過ぎだと忠告され、なくなく休暇を持て余していた。疑問に思った木曾が問い掛ける。

「……？ 何で訓練のし過ぎで休ませるんだ？」

「摩耶曰く、提督から『訓練のし過ぎで無駄な怪我を負い、万が一出撃する事になった場合、戦闘では足手まといにしかならないから適度に休ませろ』って忠告された」

「後、『サボってる奴らがいたら片っ端から摩耶に連れていく様に報告させろ』とも言われてるらしいクマ。ほらちようどこんな風に」
「え？」

球磨が話し終わった途端、大井と北上は正装の襟を誰かに掴まれた。背後を確認するとプリンツがいる。訓練をサボっていた二人は思わず青ざめた。

「あーれー」

「ちよ、北上さんが！ やめっ、やめなさい！ プリンツ!!」

襟を掴まれたまま二人は摩耶に引き摺られていった。二人とも抵抗するがプリンツには勝てず、そのまま講堂を去っていく。

「サボってたのは北上姉と大井姉か……」

「変わらないクマ」

「うん、本当に……ッ!？」

突然警報サイレンが鳴り響く。まるで戦中の空襲を思い出させるかのようなサイレンは鎮守府にいる者達と近隣住民達を恐怖に陥れた。

「何事クマ!？」

「警報……敵かッ!!」

球磨達は急いで執務室に向かう。執務室に入ると提督の姿は無く、灰色と時雨、摩耶が忙しそうに話し合っていた。摩耶は小さな板のような物を耳にかぎして誰かを待つように立っている。

「摩耶！ 敵襲か!？」

「その通りだ木曾。今提督と連絡してる、もう少し待ってくれ」

『何だ摩耶』

「提督か、敵襲だ」

小さな板から提督の声が聞こえた。それと同時に変な物音が鳴る。ため息を吐いた提督は面倒くさそうに摩耶へ伝えた。

『……んで敵の数は？ 種類は？ クラスは？』

「哨戒艦隊旗艦浜風の報告によると、数は一体、種類は海上型、クラスは鬼。恐らく特殊な？ 軽巡棲鬼を目視で確認したとの事だ」

『成程ね……分かった、今すぐ艦隊を再編成しろ。旗艦は飛龍、その他は蒼龍、日向、最上、五十鈴、不知火。潜水艦は全員出撃な。その他の馬鹿共は近海の警戒レベルを引き上げ、決められた警戒網を見張るように。近隣住民、整備士と憲兵の避難を急げ』

「分かった」

提督の指示通りに摩耶は鎮守府全員に指示を伝える。それを聞いた艦娘達は即座に訓練を止めて出撃準備、整備士や憲兵達は防空壕に避難し始めた。警報サイレンを聞いた近隣住民達も地下施設に逃げ込んでいる。

『後、作戦指揮は灰に任せる。摩耶がサポートしてくれ。今俺は呉にいて手が離せない。尚軽巡棲鬼は鹵獲不要、沈めてよしとする。もし飛行場姫が何か言ってくるなら意見も聞いてやれ』

「わ、私ですか!？」

『いいじゃないかあ、これも経験だよ灰君。だが何かしでかしたら許さんからな』

「は、はい……」

軽巡棲鬼討伐の作戦指揮は灰色に任された。今艦娘を指揮する事が出来るのは摩耶と灰色のみ。であれば勉強も兼ねて灰色がやるべきだと提督は言った。突然作戦指揮に任命された灰色は緊張して、自身を落ち着かせている。

『って事で、後は頼んだぞ摩耶——（ドンキョーホーテョ？）あ、やべ』
「おいちよつと待て。呉にいるんじゃない……切られた……クソが」

摩耶はスマホをスリープモードにし、灰色を指揮席に座らせる。摩耶と時雨に見守られながら、灰色の本格的な作戦指揮が始まった。

「とりあえず始めよう」

「わ、分かりました！」

96. 狂気なる白銀は母の海にて憎悪を嘲け笑う

許さない。

憎き艦娘共を私は許さない。

阿賀野、矢矧を私は許さない。

制裁を。

藻掻き苦しみ続けるような制裁を。

この私が直接手を下す。

私の元の名は――、

――□□だ。

「軽巡棲鬼を目視で確認！ 周辺海域の制圧を急いで！」

「敵潜水艦は確認したけどいかなかった！ 攻撃可能だよ！」

『分かった！ ありがとう最上！ 飛龍と蒼龍は制空権を頼むよ！』

取った後に戦闘開始だ！』

「了解！」

灰色の指揮に合わせ、提督に選ばれた艦隊が青い海を駆けていく。

目視で確認した飛龍達は戦闘態勢に入った。飛龍と蒼龍が航空機を
発艦させ、空を制圧。海の中では潜水艦達が魚雷を装填させ、待ち構
えている。

「確かに特殊ね……あの軽巡棲鬼は……」

「艦装が変形して、異様な姿になってる……」

「皆警戒して……何してくるか分からないよ……!」

軽巡棲鬼は攻撃されても尚、一步も微動だにしない。周辺に水柱が
立つも表情一つ崩していなかった。

だが突然、軽巡棲鬼の艦装が真横に回転。

標的を艦隊に定めて砲撃した。砲弾は一直線に最上へ向かう。

最上は砲弾を回避し、偵察機を飛ばした。

「視線を外さずのブラインド砲撃!」

「つてかそれに反応出来た最上も凄いよね?!」

最上自身も驚いてはいた。敵の突然的な砲撃に反応し、咄嗟に回避
出来たのは訓練の積み重ねによって編み出された物だ。プリンツや
摩耶に扱かれる内に戦闘能力は十分に上がっている。

「まるで私達には興味が無いみたいね……!」

「どちらにせよ提督からは殲滅する様に言われてる。抵抗しなくても
やるよ私は」

依然として軽巡棲鬼は一步も動かない。動く気配すら感じない。

飛龍と蒼龍の攻撃隊が発艦され、空を艦載機で埋め尽くす。

「……空カラ……」

初めて軽巡棲鬼が動いた。飛龍と蒼龍の攻撃隊を眺め、首を上げて
空を見上げる。次に遠くにいる艦隊に視線を移した。

「成程……少シハ変ワツタノカ——ッ!」

軽巡棲鬼の周辺に水柱が立つ。突然の攻撃に怯み出した。この攻
撃はあの艦隊からではない。水中から攻撃されている。

一方、水中では——、

「私達潜水艦に気付かないとはまだまだそちらの訓練は甘いでちね
!」

「酸素魚雷六連発射するの!」

「魚雷一番から四番まで装填！ さあ、戦果をあげてらっしゃい！」
潜水艦達が一斉に魚雷を発射させていた。唯一海中を魚のように泳ぐ事が出来る艦娘は潜水艦のみ。彼女達はある意味特殊な存在とも言えるだろう。この攻撃は灰色の指示によって行われている。

軽巡棲鬼は情報として対潜装備が存在せず、潜水艦による雷撃が有効とされていた。恐らく提督はそれを睨んで潜水艦達を出撃させたのだろう。灰色もその事は理解していた。飛龍と蒼龍の空からの攻撃、海上での砲雷撃戦、そして水中からの雷撃。軽巡棲鬼を撃沈させる上では理にかなった戦法だろう。

だが――、

「チツ……!! 邪魔ヨツ!!」

軽巡棲鬼は跳躍。

身体を横に捻り、縦に回転した。

そして水中に潜む潜水艦目掛けて砲撃。大きな水柱が立ち、砲弾は潜水艦達に直撃した。

「ゴージャ！ 皆!!」

『対潜攻撃!! 軽巡棲鬼は持ってないはずじゃ……!!』

潜水艦のほぼ全員が中破。辛うじて意識を取り戻した伊168が倒れた伊19達を運び出す。

撃たれた砲弾は特殊な物で水中で分散し、小規模の爆弾が炸裂するタイプ。言わば水中型三式弾の様なもの。深海棲艦側でこの攻撃は初めてだった。記録に無い、情報にも乗っていない。新たに観測された新型砲弾だ。

「……標的、照準施錠。敵艦隊、全員捕捉。残弾確認……装填完了、戦闘形態二移行」

聞き慣れない言葉を言い放つ軽巡棲鬼は艤装を特殊展開。無いはずの両足が海面に立ち、二手に別れた艤装は軽巡棲鬼を囲うように変形する。眼が蒼く光り、身体全体が蒼いオーラに包まれた。約十二基近くの小型化主砲が出現し、両足の太腿に約八基の魚雷が装備される。

「……軽巡棲鬼・壊。砲雷撃戦ヲ……」

全員が悟った。

この敵は一筋縄ではいかないと。

「……………開始スル」

一瞬の静寂が訪れた後、軽巡棲鬼と飛龍率いる艦隊は即座に戦闘開始。円を描く様にそれぞれ海上を高速で駆けていく。

「第二次攻撃隊、発艦!!」

「主砲、放てッ!!」

「次弾装填完了! 撃て!!」

飛龍と蒼龍は攻撃隊を発艦。軽巡棲鬼目掛けて爆弾を落としていく。

日向の主砲と瑞雲の急降下爆撃を華麗に回避し、軽巡棲鬼は隙を見て砲撃した。

お互いに高速走行を止めず、容赦ない攻撃が続ける。灰色の指示通り、連携陣を単縦陣に変更。

徹底的に軽巡棲鬼を追い詰めていく。

「(この深海棲艦、明らかにヤバすぎる……!! 他のと比べて性能が桁違い過ぎだ!!)」

「(ここで仕留めなければ後々まずい事になるぞ!!)」

「(今ここで倒すしかない!!)」

『潜水艦の娘達から援護が来ます! それまで出来るだけ耐久力を減らしてください!』

「了解!」

伊168の意識回復により、潜水艦達は戦線に復帰。まだ戦えると

伊58を始め、伊8達も戦闘態勢に再度戻ってきた。両手から魚雷を展開させ、軽巡棲鬼に定めて発射。海上は水柱が立ち、黒煙が空に舞う。軽巡棲鬼との戦闘はより激しく熾烈になった。

一方で執務室及び司令室では――、

「軽巡棲鬼に壊がいるなんて知らなかった……早く対策法を練らないと!!」

「この軽巡棲鬼は対空や装甲が重圧は勿論の事、対潜装備まで備えてる。従来の軽巡棲鬼とは比較にならない程の強さだ……青葉!!」

『はいはい！ 何でしょうか!!』

「新たな個体を軽巡棲鬼・壊と認定！ 対策の為に資料として画像が必要になる！ お願い出来るか？」

『了解了解！ 任せてください!!』

摩耶が新しくこの深海棲艦を軽巡棲鬼・壊と命名。未曾有の危険個体として新たに情報と対策が必要になる。摩耶は青葉に軽巡棲鬼の姿を撮るように指示。青葉の護衛として金剛と隼鷹、那智と阿賀野と矢矧が向かい、飛龍達の援護も兼ねて艦隊が結成された。

「チツ!! すばしっこい!!」

思わず飛龍が舌打ちして嘆く。軽巡棲鬼・壊の戦闘能力は凄まじく、飛龍達の猛攻を受けても尚小破には行き届いていなかった。立て続けに来る砲弾を両足で弾き飛ばし、潜水艦達の魚雷を跳躍で回避。空中で身体を回転させながら隙について砲撃してきた。

「ツ……!! 確認……!!」

「待て!! どこへ行く!!」

『方向転換!?! どこへ!?!』

突然軽巡棲鬼が戦闘を中止し、高速走行で戦場を離れた。飛龍達も逃がすまいとその後を負う。

軽巡棲鬼が向かった先には――、

『まさかツ……!! ツ、護衛援護艦隊の皆！ 今すぐ戦闘態勢に!! 軽巡棲鬼が貴方達に目掛けてやってきました!!』

「やはり逃がしたか。仕方ない、私達が……」

青葉率いる護衛援護艦隊が飛龍達の場所へ向かう途中だった。灰色から急かすような無線が届く。

しかし矢矧達は歴戦の艦娘、余程の事がない限りはヘマはしない。現に鎮守府襲撃の際も那智、阿賀野、矢矧は損傷ありで事なきを得ている。

だが今回だけは違った。

「……？ どうしたの、や……はぎ……」

左の光景ばかり見続ける矢矧の様子に疑問を感じた阿賀野が左に顔を振り向ける。そこには――、

「沈メ!!」

「っ!? 能代――」

誰かの名前を叫んだ途端、阿賀野と矢矧は軽巡棲鬼に顔を掴まれた。

そして掴んだまま海面に引き摺り続け、上空へ投げ飛ばす。

軽巡棲鬼は大跳躍し、矢矧と阿賀野をまとめて蹴り飛ばした。この間、僅か五秒である。

「阿賀野!! 矢矧!!」

「まずいぞ!! 早く!!」

意識を失いかけた。

真横からの突然の攻撃に対応出来なかった。反応出来なかった訳では無い、目視で確認していたはずだった。攻撃も出来た、それでも阿賀野と矢矧は攻撃出来なかった。

「の……しろ……!!」

妹の名前を呼ぶ阿賀野。阿賀野と矢矧の目の前にいるのは深海棲艦化した能代だった。頭を抱えながらもゆっくりと立ち上がる。しかし攻撃を食らった所為か、意識が朦朧としていた。目眩で相手の姿がよく見えない。

「許サナイ……」

「…………？」

「許サナイ…………!! 絶対ニ許サナイ!!」

私怨がこもった声で軽巡棲鬼及びノシロは叫ぶ。身体に纏う蒼いオーラが活発化し、炎のように燃え盛った。ノシロは阿賀野と矢矧に指さして訴える。

「沈メテヤル!! 阿賀野! 矢矧! 才前達ノ所為デ…………! コンナ姿ニナル事ナンテナカッタノニ!!」

「能代姉…………!?! 何故…………!?!」

「今更許シテト言ツテモ無駄ダゾ矢矧!! 才前方沈ンダト見セカケ、私ヲ見捨テタンダカラナア!!」

「え…………」

戦闘態勢に入ろうとした阿賀野は何故かその手を止めてしまった。知らなかった真実に絶望してしまう。能代は矢矧と同じ艦隊で、深海棲艦との戦闘の際に矢矧を庇って沈んだと聞いている。だがそのノシロが話す真実は全くの逆だった。阿賀野は視線を矢矧に移し、矢矧の肩を揺さぶる。

「どういう事…………矢矧…………!! 能代は貴方を庇って沈んだんじゃないの!!?」

「そ、それは——」「違ウ!! 私ハ矢矧ヲ庇ツテ沈ンダンジャナイ!! 私ヲ捨テタイガ為ニワザト見捨テテ沈メタンダ!!」

矢矧は目の前の現実を受け入れられないのか、ただ呆然としていた。目は見開いており、僅かながらに呼吸が荒れている。阿賀野に肩を揺さぶられても人形のように立ち尽くしていた。

「そんな…………!! じゃあ嘘だったって言うの!?! 何でそんな事を!!」

「落ち着け!! 気を取り乱し過ぎだ!!」

「ッ!?!」

ノシロが艦隊からの攻撃を受け、一步下がる。隼鷹の航空機と金剛の砲撃がノシロに襲い掛かった。護衛援護艦隊が到着し、先に那智が阿賀野達の前へ出る。

「落ち着け…………阿賀野、矢矧…………! まずこの軽巡棲鬼が能代かどうか怪しい事に気付くんだ。本当かどうか分からないのに信じ込

むのは相手の思う壺だぞ」

「ドコガダ那智!! 知ツテルンダヨ、アノ鎮守府ノ事情ナンテ!! 優遇制度トカイウ馬鹿ゲタ制度ニ踊ラサレテ、アイツノ人形デシカナイ屑共ガ!! 私ハ忘レテナンカイナイカラナアアアア!!」

攻撃を受け続けながらもノシロは叫びながら隼鷹の航空機を全て破壊する。空が爆煙で埋まり、衝撃と風圧が周辺を揺らした。ノシロは憎悪を纏うような表情で一氣に阿賀野達まで接近する。咄嗟に那智が止めに入り、ノシロを押し退けた。

「そんな……」

「阿賀野! 立て! 今はそれどころでは——」 「沈メエエ!!」

ノシロの言葉に絶望する阿賀野。沈んだノシロの真実に耐えきれず、膝から崩れ落ちた。矢矧は驚いた様な表情で息が荒くなり、過呼吸になりつつある。灰色が確認を取ろうと呼び掛けるも声は全く聞こえていない。

「チツ……!! 邪魔するなアアアア!!」

ノシロの拳と那智の拳が衝突。

そして両者同時に砲撃。

爆煙が風に運ばれ、二人は姿を現す。

ノシロは次の攻撃に移り、那智を蹴り飛ばす。

那智は蹴りを受け流すも腕が震えていた。ノシロも直撃した場所が悪かったのか那智の砲撃で膝を着く。

「ハア……ハア……次カラ次ヘトツ……!!」

空にまた埋め尽くす程の航空隊がノシロを襲う。先程戦った飛龍達の艦隊が追い掛けてきたようだ。流石に二艦隊も相手はしてられないノシロ。戦況が悪い事に気付き、齒を噛み締めながらも訴えた。

「私ハ絶対ニ許サナイ!! 才前達屑共ヲ私ガ制裁シテヤル!! 覚エテロ!!」

ノシロは周辺に煙弾を撃ち、姿を眩ませた。

しかし飛龍達は姿を捉えている、再びを追い掛けようとした。が――

『飛龍、深追いは禁物だ。帰還しろ』

「提督?！」

突然無線から提督の声が聞こえた。司令室では摩耶の携帯から提督がビデオ通話で声を流していた。飛龍達と阿賀野達の声も聞こえるようになっており、先程の場面を黙って聞いていたようだ。提督の帰還命令に飛龍達は疑問の意を唱える。

「でも提督! あの時巡棲鬼は!!」

『分かっている。超特殊な新个体だ、今逃がせば後々脅威にはなるだろうな。だからアイツに任せろ』

「アイツ? アイツって……」

『お前らも一度は目に焼き付けた方が良く。この女が俺が苦勞する程のどれだけの化け物か、かつては鈴谷と加賀を窮地に立たせた最強の北上様を物の五分足らずでボコボコにした野郎だ。んじや後はよろしく——』

『——鹿島』

「ツ?! 誰ダ!!」

「私は大いなるこの海を眺め、戦場を駆ける戦乙女……」

逃げようとするノシロに立ちまはかるは銀髪の艦娘。腕を広げ、演劇の様にジェスチャーを繰り返す。

「提督を愛し、そして愛された艦娘であり……」

「ツ!!」

挙動不審な行動にノシロは戦闘態勢に入る。ゆっくりと近づくとその艦娘は殺気がまるで無かった。気配すら精神を研ぎ澄まさなければ分からないほどだ。

「全ての艦娘を蹂躪し尽くし、歴戦の猛者として鍛え上げる。何の取り柄もない……」

その艦娘は瞬きした途端、ノシロの真横にいつの間にかいた。

気付けなかった、全くの無音だったのだ。

何故だろうか、真横に向いてはいけない気する。そこに悪魔の様な表情を浮かべた艦娘が砲口を全てこちらに向けさせ、嘲笑っていたからだ。

「ただの艦娘……鹿島であります。以後——」

「沈メツ!!!」

ノシロは反撃しようと身体を動かした。その時には——、

「——お見知りおきを」

——目の前が真っ暗になった。

97. 勝手に写真を撮るのは肖像権の侵害

ノシロとの遭遇前、提督と瑞鶴は呉鎮守府を訪ねていた。

訪問手続きは事前にしていた為に名前を言っただけで許可を出してくれた。時雨と夕立の件で顔を晒して以降、憲兵や艦娘達は興味深々に顔を覗こうとしている。意外にも影響力はあったのか、海軍一の減らず口の嫌われ者のイメージは少なからず変わったらしい。

「元気かなー?」

「白くんか、こっちは大丈夫だよ。そちらこそ調子は如何かな?」

提督の後輩と執務室で出会う。鎮守府襲撃前に潜伏していた前任によつて重傷を負わされていたが、医師達の懸命な治療によつて回復。無事戦線に復帰し、今は普通に仕事を全うしている。後輩の隣には加賀が黙々と書類を書いていた。提督に気付いたのか一旦仕事を止め、立ち上がつて礼をする。

「こんにちは、また会いましたね白さん。そちらは……瑞鶴ですね」「ゲツ……加賀さん……」

「何怯えてんだ、別の加賀だろうが。何故俺の髪を触る、そして俺の背中に隠れるな、暑苦しいんだよ!!」

呉鎮守府の加賀を見て、瑞鶴は提督の背中に隠れた。暑苦しいと提督は無理矢理身体を捻つて瑞鶴を追い出す。

「今日訪問された理由を伺つてもよろしいでしょうか?」

「ああ今日は保管庫に入る。一時このちんちくりんを預かってくれ。後、菊月がいるだろ、呼んでくれるか」

保管庫。

瑞鶴は聞いてもはてなマークを浮かべたが、後輩と加賀はその言葉を聞いて慎重になった。呉鎮守府在籍時代、提督が保管庫に行く事は危険且つ重要な事がこれから起きるか、もう既に起きているかの二択になる。提督と選ばれた艦娘以外、誰も入る事は許されない。それ故に保管庫に何かあるのかも分からない。

だが入ってはいけない事ぐらいは誰にでも理解出来ていた。「分かりました。すぐにお呼びします」

「司令官か、久しぶりだな」

「死神みたいな顔をしているなあ菊月。早速だが保管庫に來い」

「……了解した」

簡素な挨拶を済ませ、二人は地下深くの保管庫へ向かう。保管庫の扉は頑丈且つ嚴重で、提督しか知らないパスワードを五回、ランダムで指定された順に言わなければならぬ。それを提督は軽々と意味不明な単語を並べ、扉の施錠を解除。重い鉄の扉が五段階に別れて鈍く開き、提督と菊月が中へ入る。

「これで司令官の保管庫に入るのは三度目か。最早慣れてしまったな」

「まあそんなに変わってないからな」

「今回は何を探すのだ？」

「薬と資料。菊月はその金属棚から、えーつと……Eの五段の中から薬を取ってくれ」

保管庫の中は埃臭く、そして異臭が混ざっている。

半永久的に冷凍保存された深海棲艦のサンプルや既に新式解体済み艦娘の艤装、科学室に置いてある様な薬品や並べられた試験管にフラスコ。奥には壁に敷き詰められた本棚が部屋を囲うように設置されている。保管庫内は散らかっており、足の踏み場を探すのが一苦勞だ。

菊月は薬の取り出しを頼まれ、訳の分からない化学薬品が並べられた鉄棚の前まで辿り着いた。常人では重過ぎてまともに引く事すら出来ない引き出しを菊月は簡単に引く。

「これか？ 司令官」

「そうそうそれぞれ。テーブルに置いてくれ」

見るからに怪しい半透明な液体が入っている瓶を取り出し、近くのテーブルに置く。粘り気があるのか瓶の内側にしつこく残っている。

「これは……何だ？」

「効果消去薬だ。危険度第一級に指定されている薬、所持するだけで俺が牢屋に収容される」

「はあ……こんなの所持しているのがバレたらまずくないか？」

「だと思っじやん？ 正直やばいと思ってる」

「思ってるのか」

「……あつたあつたこれだ」

提督が本棚からあるファイルを取り出す。中を開き、並べられた資料を一枚ずつ目を通していった。気になった菊月も提督の背中に乗り、資料の中身を覗く。

「鍵……鍵……鍵……これかな？」

提督が探していたのは鍵に関する資料。深海棲艦の提督として確保されたあの人との尋問内容でそう思える確かな証言がいくつか残っていた。

『残■たヨ。でも教え■しなイ』

『僕は知って■ル。■■が■した罪を■当化しようと■の娘達を■■の敵として■■■事をネ』

『なに、ただの戯言サ。僕はどう■ろうと構わない。後はあの娘達が鍵を使ってやって■れるさ……だけどその時に■達は——』

『——どれくらい虚構の概念と戦っているのかな？』

「虚構の……概念……」

「鍵と言ったのはここだけだ。散々コピーした中でこれしか記されていない……なるほどね」

提督が安心したかのようにため息を吐く。

あの人が言う鍵とは何なのだろうか。

この文だけでは分からない。

唯一ヒントとして虚構の概念というキーワードが引つ掛かる。更には何か重要な事が書かれていたのか一部、文が消されていた。

「……本当は覚えてるんじゃないのか」

「何を？」

「いや……何でもない……」

菊月が慎重そうに提督に問い掛ける。菊月は提督が無名の頃に所属していた艦娘だ。勿論、提督の過去や事情は知り得ている。

だからこそ菊月は提督を心配しているのだ。提督は感情のこもらない声で菊月に答える。提督の眼を見た菊月は一瞬動揺し、提督の背中から降りる。調べ物が終わった二人は保管庫の扉を固く閉め、地上へ向かっていった。

「いやー良かった良かった。調べたい事があったが順次解決に向かってきている。ありがとなー!!」

「いえいえ、大丈夫ですよ」

提督が黒い鞆を持ちながら後輩に別れの挨拶をする。執務室では瑞鶴と加賀が珍しく話していた。何か共通性があったのか盛り上がっていたようだ。提督は瑞鶴を連れていき、呉鎮守府を出ていった。

「どうしたの、菊月」

「いや……久々に司令官の眼を見て、少し驚いてな」

「眼……？」

「ああ、あの眼は……」

——ヤツの眼だった……」

その眼は紅黒く、憎悪に溢れていたという。

「(っ)は……？」

「何でも揃う激安の殿堂様」

提督は素顔のままですーぱーの中に入る。瑞鶴もその後を追うが、中の混雑様に驚いていた。ダンボールが何個にも積み重なり、お菓子や飲み物が山のように積まれている。棚と棚の間に出来た道はとても細く、すれ違うのにも苦労した。

「何買うのよ」

「片栗粉とか色々」

買う物を物色している提督と瑞鶴に周りの人々は興味深々だ。遠くから有名人の様にマジマジと見ている。スマホで写真を撮る者もいた。

確かに軍服のままですーぱーの中に入れば物珍しそうな目で見られるのも無理はない。更には謎の存在として語られていた提督だ。素顔を一目見ようと集まって来ている。そんな中、提督の携帯から着信音が鳴り響いた。

「何だ摩耶」

『提督か、敵襲だ』

「……んで敵の数は？ 種類は？ クラスは？」

『哨戒艦隊旗艦浜風の報告によると、数は一体、種類は海上型、クラスは鬼。恐らく特殊な？ 軽巡棲鬼を目視で確認したとの事だ』

「成程ね……分かった、今すぐ艦隊を再編成しろ。旗艦は飛龍、その他は蒼龍、日向、最上、五十鈴、不知火。潜水艦は全員出撃な。その他の馬鹿共は近海の警戒レベルを引き上げ、決められた警戒網を見張るように。近隣住民、整備士と憲兵の避難を急げ」

『分かった』

提督は小声で聞こえない様に摩耶に伝える。周辺を気にしている

のか左右をゆっくりと見ていた。

「後、作戦指揮は灰に任せる。摩耶がサポートしてくれ。今俺は呉にいて手が離せない。尚軽巡棲鬼は鹵獲不要、沈めてよしとする。もし飛行場姫が何か言ってくるなら意見も聞いてやれ」

『わ、私ですか!?!』

「いいじゃないかあ、これも経験だよ灰君。だが何かしでかしたら許さんからな」

『は、はい……』

灰色の怯える声が微かに聞こえた。それを聞いた提督はゲス顔でキシキシシと変な笑い声を上げている。

「って事で、後は頼んだぞ摩耶——（ドン〇〇ホーテ♪?）あ、やべ」

『おいちよつと待て。呉にいるんじやツ——』

「ふう……危なかった」

「いや間に合っていないでしょうよ、どう考えても」

激安の殿堂で買い物を終え、専用車に乗る。某独国との会議に行つた際の運転手が駅まで送ってくれた。その最中にまた摩耶から着信が来る。提督はため息を吐きながらも携帯を開いた。

「今度は何だ摩耶」

『あの軽巡棲鬼なんだけどさ、どうやらこの鎮守府の事を知っているみたいなんだよ』

「ふーん……」

『一応記録する為に青葉の護衛援護艦隊を出撃させたんだ、あの軽巡棲鬼はとてつもなく阿賀野と矢矧に憎悪を向けてる』

その名も軽巡棲鬼・壊。恐らく何かしら改造された上級の個体だろう。記録の為に青葉や艦隊を組ませたのは正解と言える。その艦隊に阿賀野と矢矧もいたが、その軽巡棲鬼はその二人を目の敵にしているらしい。

「なるほどねえー……んじや予定変更、討伐から鹵獲にしろ。そして鹿島を向かわせるんだ、ビデオ通話でマイクに近付けろ」

『分かった』

その後はしばらくノシロと阿賀野達の会話を聞いていた提督。隣

に座っていた瑞鶴も耳を寄せて、一緒に聞いている。ノシロがどういう存在か、矢矧の罪や阿賀野の絶望ぶりが無線から聞こえてきた。最早戦いどころの話では無くなっている。

『逃がすかッ!!』

「っ? 飛龍か。おーい飛龍、深追いは禁物だー。帰還しろー」

『提督?!』

飛龍達の艦隊も追いつき、逃げゆくノシロを追いかけるのを止めさせた。後は鹿島がやってくれる。わざわざ挟み撃ちにする必要もない。飛龍は提督の命令に反対の意を唱えた。

『でも提督! あの軽巡棲鬼は!!』

「分かっている。超特殊な新個体だ、今逃がせば後々脅威にはなるだろうな。だからアイツに任せろ」

アイツとはまさに鹿島の事だ。

提督は知っている。あれこそ本物の化け物だという事を。

提督が無名の頃に着任した頃の鹿島は既に強かった。提督がわざわざ教えずとも、他の艦娘とは比べ物にならない程の戦闘能力を有していたのだ。剣術や体術、戦術の全てを知り尽くしており、摩耶ですら勝った事がない。彼女はこの世に造られた時から完璧な艦娘として完成されていた。

『お前らも一度は目に焼き付けた方が良く。この女が俺が苦勞する程のどれだけの化け物か、かつては鈴谷と加賀を窮地に立たせた最強の北上様を物の五分足らずでボコボコにした野郎だ。んじゃ後はよろしく、鹿島』

日本海軍最終決戦兵器が一人、香取型練習巡洋艦二番艦、鹿島。またの名を――、

シロガネ
『鏢』

鏢の髪を輝かせる彼女を前に立つ者は、如何なる生物でもひれ伏せ

られると言われている。

「あの鹿島ってそんなに凄いの……？」

「摩耶と何回か、戦ったが全て引き分けだ。最終決戦兵器として例外的に編入が認められているが、アイツこそ我々人間が一番警戒するべき……悪魔だよ」

提督でさえも鹿島の存在は恐れていた。

数多の艦娘を見てきた提督だが、あれ程思考が読めない艦娘は鹿島が初めてだった。彼女自身は練習巡洋艦だからと屁理屈を並べて戦場に出撃する事はなく、寧ろ出撃する事を拒む艦娘。鹿島さえいれば戦況を一変させる事など容易いだろう。それなのにも関わらず出撃しなかった。

ある時その理由を聞いた事がある。

『一気に殲滅させたら……その後はヤっても楽しくないじゃないですか？ だから私は出撃しません』

「そりゃ上層部もお前らを怖がる訳だ」

「……」

98. さあ派手に狂って回って踊りましょう

「あー疲れたあー、肩揉んで瑞鶴」

「えー何でそんな事しなきゃならないのー?」

「やってくれれば給料上げる——」「全力でやらせていただきます」

「お疲れ様です白さん」

荒くれ鎮守府に帰還した提督と瑞鶴は応接間のソファに寄り掛かった。買物袋をテーブルに起き、疲れた身体を癒そうとする。ソファに寝っ転がる提督は給料アップの条件で瑞鶴に肩を揉ませる。

「灰か、馬鹿共はどんな感じか手短かに話せ」

「はい。第一艦隊は全員入渠しており、護衛援護艦隊は那智が大破、同じく入渠しています。高速修復材は数が少ない為、使用は断念しました」

「よろしい、良い選択だ。んで問題の馬鹿二人は?」

「阿賀野と矢矧は戦闘後、部屋に閉じこもっており、誰の声も聞いてはくれない様子でした」

鹿島がノシロを鹵獲した後、帰還した阿賀野と矢矧は入渠もせず部屋に閉じこもった。その後は誰が声を掛けても返事はせず、ドアには鍵が掛けられている。

「まあそうだろうな。鹵獲した軽巡棲鬼は?」

「軽巡棲鬼は現在、地下営倉にて収容中です。鹿島さんと戦い、大破以上の損害を受けており、暴れる可能性も考慮して拘束器具を装着させています。また艦装については壊のままです為に取り外しに成功、工廠にて預かってもらってます」

ノシロの艦装は工廠にて保管されている。取り外した途端に空中に浮いていた艦装は、エネルギーが失われたのか地面に重い音を上げて落ちたようだ。母体の方は専用の拘束器具を使用し、身体全体を拘束。今は地下営倉にて意識を失っており、未だに目が覚めていない。暴れる可能性もあるとみて艦娘達が見張ってくれている。

「よーし大体は把握した。早速、新個体の間抜け顔でも拝んでこようじゃないかあ」

突然提督は起き上がり、肩を回し始める。瑞鶴と灰色だけと地下倉倉に連れていき、ノシロが収容されている牢屋まで向かった。ノシロは身体全体を拘束されたまま、静かに眠っている。特に身体の損傷は酷く、見るに耐え難い傷痕が自然治癒力で治り掛けたまま残っていた。

「まんま能代だな」

「姿や顔はほとんど能代に酷似しています。更にこの鎮守府の記憶があるとするれば最早明白かと」

「何が明白なんだ？」

「え、いや沈んだ艦娘を深海棲艦として酷使されている事ですが……」

灰色は沈んでしまった艦娘は深海棲艦に利用され、新たな深海棲艦に生まれ変わるといふ説を信じていた。

「んなの当たり前だろ。結構前から言われている事だ、この能代以外にもいくつか事例がある」

「そうなんですか……」

一般人には深海棲艦と艦娘の事しか知らない。深海棲艦が力をつけ、増え続けている理由は海軍内部でも噂程度でしか広まっておらず、真相は闇とされていた。だが現元帥と■■■大将、■■■大将、提督（中将）、■■■中将と軍の上層部は艦娘と深海棲艦が密接な関係にいる事を知っており、この機密情報は極秘として名前を挙げた僅か数人しか知らない。

「この軽巡棲鬼は本当に特殊だ。通常の軽巡棲鬼には艦装に乗る形で足が無い。だがコイツはその艦装を双方に展開させ、足を生やしている。その結果、見事な機動力と戦闘能力を手に入れた」

飛龍達の報告によれば、軽巡棲鬼でありながら対空装備や強力な装甲は勿論の事、対潜装備も常備していた。

そして普通の軽巡棲鬼とは比べ物にならない程の素早い機動力、艦娘の各弱点を見極めて正確に当ててくる命中精度。新たな対潜装備として使用されていた水中で炸裂し、一気に爆発させる砲弾。

最早軽巡棲鬼とは呼べない何かだ。空母棲姫並の戦闘能力を有しているといっても過言ではない。

「今後もこの軽巡棲鬼が出る可能性は……」

「十分有り得るだろうなあ、やはり深海棲艦も力は増してきてるらしい。何より……」

ノシロと阿賀野達との会話をスマホ越しで聞いていた提督。このノシロは正確にこの鎮守府の事について、恨むように訴えていた。明らかにこの鎮守府について何か知っている。

「コイツはこの鎮守府の事を知っている。ちょうどいい、洗いざらい吐いてもらおうじゃないかあ。いやあ楽しみでしかない、何かしら情報があれば■共から一步有利になれる。グへへへ」

「凄いゲス顔……」

提督はゲス顔で鉄格子の先に眠るノシロを舐めまわす様に眺める。巧みに指を動かし、これからの尋問に胸を膨らませた。深海棲艦となればわざわざ躊躇う必要も無い、何がなんでも聞き出してやろう。

「念の為に見張りは艦娘二人が午前午後のローテーションで組ませています」

「問題ない、自由にしたまえ」

牢屋の前には朝潮と荒潮が見張ってくれていた。疲れた様子はなく、任務と言い聞かせて立派にこなしている。

「そろそろ夕飯時だ。朝潮、荒潮、時間を見て夕飯は自由にして構わない。誰かと代わるなり、一人ずつ交代するなり、お前らで決める事だ」
「分かりました!!」

「分かったわ〜」

見張り役の朝潮と荒潮に後は任せ、提督は地上に出る。既に日は暮れており、辺りは薄く暗くなっていた。夏特有の謎の暑さが微かに感じる。

「すいません……」

「何だ」

「あの鹿島さんって……失礼な言い方になるんですが……バイサーカー狂戦士か何かですか?」

これを聞いたら鹿島は笑いながら追及してくる事だろう。

だが灰色が若干怯えている様に、鹿島の戦闘を見てそう思うわれて

もしようがない部分だらけだった。艦娘とはかけ離れた戦い方、獲物を必ず屠る獣のやり口と似ている。

「狂戦士バーサーカーねえ……あながち例えは間違ってる」

「皆、鹿島さんに怯えてばかりで散々な事になってます。正直私も生きた心地がしなくて……艦娘の真髄、その片鱗を見たような気がします……」

「アイツの戦闘能力は未知数だ。明らかに他の艦娘とは一線を超えているからな。ある意味完成された艦娘、いやリミッターが常時解除されている艦娘と言えるだろう。伊達に『鏢』シロガネとかいう厨二臭い異名を勝手につけられ、海軍内で轟かせた事だけはある」

故に提督も警戒している。思考が読めない艦娘ほど、何をしでかしてくるか分からない。イチャコラにしろ、戦闘にしろ、鹿島は全てにおいて未知数だ。時々感情のこもらない声は時として焦点を覚える程に。

「普通の姉の香取でさえも怯える程だからな、心底アイツが味方で良かったと思っている」

もし敵だとすれば、それはこの戦争はどうに終わっている事だろう。それを聞いた灰色と瑞鶴は思わず唾を飲んだ。提督が警戒する程の艦娘、■■■■以上には厄介なのかもしれない。

そう思っている中、提督と瑞鶴と灰色は食堂に向かっていった。ドアを開けば、いつもの賑わいが少し足りない。

「久々のお通夜ムードだなオオイ!! いつもの馬鹿騒ぎはどうしたア!!」

提督の大声で艦娘達は一齐に身体を跳ねらせる。ゾロゾロと提督の前に集まり、怯えた顔を提督に見せる。飛龍と蒼龍が必死に訴えた。

「提督……!」

「何あれ! 艦娘のやる事じゃないよ!! 明らかに度を超えてるって!!」

「怖いよ!! 明日から何て挨拶すればいいのか分からない!!」

他の艦娘達も飛龍と蒼龍の声と同じのようだ。どうやら鹿島のイ

メージがああ、の戦闘で一氣に変わったらしい。予想していた事だ、別に驚く程の事ではない。

「大丈夫だあ、アイツは艦娘に対しては半分以下の力で相手してくれる。死ぬ事はないだろう……多分……」

「多分って何!? その多分が一番怖いよ提督!!」

「確かにアレはやり過ぎなところが見える。鹵獲が視野に入っていたとはいえ、目くらましに水柱を発生させ、背後に回り込んで身体を拘束。海面に叩きつけ後頭部をひたすら砲撃……提督としてはどう思っている?」

長門が冷静に分析し、提督に意見を求めた。確かに鹿島の戦闘は通常では考えられない事だろう。悪魔の様な笑みでひたすら砲撃し続ける姿は味方の艦娘にとつて恐怖を募らせたはずだ。恐らく鹿島本人は殺す気で戦っている。

「んまあ……アイツは元々イカれてるから、そういう戦闘面は気にしない事にしてるな。大丈夫だ、安心しろ。命まで取りはしないって。な?」

「はい! 大丈夫ですよ! 練習巡洋艦としての務めを果たすだけなので!」

提督に背後には鹿島がいた。氣配に氣付かなかった灰色と瑞鶴は二度見をシンクロさせる。

鹿島はとびっきりの笑顔で答えた。周辺の艦娘達は全員引いている。

「……って事で、かいさーん。各自自由にしたまえー」

提督の呼びかけによつて一時解散。艦娘達は納得いかない表情や少々怯える表情しながら持ち場に戻つていった。提督達は定食を受け取り、二階のテーブル席にて夕飯を取る。

「ギャハハハハハハ!!! お前食べられねえのか!! コレが!? 甘くて美味しいコレがア!!! 残念だねえええ!!! とつても美味しいのに残すなんて!!! マジないわー、本当ないわー」

「別に笑わなくなつて……!! その顔はああ……!!」

提督の嘲笑つた顔を見て、瑞鶴は手を震わせる。出てきた料理に嫌

いな物が入っていたのか、傍に寄せたのを提督に見られて馬鹿にされていた。

「流石五航戦ね。だから勝てないのよ」

「アア!? 何ですって!!?」

「言われてやーんの! 言われてやーんのオオオ!!!」

「うるさいわね!! 提督さんだって残してるじゃないの!!? 人の事言えないわよ!!!」

「好きな物は最後に残しておくというのを知らないのか!!? やばくないかオイ!! とんだ鳥頭だ!! 一度動物病院に行つてその小さな頭でも見られてくるといい! あまりの小ささに獣医も笑いを堪えるのに大変な事だろう!! ブ〜ハ〜ハ〜」

瑞鶴に煽るだけ煽りまくる提督。これだからこの男は性格が悪い上にうざい。もう慣れたのか周りは平然としている。まだ慣れない灰色は暴れる提督を説得し、まあまあと瑞鶴を宥めていた。だがしかし瑞鶴の怒り値は限界を突破する。

「あつたまきた!! ぶん殴つてやる!!」

「ご馳走様でした」

「あ、こら逃げるなあ〜!!」

——執務室

「何の用だ……■■■■」

消灯時刻を超え、深夜の午前一時。執務室で一人、提督はある仕事をやっていった。静かな執務室にキーボードの打つ音が聞こえる。照明は消しており、パソコンのディスプレイが天井を淡く照らしていた。

その時、執務室のドアからノックする音が聞こえる。中に入ってきたのは■■■だ。

「少しお話しませんか? 顔を合わせて」

「……悪くない」

提督は一時仕事を中止し、応接間にてインスタントコーヒーを淹れ

る。提督と■■分を作り、コーヒーカップを■■に渡した。

「顔を合わせて話がしたいって事は今度は何を企んだのかな？ 楽しみで仕方ないよ」

「もう少し待っていただければ直に来ますよ。それにその私達の企みも知っている上で貴方は対策を練ってきた……お互い様ですね」

「……だな」

「どうやらお互いがこれから何をやるかはお見通しらしい。■■がこれから行う計画も、それに対抗するべく提督が練った対策も、両者共にどちらも把握済みだ。提督は黙って珈琲を啜り、ソファに寄り掛かる。

「今度は何がしたい？」

「貴方を殺します」

「どうやって？」

「そのくだらないプライドをへし折った上で数多の苦しみを与え続けながら少しずつ」

「教えていいのか？」

「教えた所で計画に影響はありません」

「出来るっても？」

「出来るから言ってるんじゃないやありませんか？」

張り詰めた空気が執務室の中を満たしていく。両者火花を散らし、一歩も譲らない。相当提督が憎いのだろうか、■■から殺気が漏れている。

「……まあ……楽しみにしてるよ」

「はい、是非ご期待下さい」

沈黙が続く。

話がしたいと言っても話題がある訳ではなく、お互い出方を探っていた。勝負の駆け引きは更にヒートアップしていく。そこで提督は少し話題性を変えて■■に話してみた。

「お前的にはどう思っている？ 阿賀野や矢矧、あの軽巡棲鬼の事を「そうですね……正直な話、どうでもいい。というのが初発の感想です」

「殺伐としてるねえ、仲間内なのにも関わらず、いざこざな関係は個人で解決しろってか」

「あの軽巡棲鬼が前のノシロとはいえ、私には全く関係が無いので。どうもコメントしづらいところですよ」

自分は関係が無いから関わらない。至極当然の理由だ、その方がよっぽど安全だろう。だが提督ら■■■の言葉に少し違和感を感じた。「その口ぶりだと自分以外誰も信じてないって感じだな。差別してる側のリーダーはどうやら慈悲も欠けりも無いらしい」

「あら、貴方だつてそうではありませんか？ 今は違つかもしれませんが、着任仕立ての貴方の眼は……完全に私と同じ眼、でしたよ？」
両者共に睨み合う。

蒼白く輝く眼と黒く光のない眼の視線が衝突した。

「……よく考えれば私達は同じ穴の貉かもしれないね。自身の目的の為ならば他人を無理矢理行使する……他人がどうなるうが関係ない、自分さえ良ければ全て良し。いつまでも憎たらしい……支配者の眼ですよ」

■■■の言葉には若干怒りと悲しみを含むような感情を感じ取れた。まるで前任を憎み、そして自分さえも憎んでいるような、後悔した声。

あえて提督はその事については何も言わなかった。

「……ここ最近暑くなりそうだ」

「ええ……そうですね……」

「この時期なんだろう、初めて殺したのは」

■■■の頭が少しだけ動く。

しかし■■■は動じない顔で答える。

「……？ 仰っている意味が分かりません」

「それは本当か？ 残念だな、折角話が出来ると思っていたのに」「すいません、そういう手の話はよく分からないんです」

話を遠ざけようとするのが聞いて取れる。

あまりにも拒み過ぎて逆に怪しい。

「分からない、ね……そうやって現実逃避し続けると後でまた痛い目

に会うぞ」

「ご忠告どうもありがとうございます」

「挙げる花は考えたのか？」

「何の話かさっぱり」

「何焦ってるんだ？ 遠ざけてばかりじゃないか」

「焦っていませんよ」

「分かるぞー、大切な何かを失う気持ちぐらい」

ソファに再度寄り掛かり、耳の穴をほじくる提督。 ■■は負けじと

答えた。

「あら、貴方にも人の心はあったんですね。関心です」

「そういうお前はその人の心を捨てられずにいるよな」

「人間離れた貴方には言われたくありません」

「そもそも人間じゃないお前にも言われたくない」

また沈黙が続く。

珈琲もすっかり冷めてしまったようだ。外から風の音がよく聞こえる。

「……少し眠くなってきました。お話はこれぐらいにしましょう」

「そうだな。夜も深くなるところだ」

「では……ご覚悟を」

「戦争もそろそろか……」

99. 馬鹿って言った方が馬鹿というこの世の不条理

「阿賀野姉……」

阿賀野と矢矧は部屋ですっと閉じこもっている。沈んだノシロが深海棲艦として蘇り、聞いた事のない真実を聞かされた。

嘘だったのだ、能代は矢矧を庇って沈んだのではない。力不足という理由で放棄する為に沈めたのだ。あまりにも残酷、且つ卑劣。そんな根も葉もない理由で艦娘が艦娘を見捨てるなど言語道断だ。

だが矢矧はそれを忠実に行い、阿賀野に嘘をついていた。能代だけではない、酒匂でさえも同様の理由で沈んだ可能性すらある。何故姉妹をいとも容易く見捨てられるのか阿賀野には理解出来なかった。

「その……何で——」「やめて」

矢矧がベッドに寝込む阿賀野に近付き、何とか答えようと口を開いた。が阿賀野は矢矧の言葉を遮り、冷たい言葉で返す。その声は若干震えていた。

「今は話しかけてこないで」

「……分かった」

阿賀野は泣いていた。

妹が起こしてしまった罪と自分の不甲斐なさに。

あの時、自分を犠牲にしてまで矢矧を止めていればまだ何とかなかったかもしれない。例え自分が差別されても身を呈して動けば良かったのかもしれない。そういつた後悔に押し潰されそうだった。姉として情けない、周りを止められる自信も無い。

どれだけ自分が惨めなのかを思い知らされた。

「なんでよ……」

——朝九時。

「木曾、手合わせを頼む」

「了解した」

鎮守府の港にて木曾と天龍が模擬訓練をやっている。互いに刀を構え、プリンツの合図の元に始まった。天龍の左手首に何か特殊な物を装着している。しばらくは警戒した方が良さそうだ。

「では……始め!!」

笛が鳴る瞬間に二人は急発進。

大きな水しぶきを上げて突進している。

先制攻撃は木曾。わざと海水を斬り上げ、水の壁を作った。

天龍は跳躍して水の壁を越える。

真下には砲口を上に向けた木曾がいた。

「掛かったな!!」

真上の天龍目掛けて砲撃。

しかし天龍は身体を捻って砲弾を躲す。

そして木曾に向けて砲撃。反動で着地地点をずらし、事前に撃たれた木曾の魚雷を回避する。

天龍はまたもや突進。身体を回転させ、刀を一気に振り下ろす。

木曾は攻撃をサーベルで受け止めた。

衝撃で海水が散り、水柱が上がる。

腕を上げたのはお互い様のようだな木曾……!」

「同感だ……フンツ!!」

木曾は天龍ごとサーベルで押し上げ、回し蹴りで蹴り飛ばす。天龍

は受身を取って着地、そして急発進。木曾と衝突し、剣戟が始まる。

互いに一步も譲らない。

刀身は軽くとも一撃が重い天龍の大太刀、刀身が軽いが故に突き技

の威力が高いサーベル状の剣。

勿論模擬訓練なので峰で当てるに決まっている。だがそんな事など一

切感じさせず、二人はぶつかり合った。キーンと高い金属音が鳴り響

き、擦りあった火花が周囲に飛び散る。手加減など不要、ただ目の前

にいる相手を倒すのみ。互いに剣技を駆使し、相手を追い詰める。

「ッ!!」

「甘いぞ天龍!!」

「甘いぞ天龍!!」

カウンターで天龍のサーベルを弾き返し、回し蹴りをする木曾。しかし回し蹴りはフェイントだ、本命はサーベルが残っている。このままではサーベルにまともに当たってしまう。が――、

「何ッ!?」

「もらったッ!!」

突然天龍が跳躍し、サーベルを回避。

身体を縦に回転させ、木曾の真上にて刀を振り下ろす。

二人を困うように水柱が上がり、爆発音の様な音が響き渡る。

「なるほど……その左手首の細工は何かしらの跳躍装置というわけか……!!」

「こいつに慣れるまで何十時間掛かったんだ……もう完璧に扱える!!」

木曾のサーベルに乗りかかり、刀で押すのをやめない天龍。

しかし木曾は天龍に砲口を向けて零距离砲撃。咄嗟に反応した天龍は砲弾を回避、身体を回転させて着地する。

「……悪くないなその跳躍装置。俺も一度試してみたい」

「あまりおすすめは出来ないけどな、反動が物凄いいしょ」

「大丈夫だ、お前より早く慣れてやるさ」

また剣戟が始まった。その様子をプリンツが睦まじそうに眺めている。あの二人は確実に成長しており、即戦力になる事間違いないだろう。

「もう扱える様になりましたか、天龍さん」

「あら明石さん、観戦してたんですね」

「そりゃ勿論。データを取らなければより良いものは作れませんからね」

明石が岸边にてメモを書いている。双眼鏡のような眼鏡を装着し、木曾と天龍の剣戟をまじまじと観戦していた。天龍が小型ジェット噴射器を使う度、素早くメモに書き写している。

「今あの装置はどれくらいの完成度まで？」

「概ね八十%近く。まだ最終調整が必要な状態ですね」

「それは良かったです。私も少し試してみたいので」

「完成をお待ちしていただけたらと思います」

明石は笑顔で答えた。彼女自身は開発するのは大好きな為、期待してもらえれば伸びるタイプでもある。ただ頑張り過ぎて徹夜するのは少し疑問ではあるが。

「そういえば Admiralはどこへ？」

「提督なら食堂の厨房にいるって聞きましたね」

「あら珍しいですね、Admiralが厨房に行くなんて」

「そうなんですか？ 普段は滅多に無い事で？」

「そうですね、Admiralはあまりそういう所には行きませんが、いいんですよ」

——食堂、厨房内。

「提督う！ 何してるのー？」

「色々」

厨房にて提督が作業をしていた。鳳翔は加賀達と弓道の訓練中、間宮と秘書艦の五十鈴が厨房にて提督の事を物珍しそうに見張っている。そこに気になって入ってきた島風が提督に絡んできた。

「何これー？ ネバネバしてるー」

「水飴だ、なめると甘い液体」

銀のボウルに入った水飴を掻き混ぜていた提督。水飴はドロドロと粘性があり、不透明で気泡が入り混じっている。水飴が入ったボウルの周辺には水飴の瓶が四つ、それぞれ違う味らしく接触は厳禁。しかしボウルの中に入った水飴ならと提督は指で水飴を付着させ、島風の口の中に誘い込む。

「はむっ……あつまーい!! もっとやってー!!」

「犬かお前はア!! 人の指を嘗めまくるのはやめろ!!」

指についた水飴を舐め切ろうと島風は提督の指を必死に舌で舐め取る。提督は島風の頭を抑え、島風から指を離す。そして水道水で唾液で濡れた指を懸命に洗い流した。

「えー失礼だなー提督うー。そんなに私の涎が汚い？」

「当然だ、何億個の細菌が口の中で動いてんだぞ。洗うに決まってるだろ」

「素直に酷い」

「提督が厨房にいるのは珍しいですね……」

「あれ？　じゃあ提督うー、仕事は？」

「俺のは終わらせた、後は灰に任せている」

提督はいち早く仕事を終わらせ、厨房に来たようだ。秘書艦である五十鈴も少し遅れて仕事を終わらせ、提督の後を追っていたらしい。

「この水飴で何か作るのー？　これは何ー？」

「質問を重ねるな露出バニーガールめ。こっちは高級な水飴、今お前に味見させたのが普通の水飴だ」

「高級なものもなめてみたーい！」

「駄目に決まってるだろ!!　お前はさっさと訓練に行つてこい!!　えーつと……これだな」

島風が頬を膨らませ、ぶーぶーとブーイングしている。

しかし提督はそんな事など全く気にせず、周辺に置かれた水飴が入っている瓶を取り出す。長いスポイトで少しだけ中身を吸い取り、ボウルに入った水飴の中に挿入する。

「あつ、提督の……挿入ってきた……」

「紛らわしい事を言うなアア!!」

隣でふぎける島風の頭を鷲掴みにし、怒鳴り吠える提督。頭をグリグリと拳で押し付けた。耐えれない激痛に島風は悶絶する。倒れる島風を放り投げ、提督は作業を再開した。ボウルの水飴を更にまた掻き混ぜていく。

「もつと……もつと私のナカをつ、掻き混ぜつ……てつ」

「そこつ、そこがいいのおお……」

今度は鹿島が提督をからかう。

提督は一旦作業を中止、即座に島風と鹿島を追い掛けた。二人は全速力で提督から逃げようと必死になっている。提督は無言でその後を地の果てまで追い掛けた。

約十分が過ぎ、提督が息切れしながら厨房に戻ってきた。よく見れ

ば食堂のテーブルには縄で拘束された島風と鹿島が気絶したまま放置されている。流石にキレたのか、何か悍ましいオーラを感じた。

「間宮、ちよつと味見してくれ」

「え……は、はいー」

そんな中提督が間宮を呼び出し、水飴の味見をさせた。スプーンで水飴を掬い、口の中に入れる。何も変わらない、ただの甘い水飴だ。

「普通の水飴……ですね」

「そうか。んじやこれを料理に入れる事は出来ないか？」

「りよ、料理にですか？ うーん……そうですね……大学いも辺りなら出来なくもないんですが……」

間宮が戸惑いながらも丁寧に例を挙げながら答えた。確かに水飴を使った料理はいくつか存在する。別に難しい事ではない。

「なら構わない。自由に入れてくれ」

「分かりました……っ……あのー！」

「何だ？」

間宮は何か言いたげそうに提督に話しかけた。しかし突然返事をした提督に驚き、言葉が詰まる。頭の中で考えていたやりたくて言いたい事を忘れてしまった。

「あ、いえ……何でもありません……」

「そか。おーい五十鈴ー、片付けるから少し手伝ってくれー」

「私もやるのー!？」

「秘書艦なんだから当然だろうがよ、胸デカイんだから腕もあるだろ」

「何その偏見、馬鹿じゃないの」

「うっせえんだ馬鹿って言った方が馬鹿なんだよバーカバーカ！ 早く手伝えー！」

「んだとコラア!!」

提督と五十鈴の会話が聞こえなくなる程、間宮は悩んでいた。間宮はそれほど料理の腕は上手くない。どちらかという和菓子やスイーツ系が得意分野だった。前任の頃はそういった贅沢品は艦娘に食べさせる事は許されず、甘い物が嫌いだからという自己中心的な理由で作る事すら許されなかった。

だが今は違う。提督はやりたい事さえ言えば必ず手伝ってくれる人だ。お店を持ちたいという欲望を叶えてくれるかもしれない。お店さえ持てば艦娘達にたらふく甘い物を食べさせてあげられる。しかし初めて会った時から提督が怖くて、顔を合わせば緊張で言葉がどうしても詰まってしまうのだ。

つい先程もある事をいきなり思い出して、勇気を出して言おうと思っていた。

かつては自分のお店があつた事を。

「言えたら……いいなあ……」

そんなアテもない他人任せの願望を呟き、間宮は普通な毎日を過ごしている。

100. コンプライアンスなどクソくらえ

「え？ 起きたの？」

「はい、現在は金剛と比叡の二人で最大限の警戒状態で見張っています」

「んー、まあちよつとぐらい話すか」

執務室に行く途中、灰色と時雨に出会った提督と五十鈴はある報告を受ける。どうやら現在拘束中のノシロが意識を取り戻したらしい。暴れる事はなく、ただ黙り続けているとか。聞きたい話がある為に提督達は地下営倉へ向かう。

「あれ、そういえば今日は来客が来るんじゃないかな」

「ええ、十四時半に予定があるわね」

「んじや手短に済ませよう」

——地下営倉

「おっはー、軽巡棲鬼・壊……いやノシロ」

提督は椅子を逆の方向に座り、背もたれの上に両腕と顎を乗せていた。ノシロが気付いた時に優しそうな笑顔で手を振る。ノシロは提督を見つめるなり何も喋らない。

「一生で最悪な目覚めだろう。そんな姿じゃ傷の痛みで悶絶してもおかしくない」

「慣レタワ、コンナ痛ミ……貴方ガ……ココノ新タナ提督？」

「ああそうだ。以後よろしく」

挨拶しながら提督は手を伸ばす。しかし拘束中のノシロは手を握るどころか動く事すらままならない。ノシロは提督の伸ばした手を無視し、希望の要件を述べた。

「サツサト拘束器具ヲ外シテクレルカシラ」

「それは出来ない相談だなあ、外せばお前は俺じゃなくて阿賀野と矢矧を殺しにかかるだろ？」

「話ガ分カルヨウデ分カラナイワネ……ッ……」

内部から突き刺さるような痛みが広がる。ノシロの身体は■■■医

師の応急処置で母体の損傷は最低限の治療をされているが、完全に傷は癒えていない。特に後頭部から背中にかけての損傷が酷く、皮膚は爛れて内部の肉が焦げて見えていた。今でも巻かれた包帯から赤い血が滲み、拘束器具に触れる度に激痛が伴う。

「お前がその損傷でまともに動けない事ぐらいは把握済みだ。さて……聞かせてもらおうか、この鎮守府の過去を」

提督が狙っているのはノシロの記憶による前任や■■■の過去。ノシロはこの鎮守府の事を知っており、姉妹の阿賀野と矢矧に対する憎悪を覚えている程鮮明だ。ならば他の艦娘の事情や前任の行動などを覚えていく可能性がある。

「……聞イテドウスルノ、ソコノ金剛ヤ比叡ノヨウニ懐柔デモスル気？」

「そんな馬鹿丸出しな事はしない。俺はこの馬鹿共の馴れ合いなんぞ毛嫌いするほどでなあ、理由としては■■■をぶっ飛ばす為にお前の過去が知りたいんだ」

提督はノシロを睨んでニヤニヤと笑みを浮かべた。■■■はあの黒い箱以上に何かを隠している可能性がある。それさえ掴めばこちらが戦争においてまた有利になるのだ。■■■が何か企んでいる以上、対策を考えつつ武器を揃える必要がある。

ノシロは依然として警戒していた。この男は何かに似ている、いや前任や■■■とほぼ同じ眼をしていた。簡単に人を見下し、他人を無惨に扱う自分優先な独裁者の眼。ノシロはそれが以前の鎮守府の前任を見ているようで気に入らなかった。

「貴方モ……アノ男ヤ■■■ノ眼ト同ジネ……ハツキリ言ツテ殺シテヤリタイクライ」

「おーおー憎悪の眼差しが凄いなあ、常人じゃおしっこチビって聞拔けな声を上げながら腰を抜かす事だろう。つてな訳で灰君、今のを実践してくれ」

「やりませんよ!! 何言ってるんですか!!」

隣にいた灰色が困惑しながらツツコミを入れる。それを見た提督は面倒くさそうな表情で答えた。

「えーじゃあ分かったよ、う〇こでいいよ」

「いや良くないですよ!! どこをどう洗ったらそんな考えが出るんですか!!」

「汚過ぎるネ……」

「流石の比叡もドン引きです」

周りから冷たい視線を受ける提督。気に入らなかったのか提督は激昂した。

「何だよ、う〇こって言って何が悪いんだ! 名前変えればいいのかあ?! んじゃう〇ちか!? う〇ちがいいのか!!!?」

「いい訳ないでしょうよ!! う〇ちでも言い方が——」

【※五十鈴が言ってしまった為に、見苦しい点があります事をお詫び致します※】

「——う〇ちでもダメなら何が良いんだ!! ○〇なのか!? ○〇なのかア!!?」

「もつと言い方あるでしょうよ!! ○〇〇とか! ○〇や○○〇、○○〇とか!!」

「一旦落ち着こうか五十鈴、どんどん酷くなってきてる」

怒鳴る五十鈴を時雨が止めに入り、提督を灰色が庇った。暴れる二人を金剛と比叡が前に出る。ノシロはこの状況に困惑しており、ジト目で頬を引き攣らせていた。

「漫才ナラ外デヤツテクレルカシラ、耳障リナンダケド」

「ほらお前の所為で言われてるぞ、全く……年頃の女はこれだから困る」

「くっそイラつく……!!」

「あーあー汚い女って結構面倒くさいんだよなあー、本当になー!! うるさいんだよなあー!!」

「殺す!!」

遂に五十鈴が沸点が限界に到達し、提督に殴り掛かる。今の提督のうざい性格はどうやっても擁護出来ない為、誰も五十鈴を止めようとはしない。時々殴る音と提督の怯み声が聞こえてくる。

「……何か私が殺ナクテモ死ニソウネ……ソイツ……」

「それは私も思いました」

「提督のうざい性格が表に出ちゃったネ……」

「うおオオ!! やめろー!! 五十鈴ー!! 時雨も止めてくれ! あああああ!!? それ以上やると白さんやばいから!! 本格的にあの世行きだからアー!!」

五十鈴は鬼となつて提督を殴る蹴るの暴行を気が済むまで永遠にやっていた。返り血を浴びながら殺人鬼の如く暴れている。必死に灰色が止めようとしているが、そんな事など気にせず力任せに殴っていた。これ以上はまずいと金剛が止めに入る。

「はーい五十鈴ストップ」

「……何か遺言は?」

「やりすぎまひた……ごめんなさひ……」

最後に五十鈴は提督の頭を鷲掴み。頭ごと身体を持ち上げ、少しづつ掴んだ手に力を入れる。提督は蜂に刺されたように顔全体が腫れており、涙を流しながら許しを懇願していた。流石に懲りたのか、もはや反抗する力は無いらしい。

「ゴノ提督ハ、イツモコンナ感ジナノ?」

「うん」

「……アアソウ」

金剛と比叡の即答にノシロは簡単に答えるしかなかった。

「んで、聞くの聞かないの? クソ野郎」

「お、遂に提督のあだ名が人格破綻者からクソ野郎になりましたね」

「関心してる場合じゃないヨ比叡」

比叡が冷静に分析し、悠長に関心していた。この提督は誰もが知る絶望的なまでの人格破綻者。性格は最悪、おまけにうざったらしい人間で艦娘達がよく思わないのは当然の事である。その為にか提督が変なあだ名で呼んでいるように、艦娘達も隠してあだ名をつけている

のがしばしば。

「どうなの？」

「聞くに決まってるだろ」

「うわ立ち直り早っ」

「顔の傷も無いし！」

数秒で回復した提督は立ち上がって軍帽を被る。白い軍服の汚れや埃を簡単に取り除き、関節を鳴らして堂々としていた。突然の登場に灰色と艦娘達は言葉にならない表情で提督を眺める。

「さてノシロ……お前は矢矧達から見捨てられ、深海棲艦として蘇った訳だが……」

「何ヨ」

「お前はどっち側だったんだ？」

この鎮守府に所属している阿賀野と矢矧は現在も差別している側だ。■の配下として時たまに差別された側の艦娘と睨み合っている。であればこのノシロは一体どちらか、場合によっては持っている情報が有利か不利に働く。

「……忘レタワヨ」

「いいや覚えてるはずだ。阿賀野と矢矧に対し、憎悪の感情を向けていたからな」

「ダカラ？」

「かつてはお前も差別している側だったんだらう？」

「……!!」

提督はノシロを差別された側ではなく、真逆の差別している側ではないかと推測していた。ノシロが復讐心に燃える理由は矢矧が見捨てた事であり、阿賀野と矢矧に虐げられた訳では無い。それこそ阿賀野が立ち上がれなくなるほどにショックを受けていた。

もし差別された側の艦娘ならば、復讐の理由は姉妹に虐げられた事になる。であればノシロは差別している側の艦娘と提督は考えた。

「お前はやっとの思いで姉妹と共に差別した側の仲間入りを果たした。それなのに何故前任にも■にも姉妹にも見捨てられたのか分からない。まともに使えなかった？ 強くもなかった？ いいや違

う、前任や■■■にとって知られたくない事をお前はこの腐った目と融通の利かない鼻と耳糞だらけの耳で知ってしまったから」

提督の語りは全て創作だ。

この場にいる五十鈴達はそれを把握している。

だがノシロから聞けばその創作が殆ど合致していた。

あの鎮守府にいなかった提督が推測するだけで大体の辻褄が合っ
てしまう。何をどうすればそんな想像が出来るのか理解が追いつか
ない。

「まさか……口封じ……」

「恐らくな。知ってしまった洗脳済みの艦娘の記憶操作など面倒くさい事この上ない。ならばと前任は矢矧に任せて口封じに能代を見捨てた。当の見捨てた本人はそれを知らないようだがな」

以前に深海棲艦と手を組んでいた彼女は舞鶴の榛名から聞いた話によれば、彼女はその何かを知ってしまった事で洗脳を施された。

だがノシロは洗脳された後でその何かを知ってしまい、記憶操作に
限度を感じた為に口封じとして沈めさせた。

この二つの事例により、その何かはそれぞれ違う可能性は高い。

が、それでも有益な情報である事には変わりはないはずだ。その何か
さえ知ればこちらが有利になる。

「ソレハ貴方ノ推測デシヨ？」

「その通り。全くアテにはならない、だからお前に聞くんだ」

「聞イテドウスルノ？」

「前任や■■■共をぶっ飛ばす」

「出来ルノカシラ？」

「出来るから言ってるんだ、さあ早く言いたまえ」

提督は有言実行をこなす男だ。説得力は充分にある。

しかし初めて会った男に意味も分からない情報を言うべきなのか、
疑問に感じていたノシロは黙り続けた。反応の無いノシロに提督は
ため息を吐き、仕方ないとある条件を述べる。

「であれば少し条件を変えよう。お前は俺が知りたい事を言う代わり
に阿賀野と矢矧の部屋へ連れていく。但し殺害は禁止、暴行は良しと

する。怒るなり殴るなり好きにして構わない」

「……本当カシラ」

「何ならお前を見捨てたようにあの馬鹿姉妹達を見捨てるのもアリだぞー。何故なら姉妹はお前が来た影響で部屋に閉じこもり、精神が不安定になってる。悪口の一つや二つ、訴えでもすれば姉妹は謝り続ける事だろう。そこで救われない姉妹達を眺め、最後まで許さずに見捨てれば面白い事になる」

悪魔のような笑みでノシロに囁ける。提督はノシロの復讐を止めるどころか助長しかねない条件を述べていた。流石に倫理に反してののではと灰色が物申す。

「流石にそれはまずいのでは……」

「何故だ、自分を見捨てた様なクズ姉妹共だぞ？ どこを躊躇う必要がある。完全に己の自業自得じゃないかあ」

「だとしても提督、これは——」「クズ姉妹に味方するのか？ 何の躊躇いもなく姉妹を見捨てたのに、そんな事など無かったかのように平然と暮らしているクズ共だ。救えないに決まってるだろう。まあ理由があるなら話は別だけどな」

そう言いながら提督は丁寧な爪の間のゴミを取り除く。確かにノシロからすれば阿賀野と矢矧は憎むべきクズのような存在だ。復讐心に燃える理由も分からなくはない。だがそんな一方的に他人の復讐に手を貸すなど、灰色としては少し疑問に感じていた。

「本当ニ連レテイクナラ……話スワヨ……」

「勿論条件付きだけどな。もし破れば大本営に送って生体実験の実験体になってもらうぞ」

「分カツタワヨ……殺シハシナイ。殴ルダケナラ充分ヨ。ソレニ貴方ノ方法モ悪クナイ」

ノシロは僅かに微笑む。激痛に耐えながらも提督の話は聞いていた。復讐をさせてくれるのなら情報を伝える事など容易い。不気味な笑みのノシロに五十鈴達は思わず臆装を展開しかけた。

「交渉成立だ。んじや早速話してもらおうか？」

「エエ……遠イ記憶ダカラ、アマリ正シイカドウカ分カラナイノダケ

「……………」

「……………
■ ■
八、深海棲艦ヨ」

101. 面倒臭い事はある日突然に

「深海棲艦!？」

「そんな……!!」

それはノシロが言い放った衝撃の情報。差別している側の艦娘を続ける■がまさかの深海棲艦としてこの鎮守府に所属していた。提督でさえも耳を疑う程、信じるには到底難しい情報だ。

「……それは本当なのか？」

「恐らく本当ヨ。ダツテ私見タモノ……■ガ深海棲艦ニ変ワツタ所ヲ……」

ノシロの記憶の中では不確かな情報らしい。しかしノシロは見た事があるという。執務室にて前任の目の前で■が深海棲艦に姿を変えた場面を。

それを覗いた事で口封じされたのかもしれない。提督は顎に手を当て、重要そうに考え込む。

「なるほどな……んーまた複雑になってきたな」

黒い箱の情報といい、ノシロの情報といい、あまりにも奇想天外な事が起き過ぎている。予見していた事とはいえ、そこまで前任と干渉しているとは思いたくなかった。

これでは以前拘束された彼女が捕まった理由が弱くなる。彼女を特定した第一の理由として、鎮守府襲撃の際にこちらの作戦がバレた事が取り上げられていた。だが■が深海棲艦となればその話は■の方が何よりも結びつきがつく。

誰が裏切り者で、何が真実なのか。一向に■について謎が深まるばかりだ。

「ホラ、言ツタンダカラサツサトヤラセテヨ」

「それは出来ないなあ。そんな損傷の状態で復讐されても心地よくないだろう？ 一旦修復してからにしようか」

「……本当ニサセテケレルノカシラ？」

「勿論だ。俺が結んだ約束は裏切らない」

自信満々に提督は宣言する。今までもここの艦娘達のやりたい事

や願い事を手伝ってやってきたつもりだ。そう言えるだけの理由が提督にはある。

「……ソウ。楽シミニシトクワ……」

「んじや金剛、比叡。今日の見張りは自由にしたまえ。俺らは先に地上へ戻るとしよう、行くぞ」

地下営倉を出ていき、地上へ上がる提督達。今の季節は夏始め、蟬の声が鳴り盛る頃だ。ジメジメとした暑さが涼しい廊下内でも伝わってくるのがわかる。

「さて来客だ、誰が来るんだっけ」

「■■大将よ。全く……嫌味でも言いに来たのかしら」

■■大将。時雨や夕立、その他の艦娘達にとっては嫌な存在。以前時雨と夕立の件について、旧式解体を一時可決させた男として知られており、この荒くれ鎮守府の艦娘達は提督と同じく良く思っていない。

「かもな。灰、俺は■■大将と別の応接間にて話し合う。お前は引き続き仕事を任せただぞ」

「分かりました。他の艦娘達や職員達にも伝えておきます」

「話が早くて助かる。五十鈴、出迎えの準備だ、外へ行くぞ」
「了解！」

身体全体を包み込む様な暑さの中、提督と五十鈴は鎮守府の門前にて■■大将を出迎える。森の中に掻き分けられたアスファルトの道路を一人の軍人と艦娘が歩いていった。憲兵達によつて重い門が開かれ、鎮守府の中に入る。

「遥々東京からこんなクソド田舎の地方鎮守府までようこそおいでくださいました、■■大将閣下。さぞかしこのジメジメした暑さでは気分も悪い事でしょう」

「いやそうでもないな。田舎というのは都会では味わえない物がある。自虐的な事は言わなくていい」

何故だろうか、皮肉的な事を言われた気がする。と思いつつも提督は少しだけ立ち話を続けた。

「そちらの艦娘は貴方の随伴艦で？」

「ん？ あ、ああそうだな。どうしてもついでいきたいと言う事で連れてきた。自己紹介をしたまえ、酒匂」

「ん、酒匂？」

■大将の大きな背中からピョン、と艦娘が現れる。

「はい！ 阿賀野型軽巡洋艦四番艦、酒匂です！ よろしくお願います！」

「……」

思わず提督と五十鈴は目を丸くしたまま数秒間棒立ちした。

これは何かの偶然か。ノシロが憎悪をぶら下げてこの鎮守府に舞い戻り、阿賀野と矢矧が部屋に閉じこもってる中でその四番艦が現れるとは予想も出来なかつただろう。しかも特徴的な口調が全く無く、きちんとした姿勢と挨拶を返してきた。

「ま、まあとりあえずここでは話がしづらいでしょうし、応接間にて話し合いますよ」

執務室の応接間ではなく、特別に用意された応接間にて話を進める。話が順調よく進めるよう小部屋の様に狭く、尚且つ防音対策も取り入れている。また第三者の介入を防ぐ為、部屋内に監視カメラの設置は禁止。扉の端に金属センサーをつけて盗聴器具など感知させている。

「今回ここにいらつしやつた目的は？」

「言わなくても分かるだろう。彼女達の陳謝と、えーっと……これだっけ？ いや違うな……あー！ っと……いやこれでもないな」

「もう大丈夫です ■大将閣下……五十鈴、白露と時雨と夕立を呼んでこい。一時灰の秘書艦は……あー……うーん、不知火にしとこう。それも頼む」

「了解したわ」

途端に思い出したかのように悩み出す ■大将を止めに入る。お茶を出した五十鈴に命令し、例の三人を連れていくようにさせた。

「失礼しまーす……」

「来たか。君達、こちらに来なさい」

以前の様な棘が刺さつたような声ではなく、優しさに包まれたよう

な声で提督は三人を誘導する。ソファに座る提督の隣に立たせて、
■大将と対面出来るようにさせた。

「ごめん提督、この人は……?」

「参謀総長の■大将閣下だ。君達に用があつていらつしやつてくれた。挨拶をしたまえ」

聞いただけで提督よりも偉い人なのが分かる。現に提督は■大将に対して尊敬語で話していた。三人は敬礼しながら元氣な挨拶を心掛ける。

「■鎮守府所属、白露型駆逐艦一番艦、白露です！ よろしくお願
いします！」

「■鎮守府所属、白露型駆逐艦二番艦、時雨です！ よろしくお願
いします！」

「■鎮守府所属、白露型駆逐艦四番艦、夕立です！ よろしくお願
いします！」

「元氣があるいい娘達じゃないか。よろしく」

無邪気な笑顔で■大将は返事をする。その老年男性の笑顔はと
ても穏やかで優しい気持ちになれそうだった。顔の傷や光のない目
などの不穏な表情など一切感じさせもしない。

「それで……その……用とは……?」

「そうそう、この前の事で君達に謝りたくてね」

■大将は立ち上がり、三人の前に移動する。
そして――、

「息子に代わって私が謝ろう。本当に……すまなかつた」

足を畳み、頭を深く下げる。額を床に触れさせ、両手を揃えた。

「私の愚息が関係のない君達を酷い目に合わせてしまった。変なプラ
イドで自分は偉いと思ひ込み続け、いつかは良くなるだろうと遠くか
ら見守っていた結果がこれだ。全ての責任は……私にある」

土下座だ。一連の行動に三人は戸惑う。提督でさえも止めさせよ
うとする程だった。

「そ、そんな……やめてください!!」

「……■大将閣下、それ以上は――」「もし今でも鬼の如く恨んでい

るのなら、どんな暴行や暴言も受け入れよう。君達の要望も聞く、謝礼の品も用意してある、烏漣がましい限りだが……どうか、許してはくれないだろうか？」

この土下座に対し、三人はどう受け答えるのか。確かめる様に提督は三人に視線を移す。

「……嫌だ」

「……」

「嫌だよ……そんな急に謝ってきて……あんな事されて許せる訳ない……！」

■少尉や ■大将がやってきた蛮行の数々をそう容易く三人は許さない。

全くもって当然の対応だ。

無実の罪を着せられた挙句、その身体を黷られれば普通は怒りで血が上ってもおかしくないだろう。それ以上の事を時雨と夕立は経験している。長女の白露でさえも二人の妹を失う羽目になる所だったのだ。

「無理よ……！ 顔も見たくないのに……」

「第一に何故大将が謝るんですか!? 謝るべきなのはあの男でしょ!？」

「君達の言葉は最もだ、だが下らない憂さ晴らしの為に君達を巻き込み、世間を騒がせたのは紛れもない、息子と私だ」

「それでも……あの男が謝ってくれるまで私達は貴方も含めて許しはしません」

■少尉が頭を下げ、謝るまでは許さない。その言葉を聞いて提督は少し身体を動かした。前に提督が言っていた事が既に身についている。鈴谷と加賀の件から成長していたらしい。

「だから今は……今は私達とは、関わらないでください……」
「……承知した」

■大将閣下、そろそろを顔をお上げ下さい……その姿を見る私と少しでも少し心苦しい限りです」
「すまない……」

■ 大将はまた立ち上がり、ソファに座り込む。三人は怒りと悲しみが混ざった表情で ■ 大将を睨んでいる。

「下がっていいぞ、持ち場に戻れ」

白露、時雨、夕立の三人は静かに応接間を出ていく。 ■ 大将の謝罪を三人は受け止めきれず、許しを乞う事は出来なかった。

「……嫌われてしまいましたね」

「分かりきっていた事だ。許されるまで頑張るとするよ」

「お気遣い改め感謝します、 ■ 大将閣下」

■ 大将はまた立ち上がり、謝礼の品を袋にしまった。許される時が来るまでは渡さないつもりだろう。

「提督！ 提督！」

「おつと……そうだったな。実はここに来たのは彼女達の陳謝だったんだが……この娘が何故かついていきたいと話を聞かなくてね」

■ 大将の隣に座る酒匂が急がせる様に軍服を引っ張る。酒匂に気付いた ■ 大将は酒匂の頭を撫でて何かを思い出したかのように話し始めた。

何か嫌な予感がする。まさかと思いつつも提督は質問した。

「……失礼ながら ■ 大将閣下、その酒匂は建造でしょうか」

「いや、この娘は私の艦隊が拾った娘だね。損傷が酷く、沈みかけていた所を運良く救助したんだ」

■ 大将曰く、この酒匂は神奈川県三浦市の砂浜にて意識不明のまま座礁していたらしい。横須賀鎮守府に帰還する遠征中の艦隊が発見し、無事に保護されたとか。意識を取り戻した後はどこの鎮守府に所属していたのか自身の一切を全く語らず、ただこの鎮守府にいてほしいと懇願する為、仕方なく横須賀鎮守府に着任させている。この酒匂はこの鎮守府を訪れると聞く前まで自身の過去を誰に教えずにいた。

「だけでもこの鎮守府に行く事になった途端、急にはしやぎ始めてね。話を聞けばどうやらこの鎮守府に所属してたみたいなんだよ」

訳を聞けば酒匂は ■ 鎮守府から来た艦娘だという。何故今になつて話してきたのか、 ■ 大将は不思議に思っていた。

「あー……そうですかー……」

「何か気まずい事でも？」

「いや実はですね……」

提督は前日に起きた事を細かく話した。新たな深海棲艦である軽巡棲鬼・壊の存在が確認された事、そしてその軽巡棲鬼がこの荒くれ鎮守府の能代だという事。そしてノシロは阿賀野や矢矧に対して憎悪を向けている事などを説明した。

「なるほど……軽巡棲鬼・壊か……そしてその軽巡棲鬼がこの鎮守府の能代だった、と……」

「はい。そして前任時代の能代を含め、四番艦の酒匂も見捨てられたという話を聞いていまして……少し複雑な心境なのが正直な気持ちです」

「そんな!! 違うよ! 矢矧姉ちゃんを私を見捨てたんじゃない!!」
「……ん？」

酒匂の発言に提督は素で声を漏らした。川内から聞いていた矢矧の過去と殆ど違っている。

「あの時矢矧姉はわざと沈めたフリをして私を逃がしてくれたんだよ!! 見捨ててなんかいない!!」

「……これはどうやらお互いにすれ違った記憶があるようだな」

「の様です。一度会わせてみますか？」

「お願い!! 会わせて!!」

酒匂は必死そうに提督に二人に会う事を願った。提督の嫌な予感の中、この状況において酒匂を会わせるのは面倒だ。ただでさえ精神状態がよろしくない上に無駄に騒がれてはこちらが困る。

「酒匂も言っているようだし、一回会わせてみよう……あ、そういえば君との話もあったんだな……」

「でしたら候補生に任せましょう。後で報告書はデータにて渡しておきます」

「そうか。んじやそうさせてもらおうかな」

そういえばちよいどいい人材がいたと心の中で思い出す提督。灰色であれば酒匂と二人の状況を何とかしてくれるだろう。

「五十鈴、灰の仕事を一旦中止。酒匂を阿賀野達の部屋に連れていき、反応や行動を報告書にまとめさせろ。後、この部屋に摩耶を呼べ」
「了解したわ」

102. 頭痛が痛い は日本語的におかしい

「さて話をしようか……」

防音壁に囲まれた特別な応接間で摩耶を含んだ提督と■大将は話し合う。摩耶が持ってきた例の黒い箱、提督がまとめた資料を元に解析が始まった。

「この黒い箱の持ち主……■大将閣下で間違いありませんよね？」

「ああ、間違いない」

「この箱に書かれている事実は本当でしょうか？」

「全て本当だ。私もその計画を耳にしていたからな」

この計画書が書かれた日は深海棲艦と艦娘が現れた年から約二年が経過、つまりは十年前に計画された物になる。どれもトップシークレット級の禁忌物であり、世間に広めれば波紋を呼びかねない程の爆弾だ。

「ABC計画……今では都市伝説扱いされている幻の殲滅計画。当時の上層部が艦娘という兵器の反逆を恐れ、深海棲艦と相討ちにさせるように緻密に計画されたモノ……」

「それが今や都市伝説ではなく実物のモノとして知らず知らずのうちに進んでいる……確かこの当時、■大将閣下は中将でしたよね？」
当時中将だった■大将は上層部の一員としてこの計画の全てを知り尽くしている。■大将を艦娘という存在に大して恐怖は感じず、寧ろ疑問を浮かべていた。何故国の為に戦う彼女達を畏怖するのか、反逆という言葉すら見つかからない彼女達を前に違和感を感じていた。

「ああ。上層部と呼ばれた偉い階級の者達の中に私も含まれていた。だからこの時の極秘会議の内容や計画の流れは覚えている」

織密に何回も行われる極秘の会議、海外との連携協力強化、艦娘に怯える軍人達。■大将はその会議の内容を秘密裏に記録、誰にも分からないように必死に書き留めた。

「しかし何故、時雨と夕立に旧式解体を要求するような貴方が何故艦娘を護ろうとしているのか……」

「平和の為だよ。私は合理的主義なんでね。君達の時雨と夕立が暴れてしまったという、知らずの嘘の出来事で日本国民に不安を漂わせてしまった。日本という国を護る為にはまず国民を安心させなければならぬ……その為には最短の手順でやった事だ。だが今は……やり過ぎたと反省しているよ……」

提督がまとめた資料に書かれる艦娘達の顔写真を眺める。声に活気はなく、しんみりそうに答えた。どれだけ自分が愚かだったのか、身に染みて理解したのか冴えない顔をしている。

「確かに艦娘の存在を決めるのは彼女達だ……それは変わらない。だが知っているんだろう——」

「——艦娘は軍が開発した生体兵器であり……そして深海棲艦は、その開発中の実験で出来た失敗作である事を……」

「……はい、熟知しております。だから艦娘には基本的人権が認められていない。そして深海棲艦は事実を知っている故に軍が隠蔽として人類の敵とみなし、現在も争っている……出来れば夢だと思いたいのですが、全て事実である事を……」

提督は真剣な表情と声で静かに話す。資料を手放し、指を組んで
■大将をゆつくりと見た。

「あの時……確信いたしました」

その時提督の眼が蒼から紅へ、闇に包まれるが如く深く沈み、光が失われているように見えた。

「……そうか、仕方ないな。私としても君が協力してくれるのはありがたい」

「いえ、私にも譲れないモノがございますので」

提督と■大将は再び資料と計画書を手に取る。この計画を阻止する為にも二人は真剣に話し合った。どうすれば止められるか、止めたとしてその先どうなるのか、世界の反応は如何なものか。幻の殲滅計画を緻密に計画したようにこちらも阻止をする為に計画を建てなければならぬ。

「しかしながら■大将閣下、私は疑問に思う事があります。この計画書は以前の上層部が記録したモノですよ？ 前の上層部の殆どは元帥閣下と貴方を除いて辞職し、後に全員病死しております。ですが全員病死というのは少し都合が良過ぎませんか？」

「その通りだ。病死はしていない」

「……まさか」

「全員……殺された」

思わず提督は目を見開かせた。

かつての上層部は全員病死したのではない、計画の口封じとして誰かに暗殺されたのだ。しかも巧妙に病死と見せかけた計画的な犯行。表沙汰には病死したと広まっているが裏では殺人事件として扱われているに違いない。

「もう分かるだろう……この計画を進めているのは我々人類とその代表である……」

■大将が胸の内ポケットからある物を取り出してきた。それは一枚の写真、そこに写っていたのは――、

「……あの男しかいない」

——軽巡察

「えっ、阿賀野と矢矧の反応をレポートに？」

「ええそうよ。この酒匂って娘がどうやらこの鎮守府に所属してたみ

たいなの。矢矧が見捨てたならまだしも逃がしてくれたーみたいな話で色々整理が追いつかない状態なのよ……ん？」

「……」

「いやその反応は分かるけど話を聞いて」

灰色が目を丸くした表情で呆然としている。隣の時雨も空を見つめて上の空だ。五十鈴が何回話し掛けても二人は人形のように立ち尽くしていた。

「何か凄く複雑になったね灰さん」

「やばい……ちよつと本当に頭の整理が追いつかない」

「とにかく一回会わせてみましょう。提督は■■大将と話があるみたいだから誰も入っちゃダメよ」

「分かった、行こう」

途中で酒匂と合流し、灰色達は阿賀野達の部屋へ向かう。酒匂は姉達に会うのが楽しみなのか終始ステップを踏んでいる。ここの鎮守府に所属していたとは思わせないほどの元気ぶりだ。■■大将が懐柔でもしたのだろうか。

「ここが阿賀野達の部屋……と言っても所属してたなら分かるかな」

「うん……何も変わらない……」

やがて阿賀野達の部屋の前まで辿り着く。ノシロの登場と矢矧の嘘で扉の前だけでも空気が重く感じた。しかしそんな事など一切気にせず、酒匂はドアをノックして名前を呼んだ。

「阿賀野姉ちゃん！ 矢矧姉ちゃん！ 私だよ！ 酒匂だよ！」

反応が無い。

物音一つもしない。からかわれてるとでも思っているのだろうか。「別の鎮守府の酒匂じゃないんだよ！ 矢矧姉ちゃんに逃がしてもらった酒匂なんだよ!!」

逃がしてもらったという言葉を言った瞬間、ドタバタと何かが落ちる音がドア越しから聞こえた。鍵をかけたドアを急いで開けようと必死感が伝わってくる。鍵が開けたのかドアはゆっくりと開いた。ドアの隙間から矢矧の顔が出てくる。

「矢矧姉……ちゃん……？」

「……で……」

「……っ?」

「何で生きてるのよ……! 確かにあの時……うっ?! 頭がっ……!!」

矢矧が焦燥した表情で酒匂を睨む。まるで自分が殺したかのよう
な言葉を言いかけた。直後に頭を抱え、その場に蹲る。

「矢矧姉ちゃんだいじょう——」「触るな!!」
「っ!」

酒匂が蹲る矢矧を心配し、声を掛けて肩に触れた瞬間だった。矢矧
は酒匂の手を拒み、強く振り払った。感情の高ぶりに酒匂が一步後退
する。目の前の姉の行動を理解するのに時間をかけてしまった。

「あれ……? 何で……? 何で触るなんて言ったの? あれ?
おかしいわ……? 酒匂は沈めたはず……あれ? 違うの……?
違うよね……? あれ? あれ?」

自身の記憶の混濁に慌て出す矢矧。本当の記憶と今までの記憶が
重なり合い、何かを怯えているように身体を震わせる。

「矢矧、一回落ち着いてくれるかしら」

「うるさい黙れッ! お前達の言う事なんて聞かない……うっ……!!
おかしいわ……! おかしいもの……だって……!」

「酒匂!!」

頭を抱える矢矧を置いて阿賀野がドアから現れた。酒匂の声と矢
矧の慌てぶりを聞いて飛び出したのだろう。現に阿賀野は信じられ
ないような顔をしている。

「酒匂なの!?! 本当に!?!」

「本当だよ! この鎮守府の事も全て覚えてるんだから!」

「何……気安く話し掛けてるの……? 阿賀野姉?」

冷たい声が背後から聞こえた。振り向けば矢矧が敵意剥き出しの
表情で訴えている。本来なら阿賀野は差別している側だ。だが阿賀
野本心は洗脳などされておらず、それも周りには知られていない。矢
矧もその事実は知らない為に困惑気味だ。

「それは鉄屑でしょ……? 何で話し掛けてるの……?」

「あ……いや、これは……その……」

思わず本性を見せてしまった阿賀野は慌てふためく。矢矧の問い詰めに何も答える事は出来なかった。

「まさか本当に裏切るつもりなの？ 馬鹿言わないでよ、阿賀野姉もあんな奴らに成り下がりたいわけ？」

「違っ……！ でも……でもね矢矧、酒匂は私達の——」「違う。私達にそんな出来損ないの妹なんていなッ痛い!!」

突然の頭痛に矢矧が悶絶する。再度頭を抱え、床に座り込んだ。

「何よこれ……？ 現実なの？ 違う、こんなの嘘よ……！ こんな の!! 嘘に決まって——」

「……うるさいから少し寝てもらおうわ、矢矧」

座り込む矢矧の胸元を掴み、鳩尾に膝蹴りを食らわせる。意識を失った矢矧は五十鈴に抱えられ、廊下の壁に座らせた。状況が静かになり、沈黙が訪れる。

「えーつと……どう話せばいいのかなー……なんて」

「シヤキツとしなさいよアンタは」

「……阿賀野さん。本当は君とは極力話したくないんだけど、仕事の為だから話は聞いておくよ。一回、二人で話したらどうだい？」

阿賀野は時雨の言葉に耳を向け、何も言わずに首を下に振る。阿賀野は緊張しながらも酒匂に話し掛けた。

「酒匂……消息不明、っていうのは嘘……なのよね？」

「うん！ 矢矧姉ちゃんが私の為に逃がしてくれたの！」

「じゃ、じゃあ酒匂……どうやって戻ってこれたの？」

「提督の艦隊に助けてもらったの！ 治療と修復が終わるまでは横須賀鎮守府で何年間か置いてもらったんだー」

酒匂は笑顔で楽しそうに自身の状況を事細かに説明する。それを聞いて阿賀野は涙を少し零して安堵した。

「そう……良かった……！」

「阿賀野姉ちゃんも元気でやってる？」

「あ……え、ええ大丈夫よ。酒匂、本当に大丈夫？ 怪我は治ってる？ 体調も悪くない？」

「大丈夫だよ！」

五十鈴や時雨から見れば、そこには異様な光景が起きていた。差別している側である阿賀野が差別された側だった酒匂を一方的に心配し、会えた事に歓喜している。同じ仲間である艦娘を蔑み、良心など存在しない連中がする事とは思えなかった。何か裏があるのではと怪しんでしまうほど、差別している側の艦娘は悪の権化として脳裏に刷り込まれている。無意識に五十鈴と時雨は艤装展開の動作をし始めた。

「ごめんね……駄目なお姉ちゃんで……！ 何もしてあげられなかったね……！ 酷い事ばかり言つてごめんね……嫌だったよね……！」
「うん……ありがとう阿賀野姉ちゃん。でも私は知ってたよ……阿賀野姉ちゃんが操られていない事に」
「え……!?!」

阿賀野が思わず素の声で驚く。

阿賀野が操られていない事を聞いた二人は――、

「……は？」

疑問の声を漏らした。

「何で……それを……？」

「だって阿賀野姉ちゃんだけ優しかったもん。私を虐める時は必ず外してたし、途中でごめんねって聞こえたし」

阿賀野の演技に酒匂は気付いていたらしい。この鎮守府の記憶では阿賀野は虐めたフリをしていたという。眠っている時も何度か謝ってきた事もある。最初から気付いていた酒匂は阿賀野の事を許していた。

「え？ じゃあ阿賀野、貴方は操られてないの？」

「い、いや……そんな訳じゃ……！」

「いつから目を覚ましてたの？」

「いつからって……そんな事聞かれても……」

五十鈴と時雨が阿賀野を問い詰める。二人からすれば差別してい

る側である阿賀野は差別された側を前任や■■■に操られたフリをして虐めた事になる。そんな事など許せるはずもない。どういった感情や心境で自分達を虐めていたのか、今すぐにでも追及したいぐらいだ。

「二人とも落ち着いて。冷静に考えよう」

「灰さん……？」

灰色は二人の前に腕を広げ、五十鈴と時雨を止めさせる。慎重そうに灰色は阿賀野に質問した。

「阿賀野さん。貴方は……操られていない、のかな？」

「……ごめんなさい。答える事は出来ないわ……」

灰色の質問に阿賀野は俯きながら口を開く。何か事情がありそうな表情だ、余程言いたくないのだろう。ここで追及すれば矢矧の様にパニックを起こしかねない。ゆつくりと状況を見て話すのが懸命なはずだ。

「……そっか、分かった。そろそろ面会の時間も終わったみたい、ほら」

廊下の奥から提督と摩耶、■■■大將が歩いて来た。どうやら話が終わったらしい。咄嗟に時雨は灰色の背後に周り、自身の姿を隠した。

「まとめたかー？」

「大体は把握出来ました」

「なら構わない……って何で道端で寝てるんだ矢矧は」

「いやまあ……後で説明するわ。そっちの話は終わったの？」

五十鈴は酒匂と阿賀野達の反応を少しだけまとめたメモ書きを提督に渡す。提督はメモ書きを眺めながらも話を続けた。

「終わってなかったらここに来ていないだろう。あ、そうだ。■■■大將閣下と話し合ったんだが、酒匂はこちらに配属する事になったぞ」

「え？ 本当に!? やったあ!」

「でも大丈夫ですかね……」

灰色が心配した理由は差別問題だ。新しく配属された艦娘ならまだしも、酒匂はかつてこの鎮守府に所属していた艦娘。差別している側が酒匂の存在を忘れてはいけないはずがない。状況によってはまた差別

される可能性すらあり、トラウマを呼び起こす羽目になる。この先やっつけていけるか、灰色は不安で心を過った。

「別に心配しなくてもお前が守ればいい話だ」

「酒匂、一回帰るぞ。ここに戻るなら支度をしなければな」

「はい！ 分かりました！」

■ 大将と酒匂と共に広場へ出る提督と五十鈴。阿賀野達の反応については灰色達に任せ、摩耶を訓練に戻させた。門前まで世間話をしながら、送迎車の場所まで見送っていく。

「本日はどうもありがとうございました。実に深い話が出来て満足です」

「それは私もだよ。君たちの武運長久を祈る、ではまた」

■ 大将と酒匂は送迎車に乗り、横須賀鎮守府に帰っていった。提督と五十鈴はお辞儀しながらその場を後にする。しかし提督は一定時間か、その場でずっと佇んでいた。

「……」

「……どうしたのかしら？ 神妙そうな顔して」

『この ■ ■ ■ 鎮守府の元責任者、 ■ 蒼 ■ 中尉だが……』

「……いや大した事じゃない」

『—— ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■』

——謎の部屋。

「……数年、若い女性の失踪事件が相次いで発生しています。被害者女性の年齢は二十五歳から六歳までの幅広い年齢層であり、依然警察は調査を進めています。未だ進展は無い状況です。また警察は狙いが若い女性である事から、グループでの犯行を視野に入れて調査を続行すると……——」

「……いくら探シても無駄なのに。だって……関わつてるのが、世界各国じゃあ……ネエ？」

「——……摩耶ちゃん」

103. ひみつ道具の使い方は人それぞれ

「え？ 間宮が部屋に閉じこもった？」

■ 大将が訪問して二日が過ぎ、夏特有の暑さに悩まされる今日この頃。

執務室はエアコンによって穏やかな気温を保っているが窓から顔を出せば皮膚を焦がすような暑さに思いやられる事だろう。

そんな夏の中、灰色から間宮について報告が上がった。

「そうみたいです。先程鳳翔さんから連絡を受けて、昨日の夜から部屋にずっとこもり続けています」

「何か言っただけだったのか？」

「いえ、鳳翔さん曰く「休みたい」と……」

灰色が聞いた話ではドアをノックしても応答する事は無く、唯一返事をした言葉が「休みたい」。

恐らく日々の仕事に少しずつ疲労が溜まっていたのだろう。前任時代から休みは殆どなく、働き詰めとなれば休みたいと思うのは至極当然の理由だ。

「ふーん……んで間宮がいなければ食堂の方も色々難しいのか？」

「現在は三人で経営してるようなモノなので鳳翔さんと飛行場姫の負担は増えるかと」

「なら間宮は当分、休ませろ。その間は憲兵か整備士の中に料理が上手い奴でも探して一時的に食堂に配備、その分の給料も負担すると伝えておけ」

「分かりました！ 行こうか、時雨」

提督から指示を受けた灰色は時雨を連れて外へ向かった。窓越しから蟬の声と訓練に励む艦娘達の歓声が微かに聞こえる。こんな暑い日によく訓練に参加出来るものだ。

「提督、駿河鎮守府から資材交換の申請書が届きました。受諾しますか？」

「何が必要なんだ？」

「主に鋼材だそうです。代わりにボーキサイトと交換出来るとの文献

が」

「なら受諾しよう。申請書の詳細を書いておけ」

「分かりました」

今日の秘書艦は大鳳。提督と面を向かって話すのは初めてだ。提督が着任してから大鳳は一度もまともに話していない。理由としては提督が怖かった、とか。

今は話してみればそう怖い印象は無いが、執務室に来た時はあまりの緊張に身体を震わせていた。

「提督って……真面目、なのですね」

「どこがだ」

「いえ普段の性格とはかけ離れていたもので……」

「偏見で人を判断するな。仕事は終わらせたいからやる、それだけだ。口を動かす暇があるなら手を動かせ」

大鳳から見て提督は真面目な印象を捉えていた。あの性格の悪さを持つ提督とは思えないほど仕事に取り組んでいる。大鳳も何とか提督についていこうと書類をなるべく早く片付けた。

「はい！ 今日の仕事終わりー!! 今日も一日ゆつくりしちゃうぞー!!」

「え？ じゃあこの後私はどうすれば……」

「自由にしたまえ、身体を休めるなり訓練するなり俺についてくるなりお前の自由だ」

仕事を終えた提督は椅子から立ち上がり、気持ちよさそうに背伸びをする。時間は昼の十一時、昼ご飯まで一時間だ。秘書艦としての仕事を大体終わらせた大鳳は何をすればいいのか分からなかった。

「提督についていけば何かあるのですか？」

「さーてそれは知らないかなー」

「……では提督と一緒にいます！ 秘書艦として提督の傍にいなければなりませんからね」

色々考えた大鳳は提督の傍にいる事に決めた。秘書艦としての務めを果たす為にも提督の後を追わなければならない。ごく当たり前の事だ。それ以前にも大鳳は提督に興味を示していた。

「本当は他の秘書艦などクソほど役に立たなかつたがお前はまだマシンだからな、今回は許してやる」

「相変わらずの棘のある言い方ですね……」

秘書艦の仕事ぶりは摩耶を除いて提督に認められる程らしい。少し嬉しかったが仲間を貶された事で相殺されてしまった。提督と大鳳は執務室を出ていき、寮に繋がる連絡通路を歩いていく。

「あつれー？ お二人がいるのは珍しいですねー？ デートですかー？」

「デ、デート!？」

「気にするな大鳳。サイコパスバーサーカーの戯言だ」

サイコパスバーサーカーとは鹿島の事だ。ひよこつと現れた鹿島は二人をからかうように話し掛ける。

「サイコパスバーサーカーなんて酷いですう。せめて恋する戦乙女と読んでくださいいな」

「何がせめてだ。妥協の意味を知らないのか？」

「妥協してるからこんなふうでもいいイチャコラしてるんですよ。まあそれはさておき、監視と視察の件で少しご報告がございます」

いきなり真面目なトーンで話が続く。思わず大鳳は足を揃えて身構えた。摩耶から聞いた話では鹿島は鎮守府の監視の為に送り込まれた艦娘らしい。何も目立った事が無いか報告しに来たのだろう。

「問題だらけだって言いたいのか？」

「本当であればそう言い伝えたいと思うのですが、元帥閣下はそれも把握済みなのでそれ以外を取れば何も問題は起きておりません。でも強いて言うなら……阿賀野さん達の件ですね！」

目立った事が無いはずもなく、堂々と言われた提督。

仕方の無い事だ、阿賀野達の件は無視しきれない問題であり、解決しなければならぬ問題でもある。正直な所、元帥にはまだ報告して欲しくない事だ。

「前任の優遇制度による差別問題でノシ口は深海棲艦として甦り、阿賀野と矢矧に対して復讐を試みた。正直な話、前任の事が無ければ貴方は今ごろ尋問されている所でしたよ。救われましたね」

「感謝しているよ、あの男のおかげで俺はとても退屈しない毎日を送れているからねえ」

「それは楽しそうですね……報告は以上です。大丈夫ですよ？ 一応は目を瞑っておきます。では私はこれから元帥閣下にも報告しなければならぬので。あ、でも……楽しそうだったら参加しちゃうかもしれないです」

鹿島は颯爽とその場を去っていく。一瞬鹿島が悪魔のような笑みを浮かべていた。

流石は『鏢』シロガネ、全く眼が笑っていない。

「んで大鳳、俺の背中に隠れるな暑い」

「ご、ごめんなさい……どうしても怖くて……!」

鹿島の恐怖に気圧された大鳳は提督の背中に隠れて身を潜めていた。涙目になりながら提督に縋り付く。しかし提督に振り払われ、その場に置いてかれてしまう。大鳳は手を伸ばしてその後を追いつけた。

「待つてくださいい〜」

「お前装甲空母だろ？ なに練習巡洋艦に怯えてんだ？ どうせその胸の小ささだ、度胸も小さいのだろうなアア!!」

「わわわ私は小さくありません!! 着痩せするタイプなんです!!」

「えー？ 本当かなあー？ 嘘に聞こえるぞー？ まさか嘘じゃないよねー？ 俺に対抗する為にわざと嘘ついた訳じゃないよねえー?? 着痩せするタイプなんでもねえー?」

反抗する大鳳を煽り倒していく提督。見せろと言わんばかりに言い殴ってきた。あまりのしつこさに胸の小ささを問われて大鳳はヤケになる。

「そこまで言うんだったら……!! 見せてやりますよ!!」

大鳳は黒インナーをずらしてその豊満な乳房を見せる。大きくもないが小さくもない乳房に提督は困り気味でガン見していた。

「わお……本当にあつ——」「見るなあ!!」「Unrea理sona不ble尽!!」

急に我に返ったのか提督を叩く。急いで黒インナーを元の位置に

戻し、その場に崩れた大鳳。提督の頬に赤く手の形が出来上がった。「見せちゃった……見せちゃった……好きでもない嫌いな男の人に……見せちゃったああ……」

「その前に殴った事を覚えていないのかお前は」

「うう……だって恥ずかしかったんですもん……ああ悪い癖がああ……」

「いや俺だって見せてくるなんて思わなかったんだけど、どう示しつけてくれるの？」

「何で被害者ぶってるんですか？ もう一回張り倒しますよ？」

「おーい明石ー？ いるかー？」

「はい！ いますー！」

工廠に訪れ、明石の名を呼ぶ提督。いつものように工廠は騒がしく、艦娘から頼まれた装備の開発に整備士達が苦勞している。その中を掻き分けて明石が煤まみれのまま提督の前に現れた。

「どうされましたか提督！ 何か開発でも!？」

「あーいやそういう訳じゃないんだ。お前の部屋にいる前の明石の状態を確認したくてな、いるか？」

「はい！ いますよ！ ご案内します！」

鎮守府襲撃時に提督を貶めようとしたその実行犯である前明石は時雨達が事件に巻き込まれた後に■■医師の治療を終え、提督の許可を得て現明石の部屋に住まわせていた。一日三食、外出禁止、手錠常備拘束の条件下で暮らしている。

「明石さん……」

「はい大鳳さん！ 何でしょうか？」

「せめて来客の前では部屋の中は片付けましょうよ……」

明石の部屋はとても汚く資料の紙で足の踏み場もない程だった。下着や正装は床に散乱し、机の上には大量のデータや資料。テーブルには埃が目につく程度で溜まっている。

「いやー提督が来るとは思わなくて……色々面倒だからこのままにしときましたー！」

「なアにがこのままにしといたただゴラアアア!!!」

提督が突然と明石に怒鳴りつける。そういえば提督は大の潔癖症だ。衛生が悪い明石の部屋に苦言を申し立てた。

「あまりにも不清潔過ぎる!! 資料の紙は畳床に散乱、棚の引き出しから出る下着、煤とシワだらけの正装、窓の縁の埃!! 何もかも汚れてばかりじゃないか!!!」

「そんな事で怒鳴らなくても……」

「そんな事だ?!? 部屋の乱れは心の乱れ! 汚い部屋に住む住人の心は汚いという事だ!! この部屋の汚さではさぞかしお前の心も汚いのだろう!! 俺が直々に清掃してやる! ありがたく思え!!」

「え!? それはちよつと困りま——」 「邪魔だ!!」

明石を退けて提督は部屋を出ていく。数十秒後にドアを蹴って戻ってきた。提督の手には箒や掃除機、雑巾など掃除用具ばかりだ。更にはマスクと眼鏡をかけて用意周到に掃除を始めていく。大鳳もその身に任せて手伝う他はなかった。

「あーそれは私の下着ー! それは大事なデータああ!!」

「ちゃんとまとめれば分かりやすく見えるんだよ馬鹿が!! 下着類も引き出しごとに決める、資料はクリップやホッチキスにまとめて本棚にいれるんだよ!! 大鳳も手伝え!!」

「ねえさつきからうるさいんだけど」

押し入れから似たような声が聞こえた。

襖を退けてある艦娘が現れる。

「前明石か、どうだー? 部屋での生活は」

「いいものね。外出許可出してくれたらもつといいんだけど」

「残念ながらそれは無理だ。部屋に住まわせてるだけでもありがたく思え、マッドサイエンティスト」

「その部屋は私のです!!」

その部屋は自分のだと訂正を求める明石。何だかんだで明石と大鳳は掃除を手伝ってくれている。窓も開けて空中に舞う埃を外に出していった。

「いや元々私の部屋なんだけど」

「うつ……そうでした……ごめんなさい……」

この部屋は元々前明石の部屋だ。鎮守府襲撃後に前明石が地下倉庫に收容されてから一度も使われなかった為、新しく着任した現明石に部屋を与えたのだ。前明石が来た時は少し驚いたものの不思議と変には思わず、日常的な生活を送っている。

「あ、そうだ前明石。お前に聞きたい事があるんだった」

「え？ 何よ」

「お前が改造した戦闘意欲促進剤……アレなんだが効果を遅らせる、又は効果を薄めるみたいな事とか出来るのか？」

改造された戦闘意欲促進剤の開発データは既に前明石の手によって消去済み。その促進剤の保管された場所も把握出来ていない状態だ。故にその事に一番詳しいのは前明石しかいない。今後の為にも提督は一度、前明石と話してみたかった。

「……また何か企んでますね？」

「じゃなきやお前にわざわざ会ったりしないんだ、早く言え」

提督の企みを怪しむ前明石。今でも二人は敵同士、何かしら情報を吐けば■■■を裏切った事になる。前明石は警戒しながら逆にある事を聞いてみた。

「それは勿論……■■■さんを救う為、ですよね？」

「あーもう面倒だなあ……それも考えてるから、さつさと言え」

提督は深いため息を吐き、面倒そうに頭を掻く。前明石が警戒するのは予想していた事だが■■■の事を持ち出されるのは厄介だ。これ以上は面倒ごとともそう起こしたくはない。

「……改造前の薬を5%ずつ調合していけば効果が発動するまでの時間と効果の効き目が調節出来るわ」

「調合する際は液体か？ 粉？ それとも錠剤？」

「全て液体よ。ただ調節はかなり難しいのであらかじめストックを用意する事をおすすめしておくわ」

スラスラと難しい単語を使って前明石は調合方法を教えた。前明石にとっては不本意な事だろう。■■■を裏切るも同然の事をしてしまったからだ。だが前明石は■■■を救う為なら教えてもいいと踏ん

だのだろう。

「なるほど、大体は理解出来た。大鳳、メモ出来たか？」

「はい、殆どの内容をメモに収めました」

「ならよろしい」

調合方法を大鳳にメモさせ、提督は掃除の続きを始める。何故か前明石も半強制的に掃除に手伝わされ、何か頼まれる度に愚痴をこぼしていった。すると大鳳が背後から見ると二人の明石を見て――、

「何かこうして二人揃うと分からなくなりそうですね、提督」

「あー確かにややこしいなあ。お前がそういうと思って俺はある物を持ってきたんだ、なので前明石の方だけ髪を青く染めてみようぜ」

「えっ」

提督がカゴの中からスプレー缶を取り出してきた。恐らく髪を青く染めるスプレーだろう。嫌な予感があった前明石は今すぐにも逃げようとする。しかし提督に服を捕まれ、拘束されてしまった。

「嫌だあああー!!!」

「嫌だじゃねえんだ!! お前ら二人いると区別つかないからやってんだよ!! 一時的だ! 一回地面に伏せてろマッドサイエンティスト!!」

あえなく御用となり、髪を青く染められる前明石。といっても完璧に青くなつた訳ではなく、少し青みがかつた桃色の髪をしている。

「……よし前明石が蒼明石、今明石が桃明石、まあ普通の明石だな」
「明石明石ばっか言ってるって頭おかしくなりそうです……」

怒涛の明石連呼に大鳳は頭を抱える。明石ばかり言っていればおかしくなるのも当然だろう。

「ううっ……私の髪が蒼に……もう寝よう……」

「おお、まんまドラ○もんだな」

「うるさい!!」

押し入れに逃げ込もうとする姿がまさにドラ○もんそっくりだ。青みがかつた桃色の髪も相まって似ている。ドラ○もんと呼ばれて蒼明石は提督に反抗した。

「ひみつ道具とか出してきそう、どくさい○イッチとか」

「地球○壊爆弾で地球ごと破壊しそうですね」

「だったら私はどこで○ドアでアンタ達を宇宙空間に閉じ込めてやる」

ドラ○もんのひみつ道具の悪用方法を言った後に襖を勢いよく閉じる。取り残された桃明石と提督と大鳳は続けて掃除を始めた。

「エグい事考えるなあ、アイツも」

「提督ならばどうしますか？ 一番嫌いな奴とかいたら」

「そうだなあ……俺だったら人間切○機で嫌いな奴を百分割して、残った頭にラジコンでもつけて探させようかな。それで百分割した身体の内の一つをとりよせバッグで拾って、永遠に探させた後に餓死させる」

「聞いた私が悪かったです、ごめんなさい」

104. 永遠に続く悪夢の中で迷いなき復讐を

「司令ー！」

「ん……何だお前らか」

工廠の明石部屋訪問後、ゆっくりと食堂へ向かっていた提督と大鳳。途中の駆逐艦寮の廊下を歩いている最中に秋月が駆けつけた。

「どうしたんだ」

「はい！ 司令が言うやりたい事って私達にも適用されますか？」

「あーまあ……されるぞ。んで、何かやりたい事でも？」

「はい！ 実は何ですが……」

秋月は頬を赤らめ、恥ずかしそうに指を弄る。モジモジしながら震えた声で自身のやりたい事を話した。

「大きなお肉が食べてみたいです!!」

「……は？」

一瞬声を漏らす提督。

予想外のやりたい事に困惑の表情を隠せなかった。

「そういえば秋月さん達はテレビとやらで美味しそうに眺めてましたね」

「そうなんです！ 是非とも一度は食べてみたいなと思って！」

提督が瑞鶴と一緒に大本営に行っている途中の事だ。講堂でテレビ番組を見ていた秋月が巨大なステーキを食べる場面を見ていて憧れたのだろう。

「まあ大体は分かった。だが今すぐって訳じゃないから待つ事ぐらいは出来るよな？」

「はい！ もう慣れっ子なので！」

秋月は元気に返事し、その場で敬礼した後スキップ歩きで去っていった。提督にやりたい事を承諾してもらえたのが嬉しかったのか、鼻唄をする程である。あの時代を経験するとなれば楽しみになるのも無理はないだろう。

「夢があっという間ですね」

「へえー……」

間宮が居ない厨房では灰色に呼ばれた整備士や憲兵がせつせと働いてくれている。鳳翔の指導もあってか統率は上手く取れていた。しかしよく見れば厨房内に灰色と時雨が忙しそうに手伝わっている。

「……んで何で灰と時雨が手伝ってるんだ？」

「あ、いや……これは、その……成り行きで……」

「ふーん……分かった」

「え……？」

食事を受け取り、その場を去ろうとする提督。予想外の反応に灰色は拍子抜けた表情だ。

だが――、

「明日覚えてろ」

「は、はいいい……」

振り向きもせずに提督は灰色に罰を与えるようだ。そんなに上手くはいかないと灰色はなくなりました承する。

「あ、そうだ天龍、お前にこれを渡しといておきたかった」

「ん？ 何だこれ、メモ書きか？」

「食後にちちゃんと読む事をおすすめする」

「お、おう……分かった」

途中天龍とすれ違った提督はポケットからメモ書きを渡す。四つ折りに畳まれたメモ書きわわ後で読むように念を押して忠告された。提督の企みを察した天龍は少々困惑している。

「大鳳、今夜俺は執務室に籠る。明日の朝六時まで執務室に近付かないように呼び掛けておけ」

「分かりました、瞑想でしようか？」

「んまあそんなものだ」

夕飯を食べ終え、提督と大鳳は執務室に向かっていた。十九時でありながら茜色の空が広がっている。もうじきに月が見える頃だろう。これから提督は執務室に何時間か籠るらしい。最近は一週間に一回、決まった曜日や時間に籠っている。今日がちょうどその日であり、摩耶曰く瞑想に入るんだとか。

「……おやおやこれは珍しい」

「阿賀野……さん……」

執務室の中に入ればそこには一人の艦娘が立ったまま待っていた。提督が入れば即座にこちらへ振り向き、畏まった表情で見続けている。

「どうしたんだ？　畏まって。何か言いたい事でも？」

「……はい」

その場で阿賀野は床に膝を下ろし、正座になる。そして手を床に添え、ゆつくりと頭を下げた。一連の行動に大鳳は驚きの表情を隠せない。これは人が見せる誠心誠意の謝罪の象徴、土下座だ。阿賀野は提督の目の前で土下座し、頭を下げたまま話し始める。

「実は私は……今まで洗脳されたフリをしていました。提督が着任するまでは洗脳されたフリをして皆を虐めていました」

「……んで？」

「もうこんな状況は嫌なんです……！　だから……仲間にも、入れてください……」

阿賀野は床に涙を零し、ひ弱な声で堂々と願い入れた。提督は頬を引き攣り、嫌々な表情をする。実は提督は既に阿賀野の事を把握していた。

阿賀野が洗脳されたフリをしていた事、そして差別意識がある事に気付いたのは摩耶が最初だ。提督が初めて着任し、大鳳達の前で顔を合わせ終わった時の事。一番後ろで見張っていた摩耶は一度、阿賀野と一緒にご飯を食べないかと誘われていた。通常であれば何ら怪しむ事の無い、普通の誘いだろう。

だがその時、摩耶は微かに感じ取っていた。阿賀野はあの時、「別に差別はしない」と言っていた。確かに摩耶はとある深海棲艦に少し外見が似ている。艦娘とは外見が違う為に驚く者も多いだろう。しかし何故そこで「差別」という言葉が簡単に出てきたのか。普段から艦娘同士の仲が良ければそんな言葉など出ないはずだ。恐らく阿賀野は深海棲艦に似ている且つ、捻くれた提督の艦娘だと考えたから「差別」されると思ったのだろう。

では阿賀野は誰に「差別」されると思ったのか。誘いを受けた摩耶は既に答えが分かっていた。

艦娘の全員が提督と顔を合わせて話していた時、艦娘達の反応がそれぞれ顕著に違った事に気付いた摩耶は提督が話し終わった直後の反応を再度確かめた。案の定、ある特定の艦娘達が明らかに他の艦娘と反応が違っていたのだ。

■■■を始め、阿賀野や矢矧、那智や加古、龍驤、利根達が提督に対して明らかに憎悪を醸し出す表情をしていた。しかも他の艦娘達とは尋常では無い程に。強靱且つ息を潜めた殺意の眼を向けていた。那智が「殺していいか？」と聞いた時は流石の摩耶も艤装を展開しようとして身構えた。

更には提督が話し終わった直後、この鎮守府の艦娘達はその憎悪を向けた■■■達を避けるように座っていた。まるで怯えているかのような、元気のない表情を持つ者ばかりだった。確かに提督のテンションについていけず、不気味な雰囲気になったおかげで多少は何を話せばいいのか困惑はするだろう。

だが露骨に■■■達を避けているのはあまりにも不自然だ。ただでさえ前任に弄ばれたのなら艦娘達の団結力や結束力は絶対的にあるはずなのに、全くその雰囲気が感じられない。提督が作り上げた不気味な雰囲気よりもっと不気味だ。そう考えている中で阿賀野が誘ってきた。

摩耶は阿賀野に話し掛けられた時に気付いた。この艦娘達は何かがおかしい、と。表情が転々とし過ぎて怪しい行動が多かった。摩耶は一度阿賀野の誘いを断り、その後の艦娘達の生活を監視。監視していくにつれて艦娘達に差別意識がある事に気付く事が出来た。この鎮守府の闇にいち早く気付けたのは阿賀野のお陰といっても過言ではない。

「……何を勘違いしているのか知らんが俺は仲間を作った覚えはない。アイツらが勝手についてきてるだけだ、見間違えないでほしい」「で、でも……」

「でもじゃない。俺はやりたい事を手伝っただけで懐柔はしていない

し、ましてや仲良くなるつもりなんてないんだ。勝手に幻想を抱いて俺に頼るな。大鳳、追い出せ」

土下座する阿賀野を通り過ぎ、提督は執務机に置いてある資料を手取る。何回も仲間という言葉聞いてきた提督は呆れていた。仲間など作った記憶も無いのに、入りたいと頭を下げる鈴谷や加賀を思い出す。大体は何かしら事情があつて提督に頼んできたのだろう。

しかしその事情は既に把握済み、更に面倒臭い事この上ない。ため息を吐く提督は大鳳に阿賀野を追い出す様に指示を出した。大鳳は複雑な気持ちでいながらも提督の指示に従い、阿賀野に近付く。

「……私は!! ■達がこれから何をするか全てを知っています!!」
「っ……何だど?」

大鳳の手が触れた瞬間、阿賀野は大声で聞き逃せない重要な事を言い出してきた。■達がこれから何をするのか、提督にとっては喉から手が出る程欲しい最重要な情報だ。流石の提督も資料から視線を外し、土下座する阿賀野を見て驚いている。

「阿賀野さん……まさか……」

「■達がどうやって提督を貶めようか、全てを知っています……! 責められる覚悟は出来ています!! だから……お願いします……」

「——この悪夢を……止めてください……!」

阿賀野は立ち上がり、再度提督の方に振り向き、再度頭を下げた。

悪夢。

差別している側として演技をしていた阿賀野にとっては悪い夢で

しかないだろう。突然周りの性格や行動が一変し、平気で仲間を蔑む様になっていたのでから。提督が来るまでずっと続いていた悪夢を阿賀野は止めてほしかった。

最初顔を合わせた時は悪印象でしかなく、差別している側と同じような振る舞いしていた為に怒り憎んでいた。もうこの男が来たからには全てが終わる、何とかして追い出したいが自分にそんな力は無い。提督の着任と何も出来ない自分による怒りと悲しみが渦巻く中で阿賀野は傍観するだけだった。

だが今はどうだろうか。寧ろこの現状を止められるのは提督しかない、今までやってきた功績がその理由だ。

これが■■■達に対する裏切りである事は充分承知している。これから先どんな事が起こるのか分からない。まともな死に方はしないと思っている。

それでもノシロや矢矧、酒匂の過去を知って阿賀野はいてもたってもいられなくなっていた。勿論前任や■■■は憎い、提督だって憎い。だがそれ以上に何も出来なかった惨めな自分が一番に憎かった。姉であるはずの自分が妹達をまともに守る事すら出来ないのは姉として失格だからだ。

そこで阿賀野は吹っ切れたのだろう。裏切る覚悟を、その勇気を、心の底に眠っていた本来の自分を引っ張るために、臆病である自分を脱ぎ去って。

もう自分に嘘はつきたくない。素直な自分でいたいんだと心の底から思った。変わりたいと思った。

「悪夢、か……」

呟いた提督は手に取った資料を執務机に再度起き、頭を下げる阿賀野を見続ける。顎に手を触れさせ、考える様に提督は阿賀野に近寄った。

「……いいだろう、やってやる。てかそのつもりだけだな」

「っー」

「提督……」

了承の声に阿賀野は提督の顔を見る。大鳳は■■■達の支配を止め

させると聞いて笑みを浮かべた。

「だが少しだけ言いたい事がある。その仲間とやらに入りたければ俺に頭を下げるんじゃないかと、お前の周りにいる馬鹿共の方が先だと思うんだが？ その所の所はどうか阿賀野君」

「それは……分かってます……」

「なら話は早い。それは後で自由にやってくれ。早速教えてもらおうか、■■■■の陰謀とやらをな」

阿賀野が嬉しそうな表情で答えようとした瞬間だった。

「は、はい！ ■■■達は——」「見ツケタアア!!」

突然窓から何かが阿賀野をかつきさらっていった。周辺の壁ごと窓を突き破って阿賀野の頭を掴み、一気に過ぎ去っていく。応接間にあるテーブルやソファは粉々に破壊され、瓦礫が執務室の中で散乱していた。一連の光景に大鳳は身体を震わせ、現実を直視出来ない。

「……流石に早すぎだ、天龍」

『すまねえ、まさか拘束器具外したら突然天井突破して地面突き破るとは思わなくてよ』

「化け物かよ」

『いや元々化け物だろ』

スマホから天龍の声が聞こえる。摩耶のスマホを借りたのか遠くで話しているようだ。

「まあいい。警報は鳴らさないでよし、整備士達と憲兵隊には事前に知らせている。お前らは周辺海域の哨戒、と言っても前みたいだに警戒網を貼るだけでいい」

『分かった、皆に知らせる』

通話は終了し、提督は軍服に乗った埃を丁寧に落としていく。執務室はまるで鎮守府襲撃を思い出すかのように惨状だ。壁ごと窓を突き破った所為か温い風が執務室の中に入り込む。

「提督……これは……」

「ん？ ああ大鳳は知らなかったな。まあ当然と言えば当然か」

「……逃がしたんですか。あの軽巡棲鬼を」

大鳳は先程スマホでの通話を聞いて察していた。恐らく夕飯時に

天龍に渡したメモ書きはノシロをわざと逃がす様にした指示だ。ノシロは阿賀野や矢矧に対して復讐心を燃やしている。提督は二人に復讐させる為にわざと逃がしたに違いない。

「逃がしたとは語弊があるが、まあそういう事だ」

「何故……!? 何故逃がすような真似を!? 前はこの鎮守府の艦娘だつとしても今は深海棲艦ですよ!? しかも憎い■■■達の……!」

大鳳は焦りと憤りが混ざった表情で提督に訴える。確かに大鳳からすれば訳の分からない事ばかりだ。かつては■■■の仲間であり、そして今は敵である深海棲艦を世に放つなど決してあつてはならない。差別された側にとっては理不尽な事だろう。

「確かに鹵獲した深海棲艦を意図もなく逃がすなどあつてはならない事だ。お前らの怒りも理屈が通っている。でも俺は……逃がしただけで再度捕まえないとは一言も言っていないぞ」

「……何が目的なんですか」

「さあ? それを確認する為に外へ行こうじゃないかあ」

——地下営倉

「本当に良かったのか? 天龍、摩耶」

地下営倉でノシロの見張りをしていた磯風と谷風は疑問を天龍と摩耶にぶつける。深海棲艦をわざと逃がすなど前代未聞だ、磯風と谷風は頭を抱えかねない。

「良くねえよ」

「なら何故……」

磯風の疑問に天龍はあつさりと否定した。

「良くねえけど……こういう時つてのは提督にも何かしら考えがあるんじゃないかって思った」

「考え?」

「ああ、アイツは救った覚えなんて無いとか言ってるけどさ、それでも俺らは少しかだけアイツに救われたんだよ」

アイツとはまさに提督の事だ。提督が着任にしてからこの鎮守府の艦娘達は少しずつ自信を取り戻している。それが大した事では無

くても、天龍達にとってはとてもありがたい事だった。

「それが大した事じゃなくてもな。悪口に慣れると大体提督の本音が分かるもんだぜ？」

「悪口に慣れるって……」

「さ、そろそろ外に出ようぜ。今頃——」

「——喧嘩が始まってる頃だ」

105. 臆病者は慎重過ぎても意味が無い

きっとこれは神様からの罰なのかもしれない。

偽りの姿で他人を騙し、嬲り、貶め、自分を騙し続けた。

何も理不尽だとは思わない。

いつか、天罰が来るのは分かっていた。

哀れな自分を救う価値は無い。そう言われている様な気分だ。

実際は救う価値すら無いのだろう。それを自分が決めるのは烏滸がましいにも程がある。

罰を受け入れる時が来た。

それが、——今だ。

「ゲホッゲホッ……い！ 何が……」

寮の壁に打ち付けられた阿賀野。周辺は土煙で何も見えない。念の為に艤装展開したのはいいものの、相手が誰だか分からなかった。だがその相手は土煙を掻き分け、ゆつくりと登場する。

「ノ、ノシロ……」

軽巡棲鬼と化したノシロが目の前にいた。無表情で艤装を展開させ、阿賀野を見下ろす。全砲口が阿賀野に向けられ、今にでも砲撃されそうだった。

「……深海棲艦ニナツタ時カラダツタヨ」

「ッ!？」

阿賀野の絹を裂くような喚声が鎮守府中に響き渡る。先が鋭いヒールの底で腹を刺され、中を掻き回す様に足を動かす。阿賀野は口から血を吐き、ノシロに頭を掴まれ壁に打ち付けられた。

「私ガアノ前任ニ洗脳サレテイタ事ヲ知ツタノハ……」

「がはッ……」

「気付イタ瞬間、怒リヲ通り越シテ笑ツチャツタヨ。私ハ今マデ何ヤツテタンダツテ、フザケルナヨツテ」

「ッ……!・ぐッ……!!」

怒りを漏らす声でノシロは阿賀野を睨む。腹を刺され、頭を何回も打ち付けられた阿賀野はノシロの言葉を必死に聞いていた。自分がしてきた過ちや罪を思い出し、ここまで生きてきた自分の天罰として。

「コンナ姿ニナルマデ全ク気ツカナカッタ。本当ニフザケンナツテ感じヨネ……本当ニ……!・ 本当ニ……!!」

「いッ、ノ……シ……ロ……!」

「阿賀野姉……本当ハ洗脳ナンテサレテナカッタンデシヨ? 洗脳サレテモナイノニヨクアンナ事出来タヨネ? ドウナノ? 罪ノ意識ヲ感じナガラ仲間ヲ黽ル気分ハ……」

ノシロは薄々気付いていた。沈められる前も、軽巡棲鬼になった後でも阿賀野の様子は他と違っていた。まるで何かに怯えるような完全に気圧された表情や姿。久しぶりに会ってやっとなつてくれたのだ。

「ごめん……なさい……でも、私は……」

「デモ? 何カ釈明ノ余地ガアルノ? 戯言ハ止メテ欲シイナア……」

「! イラツクンダヨ……!! 阿賀野姉ヤ矢矧姉ノ事モ……!! 洗脳サレテタ私自身ニモイラツキガ止マラナイ……モウ嫌ナ事バツカリダ!!」

ノシロも阿賀野や矢矧、■と同じ差別している側だった。沈む前は洗脳されている事など一切気付かず、平気で仲間を蹴落としていた。だが軽巡棲鬼になればどうだろうか。今まで自分のしてきた事

は全て間違いであり悪夢でしかない。到底信じる事など出来なかった。だがそう信じざるを得ない理由が次々と思ひ浮かび、生まれ変わったノシロは発狂した。

自分が深海棲艦として生まれ変わった事よりも、深く心に突き刺さった罪の意識。いなくなつた仲間の怨念、自分の愚かな末路。ノシロは盛大に笑い、喉が枯れるまで泣き叫ぶ。

何が私は優秀だ、何が貴方達は鉄屑だ。全てが可笑しい、あまりにも可笑しくて笑つてはいられない。今の醜い私を見て泣き叫んではいけない。今までやってきた事は全て間違いだったのだ。ストレス発散のいじめも、憂さ晴らしの暴行も、貶める為の暴言も、全てが正しいと思い込んでいた。

全く馬鹿馬鹿しい、過去の私の方がよっぽどの錆びた鉄屑だ。挙句の果てには矢矧に見捨てられ、軽巡棲鬼に成り果てた。これが恐らく報復という物なのだろう。目の前の現実にはノシロは逃げ続けた。

——もうどうでもよくなつた。

——もう生きている意味も無い。

——でも最期に一回だけ、

——私は……、

——■■■■。

「……ダカラ、才前達ヲ殺シテ私モ死ヌ……ソレデ全テガ終ワルワ……」

ノシロは目から涙を流し、驚掴みした手を離す。腹に突き刺さつたヒールの底も外し、再度砲口を阿賀野に向けた。

血の繋がった姉妹だろうと関係ない。どうせ生きる意味が無いのなら、私達で終わらせるしかないんだ。

「……いいわ、ノシロ」

「……！」

「貴方が望むのなら……一思いに私を殺して……？」

阿賀野は快く自身が死ぬ事を受け入れた。ノシロと思っている事は違えど、共通の認識がある。自分達が死ぬ事であったの仲間達に償う事だ。勿論これで償えるとは思っていない、ただそれでもそれ相応の事を受けなければ償いとは言えない気がした。

「阿賀野姉!!」

「チッ！ 邪魔が入ったなア!!」

「矢矧!!」

寮と寮の間道から矢矧が駆けつけてきた。艦装を展開し、戦闘状態に入っている。ノシロは矢矧を見るなり、即座に攻撃を仕掛けた。

「このッ……!! うわっ!!」

ノシロの地上での移動速度は素早く、艦娘の二倍以上の速度だ。ノシロは矢矧の背後に回り、後頭部を鷲掴み。地面に叩き付け、何回か砲撃した。

「矢矧……アンタニハ恨ミシカナイワ……」

「ノシロ……手を……離して、くれ……」

「断ル、才前ハナルベク苦シマセテカラ殺ス」

矢矧の頭を掴みながら地面を引き摺らせるノシロ。かつての能代の性格とは程遠い、人格ごと変わってしまったようだ。姉妹といえど容赦は無い、恨みもあれば仕方ない事だろう。

「サテ……二人共ゾロゾロト揃ッテ来テクレタ訳ダケド……」

「う、うわっ!」

阿賀野に近寄り、また頭を鷲掴む。そして二人を引き摺らせたまま、近くの岸辺へゆっくりと歩いていった。抵抗しようとノシロの腕を掴むも全く力が通らない。

「ドウイウ風ニ殺サレタイノカシラ? 戦死? 圧死? 溺死? 惨死?」

「やめっ、痛い!」

「ソレトモ……皆ニ事実ヲ伝エテ見捨テラレタイ?」

ノシロは二人を掴んだまま大跳躍。海に目掛けて二人を放り投げ

た。二人は咄嗟に艤装展開し、海面へ受身を取って体勢を整える。岸に着地するノシロを即座に視線を移した。

「マア……ドチラニセヨ、決定権ハ無イノダケレド」

「何を……する気なの……？」

「言ワナクテモ分カツテヨ。殺サレタクナイナラ少シハ抗ツテミタラ？ ドウシヨウモナイ……」

——屑達デサ」

「鎮守府近海にて砲撃を確認。ノシロと阿賀野達が戦闘に入ったものと思われます」

「よし、そのまま監視を続ける。会話の記録は出来たか？」

「はい出来ています。しかしノシロは阿賀野達を殺すつもりのようにです。如何致しますか？」

不知火が提督の後を追い、阿賀野達の事を報告する。阿賀野と矢矧、そして深海棲艦化したノシロが戦っていると聞いて艦娘達は広場や工廠へ走って向かっているようだ。提督と大鳳、不知火も外に出て阿賀野達がいる海を眺める。

「見学するよ。おーおー見た通り野次馬がいたもんだねえ」

「提督！ あ の 二 人 が 軽 巡 棲 艦 に 襲 わ れ て い ま す ！ 助 け ま す か ？ 」

「あーいや助けなくていい。色々と面倒だからな、見るだけにしたまえ」

「分かりました！」

広場付近の岸では艦娘達が艤装を展開したまま阿賀野達がいる海を見物していた。まるでニュースに写る野次馬の様に見える。提

督は一番前に立ち、特等席にて戦う阿賀野達を眺めた。

「……提督だろう。ノシ口を地下営倉から逃がしたのは」

「んで何が言いたい事でも?」

「理由と経緯を教えてほしい」

長門が腕組みしながら隣に立ち、提督に話し掛ける。長門は冷静を保ったまま提督に理由と経緯を要求してきた。戦闘による衝撃と風で黒い長髪と白い長髪がたなびく。長門は提督と顔すら合わせずに阿賀野達を見守っていた。

「……一言か二言で表すなら……あの阿賀野と矢矧は、前のお前らとそっくりだつて事かな」

「あの二人が前の我々と同じ……か。成程、古い鏡を見せられているというのはまさにこの事だな」

「お前らもまだまだ古臭い鏡だボケ。まあ所詮はブスとブスのブス同士のお見合いみたいなもんだ、第三者から見れば馬鹿らしく思えないか?」

「フツ……少し共感してしまうのが悔しい……ツ!?!」

かつての自分達を見ているようで恥ずかしい気持ちだ。そう思いつつ提督の顔を見ようと頭を横に振った途端、提督の背後から砲口が向けられた。

「何を企んでおるのじゃ、貴様……」

「返答次第ではその軽い頭が吹き飛ぶと思え」

「出来るものならやってどうぞ。そのふてぶてしい腕、今すぐにでも吹き飛ばせますよ」

「悪いですが包囲させて頂いたのでその臆装を収める事を推奨します」

提督の背後にて頭を狙うのは那智と利根。そしてそれを阻止しようとして砲口を向け、那智達を囲うのは不知火と朝潮六姉妹。殺意丸出しで膠着状態が続いた。

「おーおーこれはまたまた鬼の形相で、怒り心頭で今にでも爆発しそうな表情だなあ」

「何故ノシ口を逃がし、あの二人と対面させたのじゃ! お前はあの

二人を殺す気か!？」

「いや全く」

提督は怖気ずに那智達に方へ振り向き、愉快そうに話し続ける。砲口を零距离で向けられても尚、提督はニヤニヤと那智達を見下していた。

「ノシロがあの一二人に復讐心を燃やしているのは見て分かるだろう!! 復讐は復讐しか呼ばない、いくらやっても無駄だ! 即刻にやめさせろ!」

「嫌だね、断る」

「貴様……!!」

「そんなに止めて欲しいならお前らが止めてこい。まあ最も、止められるかどうか知らんけどな」

提督は耳の穴をほじくり、耳垢を指で弾いて捨てる。那智達のどうでもいい話に聞き飽きたような仕草だ。那智と利根は砲口を向けたまま一向に動かない。また不知火や朝潮達もその手を止めなかった。

「……何で止めに行かないんだ? お前らの仲間なんだろ? 助けないのか? そりや助けられないよなあ、だって他人が起こした面倒には関わらない方針だからねえ」

「ッ……」

「まあそれもいいだろう。俺らみたいに野次馬になりつつ、あの二人がどうなっていくのか高みの見物といくのも悪くはない。俺らは何も関わりがないからな」

提督は話しながら那智達が構える艤装を人差し指で下に押し下ろす。当然那智達は抵抗するが全く押し戻す事が出来ない。押し戻そうと力を入れるもそれ以上の力で押されていく。提督は余裕な表情で那智達を小馬鹿にしていた。

「結局お前らは上辺だけで人に訴えかけ、何もしない哀れで気色悪い、前のコイツらと何ら変わらない連中と同じだ。いけないと思っていないなら何故行動しない? 何故止めようと思わない? 何故嫌悪できない俺に訴える? 答えは簡単だ……お前らもコイツらと同じ臆病者なんだよ」

「おくつ……誰が臆病者だ!!」

遂には手で掴まれ、腕さえ抑えられる。そのまま自身の腰の所まで戻された。那智と利根の間に入り込み、提督は話を続けていく。提督は那智達の背後に回り込み、周囲を囲うようにして歩き始めた。那智達は提督の手が離れた瞬間にすぐさま砲口を向けようとする。が――

「ッ!? 何!?!」

また前腕を掴まれ、今度は上へ向けられる。予想以上の力に那智達は抵抗するもそれは無意味に等しかった。

「効いてるう〜効いてるう〜。その戸惑いこそ臆病者そのものだあ、いいかー? 陰でコソコソと俺を貶める計画を建てているお前らは俺と関わる事を拒否し続けている。計画が悟られないように大人しくしているその行動は怪しまれて当然なんだよ馬鹿共」

「何を言っている……!! そんな事私達は……!」

「いいや考えてるねー。っていうか■■■から教えてもらったし。計画が悟られないようにだつて? そんなに俺と話すのが怖いのか? 一度喋っただけで分かるはずがないだろう、怯え過ぎだ。それとも何か? 俺と摩耶が着任してからずっと負け続けて自信喪失しちゃった? あ〜! それは悪かったねえ〜! 俺が優秀故に勝ち続けちやつてごめんなツさ〜い!!!」

「こッのクズが!!!」

那智達が殴りかかった途端に今度は長門と摩耶が動きを止めた。艤装を展開し、摩耶は鋭く光る紅い眼で那智達を睨んでいる。

「ナイス長門、摩耶♪」

「チツ……!!」

「助ける気が無いんだつたら大人しくここで見届けようじゃないかあ、あの二人の――」

「――行末を」

106. 誰かの掌で下手な役者は踊り続ける

「ノシロ……!!」

「簡単ニ死ナナイデヨ」

ノシロは蒼い稲妻を発し、急発進急加速。

阿賀野と矢矧に目掛けて突進した。

二人は無意識で回避、体勢を整えてノシロに停戦を促す。

「ノシロやめて！ 私達は——」「沈メ!!!」

ノシロは方向転換、砲口を阿賀野に向け連続砲撃。

砲弾の嵐が阿賀野を襲う。黒煙と水柱で阿賀野の姿が見えなくなった。

「阿賀野姉!!」

「ナニ余所見シテルンダアア!!」

「うわっ!!」

すぐさまノシロは矢矧に突進。

すれ違いざまに矢矧の足を掴み、海面に叩きつけた。

そして頭目掛けて砲撃——、

「ッ!!」

「ナニッ!?!」

矢矧は海面に叩きつけられた瞬間に残った片足でノシロの顔を蹴り上げる。

が、紙一重で回避され、直撃は間逃れた。

しかし矢矧は身体を捻ってノシロの手から脱出。

追い打ちの砲撃で間合いを取った。

「コンナ砲撃デ私ヲ倒セル訳ガナイダロウ!! モット全力デ来イヨ!!」

「……ノシロ……!」

ノシロの眼は炎のように滾り、蒼白く輝いた。時々放出される蒼い稲妻が艀装の周辺を迸っている。傷一つないノシロは二人を戦闘へと煽っていた。そんな姿を見て矢矧は拳を握り、歯を食いしばる。しかしその時、頬から透明な液体が伝っているのが見えた。

「……何ですよ……！ 何で……私は……」

決してその液体は水しぶきによって出来たものではない。それは矢矧の瞼から現れた涙という液体だった。

「……こんなに悲しいの……!!?」

「や……は、ぎ……！」

「分からない……分からないのよ……!! 突然知らない記憶が現れて、悪夢みたいな記憶しなくて!! 私が二人を沈めたの……? 違う! 違う!! 私……」

「沈メ!!」
ノシロは戸惑う矢矧に構わず攻撃。幾度となく砲撃を受ける矢矧。ノシロの猛攻に矢矧は防御一方だった。

「何悲劇ノヒロイン飾ッテルノヨ!! 元ハト言エバ全テ貴方ノ所為ナノニ!!」

『酒匂はもういらん……棄てる。方法は何でもいい』

「酒匂ヲ沈メタノダツテ使エナクテ邪魔ダツタカラ!! 私ト同ジヨウニ敵ノ攻撃デ沈ンダ事ニシテ見捨テタンダ!!」

『よくやった矢矧。次はあの能代だ、ちゃんとやれよ?』

「次ニ今度ハ私デ!! 秘密ヲ知ツテシマツタカラアノ時ニ見捨テタ!!」

『アイツは前から消しておきたかったんだ……よくやったな矢矧』

「何デ!! コウモ人ヲイトモ簡単ニ見捨テラレルノ!!? 何デ!! 私達ニイジメラレルマデ何モ言ワナカタタノ!!?」

『これでお前は——』

ノシロの猛攻を耐え切り、矢矧は蹴り飛ばされる。

受け身も取れずに矢矧は海面を転がるように着地した。

『——姉と同じ……——』

「っ……!! がはっ……グッ……!」

『——こちら側の仲間だ』

矢矧はボロボロになりながらも立ち上がる。息も上がり、まともに
艀装は動かせない。

思わず矢矧は自身の右手の平を見た。それを見た限り矢矧は——、
「あっ……」

——全てを思い出した。

「あ……ああああ……わ、私は……」

身体を震わせ、手の平で顔を覆う矢矧。徐々に蹲り、再度海面に膝
を着いた。

全て思い出した。今まで自分が何をしてきたのかを。そのしてき
た事の重大さを。

矢矧は差別している側である姉の阿賀野と能代に羨みを感じてい
た。他の艦娘と違って虐められなくても、いつ矛先がこちらに向くの
か分からない。自身の身の危険を感じた矢矧は人一倍に努力した。
強くなれば、戦果をあげれば差別している側に入る事が出来る。そう
思い込んで矢矧は出撃と入渠、訓練を繰り返してきた。

必死だった。

妹の酒匂も強制的に参加させて強くなる為に足掻いてきた。周り
から白い目で見られようとも、馬鹿にされ続けても、矢矧は諦めな
かった。

そんな時だった。優遇制度の実行犯である前任に突然呼び出され
る矢矧。内心緊張しながらも執務室の中へ入った。

『あー……まあここ最近のお前は少しばかり目立つところがある。なあに怒ってる訳じゃない』

『何が……言いたいんでしょうか』

『簡単な話さ。俺の命令を聞いてくれれば姉と同じような待遇をしてやつてもいいぞ。命令を聞けば、だがな』

条件を述べながら前任は平気で矢矧の身体を触っていく。ニヤニヤしながら弄ぶかのように胸や下半身をいやらしく触ってくるのは悍ましい気持ちだった。

『……分かりました。ご命令を……』

『よし、良い子だ』

その命令が大切なものを失う事になるとは、この時夢にも思わなかっただろう。

「ごめん……なさい……!!」

「……モウ謝ッテモ無駄ナノヨ。私達ハ……コノ世界ニ生きチャイケナイ、存在ナンダカラ」

酷い目に会いたくないが為に演技で誤魔化し続け、仲間を虐めた阿賀野。

前任の優遇制度により、まんまと洗脳に掛かり、姉妹を脅かしたノシロ。

そんな姉達に怯えて、自ら差別している側に加入し、仲間を虐めた矢矧。

ただただ虐められた拳句、矢矧に利用され、死ぬ運命に晒された酒句。

稀に見る最悪最低の姉妹だ。自身の目的の為だけに血の繋がった家族すら虐め、利用するような鉄屑同然の艦娘。神から見放されて当然の行いだらう。これは自分達に対する天罰なのだ。改心する余地すら与えない、そこにあるのは決定的に決められた絶望の運命。だがノシロは何ら疑問には思わなかった。

「沈ンダ酒句ダッテ私達ノ事ヲ憎ンデルワ……ダカラコレハ、償イナ

「ノヨツツ!!」

「ぐはっ!!」

矢矧は腹を深く蹴られ、何十メートル先まで蹴り飛ばされる。ノシロが悶える矢矧に接近し、躊躇なく砲撃を続行した。

「私達ガ死ネバ許サレルワ……私達ガ死ネバ……許サレルノヨ」

矢矧は立ち上がる事すら出来ず、海面に這いつくばっていた。周辺には水柱が立ち、衝撃でよろけそうになっている。再度立ち上がるうとするもノシロのハイヒールの尖った底が矢矧の背中に刺さった。

「皆死ネバ……イツカ必ズ……つぐなえ——」「酒匂は……沈んでない……!!」

「ツ……!?!」

声の方向を振り向けば阿賀野が海面を這いつくばりながら移動していた。矢矧とノシロを助けようと腕を使って器用に進んでいる。

「ドウイウ事ヨ……阿賀野。酒匂ハ矢矧ガツ……!!」

「本……当、よ」

矢矧が喉を枯らした声で答えた。

ノシロの足元で必死に立ち上がろうとしている。

「酒匂は……昨日、この鎮守府に来ていた……本当よ、間違いなかった……」

「矢矧ガ沈メタンジヤナイノ!!」

「沈めた様に……見せかけた……どうしても……殺したくなくて」「ツ!?!」

前任から酒匂の殺害命令を命じられた矢矧はどうしても妹の酒匂を殺したくなかった。酒匂は自分と同じく虐められてきた唯一の肉親。到底見捨てて殺すなど以ての外だ。だが命令に逆らえば自分どころか酒匂は勿論の事、阿賀野や能代まで殺されてしまう羽目になる。前任から脅されて命令を受けた以上は遂行する他無かった。

矢矧は必死に考えた。予め決められた時刻までに酒匂をどう逃がすかを。煙弾、遺体偽造、ありとあらゆる物を使って策を考えた。しかし時々身体が言う事を聞かない時がある。まるで差別している側

の思考に順応されていくような、平気で仲間を蔑む考えを押し付けられる様な想像が頭の中で響いてきたのだ。その当時は前任の薬による洗脳だとは知らず、矢矧はもう一人の自分と戦いながら生きてきた。

『矢矧お姉ちゃん……何で……!』

約束の日。矢矧は酒匂を呼び、鎮守府から遠く離れた島の崖下まで連れ込んだ。そして矢矧ら躊躇いながら酒匂に向けて砲撃。砲弾は酒匂の頬を掠め、崖に直撃する。

『ごめん……酒匂……! 貴方を殺さない……私や阿賀野姉、能代姉が殺されるのよ……!!』

『い……嫌だ! そんなのいや——』『わがまま言うな!! この出来損ないが! 大人しく私に殺される!!』

『っ!』
矢矧が考えた策とはわざと酒匂を殺した事にし、自ら濡れ衣を着る捨て身の策だった。艦娘が艦娘を殺す事は第一級犯罪、罪の重さによつては旧式解体刑に処される事すらある。

だがしかし前任は矢矧の供述によつて自分が命令した事が世間に広まる事を恐れるはずだ。つまりはこの事は無かった事にされ、酒匂は轟沈扱いにされる。そう考えた矢矧はわざと酒匂を追い出すような真似をしたのだ。

『矢矧お姉ちゃん……嫌だよ……そんなの……嫌だよ!』

『……わがまま言わないでよ……! お願いだから……早く逃げてよ……』

『逃、げ……?』

『逃げて……私に殺される前に……早く!!』

矢矧の策は決して完璧ではない。今にでも矢矧の身体は酒匂を殺そうと躍起になっているのだ。頭の中では殺したくないと思つていても身体は全く言う事を聞かない。いつ手を出してもおかしくない状況だった。

『早く!!』

矢矧に殺されそうになった酒匂は泣き叫んでその場を去っていく。

矢矧は酒匂の後を追う事は無く、ただ一人崖下で雨に打たれていた。『……本当にごめんね酒匂……貴方だけでも逃げて……!! ここから遠く離れたあの男にも分からないような場所まで逃げて……もう二度とここには来ないように……ごめん……』

「こうでもしないと……皆が死んじゃうから……こうするしか、方法は……無かったああ……!!」

涙を流し、矢矧は自身の罪を嘆く自身の自己的な考えで姉妹を危険に晒す様な事をしてしまった。正当化も出来ない、己の不甲斐なさが招いた不幸の連続。簡単に言えば自業自得なのだろう。現にこの現状が今、自分達の愚かな行動に対する報いだ。

「……ジャア私ヲ見捨テタ事ハドウイウ理由ナ訳？」

「あの時は……完全に身体が操られてて……何も出来なかった……目を覚ました時には、もう……能代はいなくて……私は鎮守府にいた……」

酒匂の時は洗脳されかけた時だった。しかし阿賀野の時は洗脳された状態、つまりは仲間を蔑む事など当たり前のような思考を持つ差別している側だ。例えばそれは姉妹であつても差別してしまう。この前の古鷹と加古の様な関係性になる。

「何ヨ……コレ……コンナノ、フザケテルデシヨ……」

ノシロは驚愕の事実思わず後退る。当然ノシロは受け入れられなかった。矢矧達から聞けばどうしようも出来なかった事だろう、しかしノシロから聞けばただの言い訳にしかない。

「ソナナ言イ訳ヲ信ジル馬鹿ガドコニイルノヨ……全クモツテフザケテル……! フザケナイデヨ……!!」

「全て……私が保身に走った所為で起きたんだ……だから……ノシロ姉に殺されても文句はない」

「……ッ!!」

初めてノシロが動揺し始めた。姉妹を殺す事に躊躇ったのか、腕が

震えている。息も荒く、焦りの表情が見て取れた。

しかしその時――、

「何か楽しそうな事をしてますねえ〜」

聞き覚えのある声の方向に顔を振り向けばそこには――、

「私も〜」緒させてくださ〜い♪」

――悪魔の様な笑みを浮かべた『鏢』がいた。

107. 懺悔の暗海に兇気は舞い降りる

「私も一緒に緒させてください〜い♪」

最終決戦兵器『鏢』降臨。悪魔の様な笑みを浮かべた鹿島はゆつくりとノシロ達の方へ向かってきていた。とてつもないプレッシャーがノシロ達を襲う。まるで空気が揺れるかのような重厚な緊張だ。

「摩耶、プリンツ、不知火、川内。全力でアイツを出来る限り抑えろ」
「分かった」

「分かりました！」

「了解しました」

提督の指示で摩耶達が一斉に動き出す。鹿島の实力を知っている元提督の艦娘達であればまだ対抗出来るだろう。提督は冷静を保ちつつ、周辺を見渡す。

「……川内は？」

「川内姉さんは……今も眠っています……。あと複数名もついていていっちゃいました……」

川内は休暇故に部屋にて睡眠を取っているらしい。提督は頭を抱えて深く溜息を吐いた。一度睡眠に入れば川内は必ずというほど全く起きない。今から起こしにいつても無理がある。

「おい川内さーん!!! 夜戦が出来るよー!!!」

「川内さーん!!!」

灰色と時雨が大声で川内を呼ぶ。すると軽巡察の一つの窓ガラスが割れ、布団をまとった艦娘が現れた。

「夜戦だって!!! どどこどこどこどこどこ!!!?」

「うるさあああ!!! あっちだ、さっさと行けエ!!!!」

「はーい!!」

布団を脱ぎ捨て現れた川内は提督の襟を掴んでは前後に振り続ける。しつこい川内に提督は腕を掴んで摩耶達がいる海へ投げ飛ばした。投げ飛ばされても元気に答え、艀装を展開しながら海面に着地する。

「やりましたね白さん！」

「褒めてもいいんだよ？」

「はあ……はいはいよくやったよくやった。まあそれは置いてとりあえずは様子見だ」

「……貴様は何故そこまでノシロの復讐に手を貸すんだ？」

提督の背後に立つ那智が睨みながら話し掛ける。今も長門と朝潮達に砲口を向けられ、膠着状態だ。

「取り引きだよーん。お前らを徹底的に叩き潰す為のな」

「ノシロが何か情報を持つてるとでも？」

「当たり前だあ、かつてお前らと同じ仲間だったからな。情報を持つていない訳が無い」

現にノシロは■が深海棲艦であるという情報を持っていた。■

■に関する情報であれば今後の対策は容易に出来る。戦争において敵の情報を知る事は戦う上で優位に立てる手段だ。

「だとしてもそれと引き換えに復讐を手伝うなど間違っている！」

「何でー？」

「復讐をしても何も変わらない、そこにあるのはまた別の復讐だ！

それは貴様も分かっているはずだろう!!」

確かに那智が言う事は正しい。復讐は繰り返す、やり返すという本質の意味では永遠に続く事だろう。

例えばAが殺され、その殺されたAの関係者Cが殺したBを憎み、同じ手でやり返そうとBに復讐を仕掛ける。復讐の名を得たCは殺したBを自身の手で殺す。しかしその殺されたBの関係者Dが殺したCを殺そうと復讐を企てる。

終わりのない無限ループに近いだろう。提督はその事をちゃんと理解していた。

「んで、そんな事考えて何が言いたいんだ？」

「んなツ!! 貴様には人の心という物が——」「お前ら本当分かってないな!!!」

激怒する那智に提督は大声で一蹴する。

「いいかー? そういう復讐だとか、償いだとかは全て個人の自己満

足に過ぎないんだ。誰かを殺したい、誰かに償いたい、誰かに謝りたい、全て自分がやりたい事なのだよ。それを何も知らない他人が、死んだ人も喜んでますよだとか、死んだ人が望むはずがないだとか、喚いて怒鳴り散らしてくる。一々他人の事情に手を挟む馬鹿共に上手く乗せられ、結果胡散臭い形で償いが終わったり、途中で復讐を止めてしまう奴が残念な事にこの世界にはいるんだ……」

提督が耳の穴をほじくりながら話す。つまらなさそうに喋るその表情はどこか悲しげだった。

「誰かがよく言うなあそんな事をして何も変わらない、その先には何も無いって。違うんだよ、変わらなくていいんだよ、無くていいんだよ、どうせ自己満足という人生のイベントでしかないんだから!!」
「白さん、それ以上は……!」

言い過ぎなのではと灰色が止めに入る。しかし提督の気は収まらない、言いたい事を全て吐き出した。

「お前らが復讐に対する考え方は別に否定はしないし、強制もしない。だがその考え方でお前らは復讐したがる誰かを止める事が出来たのか?」

提督の言葉を聞いて那智や利根が一瞬口籠る。まるでそのような経験があったかのような反応だ。

「……まあいいさ。俺は色んな奴に恨まれてもおかしくない事を飽きる程してきてるからな。だから復讐として貶められても殺されても何ら構わない。だが俺は……その復讐を受け止め、全力で足掻いていく!! 復讐をするならなりふり構わずに全力でやってこい!!」

「全力……だと……!?!」

「お前らが思うその悲劇故に復讐を糧として出来上がった正義が正しいと思うのなら! 全力でその正義を貫き通し、遂行させてみる!!」

俺も俺が思う正義の名のもとで全力で対抗する……これが戦争だ……」

「鹿島……」

「はい鹿島です♪ 何か楽しそうなので来ちゃいました♪」

一方で鎮守府近海では恐怖を戦慄とさせる緊迫した状況下になっていた。鈴谷や加賀を圧倒させた南方の北上をものの五分足らずで蹂躪し、深海棲艦化したノシロを一方的に殺しかけた強さが未知数の艦娘、鹿島。その鹿島は今の状況を楽しそうだからとノシロ達に話しかけてきた。

「お前……は、関係……ないだろ……!」

「はい全くの無関係でございます♪ ですがこんな楽しい場面を見ていたら身体が疼いちゃって……ごめんなさいね!」

あまりにもタチが悪過ぎる。姉妹が争う場面を見て楽しいなどという表現は聞いてて不愉快だ。明らかにこの状況を見て嘲笑っている。関係の無い鹿島の言動や行動に怒りは積もるばかりだ。

「才前ハ……アノ時ノ……!」

「また会いましたねノシロさん! あの時はとてもーっても! 惜しかったですよ! 大丈夫ですか? 傷癒せました?」

「ドウイウ状況力分カツテルノ……? 才前ノ出ル梓ジャナイダロ!!」

「怒り心頭ですね♪ ますます調教のしがいがあります♪ あゝ想像しただけで身体がっ……! あっ……」

ノシロ達を調教出来る妄想をして興奮したのか甘い喘ぎ声を漏らす鹿島。僅かに身体を震わせ、頬が淡く桃色に染まる。わざと腰を振り、下半身の股辺りをスカートを引っ張って両腕で抑えた。

「はあ……さてさて誰からやろうかしら?」

「私だ」

「——っ」

横から摩耶が殴打で鹿島を殴り飛ばす。

鹿島は摩耶の殴打を受け止め、拳を掴んだ。

水柱が後を追うようにして立ち上る。

「あらあら摩耶さんですか? これは少し苦戦しそうですね……」

「摩耶さんだけじゃないですよ」

拳を掴む鹿島に不知火が不意打ちを食らわせる。

しかしその不意打ちも鹿島の空いた手によって受け止められた。

「甘いですね〜」

摩耶の拳と不知火の足を掴んだまま三連続砲撃。

爆煙が立ち、衝撃波で海面がざわつく。

しかし――、

「そちらも甘いのでは？」

「あらプリンツさ――」

両手が塞がった鹿島を蹴り飛ばすプリンツ。

鹿島は受け身を取った後に綺麗に着水した。

埃を払うかのように正装を叩き、首や腕の関節を慣らしていく。

「相変わらず素敵な蹴りをどうも、プリンツさん」

「おすわりSitz. 鹿島さん」

鹿島と対峙するは提督の艦娘であり、歴戦の猛者である摩耶、プリ

ンツ、不知火、川内。

「睨られるのは些か困ります。折角の楽しそうな場面を邪魔しないで

いただけますか？」

「鹿島こそ、他人の事情に色んな意味で首を突っ込むなよ。そういう

ところだぞ、お前の悪い所は」

「今にでも殺されそうな矢矧さんや阿賀野さんを放っておきなから見

世物にしておいて何も行動しない貴方達に言われたくはありません

ね〜」

「そういつて最後に殺すのは鹿島さんですよね」

「あらあらそんな事はしませんよ♪ ただ少しだけ睨として調教する

だけです」

元気にニコニコと話す鹿島。強者の余裕というべきか、舐められて

いる様な気分だ。とはいえそう舐められても何も言えないのが事実。

摩耶以外のプリンツ、不知火、川内は鹿島に一度も勝った事が無い。

南方の北上の様に五分足らずで勝負ありだ。

だからこそ摩耶達は全力で鹿島を抑えなければならぬ。本気も

本気、あの最強の戦艦棲姫と戦う様な意識で挑む必要がある。この究

極生命体を抑えるのはそれ程の難易度だ。

「まあ……邪魔されても行きますがねッ!!」

だが摩耶達を置いて鹿島は急発進。

向かう先は構えるノシロと跪く矢矧。

「ッ!!」

大きな水柱が幾つも立ち、持ち上げられた海水が雨となって降り注ぐ。衝撃で波が荒れ、風圧が提督達がいる広場まで広がった。腕で仰がなければいけないほど強い風圧だ。

鹿島の殴打と同時砲撃でこの威力。明らかに艦娘以上の攻撃力と破壊力を有している。

そんな鹿島の攻撃をノシロと矢矧は――、

「避けられましたか〜」

回避していた。いや――、

「矢矧!・ノシロ!・大丈夫!」

「な、何とか……」

ノシロと矢矧は阿賀野によって助かっていた。鹿島が攻撃する直前、阿賀野は一足先に傷ついた身体を動かし、ノシロと矢矧の身体を掴んで回避していたのだ。

だが完全に攻撃を回避出来ていた訳では無い。殴打は回避していても砲撃は右足の付け根あたりを直撃。悶えるような激痛が阿賀野を襲っていた。

「うッ……!!」

「ナ、何デ……! 何デ助ケタノ……!」

「はあ……はあ……」

迸る激痛に汗を流し、息が荒れる阿賀野。ノシロは矢矧ならまだしも、何故自分も助けられたのか理解が出来なかった。殺される相手を助けるなど意味が分からない。

「はあ……はあ……同じ……姉妹、だから……!」

「ッ……!」

「今更姉ぶるなんて、おかしいと思うけど……私は……腐っても、お姉ちゃんだから……!!」

「つまらない姉妹愛ですね〜」

両腕を広げた鹿島が川内と不知火を両手の平の掌底打ちで殴り飛ばす。そして砲撃で追い討ちを仕掛けた。

プリンツと砲雷撃戦に入りながら、鹿島は流暢に話を続ける。

「あの男にまんまと洗脳され、平気に仲間を蔑むノシロさん。差別されたくないからとあの男に縋り、姉妹を失う羽目になった自業自得の矢矧さん。そして洗脳されたフリをして仲間を騙し続け、虐めたくもないのに仲間を虐め続けた阿賀野さん……今更姉ぶって何がしたいんですか？」

鹿島は言葉を並べながら、摩耶達と戦っている。余裕の表情をしなからまるで練習相手の様に扱っていた。時々摩耶が来れば戦闘スタイルが変わり、激しい猛攻が繰り広げられる。

「更には矢矧さんが殺したと見せかけ救った酒匂さんが戻ってきた……貴方達の過去や酒匂さんに対する反応はレポートにて確認致しましたよ。とても無様で醜く、見るに堪えない内容です。拳句の果てには自分が招いた所為だからと、死ねば償えるといった根も葉もない根拠を馬鹿正直に信じ込み、一家心中を起こそうとしている……全くもって滑稽、滑稽で仕方ありません」

「何が……言いたいなのよ……？」

「要するに貴方達はとても弱いんですよ。あまりにも弱い、身体も心も全て弱い。今まで戦ってきておいて何故生きてるのか不思議な程弱いんです。意味が分かりませんか？ ツ!？」

話している途中に川内に腕を掴まれ、そのまま背負い投げ。鹿島は海面に叩きつけられ、川内の砲撃と魚雷を食らった。

が、鹿島は即座に起き上がる。

腕を掴む川内の頭を両手で挟み、頭から海面に叩き落とした。そして容赦なく顔に向けて六連続砲撃。

「弱いから助けられなかった、弱いから足掻く事が出来なかった。酒匂さんや能代さんを救う事が出来なかった。ただ単純明快な事です、気付かない方がおかしいんですよ。貴方達姉妹はとてもダメですね、ハッキリ言つてクズの中のクズです」

「そうよ……そして強くなろうとも……思わなかった」

「あら？ グッ!!」

阿賀野の言葉に戸惑った瞬間に不知火の砲撃が直撃。

爆煙の中から摩耶が現れ、鹿島の腹に蹴りを入れる。

蹴り飛ばされた鹿島は即座に立ち上がり、摩耶に向かって突進した。

「誰かが下にいたから……自分が強いと思い込んで……ろくに訓練もしなかった。洗脳されたフリをしつつ、訓練を受け、強くなってればまだ何とか……出来た……」

「阿賀野姉……」

突進した鹿島は摩耶の足元付近にわざと砲撃。

水柱が立ち上がり、気を取っているうちに鹿島は摩耶の背面を取った。

気付いた摩耶は鹿島の殴打と同時に砲撃を紙一重で回避。

カウンターで鹿島の頭を掴み、海面に叩きつけた。

しかし鹿島は摩耶の腹にドロップキックを食らわせ、拘束から解放される。

「……で、立ち上がって何をする気ですか？」

「確かに……貴方から見れば私達はクズでしかない……笑えて当然よね……でも、自分以外の全てを見下して嘲笑うような貴方だけには……言われたくない!!」

「……」

阿賀野は精一杯の力で立ち上がり、鹿島の前に姿を現す。徐々に阿賀野の周りから風が纏い始め、少しずつ光り出した。ノシロと矢矧を守る様に手を伸ばし、鹿島と対面する。

「許さないわ……鹿島!! 私達を馬鹿にしないで!!」

確かに今の自分達はとても醜いだろう。救いようのない哀れな連中そのものだ。だがそんな自分達にでも変われるチャンスはある。例えそれが雀の涙だとしても、自分達は変わりたい。阿賀野、ノシロ、矢矧が揃っている今なら変われる気がする。

いや今しかない。

今しかないこのチャンスを無駄にしてはいけない。
目の前の立ちはだかる壁から目を離すな。

前を見て歩け、そして先導しろ。姉として頼れる背中を新たに作り
出せ。

かつての私達を取り戻す為に。

戦うんだ。

私は――、

「――身の程を知りなさい」

鹿島の三連続砲撃が全て阿賀野の脳天に直撃。

衝撃で阿賀野は吹き飛ばされた。

「自分以外の全てを見下して嘲笑うような、でしたっけ？ 半分間違
いで半分正解です。確かに私は貴方達の様な醜く弱い存在をゴミの
ように見ていますが……提督や摩耶、プリンツ達は対等に見ているつ
もりです」

鹿島が一瞬だけ銀色の光が溢れるように光った。身体の内側に何
かを秘めているような、周辺に浮かぶ光が収束し始めている。その様
子を見て摩耶達は一直線に最大速度で鹿島へ向かっていった。

「何が言われたくないですって？ ならば全力で私に挑み、足掻き、抗
い、歯向かい、そして訂正させてご覧なさいな……罪を償う為に死に
たいというのなら私が直々に殺して差し上げましょう……」

摩耶達なら分かるこの鹿島の様子。ある鎮守府で共にいた時の地
獄の様な模擬演習を思い出すだろう。大破ばかりの六人がかりでよ
うやく抑えた地獄を。

矢矧達はそれを知らないまま、戦闘準備に入る。

「……では、これから……」

——調教を……始めます」

『鏢・通常戦闘形態』

108. 本能の赴くままに鏢は輝き続ける

痛い。

とても頭が痛い。

意識が朦朧とする。視界がぼやけてうまく見えない。

一体何が起きた。

確か私は鹿島に立ち向かおうと前進したはずだ。

なのに何故かまともに砲撃を食らっている。

分からなかった、予知すら出来なかった。

意識が保てない。

嫌だ、私は戦わなくちやいけないんだ。

私は、沈む訳には――、

銀色の稲光が暗闇の海を駆けていく。

幾つも立ち上る水柱、雨となって降り注ぐ海水。

砲撃で散る火花、風に舞う黒い砲煙。

激戦の最中に見える狂気の笑み。

「久しぶりですね〜制限も無く戦えるのは〜……あら?」

戦っていたのは摩耶とプリンツ、不知火と川内、そして阿賀野達。

また鹿島に挑もうとこちらへ来る艦娘達がいた。

「島風、天龍、飛龍、蒼龍……他にもいっぱい……揃いも揃って面白い

方達ですね〜! 興奮しちゃいます〜!! あっ……!」

更なる敵の増援に興奮する鹿島。顔を赤らめ、ゾクゾクと身体を震わせる。あまりの戦力差に思わず指を噛みそうになった。しかし鹿島の本当の相手は阿賀野達。それ以上は大して気にしてもいない。

「躰がいがあります〜! おっとー!」

ノシロの不意打ち砲撃を鹿島は華麗に避ける。

「チッ!!」

「もつと攻撃しても構わないんですよ〜！」

「んじや遠慮なく」

鹿島の正面から殴打を仕掛ける摩耶。鹿島は身体を仰け反らせ、摩耶の殴打を回避。

海面に手をつき、摩耶にそのままサマーソルトキック。

摩耶も回避し、鹿島の足を掴んだ。

「アレ？ うわッ!!」

摩耶は鹿島を投げ飛ばし、急発進大跳躍。

空中に浮かぶ鹿島に一瞬で近付き、蹴り落とす。

「いたた……」

立ち上がる鹿島の背後を天龍が取った。

天龍は勢いつけて刀を振り回す。

しかし鹿島はそれを跳躍して回避。

「なるほど〜……」

「何がなるほどだッ!!」

天龍は小型ジェット噴射器で一氣に間合いを詰める。

身体を回転させ、一瞬で鹿島の懐に入り込んだ。

そして――、

「落ち――ッ!!?」

天龍の振り下ろした刀は回避不能のはずだった。だが鹿島はその刀を片手で止め、力を相殺させていたのだ。刀の峰でなければ手は切断されている。それなのに鹿島は刀の峰で攻撃してくる事を予知してわざと受け止めたのだ。鹿島の背後では天龍の振り下ろした刀の衝撃が海を斬り裂いている。僅かに片腕を震わせ、天龍を睨む鹿島。その表情に天龍は焦りを見せる。

「少しは効きましたよ……天龍さん……」

片手で掴まれた刀がピクリとも動かない、いや動かさなかった。抜こうと力を入れても鹿島の握力のコントロールは凄まじく、まるで刀が重い岩にでもなったかのようなだった。やがて海面に着水し、片手と刀の鏢迫り合いが起きる。

「二度の死より二度の打撃……相手をもつと苦しめる方法で刀の峰で

殴るという方法を取るのには評価しましょう。ですが……」

鹿島は刀をつかんだまま後方へ引く。

天龍が連られて鹿島の前に引つ張られた。

そして天龍の顔面に回し蹴りで蹴り飛ばした。

「あまりにも力が弱過ぎます!!」

蹴り飛ばされた天龍は大きな水柱を立て、海面に転がる。

トドメの砲撃で爆煙に包まれた。

「天龍さん!!」

「貴方は筋トレを中心に訓練を受ける事をおすすめします……そして……」

鹿島が向かう先は――、

「島風さ〜ん! そんな速度だと……」

「ひっ――」 「遅過ぎて欠伸が出ちやいます!!」

島風の脳天を奪った天龍の刀の峰で殴り落とした。

通常の艦娘よりも速い島風に一瞬で追いつく鹿島。

怯える島風を躊躇いなく戦闘不能にさせた。

「貴方の力はまだ半分以下です! 百回程、海上持久走をする事をおすすめします!! そしてそして……」

鹿島が次に向かう先は、艦載機を発艦する正規空母。次々に落とされる爆弾を回避するどころか海面に当たる前に凄まじい速度で間合いを詰めた。

そして――、

「そーうりゅーうさーん!!!」

名前を呼んで、蒼龍の頬に刀の峰を殴打する。

衝撃波が出来かねない速度で殴られた蒼龍は岸壁まで殴り飛ばされた。

完全に意識を喪失し、立ち上がる様子がない。

「蒼龍!!」

「怯え過ぎです! 戦場において弱みを見せたら最後ですよ!」

後で提督にメンタル面でも鍛えてもらって下さ〜い! そしてその隣にいる飛龍さんも〜!」

「ヒッ……!!」

笑顔で飛龍を大太刀で殴り飛ばす鹿島。

飛龍は瞬時に意識を失い、岸壁に衝突した。

「馬鹿な程狼狽え過ぎでくす!! 例え仲間が小破しても敵を倒す事に専念しましょうくす! 攻撃は最大の防御、仲間を助けるのはその後でくす! さて……貴方達は戦わなくていいんですか? ノシロさん、矢矧さん……」

「ッ……」

海上に立つは容易く精鋭を弄んだ鏢の姿。本当であれば持つ事など出来ない天龍の大太刀をまるで木の棒の様に持ち歩いている。身体を纏う銀色の光、確実に獲物を仕留める狩人の眼、口から出る排熱の様な白い吐息。限界まで旋回していた艤装の砲塔が火花を散らしている。

「まさか私に怖気付いたとでも? 冗談はやめてくださいよ、まだまだこれからののに」

「お前は……本当に、人間の味方なのか……?」

「いいえ、人間の味方ではありませんよ。提督の味方です、それ以外の人間なんて毛ほども興味がないので。勿論艦娘も同じです、摩耶さん達以外はですがッ!!」

撃たれた砲弾の側面を手の平で触れ、着弾位置をずらして回避する。そして背後に回り込む不知火を見もせず移動地点を予測して砲撃した。

「調教しがいがあれば話は別ですよ? 貴方達はとくつても羨ましい方達なので特別に構ってあげてます。貴方が抱える方もね」

「狂ってる……!!」

矢矧の腕には鹿島の砲撃によって意識を失う阿賀野が。阿賀野の事はまだ諦めていないらしい。鹿島は矢矧達の元までゆっくり航行する。しかし矢矧の言葉を聞いた途端、その航行を止めてその場に留まった。

「はて、狂ってるとは一体? 私のどこが狂ってるのですか?」

「自分で言ってる気付かないの!?!」

「はあ……私は狂ってなんかいませんよ？　ただ本能と欲のままに生き、思うがままに人の世を過ごしているだけです」

頭上から金剛達の一斉放射が鹿島を襲う。だが鹿島は大太刀で全て斬り伏せた。直後斬られた砲弾は爆発し、明るく鹿島を照らす。

「羨ましいとか調教するとか普通は言わないでしょう！　あんな殺人紛いな行動が調教だ訓練だなんて罷り通る訳ないじゃない！」

「……仰っている意味が分からないのですが……何故貴方が私のやり方を否定しているのですか？　私はやりたい事をやっているだけです、これのどこが狂ってるんでしょうか」

「は……？」

鹿島の返答に矢矧は背筋が凍るのを感じた。今までの一連の行動を何も疑問に思わない、ただやりたい事をやっているだけだと主張している。あまりにもお互いの価値観が違い過ぎていた。

「そもそも貴方の普通を私に押し付けないでいただけませんか？　普通の意味って分かっています？　殺人紛いの行動が狂氣的だと仰るなら、この戦争こそ狂氣的なのでは？」

「な、何を言って……」

「貴方は戦争を何だと思っっているんです？　子供同士のチャンバラごっこみたいな幼稚な世界じゃないですよ。死を司る地獄……血と血が混ざり合い、ひたすらに死ぬ事に怯え、相手を見つけ次第殺していく、死屍累々の世界なんです」

鹿島の顔から笑顔が消え、無表情で矢矧に問いたです。銀色に光る眼が一瞬で黒く光のない眼に変貌した。余程矢矧達の姿ぶりに腹が立ったのか、次々に持論を述べていく。

「戦争では力がある者が勝利して生き残り、力なき者が敗北して死ぬ。力なくして勝利無し、力があるからこそ生きています。今がある。かつての平和な認識がこの戦乱の世の認識に通用すると思ったら大間違いです!!!」

初めて鹿島が感情を込めて大きい声を出した。矢矧達は身体を跳ねらせ、若干怯えている。再び鹿島は航行を始め、矢矧達に近付く。「死は誰にでも平等に訪れる……かつては平和な世界にあっただろう

そんな生温い条理など笑止千万、死なんて簡単にいつでも訪れるんです。ならばその不条理をどうやって打ち砕くか……それこそ力と死に対する恐怖なんですよ」

やがて鹿島は矢矧達の前に辿り着き、その哀愁なる姿を見下した。大太刀を矢矧の前に突き出し、砲口を阿賀野に向ける。

「生に喜び、死に恐れなさい。謝罪もロクにしない癖にいくら謝つても意味が無い、いくら償つても許されないなどと過程を考える事を放棄して勝手にそれらを妄信し、ましてや死ねば許される、死ねば楽になれるなどと言った生への冒流をするだけじゃ飽き足らず、力も無いのに筋の通っていない道理や認識を他者に押し付ける様な者など……この戦争の舞台に登る価値はございません。貴方に狂っているなどと言われる筋合いは無いです、正直言つて腹が立ちます」

最後に鹿島は結論を言い放つ。

「……いつまで平和ボケしているんですか？ 軟弱で無様なクズ共」

矢矧は目を瞑る。殺されると思ったのか抵抗もせず阿賀野を抱えて蹲つた。その姿を見て鹿島は呆れた表情で溜息を吐く。大太刀を振りかざし、照準を矢矧に捉えた。だが――、

「鹿島、それぐらいにしとけ」

「……あら摩耶さん、遅かったですね。衰えました？」

鹿島の肩に手を乗せたのは摩耶。艤装の砲口を鹿島の背後に向け、脅す様に忠告してきた。

「ふざけんな、んな訳ねーだろ。はあ……少々お前はやり過ぎだ、ここで手を引け」

「断ります、楽しいので」

「話聞いてなかったのか？」

「いえ聞いてましたよ。でも断ります、ごめんなさい」

「おい理屈が通つてないだろ。ふざけてんのか？」

「ふざけてませんよ。楽しいから断りますと言っただけです」

何度言われようとも鹿島はこの調教とやらを止めないらしい。一度動いたら満足する限りは二度と止まらない性格を思い出した摩耶は頭を抱え、夜空を見上げる。流星に止めてくれないかと半身諦め気

味で溜息を吐いた。

「なるほど……しゃーねえなー……」

摩耶の右眼が紅く炎の様に燃え出した。

腕の艤装が変装。外装は赤黒くなり、内部は煌めいた紅い光で輝いた。右腕だけ肌が白くなり、右眼の上にある黒い角が大きく成長した。

「――全力で抑えるしかねえな」

「やれるものならどうぞ……」ヒツレ『緋』さん

『――野』

『阿賀野！』

『阿賀野!!!』

「阿賀野!!」

「は、はい!!」

誰かに呼ばれ、返事する阿賀野。目を覚ませばそこには見知らぬ人物が。阿賀野は惚けた表情で周りを見渡す。いつもの執務室だ、何も変わりない。

「あ、貴方は……」

わざわざ名前は聞かなくても分かっていた。

だが有り得ない光景に阿賀野は疑問に思わざるを得なかった。その人物はとても懐かしく、阿賀野が大好きな人だ。

「おいおいとぼけないでくれよ、忘れたのかい?」

「い、いえ……その……」

「冗談冗談、僕は■蒼■だよ。ほらほらとぼけないで仕事手伝って」

■蒼■提督だ。あの白提督ではない。蒼色は何事もなかったかのように仕事を進めた。阿賀野も場に流れて秘書艦の仕事を続ける。

何故か懐かしい雰囲気だ。本や資料の散らかりよう、執務室独特の匂い、古臭い執務机。太陽の暖かい光が窓から差し込み、舞い上がる埃の粒が微かに見えている。まるでタイムスリップでもしたような状況に阿賀野は困惑するばかりだった。

「あ、あの……」

「何?」

「ここは……■鎮守府ですか?」

心臓の鼓動を響かせながら阿賀野は蒼色に問い掛ける。蒼色は不思議そうな表情で阿賀野の顔を見た。

「そうだけど……まさか本当に忘れちゃったの!!?」

「い、いえ! そういう訳では……ないです」

「んーそうかなー? 念の為に教えておくけど、今日は君の初秘書艦の日、だからね? んじゃ今日から一日頑張ろうか!」

——初秘書艦の日……?」

——まさか、これは……、

——私の記憶……？

「そろそろお昼だし、ご飯にしようか。阿賀野」

「は、はい……」

昼の鐘が鳴り、昼ご飯の時間が来ていた。蒼色と阿賀野は仕事を一旦中止し、二人で食堂へ向かう。

食堂の中に入るとそこは異様な光景が広がっていた。殆どの艦娘や軍関係者が黒く染まっていたのだ。誰なのかは姿を見れば大体は察知出来る。口も喋っているからなのか表情も分からなくはない。ただ話し声などは全く聞こえず、環境音でさえも耳に入る事は無かった。

「これは一体……うわっ」

「ほら阿賀野、妹達と食べようか」

いつの間にか定食のトレーを持っていた阿賀野。急に感じた重さに一瞬定食の味噌汁を零しそうになる。蒼色と向かった先には能代、矢矧、酒匂が既に席に座っていた。顔や姿がはつきりと鮮明に映り、楽しそうに話しながら食べている。

「……」

味は無い。

どの食べ物も味覚は一切感じなかった。喉を越す度に来る不快感が吐き気を催してくる。

しかし阿賀野はそれを堪え、一生懸命に定食を食べ続けた。

「どうしたの？ 阿賀野姉」

「大丈夫？」

「ん、本当だ。阿賀野、大丈夫かい？」

「え？」

話している途中の能代達が気まずそうな表情の阿賀野に声を掛けてきた。思わず阿賀野は素の驚きで返事する。

「い、いや大丈夫よ。問題無いわ」

「そう？ でも心配だわ、提督！」

「本当に大丈夫かい阿賀野？ 無理せず何でも言っただよ？」

「そうよ阿賀野姉、無理しないで」

「阿賀野お姉ちゃん……大丈夫？」

何故か不思議な気持ちだ。誰かに心配された事なんて久しぶりだった。あの時まで自分はそんな余裕なんて全く無かった。悪夢の様な時代が続き過ぎて何て返せばいいのか分からない。

そう考えている内に――、

「あれ……？」

頬から何か液体の様な物が伝っているのが分かった。手に触れればとても冷たい。その時自分は涙を流している事に気付いた。

「えー!? ちょっと何で、提督!!」

「え!? 俺のせい!? あーっとどうしよう……!」

「提督……」

「それは無いよ……」

「俺のせいなの!!?」

蒼色は慌てて阿賀野に駆け寄る。涙を流していた阿賀野はいくら拭いても流れ出る涙を止めれなかった。

――あれ、おかしいな。

――どうしても涙が止まらない。

――嬉しくて、嬉しくて、涙が止まらない

「提督、責任取ってちゃんと話してね」

「顔を合わせて話すのよー」

「頑張つてねー提督!」

「うっせーな! 分かってるよ!!」

蒼色に姫様抱つこで抱えられ、分からない場所に連れていかれる阿賀野。依然として阿賀野は止まらない涙を拭っていた。溢れ出る感情が喋る事を邪魔しに来ている。

「大丈夫かい？ 阿賀野」

「は、はい……大丈夫です……降ろしてくれませんか？」
「う、うん……」

ゆつくり降ろしてもらい、涙はようやく止まった。蒼色は阿賀野を心配して気に掛けている。終始無言のまま、二人は廊下を歩き続けた。

窓から差し込む太陽の光が蒼色を照らす。建物の影に染まる阿賀野は恐る恐る蒼色に声を掛けた。

「提督……相談しても、いいですか？」

「何だい？」

蒼色は優しい声で返答をする。その優しさからか阿賀野は震えた声で本心を口にした。

「実は……私は自信が持てないんです……」

「自信が、持てない……？」

「はい、自信が無いんです……私自身が強くなったとしても、上手く皆と助け合えるかどうか……皆の手を引っ張ってしまったり、失敗するかもしれないと思うと……自信が無くて」

今起きているこの光景がどうなっているかは分からない。自分自身の記憶の再生か、それとも一回限りの小さな夢か、それとも走馬灯の一つか。考えても分からない。

ただ今ここで蒼色に会えたのは奇跡だ。過去や現在、未来がどうであれ、今の自分がいるのなら。

私は道理を超えて話したい。

「そうか……」

蒼色は上を見て考え込む。不思議と疑われはしなかった。何十秒か考えた後、蒼色は答える。

「それは僕にも分からないな」

「えっ……」

「ごめんね。自信っていうのは結局その人本人にしか分からない事だからさ、僕が一方的に決めつけるのは良くないかなって思ったんだ」
頭を掻いて笑い誤魔化す蒼色。

唯一の頼れる人でもこの相談は難しいのだろうか。

「自信が無い、か……懐かしいね、僕にも考える時があつたな」

「提督にも、ですか？」

「うん、あつたよ。周りがとても優秀な人達ばかりで、僕は凡人でしかなくて、周りは上手くいっているのに、僕だけ失敗ばかり。自信が全く無くなつたんだ」

蒼色も経験した事があるらしい。自信を失い、周りを恐れる日々があつたとか。阿賀野からすれば蒼色にそんな経験があつたなど微塵も感じなかった。

「所謂自尊心が低い、つて事だね。泣く時もあつたし、自暴自棄になりそうな時もあった。本当は今だつてそんなに相談に答えられる自信は無いよ？ あ、失望させちゃつたかな？」

「い、いえ！ そんな事は！」

「あははごめんね、ありがとう。まあこんな感じだよ。何も最初から自信に満ち溢れた人なんてごく少数なんだ。誰しも怖いんだよ、自分を信じるのは」

——誰もが怖い……自信がある人は少ない……。

「あの人の期待に応えなきや、あの人の為に役に立たなきや、あの人の好印象を持つてもらわなきやつて誰かの為に頑張るから自信が徐々に身につくんだと思う。でも結局人に依存してるから正しくはないんだけどね」

——人に依存してる、か……私は依存してばっかだったな……。いつも誰かの気分を伺ってばかりだった。良い印象を保ち続ける為に酷い事もした。

「逆に失敗すれば当然自信は無くなる。怒られたり、縁を切られたり、そういう確執がトラウマになってまた失敗する事を恐れるからね。でも僕は思うんだ、自分の人生に単純な事で怒つたり、縁を切るような人は必要なのかなつて」

——…っ！

「んー何て言えばいいかなあ……つまりはーとりあえず自分を卑下しちやダメだよって事」

「卑下、ですか？」

「そう。自信が無いってのは自分を貶しているのかなって思う。自分で自分を傷つけて厳しくさせて縛り付けるんだよね、だから余計に自信が無くなっちゃう」

蒼色は少し屈んで阿賀野と視線を合わせる。

肩を掴んで堂々と話した。

「自分の味方は自分だよ。自分を信じてこそ切り開ける何かがある。最初は孤独かもしれないけど……いつしか味方になってくれる人は必ずいるし、これから現れる。あ、勿論僕は阿賀野の味方だよ？ でも……」

「——自分が自分である事を見失っちゃ駄目だからね」

自分が自分である事を見失うな。

いつの間にか忘れていた。

過ぎた時が残酷過ぎて記憶に残っていなかった。

かつての自分を見失っていた。

周りの突然な豹変ぶりに恐れをなし、周りを、自分を、ずっと誤魔化し続けていた。

誤魔化し続けた所為で自分を見失った。自分がどんな性格か、どん

な顔で笑い、泣き、喜びの表情をしていたか、どんな事をやっていたのか。

全て失っていた。

失った代わりに偽りの自分が出来上がっていた。

自身の暴虐を正当化し、誰もを誤魔化し続けた、非力で脆弱な自分。

だがもうそんな自分とはもうおしまいだ。

——……ここは……。

目を覚ませばそこは白い空間。先程の執務室や食堂、廊下が張りぼてと化し、何も無い空間が広がっていた。目の前には自分と同じ姿をした阿賀野が顔を隠したまま問い掛けてくる。

『私はクズだ』

——……違う。

『私は何も出来ない鉄屑だ』

——……違う。

『だから恨みに誰かの手で馬鹿にされても仕方ない』

——仕方なくなんかない。

『それが自分がやってきた事だから』

——だとしても……違う。

『私はとても愚かだ』

——愚かなんかじゃない。

『惨めな艦娘だ』

——惨めなんかじゃない。

『何で分からないの?』

——貴方とは違うからよ。

『何が違うの? だって貴方は仲間を騙し続けて、嫌々でも仲間を虐げて、私は悪くないって何度も正当化したじゃん。私と同じクズだよ? それでも違うって言える?』

——……言えるわ。

『何で?』

——もう……自分を偽るのはやめたから。

『何で、何ですよ！ 馬鹿正直に言ったって誰も許してくれないわよ！ きっと同じ事するに決まってる！ 恨まれてもおかしくない事したんだから絶対にそうよ!! 何で分からないの!!』

——……。

『開き直るつもり!? ふざけないで!! そんな事許されないわ! これから自分がどうなっていくのか知らないからそんな事が言えるのよ!!』

——……そうか……。

『これからの人生、めちゃくちやにされたっていいって言うの!!? この先まともに生活出来る保証なんてないのに、姉妹諸共惨めな思いをするのが目に見えてるわ!』

——貴方は……。

『話を聞いてよ!! 貴方は——』

もう一人の自分を前に歩み寄る阿賀野。喝声を遮り、暴れるもう一人の自分を深く抱き締めた。

『ありがとう……今まで私を、守ってくれて……』

『ツ……!!』

もう一人の自分が初めて動揺の声を漏らす。今までの言葉を聞いて阿賀野は気付いた。もう一人の自分はこの時まで阿賀野を守ってくれていた。本来の阿賀野を守る為に閉じ込めていたのだ。

『けどもう大丈夫。私は頑張るよ、方法は分かっているの』

『……それが……例えば途方もない、険しく果てしない道でも……?』

『うん……大丈夫。乗り越えてみせるわ』

『途中で……諦めるかもしれないの?』

『諦めないわ。また取り戻したい気持ちがある限り、想いは止まらないもの』

本来の自分を取り戻した阿賀野は自信満々に言い返す。もう一人の自分は徐々に消えかかっていた。阿賀野が答える度にもう一人の自分にヒビが入っていく。

『妹達を守る自信はある?』

「当然よ。今度こそは必ず、ね」

『……そんな自信、どこから出るのかしら……』

「ふふっ……これが元の私よ。もう弱音は吐かないわ。私は私のままで、この戦に塗れた世界を生きていく。覚悟は出来たわ」

もう一人の自分は姿が黒くなり、壁のようにヒビが貫通する。そして――、

『……そう。とても自信満々だったのね……』――』

『――……羨ましいわ』

泡のように上へと幽かに消えていった。

「さて……戻らないと……!」

白い空間が黒い空間へと変わっていく。

阿賀野をはひたすらに走った。

数々の記憶を思い出しながら阿賀野は前を向いて駆け走る。遠く彼方にある一筋の光を頼りに、決して後ろは振り向かない。

これから先どんな事が起こるだろうか。

一々予想して不安がつても何も始まらない。

もう一人の自分を殺してまで獲た本来の自分を曝け出すんだ。
酒匂を、矢矧を、ノシロを救う為に。

姉妹の為に。

姉妹という存在が如何に強いものなのか思い知らせるんだ。

そして仲間に謝る為にも。

今までの過ちを許してもらえるように努力するんだ。

だから今は私達を馬鹿にした鹿島を倒す。

狂っていいようが、最強だろうが、知った事じゃない。

私は――、

――前を向き続けるんだ。

110. 恐れ舞え、あの輝く鏢鉄の狂涛を

「覚悟しろ」

摩耶と鹿島が間合いを取る為に一時的に矢矧達の元を離れた。

緋色の残影と銀色の残影が交差し、円を描く様に立ち位置を決める。

互いの距離は肉眼でよく見える程度。

「摩耶対鹿島か……久しぶりだな」

「最強対最強と言うべきか？」

「馬鹿言え、それじゃ矛盾してるだろ。まあお前らからしたら最強に見える摩耶対本当の最強鹿島、だな……よし」

提督は大鳳に預けた無線機を取り出す。

摩耶対鹿島の戦闘が始まる為に艦娘達に呼び掛けた。

『戦闘は一時中断だあ、摩耶と鹿島が戦うから周りは離れるようにー。さもないと巻き込みで本当に死ぬぞー。倒れてる奴は誰か抱えてけー、行方不明とか洒落にならないからなー』

提督の指示により、艦娘達はその場を離れていく。天龍は川内が拾い、島風は不知火が拾い、岸壁に倒れた飛龍と蒼龍は岸边にいた朝潮達によって救助された。プリンツは急いで帰還するよいに案内している。

「一体何が始まるんだ」

「さて、それはこれから拝見しましょうかあ、一つだけ忠告だ……」

利根と那智は汗をかき、鹿島という艦娘が如何なる者か見定めた。灰色と時雨、大鳳は唾を飲んでこれから始まる戦闘に怯えかけている。それを見た提督は楽しそうに忠告を唱えた。

「――暴風注意♪」

――鎮守府近海

「貴方と戦うのは少々面倒なのですが」

「そりゃいい。それだけあたしが強いって事だろ？」

「んー実際そうなのがイライラしますねー」

これが嵐の前の静けさか。ざわついていた海面が途端に静かになり、荒れていた波が穏やかになった。ノシロは遠く離れた場所から見ているが極度のプレッシャーが辺り一帯を包んでいるのが目に見えて分かった。そのプレッシャーがノシロの白い肌を震わせるほど、影響は深く広がっている。

「沈められないようにしないとな」

「全くもってその通りです……ですが今回は早めに終わらせたいので、手加減はあまりしません。ご注意くださいッッ!!」

唐突もなく摩耶と鹿島は急発進。

お互いの背後から追い掛ける様に大きな水柱が立ち上る。

そして緋色の光と銀色の光が暗い海で衝突。

お互いの右拳がぶつかり合い、衝撃で海面がクレーターのように変形した。

持ち上げられた海水が風圧で暴風雨の様に降っていく。

その暴風雨の中で二人は攻撃を止めない。

殴打と砲撃を同時に重ねた攻撃が続いていく。

砲煙纏う猛攻が他の艦娘達を寄せ付けない。

遠く離れた鎮守府の岸辺までその風圧は届いた。

「激し過ぎて……何も見えない!!」

「うわっ!!」

隙を見た鹿島が摩耶の腹へ殴打、そして砲撃。

吹き飛ばされた摩耶は怯みも無く着水。

鹿島の撃たれた砲弾を回避し、また急発進。

閃光の如き砲弾の嵐を紅い残像が駆け抜けた。

「そんなに跳んだら格好の的ですよー」

「普通だったらなッ!!」

大跳躍した摩耶に目掛けて砲撃を繰り返す鹿島。

摩耶は砲撃で砲弾同士を衝突させ、着弾前に処理した。

砲口を背後に向けて砲撃し、空中での移動を熟す。

そして鹿島に突撃。

落下速度と合わせた摩耶の突き蹴りは鹿島の防御を崩した。

衝撃波が出来るほどの速度で鹿島は蹴り飛ばされる。

水平線を遮るように水柱が連鎖して立ち上った。のぼ

鹿島は海面に足を着き、綺麗に着水する。

摩耶は躊躇いもなく鹿島に接近。

間合いを確保し、頭に目掛けて連続砲撃。

砲弾を殴って躲した鹿島は高速で摩耶の元へ征く。

わざと鹿島は摩耶の目の前まで接近。

咄嗟の反応で摩耶は零距离砲撃を行う。

周辺が爆煙に包まれ、姿が確認出来なくなった。

「悪い癖ですね〜」

「ッ!!」

爆煙の中から白い手が現れ、摩耶の顔面を掴む。

そして摩耶の腹に三連続の零距离砲撃。

直後海面に叩きつけ、跳ね上がった摩耶の身体を蹴り飛ばした。

「まだ治って無かったんですね、一気に距離を詰められたら焦ってしま

うその癖。治した方がいいと忠告したはずですが」

「そつちこそ……防御崩されるのに怯えてるのはどうかと思うぜ、鹿

島……! 何せお前は装甲がかなり低いからな……!」

よく見れば鹿島の腕が微かに震えている。摩耶の突き蹴りは鹿島の腕の防御を崩し、腹に命中していた。崩れた際の防御した腕にはまだ痛みと衝撃が残っている。

「そうですね、攻撃は最大の防御という訳です。まあとはいえ摩耶さんも対空が主ですし、それにおいては右に出る者はいません。またそもそもこういう一対一では摩耶さんが不得意なので仕方ありませんが」

「不得意だろうと対策しなきゃ意味無いって言ったのはお前だろ？」

案外人の話は聞いている方だぜ？」

「それはそれは……成長していて喜ばしい限りです。ですが……—」

鹿島は急発進急加速。

また摩耶の目の前に近付き、砲撃させた。

爆煙の中を掻き分け、鹿島は摩耶の片足を掬う。

そして片足を掴み、砲丸投げの様に回転する。

「ツ……させるかツ!!」

回転する最中に摩耶は鹿島の頭に砲撃。怯んだ鹿島は手を離し、摩耶は拘束を逃れた。

「癖は治さないといけませんよね」

「チツ……!!」

「最早艦娘の戦い方とはかけ離れているな。あれが最強と呼ばれる所以か」

「アイツら、いや鹿島は相手を倒す、又は沈める為に使う従来の艦隊戦闘技術の基本は使っていない。確実に殺す為の対人戦闘技術を駆使している」

「なるほど……その従来の艦隊戦闘技術さえも応用し、対人戦闘技術と組み合わせている訳か」

長門が冷静に鹿島の戦闘スタイルを分析する。

艦娘という存在は人間よりも遥かに超えた超人的存在で、艦装を身に纏えば跳躍で三階建てのビルを越える事すら出来てしまう。コンクリートの壁も一回の殴打で軽々と破壊可能、走る際の瞬間速度は余裕で七十キロメートルを越える、正に漫画に出てくるパワーキャラに等しいモノだ。

そんな存在が対人戦闘技術を駆使するとなれば戦況は一変。深海棲艦どころか人間相手にでさえその威力を発揮する。最近では深海棲艦にも人型が増えてきた為に対人戦闘技術も視野に入れていても少なくはない。

「そういう事だ。実際そっちの方が確実に相手を倒せる上に戦闘効率が凄まじい。この戦闘技術で戦果を挙げまくった奴もいるからな」
「編成した艦隊で戦うのが馬鹿らしく思えるな」

「いやそうでもないぞ？ 艦隊での戦闘はそれぞれ役割が別れている為に敵の攻撃に対処しやすい、まあオールバランスと言うべきか。それに弾薬や燃料の節約、各々標的にされにくい利点がある……って当たり前前の事を言ってるだけなのに何で説明してんだ俺は」

一人、また単騎突撃の場合はその逆のデメリットが存在する。確かに相手を確実に倒せる点や戦闘効率、戦果を挙げやすい点では羨ましく思えるが立ち回りが良くなければ話は別だ。敵空母や敵潜水艦などの攻撃対処や急激な弾薬と燃料の消耗、一人故に的にされやすいというデメリットを背負ってでの戦闘になる。上手く立ち回らなければ沈められる可能性すらあるのだ。

「って言うか単騎突撃をする奴は大体が異常な奴だけだな。あの鹿島とか、北上とか、ガングートとか。戦闘狂な奴らだよ……ん？」

「どうした提督……む、あれは……」
「……目覚めたかな」

提督と長門が見た先は阿賀野を抱える矢矧。逃げ遅れたのかまだ帰還していない。しかし阿賀野の様子が変に見える。それを見て提督はある事を察知し、阿賀野達を見届ける事にした。

「阿賀野姉!! 大丈夫!」
「……うん、大丈夫よ」

ようやく阿賀野が意識を取り戻す。目の前には涙を流していた矢矧がいた。今がどんな状況か、辺りを見渡し確認する。そして状況を掴んだ阿賀野は矢矧の手を借りずに立ち上がった。

「阿賀野……姉……？」
「矢矧……もうやめよう。こんなのは間違ってるわ」
「それは、どういう……」
「実は私ね、騙してたの。■■達とは違う艦娘、仲間なんかじゃなかった」

阿賀野は矢矧の方へ振り向き、自身の罪を告白した。今まで自分が仲間になる為に演技で騙し続けていた事、矢矧達を止める事が出来なかった事。思う事全てを矢矧に話した。

「矢矧……本当は悩んでるんでしょ？ どちら側につくべきか」

「っ……!!」

「確かに私達のした事は誰にも許されないわ。ノシロだって怒ってるし、酒匂だって忘れてるだろうけど心の奥では憎んでるはずなもの」「じゃ、じゃあわわわ私は、どうすればっ……!」

矢矧は洗脳から解放された影響か、かなり弱気になっていた。自身があしてきた過ちを思い出してどうすればいいのか分からなかったのだろう。自己保身の為に性格が弱気になってしまった。そんな矢矧に阿賀野は目線を合わせ、肩を掴んで堂々と話す。

「謝りましょう、そして行動で示すの。鈴谷さんと加賀さんが身を呈してまで自身の過ちを許してもらえる為に行動したように、私達もそれをやるしかないわ」

「ま、まさか……」

「そう私達を馬鹿にした鹿島を倒すのよ!!　そして許されるまで何度でも行動するわ、この先もずっとね。矢矧はどう?」

矢矧の前にいるのは自信に満ち溢れた姉の姿。前の自信を喪失し、暗く落ち込んでいた阿賀野とは大違いだ。優しそうな表情で矢矧に問い掛ける阿賀野。矢矧はこの後の事を考えて結論を出した。

「……行く」

「ありがとう……矢矧。んじゃノシロの所へ行こう」

「うん……」

阿賀野は矢矧に手を差し伸べる。矢矧はその手を取り、また立ち上がった。そのまま手を繋ぎながら遠く離れたノシロの所まで航行する。

ノシロは摩耶と鹿島の戦闘に夢中になっていた。遠く離れたこの場所でも衝撃や風圧が凄まじく伝わってくる。何故鹿島にやられたのか、その理由が分かった気がした。

「ドウリデ私ガヤラレタ訳ヨネ……ン?」

気付けば阿賀野と矢矧がこちらに近付いてきていた。ノシロは臆装を構え、阿賀野達を警戒する。

「……何シニ来タノヨ。マタ痛メツケラレタイノ?」

「やめてノシロ……今はそれ所じゃないわ」

阿賀野が手を広げ、戦う事を拒否した。一向にノシロは警戒態勢を解かない。そこに後ろから矢矧が現れ、ノシロの目の前まで近付いた。そして――、

「ノシロ……ごめんなさい……私の所為でこんな事になってしまったわ」

矢矧はノシロを見捨てた事について深く頭を下げた。精一杯の謝罪だった。声は震え、身体も小刻みに震えている。許されないと分かかっていても矢矧は面を向いて謝りたかった。

「……謝ッテモ無駄ヨ、許スワケナイジヤナイ」

「なら……何をすれば私達は許されると思う？」

「……エ？」

そんな事を聞かれたのは初めてだったノシロ。予想外の言葉に素で戸惑ってしまった。悩むかと思いきやノシロは簡単に答えを出す。

「……私二殺サレテクレレバ」

「その後は自分も死ぬつもり？」

「当然ヨ……ッ!？」

阿賀野は突然ノシロに抱擁する。姉の抱擁に戸惑うノシロは脱出しようとして暴れ出した。しかし阿賀野は抱擁をやめず、ひたすらにノシロを抱き締め続ける。

「お願い、自分を傷つけるのはもうやめて。二度と……失いたくないの」

「離セ……! 私ハ……!」

「いいや離さないわ! よく考えてノシロ、私達が死ぬ事で他の皆が許してくれる保証はどこにあるの?」

「ッ!!」

また動揺するノシロ。薄々は自身でも気付いていたのだろう。こんなくだらない事など意味の無い行動だと。

「死ねば許されるなんて、そんなのただの自己満足よ! だからノシロ、貴方も――」「ウルサイッ!!」

やっとノシロは阿賀野の抱擁から抜け出した。暴れた勢いで尻餅をつき、手のひらで顔を隠す。以前のような恨みに苛まれたノシロの

姿は無くなっていた。

「ンジャドウスレバイイノヨ……！ 私ガヤツタ事ハ酷イシ、今ノ私ハ深海棲艦ナノヨ……？ 許サレル訳ナイジヤナイ……！」

本当は分かっていた。自身の所為で姉妹や皆を苦しませてしまった事、深海棲艦になれば恨まれて当然だという事。いくら懺悔しようとも許してはくれないだろう。いくら悔やんでも悔やみきれない、思いついたくもない、自暴自棄になりたい程のふざけた過去だ。

「……大丈夫よ、貴方一人じゃないわ。私達も同じだし、ずっと一緒だから」

「エ……」

「例えノシロが酷い目に合っても、酷い事を言われても、私達はずつつつとノシロの味方よ」

阿賀野は座り込むノシロに手を差し伸べる。ノシロは涙で濡れたその顔を初めて人の前で見せ、阿賀野を視線に写した。一瞬手を伸ばしかけたが、ノシロはふと我に返って手を収める。

「これから頑張りましょう。生きていく限り……きつと大丈夫だから」

「ソレコソ、ソナナ保証ハ……」

「無いわ。だから私達で作るのよ、その保証を。私達で証明するの」

視線の先には摩耶と戦う鹿島の姿。激しい攻防を繰り返して、辺り一帯の波を荒れさせている。衝撃や風圧は腕で仰がなければならぬほどだ。そして阿賀野は再度ノシロに視線を移し、話し掛ける。

「後でノシロの復讐は何だつて受けるわ。好きに殴るなり蹴るなり暴言を吐くなり、自由にして構わない。でもこれだけは覚えていて……」

「——絶対に自分が自分である事を見失ってはだめよ」
「ッ!!」

阿賀野の言葉を聞いてノシロは目を見開かせる。それはかつての提督が言っていた事を思い出していたからだ。どこか懐かしく、そして悲しい気持ちだ。

いつからだろうか、本来の自分を見失ったのは。

全てが変わってしまった。二度と変える事の出来ない過去を作ってしまった。本当の自分はもう消えてしまっていた。どんな性格か、どんな姿か、どんな艦娘だったか。もうノシロは分からない。

二度とは戻らないのだろう。だがまた作る事は出来るはずだ。

「私達は鹿島を倒しに行くわ。それが一番いい証明の仕方だと思うの。ノシロ……来てくれる、かしら……？」

阿賀野の誘いを受け、ノシロは手を借りずに立ち上がる。再度艦装を展開させ、蒼い稲妻を解き放った。自己修復はある程度完了し、いつでも戦える状態になっている。

「……休戦協定ヨ。今ハアノフザケタ鹿島ヲ倒スノニ協力スルワ」

「ありがとう能代。じゃあやりましたよう、あの鹿島を——」

「——倒しに!!」

111. 信じる心を穿け、戦う乙女よ

艦娘とは何か。

時々そんな事を考えさせられる。

あの二人の戦闘を見てからそればかりだ。

あの異次元の境地まで、自分は辿り着けるのだろうか。

躊躇いのない猛攻。

大海断つ砲撃。

時空歪む殴打。

暗空を切る蹴撃。

暗闇照らす緋色の炎影と銀色の輝光。

空気を揺らし、海はざわめき、大地は震える。

あの姿こそ艦娘の究極的な形なのだろうか。

本当に兵器そのものだ、人間とは思えない。

しかもその兵器には人格が存在する。自ら戦意を操り、物事を自由に選ぶ選択権があるのだ。

だが私は思う。

我々は本当に自由になっていいのか。

ただそれを、長門は考えてばかりだった。

「グッツ!!」

暗闇の中を二つの異色が幾度となく衝突を繰り返す。

衝突しては離れ、そしてまた衝突。

しかし鹿島は隙を見破ったのか、衝突時にカウンターで摩耶を蹴り飛ばした。

摩耶は受け身を取って体勢を整える。

そして即座に急発進。が、目の前には既に鹿島がいた。

悪魔の笑みで鹿島は引いた右腕を振り回す。

摩耶は鹿島の右殴打を紙一重で回避。

そのまま受け流し、背負い投げた。

「あらっ——」

鹿島が不安定な体勢で空中に浮かぶ。

直後、砲撃が全弾命中。太陽の様に大爆発を起こした。

爆煙に包まれる中から腕を交差したまま鹿島が墜ちている。

どうやら腕の防御で大ダメージを回避したらしい。

このまま体勢を整え、着地するかに思えた。

だが——、

「摩耶さんだ!!」

歓声にて気付くその姿。

爆煙の中からもう一人、緋色の焰を纏った摩耶が鹿島の頭上を取っていた。

摩耶は身体を回転させ、鹿島を——、

「墜ちろっツ……!! 鹿島アアア!!!」

「ツ……!!!」

摩耶の渾身の蹴撃が炸裂。

防御を崩された鹿島は海面まで蹴り落とされた。

大きな水柱が立ち、波が津波の様に跳ね上がる。

「素晴らしいですねえー!!」

巨大な水柱に穴が空く。

衝撃波が発生する程の速度で鹿島は急発進した。

海面に着水する摩耶目掛けて突進。

摩耶は砲撃で鹿島を迎撃する。

着水狩りを狙った鹿島は摩耶の砲弾を素手で弾きながら進んでいく。

そして弾いた砲弾を掴み、摩耶に投擲。自身の艤装で砲撃を重ねる。

摩耶は鹿島の砲撃を回避。次の攻撃に移ろうとした途端、突如視界が更に暗くなった。

上を見れば鹿島がいる。

どうやら回避を予測して誘い出されたらしい。

「クッソ——」

鹿島の後ろ回し蹴りが頭に直撃。

摩耶は海面に叩き付けられ、身体が跳ね上がった。しかし鹿島は躊躇わない。

跳ね上がった摩耶にもう一発、蹴撃を食らわせた。

海面にひれ伏せられる摩耶。

鹿島の足で抑えられ、身動きが取れない。

「実に……素晴らしい蹴りです。ですがそこに砲撃をアクセントに加えると……いいかも、しれませんね……！」

摩耶の蹴撃が効いたのか、少し息が荒い。

かといって摩耶も同等のダメージを受けている。

体力が五割切れた所だろうか、まだ戦える状態だ。

鹿島は装甲が弱い故にダメージが入りやすい。しかしそれを補う様にして砲撃やその命中精度、視力、反射神経、対人戦闘技術の威力が他の艦娘と比べて桁違いになっている。

まさに鬼のような力、艦娘という存在を大きく覆すだけある。

だが摩耶も負けてはいない。

鹿島は隙を見破る反面、自身の隙を知らずに見せている事がある。

それは自身より上にいる事だ。

鹿島は自身の頭上より跳んでいる者に対抗する手段が少ない。

現に摩耶が大跳躍した後、鹿島は砲撃しかして来なかった。対人戦闘技術で迎撃すればいいものを、自ら近付く事を拒んでいた様に見える。先程の摩耶が蹴り落としたのも、自身の頭上を全く警戒していなかった。

そこで摩耶は考える。鹿島しか見えていないこの状況下であれば賭けに出るのも悪くない。現在は鹿島に足で押さえられ、立ち上がる事すら出来ないこの状況を打破するにはこの賭けしかないだろう。

「……お前は……隙があるよな……！」

「あら、どんな隙ですか？」

「へっ……お前は自分の上にいる奴と戦うのが……苦手だって事だよ」

上と言って空に指さす摩耶。つまりは自身の頭上にいる敵に対し、

弱みを見せるといふ事だろう。勿論鹿島はそれを熟知しているが、出来るだけ知られて欲しくない事だった。

「バレちゃいましたか……お見事です、摩耶さん。やはり貴方は……もっと強くなるべきですね」

「ふん……あ、悪い鹿島。さっきの間なんだが——」

鹿島を照らす月の光が遮られた。

更に暗くなる中、鹿島は背後を振り向く。

そこには——、

「——聞こえてみたいだわ」

阿賀野と矢矧が右腕を引いて待ち構えていた。

鹿島が振り向くと同時に二人は殴打を重ねる。

鹿島の顔面に直撃するかに思えた。だが鹿島は右腕で二人を薙ぎ払い、砲撃で追い打ちを与える。

鹿島は即座に上を見渡した。そこには——、

「っ……貴方はッ!!!」

月を背景に一つの黒い影が躍り出る。

鹿島の頭上を取ったノシロは真っ直ぐ向かってきていた。

「沈メ!!!」

腕の防御は間に合わず、ノシロの右拳が鹿島の頬に直撃。

海面を跳ねるように鹿島は転がり続ける。

初めて摩耶以外の誰かに殴り飛ばされた。ダメージが重なってきたのか、膝を着く鹿島。更に息が荒くなり、口から少量の血が出ているのが分かった。鹿島は口の血を手袋で拭い、阿賀野や矢矧、ノシロ達を鋭く睨む。

「何故……貴方達が……!」

「私達を馬鹿にした事を……訂正してもらおう為よ、鹿島……!」

「あんな事言われて、黙らない私達じゃない!!」

「悪イケド……私達ノ証明ノ為ニ……利用サセテモラウワ」

三人の違いように鹿島は目を見開かせた。あの時までみにくいア

ヒルの子の様な哀れで、ゴミ同然だったあの三人が、一つの目的の為に協力し合っている。自分に恐れていた様な目が戦う意志を見せる目としてこちらを睨んでいた。

特に変わっているのが阿賀野だ。

自身の罪の深さに苛まれ、自信を無くしていたあの阿賀野が自信満々な姿へと変貌している。まるで偽りの自分の殻を破り、本来の自分を取り戻したかのようだ。恐らく意識を失っている途中で何かあったのだろう。あまり深くは考えない方がいいらしい、またあれも艦娘が強くなる上での成長の眼差しだと考えるべきだ。

「なるほど……何かあったようですね……」

鹿島は埃を払いながらゆつくりと立ち上がった。ダメージが重なっている分、動くのには制限がある。僅かに身体を震わせながらも阿賀野達を再度睨んだ。

「……素晴らしいです。それこそ貴方達が本来いるべき姿……あのよくな脆弱な輩とはおさらばですね」

一瞬、鹿島の表情から笑顔が見えた。成長した阿賀野達を見て嬉しかったのか、その笑顔に全くの戦意は無かった。

「訂正させたいと仰っていましたね……ならば全力で掛かりなさい。私も……」

鹿島が艦装を動かし、阿賀野達の前で身構えた。そして銀色の光を放出させ、炎の様に鹿島を包み込む。

「——全力の五割で!! 貴方達と真っ向勝負をします!!!」

「ッ!!!」

四対一。

摩耶と共に阿賀野、矢矧、ノシロが乱入参戦。戦力は今の鹿島を伺えば申し分ない。倒せる可能性は低いが、追い込める可能性はある。ここが正念場だ、摩耶は阿賀野達に鹿島について色々と教えていく。

「……だ、分かったか?」

「と、とりあえずは……」

「頭だな!!」

「ならよし! 行こうぜ!!」

鹿島が咆哮を上げて突進。

阿賀野達も雄叫びを上げて突進する。

最初にノシロが突撃、鹿島と衝突し合う。

お互い怯み合うも、鹿島が先にノシロを蹴り飛ばして砲撃。

爆煙の中から阿賀野と矢矧が向かってきた。

鹿島を囲うように二人は間合いを詰めていく。

二対一で殴り合いが始まった。

殴っては砲撃、躲しては蹴撃、蹴っては砲撃、躲しては殴打。一糸乱れぬ乱闘が繰り広げられた。

矢矧の殴打を腕で受け止め、阿賀野を砲撃で吹き飛ばす。矢矧を殴り飛ばしては阿賀野の蹴撃を受けていく。

「何故私を倒す事にこだわるのですか？」

「私達は酷い事をしてしまった!! 今更許されるとは思っていない!! でも!! うわッ!!」

「それでも謝りたい!! 全力で皆に謝りたいから!! 許されるまで謝りたいから!! またあの日を取り戻したいから!! 私達は足掻き続けるのよ!!」

悪い事をすれば謝る、ごく自然の事だ。だが許してはもらえないと勝手に決めつけ、謝る事を拒んでしまう人達がいる。それでは一生その仲は悪いままだ。

許されない事をしたとしても、生きている自分がいるのなら。憎まれてても私達は謝る事を止めない。

この思いを全力でぶつけるんだ。

「ならもつと全力で来なさい!!」

鹿島は両手の掌底突きで阿賀野と矢矧を吹き飛ばす。

そして背後に回るノシロを標的に連続砲撃を繰り返した。

砲弾の嵐を回避し続け、何とか生き延びようとするノシロ。しかし砲弾が複数当たり、怯み声を出して爆煙の中に隠れる。

「こっちだッ!!」

「グアッ!!」

立ち尽くす鹿島に摩耶が追撃。

死角からの突き蹴りに鹿島は無意識で防ぐ。
が、受けた衝撃により蹴り飛ばされた鹿島。

摩耶は急発進し、鹿島に接近する。

受身を取った鹿島は迎撃体勢に入った。が、突然下からのし上がる様なダメージが鹿島の身体を響かせる。

ノシロの魚雷だ、鹿島の周囲に水柱が立っている。

気付けば矢矧、摩耶、ノシロの魚雷に囲まれていた。

正に四面楚歌、対抗手段が多過ぎる故に最低でも最小ダメージを負わなければならない。

しかし待て、阿賀野はどこへ――、

「行ツケエエエエエ!!! 阿賀野姉エエエエ!!!」

ノシロの叫びが聞こえた。声の方向を振り向けば、ノシロが腕を上げて立ち崩れている。

腕を上げた、つまりは――、

「まさかッ!!!」

顔を上に向ければ空には阿賀野が。

鹿島は仕方なくノシロの魚雷を最低限のダメージで受け止め、艀装の砲口を全て阿賀野に向ける。

そして連続砲撃、立つ水柱を掻き消して阿賀野に襲い掛かる。

まずい、戦い過ぎて注意力が散漫している。このままでは阿賀野の攻撃をまともに――、

「押さえろ矢矧!!!」

「分かった!!!」

「ッ!? 離しなさい!!!」

摩耶と矢矧に拘束され、身動きが出来なくなる鹿島。しかしとてつもない力で鹿島は拘束を振り解く。

そして鹿島は大跳躍、阿賀野の元へ向かった。

無意識に跳んでしまった、対抗策はこれしかない。だが数コンマ間に合わない、このままでは――、

「私達はアアア変わるんだアアアアア!!!」

鹿島の攻撃は間に合わず、阿賀野の全力殴打が直撃。

頬辺りに食い込み、鹿島は海面まで隕石の様に殴り飛ばされた。提督と艦娘達のいる岸壁まで飛ばされ、今日一番高い水柱が立ち上がった。

「ハア……ハア……ハア……」

海が次第に落ち着き、波が静かになる。摩耶と阿賀野達は鹿島の安否を確認しに接近を試みた。岸辺にいる提督や艦娘達も気になって思わず覗き込む。

「あく痛かったですね〜」

鹿島の声が聞こえた。見れば殴り飛ばされた岸壁の近くに鹿島が立っている。正装は一部焦げ、艦装は悲鳴を上げている。右腕は僅かながらに震え、左手でその震えを抑えていた。

「とても楽しかったです。阿賀野さん、矢矧さん、ノシロさん。流星に心が躍りました」

鹿島は笑顔で阿賀野達に話し掛ける。そこに悪意は無かった。ただ単純に阿賀野達を褒めている。

「先程の貴方達を侮辱した件……訂正します。貴方達は鉄屑ではありませんでしたね、今はもう……それなりにいい艦娘です」

「それなりにいいって……どういう事よ……」

「ふふっ、まだスタートラインですよって事です。立派な艦娘になれるのは他の皆さんに許してもらえたら、だと私は思います」

穏やかに微笑み、鹿島は差別された側の艦娘達を眺める。阿賀野達の本心は少なからず聞こえていたようだ。差別された側の艦娘達は阿賀野達に対し疑心暗鬼になっている。相手にされない事よりも疑ってくれた方がこれからの阿賀野達にとって僥倖の眼差しだろう。「確かに貴方達の話は当分の間、許される事は無いでしょう。気が遠くなるほどの時間です……ですが本心から変わりたいという気持ちを持っているのであれば心配する必要はありませんね」

人は何かの為に戦う。

艦娘も何かの為に戦う。

その何かとは様々だ、何を考えるも自由だろう。阿賀野達は馬鹿にした鹿島の言葉を訂正する為に、そして自分は変わりたいんだと、変わったんだという事を証明したかった。証明は少なからずとも出来ている、この先は阿賀野達が頑張らなければならぬ。

「頑張ってください。阿賀野さん、矢矧さん、ノシロさん。生きていた方がいずれば良い事がありますよ、死ぬ事ばかり考えては幸せが逃げてしまいます。可愛い酒匂さんを元氣よく迎える為にも、これを第一歩としてこの先も生き続けてください」

もしいつもの平和な日常を切実に願うのなら、頑張って生きてほしい。暗い事ばかり考えるよりも楽しい事を考えた方が心はずっと軽くなる。

前向きに生きてほしい、鹿島はそう願っている。

「私は応援しています……では」

最後に鹿島は深く頭を下げ、上げた後にその場を去った。岸壁近くに阿賀野達は取り残され、緊張が解けたのか一気に腰を崩す。

「終わったようだな……ん、提督はどこへ……？」

「提督でしたら先に帰りましたよ。今は執務室にこもっています」

「ああ、瞑想とやらの時間か……」

112. いつか訪れるその日まで

鹿島との戦闘から二日が経過。皆は何事も無かったかのよう毎日を過ごしている。一切出撃は無いものの、訓練はとても盛んだ。摩耶とプリンツの指導の元で艦娘達は扱かれている。

夏真っ盛りの暑い日だ。

太陽の光が地面を焦がし、青い海を輝かせている。

「いや〜本当に楽しかったですね〜、阿賀野さんに上を取られた時なんか滾っちゃいました」

エアコンの効いた執務室にて鹿島はあの時の事を懐かしむ。提督と今日の秘書艦である朝潮はせつせと仕事に励んでいる。灰色と時雨も同様、必死に書類を書き殴っていた。

「お前焦ってたって摩耶から聞いてんだけど」

「演技ですよ、演技」

「随分と凝った演技だなあおい」

途中の瞑想的な何かにより、提督は阿賀野達の戦姿を見ていない。後で摩耶に教えてもらった限りでは鹿島に一発食らわせたらしい。よくあの鹿島に特殊艦隊以外の艦娘が攻撃出来たものだ。前任時代から優遇され、生き残ってるだけある。

「とはいえ阿賀野さん達は変わったんですし、大目に見てくださいいな」

「まあお前が来るのは予想内だ、事前に伝えていたしな」

「え!?! マジすか!?!」

灰色がペンを止めて驚きの声を上げる。てっきり鹿島の乱入は提督でも予想していなかった事だと思っていた。鹿島は灰色の顔を伺いながら笑顔で答える。

「はい♪ もし楽しそうなら参加しちゃうかもって言ってましたので。結局のところは提督に利用されたのでそこは癪に触るのですがどうしてくれるのですか?」

「いや俺の所為じゃなくね? 本能に逆らえなかったお前自身を恨め」

そうやって提督は書き終えた書類を提出ケースの中へ入れる。次

に朝潮と時雨が書いた書類を添削していた。つい阿賀野達の事が気になった灰色は鹿島に問い掛ける。

「そ、それで阿賀野さん達はどうしてるんですか？」

「今は不知火さんが警備体制の元、被害者達に頭を下げていますよ。まあ被害者達も複雑な心境で色々手一杯のようですが」

鹿島との戦闘後、入渠して身体を癒した阿賀野達は差別された艦娘達を目撃次第に謝っているらしい。今まで自身がやってきた事、皆を騙していた事など本心を打ち明かしているとか。

また深海棲艦もとい軽巡棲鬼・壊であるノシロは自ら地下営倉に収容されていた。しかし阿賀野達の希望により、ノシロは解放。阿賀野達の部屋に引き取られ、拘束器具装着の条件下で生活する事となった。

「悪い事したらちやんと謝る。阿賀野さん達も頑張っているんですね」

「はい、以前のゴミとは全く違いますね！」

「ゴミとか平然と凄い事言うなあ〜この人」

「聞こえてますよ〜」

「ヒツ」

思わず本音を口に漏らした灰色は鹿島に怯える。鹿島は鏢と呼ばれる表向きでは最強の艦娘だ。提督でさえも警戒する程の得体の知れなさは灰色でもちゃんと伝わっている。

「そうだ灰君、後でアイツら呼び出してもらえるか？ まだ話を聞いていなくてな」

「構いませんが今ですか？」

「あーいや、午後の十五時ぐらいでいい。その時俺は執務室にいと伝えておけ」

「分かりました、では私達はこれから訓練の様子を見に行きますね」

灰色と時雨はちょうどよく一つの仕事を終え、前から頼まれていた訓練の様子を見に行く事にした。書いた書類を提督に提出し、執務室を出ていく。

「んで鹿島、大本営からの視察は効果あったのか？」

「あ、そこ気になります？ 実はですね……思いの外めちやくちや危ない事をしてる人ばかりいまして〜提督の鎮守府、駿河鎮守府、呉鎮守府、横須賀鎮守府、舞鶴鎮守府、佐世保鎮守府、南方のシヨートランド泊地、リング泊地を除いて大体の鎮守府は地方も含め、禁止事項を破っていました♪」

聞けば薬の所持や使用などの軽い罪から艦娘を無惨に扱うなどの重い罪まで様々だったという。大本営は一斉摘発の準備を進める為、静かに調査を行っているらしい。準備が出来次第は大本営自ら動き、直々に矯正されるだろうとの事だ。

「あっそう、お前はいつまでここに？」

「約束の期間であれば六ヶ月の勤務なのでもっと先までいますね〜」

「チツ……まだいるのかよ」

鹿島の続投に小声で愚痴を吐く提督。余程鹿島が嫌いなのか、少々イライラしている。

「司令官！ 資材確認しました！ 資料を作っておきます！」

「把握したぞ朝潮、後で資料は俺の机に置いておけ」

「了解しました！」

今日の秘書艦は朝潮で、一時は務まるのかと不安になっていたが、何かと執務はこなしている。予想以上に読み書きは早く、綺麗に資料がまとめられていた。提督が渡した書類を一生懸命に書いている。提督とは仕事面で気が合いそうだ。

「では私は失礼します。これから調教しに行くので」

「精々怖がられないようにな〜」

「本当に……ごめんなさい!!」

軽巡察の廊下にて二人の艦娘が頭を下げている。下げた相手は五十鈴と天龍、どちらとも酷い事をしてしまった。阿賀野と矢矧はその記憶が鮮明に残っている。

「うーん……」

「どうすっかなー……」

頭を下げる二人に五十鈴と天龍は悩み出す。正直顔も見たくなかったが、それは前までの話だ。あの戦闘を見て五十鈴と天龍は考えを改めていた。よく考えれば阿賀野や矢矧、ノシロだって元はと言えば前任の被害者だ。しかしそれは極論であり、本来は加害者にあたる。暴言や暴行を受けた五十鈴と天龍としてはどうするべきか悩んでいた。

「……はあ……残念だけど、まだ許す事は出来ないわ……でも、これから誠意を見せてちょうだい？ やり方次第じゃ許しちゃうかもね」

「正直なところだが……俺は全く見てないんだ。五十鈴とかから後で聞いたけどよ、俺も許しはしない。けど……そうだな……五十鈴と同じ意見だ。本当に変わりたいって気持ちがあるなら、鈴谷や加賀みたいにその気持ち見せろよな！ 頼むぜ？」

五十鈴と天龍が出した結論は鈴谷と加賀と同じような行動で示す事だった。本当に変わりたい、謝りたい気持ちを行動で示して欲しい。それをまだ阿賀野達は見せるにはまだ足りていないようだ。

「う、うん！ 頑張るわ！」

「ありがとう五十鈴！ 天龍！」

五十鈴と天龍は満足したのか、訓練の場所へ向かっていった。阿賀野達はその姿を見届け、次の場所へ向かう。

「後は暁達の皆ね、行きましよう！」

次に二人が向かうは駆逐艦寮。当時は第六駆逐隊とあまり接点はなく、出撃以外ではほとんど話す事も無かった。暴言は何回かあるが、暴行は一度もした事が無い。前任の優遇制度により、駆逐艦寮との連絡通路は隔てられていた為に会う事も無かった。とはいえ酷い事をしてしまった事には変わりはない、五十鈴と天龍同様に謝らなければならぬ。

「あ、阿賀野姉……」

「ん、なに？」

駆逐艦寮の連絡通路を通る前、矢矧が阿賀野に声を掛ける。すっかり矢矧は元の性格に戻りかけ、阿賀野姉をより慕うようになった。少

しばらく弱気になってしまった所があるが。

「ごめんなさい……私も阿賀野姉に謝らなきゃいけない。正気に戻ったのに、色々と勝手に押し付けてしまった……」

「そ、そんな……矢矧は謝らなくていいのよ……！ 私の責任なのに……」

「どうしても謝らなきゃいけないのよ……本当にごめんなさい」

矢矧は阿賀野に頭を下げる。差別していた仲間同士でありながら、仲間を騙し続けていた阿賀野は幾度か矢矧に暴言を強いられていた。その所為で阿賀野が苦しんだ事に罪の意識を感じたのだろう。

「……大丈夫よ、矢矧。もう、矢矧達を苦しめる事はしないと心に誓うわ。あんな事起こさせやしない様に……だから顔を上げて？」

元はと言えば自身が頼りないせいでこんな事が起きてしまった。矢矧も能代も全部差別している側だった自分に暴行されるのが怖くて誰かを蹴落とす様な真似をしてしまった。もっと自分が動いてれば酒匂を失いかける事も無かつただろう。

本来なら自身が謝るべきだと分かっている。だからこそもう悲劇が起こらない為にも前を向かなければいけない。姉妹の関係が崩れるような事が無いように経験を活かして阿賀野は頑張る必要があるのだ。

「これから頑張りますしょう？」

「う、うん……！」

矢矧は涙を流し、阿賀野に抱きつく。余程嬉しかったのか抱きついた途端に矢矧は泣き崩れる。子供のように無邪気に泣き出し、ひたすら謝り続けた。阿賀野は優しく矢矧の頭を撫で、懺悔の言葉を聞いて相槌をする。

本当は矢矧も辛かったに違いない。自身を守る為に妹を見捨ててしまった。しかし矢矧と心の奥底では抗っていた。前任の洗脳が完全に染まるまで酒匂を助けようと必死に策を練って抗っていた。能代の時は手遅れだったが、きっと心の奥底では不本意だったはずだ。後でノシロにも改めて謝る必要があるだろう、その時は自分も一緒に謝らなければならない。

「あら……阿賀野さん……矢矧さん……」

「……本当に……ごめんなさい!!」

駆逐艦寮に来て、ようやく会えた第六駆逐隊。阿賀野達と同じ四姉妹で、差別された側として過酷な人生を送っている。自分達とは真逆の存在だ、仲の良さは羨ましく思える。謝る阿賀野と矢矧に対し、第六駆逐隊はひそひそと話し合っていた。何か事前に話していたのか、確認を取っているようだ。

「……実は私達で決めてただけ……阿賀野さんと矢矧さん、ノシロさんの事は許そうかなって思ってるの」

「え……」

「一々張り合っても時間の無駄だし、本心は聞けたし、それに私達駆逐艦とはそれほど干渉していないしね」

「元気が無きゃレディとして情けないわよ！ 元気出なさい！」

第六駆逐隊から来た返答は意外にも許す方向の話だった。思わず阿賀野と矢矧は予想外の言葉に声を漏らした。

「ほ、本当……？」

「本当なのです。電達は阿賀野さん達を応援しているのです！」

「朝潮も同じ意見だそうよ！」

「周りは簡単に許さないだろうけど頑張っつね。私達は応援しているよ、だから顔を上げてほしいな」

電達に励まされ、阿賀野と矢矧は顔を上げる。第六駆逐隊は可愛らしい笑顔でこちらを見ていた。

「あ、でもあまり話した事も無いし、これから仲良くなりましょうって事で」

「う、うん……ありがとう……！」

「ただいま」

「……オカエリ」

不知火に見送られ、自分達の部屋に帰った阿賀野達。返事をくれたのは深海棲艦化したノシロだった。艤装展開時にあつた足は存在せ

ず、通常状態での両足が無い為に車椅子での生活になっている。

「ノシロ……」

「……何デアノ場所カラ逃ガシタノ？ 私ハ深海棲艦ナノニ」

「深海棲艦でも……能代だから……私達の部屋にいてほしいな、って……」

ノシロは自ら地下営倉に收容される事を望んでいた。深海棲艦である自分は鎮守府において厄介者でしかない。差別していた側となれば当然だ。孤独に生きていた方がマシだったというのに、阿賀野は自分を受け入れてくれた。何故受け入れてくれたのか、ノシロはその理由が知りたかった。

「……ソウ」

ノシロは窓に映る海と訓練に励む艦娘達を眺める。暑い日差しが窓を差す中でノシロは平然としていた。深海棲艦故の特性か、ただ呆然と眺めている。阿賀野と矢矧は静かに二段ベッドの下に座る。会話は無く、沈黙が続いていた。

「復讐ハ……シナイワ」

「えっ、何で……」

「何デッテ……ソレヲスル価値ハ私ニハ無イカラネ。ムシロ受ケルノハ私ダシ……」

差別していた側の能代は自身の過去を悔やんでいる。自身の所為で姉妹を苦しめ、他の仲間を平気に見下した。矢矧に見捨てられ、憎んだとしても真実を聞けば、復讐をする気持ちは無くなっていった。寧ろ深海棲艦化した事は自分への天罰だと思っている。今更復讐する価値など自分には無い。

「矢矧……？」

「ノシロ姉……」

矢矧は突如立ち上がり、ノシロの名前を呼ぶ。

声は緊張で震え、身体は縮こまっていた。

「わ、私の所為で……ノシロ姉が……」

「分カツテイルワ、謝ラナクテモ大丈夫ヨ。謝ツタトコロデア元ノ姿ニナル訳デモアルマイシ……」

ノシロは深く落ち込み、窓の景色を眺め続ける。矢矧の方に振り向きもせず、自身の過去を悔やむばかりだった。互いに酷い事をしてきた。矢矧はノシロに苦しめられ、ノシロは矢矧に見捨てられた。このまま二人で謝り続けても何も進まないだろう。ならお互いに帳消しにした方がいいとノシロは思った。

「才互イ無カッタ事ニシタ方ガイイト思ウワ。ソレゾレ酷イ事ヲシタ訳ダシネ」

「だけど……」

「謝ツテタラキリガナイシ、ソレニモウ……充分ニ伝ワツテル」

「……分かった。けど今度は頑張りましょう？ 認めてもらう為にもさー！」

矢矧が元気そうにノシロに声を求める。

しかしノシロは全く答えない。

「ノシロ姉……？」

神妙そうな表情でノシロは二人を見つめる。

「阿賀野姉……矢矧……」

「何？ ノシロ？」

「私達……マダヤリ直セルノカナ……」

不安そうにノシロは問い掛ける。まだスタートラインに立ったとはいえ、この先仲良く過ごせる日常が来るのかノシロは不安になっていた。差別していた側だった事、自身が深海棲艦である事を考慮すれば部屋にいていいのかすら疑問に思える程だった。

「きつとやり直せるわよ！ この先頑張って行きましょう？」

「コンナ姿デモ許シテクレルカナ……」

「大丈夫よ、私達がずっと傍にいるから」

「本当ニ……ズツト傍ニ？」

「ええずつとよ」

徐々にノシロの声が震えていく。身体をも震わせ、決心したノシロは本音を言う。

「私ハ……本当ニ……阿賀野姉ノ妹で、矢矧の姉で……！ 居ていいのかなああ……！」

涙に濡れたぐちゃぐちゃな泣き顔でノシロは問い掛ける。

こんなどうしようもない自分は阿賀野達の姉妹にいていいのだろうか。

自分は生きていいのだろうか。

変わりたい、皆に謝りたい。

ノシロは悩んでいた。

どうすればいいのか分からない。

前の姿を失った私に存在意義はあるのだろうか。

阿賀野姉や矢矧に見捨てられないだろうか。

私は救われていいのだろうか。

そんな恐怖が頭の中で駆け巡る。

でも――、

「勿論よ……！」

「当たり前よノシロ、貴方は私の妹……そして矢矧のお姉ちゃん……居ていいに決まってるじゃない……！」

——この二人は私を離さなかった。

涙が止まらない。

二人に抱きつかれ、嬉しいはずなのに。

そうか、嬉しくて涙が止まらないんだ。

嬉しいんだ。心の底から、嬉し――、

「捕らえなさい」

「……さて……作戦準備に取り掛かりましょう」

「悪しき人間の――」

— 制裁を……]

Part 7. 孤影悄然のアレクサンドライト
113. 夏の暑い日に水着姿を

夏。

それは暑い季節。

夏。

それはプールの季節。

夏。

それは夏休みの季節。

鎮守府内の食堂奥に出来上がったプールに提督はいた。大きいパラソルで太陽の光を防ぎ、ビーチチェアに寛ぐ。隣に小さなテーブル、その上には大きなワイングラス。ブルーハワイ色のジュースが入ったワイングラスを持ち、ストローで優雅に飲む。

サングラスで目の保護を重ね、アロハシャツを華麗に着こなし、半ズボンの様な水着で素晴らしいひとときを過ごしていた。

適度に風に揺られ、プールの水による冷気でまさに快適。

これこそ大人の夏休みと言えるだろう。

「提督、起きてください——」「ぶっ飛ばすぞ」

「え？」

「俺の夏休みを邪魔する無礼者はぶっ飛ばすぞと言ったんだ!!」

「えっ今日は水曜日ですよ？ 夏休みって……」

今日の秘書艦である古鷹が請け負った仕事を即却下する提督。あまりの即断に古鷹は言葉を失った。

鹿島との戦闘から一日が経過、提督はプールの横にて休憩していた。

「俺が休みたい日だと思った日から夏休みだ、夏休みにわざわざどうでもいいクソでしかない仕事なんか取ってくるんじゃないこの間抜けー」

「その場合は朝八時までには伝えてください!」

「おーいもうちよつと強く扇いでくれー、瑞鶴ー」

「へいへい」

提督の傍で団扇を叩くのは瑞鶴だ。適度な涼しい風を見事な器用さで出している。この暑さ故に瑞鶴も軽めの正装で外に出ているようだ。給料アップの条件とはいえ、少し厳しい所がある。

「大本営から仕事の依頼が来てます！」

「勝手にゴミを拾ってくるな、そこら辺のドブ地方鎮守府にでも棄てておけ」

「大本営から強制的な仕事です！」

「悪いが俺は中将だ、そんな大尉辺りが考えた仕事なんぞ無かった事にしてやる」

ありとあらゆる仕事を全て拒絶する提督。余程仕事がやりたくないのか、屁理屈を並べて頑なに断っている。

「これは私達に関する事なんです!!」

「ならいつその事やる価値などない。俺はそもそもお前らと馴れ初め合うつもりは全く無いんだ、さっさとそこら辺の魚にでも食わせておけ」

「なんと言われようとも受けてもらいますからね!!」

「へえ〜前まで妹に殺されかけて怯えていた馬鹿みたいなお前が俺に勝てるっても?」

前にあつた加古との姉妹喧嘩で古鷹は見違えるように変わっていた。妹に暴言を吐かれ、死ぬ事に怯えていた弱気な古鷹はもういない。今は改装が施され、改二として生まれ変わっている。また陽気で強気な性格になり、いつにも増して提督と言い争いをする様になった。

「私はそれほど馬鹿ではありませんし、今は提督よりもめちやくちや強いです!!」

「へえじゃあさつき摩耶にボロボロにされてたのは何で?」

模擬訓練で摩耶と一対一で戦っていたのを見られていたようだ。勝敗は当然摩耶の勝ち、古鷹は惜しいところで負けてしまっている。

「アレは……たまたまです……」

「あーそうかー! たまたまかあー!! それは悪い事を言った!! 自

ら砲撃のタイミングを逃しておいて追撃を食らったのがたまたまだと言っただから、たまたまなんだろう!! たまたまなんだよねー!!」

どうしても仕事をさせたい古鷹を提督は煽り倒してひれ伏している。大声で誰もが聞こえるように言っているのだから余計にタチが悪い。あまりのウザさに聞いてしまった瑞鶴はため息を吐いた。

「はあ……分かりました。一応置いておきますね」

「最初からそう言え」

「本当に性格が悪いなあ……提督さん……」

「黙れヒステリーチキン、給料アップは無しだぞ」

「嘘です、全力でやらせていただきます」

金にがめつい瑞鶴も似たようなモノだなと思った古鷹は頬を引き攣った。

「ねえこのプール、提督一人だけ？」

「別に入りたきや入れればいい。水着があればの話だな」

「そういえばここの鎮守府の皆さんは水着は……持っていないですよね」

プールの中で不知火が水着姿で泳いでいる。疲れたのかプールサイドに座り、ポールに置いてあったタオルで顔を拭く。桃色の髪の毛が水に濡れて光り輝いた。

「不知火が勝手に泳いでる……」

「艦が泳ぐとはこれ如何に」

「確かに」

古鷹の言葉の通り、艦が泳いでるのは些か不思議な事に思える。潜水艦ならまだしも、不知火は駆逐艦だ。艦娘が泳ぐ事は割と珍しいのかもしれない。

「いや確かについて、我々艦娘だって泳げますよ。元は人間なんですし」
「でも泳いでるのがお前だけじゃなく……目の保養には足りんな」
「私の身体では不満だと仰るのですか？」

不知火は駆逐艦、大体は小中学生の身体といった所だ。艦娘はどのタイプも大体がスレンダー且つ美少女。男の誰もが目を輝かせる事だろう。不知火もまるで小中学生の体型とは思えない程、綺麗な身体

をしている。

「……まあ……不満かな」

「あ、ちよつと不知火の身体見て考えたよね」

「まさか提督さんはロリコン説ある？」

「ロリコンの意味を分かっただけから言えヒステリーチキン」

ヒステリーチキンって何よ、と小さく愚痴をこぼすも瑞鶴は与えられた役割をこなしていく。もし皆が水着姿になったら、他の憲兵や整備士は悩殺確定だろう。提督も例外ではないはずだ。

「んじやもしもの話で、誰の水着姿が見たい？」

「んくそうだなあ、摩耶とプリンツは逃せないな。後このアホ面なら……金剛、雲龍、加賀辺りが見てみたい」

「随分とグラマラスな所選ぶなあ、提督さんは」

「当然だ、綺麗な女の身体を見て興奮しない男など存在しない。目の保養にはバッチリの奴らだ」

キツパリと提督は明言する。確かに前任がやっていた事を思い出せば、提督の言葉もあながち間違つてはいない。ならば――、

「鹿島さんはどうです——」「却下。あんな腹黒女なんぞ眼中に無い」

鹿島には目にもくれないそうだ。提督は鹿島の事を嫌っているの
で予想出来た答えと言える。しかし即答するほど嫌悪とは、瑞鶴もその
気持ちは分からなくもない気がした。

「おいおい俺達が汗水流して鍛えてんのに提督は呑気に夏休みとは随
分と御大層なこつた」

「別に俺は訓練に強制参加しろとは一言も言っていない。休みたければ
存分に休みたまえ、その分他の馬鹿共が強くなるかもしれないが
な——」

「一々言う事がズルすぎるぞコイツ！」

訓練から戻ってきた天龍が汗を滝のように流している。提督に声
を掛けるなり、カマをかけられて怒りの表情で訴えてきた。訓練に誘
い込むのが上手というか、狡猾な所が見受けられる。

「夏休みとか言ってるけど毎日仕事はある訳でしょ？ 書類とかはど
うしたの？」

「全て灰色と時雨に任せた」

「……はア!？」

古鷹は何秒か遅れて驚きの声をあげる。夏休みだと言うのだから仕事は終わらせているのだろうと思つた古鷹。だがその予測は外れ、全ての仕事を灰色と時雨にらせているという。

「驚く事は無いだろう、この先司令官として生きていくのであれば多少の経験は必要だ。というよりもちゃんとやれば少ない時間で終わる事だぞ、書類の整理なんて」

「ここに着任した灰さんが可哀想」

「他の鎮守府の馬鹿共は忙しいとかほざいているが本来は午前中に終わる仕事ばかりだ。それを知らずに現実逃避し、つかの間の快樂を過ごし、結局書類に追われ続けるのだよ」

提督の仕事の活躍ぶりは尋常ではない。一日分の仕事を約二時間ほどで終わらせる程で、書かれた書類のほとんどが綺麗にまとめられているという非の打ち所が無い優秀さっぷりだ。またそれ故に秘書艦の忙しさは想像を遥かに超える程凄まじく、経験したほとんどの艦娘が着任にしてから何週間か秘書艦だった摩耶やプリンツを崇めている。古鷹は今日が初めての秘書艦で、その忙しさがまだ理解出来ない。

「でも軍人に休日って無くない？ このご時世なら尚更でしょ？」

「馬鹿言え、休日が無ければ人間なんぞ即座に壊れる。適度に休憩が必要なのだよ、ブラック企業じゃないんだここは」

プールサイドで休憩していた不知火がまあここは今もブラック鎮守府ですが、と心の中で思ったのは秘密である。

「ひえっ……冷たッ……」

「涼しそうだなー……」

飛龍と蒼龍が興味本位でプールの水を触っている。あまりの冷たさに羨んでいるようだ。それを見ていた提督は考える。

「もう二人追加だ、飛龍と蒼龍のも見てみたい」

「どんだけ下心あるのよ!!!」

飛龍と蒼龍の水着姿を想像して、見てみたい艦娘リストに加わった

らしい。

「提督ー、私達もプール入りしたいんだけど……」

「ご自由にどうぞ」

「その……水着が無くて……」

この鎮守府の艦娘達の大体は正装しか服を所持していない。というよりもファッションに全く皆無で、球磨や多摩のように部屋着を持つ事にあまり関心を持たないのだ。前任時代の禁欲生活で欲がはち切れるかと思っていたが、未だに引きずっている。とはいえ飛龍や蒼龍の様に服に興味がある事は素晴らしい事だ。手本となつた不知火がよい例だろう。

「あー……んじや摩耶かプリンツ辺りに買わせてもらえ。後で金と購入申請書を出すように、二人からは俺が伝えておく」

「本当に!? やったあ!!」

「甘いのか……厳しいのか……」

「キヒヒヒヒヒ、欲とは素晴らしいモノだね」

変な笑い声を上げて、ジュースを飲む提督。人生を最高に謳歌しているのか、提督は楽しそうに過ごしている。そんな時提督はある事を思い出して古鷹を呼び出した。

「あ、そうだ古鷹。秋月四姉妹をここに呼んでくれるか」

「え? 秋月さん達をですか? 分かりました」

秋月達を呼びに古鷹は駆逐艦寮へ向かう。飛龍と蒼龍、瑞鶴と天龍は不思議そうに提督を見つめている。また何か仕出かすのではないかと内面緊張気味だ。古鷹が行つた後に提督はスマホである人物を電話にかける。

「おーい摩耶ー」

『んー何だー? これから休憩なんだけど』

「前に言つてた秋月達の件、俺ん所でやるから準備頼むわー。秋月四姉妹は古鷹に呼ばせた……あ、プリンツは憲兵や整備士にも伝えるように言つてくれー」

『ああアレな……分かった、全力で準備するぜー!』

スマホから摩耶の声が聞こえるほどテンションが高くなっている。

やたら嬉しそうで自ら率先しているほどだ。初めてテンションの高い摩耶の声を聞いて瑞鶴は飛龍達に話し掛ける。

「妙に摩耶がテンション高くなかった？」

「まああんな事聞いたら誰でもテンション上がるぞ？　なあ不知火？」

「はい。当然の事です」

「何で目光らせて涎垂らしてるの……不知火ちゃん……」

これまたやけにテンションのおかしい不知火を見て飛龍と蒼龍が心配がる。涎を垂らすとはつまり食べ物関係の事だろうか、これから何が始まるのか予想がつかない。

「これだから疎い人達は……」

「疎い人達ってどうした不知火、おかしくなったか？」

「はあ……仕方ありません。これから私達がやる事……それは……」

「それは……？」

「——夏定番イベント!!　バーベキューです!!!」

「何かさつきからテンションおかしくない!!?」

114. 肉は中まで火を通しましょう

「提督ー、準備してきたぞー!」

「自由に配置していいぞー、あと食材は俺の隣な」

プールの隣に出来た大きい砂浜で着々とバーベキューが進んでいる。肉が食べられると聞いて他の艦娘も集まりだし、摩耶同様バーベキューの手伝いをやっていた。提督の隣には段ボール箱が何箱も山のように積まれている。

「提督ー、秋月さん達を連れてきました!」

「司令、これは一体……何をやるんですか?」

古鷹が秋月達を呼び出してくれた。砂浜の準備風景を見て不思議がっている。これから何をするのか予想がつかない。

「何日か前にやりたい事としてデカイ肉が食べたいと言っていただろう? だから用意してやったぞ」

「え!? 本当ですか!!」

以前にやりたい事として大きいお肉が食べてみたいと伝えていた秋月達。鹿島との戦闘からすっかり忘れていたが、提督は忘れていなかったようだ。提督が言い出した途端に四人とも目を輝かせ、嬉々とした表情を存分に出している。

「ああ本当だ。まあバーベキューという形になるし、他の奴らもいる事になるが構わないな?」

「はい勿論大丈夫です!! ありがとうございます!!」

やりたい事が叶った秋月達は早速バーベキューの準備の手伝いをしに行った。余程嬉しかったのかステップを踏んで駆けつけている。

「提督殿……これは一体何を?」

「お、集まったか憲兵隊と整備士諸君。悪いが仕事は一時中断だ、今はこれを楽しむといい」

「こ、これって!!」

「バーベキューじゃないっすか!!」

今度はプリンツが憲兵隊と整備士達を呼び出してくれた。普段あ

まり見ない光景に隊長と白髭は口を開けて呆然としている。提督は見張りや開発を一時中断させ、艦娘達と食べる事を勧めた。バーベキューの準備風景を見るなり、他の憲兵と整備士が驚きの声を上げる。

「本当にいいのかのお……儂らみたいな輩が来て」

「構わんだろう。これも艦娘との交流の一環と思いたまえ。なアに大丈夫だ、緊張する必要は無い。何かしたらお縄行きして首を刎ねられるだけだ」

「そうですか……ですが白提督殿、私達はあくまでも憲兵。確かに交流も必要ではありますがまだ時期が早いかと思えます。お気遣い感謝致しますが、我々は仕事に戻りたいと思います」

他の憲兵や整備士達も同意の声が上がっている。艦娘との距離は徐々に縮まっているものの、まだお互いに遠慮するような仲に過ぎない。中にはトラウマを持っている艦娘もいる。出来れば参加はしたいが艦娘達の事を考慮するとまだ時間が早いと隊長と白髭は考えをまとめた。

「まあ行くか行かないかはお前達の自由だ、勝手にしたまえ」

「了解です、では」

バーベキューの準備に憲兵隊と整備士達が加わることはなく、各自仕事に戻っていった。それを見た一部の艦娘は少し複雑な表情をしている。憲兵や整備士達の中にも名残惜しいような表情をしている者がいた。

あの艦娘大好きと噂された陸軍大臣が直々に編成した憲兵隊、艦娘の安全を第一に考える海軍元帥が選抜した整備士隊。流石人の本質を見抜くだけの事はある。この鎮守府の事を考えて人間から評価の高い人柄のいい人物を採用したのだろう。何かと突拍子で無理矢理進めてこられたが、案外考える事は考えているらしい。

「随分と奮発したな、提督」

「まあな。あの人数分で丸が多かった、後で請求書でも押し付けようかと思うぐらいだ」

「ははっ、それも面白いもんだな」

休憩にしにきた摩耶が提督の隣に座る。

準備したせいで手は炭だらけで真っ黒だ。

「やっぱ提督は優しいな、惚れてよかった」

「……古臭い事を言うんじゃない」

「はいはい。あたしき、本当はちよつとだけ提督に不満があつたりしてき。たまにイラつき過ぎて殴る事もあつただけど……」

「あの時のパンチは格別に痛かったな」

急に思い出話をしてきた摩耶。

懐かしそうに笑顔で摩耶は話を続けた。

「悪い悪い……ごめんな。でも提督の境遇とか考えたりすると、どうしても放っておけなくて……勿論頼りがいはあるし、頼ってくれるのは嬉しいけどき……」

「摩耶らしくないな」

「そりやあたしだってらしくない時ぐらいあるぞ。まあでも結局はカッコいいな……って思っただけ。それを伝えたかった」

頬を少し赤らめ、照れ臭い表情。摩耶がこんな事を言うとは珍しい。思わず提督もサングラスで逸らした目を隠した。

「……そうかい。ありがとな」

「どういたしました。んじや私は焼いてくるわ」

「行つてらっしゃい」

「白さーん!!」

「ん、ああ灰と時雨か……あ」

灰色と時雨が急いでこちらに向かつてきていた。バーベキューをすると聞いて急いで駆けつけて来たのだろう。そういえば灰色と時雨を呼ぶのを忘れていた提督。あ、と声を漏らした。

「何で私達の事呼んでくれなかつたんですかー!!?」

「すまん、完全に忘れてた」

「もう終わっちゃた?」

「そんなに早く終わるかボケ。食いたければさっさと手伝うんだ馬鹿共」

鎮守府のほとんどが砂浜に集まり、いきなり大所帯になった。バー

ベキュウの準備も終わり、提督の掛け声と共にバーベキュウが始まった。提督の隣にある段ボール箱から食材を取り出し、各自自由に焼いている。

「ジャツジャーン!! 本日のメインドイツシユ、■■県産黒毛和牛A1ランクのステーキ参上!!!」

灰色が特別大きい肉を持ち上げ、皆に見せつけている。次第に灰色の周りに人だかりが出来始め、一気に歓声が響いた。灰色の隣には秋月達が目をキラキラさせている。

「焼き方はそれぞれあるのですが、いかが致しましょうか? 秋月様方」

「えっと……じゃあ、一番美味しい焼き方で!」

「ご注文承りました!! ではこの私、肉界のスペシャリストことこの私、灰が最高に美味しいサーロインステーキをご用意しましょう!!」

いけいけー、流石灰さんなどと野次馬が飛び交う。職人技の様に大きい包丁で丁寧一枚ずつ切り分け、金網の上に乗せていった。肉が焼かれていく音という物は一々食欲を掻き立てられる所がある。肉本体の脂が液体となって泡のように吹き出し、鮮やかな赤い色の一枚肉が徐々に焼かれていく様は見る者を虜にさせるだろう。

「火加減はこれで大丈夫かな? 鈴谷」

「うん大丈夫だと思ふよ最上姉。ちようどいい火加減だわ」

「それは良かった」

別の焼き台でも最上と鈴谷が火加減を調節している。肉の焼き加減を見て了解を得たようだ。隣では熊野が焼かれていく肉を凝視してタイミングを見計らっている。最上は嬉しそうに笑いながら返事をした。

「ああー! 長門! 肉取り過ぎだぞ!」

「む、そうか。天龍よ、それは悪かった」

「って言いながら食べるのやめろ!!」

長門は食べるペースが早いのか皿に焼かれた肉を大量に取っている。そこに普段模擬訓練の相手になっている天龍が注意してきた。なお注意されても食べ続ける長門に天龍はツツコミを入れる。陸奥

はその光景を睦まじく微笑みながら見ていた。

「北上さんは何をやってるんですか？」

「おっ大井っち。今ねー、某狩りゲーの肉焼きシーンを再現しててねー……ッ!! 今だ!! 上手に焼きましたーッ!!」

「まだ焼けてないぞ」

「え？ マジ……？ あ、本当じゃん……」

北上は何か面白そうな事をやっていた。一つの肉を凝視していた北上はタイミングを見計らってトングで焼いた肉を持ち上げた。しかし隣にいた木曾から生焼けだと指摘され、よく見ればまだ完全に焼けていなかったらしい。しぶしぶ北上は焼き台に生焼き肉を戻した。

「満潮、焼けましたよ」

「う、うん、ありがとう……」

「あー！ それは大潮のだよー!!」

「こら霰！ 勝手に私が一番目に置いた肉取るのやめなさい!!」

満潮は朝潮に焼いた肉をもらい、仲良くしていた。そこに大潮が自分のだと主張し、そこにまた霰が黙って肉を取っていく姿を見て霞が自分ののだといたちごっこを始める。灰色が止めに入り、二人の喧嘩の仲裁に入った。

「食べないの？ 貴方は」

「生憎俺は肉があまり好きではないのでな」

「あらそう、それは残念」

プールサイドで一人、ジュースを飲んでいた提督。一人ぼっちを見兼ねて■ ■ 医師が話しかけてきた。パラソルの影に入り、手で扇いでいる。また隊長や白髭も提督の元まで歩いてきた。

「何でお前らはここに来たんだ」

「良いじゃない、同じ保護者同士仲良くしましょう？」

「それは私も同意見です。私も混ぜてください」

「私も頼む」

「お前らは保護者でも何でもないだろ」

艦娘を見守る者、そして上に立つ者として■ ■ 医師、大和と武蔵が保護者トークが始まった。意外にも話には共感を持つ事が多く、少な

からず提督も相槌を入れるなど話は有意義に進んでいった。

提督と摩耶が着任して約二ヶ月、憲兵隊と整備士が着任して約半月。今までに色んな事があった。初めての演習、深海棲艦の襲撃、鎮守府内の暴動、鏢との戦闘。今思えばとても飽きない日々だった。憲兵隊と整備士が来た時は一時はどうなる事かと不安しか無かったが、あの判断を見るからに問題視する事はないようだ。

「いいわねえ、こんな風景を見るのも」

「はい、とても楽しそうで何よりですね」

「全くだ。問題を抱えているとは思わん程に成長している」

とはいえまだ問題は幾つも存在する。■■との決着、前任との決戦。大きな問題が二つも残っている。いずれも対策や計画は練っているものの、相手が何をするのか未だにその尻尾を掴めていない。

「でもまだ■■■さん達はいないのね……」

「だろうなあ、来る訳が無い」

「来ても難しいだろう。雰囲気壊れるかもしれんしな」

「こればかりは仕方ありませんね」

このバーベキューに■■■達は来ていない。

当然といえば当然だろう、来れば場が騒然とするのは目に見えている。

「あれ？ 阿賀野さん達もいない……鹿島さんも」

「アイツらは急に部屋にこもりやがったぞー。俺が呼んでいるのに無視しやがった。鹿島は知らん」

「部屋にこもりやがったってただ単に姉妹同士で話しているだけだろう」

「折角姉妹が揃い始めた所です。邪魔してはいけませんよ」

阿賀野達は鹿島との戦闘後、提督に顔を見せていない。灰色からは姉妹で話し合いたいと言われ、そのまま帰ってきている。出来れば早めに来て欲しいのだが。

「そういえば貴方が言う計画って——」「今はそういう時間じゃないぞー」

折角の楽しいひとときを邪魔してはいけないと伏せて伝える。提

督といえどちゃんと理解はしているようだ。

「はいはい、そうでしたね。さて私も話しかけようかしら！」

「私達も先に戻ろうか。大和」

「そうですね。では失礼します、提督」

「はい、お疲れー」

■ 医師と大和と武蔵は艦娘達の輪に入り、話に混ざっていく。提督はジュースを飲み干した後に、スマホでゲームを始めた。

「出来上がりました秋月様方。どうぞお召し上がりくださいませ」

四枚分のサーロインステーキが出来上がり、熱い鉄板の上に乗せていく。特等席に座る秋月四姉妹は皿に目を輝かせ、遠慮なくその重厚たる肉を頬張った。初めて感じたその味に言葉が出ないまま、感動している。

「いっぱい食べる女の子は可愛いと言うがまさにこの事だな」

「艦娘とは素晴らしい存在です。この国を護っていただき本当に感謝の極み」

「尊い……」

「おい最後オタクいたぞ」

憲兵や整備士がその姿を遠くから睦まじく眺める。肉を食べれなかったのは少々悔しいが、艦娘達が幸せであればいいという気持ちでどうでもよくなった。あくまでも憲兵という身分を自覚し、艦娘達との距離は一定に保つように隊長から言われている。この状況がまさしく本来鎮守府にあるべき光景なのだろう。

「ッ!!」

「ん……提督?」

突然誰かが倒れる音が聞こえた。皆は何事かと振り向く。音の方向には椅子から倒れ込み、苦しい声を上げる提督がいた。身体をうつ伏せにして倒れ、口から血を吐き出している。

「おい提督!! 大丈夫か!!」

「あ……いや……大丈夫……やっぱ水……くれ……!」

「誰か水を!!」

すぐに摩耶とプリンツと不知火が駆けつけ、倒れ込む提督を支え

る。提督の緊急事態に近くにいた憲兵や灰色、艦娘達が周辺を囲い、提督の補助を進めていく。

依然として提督は藻掻き苦しんでいる。まるで内側から何かに破壊されるような鋭い痛みが提督を襲っていた。至る所の血管が皮膚の表面上に浮き出ており、筋肉が盛り上がるように隆起している。

「(クソっ……ペースが早過ぎる……!! また今夜も打つしか……!」

「何やったのよ……ったく、一回診てあげるわ。摩耶、担げる?」

「勿論」

「わ、私も行きます!」

はっと我に戻った古鷹は秘書艦としてその後を追った。その現場をただ眺めるだけの艦娘達は神妙そうな表情をしている。これから何かが起こるような、とても不穏な雰囲気が一帯を包んでいた。

115. 度重なる仕事は身体と精神に悪い

医務室に運ばれた提督は直ちに医療ベッドに寝込み、**■** 医師に診察された。突然の吐血、浮き出る紅い血管、まるで別の生き物の様に動く筋肉。まるで人間の物とは思えない状態だ。病気や毒の症状ではない、ウイルスや細菌の拒絶反応でもない。唯一分かるのは吐血だけ。

「いきなり吐血……内臓系に異常があるのかしら、ここだと難しい事は出来ないわ。一度病院に行くのは？」

「行かなくて……いい……！」

「行かなくていいって貴方、何で今の状態で意地張るのよ！ 折角人が心配してるのに……意地でも行ってもらわよ」

「**■** 先生、ちょっと待ってもらえるか」

鎮守府の医務室にある薬液や医療器具では物足りない。もっと高等な医療機関に適切な治療を受けた方が得策だろう。そう思った**■** 医師は電話機を取ろうとした。しかし摩耶が**■** 医師の肩を掴み、その手を止めようとする。

「摩耶まで……貴方の大事な人が死ぬかもしれないのよ……!? 何でダメなの？」

「ダメなんだ……提督は、今そういう状態じゃない……」

摩耶は提督の状態を知っているようだ。深刻な表情で**■** 医師に訴える。一度深呼吸をした**■** 医師は落ち着いて摩耶に聞き出す。

「何か知ってるのかしら、摩耶。教えなさい、医師として見過ごせないわ。貴方にはいってもらわなければならないのよ」

貴方と提督を呼ぶ**■** 医師は提督の目的を大体理解している。蒼明石が一度医務室に運ばれ、提督と話した時の事。提督は**■** 達の手を救う様な考え方を口にした。もし提督にその考えがあるのなら生きてもらわなければならない。

「提督……」

「はあ……はあ……仕方ない。摩耶……教えてやれ……」

「……分かった」

提督が摩耶の腕を掴み、必死に訴える。それを見て摩耶も覚悟が決まった。ずっと隠し続けた二人だけの秘密を今、■■■医師にだけ伝える。

提督が今まで執務室にこもる理由、提督の超人的な力の意味。

それを今、告げる時が来た。

「■■■先生、これから言うあたし達の事を信じて欲しい。もしこの鎮守府の未来を救えるのが提督だけだと思ってるなら……絶対に信じて欲しい」

「何よ、かしこまって……確かにそう思ってるから今こうやって心配してるのに……大丈夫よ、信じてみるわ」

「ありがとう……提督は——」

——四日後。

「し、白さん！ 大丈夫でしたか!? お身体は……」

「ああ勿論だとも。あれぐらいの体調不良で死ぬ俺ではない。てかお前らも大概だぞ」

「す、すいません……」

提督はバーベキュー後、体調を考慮して四日程医務室にて休む事となっていた。提督がいない間は灰色と時雨が代役として鎮守府を運営していたらしい。プリンツと不知火の補助の元で行動していたが忙しさが尋常ではなかつたらしく、二人とも目にクマが出来ている。「もう少し効率という物を考えろ。プリンツから聞いたが一つの事に集中し過ぎだ、適度にやれ」

「分かり………ました………今日も提督は夏休み、ですか?」

「いや俺が休み過ぎて馬鹿共がロクに仕事を潰せずに書類がわんさか溜まってらるだろうから、今日は執務室で普通に仕事するぞ。お前らは一回休め」

今日の秘書艦は不知火。灰色と時雨が残した後仕事を終わらせる

為に不知火がわざわざ来てくれた。灰色と時雨は紐のように応接間のソファに座って休憩する。執務室ではいつものように日常が続いた。

「し、白さん！」

「何だー？」

「も、もし何かあれば私に任せてください！ 何でもします！ 体調の方に優先を!!」

灰色は急に立ち上がり、提督に話しかける。バーベキュー後の体調を見て、灰色は心配したのだろう。こんな仕事など慣れたものだ。灰色は豪語する。

「馬鹿言え、もう体調は優れてんだよ。お前に任せる仕事はその机にある書類くらいだ。それにお前は経験不足、ただでさえ四日間分の仕事に疲れているような奴に任せるのはまだ早い」

「ですが私は……!」

「あのな……確かにあんなの見たら心配する気持ちは分かるぞ？ だが今こうやって体調は回復してるんだ、ああ良かったと思えばいいじゃないかあ」

提督と不知火は普通そうに書類を書き終えている。辛うじて目に見える速度で次々に書類を潰していた。体調は回復していると言っているが、よく見れば提督も目にクマが出来ている。体調が完全に回復したとは思えなかった。

「何か……隠してませんか？」

「何を？」

「さつきからおかしいです、白さん。必死にあの時の事を隠してるよ
うな……」

提督は灰色の声を聞いて手を止める。

立ち上がる灰色に視線を移した。

「白さん、私は本当に貴方の事を心配しているんです！ この鎮守府の問題を解決出来るのは白さんだけ……貴方がこの先倒れてはこの鎮守府に未来はありません!!」

皆提督が倒れただけで心配をしているようだ。確かに吐血までし

て苦しんでいる姿を見れば心配してもおかしくないだろう。鎮守府襲撃の際に毒を打ち込まれ、一度死にかけた経験もある。

「……はあ……分かった、そこまで言うんなら一つだけある物をくれてやる」

ペンを机に置き、提督は執務机の引き出しからある物を取り出した。提督が手に持っているのは白い長封筒とメモ書き。白い長封筒の中には何か紙が入っていた。

「これは……」

「誰にも見せるな。誰にも悟られるな。もし俺の身に何があつたとしても、これだけは肌身離さず守り抜け……いいな？」

灰色の前まで歩み寄り、目の前で手渡す提督。

灰色の手を取り、掴む様に両手で包んだ。

「後から読んでも構わない。お前が誰をも救えるヒーローになりたいのなら、書いてある事を声にして読め」

「……分かりました!!」

提督が初めて灰色に自身の所持品を預けた。神妙そうな表情で預けた物は、まるで何かを託しているようだった。大事そうに提督が持っていた物、灰色は肌身離さず持ち続けると心の中で誓う。

「失礼するぞ、提督」

そんな中、誰かが執務室に入ってきた。

入ってきたのは――、

「おーこれはこれは長門、一体何の用で？」

「提督に少し聞きたくてな、あの鹿島は確か『鏢』シロガネと呼ばれていたな」

「ああそうだなー……何で知ってんだ？」

「鹿島と話した際に聞いた。そして提督の摩耶にも『緋』ヒゲレという異名で鹿島が呼んでいたんだが……これはどういう意味だ？」

それは鹿島との戦闘中の事である。鹿島は一度摩耶と激しい戦闘をしてきている。通称『鏢』と呼ばれている鹿島、そしてその鹿島が摩耶に対して言っていたのが『緋』という異名。

長門はその言葉を聞き過ごさなかった。

「お、気になったか？」

「当然だ」

「それはぐ苦勞なことで、そうだなー……何て言えばいいか……」

提督は顎に触れ、考えるような仕草をした。余程難しい事なのか、慎重に言葉を選んで見えているように見える。

「あれは異名と呼ばれているが実際には違ってな、ある艦隊のコードネームなんだ」

「ある艦隊のコードネーム？　艦娘にそんな艦隊など……あの時のか」

以前深海棲艦のスパイである彼女が戦艦水鬼らによって回収されていく際の事。古鷹と加古の足止め中に突然と飛び出してきた金剛、龍田、叢雲によって彼女が捕縛された。あの三人がまさにその鹿島や摩耶と同じ艦隊だと言う。

「そう。そこに叢雲、龍田、金剛が居ただろう？　あれが艦娘の特殊艦隊、規格外の力を持つ艦娘のみによって編成され、ありとあらゆる任務を遂行する古兵共の集い……通称、護神厄討艦隊」

護る神が厄を討つと書いて護神厄討艦隊。何とも物騒なネーミングセンスだ。各地の鎮守府から選抜され、その常軌を逸した戦闘スタイル、艦娘よりも桁外れに備わった超人的な力、勲章を授かる程の戦果を持つ実力者が集う艦隊。極秘裏に組織された艦隊で、各鎮守府にその艦娘が所属しており、日本海軍最終決戦兵器として降臨し、随一の戦闘能力を有していた。

しかし本来の目的とは違った任務を受ける事があり、何かある度に大本営に一度呼び出されるが、その際は出席の有無を確認してくれる為に任務に参加するのは自由と融通が効いている事が多い。

「護神厄討艦隊……」

「あの艦隊に所属する艦娘はどいつもこいつも常識を外れた力を持っている。現在は十二名所属していて、各地の鎮守府に配属されているんだ」

どの艦娘も鹿島のように桁外れな馬鹿力を持っており、『緋』^{ヒゲル}摩耶の【予感】のような超能力を持っている為にたった一人で深海棲艦の艦隊を余裕で殲滅する者しかいない。基本は戦闘狂が多く、戦う事で生

きる実感を持つ狂った奴らがほとんど。実際深海棲艦でもネームドの艦娘として危険視しており、ネームド級の姫や鬼クラスの深海棲艦とぶつけて戦う事が多い。

「鹿島や摩耶もその艦隊の所属だと」

「そういう事だ」

「どういう奴がいるんだ？」

「俺が知る限りじゃあ……まず『鏢』鹿島、『緋』摩耶、そして『鐵』北上、『黝』蒼龍、『緞』木曾、『堇』龍田、『?』叢雲、『?』金剛、『滄』五月雨の九名だな。後は知らん」

あと三名は公表すらされておらず、艦隊の指揮官である■大将と海軍元帥のみしか知らない。いずれもコードネームの特徴として漢字一文字である事と色や自然に関する漢字である事が分かる。どれも難しい漢字を採用しており、まず簡単に読める事は出来ない。

「因みに深海棲艦にもこういう奴等がいるぞ。確か名前は七壊星、だったかな。たった一人で国を滅ぼす事が出来る狂った奴等がネームドの危険個体として登録され、全世界海軍共通でその名が知られている。まあ一番有名なのは『天璇』南方棲戦姫の側近、『巨門』戦艦棲鬼だな。こいつは金剛との一戦後、近々姫クラスになる可能性がある。後は『天枢』中枢棲姫、『天権』深海鶴棲姫、『摇光』欧州水姫、だな。全部言うとお面倒だからこれぐらい知っとけ」

七壊星とはある星の集団に因んで決められた深海棲艦の危険個体集団。各海域で他の深海棲艦とは比べ物にならない程の強さを持つ深海棲艦がリストアップされ、ネームドの危険個体として警戒態勢を引いている。深海棲艦側もそれは熟知しており、ネームを名乗っては戦闘に入る深海棲艦もいる。

各国の海軍元帥又はその国の代表者によって開かれた国際会議によって決められており、日本海軍では護神厄討艦隊を作るキツカケになった。どの深海棲艦も国そのものを壊滅しかねない程の殲滅力と戦闘能力を有しており、七壊星一体で護神厄討艦隊の艦娘を最低一人は投入しなければ勝てる見込みは殆ど無い。

「なるほど把握しておこう。それで、護神厄討艦隊の旗艦は誰とか決

まってるのか？」

「興味無さそうだなー、言うけどかなりの危険個体なんだぞ？ いやまあそれは別として一応は叢雲が請け負っている。でもアイツも鹿島とは別ベクトルの意味で全てがヤバいから、って意味で選ばれたけどな」

オウゲン

『？』叢雲が護神厄討艦隊の旗艦を担っているらしい。護神厄討艦隊の中でも血が滲むような努力を積み重ねて艦隊に所属した艦娘で、類いまれなる才能を持ちながらも日々訓練で努力し続けている。艦隊の中でもトップクラスの実力者であり、尚且つ摩耶と同じく珍しい常識者な為に旗艦に選ばれたとか。あの戦闘狂の集団をまとめているので、常時緊張が絶えないと叢雲自身は笑いながら言っていた。

「成程……そこにはどうやって入るのだ？」

「何だ？ 目指してるのか？ 今のお前じゃ絶対に無理だぞ」

「無理だとしてもこれからだ。早く教えてくれ」

どうやら長門はその艦隊に所属希望らしい。目を見るからに強くなりたいたいという野望が見て取れる。前任の経験を得て、余計に引き下がれないのだろう。この鎮守府の艦娘達を護る為に強くならなければならぬという使命が長門の中で燃えている。

「正直、俺にも詳しい方法は分からない。だが戦果が全国民から賞賛の声が上がるような物であれば誘いを受ける事もあるだろうな。とにかくだ、強ければ強い程いいって話だよ」

「……成程、了解した」

長門は最低限の会話で済ませ、執務室を去っていった。恐らく鹿島に訓練を申し込むのだろう。その方が目標により近づく。とはいえそれは茨の道だ、鹿島は容赦なく艦娘を叩きのめして育てる狂乱者。そう上手くはいかないはずだ。

「多分後で鹿島にボコられるだろうなあ」

「でしょうね、あの鹿島さんなら尚更です。司令、書類書き終わりました」

「グットタイミングだ不知火、まあ訂正箇所は無いな。さて……一度阿賀野達の様子を見る、ついてこい」

「分かりました」

提督と不知火は執務室を抜け、阿賀野達の部屋を目指す。今日も空は快晴、身を灼く程の太陽の光が海や鎮守府を照らしている。どの寮も部屋は勿論、廊下にもエアコン完備。どこへ行っても涼しく気持ち良い風が通り抜けてくる。

「さて着いたな」

阿賀野達の部屋に辿り着いた二人。不知火がドアをノックし、阿賀野達の名前を順番に呼ぶ。しかし呼んでも全く応答しない。

「応答しない……?」

「寝てるのか? いや……」

寝てるにしては気配が全く感じられない。ドアの隙間からやけにモワツとした暑さを感じた。提督がドアノブに触り、捻って押そうとする。

「ドアが……開いている……まさか!」

提督が開いていたドアを蹴り飛ばし、阿賀野達の部屋へ入る。じわじわくる暑さと廊下からくる冷気が交互に入り込み、提督と不知火の傍を通り抜けていく。

「阿賀野さん達がいらない!」

「荒らされてるな……」

阿賀野達の部屋は荒らされていた。土足で入り込まれたのか足跡が目立っている。そして本は床に散らばり、椅子が倒れたまま微動だにしない。

「司令、完全に阿賀野達は攫われたものと断定します」

「大体の犯人は分かっている。■■達だろうな」

「これでは■■達は何を仕出かしてくるのか……分からなくなりましたね……」

「ちよつとまづい状況だな。俺がマジで休んでいる時にちよこまかと動いていたらしい」

阿賀野達を攫った犯人はすぐに分かった。恐らく■■達が企てた物だろう。鹿島との戦闘前、阿賀野は提督の目の前で土下座し、■■達が何をするのかを伝えようとしていた。前はノシロに邪魔され、今

度こそ聞けると思っていたが既に対処していたようだ。あの時倒れて四日間も寝込まなければよかったと提督は後悔した。しかし後悔しては前には進まない。即座に提督は頭をフル活用し、次の策と計画の練り直しを考える。

「戦争も近い……摩耶に伝えろ、準備しろってな」

「了解です。司令はこれからどうしますか？」

「執務室にて仕事をするよ。不知火も摩耶に伝えた後に来なさい」

116. 悪辣なる孤立無援のヘルリークリーク

「元■■■■鎮守府金剛型戦艦三番艦、榛名。面会だ」

阿賀野達が攫われた事を知って一日が経ち、提督は大本営に来ていた。勿論訪問理由は深海棲艦のスパイである彼女との面会。秘書艦に浜風を連れ、面会室で待機していた。

「やあやあ榛名君、お腹の調子は如何かな？」

「また貴方ですか……話す事はありませんよ」

提督の顔を見て、ため息を吐く榛名。また同じ事を聞かれるのだから、話すのが嫌いだというのに強制的に面会させられるのは腹が立つ。仕方なく榛名は椅子に座り、提督と面会した。

「なアに今回は少し違う話だあ、■■■■について聞きたい事がある」
「断ります」

「いいや断れんぞー？ まだ時間はたっぷりあるんだからな」

今回は少し多めに時間を取っているらしい。しかも拷問紛いの尋問が可能という理不尽なオプション付き。今の榛名は艦娘専用の拘束器具で手足は身動きが全く取れない。歩く際だけ解除されるが、それ以外はまるで鉄のように硬く、破る事は不可能。故に何をされても抵抗が出来ないのだ。

「私を尋問したって無駄ですよ」

「さてどうだろうなあ、やり方次第じゃ君が腰を下ろす羽目になり、アンアンと喘ぎながら重要な事を吐くかもしれないぞ？」

「へえ、そうですか、本当に私を満足させてくれるんでしょうかね？」

「え？ どうしたんですか二人とも」

いきなり全く関係のない話が展開し、戸惑う浜風。提督と榛名はガラス越しに言い合いになった。

「当然だ、俺はやる時はやる男だからな」

「やるのヤが片仮名です提督!!」

「そういう事を言う人は大体やる前から緊張して、結局挿れるのが下手なタイプ、ですよね？」

「いや榛名さんもどうしたんですか!？」

どうにかして二人を押さえようと浜風は言葉をかける。

しかし二人の耳には全く届いていない。

「んんんな訳ないだろ、おおおお憶測がいい加減だ」

「慌て過ぎですよ!!」

「度胸が無いですぬ、どうしました?」

「榛名さんは一回落ち着いてください!!」

突然立ち上がり、屈んで腰を振る提督。榛名はニヤニヤしながら提督を追及している。これでは立場が逆転だ、浜風は大きい声を出した。

しかし――、

「貴方が一番落ち着きなさい、白髪巨乳娘」

「そうだ落ち着けよ、白髪巨乳娘」

「何で私が言われるんですか!!」

遂に浜風の堪忍袋の緒が切れたのか、提督を思い切りぶん殴った。提督は机に腕を乗せ、身体を震わせながら榛名に話し掛ける。よく見れば提督の頬は赤く腫れていた。

「と……とにかくだ、洗いざらい吐け。時間が……勿体ない」

「それは私にとって都合のいい事ですので黙秘します」

榛名は背後から籤を取り出し、髪をとかし始めた。

異様な光景に提督と浜風は言葉を失う。

「……………こつて化粧道具ありましたっけ」

「要望言ったらアリでしたよ……はあ、何かここ暑くありません?」

「知らんわ」

次に奥の扉から見張り役の男が現れ、被っていた帽子で榛名を扇いだ。提督と浜風は頬を引き攣り、呆然としている。

「既に営倉内の男達を手懐けている……」

「脱獄出来るんじゃないコレ」

――荒くれ鎮守府

「司令！」

「ん、秋月達か」

大本営から戻ってきた提督と浜風は執務室に戻る途中、秋月四姉妹に出会った。時間は昼十五時、そろそろ夕方になる頃である。提督は手にまた違和感を感じた。

「お身体は大丈夫でしょうか……？」

「心配せずとも既にこの通りだ」

腕を広げ、己の身を証明する提督。自身は何にも問題ないと豪語している。とはいえ目にはクマが出来ており、声も少しガラガラだ。本当に大丈夫なのか、秋月達は更に問い詰めた。

「ほ、本当に大丈夫なんですか？」

「体調は優れてるんでしょうか？」

「吐血していただろう、心配すると言われても心配してしまうんだ」
吐血した提督を運ばれた後、バーベキューは何分か続いたが、食料が無くなったの最後に終わったらしい。秋月四姉妹は勿論食べ終えたが、提督が倒れた事により、それ程味を覚えていない。

「はあ……本人が大丈夫って言ってんだから大丈夫だ馬鹿共。心配しなくても俺はそんな事で死にやしない。それよりバーベキューは楽しかったか？」

「え？ は、はい！ とても楽しかったです！」

「提督には感謝してもしきれません！」

とはいえバーベキュー自体はとても楽しかったようだ。初めて様々な人達と話しながら食べる事が出来て良かったと言う。前に着任した秋月四姉妹や磯風四姉妹、大和や武蔵は憲兵や整備士達と交友関係が広がっているようだ。こここの鎮守府の艦娘も少なからず成長している者もいる。やって良かったと言うべきだろうか。

「ならよろしい。今後もやりたい事があれば随時言いたまえ。いつでも待ってるぞ」

「はい！ ありがとうございます！」

秋月四姉妹が去っていく姿を見届け、提督と浜風は執務室へ向かう。廊下内で提督は伝えておくべき事を先に浜風へ伝えた。

「浜風、悪いが今夜も執務室にこもる。夜の警備は灰色と協力してくれ」

「分かりました……本当に大丈夫なんですか？」

「大丈夫だ、心配するなとつい先程言っただろうに」

「提督！ 提督！」

次に飛龍と蒼龍が現れ、提督を呼び止める。急いでいたのか、息が荒れていた。仕方なく提督は振り向き、飛龍達の話を伺う。

「今度は何だ、飛龍、蒼龍」

「今日って時間あたり、する……？」

「すまないがこれから俺は仕事だ、それに今夜も執務室にこもらなければならぬ。他をあたってくれ」

「じゃ、じゃあ！ 今じゃ……ダメ……？」

今では駄目かと小さく願う飛龍と蒼龍。目をうるわせて下から視線で見つめている。提督は腕でその視線を隠した。どうやらこの二人はどうしても提督に用があるらしい。

「司令、大丈夫ですよ。来るまでは私達が何とかします」

「はあ……仕方あるまい。で、何だ？」

「やったあ！ ありがとう浜風！」

「そうと決まれば提督！ 出来れば私達の部屋に来て欲しいんだけど……」

一回浜風と離れ、提督は飛龍と蒼龍に連れていかれた。三人が向かった先は空母寮にある飛龍と蒼龍の部屋。また面倒臭い事なのではと提督は愚痴を吐いた。

「何かまた面倒臭い事だったら逃げろぞ」

「面倒臭くないって！ 飽きさせないよ」

いや飽きさせないってどういう意味だよ、と心の中で思いつつ部屋の中に入る提督。以前初めて入った際の飛龍達の部屋は綺麗に清掃され、美しい和室となって蘇っていた。ボロボロだった畳は新品に張り替えられ、壁の汚れは消えている。流石の潔癖症の提督も許容範囲内の綺麗な部屋だった。

「まあ部屋は片付けたんだな」

「あんなボロボロの部屋なんて住みたくないからね」

「畳も張り替えたんだよ！」

自分達の部屋をこれでもかと自慢する辺り少しタチが悪い。あまりにも元氣過ぎて返答に困る。部屋の入ったのはいいものの、何をするのか分からない提督は飛龍と蒼龍に尋ねた。

「部屋に来たんだが、何をするんだ」

「実は……ちよつとしたお礼がしたくて提督に来てもらったんだよ
ね」

「お礼？ 何かお前らにした事あったか？」

「とろいなく提督うく。嘘嘘！ 冗談だよ……一回横になってほしい
かな」

「はあ？ 横になれつてか」

飛龍の指示通り、提督は身体を横にする。寝た体勢で何をするのか余計に分からない。そこに頭を持ち上げられ、下に二つの太腿が現れた。

「膝枕か」

「うん……どうしてもしたくて……」

飛龍の膝枕だ。自身の太腿に提督の頭を乗せ、白く長い髪を撫でて
いる。前には蒼龍が正座して提督の顔をまじまじと眺めていた。

「私達ね、嬉しかったんだ。提督に仲間って認めてくれて……言つて
くれたよね？ 嫌われ者同士仲良くしていこうつてさ」

「あーそんな事言ったなー、あんまり記憶に無いけど」

提督と初めて会った日の事を飛龍と蒼龍は忘れていない。最初は
凄まじい暴言の嵐で責め立てられ、怒り狂った事がある。その後は前
任が深海棲艦のボスだという事を知り、自分達の境遇に共感してくれ
た。実はあの時、飛龍と蒼龍は本当に嬉しかったのだ。

「あの後私達も頑張ったんだ。皆と打ち解けるようにイメージアップ
とか話し合ったりしてさ。前とは仲の良さが全く違うんだよ」

「本当に提督には感謝してるの。だからそのお礼に膝枕なんだー……
どう？ 嬉しい？」

提督ら目を瞑り、二人の話を黙って聞いていた。あまりの心地良さ

に眠気が来てしまう。思わず寝落ちしそうな程だ。ここ数日間はずもに寝ていない分、眠気が来るのは仕方ない事かもしれない。

「悪くはない」

「かつく！ 流石提督だね、厳しいったらありやしない」

「寧ろ膝枕を受けてもらっている事をありがたく思いたまえ」

「充分ありがたいよ、提督。次は私ね」

膝枕の交代が蒼龍に変わり、飛龍が次に見つめる番となった。大きな窓に太陽の光が差し込む。提督の脚辺りを照らし、畳が黄金色に輝く。冷房の効いたこの部屋でその光は妙に暖かく感じた。

いつからだろうか、誰かに膝枕をされたのは。とても懐かしい感じだった。

包容力があり、優しさに溢れている。思わず身を委ねて寝てしまいそうな感覚だ。

つい、あの時の事を思い出す。

「……随分とかしこまってるなあ、そんなに俺の事が心配か？」

膝枕が交代した時から沈黙が続いていた。ただひたすら頭を撫で続け、白く輝く髪をとかしてくれている。飛龍はずっと提督の寝顔を眺めていた。目を瞑って周りが見えていなかった提督は沈黙を破って飛龍と蒼龍に話し掛ける。

「当たり前じゃない。一番信頼してる人が急に血でも吐いて倒れたら誰だって心配するよ」

「私達……提督が失うのが怖いんだ。折角私達を導いてくれた人が急に居なくなるのは……とても……怖いんだよ」

飛龍と蒼龍は提督の喪失を恐れていた。あの時提督が吐血して倒れた場面を目撃していた二人は提督を失う事に恐れて固まっていた。身体を震わせながら、自身が想像した最悪の未来が起こりそうな時を見て恐怖したのだろう。それだけ二人は提督の事を信頼していた。

「だからこうやって少ない時間でも休憩出来るようにお礼も兼ねて膝枕してるの。少なからず提督には感謝してるからね」

「私達は提督の味方だよ、皆は嫌ってるかもしれないけど私達は提督が好き。だから……あまり無理はしないで」

余程提督を心配していたと聞き受けられる。まさかこの鎮守府の艦娘の中で自分を心配するような艦娘がいるとは提督自身も全く想像していなかった。何故だろうか、鳥肌が立ってしまった。流石に断るのは状況から考えて駄目だと思った提督は答える。

「……肝に銘じよう」

「うん……ありがとうね、提督……」

「さて……そろそろ時間だ」

提督がいきなり起き上がり、蒼龍の胸に下から正面衝突したのは内緒の話。

「えーもう？ そんなに時間経ったー？」

「悪いがああの馬鹿共が残した仕事が残ってるんだ、また今度にしてくれ」

提督は軍服についた埃を取り払い、ドアへ向かおうとする。その姿を見て飛龍と蒼龍は手を広げて左右に動かした。

「分かった……いつでも待ってるよー！」

「ありがとねー！ 提督ー！」

飛龍と蒼龍の部屋を出て、提督は執務室へ向かう。執務室には灰色と時雨、浜風が溜まった書類を潰しており、提督は仕方なく仕事に取り掛かった。

夜十九時。

提督は先に執務室にこもり、灰色と時雨と浜風は追い出された。歩きながら話をし続け、食堂へ向かう。いつも通り食堂で定食を貰い受け、艦娘達と楽しく話し合った灰色。少し味噌汁に違和感があるものの、気にしないでそのまま飲み干した。

夕飯が終わり、消灯時間まで自由に行動する艦娘達。灰色は時雨と

浜風で夜の警備をする為、交代する時間を話し合った。時雨、浜風、灰色の順となり、各自身だしなみを整えて消灯時間を迎える。

そして——朝。

「……誰も来ないな、寝坊か？」

執務室にこもっていた提督は朝早くから仕事に集中していた。しかし、朝八時になっても誰も執務室に来る気配が無い。また寝坊したのかとスマホで摩耶に電話するが、全く応答しなかった。仕方なく昼ご飯まで提督は書類潰しに時間をかける事となる。

「チツ………つたくアイツらめ………会った次第にぶん殴るぞコノヤロー………ん？ あれは？」

ようやく仕事が終わわり、頭を掻く提督。半分イラつきながらも、食堂に向かった。寮と寮との連絡通路を渡っていたその時、前にプリンツが歩いていった。

「おーい何してんだー？ プリン——」「チツ」

腹いせついでに煽ってやろうと声を掛けた途端、プリンツに舌打ちをされた。凄まじい程の豹変ぶりに提督は頬を引き攣る。思わず罪悪感を感じてしまった。

「………何でアイツ、舌打ちしたんだ？ 新手の反抗期か？」

結局舌打ちをされた意味すら分からず、提督は食堂へ向かう。食堂内はいつもの騒ぎようが外から聞こえた。少しばかり静かに聞こえるも騒いでる事に変わりはない。提督は黙って食堂の扉を開いた。

「………」

何かがおかしい。

提督が来るなりうるさかった食堂内がいきなり静かになった。まるで氷のような冷たい視線が提督に集中する。早めに食堂を利用していた憲兵や整備士もいない。明らかに何か不自然だ。

提督は冷たい視線が集まる中、カウンターまでゆっくり歩く。見渡す限りは艦娘しかいない。しかもその艦娘全員が提督に嫌悪の眼差しを送っている。

「鳳翔ー、いるかー?」

「……何ですか」

奥の厨房から鳳翔が現れた。背後から見えてくる艦娘同様、声が冷たく感じる。まるで敵視されている様な感覚だ。

「いや何ですかって、昼ご飯だからいつもの——」「そんなものありませんよ」

提督の声を遮り、鳳翔は冷たく答える。

一瞬理解出来なかった提督は再度鳳翔を問い詰めた。

「……ん? どういう事だ?」

「貴方に出す物はありません。さっさと帰ってください」

「へえー、じゃあそこにある鍋の中には一体何が入ってるんだ?」

鳳翔は棘のある言い方で提督を帰らせようとしてくる。提督が反抗するなり、背後にいる艦娘達がヒソヒソと話を始めた。クスクスと嘲笑う声や憎悪を向ける声が重なって聞こえる。

「はあ仕方ない……分かった」

鳳翔に出す物は無いと言われ、呆気なく提督は帰る事にした。まだ冷たい視線が提督を包み込む。そんな途中に座っていた時雨が提督を転ばせようと足を出した。

「えっ? うわッ!」

しかし提督は突き出した時雨の足を自分の足で下から搦り取る。そして自分の足で搦った時雨の脚を片手で掴んだ。時雨は逆さまにぶら下がり、スカートが逆さまになり下着が見えかけた。

「おっと時雨く、人の足に掛ける時はちゃんと力入れないとダメだぞ? あくでも馬鹿だから分からなかったか? ごめんなく!」

「ッ!! こッの!!」

提督は手を離して、雑に時雨を下ろした。時雨はすぐさま起き上がり、提督に対して艦装を展開する。だが提督は帰ろうとしており、敵に対する時雨も見えないまま、後ろに振り向きもせずに手を振った。

「じゃあなく、薄ら馬鹿共く」

ボタン、と扉の音が重く響いた。食堂の外に出た提督はつい先程まで起きた経験を元に考える。

艦娘達の凄まじいまでの提督に対する嫌悪感とその変貌ぶり、憲兵や整備士の突然な消失、ありとあらゆる状況、場面、時を考え、提督は思い立つ。

「成程な……」

これから提督は思い知る事になるだろう。

この日を境に――、

「■■だろうな。上等だ……そちらがその手なら――」

死が天国すら思える地獄の戦争が始まった事を。

――俺も容赦はしないぞ……翔鶴!!」

■■の本当の名は翔鶴型航空母艦一番艦、翔鶴。全てを犠牲にして墜ちた悲しい艦娘の名だ。

117. さあ遂に戦端の幕は切つて落とされた

「恐らく俺がこもった時か」

昼十三時。

インスタントラーメンを食べ終え、提督は執務室で対策を練ろうとしていた。数々の資料を開き、机の上をファイルで埋めていく。それぞれの艦娘のプロファイル、過去十年間の海軍で起きた事件の記録と荒くれ鎮守府の記録、艦娘専用に使われる薬の種類。

艦娘達の提督に対する異常なまでの嫌悪感、たった一夜で翔鶴達が何か仕掛けた可能性がある。可能性が一番高いのはやはり薬だ。恐らく翔鶴達が切り札として隠し持っていたのだろう。

前にもこうなつた事例が他の鎮守府で二つある。

一つ目は土佐清水鎮守府。四国地方の地方鎮守府で、それ程目立つた戦果は取り上げられていない。だが六年前の春に、ある艦娘が艦娘にしか効かない好嫌薬を改造又は開発し、その薬を使用して鎮守府を運営していた■■中佐を自殺未遂にまで追い込んだ事例がある。薬を使用した本人曰く、「一人占めしたかったから」という野望故の理由だった。

好嫌薬が広まったのはこの事件から始まっている。この事件により、好嫌薬が日本中に出回つたとされていた。

そして二つ目は横須賀鎮守府。大都市東京を護る砦として数多くの艦娘が所属し、素晴らしい戦果を挙げ続けている鎮守府だ。この鎮守府でも艦娘が好嫌薬を使用し、司令官だった■■少尉が自殺した事例が存在する。使用した艦娘は「興味本位でやってしまった」と供述しており、即刻旧式解体法にて処理されている。

この事例により、大本営は好嫌薬は全国一斉に取り締まる事を決定。各鎮守府で秘密裏に出回っていた好嫌薬を徹底的に回収し、二度と使用出来ないように焼却された――、

――はずだった。

「あの嫌悪感からして好嫌薬を使っただろう。効果は確か——」
好嫌薬には改造によって効果が異なる物がある。

戦闘意欲の代わりに感情を操作し、ある一定の人物にだけ嫌悪感と愛好度を顕著に示す物。それぞれ艦娘によってその人物が好きか嫌いかわかりやすく、これまでの態度がまるで違うものとなる。

同じく戦闘意欲の代わりに感情を操作し、ある一定の人物にだけ好きという感情が嫌悪という真逆の感情になる物。これはその人物に対して好きであればある程に嫌悪がそのまま反対のモノとなる。

考えるならば前者が効果として妥当だろう。だがこの鎮守府の艦娘達が好きでも嫌いでもない提督に対して一斉に嫌悪感を示してくるのは効果としては似ているが少し違う。改造された好嫌薬をまた改造したに違いない。

またこれを使用するにはいくつか問題が生じる。

ある一定の人物にだけ嫌悪感を示す際、その人物のDNA組織を採取しなければならぬ。薬の改造時にそのDNAを組み込む必要があるからだ。二人が標的になるのなら、その二人分のDNA組織が必要になってくる。

ではどうやって提督のDNA組織を採取したのか。

答えは簡単だ。

この鎮守府では■医師しか取り扱える者はいない。

医務室で提督の治療を施していた■医師であればDNA組織を採取する事など自然に出来るだろう。恐らく好嫌薬の改造の為に■医師が提供した可能性がある。

もし■医師が翔鶴達と協力しているのなら、今頃は医務室にいるはずだ。

「入るぞ」

■ 医師を着き止める為に医務室に乗り込んだ提督。

横暴にドアを開き、中に入る。だが――、

「いない……地下はどうだ」

医務室奥の床扉を開いて中へ入る。

だがまた誰もいない。

詳しく隅々まで探してもその形跡は全く見つからなかった。

「まさか ■ 医師でさえも、か」

考えうる可能性としては三つ。

一つ目は提督のDNA組織を提供した ■ 医師は翔鶴達に匿われた可能性。

二つ目は翔鶴達が勝手に提督のDNA組織を採取し、 ■ 医師をどこかへ攫った可能性。

三つ目は翔鶴達が ■ 医師に提督のDNA組織を採取するよう強要され、提督に嗅ぎ付けられないように隠した可能性。

一番有り得る可能性としては一つ目だろう。話してきた中で明らかに翔鶴達の事を知っているような口だった。

だが引つ掛かる事もある。提督にこの鎮守府の未来を任せる様な ■ 医師がそんな容易く翔鶴達と手を組むのだろうか。

しかもそれ以前に他の人間や妖精達の気配が全く無いというのがおかしい。

普通は憲兵が寮の見回りや門前の警備などにいるはずが全く見掛けないのだ。

普段はうるさい工場も今日に至っては物音一つもしない。窓越しから見れば働く整備士達の姿も見えなかった。

「誰も……いない……」

あまりの不自然さに、次に提督は工場へ来ていた。窓越しから確認したように整備士や妖精達は誰一人してその場に存在していない。工具などは片付けられ、仕事終わりの様子だった。

「でもアイツらなら……!」

工場と一緒にある明石の部屋へ向かう。

急いで明石の部屋へ入るが、時すでに遅かった。

「チツ……荒らされてやがる……！」

阿賀野達同様、部屋が荒らされていた。折角提督と大鳳で掃除した綺麗な部屋が初めて来た時と変わらない元通りの散らかりようになっっている。蒼明石が寝ていた襖にも荒らされた形跡があった。

好嫌薬を開発、又は改造する上で一番に疑えるのは蒼明石だ。

蒼明石は改造した戦闘意欲促進剤を開発した張本人。この鎮守府の艦娘の記憶を洗脳し、艦娘を操れる程の薬を開発する艦娘だ。提督を仕向ける様に好嫌薬を改造する事など容易いだろう。

だが分からない。

では何故桃明石とあの蒼明石が工廠もとい、この部屋にいないのか。薬を改造した張本人ならば普通はこの鎮守府にいるはずだ。それを知らない桃明石といえど薬の餌食になっっているに違いはない。

いや違う。

薬を改造した張本人だからこそ、自分と接触して薬を改造した事が知られるのを翔鶴達は恐れた。だから翔鶴は二人の明石を■■■医師と同じく攫った可能性がある。

逆に攫われたかどうかも怪しい。どこかへ閉じ込めたか、最悪殺された可能性すらある。

「憲兵隊寮は、当然じゃないか」

憲兵隊寮にも人間らしき気配は無い。

その後も倉庫内も隈無く調べたが、人間は誰一人としていなかった。

「……」

提督は執務室に戻り、また対策案を考える。

憲兵や整備士、明石達がこの鎮守府にいない。そして――、

「アイツも、か」

灰色もいない。

普段は時雨と一緒にいる事が多い灰色や食堂で働く飛行場姫さえも食堂に来た際はいなかった。

スマホのネットワークは圏外、電話機も圏外。通信系は全てシャット

トアウトどころかジャミングされている。恐らくどこかに通信抑止装置か通信妨害機が設置されているのだろう。

外へ出れば、外部から応援が呼べるだろうか。
いや駄目だ。

門前には憲兵の代わりに艦娘が見張っていた。しかも壁の外にちよくちよく艦娘が通り掛かっている為に逃走は困難を要する。

もし翔鶴が自分を追い出す目的ならこんな真似はしないだろう。
であれば――、

「摩耶……いるか……？」

本来のパートナーの摩耶、部下だったプリンツ、川内、不知火しかない。出来れば摩耶は正気であって欲しい限りだが。

「……姉さんは貴方に会いたくないそうです。さっさと帰ってください」

部屋から鳥海が現れ、代わりに答えてきた。ゴミを見るような目でこちらを睨んでくる。明らかに提督の事を嫌っているようだ。ドアを強く閉ざされ、摩耶と会話すらさせてくれない。

仕方なく提督は次の場所へ向かった。

「よおプリンツ、訓練はどう――」「近付かないでくれませんか？」

プリンツに話し掛けるも、声を遮ってまで嫌悪の表情を向けてきた。流石に提督もイラツとなり、話を続ける。

「何で近付いちゃ駄目なんだ？」

「居るだけで気分を害するので」

「それはどんな気分なのかお聞せくださいな」

「見て分からないんですか？」

提督の方へ振り向き、プリンツは偽りの笑顔を見せる。よく見れば頬がひくついている。笑顔を見せるだけ精一杯のようだ。提督はニヤニヤとプリンツの額にデコピンする。

「相手に都合良く察してもらおうと思ってる時点でお前の考える事は薄過ぎるんだよバーカ。胸じゃなくて脳を柔らかくしましょうね」
すれ違いざまにプリンツの頭をポンと叩いて、提督はその場を去っていく。イライラを抑えていたプリンツは低い声で愚痴を吐いた。

「……Gelberが」

次に会ったのは不知火。

広場のベンチに座り、何か本を読んでいる。

「不知火く、訓練はどうし——」「消えてください」

「何かデジヤブ感あるんだけど」

「知りませんよ」

不知火は本をしまい、またどこかへ行ってしまった。

「結果はまあ……予想出来た事だな」

艦娘達とロクに話せないのは分かっていた事だ。嫌悪感が表に出ている時点で嫌な相手と話すのは誰でも拒むのが当然。このまま会話を続けてみても、耳を傾ける事すらないだろう。

だが逆にそれがいい。

提督はそもそも艦娘とは馴れ合うつもりは無い。前々は計画を行うまでに邪魔な話し相手が多かった。しかし話し相手が自ら居なくなるのはこちらとしても都合がいい。

——摩耶以外は。

「少し傷ついたがこんな状況だ、仕方あるまい……グハツ……！」

執務室内で吐血し、縮こまる提督。またあの時の激痛が提督を襲った。身体の内側から蝕まれるような感覚だ、何も喋る事が出来ない。

またペースが早くなってきた。またこもらなければならぬ。

「失礼するぞ」

執務室のドアを蹴破られ、堂々と中に入ると艦娘達。

入ってきた艦娘は総勢七名。木曾、最上、金剛、長門、天龍、時雨、電。

とても懐かしい面子だ。

確か提督と摩耶が着任した際に、初手から砲撃した艦娘達だ。

「何の……用だ……！」

「また衰弱している所申し訳ないが……ここから出てもらいたい」

「断る……！」

長門達の要望を即断で断る提督。息が荒れながらも壁に寄り添い、

ニヤニヤとした笑顔は絶やささない。

「お前のように我々を罵る様な奴がこの鎮守府にはいけない。拒否するならば強制的に立ち退いてもらうぞ」

「出来るものならやってみるよ……これは俺個人と大本営の元帥が決めた事だ……お前らが勝手に決められるような事じゃない」

既に長門達は艀装展開済み。提督を殺す気満々のようだ。抵抗すれば強制的に追い出されるか、その場で殺されるかの二択。

だが提督にそんな二択など存在しない。

「いいかー？ お前らは俺達に良いように使われてんだ……いい加減自覚しろよ。それとも何か？ ここ数ヶ月の怨みを今晴らす為だけに来たのか？」

「ならば……実力行使だ」

戦うつもりだ。

全員して砲口をこちらに向けている。

——ふざけるな。

——こちらら睡眠不足、謎の激痛、栄養失調による衰弱で死にかけてんだよ。

——こつちの方がめっちゃめちなハンデ背負ってんだ馬鹿共。

「やめてください、長門さん」

「ッ!？」

長門達の背後から翔鶴が現れた。立場が逆転した事により、余裕の笑みを浮かべている。この艦娘こそ鎮守府の支配者にして全ての元凶。艦娘達を洗脳させ差別意識の延長を施し、提督がこもっている間に好嫌薬を使用した。差別している側ならまだしも差別された側までも一気に懐柔して手懐け、味方に仕上げた真正正銘の頭脳派艦娘。今から提督をどう追い込もうかとも考えているのだろう。

「翔鶴……てめえ……!？」

「確実に追い出すなら……日々じわじわと痛めつけられ、いつの間にか逃げますよ……まあそれまでに——」

「――貴方が生きていたら、の話ですが」

「そうか……それもそうだな。分かった、撤退するぞ」

「精々頑張ってくださいね」

執務室のドアを直さずに長門達はその場を去っていく。提督は丁寧にドアを直し、やっとの思いで椅子に座った。天井を見上げて両目を腕で隠す。

「ハナから追い出すつもりなんて……無いくせによ」

提督 VS 鎮守府所属の艦娘全員。

提督側は一人、味方や救援は全て不可。

デバフとして睡眠不足、定期的な謎の激痛、栄養失調による衰弱。まさに孤立無援、断崖絶壁の状態。毎日艦娘達の暴言暴行を受け続けながら逆転の一手を探さなければならない。

翔鶴側は艦娘全員、総勢約七十名。

味方や救援は全て有り。

提督を思うがままに虐め抜き、殺すか追い出したら勝ち。

ただの大虐殺だ。

しかも決め手となる一手はまだ無い。

薬による効果が消える時間も分からない。

全てを一から探さないといけないのだ。

とても無謀且つ無理難題な戦争。最早逃げた方が得策とも思える。しかし翔鶴達はそれを許さないだろう。ゆつくりと慎重に、じわじわ痛めつけ、確実に殺しに掛かる。

「さあ、戦争は既に始まっていますよ……提督」

1118. 孤独な白い兎は縦横無尽に駆け回る

艦娘達に嫌われて一日が経過。

また執務室にこもり、朝を迎えた提督は準備をしていた。インスタントラーメンを食べ終え、白い軍服を身に纏う。拳銃の弾倉を確認、軍刀を朝日の光で輝かせる。

「さて……戦争だ」

完全武装状態で提督はある場所へ向かう。

ある場所とは地下営倉だ。

提督がまず考えたのはたった一夜にして憲兵隊や整備士達、■ ■ 医師や灰色、飛行場姫、明石達、阿賀野達が消えた事だ。あれだけの人数をどうやって一夜でこの鎮守府から消したのか。

もし大量虐殺なら血痕や臭いがまず残る。一夜という短い時間の中で清掃も見兼ねた大量虐殺など計算上では無理がある。必ずボロが出るはずだ、現実的とは思えない。

ならどこかへ見えない所に閉じ込めた可能性がある。大量虐殺をするよりも素早く簡単にまとめられる上に無駄な事をしなくて済むからだ。この鎮守府で見えない所且つ長い間を閉じ込められるような場所と言えば地下営倉しかない。

仮にどこかへ追い出したとしてもあの大人数の誰かは大本営にこの鎮守府に異常がある事を報告しにくはずだ。通信系を全て遮断しているのなら翔鶴はそんな事などさせないだろう。

「……やはりか」

司令本部の階段を降りていた提督は物陰に隠れて様子を見る。提督の視線の先には何も無い場所を朝潮が見張っていた。あの場所は階段の手摺を捻れば地下営倉の入り口が出てくる場所だ。誰かが見張っているというのなら提督の考察は当たっている。

「地下営倉に閉じ込められたようだな。あそこに見張りを置くようじゃ、閉じ込めてますよと教えてるものだろうに」

だがそれが厄介な事に変わりはない。見張ってなければすぐさま潜入して閉じ込められた灰色達を回収出来る。が、翔鶴はそれも考慮

して見張りを置いたのだろう。逆に見張りがいない状態で入り込めば罠がある可能性すら有り得る。一日に三回は確認した方が良さそうだ。

「おゝそこで何してるのかな〜?」

声を掛けられた提督。正面を振り向いた途端、突然目の前に誰かの足が突き出てきた。提督は身体を仰け反ってその足を避ける。

「提督〜」

「よお北上……調子は良さそうだな〜」

まず最初に仕掛けてきたのは北上と大井。

二階の階段出口を封鎖し、大井は下から階段で登ってきた。

「ううん、まだまだこれからだよ〜」

「逃げれるとは思わない方がいいですよ」

前と後ろから挟み撃ちだ。

どちらも艤装を展開し、暴行する気満々のようだ。

「見てるだけで腹が立つね、その顔」

「白い長髪とかまるで女っぽくておじいさんみたいですね」

「やめなよ大井っち〜、おじいさんに失礼だつて〜……こんな人間

以外だしくそれに〜」

「深海棲艦そっくりですものね〜。敵である深海棲艦が鎮守府に乗り込むなんて馬鹿すぎですね」

「ホントよホント! 汚らわしいわ!」

大井の隣で裏声を上げながら乗り気に自分の事を罵る提督。いつの間にか隣にいた事に気づかなかつた大井は思わず素で驚きの声を上げた。

「ふえっ!」

「なに……大井っちに触ってるのよ!!」

上にいた北上は跳躍して提督に襲い掛かる。提督は急いで駆け走り、北上とすれ違った。北上はすれ違いざまに殴打するも簡単に回避されてしまう。

「はい馬鹿〜! 上取ってりゃあ優位な状況変わらなかったのに、変なプライドで簡単に譲っちゃう奴〜! もう少し状況を考えてから

動きましよう〜！ バイバ〜イ！」

「ッ……こら待て!!」

提督は階段を登った後に左の角を曲がる。

下にいた北上と大井はその後を追いつけた。

ドアを閉まる音が聞こえる。

恐らく角に曲がってすぐの部屋に逃げ込んだのだろう。北上と大

井は口角を上げ、左の角を曲がろうとした――、

「フギヤ!!」

曲がった途端に突然ドアが開き、開いたドアにぶつかる北上と大井。あまりの衝撃に廊下の床に倒れ込んだ。部屋の中から提督が現れ、倒れる北上と大井を眺める。

「はい方向転換注意〜方向転換注意〜、ちゃんと左右を確認してから曲がりましよう〜！ つて事でじゃあな〜」

「うう……」

「痛い……」

北上と大井を上手く扱って提督は外の広場へ向かう。灰色達の閉じ込められた場所が地下営倉と決まれば、回収方法はいくつもある。

以前ノシロが地下営倉の天井を突き破って阿賀野達を襲った事がある。あの後突き破った天井はブルーシートで覆われ、工事準備のはずだ。

「あちやくやっぱ対策されてるな」

ブルーシートで覆われた所は分厚い鉄板で封鎖されていた。雑に四隅を金属杭で打ち込み、簡単には剥がれなくなっている。更にその上には巨大な岩が置かれ、潰け石の様な感覚で乗せているようだ。

「俺の力じゃどうにも——おっと」

提督が独り言を喋っている最中に砲弾が脚辺りを撃ってきた。提督はその砲弾を跳躍で回避し、砲撃した先を見る。提督の背後で爆発し、砂埃と瓦礫が宙を舞った。

「命中精度下がってるんじゃないか？ 長門」

「……」

砲撃してきたのは長門だ。

青い海を背景に艤装の砲口から砲煙が風で消え掛けている。

「外してやったのだ。命中精度が下がっていようが貴様に一回でも当たれば簡単に死ぬだろうからな」

「そりやどうでもいい気配りをどうも。深海棲艦と戦う時が楽しみだな」

「貴様がその深海棲艦だ。今度は足を撃つ、外さないぞ」

「手厳しいねえ〜！ どおれ当ててみるよ」

提督は両腕を広げ、自らに的になった。

長門は再度構えて、照準を提督の足辺りに定める。だが――、

「すまんやっぱ無理」

「あ、こら逃げるな!!」

提督が逃げる方向は戦艦寮、このままでは寮の建物に撃つてしまう。逃げる提督を長門は追い掛けた。戦艦寮の自動ドアを開いて中へ入る。それを見た長門は自動ドアの前に止まり、ゆっくりと入った。

「あら長門どうしたの？ 艤装なんて構えて」

「え、陸奥!! アイツを見掛けなかったか!？」

「アイツ……? ああ提督の事ね、提督なら……あらそこにいるわよ」

「ふーさてさて帰った——ええ!？」

二重の自動ドアの中に何故か提督はいた。

早速陸奥にバレてしまい、驚きの声を上げる。

「くそっ……待てグハツ!!」

開くはずの自動ドアが開かず、思い切り長門は自動ドアにぶつかつた。提督が上のセンサーを拳銃で破壊していたようだ、開くはずもない。

「全てが当たり前だと思うなよ〜！ じゃあな〜」

提督は長門が転んだ隙に外から逃げていった。長門はすぐ起き上がり、自動ドアを無理矢理こじ開けて提督を追いかけようとした。が外には誰もおらず、提督の姿は全く見えない。

それもそうだろう、提督は二階の窓から戦艦寮に侵入している。驚異的な跳躍力で開いていた窓から入ってきた提督。しかし提督は立

ち上がるどころかその場で蹲っていた。

「やっぱ使うと……激痛が来る……！　あまり使いたくないな……！」

謎の激痛に耐えながらも提督は立ち上がる。

寮と寮に繋がる連絡通路を使って執務室へと向かった。

「一回休憩だ……仕事でもして、身体を落ち着かせよう」

椅子に寄り掛かり、重い身体を休ませる。今日分の仕事はまだ残っている。調査を控えて気分休みに提督は仕事に取り掛かった。デスクワークをしている分、身体の負担は楽になる。いつもは早く終わる作業を少しゆっくと進めた。

「……監視、か」

窓の外から航空機が徘徊しているのが見えた。エンジン音を周囲に響かせ、執務室にいる提督を監視している。言わずとも犯人はすぐに分かった。

また鎮守府近海で激しい戦闘の騒ぎが聞こえる。恐らく鹿島辺りが模擬訓練の相手でもしてるのだろう。

「後は……倉庫内の確認か」

普段は秘書艦に任せていた倉庫内の確認を提督がじきじき動くようだ。紙を挟んだクリップボードを持ち、外にある倉庫へ向かう。途中艦娘とすれ違ったが、どの艦娘も言う言葉は罵倒ばかり。

「早く消えてくれないかな……」

「どうやって痛めつけようかしら」

「気分が最悪だわ」

だが提督は全く気にしない。自分より下にいる者の罵倒など子守唄に等しい。一々気にしている方が馬鹿なのだ。

「くっそ暑い……えーっと、鋼材は基準値クリアだな」

弾薬、鋼材、燃料は基準のラインを超えており、大規模作戦においては困らない程だ。艦娘が戦う上で資源は必要不可欠、毎日欠かさずチェックしなければならない。

第四倉庫もといボーキサイトの倉庫へ向かう提督。季節は夏な為に気温が砂漠地帯のように暑い。太陽の光が服を焦がす様に満遍な

くこの世界を照らす。白い軍服を着ている所為で服の中は汗で蒸れてしまった。提督は持つてきたペットボトルの水を喉が潤うまで飲んだ。

「よし……大方確認したな。帰るか——……またかよ」

背後から練習用の矢を撃たれた。提督はため息を吐いて背後を振り向く。だが背後には誰もいない。

「なるほど……弓矢で遠距離狙撃か」

矢が放ったのは恐らく空母、司令本部を越えて食堂の二階から打っているようだ。姑息にも誰が打ったか遠過ぎて分からない。しかも気付いていないと思ったのかまた矢を放ってきた。

「……」

提督は少し歩いてその矢を回避する。欠伸をしながら回避した途端、目の前に突然矢が壁に刺さった。目を見開いた提督は矢が放たれた方向に視線を移す。そこには弓を構えた加賀がいた。

「アレは陽動でこちらが本命と……普通に打てば良かったんじゃない？」

「普通に打てば今のように避けるでしょう」

「当然だな」

太陽の日照りが燃え盛る中、倉庫前にて二人は対峙する。

蟬の音がうるさく聞こえてきた。

「早く消えてくれないかしら、目障りなのだけけれど」

「だったら今すぐ部屋の中に逃げ込むといい。俺の顔を見なずに済むぞー」

「意味分かってるのかしら？ 早くこの鎮守府から消えてって言うてるの」

「相変わらずの言葉足らずで安心したよ。まさかあの時から全く上達していないとは驚いた。意味が分かってるのかって？ お前こそ意味が分かってるのか？ 目障りって意味は見て不快だという意味、つまりは視線に入れなきゃいい話なんだよ。わざわざ俺と話す為に視界に入れて目障りって馬鹿過ぎるんじゃないの？ 被害妄想もそれぐらいにしとけ」

弓を構える加賀を置いて、提督は執務室に帰ろうとした。

が、加賀は矢を放ち、提督の歩みを止める。

「屁理屈ばかり言って楽しいのかしら」

「ああ楽しいさ。お前らの怒りの表情を見るだけで笑いが止まらなくなるね」

「減らず口もそこまでです」

「はいはい、煽られて怒っちゃうのは気持ち分かるけど落ち着きを見せようぜ！　どんだん姿が惨めに見えてきちゃうからさー！」

半分笑い気味で加賀を窘める提督。静かに怒りに燃える加賀を見て嘲笑っているようだ。まさに火に油を注ぐ行為、嫌いな人から煽られたとなればその怒りは凄まじいものだろう。

「殺すわよ」

「殺してみろよ、と言いたいけど用事あるから帰るわ！　じゃあなー！」

提督は地面を強く踏んで土煙を発生させる。地面がひび割れて破片や瓦礫が舞い上がった。加賀はその土煙に噎せて咳を吐きながらも突進。加賀の殴打で煙幕は晴れ、広場が見えた。

「いない……!?　くっ……どこへ!!」

一方で提督は倉庫裏に逃げ込み、身体を休ませていた。力をまた使ったおかげで身体全体に激痛が迸る。提督は悶えながらも何とか身体を抑えようと蹲った。やがて激痛が治まり、提督は立ち上がる。「さて……帰るとしよう……」

そこからまた苦難の連続だった。

司令本部の建物にある自動ドアをくぐり抜け、中に入ろうとした途端に古鷹と加古が左右から襲ってきた。

提督は屈んで回避し、古鷹と加古を衝突させる。

「遊んでねえで訓練しろよ……ったく……」

次に廊下内で五十鈴と出会った。五十鈴はすれ違いざまに提督を転ばせようと足を出す。

しかし提督はわざと踏ん張って逆に五十鈴を転ばせた。転んだ五十鈴をスマホのカメラに収め、カシャッと写真を撮る。

「逆にお前が転んでんのかよ、ウケる」

また次に女子トイレに隠れている磯風四姉妹が近くに通り掛かる提督に水が溜まったバケツを放り投げた。

しかし提督は見向きもせずに一歩後退して大量の水を回避。ペットボトルの水を逆に浴びせた。

「せめてそれは外でやれよ、あそこ掃除なく」

またまた次に斬りかかってきた木曾のサーベルを軍刀で殴り、サーベルを壁に突き刺させた。そして木曾の足を掬い、軍刀を鞘に収める。突き刺さったサーベルを手に取り、床に転んだ木曾のマントにもう一度突き刺した。

「お前は一度、鹿島にボコってもらえ」

執務室に帰るまで学校のいじめの様な行為が後五回も続いた。その度に提督は難無く回避し、余計な一言でその場を去っていく。

「ああく流石に構いきれないな」

既に昼十五時、そろそろ夕方になる頃だ。艦娘達の執拗な嫌がらせを尽く回避し続けた提督。余裕の表情はしていても疲労は限界にまで達していた。

「あそこまで構ってくる逆に人気説ありそうだ」

1119. 真夜中に潜む狩人には要注意

艦娘達の嫌がらせは夜になっても続く。いつもは灰色や憲兵達に任せていた夜の警備を提督が自ら行っていた。外では夜の星空が広がっており、月の光が太陽の様に輝いて窓から光が差し込んでいる。懐中電灯で廊下を照らしながら、完全武装状態で各寮を見回っていた。

「夜だろうと見張りは怠らない、と」

地下営倉の入り口である司令本部の階段を懐中電灯を消して覗く提督。消灯時間を過ぎてもなお艦娘が見張っていた。今度は暁が首をコクコクと縦に動かし、その場から周りを見張っている。

「あれ見張ってんのか？ 寝てね？」

明らかに眠っているような仕草をしている。今のうちに入れば回収出来る可能性が出てきた。が、地下営倉の入り口は開くまでに大きい機械音が鳴り響く。例え寝ていたとしても目を覚ましてバレルのが必然だろう。

「ん？ 待てよ。静かにヘッドホンを付けて音防げばワンチャンスあるぞこれ」

手をポンと叩いてある作戦を思いつく。暁が目を覚まさないうちに静かに忍び込み、ヘッドホンを被せれば機械音はあまり耳には入らない。

提督は執務室の監視室にあるヘッドホンを取り出し、地下営倉の入り口がある階段まで向かった。忍び足で音を立てずに一歩ずつ階段を一段一降りていく。木材の軋む音が微かに聞こえるが、暁は全く動揺しない。やがて階段を全て降り終え、暁の所までまた忍び足で歩み寄った。

だが――、

「ヒィッ!!」

突然曲がり角の死角から矢が飛んできた。女性のような悲鳴を上げた提督は急に身体を伸ばしてその場に立ち止まる。壁に張り付き、打ってきた方向を覗いた。

「提督、そこにいるんでしょ？」

「隠れてないで出てきなよ」

飛龍と蒼龍が弓を構え、提督の事を睨んでいた。仕方なく提督はその身を二人に見せ、静かに二人を睨み返す。

「提督の事だろうからそんな事するんじゃないかなって思った」

「姑息で狡猾な手口を使ってくるからね、分かりやすかったよ」

どうやらこの二人も提督の事が嫌いのようにだ。実際に弓矢で攻撃してくる辺り、本来の二人はそんな事などしない。恐らく昼の遠距離狙撃もこの二人が犯人だろう、飛龍と蒼龍の矢の命中精度は加賀にも勝る能力を持つ。

「……昼時の遠距離狙撃もお前らだな？」

「ご名答！ 流石提督だね」

「アレは惜しかったなく」

提督を置いといて飛龍と蒼龍は楽しく話し始める。堂々と昼間の事を認めたようだ。と言っても弓矢を持つ艦娘はこの鎮守府でごく少数しかいない。更に尋常ではない命中精度となれば特定は簡単だった。

「……いいように裏切られたな、俺も」

「あ、もしかして前の事信じてたの？ あんなの嘘に決まってるじゃん」

「やめてよ？ 本気で気にしてるとかキモいから」

好嫌薬を使われてもなお、飛龍と蒼龍は先日の事を覚えている。都合良く記憶が改竄されている可能性を示唆していたが、どうやら見当違いのようだ。飛龍と蒼龍は先日の言葉に身体を震わせ、何故言ったのか自身で理解していないらしい。

「いや……大丈夫だ。俺もたった今大嫌いになった所だ、心配せずとも俺から近付く事は無いぞ、じゃあな」

提督は手を広げながら余裕気味に二人に宣告する。そして手を振らずにその場を去った。先程の階段を駆け上がり、姿を消していく。普通であれば嫌われる事など子供の戯れと思ってい嗜んでいたが、あの二人に対しては何故か少しだけ心が苦しかった。

「あくやっといたよー」

「ん……—ツ!？」

突然曲がり角の死角から誰かに蹴られた提督。左腕で蹴りを防御し、衝撃で廊下内を引き摺る。防御した左腕から煙が出ていた。

「敵発見」

「川内か……!」

超絶夜戦好き軽巡洋艦、川内が登場。格別目が冴えているのか、黒い目が淡く輝いている。既に艤装展開、戦闘準備は万端のようだ。

「いや〜目が覚めててさ〜、何か楽しい事無いかなくて色々暇してたんだけど……ちようどいいのが居たね」

「そのまま眠ってりやよかつたのによ……!!」

まさか川内でさえも翔鶴側とは流石に予想が当たって欲しくなかった。休暇中の川内は昼夜共にずっと寝ているはずだ。だがあの一夜の時に川内は夕食を取っていたらしい。何という偶然だろうか、流石に面倒だ。

「いや〜翔鶴から聞いたんだけど、何でも提督を痛めつければここから追い出せるそうじゃん？」

「追い出してくれたら話だけだな」

「だから〜、私も夜の間は参加しようかなって思ってるんだよね〜」

あまりにも厄介過ぎだ。ただでさえ普段でも面倒臭い性格をしているというのに好嫌棄で更にその面倒臭さがパワーアップしている。夜の間という艦娘との遭遇率が低い圧倒的なチャンスの時間を一気に破壊してきた。

「相変わらずの性格の悪さで安心したよ川内、さぞかし殲滅された深海棲艦は悔しがってるだろうに」

「提督もその深海棲艦の一人になるんだよ!」

「それは不名誉な事だな!!」

接近する川内に提督は懐中電灯を目の前で点灯。強い光にやられた川内は目を手の平で覆い、喚き声を上げた。提督は川内がのたうち回っている内に颯爽と逃げ去っていく。その喚き声を下で聞いている暁が階段を登ってやってきた。

「どうしたの!? 川内さん!」

「あ、暁……? くっ……! やられた……! どこへ行ったの!」

「司令官は……見てないわ」

「私は大丈夫だから……見張りをしているよ……暁。少し部屋に戻るね」

逃げた提督は執務室に避難していた。まだここは何も嫌がらせはされていない。だがじきに何かしら嫌がらせが来るだろう。これもそれほど安全では無い。

「流石に危なかった……明日も調査続行だな」

艦娘達に嫌われて三日が経過。

今日も今日とて提督は調査を続ける。艦娘達の執拗な嫌がらせを回避しながら、何事も無かったかのように提督は鎮守府内を駆け巡った。

「ん〜意外に通信系が使えないのは痛いなあ〜……」

通信機器系等は全て遮断された上に妨害も施されている。外部との連絡は不可能、応援要請も呼ぶ事が出来ない。スマホが使える所とさえも時間確認だけぐらいである。

「探すか〜……」

提督が次に探すのは携帯電話の妨害機。この鎮守府のどこかに設置されている妨害機を破壊又は回収しなければならぬ。提督といえど約七十人の艦娘を相手に長期戦に持ち込むのは無理がある。ただでさえ体調不良などの数々のデバフを背負いながら艦娘達の嫌がらせを回避しているのだ。この嫌がらせがエスカレートすれば身体は持たない。

「しかしどうやってジャミング出来るような機械を持っていたんだ?」

問題は何故そのような高等な機械を持っていたのか。確かに今の時代でもネットで普通に妨害機を購入出来る。だがそれ以前にこの鎮守府のネットワークはこちらから遮断していたはずだ。提督が使う時に繋いで使用出来るようにしている。しかし今回に関してはそ

のネットワークは完全に遮断されていた。

「事前に持っていた可能性……にしては上手く行き過ぎているな」

誰かが仕掛けたであろう廊下内にある転倒用の紐糸を軍刀で斬って回避する。何重にも仕掛けられた紐糸を見ずに斬っていった。

仮に事前に持っていたとしても都合が良過ぎる。まるでこの時の為にとっておいたような使い方だ。

「いや、以前にも使っていた？」

前任が艦娘以外の軍関係者に携帯電話等を使わせない為に使用していた可能性。自身がやってきた犯罪の数々を外部へ漏れさせない為に妨害機を使ったのかもしれない。だがそれでは前任自身の携帯電話も使えなくなる。謎は深まるばかりだ。

「どちらにせよ破壊しなきゃ進まないだろうな」

「何を破壊するだつて？」

「……天龍か」

軽巡察の廊下を歩いている最中、天龍に声を掛けられた。

艤装を展開し、大太刀を肩に掛けている。

「何を壊すんだ？ クソ野郎」

「そうだな……この鎮守府、とか？」

「ははっ、そりゃ面白い冗談だな。さっさと見え、斬り刻むぞ」

提督の冗談に笑いながらも真面目な表情で脅してきた。

天龍は大太刀を提督に目の前に突きつける。

「せっかちなあ〜もう少し許容したまえ、カルシウム不足だぞ？」

「俺は言えつて言ったんだ、てめえの御託に付き合ってる訳じゃない」

「胸がデカイ奴はプライドもデカいとよく言うが、まさにこの事——」

天龍は勢いよく大太刀を振り下ろす。爆発音のような音が廊下内に響き、土埃と土煙が舞い上がった。フローリングの床がボロボロになるほどの威力だ、生きているはずがない。だが——、

「……ただ力任せに振ればいいってもんじゃないぞ……天龍」

「ッ!? 何を!？」

床に食い込んだ天龍の大太刀を踏みつけ、更に床へ食い込ませる提督。床の破片が飛び散り、土煙が遠くへ霞んで消えていく。踏まれた

事で大太刀が抜けなくなつてしまった。更にはアイマスクされ、周辺が見えなくなる。そして大太刀を持つ手に何か違和感を感じた。

「何してゐるてめえ!! ちょお前! やめつ、何やってんだやめろ!!」

すかさず天龍は空いた左手で前にいるであろう提督を殴りにかかった。が、見えない相手を殴れるはずもなく、空振りばかり起こしている。提督は口笛を吹きながら、天龍の右手に細工を施した。

「よーしこれでまともには動けんだろく、つて事でじゃあなくイキリ眼帯君」

「待て! せめてこれ外せよ!! 本当に行くのかオイ!? 待て、待てよ!! オイ!!! ちくしよおおお!!」

アイマスクも外されなのまま、そして大太刀を持つ手がガムテープで固定され、その場から動けなくなつてしまったまま天龍は放置された。大太刀は床に深く食い込んでおり、力を入れても全く抜ける気配が無い。提督はそのまま逃げていった。

「ここはどうだ?」

提督がいるのは寮と寮を繋ぐ連絡通路。この連絡通路は駆逐艦寮、軽巡察、重巡察、戦艦寮を繋ぐ複合型連絡通路だ。寮の建物の間にある第二広場を跨いで設置されている。その連絡通路の屋上を提督は調査していた。

「まあ流石にこんな分かりやすい所には無いか」

普段はこの屋上も使われており、程よい涼しげな風が流れる事が多い。艦娘達も設置されたベンチで話しながらこの連絡通路の屋上をよく使う事がある。現に今、最上と鈴谷と熊野がベンチに座っていた。

「うわっ独り言とかキモ」

「触らぬ神に祟りなしですわ、見ちやダメよ」

「しつつかし、見ただけで気分が最悪だね……何で消えてくれないのかな」

提督を見るなり三人は陰口を挟む。提督を汚物のように見下し、ヒソヒソと話し合っているようだ。提督は何を言われても動じない。そんな言葉を気にするよりも、解決策を見つける方が有意義だ。こん

な連中に関わる時間が勿体ない。

「……」

「反応無しか、つまんないの」

「だったらさ……」

妨害機は恐らく翔鶴が持っている可能性が高い。普通から考えてそれしかないだろう。貴重な手段をみすみす手に離すなど翔鶴がやる事ではない。

提督に聞こえないように手で防いで何かを伝えている。話がまともだった途端に不気味な笑い声を抑えて出していた。すると鈴谷が突然立ち上がり、提督に歩み寄る。

「ねえねえ提督、ちよつとやりたい事があるんだけど」

「断る」

「あれあれ？ 私達がやりたい事に関してはいつでも受け入れる方針じゃなかった？」

「いつでもとは一言も言っていない。勝手に言葉を改変するなエセJK」

嘲笑いながら提督に問い続ける鈴谷。そして周辺を囲う最上と熊野。提督は鈴谷の方に振り向きもせず空を見上げた。提督の視線に写っているのは寮の建物の屋根。

「ねえ私達の話ぐらい聞いたっていいと思わない？」

「思わない。こうして話している時間が勿体ないと思わないか？」

「いいや思わないね。だってこれから提督は……私達のサンドバッグになるんだからさ」

提督の肩を掴んで鈴谷は蹴り上げる。提督は身体を仰け反って蹴りを回避。そして最上と熊野の殴打を跳躍で回避し、三階下の地面へ降りていった。

「すまんがお前らのやりたい事はまだ手伝うつもりは無い。これからにしてくれ、じゃあな」

提督は平然とそのまま歩き、建物の陰に消えてしまった。三人は齒を食いしぼり、悔しがる表情をしている。

「クソツ!! 絶対にやってやるんだから!! 探そう!!」

120. 追い詰められた白い兎は激昂する

「まったく、野蛮な奴らだな」

人間をサンドバッグにするとは余程提督の事が嫌いらしい。嫌以上の何かに発展しているように思えるが。

妨害機は既に翔鶴達が持つているとして、次に解決策だ。

執務室の机の棚には分配した効果消去薬が入っている。これさえ飲ませれば万事解決、一発逆転だ。好嫌薬の効果を解除出来るどころかこの鎮守府の艦娘達の記憶改竄を消す事だって出来る、まさに提督の切り札。

だがこれは記憶改竄が薬によって出来ていたらの話だ。もしまた違う方法で記憶を改竄していたなら、話はまた別になる。どちらにせよ一発逆転出来る事には変わりはない。問題は――、
「どうやって仕込むか、だな」

この鎮守府の艦娘達から嫌がらせを受け続けていく中で、どうやって摂取させていくか。これが第一の問題になってくる。食事の中で食べ物と混ぜて食べてもらえば容易いが、その侵入を翔鶴達は許さないだろう。仮に混入させたとしても、自身が食堂にいる事がバレたら捨てられてお終いだ。

「チツ……集中出来ない」

ここ最近はずっと寝ていない提督。目にクマができるのが普通になり、集中力が徐々に消え掛かっていた。謎の激痛は治まったが、また力を使えば襲ってくる。栄養失調は何か治しているが、またなつてもおかしくない状態だ。頭痛も止まらない、身体が悲鳴を上げている。早くこの狂った現実を終わらせなければ艦娘達に殺される前に体調不良で死にかねない。

「食堂の中は……」

外から食堂の中を窓越しで覗く。中は誰もいない、奥の厨房には誰かいる。恐らく鳳翔だろう、夕ご飯の下準備をしているに違いない。

「いや待てよ……間宮は!?!」

そういえば間宮がいない。あの朝食堂に入った時は鳳翔しかおら

ず、間宮らしき姿は見えなかった。確か休暇を得ていたはずだ、部屋は空母寮にある。もし提督の計算が正しければ間宮は――、

「何急いでるノ?」

「っ!?!」

急いで空母寮へ向かっていた提督。連絡通路を使って走っていた途中、空母寮の目の前で金剛が立ちはだかった。神妙そうな表情でこちらを睨んでいる。

「よお金剛……そこ退いてくれねえか……?」

「それは出来ない相談ネ……ねえ提督」

「何だ……?」

「私、あんまり暴力とかしたくないからサ……さっさとここから消えてくれないカナ?」

意外にも金剛は提督に逃走を勧めてきた。消えてくれないか何度も言われるが、鎮守府周辺には艦娘達が見張っていて逃げられないようになっていいる。逃げたくても逃げられないように翔鶴が嵌めているのだ。

「それが出来たらこんな苦労しねえんだよ……! お前らのガキ臭い嫌がらせでこちとら日中睡眠不足だ……!」

「それはお気の毒。でもごめんネ、私はしたくないけど……周りがしちやうかも」

突然背後から気配を感じた。

すかさず提督は跳躍し、得体の知れない気配の攻撃を回避している。

攻撃してきたのは比叡と霧島だ。

「比叡と霧島!?!」

「あら避けられましたか」

「残念でしたね」

提督は廊下に着地し、転がって体勢を整える。前には金剛と比叡と霧島、二人は既に艀装を展開している。

「悪いですがここで痛めつけさせてもらいます」

「少し痛いですがご容赦下さい、提督」

「ふん……ただでさえ姉達の変わりように怯えていたような奴が急にしゃしゃり出て調子に乗り過ぎなんじゃねーのか？」

提督が言っているのは霧島の事だ。鎮守府襲撃から金剛と比叡の変わりように現実を受け付けられず、霧島は部屋に閉じこもっていた。だが好嫌薬を使った事により、いつもの姉達が戻ってきたと勘違いしたのか平然と外に出てきている。

「これも翔鶴さんの為……姉さん達が戻ってくれば問題ありません」

「嘘つけ、何が翔鶴の為だ。お前は翔鶴の威厳を盾にして自分の為である事を隠してるだけだ、お前自身の弱さを見せない為にな」

「……だから何だというんですか。これが私が選んだ事です。榛名お姉様は仕方ありませんが、金剛お姉様も共にいるのなら本望」

霧島の覚悟は既に出ていたようだ。本当の事を伝えても揺るぎない信念を持っている。何気に厄介な存在だ、喉けるのは無理だろう。

しかし一つだけ気になる事がある。何故差別している側と差別された側の仲が良くなっているのか。普通であれば唾み合うはずが知らず知らずの内に強力している。提督を消すという一つの目的が一致した事で互いに協力する仲にいるのだろうか。

「金剛お姉様も戻ってきてくれたので、後は提督だけですな」

もしかして差別された側ごと一気に洗脳したのでは。そうすれば差別している側と協力しているのにも辻褄が合う。好嫌薬だけ使用すれば互いの勢力にいざこざが起きるのは必然だ、例え提督を消すという目的は同じでも差別意識が続いてる事に変わりはない。言わば差別している側が第一勢力、差別された側が第二勢力、提督が第三勢力になっているような状態だ。

もし第一勢力の艦娘と第二勢力の艦娘が第三勢力である提督を消そうとした場合、一番下になりやすいのは提督と第二勢力の艦娘になる。そして第一勢力が対立するのは提督だけでなく、第二勢力の艦娘になるからだ。ただでさえ第二勢力及び差別された側は提督の影響により、差別している側に対して強く反発する艦娘が多い。実際に

対立すれば第一勢力である翔鶴達は二つの勢力を相手にしなければならぬ事になる。

そこで翔鶴は考えたのだろう、差別された側も取り込めば敵が一つに減り、余計な事をせずに済む、と。あの一夜で好嫌棄だけでなく、改造した戦闘意欲増進剤も入れたに違いない。そうでなければ霧島が金剛と比叡と共にいるのはあまりにもおかしすぎる。

「提督の事信じてたのが馬鹿らしく思ってるノ。本当に情けないナって、こんな男の事を信じてた自分が恥ずかしいナって」

「……暴力はしたくないはずじゃなかったのか？」

「したくないとは言ったけど……しないとは一言も言っていないヨ？」

金剛は艤装を展開し、ゆっくりと提督に歩み寄る。提督は一步ずつ後方へ後退り、金剛から距離を置こうとしていた。

「仕方ないか……ふッ!!」

提督は勢いよく連絡通路の窓をぶち破る。身体を回転させ、受身をとって着地。そして全速力で走行し、金剛達から逃れる。

「追い掛けますか、金剛お姉様」

「いや……いいネ。どうせその内捕まるヨ」

金剛達から逃げる事が出来た提督は執務室に帰還していた。遂に執務室は荒らされ、仕事の書類は床に散乱。本棚は雑に倒され、応接間のソファは中の羽毛が外へ出ている。そして以前ノシロが突き破った壁はブルーシートで覆われていたはずが、外の世界が丸見えになっていた。壁はペンキで「死ぬ」「消えろ」というよくあるいじめられっ子の机に書かれた悪口が書かれていた。

「やる事が餓鬼過ぎるだろ……」

最早ここまでされると呆れてしまうレベルだ。嫌がらせが小学生じみた事だらけで提督に対する影響が全く無い。大人な虐め方とかあれば提督を手こずらせるだろうが、艦娘でそんな事が出来るのは翔鶴達ぐらいだろう。

「はあく……疲れた……」

ここまでされた嫌がらせや暴力は五十回以上、全て避けてきたが疲労が限界を超えていた。身体に様々な症状を負いながら、艦娘達の相

手をするのは厳しい所がある。壊れた椅子に座ってバランスを保つのが精一杯だ。

『……姉さんは貴方に会いたくないそうです。さっさと帰ってください』

『居るだけで気分を害するので』

『消えてください』

『あ、もしかして前の事信じてたの？ あんなの嘘に決まってるじゃん』

『やめてよ？ 本気で気にしてるとかキモいから』

『こんな男の事を信じてた自分が恥ずかしいナって』

何故だろうか、今になって艦娘達の言葉が心に刺さる。あんな艦娘達の言葉など全く気にしていなかったのに、何か落ち込んでしまうような、虚しい気持ちちが身体の中を埋め尽くしていた。

恐らくどこかで自分は安心していたのだろう。徐々に活気を取り戻していく艦娘達が必死に翔鶴達と戦い、嫌であろう自分と一生懸命話しかけてくる。そういった束の間の平和に自分は安心していた、そしてそれを自分はずっと否定してきた。

今になってようやく気付く。

無意識に自分は仲間という物を作っていた。提督だけが知らない、知りたくなかった事実。本音を語らない、ただ自分だけが自己中心的にやってきた建前だけの仲間が少しだけ——、名残惜しい。

『……俺も馬鹿だな……』

提督は軍帽を顔に被せ、自身の表情を隠した。こんな時の自身の顔は最悪な表情をしているに違いない。絶対に見せたくない、見たくもない表情だ。こんな人間じみた感情で出来る表情など人生の恥ではない。

「クソがつ……」

俺はあの薄汚れたクズの塊の様な人間共は違う。

あんな人間にはなりたくない。

だから俺は人間じゃない。

俺は人間が嫌いだ。

この世で一番嫌いだ。

だから俺は――、

「失礼するよ」

「っ……」

執務室のドアをノックして現れたのは白露も時雨と夕立。荒らされた執務室を見るなり引いた表情をしている。

「……今度はノックしてきたんだな」

「ああ。随分と提督に言われたからね」

「何の用だ？」

「警戒し過ぎっぽい。ただ夕立達は忠告しに来ただけだよ」

何の忠告だろうか、また新たな嫌がらせの方法か。どちらにせよまた回避するまでだ。特に駆逐艦共の嫌がらせなど稚拙な物ばかり、避けるのは容易い事。

「やっばここにいろよね」

「金剛お姉様の言う通りでしたね！」

「あの時の事許さねえからな」

「クソっ……」

執務室のドアや開けた壁の穴から続々と艦娘達が現れた。今までの嫌がらせをしてきた鈴谷達や金剛達、天龍や木曾、飛龍と蒼龍に加賀、古鷹と加古。執務室に集合し、提督を取り囲んだ。

そして後ろにいるのは――、

「お疲れ様です、提督」

元凶である翔鶴と龍驤、那智、利根がいた。提督に笑顔で挨拶し、執務室の中へ入る。流石にこの数では何をされようが回避する事は不可能。あの力でも使わなければ絶対に死ぬ。

「揃いも揃って……何の用だ、翔鶴……」

「いや、これだけ艦娘がいてあの嫌がらせの嵐を尽く回避する提督さんが凄いので褒めに来たんですよ、全くしぶとさに関しては何世界一ですわね」

「ふん……その通り俺は世界一しぶとい人間なんでね……お前らのクソガキじみた嫌がらせなんて簡単に回避出来んだよ。もう少し頭を使ったらどうだ？」

提督はこの緊張した場面でも煽るのを止めない。艦娘達の悔しがつた表情を見るのが楽しいからだ。艦娘達が提督を必死に嫌がらせしてるのも、これが原因だからである。

「いえもうそんな事をする必要はありませんよ……だって……」

翔鶴の後ろにいた葛城が縛られた誰かを歩かせていた。その縛られた誰かを見て提督は目を見開かせる。あまりの感情の昂りで歯を食いしばった。

「お前エエエエ……!!!」

縛られた誰かとは提督が一番大事にしている且つ唯一認めている相手、相棒の摩耶だった。

「——人質が出来るんですもの」

摩耶は顔を俯かせ、艦娘専用の拘束器具で縛られている。この様子だと摩耶も好嫌薬の餌食になったのだろう。必死に提督の事を考えない為に部屋にこもり続けていた。提督が無事であるように、自分が手を出さないように必死に嫌という感情を抑え込んでいたのを翔鶴が部屋から引きずり下ろしたのだ。

「提督さん、もう分かっていると思いますが……これから私達がする事を回避する度に、摩耶さんが痛い目に会います……こうやって」

翔鶴は那智にアイコンタクトを送り、例を見せる。那智はナイフを

取り出し、摩耶の腕に躊躇いもなく突き刺した。それを見た提督は激昂し、大声をあげる。

「ッ!! やめろ!!!」

「大丈夫ですよ、これぐらいの傷で死にはしません。ですがずっと避け続けたら、言わなくても分かりますよね?」

「チツ……!!」

「提督が摩耶さんをととても大事にしているのは分かっています。ケツコンするまでの仲です、愛は素晴らしい物でしょう……試してるんですよ? 貴方達の本当の愛を」

翔鶴は摩耶に突き刺したナイフを抜き、そしてもう一度刺していく。何度も、何度も、何度も翔鶴は躊躇いなく刺していった。摩耶は声を漏らしながらも必死に我慢している。顔は隠しても涙が出ているのが見て分かった。

「この……」

「貴方がいつまで耐えられるか楽しみですね」

「この……!!!」

「だから精々頑張ってください♪」

「このクズがアアアアア!!!」

提督が叫んで駆け走った途端、金剛の蹴りが提督の腹に炸裂。壁に打ち付けられ、足で床に叩きつけられる。提督は腹を抱えて、翔鶴達を睨んだ。

「では……また——」

121. 不撓不屈の心を持つ白い兎よ

艦娘達に嫌われて四日が経過。

摩耶を人質に取られ、提督は行動を制限された。もし艦娘達のやる事を回避すれば摩耶が傷つくという卑劣な行為により、これから提督は自ら暴力を受けなければならぬ。昨夜は休憩として特別に時間が与えられ、提督は何週間ぶりか睡眠を取る事が出来た。

翔鶴から課された日課は三つ。

一つ目は必ず朝昼晩の食事の時は食堂で取る事。その際ちゃんとした食事は提供してくれるらしい。

二つ目は仕事は必ず昼までに執務室で終わらせる事。その際も艦娘達の邪魔は入らせないようだ。

三つ目は夜の徘徊は必ず三日に一回行う事。徘徊日以外は睡眠を取ってもいいらしい。

「まあ日課だろうとアイツらはやってくるだろうな……」

そう呟きながら提督は食堂の中に入る。提督が入るなり鋭い視線を向けてくるが、あの時の冷たい視線とは違ってずっと見つめてくる事は無くなっていった。提督の事を何回か見て、また艦娘同士で楽しく話している。

「……どうぞ」

「どうも」

不本意なのか鳳翔が眉を顰めた表情で定食を出してくれた。メニューは普通の朝食とは何ら変わらないいつも食べていた物ばかりだ。提督はその定食を持ち出し、二階のテーブル席へ一人で向かう。二階にはちらほら艦娘が先に食べていたが、提督はいつもの席に座って食べる事にした。

「味は……いつものか」

一瞬毒が入っているのではと思ったが、そんな事は無かったようだ。あの翔鶴が即死するような毒物を入れる訳が無い。

「やっと食堂に来たんだね、提督」

「……時雨か」

黙々と食べる提督に話しかけてきたのは時雨。

ニコニコと笑顔を浮かべ、提督を見つめている。

「何の用だ」

「いやいや実はね……」

突然時雨はコップに入っていた水を提督に浴びせた。顔辺りを思い切り浴びせられ、軍帽と軍服が濡れてしまう。

「目覚めていないようだからさ、覚ましてあげたよ。どう？　目、覚ました？」

「……ああバツチりとな」

「それは良かった。んじゃバイバイ」

恐らくあの時足を引つ掛けて来たのを回避した分、やり返しに来たのだろう。一部始終を見ていた周辺の艦娘はクスクスと笑いを堪えながらこちらを見ている。本当であればコップの水など事前に対策出来たはずが翔鶴の所為でまともに受ける羽目になってしまった。

「ぐちそうさま」

提督は定食を食べ終え、お盆を持って一階のカウンターまで向かった。階段を降りて、カウンターの目の前まで近付いた時。すれ違った五十鈴に足を引つ掛けられ、提督はその場で転倒した。

「あ、ごめんね〜提督。もう少し周りを見た方がいいわよ」

「クソツ……」

食堂という名の魔窟を抜け出し、提督は執務室へ向かう。食堂に行つて食事をしただけで三回も嫌がらせされた。提督が反抗出来ないのをいい事にやりたい放題だ。

だがまだこれは序盤でしかなかった。

「倉庫内の確認か……」

ほとんどの仕事を終えた提督は最後の仕事に倉庫内の確認を行った。クリップボードに書類を挟み、執務室を出ていく。

太陽の光が暑く差し込む中、提督は倉庫内の在庫を確認していく。最近では弾薬が基準より少なくなっている。恐らく長門を始めた艦娘達が提督自身に砲撃していたからだろう。

「提督！」

声を掛けられた途端、頭上から氷水を大量にかけられた。バケツから一気に氷を含んだ水が提督を冷やしていく。一瞬突然の冷たさに身体を震わせながらも、すぐに身体の表面は熱くなった。

「暑そうだから冷やしてやったよ？ 感謝してね？」

「古鷹……ありが——」「あたしもいんだよ!!」

バケツを上から被せられ、背中を蹴られる提督。転びそうになったが体勢を整えて何とか持ちこたえた。バケツを外し、背中を蹴った艦娘を睨む。

「……加古と古鷹か、仕事中は邪魔しない約束じゃなかったか？」

「あははっ！ 執務室だったらの話だよ？ あの時のお返し、今返したから。ここから消えてもらう為に色々しちゃうからね」

「そりやどーも……」

おかげで書類はびしょ濡れだ、また書き直さなければならぬ。記憶力で覚えている為に書き直すのは造作もないが、水をかけられるのは厄介だ。折角時雨の時の濡れた場所が乾きやすくなっていたのに、これではまた着替える必要がある。

「じゃあね〜」

洗礼を受けた提督は自室で新しい軍服に着替える。濡れた軍服は自室の窓を開けて、万が一の為に窓から少し遠ざけて干す事にした。

そろそろ昼飯時である。提督はまた魔窟へ向かった。

「……どうぞぞ」

「どうも」

また鳳翔は嫌々に提督へ定食を渡す。いつもの二階のテーブル席へ座って食べる。賑やかな一階の食堂、静かな二階のテーブル席。艦娘達が何もしてこなければこんな時間でも平和に思える。

「ちよつとついてきてよ、提督」

食べ終えた提督のお盆は大井に片付けられ、提督は北上に連れていかれた。連れてきた場所は司令本部の二階階段手前。

「やめっ——」「そ〜れ！」

あの時提督がドアを開いて北上と大井をぶつけたように、今度は提督が北上に背中を押されてドアにぶつかつた。勢いよく顔面と身体

に直撃し、提督は後方へ仰向けに倒れる。

「ぎやはははは!! 面白過ぎ〜ウケる〜!」

「クソがッ……」

提督はゆっくりと身体を起こし、湧き上がる怒りを抑える。ここで何かすれば摩耶の身に危険が及ぶ。例えどうされようとも正面から受け止めなければならぬのだ。

「何してるクマ〜?」

「ああ球磨姉と多摩姉、今提督の事いじってるんだ〜」

「姉さん達も混ざります?」

廊下の方から球磨と多摩がやってきた。妹達がやっている所を見て声を掛けたのだらう。この二人も提督に嫌がらせを仕掛けた艦娘だ。了承するのが当たり前だろう。

「混ざるクマ〜」

「でも何するの?」

「ん〜そうだな〜、取り敢えず全員で踏みつけてみる?」

「いいですね、やりましょう」

起き上がる提督の背中を踏みつけ、四人で一斉に踏みつける。頭、顔、首、胸、腹、腕、足などの要所を執拗に攻めてくる。息する暇も無い踏みつけの雨を提督は身を屈み、腕で顔を隠して必死に耐え抜いていく。やがて踏みつけが終わり、提督は確認する為に腕を上げる。

その時――、

「シユートオ!!」

最後に艦装を展開した状態で提督は顔を思い切り蹴られた。ピンボールの様に階段の手摺に当たって弾き、壁まで蹴り飛ばされる。階段の折り返しの床に提督は倒れた。

「いい気味クマ〜」

「すつきりしたし、寝るニヤ」

「そうですね、行きましよう北上さん」

「うん行こう」

提督はそのまま放置され、北上達はその場を去った。倒れていた提督は身体を震わせながらも必死に立ち上がる。全身に痛みという痛

みが身体の中を巡っていた。蹴られた頬辺りの骨は複雑骨折、何本か口から折れた歯が出てくる。しかし提督は自身の驚異的な自然治癒力でその傷を癒していく。骨は新たに形成され、赤く腫れた頬が元に戻っていった。

「くそっ……耐えろ……」

今でも痛みが続くが歩けない程ではない。提督は軍服の汚れを簡単に拭き取り、この状況を打破できる策を考えていく。以前金剛に邪魔され、間宮の存在を確認出来なかった。今度こそ間宮の確認をしたい提督は空母寮へ向かう。

「はあ……はあ……着いた……」

間宮の部屋の前まで難なく辿り着いた提督。左右は誰にもいない、確認するなら今しかないだろう。

まず最初にノックだ。

「反応無し……んじゃ」

次にドアノブを回す。すると鍵は既に開いていたのか、入れる状態になっていた。嫌な予感がした提督はゆつくりとドアを押す。

「対策済み……か」

提督の嫌な予感は的中。

間宮は既に翔鶴達に攫われていた。間宮は最近まで食事も取らずに自身の部屋で閉じこもっていたが、恐らくあの夜でも間宮は食堂に來なかったのだろう。それを見かねた翔鶴が強制的に拉致したかもしれない。部屋の中は土足で踏まれ、荒らされた形跡が残っている。

翔鶴は提督のあらゆる可能性を潰しに来ているようだ。地下営倉にいる灰色達も、阿賀野達も、明石達も、間宮も、味方になりうる存在は全て攫い出し、有利な状況には絶対にさせない徹底的な対策。通信系を全て遮断又は妨害し、外部との連絡は一切不可能。そして提督をじわじわと追い詰めていく為には摩耶を人質にした卑劣な行為。

提督は完全に翔鶴の罠に嵌ってしまったのだ。

「これがアイツのやり方か……!!」

提督は間宮の部屋を閉めるもドアノブは握り続けたままだった。翔鶴の罠に嵌ってしまった事で様々な感情が頭の中を右往左往して

いる。とてつもない怒りと滲み出る焦り、そして頭の中を掻き乱していく絶望感。無造作に傷つけられたプライド、到底受け入れられない現実。思わず頭がオーバーヒートし、思考停止する寸前だった。

「諦めるな……まだ策は残ってる。今は……それに賭けるしかない」

我を取り戻した提督は一旦深呼吸し、自身を落ち着かせる。罨に嵌ったとはいえまだ希望はある。机の棚にある効果消去薬が提督にとって唯一の希望。幸い誰にもその隠した場所は分かっていない。摩耶でさえもその場所を教えていないので苦しい拷問で密告してしまつたとしても問題は無いだろう。

だが逆にどうやって摂取させていくかが鍵となる。出来れば全員一気に摂取させたいが、それはどうやっても無理があるだろう。であれば確実に一人ずつ摂取していけば味方が増え続け、着実に解決へ向かっていく。全員よりまず一人だ。味方になってくれる且つ細かい判断力がある艦娘がこの鎮守府にいる。

それは――、

「何してるんですか？ Admiral」

「……プリンツか」

プリンツ・オイゲン、又は不知火の二人だ。前の鎮守府でも部下だったこの二人なら確実に味方になってくれる。川内も視野に入れたが、日中眠っているが神通が見張っており、入り込む隙が無い為にやむなく却下する羽目になった。

「いや何だ……最近間宮が休んでたからな、一回確認しようと思ってここに来たんだ」

「ドアは開けたのか？」

背後から那智が現れ、ドアを開けたのか聞いてきた。この様子だと提督が間宮の部屋の中へ入った場面は見えていないらしい。明らかに間宮が攫われた事を知られたくないような聞き方だ。

「いや開けてないぞ。これから確認する所だ」

「そうか。間宮は今も休療中だ、確認しなくても大丈夫だぞ」

「分かった。因みになんだがどれ位休むって言ってたか分かるか？

何ぶん、鳳翔だけでは忙しいだろうからな」

仕事に取り組んでいる姿を提督は見せつける。仕事となれば艦娘達の邪魔は入らない。と言いたいが、古鷹と加古という例外がある以上は信じない方がいいだろう。那智達の気分を伺ってその場をやり過ぎすしかない。

「確かにそうだな。聞いた所によると二週間と言っていたぞ」

二週間、となれば好嫌薬の効果は約半月程だろうか。考えて言った際には現実的過ぎる。誘い言葉で狙ってみたがこうも容易く聞けるとは思わなかった。だがブラフの可能性もある、場合によってはそれ以上続く事もあるだろう。

「二週間、か。分かった」

「まあその前に貴様は摩耶諸共消されるだろうがな」

「チツ……」

「真面目ぶって仕事をしても無駄ですよAdmiral。貴方の本性が分かっているのは摩耶さんか私、不知火さんや川内さんぐらいですし……覗いてますよね？」

プリンツの背後からぞろぞろと金剛達が現れる。那智の背後からも鈴谷達が歩いてきた。

「まずい、完全に囲まれた。」

窓から脱出するしか方法は無いが逃げれば人質の摩耶が傷つく羽目になる。逃げるにも逃げられない状態だ。

「……お前は どう思っ てんだよ……! 摩耶が殺されかけてんだぞ……!!」

「味方する摩耶さんはAdmiralと同じ敵です」

「同じ艦娘でもかよ……!!」

「どのみち貴方達、あの敵じゃありませんか」

「ツツ!! お前!!」

プリンツ達が翔鶴の味方になった事で秘密を知っているのがこうも厄介になるとは提督でも予測出来なかった。他言無用のはずが、この状況で言われかねない状況になってしまった。

「あ、そうだ! もし黙ってほしかったら……」

「何だ……!」

「私達に……存分に痛めつけられてください」

背後から鈴谷が殴り掛かってきたのを察知した提督は背後を振り向く。その時からとてつもない地獄の戦争が始まったのを、提督はその身を持って知る事となった。

提督が自由の身になったのはそこから三時間経った後だった。その三時間は提督を人とは扱わない、残虐の限りを尽くした暴力の嵐。まるで人形のように提督は無様に暴力を受け続けた。

そして今――、

「……」

自身が暴力によって嘔吐した液体と血溜まりをモップで拭いていた。軍服は血液と嘔吐した物で滲んでおり、靴底の汚れ等でボロボロになっていた。顔は醜く荒れ果て、頬の腫れや瞼の青い痣が痛々しく残っている。指は何本か雑に折られ、足は赤く腫れていた。

「……よし」

ようやく拭き取りが完了し、綺麗な廊下に満足する提督。片足を引き摺りながら掃除用具をロッカーにしまい、提督は食堂へ向かう。朝昼晩の食事は必ず食堂で取らなければならない。どんな用があるうとも絶対に出席しなければならぬ。それだけは絶対にあってはならないと提督は治療もしないままゆつくりと歩いていった。

「うわ……こてんぱんにやられたね……」

「キツモ……逃げよっ」

「せめてシャワーぐらい浴びてほしいわ」

「食欲失せる〜」

食堂へ入るなり、醜物を見る様な目で提督は見られる。醜く汚物のような姿に艦娘達は小声で愚痴を零した。

「……その手で大丈夫なんですか」

「大……丈夫、だ……」

「そうですか」

流石の鳳翔も提督を心配しかけたが、見栄を張る提督にその心配は無くなった。いつもの様に定食を渡し、提督はお盆を持つ。

しかし――、

「あちやゝ転んじやったかゝ」

「味噌汁とか零れましたけど、どうするんですかね?」

指を折られた提督に定食を乗せたお盆を持つ事は出来なかったよ。うだ。持って二歩辺りの所で転倒し、折角の定食を台無しにしまった。しかし提督は黙って立ち上がり、床に落ちた食べ物やご飯、味噌汁の具などを再度更に乗せる。二階に行けない事を察したのかその場に座ったまま手を合わせて食べ始めた。

「うっそ、そこで食べるの?」

「マジかあゝ……」

提督は黙々と食べ続ける。周りの艦娘達に軽蔑する視線で見られても。見世物の様に嘲笑われ、馬鹿にされても。提督は摩耶が無事であれば問題無いと自身のプライドを捨ててまで常識とは外れた行動を選択した。僅かな希望がある限り、提督は絶望的な状況だろうと諦めない。零れ落ちた味噌汁の液体は持ってきた雑巾で綺麗に拭き取り、そのままポケットにしまった。

「ぐちそう……さま……」

食べ終えた提督はお盆を持ちながら立ち上がり、鳳翔のいるカウンターに渡した。そして提督はそのまま食堂を去っていく。その悲しそうな後ろ姿を誰も気に掛ける事はなかった。

「早く……打たないと……!」

急いで提督は自室へ向かう。幸い今日は夜の徘徊日では無かった。夜を使って自室に籠ることが出来る。執務室は以前のノシロの件で穴が開いているおかげか、こもる事が出来なくなってしまった。

執務室の手前にある自室に入り、提督は鍵を閉める。窓を閉めて施錠し、乾いた軍服をベッドに脱ぎ捨てる。そして机の棚の引き出しを開け、ある赤い液体が入った注射器を取り出した。それを持つなり提督はシャツを脱ぎ出し、上半身裸になる。注射器を左胸に向け、そのまま勢いよく刺した。

赤い液体が身体の中を巡っていき、血管のように身体が紅く模様を描いている。すると頬の腫れや目の痣は徐々に治っていき、折れた指が元通りになるなど身体全体の怪我が自然治癒力によって治療されていった。

顔も元通りになり、その場で蹲る提督。徐々に怪我が治っていくのを実感し、両手で身体を包んだ。目は紅く輝き、床を淡く照らす。息が荒れながらも怪我が治るのを待った。

「散々だったな……」

怪我が治ったのは注射器を打って十五分程。汚れた軍服を自室の洗濯機で洗い流し、替えの新しい軍服を着ていた。前に干した軍服は消臭剤で匂いを消してハンガーに吊るしている。ベッドに横になった提督は天井を見つめるばかりだった。

「こんな日が続くとなるともう躊躇してる余裕なんて無いよな……」

医務室から持ってきた包帯を頭に巻き、提督は策を考えた。完全に怪我は治ったとしてもまだ痛みや痕は残っている。包帯やガーゼで出来るだけ隠し、万全な状態で挑むしかない。

「よし……一旦は執務室に行くか」

執務室の机の棚には効果消去薬が隠してある。それ以外にもこの鎮守府の建物の間取りや艦娘のプロファイルなど様々な資料が置いてある為、作戦は執務室で考えた方が効率がいい。提督はすぐさま起き上がり、自室のドアを開けようとした。

「何してるん？」

「ん……龍驤か」

「龍驤やで。お、怪我治ったんかいな、噂に聞いた凄い自然治癒力って奴かっつていうか何してはるん？」

ドアを開いて廊下に出た途端、隣には龍驤が壁に寄り添っていた。部屋から出てきた提督を見るなり気さくに話しかけてくる。

「いやこれから執務室に……」

「あく駄目駄目。夜は徘徊日以外は動いちや駄目なんよ、だからうちがいるんや」

恐らく翔鶴は徘徊日以外で提督が何かしらしてくるのを予知した

のだろう。その対策として艦娘一人が提督の部屋の出入りを監視していくらしい。怪しい行動でもあればすぐに報告が周りに伝えられ、提督は捕まってしまうとか。まるで囚人のような扱いである。

「つてな訳で部屋出たらアカンで。今日は許したるから、明日以降は無しな」

「……分かった」

「あ、あと今日はうちがいるから来る事は無いんやけど……明日からはどんな艦娘が夜這いしてアンタを虐めてくるか分からんで。ほな、はよ寝え」

龍驤に急かさされ、提督は自室に閉じ込められた。案外優しそうに見えるこのシステム、かなり厄介な物だ。夜間は何もする事が出来ない、作戦を練る事が難しくなってくる。資料さえあれば作戦の過程はいくらでも思いつくだろう。しかしその資料さえ無ければ考えた作戦が完璧ではないものになってしまう。自室で考えるとしても限界がある以上はしない方がいい。

そして先程龍驤が言ったように艦娘が襲ってくる可能性があるという事。今夜は無いらしいが、明日以降襲われるとなれば逃げ道は全く無い。完全個室状態でまた暴力を受ける羽目になるのだ。しかも事前に効果消去薬や資料を持ってきて自室で作戦を考える事も出来ない。あまりにも厄介且つ面倒だ。

「……んな事考えてないで、さっさと寝るか」

艦娘達に嫌われて五日が経過。

地獄の戦争はまだまだ続く。冷たい視線で見られながらも朝食を食堂で食べ終え、提督は仕事の時間に入る。摩耶を人質にされた日から提督は仕事の時間を有効活用し、同時に作戦の内容を考えていた。「プリンツか不知火……どうやって摂取させるか、だ」

この効果消去薬を口にさえ入れれば効果は発動する。しかしどうやって摂取させていくかが問題だ。ただでさえ嫌われて接触もまとも出来ない状態で摂取させるのは困難を極める。仮に強制的に摂

取しようとするれば返り討ちに会うどころか摩耶が傷付くのが目に見えてしまう以上、慎重に考えなければならぬ。

「一番可能性が高いのは……寝てる時か。徘徊日に部屋に入って眠ってる最中に摂取させる……だったら摩耶も、って鳥海がいるから無理か」

どちらも一人部屋な為に誰かに気付かれる可能性は低い。二人とも摂取中に起きなければ成功する確率は更に上がる。だが部屋に行くまでのルートを歩いている最中、艦娘達が邪魔をしてこないとは限らない。

プリンツの部屋は重巡寮、提督のいる司令本部まで連絡通路と複合型連絡通路を一回ずつ通らなければならぬ。

逆に不知火の部屋は駆逐艦寮、司令本部と連絡通路で直で繋がっている為に危険性は低い。となれば狙いは不知火になるだろうか。

不知火の部屋ならば艦娘との遭遇率が低い上に確認が早く取れる。効率を考えれば不知火の方が現実的だろう。

「とはいえそう上手くはいかないだろうな。徘徊日に三回ほど確認した方がよさそうだ」

逆に不知火やプリンツが必ず寝ているとは限らない。夜の警備徘徊時に飛龍と蒼龍、川内の様に夜に襲ってくる可能性もある。

「ん？ 待てよ？ もし遠征任務をやってくれたら……」

翔鶴達の目的は提督をこの鎮守府から消し去る事。艦娘を使ってじわじわと提督を追い詰めていく。この鎮守府の艦娘は総勢約七十人、もし遠征任務に行ってもらえれば六人は必ず減る事になる。第二から第四艦隊を遠征に行かせれば計十八人はいない事になり、艦娘の数は約五十人だ。そうすれば少なくとも戦力は減るところか艦娘との遭遇率も若干は下がる。翔鶴の事だ、提督を消す目的もあるがこの鎮守府の事も考えているだろう。資材は艦娘にとつて生命線、枯渇するのはどうしても避けたいはずだ。

「徐々に見えてきたぞ……」

通信系の遮断又は妨害も本来は外部との連絡を断つ役割を持っていて。また別の役割としてそれと同時に軍人をこちらに呼び寄せて

いるのだ。提督が生きている内に誰か軍人を呼ばせ、翔鶴が秘書艦を担った風に誤魔化せばこの鎮守府に異常は無いと判断される。そうすれば提督を消した後で通信系を回復すれば怪しまれる事は無いだろう。

「……取り敢えずは遠征任務の書類を作ろう。それで少し様子見だ」

荒くれ鎮守府の通信が途絶えたに確かめる為に誰かしら軍人は来るはずだ。常に広場を見ておかなければならない。しかし今は遠征任務を受けてくれるかどうか、そこを確かめる必要がある。まずは危険性は高いが翔鶴に会うしかない。スピーカーで遠征任務について翔鶴を呼んでみる。

「どうされましたか、提督」

「来たか翔鶴。実はだな、昨日倉庫内を確認をしたんだが徐々に資材が減りつつある。そこで遠征任務に行かせたいんだが大丈夫か？」

翔鶴は一人で執務室に入ってきた。

落ち着いた様子でこちらを睨んでくる。

「はい大丈夫ですよ。因みに書類はあるんですか？」

「俺の手元にある。だが生憎俺はこの鎮守府の嫌われ者だあ、俺からじゃ受け取ってはくれないだろう。だからお前から手渡してくれ」

「構いませんよ、後で伝えておきます」

翔鶴は警戒も無く書類を手に取り、そのまま執務室を出ていった。その姿を見届けた提督は立ち上がって隣の監視室にて翔鶴の様子を確認する。遠征任務を行う第二艦隊から第四艦隊の旗艦は第二が天龍、第三が浜風、第四が那智。もし渡していなければ提督は不利、渡していれば少し有利になる。翔鶴が本当に渡すのか、見定める必要があった。

「渡している……やっぱ俺の思惑通りだ」

翔鶴は旗艦である三人にちゃんと説明して手渡している。意外にも旗艦達は素直に翔鶴の言う事を聞いて、決められた仲間を呼びに行った。それを確認した提督は監視室を出て、窓から外を眺める。外には訓練中に旗艦達に呼び出された艦娘が工廠兼出撃ハッチに向かっていくのが見えた。どうやら遠征任務は受けてくれるらしい。

「だが見せかけの可能性もある……用心深く行くとしよう」

「失礼します提督」

監視室を出た後に突然の声に身体を跳ねらせる提督。背後に悪寒を感じた提督は恐る恐る声の方向へ振り向いた。そこにいたのは――

「……鹿島か……」

提督が一番警戒している生粋の狂戦士、『シロガネ鏢』鹿島だ。

「翔鶴さんと呼んでいましたが大丈夫ですか？ あ、そう身構えな
いでくださいよ、報告しに來ただけですって」

裏がありそうな作り笑いが何とも不気味だ。ヘラヘラしながら話している分、いつもの鹿島と何ら変わりないが、好嫌薬の効果が効いているのか判別がしにくい。しかも今は翔鶴に追い詰められたこの状況だ、いつこの狂戦士に調教という名の拷問でズタズタに殺されるのか。命がいくつあっても足りないだろう。

「まあまあ落ち着いてください提督。本当に報告だけですから」

「腹黒女が何の用だ……まさかお前もか？」

「皆さんがやってるような事はしませんよ、私は別なので……さて報告なんです、私はこれから大本営に向かい、三日ほど滞在します」

どうやら鹿島はこれから大本営に向かうようだ。本来鹿島は鎮守府の監視の為にここへ配属されているが、薬の効果で嫌われている以上はこの現状を報告する事は無いだろう。唯一外部との連絡が取れる可能性が見えてきたが、それはゼロに等しい確率だ。

「監視して起こった出来事をまとめて元帥閣下に報告してくるので、一応提督には把握してもらいたく報告しました。あ、死んだり逃げたりしないでくださいよ？ 帰還して準備が整い次第、調教するので」「建物の殆どが囲まれてるんだ、逃げれる訳ねえだろ……」

提督の言葉に耳を傾けず、何も言わないままその場を去る鹿島。久しぶりの極度な緊張感から抜け出したのか、提督はその場に座り込んだ。

摩耶は無事だろうか、ただそれだけが心配だった。自身が嫌がらせを避ければ摩耶が傷つく事になる。出来れば取り返したい所だがその上手く簡単には奪い返せないだろう。この耐え難い地獄の戦争を生き抜けるのも時間に制限が出来ている。好嫌薬の効果は約一ヶ月程かと思っていたがプリンツに見抜かれていた以上はもつと一ヶ月先まであるだろう。

「抗うぞ……俺は!!」

122. 磨穿鉄硯たる意志を持つて戦え

『君に頼みがある』

『恐らくこの会話が最後になると思う、だから君に託したいんだ』

『■■■■鎮守府、私が勤めてる所。その鎮守府の艦娘を君に任せたいんだ。■■■■元帥や■■■■大将にもそれを言っている』

『押し付けるようでごめんね……でも、君だけが頼りなんだ。君は私が見てきた中で一番……■■■■心の持ち主だからさ……』

『大丈夫。■■■■と共に戦い、仲を築いてきた君達なら出来る……だから……』

『——その■■■■で艦娘達を救ってほしいんだ』

『あの二人は……訓練中か』

これだけ嫌われていようとも艦娘達は訓練を怠らない。不知火やプリンツにボコボコにされ、練度を日々上げている事だろう。不幸中の幸いというべきか、鹿島との接触は一回のみ。現在は大本営に行っており、監視の報告をしているところだろう。

「前〜!!」

「ん?」

提督が考え込む中、突然頭に何か重い物が衝突した。鉄の棒で殴ら

れた様な凄まじい衝撃に提督は後方へ倒れ込む。意識が朦朧とし、視界がぼやけて何が起こったのか分からない。額に生温かい液体が出ているのを感じた提督は額に指で触れる。指は赤く染まり、床へと滴り落ちていった。

「ごめくん司令官、死んでない?」

「まさかこんなので死なないよ、雷」

「そうなのです、心配しなくても大丈夫なのです」

「うつわく痛そく……」

特徴的な声や口調で犯人はすぐに分かった。恐らく第六駆逐隊、頭に目掛けて投擲したのは雷の錨だ。そのまま鉄の塊を投げるとは見境ない艦娘だ。普通の人間であれば頭蓋骨折は間逃れないだろう。

「それもそうね! 行きましょ!」

「ばいばい」

まだ意識が混濁としている。平衡感覚が鈍くなり、まともに立つ事すら出来やしない。壁に身を委ね、窓の縁を掴む。頭を抱えながらも提督はやつとの思いで立ち上がった。

「このクソガキがア……! わざと投げやがって……!!」

明らかにあれはわざとやった行動だ。でなければ廊下内で艤装を展開し、錨を投擲する話など聞いた事が無い。更には頭に直撃など都合が良すぎる。

「医務室に……行くか……」

壁を伝って提督は医務室へ向かう。医療棚にある包帯を手に取り、頭に巻き付け血を止める。頭蓋骨のヒビは自然治癒力で治せたが、表面の皮膚の傷は時間を掛けて治す他ない。未だクラクラと感覚は歪んでいるが、壁を伝って歩く必要は無くなった。

「提督」

「……翔鶴か……何の用だ」

「いえいえ私は何もしませんよ。ですが誰かこの鎮守府に来たので共に迎える為にも一度、一緒をお願い出来ますか?」

「誰か来たのか……アレは……」

窓から広場に人影が二人。提督は目を凝らして誰かを確認する。

一人は身長が高く、提督と同じ軍服を着ている。もう一人はセーラー服で少し小さな女性だ。それを確認した提督は青ざめてすぐさま外に出る。

——鎮守府内広場

「……来ないな」

「仕方ありませんよ、通信が繋がらないので提督が来ている事も分からないかと」

「まあそうか。にしてもどうしたんだか、人の気配が全く無いような——」
「■大将閣下アアアアアア!!」

提督が大声で名前を呼び、走って掛けつける。スライディングしながら■大将の目の前に立ち上がり、顔を合わせた。急いで走ったのか息が荒い。提督の背後には恐らく秘書艦であろう少々息切れ気味の翔鶴もいる。

「お迎えできず……申し訳ございません……!」

「いや……構わないが、君達は大丈夫なのかね……?」

「はい!…この通り大丈夫です!!」

色々言いたい事はあるものの■大将はそれらを抑えた。

「■元帥から突然君の鎮守府との通信が繋がらなくなったというのを聞いて、直々に私が訪れたんだが……大丈夫かね? その包帯といい、怪我といい、どうしたのか。詳しく説明願おうか」

やはり約一週間、通信が繋がらなくなった事に元帥は怪しめ始められたらしい。そこで酒匂の件もあった■大将がわざわざこの鎮守府にまた来てくれたようだ。突然の通信途絶、提督の異様な姿、鎮守府の人の気配の無さ、明らかに提督を怪しんでいる。

ここで翔鶴達の事を言えばどうなるだろうか。翔鶴に背後から■大将に見えぬようナイフを突き付けられているこの現状で、今伝えれば自分だけが助かる可能性はある。だが摩耶、プリンツ、不知火、川内、その他の艦娘達、灰色達はどうか。

久しぶりに心が揺らぐ。

摩耶達を見捨ててまで自分は助かりたいのか。この繰り広げられた地獄の様な戦争で精神や体力はすり減っていくばかりだ。きっと心の奥底では助かりたいのと思っっているに違いない。

言うしかない、言わねば自分はやがて殺される。

言うんだ、口を開け。

言わせてくれ。

「っ……」

……ダメだ。

地獄の戦争が始まるまで、この鎮守府の艦娘達と話していく中で出来てしまった心が無意識に邪魔をする。

人間も艦娘も嫌いだったはずなのに、その上に馴れ合うつもりも無かったのに。

自分はどこかで安心だと思ってしまった。

摩耶達を失いたくない。灰色達を失いたくない。

頭の中でそう訴えてくるばかりだ。

『その優しさで、艦娘達を救ってほしいんだ』

その記憶は運命か、それともある種の呪いだらうか。

突如頭の中で、ある記憶が流れる。その人物はハッキリと判断出来た。

名前は■蒼■、提督と摩耶にとって敬意を表すべき命の恩人。

あの時黒い箱を開けて、写真を見た時からもう既に覚悟は決めていた。役を任された意味を、この鎮守府の艦娘と立ち向かわなければいけない理由を。例え艦娘や人間が嫌いだとしても、恩人の約束を破る事など提督には到底出来なかった。

恩人に託されたこの想いを、この願いを。

だから提督は再度この場で■■大将と出会い、本当の覚悟を決める。

——頑張ってみるか。

「……いえ……何も問題は、ありませんよ」

提督は今この鎮守府で起きている事全てを、隠す事を選んだ。これが遠い茨の道だという事は理解している。勿論報告する手段は考えていた、だが報告すれば摩耶達や灰色達がどうなるかなど想像しなくとも分かってしまう事だった。

「通信が途切れたのは配備した回線が焼き切れて、一時的に使用不可能な状態でした……すぐに連絡出来ず申し訳ない限りです。またこの怪我は私が階段で転んでしまった所為であり、職務に関しては何も支障はございません。全て私の不徳の致す所です、ご心配をお掛けして誠に申し訳ございません」

その場任せの嘘を並べて提督は深々と頭を下げる。何故か心臓の鼓動音が直に聞こえてきた。初めての緊張だろうか、額から汗が流れ出た。決して身を焦がす様なこの夏の暑さで出た訳では無い、この道を選んだ自分が本当にいるんだという実感をした故の緊張で出ていた。

「また民間業者に修理を依頼している所です。人が少ないのも有給休暇を認め、各自休日を通しているからだと思えます。何も心配する事はありませんよ」

「艦娘が門前を警備しているのは人員不足か？」

「はいそうですね」

背後から声が聞こえた。

提督の後ろには翔鶴が笑顔で■大将と話している。

「あれは私達が憲兵さん達の仕事を一時的に交代で見回りをしています。あ、紹介が遅れました、秘書艦の翔鶴です。よろしくお願いします」

「……ああよろしく。なるほど分かった、元帥にはそう報告しておく。それともう一つなんだが」

何とか嘘だらけの現状を信じてくれたようだ。もしこの鎮守府の有様を伝えていれば、摩耶はどうなるか分からなかった。提督は心の中で僅かに安堵する。

「酒匂の件についてだが、一週間後にはこちらに配属されるだろう。あの姉達に教えてやってくれないか」

「かしこまりました、報告しておきます」

「よし、じゃあ帰るぞ吹雪」

「はい！ それでは皆さん頑張ってください！」

■大将の秘書艦だろうか、改二姿の吹雪が走って現れた。どうやら提督と話している間に鎮守府内を探検していたらしい。提督と翔鶴を見るなり、元気に挨拶して鎮守府を出ていった。送迎車に乗り、

■大将と隣の席に座る。

「吹雪、いや『？』。『緋』は居たか？」

「いませんでしたねー」

「調べてみるか？」

「いいんじゃないですかー？ 面白そうですねー」

「……？」

車窓の景色を見る吹雪の顔は頬が引き裂けそうな程、不気味な笑みを浮かべていた。

「もしかして……喋る気でした？」

「いや……別に。その場過ぎしの嘘で誤魔化したただけだ」

「それは良かったです。もし喋ってたら摩耶さん達がどうなっていた事か」

翔鶴は提督が喋らなかつた事に安心しきっている。やる事は済んだのか即座に寮へ戻ろうとしていた。そこで提督は二人しかいないこの状況で提督はある質問をする。

「……お前に聞く。摩耶は何処にいる、そして何をしている?」

「摩耶さんなら鳥海さんと一緒に自分の部屋に閉じこもっていますよ。提督が守ってくれてるおかげで傷は一つもございません。本当です、嘘は言ってませんよ?」

「そうか……じゃあ、あの薬の効果はいつまで続くんだ?」

「あら原因が薬だつてもうバレてたんですか。流石ですね」

「いつまでだ?」

「そんな急かさなくても答えますよ。そうですね……確か原薬をそのまま使ったので……」

原薬という言葉聞いて提督は目を限界まで見開かせる。

原薬を使った、つまりは――、

「――永遠、ですね」

効果の自然解除、または薬の効果時間は凡そ無限。今まで作られた薬の殆どは効果が永遠に続く原薬から改良され、自然に解除される様に時間制限を設けている。つまり原薬を使ったという事は一生死ぬまで、死んでも尚提督はこの鎮守府の艦娘達に嫌われ続けるという事になる。

「では、精々頑張ってくださいね」

翔鶴は皮肉った言葉でその場を去る。広場に一人、提督が残っていた。提督は拳を握るも深呼吸して自身を落ち着かせる。

「……頑張るか」

恩人の為に提督は、鎮守府の闇へ再度立ち向かう。

後ろには何も無く、前には立ちはだかる艦娘達。最後列にて翔鶴がほくそ笑む。

もう逃げ道は無いだろう、だが逃げる気も無い。
希望がある限り――、

「そろそろ計画も終盤……準備は出来ていますか？」

「予定通り問題は無い……本当にいいのか？　これではまた先程のようにはバレルかもしれないぞ？」

「大丈夫です。あの男の事ですから上手く誤魔化してくれますよ……それにバれたところで、もう……――

――……手遅れ、なので」

艦娘達に嫌われて一週間と二日が経過。

相変わらず艦娘達の嫌がらせや暴力は続いている。すれ違いざまの殴られ蹴られなどの暴力は当たり前。食事中に水をかけられたり、砂や泥をかけられたりもした。何かといちやもんをつけられサンドバッグにもなった。何十回、何百回と殴られ続け、醜い姿を見る度に嘲笑される。練習用の矢が腕を貫通した、何回も足を引っ掛けられて転倒させられた、執務室が荒らされた、自室も荒らされた。

「……」

今日も黙って提督は仕事を続ける。■■大将が訪れた日から提督はまともに寝ていない。自室を監視する艦娘達が提督が寝たのをいい事に仲間を呼んで度々リンチを仕掛けてきていた。当然眠れるはずもなく、睡眠不足はまた発生。髪はボサボサ、目にはクマが出来た。何回自然治癒力に頼った事か、何本も注射した事か。身体は八割ほど治っても精神は既に限界まで達していた。時々誰もいないのに「死にたい」だとか「殺してくれ」だとか幻聴が聞こえてくる。自然治癒力で治った部分も痛々しくその痕が残っており、念の為に包帯やガーゼで隠していた。

「ほら、ちゃんと遠征してきたわよ。勝手に受け取りなさい、じゃ」

遠征任務から帰ってきた旗艦の霞が遠征任務の報告書を投げ、そのまま執務室を出ていった。提督は床に散らばった報告書を拾い集め、自身の机まで持っていく。

「さて……また確認だ」

提督はクリップボードを持って倉庫の確認と、プリンツと不知火の部屋の確認の為に向かった。連絡通路を使ってそれぞれの部屋をチラ見して確認、二人は訓練中の様だ。今日まで二回ほど夜の徘徊があったが、調べた結果はどちらも二回は眠っていたというものだった。今度の徘徊でまた調べれば、確実性は更に増していく。作戦は徐々に作り上げられそうだ。

「今日は曇りか……まあ暑い事には変わりはないんだけどさ」

今日は珍しく太陽が顔を出さない曇り空が広がっていた。若干立ち込める雨雲がちらほらと見える。丁度巨大な積乱雲が来ているだろう。早めに倉庫は確認した方が良さそうだ。

「全て基準はクリア、若干ボーキサイトが足りないと言った所か。別の遠征任務を考えよう」

書類に遠征任務の内容を書き、今後の為に記録を残す。若干生温い風が提督の白髪を揺らした。そろそろ雨も降りそうだ、帰った方がいいらしい。急いで司令本部に帰り、執務室に戻ろうとした。

「あ、提督いました!!」

悪魔の呼び声が聞こえた。提督は仕方なく声の方向へ振り向く。そこには古鷹が元気そうにこちらへ向かってきていた。

「……何だ古鷹」

「そう警戒しないでくださいよ〜! 今日はそのう日じゃありません! 実はですねー……」

古鷹が遠征任務について話している途中、提督は古鷹の首辺りに異変を感じた。何かが赤く点滅している、そしてその点滅が徐々に早くなっていく。音も微妙に聞こえた。まさかこれは――、

「ツ!! バカツツツ!!」

最悪な物に気付いた提督は古鷹の首辺りにある装置を無理矢理取り外し、窓の外へ放り投げる。そして古鷹をその装置から守る様に

困って抱いた。

直後、司令本部の二階外で大爆発。周辺のガラス窓が一気に割れ、壁が一部吹き飛んだ。衝撃と爆炎が提督と古鷹を襲う。衝撃に耐え切れず、二人は吹き飛ばされた。

「……………えっ……………？」

大爆発がして五分後。吹き飛ばされた二人は前の立ち位置から数十メートル以上離れていた。目の前は把握しきれないほどの大惨事。天井が一部崩れ落ち、壁には大穴が出来ていた。そして目の前には自分を守ってくれた提督がいた。

提督はこれまで以上に類を見ない大怪我を負っていた。後頭部や背中は焼け爛れ、白い長髪は一部消し飛んでいる。更にはいくつものガラスの破片がその焼け爛れた背中に突き刺さっていた。

古鷹は理解出来なかった。ただ翔鶴に今夜工廠へ連れてくるように言われていたはずが、こんな大惨事になっている。何故大爆発したのか、原因が分かっていなかった。

「……………野郎……………!!」

「っ……………？」

「馬鹿野郎!!!」

意識を取り戻した提督は即座に古鷹を思い切り殴り飛ばした。頬が食い込む程の衝撃が古鷹を襲う。その場に倒れ込み、再度提督を見た。すると次に襟を掴まれ、鬼のような眼で睨まれる。

「あれほと言ったはずなのにお前はまだ分かっていなかったのか!!!
誰かに惑わされて死ぬ事がどれだけ愚かな事なのか!!! 今のお前は
翔鶴に駆り出された特攻隊と同じなんだぞ!!! 分かってんのかよ!!!」

「えっ……………えっ……………??」

「えじゃねえんだよ!! 戸惑ってんな、こっち見ろ!! いいか、別にお前らの憂さ晴らしの為に俺を殴ったり蹴ったりするのはいくらやつても構わねえよ……………! だが自分を犠牲にしてまで俺を貶めようとするのは馬鹿のする事だぞ!!!」

提督がかつてないほど激昂している。

初めて怒り狂う提督の姿に古鷹は急に弱気になり、たじろぐように

なった。

「私は……爆発するなんて……知らなかった……」

「知らなかった？ 知らなかったでお前は今自分の人生終わるところだったんだぞ……!!! お願いだから……!! もう自分を殺すのはやめてくれ……!! 頼むよ……—」

抵抗する事なく提督はされるがままに周辺の艦娘達に羽交い締めされ、古鷹から遠ざけられた。腰が崩れた古鷹の元へ加古が心配して駆け寄る。

「大丈夫？ 古鷹……？」

「う、うん……大丈夫……」

こんな馬鹿な真似を考えたのは翔鶴に違いない。以前にもこういう経験は記憶に残っている。まさか取り外したはずの自爆装置を持ち出してくるとは提督でも想像出来なかった。自爆装置は以前に霧島や加古、阿賀野を除いて殆ど取り外している。恐らく翔鶴側で且つ、取り外していない加古や霧島の自爆装置を使ったに違いない。

「那智……!!!」

「分かっているよな、これをした代償は」

「チツ……!!!」

自爆を阻止しただけでなく古鷹を殴ってしまった。これにより人質の摩耶が傷ついてしまう。

また罫に嵌められた。自爆という即死級の攻撃を提督は避けない訳が無い、古鷹を見捨てる訳が無い。それを見込んだ翔鶴達はどうかやっても回避出来ないような嫌がらせを投じてきたのだ。

「別に私達も鬼じゃない。特別に摩耶への罰は無しだ……代わりに……」

「青葉さん！ まだ言ってる……あ」

那智の背後に青葉と祥鳳が誰かのスマホを弄っている。

青葉、スマホ、そしてこの状況、二つの単語で提督は最悪な事態を予想した。

「あつ、ごめんなさい。言う前に青葉さんが……やっちゃいました」「まさか……お前……—」

「……まあそうだ、摩耶のスマホを使ってSNSで広めた」

提督が古鷹を殴った場面を摩耶のスマホのカメラで撮り、その写真を使ってネットに広めてしまった。当然そんな事をすれば提督の身は無事で済まされない。物理的な嫌がらせよりも精神的な且つ社会的な貶め方を仕掛けてきた。

「おやおや早速炎上してますね。これは消化するのは相当先になりそうですね……どれぐらい失権しちゃうんでしょうねえ……」

「祥鳳ッ……!!」

「と言う事で解散だ。では」

その場で何もされずに羽交い締めを解いてもらった提督は膝から崩れ落ちる。今まで提督が築き上げてきたこの鎮守府のイメージを、更には自分という存在を全てを尽く破壊された。これから起こる事を予測するのは容易い。ただその現実を受け入れる事は提督にとってまだ難しかった。

「■■■■鎮守府責任者、白中将。大本営までご同行願います」

「……」

艦娘達に嫌われて一週間と三日が経過。

提督は自然治癒力にて大怪我を八割回復させ、後は包帯などで痛々しい傷痕を覆い隠した。白い長髪も伸びるまでは髪留めで一つに纏める。あの事が起きてもお、歯止めない暴力に包帯やガーゼを貼る場所が徐々に埋まっていった。

当然あの事を大本営は黙るはずもなく、すぐに大本営直属の憲兵隊が押し掛けてきた。提督は潔く憲兵隊の元へ行き、その姿を見せる。

「秘書艦又随伴艦はおられますか？」

「私が行きます」

秘書艦として翔鶴が現れた。恐らく外部に報告されないよう見張りを自ら選んだのだろう。二人は送迎船に乗り、大本営へ向かう。

「秘書艦の方は一時こちらへ。両閣下が二人で話したいとの事なので」

「分かりました……盗聴器あるのでくれぐれもご注意を」

大本営に着いた二人は憲兵隊によつて別けられ、翔鶴は秘書艦待機室にて待機する事になった。一人になった提督は元帥室へ入室。重く大きい扉を開け、中に入ると前には元帥、そして右壁の横には■
■大將が座つて待機していた。

「またやらかしちやつたね、白くん」

「早速だがこの写真はどういう事か、説明をしてほしい」

年季の入った老人男性二人は扉手前に立つ提督に問い掛ける。■

■大將が持つ資料の画像には提督が古鷹を殴つた写真が貼られていた。

「あの写真は……」

『その優しきで私の艦娘達を救つてほしい——』

「……古鷹が自爆という非人道的な手段を提案してきた為、叱咤を含め怒りのあまりに手を出してしまいました。全ては力不足の私が起こした事です……尊敬なる貴方がたにはご迷惑おかけして誠に申し訳ございません」

若干嘘混じりの状況を事細かに説明した提督。

迷惑をかけてしまった事を二人に謝罪した。

「うーん……本当にそうなのかな」

「ではこの写真を撮つたのは誰なんだ？」

「それは……分かりません。いつの間にか撮られていました」

撮つてたのが青葉とバレれば、今荒くれ鎮守府で暴動が起きている事もバレてしまう。他の艦娘達の醜態が世界に広まり、居場所が無くなるのを提督は恐れた。更に翔鶴は提督が嫌われる状況になった事で長門から没収した盗聴器類が奪い返され、今盗聴器をどこかに仕掛けられている。不意に言い出せばどんな目に会うかなど想像に難くない。

「分からないのかい？ 誰が撮つたのかも？」

「はい……現在調査中ではありますが、未だに分かりません」

「白よ、何故私達が聞いているのか分かるかね。それはあの時雨や夕立の様に捏造された写真で命を失いかけた事例があるからだよ。だからこの写真の本人である君に問いたただしてるんだ、本当なのか嘘なのか。それを私達は知りたい」

全くもって■大将の言う通りだ。時雨と夕立の件があつたようにまた今回もその可能性がある。そう思っている二人は慎重に提督を問いただしていた。だが自分が古鷹を殴った事は本当だ、それだけは変わらない。想いや理由がどうであれ、殴った以上は処罰を受けるべきだ。

「私が暴行を働いてしまった事に変わりはありません。処罰なら何なりと」

「……君、何か隠していないか？」

真面目そうな提督の答えに■大将が疑問を投げ掛ける。■大将から見て提督は何か大事なことを隠しているように聞こえた。まるで誰かを庇っているような、本音とは思えない言い方だ。

「何を、でしょうか」

「前々から疑問に思っていたが、あの人の気配の無さ、司令本部の崩れた跡やその瓦礫、そして何故君の怪我の痕が増えているんだ？ また怪我したのか？」

■大将が訪問した日から、提督の様子はまた違っていた。包帯やガーゼの場所が増えており、白い長髪も一つにまとめられている。明らかに様態が違い過ぎていた。

「はい、最近は少しオーバーワークで睡眠不足がちでして……集中力が切れていたのかまた転んでしまいました」

「転んだにしては酷過ぎないか？」

「結構派手に転倒したんですよ？ おかげでこの有様です」

提督は手を広げ、嘘の出来事を淡々と話していく。

作り笑いでその場を誤魔化した。

「……分かった。そういう事にしておこう……」

「さて、君の処罰に関してなんだけど……立場上、軽くする事は出来ない。覚悟は決まっているかね？」

「はい決まっております……どうぞ、仰せのままに」

元帥や■大将とはそれなりの関係がある。しかし個人絡みの人情で罪を軽くする事など出来ない。平等に処罰を受けるべきだと元帥は判断した。

「君の処罰は二階級の降等処分とする、そして■■■■鎮守府の配属を取消、大本営にて■大将の補佐をしてもらうよ。いいかな？」

「……かしこまりました」

提督は処罰を受け止め、元帥に礼を言う。深々と頭を下げた後、元帥室を去っていった。また時雨や夕立の時のように二階級の降等処分、そして荒くれ鎮守府から大本営へ異動、■大将の補佐を務める事になった。それまで異動の手続きや準備の為に一週間の猶予が与えられる。中將という誉れ高き階級も大佐となり、権力は低くなっていた。

「待ちたまえ」

帰ろうとした提督を止めたのは■大将。

元帥室の重い扉を開けて、提督をわざわざ呼び止めた。

「何かしらの言えない事情があるのだろう、追及はしない。だがもし、誰かに脅されているのなら……」

メモ書きには「YESなら首を縦に、NOなら首を横に」と書かれていた。何故メモ書きでわざわざ教えてきたのか分からない。だが今翔鶴がいないこの中ではチャンスだ。提督は首を縦に振る、そして口を開いた。

「大丈夫ですよ、お氣遣いありがとうございます」

「そうか……分かった」

「^{オウゲン}？」よ、護神厄討艦隊全員に伝達。参加できる者は横須賀に集え、とな」

「……了解」

123. 最期に足掻く白い兎は疾風頸草の如く

「すみません！ 話をお聞かせくださいませんか!？」

「あの写真は事実なんでしょうか!!」

「真実をお答えください!!」

大本営を出た途端、マスコミに囲われる提督と翔鶴。マイクを口に近づかせられ、カメラのフラッシュが重なる。質問攻めされる中、憲兵隊によつて送迎車までリードされていく。そのまま提督は翔鶴共に憲兵隊に援護され、送迎車に乗り込む。カメラのフラッシュに包まれる中、提督と翔鶴の乗る車は送迎船に向かっていった。

やがて送迎船で荒くれ鎮守府に辿り着き、提督と翔鶴は頭を下げて憲兵隊に礼を言う。送迎船を見届け、岸边に二人が残される。

「喋りませんでしたか?」

「ああ……喋ってはいない、お前達の為だあバレたらまずいからな」

翔鶴が気楽に話しかけてくる。この鎮守府の状況を話していか確認してきた。また一人にしてしまったのか、鋭い視線で提督を睨んでいる。

「……そうですか。わざわざ盗聴器をつける事はありませんでしたね」

「チツ……」

提督の背中から小型の機械をつまみ出された。よく見れば提督が着任して何日か経った時に長門が盗聴していたのを提督が発見し、没収したはずの盗聴器が使われている。摩耶やプリンツ、青葉達が翔鶴側に移ったおかげで盗聴機類も全て奪われたのだろう。

「では失礼しますね」

「……」

盗聴器を手に取り、翔鶴は空母寮へ帰った。自動ドアを通り過ぎ、提督から姿が見えなくなった所で翔鶴は立ち止まる。僅かに身体を震わせ、手を強く握った。握った手から赤い液体が廊下内に零れ落ちる。

「……何が私達の為、よ……! 馬鹿じゃないの……!!」

静かに怒りに燃える翔鶴は自室に戻る。

部屋の中には――、

「翔鶴姉!! 提督さんは!!?」

手錠と足枷で拘束され、監禁された瑞鶴がいた。拘束されたおかげで身動き一つ取れず、ひたすら姉に提督の心配を聞いてくる。

「大丈夫よ、まだしぶとく生きてるわ」

「もうやめて! こんなの間違ってるよ!? 翔鶴姉!!」

瑞鶴は必死に提督を消す事を止めろと促し続ける。それもそう、瑞鶴は葉の効果を受ける夕飯前から翔鶴に監禁されていた。理由は分からない、ただ瑞鶴は提督が殺されてないか心配だった。

「何でこんな事するの!!? これじゃ提督さんが死んじゃう!!」

「死ぬべきなのよ。平気で私達を罵り続け、嘲笑い、馬鹿にし、見世物にするだけでは飽き足らず、私達の欲望に火をつけて、酷い過去を思い出させようとしている……クズじゃないの?」

確かに提督の捻くれた性格は嫌気がさす程だ。艦娘を罵倒し、煽る事を止めない人格破綻者。瑞鶴だってその経験は何回もしている。だがそんな経験をしていても、瑞鶴は提督が心のどこかでは優しさがあつた事を身をもって知っていた。

「確かに嫌な性格はしてるけど……でも提督さんは、違う気がする……」

「何が違うの?」

「……悪口は酷いし、性格は悪いけど……逃げないんだよ? こんな鎮守府の闇なんて普通の人があれば大体は皆一目散に逃げるはずなのに……あの人だけは私達の事を見捨てなかった……それに……」

『私はその艦娘達の誇り高き強い魂を……再び灯す手伝いがしたい』
『彼女達の存在を決めるのは我々人類ではない、彼女達自身が決める事だ』

『ですので、どうかこの娘達の希望の火を……消さないでください。お願いします』

『私はその馬鹿達こそ……褒め称えるべきだと思う……!』

「提督は……私達の事を大切に思ってる」

「……」

瑞鶴が経験した事は何も酷い思い出ばかりでは無い。

提督が持つ想い。

心の底から願う事。

揺るぎなき信念。

それらを間近で聞いてきた。

提督が何を思っているのか、その本心を聞いてきた瑞鶴は決して悪い人ではないと思っっている。

「摩耶を人質に取ったんだよね？ 何でそんな事したの？」

「そうすればあの提督は私達の嫌がらせに対して何も出来ないじゃない？ そこを見抜いたのよ」

「だったら……翔鶴姉は、提督さんの事を一番信じてるんだね」

「……どういう事かしら？」

翔鶴が鋭い言い方で瑞鶴を睨む。

だが瑞鶴は見逃さない、自分が言った途端に翔鶴が一瞬動揺した事を。

「提督さんが摩耶の為ならば私達の嫌がらせに対抗出来ない、だから受け入れるしかないっていう提督さんの善性を信じてるんだよ？」

翔鶴姉は「

「な、何を馬鹿な事を……！ 信じてる訳ないじゃないあんな男!!」

「いや信じてる。翔鶴姉は……救ってほしいと思ってるんだ、提督さんに。前に加賀さん達や金剛が救われた様に……翔鶴姉も無意識に訴えて——」「もうやめて!!」

翔鶴が初めて声を荒らげて叫ぶ。思わず瑞鶴も身体を跳ねらせ、怯えてしまった。その場で翔鶴は蹲り、頭を抱えて自分自身を正当化し始める。

「私は……救って欲しくなんかない……!!! 私……間違っってなんかいない……!!!」

私は、弱くなんかない。

艦娘達に嫌われて一週間と四日が経過。

新聞はあの写真の事で一面を張り、テレビの報道番組ではコメントーターと討議をしている。報道番組なものにも関わらず、勝手に提督のプロフィールやどういう人物なのかを伝え、何も知らない癖に評論家ヅラして言いたい放題だ。批判や批評は当たり前、記者に囲まれた際の言葉も取り上げられている。

ネットでは写真のコラ画像や提督の批判などの書き込みが多くなり、穏健派や過激派が提督と古鷹の事で争っていた。中身の無い理論を並べてはリプ欄でどうでもいい事ばかりを主張している。

そして荒くれ鎮守府では――、
「早く立て、練習にならない」

第二広場にて提督はひれ伏せられていた。対人格闘訓練に付き合わされ、長門の一方的な攻撃に提督は為す術なく倒れていた。艦娘の圧倒的な力に対抗出来る訳が無く、左腕は変な方向に折れ曲がり、肋骨の一部も折れている。吐血や鼻血で軍服や地面は赤く染まった。

「何がッ……練習だッ、クソがッ……!!」

まだ無事な右腕で立ち上がり、やつとの思いで提督は立ち上がる。今日はどうしても生き残らなければならない日だった。六度の夜の徘徊日でプリンツと不知火の部屋周辺による艦娘の遭遇率が判明し、今日効果消去薬を飲ませる作戦を執行する。二人とも寝ている可能性は嫌われた日から計算し、必ず一日おきに眠っている事が分かった。昨日は起きているのが確認できたため、徘徊日である今日は即座に不知火の部屋に侵入し、寝ている不知火に直接摂取させる。

提督が考えた唯一の作戦だ。

「いくぞ」

「ハア……ハア……!!」

長門が右腕を後方へ引き、殴る構えになる。提督は息が荒れながらも右腕だけ前に出して防御で構えた。右拳を力一杯に握り、長門は動き出す。

すると――、

「やめてください長門さん」

長門の拳を翔鶴が片手で反動なく止めた。土煙が遅れて三人を吹雪いた。翔鶴が一瞬、空母水鬼になったのを提督は見逃さない。やはり翔鶴は深海棲艦だったというノシロの情報は本当の様だ。

「すいませんが、提督はこちらで借りさせていただきます。訓練相手は鹿島さんがやってくれるそうです」

「む、そうか。では失礼する」

倒れ込む提督を庇う様にして現れた翔鶴に提督は警戒した。人をモノ扱いするような言い方で長門をどこかへ行かせてしまう。長門が行ったのを見計らって翔鶴は提督の長い白髪を鷲掴みにし、ある場所へ連れていかれた。

「提督、何故貴方が呼ばれたかご存知ですか？」

辿り着いたのは医務室の地下にある集中治療室。蛍光灯が眩しく光り、地下内の部屋を明るく照らした。提督はベッドに寝かせられ、周辺には利根、那智、龍驤、武蔵、比叡達が提督を囲うようにして立っていた。

「実は盗聴器で内容を聞いてたんですけど、ちょっと怪しい所がありました……」

翔鶴が聞かせたのは最後■■大將が気にかけてあのメモ書きを見せた所だった。提督は大丈夫ですよと答え、その後喋る事は無かった為にも怪しい所は無いはずだ。どこが怪しいのか提督には分からなかった。

「脅されてたりとか……って言われましたけど、もしかしてこの人って何か紙とかで伝えてませんか？　伝えてましたよね？」

翔鶴は疑心暗鬼に問い掛けているが、これは明らかに気付いている様子だ。あまりにも察知能力が高過ぎる。何故あの会話でそう見抜けたのか理解に苦しむばかりだ。

「ある訳ねーだろ……！　ただの会話だ……！！」

「本当でしょうか？　個人的にはブンと環境音が耳に入るので、一回ほど」

「だから何だって言うんだよ……！俺は何も伝えてねーぞ!!」
「でも私……見ちゃったんですよね。貴方とこのもう一人の方があの事を隠して伝えていたのを」

翔鶴のふざけぶりに提督は激昂。身体を起こして、翔鶴の肩を掴もうとした。が、そう出来るはずもなく周辺の利根達に押さえられてしまう。

「やはり伝えてましたね、まあ知っていましたけど。って事で摩耶さんに罰を与えなければなりません」

「やめろ!! 摩耶は関係ないだろうが!!」

「そんなに摩耶さんが傷付くのが嫌ですか?」

「当然だ!! やるなら俺にしろ!!!」

摩耶が受けるぐらいなら自分が受ける。そう提案した提督に翔鶴は小さく舌打ちをした。とはいえ提督が受けてくれるなら嫌がらせと一石二鳥。受けてもらった方がこちらとしても都合が良い。

「……分かりました。貴方が言うならそうします、本来なら摩耶さんが受けるはずだった罰を貴方に……」

翔鶴は指を弾いて綺麗な音を出す。すると武蔵が突然動き出し、隣のベッドからある物を手に取り出した。そのある物を見て提督はゾツとする。

「おい……何だよ、それ……お前それ——ツ!!!」

提督の叫び声が部屋中に響き渡る。血飛沫が艦娘の正装や床、壁に飛び散る。突然の激痛に提督は暴れ始めた。そんな暴れる提督を利根達が強制的に押さえ付ける。

「左腕一本、断らせていただきました」

提督の折れた左腕が中途半端に切断されていた。武蔵が持つ提督の軍刀で一刀両断、切断された左腕が床に落ちている。

「あ、知ってました? 高速修復材って何故か人間にも使えるんですよ? 大本営はひた隠しにしていますが色んな怪我も一発で治せちゃうんです、例えばこの斬り裂いた腕だってこうやって飲ませれば……」

提督の切断された左腕の断面から、生きる動物の様に筋肉や骨が

ゆつくりと形成されていく。またその間、神経も形成されていく為に凄まじい痛覚が提督を襲ってきた。徐々に出来る上がる左腕から来る激痛に提督は喚き声を上げる。

「ほらこの通り。妖精さんの技術は凄いですね、綺麗な腕になりました。ですが——」

また無鉄砲に左腕を切断された。しかも生え変わった断面辺りを丁度良く狙ってきたのだ。提督は更なる激痛の波にまた身体が暴れ狂う。それを他の利根達が押さえ付け、また高速修復材を飲ませては左腕を生やしていく。激痛という激痛の連続に提督は精神が狂い始めた。

「はあはあはあはあ……!!」

「凄いですね、提督。こんな事されてまだ精神が生きてるなんて、貴方ぐらいですよ」

「……ふざけるなよ……!! こんな……拷問だろうが……!!」

「いえいえ罰です。そういうえばさつきから何か希望があるような表情してますが……もしかしてこれの事ですか?」

翔鶴が手に持っているのは大きな瓶。中には粘着性のある液体が入っていた。提督はそれを見て目を限界まで見開かせる。

あれは効果消去薬だ、提督にとって唯一の切り札。翔鶴達に対抗する為にわざわざ呉鎮守府の保管庫から持ってきた物だ。誰にも教えず嚴重に隠していたモノを、何故翔鶴が所持しているのか。提督がそれを理解するのは数秒後の事だった。

「……ままま待て……何でお前が……それを……」

「あ、やっぱりそうでしたか。前に執務室を荒らしてくれた鹿島さんが見つけたんですよ。何か大事な物でした?」

「……返せ……!」

「はて、何と?」

「それを……返せッツ!!」

「嫌です」

翔鶴は即座に断り、効果消去薬が入った大瓶を上から落とす。床でパリンと盛大に割れ、中の液体が飛び出てしまった。そして上から靴

で踏み躪り、ぐちやぐちやに汚していく。あまりの理不尽さに提督は言葉を失い、抵抗する力が徐々に無くなってしまった。効果消去薬という希望の存在を無慈悲に破壊され、目の前には受け入れ難い地獄と化した現実。提督が持っていた唯一の希望を、翔鶴は一気に絶望の深淵へ叩き落とした。

「さて……どうせなら避けた数だけ切っちゃいましょう。ではあと五十四回……——」

「やめ、お願い、しようかつやめろやめて——」

「——頑張ってください」

「さて……始めますかって、あれ……提督はどこへ……？」

124. 逆境の最中に輝くアルジエント

あの時が懐かしく思えた。

情報を吐かせるが為にありとあらゆる拷問され、牢屋に收容されていく日々。

鞭打ちや水責めなど簡単に思える程の、人として扱わない非人道的な拷問の数々。身体は細かく刻まれ、薬を打たれては苦しみ藻掻く様を見て嘲笑い、馬鹿な性癖を持つ奴には無様に犯された。

この身体がとても特殊だからだという理由もある。

俺はそもそも性別という概念が無い。

乳房は小さくとも存在し、体格は男性。男性器と女性器が同時に備わっている、とても気持ち悪い身体。

とある軍人から聞いた話では母親の遺伝子の影響力が強過ぎたらしく、染色体が異常なモノになってしまい、本来は男性として生まれるはずが女性の身体が混ざった身体になってしまったと言われた。子宮や精巣が同時に備わっているが、本来は男性故に女性器は全く機能が無く、ただの穴として残っている。

そして人間には無い、超人的なまでの力。様々な傷や怪我を治せる凄まじい自然治癒力。

拷問もされたが、研究の実験体としても使われた。数々の実験で生死を彷徨い、研究者に言われた事は――、

『――お前は、ある深海棲艦と人間の間にも生まれた子供だ』

俺は人間じゃなかった。

が、再び来ればそこに提督の姿は無かった。拘束器具で身動きは取れないはずがその拘束器具は壊されている。武蔵達は鎮守府内を一斉に捜索を開始。

いよいよ提督狩りが始まった。

一方で提督は医務室から少し遠い重巡察にいた。壁に寄り掛かりながら右腕で必死に一歩ずつ進んでいる。左腕は高速修復材で形成されているが、歩く度に電撃の様に激痛が迸った。

提督は必死だった。あのままではいずれショック死してしまう。出血多量で意識も朦朧とする中、ある艦娘の部屋の前へ辿り着いた。安心したのかドアに縫り付き、そのまま座り込む。

「なあ摩耶……大丈夫か……？」

そこは摩耶と鳥海の部屋だった。右腕で顔を隠し、か弱い声でドア越しに摩耶へ話し掛ける。唯一の希望を呆気なく打ち砕かれ、拷問の様な罰で精神が限界を突破していた提督は摩耶に一度会いたかった。「俺はもう……限界、みたいだ……！」

初めて弱音を吐く提督。身体中に怪我を負い続け、自身のプライドを踏み躪られただけじゃなく、社会的に殺され、遂には人として扱われなくなった。

辛かった。苦しかった。

だが決して諦めなかった。

どんな事をされても効果消去薬という希望がある限り、そして恩人の願いの為に提督は頑張ってきた。だがその希望も潰れてしまった。

「ごめんな摩耶……助けて、やれなくて……悲しいよな、苦しいよな……本当に、情けなくて……ごめん……！」

この鎮守府の艦娘達と立ち向かうと考え、豪語してきはずがこの有様。翔鶴に見事騙され、罠に嵌ってしまった。

何が有能だ、何がお前らとは違うだ。

翔鶴達に無様に弄ばれてるじゃないか。

傍から見れば自業自得、因果応報。そんな情けない自分に提督は悔しきで歯を食いしばった。

「もう涙は出ないはずなのに……出てしまいそうなほど……辛いん

だ。正直、もう……死にてえ……!!」

この弱音を摩耶はどう思っているだろうか。今までは摩耶がいたから頑張れた。後についてきたくれたから自分がいた。だが今はもうその摩耶は隣にいない。かつてないほどまでに嬲られた提督は身も心も限界を突き付けて弱りきっていた。

「頑張ってきたけど……もう無理だ……だから、せめて最期に……摩耶の顔を……」

ドアの開く音が聞こえた。後ろへとドアに押され、提督は後方へ少し下がる。ドアを開いた先にいたのは摩耶だった。久しぶりに顔を見る事が出来た提督は微笑む。そして――、

「ああ……やっぱお前は……変わら――」

広場まで蹴り飛ばされた。窓や壁を突き抜け、倉庫の前で無様に倒れ込む。雨が徐々に降り出し、倒れる提督を濡らしていく。

蹴り飛ばしたのは摩耶本人だった。壁に大穴が開き、一人その場に立ち尽くしている。周囲に艦娘達が集まりだし、遠くに倒れ込む提督を眺めた。

「……ああ……あ……ああああ!!」

膝から崩れ落ち、摩耶は顔を覆い隠す。今自分が何をしたのか、理解するのに時間が掛かった。だが理解した途端に自分が提督にとどめを刺してしまった事に絶望。取り返しのつかない事をしてしまった摩耶はその場で泣き崩れた。

「……どうする、アレは」

「流石にせき止める時間は限界の様です、仕方ありませんが……後はあの人が何とかしてくれませよ……準備を」

提督は全く起き上がらず、誰にも声を掛けられないまま、雨に打たれ続けた。

――ああ……俺、死んだな……。

「……とく……」

「……とく……!」

「提督……!!」

「提督!!」

「……っ?」

誰かに声を掛けられ、ゆっくりと重い瞼を開いた。目の前に見えるのは自分の太腿、両腕が縛られている感覚がする。顔を少し上げれば、前に誰かがいるのが見えた。スラツとした細い足、艦娘だろうか。徐々に顔を上げ、誰かを確かめる。そこにいたのは――、

「やっと目を覚ましてくれましたね、もし死んでたらこの連中皆殺しにしようかと思いましたがよ」

鹿島がいた。

笑顔で提督に近付き、提督の無事に安心している。

「お……これは、死んだ……はずじゃあ……」

「残念ながら死んでませんよ、私が保護したので」

あの後放置され続けた提督は鹿島によって保護され、ここまで担いで来たらしい。提督が目を覚ますまで三時間を要し、鹿島は何分か間を空けてはこの部屋に来て確認しに来ていた。

「鹿島……! お前の……所為、でっ……!」

「私の所為? 何を言っているか分かりませんが、取り敢えず目覚めた事ですし始めちゃいますね」

「ッ……!?! 何、を……する気っ、だ……!!」

「何をするって、調教ですよ? はあ……これでやっと提督の事を疑

られる……時間が掛かりましたね」

鹿島はどうやら提督が調教出来る機会を度々狙っていたようだ。翔鶴達に何回か止められ、提督と接触する事があるまり無かったが、今回やつとその機会が舞い降りて今に至るらしい。

「さて……始めましょうか」

鹿島が背後から何か取り出そうとしている。また拷問じみた事でもするのだろう。最早対抗する力も、気力も無い。自暴自棄になった提督は再び顔を俯いた。

今度こそ本当に死ぬ。

そう察した提督は目を瞑り、全てを諦め――、

「――っ……っ？」

「大丈夫ですよ、提督」

提督の目辺りに触れたのは布。予想外の行動に提督は再度目を開く。鹿島はハンカチで提督の涙を拭いていた。

「そのまま安静に、騒いでは駄目ですよ」

鹿島は涙を拭いた後、血で滲んだ古い包帯やガーゼを外していく。そして新しい物で再度身体中の傷を治療し始めた。

「どういう……事だ……」

「喋らないでください。傷が開くので」

次に鹿島は新品のタオルやハンカチで身体に付着した汚れや血痕

を拭いていった。汚れた軍服を強制的に脱がし、身体全体を洗っている。その時の鹿島は全く笑っておらず、真面目な表情だった。

「お前は……嫌い、じゃないのか……」

「提督の事を一番に愛している私が提督の事を嫌いになる訳無いじゃないですか、私は貴方の味方ですよ？」

好嫌薬の効果がまるで無い。通常であれば鹿島も提督の事を嫌っていると思っていた。だが鹿島は嫌いどころか愛していると言う。いつもの通常運転に提督は困惑した。

「何で……お前っ……だけ……」

「実はですね、翔鶴さんとある取り引きをしまして。提督の事を調教出来る代わりに仲間になってほしいと言われたんですよね。私は快く承諾し、楽しみにしていましたか」

圧倒的な戦闘能力と提督に対する愛を持っている鹿島を翔鶴は恐れていた。計画において鹿島は唯一の制御不能な危機的存在。薬の効果が効き始めれば必ず提督を独占しては暴れる可能性があり、翔鶴が考えた計画は台無しになる。そこで翔鶴は鹿島を配下に置く事よりも条件を元にした同盟相手として一時的に仲間となっていた。

条件としては、

一つ目、提督を必ず調教出来る権利を与える代わりに一週間の間は提督との接触は避ける事。

二つ目、普段と同じように模擬訓練の監督役になってもらう事。

三つ目、一週間過ぎた後は提督を自由にして構わない事。

鹿島自身は最初はどうでもいい余興だと興味無さそうに作り笑いで感心していたが、翔鶴達の目的は表向きでは捻くれた提督の性格を矯正させる事だと聞いて、流石の鹿島も興味を引かれていた。

何故なら伝えられた計画の内容は艦娘達が提督をちよつとした反抗で痛い目に遭わせ、最終的に鹿島の調教による性格の矯正してもらう事。元々は提督の性格を矯正しなかった鹿島は少し可哀想だと思っただがこれで自分好みの提督が作れるならと翔鶴の計画に参加する事にした。

しかし表沙汰に伝えられた計画内容とは裏腹に艦娘達が提督に極

端且つ非道な嫌がらせを始めた事に鹿島は違和感を持ち始める。提督が艦娘達に嫌われてから二日が経過し、明らかに艦娘達の態度が豹変したのを再確認した鹿島は急いで翔鶴の元へ向かった。だが怒り任せで馬鹿正直に疑えば翔鶴の本意は聞き出せない、そこで鹿島は翔鶴達の話を盗み聞く事を考えた。そして翔鶴が話した目的に鹿島は耳を疑う。

翔鶴曰く――、最終的な目標が摩耶と鹿島、そして提督の殺害。

鹿島は即座に考えた。唯一まともに接してくれる摩耶と一番大切な愛する提督を殺害するなど言語道断。このまま翔鶴側のフリをして内部から計画をボロボロに崩していく作戦を鹿島は思いついた。

その為には提督や翔鶴に悟られないようにしなければならぬ。不意に提督と話しかければ翔鶴から疑われられる。提督は神経質で、それこそあれだけの拷問を耐え凌いだ恐るべき精神力の持ち主だ。そんじよそこらの下等な艦娘如きの嫌がらせなど軽々と回避出来るだろう。仮に何かあったとしても一週間は接近出来ないが、その過ぎえ過ぎれば後は提督を保護出来る。

何せ一週間という自分に対する猶予、そして自分を含めた摩耶と提督の殺害。自分が提督を独占し、調教する為に二人でこもるのは必然。ならばそこで二人とも殺した方が賢明なはずだ。

勿論その策は考えている。古鷹と同じように自爆装置をつけて爆散させる考えはお見通しだ。あの時翔鶴が古鷹に何も知らせず自爆させようとしていたのは提督が自爆装置に気付くかどうかの実験に過ぎず、社会的に殺すのは表の目的でしかない。そこで鹿島は四方がコンクリート壁と金属壁に囲まれ、且つ地下深くにあるこの場所であれば信号は行き届かず、自爆される事はない。なお自爆装置をとつと外してやりたかったが、外せば翔鶴に自身が気付いている事がバレる可能性がある為、敢えて取り外すのはやめている。

しかし摩耶が人質にされたのは鹿島でも予想外だった。目的が提督と摩耶、自分の殺害であれば摩耶は提督と自分が殺された翔鶴達が

手を下さずとも勝手に死ぬはずだ。提督に唯一信頼されている且つ信頼している摩耶が何らかの方法で意図せず提督に嫌悪感を抱いているとなれば、その反動は凄まじいモノになる。今までの罪の意識に耐え切れずに自殺を選ばせた方が遥かに効率がいい、もし自分ならそうさせるだろう。

人質にした理由として、龍驤から訳を聞けば嫌がらせを回避し続ける提督に翔鶴が痺れを切らしたらしく、強制的に摩耶を部屋から引きずり下ろしたとか。

そこで鹿島は作戦内容にある護神厄討艦隊の艦娘に蹂躪してもらう計画を早急に始動。監視の報告の為に大本営へ向かう建前を作り、艦隊の司令官である■■■大将へ詳しく報告した。そして荒くれ鎮守府に帰還し、医療器具の運搬などの準備を翔鶴達に隠れて整えた後に広場の隅にて倒れる提督を保護。調教と称してこの場所へ閉じ込め、今に至る。

「しかし嫌がらせとはいえ、どれも野蛮で粗暴、残酷な事ばかり。全く美しさの欠片も無い、提督がボロボロにされるのは見るに堪えませんでした」

「お前だけは……違った……のか……」

「はい……計画の為でした。申し訳ございません、保護するのが遅れてしまつて。出来れば帰還した直後から誘おうと思つていたのですが、翔鶴さん達にしつこく見張られましたね。本当に謝る事しか出来ません……」

身体全体の洗浄が終わり、鹿島は軍服を着せていく。

鹿島は悲しげな表情で提督に謝罪した。

「実は提督が艦娘達の嫌がらせを回避した時、仕返しにいく艦娘達を私が話し掛けて止めていました。少しでも力になればと、模擬訓練の相手になる事でその気を失くさせてました」

「なるほど……だから、誰も来なかった……わけか……」

「はい。ですのでもう安心してください……私がいいます」

鹿島の声はとても優しくかった。母性に溢れているような、心地良い声。今まで全て一人で孤独に耐えてきた提督にとってそれは、再び照

らされた希望の光だった。抑えていた感情が、思いが、一気に放出されていく。

「すまない……今まで俺は……お前の事を……嫌っていた……」

「知っています。ですが私は何とも思っていないません。例え私の事が嫌いでも、それでも私は貴方が心の底から好きなんです」

狂暴的な性格で周りから恐れの目で遠ざけられ、友達も仲間もいなくなった自にとつて提督は、こんな性格だろうと絶対に見放さなかった唯一の存在。必死に自分の性格を直そうと積極的に接し続けてくれた。結局その性格は治らなくても提督は傍にいさせてくれた。仲間や友達も自然に出来ていた。

「確かに提督は気難しい性格をしています……私にとつては優しさ以外の何物でもないんです……だから、弱気な姿はもう見たくありません……立ち上がってください」

「でも……もう手段が……」

既に希望の一手は翔鶴によつて打ち砕かれた。効果消去薬は使い物にならなくなり、今から取りに行くにしても翔鶴達は見逃さないだろう。これからどうすればいいのか、提督には分からなかった。

「あ、もしかしてこれの事ですか？」

鹿島が手をポンと叩き、ある大瓶を提督に見せる。

それは翔鶴が壊した物とほぼ一致していた。

「鹿島……それは……」

「ええ実は提督の机をちよつといじつてたんですけど、何か大事そうな物があります。そういえば以前に提督が食堂の厨房にて水飴と似せて何か作っていたなーと思ひ出したので、食堂の倉庫に置いてあった水飴の大瓶とすり替えておいたんですよ。翔鶴さんは全く疑問に思わず壊したそうですが、本物はこちらにあります……確認の為に持ってきたんですけど因みにこれ何ですか？」

何と鹿島の持っている物こそが効果消去薬、つまりは本物らしい。

「それは……効果消去薬。ありとあらゆる薬の効果を打ち消す薬だ」

「……それって所持するだけで重い処罰が下るヤツじゃないですか？」

「ああそっだよ。そもそもこの現状も翔鶴が好嫌薬の効果で俺が一気に嫌われてんだ。洗脳を解く為にもコイツが必ず必要、使えば戦況は……必ず一転する……!!」

この現状を唯一打破出来る提督の武器、それが効果消去薬。鹿島が持っているのであればわざわざ作戦を考えなくても自然的に摂取させる事が出来る。誰も怪しまれない鹿島であればそんな事など容易だ。

「……いや待て。鹿島、それは本物なんだよな……?」

「分かりませんが、取り敢えず提督の机の棚から持ってきたので本物だとは思いますが……あ」

提督の顔を見て鹿島が声を漏らす。

本物かどうか分からなければ――、

「誰かを摂取させればいい!!」

誰も怪しまれない鹿島が一人、艦娘をここに呼び出せば実験が出来る。そう考えた二人は声を揃えて口に出した。

「そうと決まれば連れてきてくれ。そうだな……古鷹を連れてこい」

「古鷹さんですね! 分かりました! すぐ連れてきます」

すぐに部屋を出た鹿島は古鷹を呼びに行った。部屋に取り残された提督は再形成された左腕の感覚を確かめる。元の左腕は既に切断されている為に再形成された左手の薬指に摩耶との指輪は無くなっていた。提督は左手を握り、激しい痛覚が来ても耐えて噛み締めた。

「仕方ないな……今は――」「はい連れてきました!!」

部屋を出て数分後に鹿島は古鷹を連れてきた。あまりの速さに風が提督の髪を揺れる。思わず提督は言葉を失った。

「何ですかいきなり!! 手伝って欲しいって言うから来たのに! ここに来た途端縛るなんてどういう事ですか鹿島さん!!」

「すいませんが、古鷹さんには実験体になつてもらいまゝす」

「えっ!? 実験体って……てか提督が!? えっどういう事ですかコレ!!」

拘束器具で縛られて座る古鷹を前に二人の悪魔が微笑む。

不気味に笑う二人に嫌な予感がした古鷹は頬を引き攣らせた。

「あつ……あ、あのー……優しくして——うぎやあああああああ!!!」

部屋内に古鷹の叫び声が響いたのは言うまでもない。

「うつ……私は……確か提督と鹿島さんに……」

「目が覚めるの早いな」

「早いですね、さて古鷹さん。提督に言う事がありませんか?」

古鷹が目覚めたのは薬を摂取して一時間後。効果消去薬の効果発動時間は一時間、出来れば発動時間を調整したかったがその前に翔鶴達に仕掛けられた為に調整は出来なかった。

「……ハッ……いー 私なんて事を……!! (ごごごごごめんなさい 提督!! わわわわわわわ私あんな事を……! お願いします何でもしますから……どうか見捨てないでください……!!)」

「効果は……」

「本物の様ですね……」

古鷹の様子からして効果消去薬は効いたようだ。今まで提督にしてきた事を思い出して、青ざめた顔で提督に縋り付いている。提督は縋り付く古鷹を引き剥がしては見下すような視線で睨んでいた。それを見た古鷹は今まで提督が受けた地獄の嫌がらせを察知し、心苦しくなったのか腰を崩しては頭を抱えた。

「で、ですよね……あんな酷い事、してしまっただからです……いくら謝っても……無理、ですよね……」

古鷹はその場にて泣き崩れる。自身がしてきた事が愚行である事を自覚し、もう二度とは戻せない関係を作ってしまった己に絶望した。薬の効果から解き放たれた分、跳ね返る感情や思考は凄まじいものだろう。

「何勝手に死のうとしてんだ?」

「その方が……提督も——」「望んでいるからか?」

「……はい」

「へえ……薬の効果とはいえ、良い様に暴れといて罪の意識を感じはせず、知らなかったからと言って自爆を企んでいた翔鶴に何一つ疑

問に思わないまま……」

提督は言葉を並べながら古鷹を壁際まで追い込んでいく。怒りのつもった声で足を一歩ずつ強く踏んで歩いていった。

「効果が切れたとなればすぐさま俺に縋り付き、勝手に許されないと思いついで都合よく自殺をするなんて甚だ自分勝手だと思わないのかな？」

「ヒツ……」

「死なせるわけないだろう？ お前ら全員目覚めた後からきっちり制裁は受けてもらうからな。許してもらえなければ覚悟しろ」

紅黒く濁る眼に明らか憎悪を感じた古鷹は絶望に染まった表情で身体を震わせる。提督が歩いてきた足跡はコンクリートで出来た床にヒビが入っていた。提督は古鷹を睨むのをやめ、部屋全体を見渡す。

「……鹿島」

「はいはい。今は身体を震わせる暇があるならこの状況を何とかしましょうか古鷹さん。勿論、手伝ってくれるますよね？」

「はい……寧ろ、手伝わせてください」

「さて……ここはどこだ？」

「ここはですね……」

鹿島が勿体ぶるような表情でドアをゆつくりと開く。先程からこの部屋も辺りが真っ暗でどこなのか分からない。

鹿島が開くドアの先には――、

「白さん！」

「流石、豪語するだけの事はあるわ」

「我らが提督殿の復活だ！」

「お役に立てず申し訳ない限りです」

「提督!!」

「やっぱ貴方がいないと!!」

「心配シタワ……全ク……」

提督の前には灰色達が。ここは地下営倉、鹿島と提督がいたのはかつての拷問部屋だった。提督の推察通り、灰色達は地下営倉に閉じ込

められていたようだ。だが今は鹿島によつて解放されたのか檻の外に出て提督を出迎えている。

「……っ……生きていて清々したぞ、お前ら」

提督は感極まって齒を食いしばる。

そしてまた不気味な笑みを浮かべ、前に出た。

「じゃあ始めようか……!! これが俺の……! いや俺等の……」

」

「——逆転劇だ!!」

125. 約束されたトラディメントウオー

提督による形勢逆転の作戦が実行された。

まず提督は左腕の切断拷問が続いている為、鹿島と古鷹に調教されている体で地下営倉にこもる。

鹿島と古鷹は薬の投入役。夕食前に食堂で準備する鳳翔の気を古鷹が惹き付け、その間に効果消去薬を仕込む作戦に入った。

「ほ、鳳翔さくん……」

「はい、どうされました古鷹さん」

「実はですね……私の部屋が少し散らかっていて、部屋が綺麗な鳳翔さんに手伝ってほしいんですけど……」

「あら、そうなんですか。分かりました、まだ時間はありますし大丈夫ですよ」

古鷹が鳳翔を連れて、食堂の厨房を離れた矢先に鹿島が自然に潜入。グツグツと音を立てた味噌汁の長鍋の中へ、粘り気のある効果消去薬を投入する。ある程度誤魔化せるようにお玉でかき混ぜ、味を感じさせない為に味噌を少し多めに入れる。

「正直味噌汁は塩っぱい方が好きなんですよね……ん、私好みの味です」

効果消去薬の効果発動時間は摂取方法など関係無く、摂取してから必ず一時間後に発動する。提督曰く、出来れば効果発動時間を設定しなかったが、それをやる前に翔鶴達に罠を嵌められ出来なかったとの事らしい。昼食の時間は十二時半からで、そこから艦娘達が食べるとすれば凡そは十三時半から十四時半の間。その間に艦娘達が知らずに摂取すれば好嫌薬や改造された戦闘意欲増進剤などの全ての薬の効果はゼロと化す。

「だ、大丈夫ですかね……」

「全員が集まっています。何も問題はありません……私達が犯した罪以外はですが」

「うっ……」

鳥海が摩耶の分まで昼食を持ってきているのは確認出来た。艦娘

の全員が食事を取った事を確認した古鷹はその後の反応を追い、鹿島は提督の元へまた向かった。

そして――、

「あつ……」

最初に摂取した白露を機に全てが崩れ去る。効果消去薬の効果が発動、翔鶴達が仕掛けた好嫌薬や改造された戦闘意欲増進剤などの効果が全て消去されたのだ。

「提督……!!」

「どこに行ったのよ……お願い……!! 出てきて……!!」

「あ……ああ……ああああ……!!」

「何で私は……あんな事をツ!!」

「ごめんなさい……提督……」

突如鎮守府の中は阿鼻叫喚に包まれる。罪の意識を感じた事で泣き叫ぶ者やどこかへ消えていった提督を必死に探す者、頭を抱えてはただ只管に謝り続ける者などまさに地獄絵図だ。

「一体何が起こったのよ……!! 何でいきなりこんな事が……!!」

翔鶴や龍驤達が突然の騒動に慌てふためく。翔鶴を気にもとめずに涙を流しながら加賀や鈴谷は血眼になって探していた。まるで薬の効果が切れたかのような艦娘達の行動に翔鶴達は何が起こっているのか理解が追いつかない。翔鶴は慌てて一人で司令本部へ向かった。しかしその時――、

『よお翔鶴』

「ツ!!?」

『……また会ったな』

鎮守府内のスピーカーから本物の声へ伝わって聞こえた。ようやく司令本部と駆逐艦寮を繋ぐ連絡通路にて対峙する。翔鶴の目の前にはニコニコと微笑む鹿島と元気な姿をある程度取り戻した――、憎き提督がいた。

「悪いが翔鶴、お前の作戦はここで終わりだ」

「貴方が死ねば終わりですね」

「俺は死なねえよ。お前らが全てやってきた事が終わるんだ」

この艦娘達に嫌われ続け、嫌がらせと拷問を受け続ける日々はもう無くなる。翔鶴が仕掛けた罠や作戦が全て水の泡になったのだ。

「どうやって？　まさか鹿島さんが味方になってくれたからと言ってこの状況が打破出来るとでも？　例え鹿島さんと言えど七十人を相手に出来る訳が無い……貴方の社会的地位を降ろした、貴方の企んでいた事は潰した、貴方の下らないプライドをズタズタにしてやった……どうやって戦うんですか？　摩耶さんがどうなつてもいいんですか？　貴方の目の前で殺したっていいんですよ？」

七十人でも余裕なんだけだな、と心の中で思いながらも鹿島は翔鶴と対立する。どうやら翔鶴は計画が崩れ去った現実逃避し、理解してないようだ。薬の効果が消え去った事や艦娘達が目を覚ましている事、それを知らずに翔鶴は提督に脅していく。

「……やっぱお前は、人の心を捨て切れていない」

「……」

「俺が摩耶の為なら何も出来ないっていう良心を信じてる時点でお前は三流だ」

「……れ」

翔鶴が顔を俯き、何かを呟き出す。

提督は翔鶴を追い込む様に言い詰めてきた。

「わざわざやりたくもない癖に悪になりきるのはやめろ、お前はそういう性格じゃない」

「……れ……！」

「言えよ、誰に脅されてるんだ。お前を縛っている全てを俺が——」

「黙れ!!!」

提督の話を翔鶴は大声を出して一蹴する。突然の叫声に翔鶴以外の艦娘と提督は身体を跳ねらせ、驚きの表情を隠せずにいた。口調も命令形に、以前のかしこまった口調は消えている。

「黙りなさい!!!　貴方までそんな戯言を言い出して!!　良心を信じてる?!　良心の欠片も無い貴方の何処を信じればいいんですか!!!」

「一々私達の事情に首突っ込んで、一体何がしたいんですか!!!?」
「そりゃあ、お前らの元上司の為に!! やってんだろうが!!!」

提督は手を広げて堂々と打ち明ける。その瞬間に、突然那智と利根が前に出て提督に殴り掛かった。那智と利根の殴打を鹿島が庇い、壁を突き抜け外へ出る。連絡通路の壁に大穴が開き、そこから外にいる提督と鹿島を見下ろした。二人はすぐさま立ち上がり、以前摩耶に蹴り飛ばされ倒れ込んだ場所にて翔鶴達を見上げる。

「■蒼■中尉………忘れたとは言わせねえぞ翔鶴。かつてお前が愛し、そして殺した男の名前だ………」

「っ……!!? だから何だと言うんですか、あの人は死んだ!! 私の手によって!! あの男の所為で! 私は犯されて!! 全て台無しになつて! 脅されて!!! 殺せと頼まれて殺した!!! 仕方が無かつた!! どうしようも出来なかつた!!」

翔鶴の嘆きと共に寮から次々と艦娘達が艤装を展開した状態で現れた。

提督と鹿島に接近し、徐々に距離を詰めていく。

「力が必要だった………皆を守る様な力が………! 私が支配すれば皆を扱える、だから私は支配という力で皆を守った!! 徹底的に痛めつける事で兵器として感情を無くさせ、辛くならないように頑張った!!」

喉が張り裂けそうな声で翔鶴は自身が経験した過去と経緯を嘆く。思い出したくない忌まわしき過去が頭の中で映像のように流れた。翔鶴は頭を抱えて、提督に訴える。

「これのどこが間違ってるのですか!! 私は間違っていない! 絶対に間違っていない!!! 間違つてなんかいない!!!」

自分は絶対に間違っていない。一体そんな自信はどこから湧き上がるのか。何を経験して出来たモノなのだろうか。明らかに矛盾している事を正しい事だと思い込んでいる。

「もう終いです!! 鹿島諸共この世から消えなさい!!!」

提督と鹿島を取り囲むようにして艦娘達が再度艤装を構える。鹿島も艤装を展開し、提督を守る様にして身構えた。しかしそこで提督

はある異変に気付く。

「っ……う？　そうか……」

「やいなさい貴方達!!」

「翔鶴!!」

「っ!」

突然大声で名前を呼ばれ、たじろぐ翔鶴。

提督は翔鶴を見て、突然話し始めた。

「全てにおいてお前に完敗だったよ……流石俺が強者と認めたくらいだ。仕組まれた罠、作戦、どれにおいてもお前は優秀だった。優秀過ぎた、優秀過ぎたんだよ……」

「命乞いですか!?　見苦しいにも程がありますよ!!」

「いや違うな……お前が優秀だから、俺らは勝てたんだ……」

突如放たれた砲弾が翔鶴の頬を掠める。連絡通路の中で着弾し、爆発して崩れ落ちた。爆発を背景に翔鶴は砲撃した艦娘を睨む。

翔鶴に砲撃してきたのは――、

「不知火とプリンツが!」

――涙を流した不知火とプリンツだ。

「だから何だと言うんですか……!!　例え三人だろうとこの状況は打破出来ない!　質量に押されて……っ!!」

翔鶴が見下ろす光景には艦装をこちらへ全て向ける艦娘達の姿が。提督へ向けたのではなく全て翔鶴達に向けている。有り得ない光景に翔鶴は限界にまで目を見開いた。

「誰が私達だけと言いましたか?」

「すいませんが、ここにいる全員はもう目覚めてますよ」

何故だ、何故だ、何故反旗を翻しているんだ。

提督には何の手段も無かったはずだ。それこそ私とその手段を目前で破壊したはずなのに。

一体どうやってあの薬の効果を打ち消した？

何故だ、何故だ、何故だ!!!

「何故だつて顔してるなあ、翔鶴……」

戸惑いを隠せない翔鶴に提督が声を掛ける。

そこで初めて翔鶴は悔しい表情で提督を再度睨みつけた。

「ざまあみやがれ」

「……一体何を仕掛けたんですかツツ……!!」

とてつもない程怒りを表す翔鶴。前髪が逆立ち、淡い黄色の眼が輝いた。タイミングを見計らって灰色達が地下営倉から脱出、外に出て状況を確認し始めた。

「俺は呉鎮守府の地下倉庫からある物を取り出した……それは、効果消去薬。薬のありとあらゆる効果を全て打ち消す禁断の薬だ。俺はそれをコイツらに飲ませたんだ」

「あの大瓶に入っていた物ですか……!!　ですがあれは確かに貴方の目の前で台無しにしたはずです!!」

「ああ確かにお前は俺の目の前であの大瓶を破壊し、使い物にならなくした……だがあの大瓶に入っていた物は偽物だったんだよ」

偽物と聞いて翔鶴は過去の記憶を思い出す。確かあの大瓶を渡してきたのは鹿島だ、提督が隠していたから大事な物に違いないと言われて貰い受けている。そして翔鶴は気付いた。

「偽物……？　まさか!!」

「そうそのまさかです。あの大瓶は私が食堂の厨房に置いてある大瓶からすり替えた物……あの時翔鶴さんに渡したのは効果消去薬なんかではありません、ただの水飴です」

「元々食堂の厨房に置いてあった大瓶も俺が置いてあったものだ。作戦に使う事は無いだろうと思っていたが、良い形ですり替える事が出来たんだよ……だから誰もその大瓶に怪しむ事が無かった」

食堂の厨房に置いてあった水飴の大瓶と効果消去薬が入っていた大瓶の形は同じ形をしていた。というもの提督が初めて食堂の厨房で効果消去薬と水飴の類似性の実験をしていた時には大瓶はいくつか存在している。五十鈴と片付けた時に提督は五十鈴に命令して水飴だけの大瓶を食堂の厨房に一個常備させていた。その常備させていた大瓶がまさか必要になっており、鹿島はその大瓶と取り替えていたのだ。

結果、翔鶴はその大瓶を怪しむ事なく提督の目の前にて破壊。しかし効果消去薬が入っている大瓶は鹿島の部屋に保持されていた。唯一翔鶴達に恐れられた鹿島でなければこんな事にはならなかっただろう。

「そうとも知らずにお前はのたうち回る俺を見てほくそ笑む……この馬鹿め、と!!」

「ツツツ……!!!」

「笑っちゃまうよなあ、見事自分が考えた作戦や罠が順調良く進み、更には俺が企てていた作戦も踏み潰した……そして目の前にいるのはロボロになったゴミ同然、どうしようもないクズなんだから!!! ここまで行けばどう考えても疑わない、疑わない訳がねえよなあアア……!!!」

この鎮守府で誰一人として味方はおらず、ましてや唯一の対策案も消す事が出来たとなれば勝利を確信するのも無理はないだろう。明らかに翔鶴の方が圧倒的に優位だった、この時までには。

「お前らに立ち向かう為ならありとあらゆる手段を投じる!! その為ならどんな手段だと構わない!! だからこそ俺はコイツらを信じたんだよ!!! このどうしようもないクズがなあアア!!!」

血を吐きながら提督は昂って大声で叫ぶ。

周辺の憲兵や整備士達、艦娘達も雄叫びを上げていった。

「さあ翔鶴……形勢逆転だあ、覚悟しろ」

「グツ!!! 集まりなさい!!!」

翔鶴は寮の屋根まで跳躍し、提督と艦娘達を見下ろす。翔鶴の両隣にいるのは那智、利根、龍驤、葛城。摩耶を脅してきた時に集まって

いたメンバーだ。恐らくこの五人が考えた作戦なのだろう。各自臆装を展開し、戦闘態勢に入っている。

「それがお前の仲間か……いいぜ、やろうじゃないか……戦争を!!」

「絶対に私達は間違っていない!!! 間違っているのは貴方達です!! 何がなんだろうと……—」

「お前らの思うその正義と俺等の正義のぶつかり合いだ……—」

「——絶対に勝つツ!!!」

126. 墜ちた鉄鶴は偽（いつわ）りの白翼にて俯瞰す

形勢逆転。

今まで一人だった提督に心強い味方が現れた。鹿島が率いる艦娘達と灰色達。提督を守る様に周辺を囲い、翔鶴達を警戒している。

対立するは翔鶴率いる利根、那智、龍驤、葛城。

寮の屋上から提督らを見下ろし、艦装を展開して待ち構えている。

「さあどうするこの状況……どう見ても不利なのはお前らだぞ」

一人対約七十人が約六十人対五人へ。情勢が変わった事で一気に有利になった提督。薬によって目を覚ました艦娘達は皆翔鶴達を睨んでいる。

「いや分かりませんよ提督。翔鶴さんと合わせてあの龍驤さんは……少し厄介です」

「お、うちの事よく見抜いてくれてるんやな。ありがたい限りや」

「……霧島さんに加古さん、祥鳳さんは何故貴方達までそちらの方へ？」

翔鶴達と対立した艦娘の中にはかつては差別している側だった霧島、加古、祥鳳がいた。提督達と同じく敵対し、鋭い視線で睨んでいる。

「打ち消したのが好嫌薬だけと思うなよ……効果消去薬はありとあらゆる薬の効果打ち消す。重複している薬の効果だろうと全てだ……つまりは……」

「……なるほど……」

「蒼明石が改造した戦闘意欲増進剤で仕掛けた洗脳も消えている……分かるだろ？ お前が全てやってきた事は終わったんだよ、ここで」

効果消去薬の効果により好嫌薬の効果や薬の洗脳は全て消去されている。つまりはこの鎮守府にいる艦娘達は翔鶴がやってきた事全てを覚えているのだ。

「目を覚ました時は絶望しましたよ……金剛お姉様達が止めてくれなければ私は自害してました……」

「私もです……皆さんにこんな残酷な事をやっていたなんて、信じたくありませんでした」

「あの人の事も思い出したぞ翔鶴。何故お前がそうなったのか分からねえ……でもあたし達を守る為に支配したなんて、そんな矛盾した事が信じられる訳ねえだろ？」

「あの人……まさか」

加古の言葉を聞いて提督が思わず声に出す。加古はどうかやら蒼色の事を思い出しているようだ。つまりはこの鎮守府にいた艦娘達の殆どは蒼色の記憶を取り戻した事になる。蒼色の記憶改竄も薬によつて支配されていたようだ。

霧島達は何も提督につく艦娘達と同等に並べるとは思っていない。この時まで自身は差別している側として許されない事をした。罪の重さに押し潰されそうだった。だが今はまだ死ぬ訳にはいかない、諸悪の根源である翔鶴を倒すまではどんな事を言われようとも戦い続ける。その覚悟で霧島達は立ち向かっていた。

「後で聞いてあげるわ翔鶴。だから今は降参なさい……もう終わったのよ、悪夢の時代は」

「それに私達は今物凄く怒ってるし、とても悲しい。色々手加減は出来ないよ」

飛龍や蒼龍、加賀が翔鶴に降参を求めてきた。蒼色の事や提督の事で感情が混ざり混ざっているのだろう。涙が頬を伝い、翔鶴に向けて弓矢を構えている。

「貴方達はまだ分かってない……悪夢の時代？ 貴方達がそう思っているだけですよ、いくらでもやり直せます……弱者である貴方達を今まで強者である私が守り続けていたのに、恩を仇で返すつもりですか……？」

「貴方に恩など微塵も感じていません」

「それに俺達はそれほど弱くねえよ」

朝潮や天龍が反論する。明らかに翔鶴に対して憎悪の眼差しをし

ていた。今までの自分達の事を考えれば翔鶴を憎む事は容易い事だろう。元はと言えば前任と翔鶴の所為で大切な人やモノを失った。艦娘であるはずの翔鶴がそれを進めてきた事に怒りが止まらない。

「弱くない？　ただでさえ暴言や暴行をされて弱気になっていた貴方達が弱くないですって？　笑わせないでくださいよ、提督がいるから強くなった気ですか……ふざけるな!!」

翔鶴は天龍達の言葉を聞いて笑いながらも大声を上げて見下していく。

「この世界では力で全てが決まる!!　弱者は強者に蹂躪され、従う事でしか生きていけない!!　だから私は支配という力で貴方達を守った!!　力があるからこそ強者は弱者を自由に出来る!!　力なんですよ!!　戦う力も！　支配する力も!!　全ては力なんです!!」

愛だとか努力だとか、そんな精神論は要らない。

そんな事をやっても意味が無い。

いくら頑張っても結局は元から力がなければ弱者は強者に淘汰される。

そう身をもって知らされた。

「私は貴方達のような半端な弱者とは違う!!　力を持って生まれた私のはあの忌まわしい男が逃げ去っても支配して守り続けた!!　守り続けていたはずなのに、その男が何もかも崩し始めて兵器である私達を人間にしようとしている!!」

信頼、友情、そんなモノなど艦娘に必要無い。

そんな物があるから悲しみなんていう感情が出るんだ。

元から感情など無ければ、あんな事にはならなかったのに。

「そんな事など笑止千万!!　兵器でい続ければこんな事にはならなかった!!　人間という愚かな種族に憧れなければ仲間が沈んで悲しむ事なんてなかった!!　兵器である私達は人間になってはいけない!!　私は皆を悲しませないように徹底的に支配して守ったんです!!!」

翔鶴の背後から大多数の艦載機が。龍驤と葛城のを合わせて約五十機、翔鶴達の頭上にて旋回し続けている。翔鶴は攻撃を指示し、艦娘達に向けて発進させた。

「何故それが分からないんですか!!! 貴方達は——」「分かりたくねーよ!!!」

翔鶴達がいる屋上の寮から窓を突き破って二人ほど誰かが現れる。その二人は空中で翔鶴達の艦載機を全て破壊し、身体を回転させて着地した。そしてもう一人現れ、矢を空に向けて打ち放つ。

「ッ!!?」

「鳥海さん!!」

「摩耶……!!」

「瑞鶴も……!!」

部屋に囚われていた摩耶と鳥海、翔鶴によって監禁されていた瑞鶴が現れた。

「貴方達まで……!!」

「あの時まで好き勝手しやがってくれたな翔鶴……もう許さねえぞ」

「提督に対する侮辱をさせるだけでは飽き足らず、摩耶姉さんを人質にして危険な目に合わせたその罪は重いですよ」

「ッ……!!!」

摩耶と鳥海が肩を合わせて翔鶴に立ち向かう。そして前には瑞鶴が屈んでゆつくりと立ち上がった。重い瞼を開き、屋上に立つ翔鶴を見上げる。

「翔鶴姉……もう終わりにしよう」

「瑞鶴……!! 貴方までも私を……!!」

「分かってる、分かってるよ。翔鶴姉がどんな酷い目に会ってきたのか……聞いただけでも怒りが込み上げてくる程に……でもだからと言って自分がした経験をいけない事だと思っただけ他人に押し付けるのは……間違ってる」

瑞鶴は顔を俯き、左胸辺りで右手を握る。諸悪の根源である翔鶴の妹として悩んだのだろう。唯一の姉である翔鶴につくか、それとも導いてくれた提督側につくか。今まで翔鶴が経験した事や自分が経験した事、翔鶴がどれだけ頑張っていたのかを妹の瑞鶴は知っている。

どちらが正しいのか分からない、だがこの鎮守府の未来や翔鶴の事を考えれば結果は迫り着くものだった。

瑞鶴は――、

「どうあっても私達は姉妹……翔鶴姉が犯した罪の尻拭いは妹である私の使命。ごめんね翔鶴姉……私……もう終わらせたいんだ、だから……倒れて」

姉に初めて矢を向ける。瑞鶴は提督側に属す事に覚悟を決めた。これでこの鎮守府の闇が晴れるなら、例え唯一の姉だろうと敵対して戦わなければならぬ。瑞鶴にとっては苦しい事だった。だがそれでもしないと悪夢の時代は永遠に続く。瑞鶴は悲しげな表情で翔鶴を見上げた。

「グッ……!! 各自戦闘開始!! 下にいる皆さんを殲滅しなさい!!」

「くそっ、勝手に始めやがって! お前らに指示を与える、今は戦闘に集中しろ!! 今そこにいる加賀や飛龍達、雲龍や鳳翔の空母機動部隊は制空権を取った後に他艦隊の援護に迎え! 祥鳳もだ!!」

「了解!!」

翔鶴を残して利根達は各自、自分が動きやすいフィールドへ移動していく。唐突に始まった戦争に提督は艦娘達に指示を与えていった。

「霧島は金剛と比叡に合流! 五十鈴と第六駆逐隊は阿賀野達と合流後、■■■医師と憲兵達の避難誘導とその護衛!! 秋月四姉妹は空母機動部隊の援護だ!! 灰は時雨の元へ向かって指揮をしろ!!」

「了解です!!」

提督の指示通りに艦娘達は動いていく。出来れば艦隊で出撃させたいが、今ここで艦隊を編成するのは時間の無駄だ。

ならば――、

「後は各自ぶっ飛ばしたい奴から向かってぶっ飛ばして行け!! 建物の被害なんて考えるな、暴れまくるんだ!! だがあの五人は殺さずに無力化しろ!! 古鷹、加古!! お前らは翔鶴を狙え、絶好のチャンスだ見逃すな!!」

「了解です!!! 加古! 行くよ!!」

「オーケー!!」

指示を受けた古鷹は加古と共に翔鶴の所へ向かう。

走って向かっていった途端、古鷹と加古の位置で大爆発が発生。

翔鶴の艦載機による爆撃のようだ。

爆煙が上り立ち、風圧が提督達を襲う。突然に二人の姿が見えなくなつた。

だが――、

「古鷹、加古を確認!!」

二人は爆弾が着弾する寸前に大跳躍して回避。爆発の衝撃で空へ飛ぶように浮いていた。二人は体勢を変えて、寮の屋上に着地する。

「翔鶴……!!」

「弱者風情が……!!」

遂に何年間の時を経て対峙。

翔鶴 対 古鷹と加古。

翔鶴は即座に弓を構えて矢を装填する。

古鷹と加古は二色の稲妻を放ち、それぞれ片目を輝かせた。

前々から言っていた古鷹のやりたい事が今達成しつつある。翔鶴をぶん殴る、シンプル且つ積年の恨みがこもった願いだ。提督はそれをずっと知っててこの時の為に指示したのだろう。

古鷹と加古は即座に急発進。

翔鶴に目掛けて突進を試みた。

翔鶴は加古の拳を受け流し、古鷹の拳を受け止める。背後から衝撃波が飛び出た。

受け流された加古は方向転換。

身体を駒のように回転させ、屋上の床を引きずっていく。

古鷹の拳を掴んだ翔鶴は次に腕を掴み、背後から向かってくる加古へ投げ飛ばす。

しかし加古は投げ飛ばされた古鷹の腕を掴み、また身体を回転させる。

そして古鷹を投擲。

投げ飛ばされたエネルギーと回転による遠心力、古鷹自身の力で翔鶴を殴打を仕掛けた。

古鷹の渾身の殴打に翔鶴は片腕で受け止める。が、耐え切れずに衝撃で床を引きずっていった。それでも翔鶴は左腕を振り下ろし、古鷹と加古のいる地点を爆撃する。

寮の屋上で大爆発が連鎖した。

「ッ……グッ!!?」

爆煙と土煙の中を掻き分けて古鷹と加古は躍り出る。走りながら交差し、標的の選定を迷わせた。

古鷹と加古、翔鶴はまたぶつかり合う。

寮の屋上にて激闘が始まった。

——司令本部内広場

「龍驤、出てきなさい!!」

朝潮六姉妹、鹿島や日向が龍驤の後を追い掛けていた。龍驤が最後に見えた場所は司令本部内の広場。大きな杉の木が一本植えられており、その周辺には芝生が設置されている。

「はあ……ほな、出てきたで」

杉の木の影から龍驤は神妙そうな表情で姿を見せる。既に艤装を展開し、艦載機も発艦していた。龍驤の背後には巻物のような黄金の飛行甲板が展開され、左人差し指には『勅』と描かれた炎の文字が浮かんでいる。

「貴方も翔鶴さん側だったのですね」

「どうしても構いたくなかったってな。ウチらが慰めてきたんやで」

「貴方は降参しないのかしら」

「出来ればしたい所やけども、アイツがしたくないようだな……一応は暴れさせてもらおうでー」

朝潮達が警戒しながらも龍驤に問い詰める。

龍驤はこの窮地に立たされた状況だろうと表情は何一つ崩さなかった。

「だったら何故言わなかったのですか……!」

「何や尋問みたいやなあ、まあアイツにはアイツなりの譲れないモ

ノつちゅーヤツがあるんや。絶対に譲れない……モノが」

龍驤は右拳を握り、目を瞑る。そして右手の平から黄金色の炎を放出させ、再度朝潮達を見定めた。正直な話を言えばこの状況は明らかに龍驤が不利だ。一人に対して十人以上の艦娘達、しかも提督が育てた艦娘ばかり。負け戦のようなものだろう。それでも龍驤は戦う事を選んだ。

「アイツは……そうならざるを得ない事をその身をもって経験してるんや。だからそれを知っているウチらはアイツの考えに賛同してやってきた……死に物狂いでな」

頭の中で様々な回想が映像になって流れていく。蒼色の真実、憎き前任の残虐非道な支配、そして自分達の愚かな行動の数々。それが例え悪い事だろうと正しい行動だと思いつ込んだ。

こうやって艦娘達に指摘されるまでは。

この戦いが自分達にとってどういうモノなのかは自分が一番良く分かっている。翔鶴がどうしても譲れないモノの為に今まで頑張ってきた。今日はそのツケ払いの日なのだろう。

であれば龍驤は――、

「なら色々考えてウチは戦う事にした。散々悪い事もしてきたし、今更どうこう出来る立場じゃないしな、精一杯悪役やらしてもらおうぞ？

この戦いで勝利するのがアンタなら、それがこの鎮守府の運命……頑張りーや。だけどウチは本気で戦う、アンタも本気出さなきゃ返り討ちにあうだけや。ウチらが思う正義とアンタらが思う正義……どちらが正しいのか、いつちよぶつけてみよか……」

龍驤の背後に発艦していた零式艦戦六十二型（爆戦）が一齐に急上昇、そして急降下爆撃。広場内が爆煙に包まれ、周辺が火の海と化した。朝潮達は再度龍驤を睨みつける。

「これぐらいの攻撃でへこたれてんとちゃうぞ。軽空母と思つてたら痛い目見るで……餓鬼」

127. 蹶蹶する龍は翠角を滾らせ空に舞う

——鎮守府港近海

寮の屋上から別の寮の屋上へ飛び移り、工廠の屋上まで辿り着く。そして屋上内を駆け走り、下の海へ大跳躍。

身体を回転させながら綺麗に着水し、追い掛けてくる艦娘達を迎撃する。

「何のこれしき!!」

「チツ!!」

爆煙の中から掻き分けて現れたのは足柄と羽黒。

二人が追い掛けているのは那智だ。

その後にも長門や陸奥がいる。

足柄達は岸边から海へ跳躍して着水、そして急発進。

「待て那智!!」

「誰が待つ——ツ!!?」

那智が背後を向いた途端、重い拳に襲われる。

無意識に腕で防御した那智はその拳を薙ぎ払った。

目の前には足柄、那智にとって一番戦いたくない相手だ。

那智は後方へ引き下がりながら砲撃。

間合いを確保し、その場に止まった。

那智の砲撃を躲して、足柄達も止まる。

「終わりよ那智、観念なさい」

「もう終わらせましょう那智姉さん……!」

「なら……私を止めてみるツ!!」

那智は急発進急加速。

それに合わせて足柄達も動き出した。

円を描くように海上を航行し、砲雷撃戦を始めていく。

「流石に精度が凄まじいな!!」

那智の強みは何といってもその百発百中の命中精度。

この時速五十キロメートル近くはあるだろう高速走行の砲雷撃戦で那智は必ずというほど砲撃を直撃させてくる。どこの鎮守府の司

令官も口から手が出るほど欲しいと言われてもおおかしくない優秀な艦娘だ。

「陸奥、援護を！」

「了解よ!!」

長門が一直線に那智へ突進。

それに気付いた那智は透かさず連続砲撃で迎撃した。

しかし長門は砲撃を耐え切り、那智を殴り飛ばす。

即座に体勢を整えた那智は急発進。

そこからまた長門と近接戦闘が始まった。

音を超えるような速度で二人は並んで走行する。

走行しながら交差する度に殴り合い、衝撃波が広がった。

那智の隙を見切った長門がカウンター。

また殴り飛ばされた那智は後方へ大跳躍。

長門に向けて砲撃する。

空から空母機動部隊の艦上爆撃機が援護に向かって来ていた。

跳んでいた那智は砲撃で何機か撃墜。

身体を回転させて着水する。

しかし着水時に砲撃が那智に着弾した。

撃つたのは足柄と羽黒、そして陸奥。恐らく着水狩りを狙ったのだろう。

那智は厄介な足柄と羽黒に向かって突進した。

「何故戦うの那智!! もうやめなさい!!」

「いいや止めない!!! 翔鶴の為に、お前達の為に私は戦っている!!」

止めさせたいなら止めてみろと言ったはずだ!!」

「面倒な事を……!!」

——紀伊大島、通夜島近海

利根の後を追うように水柱が上り立つ。

空母機動部隊の援護射撃を軽々と回避。

追い掛けてくる球磨達に砲撃していく。

球磨と多摩は砲弾を回避し、更に砲撃。

北上と大井はタイミングを見計らって魚雷を発射する。

利根は跳躍して魚雷を回避。

瑞雲を発艦させ、索敵を再度行う。

しかしそこに鈴谷達が現れ、瑞雲が撃ち落とされた。

「チツ……！　生意気なツ!!」

「君こそ!!」

最上と利根が互いに殴打を衝突させて激突。

衝撃波で巨大な水柱が上がり、海水が雨となって降り注ぐ。

拳同士が重なっても二人は押し続けた。

「何故分からぬのじゃ!!　翔鶴がどれだけの想いと枷を背負って生きていたと思うとる!!」

「枷だつて？　ふざけないで!!　僕達を虐めて部屋に閉じ込めさせるのが翔鶴の想いだなんて、そんなのふざけてる!!」

「それでもしなければお前達は殺されてしまうからじゃ!!　余計な自我を持ちおつて!!」

背後に殺気を感じた利根は跳躍。

当然背後には熊野が攻撃を仕掛けていた。

利根は逆さまの状態で砲撃、そして身体を回転させて着水する。

しかし着水狩りを狙った北上と大井の魚雷が直撃。

利根は思わず海面に膝を着いた。

「殺されるってどういう事だクマ。ちゃんと教えろクマ」

「翔鶴の想いだから僕の三隈も君の妹である筑摩も見捨てたわけ？

どうなのさ」

「大事な提督を私達で傷つけさせた意味も教えてよね、私と神通は目覚めが悪すぎて手加減は出来ないかも」

「……今の吾輩達は戦わなければならぬ義務がある……知りたければかかってこい」

利根はこれが負け戦である事は充分に理解しているはずだ。それなのに何故か球磨達と戦う事をやめない。まるで誰かに脅かされているような、そんな心境の様に思える。

「分からないから聞いているのに……だったら、言わせるまでボコボコ

にしたっていいんだよね?」

「出来るものならやってみよ。吾輩は、全力で戦う所存じゃ!!!」

——鎮守府浜辺付近

「葛城……貴方も戦うの?」

「……ごめん雲龍姉、私……どうしても戦わなくちゃいけないの」

葛城の後を追うは姉の雲龍。空母機動部隊から抜け出し、一人で追いついていた。他の艦娘達には一人にさせてほしいと頼み、誰も来ないようにもらっている。だが建物の裏では灰色と時雨達、磯風達が見張っていた。

「翔鶴さんを思うと譲る事は出来ない。瑞鶴先輩には申し訳ないけど、こうするしか方法は無いの」

「私や皆を虐げたのも?」

「つ……そうよ。そうでもしなければ……この鎮守府の仲間が皆……」

悔しそうな表情で葛城は弓を構える。

何か戦う事を嫌っているような振る舞いだ。

「葛城……私ね、今物凄く怒ってるの。何でだか分かる?」
「……」

「貴方が翔鶴さんの為に戦うと決めた事は仕方ないわ。貴方は元はそちら側だものね。でも……さつきから貴方には迷いが見て取れるの。もしかしたら貴方……阿賀野さん達と同様にこれが酷い事だと分かっているながら私達を虐めた事に罪悪感を感じてるとかじゃないのよね?」

雲龍が詰め寄りながら、艦装を展開して構えた。頭から迸る稲妻の翠角が辺りを照らし、錫杖に付いている飛行甲板のぼり旗が雲龍の背後を飾る。

「つ……違うわよ、私は!!!」

「酷い事なら誰でもまず止めるはずだわ。それなのに貴方は止める事

もせずにそちら側で私達を虐げた……やってしまった事に罪の意識を感じながら生活してたのかしら？」

雲龍は阿賀野達の事を許す気は全く無い。元々洗脳されなかったからと言って酷い事だと分かっていながら仲間にも暴力を振るなど愚の骨頂。例えそれが様々な理由でやらなければならなかったとしても手を出してしまった事に変わりはない。

それを認知しつつ雲龍達と敵対する事を覚悟に決めた上で翔鶴の為に戦うのなら何も言わないつもりだった。しかし葛城にはその覚悟がまるで無いように、また揺らいでいるように思えた。

「貴方には意志と覚悟が足りない。敵対するならばそれ相応の意志と覚悟を持ちなさい……貴方の意志は弱いという事はよく分かったわ……葛城」

「っ!!」

突然雲龍の目の前で大爆発。

爆発の衝撃で砂煙と砂塵が舞い上がった。

葛城は海へ飛び出し、海上を走行する。

爆煙と砂煙を掻き分け、雲龍が葛城の後を追う。

雲龍は即座に艦載機を発艦。式神を雲龍の周辺を囲うように展開した。

そしてのぼり旗の飛行甲板から鳥居を掻い潜って艦載機となり空へ飛び立つ。

葛城も式神鏃の矢で艦載機を発艦し、雲龍を迎撃する。

空中にて航空戦が始まった。

妖精達が乗る零戦五十二型丙や天山六〇一空、流星六〇一空が暴れ回る。

撃墜し、撃墜され、爆発が花火のように散っていった。

その時葛城の流星六〇一空が航空戦を突き抜け、雲龍へ雷撃。

水柱が森のように立ち上り、雲龍の姿が見えなくなった。

しかし雲龍は錫杖を突いて、水柱に穴が空いた。

そこからまた艦上爆撃機を発艦、葛城の元へ一直線に向かっていく。

「悪いけど私は本気よ。前に貴方と戦った時は手加減して負けてあげたけど、今はその手加減すら必要無いわ。蹂躪してあげる……—」

雲龍のいる位置でまた大爆発。

水柱がいくつも立つ中、雲龍は流れる雲のように回避していく。

そして錫杖を槍のように構え、葛城を照準に見定めた。

「——懺悔の時間よ、大人しく倒れて頂戴」

後方へ引き下がりがりながら葛城は艦上爆撃機を発艦。

追い掛けてくる雲龍に対し、一斉攻撃を仕掛けた。

それを確認した雲龍は錫杖を振り回し、落ちてくる爆弾を弾いて爆発させていく。

そして大跳躍。

葛城の艦載機を錫杖で破壊。

爆発の衝撃で葛城に急降下突進する。

凄まじい威力で水柱が立ち、衝撃で葛城は吹き飛ばされた。

「あまり近接戦闘は得意ではないの、ごめんなさいね」

「ツツ……!!!」

何が得意じゃない、だ。

一番に使いこなしていた癖に。

「くそッ!!」

雲龍の艦上攻撃機による一斉攻撃を避け続ける。

全速力で発進させ、着弾を防いでいく。

葛城の後を追う様に水柱が連続して立ち上った。

葛城は後方を見ながらも艦上戦闘機を発艦。

飛行甲板裏にある特殊な打根を左手の上に召喚した。

そのまま五本投擲し、切り札の彗星一二甲型を発艦させる。

航空戦で気を引かせている途中に雲龍の位置に合わせて投下。

雲龍の位置で大爆発を起こし、また姿が見えなくなった。

だが雲龍は錫杖を巧みに使いこなし、爆煙を薙ぎ払う。

そこには翠色の雷角を輝かせ、水と風を纏う龍がゆつくりと歩いて

いた。

「こんな実力で私を倒せると思ってる?」

「グッ……!! くそっ!!」

表情はあまり変わらざとも姿から分かるその憤慨なる戦姿。錫杖を巧みに回し、のぼり旗をはためかせた。周辺に浮く式神が雲龍の手に誘われ、のぼり旗の飛行甲板へ鳥居を潜って艦上攻撃機を発艦させている。

「何て凄い戦い方だ……!」

「雲龍さんがかつてないほど怒ってる……」

「成程……手出し無用という理由はこれか」

「ひえ、荒々しい」

遠くから追い掛けていた時雨と夕立、磯風達が思わず唾を飲む。雲龍の新鮮な感情の昂りと普段の戦闘スタイルを匂わせない特殊な戦い方。錫杖を槍や薙刀のように駆使している様はまるで龍の尾の様に思えてしまう。

「灰さん、どうする?」

『とりあえず周辺を警戒しておこう。利根や那智が協力してくる可能性もある。雲龍さんに何か命の危険があればすぐに向かって構わない。雲龍さんからは後から私が言っておくよ』

「分かった。夕立、僕は灰さんの護衛と一度提督の様子を見に行くから一回任せるよ」

「分かったわ! 気をつけてっぽい!」

灰色の指示を受けた後、提督の様子が気になった時雨は一度鎮守府へ戻っていった。一時的に夕立達に任せ、時雨はその場を去っていく。

一方で雲龍は依然として戦う事をやめなかった。

必死に葛城が艦載機を発艦させ、接近されないように攻撃しているはずが雲龍には全く効いていない。それどころか爆弾が着弾する前に急加速して回避している。そしてのぼり旗をはためかせ、艦上攻撃機を発艦させていた。

「畜生っ!!」

分かっている。

この戦いは絶対に負けるといふ事を。いつかは天罰が下ると思っ
ていた。

避けられない艦娘同士の戦争。

裂けられた姉妹の関係。

翔鶴の事を知ってからはやってきた事が正しい事だと思っていた。
でもどこかでは違うと思っていた。

こんな事が正しいのか、自分だけではよく分からない。

私達は何の為に生まれたのか、何の為に戦っているのか、何の為に
生きているのか。単純な事を考えてばかりだ。

人も、艦娘も、深海棲艦も、姿は違えど感じる事は同じで、考える
事や思う事はそれぞれ違う。

私達が翔鶴さんの為に戦う理由も、雲龍姉が私を倒そうとしている
理由も、提督がこの鎮守府の闇を救おうとしている理由も全てが違
う。

「葛城!!!」

雲龍が愛すべき妹の名を叫び、一気に急接近。

間合いを詰められた葛城に対し、雲龍は身体を回転させた。

雲龍姉の怒りは最もだ。こうなる事を覚悟して生きていたはずが、
始まった途端に限って決めた覚悟が揺らぐ。結局私は私のしてきた
事が間違っている事に実感したくなくて、逃げていたんだ。今もこう
やって追い掛けてくる雲龍姉から逃げ続けて、ひたすら発艦させて足
止めしようとしている。

私が悪役だと思っっているのにそれでも足掻く理由は何だろうか。

本当は悪役になんてなりたくない、こんな事など早く終わらせた
い、そう思っているはずなのに。

どうしてここまで私は醜く足掻けるのだろうか。

もう提督に任せられた方がいいんじゃないのか。

あの人達ならきつと、私達を助けてくれる。

鈴谷や加賀さん、古鷹、時雨や夕立に白露、阿賀野達を元気づけたあの人達なら多分出来るはずだ。

「ッ……!!」

多分きつとどこかで私達は、提督に助けを求めていたのかもしれない。

この悪夢の様な現実を、

悲劇故に変わってしまった翔鶴さんを、

憎き前任から――、

「倒れなさいッッ!!!」

雲龍の錫杖が葛城の腹に直撃。

装甲ごと破壊された錫杖の衝撃で葛城の背後から衝撃波が飛び出た。

葛城は瞼を閉じて気絶、その場で膝を着いて倒れる。

倒れた葛城を雲龍は抱きかかえ、葛城のバラバラに荒れた前髪を直していく。葛城の目からは涙が頬を伝っていた。雲龍はその涙を指で拭い、僅かに微笑む。

「後で話は聞いてあげるわ……葛城。戻りましょう……」

――きつとあの方は、救ってくれる。

128. 臆病たる者は戦欲を掻き立て海を駆ける

「提督の具合は……!!」

「地下で診たけど血液が足りてないわね……摩耶、アレを打たないとダメなんじゃないの?」

「ああそうだ。提督、アレはどこにあるんだ?」

艦娘達が利根達を追い掛けてから何分後、提督は倉庫の壁にもたれかかり身体を休ませていた。苦しそうな表情で汗も少なからず出ている。 ■■ 医師は提督の容態を診察し、摩耶に声を掛ける。息が荒れながらも提督はある方向に指を差した。

「俺の部屋に……一つ、ある……」

「分かった、取ってくる」

摩耶と鳥海が司令本部へ向かい、提督は ■■ 医師と大和達で見守る事になった。提督は例の激痛で意識が朦朧としている。紅い線が身体中を這うように伝い、無作為に形成された左腕の断面部分が泡のようにグツグツと元の左腕の部分に繋がっていた。

「提督、本当にごめんなさい……あんな酷い事をしてしまつて……」
「私も許されない事を……してしまいました……」

金剛と比叡は傍に駆け寄り、提督に謝罪した。好嫌薬の効果とはいえ提督に暴力を振るつた記憶は残っている。効果が切れた時は提督の声が聞こえなければ自殺していた。一番信頼していた提督を自ら裏切つたなどとあつてはならない事だ。金剛は提督の右手を握り、精一杯継り付く。

「提督よ、後で頼む、私の左腕を斬ってくれ。そうでもしないと私の気が収まらない……提督に旧式で解体されても構わない。死ねと言えばここで死んでみせる……頼む、どうか代償を」

「私からも謝らせてください。許してはくれないと思いますが……精一杯の謝罪として貴方を死んでもお護りします」

武蔵と大和も金剛達と同じ様に提督に謝罪する。この二人に至っては提督の左腕を何回も斬り落とした実行犯だ、冷静な表情をしているが悔やみきれずにいるのだろう。何度も謝り続ける金剛達に提督

はイライラが募り続け、金剛の手を無理矢理振り解く。

「うるせえ……!! 今のは戦闘に集中しろって言ったはずだ!! んなもん後でやれ!!」

金剛達の謝罪に提督は怒りながら答える。今は謝罪どころではない、この鎮守府の運命が決まる大事な戦争だ。そんな事をしている暇があるなら戦ってほしい。提督は金剛達を押し退け、寮の屋上にて戦う翔鶴と古鷹達を見上げた。

「提督！ 雲龍さんから報告です！ 先程鎮守府近海にて葛城さんを無力化しました！」

「分かった、さて……」

「翔鶴ツ!!」

「ツ!!」

古鷹と加古が翔鶴と戦う中、天龍と木曾も参戦。寮の屋上にて激闘を繰り広げている。天龍の大太刀や木曾のサーベルを手首の装甲で受け止め、そのまま弾き返していた。

凄まじい高等技術だ、僅かな誤差でも生じれば手首など簡単に斬られてしまう。四人を相手に善戦している翔鶴の戦闘能力は予想以上にあるらしい。

そして龍驤の方でも――、

「ほらほら避けるばかりじゃ勝てへんで！」

司令本部の屋上から見下ろす龍驤の攻撃に朝潮達は翻弄されているのか接近はさせない、反撃の余地も与えない。移動を予測されているのか接近しても爆撃を食らってしまう。回避した地点に攻撃を食らうのも誘われているのも同じだ。

「激しい……!!」

「なら!!」

日向が隙らしき隙に突進を仕掛ける。

大跳躍して、屋上に立つ龍驤に目掛けて突っ込んだ。

龍驤はすかさず艦上爆撃機で日向を狙い撃つ。

空中で爆発、爆煙で姿が見えなくなった。

だが――、

「龍驤オオオ!!」

攻撃を受けても日向は龍驤に向かって突進していた。無茶苦茶な日向の攻撃に龍驤は思わずニヤリと笑う。

日向は突進すると同時に龍驤へ殴打を仕掛けた。

しかし龍驤は日向の渾身の殴打を片手で受け止める。

龍驤の背後で衝撃波の影響か屋上の床がひび割れた。

「ほー、面白い事考えるんやな日向……!」

日向を押さえても後方では朝潮達がまだ一步も近付けていない。

広場内は月面のクレータで穴だらけだ。何機撃墜されようともすぐに艦載機を発艦させてくる。

「だが……動きの止まった相手は狩られやすいって知つとるかいな?」

「ああ知ってるさ……特にお前がな!!」

日向は龍驤に向けて全門斉射。

屋上の床が崩れ落ち、連絡通路が分断されていく。

目の前での零距离砲撃、ただでは済まないはずだ。

「よおやるわ、そんなん……だけどな、それやったら相手の姿が見えなくなるんやで?」

日向の頭上で逆立ちしながら龍驤は話し掛ける。片手で身体を支え、日向の頭に手を乗せている。

そして龍驤は重心を移動させ、倒れながら日向を蹴り飛ばす。

日向は片腕で防御し、床に引き摺って留まった。

「そんなんでウチを倒せるんか? もうちょい力出してみたらどうなん?」

「この馬鹿力め!!」

「それはアンタもや」

「私も忘れないで下さい!!」

龍驤の横から朝潮と大潮が飛び出てきた。

どうやらあの艦載機の包囲網を突破してきたらしい。

二人の不意打ちを龍驤は軽々と回避し、更に後退した。
再び龍驤と日向、朝潮、大潮が睨み合う。

「お邪魔しま〜す♪」

聞いた事のある声が入った途端、龍驤の艦載機がいくつも撃墜されていく。絶え間ない龍驤の猛攻は次第に弱々しくなり、浅くなってきた。声の方向には鳳翔とあの『鏢』がいる。

「まーた厄介な連中が来おったな……!」

「はい、来ちゃいました〜!」

阿賀野達や天龍達、あの摩耶でさえも苦勞していた恐怖の怪物が登場。隣には真剣な表情をしている鳳翔がいた。二人の姿に朝潮達は思わず安心してしまう。

「お強いですね〜、これだけの艦娘を相手に余裕の顔とは。正直驚きました〜」

「お、褒めてくれるんかいな。ありがとうな」

「いえいえ〜。日向さん、まだ踏み込みとタイミングが浅いですよ〜?」

「すまない、基本通りにやってみただがな」

鹿島の教えの通りに実践していた日向だが鹿島にまた注意されました。龍驤との一戦はどうやら鹿島が仕込んでいたものらしい。「とはいえ基本は出来てるので後は応用だけです。頑張ってくださいね〜……と言いたい所ですが……」

「少し私達も参加させていただきます」

鹿島と鳳翔が肩を並べて、龍驤に立ち向かう。それを上から見た龍驤はニヤリと笑った。突然の乱入は上等、いつでも来いという戦闘意欲の表れが見て取れる。龍驤の嬉しそうな表情に思わず鹿島も同じ口角を上げるニヤリとした表情になった。

「さて、龍驤さん……貴方はどれくらい耐え切れますか？ 大体だと

〜……」

「……そうやなー……もって……」

「五分ですかね」

「五分やな」

——鎮守府近海

「くっ……！ 葛城がやられたかっ……！！」

遠方で戦っていた那智が倒れた葛城を確認して歯を食いしばる。どうやら姉の雲龍に一方的にやられたようだ。那智の方でも戦況は依然として不利。長門の砲撃を受けて中破状態だ。

那智は腕を交差して長門の殴打を受け止める。

衝撃で後方へ殴り飛ばされるも体勢を整え、着水。

砲撃で陸奥と足柄の砲弾を衝突させ回避。

爆煙を掻き分け、長門が躍り出る。

「しっ……いぞ長門ッ！！」

那智は長門に向けて零距离砲撃。

しかし突然頭上からの蹴撃に那智は仰け反った。

上には羽黒が跳躍して待っていたようだ。

零距离砲撃を受けても尚向かった長門は那智を殴り飛ばす。

受け身をとった那智は方向転換し、急発進。

跳躍中の羽黒を砲撃で吹き飛ばした。

足柄と陸奥も急発進して応戦。那智に狙いを定め砲撃する。

那智は軽々と砲弾を躲し、突進する長門を飛び越えた。

身動きがしづらい空中でも身体を捻らせ、足柄へ砲撃。

砲弾が着弾し、足柄は怯む。

爆煙の中に陸奥がいるのを確認し、また砲撃。

そして怯む陸奥へ突き蹴りで蹴り飛ばした。

両脇にいる羽黒と長門の殴打を受け止め、もう一度零距离砲撃。

しかし怯んでいた足柄に突進し、那智は吹き飛ばされた。

「グッ……！！」

「……大人しく倒れるか……それとも降参するか……頼む那智よ、もう戦わないでくれ」

「私は……まだ、倒れるわけにはいかない……!!」

那智は再び立ち上がり、身体を震わせながらも身構える。息は荒れ、戦う力は少ないはずだ。それなのにも関わらず那智は戦う事をやめない。

「そもそもこの戦闘が無意味だと自覚してほしいわ。私達の為に戦うというのなら何故その私達と戦っているの？ 理由を言っしてほしいんだけど」

「そうよ那智。妙高姉さんも私達の為に沈んだのと言うのならちゃんとした理由を教えて……でないともう頭の中パンクしちゃうのよ……!!」

「このままでは那智姉さんが傷つくだけです……!! どうか……!!」

陸奥、足柄や羽黒が那智を問い詰める。

正直な話、陸奥の言う通りだ。この戦闘はいくら戦おうとも全てが無意味、単なる負け戦に他ならない。私がここにいる理由も、戦う理由も、妙高姉さんが犠牲になってくれた理由も、全ては翔鶴と皆の為だと言うのに。出来れば心の底から叫びたい、今ここで言えば状況は変わるだろうか。

『分かったわ那智……後は任せたわよ……』

『裏切ったら分かるよなあ……那智……』

「っ……!! 知りたければ、掛かってこい……!!」

「またそれを……!!」

「お前達がどれだけ強くなったのか……それを今ここで確かめる!!! 来い!!!」

ああ——、私は馬鹿だな。

結局戦わなければ何も言い出せない臆病者だ。

戦う事であるの悪魔を遠ざけ逃げていた臆病者なんだ。

言うのが怖くて堪らない。

とても怖い。

もし言えばその代償として現れる恐怖が背筋を凍りつかせてくる。

「行くぞツツ!!」

那智と長門はまた激突。

艦娘従来の戦い方とはまた離れた、ただの殴り合い。

戦闘の凄まじい威力の殴打に対応しつう那智はすかさず反撃を与えていく。

反撃を受けても尚長門は殴るのをやめない。

隙を見破ったのか長門は那智の腹に一発、殴打を直撃させた。

海面を転がる様に殴り飛ばされ、那智は腹を抱えて悶えている。

「那智!!」

「那智姉さん!!」

那智の転倒ぶりに足柄と羽黒は近寄る。

しかし――、

「触るなツ!!」

那智は姉妹の心配を拒み、再び立ち上がる。

「何が触るな、よ……そんだけ苦しそうにしてて心配しない方がおかしいじゃない!!」

「もうやめてください!! このままでは那智姉さんが……!」

那智は既に中破状態、長門と陸奥の息の合った戦闘と一番戦いにくい足柄と羽黒との戦闘で戦況は目に見えて分かっていった。それでも那智は降参する事など全く考えておらず、いつまでも戦闘へ煽ってくる。

「来い……!!」

「……断る。戦っても意味が無い」

那智の誘いを長門達は断る。

戦う意欲の無い長門達の前に那智は動揺を隠せなかった。

「来いと言っているんだぞ……? 知りたくないのか……?」

「倒れば口も聞けなくなるだろう。教える気もないのに、わざわざ戦わなければならぬ理由が分からない」

来てくれ、戦わせてくれ。

「何言ってるんだ……？ 来い……！ 私はここにいるぞ……！！」
「そろそろ貴方も倒れそうじゃない？ もう休んだら？」

休む必要なんて無くていい、お願いだから戦わせてくれ。
こんな臆病な私を表に出さないでくれ。

「全部知ってるんだぞ……？ なあ……戦ってくれよ……！ なあ
！！」

「お願い那智、もうやめて」

やめろ、やめてくれ。そんな目で私を見ないでくれ。

「那智姉さん……貴方と戦うつもりは、もう……無いんです。だって
……」

「——そんなに涙を流してるんですもの……」

「ツ!？」

気づかなかった。羽黒に言われるまで全く気づかなかった。
いつの間にか私は泣いていた。
何故泣いていたのか分からない。涙が出る理由が分からない。
何で私は涙なんて流してるんだ。

この戦闘中に何でこんな事をしてるんだ。
違う、私はこんな泣き虫なんかじゃない、臆病なんかじゃない。私
はとても強い艦娘なんだ、皆を守る為に戦ってきたんだ。姉にも代わ
れる強い艦娘だったんだ。

「そこまで貴方が悲しそうになる理由は何……？」

「何で……何でッ!!」

那智は叫び声を上げて突進。

足柄に向かって殴打を仕掛けた。

が、足柄は突進してきた那智の拳を軽々と受け止める。

「離せッ!!」

「嫌よ!! 那智、もうやめなさい……!!」

那智の拳を足柄は全く離さなかった。

拳を強く握り、そう容易く離れさせてはくれない。

「やめろ……離つ、今すぐ……離せ足柄ア!!」

「いいや離さないわ!! 妙高姉さんの事を言ってもらうまで絶対に離さない!!」

足柄は鉄の意志で那智から話を聞き出そうとしている。明らかに何か事情がありそうな那智を絶対に離さないつもりだ。那智は必死に抗い、離れようともするも羽黒に片腕を捕まれてしまった。

「やめっ……!!」

「那智……貴方が今どんな事を経験してきたのか私達には分からないけどね……! そんな泣きたくなるような事があるなら相談の一つや二つぐらいしなさいよ!!」

足柄が那智の拳から腕へと強く掴み始める。必死に訴える足柄を見て那智は無理矢理振りほどこうと足掻き続けた。

「アンタがどれだけ臆病かなんて姉妹の私達が一番よく知ってるのよ!!! アンタの背後にどれだけ恐ろしい事があるのか分からない……でも!! 言えないなら言えないってちゃんと心の奥底から叫びなさいよ!!!」

「ッ!!!」

「一度頭を……!! 冷やしなさい!!!」

足柄は腕を引っ張り、那智の額へ渾身の頭突きを食らわす。

衝撃で海水が盛り上がり、爆発音のような音が響き渡った。

何故だろうか、昔の事を思い出してしまった。

頭の中で記憶が映像として流れていく。四人が揃って楽しく会話をしていた日常が懐かしい。共に戦う時も、共に食事を取る事も、共

に生活している事も、全てが懐かしい。

よく妙高姉さんから頭突きをされていたな。

私が命令を無視して突撃してしまった時や提督に迷惑を掛けてしまった時などに戒めとして頭突きをもらっていた。

最初はとても痛かったが、慣れればさほど苦しくはなかった。

いつも妙高姉さんは頭突きした後にもいつも笑っている。そして頭を撫でてはこう言っていた。

『次もまた頑張りましょうね』

次もまた頑張る、か。

忘れていたな。

「いっつたつっつ!!」

頭突きをした足柄は額を手で多い、涙目になりながらふらつく。久しぶりの頭突きで頭が物凄く痛い、額から血が流れていた。傍に羽黒が駆け寄り、心配の声を掛けている。那智は頭突きの衝撃で後方へ軽く飛ばされていた。

「……………」

意識が朦朧とする中、那智はまた立ち上がろうとする。視界が歪み、正しく足柄達の姿が見えない。まるで産まれたての子鹿のように足を震わせ、やっとの思いで那智は立ち上がる。

私は臆病だということを誰も知らせたくなかった。妙高姉さんにしか知らない、私の唯一の恥。誰にも悟られぬ様に戦勇ぶりを周りに見せていた。

ただ私は姉のように勇ましく凜とした女性の様な存在に憧れていた。妙高姉さんの事を誇りに思い、憧れの存在として共に足柄達と歩んできた。

だがそれは叶わなかった。妙高姉さんは前任の実験体にされて、私達の前で殺された。妙高姉さんは自分が実験体になったとしても既

に覚悟は決まっていたのか常に笑っていて、私に足柄達を任せた。

だから私は姉のようになる為に必死に自分を押し殺した。臆病な自分を、弱気な自分を殺して強くあるべき艦娘へと存在を成し続けた。強き者が弱き者を助ける、弱き者である足柄達を守る為に強くなった姿を見せ続けた。でもどこかで押し殺した自分が時々囁いてくる。

本心を叫びたい、と――。

もしそれが叶う時が来たら、その時私はこの世にいないだろう。あの悪魔の呪縛に四肢をもがれて地獄へ向かっているに違いない。

でも私は思う。

足柄や羽黒、長門達がこれだけ強ければ、もう強くなる姿は見せなくていいのかもしれない。

例えこの出来事が必然的なモノだったとしても。

例えこの先の未来が自身を滅ぼす結果になるとしても。

あの男によつて強くなった仲間がいるのなら。

一度だけでも構わない、誰かにこの心の叫びを伝えたい。

「どうなのよ、那智……言いなさいよ……」

頭を抱えて手についた流れ出る血を確認する那智。足元の力が無くなり、その場に座り込んだ。顔を片手で隠し、時々身体を跳ねらせる。

「私だって……妙高姉さんを……失いたくな……がっ、だ……!!!」

那智にとつて一番伝えなかった台詞。それは自分達にとつても守る事が出来なかった、難しかった悔しさの叫びだった。

「すまない……どうしてもっ……言えないんだ……!」

精一杯の涙を流し、那智は嗚咽を漏らしながらも必死に言う。どれだけ那智達が苦しめられてきたのか、この姿でよく分かった。

「……分かったわ……那智。でも、戦うのは……もうやめましょう?」

那智は何も喋らずに首を縦に振る。足柄と羽黒は傍に歩み寄り、手を伸ばした。その手に気付いた那智は泣き崩れた顔を二人に見せ、自

身も手を伸ばす。そして再び手を握った。

「陸奥」

「ええ分かってるわ……」

「——敵は翔鶴達だけじゃない……誰かがいるわね」

129. 海軍一の変わり者が貫き通した正義

「白さん、長門さんから報告です！ 鎮守府近海にて那智さんが降伏したとの事！」

「降伏、か……分かった。足柄と羽黒は那智を保護、そして拘束しろ。長門と陸奥は利根の場所に向かえと伝えるんだ」

「了解しました！」

岸边にて長門達と那智との戦闘を見張っていた灰色から報告が入ってきた。どうやら那智が足柄達によって降伏したらしい。葛城と続いて那智も無力化、残るは利根、龍驤、そして翔鶴の三人。

よりにもよって攻略する上で面倒な三人が残ってしまった。龍驤や翔鶴は鹿島が見た通り、凄まじい戦闘能力を有している。利根は一度仲間同士で演習をさせていたが、龍驤と同じくアドバイスは一つも入れていない。

何故なら利根は戦闘能力では龍驤と少し劣るも他の長門達と比べて桁違いの殲滅能力を持っているからだ。確実に相手を倒す、鹿島と似た戦闘スタイルを用いて戦っている。恐らくあの実力では体術面においても相当な腕前を持っているに違いない。

「あと長門さんからも一つ。敵は翔鶴達だけではない、誰かがいるとの事です！」

「誰か、か……」

先に思いつくのはこの鎮守府を地獄のモノとした元凶、人間の皮を被った外道中の外道である前任だろう。

前の鎮守府襲撃時に前任がわざわざこの鎮守府に来ては提督の被害を目論んでいた分、今後前任がこの鎮守府をみすみす見離す訳が無い。また深海棲艦のスパイとして潜り込んでいた榛名の様に翔鶴も前任と繋がっている可能性すら有り得る。

前任が夜逃げした後でも翔鶴の支配が続いた理由も恐らく――、

「提督！ 持ってきたぞー！ これか？」

「ああそうだ」

摩耶が司令本部にある自室から、紅い液体が入った注射器を持って

きてくれた。龍驤が朝潮達と戦っているおかげで司令本部内の広場は半壊状態で散々だったらしい。現在では鹿島と鳳翔が龍驤と戦っているようだ。

「すまないが■■先生、摩耶、俺を隠してくれ。馬鹿共は引き続き護衛とやらを頼む」

「分かったわ」

「了解です」

提督の指示通りに■■■医師は白衣を広げて提督に覆い被さる。摩耶も身体で提督を隠した。護衛していた大和達は少し気になるも、首を振って自戒する。

「……何とか治りそうだ」

「良かった……提督——」「摩耶」

提督が自身の口に指を立てて、静かにと伝える。

恐らく摩耶は提督に謝りたかったのだろう。回避不可能とはいえ提督を嫌いになってしまい、瀕死寸前の提督を蹴り飛ばしてしまった事に摩耶は罪悪感で押し潰されそうだった。提督に危害を加えないようにと部屋に閉じこもっていたが、それでも嫌悪という感情が心の奥底から湧き出てきて抗う事で精一杯だった。

出来る事なら謝りたい、出来る事なら許して欲しい。失った信頼をまた取り戻したい。摩耶は弱気な自分を提督にだけ見せた。

だが提督は——、

「摩耶、お前が充分に抗ってくれたのは俺も知っている。感極まって色々したい気持ちは分かるが、今はそれどころじゃない。だから……戦ってくれるな？」

「ああ……勿論——」

提督は優しい声で摩耶に問い掛ける。その言葉に摩耶は涙を拭い、もう一度元気な姿を見せた。それを見て提督は微笑んで返す。

そんな中、憲兵と整備士達を地下営倉へ避難させてきた五十鈴と第六駆逐隊、阿賀野達が戻ってきた。

「提督——」

「……阿賀野か、そちらはどうだ？」

「こちらは全員避難完了です。でも憲兵さん達がまた地下にこもらないといけないんですね……」

「折角出てきてもらったが仕方あるまい、今の避難場所はそこぐらいにしか無いんだ」

この戦争は激しさを増していく一方だ。例え憲兵や整備士だろうと戦闘に巻き込まれて死亡されてはこちらが困る。ほとぼりが冷めるまで安全な地下営倉にいてもらった方がありがたい。

「阿賀野らと五十鈴と第六駆逐隊は灰色達と合流、あと最上と熊野と鈴谷は……今戦闘中か。だったら隼鷹と飛鷹も呼んで同じく合流してくれ、空母機動部隊には偵察機を発艦させるように。阿賀野、お前を旗艦としたお中元の詰め合わせのような連合艦隊でやってもらうぞ」

「了解しました……ですが、何を……?」

「……ああ、ちよつとした任務をお前らに任せたい」

——横須賀鎮守府

「よく集まってくれたな」

横須賀鎮守府の第一執務室にて、ある三人の艦娘が赴いていた。応接間のソファに堂々と座り、自身のスマホで何かしている。横須賀鎮守府の責任者、■■大將はその様子を座って眺めていた。秘書艦の大和はただならぬ緊張に耐え切れず、青ざめた表情をしている。

「暇だったから呼ばれて来ただけよ」

「少し面倒だけど内容聞いて面白そうだから参加しただけネ」

「ああ〜どんなのがあるんでしょ、楽しみですね〜」

任務の書類を見ながら返事をする叢雲、■■大將に対して興味無さそうに反応するのは金剛、これから始まる事に胸を膨らましているのは吹雪。そしてその一面を眺める■■大將と秘書艦の大和。大和からすればこの三人は気の狂った戦闘バカのイメージしかない。ストレスで胃に穴が開きそうなほど執務室内の空気は凄まじいモノだった。

「……今回の任務の参加者は『？』、『？』、『？』、『？』だけか」

「他は面倒だから断ったようだけど」

「えく？ そんなに面倒臭いですかねく？」

「アンタの性格よりはまだマシよ」

集まっているのは護神厄討艦隊のメンバー三人。大本営所属の『？』叢雲、福島県の磐城鎮守府の『？』金剛、横須賀鎮守府の『？』吹雪の三人が横須賀鎮守府へわざわざ来てくれた。どの存在も戦闘能力はトップクラス、対深海棲艦又は対七壊星のスペシャリスト。一人で一艦隊分の殲滅能力を有しており、それぞれ範疇を超えた超能力を備えている。

「さて早速だが任務の内容の詳細を伝える。今回は■■■■鎮守府に向いてもらいたい」

「あそこには『鏢』と『緋』がいる所だけど、何かあったのかしら？」

「ああ、白の生死が危うい」

「白」と聞いて三人は眉を顰める。恐らくこの三人にとっては関係ある人物だろう。金剛は弄っていたスマホをテーブルへ置き、資料を手に取りながら■■■大将の話聞いた。

「皆も知っているだろう、あの白が殺される可能性がある。理由としては、『鏢』による報告と白が自ら勇気をもって答えてくれた……私はこれを艦娘の反逆と捉えている」

あの誰もいない不自然な環境、そして白提督自身の大怪我。報告してくれた『鏢』により■■■大将は艦娘の反逆と見定め、護神厄討艦隊を出動させる事を決定。今後の計画の為に白には生きてもらわなければならぬ。■■■大将は早急に資料を作成し、それぞれメンバーを呼び出した。

「なるほどね、確かに文面だけだと怪しいわ」

「面白い事考えますね、その鎮守府の人達は」

「んで、主に白中將の救助すればいいんだよね？」

「そうだ。白を■■■鎮守府から脱出させ、速やかに救助してほしい。前とはまた違った任務だがよろしく頼む」

前は■■■鎮守府に潜む深海棲艦のスパイの捕縛の任務だった。

白色から電話にて依頼され、その当時は鹿島鎮守府の『董』スミレ龍田も出撃してくれている。結果はスパイは確保し、事なきを得ているが古鷹と加古の戦闘を見てはつまらなそうにしていたらしい。

「まあ私達はそういう艦隊だしね。別に構わないわよ」

「戦えれば何でもいいです!」

「同じく。だけど一つ聞いていいカナ?」

『?』ヒョウコウ 金剛が手を挙げて、**■** 大將に質問する。

珍しい金剛の質問に叢雲は呆然としていた。

「何だ?」

「主軸は救助が優先だと思っけれど、反抗してきた際はどうするのカナ?」

「ああその事についてだが、あくまでも白の救助が最優先だ。悪いが本人の意思は無視させてもらう。もし救助する際に邪魔をされるような事があれば……—その場で無力化しても構わない」

護神厄討艦隊の中で「無力化」という意味は相手を殺さずに意識を喪失させるまで戦闘を行う意味を持つ。「殲滅」であれば問答無用の蹂躪と殺害又は轟沈となる。前回は戦闘が無いと聞いて乗り気では無かった為に今回も戦闘は無いのかと内心期待外れだったが、「無力化」と聞いて金剛と吹雪はニヤリと狂う様に微笑んだ。それを見て叢雲は頭を抱えてため息を吐く。

「つまりは抵抗する奴がいたら片っ端からぶっ飛ばして構わないって事ね」

「そういう事だ、以上が任務の詳細になる。何か質問は?」

三人は手を挙げる事無く、艦装を展開させている。殺る気は充分のようだ、これ以上言う事は何も無いらしい。

「……無し、か。では任務に取り掛かるぞ、全員……出撃だ」

「了解」

金剛と吹雪は不気味な笑みと声をあげながら執務室を出ていった。叢雲はお手上げ状態なのか、半分諦めムードのまま去っていく。一連の様子を黙って見ていた大和は緊張のあまり、呼吸が全く出来ておらず、口に溜まった空気を吐いては走り切ったマラソン選手のように息が

荒れていた。

「提督……怖過ぎますよ……」

「あ、ああ……よく耐えたな」

大和の怯えように■大将は困惑する。執務机にぐったりと倒れ込み、猫の様に転がった。■大将は大和の頭に優しく手刀で叩き、ぐだるのを止めるように指示をする。その後椅子から立ち上がり、窓から見える海を眺めた。

「しかし本当にあるんですかね、私達艦娘が提督に反逆するなど」

「実際は何件かあったぞ、別に珍しい事ではない」

「いや珍しくないと困るんですが……」

大和は嘘かどうか分からない言葉を困り気味に言い返した。

■大将の元に着任した大和からすれば上官への反逆などあつてはならない事だ。艦娘が本来敵として居るのは深海棲艦のみ、人間は必ず守らなければならない存在と区別がハッキリとしている。

とはいえ艦娘といえど感情や思考は存在する。自分で物事を思つて考え、自立するという意志があるのだ。故に人間とほぼ同じ存在であり、人間に何かしらの感情を持つ事は当然の事になっている。そして人間に従う艦娘達がその人間に対する感情は十人十色、それぞれ艦娘の性格によって併せ持つ感情は様々だろう。

だからこそあの白色が着任すると聞いた時は耳を疑った。海軍一の減らず口と恐れられたあの人間があの鎮守府の責任者となり、艦隊を指揮する事になる。勿論はその実力は身をもって知っていたが、あの白色に従う艦娘達が少し可哀想に思ってしまった。

■鎮守府の白、って方は提督にとつて、とても大事な人なんですか？」

「ああ彼はあの男が託した最後の希望でね……死んでもらつては困るのだよ」

「あの男……つてのは前に司令が言っていた自身の人生を変えてくれた海軍一の変わり者という人ですか？」

「そうだ……彼は海軍の中でも一番の変わり者だった」

■蒼■中尉は海軍一の変わり者と呼ばれていた。艦娘兵器思想を

持つ軍人が殆どの世界で、■蒼■中尉だけはその思想に反する人物だった。艦娘を兵器として見る事は無く、同じ人間として平等に接しており、決して仲間を見捨てない心優しい軍人。艦娘兵器思想によって艦娘は兵器だと思い込まされていた昔の艦娘達にとっては異色を放つ存在であり、そして又は光のような存在だった。

「あの男は生粋のお人好しでな。艦娘達を人間として同等に扱い、人間と同じく衣食住を提供し、福利厚生を充実させた。今の鎮守府運営による艦娘の福利厚生に関しては、全てあの男のお陰だよ」

その時代、艦娘兵器思想による洗脳で艦娘自体でも兵器だと思い込んでおり、自らそれを疑問には思わなかった。人間ではなく物として扱われており、寮のような部屋ではなく倉庫にて管理され、食事という概念は存在せず、補給という概念で燃料と弾薬を摂取させられる。人間として扱われない物と同等の制度に艦娘達は疑問には思わなかった。

だが少なからずその思想に反する艦娘も存在し、何故こんな不遇な体制が続いているのか分からないままだった。

それもそうだろう、何故なら艦娘達は自分らが人間達に恐れられているとは微塵にも思っていない。

未知の技術が使われた艦娘という存在の反逆を恐れ、徹底的に兵器として扱われている事を艦娘達は知らなかった。提督という存在が必要な艦娘達にとって人間とは守るべきモノ。人間を脅かす深海棲艦は敵と見定められている。人間が敵になるというそういった敵視の感情や思惑は全く無かった。故に人間に恐れられている事など思う訳が無い。

更に思想に反する艦娘達のほとんどが自身が人間とよく似た存在である事を認知していた。理由として深海棲艦に脅かされ続けている人間達の前に現れた艦娘という存在は助けられた人間達から人間そのものと思われていたからだった。

だからこそ艦娘達も自分も人間と同じような存在だと思っていた。だがその思想は全く別の艦娘兵器思想によって削除され、人間として扱われなくなってしまった。

「その思想に反した者は艦娘だけではない。勿論、一部の人間も疑問に思っていた」

「その一部の人間が……」

「そう。あの男……いや、■蒼■中尉だよ」

軍人以外で艦娘という存在を認知している日本の全国民が必ずしも艦娘兵器思想を支持していた訳では無い。

必ず思想には賛成派と反対派が存在する。

■蒼■中尉はその反対派であり、わざと賛成派として成り済まして軍人となり、地方鎮守府の運営を任されるまで昇進した。

艦娘を人間と同等に見ていた■蒼■中尉は、まず艦娘兵器思想によつて兵器と思い込んでいた最初の秘書艦を思想から脱却。自身を人間と同じような存在だと思わせる事で艦娘にかつてはあつた自我を再生させた。その後には建造された艦娘も自我を持った状態で着任させ、それまでの鎮守府にあつたシステムを全て撤廃させる事となる。

艦娘に倉庫ではなく寮の部屋を与え、衛生環境を整えた。

食堂を憲兵や整備士のみには当てはまらず、艦娘も自由に食事を取る事を絶対の命令として指示をした。

風呂に入つて身体を洗う事を勧める為に入渠施設と風呂を混合させ、当時は直接かければよかつた高速修復剤を風呂のお湯と混ぜる事で身体の洗浄と修復を兼ね備えた施設を設置した。

そして■蒼■中尉の厚意で艦娘達に給料を贈呈し、外の世界へ関心を持たせた。

当然、他の鎮守府の軍人達は■蒼■中尉による艦娘に対する待遇に反発した。そんな事などやってはいけない、自我を持たせて何を企んでいるんだ、と軍人達は怒り訴える。しかし■蒼■中尉はそんな反発などものともせず言い放つた。

『この国の為に戦つてくれている艦娘達を蔑ろにするなどあつてはならない事だ!! 貴方達の勝手な憶測で艦娘達の尊厳と自由を奪わないでいただきたい!!!』

■大将もその当時は反対していたと言う。しかし■蒼■中尉の

考えに共感するものが当てはまり、いつしか艦娘兵器思想というものが疑問な事に思えてきていた。

「蒼■中尉がこの世にいなかったら、君達はいつまでも倉庫の中で冷たく過ごしていたよ」

「最早そこまでいくと偉人ですね……」

多くの軍人が頻繁に反発していく中でも■蒼■中尉は艦娘に自我を持たせる事をやめなかった。皮肉にも■蒼■中尉が受け持つ■鎮守府は当時は最高峰と謳われていた横須賀鎮守府と同等の戦果を挙げ続けていた。

当時は魔窟として恐れられていた小笠原諸島近海海域をものの一週間で制圧し、攻略に頭を悩ませた深海棲艦による難攻不落の硫黄島を他鎮守府との連携により崩落させるという大記録を残した。

それこそ当時は小将だった■大将にとつては人生の転機となる出来事だったという。■蒼■中尉の考えにより、艦娘兵器思想に疑念の意を唱えていた■小将にとつて二つの難題を攻略したのは脳に衝撃を与える程の事だった。今後の戦略の為にも是非とも■蒼■中尉のやり方を参考にしたかった■少将は■鎮守府を訪れ、艦娘とのコミュニケーションや福利厚生、独自の戦術を事細かに学んだ。艦隊の士気を上げる為には互いに認め合う事が必要、艦娘が人間として又は兵器として確かな常識や考えを持っている事、ちゃんとした生活リズムを取らなければならない事など学ぶ事は多くあった。

『艦娘は誰かの物とかではありません。艦娘は艦娘、我々人間と同一存在なんだと私は思います』

『……多くの輩が君に反発しているが、間違った事ではないと言い切れるのか?』

『はい言い切れますよ。確かに未知の技術を駆使した非現実的な姿を見れば恐ろしいと思う事は仕方ない事だと思います。ですが彼女達にはこの国を守りたいという意志と覚悟がある……それを私はど

うしても反逆するとは思えないんです』

『そうか……』

『それに人間そのものじゃありませんか？ どの娘も健気で可愛らしく愛嬌が持てる艦娘ばかりです。人として扱わない連中より……よっぽど人間らしいですよ』

『そもそも何故艦娘と呼ばれているかすら分からない現状だからな。自ら艦娘と名乗ったから、そこで艦娘という概念が生まれた。まだまだ謎は多い』

『そうですね……でも私は貴方のような人がいてくれて、正直とても心強いです。まだまだ人間も落ちぶれてないのが実感出来ました』

『私は合理的主義者でね。艦娘が兵器という概念は変わらないが、艦娘が人間であると思わせる事で艦隊の士気や戦闘の効率が違う、というのは深海棲艦を殲滅するにあたって実に合理的だ。参考にさせてもらおうよ』

『参考に出来たのならこちらもありがたい限りです』

素晴らしい戦果を挙げた■蒼■中尉の考えたシステムや理論は、実践した■少将の横須賀鎮守府でもその強味が証明され、各地の鎮守府にて取り入れられる事となった。

勿論、全ての鎮守府で行われたかという点には上手くないかなかった。艦娘を人間として認めない軍人は多く存在し、■蒼■中尉が掲げる艦娘人間思想は受け入れ難いモノだった。一端の地方鎮守府風情がそんな戦果を挙げるなど狡猾な手段で手に入れたに違いないと言う軍人まで現れる程であり、■蒼■中尉の思想と才能に嫉妬する者が多くいた。

「そんな中である出来事が起きたんだ」

「ある事……とは？」

「……今までその存在が確認されなかった、深海棲艦側に属する人間……我々と同じ提督という存在が千葉県銚子鎮守府の艦隊で目撃の情報が入った」

130. 海軍一の減らず口が貫き通している恩義

深海棲艦が現れて十二年、当時は少尉だった■蒼■中尉が■鎮守府に着任したのが八年前。そして七年前に身の毛もよだつある存在が確認された。

深海棲艦を纏める人間がいる。当時は噂話でしか無かった空想上の話が現実となってしまったのだ。目撃した艦隊の艦娘達は「アレは人間だった」と口を揃えて証言している。黒い軍服を身に纏い、数多の深海棲艦を引き連れていく姿はまさに闇を総べる者。驚愕の事実全世界の人間達を恐怖に陥れた。

深海棲艦を纏めあげる提督らしき人物はとても狡猾で優れた戦術を用いり、次々に制圧海域を侵略していった。顔は仮面を被っており判別不可能、白い長髪に成人男性並の身長。次々に猛攻を仕掛けてくる深海棲艦とその提督に世界各国の海軍は頭を悩ませた。

そしてそれと同時にあの計画も始まっていた。

「そこで各国の軍上層部はその提督という存在が拠点としていた北マリアナ諸島に属するマウグ島を攻略する大規模作戦を発令させた」

南方のショートランド泊地にある鎮守府の責任者を総司令官にマウグ島攻略作戦が開始された。南方の鎮守府にある全ての艦隊、横須賀鎮守府、佐世保鎮守府、■鎮守府などの各地方の鎮守府に所属する艦隊が一斉に出撃し、北マリアナ諸島にあるマウグ島へ向かった。

深海棲艦側もこの作戦を把握し、各地の深海棲艦を呼び寄せた。今は七壊星として君臨している【天枢】^{ドゥーベ}中枢棲姫、【天璇】^{メラク}南方棲姫や『巨門』^{テラスティア}戦艦棲鬼、【天権】^{メグレク}深海鶴棲姫、【玉衡】^{アリオト}戦艦水鬼、『廉貞』^{グレイケオス}重巡棲姫、【開陽】^{ミザール}深海日棲姫、『武曲』^{シーフォウス}駆逐水鬼など錚々たる面子がマウグ島に集合し、後に北マリアナ諸島海戦と呼ばれる事となる大戦争が勃発した。

前半は深海棲艦が圧倒的有利で島に近づく事すら出来なかったが、後半になって資材に限界に来たのか次々に深海棲艦が倒れていった。分が悪いと踏んだのか深海棲艦の提督は、ある艦娘を連れてマウグ島

より南にあるアグリハン島まで逃げ込むも、後を追い掛けた大艦隊によつて島を全包围され、激戦の後に確保された。

その際深海棲艦の提督達をどうするか、司令本部の軍人達は処遇を話し合った。殆どの軍人が放っておけない存在だとその場で殺す事が大多数を占める中、ある男が大声を上げてマイク越しに異議を唱えた。

「まさか……蒼■中尉、なんですか？」

「そうだ」

アグリハン島の激戦でその一部始終を見聞していた■蒼■中尉は、深海棲艦の提督を殺さずに捕虜として捕まえる提案を訴えた。これから深海棲艦を絶滅させる為にも、情報が必要になるという理由で他の軍人を黙らせ、■蒼■中尉の案は可決。深海棲艦の提督達はその場で捕虜として拘束され、作戦終了まで約半年掛けた大戦争は終わりを告げた。

「その深海棲艦の提督という人は、今はもう……いないのですか？」

「ああ既に情報を全て吐き出し、今はいない」

そして悪魔のABC計画が開始。■蒼■中尉はマウグ島攻略作戦から一か月に■少尉に操られた翔鶴によつて殺され、死亡。■少尉が■鎮守府を私物化させ、良いように暮らしてる中、ある人物が軍に配属された。

「それが白と呼ばれた軍人。蒼■中尉によつて懐柔された、元深海棲艦の提督だった男だ」

「えッ!!? 深海棲艦の提督だった男が、あの人なんですか!!?」

深海棲艦の提督及び白色を確保した■蒼■中尉は白色に毎週出会つては世間話をし続け、何とか対等に接しようと試みていた。あのアグリハン島での激戦で何かを訴えていた白色達を聞いて、何か深い事情があるのではないかと考えた■蒼■中尉は必死にその訳を聞き出していた。

結果、■蒼■中尉にだけ心を開いた白色だったが、事の顛末を話す前に■少尉と翔鶴に殺され、それ以降■蒼■中尉が来る事は無かつた。

「戦術的価値があると踏んだ当時の黒■元帥は精神が消耗した白色の記憶を操作し、また見せしめに新たな人物として軍人に生まれ変わらせた……全くろくでもない人生だ、深海棲艦の提督として生きていたはずが今度は艦娘の提督として生まれ変わるのだからな」

生まれ変わっても尚、英才教育を受けさせられ、何度も人格を否定されては罵倒され続けていたらしい。教えている軍人が白色の悍ましい姿を見ては仲間や家族の復讐という名目で暴力や暴言は当たり前、部屋は屋根裏部屋だったとか。

当然白色にとっては自分が軍人に何をしたのか全く覚えていない。理由も分からないまま暴虐の限りを尽くされ、義母である■大佐が鬼のように叱咤する場面を見ては白色の元の人格は歪み始めていった。

「だから普段の会議ではあのような振る舞いを……」

「恐らく、な。私の考えだとそうかもしれないという話だ。あまり受け止めないでほしい」

あのような捻くれた性格をしながらも仕事は素早く真面目にこなし、戦闘や演習の指揮は常に冷静沈着。相馬鎮守府で二年間所属し、大本営に異動して主に後方勤務をしていた。そして半年後にあの■鎮守府に着任する事となる。

「■鎮守府に久しぶりに訪問した時だったが、白は既に記憶を取り戻していたよ」

「えっ……それってまずい事なのでは……？」

■大將が■鎮守府を訪問し、白色及び提督と黒い箱について話し合った際に提督の眼は紅黒く澱んでいた。恐らくあの状態だと既に記憶は取り戻しているに違いない。

つまりは■蒼■中尉の事も覚えている、そして黒い箱の内容にあった■蒼■中尉の消えた理由も知っている。今まで提督がひたすらに翔鶴達の事を隠し続けていたのは■蒼■中尉の為なのだろう。■蒼■中尉が遺せざるを得なかった艦娘達を救う為に。

「元深海棲艦の提督だった白中將を動かすまでの人物、蒼■中尉……何故殺されたのでしょうか」

「……さあな。私にも分からん」

「……何か事情があるのですね……■■■■鎮守府には……」

「ああ……察しが良くて助かる」

流石にABC計画の事は艦娘達に伝えられない。この計画はまだ伝える時では無いと■■■大將は判断した。

■■蒼■中尉の人間同等して見るシステムは今でも各地の鎮守府で、新しく就いた今の■■■元帥と昇格した■■■大將によって義務づけられている。マウグ島攻略作戦時の軍人達が異動した事もあつてか次の世代へと交代しており、海軍兵学校で優れた若い人材がその跡を継いでいるような状態だ。日本海軍の半数が艦娘人間思想を支持して、艦娘兵器思想と張り合える程にまで広がっている。

しかし艦娘人間思想を支持しているのが新しく着任した新米司令官が殆どであり、まだ影響力は少ない状態だ。

「今の私達にとっては感謝してもしきれない、畏敬の念を抱かなければならない人物ですな……」

「ああそうだな……本当に……——」

「——バカな男達だよ……」

——紀伊大島、通夜島付近近海

艦娘同士の拳が衝突しあい、海は荒れる。曇天の空には無数の艦載機、青黒い澱んだ海には利根を囲む球磨達。不透明な海中では魚雷が交差し、直撃しては水柱が上がる。

「はああああ!!!」

「クマアアア!!!」

利根と球磨が咆哮を上げながら突進。

幾度となく衝突し合つては、一步も引き下がらない。

空から見下ろせば海面は衝突する度に空気が歪み、海上から確認しては水柱が立ち上る。

水柱の中をを掻き分け、利根は自身の腕を使って球磨の首を殴る。そのまま腕を振り回し、球磨は殴り飛ばされた。

「ハアハア……—ツ!!」

周辺に魚雷がある事に気付いた利根は急発進。跳躍をしながら、魚雷の直撃を回避する。

利根の向かう先には着水狩りを狙う最上がいた。

利根は身体を回転させ、後ろ回し蹴りで反撃。

しかし最上は察知し、頭を下げて回避。

最上の頭上を利根の鉄脚が過ぎ通っていく。

過ぎ去ったのを確認し、最上は頭を上げて反撃を仕掛けた。が—

利根は残った片足を使って最上の頭を強く蹴り飛ばす。

そして艀装の砲撃で追い打ちに掛かった。

「最上姉——ツ!!?」

鈴谷が最上を心配して声を掛けた。

利根はすぐさま急発進し、鈴谷の目の前に跳躍して現れる。

利根の眼は、まるであの時の鹿島の様だった。

「人の心配をツ!!」

鈴谷は利根の殴打を紙一重で回避。

身体を左に反らした鈴谷は左裏拳でカウンターに出る。

それを見抜いた利根は裏拳を空いた左手で鷲掴み。

自身も同じく右裏拳で鈴谷を殴り飛ばした。

「しとる場合かツツ!!! グツ!!」

殴り飛ばしたと同時に熊野の砲撃が直撃。

怯みを見せた利根は反撃する隙すらなく、爆煙を掻き分けてきた多

摩に蹴り飛ばされた。

利根は受身を取って、体勢を整える。

既に目の前には神通が零距离砲撃を仕掛けていた。

「鉄屑同然だった貴様らは……!!!」

利根は砲撃される前に神通の腕を掴む。

そのまま背負い投げて、砲撃を回避した。

が、死角にいた川内に腹を殴られ、強く殴り飛ばされる。

受身を取れずに利根は海面を転倒するもすぐさま起き上がる。

「自我を得る事でより強くなるツツだがッ!!」

空母機動部隊の援護射撃を回避しながら、北上と大井の元まで接近。

妙に面倒な雷巡達を標的に定めた。北上と大井のカバーへ、川内と最上が砲撃で利根を迎撃する。

高速走行しながら身体を捻っては砲弾を回避し、大井の魚雷を食らっては水柱の衝撃で空中へ浮かぶ利根。

「余計な感情を得る事でツツ!!」

艦装の砲口を自身の背後へ向けて砲撃。

その衝撃で空中の移動を制御し、利根は一直線に突進する。

川内と最上による砲撃の嵐が利根を襲う。

「その強さは無意味と化するのじゃツツ!!」

利根は砲弾を拳で弾き、足場にしては川内達の元へ征く。

まるで隕石のように海面へ衝突した。

大きな水柱が立ち上り、水柱の中から川内と最上と大井が吹き飛ばされていく。

海水が雨となって降り注ぐ中、水柱の中には利根が仁王立ちしていた。

「我々兵器などに自我など要らぬ!! 余計な感情で苦しめられるのなら、無い方がマシなのじゃ!!」

「化け……物め……!!」

利根の圧倒的な機動力と縦横無尽な戦闘能力。川内達の攻撃を受けながら大破状態に追い詰めれようとも一向に倒せる気がしない。弾薬や艦載機などは残り僅かなはずなのに、己の体術だけで振じ伏せようとする姿はまさに戦神。おかげで川内達も全員中破状態だ。

「だからって……それを私達に押し付けないでよ……!!」

「自我を持つ事が駄目なら……お前は何故その自我を持つてるクマ……!! さつきからおかしいぞクマ!!」

「いい加減教えてよ……!! 何か言えない事情でもあるわけ……? あまりにもおかしいじゃんか……!!」

利根は満身創痍。正装は破れて素肌を外へ晒し、頭からは血を流し

て目は充血している。身体中の骨や筋肉が悲鳴をあげており、負担のかかる両足を鋭い痛みが襲っていた。

『後は任せました……利根姉さん……』

『お前の妹は無残にも沈んだぞ！ 良かったな!!』

「おかしくて結構!! 貴様らが矛盾してると思うのなら吾輩を嘲笑えばいい!! 吾輩は一度決めた事から変えるつもりなど毛頭ない!!! 全力でその意志を貫き通すのが吾輩の覚悟じゃ!!」

翔鶴の事も、優遇制度の事も、全てを貫き通してきた。

例え間違っている事だとしても、否定している自分がいたとしても利根は決して意志を変えなかった。

それが仲間の為ならば正しい事だと自ら進んでやり遂げた。

更なる悪の手から脅かされないようにする為なら何だつてやってやる。

絶対にその意思は変わらない、吾輩は何一つ間違っていない、それが吾輩にとって正義であり覚悟だからだ。

傲慢、正当化、何度でも言え。

そもそも正義とは正当化され尽くした義強な感情論ではない。

正しいか悪いかなど他者が決めるのではなく己で決める事なのだ。

ならば吾輩はその正義と覚悟を貫き通すまで。

もし他の正義が吾輩の正義を悪く言うのならお互いにどの正義が正しいのか戦うまでだ。お前達の正義を吾輩に聞かせてくれ。

「利根……アンタの言ってる余計な感情ってのは確かに辛いモノかもしれない……けどその感情を越えてこそ私達は強くなれるんじゃないの!!? アンタが今まで経験した事全てを乗り越えて、私達を圧倒して戦っている今のうちに、アンタも強くなったんじゃないの!!?」

「何が言いたいのじゃ……!!」

「アンタの言ってる事は絶対に間違ってる!!! 私達は兵器でも人間でもない!! 艦娘っていう私達だ!!!」

兵器であれば感情は無い、つまりは何事にも感じる事がなくただの人形として生きていけば苦しむ事は何一つ無いという利根の考え。

辛い経験を乗り越えてこそ強くなれる、自我があるからこそ成長出来るという鈴谷達の考え。

これらを正義又は覚悟と呼ぶか、それは誰にも分からない。だがもし利根や鈴谷達がそう思うのなら、理解するまで戦うのみだ。

「なら吾輩の覚悟と貴様らの覚悟、どちらが正しいのか……!! 決着をつけようではないか!!」

人は戦って生死を彷徨うからこそ、その人の本性や本音が現れる。それは艦娘達も然り、戦う力がある現状では戦う他は無い。もしお互いに覚悟した本音を知りたいのなら、生命を懸けて戦うのが筋だろう。

——すまぬ葛城、那智、龍驤、翔鶴よ……吾輩はこれ以上保てる時間は無さそうじゃ……後はお主で決めるのじゃぞ、翔鶴。

——この鎮守府の、運命を。

「いざ、最後の出陣じゃ……——」

利根は再度身構え、鈴谷達を睨む。

鈴谷達も砲口や魚雷を利根に向けて警戒した。

それを見た利根は一瞬微笑み、そして叫ぶ。

「——全力でかかって来い!!!」

131. 鋼鉄の戦人は最期まで足掻き続ける

「全力でかかって来い!!!」

紀伊大島、通夜島近海で一人の雄叫びが響き渡る。聳え立つ強き者達を前に、孤独な艦は立ち向かった。小さな暖かみを帯びた風が身体に当たり、波は嵐の前の静けさの様に閑寂としている。

これこそ最後の戦舞台に相応しい。

正義と正義、覚悟と覚悟がぶつかり合うこの瞬間こそ人は初めて輝く。

自身を兵器では無く人として見るのなら、その輝きは凄まじいものだろう。

鈴谷達の眼が、心が、全てが羨ましい。

背中に積もりし無数の業を枷にして、自ら最期を飾るは醜き己の戦姿。

前には自由と尊厳を取り戻した若き艦共、鎮守府の未来を輝かんとする姿はまさに希望の光。

いざ参ろうか、溢れ出る力をその手と足に宿して。

「行くぞツツ!!!」

利根は急発進急加速。

北上と大井の元へ、一直線に突進。

しかし高速走行中に川内が砲撃で邪魔をする。

怯んだ利根は海面を転倒しながらも体勢を整えてまた発進。

球磨と多摩、神通の連続砲撃を躲していく。

そして正面の最上と衝突した。

「何で三隈や筑摩を見捨てたんだ!! 利根ツ!!」

「大事な仲間を見捨てるなどする訳が無からう!!!」

「だったら何で!! うわッ!!」

気付いてくれ、この戦闘を。

手を組み合い、睚み合う二人の元へ川内が乱入。突進してきた川内と利根は海面を転倒し続ける。

しかし利根は川内を蹴り上げ、その場を脱出。

間合いを確保して、鈴谷達の位置を確かめた。

「筑摩達は自ら進んでこの世を去る事を選んだのじゃ!! この鎮守府の為! 翔鶴達、そして貴様らの為に!! 犠牲にならざるを得なかったッ!!」

「そのどころが犠牲なんだクマ!! ちゃんとした理由を言えよクマ!!」

「言える訳が……無いだろう!!」

気付いてほしい、この意味を。

そう願いながら利根は鈴谷と熊野の攻撃を回避し続ける。

すると突然利根の艦装が突然爆発、利根は海面に倒れ込んだ。

「この砲撃は……!! まさかッ……!!」

重い身体を起き上がらせて、砲撃の元を見る。そこには援軍にきた長門と陸奥が向かってきていた。

艦装の半分は跡形もなく消し飛ばされた。

残るは数少ない砲塔のみ。

「那智は降参したぞ、利根。貴様も早く降参するんだ」

「もうやめた方が良いと思わない?」

「戯け……やめる訳が無かるうて……!!」

気付け、早く。

利根はまた立ち上がる。

既に戦える姿では無いのにも関わらず、利根は戦うのをやめない。満身創痍な利根の姿に鈴谷達は思わず恐れ入りそうだった。

利根がそこまでして戦う理由は何なのか、何が彼女を突き動かすのだろうか。

何を思い、何を感じ、そして何を求めているのだろうか。

言いたくても言えない事なのだろうか。

そのボロボロの背中に誰かがいるのだろうか。

弱みを握らされているのだろうか。

教えてくれ、君は一体……何を伝えたいんだ。

利根の周辺を鈴谷達と長門や陸奥が囲う。

逃げ場は無し、四面楚歌の状態。

そんな中でも仁王立ちしながら腕を組む利根は僅かながらに笑っていた。

「……吾輩は利根であるッ!! 利根型航空巡洋艦の一番艦にして、

■■鎮守府最強の重巡洋艦也!!!」なり

腕を広げて利根は過去を謳う。

「醜悪たる眼差しにて正義を貫かんとする艦娘達よ!!! 互いにその正義を正面からぶつけようではないか!!!」

最上に指をさしては、堂々とした表情で叫び続けた。

「死ぬ事を恐れて敗北を許した誇りを持たぬ灰塵かいじんの如き敗残兵など愚の骨頂!! 最期まで足掻き続け身を滅ぼして戦うまでが艦娘、いや軍人としての本分よ!!!」

利根の背後にて水柱が立ち上る。

クラウチングスタートな様な姿勢になり、戦闘準備に入った。

「動け戦え見て示せ!!! 貴様らの強さを!! 鎮守府の未来を守るモノなのか!! 確かめようぞ!!!」

利根はまた急発進急加速。

長門と陸奥の砲撃の嵐を回避する。

利根は鈴谷と熊野に向かって蹴りを仕掛けた。

しかし熊野がその蹴りを受け流し、鈴谷が利根の腹へ殴打。

利根は強く殴り飛ばされる。

体勢を整え、再び立ち上がる利根。

前には長門が近接戦闘を仕掛けに来ていた。

長門の殴打を二回ほど躲し、回し蹴りで応戦。

長門は怯むもすぐに立ち直り、脇腹を殴られた。

転倒しながら倒れ込む利根へ長門は追い打ちに砲撃。

利根はすぐさま起き上がり、砲撃を回避した。

高速走行で一旦距離を保つも、弾着観測射撃でまともに砲撃を食らってしまう。

そこに次から次へと砲撃が度重なり、魚雷も複数命中。

水平線を遮る様に水柱が連続して立ち上る。

「うらああアアアアア!!!」

無数の攻撃を食らいながらも利根は直進。

雄叫びを上げながら向かう先には最上がいた。

同じく最上も急加速し、利根と元へ向かっている。

互いに右拳を引き、左手を前に出した。

「気付けエエエエアア!!!」

最上と利根が正面衝突。

衝撃で海面が揺れ、海水が舞い上がった。

最上の右拳が利根の顔面に直撃。

利根の右拳は僅かながらに最上の顔から若干横に逸れていた。

利根は後方へ殴り飛ばされ、宙に浮かぶ。

——ああ……どうやら……大丈夫のようじゃな。

——安心したぞ……。

初めて敗れた利根は海面にて浮かぶ。しかし耐久値が限界を超えていたのか、徐々に沈みかけていた。

そんな時すぐに長門が抱え、利根の身体を持ち上げる。

「大丈夫だ利根……お前達の意味はもう……提督に届いている……」

それを聞いて安心したのか利根は事切れる。頭をガクツとさせ、意識を失った。

「長門……！ どういう事なの……？」

「ああ恐らくだが……翔鶴達は……」

——誰かに操られている」

——■■■■鎮守府、司令本部内広場

かつての司令本部内広場は既に無くなっていった。壁や天井は崩れて瓦礫となり、散乱した木材の破片が地面に突き刺さっている。爆煙や黒煙が立ち上り、火は次第に燃え移っていた。

その広場の中で瓦礫を踏み台にして朝潮達や鳳翔、日向は茫然としている。目に映る光景には想像を遥かに超えた戦闘が繰り広げられていた。

「ッ!!」

鹿島の殴打を受け止め、龍驤は後方へ引きずっていく。膝を着いては発艦準備の姿勢になった。目の前には銀色の光を煌めき放つ『鏢』シロガネの姿。ゆっくり歩いてきては龍驤を睨む。

「五分経過……よくここまで耐えましたね。正直な感想として今は少し驚いています」

「生憎ウチはしぶといんでな……特に戦うつちゆう事に関しては、世界一を自負してるで？」

「それはそれは素晴らしい。艦娘というのは戦闘に執着すればするほど輝くものです。他の皆さんにも見習ってほしいですね」

鹿島は龍驤のしぶとさに拍手で褒め称えた。一切笑顔を崩さずに近付いてくるその姿は不気味だ。拍手した後に腕を広げては艤装の砲塔を龍驤に向けている。

「さて……龍驤さん、貴方はまだ戦えますか？」

「勿論や……っ？」

龍驤が応答し、立ち上がった途端だった。突然背後に振り向き、建物の間に見える水平線を眺めている。何かを察したのか龍驤は悔しがるように歯を食いしばり、一回落ち着いては鹿島の方向へ振り向く。

「利根もやられたか……つちゆう事は今戦ってるのがウチと翔鶴だけかいな……寂しうなつたな」

「あらあらそうですか、もう勝てる見込みはありませんね」

「馬鹿言え、勝つ気なんてあらへん……そもそもこんな内乱で六十人を相手に戦える程の実力は備わっておらんわ。まあアンタは戦えそうな実力してるけどな」

鹿島と一戦交えた龍驤は見抜いている。

この艦娘は常軌を逸した強さを持ち合わせている異常者だ。

圧倒的な戦闘能力は勿論の事、戦術や体術、反射神経などが艦娘を超えている。弱点があるようで無いように見せている素振り、命中精度や上からの攻撃などの乏しいものを上手くカバーして立ち回っている。

さしずめ一人艦隊と言うべきか、様々な個性や能力を持つ艦娘の集合体のような存在だ。あの提督や翔鶴が念入りに警戒するのも無理はない。

「目が鋭くて結構。ここにいるには惜しい戦力ですね……どうです？」

「この鎮守府を抜け出して、私達の艦隊に所属するのは？」

「アンタらの艦隊……？ どういう事や」

「護神厄討艦隊ですよ。私や摩耶さんのような強者しかいない艦隊です、貴方はその兆しがあるのでお誘いしました♪」

龍驤にとつては噂程度にしか聞いていない事だ。大本営が極秘裏に凄まじい戦闘能力を持つ艦娘を集めて艦隊を編成している。初めは馬鹿馬鹿しく思っていた龍驤だが、鹿島の言葉を聞いて目を見開いた。

「……んなもん断るに決まってるやろ？ そんな危ない連中と組んでられへんわ」

「あら、それは残念。まあ本人の意思は尊重するような艦隊なので仕方ありませんか」

「アンタはそんな悠長に誘って大丈夫なんか？ 例えば——」

龍驤は人差し指を下に向ける。

すると鹿島の位置で突然大爆発が発生した。

鹿島は後方へ一歩下がり、突然の爆発を回避する。

空には龍驤の艦上爆撃機、零式艦戦六二型（爆戦）が舞っていた。

「奇襲とか食らったら危ないやろ？」

「ええ全く同感です……ねッ!!!」

鹿島は急発進して突進。

龍驤の艦上爆撃機の攻撃を回避せずに爆煙を掻い潜る。

大きく振りかぶった後に鹿島は殴打を仕掛けた。

龍驤は鹿島の殴打を受け流し、そのまま背負い投げる。

しかし鹿島は両足で強く踏ん張った。

叩きつけられるのを無理矢理回避する。

龍驤の掴まれた腕を掴み返し、逆背負い投げで仕返した。

強く屋上の床に叩きつけられ、龍驤は一階の空き部屋まで貫通して落下する。

土煙や埃が舞い上がる中、倒れる龍驤の頭上では跳躍した鹿島が。

鹿島の砲口が銀色に光り輝くのを確認する龍驤。

目を見開かせた後にすぐさまに起き上がる。

鹿島の砲撃を間一髪で回避。

ドアを突き破って司令本部一階の廊下へ転がった。空き部屋が突然爆発し、爆煙に包まれる龍驤。目に映るは舞い降りる銀色の光を纏いし狂戦士。

爆煙を手で掻き分け、龍驤の姿を確認する。

龍驤はまた鹿島の頭上に爆撃。更なる爆発が鹿島を襲った。

だが――、

「ここでは容易に使えませんね〜」

「さ〜てそれはどうやるなあ〜……!!」

鹿島は突進して龍驤とまた激突。

龍驤は周囲の壁を応用しながら攻撃を受け流していく。

鹿島の絶え間無き猛攻を己の眼と小さな躰で回避し続けた。

鹿島は身体を捻って腕や足を振り回す。

対人戦闘技術をなりふり構わずに繰り出した。

龍驤も反撃の余地を伺って応戦する。しかしダメージは最小限に抑えられてしまった。

回避パターンを読んだ鹿島は移動地点を予測、裏拳で龍驤を殴り飛ばす。

司令本部内広場まで飛ばされ、龍驤は転倒する。

直撃が効いたのか龍驤は痛み悶えるも、鹿島の砲撃を察知して跳躍で回避。

巻物状の艤装を再展開し、艦上爆撃機を発艦させる。

だが――、

「させませんッ!!」

「ンなッ!？」

突如横から朝潮が現れ、龍驤を蹴り飛ばす。

瓦礫の中へ飛ばされては砲撃で追い打ちをかけられた。

埋もれる瓦礫を押し退けて、爆煙を腕で掻き分ける。

何故か酷く傷ついた躰でありながら龍驤は馬鹿笑いしながら立ち

上がった。

「こんなになったのは久しぶりだああ……!!」

額から大量の血を流し、龍驤は目を光り輝かせる。手で血塗れた前髪を掻き分け、血反吐を吐いては脹脛に刺さった瓦礫を抜き取った。

「私をここまで滾らせてくれるのは……!!」

そこに関西風の口調は無く、標準語で話し掛ける龍驤がいた。不気味に笑いながら、ゆっくりと歩いていく。いつの間にか艦載機も発艦しており、朝潮達の頭上を駆け飛んでいた。

「あくこれだから戦いはやめられない!! いつかは出せると思っっていた私の本当の本気を出せるなんて!!」

龍驤の身体を光や風が纏い始め、次第に空気が揺れ出した。龍驤の狂った笑い声と共に空を舞う艦載機が歓喜の声を上げる。龍驤は違和感な口調で本気を出せると言っていた。

つまり今まで朝潮達が戦ってきた龍驤の本気はまだ本気では無かった事になる。それを聞いて朝潮達はゾツと青ざめ、鹿島は狂気に満ちた笑顔で見つめていた。

その時、突然朝潮の位置で大爆発が起きる。

朝潮は大ダメージを受けて意識を失ってしまった。

「朝潮姉!!」

「ボーッとしてんじやないよ!! 早速始めよう……!! 容赦なく攻めるから、精々死なないでね……ん?」

龍驤が艤装を構えて艦載機を発艦しようとしたその時、鎮守府の中央にて紅黒い稲妻が降ってきた。紅黒い閃光が鎮守府を照らし、雷鳴が周囲に轟く。突然の稲妻と雷鳴に龍驤や朝潮達は稲妻の方向に顔を向けた。何かを察知した龍驤は再びにやけ出す。

「やったな翔鶴……!!」

132. 来たれ憎悪よ、剩る絶望は嘆きの空に

——五分前

「何て馬鹿力だよ……!!」

「四人を相手にここまで善戦するとはな……!」

翔鶴との激戦により、寮の屋上は戦場と化していた。爆弾による幾つもの穴が空き、火を纏う瓦礫は散乱。寮の窓ガラスは戦鬨の衝撃で殆どが割れてしまい、建物はいつ崩れてもおかしくない状況だった。「っ……!!」

寮の屋上にて古鷹や加古、天龍や木曾が囲うのは孤独の鉄鶴。この鎮守府において元凶に等しい翔鶴が艤装を展開して古鷹達を睨み返す。逆転されてから十六分が経過、葛城と那智が撃破されて翔鶴側は一気に不利になってしまった。

「しぶといですよ……!! 大人しく倒れなさい!!」

「そりゃこつちの台詞だ……! お前こそ早く倒れやがれ!!」

善戦とは言われたが翔鶴は今、極度の限界状態だ。体力や気力は消え掛け、残りの艦載機もあと僅か。辛うじて今は体術で凌ぎつつ、確実に直撃出来るタイミングを伺いながら攻撃を仕掛けている。翔鶴一人でこの長期戦はどう考えても無理があるだろう。だが今の本人は全く諦めるつもりはない。

「絶対に……!」

「倒してやる……!!」

「覚悟しろ……!」

「翔鶴ツツ!!」

弓を上へ投げ飛ばした翔鶴。

取り囲む四人が一斉に畳み掛ける。

古鷹と加古の殴打、天龍と木曾の突きが交差した。

翔鶴は身体を捻らせ殴打を回避、手首の装甲で弾いて受け流す。

捻った身体の反動で両腕を広げ、天龍と加古を殴り飛ばした。

古鷹の蹴撃を受け止め、そのまま空いた左拳で殴り飛ばす。

木曾の振り下ろしたサーベルを回避。
再び向かってきた加古の殴打を左手で受け止めて掴む。
攻撃を仕掛けた木曾の服を掴み、天龍の元へ投げ飛ばした。
しかし天龍は投げ飛ばされた木曾を回避する。
身体を横回転させ大太刀を振り下ろした。

「ツッ!!」

天龍の大太刀を紙一重で避ける翔鶴。
隙を見た加古は翔鶴の左腕を掴んだ。

全体重を使つて古鷹が攻撃しやすい様に翔鶴を無理矢理動かす。
体勢が崩れた翔鶴の元へ古鷹の殴打が脇腹に直撃。

一瞬怯むも翔鶴はすぐさまに加古と古鷹を蹴り飛ばした。

背後に回つた木曾がサーベルを振り回し、翔鶴に猛攻を仕掛ける。

翔鶴はすかさず手首の装甲で受け止める。

しかしすれ違いざまに天龍が大太刀の峰で脹ら脛を殴つた。

足を掬われた翔鶴は怯みながらも受身を取る。

そして木曾をドロップキックで蹴り飛ばした。

体勢が不安定な翔鶴の頭上を加古が襲い掛かる。

足で踏みつけようとするも翔鶴はそれを躲した。

翔鶴は寝転がりながら加古の足を掬う。

そのまま逆立ちになり、身体を回転させる。

足の装甲で天龍と木曾の剣撃を弾き続けた。

そして翔鶴が跳躍した途端、天龍と木曾の地点で大爆発が起きる。

天龍と木曾は爆発の衝撃で吹き飛ばされ、翔鶴は屋上へ綺麗に着地する。

翔鶴が次の攻撃を仕掛けたその時だった――、

「ツ!!? まさか!!?」

翔鶴がある方向に顔を向け、驚いた表情をする。何かを感じたのだろうか、戦闘の真つ最中に翔鶴は声を上げてその方向を見続けた。突然の翔鶴の行動に古鷹達は一瞬理解するのが遅れた。ハツと我に返つた木曾が皆に呼び掛ける。

「おい!! 今がチャンスだ、畳み掛けるぞ!!」

他の三人も顔を横に無造作に振っては我に返り、木曾の呼び掛けに応じる。四人が一齐に急発進し、翔鶴の元へ突撃を仕掛けた。だが――

「そんな……まさか……！ 違う……こんなのは……!!」

葛城がやられてしまった、那智がやられてしまった、そして利根までもやられてしまった。残る戦力は龍驤と自分だけ、最早負け戦だと決まったものだろう。しかも龍驤と自分は防戦一方、勝てる道筋は未だに無い。

違う。

こんなのは空想だ。

違う！ 違う!! 違う!!!

違う!!!!

「ッ……！ 来なさい!!」

工廠で石畳の床を、そして天井を黒い何かが突き破った。黒い何かは大跳躍して空中に浮かんだ後、一直線にある場所へ向かう。

その先にいるのは――、

「っ……まさかッッ!!!」

――寮の屋上にいる翔鶴だ。

翔鶴に突撃する四人が謎の衝撃で全員吹き飛ばされた。
吹き飛ばされる最中に古鷹は目を限界にまで見開かせ目撃する。

悪魔が降臨。

紅黒い稲光を発して現れたのは、とある深海棲艦。

怪物の様な口の艤装に両脇に備え付けられた黒い飛行甲板。

幾つもの砲塔を展開させ、この地一帯の空気を揺らす。

「何だよ……あれ……！」

「なるほど……奴は深海棲艦だった訳だ……！」

古鷹の前にいるは深海棲艦の中でも危険な鬼クラス、白くて丸い艦載機『深海地獄艦爆』を発艦させ、即座に敵を殲滅せんとする空母水鬼がいた。

いや、空母水鬼と変身した翔鶴だろうか。見た目の姿は変われど性格は変わっていない。

「空母水鬼だ?!？」

「まさか翔鶴は深海棲艦なんですか!？」

「ああ、そうらしいな……!!」

下で見上げる武蔵や大和が驚いた表情で空母水鬼と化した翔鶴を

見る。どうやらノシロが言っていた情報は本当の様だ。摩耶が代わりに答え、提督は表情を変えずに翔鶴を睨む。

「負けナイ……絶対二、負けナイ!!」

シヨウカクは曇天の空へ掌を広げる。一つの深海地獄艦爆を囲う様に次々に同じ艦載機が現れ出た。紅黒い煙や稲妻が響き渡り、鼠色の曇天の空が鎮守府一帯を紅黒く染める。その光景はまるで終焉を彷彿とさせるような、互いの存在を賭けた最終決戦の舞台のようだ。

「墜チロオオオ!!」

紅い弾丸の如く急発進する翔鶴の艦載機が古鷹達を襲う。また古鷹達だけでなく提督の元まで襲い掛かってきた。降り掛かる爆弾の暴風雨に古鷹達と提督達は身構える。

「空母機動部隊!! 秋月型!! 照準を翔鶴及び空母水鬼に変更、対空戦闘開始! 今すぐ古鷹達を援護しろ!!」

「了解!!」

「了解です!!」

「ヒサシブリナノネー!!」

「アバレテヤルノネー!!」

「ヒヤッハー、ナノネー!!」

提督が大声を出して各艦隊に指示を伝える。加賀達や秋月達は一斉に攻撃隊を移動させ、大群の深海地獄艦爆へ航空戦を仕掛ける。しかしシヨウカクは大量の深海猫艦戦をも繰り出してきた。

鎮守府の上空にて空母機動部隊の攻撃隊とシヨウカクの攻撃隊が衝突する。白く光る曳光弾が列に並ぶ様に交差し、互いに敵機を撃ち落としていく。深海地獄艦爆を撃墜した飛龍の零式艦戦二一型（熟練）が爆風を潜り抜けて旋回、更に深海猫艦戦を追い掛ける。加賀の紫電改二の頭上から三機の深海猫艦戦が急襲、弾丸の嵐を受けて撃墜された。

水上から秋月達が十センチ高角砲で航空戦の援護、的確に航空戦から距離を取った敵機のみを攻撃していく。

「摩耶!! 今すぐ翔鶴の元へ向かえ!!」

「分かった!!」

場面は変わる。

崩れた司令本部では光纏う龍驤が新たな力を押し出そうとしていた。眼は黄金に輝き、常に狂う様に笑っている。左掌に『勅』と書かれた金色の炎を灯し、巻物型の飛行甲板を無理矢理擦る様に火花を散らしながら零式艦戦六十二型（爆戦）と彗星一二型を発艦させた。

「アハハハハハハ!!!」

それと同時にショウカクの深海地獄艦爆も襲来。鳳翔が零式艦戦五十二型を発艦させ、龍驤の爆撃機と同じく攻撃していく。まるで蝙蝠の様な爆撃機の並びに陸にいる霞達は焦りを見せた。視線を黒影が駆ける紅黒い曇天の空から瓦礫の頂上で太陽の様に輝く龍驤へ双眸の視界に移す。

「今すぐ止めないと!!」

「でも朝潮姉が!!」

「霞さん」

戦闘態勢にすぐ入った霞は龍驤の元へ向かおうとした。

が、鹿島に肩を掴まれ、名前を呼ばれる。振り向けば多少頬を赤らめた鹿島が嬉しそうに龍驤を見ていた。

「こういう時こそ落ち着くように。大丈夫です、貴方達ならば必ず勝てます……私の指示通りに動いてみてください」

「鹿島さんの、なの?」

「はい。大丈夫です、指導通りにやれば問題ありません」

「……分かったわ……!」

霞は深く深呼吸し、自身を落ち着かせる。鹿島の言葉を聞いていた大潮達も覚悟を決め、狂い笑う龍驤を睨んだ。

そして――、

「大潮さん、霞さん。龍驤さんの目の前に移動、右殴打を頭を下げて回避」

鹿島の指示は一秒後の動きだ、二人が指示を聞いた途端に頭を下げれば無事に龍驤の殴打を回避出来る。一回でも聞き逃せば龍驤の攻撃が即座に当たる。大潮達は精神を研ぎ澄まして、指示通りに動いて

いく。

「霰さんは左腕を掴まえ抑えて。大潮さんは足を引っ掛けて下さい、満潮さんは龍驤さんの目の前まで移動を」

「ッ、うおッ!?」

龍驤からすればまるで操られているような感覚だ。

鹿島の指示は自分でも聞こえているはずなのにその通りに動いてしまっている自分がいる。

「満潮さんは顔面に殴打。手応え無ければ一步退避、投げ飛ばされた霰さんをキヤツチ」

満潮の殴打を顔面から受け止める龍驤。

しかし龍驤はビクともせず、頭だけで満潮の拳を跳ね返した。

「ふはははッ、いいねッ!!!」

腕を抑えている霰を無理矢理腕ごと振り回して拘束を解除させる。そのままよろけた霰を投げ飛ばした。

龍驤は大跳躍、駆け昇る龍の如く空へ舞う。

纏う光がより一層輝き始めた。

身体はうつ伏せに捻らせ、左掌と右足を紅黒い空へ、右掌と左足を大地に。

右掌に黄金に輝く『勅』の焰を燃やし滾らせ、自らの背後に飛行甲板を展開。

「霞さんは私の元へ、日向さん!」

「何だ!」

「荒潮さんを投げ飛ばせますか?」

「勿論だ! 荒潮!!」

霞が鹿島の元へ向かい、呼ばれた荒潮が日向の元へ。日向へ指示した途端に鹿島は霞の服を掴み、投げる体勢にはいる。思わず霞は「え」と声を漏らすも、咄嗟に覚悟を決めた。

「加減は無しだぞ!!」

「オーケーよ!!」

「よく言った! おッらアアア!!!」

鹿島と日向は一斉に霞と荒潮を投げ飛ばす。ミサイルの様に空へ

舞う龍驤に突撃を仕掛けた。龍驤は二人を迎え撃つ様に零式艦戦六十二型（爆戦）を荒潮と霞へ向かわせる。

「朝潮さん、ってどこへ？」

「アレを見ろ!!」

「っ……!!?」

一方で寮の屋上では既にシヨウカクと古鷹達が激突していた。

シヨウカクは空母水鬼の艦装にある砲塔で牽制砲撃。

距離を詰めてくる古鷹達へ砲撃の嵐を浴びせた。

しかし古鷹達も応戦、砲弾を躲しつつシヨウカクの元へ駆け走る。

そしてまたシヨウカクも自ら突進。

砲撃をやめさせ、古鷹達に突撃を仕掛けた。

咄嗟の突撃に古鷹達はたじろぐ。

シヨウカクのドロップキックが天龍に直撃。

無意識に防御した天龍は衝撃で後方へ蹴り飛ばされた。

「天龍!!」

シヨウカクは身体をうつ伏せに、床に手をつけて逆立ちになる。

堅い装甲が備えられた両足を振り回し、古鷹達を寄せ付けない。

だが古鷹は床を滑走し、無防備なシヨウカクの腕めがけて蹴撃を仕

掛けた。

が――、

「ッ!! んなッ!!?」

シヨウカクは跳躍、体勢を整える。

滑走する古鷹の背後に回り、そのまま追い掛けるように古鷹を蹴り

飛ばした。

広場を挟んだ隣の寮の建物へ隕石のように衝突。直後、深海地獄艦爆による無慈悲な爆撃が古鷹にトドメをさしてきた。

「負ケナイ……絶対二私ハ、負ケナイ……!!」

「くっ……なんて禍々しい力だ……!!」

シヨウカクの姿はまるで全てを憎む憎悪の化身、絶望を齎す悪魔の

様だ。眼は紅く輝き、身体全体を紅黒いオーラのようなもので纏っている。口から出る白い吐息で排熱し、白い肌を持つ掌は稲妻が迸っていた。

「お前は……翔鶴、なのか……？」

「元ハ艦娘デシタヨ……艦娘ダツタ……!!」

「だったって、じゃあ何で深海棲艦になってんだよ……!!」

「貴方達ニハ知ル必要ノ無イ事デス!! 大人シク倒レナサイ!!」

ショウカクが紅黒い曇天の空に掌を広げる。『深海地獄艦爆』をいくつも繰り出しては発艦準備させた。突如曇天の空が歪み、陸にいるショウカクを中心に雲が円を描き始め、収束するように動いている。徐々に風が吹き荒れ、波がざわついた。

「ショウカク姉……何で……!」

瑞鶴は変わり果てた姉の姿を見て歯を食いしばる。

翔鶴姉の心の傷はここまでしななければいけない程に深くなっているのか。

皆を守りたいはずの翔鶴姉が、今は皆に対立して戦っている。

違う、翔鶴姉が望んでいるのはこんなのじゃない。

「……」

屋上にて戦うショウカクを見上げる瑞鶴。顔を俯いては右手を握った。

もし私が動いていればこんな事にはならなかった。

ショウカク姉や皆が戦う事なんてなかった。

あの時私が何か言葉を掛けていれば、翔鶴姉は少しでも救われたのだろうか。

いや、駄目だろうな。

憎き前任によって変わってしまった翔鶴姉を私は止める事が出来なかった。自分の身に脅威が迫るのが怖くて、嫌な思いをしたくなくて逃げていたんだ。

提督さんの言っていた事が本当だなんて信じたくはなかったけど、

今思えばあの時の私はとても惨めだな……。

だから……、

だからこそ……、

だからこそ私は——、もう退かないって決めたんだ。

初めて提督さんと手を組んだ時から決めたんだ。

もうこんな地獄を作らない、もうこんな悪夢は見させない。

例え身内と戦う羽目になったとしても、二度と退かないって。

それが今なんだろうと思う。

唯一の姉妹である翔鶴姉と敵対し、皆が悪夢の時代を終わらせようと必死に戦っている。自分の身を削ってまで未来を勝ち取ろうと必死に足掻いているんだ。

そこで私が動かないでどうする。

いつまでも過去の私に縋って後悔するのはやめろ。

今度こそ私が変わってしまった翔鶴姉を救うんだ。

もしこの先の未来が、私にとって死すら羨むような地獄だったとしても。

私は——、

「待ってくれ瑞鶴」

「っ……？」

「あたしに戦わせてくれないか？ アイツは一発殴らなきや気が済まなくてな……姉妹喧嘩なら後でやってくれ」

その右眼は炎の如く、紅く輝いた。

「ハアアアアアアア!!!」

シヨウカクは『深海地獄艦爆』を複数発艦。

紅いオーラを纏った爆撃機が残された木曾や加古目掛けて爆撃を仕掛ける。

爆撃されまいと二人は一斉に急発進。

しかしそれを予知したシヨウカクは突進。

二人の顔面を勢いよく掴んだ。

そして二人を掴んだシヨウカクは別の寮へ飛び移っていく。

向かってきた天龍をもう一度蹴り飛ばした。

工廠の屋上まで跳躍。また更に跳躍し、二人を海面へ投げ飛ばした。

天龍、木曾、加古の三人は体勢を整えて綺麗に着水。

シヨウカクは艤装を巧みに使いこなし、立ち乗りのように艤装の上に立った。

天龍達の頭上には大量の深海地獄艦爆が飛び交っている。

「一旦別れるぞ！ 不規則に移動して攪乱させるんだ!!」

「オーケー！」

「任せろ！」

海上を不規則に展開し、照準をずらすように動く三人。シヨウカクは手当たり次第に三人へ爆撃を開始した。

水柱がまるで壁のようにいくつも立ち上る。それでも三人はその水の壁を突き抜け、シヨウカクの元へ一直線に向かっていった。

しかし――、

「ッ!？」

突如シヨウカクの爆撃隊が次々に爆発し始めた。まるで花火のように爆ぜ散り、残骸や火の粉が海面に降り掛かる。シヨウカクからすれば撃ち落とした相手はすぐに理解出来るものだった。

「貴方ハ……!!」

その相手とは――、木曾達の前に立つは右眼に紅い炎を灯し、艤装が一部変形した『緋』^{ヒケル}の姿。

「摩耶……!」

「シヨウカク……覚悟しろ」

133. 紅黒い空に輝く双対の太陽、そして緋星流
爛

『君は頑張り屋さんだね、いい娘じゃないか』

『朝潮、たまには休む事も必要だよ』

『大丈夫、君達駆逐艦は強いよ。ほら、泣かないで元気出して』

『大丈夫、大丈夫だから』

『大丈夫だよ』

『大丈夫』

ふと、考えた事がある。

誰かの為に役に立ちたいという考えは、果たして正しい事なのか。私はただ、司令官のお役に立てればそれで良かった。例え小さな事でも、身の危険を犯す様な事でも、それで司令官の役に立てるのなら。ただ、それだけだった。

それだけが私にとって全てだった。

司令官という存在が私にとって唯一の、かけがえのない大切な人だった。

それなのに私はその大切な人を忘れてしまっただけでなく、もう一人の大切な人を殺しかける羽目になるとは思わなかった。

私達を人間と見てくれて、自分とはどういう存在かを教えてもらい、尊厳と自由を与えてくれた蒼■司令官。

私達を兵器と見ていても、自分とはどういう存在かを自覚させ、失った尊厳と自由を取り戻そうとしてくれる白司令官。

目的や方法は真反対でも、二人共にあるのは——全て私達の為という心優しい信念。

それを気付かずに私達は記憶の彼方から消去し、ましてや忌み嫌っては手を出していた。

恩知らずにも程がある。

いきなり薬によって目が覚めれば司令官達を侮辱した事による罪の意識で悲しむよりも先に、恩を仇で返す様な真似をした私に腸が煮えくり返る程の怒りが湧き出ていた。

無様に翔鶴に操られ、悪逆非道の限りを尽くした私達を見て、司令官達は幻滅しただろう。

こんな鉄屑などこの世からいなくなればいい。

全くもって同感だ、私達はこの世にいない方がいい。

……。

……でも。

……それでも。

それでも私は貴方達に一度だけでいい。

心の底から謝りたい。

自分が犯した罪を洗い流しにはさせない為にも。

一度だけでいいから面と向かい合って謝りたい。

貴方達の恩を一生忘れない為にも、私達は謝らなければならない。

だからここで惨めに死ぬつもりは無い。

私は、

私は——、

「朝潮さんは、ってどっへ!？」

「アレを見る!!」

「っ……!？」

鹿島の指示通りに霞と荒潮が投げ飛ばされ、太陽の如く光輝く龍驤の元へ向かっている最中だった。鹿島が庇っていた朝潮がいつの間にかいない。鹿島が驚いた矢先に日向が声を上げて視線を集めた。

その先にいるのは――、

「ツッ!!」

司令本部の隣にある駆逐艦寮の建物の壁を垂直に走る朝潮がいた。決死の表情で地上四階建ての駆逐艦寮の壁を昇って行く。

煉瓦の壁につま先を突いて足場を作り跳躍。

上へ上へと昇っていき、屋上に着いては更にまた大跳躍。

身体を回転させ、空へ飛び立った。

「うおッ!？」

朝潮は龍驤の頭上へ飛び、殴るように腕を振るって砲撃。

龍驤は砲撃を受け止め、空中にて反撃態勢に入る。

しかし龍驤の目の前には投げ飛ばされた霞と荒潮が。

空中にて三人に囲まれ、逃げ場を無くす龍驤。

すぐさま龍驤は発艦させた艦載機に信号を送る。

標的を朝潮、霞、荒潮に変更させ迎撃した。

「朝潮さん、私の考えを……!」

鹿島は光を纏う朝潮を見て驚きの表情を隠せなかった。自分が即興で考えた作戦を朝潮は傍で聞いただけで汲み取り、自ら空へと壁を昇って移動したのだ。思わず鹿島は朝潮の成長ぶりに笑みを浮かべる。

「行きなさい朝潮さんツッ!!! 勝利は貴方の手にツッ!!」

鹿島の声援と共に朝潮達は攻撃を仕掛ける。

だが龍驤も諦めない。

「甘いよツッ!!!」

向かってくる霞と荒潮を零式艦戦六十二型(爆戦)ごと衝突させる。

二人は砲撃で迎撃、空中にて爆発した。

そして頭上から襲い掛かる朝潮へ、二十五ミリメートル連装機銃で急襲。

朝潮は身体を守るように身を屈める。

腕を交差し防御しながらも龍驤から目を離さない。

「龍驤ツツ!!」

龍驤と朝潮が衝突。

お互い手を掴み合い、空中にて睨み続ける。

しかし朝潮の背後にて龍驤の艦戦六十二型が。

「残念だったな朝潮オ!! 私ほ——」「大潮ツ!! 霰ツ!! 満潮ツ!! 来なさいツ!!!」

朝潮の掛け声と共に立っていた大潮達が即座に駆け走る。

崩れた司令本部の建物の瓦礫を利用して大跳躍。

爆煙を駆け抜け、霞と荒潮も龍驤の元へ。

龍驤が再び朝潮型全員によって空中で包囲されてしまった。

「面白いなアアア!!!」

龍驤は朝潮を蹴り飛ばし、荒潮達の方へ身体を向ける。

背後に巻物型の飛行甲板を展開させ、掌に『勅』と描かれた金色の炎を削る様に艦載機を発艦。

手を下げて操る様に零式艦戦六十二型（艦爆）を突撃させた。

「私達も援護を!!」

龍驤の艦戦機を陸にいる鹿島達が援護射撃。

荒潮達の間をすり抜けて砲弾が着弾する。

そして鳳翔の零式艦戦五十二型（熟練）が艦戦機を次々に破壊していった。

「もう終わりです、龍驤さん……!!」

「鳳翔!! 隠し持ってたなツ!!!」

「!!」「まだだアアアアアア!!!」「!!」「!!」

荒潮達が龍驤の元へ辿り着く。

それぞれ龍驤の足や手を拘束し、自由を奪った。

身動きが取れなくなった龍驤は無理矢理身体を動かして拘束を解こうとしている。

だが既に――、

「ッ!!?」

龍驤の正面には殴り構えた朝潮がいた。

「私はッ!!」

何度醜く荒れ果てても――、

「まだッッ!!」

何度ひれ伏せられようとも――、

「死ぬ訳にはッッ!!!」

何度打ちのめされても――、

「いかないんだッッ!!!」

強く生きる事を諦めない。

私達が強いんだってという証明を見させてやるんだ。

それが二人の司令官によって教えられた、朝潮が掲げる全て。

誰かの為に役に立つ事も、

誰かの為に戦う事も、

誰かの為に生きる事も。

そして私自身の為、二人の司令官の為に――。

「ウオオオオオアアアアアアアア!!!」

龍驤の顔面に朝潮の渾身の殴打が直撃。

衝撃で大潮達が振り払われ、朝潮と龍驤はそのまま落下。

咆哮を上げながら朝潮は殴った右拳を龍驤の顔面に押し続ける。
まるで隕石のように司令本部へ衝突し、建物の瓦礫が衝撃で周囲に
飛び散った。

「朝潮姉……！」

瓦礫に囲まれた中心には右拳を突き出したまま立ち尽くす朝潮と
白目を向いて倒れる龍驤がいた。逆転してから三十七分が経過、龍驤
との戦闘は朝潮達の勝利によって終わりを告げる。

流石鹿島が興味を示す程の戦闘能力、まだ力を隠し持っていたよう
だ。口調や戦闘スタイルが激変するあのやり方は味方や敵に恐れら
れてもおかしくはないだろう。

「……」

「朝潮姉!!」

そのまま立ち尽くしていた朝潮。無理して戦っていたのか事切れ
たかのように倒れだした。すぐに荒潮達が駆けつけ、意識が朦朧とし
ている朝潮を支える。朝潮は頭から血を流し、顔はほとんど赤い血で
染まっていた。

「鹿島さん……私は……！」

朝潮の周りには日向達も駆けつけ、怪我した姿に心配になってい
る。鹿島も同様に朝潮を見ていたが、それに気づいた朝潮が手を伸ば
した。

「私達は……強い、ですか……？」

「……ええ……とても、良かったですよ」

朝潮のか弱い手を優しく握り、そっと微笑む鹿島。鹿島の言葉を聞
いた朝潮は安心したのか目を閉じる。荒潮達が心配するもまだ脈は
動いているようだ。

「大丈夫です、荒潮さん達は朝潮さんを看護してあげて下さい。鳳翔
さん、お願い出来ますか？」

「はい、大丈夫ですよ」

「ありがとうございます。では日向さん、私達は倒れた龍驤さんを拘
束しましょう」

「分かった」

——鎮守府近海。

「覚悟しろ……シヨウカクッ!!」

「貴方ダケハアアア!!」

シヨウカクの叫びと共に無数の深海地獄艦爆が繰り出された。両脇の飛行甲板から、空へ差し出された右掌から、白い破壊の妖精が空へと飛び立つ。

「あたしを前にして……」

紅い炎を滾らせ、摩耶は急発進急加速。

シヨウカクの艦載機が飛ぶ高度まで大跳躍。

「空は意味無エんだよ!!」

集中配備された二十五ミリメートル三連装機銃から紅い光が収束。

摩耶は駒のように身体を回転させる。

摩耶を中心に腕の艤装と脇腹の艤装から紅い曳光弾の弾幕が放たれた。

次々に艦載機が撃墜され、空が火の海に染まる。

シヨウカクは空中の摩耶に向けて砲撃。

体勢が不安定な摩耶に集中攻撃し始めた。

しかし爆煙の中から摩耶が現れる。

輝く紅い流星がシヨウカクに急落下突撃。

シヨウカクの位置で大きな水柱が上り立つ。

水柱の中から艤装に立ちながら乗るシヨウカクが現れる。

砲撃と同時に艦載機を発艦させた。

シヨウカクを追い掛けるように摩耶も水柱を掻き分け高速走行。

摩耶は突進しながら跳躍、ドロップキックをシヨウカクに食らわせた。

腕を交差して防御するも衝撃で後方へ吹き飛ばされるシヨウカク。

しかしシヨウカクもすぐに体勢を整え、急発進。

うつ伏せになった摩耶を上から鋼鉄の足で踏み潰した。

摩耶は即座に体勢を無理矢理整え、その足を受け止める。

海水が衝撃で持ち上げられ、暴風雨となって降り注ぐ。

「シヨウカク！ お前がやってきた事は全て間違ってるんだ!! いい加減頭冷やして冷静になれ!!」

「イヤ間違ッテナンカイナイ!! カハ全テヲ支配デキル!! 支配デキルカラコソ私ハ守ツタンデス!!! ソレガ何故分カラナイノデスカツツ!!!」

足に強く力を入れては摩耶を踏み潰そうとするシヨウカク。

深海棲艦特有の馬鹿力と翔鶴本来の力で摩耶は押されつつあった。

「分かるわけねえだろ!!! んな無茶苦茶なやり方があってたまるか!!!」

そんなに守りたいなら強くなってみろよこの馬鹿が!!!」

「分カラズ屋アスネ本当ニ貴方ハアアアアア!!!」

摩耶は力強く踏みつけてくるのを確認し、シヨウカクの足を往なしていく。

隙が出来たシヨウカクに後ろ回し蹴りで蹴り飛ばした。

海面を跳ねるように飛ばされるシヨウカク。

自立型の艦装が自動で発進。蹴り飛ばされたシヨウカクを乗せた。

「貴方ダケハ——ツ!!?」

体勢を整えたシヨウカクが艦載機を発艦させようとした。

が、また摩耶に砲撃で邪魔をされる。

摩耶は爆煙を潜り抜け、翔鶴に膝蹴りを食らわせた。

膝蹴りは顎に直撃し、シヨウカクはよろける。

とてつもない衝撃で一瞬意識を失いそうだった。

しかしシヨウカクはすぐ様に摩耶へ殴打を仕掛ける。

摩耶はシヨウカクの殴打を空中で躲し、肩の艦装にて砲撃。

砲煙と爆煙を掻っ切る様にシヨウカクの回し蹴りが摩耶を襲った。

瞬時に摩耶はシヨウカクの鋼鉄脚に手を乗せて跳躍。

身体を縮こませて回し蹴りを回避。

そしてシヨウカクの鋼鉄脚を逆に踏みつけた。

「シヨウカク……あたしはアンタが大嫌いだ」

足を抑えられ身動きが取れなくなるシヨウカク。

目の前に立つ摩耶を悔しそうに睨み返した。

「散々仲間を巻き込みやがって……! 拳句の果てには提督を殺す様

黒い艦装にクレーターができ、衝撃が海面に伝わる。

波は嵐のように荒れ果て、風圧が鎮守府の瓦礫の火を消すまでに至った。

「摩耶……」

加古達が遠くからその様子を見ていた。異次元の戦闘、シヨウカクの嘆き、摩耶の怒号。誰も立ち尽くす摩耶と倒れるシヨウカクに接近する事が出来なかった。

紅黒く染まる曇天の空が徐々に本来の鼠色を取り戻しつつある。荒れていた波も静かになり、騒ぎ立つ風は優しくなってきた。

加古達を含む、殆どの艦娘達がふと思う。

永遠に続くと思われた悪夢の時代は——、紅い炎拳によって終わりを告げた。

——はずだった。

「ッ?!」

倒れるシヨウカクが突然起き上がり、摩耶を吹き飛ばしては咆哮を上げていく。また曇天の空が紅黒く染まり、波や風が暴れ狂う。倒されたはずの孤高の悪魔が再び目覚めた。

「貴様ラァァァァァァァァァァ!!」

白目を向いたままシヨウカクは叫び続ける。紅黒いオーラを身に纏い、背後に全ての艦載機を出現させた。恐らくあの様子だと意識は失っていても身体が勝手に動いているのだろう。絶対に勝つという執念深さと誰にも囚われない支配という存在に固執し、シヨウカクの中にいる何かが赴くままに暴れ出している。

「厄介な事を……!! 加古、天龍、木曾! 全力でヤツを抑えるぞ!!」

「おう! 分かった!!」

「任せろ!」

「当たり前だ!」

「我々も参加するぞ！」

摩耶達だけでなく長門や陸奥、雲龍や鈴谷達が合流してきた。皆それぞれ葛城、那智、利根を撃破して来たのだろう。大半が怪我を負っている状態だが戦力になるだけ充分だ。皆が戦闘準備態勢に入る、シヨウカクに照準を定め攻撃しようとした。

が――、

「まあ待ちなさいな」

摩耶達の目の前に突如閃光の如く艦娘が現れた。白い光の一閃の中から稲妻を迸らせて摩耶達の前を遮る。一人は太陽の様に輝く槍のような武器を持っては藍色の髪を靡かせ、もう一人は光を舞い散る雪のように操り左手に収束させては身体に白い光を纏わせる。

「集まってもらった所悪いけどここは私達が預からせてもらおうわ」

「早速面白そうなヤツと戦えそうですね。胸が躍ります」

「お前らは……『?』『?』『?』！」

護神厄討艦隊旗艦『?』オウゲン叢雲、そして公表されない秘匿された艦娘、

『?』吹雪。二人の古強者が荒くれ鎮守府の近海に現れた。摩耶は二人を見ては思わず笑みが零れる。意識の無いシヨウカクは獣のように警戒して咆哮を上げた。

「うるさい獣ね、つたく……さーて」

「どうやっちゃいますしょうか」

134. 大海を啓迪（けいてき）するは、白金織り成す双光乱閃

「さて……拘束はしましたが、少し暴れ過ぎましたね」

「ああ半分は跡形も無くなっているな。提督に申し訳ない限りだ……」

倒れ込む龍驤に艦娘専用の拘束器具を装着させ拘束。依然として龍驤は白目を向いたまま倒れており、瀕死状態にまで近づいていた。鹿島の応急処置により一命は取り留めているがそれでも危ない状態になっている。龍驤との戦闘が終わり、日向は崩れた司令本部を見てはため息を吐いて頭を抱えた。

「嫌がらせた自分が憎いですか？」

「当然だろう……上官に手を出すなどあつてはならない事だ。今更顔を合わせる事すら出来るか……」

「今更悩んだ所で時間の無駄ですよ日向さん。私達は私達なりの行動で示すべきです、迷う必要なんてありません」

ゆっくりと背伸びをしては紅黒い空を眺める鹿島。先程の戦闘で少し張り切り過ぎたのか疲れが溜まっていたようだ。ヘラヘラと鹿島は笑っているが、鹿島自身は計画の為とはいえ提督を助けなかった事に負い目を感じている。もつと早く助けておけば、こうやって戦う日も早かっただろう。自分を責めては考えてばかりだ。

「ああそうだな、少し考え過ぎた。しかしだが……龍驤があれだけの力を隠し持っていたとはな……」

「ええ潜在能力は素晴らしいです。ここにるのが勿体ないくらいです」

龍驤の戦闘能力はこの鎮守府の艦娘の中ではトップクラスに属する程だ。精密な偏差の計算、戦艦クラスの攻撃を余裕で耐える強靱な防御力、初めて戦う相手だろうと即座に見極める観察眼とその適応能力。そして窮地に追い込まれる程発揮される更なる身体強化と巧みに艦載機を操るその術。

正直な話、育て上げれば鹿島達の仲間入りをしてもおかしい話ではない。

「こうなつてまで勝ちたい理由……譲れないモノ、か……我々には到底理解出来んな」

「譲れないモノですか……はて、龍驤さんや翔鶴さん達は一体何を隠してたんでしようかねえ」

「隠してた？ 何をだ？」

顎に手を当てて鹿島は考える仕草をする。戦闘前に聞いていた鹿島は龍驤の言葉を深く考え始めた。どうしてもこの五人が戦わなくてはいけなかった理由、何が裏があるのではと鹿島は思いつく。

「分かりません。ですがこうでもしなければいけないほど龍驤さんは本気を出して戦い抜きました。恐らく……貴方達に関する事、ではないかと私は予想します」

「私達に關係する事、か？」

「はい、あの時が翔鶴さんが言っていた事を思い出せますか？」

戦闘前に龍驤は譲れないモノがあると云っていた。負け戦だと分かっていながら戦う事を止めず、ただ只管に龍驤は朝潮達と張り合っていた。隠してた力を使わなければいけないほど、譲れない何かがあるのかもしれない。

「支配して守る。一見破茶滅茶な言葉ではありますが、手段が支配であり、目的は貴方達を守る為……守るという意志は絶対に変わらなかった……譲れないモノとはその意志なのかと私は思います」

「……まさか……」

「そうです……貴方達は誰かに命を握られている、という可能性がありませんね」

日向は思わず動揺の声を上げた。鹿島の考察が正しければ、この鎮守府の艦娘達は誰かに命を脅かされようとしている。

その誰かなど考えなくても分かる事だ、勿論あの男しかいない。この鎮守府に関わり、この地獄を作り出した全ての元凶。外道中の外道に成り下がったクズ、前任の■■■少尉だ。

「もしかしたら翔鶴さん達は前任に脅かされているのかもしれない

ね」

「わ……たし……は、まだ……」

倒れ込んだ龍驤が目を覚ましたようだ。

弱り切った細々とした声で何か言っている。

「あら目が覚めましたか、流石で——」 「まだ終われないんだアアアアアア!!!」

艦娘専用の拘束器具をいとも簡単に破壊し、大跳躍する龍驤。再び太陽の様に輝き、発艦する準備をし始めた。満身創痍でありながら戦おうとするその精神力。出来れば褒めてあげたいが鹿島はつまらなさそうな表情で龍驤を見上げた。

「いい加減しつこいですね龍驤さん……一回頭を冷やしてみては？」

「私はまだアンタに負けてない……!! 力がある限りは絶対に戦うのさ!!」

「その執念さは褒めてやりたいですね……はあ……分かりました。日向さんは見ててください、私が相手してあげます……なので龍驤さん——」

鹿島は艤装を再び展開し、銀色の光を身体の中へ収束させる。銀色の光が鹿島の身体を纏い、目が銀色に輝き出した。

「命の保証はしませんので、ご注意を」

鹿島は通常戦闘形態に移行、照準を全て空高く舞う龍驤に向ける。恐らく鹿島は本気でやるつもりだ、龍驤といえどもたない事は分かっている。龍驤は再び掌に金色の炎を灯し、飛行甲板を削る様に艦載機を発艦。

なりふり構わず鹿島に攻撃しようとしたが——、

「面白そうなのがいるネエ」

声が出た途端に突然龍驤は殴り飛ばされ、また地に叩き落とされた。その威力は凄まじいもので、龍驤が落ちた地点はクレーターの様になり、落ちていく時はソニックブームが出来るほどの速さだった。龍驤を空中で殴り飛ばした相手に二人は驚きの表情でその姿を見る。

「『?』さんですか……どうやら間に合ったようですね」

護神厄討艦隊メンバーの一人、『?』金剛が現れた。空からまるで

白翼を持つ天使の様に降臨し、荒れ果てた地に足をつける。金剛は白い光を身に纏っており、眼は白く輝きを見せている。

「貴方の報告を受けて任務の為に来たヨ。提督はどこか案内出来ませんか？ あとこの娘面白いネ！」

「提督は今が広場にて安静にしていますよ『？』ビョウコウさん。それよりも龍驤さんの事、殺してませんよね？」

互いに身に纏う光を抑え、仲良く話し合った。この金剛は元気な表情で話しており、その優しさから親近感が湧いてくる事だろう。だが日向から見ればその優しさの裏に悍ましい程の好戦的な戦欲が隠れているのが分かった。

「Don't worry! 殺してはいませんヨ、半殺しにしかただけデス！」

堂々と金剛は殺してないと豪語したその時、金剛の頭上で大爆発が起きた。空には龍驤の零式艦戦六十二型（爆戦）が金剛を攻撃していたようだ。攻撃を仕掛けた龍驤は地面にひれ伏しながらも必死な表情で金剛を睨んでいる。爆撃を受けた金剛は傷一つ付かず、微動だにしないまま笑っていた。

「あーまだ起きてみたいデスネー……そのまま眠っていれば痛い目に会わなくて済むノニ」

『？』ビョウコウ金剛はまた龍驤の元へいき、目の前まで近付いて座った。うつ伏せになって倒れる龍驤を見下してはニヤニヤと笑っている。

「残念デスガー、貴方達はここで終わりデース。大人しく眠っててくだサイナ」

「私は……まだ……」

「私達の艦隊では『無力化』という、意識があるまで徹底的に叩きのめす許可が出るノ。だからさっさと眠った方が身の為ダヨ」

「私は……」

龍驤が地べたを這いつくばりながら手を伸ばす。満身創痕の身体でどこへ行こうというのか。金剛はその行動が理解出来なかった。つまらなそうに金剛は龍驤の頭を掴み、地面に五回ほど叩きつける。完全に意識を失ったのか龍驤は身体を動かさなくなった。生きてい

るかどうか脈を確認し、龍驤を抱きかかえる。

「本当に殺してないですよね？」

「Of course! 確認はしたヨ。さて……白中將の所へ、連れてってもらえるカナ？」

「……分かりました」

なにぶん『?』ビョウコウ 金剛は力加減が出来ないような馬鹿力をしている為、敵を殴っていたらいつの間にか死んでいたなど当たり前になっている程の力を持つ艦娘だ。

物理的攻撃や無尽蔵な耐久力に特化しており、持ち合わせる超能力は「痛覚麻痺」。身体の中にある痛覚神経を全て遮断し、外部からの物理的攻撃や砲撃、爆撃など全ての攻撃による痛みを感じさせない能力だ。戦闘中は痛覚を麻痺させる事で気にする事なく戦える能力になっている。

「大丈夫なのか……?」

「……死んでないのなら大丈夫なんでしょう」

——鎮守府近海

「久しぶりの戦闘ですな〜」

「いつものアレで行くわよ」ラセツ『?』

暴れ狂うショウカクの前に立つは古強者の二人。摩耶達を一旦避難させ、鎮守府近海を三人だけに残した。波や風が暴れ牛の如く荒れていく中で余裕そうな雰囲気醸し出している。

「ん、でもあれ意識無いですよね？」

「え? あら本当ね。これだどうしましょうか」

よく見れば白目を向いたままショウカクは動いている。司令官の命令通り、意識が喪失するまで戦い続けるという意味の「無力化」で相手をしようかと思っていたが既に意識が無いようだ。これではどう戦えのばいいのかわからない。『?』オウゲン 叢雲は司令官と無線を繋げようとしたが、何かに邪魔されて全く繋がらない。手当たり次第に頭の

艦装を叩いたり、背伸びやジャンプしてみるが無意味のようだ。

「……何でこんな時に繋がらないのかしら、ここってそんな秘境じゃないでしょうに」

「うーん『無力化』とは言われましたが面倒なので旗艦の『?』様に任せますね〜」

「はあ……あーホント、アンタって面倒な性格してるわ……まあいいわよ、決めてあげる」

『?』 叢雲は金色に輝く槍を巧みに回し、シヨウカクを見定める。シヨウカクは今にでも二人に襲い掛かろうと雄叫びを上げて躍起だ。全ての艦載機を繰り出し、紅黒い空へ発艦させている。

「とりあえず動かなくなるまでぶっ飛ばす!! って事でいいかしら

?」

『?』さんなら言うと思ってましたよー!」

「なら、とつげ——」

吹雪と確認し合った途端、シヨウカクが叢雲に突撃。

黒い化け物の様な艦装を衝突させ、押し潰しては叢雲を海面に引き摺らせた。

水柱が後を追い掛けるように立ち上る。

「ヤハリコノ私^{バカ}ニ任セルベキデハナカッタ!!! 全テ私ガ操ツテイレバ
コンナ事ニハナラナカッタノニ!!! 甘ク——」

しかし叢雲はシヨウカクの艦装を下から蹴り飛ばした。
衝撃でシヨウカクの艦装は宙へ浮かぶ。

そこに『?』吹雪がシヨウカクの背後から現れた。

吹雪の飛び蹴りがシヨウカクの頬へ直撃。

海面を跳ねるように飛ばされるも体勢を整える。

自動で動く自立型の艦装に支えられ、そのまま立ち乗った。

叢雲と吹雪に狙いを定めようとしたその時には——、

「どっ見てるのよ」

死角になっていた真下には叢雲が既にいた。

叢雲の槍の先端がシヨウカクの顎に直撃。

槍の穂は鋼鉄の打撃武器になっている。

凄まじい衝撃でシヨウカクも宙へ浮かんだ。

そしてシヨウカクの背後にまた吹雪が襲い掛かる。

宙に浮かんだシヨウカクの後頭部を叩き殴った。

「まだ戦えますか？ 戦えますよね？」

起き上がろうとするシヨウカクを見て声を掛ける吹雪。シヨウカクの頭をポンポンと叩いては安否を確認している。本人の意識が無いにも関わらずまるで別人の様に豹変したシヨウカクに対し、懲りずに煽り続ける吹雪に叢雲は気味が悪いと嫌そうな表情をした。

「黙レツツ!!!」

シヨウカクは自身の周囲を爆撃。

既に察知していた二人は後方へ下がり、間合いを確保した。

残っている艦載機を手で操り、二人へ爆撃を始める。

「骨があるわね!!」

「少しだけ本気だしましょうか!!」

叢雲と吹雪は急発進急加速。

その速度は正に光の如く。

白金織り成す双光乱閃が海面を駆け走る。

あまりの速さに数秒遅れて水柱が暴れ出した。

爆弾が落とされる前から海面を駆け抜け、一気にシヨウカクへ接近する。

黄金の光纏う叢雲は飛び蹴りでシヨウカクを蹴り飛ばした。

次に白輝纏う吹雪はシヨウカクの黒い艦装を殴り飛ばす。

岸辺の壁に打ち付けられ怯むシヨウカク。

そこに吹雪が蹴り飛ばした艦装で更に押し潰された。

更に怒涛の連続砲撃で追い打ちを掛けていく。

二人の輝く戦闘狂は全く手を止めない。

砲撃を耐え抜き、爆煙を掻き分けるシヨウカク。

だが黒い艦装に押し潰されたお陰で身動きが取れなくなっていた。

そこに吹雪が現れ、頭を掴んでは更に壁へ何度も叩く。

零距离砲撃を五回ほどした後、下から突き上げるように殴打。

岸辺の壁を貫通して、鎮守府の寮の屋上まで殴り飛ばされた。

「まだ意識はあるようね」

「ツ!!!? ヤラセハ、シナイヨツツ!!!」

既に寮の屋上には叢雲が待ち構えていた。

シヨウカクは身体を捻って後ろ回し蹴り。

しかし残像を残して簡単に回避されてしまった。

叢雲の槍の穂がシヨウカクの腹に直撃、カウンター。

シヨウカクは天高く空へ殴り飛ばされた。

叢雲は大跳躍してその後を追い掛ける。

空に舞うシヨウカクの頭上を取った。

叢雲が纏っていた金色の光がより輝き出す。

叢雲から繰り出される渾身の槍の殴打がシヨウカクの顔面に直撃。

シヨウカクは一気に地表まで叩き落とされた。

寮の建物ごと吹き飛ばし、建物が真つ二つになる。

衝撃で瓦礫が宙に散乱し、土煙が広場を覆い尽くした。

そして叢雲は艦装の砲口から金色の光を収束。

砲撃の流星群が地上のシヨウカクを滅多打ちにした。

寮の建物が砲弾の爆発による衝撃によって崩壊。

地面の舗装ブロックが挟れるように宙へ舞った。

「私ハ……私ハ……私ハアアア!!!」

あれだけの攻撃を受けても尚、シヨウカクは立ち上がる。背中に乗る瓦礫を押し退け、咆哮を上げた。よく見ればシヨウカクは涙を流していた。まるでこの世の理不尽さを嘆いている様に見える。

シヨウカクの頭の中で忌まわしい過去が映像として流れていく。前任に弄ばれ、黜られ、脅され尽くして、愛する人を殺してしまつて、支配が全てだと教えこまれて。今でもあの男が殺したい程憎い。シヨウカクは頭を抱えて涙を流しながら叫び続けた。

その時――、

「クソツ!! コンナ時ニ現レルナコノ屑ガツツ!!! オ前ハ――」
「シヨウカクウウアアアアアア!!!」

第二広場を挟んだ隣の寮から古鷹が咆哮を上げて現れる。

瓦礫を破壊してシヨウカクの元まで駆け走った。

真鍮色の稲妻を迸らせ、古鷹は大跳躍。

シヨウカクの頭上を取った。

古鷹は空に掌を向けて砲撃。

砲撃の衝撃で一気にシヨウカクへ接近する。

シヨウカクも迎撃しようとするも、瞬く間に古鷹と激突。

地面を転がる様にして第一広場に突入。そのまま二人は弾薬庫に突入した。

「古鷹!! うわッ!!」

弾薬庫の弾薬が引火、火山の噴火の如く大爆発。

凄まじい爆音が響き渡り、衝撃波で近くにいた提督達は吹き飛ばされた。

その中でもシヨウカクは腕を大振りにして巨大な爆煙を掻き分ける。

そして爆煙の影にいるであろう古鷹目掛けて走り出した。

だが——、

「ッ!!!?」

爆煙の中から出てきたのは古鷹ではなく、妹の瑞鶴だった。

瑞鶴は弓の艤装を棄てて右拳を握る。

そしてシヨウカクが攻撃するよりも前に殴打を——、

「瑞鶴——」

瑞鶴の渾身の右拳が直撃。

そして——、

「翔鶴姉エエエエ!!!」

シヨウカク、いや翔鶴は妹に殴られてようやく意識を失った。

そして時は遡る——、

翔鶴型航空母艦一番艦、翔鶴。

彼女がこの荒くれ鎮守府に着任してきたのは深海棲艦が現れてから六年が立つ春の時だった。

桜の花びらがそよ風で舞い散り、地面を桃色に染めていく春の季節。太陽の光が暖かく、海は煌めく様に輝いた。深海棲艦との戦時中とはいえ、安らぎの時間が出来ない訳では無い。

鎮守府の広場では艦娘達が愉快に話しながら歩いており、すれ違った憲兵と挨拶を交わす。近くの海では艦娘同士が演習しては戦いあっている。

翔鶴は建造施設にてこの鎮守府に着任した。初めて会った艦娘は案内役の大淀。大淀は着任した翔鶴を快く迎え入れた。

「初めまして翔鶴さん、私は案内役の大淀です。これからよろしくお願ひしますね」

「はい！ よろしくお願ひします大淀さん」

翔鶴は笑顔で大淀と挨拶を交わす。工場には多くの整備士が艤装のメンテナンスや妖精と共に開発会議などをやっていた。和気藹々としている様はとても和やかに思える。

案内役の大淀の後を追う翔鶴。立派に建てられた寮の建物が並び、複合型連絡通路の下を潜る。寮と寮に挟まれた第二広場を通っている、大淀と翔鶴は奥の司令本部へ向かった。

「失礼します提督」

司令本部の中へ入り、案内されたのは執務室。大淀はドアをノック、中からどうぞと声が聞こえた。確認した大淀はドアを開けて執務室の中へ入る。

「やあ君が翔鶴、だね？」

執務室の奥にはある男が座って出迎えてくれた。三十代前半の男性で髭を生やしては髪はボサボサ。蒼色の目をしており、白い軍服を着こなしている。翔鶴は取り敢えず自己紹介をした。

「翔鶴型航空母艦一番艦、翔鶴です。一航戦、二航戦の先輩方に、少しでも近付けるように瑞鶴と一緒に頑張ります！」

「自己紹介ありがとう、翔鶴。私はこの鎮守府の責任者、艦隊の指揮を務めている■蒼■だ。これからよろしくね」

蒼色は元気に自己紹介をし、握手を求めてきた。翔鶴も快く蒼色の手を握り握手を交わす。見たところはとても優しそうな人だ、どんな人かと少し不安だったがその不安も無くなった。

「翔鶴姉……翔鶴姉だ！」

「あら瑞鶴……？　瑞鶴なのね！」

執務室のドアを恐る恐ると開けて中を確かめてきてのは瑞鶴だ。特徴的な白髪姿の翔鶴を見て飛び掛かる。翔鶴と出会ったのが嬉しかったのか手を取り合ってジャンプし続けた。

「お姉さんに出会えて良かったね瑞鶴。ではこの鎮守府の案内も君に任せようかな」

「任して提督さん！　じゃあ行こう翔鶴姉！」

「え、ええ！　すいません提督、失礼しま——」

瑞鶴にされるがまま翔鶴は執務室を出ていった。その様子を見ていた蒼色、秘書艦の吹雪と大淀は睦まじく眺める。

この日から翔鶴の生活が始まった。

翔鶴と出会えた瑞鶴はとても嬉しそうで笑顔で満ち溢れていた。今まで身寄りがいかなかったという理由もあるのだろう、姉が出会えた事がとても嬉しいようだ。

翔鶴も同様嬉しかった。自分がこんなにも歓迎され、これから仲間になる事に胸を躍らせていた。嬉しそうな瑞鶴を見て、この鎮守府はいい所なのだろうと思っていた。

本当に——、そう思っていた。

「翔鶴姉！……ここが私達の部屋だよ！」

鎮守府の案内をされ、最後に来た場所は瑞鶴の部屋。とは過去のモノとなりこれから自分と瑞鶴の部屋になる。部屋の中はある程度片付けられているが、それでも本やペンが机に散らっていた。布団はちゃんと畳んでいよう雑に仕舞っており、片隅に置いているだけ。

「これから一緒に頑張ろうね翔鶴姉！」

「……まあ言いたい事は色々あるけど、頑張りましょう瑞鶴」

この鎮守府は潮岬町鎮守府。和歌山県潮岬町にある地方の鎮守府だ。隣には紀伊大島があり、この海一帯の制圧海域を警備している。地方鎮守府でありながら艦娘の所属人数は全艦合わせて百名以上、第六艦隊まで編成する事の出来る大規模な前衛基地だ。

倉庫は第一倉庫から第六倉庫まで設置、艦娘のみ無料の食堂や風呂と合わせた入渠施設。艦娘の建造や装備の開発、また艦娘の艤装メンテナンスなどを手掛ける工廠がある。

門を開けば水平線が見える公共広場があり、寮と呼ばれた建物は計六つ。それぞれ駆逐艦寮、軽巡洋艦寮、重巡洋艦寮、戦艦寮、航空母艦寮、潜水艦又は海防艦などの数少ない種類の艦が集う寮が配備されている。全室冷房暖房完備、艦娘の好みに合わせて洋室か和室かで別

れている。

寮と寮の建物間に挟まれているのは第二広場、公共広場とは少し規模が小さい。鎮守府の四方は約二メートルの壁に囲まれており、隣には砂浜に行く為の扉が設置されている。

「さて翔鶴、君にはある事を二つしてもらおうよ」

「二つ、ですか?」

翔鶴が潮岬町鎮守府に着任して二日が経過。蒼色は翔鶴を執務室に呼び出し、傍にいる瑞鶴を一旦執務室の外へ引き離れた。

「そう。一つ目は翔鶴の練度向上訓練プログラム。翔鶴は貴重な航空母艦だからね、これから出撃する為にも演習と訓練を何週間か受けてもらおうよ。もう二つ目は社会学習プログラム。あまり私が心配するは無いんだけど、念の為に人間として生きていく為の社会のルールやマナー、その他諸々を学習してもらおう。大丈夫かな?」

「は、はい! よろしくお願いします!」

「元気があってよろしい! んじゃ、瑞鶴!」

執務室の外に瑞鶴を呼び出し、練度向上訓練プログラムの面倒役は妹の瑞鶴が担ってくれた。最初は適度な運動、体操や持久走など単純な事をする事になった。

次に実戦を想定した模擬演習。艦娘との一対一で戦い合う、至ってシンプルな訓練だ。翔鶴が持っていた装備は零式艦戦二十一型、九九式艦爆、九九式艦攻。そして瑞鶴に貸してもらった流星を使って演習は始まった。

初めて戦った事もあつて最初はボロ負けだった。相手をしてもらった赤城が得意や不得意な点を指摘してもらい、その日の訓練は終わった。

訓練が終わった後は社会学習プログラム。瑞鶴を始め、長門や陸奥に言葉遣いや立ち振る舞い、入渠施設の使い方や食堂でのルール、外

の世界は如何なるものかを教えてもらった。

最初はとても大変だった。覚えなければいけない事が山ほどあり、艦隊での演習や秘書艦の仕事など沢山の事を経験した。渡されたメモ帳はびっしり教えられた事が事細かに書かれており、自室の壁はメモ帳や写真などで徐々に埋まっていった。

大変だったが、それ以上に楽しかった。

全てに恵まれ、不安な事は何一つ無かった。初めての演習で負けてしまってもお互いにフォローし合い、訓練には瑞鶴を始め赤城や加賀などの空母が手伝ってくれた。秘書艦の仕事でも間違いがあっても蒼色は優しく対応してくれる。初めての出撃は鎮守府海域の制圧で蒼色の指揮と艦隊の皆に支えられ、難なく戦い終える事が出来た。

「皆お疲れ様！ 今日はずっくりと休んでね。あ、翔鶴、君だけはまだ残ってね」

「は、はい……分かりました」

何度か出撃を終えて、蒼色に報告し終わった時だった。翔鶴だけが残る事を言われ、他の皆は先に執務室を出ていく。何故自分だけ残されたのか翔鶴は不安になりつつ蒼色の指示に従った。

「ごめんね翔鶴。一人にしてもらって」

「いえ大丈夫ですよ提督。でも何故私だけですか？」

「実はね練度向上の為に君をしばらく私の秘書艦にしてください。君の意見を聞きたかったんだ」

蒼色は照れ臭そうに頭を掻いて翔鶴に聞いた。目的は練度向上の為の秘書艦任務、もつと強くなつて皆の役に立ちたかった翔鶴の答えは決まっていた。

「はい！ 私も皆さんの為に頑張りたいです！ こちらこそよろしく願います」

あの日から蒼色と秘書艦翔鶴の日々が始まった。

朝七時。

蒼色は寝起きがとても悪い為にまず秘書艦の翔鶴が起こしにいかなければならぬ。秘書艦になった艦娘は全員経験しており、皆許容している範囲だとか。

「提督………？ 朝です——」「バナナはおやつだバカヤロー!!!」

「ヒイイ!!」

朝七時半に食堂にて共に朝食を取り、朝八時に仕事開始。遠征任務の報告書や開発実験の報告書、大本営から課された任務の内容書に訓練内容の確認、やる事は様々だった。昼十二時までデスクワークを終わらせ、食堂にて昼食を共に取る。

「そういえば今日って何曜日だっけ?」

「今日は木曜日ですね」

「木曜日か………あつ! ドラマ録画するの忘れた!!」
「へ?」

昼十三時から他方の鎮守府の艦隊と演習。艦隊にいる艦娘のデータをメモし、資料と報告書に書き起こす。演習が終わり次第、潮岬町鎮守府へ帰還。

昼十五時から戦闘任務と遠征任務。出撃する艦隊と遠征に行く艦隊を編成し、それぞれ出撃していく。秘書艦の翔鶴は戦闘任務の艦隊旗艦、攻略中の海域へ戦闘を仕掛けた。無事戦闘を終えて鎮守府に帰還し、蒼色が出迎えてくれた。翔鶴は出撃報告書を作成し、出来次第に蒼色へ提出。

夜十九時まで蒼色と翔鶴で書類の最終チェック。全ての書類を書き終えた後に大本営へ提出し、今日の職務は終了する。夜十九時になつてから共に夕ご飯を取った。

「翔鶴、これで君の仕事は終わりだよ。お疲れ様」

「はい、ありがとうございます!」

「どうかな?　これが毎日続く事になるけど」

「いえ大丈夫ですよ。案外秘書艦も楽しいので……何より提督の素顔が見れて退屈しないな、と……あれ?」

翔鶴の言葉を聞いて蒼色の顔は青ざめていた。持っていた箸を落とし、何か気まずいような表情をしている。数秒遅れて気付いた翔鶴は何かまずい事を言ったのかと心配した。

「やばっ……いつもの感じで醜態を晒してしまった……」

「え?　どういう事ですか?」

「あく翔鶴は知らんよなあ」

翔鶴の背後の席に座っていた龍驤が声を掛ける。爪楊枝を歯に挟み、ニヤけた表情で蒼色を見ていた。龍驤は翔鶴の耳を近付き、コソコソ話をするように小さい声で喋る。

「実は提督な、演技してんねん」

「演技ですか?」

「こそ、翔鶴が綺麗過ぎてな?　提督がカッコいい所見せようと見栄張って——」「それ以上言うな龍驤オ!!」

蒼色が赤面しながら声を上げて龍驤を注意する。龍驤の言っていた事はどうも本気で本来の自分を隠していたらしい。確かに朝の寝起きの悪さやこの口調を見れば隠していたのは丸見えだ。翔鶴も薄々勘づいてたが、あまり気にはいなかった。

「あーもう最悪だ……バレちゃったなんて……」

「見栄張るからやで」

「うるせえ……！　ちくしょう……！」

「あ、あの提督！」

自分の姿がバレてしまった事に余程悔しがっているようだ。散々見栄張ってるのを見てきた龍驤はケラケラと笑いながらその場を去っていく。周りの艦娘達の反応も見て間違いないだろう。翔鶴は慌てて蒼色に声を掛けた。

「私そのままの提督の方が良いかなって思います。そちらの方が私としては親しみが持てるので……元気出してください」

「そ、そうかな……？　大丈夫かな……？」

「はい大丈夫ですよ」

翔鶴の答えに蒼色は徐々に表情が崩れる。蒼色はとても表情が豊かで、部下である艦娘にはまるで友達のように躊躇いなく話していた。提督と艦娘同士の仲はとても良く、話す姿を見て翔鶴も憧れた。

いつか自分も他愛の無い会話をして、平和な日常を過ごせたら。

それはとても楽しいものだろう。

やがてこんな一日が五ヶ月も続く。毎日蒼色を起こして仕事に励み、訓練を受けては出撃で練度を高め、御飯を食べて寝る。忙しかった仕事は慣れてしまい、訓練や出撃も難なくこなしていく。いつの間にか艦隊にも馴染む事ができ、徐々に蒼色と翔鶴の距離も縮まっていた。

「よし……そろそろ始めようかな」

「そうですね」

翔鶴が着任して半年が経ち、練度も九十以上になった時の事。蒼色は艦娘達を全員広場へ呼び出し、ある事を始める集会を行った。

「明日から横須賀鎮守府を初めとした各鎮守府との連携で難攻不落と

された硫黄島海域を奪還作戦を執行する。小笠原諸島海域奪還作戦の様にまた激しい戦いになるだろう。君たちは覚悟してほしい」

他方の鎮守府が幾度となく攻め破れた難攻不落の硫黄島海域を今から奪還する作戦を大本営は発令。目的は制圧海域の拡大と硫黄島の最前線基地の建設、厄介な陸上型深海棲艦の殲滅。

潮岬町鎮守府の艦隊は主に前線部隊、海域攻略の第一線を担う事になった。以前に小笠原諸島海域を奪還した成績による配分だろう。作戦内容を伝えられた艦娘達の士気は上がりになり、各自出撃の為に準備を行った。

「翔鶴、もしこの作戦が終われば君に話したい事がある」

「この作戦が、ですか？」

「ああ……だからお互いに頑張ろうな！」

「分かりました……私達の力を見せつけましょう！」

そして硫黄島海域奪還作戦は開始。

翔鶴率いる連合艦隊が硫黄島海域に出撃した。初めての大規模作戦で少し緊張していたが、それをさせる暇もなく深海棲艦と激突。深海海月姫や港湾棲姫、リコリス棲姫など危険な姫クラスなどが挙って現れ、戦闘は更に激しくなった。蒼色の指揮に従い、次々に深海棲艦を撃破していく。誰かが大破すれば二人でカバーし合い、無理があるならばすぐに帰還。鎮守府にて修復し、適度に休憩した後また出撃。蒼色は艦娘のストレスや疲労を考えて帰還する度に艦隊を再編成。鎮守府で待機していた艦娘達を出撃させ、その間に帰還した艦娘達の修復と休憩を優先した。

やがて硫黄島海域にて最後に足掻いていた深海海月姫が翔鶴達の攻撃により撃破。他の深海棲艦達も殲滅され、硫黄島海域を奪還する事が出来た。

二週間掛かった作戦は終了、硫黄島海域は制圧する事に成功した。大本営はすぐさまに硫黄島にて最前線基地を建設。翔鶴達はその護

衛を任せられ、建設されるまでの護衛任務を請け負った。後に硫黄島の最前線基地は戦闘狂の艦娘達が集まり、手当たり次第に取り戻さんとする深海棲艦を殲滅していく。

「皆お疲れ様！ 今日はずっと身体を休ませてくれ!!」

潮岬町鎮守府では祝賀会が開かれ、艦娘達や整備士達を含めた全員が騒ぎあった。食堂の中はお祭り騒ぎ状態、蒼色も酒を飲んで馬鹿笑いした。翔鶴も瑞鶴や赤城達と盛り上がり、更にヒートアップ。祝賀会は何時間も続き、酔いが回ってきた翔鶴は食堂を抜け出し、岸辺を散歩して風に当たっていた。

「色んな事があったなあ……」

風に当たりながら翔鶴は思い出に浸る。着任してから退屈しない毎日だった。

初めて演習で足を引っ張ってしまった事、

初めて出撃で MVP を取れた事、

初めて仕事で提督と徹夜した事、

初めて外に出た事、

本当に楽しかった日々だ。

これからどんな事が起こるのだろう。

もっと楽しい事が始まるはずだ、今この鎮守府にいる仲間なら、艦隊の指揮を執る提督なら、いつまでも笑っていられるような毎日が来る。

例えどんな障害だろうと皆がいれば大丈夫。そんな気がする。

確かな確証は無いけれど、きっと大丈夫なはず。

「翔鶴!」

「あれ提督……皆さんの事はいいんですか?」

岸边に一人座る翔鶴を呼ぶ声がした。後ろを振り向けば蒼色が走って来ていた。翔鶴は立ち上がって蒼色の方へ身体を向ける。

「いいのいいの！ トイレ行くつって騙して来たから」

「そ、そうですか」

蒼色の顔は若干赤くなっている。酒の飲み過ぎだろうか、酔っているように見えた。蒼色曰く、酔いが回ってきた為に風に当たりたいらしい。そこにちょうど翔鶴がいて、声を掛けたとか。

「そういえば君に話したい事があるって言った事覚えてるかな？」

「あ、そういえばそうでしたね……話って何ですか？」

「あ、そそそそそうだな……えーつと……そうだな……あ……」

大規模作戦のお陰か忘れそうになっていた翔鶴。蒼色に言われて思い出し、何も探る事無く話し掛けた。

すると蒼色は突然赤みがかった顔を更に紅潮させ、恥ずかしそうに俯き出す。

「どうしました提督？」

「早く言え言え！ キシキシシ」

「漢見せろー！」

「だらしない男ね」

「翔鶴姉……」

翔鶴はこれから言われる事など予想もしていない。装備の事か艦隊編成について話し合うのかと思っていた。蒼色の背後には龍驤や那智、瑞鶴や■■医師などが影からヤジを飛ばしている。ヤジが聞こえた蒼色は悔しそうに愚痴を零した。

「ううう……あーもう決めた!! 翔鶴!!!」

「はーん？」

蒼色に突然肩を掴まれ、驚いた声を出す翔鶴。蒼色の顔が徐々に近づき、翔鶴は目が見られずにそっぽ向く。蒼色は一旦深呼吸、自身を落ち着かせ空を眺めた。

そして――、

「貴方が着任して初めて会った時から貴方に一目惚れでした……こんな私でよければですが……ケツコンしてくれませんか……！」

「……………ふえっ？」

蒼色の言葉に理解出来ず、翔鶴は思わず腑抜けた声を出した。

勿論ケツコンという言葉は知っている。ある種の指輪を象った装備で、一人の提督と一人の艦娘が身に付ける事が出来る代物。身に付ければ艦娘には更なる強化が追加され、新たな力を手に入れる事が出来るパワーアップアイテムだ。条件としては練度が九十九の艦娘、勲章を授かった軍人にしか効果が発揮されない。また結婚指輪を象ったものとして艦娘間では噂が耐えない且つ狙っている者もいる。

「わ、私ですか……………？」

「はい……………そうです……………！」

翔鶴の練度は九十九、蒼色も幾度か勲章を貰っている為に条件には当てはまっている。だが他にも練度が九十九の艦娘はいたはずだ。まさか自分が選ばれるとは微塵にも思わなかっただろう。

「……………こちらこそよろしくお願ひします、提督」

「ほ、本当に!?!」

「はーん！」

迷う事なく翔鶴は快く蒼色のプロポーズを受け入れた。翔鶴が蒼

色と共に経験してきた中で芽生えていたのは蒼色の好意。誰にでも平等に優しく接し、いつも楽しく笑っている蒼色に翔鶴もまた惚れていた。彼の傍にい続けたい、彼と共にいたい。そういった想いが翔鶴の心の中で芽生えていた。

「ありがとう……翔鶴。んじや、いいかな……？」

「はい……お願いします……」

蒼色は照れながら指輪を翔鶴の薬指へ嵌めていき、翔鶴も蒼色の薬指へ指輪を嵌めていく。ここにケツコンカツコカリの儀式は終了、今二人は完璧に繋がったのだ。すると陰で見えていた龍驤達が祝福の声を上げ、二人を盛大に祝ってきた。

「ひゅ〜！ こりやめでたい日になったで！」

「おめでどう翔鶴姉!!」

「おめでどう二人共」

「おめでどう蒼■さん、翔鶴」

「はい！ ありがとうございます！」

「えへへ〜いいだろ〜！」

祝いの声に翔鶴は元気に答えた。蒼色は薬指の指輪を自慢し、鼻の下を擦っている。瑞鶴は翔鶴に抱きかかり、只管に何か喋っていた。龍驤や那智らは蒼色をからかい、反応を面白がっている。

その光景を見て翔鶴は幸せに満ち溢れたような笑顔で笑っていた。

本当に幸せだった。

本当に――、

——幸せだった。

「こちら第四艦隊、これより鎮守府へ帰還します。今のところ北ソロモン海域に問題は無し、敵影も発見されません」

『了解。帰還次第に報告せよ、また緊急時の場合も即報告するように』
「了解しました……ん？ アレは……深海棲艦!? しかも姫級……え……」

「——アレは人？」

136. 「秘めた思い」 2 / 6

翔鶴と蒼色がケツコンして何週間か経った。ケツコンした翌日は艦娘達に祝われ妬まれたの連続でいつも話の話題が絶えなかった。前々から狙っていた金剛や吹雪には厳しい視線を送られ、睦月や秋雲などの駆逐艦には祝いの言葉を沢山貰った。今でもその話題は未だに止まず、時々龍驤や千歳が初夜はどうだったなどを聞いてきてもかかってくる。

勿論性能面でもその効果は発揮しており、改二でありながら練度は百二になった。戦闘面では更に対空能力や耐久力が向上、また念の為に蒼色から近接戦闘術を教えられた。手首の装甲や足技の習得、身につく事は更に広がった。

「うーん……」

「どうしました？ 提督」

いつものようにデスクワークをしていた蒼色と翔鶴。書類を書き終えていた蒼色はパソコンの画面を只管に見つめていた。気になった翔鶴は一旦ペンを置き、蒼色の背後に移って画面を覗く。

「深海棲艦に俺らと同じく提督らしき存在、ねえ……」

「まさか……やはりそうなんですネ……」

「まあ薄々そうなんじゃないかとは思ってたよ。あの硫黄島の時、明らか誰かに指示されて意図的に戦っていた奴が多かったし」

それは深海棲艦に提督がいるという予想もつかない出来事だった。近年深海棲艦が活発化していく中で考えられていたのが自分達と同じく深海棲艦を指揮している人間がいる可能性。俄に信じ難い事で発見もされていない事から多くの軍人が気にしていなかった。

しかし蒼色は前の硫黄島海域奪還作戦にて密かに感じ取っていた。明らかに深海棲艦の動きが違っていた事を。まるでこちらの動きを

読んでいる且つ狙っているような戦い方だった。確かに姫クラスの深海棲艦となれば多少の指揮を執る事は出来るだろう。

だがわざわざ危険海域の奥まで侵入させ、誘い出した所に全方位から奇襲を仕掛けるような作戦を考えるなど今までの深海棲艦には無かった動きだ。

もしかしたらこの作戦を考えた何かがいるのではないか、蒼色は考えた。

「午後から緊急会議を開くそうさ。翔鶴、ついてきてくれ」
「了解です」

翌日、蒼色と翔鶴は東京の大本営に直行。突然の緊急会議に来る軍人は少なく、南方や北方の鎮守府に所属する軍人達はビデオ通話にて参加する事になった。

会議内容は勿論、深海棲艦の提督らしき存在の話。北ソロモン諸島にて確認した銚子鎮守府の艦娘達の証言と提示された画像を元に話し合った。画像には遠くに写る緑の島に白い影が二つ。一人は艦装を纏った陸上型の深海棲艦、そしてもう一人が小さい人間の姿。目撃した艦娘達全員が口を揃えて言い出した。

「アレは確実に人間でした」
「……」

綿密に話し合った結果、一度南方のショートランド泊地とトラック泊地から別々に偵察部隊を派遣。それぞれ違う日に偵察し、その提督らしき存在を確認する事になった。あくまでも提督らしき存在の可能性だ、人質や監禁されている一般人の可能性もあるだろう。

だがもし提督らしき存在が事実であればもう一度大規模な作戦になる事になると示唆され、最大限の準備をするように呼び掛けられた。

「分かり合えたりしねえのかなあー」

「……その深海棲艦の提督らしき存在とですか？」

「ああ。敵の親玉とはいえ元は人間だ、理性や知識は持つてるはずだろ？」

帰還した二人は執務室で休憩していた。蒼色が考えていた事はいずれも深海棲艦の提督らしき存在。その存在が人間であれば様々な可能性が芽生えるはずだ。上手く行けば平和な道を歩めるかもしれない。

それ以前に――、

「正直な話、翔鶴達も深海棲艦もどこから来たのか分からねえんだよな。突然現れ侵略してきた深海棲艦の出処も、深海棲艦から守る為に現れた翔鶴達も、全ての源が分からない」

「私も……それは分かりません。私は妖精さん達の建造により着任したので……発生源も……」

「まあそりやそうだよなあー、あまり深く考え込まない方がいいかもな」

しかし蒼色は考える。今まで殆どの人類は先に深海棲艦が侵略してきたという歴史の元に今を生きている。

ならば逆の発想はどうだろうか。

逆に何故深海棲艦は我々人類を敵視しているのか。

もしかして人類に恨みを持っているのでは。

そう考えると謎は深まるばかりだ。

――北マリアナ諸島海域、マウグ島

南方鎮守府から編成された偵察部隊が虱潰しに無人島を搜索していた。遠征任務の艦隊が発見したのはこの島付近だとされている。航空母艦が水上偵察機を飛ばし、辺りを偵察していた。北マリアナ諸

島海域は危険な海域で一般人はおろか、艦隊でもその海域を渡る際は護衛艦隊が必要になるほどの域に達する。傍を通りかかった遠征任務の艦隊が無事に帰還出来たのは偶然といえるだろう。

そして――、

「何!?! 偵察部隊が全滅だって!!?!」

北マリアナ諸島海域へ向かった偵察部隊が何者かの攻撃によって通信途絶。すぐに救援部隊が駆けつけたがそこに艦娘の姿は無く、艦装の破片や一部が海に浮かんでいるだけだった。

「やはり深海棲艦の提督は存在していたとみて間違いないみたいだな……!」

「これからまた戦争は激しくなりそうですね……」

その件以降、深海棲艦の動きは更に活発化。次々に人類と艦娘が制圧した海域を奪取していった。勿論大本営を初め、世界各国でも深海棲艦に対抗。日夜深海棲艦と戦闘を繰り返すも敗戦濃厚で、深海棲艦の提督による狡猾な罠や作戦に躍らされ、圧倒的な戦闘能力を持つ深海棲艦に尽く蹂躪されていった。

太平洋では深海棲艦による猛攻撃で硫黄島海域は取り返され、挙句の果てには小笠原諸島海域をいとも簡単に制圧。いずれも設置された鎮守府や最前線基地は破壊され、軍人や艦娘達は撤退を余儀なくされた。そして繰り返される悪夢、深海棲艦による空襲が世界各地で発生。眠れる暇もなく艦娘達は最大限の警戒で海域を守った。

「いくらなんでも早すぎる……あちらの司令官は相当優秀らしいな……!」

「明らかに深海棲艦が強くなってきてます……私達でも相手出来るかどうか……」

深海棲艦の提督が確認されて三ヶ月が経過。戦況は不利に陥り、艦娘達も躊躇いの無い深海棲艦の空襲や強襲に疲弊する一方だった。

「取り敢えず今はこの地域と海域を守るのが優先だ。幸い、資材は心配する必要が無い……っ?」

パソコンでデータをまとめていたその時、一件のメールが届く。メールの送り主は大本営の■■■■元帥。

メールの内容には――、

「マウグ島攻略作戦……南方のショートランド泊地の執念なる偵察の報告により、深海棲艦の提督がこの島にいと確認された。我々は深海棲艦の提督を即座に叩き、深海棲艦との最終決戦を挑む。心しておくように……」

何度も斥候を行った偵察部隊によるとマウグ島にはある巨大な装置が確認にされたらしい。そしてそこに深海棲艦の提督らしき人物も確認され、大本営は即座に大規模作戦を発令。マウグ島にいる深海棲艦とその提督を一気に叩き潰す事になった。

「■■■少尉、君にも作戦に参加してもらおう。大丈夫さ、分からない事があれば私に言っつて構わない。うちの艦隊を指揮してもらおうよ」

■■■少尉は■■■元帥が送ってきた新米司令官だ。潮岬町鎮守府の戦力拡大に基づき、司令官を一人増やしてくれた。常に寡黙で無愛想だが、淡々に仕事や指揮をこなす冷静沈着な人間である。艦娘達からは不思議がられているが気遣いや気配りは出来ているのか、第一印象が定まらないようだ。

「よし……ウオーミングアップしないとね」

そして全鎮守府の艦隊が出撃する大規模作戦が開始。深海棲艦の提督がいるとされているマウグ島へ向かう。

深海棲艦の中心地、マウグ島には数多の深海棲艦が待ち構えていた。南方棲戦姫や戦艦棲鬼、深海鶴棲姫や深海日棲姫、駆逐水鬼や空母棲姫に空母水鬼、港湾棲姫や集積地棲姫と五十人の敵艦隊。そして空母ヲ級や戦艦ル級などの普段の深海棲艦が三千以上。

いずれも深海棲艦が困うように守っていたのはマウグ島中心にある巨大な機械だった。何か空へ打ち出す砲台か、砲身が禍々しく紅い線が光り出ている。

「あれが……深海棲艦の、提督……！」

マウグ島の陸地には深海棲艦の提督が艦娘の艦隊を眺めていた。成人男性の身長に白髪長髪で仮面を被り、黒い軍服を着ている。その提督の真後ろには全ての発端となる深海棲艦の源、中枢棲姫がいた。禍々しい紅黒いオーラを身に纏い、まるで深海棲艦の提督を保護するかのように佇んでいる。

そして隣にはある艦娘がいた。

「……全艦戦闘開始、一斉砲撃デ蹴散ラセ」

「戦闘開始!! 深海棲艦を殲滅せよ!!」

そして突拍子も無く戦闘が開始。陸上型深海棲艦による一斉砲撃と急襲爆撃、連合艦隊による一斉砲撃と空母機動部隊による急降下爆撃。海は砲撃の嵐で地獄と化し、空は爆煙と弾幕に覆われた。水柱が森のように立ち上り、砲撃の衝撃が身体中を伝う。

「赤城、加賀が中破! 第一水雷戦隊五名が大破状態に! 提督!」

「分かってる! 空母機動部隊と第一水雷戦隊は一時帰還! 空母機

動部隊は再編成、龍驤と隼鷹で入れ替えだ!」

「えっ嘘っ……提督! 第一水雷戦隊から報告、帰還ルートに深海棲

艦の艦隊を確認しました!!」

「何っ!？」

深海棲艦の猛攻撃は苛烈を極め、序盤は島に近づく事すら出来なかった。更には帰還する艦隊を逃がさぬ様に伏せていた深海棲艦が出現し、強制的に戦闘を強いられる羽目になる。

守っているように見える巨大な機械へ攻撃をしてもビクともせず、寧ろ反撃をされてしまう始末。陸上型深海棲艦による絶え間ない白い悪魔の発艦、一方的に砲撃出来てしまう為に一刻も早く仕留めたいが海上の深海棲艦達がそれを阻止してくる。

やがてこの作戦は三ヶ月間も続き、徐々に深海棲艦の数が少なくなり弱体化。マウグ島の中心にあつた巨大な機械は自ら海へ沈み、脅威となる姫や鬼クラスの深海棲艦は次々に破れ、撤退する者が多くなつた。

突然の弱体化に人類側は好機と見て、追い討ちを畳み掛ける。マウグ島近海が徐々に制圧されていく中、要の中枢棲姫は連合艦隊の一斉砲撃により撃沈。陸上型深海棲艦もいつの間にか撤退しており、残るは深海棲艦の提督だけだった。

『六時の方向に深海棲艦の提督と裏切り者の艦娘を発見しました！』

近くのアグリハン島に逃げ込んだ模様です!』

「よし翔鶴! そのまま追い込むんだ!」

南の方角に裏切り者と見なされた艦娘と抱えられた深海棲艦の提督が発見された。残っている艦隊は即座にその後を追いかけて、二人が逃げ込んだアグリハン島を全面包囲。為す術もない敵の二人は何をするのだろうか。蒼色は慎重に相手の出方を伺った。

すると――、

『あれは……摩耶!!? 摩耶です! 深海棲艦化した摩耶が……嘘っ!?!』

「何があつた翔鶴!!」

『緊急事態発生です！ 摩耶が突然艦らしき幻を召喚し、無作為に！

攻撃してます!!』

「映像を！」

画面に表示されたのは空から見た小さな無人島であるアグリハン島。その島の近くにある艦を模した紅く不透明な軍艦が手当たり次第に艦娘達を攻撃していた。中心にはその裏切り者の摩耶と抱きかかえられた深海棲艦の提督。艦娘達が無慈悲に攻撃していく中で、裏切り者の摩耶からある言葉が聞こえた。

『ふざ——んな……よ!!』

『これが、お前らの言う——正義かよ!! こんな残虐で——理不尽な結末が正しい事だつて言えんのかよ!!』

『なあ教えてくれよ!! お前らの正義が全て正しいって言うんなら!!
■や深海棲艦は悪だつて言うのかよ!! アイツらやあたし達が一番の被害者なのに!! 何でお前ら人間が怯えた顔して被害者ぶつてんだよ!!』

『いい加減にしてくれよ!! あたし達はお前らの道具なんかじゃない!!! 元は人間だったのに……!! それをお前らがアアア!!!』

『戦う事で利益を見出そうとするお前らなんか……!! 負けてたまるかアアア!!!』

裏切り者の摩耶の言葉など耳に入らず、紅い不透明な軍艦の幻は艦娘達の砲撃と爆撃によって爆散。裏切り者の摩耶と深海棲艦の提督は爆風で吹き飛ばされ、アグリハン島の浜辺に不時着する。裏切り者の摩耶は只管に深海棲艦の提督を守るように抱き締め、辺りを囲う艦

娘達の声を遮断し続けた。

『どうしますか……提督……』

二人に砲口と矢を向け、威嚇する艦娘達。この二人の処遇をどうするか各地の鎮守府にいる軍人達は口を揃えて言い出した。「その男は殺せ」「艦娘も殺せ」などと殲滅せよという声が多く、また艦娘達もそれに同意していた。かくいう蒼色も最初はその意見だった、がしかし裏切り者の摩耶の言葉を聞いてその意見が揺れていた。

深海棲艦が人類を狙う理由、それはもしかしてこの二人が握っているのでは。深海棲艦が一番の被害者、残虐で救いも無い事。必死に何かを訴えていた裏切り者の摩耶は深海棲艦と艦娘が生まれた訳を知って可能性がある。多くの軍人が殺害を命じる中、蒼色は異議を唱えた。

「待ってください」

『っ!?!』

「その裏切り者の摩耶と深海棲艦の提督は、今後深海棲艦を絶滅させるにあたって重要な情報を持っています……殺害ではなく、捕虜として捕らえた方がいいかと」

重要な情報を持っているという仮説を建前に捕虜として捕まえる提案をした蒼色。それを聞いた多くの軍人や艦娘が反発し、罵詈雑言を並べていく。翔鶴達も疑問に思ってしまうほど、蒼色の提案は受け付けられない程だった。

『何ごちやごちや言っただか知らんが、決定権は私だよ。他の馬鹿共は黙ってくれないかい、耳が腐っちまう』

このマウグ島攻略作戦の総司令官は南方ショートランド泊地鎮守府の■大佐、通称鬼の大佐と呼ばれた誰もが恐れる老婆の軍人。か

なりの捻くれ者で相手を見下しては本質を見抜いて罵倒してくる為、多くの軍人が恐れている。その軍人が蒼色に話しかけてきた。

『蒼■中尉。アンタ今言ってる事が理解出来てるかい？』

「はい勿論……覚悟の上でございます……！」

『もし何かあったら責任取れるんだらうね？』

「責任は取って当然です……!!」

『……そうかい。その言葉、忘れるなよ』

鬼の大佐により、裏切り者の摩耶と深海棲艦の提督は捕虜として捕らえる事に決定。マウグ島攻略作戦は終了し、潮岬町鎮守府の艦隊は帰還する事になった。一旦南方の鎮守府に引き取らせ、二人を拘束。厳戒態勢の中、東京の大本営まで輸送された。

「……やあ深海棲艦の提督さん」

作戦が終了して一週間が経過。

蒼色は翔鶴を引き連れ、捕らえた深海棲艦の提督と会う為に大本営まで赴いていた。地下二十五階の特別収容所までエレベーターで降りていき、何重にも重なった強化ガラスで遮られた特別面談室にて深海棲艦の提督と蒼色は出会う。背後には艤装を展開した翔鶴、深海棲艦の提督の背後には小銃付き監視カメラに見守られる中で蒼色は話した。

「私は■蒼■中尉。どこかの鎮守府で艦隊の指揮を執っている人間だ」

「……」

「実は君と話がしたくてね、出来れば何か言ってもらいたいんだけど……」

深海棲艦の提督は顔を俯かせ、口を開かずに黙りこくっている。予

想通りの反応に蒼色は苦笑いしてしまった。

「あはははは……いやまあ、そうだよね。わざわざ敵に話してくる奴なんて馬鹿しかいないもんね……よし」

気分を変えて蒼色が次に話したのはただの世間話。今の日本はどうなっているか、美味しい食べ物の話や身内での笑い話。どうでもいい話ばかりを深海棲艦の提督に聞かせ続けた。蒼色はその日に留まらず、一週間に一回は深海棲艦の提督に会い続けて世間話を話し続けた。

何回も、何回でも蒼色はめげずに話そうと諦めない。どうやったら口を開いてくれるか、拷問などの方法で強制的に喋ってほしくはない。ちゃんと自分の意思で喋って欲しかった蒼色は白という名前をつけてまで来る日も来る日も話し続けた。

そして――、

「それでね、今ヲ級が――」「空母ヲ級……が？」
「っ！」

空母ヲ級の言葉を耳にした途端、突然深海棲艦の提督もとい白色が口を開いたのだ。思わず聞き流そうになった蒼色は嬉しそうに口角を上げ、その話を続けた。傍で見ていた翔鶴も驚きの声を漏らしつつ艦装を展開して警戒する。白色が口を開いた事に嬉しそうな蒼色を見て、翔鶴もまた微笑んだ。

「……という話だよ、どうかな？」

「……貴様の話はどれもつまらないナ」

「それは申し訳ないです、でも私は嬉しい。いま君と話せた事が凄く嬉しいんだ」

「いつまでも黙っていたら貴様は必ずここに来るだろう」

「ご名答、君と話したいからね」

「馬鹿な男ダ……お前らに言う情報など言うはずが無いだろう。分

「かつたらさつきと失せろ」

その日からというものの、蒼色はしつこく白色に話し続けた。例え情報が聞き出せなくても対話が必要な蒼色にとっては充分な一歩だ。白色も何度も話し掛ける蒼色に呆れてきたのか溜息を吐いたり、そっぽ向いて無視していた。が、口数も相槌から少しずつ増え続け、徐々に白色は蒼色と話すようになってきた。

「今回白さんは楽しそうでしたね」

「ああそうだな！ 後もう少して色々話してくれるかもしれない。

あ！ ごめん翔鶴、ちよつとだけ待っててくれないかな？」

「はい、大丈夫ですよ」

蒼色は翔鶴を置いてある場所へ向かう。そこは大本營の資料室、危険海域の資料や艦娘の戦果記録、艦娘の出現記録など重要な情報が敷き詰められた部屋だ。蒼色は深海棲艦の出現記録と艦娘の出現記録のファイルを取り出し、一人である事を調べていた。

「深海棲艦が出た理由……人間に恨みを持つなら何故……」

深海棲艦が出現したのは約五年前。突如海の中から現れ、人類を脅かした敵だ。太平洋や大西洋などの海を八割支配し、シーレーンは壊滅状態。戦車の砲撃や誘導ミサイル、地中貫通爆弾などの攻撃は一切効果無し。戦闘ヘリや戦闘機などは深海棲艦の航空機によって次々に破壊された。

そして為す術もない人類の目の前に艦娘という希望の存在が現れる。唯一深海棲艦に対抗出来る存在で海を支配した深海棲艦を次々に倒していった。小型化された艦載機や砲塔、魚雷によって人類は攻勢に切り替る事になる。

「艦娘もどこから現れたんだ？ 日本の記録じゃ東京湾になってるが

……どうやって……ん？」

深まる謎を考えていた蒼色は背後の物音に気付く。振り向くと本棚から、ある黒いファイルが床に落ちていた。本棚に隠されていたのか妙に埃を被っている。蒼色はどんなファイルか、タイトルを目にした。

「何だこれ……『ABC計画』……？」

137. 「秘めた思い」 3 / 6

その後蒼色は資料室を去り、翔鶴と合流。蒼色は翔鶴と何も話さずに新幹線に乗り、潮岬町鎮守府へ帰った。

「ごめん翔鶴、またちよつと寄り道していい？ 今度は二人で」
「はい……大丈夫ですよ？」

二人は寄り道の為に送迎車を降り、海が眺められる神社へ向かった。潮岬町鎮守府までは歩きで帰れる距離なので運転手には帰っていいように伝えている。雑木林の獣道を潜り抜け、着いた先は海に向かっていている神社。光り輝く太陽が水平線へ沈んでいき、海に光の道を作っていた。

「俺と翔鶴が出会って一年ぐらい過ぎたな」

「そうですね……」

「色んな事があつたよなあ……」

「何かあつたのですか？」

「いやいや。ただ少し思い出に浸りたかつただけだ」

翔鶴が潮岬町鎮守府に着任してから約一年半が過ぎようとしていた。数え切れない程の思い出が映像のように頭の中で流れる。辛い事も、楽しい事も、悲しい事も、嬉しい事も沢山あった。

いまこうやって二人で歩いて海を眺めているこの瞬間も、いずれは思い出の一つになるのだろう。記憶というモノは印象に残れば残る程、鮮明に映像として頭に流れる。

そしてその記憶を元に人は生を歩んでいくのだ。これがもし記憶の一部となり、誰かの為に生きていく糧となるならば。

だがその記憶を失ってしまえば、取り戻すのは至難に等しい。自分是谁なのか、自分は何なのか、別のモノに書き換えられてしまう事だつてある。そうすればその時、記憶を失う前の自分は喪失したも同

然だろう。自分本来の意思とは関係なく記憶を失い、改竄されてしまったのならば尚更だ。

「翔鶴……もしもの話なんだが、君達艦娘が元は人間だったとしたら……翔鶴はどう思う？」

蒼色は神妙そうな表情で翔鶴に問い掛けた。突然の重い問い掛けに翔鶴は思わず蒼色の方へ顔を振り向く。蒼色はただ只管に潮風に煽られ海を眺め続けていた。

「そうですね……上手く答える事は出来ないので……私達が兵器である事に変わりは無いと思います」

翔鶴は自身が考えた限りでの答えを精一杯に話した。

自分が何故この姿で生まれたのか、何故深海棲艦と戦っているのか。普通は疑いもしない当たり前の事を時々無性に考えた事がある。艦娘にとってこの事を考える事はタブーなのか、考える度に胸が苦しくなる時があった。何かに心臓を直に握られているような、悍ましく蒼白とさせる様な苦しさが残るだけ。あまり考えたくは無かったが、どうしても頭の片隅に引っかかってしまう。

例えば意味の無い事だとしても不思議と信疑という感情は抑制出来ず、解明という欲求の元で考えてしまう。恐らくこれが人間の本质である「疑う」という行動なのだろう。故にそれが人間性に関わるモノなのかもしれない。

「あまり外のお話は聞かないので少し正確な事は言えないんですが、周りの方々は私達を人としてではなく兵器というモノとして見ているそうですね」

「ああ……嫌だよな、そういうのは」

「確かに私達は兵器です。深海棲艦に対抗する唯一の兵器は私達しかないのです。でもそれ以上に私は人間だと思っています」

翔鶴からすれば潮崎町鎮守府で着任した時から自身の事など疑いもしなかった。

ただ普通に食べて、

普通に鍛えて、

普通に戦い、

普通に寝て、

普通に暮らしていくだけ。

だが他の鎮守府ではこんな生活が羨ましく思える程、人として扱われていないらしい。現に演習で相手をしていた艦隊の艦娘達の殆どは生気がまるで無かった。ただ司令を忠実にこなすだけのロボットのようで、同じ艦娘とは桁違いに変わっていた。

そこから翔鶴は知る事になった。如何にこの世界が酷悪で歪んでいるのか、考えただけでも背筋が凍るほどだった。もし自分が他の鎮守府に建造されて着任していたら、あのロボット達のように感情も無いまま戦っていたのかと思うと、なんて自分は恵まれてるんだと心の中で安堵するばかりだった。

人間でいる事と兵器でいる事による意識の違いで極端にも差が出来る始め、不幸と思えるこの歪んだ世界はきつと必然的な運命なのだろう。いつから歪んだなど分からない、狂ってしまったなど分かるはずもない。だからこそ深く考えずに今を生きていく方がいいのかもしれないと翔鶴は考えた。

「何故なら提督が私をそう育て、愛してくれたから。私達を人間として見てくれた貴方がいたからこそ今の私達は人間として生きる事が出来ています。だから元々人間だったとしても、変わらずに私達は人間であり兵器です。難しく考える必要はありませんよ」

艦娘という存在はどういうモノなのか、この世界の概念から考えれば人間や兵器など人それぞれだ。翔鶴はその人間として思う側の人間と共に歩んだ。着任した時から形成された無自覚の意識は固定さ

れ、自分を人間だと思い込ませてくれた事に感謝している。勿論自分が兵器である事も確信済みだ。だがそれ以上に人間である事に変わりはない。

「でも色々人間と違う所はありますけどね。そういった所では少し羨ましいですし、人間になれたらなって思っています」

「……そうか。ありがとうございます……翔鶴」

「いえ感謝をするべきなのは私達ですよ提督。私達を人間にしていた
だきありがとうございます」

翔鶴は頭を下げ、蒼色に感謝の言葉を述べる。今まで自分は恵まれていた事、その恵まれた分の恩返しのためにも蒼色に貢献しなければならぬ。これから人間として生き抜き、戦っていく上でも。

「これからも提督の為、仲間のために強くなって守っていきます。共に頑張りましょう……提督」

「翔鶴……やっぱお前は天使だああー!!!」

「ふえ!? て、提督! いきなり、あつ!」

「また貴様カ」

「うん来たよ、白くん」

一週間が経過して、蒼色はまた白色と話していた。白色の様子はどこか不自然で包帯を巻いていたり、何かしら怪我をしているようだった。おおかた上層部による非道な拷問などの方法で強制的に情報を喋らせようとしたのだろう。鮮やかに光る紅い目の下にはクマが出来ている。そんな事をして白色が情報を吐き出す訳が無い、まずはお互いに理解が必要であり信頼を掴まなければならぬのだ。

「摩耶は……どうしてル」

「ん？ ああ君を守っていた摩耶だね。彼女は今、君と同じく特別收容施設にて二十四時間厳戒態勢の元で監視されてるよ」

白色を守る為に自ら暴走し、紅い幻影の軍艦を召喚した摩耶。彼女は特別製の拘束器具を何重にも付けさせ、三百六十度の監視カメラで二十四時間厳戒態勢の中で監視されている。一度確認した時は白い蛍光灯に囲まれた四方の壁の中央にてずっと顔を俯かせていた。

「大丈夫さ。君と同じく殺したりはしない」

「……嘘をつくナ。お前らがあの摩耶を使って実験をしてるのは分かっているんだ」

「実験……？ どういう事なんだ？」

「つ……？ ああなるほど、そうい——ツガアアアア!!!」

白色の両腕に取り付けられた拘束器具から突然電流を流され、あまりの苦痛に悶絶してしまった。床に倒れ込む白色を見て蒼色は立ち上がり、何重もの窓越しから心配の声を掛ける。

しかし白色は一向に立ち上がらない。白色が倒れる部屋に武装した憲兵が雑に白色を運び出し、そのまま去っていった。蒼色も憲兵に誘導され、白色との面談は早くも終わる事となる。

「……すいませんが何故あんな事をしたのですか？」

「あの拘束器具には彼本人が何かしら動けば自動で電流が流され、強制的に気絶させるようになっています。恐らくあの時はむりやり拘束器具を外そうとして作動したのでしょうか……大丈夫です、死ぬ様には設計されていません」

「そうですか……」

憲兵の言う事は確かに理にかなっている。摩耶の事を聞き出した白色は酷い事をされているのを聞いて、いてもたってもいられなくなったのだらう。むりやり拘束器具を外そうとして摩耶の元へ向か

おうとしたなら作動する理由にはなる。

だが何故か腑に落ちない。白色から初めて実験という言葉聞いた途端に電流が流れ始めた。上層部が情報を吐かせる為だけに非道的な拷問しているならあの方法はまだ分かる。

しかしあまりにも偶然的すぎる。自分も知らない実験という言葉を使ったその後には電流が流れ始めた。あの時はそんなむりやり拘束器具を外そうとしていた素振りには確認出来なかった。寧ろ自分が実験について知らなかった事に驚いていたようでその後には――、

「翔鶴……ちよつとトイレ行ってくるね」

「はい……分かりました」

エレベーターで地上へ上がり、蒼色はトイレに行った。小便を済ませ、速やかに手を洗う音が聞こえる。しかし何十分か経っても蒼色が一向に出てこない。名前を呼んでも男子トイレの中から応答の声は聞こえなかった。

「提督………？ 大丈夫ですか………？」

「っ！ あ、うん大丈夫。今行くぞ」

とうとう翔鶴は少しだけ男子トイレを覗き、恐る恐る蒼色を呼び出す。翔鶴の声に気付いたのか突然我に返り、姿を見せてくれた。洗面所で何をしていたのだろうか、少しばかりそこが気掛かりだ。蒼色は平然とした表情で男子トイレを出ていく。そのまま翔鶴は蒼色の後を追った。

また一週間が過ぎ、白色との面会日となる今日この頃。しかしながら今回は白色とは会わずに、黒■元帥と話をする約束をしていたらしい。まるで辞書のように分厚いファイルを鞆の中に入れて翔鶴と蒼色は大本営へ向かった。

「ごめん翔鶴、ちよつとだけ待っててね」

「……………？ 分かりました」

どうやら蒼色は黒■元帥と二人で話したいらしく、翔鶴は秘書艦待機室にて待つ事になった。秘書艦待機室にはベッドやソファだけしかなく、暇を潰せるような娯楽は殆ど無い。唯一の手段としては窓から見る東京のビル群のみ。窓縁に身体を寄せ、頭を窓に寄せながら翔鶴は景色を眺め続けた。

「失礼する」

「っ?」

蒼色が黒■元帥と話し合いが始まって十三分が経った時、秘書艦待機室にある男が入ってきた。数々の勲章を左胸にぶら下げ、威厳のある老人男性だ。とても偉い人だと分かった翔鶴はすぐさま立ち上がって敬礼する。

「敬礼はそこまで。私は■少将だ、君のところが提督と少し話がしたくてね。彼は今どこにいるのか分かるか?」

「提督でしたら今、黒■元帥閣下とお話をされています…いつ終わるのかは分かりません」

「そうか、分かった。では終わったら第二会議室にて私が呼んでいたと彼に伝えといてくれたまえ」

「かしこまりました」

「おっ！ 君が翔鶴かね！」

翔鶴と■少将が話し合っている中、割り込んできたのは■大将。少将と真反対の元気な性格をしている老人男性だ。■少将と同じ歳な為に互いに友人として気楽に話している。

「私は■大将だ！ この近くを通りかかった時にちょうどよく君達が話してるのを見掛けてね…ふむふむ、これが噂に聞く翔鶴さん

か

「ふえ？」

「なるほどなるほど、長い白髪に清らかな性格と聞いたがまさにその通りだな、ふむふむ。少し触れて——」「やめていただけますか■大将閣下」

艦娘の中では珍しい航空母艦とされている翔鶴を舐め回すように眺める■大将。遂には身体にも触れようとしたが■少将が肩を掴んで止めてくれた。■少将は嫌悪な表情を包み隠さずに■大将を睨んでいる。

「彼女は■中尉の秘書艦。珍しいとはいえ触れるのは厳禁です、勝手な行動は慎んでもらいたい」

「え〜？ 駄目なの〜？」

「ダメです。それよりも貴様はやるべき事があるだろ、さっさと行けエロジジイが」

「うわ〜少将ちゃん酷い〜……っ!? ハイハイ分かりましたよ、行きますよ！ だからそんな目しないで!!」

友人なのか互いに敬語が無く、フランクに話している。■少将の目が怖かったのか■大将は焦る様に逃げていった。少なからず恐怖を覚えた翔鶴は安堵のあまりにため息を吐く。

「すまないな。あのバカは非合理的で少しやんちゃな所がある、迷惑を掛けたなら申し訳ない」

「い、いえ……大丈夫です……」

「ならいい。という事でよろしく頼む」

■少将は流れる風のように秘書艦待機室を去っていった。蒼色が黒■元帥との話し合いが終わったのはそこから二十四分後、呼び出された翔鶴は青と合流を果たした。黒■元帥と話し終わった後

の蒼色は神妙そうな表情をしていて、考えるような仕草をずっとしていた。

「……提督？」

「うん翔鶴、何？」

「■少将から伝言で第二会議室で待っているそうですよ」

「あ、ほんとに？ んじゃ今すぐ行かないと」

■少将との会議もやがて終わり、翔鶴と蒼色は潮崎町鎮守府に帰還。その日は白色と一度も会わずに話だけで終わった。

「大本営にて■大将に呼ばれたので行って参ります」

「うん……気を付けてね。あれ？ 随伴艦は？」

「いえ、一人で来いと事なので」

「そ、そう……分かった」

蒼色が黒■元帥と話し合った日から三日が経過。

通常通り仕事をしていた蒼色と翔鶴だったが、■少尉からある報告を受けた。どうやら■大将の命令により、一時的に■少尉が大本営に行かなければならないとか。内容は昇進についてらしく、詳しくは大本営にて話すとの事。■少尉は手短に蒼色へ報告を伝え、荷物をまとめて大本営へ向かっていった。

「……っ？ 提督？ どうされました？」

「いや……何でもない。ちよつとした考え事をしてただけだ。さ、仕事を再開しようか」

更に時は進み、■少尉が大本営に行ってから一週間が経過。

ここ最近の蒼色は神経質で食事をする前は必ず匂いを嗅いでから食べている。翔鶴が出したお茶や憲兵からのお土産にも注意を配り、必ず物色して確かめては食べている様になっていた。まるで誰かに命

を狙われているような危機感の出し方に翔鶴も心配だった。

蒼色曰く、最近花粉症で鼻詰まりが激しくて一々匂いを嗅がないとやってられないとの事。確かに今は花粉症の季節だ、多少の鼻詰まりなど有り得る事だろう。翔鶴はインターネットで調べ、乳酸菌飲料や部屋内の空気を清浄する事で蒼色の花粉症対策に勤しむ事になった。

「ちよつと提督さん！ 最近翔鶴姉に気遣わせ過ぎじゃないかしら？」

「え？ マジ？」

「マジよ。見なさいよ、翔鶴姉が疲れてるこの表情！」

いつもの通りに仕事をしていた翔鶴と蒼色。しかしそこに瑞鶴が現れ、姉の頑張り様子を見て蒼色に訴えた。恐らく瑞鶴は頑張り過ぎた翔鶴姉の事を心配しているのだろう。

「一度くらい翔鶴姉を休ませたらどうなの？」

「大丈夫よ瑞鶴、私は——」「駄目！ 翔鶴姉にも休息は必要だー！断固有給を要求するー！」

「ソウナノネー!!」

「ヤスマセテヤレ、ナノネー!!」

「ツイデニワタシタチモ、ヤスマタイノネー!!」

瑞鶴と共にいた妖精達がボイコットし始めた。航空機を執務室内に飛ばし、旗には「休暇を与えろ」などと直接的に訴えてくる。瑞鶴も腕を上げては大きな声で蒼色に翔鶴姉の休暇を訴えた。

「困ったなあ、明日は白くんとの面会日なんだけど……」

「私が行けばいい話でしょ!? ねえ休ませてあげて？」

「確かにまあ……最近頑張り過ぎたかな……よし翔鶴。今日から一週間、自由に休んでいいよ」

確かに最近は出撃と演習が度重なり、二人とも疲労は静かに溜まっていた。自然と肩は重く、全体的に倦怠感を感じている。出来れば蒼色も休みたいが仮にも鎮守府の司令官が無闇に休む訳にはいかないだろう。

それに明日は白色と面会日で絶対に休めない日だ。確かに代わりに瑞鶴が来てもらえれば翔鶴の負担も少しは減らせるだろうか。蒼色は翔鶴に今日から一週間休ませる事にし、瑞鶴と交代という形で翔鶴は休む事になった。

「提督は大丈夫なんですか……？ 瑞鶴もちやんと出来る？」

「大丈夫大丈夫、瑞鶴が頑張ってくれるみたいだし。ね？」

「任せなさい提督さん！ 翔鶴姉！ ちゃんとなしてみせるわよ！」

蒼色は瑞鶴がいれば大丈夫と安心しており、瑞鶴は高らかに豪語して自信満々だ。少し不安で寂しい分もあるが、蒼色の為にも休んだ方がいいのだろう。翔鶴は蒼色に甘えて休暇をもらい、自身の部屋へ戻っていった。

「……ハッ！ あ、そうね……昨日から休みよね、私……」

休暇を貰って一日目。

翔鶴は蒼色を起こさなければと突然起き上がり、急ぎの声を思わず出した。が、休暇を貰っている事に気付き、安堵したのかため息を吐く。隣で寝ていた瑞鶴の布団は既に片付けられ、蒼色と大本営に向かっているようだ。

「何しようかしら……」

休暇を貰ったとはいえ、何をすればいいのか分からない。ただ窓から見える艦娘達の訓練光景を眺めるだけだった。今思えば蒼色との

仕事で娯楽など手を出していなかった翔鶴。興味津々に瑞鶴の所有する二つ折りの板状の機械を少しだけ触ってみた。

「……分かる訳無いわよね……私が」

「失礼します」

誰かが挨拶をして部屋をノックしてきた。翔鶴は入室を許可し、中へ入らせる。入ってきたのは普段は翔鶴の艤装をメンテナンスしている整備士だ、マスクをしながら何かクリップボードを持って来ている。

「すいません翔鶴さん、少し艤装について確認したい事がありました」
「はい、何でしょうか？」

「翔鶴さんの弓、あるじゃないですか？ すいません、見落としとしてまっぴりメンテナンスするのを忘れていました……少しだけお時間掛かりますが見せていただけないでしょうか？」

「あら、そうなんですね。分かりました、大丈夫ですよ」

「ありがとうございます」

整備士も疲れていたのか弓をメンテナンスするのを忘れていたらしい。快く翔鶴は艤装を展開し、弓を整備士に渡す。

やはり戦闘のし過ぎで弓の一部が壊れていたようだ。確かに少し弓に違和感を持っていた為、原因が分かったのなら難しく考える必要は無いだろう。そう思っていた翔鶴だったが、突然違和感のする音が聞こえた。

「あれ……どうしました？」

気の所為だろうか、鍵を閉められた音がした。確か寮の部屋にあるドアは全て外からしか施錠出来ない仕組みだ。誰かにイタズラで閉じ込められたのだろうか。整備士が確認の為にドアへ近づき、ガタガ

タとドアを揺らしている。すると何故か整備士はドアノブを握ったまま、ピクリとも身体を動かさない。

「閉められたんですか？ 整備士さ——」

いきなり頬を殴られ、その反動で壁に激突し、畳に倒れ込む翔鶴。殴られた頬を手で覆い、目の前に立つ整備士を見上げた。翔鶴は整備士の理解の出来ない行動に怯え、恐怖のあまりに涙を浮かべる。普段は心優しい性格の整備士がこんな酷い事をするはずが無い、何かの間違いだと翔鶴は思うばかりだった。

だが目の前に立つ整備士の目ら明らか翔鶴を見下しており、マスクの外から見えるニヤケ顔が翔鶴の思いを粉々にしていく。

「やめっ、やめて……何でこんな事を……」

整備士は表情一つ変えずに倒れ込む翔鶴にゆっくりと接近していく。恐怖に包まれた翔鶴は後退りしながら、整備士との距離を離そうとした。

「まだ俺の事整備士だと思ってるのか。本当に馬鹿だな」

普段の整備士の声とは違った声に翔鶴は更に恐怖に襲われる。この整備士は違う、整備士に装った別の誰かだ。偽りの整備士はポケットから小さいナイフを取り出し、翔鶴の正装をズタズタに引き裂いていく。

「やめてください……！ やめて……やめっ、嫌っ!!」

「……ほおー、随分といい身体してんじやんか。そりゃあのバカもお前に惚れる訳だ」

「貴方は……一体、誰なんですか……?」

「ん？ 俺か？ 俺はな……」

整備士の帽子と被ったマスクを外し、翔鶴にその素顔を見せる。偽った整備士の正体は翔鶴にとって全く予想のつかなかったある人物だった。

「■■■■です。まあ正確には■■■■少尉、だったかな？」

翔鶴の目の前には蒼色と同じ司令官だった■■■■少尉がいた。普段寡黙な性格とは裏腹に絶望に染まる翔鶴を見て嘲笑っている。■■■■少尉はナイフを翔鶴の脛あたりの横に突き刺し、畳に刺しては翔鶴を脅した。

「これからやるから、騒いだら殺すぞ。いいね？」
「ヒツ……いやっ、やめ……やめて……いい——」

この時から、私の人生は一気に狂い出した。

「……………」

「よし写真も取ったし、後は殺るだけだな」

■少尉は整備士の格好に戻り、スマホの写真を再度確かめる。それは翔鶴が惨めに凌辱された写真だ、今後翔鶴を脅す為に撮ったのだろう。翔鶴は白い液体に塗れ、正装もボロボロのまま半裸で畳に横たわっていた。目に光は無く涙は流れ出ており、■少尉の声に全く反応しない。

「おい翔鶴。反抗しようと思うなよ？ 何か怪しい行動でもすればお前の大事な提督や仲間はこの写真をバラすからな？ バレたら君はもう人生おしまいだな！」

「……………あ……………」

一時的に人間性を喪失した翔鶴は最早喋る事すらままならない。抗いも出来ない絶望の前に、生きる気力は既に無かった。■少尉は倒れ込む翔鶴の白髪を握り、座る■少尉の目線まで顔を上へ持ち上げる。

「死んじやアイツが悲しむぞお？ あ、後でここは何事も無かったかのように片付けて、皆の目の前では普通に振る舞えよ？ やらなかつたらもう言わなくても分かるよな〜？」

「……………はい……………」

■少尉は翔鶴の髪を揺らし、辛うじて翔鶴は精一杯の言葉で答える。その後■少尉は何事も無かったかのように部屋を抜け出し、その場を去っていった。

部屋の中で一人になった翔鶴は身体を震わせながらもゆっくり起

き上がり、切り刻まれた正装を脱ぎ捨てる。部屋にあるシャワー室にて汚れた身体を洗い流し、再び別の正装に着替えた。白い液体と透明な液体で汚れた畳を綺麗に拭き取り、臭いはバレないように窓を開けて換気。そして部屋の隅で翔鶴はずっと蹲った。

「こんなのって……」

翔鶴は必死に声を殺し、誰にも聞こえないように泣く。これから自分はある男の言いなりにならないかなければならない。あんな酷く辱められた写真など仲間はおろか、蒼色に見られたら本当に自分の人生はおしまいだ。今も局部が針で突かれる程に痛い、胸も無理矢理掴まれた所為で気持ち悪く感じる。翔鶴はこれからの未来に絶望し、声を殺して泣き叫んだ。

「おーい翔鶴ー！」

あの男に襲われて五時間後。食堂にて夕食を食べ終えた翔鶴は部屋に戻ろうとしていた。勿論誰にもあの事は話さず、楽しそうに那智や龍驤と話している。

「久しぶりの休暇、どうだった？　ちゃんと身体は休められた？」

「いえ……まだ疲れが残ってたみたいです。今日は早く寝ますね」

「そうかー……それなら仕方ないな。ゆっくり休めよ！　じゃ、おやすみ翔鶴」

「おやすみなさい」

蒼色と最低限の会話を済ませ、翔鶴は部屋に閉じこもる。ドアを閉めた後に翔鶴はその場に座り込んだ。顔を腕で隠し、流れる涙が溢れ出る。

「ごめんなさい……提督……本当に……ごめんなさい……本当に……」

本当に……」

蒼色と話すだけで精一杯だった翔鶴。蒼色の顔を見るだけで心が苦しくなり、今すぐにも泣き喚たい気持ちでいっぱいだった。蒼色は自分が■少尉に犯され、脅され続けている事を知らないだろう。

もし言えば自分の惨めな姿が全員に知られ、築いてきた信頼や友情、愛情が全て水の泡となる。それだけはどうしても避けたかった翔鶴はあの男の言いなりとなり、蒼色と会わぬように部屋にこもり続ける選択を選んだ。

「翔鶴姉、十分に休めたでしょ?」

「ええ……そうね。身体が軽くなったわ」

「でしょー? やっぱ時には休む事も大事なんだからね! でも明日からまた秘書艦だけ……大丈夫?」

「大丈夫よ。問題無いわ瑞鶴」

「そう……? ならいいんだけど……」

翔鶴は一週間の休暇を経て秘書艦に復活。いつもの仕事に復帰出来るかと思えたが、そう簡単に上手くはいかなかった。普段は間違えないミスをしてしまったり、書く書類を間違えてしまうなどありがちなミスをやってしまうばかりだ。蒼色は一週間休んだから忘れたのかなとフォローしてもらったが、それでも書類は残ってしまい、演習の時間を無しにして午後の時間を使う事になった。

「大丈夫か? 翔鶴、本当に疲れ取れてる?」

「はい大丈夫なんですけど……やっぱ忘れてるみたいです」

「ちゃんとしてよー? 頭脳明晰な翔鶴さん?」

「すいません……」

昼になり食堂にて昼食の時間になった。空は曇天となり、今すぐにも雨が降りそうな感覚だ。翔鶴と蒼色が昼食を取っている最中に

■少尉が話しかけてきた。

「君、調子はどうだい？」

「大丈夫です。あとお二方、お茶を持ってきましたよ」

■少尉が二人分のお茶を持ってきてくれた。飲み干した分のお茶を持ってきてくれた気配りは他の人からすれば流石と思うだろう。しかし翔鶴からすれば怪しいもの以外の何物でもなかった。

「花粉症にお茶は効くとされています。飲んでいただければ私も幸いです……では私はこれで」

「ありがとねー」

あの男によつて自分は脅されている。

つまりこの渡されたお茶も飲まなければならない。見た目は普通のお茶だが、中に何が入っているのか分からない。

だが何かしらモノを入れた事には変わりはないだろう。蒼色は怪しんでいるのか飲む気はさらさら無いようだ。翔鶴は何か入っているという認識をしたままお茶を飲み干した。

「っ……」

身体に何も変化は無い。味は普通のお茶、特に違和感は無かった。だが後でまた来る効果かもしれない。常に警戒する必要があるらしい。

「よーしちやちやつと終わらせるぞー！」

昼食を食べ終えて一時間後の事。残った休憩時間を使って工廠に向かい、整備士達の現場を視察した。翔鶴の機装をメンテナンスしていた整備士は何処にもおらず、訳を聞けば風邪で休んでいるらしい。

「……どうした？ 翔鶴」

執務室に着いた翔鶴と蒼色は終わりきらなかった書類を片付ける為の仕事に取り掛かろうとしていた。しかし蒼色の後を追っていた翔鶴が突然立ち止まり、黙り込んだまま立ち尽くしている。どうにも様子がおかしい翔鶴に蒼色は歩み寄って声を掛けた。

「おーい翔鶴ー？ どうし——」

突然首を絞められ、倒れ込む蒼色。

蒼色の首を絞めようとするのは翔鶴だった。

馬乗りになりながら、殺気を漏らして今にでも蒼色を殺そうと躍起になっている。

「ど……して……！ しよ……か……！」

しかし翔鶴の絞める力は殺すには弱い力で、蒼色は翔鶴の手首を掴んで首絞めから解放させた。蒼色は勢いよく起き上がり、翔鶴の額に頭突き。怯んだ翔鶴の馬乗りから逃げ出した。

「どうしたんだ翔鶴！ お前はそんな事をやる奴じゃないだろ！！」

「うっ……！」

蒼色は立ち上がって翔鶴を警戒する。訳の分からない行動に戸惑うばかりだった。愛している翔鶴が突然自分を襲い、そして首を絞めては殺そうとしている。

「翔鶴！ 何があった!! 誰かに脅されてるのか!? なあ!!」

「殺す……殺す……違っ、いやっやめて!!」

「っ!？」

翔鶴は頭を抱えて、身体を震わせながらなりふり構わず暴れ出した。まるで誰かに操られているような、蒼色を殺す事を拒否しているかのような。様子を見れば自分の本心では無いのは容易に分かる。

「私は……いやっ違、嫌あ……!!」

翔鶴の頭の中では蒼色に対する尋常ではない殺気に精神が侵されていた。殺せ殺せと幻聴が耳を塞いでも聞こえてくる。身体が自分の意思とは反して蒼色を殺そうと躍起だ。

だが本心では蒼色を殺したくないなどない、本当は愛しているはずが殺気に邪魔されてしまう。最早自分の身体と精神を抑えるだけで精一杯だった。

「やっぱまだボロが出るなあコレは」

「っ!! やはりお前か…… ■■少尉!!」

執務室のドアを閉めて入ってきたのは ■■少尉。普段の寡黙な性格は殆ど無く、敬語を使わないさまを見ればこれが本性なのだろう。蒼色も上層部に例の計画を訴えてから ■■少尉が随伴艦も呼ばずに大本営に呼ばれた時から不穏な空気は感じていた。

「お前の神経質ぶりに散々振り回されたよ……よくもまあ、自分が殺される危険性なんて考えたもんだ。俺が仕組んだ毒殺を全て回避しやがるんだからな」

最近の二週間近く、蒼色は暗殺される可能性を考え周囲を警戒していた。例の計画が今も起きているのならどうしてもバラされたくない上層部は蒼色を殺しに来るだろう。それこそ ■■少尉が一番怪しかった存在だった。

「当たり前だろ……あの計画を知っておいて上層部が俺を見放す訳ないだろうからな。さしずめ口封じの為の暗殺、だろ？」

「ご名答。流石は人間派の軍人だあ、頭の優秀さはピカイチだな。だがそれも今日で終わりなんだよ」

翔鶴が呻き声を上げ、頭を抑えてはもがき苦しむ。

それもそうだろう、翔鶴は今■少尉に操られている。その呪縛から翔鶴は抗い、出来る限りの声を出して殺そうとする身体を抑えていた。

「翔鶴に何をした……!!」

「何って、ちよつとしたお薬を飲んでもらったただけだよ。私の命令に従順になる……お薬を、ね……」

「うっ……ああ……!!」

二人の会話から翔鶴はあの時のお茶を思い出す。やはり何かしら薬を入れられたモノのようだ。まさか■少尉の命令に従順になる且つ蒼色を殺すような薬だとは思わなかった。

あれだけ警戒しておきながら自分が情けない。頭や胸が物凄く痛い上、徐々に自身の身体が自分のモノにならなくなっていく感覚がする。頭を何度も叩きつけなければ正気を保っていられない。

「薬の所持及び使用は軍法により重罪に課せられる物だぞ！ お前だって分かっているはずだ!!」

「上層部の差し金からだぞ？ そんな事などいつでも帳消しに出来る」

「ツツ!! こんな事が罷り通っているはずがない!! 艦娘といい、深海棲艦といい、どこまで腐り切っているんだお前らはツツ!!」

「あーうるせえなあ。翔鶴、絞めるのは面倒だ。これで殺せ」

■少尉はナイフを翔鶴に渡し、速やかに殺せと命じた。翔鶴は拒

否の声を出して抗うも自然と身体はナイフを持ってしまふ。

そして握ったナイフを蒼色に照準を定め、身体を震わせながら身構える。翔鶴の意識とは別になり、翔鶴の身体だけが蒼色を殺そうと飛び掛かった。

「ッ……!! お前——うわッ!!」

「嫌ああああ!!!」

「翔鶴ッ……!!!」

嫌だ、殺したくない、大切な人を殺せるはずがない。

誰か助けて。

助けてください。

助けて、誰か。

誰でもいいから、助けてください。

お願いします。

神様お願いします。

私の大切な人を、殺さないでください。

これから人の役に立てるよう頑張ります。

これから戦ってこの国を守ります。

これから人らしく生きていきます。

だからお願いします神様。

どうか——、どうか——、

どうか――、

金属の刃が左胸下辺りを深く突き刺さっていく。

ゆっくりと刺さっていく刃の隙間から赤い液体が流れ出た。

白い軍服が赤く染まり、身体は徐々に力を失っていく。

「あ……ああ……あああ……」

口から大量の血を吐き出し、咳き込む蒼色。翔鶴が持つナイフは蒼色の左胸下辺りを深く刺さっていた。翔鶴は受け入れられない光景に言葉を失い、手や身体を震わせる。

「……翔鶴」

「っ……………！ 提督……………こ、れ……………は……………！」

「分かってる……………お前は悪く、ない……………自分を……………責めちや、ダメだ……………」

倒れる蒼色は腕を伸ばし、翔鶴の頬を伝う涙を優しく拭う。まともった白髪の一部が重力で離れているのを翔鶴の耳にまとめさせた。

「ああ翔鶴……………やっぱお前は……………綺麗だな……………惚れて、よかった……………」

「止血を……………！ 止血しますから……………！」

「あ、薬の効果がまだ中途半端だな。まあいいか」

翔鶴は通常通りに戻り、腹から出る赤い液体を必死に止めようとした。とはいえ翔鶴に医療の専門知識はあまり分からない。ナイフは抜いたら更に赤い液体が出るのは容易に分かる。だが止め方が分からない。翔鶴は涙を流しながら必死に考えた。

「翔鶴……………俺から、最期の……………お願い……………」

「ダメです……………そんな事を言わないで——」 「翔鶴」

翔鶴の声を遮り、蒼色は顔を近付かせる。蒼色は息が荒く、意識を失う寸前なのだろう。そっと口を翔鶴に耳に寄せ、精一杯の声で話し掛ける。

「この鎮守府にいる……………皆を……………守ってくれるか……………？」

それが蒼色にとっての唯一の願い。これから■少尉によって起きる悪夢の時代を考えたのだろう。恐らく■少尉はこの鎮守府の艦娘達に対して兵器という扱いで地獄を見るはずだ。だからこそ蒼色が一番信頼し愛している翔鶴が皆を守ってくれると信じていた。

一番強い翔鶴なら絶対に出来るはずだと。

「守ります!! 守りますから!! 何があろうと皆さんを絶対に守ります!! だから……」

死なないで。

「そうか……良かった……」

良くなんかない。

「終わり……か……」

私はまだ貴方に一つも良い事をしてやれていない。

「ありがとう……翔鶴……」

まだ色んな事も出来ていない。

「君に、出会えて……」

嫌だ。

「幸せ……」

やめて……。

「で……し……」

嫌ああああああ……!!!

蒼色は失血死により、潮岬町鎮守府の執務室にて死亡が確認。執務室に整備士が入っていたという目撃情報により、憲兵達によって一斉に取り調べが行われた。

当然取り調べている憲兵も上層部の差し金の為に犯人は見つか
るはずもなく、また事件を隠蔽したかった上層部は表向きに「潮岬町
鎮守府憲兵殺害事件」という全く別の事件として扱う事となった。

潮岬町鎮守府の艦娘達は提督の謎の殺害に怒り悲しみ、多くの者が
戦意を喪失してしまった。取り調べも受けたが誰も提督を殺したの
は誰か分かっていない。翔鶴は当然疑われる余地は無く、誰が殺した
のか日々言い争ってる毎日だった。

「もう……死にたい……」

翔鶴は空いた部屋に閉じこもり、ただ只管泣いていた。蒼色がいな
い毎日を受け入れられず、現実逃避し続けている。誰も慰めの言葉を
言う事など出来ず、翔鶴をそっとしておくのが艦娘達の中での暗黙の
了解だった。

「私が代理の司令官となった■少尉だ。色々あると思うが……これ
からよろしく」

潮岬町鎮守府の提督の代理は■少尉が選ばれる事になった。こ
の状況下で司令官になるのも一苦労だろうと他の艦娘達は同情の声
を上げる。食堂に殆どの艦娘達が集合し、翔鶴も強制的に部屋から引
きずり降ろされた。

「しかしながら私は……ある写真を入手してしまった……これを見て
もらいたい」
「……っ!!?!」

プロジェクトターから一枚の写真が映し出される。それは翔鶴が蒼色を殺した決定的証拠の写真だった。■少尉からは誰にもバレたくなければ黙っていると言われたから、ずっと部屋に閉じこもっていたというのに。翔鶴は顔を青ざめさせ、凍えるように身体を震わせる。

「嘘だろ……」

「まさか……翔鶴が……!?!」

「翔鶴さん……?」

食堂内が驚愕の声で埋まっていく。全員が翔鶴の方へ顔を向けさせ、信じられないような表情を見せた。

「どうして……? 貴方が黙っているというから私は部屋に閉じこもっていたのに……! 何故……!!」

「おーおー怖いなあ、流星は殺人犯だ。こんな事しちゃうんだもんなあ」

もう一つ出てきたのは翔鶴が■少尉に犯されている写真。のようだが■少尉の事はモザイクで隠されている。バレたくもない二つの写真を呆気なく艦娘達の前に晒されてしまった翔鶴。他の艦娘達から軽蔑と憎悪の視線が翔鶴を襲う。

「ッ……!!? 違う!! あの写真はこの男が襲ってきたんです!! それに提督の殺害は元はと言えば貴方が全て……!!」
「でも決定的証拠があるからなあ」

写真に決定的瞬間がある為か、何を言っても艦娘達は信じる様子はない。艦装を展開し、明らか殺意を向けてくる艦娘達に翔鶴は出来る限りの命乞いを始めた。怯えた表情で涙を流しながら訴える。

「違うんです……皆さん……信じて下さい……！ 私はただ、利用されただけで……！」

「いやー写真がある以上はお前がやったんだよな」

「あの男に……私は……！」

翔鶴は殺されるのを避ける為に逃げ走ろうとした。

が、鬼の形相で睨みつける艦娘達に拘束され、その場で捕まってしまう。 ■■少尉は殺すなど命じ、幸い命は救われた。

いや寧ろここで死んでおけばよかったのかもしれない。

「翔鶴は大切な蒼色を殺して失い、守るはずの仲間からの信頼を失い、自身の存在など、何もかも——、

全てを——、失った。

「翔鶴姉……」

■少尉が代理として着任してから一週間が経過。

捕まった翔鶴は両腕両足に拘束器具で拘束されたまま地下営倉に收容され、囚人のような生活を強いられていた。艦娘達は蒼色を裏切っただけでなく殺害までした極悪人として認識され、侮蔑の視線で見られるのは当たり前で、持つてくる食料は大抵悪戯された物ばかりだった。■少尉に貶められた翔鶴は涙を流しながらも黙って渡された食料を口にする。

「何で……私が……」

不幸の連続で何もかも奪われた翔鶴の精神は不安定になっていた。愛していた大切な人を自らの手で殺し、信頼されていた仲間からは見捨てられ、自身の存在は失きモノとなってしまうた。

全て■少尉の所為で、あの男の所為で。

腸が煮えくり返る程の憤怒と憎悪が翔鶴の頭の中で巡り巡る。今すぐあの男を殺したい、ボロボロにぶっ飛ばしてやりたい。牢屋の中で一人、翔鶴は様々な感情に左右されていった。

「よお悲劇のヒロインさん」

「っ……？ 貴方はッ……!!」

地下営倉の扉から入ってきたのは忌まわしきあの男。■少尉がヘラヘラと笑いながら翔鶴のいる牢屋まで近付いた。鍵が纏められた円の金具を指で回し、軍帽を上げて翔鶴の姿を確認する。

「凄い睨みようだなあ、まああんな事すれば当然か」

「貴方さえ……！ 貴方さえこの世からいなければッツ!!!」

「残念ながら俺はいるんだよバーカ。あれだけの事されてまだ反抗の意思があるのは驚いたけど」

翔鶴は殺意を余す事無く■少尉にぶつけては激昂した。拘束された状態でも必死に這いつくばり、無理矢理身体を動かそうとしている。よく見れば腕や足が千切れそうなほど皮膚が赤みがかっていた。■少尉はその姿を見て嘲笑う。

「まあまあ悪かったって。アレは一週間も過ぎればお前がやった事なんて忘れてるからよ……だけどその前に……」

ガラガラと滑車のホイールが地下営倉内に響く。■少尉の背後から滑車に乗せられていたのは焚かれた炭火の壺と鉄の棒の様な物。憲兵二人が何やら壺の中身を確認していた。それを見た翔鶴はゾツと背筋が凍り付く。

「犯罪者の烙印はしとかないとな」
「嫌……いやつ、やめ——」

地下営倉内に一羽の鶴の号哭が響き渡った。

——一週間後

■少尉により翔鶴は地下営倉から解き放たれた。二週間ぶりに地上へ出た翔鶴は周囲の艦娘達の反応を確認する。

しかし以前の様に翔鶴を睨む様な視線は感じられない。

寧ろ物珍しそうな表情で視線を逆に集めていた。

翔鶴からすれば一体何が起きているのか分からない。何故艦娘達はこんなにも普通の反応をしているのか。本当ならば殺意を向けてくるような艦娘しかいなかったというのに。もしかしてそれを分かったフリをしてわざとからかっているのかもしれない。周りから悪口や罵倒が幻聴のように聞こえてくる。周囲の視線に耐え切れなくなった翔鶴は即座に自身の部屋へ向かった。

「はあ……はあ……」

自身の部屋にようやく入れた翔鶴。ドアを閉めた途端に息を荒れさせながらドアに寄りかかった。その場に座り込み、耳を塞いで周囲の音を遮断する。今でも聞こえてくる幻聴に翔鶴は身体を震わせ怯え続けた。

「怖い……もう嫌……」

もう誰も信じられない。

誰にも頼れない。

この先どうすればいいのか分からない。

心も精神も限界だ。

こんな辛い事が続くならさっさとあの世へ行きたい。

『この鎮守府にいる……皆を……守ってくれるか……？』

提督の最期の願いが、何故か思い浮かんだ。

私の手によって死んでしまった提督が、私に頼んだ唯一の願い。

提督はこれから起きる最悪の事態を予想して、私に託したのだろう。

何故私なんかはその願いを託したのか理由はよく分からない。

確かに私はあの時、皆さんを守ると提督の目の前で誓った。

でもそれは私が提督に死んでほしくない事で精一杯で、その場しのぎに辻褃合わせて言っただけだった。

どうやって仲間を守ればいい？

どうすれば誰も傷つけずに守れる？

何をすればあの男から遠ざけられる？

「殺すしか……ない……！」

あの男を殺すしか方法は無い。

全ての元凶に等しいあの男さえ葬れば私や皆の謎の呪縛は解放されるはずだ。

今は自由の身、どんな方法だろうと立ち向かえる。

「殺す……！ 絶対に……殺す!!」

翔鶴は艤装を展開した状態で練習用の弓矢を装備し、**■**少尉がいる執務室へ向かった。殺意を**■**少尉にだけ向けさせ、再度翔鶴は立ち向かう。執務室のドアを蹴破り、躊躇いもなく**■**少尉へ矢を撃ち放った。翔鶴の矢は**■**少尉の右肩を撃ち抜き、椅子の背もたれに貫通する。翔鶴は矢を弓に装填、早歩きで執務室の中へ入り、照準を**■**少尉の脳天に定める。

「ちよ!? 翔鶴姉!!」

「っ?」

■少尉を殺したい気持ちで視野が狭くなっていた翔鶴。**■**少尉の机の手前には瑞鶴が何故かいた。瑞鶴の声を聞いて初めて気づき、盾になる瑞鶴を確認するも弓矢は構え続ける。

「そこを退きなさい瑞鶴」

「ちよちよちよ待って!? 何があつたの翔鶴姉!? 危うく提督さんが死ぬ所だったじゃん!!」

「死ぬべきなのよその男は。いいから早く退いて瑞鶴」

「何で!? 二人は、愛し合ってる仲じゃないの!?!」

瑞鶴の意味の分からない発言に翔鶴は思わず「は?」と声を漏らす。醜く憎悪の体現者でしかない**■**少尉と愛し合うなどと妄言も甚だしいところだ。妹の瑞鶴にでさえも怒りが湧き出てきそうになる。

「気持ち悪い発言はやめてさっさとそこを退きなさい瑞鶴!!!」
「ダメだって翔鶴姉!! 仮にも代理の提督さんを——」

■少尉を庇う瑞鶴が突然苦しむ声を上げてその場に倒れた。まるで電流でも流されたかのような痺れ方をしている。倒れた瑞鶴は痙攣しながらそのまま気絶してしまい、その姿を見た翔鶴は声を荒らげて

■少尉を脅した。

「瑞鶴に何をしたのよ!!!」

「なアに……ちよつとした細工だよ。お前以外の全員に自爆装置と緊急停止装置をつけただけだ」

「緊急停止装置……!?!」

「気絶するぐらいの電流がビビッと流れ出る。いやー流石、妖精達の技術は凄まじいねえ」

自爆装置と緊急停止装置、恐らく瑞鶴が倒れた原因は緊急停止装置の方だろう。スタンガン並みの電流が一気に放出され、対象の意識を喪失させる仕組みに違いない。

「どこまでも貴方は私達をツ……!!」

「最初打たれた時はどうなる事かと思っただがい盾がいてくれてよかったよかった……あ、その矢を放つ気ならやめた方がいいぞ？ さもないと……」

倒れていた瑞鶴がまた電流を流され、喚声を執務室内に轟かせる。あまりの非道さに翔鶴はまた声を荒らげて止めるように訴えた。■

■少尉は代わりに艤装を収納させる条件を提示し、仕方なく翔鶴は艤装をその身に仕舞う。

「瑞鶴に……いや皆さんに何をしたんですか……!! 貴方と私が愛し合ってるなどと瑞鶴に妄言を言わせるだけじゃなく、命を脅かすよう

な真似をして……！ 貴方はそこまで何をしたいんですか!!？」
「まあ気付くよなあ……アイツらの反応を見れば。よしネタばらしと行こうか」

■少尉は椅子から立ち上がり、翔鶴の元まで歩み寄る。■少尉に襲われた経験のある翔鶴はトラウマによって後退りし始めた。思いついたくもないフラッシュバックが頭の中で流れ出る。怯える翔鶴を見続けた■少尉は突然翔鶴の顔を掴み、勢いよく投げ飛ばした。倒れ込む翔鶴に馬乗りなって顔を何回も殴り続ける。何の躊躇いもなく■少尉は無慈悲に翔鶴を痛ぶった。

「お前が地下で馬鹿みたいに過ごしてた間、俺はお前に仕掛けた薬のようにもう一つある薬を仕込んだんだ」

「ある……薬……？」

「ああそうさ。お前が好きだったあの蒼■中尉に纏わる記憶を全て捏造して、全て俺がやった事にしたんだ……つまりは記憶を改変させる薬なんだよッ！俺が都合良くアイツらを従える為になア!!」

腹いせにもう一回翔鶴を殴り、また白髪を掴んでは髪を持ち上げる。■少尉曰く、この鎮守府の艦娘達は蒼色に関する記憶を全て消去され、別の物に書き換えられてしまっているらしい。つまりは今まで蒼色のやってきた事やその存在全てを翔鶴以外の艦娘達は忘れ去られてしまっている。何とも受け入れ難い現実には涙を流し、絶望する翔鶴。最早対抗する力や心は呆気なく打ち砕かれていた。

「いい加減馬鹿のお前でも分かるように教えてやるよ……この世の全ては、力なんだよ!!」

■少尉は何度も翔鶴の頭を床に叩き付ける。

翔鶴は怯み声すら出さずにされるがままだった。

「相手をひれ伏せさせるのも、相手を振じ伏せるのも、相手を蹂躪するのも、相手をズタズタに絶望の底へ落とすのも、相手に完膚無きまでに勝利するのも全ては己が持ち合わせる力なのさあ!!!」

違う。

力は皆を守る為にあるモノだ。

他人を向けていいモノじゃない。

「支配力と権力さえあればお前らなんて塵同然!!! よくもまあ俺の考えた策に溺れ嵌ったもんだな!! あまりにも馬鹿すぎて笑いこけそうだったよ!!!」

私に力さえあれば。

この男に刃向かえる力さえあれば。

その力はあつたはずなのに、自由に振り翳す事すら出来ない。私の自由を束縛し、縛り続けるこの男の前では全てが無力だ。

「力なんだよ!! ちーかーらー!!! 愛だとか友情だとかで何とかなるとでも思ってたのかア!!! お前ら兵器を操るなんて造作も無かつたぞ!! 憎むなら俺じゃなくてまんまと俺に騙された非力な自分自身を憎みたまえ!!!」

私が悪かったのかもしれない。

もつとこの男の企みに気付いていれば、こんな事にはならなかった。

私が能天気には暇なんて取らなければ、もつと提督の事に気付いていれば。

私が悪いんだ。私の所為で全てが狂ったんだ。

私が――、

「皆を守りたいんだろ？ だったら俺の秘書艦になって仲良くしよーぜ？ な？」

私が――、弱いからなんだ。

「よ、翔鶴」

「……龍驤さん」

怪我を負った状態で翔鶴は空母寮の廊下をふらついていた。■
少尉に散々なまでに罵られ続け、翔鶴の精神は臨界に達している。殴られた痕も治療しないまま生きる気力は消滅し、考える事を放棄していた。

そんな翔鶴を通りかかった龍驤が突然声を掛ける。翔鶴の容姿など気にせず、気さくに話しかけてきた。

「ちい〜とウチんとこ来てくれへん？」

「分かり……ました……」

翔鶴は龍驤に誘われ、ある部屋に連れていかれる。そこは龍驤の一人部屋、机にテーブル、テレビなどがある何とも生活感のある部屋だ。龍驤は翔鶴をリビングに誘い、キッチンにてお茶をいれる。

「まあまあお茶でも飲んでゆっくりしてって」

「……いただきます」

翔鶴はまるで人形の様に感情のこもらない声で返事する。お茶を啜る光景を龍驤は睦まじく眺めていた。何も翔鶴に対して嫌悪や陰悪な感情を出す訳でもなく、ただ只管に翔鶴を見つめている。翔鶴の落ち着いた様子を確認したのか龍驤は再び話し掛けた。

「……さて翔鶴。本題に入るとして、アンタに聞きたい事があるんやけど」

「何でしようか……」

「そのー……何と言うか……何か蒼■と訳があつたんやろ？ ゆつくりでいいから、ウチに話してみ？」

確かこの鎮守府の艦娘達は■少尉の薬によって改竄され、蒼色の事は何一つ覚えていないはずだ。だが龍驤はハッキリと鮮明に蒼色の名前を呼んでいる。翔鶴は聞くはずのない言葉に理解するのが遅れてしまった。

「……？ 龍驤さんは……覚えてるんですか……？」

「それがなあ〜？ 聞いて聞いて？ 二日前ぐらいなんやけど、何故か皆が蒼■の事忘れよってウチは頭にハテナマーク浮かべてたんや」

龍驤曰く、ある日朝起きたら何故か蒼色の死を悲しんでいたはずの吹雪が何故か蒼色の事を忘れていた。それどころか蒼色があの代理の提督として塗り替えられており、様子がおかしくなった事を把握した龍驤は同じ認識を持つ艦娘達と話を共有。■少尉が怪しいと踏んだ龍驤達は何かを知っている素振りをした翔鶴が鍵を握っていると予想し、今ここに翔鶴を呼んだようだ。すると龍驤が話してる中、部屋のドアから赤城や葛城、妙高や那智、利根と筑摩が入ってきた。

「赤城さんや妙高さん達……利根さん達に葛城さんまで……」

「妙にあの■少尉って男が怪しいと思ってるな？ 翔鶴に一度聞いてみよって話になって来てもらったんや」

「翔鶴さん、ゆつくりでいいので真実を話してください」

「どうなってるのか教えてほしい、翔鶴」

「んまあこう言ってる通り、あれだけイチャイチャしてたアンタが殺すとは考えられへんからな。そこんとこどうなん？」

龍驤の部屋はいきなり大所帯となり、全員が翔鶴に注目した。翔鶴は恐る恐る怯えながらも自身が経験した凄惨な過去をゆつくりと話す。■少尉に襲われた事や蒼色を殺してしまった事などの詳細を事細かに龍驤達に伝えた。途中恐怖のあまりに身体や声が震えてしまい、涙が出て話すのが辛くなる。龍驤達は気をかけて殴られた痕を治療しつつ、身体を摩つては必死に翔鶴を慰めた。

「なるほどなあ……全てはあの男の仕業という訳やな」

「……凄まじいな」

「惨い事を……」

「なるほどなるほど……よお頑張ったな翔鶴。お疲れ様やで」

龍驤は翔鶴の頭を撫でて翔鶴が頑張って抗った事を褒め称える。頼れる仲間がいない中で翔鶴はたった一人で■少尉に立ち向かっていた。龍驤達からすれば翔鶴の過去は聞くだけでも背筋が凍るほど恐ろしいモノで、よくここまで生きてこれたなど関心する程だった。その分自分達が何も出来なかった事はおろか、■少尉の蛮行に気付けなかった事に罪悪感を感じていた。励まされた翔鶴は閉じ込めていた感情が爆発。龍驤の胸に抱き掛かり子供のように泣きじやくった。

「もう私は……死にたいです……」

「ダメやダメや！ 死にたいとか言っちゃアカンて。蒼■に仲間を守るように約束したんやろ？ なら生きていかなきゃ約束破ったと同じやで？」

龍驤が翔鶴の頭を掴んで目線を合わせる。堂々と笑いながら龍驤は蒼色の約束を全うするように言い出した。仲間を守ると約束したなら、何としてでも生きなければならぬ。死んでしまったら約束を破った事になる、そんな事など蒼色が悲しむのは必然だ。

「ウチらも協力するから、泣きたい時はまたウチの胸で泣きーや。ま、そんな胸あるかどうかなんて分からんけどな！ あはははは!!」

「ありがとうございます……ごいませす……!」

「どういたしましてや!」

孤独だと思われていた翔鶴は心強い味方を入れた。何もかも全て失った翔鶴にとって龍驤達は一筋の光に等しく、最後の希望そのものだ。今まで不幸の連続で希望も未来も信じられなかった翔鶴は再度最後の希望を手に入れたのだ。

しかし何故龍驤達が記憶を失っていないのか。翔鶴が聞いた所によると、記憶が改竄される前日の夜の晩御飯でお茶を飲まなかったらしい。恐らくそのお茶に薬が仕込まれており、他の艦娘達は記憶が改竄されてしまったようだ。

更にいつの間にか取り付けられた緊急停止装置というものが非常に厄介で、**■**少尉が自由に起動させては電流を流して気絶させてくる。龍驤達は一旦身を引き、緊急停止装置がある以上は何も出来ない。とまずはその装置が身体のどこにあるかを探す事にした。

だが身体中のどこを探しても見つからず前途多難となる。そこで龍驤達は**■**少尉に従うフリをして、**■**少尉の蛮行を訴える計画を考える事に時間を当てた。

■少尉は翔鶴の反抗以降、本性を目の前で晒した事をいい事に隠さなくていいと思つたのか突然本性を露わにした。**■**少尉の性格はとても冷酷で艦娘達をいたぶっては嘲笑うような外道中の外道。人の皮を被った悪魔の様な極悪の体現者そのものだった。日々のストレス発散による艦娘のサンドバッグは続き、反抗すれば緊急停止装置の餌食になる。戦闘中は無謀な指揮をして命令に背いたり、思い通りにならなければ罰と称して拷問器具で拷問するという惨たらしさ。

最悪な事に憲兵や整備士達は**■**少尉に金を握らされ、艦娘達を襲う側として仲間にさせられていた。唯一医務室で務めていた専属の**■**医師は**■**少尉側に成りすまして艦娘側に徹してくれている。

■少尉達によって怪我を負った艦娘達の治療に専念した。

そこで翔鶴や龍驤達は■医師に■少尉の蛮行を大本営に訴えてほしい事を願った。勿論■医師はその願いを貰い受け、やっと取れた有給休暇を使って大本営へ直接訴えに行く。

だが――、

「誰も信じてくれなかったんですか!!?」

「ええありとあらゆる方法で画像とか色々証拠は見せたんだけど全く信じてくれなかったわ……マスコミに見せようかと思っただけで貴方達を兵器と見るような連中に見せた所で無意味だし……変に間違えば捏造とかで私や貴方達が疑われる事になるわ……困ったわね……」

■医師からの報告によると大本営の殆どは■少尉の蛮行を頑なに認めなかった。認めるどころか信用すらされず逆に■少尉を貶める為に来たのか疑われる始末。全てのマスコミや各メディアは艦娘兵器思想で見せても無意味な上に、変な捏造で■医師や翔鶴達が疑われる可能性がある。場合によっては命に関わる危険性がある為、やむなく■医師は鎮守府に帰還せざるを得なかった。

「明らかにあの男は軍の上層部と深く関わっているわ。理由や目的は分からないけど私達では力が足りない……ごめんなさい、力になれなくて……」

「いえいえ■先生は悪くありません……寧ろ私達の為にわざわざやっていただけありがとうございます」

「貴方達は私達と同じ人間よ、無力かもしれないけど……また何かあれば協力するわ。出来る事があるならまた言っただけ」

更に■少尉の愚行はエスカレートしていった。秘書艦の翔鶴に大半の書類を押し付けるだけでなく、隙あらば身体を触ってくる等のセクハラが横行。罰と称して憲兵や整備士達に艦娘を襲わせるという淫行を犯した。また食事も■少尉によって制限され、艦娘は固形

食という艦娘専用の食料のみ与えられた。それどころか土や石を食べさせてくる悪戯などをしてくる始末。

そして――、

「よし、やるか」

仲間を引き裂く地獄の発端となる――、優遇制度が始まった。

140. 「秘めていた、変わらないはずの想い」6 /
6

一ヶ月に一回の食事の日が回り、味のしない固形食を食べ終えたその次の日。突然艦娘同士で争いが勃発し、仲間割れが始まったのだ。躊躇いもなく仲間を蹴り飛ばし、罵倒の声がそこらじゅうで聞こえてくる。また様子がおかしくなった事態に翔鶴は■少尉に問い詰めた。

「いきなり皆さんが争い始めました!! 一体何をしたんですか!!?」

「強い艦娘だけを優遇しただけだ。他の弱いゴミ共とは違うという固定概念を植え付けさせたんだよ」

態度が豹変したのはいずれも戦闘経験が豊富且つ、練度が九十五以上の艦娘だった。金剛型姉妹や阿賀野に矢矧と能代、加賀や瑞鶴、加古や川内に祥鳳、更に龍驤や葛城、利根や筑摩、妙高や那智、一部の軽巡洋艦や駆逐艦までもが変わってしまった。

「何故そんな事を!!」

「その方がやりやすいからだよ」

「貴方は私だけでなく仲間ですえも壊すつもりですか!!?」

「俺は壊してない、彼女達が自らやってるんだ」

「言わせておけばアアア!!!」

■少尉の外道っぷりに翔鶴は再び激昂する。しかし突然現れた赤城によって止められ、翔鶴は■少尉のいる執務室から引き離された。翔鶴を抱える赤城は一旦自身の部屋に連れていき、翔鶴を部屋の中へ投げ飛ばす。

「翔鶴さん、感情的になってはダメです。一回落ち着いて状況を把握

するべきですよ」

「でも赤城さん！ 私は……!!」

「分かります、それでも落ち着いて。皆さんが突如豹変したのは私も把握しています、恐らく昨日の固形食に何かしら仕込まれていたのでしょうか」

赤城は翔鶴の様に客観的に状況を把握出来ていた。 ■■少尉の仕掛けた優遇制度による性格の豹変は見受けられない。

「赤城さんは……何故……!」

「私にも分かりません。恐らく薬の効果などは受けない体質なのかもしれないですね……取り敢えず、落ち着きましたか?」

「は、はい……」

赤城に落ち着くように言われ、翔鶴は身体を休ませた。赤城と加賀の部屋はとても綺麗に整えられていて、赤城の机にだけノートや資料が散らばっていた。赤城は机から資料を取り出し、何かを探している。

「朗報ですよ翔鶴さん。緊急停止装置の場所が分かったんです」

「え、本当ですか!?!」

「はい。緊急停止装置は私達の艤装に取り付けられていました」

赤城の研究により、緊急停止装置は自由に格納出来る艤装に取り付けられていた。

艦娘は意のままに自身の艤装を展開や格納、又は離別する事が出来る。艤装と身体が接する部分にある程度のスペースさえあればその場で展開出来る仕組みで、普段は特殊な光学迷彩で物質ごと透過して触れる事は出来ない。その艤装に緊急停止装置は取り付けられており、艤装と一緒に透過していた為に誰もが不意をつかれていた。確かに ■■少尉に電流を流される時はいつも艤装を展開している時で普

段の姿でいる時は何も無かった。

「ですが自爆装置はまだ分かりません……これが一番危ないと言うのに……」

「い、いえ！ 緊急停止装置だけでも見つければ大発見ですよ……！」

「ありがとうございます。実は後もう一つ、朗報があるんですよね」

「それは一体……何ですか？」

もう一つ朗報があると聞いて翔鶴は唾を飲む。緊急停止装置と自爆装置以外だとすれば残るは薬の発端。■少尉がどうやって禁止されているはずの薬を入手し、使用しているのか。上層部が協力して薬を仕入れているのならまだ分かる。

だが何故記憶を改竄する薬と今回の性格を豹変させてしまう薬をわざわざ使用したのか、それが分からなかった。何の目的で、なんの為に使うのか理由が分からない。

「性格を変えてしまう薬の発端です。恐らくこの薬、この鎮守府の明石さんが開発していたモノかと思います」

「明石……さんが……!? でも何故……」

「記憶を改竄された当日、私は彼女の変化を確認しに行きました」

赤城は記憶が改竄された当日に、明石の変化を確認する為に工廠へ向かっていた。赤城が来るなり明石はあからさまにオドオドとした表情で接しており、何か隠していると赤城は予想したらしい。

「そして皆さんの性格が変わってしまった今日、私は即座に明石の元へ向かい半分脅して問い詰めました」

「そうしたら……?」

「あっさり彼女は自分が薬を開発した事を自白してくれましたよ。何でも■少尉に脅されて開発する他無かったようです。緊急停止装置の影響もあつたんでしょう、怯えてしまうのは当然の事ですしね」

赤城は明石を脅して、薬の開発を自白させていた。明石は■少尉に刃向かえば殺すと脅され、性格を変えてしまう薬の開発を命令されていたらしい。当然明石は開発などしたくなかった様だったが、自己保身の為にせざるを得なかったようだ。その後は薬の効果や発動時間など余す事無く全てを告白してくれた。

「記憶を改竄された薬は明石さんが開発したモノではありませんでしたが、性格を変えてしまう薬は■少尉に頼まれ開発したようです。効果は一週間、恐らく一週間に一回の食事で効果を延長させる為に設けたのでしよう」

「でしたら、この事を皆さんに教えて食べないように呼び掛ければ……！」

「はい。優遇制度とやらはすぐに終わりますね」

赤城の研究により、■少尉の優遇制度は終わるはずだった。

だが何故か優遇されてしまった艦娘達は■少尉の言う事を忠実に聞くようになっていた。いくら食べないでと呼び掛けても無視され、固形食を食べてしまう始末で止められなかった。唯一止める事が出来たのは龍驤、那智、利根、葛城のみ。それ以外の艦娘は薬の効果が強いのか聞く耳すら持たなくなっていた。自身の性格を取り戻した龍驤達は再度赤城の話に耳を傾ける。

赤城は自身が■少尉の蛮行に気付いた事により、度々命を狙われている事を把握した上でこれからやるべき事を順に教えていった。秘書艦の翔鶴の情報によると艦娘達は一種の洗脳を施されているらしく、■少尉の命令に忠実になっている仕組みの様だ。目を覚ました利根と那智に協力してもらい、筑摩と妙高は洗脳から解き放つ事に成功。そして加賀や瑞鶴、金剛も順調に目覚めさせていくはずだった。

「赤城さんが……行方不明!？」

昨夜から赤城が大量の血跡を残して行方不明になった。原因は■少尉が仕向けた加賀による暗殺の失敗、部屋は血塗れで斬られた赤城の左腕が生々しく残っていたらしい。窓は逃げたと思われる突き破った形跡があり、恐らく逃げれたとしても部屋中に散らばった大量の血痕の跡から失血死は間逃れないと■医師は歯を食いしばりながら翔鶴達に告げた。

「……一旦は落ち着きましょう。赤城さんならきつと大丈夫よ。私達はやるべき事に集中しないと」

赤城の消失に翔鶴は深呼吸して自身を落ち着かせる。以前に赤城から言われた事を思い出して、感情を抑えるように心を整えた。赤城なら大丈夫だ、あれぐらいの怪我だろうと必ず生きて戻ってくる。赤城の事を信じ続け、翔鶴は前を向いた。

「翔鶴、吹雪と深雪を連れてこい」
「……分かりました」

優遇制度が始まって二ヶ月が経過。

最近は■少尉の蛮行を阻止する計画を立てるのに寝る時間を割いていたおかげで睡眠不足、■少尉の頻繁に起こるセクハラの横暴。目にクマが出来ており、少しやせ細った姿になっていた。

そんな日に突如■少尉が吹雪と深雪を呼ぶように翔鶴に命令した。嫌々ながら翔鶴は駆逐艦寮にいる吹雪と深雪を呼び出しへ向かう。二人は■少尉に呼ばれた事を聞いて身体を震わせ怯え出したが、翔鶴が何とか守ってみせると無理矢理言い聞かせ二人と共に執務室へ向かった。

執務室に来た吹雪と深雪は憲兵達に腕を拘束され、■少尉についてこいとある場所へ連れていかれた。秘書艦の翔鶴も二人を守る様に密接にくつつきながら■少尉の後を追う。

■少尉が向かったのは地下営倉。反抗した艦娘達が牢屋に入れられ、貧相な牢獄生活を強いられている地獄のような場所。営倉には天龍や長門など、反抗した艦娘が手足を拘束された状態で俯いていた。鼻を突くような異臭と思わずえずいてしまうような凄惨な光景に吹雪と深雪は身を呈して守ってくれた翔鶴に縋り付く。その地下営倉を抜け、ある部屋に辿り着いた。

「さて……調子はどうだ、ネ級」

■少尉が呼んだ名前を聞いて、翔鶴達は耳を疑う。部屋の中には人類の敵である深海棲艦の一人、重巡ネ級が何故かいたのだ。更にはその重巡ネ級を困うようにして物騒な道具や機械、薬品等が散らばっている。

「連レテキタノカ、実験体ヲ。早速ヤルゾ」

「ああ分かつ——」「ちよつと待ってください!!!」

重巡ネ級と■少尉の会話を遮って翔鶴が大声を上げる。翔鶴は吹雪と深雪を自身の背後に隠し、艦装を展開した状態で敵視していた。

「何故貴方が深海棲艦と……!!!」

「ああそうか。伝えてなかつたな……まあいざ知られる事だ、教えてやるよ。実は近々俺は深海棲艦の提督になるんだわ」

「はア!!! 何を言ってるんですか!! そんな事をすれば貴方はタダじゃすみませんよ!!! 第一どうやってこの鎮守府に深海棲艦が……!」

「俺の権限で一部の警戒網を薄くすれば簡単な事だ、そんな脅迫されても意味無いぞ……やれ」

命令された重巡ネ級は翔鶴達の元へ歩み寄る。更に暗闇に隠れて

いたのか雷巡ホ級や戦艦夕級が目を淡く黄色に光らせて翔鶴達を囲んだ。小さな部屋の中で艦載機は発艦出来ないこの状況で翔鶴達に勝てる見込みは無い。翔鶴は抗おうと対人戦闘技術で応戦するも二匹の深海棲艦では部が悪く、床に叩きつけられ拘束されてしまう。翔鶴が守っていた吹雪と深雪があえなく重巡ネ級に連れていかれ、中央のベッドの様な実験台に深雪が乗せられた。

そして――、

「やめてください司令官!! 二人はまだ戦えますから!! 殺すのだけは!!!」

「ネ級、投与しろ」

「やめてください!! やめ、やめて!! お願いつ!! やめてエエ!!! 私達は――」

翔鶴や吹雪の懇願は全く届かず、実験台に乗る深雪にある液体を注射器で取り込ませた重巡ネ級。床に這いつくばる吹雪は只管に深雪の名前を呼んでは泣き叫んでいる。

すると深雪は突然痙攣しながら悲鳴を上げ、身体が肉塊へと変形していった。更に肉塊は巨大化し、徐々に白く染まっていく。そこに人の形などなく、黒い装甲に身包まれた深海棲艦の姿があった。

が――、

「……失敗か」

黒い装甲に包まれた何かは突然収縮し始め、ただの肉塊と成り果てる。それを見ていた翔鶴と吹雪は言葉を失い、頭が真っ白になってしまった。

実験台の上に、本来の深雪の姿はいなかった。

その後反抗したと思われるしまった翔鶴は再び地下営倉に閉じ込められ、その間は吹雪が秘書艦として担う事になった。

翔鶴はあの光景が脳裏に焼き付いてしまい、何も感じない廃人にな

りかけていた。最早抗う力や精神は既に無く、何をされても動じない人形そのものようになってしまっていた。

更に追い打ちを掛ける様に翔鶴を絶望の底へ落としていく。■ ■少尉の無理矢理な指揮により、次々に仲間が沈んでしまっていた。何とか龍驤達が轟沈率を下げ、自ら身を呈して戦闘に集中するも次第に疲労が蓄積。休憩は五分と短く疲労とストレスは溜まりに溜まり、精神を削ぎ落とされていく一方で最早自身の身を守るだけで精一杯になっていた。

殆どが最強と言われた戦艦棲鬼による砲撃と撾殺で、遺品は艦装の破片やその一部のみ。使えないと決められた艦娘は旧式解体で処理され、資材を無駄に使っては建造して出撃させる毎日だった。またこの時 ■ ■少尉に操られた金剛四姉妹も被害者となり、金剛以外の三人は旧式解体で処理され、後に新たな三人が建造される事となる。

「あ、翔鶴。あの事アイツらに言ったら妹の瑞鶴を爆散させるからな。緊急停止装置は見破られたとはいえ、自爆装置はどこにあるかまだ分からないだろうしな……覚えとけよ」

「……分かり……ました」

緊急停止装置の件については ■ ■少尉も把握しており、赤城が失踪する前から翔鶴達が緊急停止装置の位置を発見した事に気付いている。とはいえ ■ ■少尉の言う通り、自爆装置の場所はまだ分からず前途多難だった。

この装置さえ無ければ、すぐさまこの男を消せると言うのに。

しかし遂に翔鶴はトドメを刺されてしまう。仲間の一人だった筑摩と妙高が ■ ■少尉の実験台となり、醜い深海棲艦の肉塊へと成れ果ててしまった。自爆装置で脅してきた事をいい理由に、筑摩や妙高は残った姉妹に想いを託して自ら実験体となって肉塊と変貌し、その命を落とした。その一部始終を見ていた翔鶴は誰もいない部屋で泣き崩れ、情けない自分を責め続ける。

「翔鶴、とうとう最終実験だ。実験体はお前にする」
「……………どうぞ……………仰せのままに」

■少尉は最終実験と宣言し、翔鶴を実験体に決めた。憲兵に腕を拘束され、翔鶴はされるがままあの部屋へ向かう。

不思議と部屋に近づく度に自身があの結末を迎える事に恐怖は無かった。翔鶴の中では負の感情で溢れ出し、自ら死を願うほど心が荒んでいる状態。精神崩壊は一歩手前、いつ自我を失ってもおかしくなかった。

実験台の様なベッドに仰向けとなり、身体を二重に拘束されていく。天井には眩しく光る蛍光灯、少々血腥い臭いがした。

そして注射器に禍々しい色をした液体を注入され、翔鶴はゆっくりと目を閉じる。

私はここで死ぬ。

もう泣かなくてもいいんだ。

もう辛い事は無いんだ。

私は頑張ったんだ。

身を滅ぼしてでも頑張ったんだ。

決して褒め称えて欲しくて頑張ったんじゃない。

本当に皆さんを守りたかったから、私は頑張った。

でも全てが無意味だった。

どれだけ頑張っても無力だった。

私は無力だ。

仲間を、皆を守れなかった。

怯える皆さんを救えなかった。

大好きなあの人を救えなかった。

もうあの人に、私は会えない

あの人の約束を果たせずに破ってしまった。

もうあの人は私を振り向いてくれない。

もう私は誰も守れない。

「イヤ〜？ マダチャンスハア〜……アルト思ウヨ〜？」

突然の聞き慣れない声に翔鶴はゆっくりと目を開く。周囲は訳の分からない異質な空間が広がっていた。目の前は黒い闇が広がっており、翔鶴の背後には白い背景が地平線無く永遠と続いている。一切物音はせず、風の流れや全く感じはしない。

すると目の前の黒い空間からあるモノが現れた。

「貴方は……！」

「ヤア初メマシテ、私ハ深海棲艦ノ空母水鬼ダヨ」

翔鶴の前には空母水鬼がいた。

翔鶴が艤装を展開して身構えようとするも全く出てこない。

「ア、無理ダヨ。コノ空間ジャ何モ出来ナイミタイダシ。私モ出来ナカツタ」

「……この空間は何なんですか……！ 貴方は何をするつもりなんですか!!」

何も感じるはずのない異質な空間に翔鶴の声が反響して響き渡る。翔鶴は空母水鬼を警戒し、艤装が展開出来ないならと対人戦闘技術で身構えた。空母水鬼は惚けた表情で辺りを見渡し、物珍しそうに眺めている。

「……ネエ翔鶴」

「何ですか……！」

「仲間……マタ守ツテミタイト思ワナイ？」

「っ!!？」

空母水鬼は満面の笑みで口に指を触れさせながら翔鶴に問い掛け

た。驚きの言葉に翔鶴は驚愕の声を漏らす。まさか空母水鬼から仲間を守るなどという言葉を耳にするととは思わなかった。

だがそれだけその言葉がとても怪しく見える。翔鶴はまるで吠える番犬のように声を荒らげて空母水鬼に口答えた。

「早く戦うなら構えなさい!! 貴方の妄言に付き合ってる暇なんて無いんです!!」

「イヤ戦う気ハ無いシ、妄言トカジヤナインダケド……タダ貴方ガ後悔シテソウナ表情ヲシテタカラ言ツタダケデ」

「私はこれから貴方に殺されて本当に死ぬんですよ!! 早く殺しなさい!!!」

翔鶴はこの状況から察するに自身が空母水鬼に殺される事で元の世界の翔鶴は空母水鬼になるか、はたまた肉塊へと成り果てるかのどちらかになると思っていた。■少尉の実験体となり、翔鶴は死んだも同然の様な状態にいる。翔鶴にとって空母水鬼の台詞は殺されるまでの時間を引き伸ばされ、翔鶴の反応を確かめたいだけの煽りではない。

「ソナナ死ニ急ガナクテモイイノニ。トリアエズ言ツテオクヨ？」

翔鶴ハマダ死ンデナイ」

「は……?」

「確カニ翔鶴ハ私ノ全テヲ身体ニ注ギ込マレテ、元ノ翔鶴デハ無クナツテシマツテイル。デモソレハ元ノ翔鶴デハ無クナル話」

翔鶴の身体は今、空母水鬼となりどちらが主導権を握るか争っている。その争いがこの空間の中で行われるらしい。翔鶴が殺されれば翔鶴の身体は空母水鬼の物となり、翔鶴の元の人格は消えて新たな空母水鬼に生まれ変わる。その逆も存在し、もし翔鶴が空母水鬼を殺せば翔鶴の身体は肉塊となり、そのまま死ぬると言う。

だがそこで空母水鬼は新たな条件を提案した。互いに殺し合うの

ではなく協力関係を結ぶ事で翔鶴と空母水鬼は表裏一体の存在となり、互いに力を使用出来るだけでなく自由に姿を変える事も出来るらしい。そうすればまた仲間を守れると空母水鬼は豪語した。

「そんな事……信じれる訳無いじゃないですか……!!」

「イヤ本当ニ出来ルヨ? 何ナラ、翔鶴ニ主導権ヲアゲタ状態デ私ノカラ使ツテモイインダカラネ? マタ皆ヲ守レルヨ? アノ人ノ約束ハ果タセルヨ?」

空母水鬼の台詞に翔鶴は一瞬揺らぐ。翔鶴は自身が不甲斐ない所為で仲間を守るという約束を破ってしまった挙句、■■少尉に弄ばれて実験体にされて死ぬ事になっている。

当然翔鶴は後悔しており、背負い切れない罪の責任に押し潰されていた。あの人に会わせる顔も無い、自分は地獄に行くものだと思っていた。

だが空母水鬼の力を借りた状態ならばまた生き残った仲間を守れる。あの忌まわしい■■少尉という男から迫害されずに済む。翔鶴の中で徐々に考えが変わっていった。

「後悔シテ死ニタクナイデシヨ? 成レ果テタ肉塊ニナリタクナイデシヨ? 私ト組メバ、マタ約束ヲ守レルヨ?」

空母水鬼の誘いに翔鶴は警戒を解いて、少しずつ歩み寄っていく。翔鶴の精神は崩壊寸前でまともな思考は出来ていなかった。あの人約束の事や仲間を守りたい事で必死になり、後先を考える事は出来ていなかった。

「また……私は……守れますか……?」

「ウン守レルヨ……ホラ、オイデ……? 私ノカラ使ツテ、支配シテ守ロウ?」

「し……はい……?」

「支配スレバ皆ヲ守レルヨ？ 支配トイウカサエアレバ、傷ツカズニ
済ムンダヨ」

そういえばそんな事をあの男も言っていた様な気がする。

私が無力だから仲間を守る事が出来なかった。

私が無力だから約束を破ってしまった。

全ては私が弱者で無力な存在だから、こんな事になってしまった。

「力が……あれば……？」

「何デモ出来ルヨ……」

「支配……すれば……？」

「皆ヲ守レルヨ……キット」

そうだ、力さえあればまた皆を守れるんだ。

今度は無力なんかじゃない。

力がある私なら支配で皆を守る事が出来る。

「捕マエタ♡」

空母水鬼が歩み寄って来た翔鶴を抱き締める。

まるで母親に抱き締められた様な温もりが翔鶴を包み込んだ。

しかし空母水鬼の表情はその抱擁とは裏腹に、翔鶴を嘲笑う様に頬
が張り裂けそうな程の狂気の笑みを浮かべていた。

「今度こそ……皆を……」

「ウン……守ロウネ……」

抱き締められた翔鶴は空母水鬼と共に黒い闇の空間の中へ消え掛
けていく。翔鶴は空母水鬼にされるがまま目を瞑った。

そして翔鶴の身体と空母水鬼の身体が融合する。お互いの身体が
糸のように分解し始め、絡め合う様に密接に繋がっていった。次第に

糸は新たな身体を形成し、それぞれの記憶や感情、思考や性格が混ざり合う。

空母水鬼の支配という力による艦娘の殲滅。

翔鶴の託された想いによる仲間の絶対的守護。

二つの異なる思考が組み合わせさり、混合して変化、狂っていく。

力で支配して皆を操れば、余計な傷を負わずに済む。

自己保身に走らせれば必ず自分の身だけは守ってくれる。

それで死ぬ様ならそれは自分の所為だ。

私は悪くない、私は頑張った。

今度は仲間も頑張る番だ。

私だけじゃない、皆も守る様に頑張るんだ。

私の支配という力で守る様に頑張っていこう。

『最期ニヒトツ——』

『っ?』

『——才前ツテホント……馬鹿ダヨナア!!』

「っ……………」

「……………やっと成功したか」

地下の小部屋で目覚める。

男と深海棲艦に見守られながら起き上がった。

「ふっ……………」

その表情は悲しんでいるようでほくそ笑んでいるような、全ての感情が混ざっていた。

姿は翔鶴とは変わらない、だが何かが違う。

「最初に聞いておこう……………お前はどちらだ？」

「私……………ですか？」

「私は……………」

「——翔鶴、ですよ」

修羅の妄執に囚われた、哀しき鉄鶴が生まれた。

141. オプスキュリテは廳で晴れる

紅黒い曇天の空が次第に元の鼠色へと戻っていき、更には太陽の光が差し込んできた。黒く澱んでいた海を所々照らし、そして荒くれ鎮守府の広場にもその光に照らされる。

荒くれ鎮守府は翔鶴達との戦闘により廃墟の様な状態。建物の瓦礫は散乱し、第二倉庫は大爆発の影響で隣の倉庫に燃え広がっている。司令本部は龍驤との戦闘で半壊、翔鶴との戦闘の舞台だった屋上の軽巡察は真つ二つに寸断されていた。軽巡察の広場を挟んだ先にある重巡察は一部破損、工廠も一部突き抜けた形跡がある。

戦闘が終わった直後、憲兵や整備士達が燃え移る火を消そうと消火器や消防隊に連絡してくれていた。大体の火事が済んでいく中、第二倉庫跡の中心には瑞鶴によって殴られた翔鶴が倒れている。

「ごめん……」

地面にうつ伏せで倒れたまま涙を流す姉の姿を見て瑞鶴は顔を俯き、土が剥き出しの地面を強く握って歯を食いしばる。提督の効果消去薬によって全ての記憶が思い出した瑞鶴は今だからこそ分かる事があった。

翔鶴が今まで経験してきた悍ましい不幸の数々や仲間を守ろうと必死に足掻いてきた事。どれだけ自身が凄惨な事を受けても翔鶴は仲間を守るという信念を貫き通していた。

「どれだけ心を打ち砕かれようとも、

「どれだけ精神をすり減らされようとも、

「どれだけ自分の身が穢れようとも、

翔鶴は既に犠牲になっているのにそのまた犠牲になった上で仲間を守る事だけに執着していた。

だが何故仲間を守りたかった姉の翔鶴の性格が一変し、今になって仲間と敵対してしまったのか。妹の瑞鶴には分からなかった。

「私は、馬鹿だな……」

深海棲艦になってしまいう程にまで翔鶴は追い詰められていたのだろう。瑞鶴はあの時気付かずに前任に操られていた自分自身を憎ん

だ。もつと早く気付いていれば、もつと早く支えていれば、こんな事にはならなかったのかもしれない。

果てしなく続く過酷な地獄の血海で孤独に揺蕩う姉に手を差し伸べる事が出来ていたら、ただその姿を何の感情も無く呆然と眺めていた自分が勇気を振り絞って姉の後を追っていれば、少なくとも何かしら変化はあったのかもしれない。

背中に押し掛ける後悔の念に瑞鶴は押し潰された。

「逃げ瑞鶴、提督が来るぞ」

倒れる翔鶴の傍で割座していた瑞鶴の元へ、摩耶が声を掛ける。背後を振り向くとそこには風に揺らされた長い白髪を靡かせ、眼を紅く滾らせる提督が立っていた。翔鶴が仕掛けた罠により、大怪我をしていたが自然治癒力で治したのでろうか。摩耶は返答も聞かずに瑞鶴を抱き上げ、提督の背後まで移動させられた。提督は寡黙なまま、倒れる翔鶴の元まで一人で歩み寄る。

すると――、

「っ……」

翔鶴が意識を取り戻して起き上がる。そこに空母水鬼の様なシヨウカクの姿は無く、元の翔鶴の姿に戻っていた。正装は素肌や胸が見える程までボロボロに、艦装は一部が破損状態で小さな黒煙が空に昇っている。翔鶴は割座になったまま顔を俯かせ口を開かない。

その姿を見て提督は腕を伸ばし、背後にて身構える摩耶達を抑える。そして翔鶴と同じ視線になるようその場に胡座をかいて座り込んだ。

「散々やってくれたなあ、翔鶴」

「……」

翔鶴は提督の声に気にもくれず、ただ只管に顔を俯かせ黙り続ける。

「お前のおかげで俺は死にかけた訳だが、そこの所お前はどう思ってる?」

「……」

翔鶴の仕掛けた罠により、提督は幾度となく生死を彷徨った。日常

的に行われる度の過ぎた嫌がらせ、プライドを傷つかせる為の社会的抹殺、左腕を只管に切断し続けた拷問。

翔鶴は全ての行動は仲間を守る為だと訴えていた。自分が支配という力で皆を操れば余計な傷を負わなくて済むという無茶苦茶な思考で、唯一邪魔者だった提督を追い詰めた。傍から見れば翔鶴のは矛盾した救いようなのない考えで悪行そのものでしかない。逆に翔鶴の中ではその支配という力は悪行だと自覚していたのか、そこが分からなかった。

「支配して守る……目的は間違っちゃあいないが、方法が間違ってるな」

「……」

「そんな方法で本当にお前は……仲間を守れたのか？」

提督はこの潮岬町鎮守府に着任するまで、艦娘達の情報は粗方知り尽くしている。艦娘達が悪逆非道の前任によって性格が変貌し、賑やかな鎮守府などには無くなっていた。しかもこの鎮守府は提督にとって恩人とも言える蒼色が遺したモノであり、昔しつくく話してきた蒼色が託した理由と意味を改めて知った。

「まあお前が守れたって言うんだったら守れたんだろうな。お前なりに頑張って来たんだってのはよく分かった」

「……」

「……何か言ったらどうだ？ 別に今お前をどうこうするとかそういう話をしてる訳じゃない。お前が何故、深海棲艦になってまで仲間を守らなきゃいけなかったのか。それを俺は知りたい」

提督は神妙な表情で翔鶴を見続ける。黙り続ける翔鶴に痺れを切らした提督は本音を伝え、翔鶴に口を開くように促した。

翔鶴に対しては数え切れないほど言いたい事がある。

しかしそれを言う前に提督は確認したい事が出来ていた。

「あの人の……約束を……守りたかった……」

「■蒼 ■中尉のか？」

「どうしても……あの人の約束を、守りたかった……」

ようやく口を開いた翔鶴は蒼色をあの人と称して提督に話し始め

た。顔を俯かせながら時々涙を零し、声を震わせながら喋っていく。翔鶴の想いはただ一つ。

皆を守って蒼色の約束を守りたかった。

「ただ守りたかった……守りたかったただけなんです……」

「でもお前は平然と仲間を見捨てる様な事をしてたよな。それでもお前はその約束とやらを守り通したかったのか？」

また翔鶴は口を塞いで黙り込む。

「どうやら良心の欠片というモノは残っていらしい。仲間を守るという約束に固執している翔鶴が仲間を見捨てる事などあつてはならないはずだ。」

だからこそ提督は考えて気付いた。

翔鶴達が守っているのは仲間ではなく、蒼色の約束を守っている事に。

「翔鶴……お前は仲間を守りたかったんじゃないんだな」

「違います……私は……」

「違くない。お前は蒼■中尉の約束を守る事だけに執着して、本来の目的を見失ってるんだ……破ってしまった蒼■中尉の約束を今度こそは必ずと立ち上がり、仲間を守ってきたと思いつけていた」

明らかに翔鶴の人格に歪みが生じてるのは確かだ。

良心の欠片と支配という傲慢さが極端に現れ、真反対の矛盾した人格になっている。

仲間を守るという約束から仲間を守るという約束を守る為、という風にすり替わってしまった。この様子だとすり替わっていた事に翔鶴は気付いていなかったのだろう。蒼色を大切に想うばかりにその約束を守る為と暴走してしまったのかもしれない。

「だがそれらは全て幻想に過ぎない自身の理想だ、現実はそう甘くない。三十人近くいた艦娘は全て肉片か海の底、一人は深海棲艦として甦る始末……大切なモノを奪われていくうちにお前はこう思ったはずだ……約束の為の犠牲ならば仕方ない事、生き残った仲間だけでも守り抜く、と……徐々に自分は自分自身を守る様に正当化したんだ」

「違う……私は……!!」

提督の惑言に翔鶴は否定しようと目線を合わせて口を開く。

だが否定の言葉が出る前に自分自身が何なのかを先に考えてしまった。頭を抱えて首を傾げては狂う様に自問自答し続ける。最早何がしたかったのか思考が処理し切れずに頭が狂い掛けるようだ。

「私は……私は……?」

「恐らく俺の考察が正しければだが……お前の中に空母水鬼がいるよな?」

「ッ!!」

空母水鬼と言葉にした途端、翔鶴は怯えるように身体を跳ねらせる。自身の正体を見透かされた翔鶴は頭を抱えたまま左右へ振り、怯えた子供の様に身体を震わせ目を瞑った。涙が滝のように流れ出ては地面を濡らす。

「実は俺の摩耶も似た感じでな、詳細は言えないが摩耶も深海棲艦と共存してる……まあ一方的な摩耶の支配なんだがな。お前もそういう感じだろ」

「な、何を言ってる……私は翔鶴、ですよ……? 空母水鬼なんて……うっ!!」

提督は翔鶴が深海棲艦になった時からどういう状態かを知っていた。翔鶴と同じく、摩耶も一応深海棲艦に変身する事が出来る特殊な能力を持っている。

原因は摩耶の身体の中に深海棲艦の液体が入っている所為だ。ある事により深海棲艦の液体を流し込まれた摩耶はその深海棲艦を一方的に支配し、不平等条約を結んで深海棲艦の力を扱える様にしている。それぞれ摩耶の人格と深海棲艦の人格が存在しているが、摩耶が支配しているので今は本来の摩耶の人格になっている。

また変身については一部に過ぎず、艦装が変形するぐらいのモノで全身が深海棲艦になる事は滅多に無く、最終手段として隠しているらしい。

「惚けても無駄だぞ。まあこの様子だと人格が混ざっている可能性があるな。恐らく元の翔鶴の人格は既に死んでいるのかもしれない」

しかし翔鶴は心の中から現れる空母水鬼を必死に抑え、何とか閉じ込めようと抗い続ける。何度も頭を叩きつけては血を流し、主導権を保持しようとしていた。

「はあ……はあ……私は……間違つて、ない……！　間違つてない、のに……あああ……!!!」

空母水鬼を抑え込む事が出来たのか息が荒れている。整えられた白髪もバラバラになり、痛み悶えるような表情で翔鶴はまた頭を抱えた。

瑞鶴以外の潮岬町鎮守府の艦娘達は翔鶴がどんな目にあつてきたのかよく分からなくても、想像で考えるには難しくない事だった。

記憶改竄や洗脳から解き放たれた今なら理解出来る。

忌まわしき■少尉によつて人格が歪む程までの屈辱を受け続け、敵に成り果てた翔鶴の果てしなき惨憺たる過去を。

翔鶴が許せない事をしたのは事実でもある。敵対して戦った古鷹達は一度制裁を受けてもらわなければ気が済まなくなつていた。当然他の艦娘達もいなくなつてほしいと思う気持ちも必然だろう、だが提督の言葉を聞いて少しだけその気持ち揺らいでしまった。

許せない事をしたのは翔鶴だけではなく、翔鶴の中にいる空母水鬼だという事に。

「……摩耶的にどう思う」

「無理だろうな。まだそれぞれの人格があるなら横須賀の改修装置で何とか出来るだろうけど……人格が融合してるんじゃ、その融合した人格の一部にいる翔鶴の人格が勝たない限りは……改修しても無理だと思う」

「そうか……摩耶、砲撃」

「了解」

提督の指示に合わせて摩耶が空へ砲撃する。砲音が水平線の奥まで鳴り響き、曇天の空から蒼い空が顔を出した。太陽の光が提督を照らし、対となるように翔鶴は影で覆われる。

「勝手に壊れては困るぞ翔鶴。まだ知りたい事が山ほどあるんだ」

「ヒツ……!!」

砲音によつて一時的に覚ました翔鶴は提督に睨みように怖気付く。最早提督達に抵抗する力も無いようだ。戦争に負けただけでなく全てを見透かされた翔鶴にとつては自身を守る事で精一杯になつていた。提督はその様子を見てもなりふり構わずに翔鶴に問い続ける。

「翔鶴、お前は自身の中に空母水鬼がいた事をあの四人には教えていたのか？」

「い、いえ……龍驤さん達には……教えていません……」

翔鶴曰く、自身の中にいる空母水鬼の事は誰にも教えていないと言う。液体を入れられた実験の事は鎮守府にいる艦娘達は全員知つておらず、■少尉が実験に関する内容を口封じも合わせて隠蔽し続けていたようだ。

「そうか。まあそれは後で参考にするとして……戦つてる途中、那智や利根から勇気ある告白を報告で知つたんだがな？ どうやらお前はどうしても言えない事情があるみたいだな。何故言えないんだ？」

提督がもう一つ知りたかつた事。

それは戦闘中に確認された翔鶴達を操り脅している黒幕の存在。

長門曰く、那智や利根は何かを隠しているようで気付いてもらいたいような口振りをしていた、と報告を受けている。

そこで提督は阿賀野達と五十鈴、第六駆逐隊、空母機動部隊を使つて裏の存在があるかどうか、この鎮守府内十キロメートル圏内を搜索する任務をしてもらった。もしこの場で言えない事情があるのなら、この鎮守府を最初から見張つている存在がいるはずだ。翔鶴達が秘密を漏らす様な真似をすれば即座に何かが発動するなどと言つた脅しをされている可能性がある。

「……」

「言えないのか？」

「言え……グッ……!! 言え、ません……」

「何で？」

「言え、皆さんが……殺されてしまうから……」

鈴谷達は翔鶴の言葉を聞いて利根が似たような事を言つていたの

を思い出す。

利根は『そうでもしなければお前達は殺されてしまう』と言っていた。

翔鶴や龍驤、利根達がわざわざ敵となって戦わなければならない程の脅迫を受けているのは明確。どうしても譲れない何かがあったからこそ翔鶴達は敵対した。

「誰にだ？」

「……」

「提督！　只今帰還しました！」

搜索任務から帰還した阿賀野達が提督に声を掛ける。

雑草や茂みの中へ入ったのか少し土で汚れ気味だ。

「成果は？」

「……申し訳ありません。黒幕らしき存在は確認されませんでした……」

「そうか。分かつ」――ですが」

提督の言葉を遮り、阿賀野は声を震わせて恐る恐る口を開く。冷や汗を掻きながら阿賀野は真剣な表情で提督を見つめた。思わず遮られた提督は阿賀野の方へ視線だけを移し、阿賀野を睨みつける。

「心当たりのある人物が……います」

「……ほう……誰だ？」

提督の眼が鮮明に紅く染まったのを見た阿賀野は少々怯えながらも身体の向きを変える。そして腕を広げて人差し指であるモノを指差した。流れに沿って提督や摩耶達はその指差した方向へ身体を動かす。

そこにいたのは――、

「島風さん、です……」

摩耶達の最後列に島風がポツンと一人で立ち尽くしていた。

「えっ……何で……？」

「……お前ら、捕らえろ」

突然の名指しに島風は顔を青ざめてたじろぐ。身に覚えのない反応をしてはゆっくりと後退りし始めた。それを見た提督は思い出し

たかのように目を見開き、摩耶達に島風を捕まえるよう命令する。怯える島風は即座に摩耶達に捕らえられ、提督の目の前に強制的にひれ伏された。

「よくよく考えれば確かにお前が一番怪しいなあ、そういえばそうだった。あのクズが夜逃げした後の一週間後に塩岬町鎮守府に漂流して何気なく生活してるんだもんなあ……あまりにも辻褄が合い過ぎる」

よくよく考えてみれば島風の存在はあまりにも不明瞭だ。

■少尉が夜逃げした一週間後に島風は何故か潮岬町鎮守府近海に漂流し、記憶を失ったままたの間にか住み着いている。夜逃げしたタイミングで一人の艦娘が鎮守府近海に漂流するなど偶然過ぎるだろう。提督などの責任者がいない状態であればどこの所属かは判別不可能、更に記憶を失っているとなれば漂流した鎮守府に留める他は無い。

「提督……私は、本当に……！ 知らないよ!!?」

「んじゃそれが本当かどうか、その白いお姉さんに聞いてみようじゃないかあ、なあ？」

目の前に仰向けにひれ伏せられた島風を見て翔鶴はあからさまに動揺する。目を泳がせ息が荒くなり、徐々に呼吸が乱れてきた。島風を見つめる度に身体中の穴という穴から汗が湧き出てくる。

「私は知らないんだって！ 違うよ！ 私は——し——えあ……——うかく……」

島風はひたすら無実である事を主張し続ける。

しかし突然電波の悪いラジオの様に声が途切れ、様子が激変。頭を左右上下に振り回し、人ならざる動きをしている。

「言え、ば……分かつ、てるよっ……なあ……」

「これは……!!」

「成程……」

そこに島風の口調は存在せず、男のような口振りで話し掛ける何かがあった。眼を紅く輝かせ、翔鶴に明らかな殺意を向けて睨んでいる。

この口調はあの男とみて間違いないだろう。提督は手のひらに顎

を置き、何か考える仕草をし始める。そして何かを思い出したのか提督はある命令を摩耶達に出した。

「……摩耶、プリンツ、不知火、島風の身体を徹底的に探れ」
「了解」

「おい！ やめろ!! そんな事をすれば貴様諸共——」

島風の後頭部辺りで火花が散る音が微かに聞こえた。すると島風は白目を向いて意識を失い、糸を無くしたあやつり人形のように地面に顔を伏せる。摩耶が淡い金髪の後頭部からある物を取り出す。

それは――、

「……提督、あつたぞ。深海棲艦の侵食通信機だ」

「やはりな、だと思った」

摩耶の摘んだ指には黒く滑りのある触手のようなモノと小さな基盤があつた。深海棲艦の侵食通信機、摩耶曰く一度でも取り付けられれば深海棲艦の操り人形となり、スパイとして送り込む事が出来る代物らしい。遠隔操作で自由に取り付けられた艦娘の身体や意識を乗っ取り、思うままに操作する事が出来る。

過去に三回程この侵略通信機が使われた事例が存在し、海軍も把握していた。

轟沈したはずの艦娘が何事も無かつたかのように生還し、何の支障も無く生活を送っていた事がある。

しかしある日突然に、その艦娘が非公開だった作戦内容のデータをハッキングして入手しようと執務室に侵入し、警戒中の憲兵達に見つかって確保。まるで操り人形の様に抵抗もせず言葉を発さない事から、怪しんだ憲兵はすぐさま身体を調べた。

すると後頭部から黒い触手の様な通信機が取り付けられ、取り外した途端にその艦娘は意識を失う。事後、意識を失った艦娘は帰還してから確保された間の記憶の一切を覚えておらず、自身が沈んだ事しか頭に無かつた。

この事例から島風が身に覚えのないような素振りをしていたのも納得出来る。恐らく記憶を失った理由も侵食通信機の影響だろう。

「さて……今お前を脅すような輩はいなくなつたぞ」

摩耶が島風に取り付けられた侵食通信機を握り潰したのを見た翔鶴は何故か涙が止まらなかった。

それは一瞬の解放のようなモノなのか、今まで溜め込み閉じていた全てが放出されそうだった。泣くと同時に嗚咽を漏らし、翔鶴は腕で自身の顔を隠す。

「この通信機が途絶えた以上は空母水鬼の脅しも意味ないぞ、さあ存分に言いたまえ……どんな脅迫をされてたんだ？」

「……深海棲艦襲撃時に、この鎮守府を深海棲艦の第一拠点にする為、その間まで私が支配し続けろと命じられました……もし崩れる様な事があれば七壊星の三人を襲撃させ、ここにいる皆さんを痛め尽くした後、深海棲艦化させると……脅されました……」

怯えながら声を震わせながら心の中に出てくる空母水鬼を抑え、翔鶴は恐る恐る脅迫された内容を話す。

化け物揃いの七壊星を三人程この鎮守府に出撃させれば抗う術は殆ど無いだろう。即座に蹂躪されて痛め付けられるのが目に見えて分かる。

恐らく翔鶴もそれは分かり切っていた、だからこそ言いなりになる他は無かった。仲間を必ず守るという約束を守るという執念深く積み上がった感情と、支配して守るといふ■少尉や空母水鬼によって狂ってしまった思考を持つ翔鶴にとつては、その二つを同時に熟す事が出来る唯一の守衛且つ手段であり、格好の方法だった。

当の本人がその脅迫を受けて、優遇制度を続けた時の思考や感情がどんなモノかは提督から見ても分からない。

翔鶴は二人の悪魔によって人格が狂い変わってしまった。

元の心優しいお人好しな人格は消え去り、支配という力に目覚めた悪魔の如き冷酷な人格に。

もしその時の翔鶴に元の性格が存在していたとしたら、拭えない罪の意識に囚われていた事だろう。

勿論翔鶴自身は止めようと心の奥底では思っていたのかもしれない。支配して守るといふ狂い混ざった固定概念にはただ支配するだけだけでなく仲間を守るといふ翔鶴の願いと想いの残滓が残っていた。

「……分かった。じゃ改めて聞くぞ？ お前らを脅してるのは■■少尉か？」

「……違います、もう一人……」

「つ……そいつは誰だ？」

翔鶴が震えた声で否定の声を出す。

その声を聞いて提督は一瞬動揺していた。提督の中では嫌な予感がしてならない胸騒ぎがしている。

提督は■■■大將が訪問し、計画について話し合った時の事を思い出した。

『——もう分かるだろう……この計画を進めているのは我々人類とその代表である……ある男しかない……』

『まさか……』

『——日本海軍元帥だった……今は■■■元帥を裏で操っているだろう……』

「……『黒■■■』元帥……」

「何だと!!?」

男の名前を聞いて摩耶は大声で動揺し始める。長門や金剛達は驚きの声を隠せずに摩耶と同じく動揺していた。

誰もが聞いた事はあるだろう有名な名前。

当時は元帥海軍大將として英雄と呼ばれた男だった。

「やはりか……」

提督も動揺していたが、それ以上に事の重大さに思わずニヤついていた。

やっと闇の深淵に辿り着いた様な気分だ。計画の実行者は■■■少尉であり、それを手助けしていたのは元帥だった黒■■■という男。この二人が計画遂行の為に翔鶴を脅し続けていた。

「翔鶴」

「っ……っ？」

提督は重い身体を無理矢理立ち上がらせ、しやがむ翔鶴を見つめる。暖かい風が流れ、靡く白い長髪が光に反射して綺麗に輝いた。翔鶴は名前を呼ばれ、顔を上げて提督の顔を見る。提督が一瞬、穏やかな表情をしているのを見た。

「本当は罵声の一つや二つ、乱れなく浴びせたい所だが……生憎、今はそれほど余裕じゃない……だから色々な思考や感情を抜きでお前に一つだけ言っておこう……」

すると提督は翔鶴の元へ寄り、右手で翔鶴の頭を自身の胸によせ、ゆつくりと口を開く。

「……よく言ってくれた、感謝する」

その言葉を聞いて翔鶴は静かに声を漏らして泣き崩れる。溜め込んでいた感情のダムが崩壊し、まるで子供のように我武者羅に泣き喚いた。

■少尉に縛られた暗黒の呪縛に苛まれ、全てを抑え込んでいた翔鶴。

何も翔鶴が全て悪い訳では無い。

この鎮守府を変えてしまった元凶はまだ奥深くに潜んでいる。翔鶴もまたその元凶に貶められた一人の被害者に過ぎない。龍驤や利根、那智や葛城も■少尉という元凶に貶められた立派な被害者だ。苦しかっただろう、辛かっただろう。何度も涙を流しただろう。悩んだ事だろう。

幾度となく凄惨な目にあつた翔鶴の抗い続けた努力は計り知れない。

「話は終わりカナ？」

「っ？」

聞き覚えのある声が聞こえた。

提督は金剛の方を振り向くが、その金剛は別の方向を見ている。提督も視線を移してその方向を見た。

そこには目が黄金に輝かせ堂々と腕を組む叢雲、不気味な笑顔で見

つめる吹雪がいる。背後には鹿島と日向がいた。

「貴方が白、デスネ？」

「ああ……そうだが」

「私達は護神厄討艦隊、『?』、『?』、『?』、そしてこちらが旗艦の『?』と申しマス。以後お見知りおきを」

『?』金剛は礼儀正しく提督に頭を下げて正式な挨拶をする。提督は護神厄討艦隊と聞いて険しい表情になった。挨拶を終えた後に『?』金剛は後ろへ下がり、『?』叢雲が前に出て提督に近付く。

「任務により、貴方を隔離します。その為、一時的に鎮守府の責任者は私『?』に預からせてもらうわ。横須賀鎮守府までは『?』達が同行するけど、貴方に拒否権は無いので文句なら司令官に言っ頂戴」

「……なるほど、分かった……っいて行こう」

「ちよ、ちよと待ってくれ！ 私達はまだ——」「黙りなさい!!!」

叢雲が大声を上げて長門達を一蹴する。身体から黄金の光を纏い、敵視した眼で長門達を睨みつけた。その眼は全身から逃げろと危険信号を発する程の純粋な死の予感を伝えさせてくるほどだ。

「今更何をするつもりかしら？ 後で裁いてもらうけど一時的にこの鎮守府の地下営倉に住んでもらうわ。憲兵隊!!!」

『?』叢雲は静かに怒り、長門達を言葉で押し倒す。そして怒り殴る様に大声で憲兵隊を呼び出した。

「は、はいー」

「今すぐここにいる馬鹿共を一人残らず全員捕らえ、地下営倉に閉じ込めておきなさい。もし逃げるような馬鹿がいたら殺しても構わないわ」

「わ、分かりました……」

叢雲は冷静に憲兵隊に指示を与える憲兵隊長は少し戸惑いながらも部隊に命令を与え、次々に艦娘達を専用の拘束器具で捕らえていく。艦娘達はされるがまま両手両足を拘束され、地下営倉へ連れていかれた。

翔鶴達との戦闘で夢中になっていたが、全ての艦娘達は提督に過度な暴力を振るっている。勿論プリンツや不知火、川内や加賀達は自身

が犯した過ちを忘れていている訳では無い。一度だけでも謝りたい、そう思って提督の名を呼び続けた。

『緋』と『鏢』はこちらに来なさい、後で事情聴取するわ」

「分かった……」

「分かりました」

しかし提督は『?』に連れていかれ、摩耶と鹿島の姿で見えなくなった。提督は終始無言でプリンツ達の呼び掛けに全く応じない。

「一時旗艦を『緋』、アンタに任せたわ。後の事は『?』がやってくれるから」

「でも『?』、お前は……?」

「私はここに残るわ。上官に反逆したろくでなし達の管理と艦娘が誰一人もいない鎮守府に攻めてくる雑魚どもを蹴散らす為の防衛にね」

潮岬町鎮守府の一時的な責任者として『?』叢雲が残る事になった。誰もいない無防備な鎮守府など、深海棲艦に容易く落とされるのは必然だ。これからは鎮守府の管理と鎮守府近海の防衛を担うらしい。更に聞いた話では七壊星を連れてくるような事を聞いている。様々な事情がある以上は残っておいた方が先決だろう。

「狡いです『?』さん。私も残りたいです」

「そうよネー、ミーもここに残りたいナー」

「アンタ達はこれから別の出撃任務でしょうが!! 忙しいとかほざいてたのは誰!!!」

叢雲がブーブーとブーイングする『?』と『?』を怒鳴りつけた。

槍の穂を頭で何回も叩き、どうしようもない二人に説教し始める。流石は護神厄討艦隊の旗艦というべきか、凄まじい威圧を感じた。

「ほら行きなさい、早く!!」

142. 身が朽ち果ててもソレは變わりゆく

『お願い貴方……この子と一緒に……逃げて……!』

『遠く離れた場所へ……私と関わる事のない所まで……!』

『いつかきつと……私達の夢が叶えられたら……! また――』

『――あの場所で……お話……しましう……』

翔鶴達との戦争が終結し、潮岬町鎮守府は護神厄討艦隊旗艦^{オウゲン}『?』叢雲によって取り締まられた。提督は護神厄討艦隊^{ヒョウコウ}『 \boxtimes 』金剛に保護又は救助され、横須賀鎮守府へ連れていかれる。摩耶や鹿島も^{ラセツ}『?』吹雪の監視下の元、事情聴取の為に横須賀鎮守府の地下営倉へ連行された。

潮岬町鎮守府では^{オウゲン}『?』叢雲の指揮下により、艦娘達は地下営倉に全員収容。常に憲兵隊が見張るよう命令し、休憩時間では憲兵や整備士達に事情聴取。情報を掻き集め、原因を模索した。

翔鶴達との戦争により、半壊した鎮守府の建物は即座に撤去。噂をかきつけた鬼の^{オウゲン}■大佐が建築費を請け負い、新たな建物の建築が始まった。『?』叢雲は無傷だった講堂の中の部屋に仮司令本部を設置し、一時的に潮岬町鎮守府の提督として灰色が指揮を務める中で鎮守府近海海域の哨戒にあたる。

そして二日後――、

「っ……」

ゆつくりと重い瞼を持ち上げる。

広がる視界には白い天井が映った。

風に揺らされる草木の音、そしてある一定の感覚で電子音が聞こえる。風に揺らされた白く薄いカーテンが目に入り、思わず顔を横にした。

見えるのは大きな窓、そして広がる蒼い空。

次に自身の左腕、白い布団に寝る身体、自身の右腕と視線を移動させていく。

そして最後には自身の右手を握りしめたまま、椅子に座って寝ていた摩耶がいた。

「……」

摩耶の背後にある壁の時計を見て時間を確認する。

時間は午前十一時、昼前時だ。

白い天井、白いカーテン、白い壁にこの状況。

辺りを見渡して提督は、自分は今横須賀鎮守府の医療施設にいる事を把握した。

「……はぁ」

横須賀鎮守府に到着した時から鮮明な記憶はあまり残っていない。

確かあの時自分は突然視界が歪み、力が抜けて倒れてしまっていた。その後の記憶は全く覚えていない。恐らく貧血か、あの液体が足りていなかった所為だろう。今はあまり身体を動かせないが、身体感覚は平常だ。

「災難だな……」

提督は翔鶴達との戦争を思い出し、自身の無様な姿を鼻で笑った。今思えば翔鶴に躍らされた自分が恥ずかしく思える。まさか左腕を何度も切り落とされ、死を迎えるかもしれない程の状況にまで追い込まれるとは全く想像していなかった。あの時に鹿島がいなければ本当に自分は死んでいただろう。

「摩耶……」

摩耶にも申し訳ない限りだ。

普段から迷惑をかけた分、随分と面倒な事に巻き込んでしまった。無理矢理にでも摩耶を攫っていれば、状況は変わっていたのかもしれない。

正直な話、翔鶴達との戦争でも摩耶なら大丈夫だろうと過信していた。故に翔鶴が人質にとるとも思わなかった。

「ごめんな……」

「……………提督……………」

提督の言葉な耳に入ったのか摩耶が目覚める。目を腕で拭い、提督の顔を確認し始めた。摩耶の目下にはクマが出来ており、深夜まで起きていたのがよく分かる。ずっと付きつきりで見守ってくれていたのだろう。

「提督……………！ 目が覚めたんだな……………」

「ああ、そうだな」

意識を取り戻した提督を見て摩耶が思わず安堵する。そして手より一層と強く握り、涙を零して摩耶は泣きながら話した。

「ごめん……………提督……………！ あたし、提督の事蹴り飛ばしちゃった……………本当は味方にならなきゃいけないのに、まんまと翔鶴の罠に引っ掛かってあたしは……………!!」

「分かってる。お前がどれだけ抗ってくれてたのかくらい丸見えだ……………あまり自身を責めるな」

摩耶自身は提督の味方になれなかった事に負い目を感じていた。提督が唯一信頼出来る艦娘ゆえに摩耶は支え、支えられてきた今がある。提督を一番に信頼して一番愛しているからこそ、あの時の場面は提督の味方でありたかった。

だがその支え合っていた信頼が仇になるとは夢にも思わなかっただろう。お互いがお互いに支え合い、顔を合わせずとも頼り合っていたのが逆にどちらかを不幸な目に合わせるモノとは想像し難い事だ。「俺はお前に頼り過ぎていた。摩耶だったら大丈夫だろうと、期待して頼り過ぎていたんだ……………お前はそ期待に答えようと頑張っていた……………でもお前もイツらと同じ艦娘、一人の人間としてそう変わらない……………ごめんな、頼ってばっかで」

「違う！ あたしだって提督を頼ってた!! 提督なら大丈夫だろうと思ってた……!! 謝るならあたしの方なんだよ……! 提督だって自身を責めないでくれよ……」

摩耶に言われて提督は初めて気付く。今自分は自分自身の事を責めていた。自身の今の性格で自分を責める事など全く無かったはずが、散々追い込まれた事で性格が変わりつつあるのだろうか。提督は空いた左腕で顔を隠し、後悔するように苦笑いした。

「ああ、そうだなあ……自分を責めるなんて久しぶりだ……柄にでもない事をするようになったもんだな……俺も……」

提督は首を傾け、窓に映る蒼空を眺める。

空を覆い尽くす程の入道雲が成長し、飛行機雲が跡を残して消え掛けている。

あの時の夏とそう変わらない風景だ。

確か初めて外を出た日の空もこんな風景だった。まだ子供だった自分を助けてくれたあの日からはや数年。

今まで色々な事があった。

人格を改変させられるのはこれで何回目だろうか。

「なあ摩耶。俺はまた変わっちゃったか?」

「いや……いつも通りの……提督だ」

「そうか……それは良かった」

摩耶は動揺しながらも提督の問い掛けに答える。

提督は摩耶が言わずともその表情や雰囲気で察してしまった。

「……変わるのは何回目だろうな。もう変わり過ぎて本来の自分なんて覚えてやしない」

翔鶴との戦争で僅かながらに提督の人格は変わってしまった。

間の絶えない極度な嫌がらせと暴力、プライドをズタズタにされるなどの精神的苦痛、そして時間がまるで永遠のような激しい拷問。精神が追いやられていた提督の人格に自虐的な性格が新たに作られていた。

自分がやらなかったから自分が悪い、相手を巻き込んだのも自分の所為などという自身を責め込んでしまうような性格がいつの間にか

出来上がってしまった。

先程自分を責めたのも、その人格の変化による現れだろう。

「何度変わっても……あたしは提督の味方だ。どれだけ世界に操られても、あたしは提督についていくって決めたんだ……！」

「さーてその俺にどこまでついてこれるかなあ？」

勿論、なりふり構わず他人に攻撃的でウザい人格は今も健在だ。

この人格は一生変える事も、変わる事も出来ない。

また新たに次の人格が形成され、ウザい人格の中に混合されていく。

そうして出来上がったのが破綻した人格を持つ今の提督になった。

「そ、そうだ……■大将から連絡する様に言われてたんだ。提督、ちよつと席を外すぞ」

「ああ分かった」

会話が途絶えてしまい、何となく気まづい摩耶は■大将の事を思い出し、病室を去る。広い病室に提督だけが残り、草木が風に揺れる音が囁かに流れた。

「……」

提督は窓の景色を見ながら、潮岬町鎮守府の艦娘達の事を思い浮かべる。

初めて会った時から彼女達の事は物凄く嫌いだった。

抗える力はあるはずなのに一向に立ち向かおうともしない行動力の無さ。

自虐的な性格や弱気な性格、自らやろうと思わない自主性の欠如。様々な問題点ばかりで気が遠くなりそうだった。

他人から言われて初めて気付くのではなく、自分を見つめ直して自分の欠点に気付く事で成長を促すのが提督の目的。目的の為ならば自分が悪になろうがお構いなしに行動し続けた。

だが自分から言わなければ気付いてくれない事もあった。何ぶんこんな攻撃的な破綻した人格では本音はそう簡単に吐き出せない。故に伝えたい事も伝わっていかどうかは分からない。成長してくれるかどうかも分からなかった。

しかし彼女達は自身を見つめ直し、僅かではあるが成長する様になつていた。例えそれが一ミリにも満たないモノだとしても、彼女達にとつては立派な成長だった。辿り着くまでに様々な困難があつたからこそ彼女達は立派に成長したのだろう。

その成長し続ける彼女達を見続け、提督の心境も変化していた。嫌つていた艦娘と馴れ合うつもりはなく、ましてや仲間を作るつもりなど無かつた。仮に仲間が出来ていたとしても提督は無視し続けていた。

だがその仲間という上辺だけのモノが今の自分に足りなかつた必要なモノだった。仲間というモノが無意識に信頼という関係を作り出し、提督が意識せずとも頼っている場面が度々あつた。

恐らく自分はどこかで彼女達を信頼していたのかもしれない。表面では信頼の言葉すら考えないほど信じていなかったはずが、裏では彼女達に少なからず信じて頼っていた気持ちがあつた。

「これだから人間は嫌いだ」

——潮岬町鎮守府

「僕達……これからどうなるのかな……」

「分からないっほい……」

陽の光が届かない地下営倉にて艦娘達は心配の声を上げる。翔鶴達との戦争後、地下営倉に収容された艦娘達は囚人の様な生活を強いられていた。一日中牢屋に閉じ込められ、手足は拘束器具にて自由を奪われる。

そして憲兵に見張られてる中で朝昼晩の食事が与えられた。営倉内は綺麗に清掃されて嫌な匂いは感じないが、鉄格子に閉じ込められている為にプライバシーの配慮が全く無い。故に隣から何を話しているのか丸聞こえで、大半の艦娘が提督の安否に不安になっていた。

「提督……大丈夫かな……」

「多分大丈夫だよ……多分……きつと」

誰もが提督の心配をしている。

『?』オウゲン 叢雲からは横須賀鎮守府に到着した際、急に意識を失い倒れた

と言われた。その後は何も聞かされず、提督が無事なのかどうか分からない。翔鶴達との戦争で後回しにされていたが、殆どの艦娘達は提督に対して嫌がらせという名の過剰な暴力をやってしまっている。

当然忘れる筈もなく、仮にも上官である提督を死に一步寸前の所まで追い込んでしまった事に罪悪感で押し潰されていた。自身のやりたい事を手伝ってくれた艦娘にとってはその罪悪感は凄まじいモノだろう。死を持って償わなければならぬと自殺未遂を図る艦娘を止める為に、憲兵達が常に見張っては慰めの言葉で何とか止めさせていた。

「ん……あれは……」

地下営倉の重い扉が鈍く開き、金属同士が擦れ違う音が残響して響き渡る。明るい光が地下営倉内の廊下を照らし、ある艦娘がその光を遮った。槍を構え金色の眼を輝かせる『？』オウゲン叢雲がゆつくりと姿を現す。地下営倉を広々と眺め、近くの憲兵に話し掛けた。

「馬鹿共の体調は？」

「今のところ問題ありません」

「なら構わないわ、引き続き警備するように」

憲兵が渡したクリップボードの報告書をスラスラと読み流し、叢雲はそのまま憲兵を返す。早足で地下営倉内の廊下を歩き、足音を周囲に響かせた。少し歩いた先で足を止め、槍を振り回して仁王立ちする。

「馬鹿共に朗報よ。白中將が午前十一時程に目を覚ましたわ」

叢雲の報告により、牢屋にいる艦娘達は一斉にザワついた。

提督が無事だと聞いて安堵の声を漏らす。

「現在は医師が様子を診ているわ。とりあえず目を覚ましただけでそれ以上は何も進展は無いわね。うん以上」

「ま、待ってくれ！」

叢雲が報告を済ませて地上へ戻ろうとしたその時、一人の艦娘が叢雲を呼び止めた。叢雲は首を動かして身体を振り向かせず背後にいる艦娘を確認して睨みつける。直後溜息を吐いた叢雲は自身を呼び止めた艦娘の元まで歩み寄った。

「何よ天龍」

「提督に……会う事は出来ないのか……？」

「……会う？ 何を言っているの貴方」

天龍の問い掛けに叢雲は金色の眼で見下ろす。

槍を石床に突き刺し、その場に座って天龍の目線に合わせた。

「状況を考えなさいよ。貴方達がした事は立派な殺人未遂罪という重罪、そして上官に対する暴行や暴言などの謀反……何で貴方達罪人が被害者に会えるだなんてそんな思考が出来るのかしら」

「だけどよ……！ それでも俺達は……！」

「面と向かって謝りたいの？ やめた方がいいんじゃない？ 貴方達という存在のトラウマを抱えた被害者と快く面会なんてまた被害者を恐怖に陥れるだけだから、二次被害に等しいわよそんなの」

叢雲は呆れた表情で天龍に否定の言葉を並べていく。今の艦娘達がどんな現状にいるのかを再確認させる為に叢雲は敢えて棘のある言葉を使った。

何も関係の無い第三者の叢雲からすれば艦娘達は全員罪人であり、制裁をしなければならぬ存在として認識している。

勿論人道に則り、罪を犯したとはいえ人として扱ってはいるがそれは護神厄討艦隊旗艦『？』叢雲だから出来る事であり、本来は大本営の管轄下となって人にあらぬ扱いを受ける事になっていた。故に艦娘達が潮岬町鎮守府の地下営倉に收容されたのはあくまで『？』叢雲個人による慈悲、そして戦力温存の為に更生の余地がある艦娘を見定めているだけに過ぎない。

よって、ある程度であれば艦娘達の願いは耳を傾けるが罪人である以上は願いの限度も最低限となる。ましてや被害者と面会したいなど言語道断だ。

「まあ仮に会えたとしても、散々暴力を振ってきただけじゃなく精神的な嫌がらせをしておいて、どの面下げて会いに来たんだって普通は怒り狂うものよ……身の程を知らなさい、同じ艦娘としていただけでも恥ずかしいぐらいだわ」

『？』叢雲はこの鎮守府の艦娘ならば誰もが願うだろう提督との面

会を拒否させた。提督本人が艦娘達と面会したいというならいざ知らず、罪人である艦娘達が面会したいと言うのはあまりにも烏滸がましい程である。

しかもやつと目覚めた頃合いであり、体調の変化が激しい期間だ。会うにしても非合理的過ぎる。叢雲は立ち上がって天龍を見下し、その場を去ろうとした。

が――、

「……ついでおこうかしら。白中將がこの鎮守府に戻る事はもう無いわよ」

「っ!? 何故!!」

「何故って……やってきて分からないのかしら? 貴方達が故意にやったのかどうかはどうでもいいけどね、白中將が艦娘を殴った写真の一件で責任を取る為にこの鎮守府から異動する事になってるのよ」

『?』オウゲン叢雲は護神厄討艦隊旗艦であり、ガングートや瑞鳳のように大本営直属の艦隊に属している艦娘だ。各地の鎮守府の情報や危険海域のデータなどを全て知り得ており、自身の記憶の中に記している。故に提督と摩耶の件や潮岬町鎮守府の情報も大体は把握済みで、提督がやらかした事も把握している。

「ま、あの白中將の事だろうから貴方達の事なんて会いたくもないし、顔も見たくないとか思ってたそうね。死のうが生きてようがどうでもいいって感じかしら。もうこれで完全に見限ったんじゃない? 恨むならやってしまった自分を恨みなさい」

「……私みたいに」

143. 後悔 噬（ほぞ）を臍（か）むその先に

「ああ……」

牢屋の中で孤独に一人、悲しそうに呟く艦娘がいた。叢雲の報告を聞いて提督に無事に一度は安堵したものの、拭い切れない罪悪感に押し潰され続けている。

「Admiral……」

プリンツは冷たいコンクリートの床を見たまま、只管提督に向けて謝り続けていた。効果消去薬によって目覚めた後は提督の護衛をしていたプリンツ。翔鶴との戦争中やその後のプリンツは一度も提督と顔を合わせる事が出来ていない。

自分が提督に過度な暴力をし始め、ボロボロになっていく提督を見ては嘲笑った記憶が鮮明に残っているおかげで罪の意識に苛まれ続けていた。今でもその顔を殴った感覚が直に残っており、忘れようと気を逸らしても這い蹲る様にゆつくりと感覚が戻っていく。

「あつ……私が、やったんだ……ああ……ああ……あ……」

私は何てバカなんだ。

私の所為でAdmiralが死にかけた。

あの時の私の行動が分からない。

何でAdmiralが嫌いだった？

何でAdmiralを脅した？

何でAdmiralを殴った？

何でAdmiralを蹴った？

プリンツは涙を流しながら腕を振り回し、一時的なパニック状態に陥る。頑丈な拘束器具によって身動きの取れない両腕を只管壁にぶつけて狂い始めた。プリンツの異変を確認した憲兵がすぐに駆けつけ、中に入って直接落ち着く様に説得する。

全てが崩れた。今まで積み上げてきた全てが、一気に崩れ去ったんだ。Admiralと過ごした時間や思い出、やっとAdmiralに頼りにされた事、経験してきた仲間愛。

でも既にそれは——、私の中には無い。

憲兵による呼び掛けで、徐々に落ち着きを取り戻したプリンツ。硬いベッドの上に寝込み、拘束された腕で顔を隠した。

「もう……Admiralと……会えないの……？ いや……嫌だよ……」

叢雲からもう二度と会えないと聞いてプリンツは絶望に昏れる。

「プリンツさん……」

プリンツの姿を不知火は鉄格子を挟んで見ていた。硬い石の椅子に座り、白く光る蛍光灯に視線を映す。不知火も提督の護衛をしていたが、プリンツと同じく顔は一度も合わせていない。薬によって支配されていた時に提督が憎悪を孕んで敵視した顔を見ており、開放された後の不知火はその顔を思い出す度に顔を見る事が出来なかった。

もし顔を合わせて話そうとすれば、もし助けようと手を差し伸べれば、司令は恐らく鬼神の如く怒鳴る事だろう。

私はそれがとても怖い。

司令との関係が既に崩れていても、互いに何もせず顔を合わせないままいた方が気は楽だ。

まだ関係が崩れていないような感じがして、司令の事を心配しているだけでまだ心は形を保つ事が出来る。

それは今のようには思わず落ち着いてしまうほど、冷静に物事を考えるようになった。

「はあ……まんまと罠に嵌ってしまいましたね……私も。しかも二度と会えないとは、もう取り返しをつかない事をしてしまったようです。これだけ過去に戻りたいだなんて思ったのは久しぶりですね……」

だがその冷静さは一時的なモノに過ぎない。

私が顔を合わせなかった理由は、崩れた司令との関係を否定している事。

つまりはただの現実逃避だ。

既に司令との関係は崩れているのに、それを私は恐れて逃げているだけ。

もし本当にその事実を自覚すれば、私の心は形を保てず、砂の様に消えてしまう事だろう。勿論この身体も、何もかも全てが。

司令との関係は元に戻すのはとても困難で、最早戻す事は無理なんじゃないかと思える程、絶望的なモノだ。

私は案外、冷静じゃないのかもしれない。

「とりあえず……司令が無事であつて良かったです。後は私の制裁を待つだけ、ですか……」

不知火は硬いベッドに寝転がり、蛍光灯の光を嫌うように背中を向ける。目を瞑り、一人の空間へ閉じこもる。先に考えなければならぬ事を後回しに、また落ち着く為に不知火は眠りについた。

「鈴谷……その……」

鈴谷、熊野、最上は同じ牢屋内にて時間が過ぎるのを待っていた。翔鶴達との戦争後、利根を拘束して帰還した鈴谷達は提督の話をする。その後憲兵達によって拘束され、提督はどこかへ連れていかれた。鈴谷達は高速修復材を直にかけられ、傷を癒した後に牢屋へ入れられ、今に至る。

「……良かったね。無事みたい」

心配して声を掛けた熊野と最上は鈴谷の反応を確かめる。牢屋の鉄格子に頭を寄せ、座つたまま壁に張り付いていた鈴谷。熊野達の声を聞いて思い出したかのように笑みを浮かべて答えた。

「あくあ酷い事しちゃったな……もうダメだねこれは。あの提督が許してくれる訳ないよね……あははは……」

「鈴谷……」

「ははは……あれ……？ どうしてだろ……涙が出てきちゃうなあ……もう枯れて出ないと思つてただけど……あれ？ あれ……？」

鈴谷はいつものように振る舞い、元気な姿を見せたが、涙が流れている事に気付いた時にはそれは崩れてしまった。

分かっている、私が何をしたのかを。

分かっている、もう提督と会えない事を。

分かっている、分かっているんだ。もう何もかも取り戻せない事実を。

分かつてるからこそ、私は私が許せないんだ。

提督が手伝ってくれたおかげで熊野や最上と仲直り出来た。二度とは戻らないだろう姉妹同士の軋轢を、あの提督は直す為に私を強くしてくれた。

私は提督に感謝し切れないう程の恩がある。

私はその恩を、いつかは返したかった。

提督が喜ぶ様なデカくて凄い事をしてあげたかった。

でももうそれは出来なくて、恩を仇で返してしまうとは夢にも思わなかった。

私は最低だ。

とてつもなく最低だ。

心が苦しい。

「金剛お姉様……霧島……」

金剛、比叡、霧島も同じ牢屋にて時が過ぎていくのを待つばかりだった。金剛や霧島は体育座りで牢屋の片隅に收容された時から閉じこもっている。比叡に顔も見せないまま何も喋らず、叢雲の報告を聞いても全く反応しなかった。牢屋内の中央で比叡は姉妹にひたすら話し掛ける。

三人は提督を護る為に提督の傍にて身構えていた。途中、金剛は提督に精一杯の謝罪をして手を伸ばしたが、怒りに触れたのかその手を振り払われた。

私は最低だ。

心から信頼した人達を一方的に裏切るような真似をしてしまった。もう二度と会えないとなれば、もう一度謝る事も出来ない。

一人は蒼い空の先にある天国へ、もう一人は遙か彼方の鎮守府まで。

とても大切に信頼していた二人を、私が自ら手を離れたんだ。記憶から消し去り、暴行を企てる様な事をして、とことん私が嫌になつてくる。

会いたい。

一度だけでいいから、あの二人に会いたい。
そして謝りたい。

私の自己満足ではあるけれど、どうしても謝らなきゃいけないだ。
だ。

仮に会えたとしてあの人に無視をされても。

仮に会えたとしてまたあの人に手を振り払われるだけでも。

見限られたって構わない。

だからその顔をもう一度見て、謝りたいのに。

もう二度と——、会えないだなんて。

「はあ……」

私は金剛お姉様や霧島の辛さが身に染みて理解出来ている。

私達の犯した行動が、如何に愚かで恥ずべき事なのか。

今でも気が保っていられるのが不思議なくらいだ。

絶望に浸る姉妹を他人の様に見ている私もその愚か者の一人に過ぎないと言うのに。

私だつて許されない事を数えきれないぐらいやった。

金剛お姉様を侮辱し、仲間を傷つけ、それらを全て正しい事だと思
い込んでいた。

目が覚めた時からでも、その愚行による罪の意識が凄まじい程に襲
いかかって来る。何回も悩んだし、何回も考えた。これから金剛お姉
様に許してもらう為に、仲間にも許してもらう為に出来る事は何なの
かを探し続ける日々。

気の遠くなる道ではあったけれど、必ず変化はあった。

金剛お姉様には少しずつ近付けるように、そして近付いてもらえる
ようになった。仲間も僅かだけど挨拶を交わす事が出来た。

提督には金剛お姉様を救ってもらった恩がある。本人は救ったつ
もりなど毛頭無いようだけど、金剛お姉様は提督を心から信頼する様
になつていたのでから救われたに違いない。

だから私は金剛お姉様を救ってもらった恩として、提督の助けにな

るように頑張ろうと思った。

目に見えない所から影で提督を支える様にしようと思った。

だがその恩を返す事は、もう出来ない。

「提督……ごめんなさい……」

比叡は途方に暮れて体育座りになり、金剛と同じく顔を隠した。自ら閉じこもりたい気分だ、もう目の前の世界は見たくない。比叡は自分の世界へ閉じこもった。

——潮岬町鎮守府、仮司令部

「帰還したわ」

「お、お疲れ様です」

講堂のある部屋に設置された仮の執務室で灰色は度重なる出撃の指示と溜まる書類に追われていた。

翔鶴達との戦争後、灰色は一時的な『?』オウゲン 叢雲による一人艦隊の提督として職務を全うしている。書類を書き終えては出撃、書き終えては出撃と眠らず休まずの毎日だ。

唯一の救いとしては提督のスパルタ教育のおかげか、書類を書き終えるスピードは徐々に早くなっている。今日も書類を少しだけ残して、叢雲による一人艦隊の指示を出していた。

「アンタ、司令官候補生にしては結構やる方じゃない。少しだけ感心したわ」

「お褒めに与り光栄の限りでございます……」

「別に畏まる事ないじゃない、褒めてあげてんのよ。感謝しなさいな」オウゲン

『?』叢雲の威厳は、思わずその場の人間達の身体を震わせてしまうほどで、とても勇ましく灰色にとっては恐れ多い存在だった。灰色も少なからず叢雲にかしくまっております、指示を出す事すら恐れる毎日だ。もしハマをすれば後の事は想像に難くない。

「やっぱり深海棲艦の襲撃が来るわね……しかも日に日に強くなってきてる」

「やはりこの鎮守府を狙っているのでしょうか……」

「まあそうでしょうね。その内、七壊星が来てもおかしくないわ」

七壊星と聞いて思わず灰色は唾を飲む。そういえば海軍兵学校の授業の時に一度教えてもらった事がある。深海棲艦の中でも桁外れな戦闘能力を持つ個体がネームドとして危険視された存在。灰色もその存在については把握していた。

「それで灰■司令官、貴方の確認が欲しいんだけど」

「え？ 確認ですか？ 何でしょうか」

「ウチの艦隊から何人か連れてきていいかしら」

叢雲の艦隊、つまりは護神厄討艦隊のメンバーを呼び寄せる事だろうか。恐らく七壊星の襲来に備える為、強い味方を揃える必要があるらしい。

「勿論私一人でも構わないのだけれど、それは一対一での話。複数来られたらたまったもんじゃないわ、それこそ日本の終わりよ。構わないでしよう？」

「はい、大丈夫ですよ。強い方達が来てくれるのはとても心強いですし」

「ならいいわ。■大佐にも確認は取ってもらってるし、すぐに呼ぶとしましょう」

灰色の確認を得て叢雲は頭の通信機から各地にいる仲間へ発信する。

以前通信が取れない状況下にいたが、翔鶴の供述によって電波妨害機が発見され、無事に取り外す事が出来た。その為通信系統は回復し、またいつもの様に遠方と話す事も出来ている。

「各メンバーに伝達。暇な奴は潮岬町鎮守府に集合しなさい、これは旗艦命令よ。来るか来ないかは自由に決めて構わないわ」

「暇ではないので断る」

「つまらなさそうなので断りまゝす」

「私は行くネ」

「私も行きたいです！ 今度こそ『？』オウゲンさんには独り占め——」
「お前は
まだ任務の途中だろうがア!!」

頭の通信機から様々な艦娘の声が漏れ出していた。途中から誰かの声に遮られ、通信を切られた艦娘もいる。更に他の艦娘から断りの

声が聞こえ始め、本当に自由過ぎる所為かある程度予想していた叢雲もイライラした表情になっている。

「……『?』^{ラセツ}以外、『』^{ビヨウコウ}は来るのね。その他は断る、と……分かったわ、そんなに暇じゃないなら仕方ないわね、もしかしたら七壊星が出るかもしれないの……暇じゃないなら仕方ないわ、あく本当に残念よね」

『行く、今すぐ行く』

『えーっと、どこだっけそこ』

『もう私は知ってるネ』

『私だって知って——』

断りの声を入れていた艦娘達が手の平を返す様に食いついてきた。急いでいるのかガチャガチャと雑音が聞こえてくる。叢雲の表情はニヤついでいて、まさに計画通りのような顔をしていた。

「早い者勝ちって事で、『』^{ビヨウコウ}『』^{レイ}『』^{アオグロ}は来る様に。その他は何かあり次第、また召集するわ。じゃ」

「……中々個性のある艦娘達ですね……」

「そうねえ、性格に難ありって所かしら。全く……世話の焼ける仲間よ、飽き飽きしないわ……ホントに……」

「出撃命令が出たソウダゾ……行くか? ^{メグレズ}【天権】……」

「コノ私が行くワケナイダロ……タダノ冷ヤカシダ、才前一人で行く……」

144. 誰にでもたまに甘えたい時はある

金色の十字光が光芒となって淀めく海を駆け走る。
落雷の如く碧雷纏った砲弾の暴風雨が襲い掛かった。
金色の十字光は砲弾を着水する前から急加速して回避。

その後大跳躍して、空に舞う砲弾を斬り伏せ着水、その場に仁王立つ。

向かう先は雷鳴轟く黒雲、黒く穢れた海波。

雷光が逆光となって影が現れる。

黒いフードから覗く紺碧の雷眼が輝く。

特殊な雷眼から電撃が迸り、触れた艦装から火花が散った。

まるで尻尾の様に動く艦装は先端の口じみた突起物から稲妻を放出させ、向かってくる金色の十字光に吼えた。

護神厄討艦隊旗艦『?』オウゲン 叢雲はその雷影を目視。

七壊星「天権」メケレスの側近、『文曲』アストラファイ 戦艦レ級も金色の十字光を目視。

それぞれ一直線に突進、数秒遅れて水柱が立つ。

衝突する瞬間、周辺の一帯は――、

――光に包まれた。

――横須賀鎮守府病室

「提督……食べれるか?」

「馬鹿言え、普通に手は動かせるっての」

横須賀鎮守府のとある病室で提督と摩耶は昼食を取っていた。提督が目覚めてから三十分が経過し、駆けつけた医師が容態を診てくれ

た結果、身体の調子は徐々に良くなるらしい。余程の事が無い限りは心配いらぬようだ。今は看護師に用意された昼食を食べようとしている。

だが――、

「あ

茶碗を持つ左腕が突然テーブルを叩き、茶碗とご飯がお盆に転がった。よく見ると提督の左腕がまるで糸の切れた人形のように力を失くし、振り子のように肩にぶら下がっている。

「ほらやつぱり……あたしが手伝うからさ。提督は楽にしててくれよ」

「まだ左腕はリハビリ必要だなこれ」

提督の左腕は何度も切断され、そして再形成されている。今でもその切断部分が生々しく残っており、まだ完璧に動かす事は出来ていない。

医師曰く、血管は繋がっている為問題ないそうだが、神経や筋肉などは完全に繋がりにきれいないらしく、その後も徐々に繋がる為に力の使い方には要注意と忠告された。

「あーん……って、何恥ずかしがってんだ提督」

「いや恥ずかしいだろ!! 俺はいい歳した大人なんだぞこれでも!!」

「いいだろ別に。小さい頃からやってあげたんだからこれくらい」

「過去は過去、今は今――」「いいからつべこべ言わず食う!!」

摩耶の介護に提督は赤面して恥ずかしがる。いい歳した大人が女性に食事を手伝ってもらうのはいささか自分のプライドが許せなかつた提督。しかし無理矢理摩耶にスプーンで分けたご飯を口に押し込まれ、抵抗の出来ない提督はなくなき食べるのを手伝ってもらった。

「くそつ……!! 屈辱的だ……!!」

「小さい頃は自分から頼んできた癖に」

「うるせえ!! そんな事など忘れた!!」

「失礼するよ」

病室内が提督の怒声で響く中、ある人物がドアをノックして入って

きた。ノックした音が聞こえた二人はドアの方向へ顔を振り向き、会話を止めさせる。中に入ってきたのは■大将と秘書艦の大和だった。

「おや、食事中だったか……少しタイミングを間違えたな」

「いえ大丈夫ですよ大将閣下、どうぞ此方へ」

提督の態度も一瞬で変わり、畏まった表情にて■大将を誘導する。テーブルに置いてある食事を一旦棚の上に置き、摩耶はそれぞれ座る椅子を用意した。

「さて……身体の調子はどうかな、と本来は聞くはずだったが……まあ……問題は無さそうだな」

「先程はお見苦しい所を見せてしまい、申し訳ありません」

「いやいや別に構わない。急に入ってきた私も悪いからな」

■大将は困り気味に提督と摩耶の唾み合いを見ている。この様子では身体の具合は聞かなくても大丈夫のようだ。■大将は話し掛けやすいように笑みを浮かべながらに対応し、来た理由としてある本題へ自然に入る。

「まあ本題に入るとしよう。君が運営していた潮岬町鎮守府の艦娘達の件についてだが……今は島風を除いて全員が地下営倉に收容されているようだ」

「……」

「そして、君を殺害目的で計画を実行した主犯格の……翔鶴……龍驤、利根、那智、葛城も同じく嚴重な警戒態勢の下で收容されている。何か言いたい事は？」

「……ありません。続きをお願いします」

■大将の本題とは潮岬町鎮守府の艦娘達について。

翔鶴達との戦争後、護神厄討艦隊旗艦『？』オウゲン 叢雲によって艦娘達は全員地下営倉へ收容。主犯格の翔鶴含めた五人もそれぞれ收容されているようだ。艦娘が不在の鎮守府では『？』オウゲン 叢雲が一人で海域の哨戒に出ており、毎度深海棲艦と戦闘を繰り広げているらしい。

『？』オウゲン が海域を護っている以上何も問題は無いが、日に日に勢力が増してきているらしい……聞いたところによると君と翔鶴が何かしら

話していたという報告を受けた。何か手掛かりはあったか？」

■ 大将の言葉を聞いて提督は眉を顰める。やはり操られた島風による■ 少尉の脅迫が無くなって以降、潮岬町鎮守府へ攻撃する深海棲艦が増えていようだ。唯一鎮守府との連絡手段が無くなれば、■ 少尉は全力で潮岬町鎮守府を落とすに来るのは必然。あの七壊星を呼んででも攻め落としに出撃させるだろう。

「はい……主犯格の翔鶴から情報は入手しました。やはり大将閣下の思惑通り、黒■ という男が絡んでいたようです」

「成程……面倒な事になったな」

■ 大将は提督の報告を受け、顎に触れて考える様な仕草をする。前にも■ 大将は黒■ という男が絡んでいる事については把握していた。今回翔鶴が告げた事で更に信憑性は高くなり、計画に関する証拠も明確になりつつある。

しかしまだ黒■ の現在位置は未だ掴めない。

何故なら――、

「やはり難しいですか……」

「ああ、奴は世間では死亡した事になっている故に何処にいるか行方が分からない男でな……何回か徹底的に調査したが跡取りは全く掴めていない。更にこの事が知られれば世界を揺るがすような出来事、海軍内はおろか日本全国……いや全世界がパニックに陥る。■ 元帥が何も出来ない以上は無闇に動けば奴に勘づかれる場合もある、実に非合理的だ」

黒■ という男は■ 元帥を裏で操っているらしい。元帥本人は知られるのを避けて一向に話はしないが、■ 元帥と同期である■ 大将は既に察知していた。明らかに陽気な性格が抑え込まれ、何か隠しているような雰囲気だったとか。■ 大将は同期の腐れ縁でもある為に一人で極秘に黒■ という男について調べている。

「これからどうするつもりですか？」

「取り敢えずは君の報告と私の資料を照らし合わせ、こちらで調査した内容と共に情報を分析し、奴の潜伏している場所を徹底的に見つけ出す。現時点ではこちらの方が合理的だ」

「私も協力します。計画の為に」

提督は手を伸ばし、■大将と握手した。

二人は計画の為に互いに協力関係、それぞれ個人の目的の為に動いている。

立ちほだかる敵が同一人物であり、協力無しでは倒す事は出来ない。

「さて……もう一つ本題がある」

「何でしょうか」

「潮岬町鎮守府に所属する艦娘達の処罰について、だ」

■大将から言われた事に提督は少し動揺する。目線を目の前の白い布団へ移動させ、少しだけ顔を俯かせた。いずれは聞かれる事ではあつたが、それだと動揺を隠せない提督。それを見た■大将は伺いながらも気にせず話を続ける。

「……君が体験した通り、奴らは殺人未遂罪、脅迫罪、傷害罪、その他多くの罪を行っている。まず計画の主犯格である翔鶴は旧式解体という形で処理されるのは間違いないだろう。また翔鶴に加担、協力した四人も旧式解体に近いそれ相応の処罰が下される。その他の艦娘達は翔鶴に操られていた事もあって本人の意思では無い事が確認されている為、恩赦として軽い罰程度で済むようだ」

「それは■元帥閣下の決議でしょうか？」

「いや君の義親である南方の■大佐が勝手に決めた」

「ええ……」

提督の義親にあたる南方の■大佐が『オウゲン』叢雲から管理者権限を譲受してもらい、現在は潮岬町鎮守府を管理しているらしい。翔鶴達との戦争についてを通常は秘匿していたが、半分脅して無理矢理話を入手したようで■大佐は即座に潮岬町鎮守府へ向かったようだ。

行動力の化身と言うべきか、あつという間に司令本部や寮の建設工事などの手配を終わらせ、地下営倉に収容された艦娘達を事細かに調べあげたり、護神厄討艦隊の艦娘達を無理矢理まとめあげるなどやる事全てを負担しており、■大将でさえも頭が上がらないとか。

更にはそれぞれ懲罰なども自ら勝手に決定し執行しようとする為、

まだ早いと ■元帥と ■大将が慌てて止めたらしい。

「あの人は一回休んでもらいたいものだ……いや本当に……まあ、勝手に決めた事とはいえ、必ずしもこうなるとは限らない。前にも伝え通り、利用される形にはなるが、この一件を近々ある実験の為に有効活用する事に決めた。 ■大佐と ■元帥がそれぞれ話し合つて、被害者である君本人が決めていいそうだ……率直に聞こう、君は艦娘達をどうしたい？」

「……そうですね……」

提督は率直な意見を聞かれて思わず視線を逸らすように蒼空を見る。摩耶や ■大将も釣られて窓から見える蒼い空を眺めた。自動車の走行音や蝉の声がどこか遠くで聴こえる。

艦娘達はどうしたいか、空を眺めながら提督は考えていた。

正直に言えば、どうしたいのか私には分からない。

別に艦娘達の事が嫌いだからと言って、無鉄砲に艦娘達を解体したい訳じゃない。

ただ悪口を言つて優位に立ちたいだけの残念極まりない性格で、暴力だとか力で振じ伏せるのが嫌いなだけだ。

艦娘達を殴りたい訳じゃないし、蹴り飛ばして見捨てたい訳でも無い。

全ては蒼 ■中尉の恩義に尽くす為、私なりに動いていただけだ。

あの鎮守府に辿り着いて、あの時の事を思い出して、あの計画の真実を知つて。

私は動かなきゃいけないんだって自覚させられた。

いつの間にか出来ていた仲間というモノがまた寂しく思う。

普段は全く気にしていなかったはずが、途端に意識してしまつたらそればかりを考えてしまった。

艦娘達の頑張ろうとする姿を見続けて、私の中に分からない感情が出来上がっていたのだろう。

勿論艦娘達のした事は、例え誰かに操られていたモノだとしても簡単には許されない。

裏切り、恫喝、暴力、脅迫。

精神は限界だったし、身体も数え切れない程悲鳴を上げた。憤怒という感情は当然で、それと同時に失望や同情、悲哀の感情だつて持つてる。

人間が嫌いだというのに何とも皮肉な事だ。

今の艦娘達を感情任せに淘汰するのは、どこか違う気がしていた。根拠は無い、ましてや理論なんて無い。

ただ単にそう思っていたただけだった。思っていた。

——思っていた？

——思う？

あの鎮守府に辿り着いて、あの時の事を思い出して、あの計画の真実を知って。

思い出したから蒼■中尉の恩義の為に頑張った。

では何故プリンツは過去の俺の記憶を知っているのか。

翔鶴の罠に嵌って、一度その事で脅された。

確かにプリンツとは無名の頃は俺の艦隊に所属していた。

でも一度も俺の過去の記憶を摩耶以外には話した事は無い。ましてや思い出すまでは誰にも話してないはずだ。

俺は計画の真実を知ってから、あの時の記憶を全て思い出した。

蒼■中尉の事も、計画の真実を知るまではその片鱗すら覚えていなかった。

辻褄が合わない。

何かおかしい。

俺は何度も、誰かに記憶と常識を改変させられている——？

「……どうも私では決めかねません……確かに彼女達は罪を被り、今は犯罪者として収容されていますが……私個人の感情で簡単に決める事は出来ません」

「では、まだ分からないと？」

「彼女達に罪を償う意思があるかどうか、私はそれを聞いてから然るべき処罰を下します……全員に聞いて下さい、まずはそこからだと……義母にはお伝え下さい」

「……分かった、そう伝えておこう」

提督の慎重な意見に■大將は一瞬驚くも何事も無かったかのよう
うに返答した。秘書艦の大和に指示を出し、言われた事をクリップ
ボードに記している。

「さて、これで君に聞く事は終わった。私はお邪魔するよ」

「わざわざ来ていただきありがとうございますどうぞございます大將閣下。こんな形で話してしまい申し訳ありません」

「問題は無い。こちらは見舞いに来たつもりだ、そう負い目になる必要は無いぞ、では」

——潮岬町鎮守府、仮司令本部

『——との事です。よろしく頼みます、■大佐』

仮司令本部の執務室にて一本の電話を受け取った■大佐。相手は■大將で提督から聞いた意見を耳にした後、返事もせずに通信を切った。椅子の背もたれに寄り掛かり、煙草を吸っては腕を組む。深く吸って、白い主流煙を大胆に吐いた。

「まったく……慎重なのは変わってないね、あの馬鹿は」

執務室には灰色がせつせと書類を書き潰している。■大佐に怯えながら、涙目で仕事をこなしていた。

一方で仕事を既に終えた■大佐は煙草を吸いながら休憩している。

「灰■、地下営倉に行ってくる。後は任せたよ」

「は、はい！ お任せ下さい■大佐!!」

■大佐は煙草の火を磨り潰して、椅子からいきなり立ち上がる。そして仕事を一旦灰色に任せて地下営倉へ一人で向かった。白い軍服をマントのように靡かせ、首元のネクタイを少し緩ませながら歩く。すれ違いざまに通る憲兵達が歩く■大佐を見てはその場に止まって敬礼した。

「通るよ」

「はっ!!!」

やがて地下営倉に辿り着き、見張っていた憲兵に許可を貰う。憲兵達は重い扉をこじ開け、■大佐を中へと入らせた。暗い老化が先に続き、薄く光る蛍光灯がその道の先を照らしている。両脇には広さが四畳程の牢屋が敷き詰められており、遮る鉄格子が奥までズラリと並んでいた。

「さて……貴様ら全員に聞きたい事がある！」

■大佐は地下営倉内にて大声を上げ、牢屋に收容された艦娘全員に聞こえるようにハッキリと口を開いた。■大佐の声がエコーのように反響して重なる。突然の大声に艦娘の大半が驚きの声を上げた。

「本来貴様らは私の処罰によりそれぞれ罰が与えられる所だったが、先程白中將の意見を聞いて状況が変わった!!」

「提督……?」

「提督の……意見?」

「率直に問う!! 貴様らは白中將に対して、その罪を償う意思があるか!!」

■大佐は仁王立ちしながら艦娘達へ問い掛ける。提督に対して罪を償う気があるのか、一旦■大佐は全艦娘達に聞き出した。■大佐の話の聞いて艦娘達は一斉に鉄格子に張り付く。

「あるに決まってんだろ！」

「お願いします、償わせて下さい！」

「もう一度……!」

勿論殆どの艦娘が罪を償いたいと自分の意思を主張している。特に提督と深い関わりのあるプリンツや不知火は必死に訴えていて、や

りたい事を手伝ってもらった鈴谷や加賀、金剛達も償いたいと大声を上げて発した。■大佐はあまりの五月蠅さに耳を塞ぎ、更に大きい声で艦娘達を振じ伏せる。

「黙れ凡骨共!! 言いたい事は大体分かった、憲兵!!」

「はい!」

「全員分には意思があるかどうか一人ずつ聞きなさい。明確に且つ具体的にだ……いいな?」

「かしこまりました!!!」

「……さて」

憲兵達に艦娘全員分の意思を聞き出す事を任せ、■大佐は奥の牢屋まで早歩きで向かった。途中で拳銃の弾倉を取り出し、弾薬の数を確認して拳銃に装填。拳銃を巧みに指で回し、ホルスターへ収納させる。

すると突然■大佐は止まり出し、ある牢屋の前まで辿り着いた。

「アンタが主犯格の翔鶴かい」

「……?」

牢屋に収容されていたのは計画の首謀者である翔鶴。手足の拘束器具が幾つも重なり、硬く重い鉄鎖によって身体の自由を奪っている。それはさながらスフィンクスの棺桶に入れられるミイラの様で、憲兵二人が見守る厳重な警戒態勢の下で監視されていた。

「貴方は……」

「私や南方の総司令官を務めてるおばさんよ。周りは失礼な事に鬼と呼んどのがね」

目覚めた翔鶴は重い瞼を鈍く開き、鉄格子の先にいる人物へ視線を写す。そこには還暦のある老人女性が腕組みしながら立っていて、真剣な表情で翔鶴を睨んでいた。

「何故……貴方が……」

「義理の息子が随分とお世話になったからねえ、何ぶんあの性格じや苦労したろうに。まあ半分は私の所為なんだが」

容姿は提督に似つかないが口振りや振る舞いは殆ど一緒で、どれだけこの軍人が提督に影響を与えたかを物語っていた。義理の息子と

なればその影響力は尋常ではないだろう。蛙の子は蛙とよく言うが、鬼と呼ばれたこの女性に育てられたのならあの性格は当然だ。

「アンタともう一人の提督については昔から把握しとるし、馬鹿の調べ上げた資料と凡骨共の情報で大体分かったよ。何とも言い難い経験してきたもんだねえ、出来れば同情したいが……今のアンタにや無理だ」

「……」

「■蒼■……アンタにとって一番の愛した人間、か……その大切な人間を自分で殺して、仲間を守ると約束をしてしまったと言う訳かい……どうしても守りたかったのかね？　こんな無理に近い約束を」

提督の調べ上げた資料や艦娘達の情報によれば、当時の■少尉による理不尽なまでの支配は、一艦娘では太刀打ち出来ない程悲惨な状況のように思えた。

■少尉によって屈辱的な淫行や暴力を受け続け、緊急停止装置や自爆装置などによって全艦娘を人質に取られ、■少尉の身勝手に仲間が殺されてしまうとなれば約束を守る余裕すらないだろう。普通は精神崩壊を起こして廃人になってもおかしくはない。

しかし翔鶴は蒼色の約束を守る事だけに執着し、翔鶴が考えた策で抗っていた。例えば自分が深海棲艦となつて悪に堕ちたとしても、敵になつたとしても只管に抗っていたのだ。

「提督は……私にとって、希望の様な存在でした。決して失いたくない……失わせたくない、大切な人なんです……そんな大切な人の約束を破る訳には……いきませんでした……」

「そうかい……とても愛していたんだね……とまあ、別にそんな事はどうだっていいんだ。本件は別でお前達に聞きたい事があつて来た」

「聞きたい……事……？」

翔鶴の言葉を聞いて一瞬■大佐が優しい表情をしていた。翔鶴は見逃さずに意外な表情に呆気に取られる。

しかしいつもの様につまらない表情になり、思い出したかのように話し始めた。

「ああ。私個人ではお前達全員を旧式解体で処刑済みにするはずだっ

だが、あのバカ真面目な男二人に止められてね。まあ近々ある実験を今更やるもんだから、馬鹿の意見を聞いてその通りにしてやってるんだ」

「実…… 験……？」

「率直に聞くぞ？ 今のアンタらは私の馬鹿、いや白中將に償いたいかい？」

「私は……」

145. 洗い流されたアルジエントに更なる輝きを

「ドウシマシヨ……」

潮岬町鎮守府から少し外れた森の中に飛行場姫は身体を潜めて隠れていた。鎮守府を見下ろせる山の森の茂みに潜んでおり、完全に出るタイミングを失っている。

「アノ艦娘ガ来タカラ思ワズ隠レテシマツケド……一向ニ逃ゲレル氣ガシナイワネ、コレ……」

あの艦娘とはつまり、護神厄討艦隊の艦娘達の事だろう。『?』オウケン 叢雲、『?』ヒョウコウ 金剛、『?』ラセツ 吹雪の僅かな殺気を感じて飛行場姫は決死の思いで森の中へ逃げ隠れた。あの艦娘達は七壊星のみでしか相手出来ない強者しかいない。故にただの姫クラスである飛行場姫では太刀打ち出来ないのを知っている為、瞬殺されるのを恐れていた。

「艦装ダツテ第二倉庫ガ潰レタオカゲデ黒焦ゲニナツタシ……逃ゲルニ逃ゲレナイ……」

飛行場姫の艦装は第二倉庫に格納されていたが、翔鶴達との戦争による損害で大破。瓦礫の中から黒焦げになった艦装が発見され、そのまま行方知れずとなってしまった。

「古鷹ト榛名ノ時ダツテ命カラガラ逃ゲテ何ト力身ヲ潜メテタノニ……何デマタ来ルノヨ……」

ただでさえ戦いたくない且つ、会いたくもない大海の殲滅者達と共にいるなど気が滅入る。

一時的に提督や灰色に認識してもらっているとはいえ、飛行場姫は鬼より危険な個体である姫クラスに属する深海棲艦だ。普通は周辺の人間から恐れられ、艦娘からは敵視されてもおかしくはない。自身の事情を知らない艦娘が自分を見つけければ戦闘になるのは必然だ。艦装が無い今となればあの艦娘相手に戦うのは無理だろう。

「ウ……灰サン、助ケテ……」

「あ、いたいた」

「ッ!!?」

大木に背中を預け、そのまま座り込む飛行場姫。両手を頭に乘せてひたすら悩み続けた。しかし突然聞き覚えのある声が背後から聞こえる。飛行場姫は大木で身体を隠し、恐る恐る背後を振り向いた。

「どこ逃げてんのよ……」と思つてたけど、ここにいたのね。飛行場姫」
「エッ……?」

背後に振り向いたが誰もいない、そう思つたその時また背後から声が聞こえた。突然の声に飛行場姫は首を動かし、声の方向へ振り向く。

そこには護神厄討艦隊旗艦『?』オウゲン 叢雲がいた。

「ア、終ワツタ」

「終わつてないわよ」

「夏ガ」

「ぶつわよ」

最も会いたくない艦娘ナンバーワンの叢雲に零距离で目を合わせ近付かれた。飛行場姫は『?』オウゲン 叢雲の姿を見た瞬間に自身に死期を悟り、恐怖のあまりに言動がおかしくなつてしまふ。変な怯え様に叢雲は反応に困つて、自分がどんな存在か考えさせられた。

「仮にも貴方、姫でしょう? 何で姫が怖がつてんのよ」

「アンタガイルカラヨ!! 艦装ガアツタラ、マダ虚勢ハ張レタワヨ!!」
「現在進行形で私に怯えてるのに虚勢は張るのね」

飛行場姫は叢雲へ怒り訴えるように指を差す。深海棲艦にしては感情豊かな飛行場姫に叢雲は戸惑うばかりだった。飛行場姫の一方的な訴えに耳をほじくり、叢雲は丁寧の説明する。

「あー……大丈夫よ。別にアンタの事は知ってるし、一応は捕虜として捕らえている以上は殺しはしないわ」

「エ……? 知ツテルノ? 私ノ事?」

「ええ知ってるわ。自ら命乞いしてきて敵である艦娘に守られる様な哀れな深海棲艦って事ぐらいはね」

「アーソウナノネー……チツ、死ネバイイノ——」「何か言つたかしらー?」

「アー!!! ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ!!!」

惨めに煽られたのが癪に障ったのか飛行場姫は最後に悪態着く。

しかし叢雲の地獄耳に入ってしまったのか、槍の鋭利な刃を首に近付け脅される。飛行場姫は涙目になってひたすら謝り続けた。

「とりあえず戻るわよ。後で司令官達には説明しておくから、さつさと来なさい」

「分かつたワヨ……指図シナイデット思テタケドヨロシクオネガイシマース」

何か色々言うが目が笑っていない顔を見せられて遠回しに脅される。飛行場姫は叢雲の笑顔の脅迫に口調も敬語になってしまった。叢雲の後を追って森の茂みの中を何とか潜り抜ける。次第に鎮守府の建物が見え始め、地面に太陽の光が目立ってきた。

「ねえ飛行場姫」

「何ヨ」

「貴方は一番最初に覚えてる記憶はある?」

「記憶? 建造サレテ目覚メテカラノ記憶ガ最初ネ、ソレガ何カ?」

「……そう、分かった……ありがと」

——横須賀鎮守府、病室

「潮岬町鎮守府の艦娘達による意思がまとまったそうだ。詳しくはその書類に書いてある、よくと読考したまえ」

■ 大将から書類の束を突然渡され、困惑する提督と摩耶。

困惑する理由として ■ 大将が直々に持つてくれただけでなく、読み終えるまでその場で座って待っている事だ。

あまりの珍しさに提督と摩耶は ■ 大将と渡された書類に頭を動かして何度も目線を写し、瞬きを二回ほどしては目を拭う。目を瞑って静かに待ち続ける ■ 大将を見て、提督はそのまま書類に目を通した。

「……」

書類の内容は艦娘達の贖罪の意思。

当然と言えば当然か、ほぼ全ての艦娘が提督に対して罪を償う意思があるようだ。

翔鶴達との戦争中に謝ってきたぐらいだ、大体は予想が着く。

しかし問題は計画の主犯格である翔鶴、そして龍驤や利根、那智や葛城だ。彼女達だけはどう思っているのか、そこが一番気になる所だろう。

「葛城、罪を償う意思あり。特に姉の雲龍と仲間の艦娘達には一度謝りたい、と述べた……那智、罪を償う意思あり。特に妹の足柄、羽黒に対して罪の意識を感じている、か……」

利根と龍驤は罪を償う意思はあるものの、その罪を償う為に旧式解体による死を望んでいる。

そして翔鶴は――、

「翔鶴、罪を償う意思あり……潮岬町鎮守府の艦娘達の処罰を無しにする代わりに、過去に至る今までの計画の全責任を負い、一人だけの旧式解体による死を望んでいる……」

「……そうだ、どうかな？ 何か変更したい点はあるかね」

全ての内容を読み終えた提督に気付き、**■**大将が口を開いて問い掛ける。提督は書類を純白の布団の上へ置き、考える様に少し顔を俯かせた。

「……ええありますとも。そろそろ実験も行う予定でしょう、それに合わせて私は然るべき処罰を下します。まとめいただきありがとうございます、**■**大将。義母にもそうお伝えください」

「断る」

「……？」

提督の言葉に**■**大将は即断。

提督と摩耶は首を傾けて目を丸くした。**■**大将は目を瞑ったまま眉を顰めている。

「私を伝書鳩代わりとは随分と偉くなったものだな……少し君は甘え過ぎな所がある。君はもう大体の部分は治ってるだろう？ 左腕はまだと言えどその二つの足は充分に動かせるはずだ、私にわざわざ伝言を預からせるなど非合理的過ぎる」

「おやおや、バレてしまいましたか」

「ふはっはっはっはっ!! 何年君を見てきたと思ってる、君のずる賢い性格など……嫌なほど熟知しとるよ」

■大将は腕を組みながら高らかに笑い声を上げた。無愛想で目付きの鋭い老人男性とは思えない優しく派手な笑顔が印象深く残る。口角を上げて微笑みながら■大将は提督の頭を撫でながら見つめた。

「君が直接行って伝えたまえ。時に人とは、言葉だけでは伝わらないモノもある……君が直接執り行う方が実に合理的だ」

■大将は立ち上がり、まとめあげた書類を回収する。団扇で扇ぐ様に書類の束を左右に揺れさせ、微弱な風を浴びた。

そのまま提督が眠るベッドから離れてドアの手摺に手を掛ける。

「送りの船も手配済みだ、いつでも行きたまえ……では、ん？ ああ君か、何故そこにいる？」

横開きのドアを開けて病室を出ようとしたその時、■大将が誰かと鉢合わせた。ドアが影になって誰だか分からないが、見慣れた顔なのか普通に話している。■大将は仕方なく訳を聞いていたが、ため息をつかれて面倒そうに言い返した。

「それは君次第だろう。私にはどうする事も出来ない、謝りたければ直接君が謝りたまえ」

そのまま■大将は院室を出ていく。どうやら話の内容的に提督に用がある人物のようだ。その人物は中途半端に開いたドアの隙間から颯爽と現れる。

「お前は……鹿島か」

護神厄討艦隊に属し、『シロガネ鐐』の名を持つ最強に近い艦娘、鹿島が姿を見せた。いつものニコニコとした表情は無く、鹿島は真剣な表情で提督に歩み寄る。

「護神厄討艦隊『シロガネ鐐』鹿島です……この度は提督に謝罪したく、この場に参りました」

いつもの鹿島とは違った雰囲気を感じた。身体は少し痩せ細り、目には普通に見えるほどのクマが出来ている。鹿島は自己紹介しながら

ら頭を下げ、慎重に内容を伝えた。

「……本当に申し訳ございませんでした。提督が命の危険に晒される事を予知せずに己の欲を走らせ、気付けば死に追いやられていたかもしれない状況下でありながら救助する時間が遅れてしまいました……到底許される事ではありません」

鹿島は提督に向けて頭を下げながら、謝罪の言葉を次々に述べていく。珍しく鹿島にしては声が震えていて、感情の昂りからか涙ぐった声が聞こえた。

この様子だと鹿島は提督をもう少し早く助けていればと過ぎた事を悔やみ続けているのだろう。誰にも左右されない自由な立場でありながら、欲に走って提督を蹴落とそうと加担してしまった事に負い目を感じ続けている。提督を助けたとはいえ、自分が計画に参加した事に変わりはない。少しの容赦は与えられたとしても裁きは受けるべきだと鹿島は考えていた。

「この鹿島、貴方の命令であればお望み通り死ぬ事も厭いといません……どうか罰を、お願い致します」

鹿島の言葉を聞いて提督は驚いた表情を隠せずにいた。あの鹿島が提督に対して頭を下げて、身を捧げるが如く謝罪している。

死にかけていた提督を助けてくれた鹿島が謝ってくるのは予想外だった。驚いた表情をしていた事に気付いた提督はハッと我に返り、少し間を開けて口を開いた。

「……最初会った時から、俺を助けられた時まで……お前の事が大嫌いだった」

「重々承知しております」

「だって言う事は聞かない、ひたすら俺を嵌めようとする、変な悪戯してくる……普段やってる事アイツらとあまり変わらないとは思わないのか？ 流石は生粋のサディストだ、虐めたいという欲からは逃れられないらしい……今回は流石に死ぬかもしれないと思って俺を助けたのか？ なあ」

提督は意味もなく棘のある言い方で鹿島を責め立てる。言われるがままの鹿島は反応や素振りも見せず、ただひたすらに無言で頭を下

げ続けていた。何の反応も無い鹿島を前に提督はまた話を続ける。

「とは言ったものの、実際お前は……お前がやりたい事を貫き通して
るだけなんだよな。それは俺も分かってたし、止めるつもりもなかつ
た……のは嘘で止めてほしい気は何回かあったな、うん。まあだけど
それなんだろうな、嫌いでもお前を受け入れてた理由って」

提督は無名の時代から鹿島についてよく知っている。人を躰ると
性的興奮を覚えるサディストで筋金入りの捻くれた性格の持ち主。
最強に近い戦闘能力を有しておきながら、自ら戦線に立つ事はあまり
ない。そんな鹿島を提督は矯正させようとしてありとあらゆる手で尽く
したが、それは鹿島との馴れ合いに終わって全てが無意味だった。

そんな鹿島が提督は大嫌いだった。

今まで出会ってきた艦娘の中で一番捻くれていて、提督が唯一手に
負えなかった存在。

どんな状況下だろうとなりふり構わず躰てこようにするタチの悪
い癖に何度躍らされただろうか。何回か本気で怒った事もあるのに
も関わらず、鹿島は何度でも提督の後を追って来た。そして追ってき
ては躰てこように仕掛けてくる。嫌になってくる程の癖と性格だっ
たが、幾度も諦めずにやってくるその精神は少なからず褒めざるを得
ないモノだった。

「やりたい事をやろうとしてる時のお前は鹿島今こうやって謝ってるお前鹿島
より百倍も生き生きしてるんだよ。何をする時よりも、俺を調教した
いが為に何がなんでもやろうとする執着的な行動をしてるお前の顔
は一番楽しそうだった」

鹿島からすれば艦娘とは並外れた力と捻くれた性格で人間関係が
崩壊し、誰も寄りなくなってしまう孤独な自分にとって提督は光の
ような存在だった。

例えどんな自分だろうと見限る事は決して無く、ひたすら自分の性
格を矯正しようと仕掛けてくる。毎日会話や馴れ合いをする事は絶
えず、誰とも話す機会が無くなった鹿島にとっては歓喜に余る事だっ
た。

そこからだろうか、私が提督を好きになったのは。

私の性格や癖を認知し、矯正しようと努力を怠らない提督が、毎日顔を合わせては起きてしまうどうしようもない馴れ合いに付き合ってくれる提督が、棘のある言い方はしていても本当は優しくかったりする提督が、異性として本当に好きになった。

その馴れ合いが私に足りない何かを満たしてくれているようで、人を躰るよりも楽しいと思うようになった。強烈に残る興奮が忘れられるような別の楽しさが私の中を満たしてくれる。提督を躰る為に悪戯をする理由もただの馴れ合いがしたいが為の建前で、多くの人を巻き込む様な事かもしれない。

だがその馴れ合いが私を変えるキツカケになりつつある。この捻くれた性格が変わるのかもしれない。確証は無いが、少なくとも今の私は過去の私よりも輝いているような気がする。

だから私は提督を失いたくない。

私の事が大嫌いで。

一方的な片思いでも。

私は提督の味方であり続ける。

生まれ変わった私を見せるまで、提督を絶対に護る。

そう思っていたのに――、

「別に助けたのが遅れたからと言って何でもっと早く助けなかったんだーと訳を聞かずに怒り倒すつもりはない。まあ大体の理由は聞いてるし、翔鶴の計画を完全に崩す計画を考えていたとか言われなきやキレてたかもな」

提督は両足を動かし、久しぶりに床へ足を着く。

淡い薄緑色の患者服を見せつけるかのように提督は鹿島の方へ臍を向けた。

そして鹿島の頭にそつと手を乗せる。

「鹿島、お前が気に病む必要は無い。お前は充分に頑張った、寧ろ助けてくれた事に俺は感謝しなければならぬ。今までは大嫌いだだったが、今は……普通だ」

提督は鹿島の頭を優しく撫でた。
初めて好きな人に撫でられた鹿島は思わず涙ぐむ。

「……ありがとうございます……ございます」

鹿島とのわだかまりが解けて提督は処罰の内容を纏めた報告書をまとめ、直接■大将に手渡して提出。大本営の■元帥には電話にて報告書の送付と今後の予定を伝え、現在は潮岬町鎮守府を請け負っている■大佐にはこれから訪問すると嫌々言いながら伝えた。

「やっ……」

新しく用意された白い軍服を身に纏う。上着を大きくはためかせ、裾へ静かに腕を通す。予め左胸辺りに付けられた勲章や階級の紋章が太陽の光に反射し、十時の模様を描いた輝きを見せた。白い手袋を隙間なく手に装い、軍帽を頭に嵌るようゆつくりと被る。

「まあ流石に左腕は固定しとかないとな」

「まだ動かせないのでは仕方ありませんね」

「寧ろやっとした方がいい。こうやって怪我した姿を見せればもつとチャホヤされるからな。あのポンコツ兵器共も償いと称して、俺の事を全力で介護すること間違いない！ いや〜これからまた楽しくなるね〜!!」

「まあ、また戻れるとは決まってるけどな」

右腕と両足は満足に動かす事が出来るものの、左腕だけはまだ簡単には自由には動かせない。痛みは気になる程度に残っており、今後の為にも左腕だけは安静にしていた方がいいようだ。一番楽な姿勢で左腕を固定し、首で支えるように包帯を巻く。

「準備はいいか？ 摩耶、鹿島」

「ああ！ いけるぞー！」

「いつでもどうぞ、提督」

久しぶりに建物の外へ出た提督は眩しく輝く太陽の光を右手で遮る。満点の蒼空が澄み渡り、大きな入道雲が空を美しく象った。

「じゃあ行くぞ……潮岬町鎮守府へ」

146. 親が子を心配するのは当たり前、だと思いたい

『オ前ノ所為デ全テガ台無シダ!! シクジリヤガツテ!!』

『クソツ!! ドイツモコイツモ役ニ立タナイ層バカリダ!! 何デ私ノ計画ノ邪魔バカリスルンダ!! フザケルナヨ!!』

『深海鶴棲姫モ! 中枢棲姫モ!! アマツサエ提督デサエモ!!! 馬鹿ニシテハ理解スラシテクレナイ!! 拳句ノ果テニハ……私ノ完全ナル支配計画ヲオオ……!!! 踏ミ躪ルナンテエエ!!!』

『珍シク情弱ナ鉄屑ノ身体へ入レタカラ、主導権握ラセ上手ク操ツテハ躍ラセテタノニコノ始末カ!!!』

『クソツ……!! 何デ……!! 何デ……!!』

「いや、あの鎮守府はいつも壊れてるねえ」

「壊されるのは二回目か」

「折角私が泣く泣く払った建設費も水の泡だあ、後であるポンコツ兵器共に請求書でも送り付けようじゃないかあ」

蒼く晴れ渡る空と澄み渡る青い海に挟まれ、摩耶達は荒くれ鎮守府へ向かっていった。摩耶が提督を横抱きしながら、艤装を展開して鹿島と共に海を駆け走る。夏の時期となると海の風はとても涼しく、透き通るような白い長髪が雲のように靡いた。

「でも今回の建築費は全て■大佐が負担したそうですよ」

「へえ、あの鬼がねえ………どうい風風の吹き回しなんだろうなあ」

「そりゃアಂತアの義親だろうに。流石に心配したんじゃないのか？」

ちょうど潮岬町鎮守府が遠くで見えた所に摩耶達は雑談を繰り広げる。横抱きされている提督は片手で軍帽を押さえながら目の前の光景を眺めていた。

「有り得ない。あのスーパーモンスターペアレントが俺の事を心配するなど天地がひっくり返っても有り得ない」

「どれだけ義親のこと信用していませんか……」

流石は鬼に育てられたと言うべきか、**■**大佐と似た性格のおかげで自身が義親に心配されるなど毛ほども思っていないらしい。それはお互い共に心配する必要は無いという信頼をしている上での考え方なのか、ただ単純にあの性格だから来ないという考え方なのか、摩耶と鹿島にとってはどちらか分からなかった。

「まあでも……送迎船が途中でエンジントラブルにより航行不可能、提督を抱きかかえながらここまで来る羽目になるとは思わなかったな」

「俺は楽で充分ありがたいがね」

「抱いて運ぶあたし達の身も考えてくれ」

摩耶が提督を横抱きし、鹿島が荷物を抱えているのは訳がある。**■**大将の手配した送迎船が途中エンジントラブルで航行出来なくなり、仕方なく護衛していた摩耶と鹿島が連れていくという形になっていた。

提督としては身体を横にした方が楽なので、尚且つ摩耶に抱きかかえられながら間近で胸を見る事が出来るのは至福の時と言える。一方で摩耶はそれに気付いていても何故か止めようとはしない。

「着いたぞ」

摩耶達は潮岬町鎮守府周辺にある砂浜へ辿り着く。海面を跳躍して砂浜へ着地する前に艦装を格納。横抱きしている提督をゆつくりと支えて砂浜に足をつかせる。砂浜の一部は黒く焼け焦げていて、クレーターの様な爆発跡がそこかしこに残っていた。翔鶴達との戦争後か、鎮守府の外部でも一部戦闘した跡は消えていないようだ。

「さーて帰ってきたぞ、って今は新しく司令本部を建築してるのか。どこにあるんだ？ 仮の司令本部は」

摩耶達は荒くれ鎮守府内へ入り、次々に建設されていく建物を眺める。建設業者がせつせと汗水流して働いており、仮の司令本部があると聞いてその場所を探していた。

「あら早いよね、もう少し遅れると思ってたわ」
「ん？」

しかし突然身に覚えのある声が聞こえ、摩耶達は声の方向へ振り向く。

「やっぱ艦娘の方が早いよ。そっちで来てもらった方が良かったわね」

「『？』^{オウゲン} 叢雲か、迎え役はお前か？」

「ええそうよ。 ■■大佐に頼まれたからね……早速案内するわ、来て頂戴」

護神厄討艦隊旗艦『？』^{オウゲン} 叢雲が元気に摩耶達を迎え入れてきた。そこで世間話の一つや二つする暇もなく、摩耶達は叢雲の後を追う。四人が向かった先は普段は艦娘達が利用する講堂。その講堂にある空き部屋が仮の司令本部らしく、執務室も兼ねているらしい。

「……やっぱ艦娘がいないと静かだな」

「まあね。この鎮守府って地方なのに割と大規模だし、誰もいないとなれば急な閑散に違和感を感じるのは仕方の無い事よ」

艦娘がいない鎮守府というのはとても不思議なもので、憲兵や整備士などがいても違和感を感じてしまうほどだった。当たり前の感覚が突然当たり前では無くなる事で、急な喪失感で身体に違和感を引き寄せてしまう。言葉にした摩耶や鹿島、叢雲でさえもそれは感じていた。

「ここが仮司令本部兼執務室よ」

やがて講堂内の仮司令本部へ辿り着く。突貫工事が無理矢理作り替えられた雰囲気が見て取れた。名札はノートの破ったページの紙に「仮司令本部」と油性マッキーで書かれており、ドアは何回か蹴破られたのかドアと脇の隙間から中がよく見える。異様な雰囲気言葉葉を失うも提督はその部屋の中へ入った。

「やつと来たかい、遅過ぎて眠っちゃう所だったよ」

「……やはり貴女は変わりませぬね」

部屋の奥には机に足を乗せ、煙草を堂々と吸う ■ 大佐が居座っていた。しかし ■ 大佐の女性の素振りとはらしからぬ行動に誰も指摘したりはしない。提督は口調を敬語にして話しながらゆつくりと ■ 大佐に歩み寄る。

「そろそろ煙草はお止めになった方がいいのでは？ その老体となればいつ倒れてもおかしくはありませんよ、今倒れても私は構いませんが」

「その様子だと余計な減らず口は治さず来たようだな。安心したよ、それぐらいなければ張り合いがないからな」

堂々と居座る ■ 大佐を前に提督は執務机を挟んで相對する。お互い沈黙を保ったまま目で睨みつけ、部屋全体の空気を重苦しくさせた。

「……ありがとうございます。司令官不在の中、鎮守府の経営及び建設費の負担、艦娘の管理など本来は私の執務を態々請け負っていただき感謝の意を表明します」

提督は ■ 大佐の前で軍帽を脱ぎ、深々と頭を下げて感謝を述べた。

提督の意外な行動に摩耶や鹿島は驚きの表情を隠せずにいる。

「ふん………どういたしまして。何だい義親の前には珍しく素直じゃないか、少しは凡骨共のいびりも効いたのかね？」

「ご冗談を………私は一個人の軍人として貴女に感謝を述べただけに過ぎません。ポンコツ兵器共の嫌がらせなどで性格が治る様でしたらとつくの昔に治っていますよ」

「そりゃ違ういな」

提督と ■ 大佐は静かに笑い声を上げる。義理の親子関係とはいえ、この親子の話を傍から見るのは新鮮なものだ。互いに捻くれた性格であり、言動や素振りもほぼ一致。鬼と呼ばれた軍人と海軍一の減らず口と呼ばれた軍人が話しているのは珍しい事だ。

「謎は解けたのかい？」

「………はい。やはり貴女の言う様に闇よりも深い暗黒………徐々に規模

は大きくなっています」

「そうかい……まあ私は楽しんで生きていんでね、そういう事には関わらない主義だからお前らで自由にやってくれ」

提督の話聞いていた■大佐は吸っていた煙草を灰皿に潰し、執務机に乗せていたクリップボードに挟めてある資料を確認した。最後の確認か、軽く見通した後に■大佐は机に乗せた足を床に着かせて立ち上がる。手には恐らく服装などが積まれたキャリアバッグを持っていた。

「さて……そろそろ戻るとしようかね」

「おや、お帰りになられるので？」

「いつまでもここにいては南にいる部下が寂しがるからね。ある程度の手続きは済ませた、後はお前達で自由にやりたまえ……」

——……異動する日までな」

キャリアバッグを引きながらすれ違いざまに■大佐は最後の言葉を吐き捨てる。脅迫じみた威圧感ある声に思わず摩耶と鹿島は身体を微妙に跳ねらせた。■大佐は仮司令本部のドアを蹴って開かせ、静かにその場を去っていく。

しかし——、

「あ、そうそう忘れていたよ」

「……何でしょうか」

「あの護神くなんちやらかんちやら艦隊の艦娘がその叢雲ちゃんとか合わせて三人、ここに來てるんだった。精々気をつけるこったね」

伝える事を忘れたのか■大佐は廊下から顔を出して提督へ伝えた。どうやら護神厄討艦隊の艦娘が何名かこの鎮守府に赴いているらしい。恐らく『？』叢雲が一時的な戦力強化の為に引き寄せたのだろう。

「……叢雲、誰が來てるんだ」

「今はこの私、『？』叢雲と『緋』木曾、『黝』蒼龍、『？』金剛がいるわね、今は哨戒任務でないけど。まあ貴方と共に『鏖』鹿

島と『緋』^{ヒゲレ}摩耶も合わせれば合計六人いる事になるわ」

『？』^{オウゲン}叢雲は提督が横須賀鎮守府へ連れていかれた後、潮岬町鎮守府の仮責任者として鎮守府の護衛と管理を一時的に担っていた。後に灰色や■大佐が肩代わりする事になり、次に叢雲は鎮守府近海海域の哨戒又は防衛を担う事になる。

翔鶴達との戦争後、鎮守府近海付近の制圧海域へ侵攻する深海棲艦の艦隊が目撃され、『？』^{オウゲン}叢雲は日夜問わずに戦っては殲滅させていた。

しかし日に連れて深海棲艦の勢力は徐々に増していき、七壊星である『文曲』^{アストラフイ}戦艦レ級の出現を確認。今後も出現する可能性を考えて叢雲は護神厄討艦隊のメンバーを三人招集し、そして今に至る。

「大所帯だな、まさに敵無しという訳か」

「そうね、今じゃ世界で一番安全な場所はここなんじゃないかしら」
「只今終わりましたらって、あれ!!? 白さん!!?」

何か仕事を与えられていた灰色が疲れた表情で仮執務室のドアを開けて入ってきた。書類を挟んだクリップボードを脇腹に抱えて仕事を終えたようだ。仮執務室に入れば白い軍服を着こなし、特徴的な白い長髪と鮮やかな紅い眼の提督が視線に入り、すぐさま白色だからさまに嬉しそうな表情で気付く灰色。付近には摩耶と鹿島、『？』^{オウゲン}叢雲も入ってきた灰色に視線を集中している。

「おお、灰か。その様子だと随分と鬼に扱かれたようだな」

「はい……めちやくちやにされちゃいました……とほほ……」

■大佐が責任者になったというものの、灰色は厳しい生活を送っていた。午前五時に起床して午前六時に朝食、午前七時から午前十二時まで書類任務に入り、午後十三時から午後十八時までまた書類任務、午後二十一時に消灯又は就寝という余裕の無いスケジュール。少しでも怠る様な事があれば■大佐に鬼の如く説教を打ち付けられ、規律ある生活やマナーをその身に叩き込まれていた。

「んで、さっきの話の続きをしたいんだけど七壊星の件……少し変な動きがあったわ」

「変な動きか?」

「ええ、翔鶴が言うからにはこの状況なら普通は七壊星を三人程送り込んでくるはずだと思ってたの……だけど」

一昨日から連続して七壊星が確認されず、更には深海棲艦の艦隊の勢力が弱くなってきたと言っている。昼夜問わず侵攻してくる深海棲艦の艦隊だったが、一昨日午前三時から急に艦隊の規模が小さくなり、『?』^{オウゲン} 叢雲達は違和感に思っていた。

「明らかにおかしいわ。徐々に規模が小さくなってきてるなんて、何かしら怪しい事を考えてるに違いない。まるで、何かを待ってるみたい……」

「……」

今の戦況はとても不明確な状態で危険だった。 ■ 少尉によって呪われたと言っても過言ではない潮岬町鎮守府は、いつ七壊星や深海棲艦の艦隊によって破壊されてもおかしくはない。

現に深海棲艦の艦隊が襲撃してきているが、強まってくるはずの勢力は逆に弱体化しつつあるという予想外の事態だった。護神厄討艦隊のメンバーを即座に集めて牽制したのが逆に抑制する様な形になったのか。敵側の思考が全く分からなかった。

「って事で摩耶、どうかしら?」

「……ああ、また今日の午後五、じやなくてヒトナナマルマルに深海棲艦の艦隊が襲撃してくる……だけど、よく見られる敵水雷戦隊だ」

「やっぱりね……悪いけど、今後の鎮守府防衛の為に私が一時的に艦隊に加わる事にするけどいいかしら?」

摩耶の【予感】では敵水雷戦隊が鎮守府近海に侵攻してくるらしい。報告を聞いた『?』^{オウゲン} 叢雲は哨戒中の三人へ無線で伝達。三人は即座に敵水雷戦隊へ向かっていったようだ。それを確認した叢雲は提督へ、自身が潮岬町鎮守府に留まる考えを伝えた。

「お前が来るのか?」

「ええ私だけよ。あの三人は各々違う日にそれぞれの鎮守府へ制圧海域防衛の重鎮として帰還させる。そして念の為、この鎮守府で戦力の一時的な弱体化を狙ってくる深海棲艦の襲撃を考慮して、この私が着任するわ」

この不安定な戦況の中で多大な戦力を移動させるのは危険だ。そこで『？』オウゲン叢雲は潮岬町鎮守府に集合した『緞』レイ木曾、『黝』アオグロ蒼龍、『？』ビョウコウ金剛を一週間に一人ずつ帰還。今後の深海棲艦の侵攻を考慮して最終的に叢雲が一ヶ月間残る案を考えた。

「まあ『緋』ヒと『鏢』シロガネがいるこの鎮守府じゃ、恐らく大丈夫だろうと思うのだけれど、念の為にね。もしかしたらこうなる事を考えた上で襲撃してくる可能性があるもの」

「なるほどな……よし分かった。お前の考えを採用しよう。灰、忙しい所悪いが■■大将に提出する異動関係の書類を作成しろ、期限は今週末までな。俺は後で直接■■大将に連絡する」

「わ、分かりました」

提督は叢雲の考えに賛同し、灰色に書類を作成するよう指示を与えた。後で■■大将には提督が直接連絡するようだ。灰色は早速自分の机に向かい、用意された書類を手に取り書き始めた。

「あ、貴方に少し確認してもらいたい事があるのだけど」

「何だ？」

「ついてきてくれるかしら」

仮執務室を出ていき、提督と摩耶達は『？』オウゲン叢雲の後を追う。

向かった先は新しく改装された医務室。

司令本部にあつた医務室は翔鶴達との戦争によって半壊し、一度撤去されて司令本部だけでなく医務室も新しく改装されていた。以前の医務室のドアは木製で廊下の音漏れや開く際の妙な音が酷くなっていたが、今は鋼鉄製の引き戸となって嚴重だが軽く、そして防音と耐久に優れたドアになっている。

「邪魔するわよ」

「は〜い、って貴方!?! いつ戻ってきたの!?!」

「ついさっき」

「ついさっき!?! 一体どうなってるのよ!?!」

医務室の中へ入るとまるで新しく開設された病院のように白く清潔な場所へと生まれ変わっていた。廊下を挟む様に個人の病室が設置され、手術室も用意されている他、医療器具も最新の状態へ一新さ

れている。以前に入院していた横須賀鎮守府の医療施設とそう変わらない。ドアを開けた手前の部屋からカーテンを潜って■醫師が現れた。突然の提督登場に目を見開かせて驚きの表情を隠せずにいる。考えるのが面倒臭くなつたのか頭を掻いて状況を確認した。

「あくまあ……とりあえずいいわ。島風ちゃんの事でしよう？」

「ええそうよ。一応確認取ってもらいたくね」

■醫師の服装も新しく調達されたのか目が眩む程の純白な白衣を着こなしている。さながら医療ドラマに出てくる医師の主人公のようだ。今度は■醫師に案内され、ある病室へ入る。

そこにいたのは――、

「今も意識は戻らないわ。あの時以降身体に異常は見られないのだけど……一向に目を覚まさない状態よ」

綺麗なベッドで眠っていたのは島風だった。

翔鶴達との戦争後に島風は意図せず■少尉の操り人形として翔鶴を脅迫していたが、侵食通信機を取り除かれて以降目を覚まさなくなってしまうていた。呼吸や血圧、心拍数に異常は無く心臓も正常に機能しているが、意識だけが全く戻らない。

遷延性意識障害、いわゆる植物状態に近い状態でいつ目を覚ますのか分からないようだ。大脳や脳幹は至って正常で損傷や怪我もない事から無理に施す必要は無いらしいが、三ヶ月以上この状態が続くとなれば植物状態と認めざるを得ないと■醫師は言う。仮に目覚めたとしても本人との意思疎通や自力で動く事が出来なければ治療は困難を極める。艦娘として復帰出来る事はまず無いだろうと考えていた。

「色々あらゆる手段は尽くしたけどこれが限界だった……いつか目を覚ましてくれるといいんだけど……」

島風の身の回りの世話は全て■醫師が担っており、毎日欠かさず話し掛けている。その為か■醫師は疲労困憊の様で、目にはクマが出来ていた。

「ねえ貴方、何か知ってる事無いかしら？」

「……」

「睨まなくても私は貴方の事知ってるのは分かってるでしょう？ 別に怪しんだりはいしないわ、どうぞ遠慮なく」

■ 医師の問い掛けに提督は一瞬『？』オウゲン 叢雲の方へ睥睨する。それに気付いた叢雲は提督の事情を知っているのか、面倒そうにため息を吐いて気遣った。 ■ 医師は提督と摩耶の事について全てを知っており、叢雲も把握していたようだ。

「……侵食通信機は一時的に艦娘の身体の中にある核を操っている。まあお前の事だろうからサンプルとしてホルマリン漬けにでもするだろうが……あの黒い触手があっただろ？ アレがまだ身体の中に残っている可能性がある。手術でもして取り除くといい」

「分かったわ……流石ね。ありがとう……だったら少し仲間を呼びたいのだけれど、いいかしら？」

「……構わない」

■ 医師はあからさまに嬉しそうな表情で提督へ感謝の意を述べる。険しそうな表情をする提督は何も言わないまま医務室を出ていった。『？』オウゲン 叢雲と摩耶、鹿島は提督の後を追っていく。

「何か嫌な事でも思い出した？」

「ああ……まあな」

147. 時代はこれから変わっていく

「白殿！」

「ん？ ああお前か」

仮の司令本部へ戻る途中、ある人物に声を掛けられた提督。

声の方向へ振り向くと憲兵隊長が急いだ様子でこちらに向かっ
てきていた。かなり急いだのか汗だくで息が荒れている。

「お戻りになられたのですね。お身体の方は大丈夫でしょうか……
？」

「この様子でどう大丈夫に見えるんだお前は。とまあそんな事はどう
でもいいんだが……何かあったのか？」

「いえ■大佐が勝手に一人で帰って行くので無理矢理護衛をつけた
のですが、一体何事かと思ひ鎮守府内を駆け回って今に至る次第であ
ります」

「お前も振り回されたんだな、分かるわその気持ち」

隊長の困惑した表情を見れば■大佐に振り回されたのは容易に
想像出来る。

窓から見える警備中の憲兵の顔を見れば如何に疲弊しているのか
よく分かった。

「しかし本当なのですか？ 白提督殿が異動なされるのは……」

「翔鶴の件で嵌められたからな、降等処分も食らってるぞ。まあそれ
は翔鶴に嵌められていた事を知らなかったからこんな事になったつ
てのもある。今はそれも考慮して内緒に決めるそうだ」

翔鶴によつて罫に嵌り、古鷹を殴った写真が広まった事で提督は処
罰を受けている。潮岬町鎮守府の配属取消又は横須賀鎮守府責任者
■大佐の補佐官異動と二階級の降等処分。本当であれば異動日は
過ぎている為、既に異動済みで潮岬町鎮守府に赴く事は無かった。

しかし■大佐があくまでも訪問と視察という形で手配してもら
い、この潮岬町鎮守府へ来ている。

「そうですか……つて事は、また此方にお戻りになられるのですか
……？ いや、それでは白提督殿に……」

「いや分かんないな。確かに俺はアイツらが嫌いだし、顔も会わせたくないってのはお前らでもよく分かつてるはずだ。下手すればトラウマ呼び寄せるとか思ってるだろ?」

「それは勿論……! あれだけの事をされて……いや、私が決めつける事ではありませんね……すいません」

第三者である憲兵隊隊長から見れば白黒つかない複雑な気持ちだった。

勿論艦娘達が提督にやった事は許されない。

しかし艦娘達が業によつて操られ、やらざるを得ない強制的な状況下だった事に関して是一部考慮する場面もある。更には主犯格である翔鶴達も訳を聞けば悲惨な過去から始まったとなれば、罪は咎めるにしても全ての元凶が■■■少尉だ分かった途端、決して責め切る事は出来なかった。

「……取り敢えず今は後片付けだ。後先考えるより目の前の事にだけ集中しろ、一々考えては頭が追いやられるからな。今の警備体制はどうなってる?」

「はい今は通常通りの警戒を行っております。ですが戦後以降は艦娘を地下営倉に収容した為、厳重な警戒の下で部下に管理させています」

鬼の■■■大佐による指導の下、憲兵隊の警備体制はいつもより厳重さを増している。規律ある行動を心掛けるよう徹底的に扱かれ、少しでも気になる点が見えた時は厳しい罰則を与えられた。流星の憲兵達も突然の非日常についてこれるのが精一杯で、疲労困憊でありながら身体が鍛えられているらしい。今まで提督が決めていた警備体制の意識が緩かった事も一因である。

「んじゃその通常通りのまま行ってくれ。白髭は何処にいる?」

「あの方でしたら工廠にいるかと」

「分かった。引き続き警備を頼む」

「畏まりました」

憲兵隊隊長から白髭の場所を教えてもらい、提督と摩耶達は早速工廠へ向かう。いつものように激しく大きい音は聞こえないが恐らく

休憩中なのだろう。開いている扉の横に寄り掛かり、整備士達に声を掛ける。

「やあやあ元気そうだなによりですねえ、白髭」

「その声は……白提督殿か」

「ええ私です。どうやらあの狂戦士共のメンテナンスで精一杯のようですねえ」

工場内ではメンテナンスを終えた整備士達が羽を休めていた。■

■大佐に扱われて疲れているのかと思いきや、■大佐どころかあの手練の艦娘の艦装メンテナンスで体力を根こそぎ奪われていた。帰還しては出撃し、帰還しては出撃の繰り返しで休む暇は約一分程度。殆どの整備士達は本心では一度くらいサボってもいいのではないかと思う所もあったが、そのサボりの所為でもし戦闘に支障が出てしまったら整備士として情けないと誇りが許せず、身体が果てるまで働いているらしい。

「ご名答じゃ。流石に勤勉過ぎて手が焼くわい……まあその分燃える所はあるがな」

「技術者のプライドという訳ですか……ん？ 何だあそこは」

工場の物置き場にはブルーシートに覆われ、赤い三角コーンと巻き付けられたトラテープが周辺を囲っていた。翔鶴達との戦争後も■大佐の命令により、そのままの状態で残されている。瓦礫や石塊が取り除かれないまままで剥き出しだった穴はブルーシートで隠されていた。

「ん？ あ、ああこの穴か？ 確か翔鶴と戦ってた時に出来た穴らしくてな。今は三角コーンにテープ張って注意するようになっているぞ」

「穴の中は覗いて見ましたか？」

「……口には言いたくねえ、色々と悍ましいモンがあったとよ。後で執務室に書類があるから確かめてみるといい」

白髭曰く、■大佐が直々に穴の中へ入って調べたと言う。穴の中は一つの部屋の中で、取り付けられたドアの先にそれぞれ別の部屋があったようだ。

しかし鼻が歪む程の刺激臭や腐敗臭と思わず目を疑ってしまうよ

うな想像を絶する光景が広がっているらしく、■大佐と共に調べた憲兵が狂ってしまった為に調査は後回しになっていた。

その後■大佐は防護服を着ながら一人で穴の中へ入り、やがて全ての部屋の調査が終了。

調べられた書類の内容には『蠅や蛆虫が無限に湧き続ける、腐敗した誰の遺体かも分からない肉塊が並んでいた』と書かれていた。

「なるほど……では後ほど確認させていただきます。私はこれで」

「あ、そうそう。白提督殿は戻れるのか？　ここに」

「……さあそれは分かりませんね」

白髭の表情からして提督が異動する事は知っていたようだ。提督にこの鎮守府へまた戻ってくるのか問い掛けてきた。

提督は少し沈黙した後、移動しながら言葉投げ捨てる様に言い放ち、その場を去っていく。それを工廠の奥で見ていた整備士達は寡黙なまま呆気にとられていた。

「さて……あまり気分は乗らないが、そろそろ面会のお時間だ。摩耶と鹿島は憲兵隊長に伝達、地下営倉に引き籠るポンコツ兵器共を全員食堂に呼び寄せろ。伝えた後は食堂に集合するように」

「分かった」

「分かりました」

講堂の廊下内にて提督は摩耶と鹿島に命令を与える。

本来この鎮守府に赴いた理由は二つ。

一つ目は■大佐に感謝の意を述べる為の面会、そしてもう一つは潮岬町鎮守府の艦娘達による提督に対する贖罪の意志を直接聞く事。

提督は艦娘達を一旦食堂に集合させ、全員と面会する計画を考えた。

「叢雲は先に地下営倉に向かい、食堂に向かうポンコツ兵器共の監視を頼む。拘束器具は必要無し、自由な状態で食堂まで先導しろ」

「はあ……司令官じゃないから本当は聞く気なんてないけど、分かっただわ」

摩耶達がそれぞれ命令により別れ、一人になった提督は一足先に食堂へ向かった。翔鶴達との戦争中では一切被害の無かった食堂は現

在閉鎖中で、提督は無理矢理扉を蹴り飛ばして中へ入る。数日間も放置状態のおかげでテーブルや手摺の上は埃が溜まっており、奥の厨房も事前に作られていた料理が異臭を放っていた。

「……もう一度清掃だな」

二階へ向かった提督はゆっくりと階段を登り、いつも座っていた場所へ歩いた。テーブルに溜まった埃を指でなぞる様に取り、しみじみと艦娘達に虐められた時の事を思い出す提督。飲み水をかけられたり、砂や泥を混入させられたりと散々な嫌がらせを受けてきたが、提督はそんなみつともない哀れな自分を想像して鼻で笑った。

「アレさえ無ければなく……」

「提督く、いるか？」

「あゝいるぞ」

摩耶の声を聞いて提督は二階から手を上げて自身の位置を教える。食堂の中へ入った摩耶と鹿島は懐かしむ様にその中を眺めた。

「ここにいたのか」

「いつもの特等席だぞ」

「いつもそこだもんな提督……あ、そろそろ来るぞ」

外から大勢の足踏み音と大きな扉が開いて軋む音聞いて、摩耶と鹿島は二階から入ってくる艦娘達を見下ろす。『？』オウゲン 叢雲を先頭に次々に艦娘達が恐る恐るどよめきながら入ってきた。周辺には多くの憲兵が見張っており、そろそろと食堂内の壁へ張り付くようにそれぞれの位置へ向かっている。

「いきなり集合して、一体何を……」

「またあの人が何か言うのかな……」

「怖いな……」

突然の食堂集合に艦娘達は不安がっている。いつもは営倉内で話を聞いていた為に、拘束器具の無い状態で全員が食堂に集合するとなれば多少の不安は募るモノだろう。龍驤や利根、那智や葛城も拘束が解除された状態で食堂へ来ている。

しかし主犯格である翔鶴は中にいる空母水鬼が時々暴れ出す為、連れていく事は出来なかったようだ。それぞれ艦娘を担当している憲

兵による報告を受け、準備万端になった事を確認した『？』オウゲン 叢雲は二階にいるであろう提督の下へ向かう。

そして――、

「やあやあやあやあ、ご機嫌麗しゅうポンコツ兵器諸君」

「っ？ その声は……！」

「まさか……」

「提督!!」

誰もが聞いた事のある声の方向へ顔を向ける。純白な軍服と軍帽、淡く透き通るような白い長髪、汚れのない澄み切った白い肌、宝石のように煌めく蒼い眼。二階のラウンジにて提督が手摺に座って見下ろしていた。

「よお久しぶりだなあお前ら。ちゃんと檻の中では眠れたか？」

突然の提督登場に艦娘達はざわめき、驚きの表情を隠せずに啞然としていた。いつもの声、いつものほくそ笑むような表情で提督は話しかけてきたのだ。戸惑う艦娘達を余所に提督は話を続けていく。

「お前らの話はよく聞いている。何でも俺に謝りたいそうじゃないかあ、もつと謝るべき相手がいるのにも関わらず大した根性だ。思わず敬服しそっだよ」

「提督……悪いけど本題に。あと危ないから降りて」

「……まあ俺が来た理由はお前らの処罰だ。知つての通りだがお前らは俺に幾度となく暴行を働き、殺人未遂にまで追い込んだ。これは立派な謀反であり、脅迫罪や傷害罪など多くの罪が課せられている」

提督が毒舌を吐こうと口数を並べるも摩耶に肩を掴まれ止められる。摩耶の表情を伺った提督は口を止めて蒼い眼から紅い眼へ輝かせ、乗っていた手摺から離れて立った。摩耶と鹿島に支えられながら提督は叢雲に渡されたクリップボードと挟められた書類を手を持つ。

「そこで俺はお前らに罪を償う意志があるのかどうか、■■大佐に協力してもらい、それぞれの話を聞いた後に然るべき処罰を下す事に決めた。だから今日、それを告げる為にお前らにはここへ集まってもらったわけだ」

渡されたクリップボードにある書類には提督が纏めた処罰の内容

が書かれていた。艦娘達の贖罪の意思と共に提督が直筆で書かれた処罰を記している。提督は躊躇いもなく艦娘達の前で告げた。

「早速だが伝えるぞ……駆逐艦二十三名、軽巡洋艦及び重雷装巡洋艦合わせて十二名、重巡洋艦及び航空巡洋艦合わせて十一名、戦艦十名、航空母艦又は軽空母及び正規空母一人除き十一名。これら全員の罪を情状酌量の余地があるものとみなし、四年の懲役と七年の執行猶予を言い渡す。また殺害計画を建てた主犯格であり、今までに渡る全ての行動に伴い、全責任を負うものとして翔鶴型航空母艦一番艦翔鶴を旧式解体処分とする。またこれは本人の意思を尊重したものである……」

提督は真剣な表情で自ら決めた処罰を艦娘達に言い渡した。

「以上が俺が下す処罰だ、勿論摩耶と鹿島、プリンツにも適用される。もしお前らが七年間、何も罪を起さず善行を積みばこの罰も減刑されるだろう」

「ちよつと待つてよ……提督さん……！」
「っ……っ？」

艦娘の誰一人声も上げない静寂に包まれた空気の中、瑞鶴が震えた声で提督に物申す。全視線が瑞鶴に集まり、加賀や蒼龍達が止めようと瑞鶴の肩を掴む。瑞鶴の納得いかない表情に提督は冷ややかな視線で睨み返した。

瑞鶴が声を上げた理由も理解出来る。

自身の処罰がある事には変わりはないが姉の翔鶴だけが旧式解体処分にされるのはおかしいと思っただろう。翔鶴も■少尉に貶められた被害者であり、旧式解体とは言わなくても他の処罰があるだろうと瑞鶴は目で提督に訴えているのがよく分かる。

「翔鶴姉は……！」

「瑞鶴、確かに翔鶴も弱みに突き込まれて■少尉と空母水鬼に操られた被害者だ。翔鶴に元の心があれば考慮していたが、今の翔鶴の身体には空母水鬼の人格、そしてその空母水鬼と翔鶴の魂が混ざった人格が残っている。その混ざった人格の中で翔鶴が空母水鬼を完璧に抑え込めれば話は変わる可能性はなくもない」

「だったらもつと深く調べれば……！」

「勿論日にちを調整して調査も行う、決めたからと言って即刻やるわけじゃない、最後まで話を聞け瑞鶴……話を戻すが決めた理由はそれだけじゃないんだ。翔鶴はその人格でこの潮岬町鎮守府を支配し、お前らに恐怖と絶望を味あわせた……それはお前らでもその身を持って鮮明に憶えているはずだ。この俺だって死にかけた」

ギプスで固定された左腕をクリップボードで視線を集めさせる。顔を俯き瞬きした瞬間に紅い眼が蒼く染まり、提督は翔鶴達に嵌められた時の屈辱的な悔しさを誰にも分からないようにゆつくりと歯を噛み締める。

数十秒間か沈黙が続く中、提督は話を続けた。

「だからと言って、感情任せに今すぐ殺してやるなどと小学校低学年レベルの感情処理で憎悪を孕ませ死に追いやるほど俺はそこまでガキじゃない。中立の立場で公正に見極め、定められた規則の基で判決を下す……先程も伝えたが翔鶴については近々調査も横須賀鎮守府で行う。その判決がお前らにとつて大きかろうが小さかろうが、不公平だろうが理不尽だろうが関係無い。簡単に文句を言える立場だと思ったらそれは大間違いだ、分かったか」

持っていたクリップボードを『^{オウゲン}?』叢雲に投げ渡し、提督は手摺に右腕を乗せて寄り掛かる。夕陽の如く鮮やかな朱色の眼で提督は艦娘達を見下ろした。息を詰まらせる様な緊張漂う空気が食堂内を包み込む。誰一人声も発さない閑静とした環境の中で心臓の鼓動音が聞こえてくる。

「……本来お前らには基本的人権が無い。平等権、自由権、社会権、請求権、参政権など多くの人権の尊重を守る権利が無いんだ。だから■少尉がやってきたようにお前らをモノ同然とひたすら人扱いせず、にどんな目に遭ったとして、それをお前らがどれだけ叫ぼうが、いくら泣き喚こうが、必死に訴えようが第三者が何も思わなければ問題ない……それが世の中だった」

だった。

その話を過去のように提督は艦娘達へ聞かせる。

提督の顔はとても真面目で、それこそ捻くれた性格とは程遠く、それらを一切感じさせない顔だった。

提督は手摺に寄り掛かるのをやめ、右手で手摺を掴みながら右へゆっくりと動かした。

手摺に溜まった埃が右手の掌外沿へ寄せ集められていく。

「だが近年では艦娘に人権を与えようと思う人間派が世間でも声を出せるようになってきた。蒼■中尉だけでなく、多くの一般人が、多くの政治家が、多くの軍人が、お前らを兵器派から護ろうと一日一日地道な努力を積み重ね、艦娘に人権が与えられるよう戦ってきたんだ」
提督は階段の一步手前までゆっくりと歩く。

手摺に掴んだ右手を右へ右へと滑らせながら移動し、掌外沿に埃が鼠色を帯びて手の甲まで寄せられ、塵同然だった小さな埃が山を為して積もってきた。

「国を護ってくれる艦娘という少女の姿を模した艦らしき兵器達の存在を……いや、艦の姿を模した少女達の存在を、今度は我々が護ろうと皆が立ち上がった。艦娘でも自由に人として生きられるように立ち上がったんだ。その想いが今ようやく届きつつある……艦娘にも基本的人権の尊重を、兵器派を退けて今も頑張ってる」

時雨と夕立の件でも少なからず二人を擁護する者はいた。艦娘という存在を根本から変えてしまったとしても、二人を信じる者は必ずいる。

そして提督と古鷹の件でも古鷹を信じて擁護する者はいた。見知らぬ誰かが艦娘を人間だと信じて、必死に軍へ訴え続けている。

その想いは新米の軍人や灰色へ、または声を上げる政治家へ、更にはその政治家を応援する人々へ。数多の想いが継がれていき、海軍へ反撃の狼煙が上がっている。

「しかしながらその想いは、悔しくも完璧に届いていない。多くの人達が立ち上がったとしても、お前ら艦娘が意思を持って立ち向かわなければこの想いは決して届かないんだ……！ 感情が豊かなお前らが直接人間として証明しなければ……継がかれた想いが無駄になってしまう」

右手で寄せた埃の山を勢いよく吹き飛ばし、埃は塵になって消えてしまった。積まれた埃を想いと掛け、艦娘自身が立ち上がらなければ今のように継がれた想いも塵となって消えてしまう。それは話を聞いた艦娘達でも決して止めなければならぬ事だと分かった。

「これは艦娘の基本的人権の試行段階による実験と試練だ。もし罪を犯したお前らが与えられた執行猶予中の期間、何事も無く善行を積んで生きる事が出来たのなら、お前らは本当に人として証明される事になる。これは全国の鎮守府でもケースは違うが、似たような事を実施している。人々の想いと蒼■中尉の想いがようやく達成されるんだ……尽く虐げられ、弱さを思い知り、その弱さに寄り添い、人の強さを信じ、人の心を理解し得ているお前らなら簡単に出来るだろう……間近で見た俺が言うんだ、無駄にするなよ」

再度手摺に寄り掛かり、右手で顔を支える提督。

普段から捻くれた事しか言わない提督の励ましののような言葉が重く感じた。

「……俺は少なからずお前らを信頼していたらしい。嘘なんかじゃない、俺が気付いていない……いや、気付いていないフリをしていただけで本当は心の中で無意識に……信頼、していた」

「え……」

「上辺だけの信頼だ、本当に心の底からお前らを信じていたのかどうかは分からない、そしてその上辺だけの信頼がお前らにとってどういうモノのかも分からない。お前らも俺と同じく、口には出さずとも内心は俺を嫌っていたからな」

「……違う」

若く幼い声が聞こえた。

声の方向には響が帽子を上げて提督を見つめている。

「違うよ司令官。私は本当に司令官を信じてるんだ。上辺だけの信頼なんかじゃない、本当に私は……いや私達は信頼しているんだ……今も」

「私だって……提督に救われたから……！ 嫌ってなんかいない……本当に提督を信じてる……私は……！」

響に続いて蒼龍も繋ぎ繋ぎで伝えたい言葉を提督へ必死に声を大にして口を開く。今提督に分かつてもらいたい事を思いつく限りの言葉で伝えた。

「まあいずれにせよ俺はここを去る。俺が古鷹を殴った写真が広まった事、翔鶴の事も含めてお前らが仕出かした事で俺は全ての責任を取る形で横須賀鎮守府に異動する事になってるからな。プリンツ、お前も後々大本営に異動する事になっている。それらはお前らでも充分なほど身に染みて理解してるはずだ」

薬の効果とはいえ、艦娘達は提督を脅かした事を鮮明に覚えていく。自分達の所為で信頼している提督という存在を自ら手放してしまった事に罪悪感は一層に深くなっていく。拳を熱くなるほど握り、過去の愚かな自分をひたすら憎んだ。

直接の原因になってしまった古鷹は握った手から血が滲み出るほどの憤怒に駆られていた。何故あんな事をしてしまったのか、何故酷い事を言ってしまったのか、自身の頭の中で問い続けた。あの時提督に殴られた頬の痛みがより痛烈に感じる。殴った理由が自分を大切にして欲しいという提督の切実な願いだという事を理解して、古鷹は己の中で一番恥ずべき行為だと自覚していた。

提督が必死に訴えていた言葉の意味が目覚めた後の最悪な今になって心に深く突き刺さる。まるで氷のように凍えた鋭利な刃が傷だらけの心にとどめを刺すかのようだ。

「罪悪感を持っているのなら自業自得、傍から見れば簡単に分かる事だ。嫌っていたなら晴れて清々するだろう、上辺だけの信頼も最早無い……ご苦労だつ、何だ鹿島」

「■大将から緊急の連絡だそうです」

提督が最後のお別れの為にさよならを告げようとした途端、背後から鹿島に肩を叩かれる。面倒そうに提督は背後に振り向くと鹿島はいつになく真剣な表情で右手にはスマホがあった。■大将から緊急の連絡があると鹿島は耳で囁き、提督へスマホを差し出す。

「……もしもし、代わりました白ですが」

『私だ、君は白か』

「はいそうですが、どうされましたか？」 ■■大将閣下」

『急で悪いが君の異動は一旦取り消した。緊急事態が発生した』

「っ……何があったのですか？」

『ああ。本来であれば君が異動した後着任する予定の司令官だった ■■大尉が不慮の事故で死亡してしまった。 ■■元帥曰く、手配するまでの期間は申し訳ないが君にいてももらいたかったそうだ』

■■大将の話聞いて提督は嫌な胸騒ぎに襲われる。どうやら着任予定の軍人が送迎車で送られている途中、突然送迎車が急加速して方向転換を失った後にトンネルの壁に激突。送迎車に乗っていた運転手とその軍人は事故による即死だったらしい。

鎮守府の軍人不在を埋め合わず為に ■■大将や元帥が新たに軍人を手配するまでの期間は、提督が一時的に潮岬町鎮守府の提督としてまた運営する事になった。着任予定の軍人が亡くなった事により、潮岬町鎮守府には司令官候補生の灰色しか残らない事になる。まだ灰色は実戦不足故に一人で任せるには荷が重過ぎるだろう。

しかし提督はそんな事よりも、その不慮の事故に違和感を感じていた。

「……まさか……」

『気付いたか……そうだ、不慮の事故と表向きには公表させているが本当は違う。明らかな殺人事件だ、警察の調査で判明した』

明らかにこの事故は潮岬町鎮守府に関するものは確実だ。

着任予定の軍人が仕組まれた事故で亡くなり、その事故を受けて何故か ■■元帥は提督にいてもらうように命令を下している。

『更には小笠原諸島海域や硫黄島海域で深海棲艦に新たな動きが確認されている……詳細は後で話そう……』

『——奴等が……動き出したぞ』

提督の眼から一瞬、紅い稲妻が迸った。

Part 8. 廻光返照のドロマイト
148. 夏の中でも残暑が一番暑い

「おはようございます！」

翔鶴達との戦争から約一週間、提督による処罰の宣告から二日後の事。

講堂の空き部屋に設置された仮司令本部兼仮執務室で元気に挨拶するは司令官候補生の灰色。クリップボードに挟まれた書類を持ちながら仮執務室のドアを開けた。

窓から鮮やかな青い空と白い雲、緑澄み渡る森林と太陽に照らされる岸壁が背景に写る。

エアコンから吹き続ける涼しい風が灰色の喉元を静かに通った。仮執務室に入ると執務机に提督はいらず、手前から悩み声が聞こえる。即席に用意された応接間のソファにて提督と摩耶が書類の束を見て頭を悩ませていた。

「どうしたんですか？ 神妙な顔されて」

「ここ数週間、立て続けに色々な事が起きたからな。この鎮守府の運営維持がかなり難しい状況になりつつあるんだ」

■少尉と『巨門』テラスティア戦艦棲鬼による鎮守府襲撃での司令本部半壊、そして翔鶴達との戦争による司令本部の全壊と寮の半壊。

一度目は提督が全額負担し、夏を迎えた時は既に完成に近付いていた。

二度目は全て■大佐が負担してくれている。新たに司令本部や寮も改築工事が始まっており、何事も無く過ごしていた。が、問題はそこではない。

建築工事費用は負担してくれている分、まだ楽だが問題は資材だ。立て続けに戦闘が続いた事で貯蓄していた資材が底をつきそうになっていた。燃料や鋼材、ボーキサイトは三度ほど出撃したら消えてしまうほど消失しており、弾薬に至っては翔鶴と古鷹が激突した衝撃で弾薬が引火し、大爆発した事でほぼ皆無である。

「何とか増やしていく方法ってあるか？ 摩耶」

「ああ、あるとも。提督が呉鎮守府に隠しておいた五万近くの燃料とボーキサイト。大本営の地下に何重にも施錠して隠してある十二万近くの弾薬と何千万もの資金。そして以前務めてた磐城鎮守府の地下に隠した六万近くの鋼材」

「何一つ駄目だなあ」

「いや出来ますよ!!」

摩耶の発言から考えられる膨大な備蓄量に驚きながらも、頑なに渋り続ける提督に思わず灰色はツツコんでしまう。灰色に言われたのが癢に障ったのか、提督はムツとなって立ち上がり灰色の目の前まで歩き迫った。

「俺はわざわざ深海棲艦との来たるべき戦争の日に備えて蓄えてやってるんだ。このとち狂った戦況の中、貯蓄でもしなければ情勢を持ち返すなど不可能!! お前のような平和ボケした深ア二主人公が如何に主人公補正で恵まれている事か少しでも自覚して俺に頭（こうべ）を垂れて感謝し、少しは価値のある報告でもあげてこい!」

提督の怒濤の悪口に灰色は為す術なくひれ伏せられる。いつもの提督だと灰色は内心は安心した。とはいえ互いの顔が近い距離で悪口を大声で発せられるのは少し心が痛い。

「価値のある報告って……時雨達の事ですか？」

「アイツら以外に誰がいる。あの叢雲や吹雪のような第三次性徴止まりの戦闘大好きクソガキとは違うんだ。第一必ず成し遂げると言い出したのはアイツらだぞ、あの現状じゃ打倒七壊星など夢のまた夢だ」

一時的に潮岬町鎮守府の管理者としてまた着任した提督は艦娘達を全員、訓練に強制参加させていた。太陽から浴びせられる皮膚を焦がすような陽射しが照らし続ける夏の中、汗を滝のように流しながら艦娘達は練習巡洋艦鹿島と護神厄討艦隊旗艦『（オウゲン）?』叢雲の訓練に励んでいる。この訓練するには煉獄に等しい環境下でありながら、艦娘達は弱音を吐くどころか自己的に訓練へ参加していた。

艦娘達の理由は二つ、ある深海棲艦を倒す事と■少尉の復讐だっ

た。

「その事で報告があります、白さん」

「何だ」

「七壊星『ディアボルフ貪狼』集積地棲姫ですが、何故かこのタイミン・グで現在硫黄島で目撃が確認されたと横須賀鎮守府遠征艦隊から報告を貰いました。また■先生が島風の手術の為に医師仲間を招集、これから始めるそうです」

灰色から渡されたクリップボードの書類には事細かに記された目撃情報が記載されていた。七壊星の一人である『ディアボルフ貪狼』集積地棲姫が硫黄島で何かをした形跡を残していたらしい。

また島風の身体の中にある黒い触手を取り除く為、■医師が仲間を集めてこれから手術を行うようだ。

「なるほど。んで、報告はそれだけか？」

「え？ は、はい」

「七壊星については俺の所で考えておこう。灰は訓練の様子を見てきてくれ。後島風の手術時間中は誰も医務室に近付けるな」

「分かりました！」

灰色は元気よく答えてその場を去る。

執務室には提督と摩耶だけが残り、二人は引き続き資材については話し合った。

「しっかし立て続けに面倒な事が起きたといい、テレビじゃすっきりここも有名になってきたな提督」

「別の意味だけだな」

テレビでは連日で潮岬町鎮守府と提督の事で持ち切りになり、最近では着任予定の軍人が不慮の事故で亡くなった事を取り上げている。表向きに事故として広まっているおかげで裏の事実を知る事は無いが、それでも専門家や芸能人は軍の対応に不安を隠し切れない様子だ。

以前にも時雨と夕立が話題に上がった事と提督が古鷹を殴った写真の事で日本海軍の信頼、そして潮岬町鎮守府に対する信頼は右肩下がり。更には潮岬町鎮守府から五キロメートル離れた地域から雲空

が紅黒く染まった画像が異常現象として各地に広まり、これもまたニュースやワイドショーなどで物議を醸している。日本海軍はこの事についてはあまり詳細を話さず、あくまで深海棲艦の襲撃としてこの事象を裏付けた。

その影響でネット上では『紅黒い空が突然光った』や『紅い流星群が見えた』などと一部の戦闘現象を目撃しており、また深海棲艦も見た者がいると現れた事で完全に襲撃の事だと思いついでいる。

「提督が着任にしてから全く退屈じゃなくなつたな」

「俺らに退屈という時間は存在しないだろ摩耶。暇という時間なんて過去も今も全く無かつた」

「まあな。でもこうやって気楽に話せる時間はあるけど」

提督が座る一人用のソファの肘掛けに座る摩耶。足を組みながら背もたれに肘を置いて提督を眺める。その表情は欣快きんかいに溢れていて、声は出さずとも頬は少し赤らめており、目に見えて嬉しそうなのがよく分かった。その表情を見た提督は目線を摩耶から書類に移動させる。

「……摩耶らしくない」

「いいじゃんか、たまには」

摩耶は提督の頭を抱くように腕で囲み、自身の腹辺りにゆつくりと寄せる。頭を抱かれた事で露わとなつている摩耶の腹の素肌から心地いい暖かさを感じた。

頭ごと抱かれた提督は反応せず次々と別の書類に目を通した。摩耶が仕事をサボっている事に対して何も言わず、ましてや抱かれている事に関して何も文句は言わない。抱かれたまま二人は何も言葉を発さずに十五分が経過した。

「なあ提督」

「何だ」

「夏つてなると……あの時の事、思い出すよなあ……」

摩耶は仮執務室の窓から見える夏の光景に黄昏た。遠くから蝉の鳴く音が幽かに聞こえてくるのが徐々にしまつていた過去を思い出させてくる。

飛んでいる虫を捕ろうと虫あみ片手に虫かごを抱えて走る子供と、それを追い掛け汗を掻きながら見守る艦娘。

木に張り付いた虫を捕る為に艦娘に抱きかかえてもらい、高い所まで子供を持ち上げる。

しかし後ちよつとの所で逃げられ、泣いてしまう子供を見て艦娘は慌てふためたいた。代わりに一緒にかき氷を食べ、満腹になった子供は疲れて寝てしまう。

艦娘は眠った子供をおんぶして鎮守府に帰っていった。

そして――、

「摩耶ー？ 聞こえてるかー？」

「……？ あ、悪い。少し黄昏てた……ホントは色々人間らしい事しかかったんだけどな」

「生憎あいにくこの世界じゃそんな茶番は出来ないようになってるからな。こうやって束の間の平和で出来た時間を使って俺にひたすら甘えるぐらいの事しか出来ないんだ」

摩耶が提督を抱き締める事は滅多に無く、こうやって二人になる時間ではかやらない事が殆どだ。摩耶自身も恥ずかしいと思ってるのか提督に甘えるのは少しきこちないらしい。

数少ない平和なひと時を作るのが精一杯なこの世の中で、艦娘が甘える事など珍しい事だと思われてもおかしくはないだろう。

それほど今は残酷な世の中になっている。

「案外口に言われると恥ずかしいなそれ」

「事実だろう」

「そうだけど……それを言っておきながら注意しない提督も案外満更じゃないよなあ？」

「勿論。俺が唯一信頼している相手の数少ない愛情表現を無闇に止めたりするわけないだろう……お前だけだ、こんな事を出来るのは」

提督は一度摩耶の方へ顔を振り向かせ、少しだけ下手な笑顔を見せ

る。提督自身も摩耶が愛情表現をしてくれるのは嬉しいものがあり、何事も無ければ止めはしないようだ。提督が唯一信頼している、且つ愛している相手であれば文句は何一つ言わない。

「……そうかよ。だったら……オラオラっ！ もっと摩耶様の暖かい抱擁を味わえ！」

「摩耶、流石に苦しい」

——二日前

『どういう事か、説明願えないでしょうか』

時は少し遡る。

着任予定の軍人が亡くなった事を報告されたその日の翌日、朝から提督は即席で用意されたモニターにてミーティングをしていた。画面に映っているのは大本営の■元帥、横須賀鎮守府の■大将。日本海軍のトップに等しい二人と大佐である提督がテレビ越しに話している。三人の周りに艦娘やその他の関係者は執務室を立ち入り禁止にして一切の入室を余儀なく禁止していた。

『私の言った通りだ。着任予定の■大尉が不慮の事故で亡くなった。■元帥が手配するまでの期間は君にいてもらいたい、と』

『そういう事だよ、白くん。すまないね、迷惑をかけてしまつて。まあこれも一部の罰だと思つてね』

『……色々言いたい事はありますが、致し方ありません。それで、今日は何故このような会議を？ しかも三人のみのテレビ会議とは』

突然の対応に色々と疑問を呈したところだが、自身への罰として仕方なく提督は受け入れる。それよりも今回この三人でのテレビ会議にした事に疑問の念を感じていた。嚴重且つ徹底的、あまりの警戒さにまるでこれから話す事を誰にも知られたくないような雰囲気だ。

その雰囲気とは裏腹に気さくに話しかけてくる ■■■元帥を見て、警戒しなければならぬとは分かっているにも少し腹が立ってきた。情勢が不安定なこの状況で ■■■元帥が黒■■■に操られている可能性があるという事を知っていなければ、この親しみ易い話し方にも疑問には思わなかっただろう。

もし本当に ■■■元帥が黒■■■に操られているとしたら、その親しみやすさは誰にも悟られないようにする為の演技として考えられる。自身が誰かに脅されている事を匂わせない為に必死に隠しているのだ。

であれば提督が潮岬町鎮守府に着任し、初めて ■■■元帥が訪れた時から既に脅されている事になる。その時何か伝える事が出来なかったのか、それとも脅されたモノが大切なモノだったのか。考えても全く想像が追いつかなかった。

『実はね、君のところの翔鶴……どうやら摩耶と同じく深海棲艦を取り込んでいるという話を聞いたんだ。だから私の所でちよつとした調査をしたいなと』

『……横須賀鎮守府ではなく、大本営で行う……と？』
『そうそう。駄目かな？』

本来は横須賀鎮守府の研究施設にて翔鶴の調査を行う予定だったが、 ■■■元帥はわざわざ大本営の研究施設にて調査をしたいと言ってきた。それを聞いて ■■■大将と提督は表情は崩さずとも内心では一気に勘づく。

二人の思惑は殆ど一致していた。

何故翔鶴を横須賀鎮守府の研究施設ではなく、わざわざ大本営の研究施設にて調査を行うのか。確かにどちらとも設備や環境においては明確に差は存在しない。どちらで調査をするかなど争う必要もないほどだ。

しかし大本営の研究施設で翔鶴を調査したいと言うのなら、裏で操る黒■は翔鶴の存在を欲している可能性がある。

恐らく考えうる目的は計画をバラされた事による翔鶴の報復、又は潮岬町鎮守府の情報奪取。前者は別として問題は後者、黒■に潮岬町鎮守府の情報を提供されてしまう事だ。

もしABC計画の主犯格である黒■が■少尉と何らかの手段で繋ぐ事が出来るとしたら、潮岬町鎮守府の艦娘達の情報は相手にとって有益な情報でしかない。

これから敵対する上で戦闘が勃発するとなれば戦況は大きく左右されるからだ。艦娘の精神状態、得意な戦術、艦娘の強みや弱点が知られれば必ずこちらが不利になる。

それだけは絶対に避けなければならない。

故に安易に■元帥へ翔鶴を引き渡すにはリスクが大き過ぎる。

そう簡単に翔鶴を引き渡す訳にはいかない。

出来れば拒否したいが、この状況ではそうも上手くいかないようだ。

相手に意見を聞くのではなく、イエスカノーかで聞いてくる厄介さ。前に■元帥と■大佐が潮岬町鎮守府の艦娘達の処罰を決める際、提督の意見を聞いてきた時とは全く違うやり方だ。余裕がないほど■元帥は追い詰められているのか、それとも黒■と■少尉が追い詰められているのか。

深く考えたいが時間だけが過ぎていく始末だ、熟考すればするほど怪しまれる可能性がある。かと言って無闇に発言するのも危険過ぎる状況、提督は脳の血管がはち切れるまで考え続けた。

『……■元帥、翔鶴の件は私の横須賀鎮守府で調査を行う事になっています。以前にもその書類は目に通したはずですが、何故わざわざ大本営で行うのでしょうか?』

■大將が話に割り込み、本来の案件を簡潔に伝えていく。そしてそれと同時に大本営ではなければならぬ理由を聞き出した。

■元帥に潮岬町鎮守府の翔鶴を調査する件については既に書類を通して把握させている。まさか目を通さないなどと職務を放棄する事は何かあっても無いはずだ。大本營の研究施設でなければいけない理由があるのなら、簡単にその理由を答えるのが当然の事だろう。

もし答えられないのなら――、

『分かってる、把握済みだよ。だけど君の摩耶の様に深海棲艦の力を身体に有していたからね、その時纏めた資料を照らし合わせて上手く扱えないか試してみようかと思ってるんだよね』

■元帥の狙いは深海棲艦の力を操っている摩耶の様に、翔鶴も深海棲艦の力を上手く扱えるように実験するという事のようなのだ。

近年の研究では摩耶の様に深海棲艦を身体に有している艦娘は凄まじい戦闘能力を秘めており、研究者達は実験体が来るまで準備を進めているらしい。その実験体が既に深海棲艦を身体に有している翔鶴となれば研究は大いに進み、必ず発展を遂げると■元帥は豪語した。

勿論■大將はその極秘研究について大体把握している。■

大將のような上層部の中でも指で数える程の人数しかその情報は知られていない。提督も元は中將だった為にある程度の情報は認知していた。

しかし■大將はその極秘研究の件を提督が知っている事に少しだけ不安に感じざるを得なかった。■元帥は気付いているのか分からないが、今の提督は明らかにあの白色の時の記憶を取り戻している。もし摩耶と受けた非人道的な扱いや実験の数々、深海棲艦の提督の記憶があるとするならば、その憎悪は計り知れない事だろう。提督であれば激昂して殺意を溢れ出させてもおかしくはない。

『……私の摩耶と同じように……翔鶴も、ですか？』

『そう。戦力強化の為の案として悪くないとは思わないかい？』

『確かに、今の戦況であれば良いかもしれませんがね。ですがそれは急がなくても出来るはずです……一刻を争う事態ならまだしも、聞いている限りでは緊急の事とは思えません。横須賀鎮守府の研究施設で調査が終わった後では駄目なのでしょうか』

とはいえ、提督が感情任せに暴れて取り乱すような男ではないと■
■大將は分かっている。■元帥の狙いを冷静に分析し、提督は横須賀鎮守府での調査に交渉を求めた。

『……確か、潮岬町鎮守府から横須賀鎮守府への搬送日は後四日、横須賀鎮守府横須賀鎮守府での調査期間は五週間、だったかな』

『間違いはありません』
『だったら……期間を少し、長くしようか。搬送日は変わらず後四日、横須賀鎮守府での調査を六週間にしよう』

意外にも■元帥の口から発せられたのは調査期間の縮小ではなく延長。予想しなかった■元帥の発言に二人は表情は動かさずとも内心は驚愕していた。

もし黒■に脅されて命の危険が及んでいるのなら普通は調査期間を縮小するはずだ。しかし■元帥は敢えて調査期間を逆に延長し、実験の期間を遠ざけた。それでは今まで語っていた戦力強化の為による実験の下りが意味を成さない。予想外の発言に思わず何か裏があるのではないかと怪しんでしまうほどだった。

『六週間、ですか？』

『そう、どうせなら私も拝見したいと思っただけね。横須賀鎮守府の調査期間があと一週間あれば、ちょうどよく見られるんだよ。だから伸ばした』

自由気ままな性格である■元帥ならばあってもおかしくない事だ。ただ鎮守府を訪問したいが為に他の仕事の期間を少しずらすな

どよくある事でもある。完璧に仕事はこなす為に誰も文句は何一つ言わないが、今の状況もあつてか少し複雑な心境だ。

『……分かりました。ではその日程で始めたいと思います』

『私も把握致しました。順次、準備を進めてまいりたいと思います』

『うん、我儘に付き合ってくれてありがとね！ んじゃ、これにて会議は終わり！』

テレビ会議は何の前触れもなく終了し、**■**元帥は腕を伸ばして背伸びし始める。**■**大将もため息をこぼし、提督は肩を解すように揺らした。それぞれ通話を終了しようとしたその時、**■**元帥は最後に伝える。

『……頼んだよ——』

149. 一度くらいは奉仕されてみたい

提督が仮執務室にて通話中、朝が過ぎて束の間の待機時間を過ごしていた艦娘達。彼女らは食堂にて朝食を食べ終え、部屋に待機するよう命じられていた。

提督から与えられた処罰、懲役四年と執行猶予七年。

執行猶予によりこれから七年間、何の不祥事も無く善徳や戦果を積みめれば処罰は帳消しされる。艦娘達の考えは少し似つかなくとも大体は一致していた。

必ず二人の提督の為に戦う、と――。

潮岬町鎮守府の艦娘達は、記憶から消去された蒼色への弔いと救ってくれた提督への償い。

潮岬町鎮守府に着任した艦娘達も提督への償いをする為に、この先どんな困難でも立ち向かってみせようと気合いを入れていた。

そんな中で――、

「飛行場姫」

「ヨイショット、何ー?」

「話があるんだけど、来てくれないかしら」

食堂の厨房にて飛行場姫がせつせと後片付けしている中、ある艦娘が飛行場姫を呼び出した。

厨房を抜け出して顔を見せると、目の前にいたのは航空母艦の瑞鶴。真面目な表情で飛行場姫を見つめていた。

「鳳翔、少し離レルワ」

「分かりました」

鳳翔から確認を取ってもらい、飛行場姫は給食着を脱いで用意する。元の露出した衣装を着て、待っていた瑞鶴の後を追った。

夏の厳しい暑さが吹き返していく昼手前、二人は第一倉庫の裏へ向

かった。

倉庫の裏は柵壁の上から覆い被さるほど木が生い茂っている。太陽の光が届く事は少なく影に覆われ、あまり人が来る事も無い。そして遠くに水平線が映り、涼しい潮風が流れてくる為に休むには絶好の場所ともいえるだろう。

「ンデ、コンナ所マデ来テ何ノ話ガアルワケ？」

黙々と瑞鶴の後を追ってきた飛行場姫が柵壁に寄り掛かって話し掛ける。

内心飛行場姫は瑞鶴を怪しんで警戒していた。

「……率直に聞いわ、飛行場姫」

「ドウゾドウゾ」

「翔鶴姉を……元に戻す方法って……知ってる？」

瑞鶴の問い掛けに飛行場姫は数秒間微動だにせず固まる。そして何か考えたのか面倒臭そうにため息を吐いて、身体を動かし瑞鶴の方へ臍を向けた。

「……悪イケド知ラナイワヨ、ソナ事。私ニハ関係無イワ」

「本当に……？ 何も、知らないの？」

「ジャア逆ニ聞クケド、何デ私ガ知ツテルト思ツタワケ？ 私ガ深海棲艦ダカラ？」

飛行場姫は腰に左手を当て、右手の平を空へ向ける。飛行場姫の言葉が凶星だったのか瑞鶴は黙り込んだ。

「言ツテオクケド、私ハ貴女達ノ敵ヨ？ 仮ニ翔鶴ヲ元ニ戻ス情報ヲ持ツテイタトシテ、ミスミス敵ニ情報ヲ明ケ渡スト思ウ？」

それは翔鶴がはずれ旧式解体という方法で死にゆく運命だとしても飛行場姫は情報を渡すつもりは一切無い。

そういった技術があるならば逆があると海軍の人間達は黙っていられないからだ。

摩耶や翔鶴のような恐ろしい存在が敵対するのは深海棲艦側にとっては厄介でしかない。何がなんでも飛行場姫は提督以外の人物に情報提供したくないのだ。

「確力ニ私ハ有益ナ情報ヲ持ツテルケド、ソレハアクマデ提督ノ為。

貴女達ノ為ニ捕虜ニナツテル訳デハナイノ」

「じゃあ色々知ってるじゃないのよ」

「翔鶴二関シテハ知ラナイワ、コレハ本当ヨ。ダツテ翔鶴ノ中ニ生意氣ナ空母水鬼ガ居ルダナンテ私モ氣ツカナカッタシ」

飛行場姫が地上へ出て何週間か経つが、翔鶴の身体の中に空母水鬼がいた事には全く気づかなかつた。時々その片鱗を感じる事はあつたものの、大体は摩耶だと思ひ込んでいた為に疑問には思わなかつたらしい。

「第一、何デ貴女ハ翔鶴ヲ助ケヨウトスルノ？ 仲間ニ酷イ事ヲシテタンデシヨ？ ソンナ艦娘ノ妹ニナツテ恨マナイノ？」

飛行場姫の発言に瑞鶴は眉をピクつと動かす。

すると瑞鶴は手を強く血が滲み出るまで握り込め、髪を逆立てさせた。明らかな憤怒の感情が飛行場姫の肌をピリピリとさせてくる。怒らせてしまったかと飛行場姫は面倒臭そうにジト目で頭を掻いた。

「……恨む……？ 私が翔鶴姉が恨む訳無いじゃない……！」

飛行場姫の問い掛けに反論する瑞鶴。喋つていく内に声の大きさが徐々に大きくなっていくのを聞いて、飛行場姫は少し後退りする。暴れる馬のように激昂するかに思えた。

が――、

瑞鶴は自身を落ち着かせるように深呼吸をした。

深く空気を吸い上げ、そして静かに息を吐く。

「……違うわ」

落ち着く事が出来たのかゆつくりと飛行場姫に歩み寄り、肩を掴んで顔を見せた。

「翔鶴姉だつて……私達と同じ、あの屑共に貶められた……被害者よ」

瑞鶴は真剣な表情で冷静に飛行場姫へ教える。瑞鶴を警戒していた飛行場姫は掴まれた手の震えを感じて、必死に抑え込んでいるのが分かった。自然に力んでいた腕の力を無くし、真っ直ぐに瑞鶴の眼を見る。

「私は悔しい。翔鶴姉を救えなかつたと思うと、あんな奴等に苦しみられてたなんて思うと……心の底から許せないんだ……本当に」

「……ソレハ……自分自身ニ？ ソレトモ空母水鬼ト貴女達ガ復讐シタイ男ニ？」

「どっちも。許せない相手を選ぶ理由なんて無い……私は、この狂った世界が嫌いなだけ……私達を苦しませたこの世界が、私の敵なのよ」

「ッ……」

瑞鶴は飛行場姫の肩あたりに頭を寄せて世界の理不尽さを静かに嘆く。

自然と身を寄せてくる瑞鶴に飛行場姫は何故か不快には思わず、拒絶反応で身体を遠ざけようとはしなかった。立ち尽くしたまま瑞鶴の話を聞いているだけで何もせずにいる。

狂った世界が敵だと言って飛行場姫は一瞬動揺した。

「これは私の贖罪……皆や提督さん、翔鶴姉に対する償いなんだ。あの忌まわしい男と何も出来なかった無力な自分、そしてこの狂った世界を倒して、皆を、翔鶴姉を……救いたいだけ」

倉庫の隙間を抜いてきた夏の微風が二人にすれ違って吹いてきた。互いの色帯びた髪が靡き、木の葉が擦れ合う音が優しく奏でられる。

瑞鶴に半分身体を寄せられた飛行場姫は倉庫の壁と柵壁の隙間に広がる蒼い世界をただ一心に眺めていた。

瑞鶴は飛行場姫の肩に頭を寄せたまま微動だにせず顔を俯かせる。

もしこの世界が本当に狂っているのなら、この時間が凄く居心地いいのは何故だろう。

心の奥底から何かが暖かくなっているような、青ざめた感情が徐々に淡く暖色に広がっていく感覚がする。

瑞鶴の手から感じる素肌の温かさが羨ましく感じた。

本当であれば肩に掴まれた手を躊躇いもなく退けるはずだったのに、何故かその手を退けなかった私がいる。

退けなかった事を普通だと思ってしまった私がいる。

この瑞鶴を会話が出来る相手だと思ってしまった私がいる。

分からない。

私の中で何が変わっているのか分からない。
でもきつと、悪くない事なんだろうと思う。

抱えていた虚構な憎悪も、

必死に縋る生への執着も、

想い描いた壮大な理想も、

併せ持った全ての感情も、いずれは変わっていく。

良い方向にも、悪い方向にも、必ず変わっていく。

それが今の私なのだろう。

——中々、悪クナイ気分だ。

「……ごめんなさい。だったら敵なんか頼るなって話よね……私が悪かったわ、話は終わりにしましょう」

数分間か何も言葉を発さずに身体を寄せ合っていた二人。

我に戻った瑞鶴がゆっくりと飛行場姫から後退して離れ、指を額に当ててつい先程の行動を悔い改めた。飛行場姫に一言言った後に瑞鶴はその場を去ろうとする。

しかし——、

「待チナサイ」

「……？」

飛行場姫が瑞鶴を止める。

瑞鶴は不思議そうに飛行場姫の方へ身体を向けた。

飛行場姫は腕を組みながら海を少しだけ眺めた後、瑞鶴の方へ自ら歩み寄る。

「……サツキカラ黙ツテ聞イテイレバ、弱々シイ事バカリデ張り合イガ無イワネ……ツタク」

歩み寄った飛行場姫は文句を垂れ流しながら半ば閉じた眼で瑞鶴を睨み続ける。やがて互いの距離が手が届くまで近付いた時、飛行場姫は右腕を開いて瑞鶴の左胸を右手の甲でトン、と優しく当てた。

「敵ナラ敵ラシク、堂々ト脅シテ情報ヲ手ニ入レテミナサイヨ。アンタハ色々ト周りニ優シ過ギナノヨ」

「優し過ぎ……?」

「ソウヨ。ソノ優シサハ、イズレ自身ノ破滅ヲ呼ブ羽目ニナルワ。氣ヲツケナサイ」

再度腕を組んだ飛行場姫は飽き飽きした表情で瑞鶴に注意するよう促した。瑞鶴は自覚の無い事に少し拍子抜けてしまい、戸惑ってしまっている。

そんな瑞鶴を見て飛行場姫は自身の背後の方へ振り向き呟いた。

「……七壊星ノ一人、『貪狼』集積地棲姫ナラ……何カ情報ヲ持ッテルカモシレナイワ」

「『貪狼』集積地棲姫……? そいつが何か知ってるの!？」

「アクマデ持ッテイルカモシレナイッテダケヨ。本当ニ知ッテルカナンテ、私ニハ分カラナイワ」

実際に翔鶴と空母水鬼を引き離す方法など飛行場姫は本当に知らない。そもそも艦娘と深海棲艦が融合して共生しあうなど稀有な存在であり、滅多に見ない事だ。元に戻す方法は疎か、何故そうなったのかという仕組みすら分からない。

ただ一つだけ、そのような事を考える仲間が一人だけ居たのを飛行場姫は思い出した。出来ることならあまり口には出したくない深海棲艦だが、少しの情報となれば致し方ないだろう。

その名も、深海棲艦の中でもトップクラスの危険な存在、七壊星の一人である『貪狼』集積地棲姫が何か知っている可能性があるという。

「ア、勘違イシナイデヨ。別ニ貴女ノ為ジヤナク、アクマデ提督ノ為ナンダカラ。貴女ハ敵デアル私ニ頼ツタンジヤナイ、私ガ自ラ白状シテ

アゲタノ。ソコノ所、チャント理解シテヨネ」

「う、うん、分かった……ありがとう……」

飛行場姫は瑞鶴の方へ振り向き、慌てる様に指さして注意した。まるで瑞鶴を庇うような言い草に庇われた本人は困惑して反応に困っている。

『ディアボルフ貪狼』集積地棲姫……易々と情報を言う訳にもいかないだろうし、

そいつを倒せば吐いてくれるかもしれない……」

「イヤ貴女達デハ無理デシヨウネ、奴ヲ倒スノハ」

「え……何で？」

「ダツテアイツハ……——」

「——コノ世デ一番、イカレテル」

「古鷹、肩を揉め」

「はい！」

「雷、エアコンの温度を少し高くしてくれ」

「分かったわ！」

「五十鈴、ドアの横にある棚から緑のファイルを取ってきてくれ」

「緑のファイルね、了解よ」

「祥鳳、お茶を容れてくれ」

「分かりました」

「武蔵ー、この書類を灰に渡してくれー」

「任せろ」

「鳥海は灰の書類にミスが無いか確認なー」

「かしこまりました」

仮執務室にて大勢の艦娘達が命令された事を忠実に聞いて行動している。文句を言わずに働く艦娘達に瑞鶴は啞然となっていた。廊下では飛行場姫が隠れてその様子を眺めている。

「……何か凄い事になってる……」

「おお今度は瑞鶴かあ、お前も俺に施したい口かな？」

「いやまあ……そうでも無いような、あるようなく……」

瑞鶴が入ってきた事に気付いた提督はとても機嫌がいいのか瑞鶴に快く受け入れ声を掛ける。椅子から立ち上がって瑞鶴の前まで歩み寄ってきた。立ち上がる提督に連れられて肩を揉んでいた古鷹も動きを合わせる。五十鈴が持ってきた緑のファイルを貰って読み始めた。

「皆は何してるの？」

「いや〜何でもこのポンコツ達が俺にどうしても御奉仕したいと紙くずのように軽い頭を下げて泣き喚きながら懇願して来たもんだから、俺はそのやりたい事を仕方なく叶えさせて善行を積んであげているのだよ〜」

緑のファイルをパタンと閉じて提督は長々と説明し始めた。テレビ会議終了後に部屋で待機していた艦娘達が提督にどうしても償いたいという気持ちが強くなってしまい、執務室に押し入ってどんな仕事でも手伝うから介護させてくれと頼んできたらしい。

最初は古鷹、次に雷、そして五十鈴と次々と艦娘が現れ、仮執務室は大所帯に。秘書艦の摩耶や一人で書類を書いていた灰色も巻き込まれ、随分と騒がしい状態になっている。

「どこかの馬鹿共の所為で左腕がまだ使えないんだあ、これぐらいこき使っても大して何も問題無いだろう？」

「そりゃあ……そうよね、うん」

「中立な立場でお前らにあの処罰を下したが、あんな事があつた以上はまだまだ序の口だ！ いや序の口にしてやる!! またここに居座る事となればお前らの給料を全部俺のモノにして、お前ら全員奴隷みたいに最期までこき使つてやるからな!! か〜く〜ご〜く〜ろ〜!!!」

提督は大声で欲望剥き出しの発言を並べ、周辺にいる艦娘を一人ず

つ指さしては毒を吐いてきた。中立な立場での処罰だけでは満足出来ない提督はこれ見よがしにと艦娘達の給料を全部自分の物にして、身が朽ち果てる最期までこき使つてやると未練垂れ流しでやっていくらしい。

どうにもこうにも何も反論や反抗出来ない艦娘達は自身への罰だと素直に受け入れ、ちゃんと仕事をこなしている。

毒を吐いた後に提督は共にある椅子に座り、執務机の上に足を乗せて堂々とした態度を見せつけた。

「んで、瑞鶴。何の用件で来たんだ？」

「あ、そうそう提督さん。少し私の話を聞いてくれないかな」

「お前の事だから大方予想はつくが言ってみろ。そこに隠れてる飛行場姫から聞いた情報とやらをな」

飛行場姫と言われた途端に廊下に隠れていた本人は思わず身体を跳ねらせる。バレていないと思つていたのか声を上げる程驚いたようだ。

提督は僅かな気配で瑞鶴と飛行場姫の事情を知り得たのか、これから言う事も大幅予測は出来ているらしい。

「じゃあ遠慮なく言うわ。提督さん、翔鶴姉を元に戻す手掛かりを見つけたの……どうやら七壊星の『貪狼』ディアボルフ集積地棲姫が何かしら情報を持つてるらしいから……手伝つてください!!」

「無理だし嫌だ」

頭を下げてまで瑞鶴は提督に手伝つてくれるよう懇願した。

しかし瑞鶴の話聞いて提督は即刻断つてしまう。概ね予想は出来ていたが改めて言われると少し悔しい。

周辺にいた艦娘達は動いていた手や足を止めて瑞鶴に視線を送っていた。仮執務室内が静寂に包まれ、外から風が吹いて窓ガラスが揺れる音が聞こえる。

「まあ翔鶴に関する事だと思つて黙つて聞いていれば滅茶苦茶な事を言つてくるとは恐れ入ったよ瑞鶴。粗方あらかたその飛行場姫にせがんで情報を貰つたんだろうが今のお前では無理だ。アイツは数多にいる深海棲艦の中でも外道中の外道、そんな不確かな情報を仮に持つてい

たとしても敵である我々に易々と吐くわけが無いだろう……現実を見たまえ」

「無理な相談だとは私の中でも分かっています!! でも私は翔鶴姉を救いたいんです!!」

瑞鶴は頭を下げたまま必死に提督へ訴え続ける。飛行場姫や提督が言うには『貪^{ディエアボルフ}狼』集積地棲姫は相当の捻くれ者らしく、味方である深海棲艦からも疎まれていいる存在らしい。

名前や噂からして相当強いのは明らかだ。

今の自分では到底敵わない存在なのは自覚している。

それでも瑞鶴は簡単には諦め切れなかった。

「お前が翔鶴を救いたい事だけに被害者である俺も巻き込まれなきやいかないのか? 第一によく考えろ、お前の願いだけで一体どれくらいの労力と時間を犠牲にしなきゃ行けないと思う? 下手したら周りも巻き込まれるかもしれないんだぞ? お前はそれをちゃんと考えたのか?」

「考えてます!! 私が今どれだけ無力な事も、今までの道理じゃ上手くいかない事も、この現状のままじゃ駄目な事も、全部嫌なほど私も皆も分かっている……!!」

確かに瑞鶴の話は他人を巻き込んでしまうような利己的な願い。

簡単に手伝ってくれるような事ではなく、それは当の本人も充分理解している。

「もう後悔するのは嫌なんです……嫌な事から目を背けて逃げ続けている事がどれだけの後悔を孕ませ、一生その背中に背負う事になるか……もう私の背中には数え切れないぐらい重くのしかかっている」

「まあそうだろうな」

瑞鶴は血が滲み出るまで手を強く握り締める。歯を噛み砕く勢いで噛み締め、僅かに身体を震わせた。瑞鶴の頭を下げる姿を見て、艦娘達は自身と瑞鶴を重ねた。

この鎮守府にいる艦娘の誰もが何かしらの後悔を背負って生きている。提督や蒼色、差別された側の艦娘達や翔鶴など後悔するモノは様々だろう。だからこそ瑞鶴の言っている事は身に染みるほど分

かっている。

このまま善行とやらを積んで戦う事から逃げ続けても自身の成長は進まない事に。

「だから私はもう逃げたくない……下手をしたら巻き込む？ 違う私は、皆を巻き込ませる訳にもいかないし、仮に巻き込んだとしても、決して悪い方向に巻き込ませる訳じゃない……私は良い方向へ巻き込ませる!! でも下手なことは絶対にしたくないし、巻き込ませないためにも強くなりたいんです!!! 例え無理だと何もしないまま言われても!! やつてみなくちや分からない事だつてあるし、私はその無理を超えて進みたい!!!」

これは瑞鶴本人の個人的な事情だ、皆を巻き込むつもりは全く無い。それでも仮に皆を巻き込んでしまったとしても悪い方向へ巻き込むんじゃなく、良い方向へ皆を巻き込ませる。

瑞鶴は瑞鶴なりに自身の考えと本心、気持ちを持っていたようだ。どうすれば翔鶴姉を救えるか、どうすれば強くなれるか、自身が納得するまで考え続けていたのだろう。

破茶滅茶な事ではあるが、決して不可能ではない。

無理だと言われてもその無理という根本をひっくり返してやるという野望を持っている。

「提督さんにも後悔させないくらい強くなってみせます!!! 提督さんが胸張って誇れる様な強い艦娘になります!!! 皆を導けるような艦娘になります!!! だからお願いします!! もう一度私達に、チャンスを下さい!!!」

「……そうだなー……」

150. 鉄鍔だらけなら重曹でも入れてみよう

「そうだなー……」

瑞鶴の熱意を聞いて提督は椅子の腕掛けに肘を着き、右手で頭を支えて考えるような仕草をした。返事をした後に口を閉じたまま、ひたすら瑞鶴を睨み続ける。

緊張が走る仮執務室内で他の艦娘達は思わず唾を飲んだ。

この提督がどういう人格の持ち主かは誰もが身に染みて理解している。

ましてやこの鎮守府の艦娘達は誰も提督に逆らう事は出来ない。今こうやって瑞鶴が提督に懇願している事自体、艦娘達にとっては恐れ多い出来事だ。

例え本心と熱意、そして願いと想いを伝えたとしても結果は目に見えている。

「……確かにお前とは■少尉に復讐するという野望を叶えさせるために手を貸していた。その為にはお前らは強くならなければならぬ、■少尉が護衛も無しにのそのそと歩く奴ではないだろうからな。あのイカれた奴らを連れてもおかしくない……だから毎日訓練を受けさせたんだ」

提督は椅子から立ち上がり、閉じた口をゆつくりと開いて語り始めた。語りながら執務机に寄り掛かり、右腕で支えながら頭を下げる瑞鶴をまた睨む。提督の話に艦娘達は聞き入ってしまい、自然と身体は動けなくなっていた。

「皆を良い方向へ巻き込む……抽象的ではあるが実にお前らしい考えだ。下手に巻き込むかもしれないと言われ、お前は悪い方向じゃなく良い方向へ巻き込ませると考えた訳だ……つまりはお前はもう既に覚悟している訳だな？」

「勿論です!!」

「■少尉と空母水鬼に対する復讐と同時に翔鶴を救いたいという願いが出来た、その為に強くなるなら手段は選ばない。どんな辛い事でも、どんなきつい事でも、泣き喚いてしまうほど気が遠くなるような

道だとしても……お前は、覚悟してやるんだな？」

「待ってくれ提督」

提督が瑞鶴に問いただす途中、誰かが呼ぶ声が聞こえた。

声の方向へ視線を写すとそこにいたのは大勢の艦娘達。

仮執務室のドアを開き、身体を隠すようにして提督と瑞鶴を目視し続けている。声を掛けた木曾が仮執務室の中へ入り、瑞鶴の隣まで歩み寄った。

「俺達もその道……歩ませてくれないか？」

木曾は瑞鶴の方へ顔を向け、自身もその道を歩みたいと願った。驚きのあまりに瑞鶴は頭を上げ、思わず声を漏らしてしまう。瑞鶴の表情を見た木曾は左胸に握った拳を寄せた。

「瑞鶴の言葉に心震わせられた……確かに今の俺達じゃ逃げ続けてばかりで前には進めない。無理だと言われてもその無理を超えて強くなる……今一度希望が見えたよ」

少々顔を俯き、握った拳を見つめる木曾。

次に提督へ視線を移し、木曾は足並みを揃えて言い出した。

「俺にも果たさなければならぬ事がある。想う事は人それぞれだが……俺も、提督や蒼■提督が誇れる様な艦娘になってみせます……どうかもう一度、チャンスをくれませんか」

瑞鶴と同じく木曾も深々と頭を下げる。

それに合わせて背後にいる艦娘達も同じく頭を下げた。

木曾は天龍と共に■少尉に復讐したいと提督に願い、初めて提督の目的に当てはまった艦娘。鎮守府襲撃時は蒼明石の策略を阻止し、翔鶴達との戦争では翔鶴と直接対決している。実力は申し分ないがその力に見合った結果を、果たすべき復讐という目的を果たせてはいない。

逆に力の使い方を誤り、目的を見失ってしまった。

木曾自身もとてもないほど後悔している。

手を組んだのにも関わらず、裏切ってしまった自分が許せなかった。

何も提督の事を完全に信じていたわけではない。目的を果たすだ

けの手段に過ぎず、特別な感情も持つてはいなかった。

だがそうした日々の中で一つだけ芽生えてしまったモノがある。

提督と同じく木曾も、信頼というモノが徐々に芽生えていた。手を組んで以降、提督の信念や想いを知った事で不思議と充実感を覚えていた。日に日に訓練を受けて少しずつ強くなつていく感覚を感じると、復讐という目標に近付けているような気がしていた。

だから提督には感謝しかない。

人格や方法はともあれ、自身を立ち上がらせてくれた事に関しては頭を下げるにはいらなかった。

少なくとも木曾はその感謝を返したい。復讐という目標に近付きながらも提督が誇れる様な艦娘になりたいと切実に願った。また提督の力に頼つてしまうような形になるが、それに見合つた結果を残したいと木曾は思った。

「……こうも一度にせがまされると面倒だ、戦況が不安定なこの時期に未だ強くなりたいなどと欲を残しているとは余程やんちゃを仕出かしたいらしい」

願いを聞いた提督は執務机から離れ、話しながら椅子へ戻つて座る。椅子の背もたれに寄り掛かり、机の上に置かれた資料を手にとつた。誰もが唾を飲んで提督の行動に注目する中、古鷹は思い切つて口を開く。

「……提督、私もお願ひしま——」「翔鶴の横須賀鎮守府引き渡しまで……後四日。横須賀鎮守府の研究施設での翔鶴の調査は六週間、大本営の引き渡しまで約一ヶ月半。これはこれは随分と期間があるなあ、何でこんなに長いんだろうかあ、不思議でしょうがないなあ摩耶」
古鷹の言葉を遮つて提督は突然翔鶴の調査について話し始めた。まるで説明口調で艦娘達に話し掛けるような言い方に聞こえる。次々と資料をペラペラとページを変えながら、新たな資料に提督は眉を動かした。

「おっと■少尉の現在位置も大体の場所の特定もそろそろ掴めそう
だ。今も不明なハズなのによく見つけたものだあ、我ながら賞賛に値
するねえ。これなら見つかるのも時間の問題だな。お？」
『ディアボルフ貪狼』集

積地棲姫の目撃報告も揃ってるなあ、何でだろう本当に不思議だなあ」

資料を一通り読み上げた提督は視線を艦娘達に移す。

瑞鶴や木曾は困惑した表情で提督を見つめていた。

「……何ボサつとしてんだ。わざわざここまで来て頭を下げながら声量の調節もままならないのに己の立ち位置も考えず懇願している暇があるなら、さっさとその酸化しきった鉄錆だらけの太りに太った無様で見るに堪えない身体でも動かしたまえ、時間は有限だ」

手に取った資料を投げ飛ばし、提督は両足を机の上に乗せる。

立ち尽くす艦娘達に指示を与え、つまらなそうに欠伸をかけた。

その指示を聞いた艦娘達はあからさまに嬉々とした表情で元氣よく「はい」と答え、仮執務室を出ていく。大所帯だった仮執務室が閑散とし、提督と摩耶だけが部屋に残る。

「珍しいな、提督が受けるなんて。具体的に決まってるのか、提督」

「アイツが関わってくるとなれば無視は出来ないからな、注ぐ労力と得られる利益を考えて仕方なく受けてやっただけだ。何も俺一人でやるわけじゃない。摩耶や鹿島、あの戦闘狂共にも手伝ってもらおうかな」

「断ると思うけどなあ、あたしは」

「果たしてそれはどうだろうな」

今回は提督や摩耶、鹿島だけでなく護神厄討艦隊の艦娘達も参加させるらしい。

目標は■少尉と護衛している可能性のある七壊星、そしてその七壊星の一人である『貪^{デアボルフ}狼』集積地棲姫の鹵獲。

だいぶ目標は大きくなり、それに達する力も要求される。

その為には艦娘達が強くならなければならない。

そこで提督は護神厄討艦隊の艦娘を訓練艦にする事で戦力強化を計った。

しかし摩耶からすれば戦闘を常に欲している戦闘狂達が提督の要請に耳を傾けるとは到底思えなかった。

「算段がついてるのか？」

「摩耶、あの戦闘狂共は何故あんなに強いと思う?」

「そりゃあ……あたしの【予感】みたいな超能力と規格外の戦闘能力を持つてるから……」

「それ故に実戦経験も豊富、誰とでも戦えれば何でもいい連中だ。あのポンコツ共に厳しく教えるにはおあつらえ向きという事だよ」

護神厄討艦隊の艦娘ならば訓練の監督も余裕だろうと考えた提督。並外れた戦闘能力や戦術知識を持っているのなら教えるのには持つてこいだ。

しかしあの戦闘狂達が素直に言う事を聞いて監督を務めるとは思えない。

そう思った提督は椅子から立ち上がり、ある場所へ向かった。

「私達があの馬鹿達の訓練の監督になれって言う事?」

「ああそうだ。お前達は艦娘の中では優れた知識と飛躍した戦闘能力を有している。あのポンコツ共を教育させるには持つてこいって話だ」

「なるほどね、だからさつきから寮内がバタバタとしてるわけ」

広場の岸边にて『?』オウゲン 叢雲は永遠に続く水平線を眺めていた。遠い海域にて戦闘中の護神厄討艦隊の艦娘達から報告を受け、書類にて直接書き記していたようだ。提督に話し掛けられた叢雲は振り向きもせずに仕事に没頭している。

護神厄討艦隊旗艦であり唯一まともな艦娘として艦隊を率いる『?』オウゲン 叢雲であれば、訓練の監督の承諾をしてくれるだろうと提督は考えていた。提督は叢雲の隣に立ち、同じく水平線を眺める。

「んで、それは『?』ビョウコウ 達に伝えたのかしら?」

「まさか。伝えてないに決まってるだろう、あのイカれた連中にマトモな話を通じるわけない」

「同感。って事になると私の命令だったら素直に聞く可能性があるから、私に伝えてきたのね」

提督は視線を動かさなまま悠長に話しながらも、『?』オウゲン 叢雲から手渡しされた護神厄討艦隊の戦闘記録を一枚ずつ目を通していく。

叢雲は提督の提案を適切に理解し、わざわざ自身に伝えてきた理由

も言葉にして話した。

話は円滑に進みながらも、全て読み終えたのかまた叢雲へ書類を返していく。

「そういう事だ。護神厄討艦隊というダサくて厨二臭い頭のおかしい捻くれた馬鹿力共を纏めるお前なら簡単だろう」

「その言い方だと私もあの頭のおかしい連中と一緒に、みたいな言い方ね」

「現にそうじゃないかあ。唯一あの艦隊の中でマトモとは言え、あの馬鹿力共を一人の艦娘が纏めあげてる時点で頭がおかしいと思えないよ」

護神厄討艦隊の中でもトップクラスの強さを誇る『?』叢雲はその艦隊の旗艦として艦娘達を率いている。

それは他の艦娘達も言わずともその実力を認めているようで、叢雲が旗艦を担っても文句は一つも無いそうだ。

唯一艦隊の中で話の通じる人格者としても旗艦に選ばれた理由にはあるが、選ばれたとしてあの軒並み捻くれた艦娘達を従えさせる叢雲も、別の意味では狂っていると思われてもおかしくない。

「唯一私がマトモで最強だから、皆も従ってくれてるだけよ。私は扱いか方も知ってるし、皆もその強さは知ってる」

「それはよかったあ、だったら訓練の監督にも向いているだろう。あのポンコツ共を完膚なきまでにボコボコにして鍛え上げてくれた方が効率は良い」

「だったら報酬の一つや二つでも用意してもらいたいものね。それ次第じゃ、色々とやる気も変わってくるわ」

『?』叢雲は提督の方へ臍を向け、右手を差し出し報酬を欲しがるとうな仕草をした。

提督は横目でその姿を目視し、目を瞑っては面倒そうにため息を吐く。

「ならお前達に金や装備でも一人ずつ違うモノでもくれてやろう」

「別にそれでもいいけど……私はお金より【天璇】南方棲戦鬼の位置情報メラクが欲しいわ……貴方の事だから簡単でしょ?」

『?』オウゲン 叢雲はお金や装備よりも七壊星【天璇】メラク南方棲戦鬼の位置情報が欲しいと提督に伝えた。対七壊星の艦隊として編成された艦娘らしい欲というべきか、七壊星に関する事ならばあらゆる手段を通じて情報を得ようとするようだ。叢雲は【天璇】メラク南方棲戦鬼に何かしら縁があるらしい。

提督は叢雲から差し出された右手の平を勢いよく叩き、交渉が成立した意思を見せる。

「じゃ、早速しようかしらね」

『?』オウゲン 叢雲は早速頼まれた訓練の監督をする為にその場を去っていった。すれ違いざまに摩耶へ先程提督に見せた戦闘報告書を渡し、黄金の槍を足を使って巧みに回し手に取る。その後『?』ヒョウコウ達に知らせるような言葉が聞こえた。

岸边に取り残された提督は未だ水平線を眺め続ける。反応を確認したい摩耶は恐る恐る提督の顔を見た。

「……いいのか？」

「後でネット上に嘘の情報流し込んでやる」

「それはやめろ」

——講堂、仮執務室

「白さん。おはようございます」

「灰、雰囲気理解しているだろうがお前にあのポンコツ共の訓練の管理を任せる。訓練が終了次第、報告書をまとめて俺に提出しろ。詳しくは『?』オウゲン 叢雲から聞くといい」

「かしこりましたー!」

仮執務室では既に灰色が仕事に取り掛かっていた。元氣よく挨拶をした灰色に早速提督は新たに仕事を与え、一番奥の執務机へ小走りで行かう。灰色は与えられた仕事の詳細を知る為、書類を持って『?』オウゲン 叢雲の元へ仮執務室を出ていった。

椅子に座り次第提督は電話機である人物の方へ電話をかける。

『こちら横須賀鎮守府責任者■だ。何の用かね』

「わざわざ出ていただきありがとうございます
■大将閣下、実は七壊星の件について確認したい事がございまして」

電話をかけた相手は横須賀鎮守府の
■大将。先程
■元帥と
■大将、提督の三人によるテレビ通話で話したばかりだったが、もう一度提督と話す事になるとは思わなかっただろう。何か忙しいのか少々対応が早口だった。

『貪狼』集積地棲姫の先週までの記録、
【天璇】南方棲戦鬼の記録について情報を共有したいのですが、お時間大丈夫でしょうか」

『その二人の記録か……情報の共有は構わないが、私はこれから席を離れる。後でメールにてデータを送っておこう』

「ありがとうございます」

瑞鶴に頼まれた『貪狼』集積地棲姫の目撃記録、『?』叢雲に頼まれた【天璇】南方棲戦鬼の出現記録の情報を
■大将へ求めた。

本来七壊星の出現記録や行動記録、目撃情報などは各鎮守府が提出した報告書によってまとめられ、週に一回ほどその週間の記録が更新又は保存される。七壊星の情報管理については護神厄討艦隊司令官である
■大将が担っており、情報が更新される度に各鎮守府へ共有させていた。

鎮守府の責任者であればデータベース上でいつでも閲覧する事は出来るが、今回いち早く情報を入手したかった提督は今週分の更新する情報を早く閲覧出来ないかと
■大将に打診し、メールにて送ってくれるらしい。

『……薄々気づいてはいたが……やはり潮岬町鎮守府とは少しばかり因縁がありそうだな』

「深海棲艦と艦娘の実験関係となるとあの七壊星の事は避けては通れません、戦力を強化していく必要があります」

翔鶴と空母水鬼の件がある以上は七壊星との関わりは避けられない。
■大将や提督が警戒している『貪狼』集積地棲姫はそれほど厄介な深海棲艦であり、なるべく関係が無い事を祈ってしまうほどだ。

瑞鶴には悪いかもれないが、それ程あの深海棲艦はタチが悪い。今まで以上に厳しい戦闘が待っているだろう。

『あまりあの叢雲の事情に関わって欲しくはないが、何か約束事でもしたのか?』

「ええ、少しばかり訓練艦として働いてもらおうかと」

『成程、報酬目当てに情報を寄越せと言われたか……まあ仕方あるまい』

【天璇^{メラク}】南方棲戦鬼の出現記録については既に『?』^{オウゲン}叢雲が欲しがっている事は分かっていたようだ。

本人の意思故にその事情を話す事は出来ないが、深い関わりを持っているのは確かだろう。司令官である■大将も個人的には叢雲と関わる事をあまりよく思っていない。

その事情を知っている故か、叢雲という存在を失いたくないと■大将は願っている。

『では、頑張りたまえ。あの件については任せたぞ』

「ありがとうございます、必ず場所を特定してみせます……では私も失礼します」

■大将との電話を終了させ、肩の力が抜けたのか椅子の背もたれに背中を預ける。軍帽を人差し指でくるくると回し、両足を机の上に乗せてため息を吐いた。

「さて、奴らはどう動くかな……」

——次の戦争の刻まで、そう遠くない。

151. 【このファイルの読み込みに失敗しました】

——大本営、収容施設

「何でもっと前に知らせなかったの!!」

「何を」

「提督がああ艦娘達の罠に嵌って命が脅かされてた事よ!!」

「突然の事だったんだあ、伝える余裕など無かったのだよ」

「やはり私達がいないと駄目駄目なのよね」

「寧ろお前らがいない方がよりスムーズに進んだがねえ。ついでにお前らもああ艦娘共の罠に参加して、同じ罪でも被ればいいと思ってるだけさあ」

「もう一度殴られたいのかなあ〜?」

「やってみたまえええ〜!」

「あ、悪いんですけど」

面会室にて提督と瑞鳳が口喧嘩をしていた。

翔鶴達との戦争の件を知らなかった瑞鳳は提督が大本営に来た途端に心配されて会話がやがて口喧嘩に発展。

面会室に入った時でさえ口喧嘩しているので、既に待っていた榛名は気にせず平然と昼ご飯のサンドイッチを食べる。しかし無視出来なかったのか思わず榛名は二人に声を掛けた。

「そういうのは別の場所でやってくれませんか……ここに危険視された艦娘がいるのですが」

「それはすまなかつたわね榛名さん、さっさと話を続けましょ」

「お前が話を進めるな! 元々お前は関係無いだろ。前も今後も俺がやる、護衛だか何だか知らんがご苦労だった」

「引き続き私が護衛するので悪しからず」

榛名に声を掛けられて瑞鳳が先に椅子に座り、ため息を吐きながら提督が机に足を乗せて座る。提督一人だけでは危険だと思った瑞鳳

が自ら護衛の為に提督の後を追っていた。

提督は要らないと一方的に拒否するも、瑞鳳は提督の拒否を拒否して護衛する事を頑なに諦めない。

一方で榛名は淹れたての紅茶を飲みながら優雅に過ごしている。

面倒臭そうな提督は話し相手を榛名に振って瑞鳳を追い出すよう促す言葉を頼んだ。

「榛名言っちゃってえ！ 卵焼きしか作れない中学生はもった料理のレパートリー増やせって」

「何故貴方が勝手に決めるんですか、話す相手は私が決めるんですよ？」

「いくら提督だろうとその怪我と精神が不安定な状態で仕事を受け持つのは危険よ」

「お前に足を引つ張られるよりはマシだと思うがね」

しかし榛名は促すどころか生意気にも話す権利は私だと主張してきた。

更には瑞鳳が提督の体調状態をすぐに見抜いて、このまま仕事をする事を心配がつている。心配する瑞鳳を余所に提督はへっちゃらとした様子で椅子にもたれかかっていた。

「喧嘩するなら他の場所でお願います」

「お前もここがカフェだと思つたら大間違いだぞ。何で危険視されたお前が紅茶片手にサンドイッチ食べてランチタイムみたいに過ごしてんだ!! お前は昼休憩のOLか!!!」

「軽いモノならいいって許可してくれました」

榛名は目の前の机にどこかの国のティータイムの様に紅茶を飲みながらサンドイッチを食べ、隅に置かれた加湿器で肌を潤している。深海棲艦のスパイとして危険視された最重要の艦娘の待遇とは思えない豪華さに提督と瑞鳳は言葉を失った。

「で、今日は何の為に来たんですか？ 何度も言いますが話すつもりはありませんよ」

「いや〜今日はそういかないかもね〜、ちよつとした情報を手に入れてしまったのだよ〜」

自ら話を進行させいつも通り何も話す事は無いと釘を刺す榛名。

それを聞いて提督は机の上に乗せた足を退かし、机に腕を寄り掛かったまま親指と人差し指を擦るように動かす。まるで何か掴んだかのような不敵な笑みを浮かべながら榛名を睨んだ。

「はてはてそれは何でしょうかねえ？」

「翔鶴の件を終わらせた」

提督の言葉を聞いて榛名は頬を一瞬引き攣らせる。

決して何も言わずにただずつと提督を睨み返し続けた。

「お前らが脅されてる黒幕とやらも情報も既に掴んでいる。最早翔鶴に何の効力も無くなった以上、お前も鎖が解けた訳だあ……いい加減言った方が気は楽だぞ」

「つ……」

「翔鶴が蒼■中尉を殺してしまった事実をお前は知ってしまった、それを■少尉は隠蔽する為にお前を洗脳し、■と共にあの鎮守府を支配していた」

榛名はあからさまに動揺を隠せなくなっている。

翔鶴達との戦争が終結した事によって翔鶴による支配や洗脳も晴れ、一時は自由の身となった潮岬町鎮守府の艦娘達だが榛名もその一人に含まれる。翔鶴の言いなりになって扇動していた榛名も翔鶴の支配が無い現状は脅迫も意味を成さない。榛名がずつと翔鶴に従っていた理由や深海棲艦のスパイとして潜んでいた理由も打ち明ける事が出来る。

「だがお前が地下の奥底で惨めに監視されている中、俺は翔鶴の支配を記憶改竄や洗脳諸共全て終わらせた。今ごろ■少尉は慌てふためきながら顔を真っ赤にして、腹いせに俺達に攻撃を仕掛けてくる事だろう……勿論お前にもな」

「まさか本当に……やっただんですか」

「ああ勿論。完膚なきまでに翔鶴共をボコボコにしてやったよ」

逆に翔鶴の支配が終了した事により戦況は不安定化、潮岬町鎮守府はまた襲撃されてもおかしくない現状になっている。それは榛名も例外ではなく、■少尉と黒■の居場所が掴めない以上は殺される

可能性があるのだ。流石にそれらを見逃す出来ない提督は榛名の殺害を懸念していた。

「先程も言ったようにお前には縛られていた鎖はもう無い。知っているんだろう……？」 奴の……いや、**■**少尉の居場所を……」

ならば殺害されるまでに**■**少尉の居場所を聞き出そうと提督は考えた。

鎮守府襲撃時に**■**少尉と深海棲艦の侵入ルートを手配し、二度目の襲撃時に深海棲艦を呼び寄せたスパイとして暗躍した榛名であれば**■**少尉の居場所を知っている可能性がある。

例え知っていなくても関する情報を持っているのは確実だ。

「……知ってるんですか？」

「何をだ」

「翔鶴さんが……空母水鬼に操られていた事も……もう既に、知っているんですか……？」

「ああ勿論。お前が翔鶴と結託していた、いや半分言いなりになっていた理由はそれか？」

どうやら榛名は既に翔鶴が空母水鬼に操られていた事を知っていたようだ。仲間を裏切つて翔鶴の言いなりになっていた理由はこの事だろう。正体を知られた空母水鬼が榛名を脅し、裏切らなければならぬ状況下に追い込ませた。

「私は執務室に私物を置いたまま出て行ってしまって、消灯後一人で取りに行こうとしました……その時執務室のドアが何故か開いていて、私は何をしてるのかと覗いたら……」

提督が翔鶴が空母水鬼に操られていたのを知っていた事に榛名は恐る恐るあの時の事を打ち明ける。

榛名は姉の金剛の過去も知らないまま、金剛を虐め抜いていた時の事。

その日執務室に取り忘れた私物を再度取りに、消灯後の誰もいない時間帯に執務室へ向かっていた。月の光が窓から差し込み、暗闇の廊下が薄く照らされる。

執務室の前に辿り着くと僅かにドアが開いていた。開いていたド

アから淡く光が漏れており、微かに話し声が聞こえる。
少し怖かった榛名はゆっくり音を立てずに執務室内を覗いた。

『計画はどうだ……空母水鬼』

『順調よ、皆馬鹿ミたいニ従ってクレテルワ』

『それはそれは良かった……』

ドアの隙間から覗いた榛名は目を疑った。

■少尉と話している翔鶴が徐々に深海棲艦へと姿を変えていき、何かを企んでいたのだ。

有り得ない光景に榛名は恐怖で身体が岩のように固まってしまう。

『黒■も人質を確保して準備が整ったらしい、こちらも直に始めるぞ。装置の開発は間に合うのか？』

『大丈夫ヨ、既ニ手配ハシテアル』

黒■元帥の事や人質、装置の事も何を言っているのか分からない。
い。

ただその会話にとてつもない恐怖を感じた。

『ABC計画など最早どうでもいい、黒■は俺にとっては手段ではない……俺は俺が望む世界を創る……』

『シカシ、ヨクコンナ無茶ナ計画考エタワネ……アイツガイナカッタラ現実ニハ出来ナカッタワヨ……』

『——全テノ艦娘ヲ洗脳シテ反逆サセル、ナンテ』

「■■■少尉の考えていた計画とは……全世界にいる艦娘を洗脳し、自身の意のままに操って人類へ反逆させるという、恐るべき計画でした」

その後榛名は恐怖のあまりに物音を立ててしまい、二人に見つかって洗脳されてしまう。翔鶴もとい空母水鬼の奴隷として差別による優遇制度を助長させていった。■■■少尉の逃走後も空母水鬼と共に潮岬町鎮守府を支配していく。

翔鶴に化けた空母水鬼は鎮守府を支配し、榛名は黒■■■への情報提供と深海棲艦の手引き。

もし逆らえば姉妹を公開処刑すると脅されるも寧ろ榛名は計画に協力する素振りを見せ続けた。鎮守府襲撃時に深海棲艦を鎮守府まで誘導し、二度目の古鷹と加古が戦闘時に起きた鎮守府襲撃時にも深海棲艦を手配。

そこで榛名は極秘で翔鶴を誘拐し、空母水鬼諸共心中を計ったが失敗してしまった。

「恐らくその計画を実行する為に潮岬町鎮守府を実験台として利用したのでしよう。艦娘達を洗脳して操れる時間はどのくらいなのか、結果が得られた途端に■■■少尉は逃走しました。その計画が何の為なのか、またどうやってやるのかは分かりません。ABC計画というのも私には分かりません……ですが恐ろしい事だとは思っています」

榛名の話聞いて瑞鳳は腹を刺されたかのような表情で驚いていた。あまりにも現実離れした破茶滅茶な計画に信じられない。

提督は口を閉じたまま落ち着いていたが、内心では心当たりがある事に頭に血が上るほどの怒りに駆られていた。

「聞いた装置の場所は五箇所。小笠原諸島、硫黄島、南鳥島、南大東島、マウグ島です……それ以外は聞けませんでした」

「……何故今になってそれだけの情報を伝えるんだ……死ぬ気か？」

「もう別に殺されても構いませんよ。私が死んだ所で誰も悲しむ人はいませんし、未練もありません……」

計画の詳細をこれでもかと伝えていく榛名に提督は危機感を募らせた。

今榛名がやった事は全てを言いきってこれから死にいくようなものだ。

それはつまりこの大本営には既に■少尉や黒■がいる可能性、またその二人と繋がっている人物がいるという事になる。この収容施設に長くいられる時間は無い、見張られている可能性すら高いだろう。

「……伝えられる事は伝えました。聞いた以上は貴方達も脅かされないよう早く出ていった方が良いかと……では」

言いたい事や伝えたい事を話した榛名は面会室を去ろうとする。

しかし――、

「未だにお前の姉は……お前を……信じているぞ」

提督のお前の姉はという強調した声に榛名はその歩みを止めた。

ドアノブに触れようとした手を納め、決して提督の方へ振り向かず耳を傾ける。

「お前に一度でも謝ろうと身を削ってまで戦っている……ひたすらにただ必ずお前を救おうとな」

「あの出来損ないが、ですか？」

「まあ、確かにどうしようもない出来損ないだあ、とてつもなく優柔不断で図太く厚かましくネガティブで無愛想な堅物、誰かの為ならと一途に戦い続け決して諦めない不屈の精神を持っている。最早手に負えないほどのポンコツだ」

「何で私なんか……」

感情が昂ったのか思わず榛名は小言を漏らした。手を血が滲み出るほど強く握り締め、僅かに腕を震わせる。

出来損ないだと思っていた姉が生きる意味の無い自分の為に戦っていた事に苛立ちを覚えた。

死ぬ事など恐れていなかったはずが今になって生きたいという欲に苛まれてしまう。

「もし……救われる可能性があるのなら……お前は救われたいか？」

「……出来るものなら、どうぞ」

「よし！ ならばお前を救ってやろう！ お前を縛る全てをあの糞共諸共宇宙の彼方へぶっ飛ばしてやろうではないか!!」

榛名の言質を取った提督はすぐさま立ち上がり、高らかに救ってやろうと大声で宣言した。

榛名は首を動かし二人の姿をチラリと見ては面会室を去ろうとする。

その時榛名は二人に対してこう言い捨てた。

「……楽しみにしています」

面会室のドアがうるさい音を立てて閉まる。

取り残された二人も颯爽と面会室を出たが、隣に見知らぬ人物が立っていた事に提督は気付く。ドアの戸当たりに頭をぶつけそうなほど高身長で、鋭い目つきをしながら提督に話しかけてきた。

「ん？ 誰だお前は」

「私は憲兵隊の隊長を務めさせてもらっております、■■■■■と云う者です。一応階級は大佐、好きな食べ物は何でもありです！」

見知らぬ人物の無駄に長い自己紹介を聞いて提督は思い出す。

確か時雨と夕立の件で絶望的な状況下の中、■■■■■少尉の非行などをまとめた録音テープを提供してくれた人物だ。あの録音テープが無かったら仕組まれた冤罪が認められ、時雨と夕立はこの世にいなかった事だろう。

「ああお前か。あの件では感謝しているよお、何か礼がしたいのだが金はどれくらい欲しいのかな？ 言い値で言いたまえ」

「いえいえ、お礼は大丈夫ですよ。私は私が正しいと思っただけを遂行しただけに過ぎません。貴方がたの役に立てたのであればそれだけで私は大丈夫です。お気持ちだけいただきます」

「いいねえ、そういう奴は好きじゃないが嫌いじゃない。今後とも頑張りたいよ」

■■■■■隊長は提督の礼を貰わず、気持ちだけ受け取るように言った。鋭い目つきとは裏腹に温厚そうな性格に提督の隣にいた瑞鳳は思わず安心する。提督もあやふやな印象を述べ、■■■■■隊長を適当に

激励した。

「そういえばお前は瑞鶴とはどんな関係なんだ？」

「瑞鶴……？ ああその時でしたか、その時はそうやら道を迷っていたようなので自己紹介と同時に道案内をしただけです。特に深い関係はございません」

「そうなのか。それは苦労かけたな」

「問題ありません、いつでもお声掛けください。それはそうと瑞鶴さんもですが、古鷹さんは大丈夫でしょうか？ 色々あったとは聞いているのですが」

■ ■ 隊長でも潮崎町鎮守府の件についてはある程度知っているようだ。

だがそれは件の中心であつた翔鶴達との事ではなく、提督が古鷹を殴つた写真が広まつた表面的な事実。潮崎町鎮守府の真実や提督の事情についてはあまり知られていない。

「お前が気にする必要は無い。滞りなく順調だ、心配は無用だぞ」

「それならばよかつたです……では私はこれから用事があるので……また」

「んでこれからどうするの？」

「機密事項、お前に話す訳が無いだろう」

「でしょうね、監視だらけのここで話す人じゃないし」

「そう思うのならさっさとそのおしゃべり人形みたいな口を閉じて前を見て歩きたまえ中学生。時間は有限だ、取り敢えず俺は帰るぞ。詳細は後に連絡する」

「了解了解！」

「おい待て」

■ ■ 隊長との端を終えて、早々と大本営を出ようとした途端に誰かに声を掛けられた。

面倒そうに提督は声の主へ身体を振り向かせ顔を確認する。提督にとっては意外な人物だったのか拍子抜けした表情でその人物を見

ていた。

「これはこれは■中佐。相変わらず私だけに対して顰めっ面するのは見てて飽きませんかえ〜」

「御託はいい、お前の所の艦娘の件について話したい事がある……ついでこい」

■中佐は横須賀鎮守府の第三艦隊司令官で、効率の良い戦術と優れた艦隊指揮能力を兼ね備えた実力ある人物。少し細い体格の三代男性、細目で性格の悪そうな顔つきをしている。

■大将の直属の部下でもあり、参謀としての能力を買われていた。

そして時雨と夕立の件が起きる前に欧州海戦ほどの艦隊を友軍を送るかの会議をした際に提督と張り合った人で、■中佐自身は提督の事を良く思っていないらしくいつも言い争っているとか。

「こっちは？」

「資料室だよ！ 見りゃ分かるだろ!!」

「え？ 私も入っていいんですか？」

「私達がいるから問題は無い、さっさと来い」

■中佐は二人を普段は入る事の出来ない資料室へ連れていった。ジャラジャラと音を鳴らして鍵の束をから資料室の鍵を見つけ、重い扉を開く。資料室はいつものように埃だらけで息を吸うだけで身体が悪くなりそうな環境だ。

「んで、話とは？」

「率直に言う。お前の所の艦娘四名、その瑞鳳、後は皐月、ガングート、プリンツを四日後から一時的に私の艦隊へ加えたい」

「何故に？」

「アリューシャン列島海域の防衛に必要な艦娘だからだ。お前らも知っているだろうが、あの海域には絶対に解き放つてはいけない奴がいる。その為にお前ら四人はあの海域について詳しいだろうからな、私と共に来てもらいたい」

四日後から■中佐はアリューシャン列島海域防衛の為に瑞鳳達を戦力に加えたいと言う。

米国との提携により、ダッチハーバーの基地とキスカ島に設置した鎮守府が手を組み、アリューシャン列島海域の中心にある深海棲艦の封印を守る為に防衛戦力が必要だとか。

最近ではベーリング海域の北上ほくしやうと北太平洋海域から深海棲艦に動きが見えたらしく、封印を解く為に動いたと予想した■■大將が■■中佐に防衛するよう命じたらしい。

「実質■■中佐も異動を命じられたようなものですね〜心中お察し致します〜」

「常になら目線とはつくづく気に入らない態度だ、後等処分を食らったからには少しはその生意気な性格も落ち着いているかと思えば逆効果だったみたいだなあ!!」

「後等処分とはいえ私はこれでも大佐だ、お前とは格も知識の差も全く違うのだよ。話と聞いて来てみれば口喧嘩をする為に呼び寄せたのか？ 随分と中佐様はお暇の様だな」

「んだとコラ」

「やんのかコラア」

先程まで感情を抑えて提督と話していた■■中佐だったが、煽りを受け止めきれず口喧嘩に発展。

メンチを切ってはポケットに手を納め、互いに睨み返してヤンキーの様に振る舞う。

「やってやんよコラ」

「どうやるんだよコラア」

「色々やるんだよコラ」

「コラコラ言ってんじやねーよコラア」

「お前だつて言つてんじやねーかコラア!!!」

「はいはいそこまで!! あー!」

喧嘩し続ける提督と■■中佐の中間に入つて強制的に引き離す瑞鳳。

しかしあまりにも力が強過ぎたのか勢いよく二人を突き飛ばしてしまった。埃が煙のように宙に舞い、棚の中にあつた本やファイルが崩れ落ちる。

流石に資料室で暴れてしまったとなれば■元帥が怒るのは目に見えているので提督と■中佐は黙々と棚を直し、本やファイルを収めていった。片付けが終わり次第、二人は瑞鳳の方へ歩み寄ってまた対面する。

瑞鳳は悪い事をしてしまったと提督の表情を恐る恐る伺った。

「ご、ごめんなさい提督……それで……どうするの？」

「私は一向に構わない！ どうぞこの馬鹿と共にオンボロな鎮守府に閉じ込め、まともに航行すら出来ない氷海だらけの海域防衛でも婆さんになるまでやらせてればよろしい」

半分苛立ちのある声で瑞鳳を■中佐の方へ突き飛ばし、勝手に連れていけと罵る。■中佐は突き飛ばされた瑞鳳を受け止め、提督の罵言に啞然としていた。

「……マジでこいつ容赦ねえな」

「提督はいつもこんな人です」

「以後お見知りおきを」

改めて提督の歪んだ性格に■中佐は頬を引き攣る。瑞鳳は驚きもせずと言われ慣れているのか気にも留めないようだ。提督は相変わらず偉そうに挨拶をしている始末。これで慣れている瑞鳳も少し変なのは間違いだらうかと心の中で思うも口には出さなかった。

「はあ……まあとにかくだ、詳細は後でメールで送る。瑞鳳は周りに知らせで移動する準備をしてくれるとありがたい」

「分かりました！」

「……おい、白——」

「——へマ、するなよ」

152. 病み上がりの身体はとても重い

「っ……っ」

病室にて目を覚ます。

瞼をゆつくりと開くも、突然の光に目が眩んだ。

思わず左腕で光を遮り、視界が安定したところで辺りを見回す。

白い壁、白い天井、白い布団、どれも見た事のある場所だ。

鉛のように重い身体を起き上がらせ、誰かの声援が聞こえたの感じ
て左壁にある窓を見る。

窓からは暑い日差しが差し込み、何かで遮なければまともには見れ
なかった。恐る恐る身体を動かし、左腕で光を遮ながらも窓の景色を
見るとそこには――、

「(っ)っ……(ど)っ……っ？」

「島風ちゃん、元気かな？」

誰かが名前を呼んだ。

声が聞こえた方向は左側の窓とは真逆で、呼ばれた島風は素早く振
り向いた。

「今日も日差しが暑いわねっって、えっ嘘」

今まで意識不明のまま眠っていた島風が起き上がっているのを見
て■ ■ 医師身体を硬直させる。毎朝島風の容態を確認していた■ ■
医師は今朝も確認の為に病室を訪れていた。

提督が言っていた様に■ ■ 医師は島風の身体の中から黒い触手が
一部取り残されており、樹木の根の様に絡んでいたのを丁寧に切除。
無事手術は終了、その後は意識は覚めないまま一日が過ぎていた。

「ああ〜！ よかったあ〜！ 意識が戻ったのね！ 体調は島風ちゃん
的に大丈夫かしら？」

起き上がった島風を見て■ ■ 医師は自身の娘の様に喜んだ。

今までの記憶が無い島風からすれば見知らぬ人物が自身の事を喜
んでくれている。

確か自分はその時沈んで死んでしまったと思っていた。何かの奇
跡的な偶然なのか分からないが、どうやら自分は助けられたらしい。

そうするとここは鎮守府だろうか、島風という名前を知っている医者であろうこの女性は軍の関係者である事に間違いない。

一瞬だけ窓から覗いた風景からは鎮守府でしか見られない石畳や赤レンガの建物が見えた。

そう考えた島風は恐る恐る ■■ 医師にある質問をした。

「す、すいません……」

「ん？ なに？」

「ここはどこ、ですか……？ それと貴女は……誰、ですか……？」

少し不安気味の島風は名前も知らない ■■ 医師に名前とこの場所の説明を願った。

質問を聞いて ■■ 医師は思わず「あ」と声を漏らして、島風が漂流してから今日この時の記憶が無い事を思い出す。

「あ、そうよね……確か覚えていないのよね……ごめんね、島風ちゃん。今はとりあえず容態を確認するから、お話は後でも大丈夫かな？」

「わ、分かりました……」

「ありがとう！」

色々と事情を話してあげたいのは山々だが起き上がった今は容態を確認するのが最優先だ。 ■■ 医師は島風を一度寝かして、看護師を呼び出した。

「よし、今の所では問題ないわね。流石艦娘といった所かしら、予想してた日数よりも早く回復してる……ちよつと予定は狂っちゃったけど、このまま何事も無くければ必ず回復に向かっていけるわ。ただ酸素マスクに関しては念の為に今後一週間はつけてもらうからね」

「ありがとうございます……ごいます……」

「どういたしました。後回しになっちゃったけど私は ■■ ■■、この鎮守府で医師を勤めてるわ」

■■ 医師や看護師達による確認が終わった後、 ■■ 医師は自ら自己紹介をした。

名前を言うと同時に右手を出して握手を求める。

島風は少し警戒しながらもゆつくりと ■■ 医師の手を握った。

「■■■■■■……」

「そ、皆は先生って呼んでるけど呼び方は島風ちゃんの自由で大丈夫よ」

「じゃ、じゃあ■■先生……ここは……?」

「ここは潮岬町鎮守府、和歌山県の潮岬町にある防衛拠点。紀伊半島の海域の防衛又は哨戒を中心に動いている所」

潮岬町鎮守府という名前は聞いた事がある島風。

確か小笠原諸島海域攻略や硫黄島海域攻略で大きな戦績を挙げた鎮守府だった。

「潮岬町……?」

「島風ちゃんがここに来た経緯については、色々話したいのだけれど少しややこしくしてね……島風ちゃんと言う提督、かしら? 今その人を呼ぶからちよつと待っててね」

「分かり……ました……」

自身の記憶が正しければ潮岬町鎮守府の提督は艦娘に優しい事で有名な人だと聞いている。名前は分からないが自身を助けてくれたのなら感謝しかない。

「目覚めたか」

「ええつい先程ね、体調も今後何も無ければ次第に回復していくわ」

「どれどれ、哀れな操り人形の顔でも拝見するか」

ドアの先で■■■医師と提督らしき人物が会話をしているのが聞こえる。

一言余計だが声からして男のようだ。会話が終わった後に横引きのドアが開かれる。

「っ……!?!」

横引きのドアを勢いよく入ってきたのは白い軍帽と軍服を身にまとい、透き通った白い肌に深海棲艦の様な白い長髪を靡かせた女性の様な人。圧倒的な白さに一瞬目を腕で遮ってしまうほど眩しく見えた。

もう一人は艦娘の摩耶、恐らくこの提督の秘書艦なのだろう。この摩耶も外観は少し特殊で、顔の右半分が提督と同じく白い肌に深海棲

艦特有の黒い鉄角。右眼が宝石の様に紅く、その眼から紅い線が時々光って頬や額を伝っている。

「……何驚いた顔してるんだコイツは」

「貴方達の特徴から考えれば誰だって最初は驚くわよ」

「まあそれは仕方ないぞ提督」

異様な姿の提督と摩耶に島風は驚きを隠せずにいた。

あまりの驚きに口を開いたまま啞然としている。

「……やあやあここで目覚めた気分は如何かな島風君。さぞかし身体が鉄の如く重いというのは不快感でしかないだろうなあ、それだけは同情するよお」

いつもの流暢な口調で提督は島風に話し掛ける。聞いていたイメージとは程遠い提督に島風は依然として口を閉じぬまま言葉を失っていた。

「その表情から考えるに自身の記憶からイメージしていた提督とはまるで違うと言った表情だなあ、まあこの俺の美貌に取り憑かれたのであれば仕方あるまい」

「それは違うと思うな」

「摩耶は一回お口チャック」

啞然とした表情の島風の気持ちを代弁し、提督は腕組みから右手を軍帽のつばに触れたポーズで話を続けていく。摩耶や■医師からは変な人にしか見えないポーズだが、提督自身はカッコいいと思っっているらしい。

摩耶が一言余計な事を言うも提督はすぐさま振り向き、早口で注意しては島風の方へ顔をを向ける。行動がおかしい提督に島風は戸惑うも思い切って質問を試してみた。

「蒼■中尉……ですか……？」

「残念だがお前の知っている蒼■中尉は故人だ。代わりにこの白と呼ばれた俺が潮岬町鎮守府の責任者になっている」

■医師の説明では四年前に蒼■中尉は不慮の事故で死亡し、その後に着任した軍人が約四ヶ月前に失踪、そして『白』と呼ばれたこの男が約三ヶ月前に潮岬町鎮守府の責任者になったらしい。何かとト

ラブルがあつたのかと島風は察し、口には出さず真面目に説明を聞いた。

「早速だが轟沈前の所属と記憶を言ってもらおうか、今は二■■■■年の八月になる」

「……はい私は、小笠原鎮守府所属……島風型駆逐艦一番艦……」
「えっ、嘘」

小笠原鎮守府と聞いて思わず■■■■医師は言葉を漏らして手で口を塞いだ。摩耶も■■■■医師と同じく動揺しており、何を言えればいいのか言葉を選ぶのに時間がかかってしまった。

「多分ですけど、鎮守府はもう……駄目、ですよね……」

「……ああ、小笠原鎮守府は五年前に深海棲艦の奇襲によって今も占拠されている」

深海棲艦の拠点だった小笠原諸島は一度蒼■■中尉の艦隊を始めた連合艦隊によって奪取され、その後小笠原諸島海域防衛を中心に鎮守府が設置された。

当初小笠原鎮守府では海域防衛の為に各地の鎮守府から一人ずつ艦娘が着任し、その戦力は深海棲艦に恐れられるほどで海域防衛に大きな役割を果たしていた。

しかし深海棲艦側に提督らしき存在が確認されて数週間、深海棲艦の連合艦隊が小笠原鎮守府を奇襲。

僅か五時間で鎮守府や小笠原諸島海域一帯を火の海へと変貌させ、艦娘一人と憲兵一人を残して殆どの艦娘と軍関係者が行方不明になつてしまった。

生き残った艦娘は修復不可能と思われてもおかしくない程の大損害、憲兵も意識不明の重体で瀕死寸前と、深海棲艦の連合艦隊による戦闘がどれだけ熾烈を極めていたかを物語っていた。

その深海棲艦の連合艦隊には今は七壊星として君臨している
【天璇】^{メラク}南方棲戦鬼や『巨門』^{テラストレイア}戦艦棲鬼、『文曲』^{アストラファイ}戦艦レ級、『貪狼』^{デアアボルフ}集積地棲姫や【玉衝】^{アリスト}戦艦水鬼が報告によって確認され、七壊星という危険個体リストや護神厄討艦隊の編成が決められた要因にもなっている。

「五年も……経ってたんだ……」

「まあさか生き残りがいたとはねえ……いやまあ一回沈んでるけど」

当時七壊星や護神厄討艦隊という存在が無かった海軍では、今までの海域防衛による戦果から考えて小笠原鎮守府の信頼が強かった。

その理由として各鎮守府から着任した艦娘の殆どが優れた戦闘能力とあらゆる状況に対応する適応能力を有しており、余程の事が無い限りは到底攻め落とす事など出来ないだろうと思われていたからだった。

もしまた攻め落とされた場合、陸上型深海棲艦による日本への爆撃が易々と出来てしまう。それらを防ぐためにどうしても鎮守府の正式運営の準備が整う期間とその後の海域防衛を行えるほどの戦闘経験が豊富な艦娘が必要だった。

その為に小笠原鎮守府が奇襲攻撃によって陥落し、命からがら脱出してきた艦娘と憲兵を目撃した時には多くの軍人が驚いたと述べている。それだけ小笠原鎮守府に所属していた艦娘は精鋭と謳われており、今潮岬町鎮守府にいる島風もその一人だった事に摩耶と■■■医師は驚いていた。

「自分が沈む又は死ぬ寸前の記憶は覚えているかな？」

「はい……少しあやふやではありますが、散々身体を電気ショックで痺れさせるような拷問された挙句に突然目の前に砲口を突きつけられ、視界が真っ暗になったのを覚えています」

「凄い鮮明に覚えてるじゃないか」

島風の記憶の中では深海棲艦の連合艦隊による奇襲攻撃から四時間以上が経過、ある特殊な深海棲艦と戦闘を繰り返していた事を覚えている。

その深海棲艦は尻尾の様な艦装に怪物の口をかたどった突起部から碧色の雷を放っていた。

そして途轍もない程の戦闘能力と異常なまでの走行速度。

海軍の中でもトップクラスで最速だった島風の海上走行速度とほぼ同等の速さを誇り、海を駆ける姿はまさに雷の如く。その勝負で島

風は敗北し、散々痛めつけられた後に戦闘不能になってしまった。

「なあ提督……」

「何だ摩耶」

「オウゲン『?』に言ってみるか?」

「……まあそうだな……仲間がいた方がアイツも心強いだろ」

摩耶が島風の事情を少し聞いてある提案をする。護神厄討艦隊旗艦である『?』オウゲン叢雲に直接会わせようと摩耶は考えた。その案を聞いて提督は顔を天井に向け、考えるような仕草をした後に叢雲を呼ぶように摩耶を行かせる。

島風は『?』オウゲンという聞き慣れない名前を聞いて頭にはてなマークを浮かべた。自身の関係者なのだろうか、艦娘か軍関係者なのか分からない。

「■先生はこれまでの経緯を簡単に話してくれ、島風の事はお前の方がよく知っているはずだ」

「はいはい分かったわ」

単に説明するのが面倒なだけだろうと心の中で思いつつ、■医師は島風に漂流してきた経緯と潮岬町鎮守府で起きた事について分かりやすく説明した。

■少尉の恐るべき蛮行、蒼■中尉の殺害、翔鶴の暴走、そして自身が■少尉の操り人形となって翔鶴を脅していた事を伝えていく。

島風は沈んだ時の記憶以来、全く何も覚えていない。

侵略通信機による後遺症か、身体の中を蝕んでいた黒い触手が核に直接影響を与えて記憶障害が起きている。何を言われても理解するには時間は足りず、自身がその言われた通りに生きていた事に実感が湧かなかった。

ただ心の中で残っていたのは今まで意図せずに潮岬町鎮守府の艦娘達を脅してきた罪悪感、そして――、

「島風!!」

「えっ、うわっ!!」

病室の横引きのドアが勢いよく開かれ、あまりの強さにレールから外れたドアを咄嗟に■医師が支えた。

金色に光る槍を放り投げられ、提督は無意識に槍を掴んで倒れる。名前を叫んで出てきた途端に島風の方へ一直線に走り、生きてくれている喜びを噛み締める様に抱き締めた。突然の抱擁に島風は驚きを隠せずに慌てふためくも、抱擁してきた艦娘を確認して落ち着きを取り戻す。

「良かった……本当に良かった……!」

「貴女は……叢雲ちゃん……?」

島風を抱擁したのは叢雲。今は護神厄討艦隊旗艦として『?^{オウゲン}』の名を背負っている艦娘だ。

何を隠そう叢雲はあの小笠原鎮守府で深海棲艦の連合艦隊による奇襲攻撃から生き残った唯一の艦娘である。

「ええ私よ島風。久しぶりね」

「うん、そうだね……久しぶりだね」

約五年ぶりの感動の再会に島風と叢雲は喜びを分かち合う。あの惨劇から生き延びた叢雲と沈んでしまったが生き返った島風が相見え、嬉しさのあまりに叢雲は涙を浮かべた。

「摩耶ああ!! 助けてええええ!!」

「はいはい」

その二人を他所にコンクリート製のドアを必死に支える■**■**医師と床にヒビが入る程重い金色に光る槍を仰向けになりながら必死に持ち上げる提督が摩耶に助けを求めた。

病室内の混沌とした光景に困惑するも、摩耶は二人を助ける。

「まさかこんな所で筋肉を使うとは思わなかったわ……」

「悔しいが俺も同じ感想だ」

「あらごめんなさい、いるとは思わなかったわ」

提督と■**■**医師は壁に体育座りで寄り掛かり、予想もしていなかった事を嘆いている。

『?^{オウゲン}』叢雲は摩耶から金色の槍を返してもらい、今更提督と■**■**医師がいた事をわざわざ言葉に発してきた。

「叢雲ちゃんは、その……元氣?」

「ええ私は元氣よ、島風こそ体調は大丈夫?」

「うん、ちょっと大丈夫になってきたかも」

勇気を振り絞って島風は叢雲に話し掛ける。

『?』オウゲン叢雲は笑顔で島風の話に答え、同じ目線になるよう椅子に座って話し始めた。

お互い自身の無事を喜び合い、それぞれ手を優しく握り合う。

「はあ……本当にごめんなさい……あの時はもう、アイツらと相手するのに精一杯で援護出来る余裕が無かったの」

「仕方ないよ、強い敵がいっぱいたんだし……みんな自分の事で精一杯だったよ、私だってそうだったし……」

島風と叢雲の二人だけにしか分からない小笠原鎮守府の激闘の行末。

突然鎮守府内の倉庫が大爆発を起こし、資材が燃えていく中で海を埋め尽くす黒群が島一帯を囲む。援護要請をする暇もなく一斉砲撃によって鎮守府は疎か小笠原島の地形は変形した。

あまりにも突然な奇襲に対応が遅れるもすぐさま叢雲と島風は出撃、何十匹もの深海棲艦を蹴散らし、鬼や姫クラスの深海棲艦と対峙した。

戦況は一時的に巻き返すが、得体の知れない強さを持った深海棲艦が続々と出現し、艦隊はバラバラになってしまう。

しばらく島風と叢雲は深海棲艦に応戦するも、次第に手に負えず戦況は悪化。

仲間の艦娘は巨大な腕を操る二人の深海棲艦によって蹴り殺され、その惨状を見た艦隊を指揮する司令官は自身の失態を恐れるあまりに自害。鎮守府内は深海棲艦によって蹂躪され、憲兵や整備士は巨大な鋼鉄の拳を装備した深海棲艦に連れていかれてしまう。

残る艦娘は二人だけとなり、絶望的な状況下でありながらも島風と叢雲は特殊な深海棲艦と苛烈を極める戦闘を繰り広げていた。

二人とも弾薬や燃料もあと僅か、大量に血液を失い意識は朦朧とする。

依然として敵対する深海棲艦は損害を与えても余裕の笑みを浮かべていた。

このままでは確実に死ぬ。

そう思った叢雲は少しでも救える命を救う為に微かに息のある生き残った憲兵一人を救助し、一人の艦娘が殿しんがりとなって小笠原諸島海域を脱出する作戦を試みた。

最初は島風が憲兵を抱えて脱出するはずだったが、島風の意向により叢雲が憲兵を抱えて脱出。島風は小笠原鎮守府の最後の艦娘として深海棲艦の大艦隊を相手に突撃、叢雲が逃げられるだけの時間を作って海へ沈んだ。

「本当は貴女が脱出するべきだったのに……私達の事を知ってわざわざ殿になってくれた……」

「だって大切な人、だったんでしょ？ 一緒にいた方がいいもん」

生き残った一人の憲兵は『？』叢雲にとつて大切な人だった事を島風は知っていた。

叢雲が脱出する作戦を考案し、最初は島風が脱出するはずだったのを瀕死寸前の憲兵が叢雲と関係のある人物だったのを見て、咄嗟に二人を逃がす事だけを考えていた。

あの二人の為ならば潔く死ぬる。

そう思った島風は脱出を試みる叢雲と憲兵を背後に深海棲艦と再び戦った。

「ねえあの人は今どうしてるの？」

「え？ い、いや……その……大丈夫よ、ちゃんと生きてるわ」

「ほんとに？ なら……良かった」

生き残った一人の憲兵の無事を聞いて、島風はため息を吐いて安堵する。自身が殿しんがりを務めて最期まで戦い抜き、一度沈んだ意味があった事に安心した。

「あ、そうよ！ 島風はこの先どうするの？」

「え？ 私？」

「そう、貴女は今ここにいて治療を受けているけど、本来は沈んだ事になってるわ。だけど大本営の方で確認を取ればまた戦線に復帰出来るかもしれないのよ」

「ま、待ってよ私は……」

「聞いた所によると体力が落ちてくるくらいでこの先何事も無く生活していれば何も問題は無いって言うし、心細い私としても貴女がいてくれたら嬉しいのよね」

「待って……」

叢雲にこの先どうするのか尋ねられた島風。

当然何も考えていなかった島風は困惑して答えを導き出せずにはいたが、叢雲はお構い無しにこれから先の事を提案し始めた。

島風の声も耳に入らないのか次々に案の内容を所狭しと話して行く。

「同じ地獄を生き抜いた唯一の仲間だし、それに自慢のスピードを出せるなら活躍出来ると思うの。前までは候補者だったんだし、島風なら楽に——」「待って!!」

島風の大声が叢雲の話の遮って病室内に響き渡る。突然の大声に叢雲は一歩後退するほど愕然し、提督達も同様に一驚していた。

大声の直後、誰も声を発する事が出来ず病室内が沈黙に包まれる。

「待ってよ……この先の事なんて決まってもないし、勝手に決めないで……!」 それに私はもう……」

沈黙を破って島風が自ら意思を伝える。

島風の本心は——、

「戦いたく……ないの……」

153. 　どんな事もまずは真似る事から

「戦いたく……ないの……」

島風から伝えられた一言は叢雲にとつては残酷な事だった。

島風には戦意が存在せず、戦う気力も殆ど残っていない。

五年前では艦娘における戦いたくないという意味表示は、遠回しに自分を解体してくださいと相手に伝えていようなメッセージだった。戦う気の無い艦娘など戦争には不要、せめて解体されて他の艦娘の糧となれという考えが主流だと言われている。

現在では■元帥が考案した新式解体法により、死ぬ事は無く解体という名の退役で第二の人生を歩む事が出来る。

しかし孤独に生きてきた叢雲からすれば、唯一生きていた仲間が間接的に消失した事になり、また叢雲は孤独になってしまう。故に島風の言葉にはそれだけの重みがあった。

「……そ、そう……！　それは悪かったわね……ちよつと私、勝手に一人で舞い上がってたわ……ごめんなさい、頭冷やしてくる」

島風の大声で我に返った叢雲は一度反省して謝罪、色々取り乱した自分を正すべく金色の槍を持って病室を出ていった。すれ違いざまに■医師は叢雲の目から涙が出ていたのを見る。様々な感情が押し寄せて耐えきれなくなったのか走っていく足音が聞こえた。

「戦いたくない、か……ある一種のコンプレックスだろうか」

「コンプレックス……？」

一連の光景を黙って聞いていた提督は島風の発言を考え、あるコンプレックスだと見抜いた。

それを聞いた■医師は思わず聞き返すも、島風はあからさまに動揺しおもむろに顔を俯く。よく見れば島風は腕全体を震わせながら、真っ白な布団を握り締めていた。

「そうです……流石ですね」

「随分と性格が大人しいからな、卑屈になってしまうほど何か嫌な事情でもあるんだろう」

コンプレックスがある事を見抜かれて、島風は震えた声で提督の言

葉を認めた。

本当は誰にも知られる事無く生きていこうと思っただけに恥ずかしくて悔しい。

心の内に秘めていた劣等感が知らぬ間に島風を押し潰していた。

「……私は小笠原鎮守府に着任するまでは横須賀鎮守府に所属していた、皆さんが知っていたように艦娘の中でも戦闘能力における速度が一番早く、それなりに名が知られていました」

当時の島風は日本海軍最大の拠点として数多くの精鋭と呼ばれた艦娘達が集まる横須賀鎮守府に所属していた。島風は最高峰の速度を兼ね備えた駆逐艦で、戦闘能力における走行速度や反射速度が他とは比にならないほど優秀とされ、海軍もその存在を重視していた。

そしてその実力が認められた島風は小笠原鎮守府への異動を命じられる。

理由は海域防衛の為に一時的な戦力を補う為、他に異動する艦娘もいたが島風もその一人として小笠原鎮守府に着任した。

「私はその速さを誇りに思っていて、私以外に速い奴なんていない、そう思い込んでました」

「だがその幻想は崩れた、と」

「はい……奇襲時に私と同じくらい……いや、それ以上の走行速度を持つ深海棲艦がいて、私は……」

『遅イ』

『遅過ギル。艦娘ノ中デ一番速イト聞イテ戦ツテミレバ、ガツカリダ』

『走行速度、航行速度、動作速度、反射速度、弾速、全テニオイテ私が勝ツ^{マサ}テイル……マルデオ前ハ、私ノ下位互換ダナ!!!』

『……イヤデモ、オ前……マアイイカ。ドチラニセヨ、ココニイル奴ラハ全員連行ダカラナ……』

『じゃ、バイバイ——』

「誇りやその全てを、失いました……」

奇襲攻撃の時に特殊な深海棲艦から言われた言葉で島風の全てが崩されてしまった。

自分にとって一番のアイデンティティだった速さがいとも容易く格上の敵に弄ばれて喪失し、速さ以外に自分に何が残っているのか分からない。

速さが無ければ自分に価値や存在意義は無い、この世界で戦う意味も生きる意味も無い。

何もしたくない、何もやりたくない。

自分の心の中で徐々に膨れ上がっていた。

「私より速い奴なんてこの世にいっぱいいる、もう気付いたんです。あの時から、ついさつき起きた時からでも、もう……」

話し続けていた島風の声が再度震えて、涙ぐんだ表情で歯を食いしばる。何度か水滴が零れ落ち、真つ白な布団を点々と濡らした。感情が極まって島風は静かに泣き始める。今すぐ泣き叫びたい思いを必死に堪え、本心を打ち明けた。

「私は……！ 使い物にならないんだ、って……！」

戦闘の死に際で初めて挫折し、自身のアイデンティティを喪失。

まだまだ自分は未熟で、何もかも物足りないのだと自覚させられ、そして殺された。

その時死んでいたのならどれだけ気が楽だったろうか、今生きているこの瞬間がとても辛く感じる。

最早自分に残っているモノは何も無いというのに、生き返ってしまった事に心が苦しめられた。何故なにも無い自分が生き返ったのか、自問自答し続けなければ落ち着く事すらままならない。

「■■先生、後は頼んだ」

「ちよ、貴方は……！ 何か言ってあげたらどうなの!？」

泣き崩れる島風を余所に提督は興味も無く病室を去っていく。

思わず■■■医師が言う事は無いのかと止めに入るも、提督は無視し

て廊下内を小走りでその場を去ろうとしていた。 ■ 医師が提督の肩を掴み、提督は肩を大きく動かし掴んだ手を退ける。

「何を言えればいいんだ？ 使い物にならないなんてそんな事は無いよ、とでも言えればいいのか？」

「あーいや、本当は少し違うけど大体そうよ、貴方から直接言えば変わるかもしれないでしょう？」

「それはお前の役目だろう ■ 医師。鎮守府内の関係者の治療やメンタルヘルス、カウンセリングがお前の仕事だ。お前という存在がいる以上は俺がわざわざやる事はない」

■ 医師の仕事は淡々と並べて提督はまた小走りをしようとする。

■ 医師はその後を追い掛け、ひたすら提督に訴え続けた。

「勿論私はやるし、そうだとしても仮にも貴方の部下よ！ 弱った部下の気持ちに寄り添うのも上司の仕事じゃないの!!? 言う人が変わるだけで気持ちも変わるのよ!!」

「自己を喪失した奴に綺麗事を言う暇など俺には無い！ そもそも何故俺が自分自身を誇る様な奴に気に掛けなければならぬんだ！」

「何でそんな傲慢なのよ！ 助けてあげたいって思わないの!？」

「自身が人間である事を良い事に兵器である艦娘を助けてあげたいなどと上から目線で憐れむお前こそ傲慢じゃないのか!!?」

廊下内に ■ 医師と提督の声が響き渡る。

直後、ドンと扉を閉める音が聞こえ、二人はその音の方向へ顔を向けた。

その先には島風の病室、二人の口喧嘩を聞いて摩耶が聞こえないように扉を閉めていた。二人に近づく事は無く、静かに扉の傍で壁に寄り掛かって待っている。

「井の中の蛙、大海を知らずって諺を知ってるか……? 例えるなら島風はその蛙だ、自分が一番速いと信じて疑わず思い込み、いざ格上がいたとなればまだまだ未熟なんだと思いき知らされる！ 死ぬ時が来るまでひたすらその速さを追い求めていれればいいものを、まるでアイツは何もしてこなかったかの様な言い草だ!! だとすればあの島風は己の怠慢が生んだ自業自得なんだよ!! 仮に何かしていたとし

でも戦闘に負けたとなればそれは己の力不足だ!!!」

提督は島風の事情を自身の自業自得だと訴え、指差して話しながら

■ 医師を壁に追い詰める。

それはまるで提督がその言葉通りの経験をしたかのように訴えていて、自分自身を咎める風ふうに聞こえた。

差された指元は僅かに震え、珍しく感情が昂っている。

「お前がそんな傲慢な奴じゃないとは俺も思っている。確かに助けたと思う気持ちは立派だ、決して馬鹿にしてるのではなく本当にそれは尊敬しているし、感謝もしている。だが一方でその気持ちは時として刃になってしまう事だってあるんだ。その両方を考えなければならぬ、それだけ助けるといふ行為は単純でもあり難しい事でもある……!」

提督は少なからず ■ 医師の信念と実力を認めていた。艦娘を人間として必死に救おうとする精神は、決して馬鹿に出来るモノではない。艦娘が現れた時からこの時まで人間として見ているのならちゃんとした価値観を持つ人間だ。

だからこそ道を間違つて欲しくない。

彼女が艦娘達にとって希望の存在で居続ける為にも、提督にとって

■ 医師は必要な存在だった。

「だつたらせめて……今は罪悪感に押し潰されないう様にお前が傍にいてあげる事が重要だ。俺は本当に暇じゃない、いつアイツらが攻めてくるか分からない現状下の中で寝る暇なく無数にある拠点を調べ尽くして探している、時間があれば考えたが今更一艦娘の事情に首を突っ込める程の余裕なんて無いんだ! だからこういう時にこそお前がいるんだよ!!」

文字通り、提督の目にはクマが出来ていた。

提督も艦娘達の為に行動しているのがよく分かる。

■ 少尉の拠点を特定する為、全ての攻略海域の情報を収集し、いる可能性のある海域を限定して搜索していた。

翔鶴達との戦争後、戦況は不安定な状態になっている。更には提督が鎮守府にいる期間は他の軍人が見つかるまでの終わりが見えない

不明瞭な期間。

時間は刻一刻と迫ってきている。

「話は済んだか？ 二人共」

「……あ、ああ……すまない、少し取り乱した」

「いえ私も、感情的だったわ。ごめんなさい」

摩耶の呼び声によって二人は自制し、一旦は落ち着く。

それぞれ誤りがあった事を踏まえて謝罪の言葉を口にした。

「……行くぞ」

提督は摩耶を連れて医務室を去っていった。

——鎮守府近海海域

耳元で囁く様な波音が聞こえる。

穏やかな波が岸辺の壁に打たれ、更に波音を掻き立てた。

天気は満天の青空、水平線のその先まで広がる青色の天井が海を染めていく。その青空を侵食する様に白い入道雲が上へ上へと昇り立ち、天井に到達したのか左右へと広がり続けた。

その空と海を背景に銀色の炎影が十字に描いた輝きを見せる。

更にその前には純白の金剛石ダイヤモンドが太陽の光に屈折し、周辺の海を淡く照らした。

「『?』さん、準備はいいですか?」

「Of course 『鏢』シロガネ! いつでも大丈夫ネー!」

潮岬町鎮守府の間近の海域で『鏢』鹿島と『?』金剛ビヨウコウが海上にてある準備をしていた。鹿島は準備体操の様に腕を回し、『?』金剛ビヨウコウは両拳をぶつけさせ待ち構えている。周辺では二人の模擬戦闘を見ようと多くの艦娘達が参加していた。

「じゃあ行きますよー!」

鹿島はステップを数回踏んで、いきなり右方向へ急発進。

『?』金剛ビヨウコウも右方向へ急発進急加速。

円を描く様に二色の光芒が海を駆け回る。

光が屈折する様に二色の光芒は直角に方向転換。

拳同士が衝突し、互いの背後に津波のような水飛沫が宙を舞う。直後『?』金剛は鹿島の腕を掴み、青空へ投げ飛ばして砲撃。空へ舞う鹿島は腕を交差して砲撃を受け止める。黒い爆煙に包まれ、風圧で陸地の木々がざわめく。すかさず『?』金剛は大跳躍して爆煙の中へ。しかし爆煙を斬る様に鹿島の回し蹴りが『?』金剛の頬へ直撃。蹴り飛ばされた『?』金剛は間欠泉の様な水柱を立てて海面に打ち付けられた。

海面に着水した鹿島は水柱へ連続砲撃。

雨のように降り注ぐ水と爆煙が混ざり合う。

その中から砲弾の如く『?』金剛が急加速して突進。

鹿島の砲撃を怯みもせず殴打するかと思いきや——、わざと何もせず鹿島とすれ違って背後を取る。

すれ違った時間はほぼ一瞬。

既に全砲門を鹿島へ照準を合わせた。

取られた瞬間に鹿島も背後へ振り向き、全砲口を『?』金剛へ向ける。

二人の周辺が巨大な爆煙に覆われた。

覆われても尚二人は見えない相手へ殴打を仕掛け、拳が再び衝突。衝撃で爆煙が吹き飛び、海水が碎ける様に飛び散った。

「……………ここのくらいにしておきましようか」

「そうしましょーカー！」

キリが良いと見た二人は拳を納め、距離を取って鎮守府へ戻る。手首や腕を回したり、関節を鳴らしては満足した表情だ。

あまりにも逸脱した高度過ぎる戦闘に見ていた艦娘達は啞然としている。岸辺に戻ってきた鹿島は戦闘に満足して忘れていたのか「あ」と声を漏らして艦娘達に伝えた。

「あ、これをやってみてください」

「「いや出来るかアアツツ!!!」」

規格外な高速戦闘を模してみろと言われ、艦娘達は総じてツツコミを入れた。

「何も最初からコレをやれと命令形で言っている訳ではありません。100%の完成形がコレに近付いたら良いですねって言ってるんですよ」

「訓練すればするほど近付けマスヨー！」

海から鎮守府の広場へ跳躍して着地し、鹿島と『?』金剛は身体に纏う光を抑えながら艤装を収納する。

先程の凄まじい戦闘で損害を受けているかと思いきや、鹿島は手袋が衝撃で破れた程度、『?』金剛は一切の怪我や傷跡が全く無かった。「どういった訓練をすれば現実離れた実力を持つ事が出来るんだ?」

「航行速度やその身体に纏う光という物は私達にも出せるのでしようか?」

「やっぱ装備とかも性能が良い奴じゃないと駄目なのかな?」

「全ての質問はある一つの答えで纏まります。まず艦娘という兵器は身体の中に核というエネルギー源が存在します。この核によって貴女達は海を駆け抜け、小型化された艤装で攻撃、攻撃を受けても耐え抜くなどといった高度な戦闘技術で深海棲艦と戦う事が出来ています」

二人の戦闘を見た艦娘達はお構い無しに次々と質問をしていく。

確かに二人の戦闘を見れば不思議に思う所は多いだろう。常人離れした航行速度や身体を纏う光など通常の艦娘とは掛け離れている事ばかりだ。

質問を受けた鹿島は全ての質問を一つに纏めて答えを順に話していく。

「そしてこの核なんです、実はそれぞれ性質があるんです。例えるならゲームのRPGに出てくるステータスのようなモノで、耐久、装甲、回避、火力、雷装、対空、対潜、索敵、速力、持力、感覚があります」

艦娘には艦種に係りそれぞれ得意と不得意がある。

秋月達の様に対空が得意な防空駆逐艦であったり、索敵が得意な航空巡洋艦の最上や利根、雷装が得意な重雷装巡洋艦である木曾、北上

や大井であったりと多種多様だ。

「その性質を特化させた、また最初から特化していたのが摩耶さんや『?』さんなどといった、錚々たる方達が集まった艦隊が我々護神厄討艦隊なのです」

「訓練次第ではその性質を特化させる事が出来るという訳だな」

「その通りです長門さん。恐らくですが、この中にその特化した艦娘が一人か二人いるかと思われれます。例えば何か不思議な能力を持った、とか」

鹿島の言葉を聞いて艦娘達は一齐に青葉に視線を移す。

全ての視線を集めた青葉は恐る恐る怯えながら手を挙げた。

「おやおや、青葉さんは何かお持ちで?」

「は、はい……人の嘘を完璧に見抜く事が出来ます」

「では見抜く際に相手のどういった所を見ますか?」

「相手の目や口の動き……頬の動きや声を聞いて分かります」

「なるほど、恐らくそれは青葉さんが生まれながらに感覚の一部が既に特化して出来た才能ですね。我々はこういった超能力を『才能』と呼び、軍では貴重な存在として重宝されます。とても珍しいので青葉さんは恵まれますよ」

摩耶の【予感】や青葉の嘘を見抜く力は総じて『才能』と呼ばれている。既に特化していた性質が状況によって進化し、超能力のような力を持つ事が出来るらしい。

しかしその才能とは特化していた性質を応用して出来たモノで、自身が持ちたいと思う才能とは相反した才能を持つ事が殆どだ。

更に才能が芽生える確率は非常に低く、状況による変化の例として身体に深刻な物理的ダメージを受けた時や精神的なダメージやストレスを受けた時など理由は様々。特にこういった変化は過酷な環境下で戦っていた艦娘に多く、逆境の最中に目覚めた事例や艦娘をモノとしてぞんざいに扱う鎮守府で芽生えた事例がある。

「訓練では私達が貴女達の性質を見極め、それぞれ特化出来るようにするのが目的です。約一ヶ月半というかなり短い期間なので、想像以上に厳しい訓練である事を覚悟してください」

「当たり前だぜ!!」

「死ぬ気で頑張らないとね!!」

「素晴らしい意気込みです天龍さん、瑞鶴さん。なんと言っても貴女達が立ち向かう敵は深海棲艦の中でも一際目立つ、一人で国そのものを滅ぼしかねないと断定された恐るべき七壊星という存在です。死ぬ気で……いや、自分自身を殺す気で頑張ってください」

艦娘達が挑む相手は ■ ■ 少尉と七壊星。

深海棲艦の提督して猛威を振るう ■ ■ 少尉が七壊星を連れてこない訳が無い。

更には瑞鶴が『貪狼』ディアボルグ集積地棲姫の打倒を考えている。生半可な気持ちと力では返り討ちに遭うのは必然だろう。その為にも鹿島達が厳しく鍛える必要があるのだ。

「先程現実離れた力とか言われましたが、それを現実にするのが私達であり、貴女達でもあるんです。大丈夫です、ちゃんと最後までサポートしますよ……」

「……では共に、頑張らしましょう」

154. 出る杭は打たれても壊れない

「とは言いましたが今日は座学です」

『鏢』鹿島と『?』による模擬戦闘を終えた後に鹿島は艦娘達の訓練の為に講堂の多目的室へ集まらせていた。護神厄討艦隊の『鏢』鹿島によって全員が集められ、多目的室は一気に大所帯となる。全員を床に座らせた後に多目的室の奥にあるホワイトボードの前に鹿島が指揮棒を持って現れた。

「ある諺に、彼を知り己を知れば百戦殆うからず」というのがあります。孫子の一節に語られていた格言で、敵の実力と自分の実力を知れば百回戦っても敗ける事は無いという例えです。今日はその両方を勉強してもらいたくこうして座学を開きました」

敵の事を知りつつ自分自身を知る。

訓練をする前に必要不可欠な情報を教える為に鹿島は全員を集めた。集まった艦娘達の周辺には『黝』蒼龍、『緞』木曾、『?』金剛が囲うように立っており、何だか監視されている様に感じる。

「まず我々はどんな存在か、簡単に説明しましょう」

ホワイトボードにはプロジェクトに写された資料が見えた。艦娘という存在とその仕組みについて事細かに記されている。

鹿島は指揮棒で書かれた内容を順に簡潔に教えていった。

「我々の艦娘の身体の中には核というエネルギー源によって全てを制御しています。艦装を腰や肩に背負い、海上や海中を自由に駆け抜け、深海棲艦に対抗出来る唯一の兵器。その特殊な仕組みは今もそれほど解明されていません」

深海棲艦に侵攻されていく中で突如現れた艦娘という存在は、まさに人類の希望となってくれた唯一無二の存在。

様々の分野を持った専門家や科学者、軍関係者達が艦娘の構造を解明しようと研究に研究を重ねたが、誰も現代の科学力でその特殊な構造を解明する事は出来なかった。

どの技術も現代の科学力では証明に辿り着かず、唯一艦娘の技術を知っていたのは艦娘と共にいた妖精という存在。

発見当初は小人として把握されていたが、次々に見える人と見えぬ人で別れ始め、普通の生き物ではないと確認された。

更には艦娘の技術を当然の様に扱う為、魔法の世界から現れた事や艦娘達がそう呼んでいるからか妖精と呼ばれる様になる。

妖精が見える者から伝言者となつて徐々に艦娘の構造が判明し、その技術を扱えるように指定された国家資格を持った整備士が生まれ、各地の鎮守府に配備される。

「そもそも我々艦娘は食事を必要としません。身体の中にある『核』というエネルギー源が自ら無尽蔵のエネルギーを作り出し、我々の身体の中を循環しているんです。人間で例えるなら血液の様なモノですね」

核から作られるエネルギーは艦娘の全てを司る液体の様な構造体で、核がある胸から頭や足の端まで毛細血管の様に隅々まで張り巡らせており、通称エネルギー脈と呼ばれている。

艦娘の超人的な力や艦装の操作、被弾時の耐久など様々な役割を持つているが仕組みは未だに完璧に解明出来ていない。

「このエネルギー体は戦闘時において重要な役割を果たしています。特に被弾時ではそれがとても顕著に現れますね。例えば銃弾や砲弾を受けたとしても身体は一切吹き飛ばず、無傷のままになったりする事は皆さんにもあるかと思えます」

「でも逆に被弾が多過ぎると怪我を負う事はありますよね」
「そうです。元々そのエネルギーによって身体は守られている為、ちよつとやそつとの攻撃ではまともに傷付く事はありません。ですが、人間であれば即死に近い攻撃を受け続けるとエネルギーは徐々に減少し、装甲を失つて艦娘の身体へ戻っていくんです。これが所謂『装甲』という性質ですね」

艦娘は艦装展開時に核から作られるエネルギーによって鉄壁の装甲が身につく。身体全体を包み込む着ぐるみの様な見えない膜が隙間無く付着し、常にエネルギーが流し込まれている。

外からの物理的ダメージを受けるとその受けた部分にあつた見えぬ膜は剥がれて消えるが、瞬時にエネルギーが新たな膜を生成し、

次の攻撃に対して備える様に身体を護ってくれているのだ。

「元々装甲のエネルギーの供給速度は100%ですが、常に100%という訳ではありません。先程も説明したように度の過ぎた攻撃を受け続けるとエネルギーの供給速度は徐々に下がっていくんです。原因としては核から作られるエネルギーの供給が不足して間に合わない、他の性質へエネルギーを供給しなければならぬ装甲に回す余裕が無いなどと様々な仮説があります」

それぞれの性質は核から常に約100%のエネルギーを供給している。

耐久や装甲、回避や火力など準備から攻撃までの全ての動作はエネルギーを消費して行われているのだ。

核は性質からエネルギーが消費され次第、瞬時にエネルギーを供給させて戦わせている。

どこか一つの性質がエネルギー不足に陥った場合、核は優先して不足したエネルギーを補おうとするが、代わりに他の性質のエネルギー供給速度を低下させ、エネルギー効率を一定にしようとするらしい。「では何故護神厄討艦隊である私達は他の艦娘と比にならない程の戦闘能力を持っているのか。皆さんがお察しの通り、それはエネルギーの供給速度にあるのです」

「つまりエネルギーの供給速度が良ければ良い程、身につく戦闘能力は跳ね上がっていくという事か」

「流石ですね木曾さん。護神厄討艦隊である私達は、普段の貴女達とはかなりのエネルギーの供給速度の差があります」

鹿島はホワイトボードをひっくり返し、貼られた図面に指さし棒で艦娘達に説明していく。

「正直エネルギーの供給速度って言うの面倒なので、これからは正式名称で『エネルギー効率』って呼びますね。ちゃんと覚えてくださいよ？ 話は戻しますが、普段の艦娘は全ての性質のエネルギー効率を100%前後、それを限界値として定められています。ですが護神厄討艦隊である私達はそのエネルギー効率を常に200%前後を限界値として定めて稼働させているのです」

「二倍しか差は無いように見えますがそれは……?」

「いい質問です古鷹さん。実は100%と200%では見違える程の遠い差が存在しています。例えるなら貴女達のエネルギー効率をレベル1だとして、私達のエネルギー効率はレベル50。近い様に見えるとても遠いんですよ、この差は」

エネルギー効率の差は例え1%とでも大きな幅がある。

それは身体に直接感じる要素が多く、以前より走るのが早くなつた、以前より体力が身につけている、などと身近な事だ。

1%変動しただけでも艦娘の身体には目に見える変化が起きる。

「ごめんなさい悪いんですけど、分かりやすく言えば……1 Lリットルのジュースを核とエネルギー、コップを艦娘の性質と例えてた場合、三人分に分ける時、Aさんは小さいコップ三個でそれぞれ100mlずつで分けるけど……Bさんは大きいコップ三個でそれぞれ250mlずつ分けている、みたいな事ですよね?」

「説明ありがとうございます。少し分かりずらかったかもしれませんが、申し訳ないです」

「いえいえこちらこそ理解出来ずに申し訳ないです」

いまいちエネルギー効率の事を理解出来なかった鳳翔は自身にとつては分かりやすい例えで鹿島に説明し、確認を取る。

鹿島は元気よく笑顔で正解だと答え、上手く説明出来なかったのを反省した。

「話を進めていきますね……要はそのエネルギー効率を如何に上げていくか、そこが課題になります。では皆さんにクイズを出しますね!」

「クイズ……?」

「はい! 普段の皆さんは全ての性質のエネルギー効率を100%前後、護神厄討艦隊である私達は200%前後を限界値として大きな差があります。特に『?』ビョウコウさんは耐久と装甲、感覚が特化しているのですが、何故全ての性質のエネルギー効率が200%前後の限界値で全て特化しているハズなのに、その三つの性質だけ目立つように特化しているのですよ?」

鹿島は『?』金剛を例に見立ててあるクイズを出した。

クイズを出された艦娘達は手に顎を乗せたり、上を向いたりと考え込む仕草をして答えを導き出そうとする。

クイズの内容は普段艦娘の全ての性質へ流れるエネルギー効率は100%前後、護神厄討艦隊の艦娘は200%前後を限界値として定められている。普段の艦娘達からすれば200%まで限界値が突破しているのなら、それは全ての性質が特化しているのではと疑問に思うだろう。

だが『?』金剛は耐久と装甲、感覚だけが特化しており、それ以外のエネルギー効率は変わらないという。何故全ての性質が、ではなく一部の性質だけ特化していると言っているのか、矛盾が出来ているのだ。

「……なるほど分かったぞ……！ お前らは常に200%のエネルギー効率で動いているけど、その三つの性質だけ200%以上のエネルギー効率で動いているのか!!」

考え込んだ天龍が閃いたと手をポンと叩き、鹿島にクイズの答えをハッキリと言った。

「正解です天龍さん、お見事です。最初私達は貴女達より200%前後のエネルギー効率で動いていると言いました……もう一度、『?』さんで話してみましよう」

ホワイトボードの前に『?』金剛が仁王立ちして現れた。

見本として鹿島の説明がしやすくなる様に静かに立ったまま堂々とした表情で黙り続けている。

『?』金剛さんは耐久と装甲、感覚という性質が特化した艦娘です。いくら砲撃の嵐を浴びようが、殴る蹴るの暴行を受けようが、ダイヤモンドより遥かに堅い装甲とどんな傷でも再生する耐久を持ち、オマケに感覚が特化し過ぎて痛覚を遮断するような超能力まで得てしまいました」

「痛覚を遮断……? 凄まじいな……それ」

「天龍さんの言う通り、私達はそれぞれの性質を200%を限界値として稼働していますが『?』さんは耐久や装甲、感覚の性質が200

%以上限界値を超えて突破し、それぞれ耐久が約250%、装甲が約300%、感覚が約350%と有り得ない限界値を持っているんです。例えるなら耐久はレベル75、装甲はレベル100、感覚がレベル150の様なモノですね。ハッキリ言ってマジでバケモ——」「失礼ネー!!」

『?』ビョウコウ金剛は失礼な事を言われてイラツときたのか鹿島を叩き殴った。

殴られた鹿島は床を突き破って杭のように嵌ってしまう。あまりの衝撃に思わず艦娘達は身を守る様に腕を前に出した。

多目的室内が地震のように揺れ、宙吊りの照明器具が動き出す。

数十秒後かして鹿島は何事も無く嵌った床から抜け出し、肩や帽子に乗った埃を手で払った。

「と、これだけ言ってもあまり理解は出来ないかと思えます。ここからは性質の仕組みについてお話しましょう」

「……………」

【耐久】

身体を再生する自然治癒力。

装甲を突き抜けた外からの物理攻撃によって出来た傷や怪我を再生する。

エネルギー効率が良いほど再生速度は早くなり、瞬時に治癒する事が出来る。

【装甲】

身体全体を覆う見えない膜。

外からの物理攻撃をある程度相殺する。

エネルギー効率が良ければ良いほど装甲を貫くダメージは減少し、見えない膜の再生速度が向上する。

【回避】

通常は身体全体に張り巡らせたエネルギー脈が危機を察知して身体を動かす様に命令する。

エネルギー効率が良ければ良いほど危機を察知する範囲が広くなり、身体を中心としたドーム状の見えない空間の様に広がる。

【火力】

基本的な砲撃や射撃の威力、殴る蹴るの腕力や脚力を含めた総合的な攻撃力。

一つ一つの攻撃や砲撃にエネルギーを消費又は放出する為、エネルギー効率が良ければ良いほど威力は上がる。

装備によって変動しやすい。

【雷装】

基本的な水上艦に対しての魚雷の威力。

火力と同じくエネルギーを消費又は放出する為、エネルギー効率が良ければ良いほど威力は上がる。

装備によって変動しやすく、元々エネルギー効率が回っていない艦娘もいる。

【対空】

空からの攻撃に対する防空能力と迎撃能力。

エネルギー効率が良ければ良いほど対空砲火の威力や命中率、敵航空機の撃墜率や味方航空機の被撃墜率、被弾時のダメージ軽減率が上がっていく。

装備によって変動しやすい。

【対潜】

潜水艦などによる海中からの攻撃に対する防衛力と攻撃力。

エネルギー効率が良ければ良いほど水面下の敵に対して威力や命中率は高くなるが装備によって変動が激しく、元々対潜にエネルギー効率が回っていない艦娘もいる。

【索敵】

相手の情報を分析する洞察力。

身体を中心とした円筒状の見えない空間が展開されており、その範囲内から相手の身体の中に流れるエネルギーを感知して、位置などを特定する。妖精や装備の協力で索敵範囲を拡大する事も出来る。

エネルギー効率が良ければ良いほど索敵の範囲を拡張し、相手の情報を分析する時間が早くなる。また相手の弱点や攻撃手段なども分析しやすくなる。

艦種によつては元々エネルギー効率が回っていない艦娘もいる。

【速力】

海上での航行速度。

腰や肩の艤装の中の一部に艦本式タービンや技本式タービン、蒸気タービンに似た構造が仕込まれていた。外部からのエネルギーである燃料で蒸気を発生させ、高速の蒸気流で生まれた回転エネルギーを脚全体のエネルギー脈に通し、足の艤装から推進力を得て航行しているという仮説が有力とされている。

光の速さの如く高速で航行出来る理由として、高速の蒸気流によつて生まれた回転エネルギーを核から作られたエネルギーと融合し、爆発的な速度を生むエネルギーに変換して高速戦闘を可能にしているらしい。

エネルギー効率が良ければ良いほど爆発的な速度を生むエネルギーの量産は素早くなり、持続的に加速出来る。

【持力】

長時間での運動を続けられる持久力、言わばスタミナ。

戦闘時では身体を動かす事が殆どなので、エネルギー効率が良ければ良い程身体的疲労を長時間受けずに済む事が出来る。

【感覚】

体性感覚や特殊感覚などの、言わば五感や第六感の事を指す。

全体に流れるエネルギー脈に流れるエネルギーで敏感になり、視覚や聴覚などの感覚が向上する。どの感覚が向上するのは艦娘それぞれで、向上する感覚は一つだけとなっている為、他の感覚が向上する事は一切無く常に一定を保っている。

またエネルギー効率を良くしたとしても向上する感覚は一つだけである。

全艦娘に共通している事は砲撃時に聴覚をわざと下げられたり、砲撃の反動や被弾時の衝撃を和らげるなどがある。

性質の中で最も他の性質に影響を与えやすく、そして受ける影響も一番。索敵や命中率、持力などに深く関係している。

「以上が性質の仕組みになります。まあ色々抽象的ですがそこはご愛嬌。効率が上がるとどうなるか、想像したらワクワクしませんか？」

エネルギー効率が良いほど戦闘を有利にする事が出来る。

今まで苦労していた敵や格上の相手に立ち向かえると分かって艦娘達は静かに興奮を抑えた。

「ですが皆さん、もう一つ疑問に思いませんか？」

「ええそうですね。そのエネルギー効率と関係はあるのか知らないけど、私達には練度があるわ。戦闘における強さの指数としてね。その場所ってどうなのかしら」

「いい着眼点です五十鈴さん。そうです、戦闘における強さの指数として私達には練度があります」

海軍内で艦娘の戦闘能力の指数として練度が設けられている。

建造された時から練度数は0と定められ、訓練や演習、戦闘を行う事で練度数が徐々に上がっていく様に設計されているのだ。

例えるならゲームの経験値の様なモノで、戦闘に関する物事をする度にそれらを経験値として、艦娘は成長していくらしい。これらは全て妖精が見極めたモノであり、海軍はその妖精の能力を採用して決め

られていた。

「しかし妖精さんが見極めて練度が上がり成長したとしても、エネルギー効率については全く成長していません。元から100%前後に設計されているので例外を除いてそもそも見る必要が無いんですよね」

妖精が見ているのは艦娘の戦闘能力で、建造された当初からエネルギー効率は100%として設計されている為に目視される事は無かった。

だが著しく戦闘能力が凄まじい艦娘が現れ、原因を調査した結果ではエネルギー効率が100%の限界値を超えていた事が判明。

海軍はこれらを極秘情報として取り扱い、戦闘能力が凄まじい艦娘を招集して特殊艦隊を編成した。

現在は艦娘のエネルギー効率についても調査が進められている。

「こうして言われると今までやってきたのはなんだと疑問に思うかもしれないですがそれは違います。練度自体も戦闘において必須ですし、身体的や精神的にも皆さんは確かに成長しています。今まで続けた事には意味があるのです、決して無駄では無いんですよ」

エネルギー効率はゲームで例えるなら裏ステータスのようなもの。

圧倒的な戦闘能力を持つ艦娘が現れるまで誰も気付く事は無かった。

それまでは演習や戦闘などをすれば艦娘はその経験を学んで次に活かし、身体的にも精神的にも成長していく。頭の中で様々な戦術や経験を記憶して、地道に艦娘は強くなっていくからだ。

エネルギー効率があつたからと言ってそれまでの経験が無駄であつたとは限らない。エネルギー効率を高める上で訓練をするのであれば、練度とその経験は必要不可欠だ。

「皆さんは身体的にも精神的にも成長はしています。ですが身体の中にある核は、成長していません。エネルギー効率を高めたいのなら、まず核を成長させましょう！」

「核を、成長させる……?」

鹿島は人差し指を立てて前に突き出し、高らかにエネルギー効率を

高める要点を伝えた。

その要点とは身体の中にある核自体を成長させるという通常であれば疑問に思いかねないモノ。

あまり理解出来なかった暁は思わず言葉を漏らした。

「はいそうです！ 身体と精神を成長させたのなら、今度は核を成長させましょう！ 皆さんが私達に近付きたいと仰るのなら、私達から見れば皆さんの核はまだまだヒヨっ子です。理解出来ない方もいると思うので簡単に言うのなら、核に学習させ、経験し、記憶させる。この三つのメカニズムを通して訓練を行います」

「でも、どんな訓練を？」

「それはですね〜……」

指揮棒を両手で曲げてわざわざ勿体ぶる鹿島に艦娘達は固唾を呑んで待ち構える。

核を成長させるその訓練とは一体どういうモノなのか。皆が興味津々に鹿島へ注目した。

が――、

「後で教えます」

鹿島の予想外な答えに艦娘達は足を踏み外して転がった。

155. 大海二誕マレシ世界ヲ破壊スル七ツノ星

「あれ、期待してましたか？」

「いや期待するだろうよ!! 何で後なんだよ!!」

「今日は座学と言ったはずです。実践的な訓練は明日からですよ」

「でもそんな時間は……」

エネルギー効率を高める訓練の内容をお預けにされた艦娘達は異議を申し立てる。提督に言い渡された約一ヶ月半という短い期間の中、今は一刻の猶予も許されない。早く強くなりたいと願う艦娘達は心と共に身体が躍っていた。

「それは貴女達の問題でしょう？ 私達には全く関係ありません。そもそもその訓練自体、私達は提督と『？』オウゲンさんの命令で特別に動いています。別に私達は貴女達の事情など心底どうでもいいと思つてますし、興味も無ければ関心もありません。私達にとっては役目とは関係の無い急な任務であり、本来はする必要の無い事なんです。それを私達はわざわざやって差し上げているんです、本当に強くなりたいのなら……黙って私達に従ってください」

多目的室内が緊迫した空気に包まれる。

鹿島の身体を纏う様な銀光が一瞬輝きを見せた。

理由を知った艦娘達は大人しく鹿島の指示に従い、再び冷たい床へ座る。

潮岬町鎮守府へ来た護神厄討艦隊の艦娘達の本来の目的は“深海棲艦の提督となった■少尉が、潮岬町鎮守府の制圧の為に七壊星に襲撃させる可能性があるのを考慮して一時的に鎮守府の担当する制圧済海域の防衛と鎮守府の防衛”である。

潮岬町鎮守府の艦娘達の訓練官を務める為に来たのではなく、鎮守府襲撃と七壊星の出現に対するモノとして、■大将と『？』オウゲン叢雲の命令によってわざわざ来ているのだ。

艦娘達の事情など興味どころか気にも留めない、ましてや馴れ合うつもりも全く無い。

彼女達は艦隊の役目を果たす為にいるのであり、訓練の件は旗艦の

叢雲に従っているだけに過ぎず、急に入ってきた役目とは関係の無い任務なのだ。

「……ありがとうございます！ エネルギー効率について話はほぼ終わったので、次に敵について知りましょう！」

ホワイトボードに写されたプロジェクトの内容が艦娘のエネルギー効率から深海棲艦の七壊星について切り替わった。

「皆さんや瑞鶴さんが追い求めている深海棲艦とは、軍のトップ達が“たった一人で国を滅ぼしかねない”と危険視された深海棲艦のリスト、いや……危険集団です。現在は七人の姫や鬼クラスの深海棲艦と、その七人に一人ずつ配下や相棒とされる姫や鬼クラス、その他の深海棲艦が特殊危険個体として登録され、我々は常に警戒態勢を引いています。こちらがその集団のリストです」

【天枢】ドゥーベ 中枢棲姫
『貪狼』ディアボルフ 集積地棲姫

【天璇】メラク 南方棲戦鬼
『巨門』テラスティア 戦艦棲鬼

【天璣】フェクダ 北方棲姫
『禄存』マグニティス 港湾棲姫

【天權】メグレズ 深海鶴棲姫
『文曲』アストラファイ 戦艦レ級

【玉衡】アリオト 戦艦水鬼
『廉貞』ディケオス 重巡棲姫

【開陽】ミザール 深海日棲姫
『武曲』シロフオウス 駆逐水鬼

【摇光】アルカイド 欧州水姫
『破軍』ベネトナシユ 欧州棲姫

七壊星は深海棲艦の発端とされる中枢棲姫を初めとした各海域に名を馳せる深海棲艦を特殊危険個体として登録している集団だ。

深海棲艦の発現地とされている太平洋の中心にあるミッドウェー諸島海域とハワイ諸島を支配し、全ての深海棲艦を纏めあげる世界の

災厄にして全ての元凶とされる【天枢】^{トウシュ}中枢棲姫。
その中枢棲姫の直属の配下として知られる『貪狼』^{グンロウ}集積地棲姫。

インド洋海域全体や太平洋南方の海域全体を支配している七壊星
きつての戦鬪狂であり“殺戮機姫”として名が知られていた【天璇】^{テンセン}
南方棲戦鬼。

その南方棲戦鬼の相棒として深海棲艦出現時に初めて陸に侵攻し
た“最強”と呼ばれた『巨門』^{キョウモン}戦艦棲姫。

ベーリング海域や北極海海域全体を支配している“氷海ノ死神”
と呼ばれた【天璣】^{テンレイ}北方棲姫。

その北方棲姫の補助として全てを引き寄せる謎の力を持ち、“誘導
要塞”と呼ばれた『緑存』^{キナンド}港湾棲姫。

フィリピン海域の一部を支配している“憎悪ノ権化”と呼ばれた
【天権】^{テンケン}深海鶴棲姫。

その深海鶴棲姫の配下として稲妻を体現したかの如く瞬速で海を
駆け回る“碧露”と呼ばれた『文曲』^{ブンキョク}戦艦レ級。

南太平洋海域を支配下に治めるも世界の各海域に度々出現し、七壊
星の中では遊撃部隊を率いるとされる“暴虐ノ女王”と呼ばれた
【玉衝】^{ギョウキョウ}戦艦水鬼。

その戦艦水鬼の配下として対等に戦う事を掲げている騎士道的性
格から“正義ノ使魔”と呼ばれていた『廉貞』^{レンジ}重巡棲姫。

現在はトラック泊地の鎮守府を根城として活動しており、鬼の大佐
と因縁の深い“怨骸ノ邪神”と呼ばれた【開陽】^{カイヤウ}深海日棲姫。

その深海日棲姫の配下として唯一七壊星の中で近接武器を使い、自
身の身長のはある大太刀を操る“幻暁ノ斬鬼”と呼ばれた『武曲』^{ブキョク}
駆逐水鬼。

大西洋海域全体と地中海海域全体、北海海域全体を支配しており、深海棲艦を纏めあげるカリスマ性と狡猾な戦術等を考える優秀な頭を持った“支配ノ象徴”と呼ばれた【アルカイド揺光】欧州水姫。

その欧州水姫の配下兼代役として海域侵攻や欧州水姫の援護など様々な行動を手掛け、尚且つ立ち向かってきた軍を地の果てまで追い掛け、必ず殲滅する残虐な性格から“全滅ノ象徴”と呼ばれた【ベネトナシユ破軍】欧州棲姫。

「どの深海棲艦も一線を超えた戦闘能力と特殊な力を持っている凶悪な強者達ばかりです。特に『テラスティア巨門』戦艦棲姫、この深海棲艦は特に危険で出現率も七壊星の中では一番高く、偵察隊の報告では姫クラスになつていと報告がありました、今は我々も最警戒態勢に入っています」

深海棲艦にはそれぞれクラスが存在する。

日本海軍規定では艦種ごとにイロハ順でネームが名称され、イロハ級と登録されていたが、新たな駆逐艦や戦艦などが現れてからはその順に更新されていた。

またイロハ級には紅い光や黄色の光を纏う深海棲艦が現れ、これらを順に紅い光を上位個体のエリート級、黄色の光を最上位個体のフラグシップ級、その中でも黄色の光を纏いながら蒼い炎を片目に灯す深海棲艦を最上位強化個体として改フラグシップ級として登録している。

更にはその最上位個体を上回る深海棲艦が現れ始め、戦艦棲姫や中枢棲姫の様に明らか人間に近い深海棲艦が出始めてからは改めてネームを変更し、鬼や姫の様な風貌から鬼が特殊上位個体、姫を特殊最上位個体として登録された。

鬼クラスや姫クラスの深海棲艦は水上型と陸上型の二つに別けられ、中でも陸上型にはいくつかのタイプがあり、非装甲型や重装甲型などの異なる個体が存在する。水上型には空母や戦艦などの艦種がハッキリしているが、一部では魚雷や艦載機等を扱えるオールマイティ的な深海棲艦が存在している。

「七壊星は戦闘報告や戦闘記録、目撃情報にて一体ずつ情報が更新、そして各鎮守府に共有されています。七壊星の支配している海域の範囲や我々が制圧している海域の侵攻ルート予測、七壊星の戦術や戦法に対応又は対抗する手段の準備など情報は様々です」

「となると、我々にも情報を共有すればある程度七壊星に対応出来るのかもしれないな」

「出来ればそうしたいんですが、残念ながら七壊星はその都度に情報とは違った戦術や戦法を用いて来る事が殆どなんです。まあ戦う上での基本でもありますよね、知られたのなら別の方法で戦えばいいみたいな面倒な駆け引きをします。また討伐又は撃破した際、七壊星の枠は空くのですがそれでも特殊な深海棲艦が現れては登録されています」

七壊星という特殊危険個体集団及びリストが確立された時から今に至るまで何度か撃破や討伐などで深海棲艦が入れ替わっている。

現状七壊星以外の深海棲艦も実力は十分な程で、近接武器を扱う深海棲艦や特殊な能力を扱う深海棲艦も数多く存在しているのだ。七壊星はその中でも選りすぐられた危険な深海棲艦として登録されている為、より一層の戦力強化が必要になってきている。

「それって確か……太平洋深海棲姫、でしたっけ？」

「はい。封印される前は【天枢】ドゥーベ中枢棲姫と同等の実力を持つとされ、

【天璣】フェクダとして太平洋海域全体を支配していたのですが、米国との共同作戦によって撃破し、現在はアリューシャン列島海域の氷塊の中に封印されています」

太平洋海域の全てを支配していた中枢棲姫の肩代わりとして太平洋深海棲姫がその役を担っており、巨大な白鯨の形をした艦装での戦闘や優秀な作戦指揮能力から支配海域下での猛威を振るっていた。

そこで日本海軍は米国と協力し、ハワイ諸島海域奪取及び太平洋深海棲姫の討伐作戦を実行。

太平洋深海棲姫は何度攻撃しても瞬時に再生する自己再生能力を持っており、日本と米国は互いに討伐は不可能と断定し、意識不能にさせて封印して閉じ込める作戦を考案。

一瞬の隙を見抜いて太平洋深海棲姫を行動不能にさせ、特殊拘束器具によって艤装ごとアリュウシヤン列島海域の前衛基地まで輸送、地下五百メートルの地下監獄にて二十四時間監視下の元で拘束されている。

「また【開陽】^{ミザール}深海日棲姫の配下だった『武曲』^{シーフオウス}雷巡子級をそこにいる木曾さんが見事一人で討伐し、護神厄討艦隊に入るキツカケとなっています。その後新たに駆逐水鬼が『武曲』^{シーフオウス}になりましたが」「幾らでも倒してやるさ、ヤツを殺るまでな」

護神厄討艦隊の『緞』^{レイ}木曾は無名の頃の過去に『武曲』^{シーフオウス}だった雷巡子級を一人で斬り倒している。『武曲』^{シーフオウス}雷巡子級は殺した軍人から鹵獲した太刀を巧みに使い回し、近接武器を使用する深海棲艦の発端となった存在だった。

当時ある深海棲艦を追っていた木曾は因縁の相手だった『武曲』^{シーフオウス}雷巡子級と幾度となく戦闘を繰り広げ、死闘の末に木曾は雷巡子級を討伐。七壊星の一人を倒した実力とサーベルと雷撃による高度な近接戦闘能力によって護神厄討艦隊に選ばれ、『緞』^{レイ}というコードネームを貰っている。

「七壊星にそれぞれ役割とかあつたりしますか？」

「基本的にはその海域を支配する王様の存在として様々な深海棲艦を率いて行動しています。所謂艦隊の司令官の様な立ち位置ですね、水上型を除いてあまりその海域から動く事はありません」

「じゃ、じゃあー！『貪狼』^{ディアボルフ}集積地棲姫とかはどうなの？」

七壊星は支配している海域からあまり動く事は無い。

司令官的立場として深海棲艦の艦隊に指示を与え、制圧海域に侵攻してくる事が殆どだ。

時たまに七壊星の配下が艦隊旗艦として現れる事が多く、その都度護神厄討艦隊が出撃して対応している。

では【天枢】^{ドゥームズ}中枢棲姫の配下である『貪狼』^{ディアボルフ}集積地棲姫はどうだろうか、瑞鶴は手を挙げて鹿島に質問した。すると質問された鹿島は数秒間沈黙し、艦娘達へ背後を見せて答える。

「……残念ながら『貪狼』^{ディアボルフ}集積地棲姫は七壊星の中でも出現率が最も

低く、過去三年に目撃されたのが一回だけという神出鬼没の存在です……そして何故か情報についても足りていないのか開示されていません……」

『貪狼』集積地棲姫は陸上型深海棲艦で長年ハワイ諸島に居座っていたが、太平洋深海棲姫が封印されて以降は殆ど目撃情報が確認されていない。生態や戦闘能力などの情報が全く皆無で、護神厄討艦隊の艦娘でさえも得体の知れない存在として鉢合わせ次第、厳戒態勢する方向でまとまっている。

「深海棲艦の提督が七壊星を護衛につけているのであれば、それは恐らく二人に絞られます。一人目は『巨門』戦艦棲姫、そして二人目は『文曲』戦艦レ級です。『文曲』戦艦レ級に関しては数日前に『？』叢雲さんが目撃し、激闘を繰り広げました」

翔鶴達との戦争後に潮岬町鎮守府の防衛を担っていた『？』叢雲は潮岬町鎮守府から約五十キロメートルの制圧海域にて『文曲』戦艦レ級を確認し、一戦交えている。

金色の十字光と碧緑の雷霆が暗い澱んだ海を舞台に激闘を繰り広げ、そして『文曲』戦艦レ級は突然撤退。叢雲は後を追い掛けようとしたが、畏の可能性も含めて後追いを中止した。

「恐らく『文曲』戦艦レ級は高確率でいるでしょうね。気をつけなさいよ」

「どういう奴なんだ？ 『文曲』戦艦レ級って」

『文曲』戦艦レ級は七壊星当初から決められていて、雷の速さの如く瞬速で海を駆け回る深海棲艦です。眼や艀装から溢れんばかりの碧色の稲妻を操り、砲撃や雷撃、航空機発艦など様々な行動を行います『文曲』戦艦レ級は深海棲艦の中で一番航行速度や行動速度が速いとされる七壊星の一人だ。

出現時には嵐のように天候が悪化し、黒雲から放たれる雷の影となって現れる。

海を雷の如く駆け回る姿から日本海軍では“碧靄”と呼ばれ、七壊星というリストが出来る前は最警戒対象の特殊上位個体として恐れられていた。

「また皆さんもご存知の通りですが『巨門』テラスティア戦艦棲姫は通常の戦艦棲姫よりも特殊で、巨大な腕の艦装を武器に近接戦闘を仕掛けてくる厄介な深海棲艦です。この巨大な腕と拳でどれだけの人間や艦娘を戮り殺しにした事か……世界で最も人類を殺害し、そして最大の被害を及ぼした深海棲艦とも呼ばれています」

潮岬町鎮守府の艦娘達は鎮守府襲撃時にその実力を生で見ている。巨大な腕を使う破壊力抜群の戦闘能力に誰もが必死になって戦ってきた存在だ。

特に金剛に至ってはお互いが瀕死になるまで戦い続けた、まさに因縁とも言える相手だろう。

「なので正直、そちらの金剛さんが善戦したと聞いた時は驚きました。あの深海棲艦を相手に瀕死に追い込めたのはまさに奇跡としか言い様がありません」

「確かにあの時の金剛さんは凄かったですね。まるでの貴女がたの様に素早く駆け抜け、隙を見つけては攻撃、空に飛ばされても砲撃の反動で軌道修正して突撃からの最後は頭突きで致命傷を与える。当時の金剛さんも瀕死ではありましたが、それでも戦えていました」

「天龍さんも凄かったよ!! 南方棲鬼相手にとっても速く動いていたし、最後はあまりにも速すぎて風が遅れて来たんだよ!」

金剛と同じ艦隊でその戦闘を見ていた鳥海は過去の記録を冷静に分析し、あの『巨門』テラスティア戦艦棲鬼相手に善戦していた金剛に改めて感心した。

天龍と同じ艦隊だった大潮も金剛と似たように天龍が南方棲鬼を翻弄し、最後は紫電の如く斬り伏せるといふ御業を成し遂げた場面を見ている。

相手の攻撃を見極める観察力や音速並のスピード、躯体を活かした戦闘や巨体に対応する順応力は護神厄討艦隊の艦娘と比べてみると似ているような気がした。

「成程成程、その時身体とか光っていませんでした?」

「光って……たのか?」

「いや私に聞いても分からないネ」

「いやでもあの時は光ってたよ？　それで君達は改装出来たんじやないのかい？」

「あく確かに」

深海棲艦を圧倒して戦っていた時の二人は確かに身体全体に光を纏っていた。

鎮守府襲撃が過ぎてから金剛は改二から改二丙へ、天龍は改から改二へと改装しており、装備も一新されて新たな力を手に入れている。「それは艦装が改装できる証の様なモノですね。核から作られたエネルギーが漏れ出して光る様に具現化したんですよ、我々がこうやって光を纏う様に」

「改装できる基準とかはあるのか？」

「規定では改装できると定められた練度数を超えている事、艦装にある核から供給されるエネルギー量が超えてしまっている事など色々ありますね」

艦娘には改装という強化手段がある。

建造当初の艦娘を通常段階、

改装できるに値する艦娘を第一式改装段階、

改装できるに値する一度改装済みの艦娘を第二式改装段階として日本海軍が取り決めている。

改装すると名前の後に“改”や“改二”などと付け加えられ、その艦娘の改装段階が簡単に分かるように設定されている。第二式改装段階の上にも第三式改装段階、第四式改装段階が決まっているが改装設計図などの装備が必要となる為、そこまでの段階に近づける艦娘は少ない。

「ん？　でもそれだと既にエネルギー効率は上がってないですか？　超えてしまっているのなら、100%以上になっているんじゃないかと思っただんですけど……」

「そうですね、これに関しては少しややこしいので後から説明しようかと思っただんですが、面倒なので今お話しましょうか」

プロジェクターの光を一旦隠して鹿島はホワイトボードへ注目を集める。

前に話したエネルギー効率の話へと戻し、艦娘達に説明を始めた。「少し話を振り返りましょう。普段艦娘はエネルギー効率を100%前後にし、そして我々は200%前後で活動しています。確かにエネルギーが漏れているという事はその時点でエネルギー効率は100%以上あるという実証になりますね……実はなんですすが性質とはまた別に、艦装自体にもエネルギー効率が存在するんです」
建造された時から艦娘は全ての性質にのエネルギー効率が100%で設計されている。

それは「艦装」にも含まれていて艦装の中に流れるエネルギー効率も100%だった。

だが改装できる段階になるとエネルギー効率は約10%向上し、それまで100%で保っていた艦装に流れるエネルギー効率は限界値を超えて漏れ出してしまう。

金剛や天龍が光を纏っていた原因はその為だろう。

改装された艦装や性質には予め110%のエネルギー効率が回るように計算されており、通常段階では110%のエネルギー効率を、第一式改装段階である“改”からは100%の限界値として上書きしている。

通常段階では110%だったが、第一次段階の改でその数値は100%に設計される設定だ。第二式改装段階とされる“改二”でも同じ設計が施されている。

「じゃあ改装しない方がいいの?」

「いえ、改装した方がいいに決まっています。艦装や装備の性能が遥かに違うので。確かにエネルギー効率がリセットされるのは痛いですが、それは上書きされているだけなので何も問題はありませんよ」

鹿島が説明していた普段の艦娘のエネルギー効率が100%だという意味は、その改装段階でのエネルギー効率を指していた。第一式改装段階でのエネルギー効率の成長、第二式改装段階でのエネルギー効率の成長具合や過程を鹿島は初めて戦った時から全員を見極めている。

艦娘達がどうすれば強くなれるのか、またどう強くなりたいたいのかを

聞き分けてこれからどう成長させていくのか、その練習計画を既に考えていた。

練習巡洋艦である以上はプライドを賭けて徹底的に鍛え上げる。

それが鹿島の本音だ。

「話を戻しますが、深海棲艦の提督であれば七壊星の一人や二人は傍に居る事は間違いありません。もし戦う事があるのであれば私達も参加します。貴女達の事情はともあれ、私達は対七壊星の艦隊として役目を果たさなければならぬので」

護神厄討艦隊の役目とは七壊星に対抗出来る唯一の艦隊、対七壊星の為に誕生した艦隊だ。七壊星が出現する度に近くの鎮守府に所属する護神厄討艦隊の艦娘が出撃し、襲撃中の艦隊を護衛又は戦闘へ入る。

それはこの鎮守府でも役目を務めており、もし深海棲艦の提督に七壊星がいるのであれば事情や戦果に関係なく護神厄討艦隊の艦娘は出撃する権利があるのだ。

「ではこれにて座学は終わります。夕暮れ時ですね、明日から訓練を始めましょう」

156. 朝の早起きが一番ツライ

「提督、そろそろ行かないと」

「つゝ面倒臭いなあ」

医療施設にて提督は島風との面会を終え、講堂の多目的室では艦娘達が鹿島の講義を終えて、次の日を迎えた朝の五時ちょうど。

かなり早朝ではあるが、またいつもの様に仮の執務室にて奥の執務机と椅子へ向かい、提督は堂々と執務机に足を乗せながら欠伸をする。同じく摩耶も隣の机と椅子に向かい、本日の書類を手に取って仕事を確認した。堂々と居座る提督に声を掛け、外に出ようと摩耶は急かす。

「今日だっけ、翔鶴の護送日」

「ああ、もう護送船も停泊してるぞ。隊長には地下営倉から翔鶴を移動させるように指示は出してある」

「んで俺が色々と確認を取り次第、最後まで見届けろと言う訳だな」
「そういう事だ」

今日は横須賀鎮守府へ引き渡す翔鶴の護送日。

空母水鬼と共に生きている翔鶴の調査を始める為、横須賀鎮守府の研究施設まで送る事になっている。

深海棲艦による敵襲で奪取されるのを防ぐ為、護送船の周辺には横須賀鎮守府に所属している艦隊の艦娘達が赴いていた。念の為に護送船の護衛として『？』^{オウゲン}叢雲も参加し、厳重な監視下の元で護衛する事になる。

■大将と■元帥とのテレビ通話後から四日が経っており、日には刻々と過ぎていた。

「ん？ 何だお前も来てたのか、瑞鶴」

港の岸辺へ向かっていた提督と摩耶は先に来ていた瑞鶴を見掛ける。まだ太陽が顔を出さず光を溢れさせている紺色の空の下で瑞鶴は一人、港の岸辺で立ち尽くしていた。

瑞鶴の眺めていた方向には護送船、何の感情も無くただただ見つめている。

「来ない理由がないわ」

「そうか」

「来たぞ、提督」

提督の呼び声に反応した瑞鶴は振り向く事無く口を開いた。提督は瑞鶴の隣まで歩き、共に緩やかな潮風を浴びる。

何十秒後かして特殊な拘束器具に縛られた翔鶴を隊長と共に憲兵隊が移送。ミイラのように拘束された翔鶴を滑車で移動し、その周辺には武装した憲兵達と『?』オウゲン叢雲が警備していた。

「おはようございます白殿、命令通り連れて参りました」

「よし、じゃあ船の中へ入れておけ」

「かしこまりました」

憲兵隊の隊長が改めて提督へ敬礼しながら挨拶する。

本来は起床時間である今の時間だが、提督の命令と聞いてすぐさま起き上がったようだ。

挨拶した後、憲兵達は拘束された翔鶴を船の中へ移送する。

その時――、

「っ!」

「何故……!」

拘束された翔鶴の元へ瑞鶴がすぐさま近付き、顔を包み込む様に両腕で抱く瑞鶴。一瞬の行動に周辺の憲兵や艦娘は驚きの声を上げ、瑞鶴を引き離そうとした。

しかし引き離す前に瑞鶴は翔鶴から離れ、提督の元までゆっくり歩み戻る。憲兵や艦娘は困惑した表情で身体を固まらせ視線を瑞鶴に集めるが、瑞鶴は自身の背中を見せつけては何も言わずに立つままだった。

誰も声を発さずに波の音が際立って聞こえてくる中、提督は隣に立つ瑞鶴を睥睨し、そして面倒臭そうにため息を吐いては一步前に出て口を開いた。

「ああこれはこれはウチのヒステリックアングリーバードがすまなかつたあ、何ぶん自分勝手に動くズボラで間拔けなポンコツでなあ! ポンコツな姉を一度抱き締めたかつたらしい。まあこれが姉妹の

最後のお別れだあ、別にこれぐらいしてあげても何も問題ないだろう」

「……ほら行きなさいな」

提督の長い屁理屈で沈黙の時間が更に長くなる。

『？』オウゲン叢雲がその沈黙を破り、憲兵達に翔鶴を運ばせた。鉄鎖が擦れる音を鳴らして拘束された翔鶴は船の最深部へ収容されていく。

その後護衛艦隊の旗艦である艦娘と確認を取り、翔鶴に関する書類を預けさせて船は出航。提督と摩耶、瑞鶴は護送船を見えなくなるまで見届け続けた。

「……俺に面倒な事をやらせるのが上手くなってきたな瑞鶴」

「ありがとう、提督さん……」

「その顔は、何かを決心した表情かな？」

耳元で囁く様な潮風で二色の髪が靡く。護送船が次第に見えなくなり、瑞鶴は顔を俯き手を握って目を閉じた。

これからの覚悟を決めた様な表情に隣に立つ提督がうつすらと笑みを浮かべて話し掛ける。

「……ええ、そうね。私も……」

話し掛けられた瑞鶴はゆっくりと瞼を開き、徐々に青色を取り戻していく空に向かって顔を仰いだ。昇りゆく太陽の光が山から漏れ出し、潮岬町鎮守府を淡く照らしていく。光に晒された瑞鶴は空を眺め続け、提督へ伝える様に呟いた。

「頑張らなきゃいけないな、って思った」

「……そうか」

昼手前の十一時。

提督は書類を全て終わらせ、摩耶や青葉と共に工廠を訪ねていた。

「明石はいるか」

「はい！ いますよ!!」

工廠の入り口にて提督が明石の名を呼ぶと、ドアの影からひよこっ

と顔を出して明石が顔を出してきた。どうやら翔鶴に拉致された後の散らかった部屋を掃除しているようで、中々片付かないといった様子に見える。

桃明石は一旦掃除を中止して提督の元へ走り寄った。その後から蒼明石も無表情で姿を見せ、桃明石と同じく提督の元まで向かった。「どうされましたか？」

「んーちよっとお前らに開発して欲しいモノがあつてでねえ、あとは後ろにいる不貞腐れたポンコツに話があるくらいかな」

「では前者の方からお願ひしてもいいですか？ もう一人の私も話したいそうなので……それで、開発して欲しいモノとは何ですか？」

提督は背後にいる摩耶へ横目で流し、摩耶はクリップボードから開発リストを桃明石に手渡した。開発する装備とその量数を纏めた書類を桃明石はまじまじと見続ける。開発して欲しいと書かれた装備は索敵能力を上げるモノばかりだった。

「彩雲と零式水上観測機、三十三号対水上電探、ですか……少し時間はそれぞれでかかりますが恐らく失敗する事は無いと思います」

「時間はどの程度だ？」

「そうですね……現在は叢雲さんに頼まれているモノを開発してそれを今は量産中でして……全ての作業が終わり次第、量産も含め全て開発するとなると、一週間〜二週間は必要かと」

「なるほど。明石、俺は近々大規模な偵察任務を発令しようかと考えている。一週間半で間に合わせてくれ」

提督は二週間内に潮岬町鎮守府の艦隊だけである五ヶ所の海域の偵察任務を行うようだ。詳細は話してくれないが、目的は二人の明石でも簡単に理解出来る。提督の声を聞いていた蒼明石は顔を俯かせ、一瞬身体を僅かに跳ねらせていた。

「一週間半、ですか……正直キツイですが、出来るだけ頑張ります！」

「元気があつてよろしい、では頼んだぞ」

「はいー」

桃明石は書類を手にしながらステップを踏んではその場を去っていった。

すれ違いざまに今度は蒼明石が前に出て提督の目の前まで歩み寄る。目と目を合わせ、蒼明石は静かに提督を睨みつけた。

提督は指でついてこいとジェスチャーし、蒼明石を工廠裏へ連れていく。

工廠裏とは講堂と工廠の間に挟まれた小さい空間。

太陽の光が届く事はなく影に染まっており、隙間を通る様に風が少し吹雪いている。

「話つてのは？」

「まずは確認だ、お前が改造した戦闘意欲増進剤で洗脳を施したのは間違いないな？」

「そうよ……アイツらに脅されて、どうしようもなかった」

「じゃあお前は脅されて作った訳だが、その時■■少尉又は空母水鬼は何か言っていたとか分かるか？」

蒼明石は艦娘を洗脳出来る改造した戦闘意欲増進剤を開発し、差別による優遇制度の発端として嚴重に監視されている。今は何気なく桃明石と暮らしているが手錠には思考と感情が読める特殊な拘束器具で、怪しい動きでもすれば即座に電流が流れる様になっている。

その重要人物である蒼明石に提督は脅された当時の■■少尉や空母水鬼の言葉を聞いていたかを質問した。

「何か……？」

「脅された時の言葉とか、盗み聞きした会話とかでもいい。何か聞いていないか？」

狙いはその薬を作るにあたって考えた■■少尉の意図や目的。

もし■■少尉や空母水鬼の最終目標が“全世界の艦娘を洗脳して反逆させる”といった無茶苦茶な計画ならば、実験台として利用された潮岬町鎮守府の艦娘は何か聞いている可能性がある。

その中でも蒼明石は艦娘を洗脳出来る改造した戦闘意欲増進剤を開発した貴重な存在、その時に何か聞いているのかもしれないと提督は考えた。

「早く作らなきゃ殺すとした言われてないから……分からない……」
「青葉」

「……本当です。嘘は言っていないません」

「手掛かりは無しか、まあ仕方あるまい」

蒼明石が情報を持っていない事は予想の範囲内だ。

可能性があるにしてもその数字はとても低く、半ば賭けに出ている様なものだった。

これだけの大規模な計画だ、わざと他人に漏らす方がおかしいと言える。嘘を見抜ける青葉を使ってまで試してみたが、予想通りの答えに全く期待していなかった提督はつまらなそうに仕方ないと答えた。

「……何故私も旧式解体にしなかったの」

「確かお前は龍驤や利根と同じく罪を償いたいと旧式解体を自ら頼んだらしいな。翔鶴、いや空母水鬼か、そいつ等による支配が終焉を迎えた途端、このポンコツ兵器やその他はともかく、散々俺を敵視してた癖に手のひら返して罪を償いたいなどとほざいて無様に後悔してる奴の言い分など素直に耳を傾ける訳が無いだろう」

蒼明石は自身の行いの対価として旧式解体にされるべきだと思っていたが、翔鶴が全責任を負う形で蒼明石の意志は取り消されている。他の艦娘達はともかく何故自分は消されないのか、蒼明石は疑問に思っていた。

提督の言っていた事は全て本当だ、地下営倉で話した時や医務室で暴れそうになった時に言われた事は凶星だった。作らなければ殺すとアイツらに脅迫され、保身に走って改造した戦闘意欲増進剤を開発した。その時は生きる事に必死で他の事など考えている暇は無かった。

目の前で旧式解体法で命を落とす仲間を見続けて、あんな惨い死に方はしたくないと心の底から願っていた。

私は解体された全ての艦娘を見届けている。

だから解体されていく艦娘の表情を今でも鮮明に覚えている。

死の宣告を迫られて暗い解体場所の中へ連れていかれていく艦娘の恐怖に歪んだ表情は思い出すだけで身体が震えるほど目に焼き付いている。

だからアイツらに褒められて差別する側に入った時には思わず安

堵し、そして頼まれたモノを開発する度に信頼されるようになって、私は必要な存在なんだと思い込む様になった。

依存していた。

死への恐怖による一種の洗脳で、二度と失敗や裏切りは出来ないと思っていた。そんな事をすれば私は私がどうなるかなど目に見えている。

最早自身の性格や口調、自我が徐々に透けていくように消えていった。

いつの間にか開発したモノが有効活用されていくさまに優越感を覚えてしまった。

いつの間にか開発したモノを使う場面を見て狂う様に笑ってしまった。

私はアイツらの様に染まってしまった。

死ぬのが怖くて仕方なく開発して今まで生きてきた私だが、私は今死にたいのか生きたいのか全く分からない。

自分の結末をどう決めればいいのか分からなかった。

旧式解体を望んだのは世間や仲間がそう思っているだろうと思っただけで本心ではない。生きたいと思っただけはアイツらの脅迫が薄れてきた事で自由になれたという解放感で充実していたからだ。

だがアイツらの脅迫が薄くなって少しは自由に動けても、そこにあるのは背中に重く押し掛ける罪悪感。死にたいと思うのはただその罪悪感から逃げたいだけなのかもしれない。

もし提督がその感情や思考を知り得てまで私を生かしたのなら、罪悪感と共に生きなければいけないこの世界こそ――、今まで以上の地獄だ。

「じゃあ貴方は私達を生かして翔鶴だけに罪を背負わせたの？」

「背負わせたんじゃない、アイツが自ら背負ったんだ。空母水鬼の作業とはいえ、自分自身でやってしまった事には変わりはないからな。何も出来なかった自分が相当悔しくて、苛ついて、罪悪感で押し潰され

た事だろう。仲間を第一に大切にしていた翔鶴だ、自分だけを犠牲に
してでも仲間を助けたかったんだろな」

翔鶴の例え自身が陥ってでも仲間を助けたいと思う桁外れた仲間
想いの精神力は賞賛に値するモノだ。何があっても貫き通してきた
その信念は世界線が違えば多くの艦娘達から慕われていただろう。

しかしこの現実には全く融通が効かず、必ずしも思い通りにはいかな
い世界で成り立っていて、とても辛辣しんらつ且つ非情である。

翔鶴や提督、他の人類はそんな最悪な世界に生まれ、そして翔鶴は
闇に支配されてしまった。

「何故お前や龍驤達を生かしたかって？ 答えは簡単だ……見せしめ
だよ……今後こんな事が起こらないようにお前らを公開処刑にして
海軍内で辱めさせてるんだ……この鎮守府は狂暴な艦娘がいる恐ろ
しい場所ですよ、と日本海軍の除け者として影でコソコソと言われて
いるだろうなあ」

「精神的にも社会的にも、か……」

「そう！ お前らが俺を嵌めたように俺も同じような手段で制裁させ
てもらったよお。お前らがいるような鎮守府など誰も相手をしてく
れるはずがない、孤立無援になるだろうと思ってな……だがまあ、そ
れが俺に跳ね返ってくる形でこの状況になった訳だが」

本来ならば提督は横須賀鎮守府に異動して潮岬町鎮守府とは一切
関わらないと思っていた。だが不慮の事故によるトラブルで新しい
軍人を手配するまでの期間は提督が運営する事になっている。何故
■元帥が提督を潮岬町鎮守府に居続ける事を継続させたのかは謎
だが、その理由も提督の中では判明しつつあった。

「新しい軍人の手配までの期間中は訳あって特別にお前らに協力して
やろうと思っている。しかも被害者である俺に償おうと尽くしてく
れるからねえ、こんなおいしくて甘い汁を吸わない訳が無いだろう？
？ 俺の掌で綺麗に踊ってくれてありがたい限りだよお」

「……」

「何も言い返せないだろうー！ 何故ならお前らと俺は似た者同士
で、艦娘の風上にも置けないクズなんだからなあー!! どうだあ〜？

俺と同じクズになれた気分は？ さぞかし胸糞悪い事だろうなあー！」

何も言い返せない蒼明石を前に提督はあからさまに煽り倒し、子供の様にはしやぎだす。

そして指を差して喋りながら蒼明石に詰め寄った。

「こうなった以上はお前ら全員死ぬまで罪を背負わせながら俺の忠実な駒として働かせてやる!! 自害や特攻みたいな死などさせてたまるか、その罪を洗い流せる時と深海棲艦との決着が着くその時まで一生戦わせてやるからなー!! かくくくごうしたまえくく!!」

提督は一文字ずつ青葉と蒼明石へ指を差し、最後に提督は指で蒼明石の額を押し出した。

指を差された二人は呆気に取られて言葉を失う。

「以上だ」

前髪を直して軍帽を再度定位置に被った提督は言葉を吐き捨て、その場を去っていった。

摩耶と青葉は提督についていき、工廠裏は蒼明石が取り残される。

我に戻った蒼明石は提督の言葉を思い返して顔を俯き、工廠にある自身の部屋へ戻った。

「個人的な質問なんですが、何故明石さんが希望としていた旧式解体にしなかったのですか？」

講堂の廊下内にて個人的に気になった青葉は提督に質問した。

質問しても答える気の無い提督は口を閉じている。それを見た摩

耶は仕方なく提督に話し掛けた。

「提督、蒼明石を旧式解体にしなかった理由はもう一つあるだろ？」

「当然だ、艦娘を洗脳させる薬を開発出来る程の高度な開発技術を持った艦娘をみすみす逃す訳が無いだろう。力は使いようだ、別方向へ効かせればこちらが有利になる」

「でももし……また何かあれば、その時は……？」

青葉や提督とて蒼明石の危険性は十分に承知している。いくら高度な開発技術を持っていても人格に難ありであれば、いつ何が起こってもおかしくはない。

その時提督はどうするのか青葉は気になっていた。

黙々と歩き続ける提督は青葉の方へ顔は見せずとも少し振り向く。
そしてまた正面を向いて提督は口を開いた。

「……その時は徹底的に処罰を下すまでだ」

157. エネルギーチャージはお早めに

「では早速始めましょうか」

翔鶴を護送船に乗せて四時間が経過、朝の九時になって艦娘達は広場に集まっていた。

これから行う訓練の為に誰一人として寝坊はしておらず、龍驤達や摩耶を除いて殆どの艦娘が参加している。

■少尉の復讐の為に護衛でいるだろう七壊星を打倒する為、亡くなっていた艦娘達の弔いの為、数え切れない程の恩恵がある蒼色に報いる為、そして成長へ導かせてくれた提督へ犯した罪を償う為に戦わなければならない。

残された時間は不明確、のんびりと時間を潰している暇は無く一刻を争う事態だ。

「最初に訓練をする前に前に教えたエネルギー効率をじかに感じてもらいましょうか。今自分の中に流れるエネルギー効率がどんな感じなのか、把握すれば凡そは掴めると思います」

鹿島は最初に身体の中に流れるエネルギー効率を感じてもらおうと背後のダンボール箱からある物を取り出した。

鹿島が手に持っているのは手首や腕にかけるようなブレスレット。とは思えない、アクセサリーとは程遠い鋼鉄製の厚いリングだ。しかも重量は凄まじく、装置すれば突然手首が鉛になったのか錯覚してしまうレベル。

まるで拘束器具の様な物騒な物に艦娘達や鹿島でさえ引いてしまっていた。

「これは蒼い方の明石さんに特注で作ってもらった特殊な感知器具です。手首や足などにつける物でエネルギー効率の流れを感じる事が出来ます」

「あの明石が……?」

「いやはやあの明石さんは素晴らしいですね、設計図を共有して見ただけで構造を即座に理解して簡単に開発出来ちゃうんですから」

この特殊な感知器具は蒼明石が二日半で量産も含めて開発した代物らしい。

最初は開発出来て一日で精々十二、三個だと思っていたが、蒼明石はそれを遥かに上回って三十個以上量産に成功していた。

流石に鹿島や『?』^{オウゲン}叢雲も開発技術とその効率に驚き、蒼明石をただならぬ艦娘だと思い知る事になった。

「これを手首に嵌めますと、恐らく流れの感じが分かるかと思えます」「んっ、あ、こういう感じなのですね」

鹿島は一番手前にいた朝潮の手首に感知器具を装着させる。

直後朝潮は身体を少し跳ねらせながらもエネルギー効率の感覚を感じる様になった。最初は少し身体が震えるも次第に慣れていくらしい。

例えるならば手首に見える血管に指を当てると心臓の鼓動と共に血液が流れているのが分かる様な感覚だ。ジン、ジン、とエネルギーが身体中を巡り巡っていくのが実感出来る。その感覚に合わせて感知器具が僅かに音を鳴らして振動していた。

「変な感覚だが、分かりやすいな」

「艦装を展開した状態でこんな感じか」

「その感覚が普段のエネルギー効率です。その振動が早ければ早いほどエネルギー効率は上がっている証拠になります」

「鹿島さんはつけないんですか?」

「つけるわけないじゃないですか、こんな気持ち悪いモノ、一々感覚と振動がうるさくてたまりませんよ」

辛辣な言葉を並べるのであれば鹿島の身体の中ではエネルギー効率が凄まじく高まっている証拠として見て取れる。流れる感覚と振動が早ければ早いほどエネルギー効率は高まっていく、つまりは鹿島が言っていたように気持ち悪く感じてしまうまでが強さの目標だろう。

「じゃあ次に皆さんでこれを食べましょうか」

「げっ、それって固形食じゃ……」

鹿島が次にダンボール箱から取り出したのは味の無い固形食が詰

まれたパツク。

艦娘は身体の中でエネルギーが生成される為に普段は食事を必要としない。

この事実を知ってもなお兵器として運用されていた艦娘には、発見時に一部の艦娘が所持していた固形食を妖精達が開発し、全鎮守府にてその固形食を活用していた。固形食はパサパサとしたビスケットの様なスティックタイプで主にエネルギー効率の向上を計るモノ。

食べれば戦闘によって溜まった疲労は回復し、あらゆる状態異常も回復させる働きがある。

全ての性質へ流れるエネルギー効率が上昇した事による作用で持力や感覚を中心に核が再活性化する仕組みらしい。

エネルギー効率を見ていなかった当時は艦娘の疲労回復用に使われていた為にそれほど注視される事は無かった。現在では作られる料理用にペースト状のモノへと開発されており、全鎮守府にて採用されているが一時的なエネルギー効率の上昇は少ない。

「この固形食は元々疲労回復の為に開発されていたモノなんです、実はエネルギー効率の上昇による効果の一部に過ぎず、疲労回復の他に全ての性質へ流れるエネルギー効率を一時的に高めてくれるモノなんです。恐らく毎日食堂で厨房にいた鳳翔さんはその効果は深く知らずとも、エネルギー効率が上がる事については知っていたんじゃないでしょうか？」

「そ、そうですね……■大佐に渡された際にそのような事を仰っていたのを覚えています。知っておいた方がいいと言われて覚えてました」

「なるほどなるほど、流石は鬼の大佐ですね」

この固形食は艦娘におけるパワーアイテムだという事を■大佐は事前に知っていたようだ。

深海棲艦との戦争史において有名だった『アイオーン・プロトポリア永遠なる最前線』と言われていたビスマルク諸島海域とソロモン諸島海域を中心に活動する

【ミザール開陽】深海日棲姫と【メグレス天権】深海鶴棲姫の戦争を繰り広げ、南方海域を中心に南方の総司令官として君臨する■大佐は日夜戦力強化に

力を注ぎ込んでいる軍人としても有名である。

艦娘の戦闘能力の上昇や戦術の幅を広げており、最初に艦娘の近接格闘術や近接武器技術を提言した人物だ。

後にその近接戦闘技術が深海棲艦との戦闘において十分なまでの威力や殲滅能力に適している事が判明し、近接格闘術の訓練が注目されている。

「で、この固形食で何をやるんだ？」

「もしかして固形食による一時的なエネルギー効率の上昇中に訓練を受ける事で……えーつと……なんて言えばいいのかな……」

「時雨さんの言う事は当たってますよ！　そうです！　一時的なエネルギー効率の上昇時を見計らって訓練を行い、その上昇による限界値が普段の限界値である事を核に経験させ、学習する事で思い込ませます。そして徐々に記憶として覚えさせいく。これらを実戦形式で行っていきます」

訓練を行う前に固形食を食べてエネルギー効率を一時的に上昇させ、その限られた上昇時間の中で訓練を受けていくという方法だ。

固形食によって一時的にエネルギー効率が高まった状態で実戦形式による訓練を行い、その戦闘でのエネルギー効率の状態を普段のエネルギー効率の状態と学習させ思い込ませていく。

この方法を毎日行う事で核が戦闘でのエネルギー効率の状態を徐々に記憶し、僅かに前の自分とは違った戦闘能力を得る事が出来るそうだ。

「地道ではありますが強くなる方法では一番に適した方法でもありません。現に『？』^{オウゲン} 叢雲さんは元々エネルギー効率が限界値を超えていてもこれを五年間、今でもずっと続けていますので」

「五年間も……！　それは凄いな……」

「じゃあ興味半分で聞くけど、叢雲のエネルギー効率はなんぼなんだい？？」

『？』^{オウゲン} 叢雲は建造された当時からエネルギー効率に恵まれ、定められた練度とは比べ物にならない程の戦闘能力を有していた根っからの天才だった。

決して自身を驕る事や他人を見下す事は一切なく、共に戦う仲間を励まして応援したり、誰かに妬まれて喧嘩ごとになっても自身の過失を認めて謝ったり仲を直そうと、太陽の光の様に暖かい天真爛漫な性格から仲間深く慕われていた。

しかし深海棲艦による小笠原鎮守府の奇襲攻撃により、大破状態だった叢雲は意識不明の重体だった憲兵一人を残して仲間全員を喪失。

悲しみに打ちひしがれた叢雲は強くなる事を決意し、元々才能はありながらもその才能を伸ばしていく修羅の道を選んだ。

毎日訓練と戦闘を怠らず、毎日汗だくになって戦い続け、やがて最強の代名詞とされる護神厄討艦隊に編入した後に旗艦に選ばれた。なお選ばれた後でも叢雲はひたすら訓練と戦闘を今までを含めて毎日行っている。

その叢雲は訓練を行う前に広場のベンチに座って鹿島の話聞いていた。

突然響に興味半分で質問され、半目で睨みながら口を開いた。

「誰にも言っていないのに教える訳ないでしょう」

「噂ではそろそろ五百を超えるところとか聞いた事ありますね」

「ぐ、五百!!!」

「化け物かよ!!!」

鹿島が説明した通常段階でのエネルギー効率^{レリョウユウ}が200%である事や例として出された『金剛が350%〜250%のエネルギー効率を持っている事よりも遥かに上の限界値を叢雲は常に高めているらしい。あくまでも噂程度なので信じれるかどうか分からないが仮に本当だとしたらまさに最強と呼べるだろう。

「嘘よ」

「嘘かよ!!!」

「という名の嘘よ」

「どっちだよ!!!」

「ねえ振り回され過ぎじゃない?」

真偽かどうか分からない『?』^{オウケン}叢雲のエネルギー効率の限界値が気

になる天龍。

叢雲は弄ぶ^{もてあそ}ように嘘と連呼し続けて意味が分からなくなる様に仕掛けてきた。

「つて事で早速実戦形式でやってみましようか。因みに言っておくけど実戦形式と言ってもただ単に戦う訳じゃないのよ？ 実戦での相手は私達、一対一で直接戦うわ。装備はいつも通りだけど模擬弾薬は使わない……予定のハズがまあ色々あつて今は模擬弾薬を使用するわ」

「制限時間は五分間、その時間内に私達に何度でも全力で挑んでください。模擬弾薬を使用する為戦闘の迫力があまり乗らないと思いますが、それでも私達は貴女達を殺す気で戦闘に挑みます。ですので貴女達も全力で……いや、私達を殺す気で戦ってください。半端な戦い方や全力では無いと判断した時点で貴女達を即座に無力化させますのでご注意ください」

「精々死なない事ね」

『？』叢雲はベンチから立ち上がり、金色の槍を突き出して注意するよう呼びかけた。半分脅しにも聞こえた様な気がしてならず、艦娘達は内心不安になってしまう。護神厄討艦隊の艦娘達の前に出て艤装を展開し、それぞれ違った色の光を纏い始めた。

「覚悟はいいですか？」

「泣き喚く涙は残ってるかな？」

「医療器具の用意は済ませただろうな？」

「入渠施設で高速修復材に浸かり続ける心の準備はオーケー？」

「……外へ、出ないのでですか？」

地下営倉の奥深くにある特別な牢屋にそれぞれ一人ずつ四人が収容されていた。特別な牢屋と略称されているが本来は懲罰房の様な部屋で、普通の牢屋よりも衛生環境が酷く血生臭いにおいが漂っている。

翔鶴に加担していた龍驤、利根、那智、葛城は修理後に特殊な手錠

で拘束され、その牢屋に今も自主的に居続けていた。地上へ出たのは提督に呼ばれて以降でそれ以外は全く無い。

提督の処罰が下された後でも引き続き憲兵隊隊長は収容された四人を毎日警備し続けている。時々鉄格子越しから目が合う程度で何の関わりも持たなかったが、隊長は龍驤達に少し疑問に思った事があり、思い切って龍驤の前まで座って声を掛けてみた。

「仕事を増やすようで悪いんやけど、ウチらはここにいなきやいけな
いんや」

「いえ構いませんが……」

隊長と目が合った龍驤は鉄格子を挟んで話をしていく。龍驤達は自身の行いを考えて自主的にこの営倉にこもり続けていた。提督や『^{オウゲン}?』叢雲に指示されて入った訳では無く、自らの意思でこの牢屋に入っていた。

「……分かつとる。何でウチらが処されないのか不思議なんやろ？」

「いえ……違います」

「あー！ 外れてもうたか、そりやすまんなあ……まあ、色々と感情の整理が出来ないのは分かるで」

龍驤はいつもの様に元気に振る舞う。

隊長の表情からして既に翔鶴や龍驤達の事情、潮岬町鎮守府の真実を知っているようだ。

隊長は少々顔を俯き、素直に思った事を龍驤へ打ち明けようとしたが上手く言葉が出てこない。

その様子を見た龍驤は隊長の思惑を察して自ら口を開いた。

「……言いたい事も分かる。確かにウチらは薬の影響を回避し続けて唯一操られずに済んだからな。何であんな事やこんな事止めなかったんやー、って普通の生き物は考える事や」

「貴女がたは脅されていたらしいですね。仲間を守る為に自ら犠牲になった、と個人的に考えていますが」

「そうやな、ウチらは脅されてた……何も出来なかったんや……勿論色々方法は考えてみたものの、100%仲間を守るかどうかは別で、翔鶴はどうしても全員を守りたかった」

「だが、それでも守りきれなかったと……」

隊長の繋いだ言葉を聞いて龍驥は軽く頷く。

穏やかに微笑む表情を見せる龍驥の握った手は今にでも暴れ出そうなほど震えていた。拘束器具の鎖が左右に揺れて金属同士が触れる音が聞こえる。

龍驥の中で悔やみきれない後悔と破壊衝動に駆られそうな憤怒が入り乱れているのがよく分かった。

「トロッコ問題って、知ってるやろ？ あれと似たようなもんや……一人を助ける代わりに大勢を殺すか、大勢を救う代わりに一人を殺すか。翔鶴は迷う事無く犠牲が少ない方選んだ。ウチらも不安な所はあったがそれでも頑張ってみた、そして選んだ結果がこのザマや!!」
龍驥は喋りながら立ち上がり、最後に大声で叫んで頭を壁に衝突させた。

頭を壁に引き摺りながら再度腰を下ろす。

誰も ■■少尉の蛮行を簡単に止められる訳もなく、差別する側になりすまして仲間を守る方法で戦い抜いた。

差別する側や差別される側、勿論■■少尉にも悟られないように息を潜めて何とか守り抜こうとした。

■■少尉を言葉で上手く騙して艦娘の解体を防ぎ、暴力を振ろうとした艦娘を落ち着かせ喧嘩を無くすなどとやれるだけの事はやった。

だがそれでも全員を守り抜く事は難しく、仲間を失ってしまった時は誰もいない部屋で己の無力さを嘆く。

翔鶴は少ない犠牲は仕方ないモノだと、これから犠牲を出さない様に正当化して目を逸らし、龍驥達もいつの間にか自身を正当化していた。

「ほのかに感じるなどは思ってたけど、まさかな……翔鶴が……深海棲艦に……操られてたなんてな……!!」

龍驥は壁から床へ頭を移動させ、若干涙ぐんだ声で嘆いた。

龍驥達は翔鶴の中に空母水鬼がいた事を知らない。

勿論いつ潜んでいたのかも分からなかった。

翔鶴の中で空母水鬼が操っている事も知らず、龍驥達は仲間を守り

続けていたという事はまた龍驤達も翔鶴に騙されて空母水鬼に操られていた事になる。

翔鶴は何も言い出す事が出来なかったのかもしれない。

空母水鬼が隠す様に脅せば簡単な話だ。

龍驤は翔鶴にもし計画が崩れたらどうするか聞いた時、翔鶴は最終手段を投じると言っていた。まさかその最終手段が自身の中にある空母水鬼だったとは思わなかった。

「ウチらって最悪やなあ……ホントに……」

別の牢屋にいた利根達も顔を俯き、龍驤と同様唇を噛んで悔やむ。

今までやってきた事は間違いだと薄々気付いてはいた。

これ以上犠牲を出さない為だとしても少なからず罪悪感の心の奥底で密かに積もっていた。

例え忌み嫌われ敵になつてしまったとしても、仲間が生きているのならそれでいいと自分に言い聞かせていた。

■少尉に脅されて何年もの月日が流れ、その脅迫から一時的に解かれた自身の中に残っているのは、今までやってきた事の罪悪感。自身の尊厳や仲間との関係、捨てる物は捨てて生きてきた。一時的に自由にはなれているが、その自由という感覚を押し潰す程の罪悪感が肩に重く押し掛ける。

死ぬ事も許されずただ何もしいまま生きている自分に意味はあるのか。

もしかしたら提督はこうなる事を考えてわざと生きる様にしたのかもしれない。自分達の死にたいという要望を無視してわざと生き長らえさせ、罪悪感に押し潰されながら生きていく。

それが自分達の処罰なのだろう。

「……ごめんな、勝手に泣き喚いて。こうでもしないと保っていられへんのよ」

「いえ……大丈夫です……」

数分間か泣いた龍驤は落ち着いたのか、手や腕で拭えない代わりに膝で涙を拭い隊長へ謝罪を込めて話し掛ける。一連の光景を見ていた隊長は言葉が詰まったのか同情するかのように返事をした。

出来れば何かしら言葉を掛けてあげたいが立場から考えればそう簡単に言うのは難しい。

仮にも龍驤達は罪を犯した犯罪者、そしてその犯罪者を取り締まり、規律を正して治安を維持するのが憲兵である自分。

本来であれば犯罪者に同情する余地など無い。

それは隊長の中でも分かりきっている。

「……一つだけ、言ってもいいでしょうか」

その場から立ち去ろうとした隊長が扉を開けようとドアノブに触れた瞬間、顔を見せないまま龍驤達へ伝える様に口を開いた。龍驤達は予想しなかった事に思わず声を漏らし、戸惑いながら了承の声を挙げる。

「……確かに貴女がたは罪を犯しました、それは断じて許されるものではなく然って処罰は受けるべきです」

隊長は顔も見せないまま顔を仰ぎ、途切れ途切れに光る蛍光灯を見続ける。

「ですので、これからは考えて下さい。道を踏み外さぬように……」
そう言い去って隊長は懲罰房がある部屋から消えていった。

「失格だな……私も……」

「いや〜大変ですな隊長も」

部屋を抜け出して地下営倉の廊下を歩いている最中に特定要注意艦娘の警備部隊に所属する部下とすれ違う。少し時間に余裕があると思っただのか隊長と肩を並べて歩き出し話しかけてきた。堂々とサボろうとする部下を前に少し溜息を吐きながらも仕方なく隊長は口を開く。

「何がだ。特に大変という訳でもない、警備を引き続き頼むぞ」

「了解です！ あ、そういうえば隊長は大本営の方にいるお兄さんと連絡を取り合っていたりするんですか？」

「……何故それを？」

「いやいや隊長！ そろそろお盆ですよ？ 家族と連絡取ったり会ったりしないんですか？」

「しないな」

部下の言葉で季節的にもお盆だと隊長は手を顎に乗せて考えるような仕草をする。残暑が厳しく猛威を振るう夏にもお盆の季節が来たように、隊長は部下の有給休暇やお盆休みの事で考えていた。

通常であれば地元にも帰省して家族と顔を合わせるところだが隊長は家族とさらさら会う気が無いらしい。まさかの答えに部下は聞き逃したのかともう一回復唱するように質問した。

「え？　しないんですか？」

「ああしない。兄とは色々あつて疎遠になつてるからな、今更会うにしても気まず過ぎる」

「あら〜それは残念ですね〜」

「そもそも私に家族はいないのでね、関係のない話だ」

「でもお兄さんがいますよね？　確か海軍のお偉い人の娘と結婚して家庭を持つてゐるって話聞きましたけど、もしかしてそれで嫉妬してます？」

部下が試すようにからかつた途端、隊長は露骨に嫌な顔をして部下の方へ振り向いた。

普段冷静沈着な隊長の意外な素顔を見れた事に部下は歓喜するも機嫌を損ねた隊長を見て心の中で自制する。

「……んな訳ないだろう、勝手に考えるな。それにこんな世間話を私にしている暇があるならさっさと持ち場に戻れ。減給するぞ」

「それパワハラっすよ？」

158. 風吹く島は未だ日差しに照らされず

太陽の陽射しが満遍なく降り注ぐ外では艦娘達が実戦的な訓練をしている。

時々轟音や砲音が終始鳴り響き、訓練が激しさを増しているのがよく分かった。

病室では休療を続けている島風が窓から映る風景を茫然と眺めていた。

建設中のを含めた寮の建物のある細長い広場から、そして講堂と工廠の間の先に挟まれた青い海を凝視し続けていた。

ベットサイドモニターから一定の感覚で電子音が鳴り、打たれた点滴バッグから少しずつ薬剤が水滴となって落ちていく。その度に太陽の光が屈折し、純白のベッドに淡く光り映った。

「島風ちゃん」

「あ……先生……」

重量感のある鋼鉄製の横引きドアを静かに引きながら ■ 医師が現れる。島風の様子を見に来た ■ 医師は笑顔で気さくに話し掛けてきた。

「外、うるさかったりする？」

「いえ……それほど気にはしません……」

訓練による衝撃波で窓や建物が揺れるかと思いきや、案外耐震性能には優れていて多少窓が少し揺れる音が耳を澄まさないで聞こえない程度だ。

「島風ちゃんって好きな事とかあったりする？」

「好きな……事、ですか？」

「そうそう！ 何でもいいのよ、例えば私なら園芸が好きだったりとか、あと絵を描く事とかね。美味しい物を食べるのも好きだなあ……島風ちゃんはどうかかな？」

■ 医師は友達のように島風へ好きな事を教えてきた。

何の偽りもない誰でも受け入れてくれそうな優しい表情と声に島風は少し動揺する。

島風は■ 醫師に好きな事を聞かれ、考える様に顔を上に向けて首を傾けた。

「あ、私は……走るのが好きでした」

「……いいねえ……私も小さい頃は走るのが好きで陸上やってたなあ」

「陸軍出身ですか？」

「ふふっ、そんな感じ」

陸軍出身と予想外な事を言われて■ 醫師は思わず笑ってしまう。島風の少し間違った答えに■ 醫師は否定の言葉は入れず、敢えてあやふやな答えで誤魔化した。

「他に好きな事とかある？」

「……」

「あーじゃあ変えようか！ 戦う事以外でやりたい事ってある？」

本当に好きな事が走る他に無いのか島風は黙り込んでしまう。他に好きな事が無いほど速さに関して事は大好きだったのだろう。

そこで■ 醫師は質問の内容を好きな事からやりたい事へ、少し変えて島風に再度聞いてみた。島風はまた顔を上げて考え出し、数秒後何か思いついたのか■ 醫師に問い掛ける。

「あの……園芸って、何ですか？」

「おっ園芸に興味あるのかな？ そうだね、簡単に言うとな植物を育てて楽しむ事かな。花や野菜を育てて庭を美しくしたり、自分で育てた物を食べるとか結構やって楽しいよ」

「じゃ、じゃあそれがやりたいです……」

■ 醫師は島風が園芸に興味を持ち出したのか、誰にでも伝わる様に簡潔に答えた。

それを聞いた島風は苦笑いしながら自身のやりたい事だと■ 醫師に伝える。

しかし■ 醫師は目に見えて島風本人がやりたい事ではないのは分かっていた。自分自身のやりたい事など存在せず、代わりに■ 醫師が好きな事に興味を示したフリをして機嫌を取っているだけ過ぎない。

本当は何もやりたくない、何も考えたくない逃げたい気持ちで溢れていた。

現実を直視するのが恐怖で堪らず、何もせずに呆然としている時間がとても楽でしかなかった。

だがそれでも時たまに自分自身が現実逃避している事を無意識に考えてしまう。

目の前にある未来へ歩む道があやふやで、一寸先も見えない濃い霧に囲まれているような不安が募り積もっていくような気がした。

独りでは到底歩む事すらままならない、いつ襲いかかってくるか分からない不安という名の恐怖が島風の心を深く海の底へ閉じ込めていく。

ここまま何もしなければ不確定な恐怖に怯える必要は無い、難しく苦しい事を考える必要も無い。

ただブーツと窓の景色を眺めていればそれでいい、そう思っていた。

「……んじや私は、島風ちゃんと友達になつて仲良くなりたいな」

「私と、ですか……？」

数十秒間か沈黙に包まれた病室で ■■ 医師がその沈黙を破る。ベッドガードに肘を着き、手のひらで頭を支えながら ■■ 医師は曇りない笑顔で島風に仲良くなりたいと伝えた。

予想外の答えに思わず島風は返事をしてしまう。

こんな自分と仲良くなりたい人間など初めてで、まさかこの世に居るとは夢にも思わなかった。

「うん。どうかな？」

「いえ……別に構いませんが……何故そこまで私なんかと仲良くなりたんですか？」

「私にとつて島風ちゃんは必要な人だから、かな」

「……えっ……？」

島風の問い掛けに ■■ 医師は考える仕草も無く島風が必要だとすぐに答えた。

あまりの速さに一瞬島風は聞き逃して拍子抜けした表情で声を漏

らしてしまおう。

■ 医師は島風の表情を見て何故そんな表情をするのか分からないと言つていそうな不思議に思っている顔だった。自分に価値は全く無い以上必要とはされていないと思ひ込んでいた島風にとって

■ 医師の言葉は理解するには時間が掛かり過ぎる。

島風はもう一度確かめる様に

■ 医師と同じ言葉を言い出した。

「私が、必要……ですか？」

「そう。こうやっておしゃべりする時間とか、これからになるけど一緒にやりたい事をしてみたいなあとか、私にとって島風ちゃんが必要不可欠な存在だからかな」

島風が必要な理由を率直に伝える

■ 医師。

それはとても和ましい事ばかりで普段でも出来るような単純な理由ばかりだった。

誰にでも出来るような事を何故自分でなければダメなのか、何故そんな事を飄々と口に出せるのか。

島風は全く分からなかった。

「あ、勿論戦いはやりたくないよ？ 私と島風ちゃんは人間だし、限界は人それぞれだからね……出来ることなら……島風ちゃんのような可愛い娘達には戦わせたくないな、って思う」

■ 医師は天へ祈る様に手を握り、顔を俯かせ艦娘に対する思いを少しだけ口に出した。

その

■ 医師を見た島風は困惑し切った表情で自分自身が何なのか慌てる様に訴える。

「でも……私は……兵器、ですよ……？ 人間なんかじゃない、戦わなければ価値なんてないモノなんです！ 先生だって自分の価値を考えた事は無いんですか!？」

今まで島風が

■ 医師の答えに疑問や理解が追いつかなかつた訳には意味がある。

島風が所属又は轟沈した時代は兵器派思想が中枢を占めていた軍の時代であり、人間派の声は雀の涙程度で艦娘は兵器だと定められていた世界だった。

当時は少なからず自身も兵器だと思い込んでいた艦娘も存在し、島風もその一人故に思想の食い違いが発生。時は流れて島風は敵によって轟沈、意識を失い続け島風が目覚めた時には既に五年も時間が進んでいた。

「無い訳ないよ。私だって島風ちゃんのように何度でも考えた、そして探し続けてる……今もね」

「え、今も……？」

「そう私も皆も、自分の価値を探し求めながら生きてるの。この価値は無くなった、じゃあ次の価値あるモノを探しに行こうって。誰しも皆が永遠に自分だけの価値を持って生きている訳じゃないの」

自身もその価値になるモノを探していると■医師はキツパリ答える。島風と同様に価値になるモノを探している同じ人間だと唱えた。島風は自身と似た存在である事に少し■医師に対する感情が変わりそうになる。

「自分に価値なんてない、確かに今は無いかもしれないけど探そうと行動に移せば必ず見つかる。価値って難しい事のように思われてるけど実は何だっていいのよ？ 誰かの役に立ちたいとか、誰かを助けたいとか、誰かの支えになりたいとかちよつとした出来事や簡単な事でもいい。それだけで人はまた価値を得て誇る事が出来る」

■医師は島風の手を優しく両手で握り、島風の目を見続け一切逸らさない。握られた両手は思わず握り返してしまいそうなほど心地良さのある暖かさで、じんわりとその暖かさが自身の冷たい手肌に染まっていくのを感じた。

「でもそれは一人だけじゃ出来ない事や乗り越えられない事もある。今こうして泣いている島風ちゃんのように、中には不安が募って価値を簡単に探せない人もいる。だから一緒に探そう、私と島風ちゃんの価値になるモノを」

「一緒に……探す……？」

「そう！ 島風ちゃんが自信に満ち溢れる様に私がサポートする！
どんな事を言ってもやっても構わないよ、私は島風ちゃんの為なら何だってやるんだから」

今こうして自身のあり方に悩み続け、途方に迷う島風に手を差し伸べようと■ 医師は堂々と告白した。一瞬の曇りもない、迷いすらない■ 医師の言葉に島風は感極まって歯を食いしばる。

それは一寸先も見えない濃い霧の中で希望となる一条の光が差し込んできたようなもの。

孤独に彷徨う島風に手を差し伸べ、共に探そうと傍にいてくれる人間がいる事を島風は初めて知った。

「だからこれからそうする為にも、お互い信じ合わないとね。私は島風ちゃんを信じてるよ」

例えそれらが慰める為の偽りの言葉だとしても、どこか信じてほしいと思ってしまう自分がある。何も無い自分に手を差し伸べようと

■ 医師は何の躊躇いも無く素直に思っている事を言葉にした。

いつの間にか無意識で自分は助けてと周りに訴えていたのかもしれない。

心では何もしたくないと虚無になって呆然としていても、心の奥底では誰かに救いを求めている。

その僅かな気持ちも■ 医師は汲み取り、自分の為に頑張ると言ってくれた。

「……ちよつと呼ばれちゃった。また後で来るからね、何か言いたい事とかあれば横のボタンで連絡して？ すぐに私が駆けつけるからさ……じゃあ、またね」

途中で■ 医師の携帯電話が鳴り出し、■ 医師は携帯電話を開いて誰かと話をする。誰かに呼ばれてしまったのかこの病室から立ち去るようだ。■ 医師は島風の頭を撫でながら病室の仕組みを簡潔に伝える。何かあったら連絡してほしいとベッドの横に小さなボタンが用意されていた。終始笑顔を崩さずに■ 医師は病室を去っていく。

「……価値を、探す……か……」

島風はその時、久しぶりに窓から目を離した。

「初戦、『緞』対木曾さん。構えてください……」

初戦は自ら名乗り出た木曾と『緞』木曾という同じ艦娘同士の実戦。演習などで同じ艦娘に遭遇する事は多々ある為にさほど気にする事では無かったが、傍で記録係として見守っていた灰色は少し違和感があった。

さぞ当たり前の様に思われているが、これは明らかに人間同士であればドツペルゲンガーだ。不思議に思わない方がおかしいとも言える状況で顔色一つ変えずに戦おうとしている。

「……始めー」

鹿島の声とホイッスルによって開戦の火蓋は切って落とされた。

高鳴る音と同時に両者構える。

木曾はサーベルを鞘から抜き、太陽の光を浴びさせた。

「ツ……う？」

木曾が『緞』の姿を見て違和感に気付く。

『緞』の軍刀は翡翠色に煌めいていた。

その軍刀を天に突き立て、『緞』は不敵な笑みを浮かべる。

「本気で来い、一瞬でも気を抜けば……叩き切るぞ」

「上等ツ……!!」

木曾は急発進急加速。

砲撃や魚雷の命中率を上げる為にある一定の距離を取って海を駆けっていく。

壁のような水柱を後方へ立てさせながら、『緞』の周辺を無作為に走行した。

それは相手に行動のパターンを掴めさせない為か、それとも次の行動を予測させない為か。

水柱を立てさせ『緞』を錯乱させていく。

そして木曾は『緞』に向けて砲撃。

『緞』は砲弾を斬り伏せて破壊、爆煙で視界が悪くなる。

爆煙の中心で『緞』は突っ切る様に前進して跳躍。

爆煙を潜り抜けた先には――、

「来たなツ!!」

事前に跳躍し、サーベルを振り下ろす姿勢で待ち構えていた木曾がいた。

仰向けの体勢で身体で隠れていたサーベルを力いっぱい振り下ろす。

が、『緞』はそのサーベルを翡翠色の軍刀で弾き返した。

弾き返された木曾は不安定な体勢になる。

『緞』はすかさず身体を回転させ、回し蹴りで木曾を蹴り飛ばした。

木曾は隕石のように海面に衝突。

大きな水柱が立ち上り、海面がざわめき立つ。

その水柱を斬り裂いて木曾はもう一度急発進急加速。

着水する寸前の『緞』を狙って突進した。

『緞』は突進してくる木曾の突きを回避。

回避すると同時に木曾へ翡翠色の軍刀を振り下ろす。

木曾は背後へ振り向き、サーベルを横にして受け止めた。

無理矢理翡翠色の軍刀を押し倒し、無数の斬撃を浴びせていく木曾。

『緞』はその斬撃を弾き返し、自身も斬撃を仕掛けていく。

剣戟は苛烈さを増していき、二人の後方で水柱が立っていった。

翡翠色の軍刀とサーベルが衝突する度に衝撃波と共に火花が散る。

やや攻勢に出ているのは『緞』。

逆に木曾は怒涛の斬撃に押されつつあった。

既に頬や腕に掠った切り傷が出来ている。

「ッ!!!」

木曾はわざと海面を斬って水飛沫を『緞』へ浴びせる。

目眩しとなった水飛沫は『緞』の隙を一瞬だけ作った。

木曾は直後に身体を回転させ、遠心力が上乘せされたサーベルを横へ振り回した。

「悪くはない」

『緞』は足を縮ませて跳躍。

木曾の渾身の斬撃を跳躍で回避した。

空中で『緞』は翡翠色の軍刀を一気に振り下ろす。

木曾はまたサーベルを横にして斬撃を受け止めた。二人の周辺で間欠泉の様な水柱が一気に立ち上る。

互いの武器を擦り合わせ、火花を散らしながら睨みつけた。

「最初は無作為に動きながら錯乱させるかの様に移動する事でその時に魚雷を発射させ、悟られないように行動していた……」

『緞』の押し出す力が徐々に強くなっていく。

木曾も負けじと全力で翡翠色の軍刀を押し出した。

「俺が砲弾を斬る事を前提に砲撃。爆煙で視界を不安定にさせ、隠していた魚雷を直撃させる……が、それはフェイクで、本命は自身の攻撃が予測され跳躍で回避する事を予知しての奇襲……更にはわざと水面を斬って水飛沫を浴びせ、目眩しで隙を作った……悪くはない」

『緞』は押し出す力をわざと弱め、冷静に今までの戦闘を分析する。全力で襲い掛かる木曾の行動を即座に見極めて評価した。

戦闘技術は他の艦娘とはほぼ変わらないが、心理把握や判断力は少しだけ変わっている。相手をどうやって倒すのか、様々な戦略を考えて実行に移したのだろう。

内心艦娘達には期待していなかった『緞』だったが、自身と同じである木曾には少しだけ変わっている事に安心した。

「だが……」

わざと押し出す力を弱めていた『緞』は突然軍刀を百八十度反転。反転した事で『緞』に押されていた力は無くなり、強く押し出していた木曾はサーベルを振ってしまう。

『緞』はサーベルを避け、その隙に木曾を勢いよく斬り飛ばした。海面に打ち付けられ木曾はうつ伏せの状態で倒れ込む。

木曾はすぐに立ち上がり、吐血しながらも『緞』を即座に睨んだ。よく見れば木曾の胴体には斬られた痕が著しく残っている。傷はとても浅いがそれでも血は破れた正装を赤く染めていた。

「戦闘技術や剣術は見るに堪えない。力の使い方に関しては悪くないが、致命的な部分が欠如している。そんなのでは七壊星に一瞬で殺されるぞ」

殺されるぞと言って軍刀を振るった瞬間に身体中から萌葱色の光を身に纏う。

明らかに見下した目で木曾を睨み、眼帯から翠色の光が溢れ出していた。

『緞』はゆっくりと木曾の元まで航行していく。

「一応は訓練だ、傷は浅くしてやる。その様子だとまだ気は抜いていないようだな……扱いてやるから……来い」

その時木曾は恐怖と同時に戦闘意欲が凄まじく昂った。

絶対に強くなつてやる、尽きぬ欲望を力に変えて。

『黝』……だったかしら。一度演習相手を頼みたいのだけれど」

加賀や瑞鶴、飛龍や蒼龍に雲龍達は護神厄討艦隊唯一の航空母艦である『黝』蒼龍を探し、ようやく見つけて声を掛けていた。

『黝』蒼龍がいたのは工廠の隣にある海へ突き出た堤防の一番奥。地べたに座りながら『?』叢雲の訓練を受けている艦娘の戦闘を観戦していた。

「私とく? いやくそりや無理だねく」

「勝負にもならない相手、だから?」

「まあそれもあるけど、根本はそこじゃない」

瑞鶴がその理由を言葉にして述べた時に『黝』蒼龍は立ち上がって正装についた土や砂を手で払った。否定するどころか肯定してきた所に若干性格の歪みを感じたが、考える所はそこではないと蒼龍は真面目な表情でハッキリと言う。

『鏢は何故か言わなかったけど、七壊星には司令型の他に突撃型も別にいるんだよね。圧倒的に多いのは突撃型で大体遭遇するのも突撃型、自ら接近して艦隊の行動を崩しに掛かって来る。奴らは艦娘一人だけでは簡単に対抗出来ないって事を知ってるからなのかな」

『黝』蒼龍の話を聞いて加賀達は鎮守府襲撃時に金剛と戦っていた『巨門』戦艦棲鬼の事を思い出した。巨大な腕を駆使した破壊力のある戦闘技術や連合艦隊を纏める司令能力がああ時は見受けられた。

『黝』蒼龍曰く、『巨門』戦艦棲姫は突撃型と司令型のどちらも平均的に高いとされている兼ね備えたハイブリッド的存在で、『最強』と

呼ばれていた所以はそこにあるらしい。

だがその深海棲艦を配下に置く【天璇】^{メラク}南方棲戦鬼はどういう存在なのか、更なる未知の存在が加賀達に恐怖を募らせる。

「だから今はあやつて一対一の形式で一人一人の艦娘が強くなれるように海軍が色々と推薦してる。あらゆる戦況下でもある程度対応出来るようにする為にね。少し当てはまらない艦娘もいるけど」

「……その当てはまらない艦娘が私達空母だと」

「そういう事！ 流石、どこか加賀さんも頭が回るね！」

『黝』^{アオクロ}蒼龍は人差し指を空に向け手を加賀達の前へ差し出す。

加賀の言葉が当たったのか嬉しそうな表情で見つめていた。

「勿論自分の身を守る為に近接格闘技術を学ぶのもいいけど私達空母の本質は空、空を制する事に意味がある。どういう敵なのか、どういった策略で戦うか、味方の支援や防衛に攻撃。うちの艦隊の皆は近接格闘技術を主に戦闘してそれらを得意としてるけど、私は航空戦術が要の艦娘。あまり殴り合うのは好きじゃないんだよね〜」

護神厄討艦隊の中でも特殊な存在で、『緞』^{レイ}木曾や『？』^{オウケン}叢雲の様に超人を更に超えた力を使う戦闘技術は駆使せず、エネルギー効率によって特化した索敵能力や対空能力に一部の感覚、そして要となる航空戦術に長けている艦娘。それ以外は普通の艦娘とほぼ同じで音速並みの航行速度や相手を遠くまで殴り飛ばす程の力は有していない。

その分航空関連においては凄まじい力を発揮し、戦況に応じた戦い方で戦果を収めている。

勿論近接格闘技術も習得済みだが本人は殴り合う事をあまり好まないようだ。

「そしてそれには仲間や妖精さんとの協力も必要。特に妖精さんとは深い信頼関係が必須になってくるね。私は基本、仲間と協力又は連携して戦闘に参加してる。だから一対一ってのは私にはあまりはまらないんだよね〜」

「じゃあ……どうすれば……？」

「だから私と艦隊を組んで協力しながら戦いながら学んで演習しよう！ 勿論相手は実戦を想定した形で『緋』^{ヒゲル}がしてくれるからさ〜」

「仕方なくな」

加賀達の最後尾にひっそりと隠れていた『緋』^{ヒゲレ}摩耶が落ち着いた声で返事をした。背後にいた事に気づかなかった加賀達は驚きの声を上げて加賀や瑞鶴の元へ身体を寄せる。

どうやら『黝』^{アオク}蒼龍は加賀達と一対一で戦うのではなく、逆に艦隊を組んで実戦を想定した演習をするようだ。相手は『緋』^{ヒゲレ}摩耶、対空能力と火力に特化した艦娘であり、鎮守府襲撃際の戦闘やシヨウカクとの戦闘でも度々その実力は目撃して知っている。

加賀達はその実力を知っている故に摩耶が相手になるのは少し苦手な存在だった。

「んじゃ、やろっか！」

加賀達の意見もなく、ましてや何の前触れも無く『黝』^{アオク}蒼龍は勝手に演習を始めた。

159. 滄海で輝く太陽は悩み続ける

雲一つない蒼空から地面さえ焦がす様な暑い太陽の陽射しが降り注ぐ。ゆつくりと吹く潮風が汗で濡れた正装を涼しく感じさせ、近くの陸地で蟬の鳴き声が微かに聞こえた。

蒼く澄み渡る海原にて金色の十字光が目が眩む程の輝きを放つ。その光を指すかのように何人もの艦娘が海原を駆け抜けた。

波で出来た段差を跳躍して乗り越え、金色の十字光から放出される分散する光芒の猛攻を辛うじて避けていく。

「……」

金色の十字光を放つのは護神厄討艦隊旗艦『?』叢雲。

あまりの暑さに顔を仰ぎ、片腕で太陽の光を防いで空を見ていた。何も言わずに黙り込んだまま果てしなく続く蒼空を眺めている。

周辺の環境音を遮断し、何かを考え込む様な表情でただひたすらに眺めていた。

「ツそこです!!」

「当たれ!!」

「……!」

隙だと見た朝潮と大潮が『?』叢雲を挟み撃ちする。

叢雲に高速航行で接近しながら二人は近距離砲撃。砲撃に気付いた叢雲は金色の槍を上へ投げる。

そして身体を回転させた。

交差する寸前で二つの砲弾を受け流し、砲弾の方向を転換。砲弾は逆に大潮と朝潮へ飛んでいく。

二人は間一髪で回避し、頬を掠めながらも突進。

拳を前へ突き出し、『?』叢雲へ殴り掛かる。

『?』叢雲は二人の殴打を両手で受け止める。

直後、叢雲の背後と正面へ大潮と霞が回って砲撃。

叢雲は跳躍で砲弾を回避し、投げていた金色の槍を手に持つ。

金槍を勢いよく振り下ろし、真下にいる大潮と朝潮を衝撃で吹き飛ばした。

そのまま『?』^{オウゲン}叢雲は海面に着水。

振り下ろした衝撃で立ち上る水柱が視界を遮る。

その水柱を貫いて砲弾が叢雲に襲い掛かった。

水柱との距離は約二メートル。

砲弾の速度から考えて直撃は間逃れないだろう。

しかし『?』^{オウゲン}叢雲はこれから来るであろう砲弾も含め、全ての砲弾の軌跡を瞬時に予測して見切っていく。

黄金に輝く眼で砲弾を把握。

目に見えぬ速度で金鎗を振り回し、不可避の砲弾を弾き飛ばした。

次第に水柱が消えて無くなり、水平線が見えていく。

そして何かを感じ取った『?』^{オウゲン}叢雲は跳躍。

いつの間にか放たれていた魚雷が水中を泳いでいた。

跳躍した叢雲は周辺にて駆ける朝潮達の位置を把握。

身体を駒のように回転させ、砲撃と同時に八本の魚雷を発射させる。

光芒となった砲弾は朝潮達の足元に着弾。

水柱が立ち上り、視界が不安定になった。

腕を使って身を屈ませる朝潮達だが、直後に水面下が爆発する。

『?』^{オウゲン}叢雲を中心に六つの大きな水柱が立ち、六人の身体が宙に舞った。

叢雲は何事もなく海面へ着水し、金鎗を足に立てて仁王立ちする。

「早くしないと即座に無力化するわよ」

「ぐっ……強いッ……!!」

これが艦娘の頂点に君臨する者の実力か、もしくはその片鱗か。

訓練を申し込んだ朝潮達は傷一つ付ける事が全く出来なかった。

考えうる作戦で連携を取りつつ攻撃しようとも呆気なく返り討ちにされてしまう。

例え視界を不安定にしても、例え挟み撃ちにしても、例え囲もうとしても最善とも言える戦い方で対処していた。どんな戦況下だろうと突き破っていくその柔軟さと判断力はまさに頂点に立つだけの事はある。

「連携は申し分ないけど、火力が足りてないわね。後は予測かしら、敵がこれからどう動くのかを予測出来ていない」

「予測……？」

「私は貴女達の攻撃のパターンを予測して動いていたのよ。この攻撃の次はどう動くのか、どう展開していくのか、予測するだけでも戦況は違ってくるわ」

今まで『?』^{オウゲン} 叢雲が優勢に戦っていたのには訳がある。

叢雲は朝潮達の戦闘行動を見て次の行動を予測、予測したパターンの中から数ある対処法で攻撃を躲している。必ずしも超越した力を常時駆使して無双するのではなく、相手と戦う上でどうやって倒すかを模索し戦闘に挑む。

それこそ艦娘の頂点に立つモノの極意なのだろう。

「雷撃をまともに食らったとはいえ、まだ立ち上がれるでしょう？」

今度は予測しながら戦ってみなさい。私がこれからどうやって動くのかを……ね」

「予測……ね……！……なら……ッ!？」

荒潮がダメージを負いながらも立ち上がり、『?』^{オウゲン} 叢雲の助言を聞いたその時。

予測する事を中心に荒潮が身体を動かそうとした途端、突然射て差す光芒が荒潮の頬を掠めた。

荒潮の後方で大きな水柱が立ち上り、持ち上げられた海水が雨となって降り注ぐ。改めて叢雲の方へ視線を向けると、金鎗を荒潮に向けて砲撃していたのが見えた。

「とはいったけどそう簡単に予測はさせないわよ。相手に行動を読まれているに即座に動かないバカはいない、誰でも対処するし私も対処する。訓練だと思って甘く見てたら大間違い。容赦はしないからね」

『?』^{オウゲン} 叢雲は容赦なく朝潮達を無力化すると鋭い目線で睨んだ。

依然として身体を纏う金色の十字光は輝きを維持し続け、あまりの眩しさに叢雲の身体が逆光で見えなくなるほど輝いている。

それは叢雲が持つ限界値を超えたエネルギー効率が更に溢れ出しているのを体現しているかのようだった。

「ほら、来なさいな」

『?』^{オウゲン} 叢雲は手で誘うように動かし、朝潮達を煽っていく。

神に挑むが如く朝潮達はそれぞれ自身を鼓舞し、もう一度戦闘に挑む覚悟を決めた。

朝潮達は一旦全員を集合させ、作戦会議。

朝潮を中心に荒潮達は次の一手へ行動を移す。

叢雲はそれらをさせまいと光纏う砲撃を浴びせた。

朝潮達は光線の暴風雨を回避。

小さく軽い身体を利用して間一髪で避けていく。

なお避けながらも高速航行を決して止めず、叢雲に接近する事だけに全力を出している。

霰と霞が遠方から砲撃。

砲弾は『?』^{オウゲン} 叢雲の一步前に着水。

水柱が立ち、叢雲の視線を再度隠していく。

まるで先程叢雲がやった戦い方と手順が少し似ている。

叢雲は駆け引きを仕掛けてきたかと次の行動を予測した。

今朝潮達が仕掛けているのは先程叢雲が朝潮達を一斉に攻撃した際に使われた戦法。

その戦法を朝潮達は早速真似て叢雲に仕掛けてきた。

予測出来るパターンは二つ。

一つ目はもしそのまま待ち構えていれば朝潮達の攻撃手段は魚雷か砲撃。跳躍すれば攻撃は回避可能になる。

二つ目は待ち構えずに前後左右に動いた、又は跳躍した際の朝潮達の近接格闘技術を応用した奇襲。水柱が消えてなくなれば朝潮達の居場所は特定出来る。

ならば『?』^{オウゲン} 叢雲は――、

「跳んだよ!! うわっ!!」

前方へ低空跳躍しながら周辺へ無差別に砲撃。

身体を回転させ、小さな円を幾つも描いて滑る様に海面へ着水する。

砲撃の跡を確認すると荒潮と大潮、朝潮が砲撃によって怯んでい

た。

だが待て、確か突撃した時には四人だつ――、

「……なるほど」

屈んだ体勢で不安定な『オウゲン？』叢雲の背後へ影が映る。

背後を取っていたのは満潮、突撃時に満潮だけは叢雲から距離を
図っていた。

叢雲はすぐさま振り向き、残りの一人である満潮を再確認。

金鎗を横に薙ぎ払い、満潮を迎撃する。

しかし満潮は間一髪で金鎗を躲す。

足を縮こませて一気に零距离砲撃を食らわせようと接近した。

叢雲は冷静に満潮の砲撃を回避。

そして右腕を掴み、軽く後方へ投げ飛ばした。

「悪くないじゃない……」

作戦が破れても朝潮達はめげずに『オウゲン？』叢雲に立ち向かう。

その時叢雲はある事を思い出して考えていた。

時は島風が目覚めた時の事である。

叢雲は講堂の屋上にて柵に身体を寄せ、永遠に続く水平線を眺めていた。

久しぶりに島風と出会い、感動の再会に嬉し涙を流していた叢雲。

しかし島風から戦いたくないと言われ、一方的に喜んで話も聞か
ないまま島風を追い込んでしまった事に落ち込んでしまっていた。

元はと言えば小笠原鎮守府襲撃時に自身の個人的な関係で島風を
見捨てる様な事をしておいて、死亡していたと思われていた島風に対
し喜びの声を上げるなど島風本人からすれば馴れ馴れしい程この上
ない事だ。

恐らく島風は自身の事を心の底では憎んでいるのかもしれない。

『どうされましたか……っ？』

『つ……？ ああ貴方は候補生の……別に、ちよつと黄昏てただけよ』
『そ、そうですか……』

背後から聞こえた声の方向へ振り向くと、そこには司令官候補生の灰色がクリツプボードを持ちながら立っていた。

この様子から見て島風と叢雲の事情を聞いてどうやら声を掛けずにはいられなかったようだ。

この鎮守府の艦娘達からはかなり好印象を持たれており、司令官としての才能も芽生えつつある人物だが、まだ経験値とその実力は足りていない。

最近の新米司令官には艦娘を人間だと思ふ者が多いと言われており、候補生である灰色もその一人なのだろう。

故に事情があつて落ち込んだ艦娘を放っておけないような性格で好印象を持たれているのかもしれない。

『……叢雲さん……私は——』『ほんと最低よね〜』

沈黙を破つて灰色が叢雲に話し掛けるが、叢雲はその声を更に大きな声で遮る。

顔や表情を見せないまま一人語りするように喋り続けた。

『よくよく考えれば自己中心的に動いてたわね。大事な仲間が生きていたって知って、そこで周りの事も考えずに突っ走っちゃった。私の所為であんな事になったのに、どの面下げて会いに来たんだって普通は思うのよね』

叢雲と島風の事情を知っているだろう灰色へ伝える様に語る。

灰色は真面目な表情で叢雲の話を一心に聞いていた。

その話は自身が誤った行動を反省し、他人の感情を考えて行動しなければならぬという戒めの話。島風が生きていた事について喜びの感情が昂つてしまい、周りを気にせずに迷惑な事をしてしまった自身を反省していた。

『だけど私はそれを配慮せずにながむしやらに喜んじやった……まだまだ私も未熟ね、全くもって……何一つ、足りてない……』

足りてないという言葉に後悔の感情が溢れ出しているのが分かった。叢雲や島風の詳しい事情はあまり知らないが、何かとてつもなく

忘れられないような後悔をしたのだろう。

『……そうですか……少し語弊があるかもしれませんが、私は素晴らしいなって思っています』

『素晴らしいって？ どういう事？』

『すいません上手く言い表せなくて……何て言えばいいのか分かりませんが、叢雲さんは自分の事は勿論、他人の事もちゃんと考え行動している。失敗した事も必ず反省して次の行動に活かしている。私はそれらを簡単に出来るのが素晴らしいなって思ったんです』

灰色は喋りながら歩み寄り、今叢雲が起こした行動や言動を見て率直に内容を伝えた。やがて叢雲の隣まで近寄り、顔も見せないまま同じく永遠に続く水平線を眺める。

夏の日照りは一定の暑さを保ちながら、延々と地面を焦がし海を煌めかせる。

モワツとした身体にまとわりつく暑い風が二人の隙間を通り抜き、肌から滲み出た汗が思わず爪で搔いてしまうほどの痒みを感じさせてきた。

『アンタ達人間はそうするモノじゃないの？ バカにしてるのかしら』

『いえいえ決してバカにはしていません！ ただそう出来る人間が私の周りには少ないなって……そう思ったので……』

叢雲は灰色の方へ顔を振り向かせ、少しからかい気味な声で問い詰める。

灰色は両手を広げて否定する様な仕草を出し、慌てながら訂正する声を上げた。

そして物寂しそうな表情で俯き、視線を水平線から広場の地面へ移していく。

『皆ピリピリしてるんです。長く続く戦争の中で痺れを切らして事ある毎に慌てて、周りが見えなくなり自分の事しか考えられなくなって。仕方の無い事なのかもしれませんが、ですが私はそれでも見失ってはいけない時があると思っています』

『確かにね、そういう奴らは山ほどいるのは私も知っているわ。だけ

どこまで人間も落ちぶれてないでしょう？　精々貴方みたいな人がある限りはね』

灰色と同じく、叢雲も自身の事しか考えられなくなる人間を飽きる程見てきたと言う。

深海棲艦の出現から今日までの戦争で生き続けた叢雲は、人間とはどういう生き物なのかを大方知り尽くしている。

観点は見てきた人物によって様々で人間はそれぞれ様々な性格をしていて、そこには善悪や優劣が存在し、一人の観点からは甲乙つけるものではないという個人的な価値観を持っていた。

故に人間に対する感情は常に一緒に、初めて会った人物だろうと馴れ初めあった人物だろうと、こういう人なんだとしか思わないらしい。

『そうですかね……私も実際出来ているかどうか分かりません……これは父親から教えてもらったのですが、自身という人間の本質の一部は他人から見る事で分かってしまう事もある。今こうして叢雲さんに自身や他人の事を考え、自身を反省して次に活かすという叢雲さんの本質の一部が見えて分かったんです。叢雲さんは人として素晴らしいなって、そう思ったので率直に言ってみました』

『素晴らしい、ね……お褒めの言葉として貰っておくわ』

『いや本当に決してバカにしてる訳ではないので……そう思っていただけると幸いです』

灰色の素直な気持ちの答えに叢雲は半分疑いながらも褒めの言葉として受け止めた。

叢雲の反応に灰色は頬を指で搔きながら苦笑した表情で安堵する。それ以上話す言葉が無かったのか灰色は掛ける言葉を悩んでいるように見えた。

それを見て叢雲は自身の本質の一部は他人から見る事で分かってしまうという言葉を目の当たりにする。島風の件で落ち込んでいた叢雲の元へ、励ましの言葉や慰めの言葉を掛けようとしている灰色だが、叢雲本人を傷付けない為なのか選ぶ言葉に悩んでいるようだ。

そういった意味では灰色も叢雲の事を考えて行動している。

気付かない内に灰色も周りの事を考えている事に叢雲は笑みを浮かべた。

『……何と言うか……とにかく！ 共に頑張りましょう!! 私は叢雲さんの事を応援していますし、何かあれば役に立つ事もしてみますので！ 司令官候補生として立派に役目を果たしていきます！』

灰色は精一杯の言葉で叢雲を勇気づけようとした。それを聞いて叢雲はようやく口に出来た言葉がそれかと微かに笑う。

『共に……頑張る……ね』

『えっ?』

『いやただの独り言……いいわ、そこまで言うんならボロ雑巾になるまで使つてやるわ。精々アンタも頑張りなさい!』

『ええ勿論です!』

暑い夏の日、二人は初めて互いの手を握った。

「調子はどうですか、鹿島さん」

「概ね順調ですよ。これが記録も報告書の一覧です」

演習の管理を任された灰色がクリップボードを片手に戦闘中の艦娘を眺める鹿島へ話し掛けてきた。

緩む事の無い暑さに灰色は手の平で風を仰ぎ、汗に塗れた額を拭う。鹿島は演習の記録と報告書を灰色に提出し、また新たに始まった演習を記録していった。

「ありがとうございます……凄いですね。木曾さんが出血多量の大破状態、『?』ビョウコウさんと戦った長門さんが意識不明の大破状態……大丈夫なんですかこれ」

「大丈夫ですよ、艦娘ですし、いざとなれば高速修復材で終わります」
「その高速修復材が今少ない状態である事だけ把握していただければと思います……」

鹿島が書き留めた記録や報告書の内容はどれも詳しく書かれており、弱点や強み、性質の成長具合やエネルギーの効率純度、演習の戦

闘経過報告など各艦娘によって一人ずつ明確に区別されていた。次の演習はどのようにするべきか反省点や行動のメリツトやデメリットなども簡潔に述べられ、演習を管理する灰色はその報告書を貰い受けながら次の演習計画書をまとめしていく。

「次は『緞』^{レイ}さんと天龍さん、『?』^{ビョウコウ}さんと金剛さん……引き続き『黝』^{アオグロ}さんと加賀さん達対摩耶さん、叢雲さんと朝潮型の皆が戦闘続行中……と」

「まあでもそろそろ朝潮型の皆さんは終わるでしょうね。六人中、三人は大破状態ですし」

「うう……私は何も出来ないけど、頑張れ皆!!」

『?』^{オウゲン} 叢雲に挑み続ける朝潮達に灰色は邪魔してはいけないと小さな声で応援する。強敵に挑むが如く海を走り駆ける艦娘達を見て記録する事しか出来ない自身に少し嫌気が差しそうになった。

そんな事も気にせず戦う艦娘達は戦闘に夢中で、以前の演習よりも艦娘達の士気は上がっており、皆強くなりたいたいという気持ちがひしひしと伝わってくるのが分かった。

「鹿島さんは誰かと演習はしないんですか?」

「うくんしてもいいんですけど、何故かあちらから来てくれないんですよね」

「そ、そうなんですか」

ノシロを戦闘不能にした事や阿賀野達との戦闘を考えれば恐れられるのは当然なのではと灰色は心の中で思いつつも肯定の声をあげる。

正直な話、灰色は鹿島の事を少し恐れている。

驚異的な戦闘能力は勿論ではあるが、何よりも怖いのが普通の言葉が通用しない頭のねじが外れたような性格。そして何かを企んでいるような異様な不気味さ。

阿賀野達との会話を聞いた時には灰色も矢矧と同じく背筋が凍るほどの狂気と恐怖を感じていた。言っている事は正しい事も含めて考えさせられる部分はあるが、それを言う前に行動していた狂気的な性格を見て恐れてしまっていた。

「そういえば島風さんは今どうしてますか？」

「島風、ですか？　島風なら今も病室で休養中ですよ」

「そうですか」

あまり面識のない鹿島から話し掛けられた灰色。

突然島風の事を聞かれて一瞬戸惑うも、今も医療施設の病室にて身体を休めていると簡潔に伝えた。

その話を聞いた鹿島は淡々に返事してまた書類へ戦闘の内容を記録していく。珍しく鹿島に声を掛けられた灰色は恐る恐るこちらから話し掛けてみた。

「……珍しいんですかね、鹿島さんが誰かに気を掛けるのは」

「まあ少し気になった事があるので」

「気になった事？」

どうやら鹿島はあの島風について少し気になると言う。

一体どういう思惑で気になっているのか、灰色は唾を飲んで耳を傾けた。

「……阿賀野さん達との戦闘中で私に挑んできた艦娘達がいたと思いますが、その中で唯一私に反応していたのは島風さんだけでした。聞いてみれば小笠原鎮守府の艦娘らしく、よくよく考えてみればあの島風さん、一味違えますね」

「一味違うっていうのは……？」

「小笠原鎮守府の艦娘達は軒並み戦闘能力が高い艦娘が多く、現在の護神厄討艦隊でも叢雲さんが小笠原鎮守府に所属していました。私の仮説ではありますが……恐らくあの島風さんは私達と同等の戦闘能力、またはそれ以上あるかもしれませんね」

「っ……………」

鹿島の言葉を聞いて思わず灰色は驚きの声を上げた。

あの島風が鹿島や叢雲のような超人的な戦闘能力を持っている可能性があると鹿島は見極める。

いや持っているのではなく、正確には秘めている又は潜んでいるが正しいらしい。島風の中に強大な力が眠っているようで島風自身も己の眠っている力に気付いておらず、いつ何らかの出来事で発現して

もおかしくないそうだ。

「流石、『ライテイ霆』の候補にされただけの事はあります」

「ラ……えっ？ 何ですかそれ」

「別になんでもありません」

160. 世界の果てまで行つてどうする

護神厄討艦隊の艦娘達による特別訓練の初日が終了し、次の日を朝を迎えた翌日。

一人の艦娘が身支度を終えて仮執務室に向かっていた。

その艦娘はゆつくりと床を踏みしめるように歩き、荷物が積まれたキャリーケースを引っ張っていく。

窓から僅かに差し込む朝日の陽射しが妙に明るく感じた。遂にこの日が来てしまった事にその艦娘は朝日に嫌気が刺して、光を見ないようにと俯きながら歩き続ける。

「短い期間だったが、（ん）苦労様……プリンツ・オイゲン」

やがて仮執務室に到着し、中へ入ったプリンツは奥にいる提督から労りの言葉をもらった。

これからこの鎮守府を出ていくのはプリンツ。

翔鶴達との戦争による処罰の一つでプリンツは大本営への再配置を予定されていた。

それと同時に横須賀鎮守府の■中佐の艦隊へ一時的に配属され、アリュウシヤン列島海域防衛作戦に参加する事となっている。

「まあ瑞鳳から聞いているだろうがお前もこれからキスカ島の鎮守府に行つてもらおう。アリュウシヤン列島海域防衛の為に経験のあるお前らが必要だそうさ、大丈夫かなオイゲン君」

「はい……大丈夫です」

プリンツは提督の目を見続けながらも落ち込んだ表情で話を聞いていた。

先程から元気の無い姿やこの表情をしているが、翔鶴達との戦争を考慮すれば簡単に分かる事だろう。自身が提督に対して残酷な仕打ちをした事にプリンツは罪悪感で押し潰されそうになっていた。

「もうすぐ迎えの艦隊も来る頃だろう。何か言い残しておきたい事はあるか？」

「……本当にごめんなさい。謝る事しか……出来ません……」

提督からすればプリンツが頭を下げて謝ってくるのは予想の範囲

内。

いや百%確実にしてくる行動だと椅子の腕掛けに肘を立てて顔を支えながら呆れた表情でプリンツを眺めた。

足を組んで粗末な態度を見せつける提督に対し、傍にいた秘書艦の摩耶やプリンツは何も言わない。言えるはずもない、何故なら今ここに居座っているのは自分が手を出した被害者であり、そして自分を罪を犯した罪人である。

明らかに自身に非がある以上は慎む事しか出来なかった。

「……操られてた時のお前となったら酷い事をしてきたもんだ。見下されるわ、蔑まれるわ、殴られるわ、蹴られるわ、脅されるわで本っ当に苛立ったよ。あの事で逆手に取られるとは思っていなかったからねえ」

「あ、あれは！　ただ……いえ、何でもありません……」

提督の言葉から恨みと怒りを感じた。

プリンツは慌てて否定しようとしたが、何か思い出したのか急に諦めて口籠る。

「……まさか翔鶴達には言っていないだろうな」

「断じてあの事は一切言ってません！　それは本当です!!」

決して提督と摩耶の事に関しては誰にも告げ口はしていないとプリンツは必死に言い掛ける。

プリンツがそう言える自信がある理由は翔鶴の好嫌薬によって意識を改変させられた当時の記憶が鮮明に残っていたからだだった。

急に提督へ嫌悪の感情を抱き始めた瞬間や提督を脅した時、そして手を出した時などを出来ることなら二度と思い出したくもない記憶がビデオの映像の様に残っている。その時自分は何をしていたのか、提督に何をしようとしていたのか、提督に関する事だけは完璧に覚えていた。

「改めて言うがオイゲン、お前がやった事は明らかな俺達の裏切り行為だ。例えどんな方法でそれ等をやってしまったとしても、お前にそういう考え方があったという事実だけで、それは約束を破ったと同等の行為に等しい」

「はい……分かっていきます……」

提督は改めてプリンツへ自身が犯した行動について詳しく説明した。提督が無名の頃に苦楽を共にした艦娘だからこそ、提督はこの約束だけは絶対に破って欲しくなかった。

例えどんな事だろうともし変えたいという気持ちがあるのなら、その気持ちと一緒に戦ってもらいたかった。

提督は失望と同時に哀れみの感情でプリンツを見続ける。

久しぶりに見たその視線がプリンツの心を更に痛くさせた。

「ですが……これだけでも言わせてください……」

プリンツは声を震わせながらも思い切って提督へ伝える。

「私は……口外に漏らす様な真似は……絶対にしていません……!」

プリンツの碧色に輝く目は珍しく真剣な目付きをしていた。緊張で汗が頬を伝い、息も少し荒々しく感じる。

一見して提督は疑念の表情を全く変えないまま少しばかりため息を吐いた。

「……そうか。ならこの失望をお前ならどう挽回させる?」

「今Admiralが一番会いたがっている……アイツを見つけ出します……!」

「へえ……」

提督に対する失望をどうするかとプリンツへ尋ねた時、プリンツは神出鬼没のアイツを必ず見つけ出すと宣言した。それは提督が今一番会いたがっている存在であり、欲している存在でもある。

流石提督の事を分かっているのか、大胆不敵なプリンツの言葉に思わず提督は企んでいそうな笑みを浮かべた。

「面白い事を言う事だけは一人前だなオイゲン。だがお前が——」
「Guten Morgen!! Admiral! 私が来てあげたわよ!!!」

提督は半笑いでプリンツを睨みながら話を続けたその時、誰かが仮執務室のドアを蹴破って現れた。

驚いた提督は叫び声を上げながら椅子ごと床に転げ落ちる。

先程まで緊張した空気に包まれていた仮執務室が一気に解け、混沌とした雰囲気^{（カオスな雰囲気）}に切り替わってしまった。

「誰だこんな時に割り込んできた奴は!!!」

「私よ Admiral!! このビスマルクが直々に来てあげたのよ!

感謝しなさい!!」

「これまたややこしいやつが来たな」

大事な会話の途中に割って出てきたビスマルクに提督は指差して怒り出す。

邪魔をしたビスマルクは悪気が無いまま話を進めようとした。

それを見て摩耶は困り汗を掻きながら苦笑いで提督の椅子を立て直す。

「何故お前が来るんだビスマルク!! ガングートの言う任務やらはどうした!!」

「あの任務は既に完遂したわよ。北海海域に攻めてきた深海棲艦共を蹴散らしてやったわ! 後は神聖なる騎士団^{（セイクリッド・レーシユヴァリエ）}に任せとけば問題無かったからここにまた来たのよ」

以前の鈴谷達と南方の艦隊であった演習時に、元帥と共に来ていた阜月達が来ていたが、ビスマルクだけが共に来る事が出来なかった。その時は北欧での任務がちょうどよく重なっており、久しぶりに提督に会いたかったビスマルクは任務優先で行く事も出来ず、代わりにガングートへ頼んで行ってもらう様^{（スタイル）}にしていたらしい。

つい四日前に帰還したばかりのようで荷物を持ち抱えたまま来ているのが見えて分かった。

「ビスマルク姉様……その……」

「オイゲン……大丈夫、分かっているわ。仕方の無い事よ、オイゲンは悪くないから安心なさい……でも、やった事はやった事でちゃんとして反省はするのよ?」

「は、はい……! します……!」

「いい娘よ、オイゲン。よく頑張ったわ」

オドオドしているプリントは恐る恐るビスマルクへ話し掛ける。

やはりこの鎮守府の事情は既に知り得ているのか、プリンツや艦娘達がやった事は全て把握済みのようだ。

ビスマルクはプリンツの頭を撫でながら優しく慰め、思わず泣きそうになるプリンツを力いっぱい抱き締めた。

「んで、どういう風の吹き回しでここに来たんだお前は」

「オイゲン達がこれからアリュウシヤン列島海域の防衛に行く事になったのをついでに、そちら側の一番偉い人がオイゲンと入れ替わりで着任する様に言われたの。まあ事情や理由はほぼほぼ知ってるし、短い期間ではあるけどまたよろしく頼むわね、Admiral」

■ どうやら ■ 元帥がビスマルクを異動させたらしい。臯月達が ■ 中佐と共にアリュウシヤン列島海域の防衛任務の為に居なくなる事を把握してプリンツに成り代わる戦力として提督と面識のあるビスマルクを入れ替わらせたようだ。

■ 中佐が連れていく話をした際にビスマルクだけ名前が入っていなかったのはこれが理由だろう。

「お前によるしく頼まれる筋合いは無い」

「あら〜また拗らせちゃって、前と同じで可愛いところは抜けてないわね〜。摩耶も苦勞してるでしょう?」

「摩耶、答えなくていいぞ。こんなとある名探偵の逆バージョンみたいな奴の言葉に耳を貸すな」

敵対する提督に対し、ビスマルクは指を差しながらウザ絡みする様に提督を揶揄う。

初期の頃から共にいた摩耶やプリンツしか知らないが、提督がビスマルクを一方的に嫌っているように見えるも何かと持ちつ持たれつの関係性にある。

ビスマルクの目立ちたがり屋で高飛車のような性格に提督は飽き飽きしており、拳句の果てには隙あらば好き嫌い関係の事だからかってくるのでいつも提督の一方的による口論になっていた。

ビスマルクは大して提督の言葉を気にしてはおらず、ただ真正面から話す事が出来ないためにわざとからかっているらしい。

中々崩れかけた関係だが戦闘になると提督の指揮は必ず従い、ビス

マルクの作戦の提案には耳を傾けるなど互いに信頼している部分があるので一概に仲が悪いとは言いきれない。

提督は信じていないと言いつ張っているらしいが。

「まあ苦労はしてるな」

「ほら〜やっぱりAdmiralは私が必要なんだから〜」

「うるさい黙れ」

提督は嫌悪気味にビスマルクへ言い返す。

摩耶としてこのやり取りを飽きるほど見ているのでまたこれが続くのかと思うとため息を吐く他なかった。

「さて……お遊びはここまでとして、戦況はどうなのかしら」

「急に切り替わるの早くね？」

「今のところはかなり追い込まれている状況だな。色々あったおかげで他の鎮守府とは連絡はあまり取れず、いつ深海棲艦に襲撃されてもおかしくない状態になってる」

「なるほど、噂ではこの鎮守府はイカれてるとか聞いてたけど本当なのね」

ビスマルクの急な切り替わり様に提督は思わず言葉を漏らすもスルー。代わりに摩耶が説明し、この鎮守府の状況が如何に厳しいものであるかを教えた。

摩耶は鎮守府についてまとめられた書類の束をビスマルクへ渡し、その書類の束を一ページずつビスマルクはじっくりと読んでいく。

「で、今は二人の提督へ恩を返す目的と復讐の目的で別れていて、打倒七壊星の為に叢雲達がこの鎮守府の艦娘達を指導して訓練を受けさせてる。そして■少尉の特定と『貪狼』ディアボルフ集積地棲姫の特定を進めている所だな」

「へえ〜……あの娘達も随分と嫌なのを選んだわね、まあ私は関係無いからいいけど。あ、でも既に■少尉の場所は掴んでるのね」

「掴んでると言っても必ずそこにいるとは限らない。特定の五箇所と俺が選んだ二箇所付近々大規模な偵察任務を行う予定だ。勿論ビスマルク、お前にも協力してもらおうぞ」

■少尉の居場所はある程度把握済みだが、どの島にいるのかはま

だ分らない。これから戦闘になる上で敵の居場所を事前に知っておく必要がある。

プリンツの代わりに来たビスマルクも強制参加させると提督は真剣な表情で告げた。

「その為に来たんだから勿論参加はするわよ。だけど『貪狼』ディアボルフ集積地棲姫の場所はどうしたわけ？」

「察してくれ」

「あくはいはい、そうだったわね……それでオイゲンが罪滅ぼしに見つけ出すと言ってたのね」

察してくれと言って提督は椅子に寄りかかってため息を吐く。随分と苦勞している様な態度にビスマルクも同情せざるを得なかった。

三年間に一度しか現れないような神出鬼没の深海棲艦を星の約七割を占める海から今更あの手この手で探そうなど無謀にも程がある。例えるなら部屋の中に突然現れた虫がどこから出てきたのか、その穴を探すくらいなほど厄介だ。

それをプリンツは何がなんでも見つけると提督へ誓っていた。

ビスマルクはプリンツの方へ振り向き、それだけプリンツが精神的に追い込まれている事を察する。この鎮守府で起こった内乱が如何に残酷なものなのかをビスマルクは静かに感じ取った。

「……頑張りなさいオイゲン。とても辛くて険しい道だと思うけど、必ず乗り越えると私は信じてるわ」

「は、はい……頑張ります!!」

「来ましたよ〜」

直後に旗艦の瑞鳳が仮執務室へプリンツを迎えに来てくれた。自由過ぎるビスマルクに対して面倒そうにため息を吐きながらも手続きを提督と共にこなしていく。手続きの途中で聞いた話ではガングートと皐月は岸边にて待機中で艦娘達の訓練を観戦しているとか。

またベーリング海海域ほくしよの北上に位置する北極海とアラスカ付近の北太平洋海域で深海棲艦に不穏な動きが出たようである。■中佐からは即刻に行かなければ間に合わないと急いでいるようだった。

「しばらく離れますが、ご武運を祈っています。私も必ず見つけ出し

てみせますので、どうか Admiral も必ず勝って生きてください
い」

「言われなくても勝つのは当たり前だ。無駄な心配など必要ない、お前は
お前のやるべき事に気を掛け、目の前の事に集中したまえ!!」

「いたっ!」

最後プリンツは提督に別れの言葉を告げ、それを聞いた提督は口角
を上げて自身の頭をプリンツの額へぶつけさせる。

言葉に一瞬励まされているような気がしたプリンツは久しぶりに
提督に対して笑みを浮かべ、仮執務室を出ていった。

「……ビスマルクは?」

「オイゲンが行った同時に鎮守府探索」

「あの野郎!!」

「どんどん建て替えられていくわね、流石日本といった所かしら。
あの技術力は祖国でも欲しいわ」

ビスマルクは提督に伝えもしないまま自由奔放に潮岬町鎮守府の
探索に出掛けていた。

仮執務室から抜け出して講堂をある程度把握し、次に艦娘の寮を艦
種ずつ入って確認していく。

六つの寮の内、二つの寮は翔鶴達との戦争により半壊状態になっ
ており、建設の為に鉄パイプで組まれた足場と防水シートに囲まれてい
た。

「どうやらビスマルクは日本の技術力を羨んでいるようで、祖国でも
あの技術力が欲しいとため息を吐きながら嘆いた。

「あら、ここに医療施設? 地方の鎮守府にしては随分と立派な感じ
じゃない」

「ひたすら廊下を歩いていると司令本部に辿り着いていたビスマル
ク。」

途中で医療施設に繋がる扉を発見し、都心で見掛ける病院のような
内装に物珍しく感じた。

ビスマルクは興味本位で扉を開けて中へ入る。

「誰もいない……って訳では無さそうね……ちよっとお邪魔するわよ
くっつと……」

手前にある仮に建てられたナースステーションには明かりがついているが覗いてみると誰もいないように見えたが、奥の方でパソコンを使って何かやっているのが見えた。ビスマルクはバレないように静かに歩いて奥の方へ向かう。

するとある病室の扉が少しだけ開いているのをビスマルクは目撃した。恐る恐る近付いて中を覗いてみる。

病室の中では艦娘らしき姿がベッドから離れ、立ちながら窓の景色を眺めていた。

「早くベッドに戻った方がいいんじゃないかしら」

「……ふえ!? 誰?!」

「私はビスマルク型の戦艦のネームシップ、ビスマルクよ。よく覚えておきなさい!」

後ろから突然話し掛けられた島風はビスマルクを見て驚き出す。

誰と言われてビスマルクは堂々と自己紹介を始めて名を名乗った。

「ビ、ビスマルク……さん……? 何故ここに?」

「初めてここに来たからちよっとした探索。地方の鎮守府にしては偉く整った医療施設だから物珍しさに見に来ただけよ。そしたら貴女がそこにいた」

「そ、そうですか……」

島風と並んでビスマルクは窓の景色を眺める。恐る恐る島風はビスマルクが何故ここに来たのかを質問した。

ビスマルクは弱々しく見える島風を疑問視しながらもここに来た理由を簡潔に話していく。視線を窓の方向へ向けたまま話し続けるビスマルクに島風は少し怖がっていた。

そんな自身を恐れているような島風の怯えた表情を見てビスマルクが声を掛ける。

「何か悩み事でもしている様な表情ね。このビスマルクが相談に乗ってあげてもいいのよ?」

「い、いや……そういうのじゃなくて……その……大丈夫です、すいません……」

「あら、そう」

ビスマルクは島風が手術を受けて目覚めた事は勿論、提督がここに来た経緯や翔鶴達との戦争などは殆ど把握しているが、その目覚めた島風が五年前の小笠原鎮守府の生き残りで尚且つ敵によるトラウマで弱りきっていた事は知らなかった。

だから島風が何故臆病になっているのか分からず、ビスマルクは大丈夫だと言われて何とも思わなかったが、半分疑心暗鬼で島風の事を不思議がっていた。

「つてよく見たら貴女、髪ボサボサじゃない！　なんて事に……もうそんなのじゃ印象ガタ落ちよ？　私が簡単にやってあげるから、座つて頂戴」

「え？　えっ、ちよっ！」

「ほら早く」

ここ最近でずっと病室にいた島風の長い金髪は少しばかり傷んでいた。それに気付いたビスマルクは常に持っていた化粧道具を取り出し、狼狽える島風を半強制的に椅子へ座らせる。なされるがまま島風は不安な気持ちになりながらもビスマルクに髪をとかされていた。

「髪は女の命よ、面倒臭くてもこれからは丁寧にしなさい」

「は、はい……」

ビスマルクに何も抵抗は出来ず、島風は戸惑いの表情を隠せないまま返事した。

何か会話をする事もなくただ沈黙の時間が流れていく。

徐々に窓から朝日の光が鮮明に明るくなり、外で誰かが走る音が聞こえてきた。

何故初対面の艦娘に自身の髪を整えさせられているのか、後になって不思議と考えたがビスマルクに嫌な思いをさせたくなかった島風はそのまま従っていった。

「……ビスマルクさんはもし解体されて人間になったら、何がしたい

ですか？」

しかし沈黙が耐えられなかった島風はどうとう口を開いて自身の悩みや行く末を交えた質問をビスマルクに聞いてみた。

■ 医師から言われたような自身の価値を探すという言葉を気掛かりにしていた島風は、いずれは自分も解体される身だと考えており、もし他の艦娘が解体された時、後の人生をどう歩むのか気になっていた。

「んーそうねえ……まあ個人的には色んな所に行つて遊んでいたいけど、出来れば一番は……好きな人と付き合つて結婚して、子供を産んで家族を持ちたいわね」

「……」

ビスマルクの回答を参考に出来ればと思つていた島風だったが、予想外の答えに何も返事をする事は出来ず反応も無いまま黙つてしまった。ただそこまでに明確なやりたい事が簡単に言えるビスマルクに少しだけ羨ましく思える。

自身もそういう風に生きていけば価値を見い出せる事が出来るのだろうか、自分も好きな人と付き合つて結婚して家庭を持てば少しは変われるのだろうか。

考えを処理し切れずモヤモヤした複雑な気持ちたちが徐々に膨れ上がった。

「じゃあ逆に聞くけど島風、貴女は解体されたら何がしたいの？」

「えっ?」

「えっ、じゃないわよ。島風は何がしたいの?」

今度はビスマルクから逆に聞かれ、予想だにしなかった島風は思わず聞き返す。

当然島風は何をやりたのか全く決まっていない。

それどころか自身の未来が不安でしようがなく感じて怯える毎日だ。

なんて納得のいく答えを返せばいいのか分からない。

ビスマルクに少し期待されているのが嫌に思えた。

こんな質問なんて聞かなければよかったと後悔もした。

変に答えれば機嫌を損ねる可能性がある上にビスマルクの善意で髪を整えてくれているこの状況を失う可能性もある。

考えるだけで時間が進む度に緊張が止まらない。頭の中で慌て始めた島風は無意識に口を開いてこう言った。

「……………まだ……………決めてないです」

「あら、それは楽しみね」

「楽しみ……………？ 何故？」

また予想外の返答に島風は思わず復唱して聞いてしまった。

何も決めていないのに何故これから楽しみになるのか、島風の中では到底理解に苦しむモノだった。

何も無い自分に、

何も出来ない自分に、

これからどう生きるのか分からない自分に楽しみがあるとでも言うのだろうか。

それとも何も決まっていけない自分を皮肉を込めた意味で言ったのだろうか。

島風は顔を俯いきながら悲しげな表情で手を握った。

「やる事が決まっていけないっていう事はつまり、これからやりたい事を自分自身で自由に決めれるって事でしょ？ 自分が知っている事は勿論、この世界にはまだまだ私達には知らない事が沢山ある。それを知れば楽しくなるし、自然と興味が湧いてきてやりたい事だと決まっていけるものよ」

「そう……………なんですか……………？」

「……………？ そうだけど……………？ 何ら疑う余地なんてないわ。まあでも島風はこの世界には何かがあるのか、まだまだ知らないようね」

ビスマルクの話聞いて島風は自分を励ます為に言っているのかと疑問に思ったが、ビスマルクの反応を見ると彼女は本気で思っているようだった。

ただ単純にビスマルクはこれからやりたい事を決められる島風を羨んで伝えたのかもしれない。

ビスマルクは遙か遠くの国から来た海外の艦娘で、日本の艦娘とは

一風違った外見をしている、言わば本当の外国人のような艦娘。

日本とは違う世界を見ているのだろうか、島風は本当に少しだけ気になっていた。

「この世界の色んな所に行った私に聞いてもいいのよ？ 何だって聞かせてあげるわ、遠慮はいらないわよ」

「じゃ、じゃあ……」

島風は言葉に甘えて話を聞こうと緊張しながらも口を開く。

ビスマルクの方へ振り向く事はまだ出来なかったが、彼女はそれを注意する様な事は全く言わなかった。

寧ろ興味を示してくれたのが嬉しかったようで、嬉々としてあらゆる世界の話を教えてくれた。

その時、私は何か変わろうと心のどこかでそう思っていたのかもしれない。

いや変わろうと思ってたんだ。

だけど運命は、とても残酷で――、

〈へでは『^{アストラファイ}文曲』、任せたぞ〉

「リョーカイ……ア、通信切レタ。ハア……コレデイイカー？」

「充分。色々言イタイダロウガ所詮ハ双方デ利用シテル操リ人形デシカナインダ。イツデモ廃棄出来ル、今更イラツイタツテ意味ハ無イダロウ」

「マアソウダケド……ジャア指令通り、行ツテクルカ」

——確実に、その時は迫ってきていた。

161. 狙うは一撃必中のカウンター

プリンツが瑞鳳達と共にアリューション列島海域へ出向き、代わりにビスマルクが艦隊に加わった今日も艦娘達は『オウゲン？』叢雲達による特殊訓練を受けていた。厳しい残暑で体力を奪っていく最中でも艦娘達は挫ける事無く戦い続ける。圧倒的な戦闘能力を誇る彼女らを前に勇往邁進に咆哮を上げて前へ進んだ。

「頑張ってるわね〜」

ビスマルクは島風と一時間ほど話をした後、■医師が現れ、診察の為に病室を後にしていた。

講堂から海が一望出来る席に座り、持ってきていたペットボトルの紅茶を飲みながら艦娘達の戦闘を観戦。あの戦闘狂達に挑むこの鎮守府の艦娘達を見て関心していた。

「まあ流石に、挨拶ぐらいいはした方がいいわね」

ただ観戦して眺めるだけでは飽きてきたビスマルクは思い立って講堂を出ていき広場の岸边まで向かった。外へ出ると軍帽で陽射しを遮られたが、全身から皮膚が焼けそうな程じわじわと来る暑さが気分を損なわせてくる。

思わず手で風を扇ぎ、苦し紛れの涼しさを求めた。それと同時に付近の海域にて戦闘を依然続行中のようで、その影響が身体感覚を震わせてきた。

講堂内と外では音響や衝撃が倍近く伝わってくるのが分かる。

「久しぶりね鹿島、調子はどうかしら」

「概ね順調ですよビスマルクさん。確かに久しぶりですね、提督から話は聞いています……あ、逆になんですけど話は提督や摩耶さんから聞いていますよね？」

「その前にお偉い方から色々と言われたわ。まあ私は全く関係無いから気にしてないけど」

「いいですよね〜、ビスマルクさんは何もしていいんですから」

久しぶりに鹿島と出会ったビスマルクは隣に並んで他愛のない話をしながら観戦を見続けていく。鹿島は提督にプリンツと入れ替

わった事は聞いているようで別に驚いた表情はしなかった。

「何もしなくていいとは限らないわよ。私だつてちゃんとやる事はあ
るし、ただ今日は気分が乗らないから休んでいただけ」

「戦闘欲求を満たしたいだけの私達とは違う、とでも言いたそうな表
情ですね。まあ実際そうなんですけど」

「貴女達のような艦隊は欧米にもあるから、もうとつくの昔に見慣れ
てるわよ」

護神厄討艦隊のような戦闘狂集団は欧米諸国でも存在しているら
しい。

セイクリッド・レーシユヴァリエ
神聖なる騎士団と呼ばれ、各国から選りすぐられた艦娘五名が所
属し、大西洋海域全体を支配する【アルカイド揺光】欧州水姫と『ベネトナシユ破軍』欧州
棲姫打倒の為に日夜戦っている。

護神厄討艦隊の艦娘のように頭のネジが外れた戦闘狂が多く、各国
の軍達はそれらを逆手に取るような形で燃料が尽きるまで無制限の
戦闘を許可しているようだ。

かくいうビスマルクは戦力は少しばかり劣るため所属していない
が、あらゆる戦況にも対応出来る適応能力や判断力、艦隊全体の生存
能力に目立っていて、よく偵察任務や前線維持任務を請け負う事が殆
ど。

セイクリッド・レーシユヴァリエ
神聖なる騎士団の艦娘達は少なくともビスマルクの実力を認めて
おり、幾度か勧誘しているがビスマルクは拒否している。

「それは良かったです。皆さんにご挨拶はしたのですか？」

「今それをしようと思つて来たのよ。医療施設にいる島風にはしてき
たけど」

「そうですか」

「すまないが、貴女はビスマルクか？」

どういう挨拶をしようか悩んでいたその時に向こう側から声を掛
けられた。

ビスマルクは声の方向へ振り向き、声の主を確認する。

「ええそうよ。そういう貴女は長門かしら？」

「ああ、長門型戦艦一番艦の長門だ。話は摩耶から聞いている、これか

らよろしく頼む」

「ええよろしく長門」

長門は簡単に名を名乗り、挨拶をすると同時に握手を求めて右手を差し出す。

ビスマルクはその右手を握り、自信に満ち溢れたような笑顔で互いに握手をした。

長門の後ろには陸奥と日向と扶桑もあり、順に自己紹介しながら長門と同じく握手で挨拶を交わす。

「貴女達も頑張ってるようね。その傷は白い金剛にやられた痕かしら？」

「ご名答だ。流石凄まじい力を持っている艦娘だ、こうして敗北が続いていくと……私達がああなるビジョンが全く見えてこない」

全力で挑もうとしても掠り傷一つ付ける事すらままならず、相手の気分次第でいつの間にか無力化されてしまう。

目が覚めた時には入渠施設で身体や艦装を修復中で、そこで本当に敗北した事に気付く。

それが何回も続き敗北の回数が増重っていく事に長門や後ろの陸奥達は落胆していた。ビスマルクも長門達の表情を見て少なからず同情はしていた。

確かに長門達が言っている事には少しばかり共感出来る所がある。

艦娘という枠を超えた存在に全力で挑み続け、徹底的に敗北という二文字の言葉の意味を思い知らされてしまう。ビスマルク自身にもそういう経験は何回か記憶に残っていた。

今こうやって落ち込みつつある長門達と同じように苦しい経験は誰にだってあるモノだ。

そこでビスマルクは少し考えた後に声を掛ける。

「失敗は成功の元、って日本ではよく言われてるでしょう？ 負けた分も色々見直していけば大体何とかなるわよ、そういうのが成長っていうモノでしょ？」

「ああそうだな……ありがとう……少しばかり気になったのだが、その左腕と右眼の包帯は何か怪我でもしたのか？」

ビスマルクに励まされて感謝を述べた長門がある事に気付いていた。

今日プリンツと入れ替わったビスマルクの容姿が普段知っているビスマルクと少しばかり違っていたのだ。

右眼から眼帯で保護しており、左腕全体も指の先から腕の根元までしっかりと包帯が巻かれている。

確か摩耶から聞いた話では遥か遠い海域での任務を終わらせここに来たと話していた。

その任務による傷跡なのか、見てるだけでも少し痛ましく思えてしまう。どれだけ激しい戦闘が繰り広げられていたのかを物語っているようだ。その部分を指摘されたビスマルクは哀愁漂う表情で右手を包帯に包まれた右頬に触れさせ、包帯で保護された左腕へ視線を移す。

「……まあそんなものよ。貴女達が追い求めている七壊星の一人とちよつとやんちゃして出来た傷を隠してるの」

「ダイモニアス……？ ああ、七壊星の事か。海外ではそう読んでるんだな」

「えーっと、それは高速修復材でも消せないの？」

「無理だったわ、色んな方法でやってみただけど消える事は無かった……貴女達も気を付けなさい。七壊星ダイモニアスと戦うという事はこうやって一生癒えずに残り続ける傷を負うかもしれない、という事をね」

陸奥が高速修復材で回復は出来ないのかと聞いたが、その方法は勿論他の方法でも傷を完全に回復させる事は出来なかったらしい。

ビスマルク曰く包帯を取ると右眼は目玉自体が溶けてしまっていて視力が全く無いと言う。左腕全体も火傷の痕が著しく残っているらしく、周囲から心配されないように為に隠しているらしい。

「肝に銘じておく。さてここで話し掛けたのには少し理由があっただな……」

「あら、何かしら？」

「提督と共に居た艦娘であり、遠い海域にて戦っていたと聞く。ぜひともその経験を参考に聞きたいのだが、お願い出来ないだろうか」

長門達は回復中の間の時間を使って戦闘経験が豊富であるビスマルクの話を書き進めたが、聞いていた。

恐らくその経験を基にした戦術に関する勉強がしたいのだろう。

何せ提督の部下だった以上、明らか長門達より強いのは確かだ。聞き進めれば何か掴めるかもしれない、長門達はそう思っていた。

「いいわよ、どんどん聞いてきなさい。と言ってもここで話すのは疲れるから講堂行きましょうか」

「ありがとう」

当然ビスマルクは目立ちたがり屋なので長門達の話の快く受け入れられた。

しかし流石にとっても暑い外で話すのは疲れるからか、ビスマルクは講堂へ長門達を誘っていく。

それを見ていた艦娘達の戦闘を記録中の灰色は無意識に呟いた。

「……艦種同士、話しやすいモノなんですかね」

「いたんですか、灰さん」

「良かったですよ!!? 何ならビスマルクさんが来る所までずっといましたよ!!」

「ごめんなさい、影が薄くて気付きませんでした」

「つらい」

鹿島の隣で訓練の経過記録を取っていた灰色が長門達とビスマルクを見て呟く。

気づかなかったと嘘をついてからかう鹿島に灰色は存在証明を訴えた。それに対して鹿島は息を吸うように自然に毒を吐く。

影が薄いと言われて灰色は弱音を吐きながら落ち込んだ。

「はあ……それにしても、凄まじいですね……この訓練方法は」

護神厄討艦隊の艦娘達と潮岬町鎮守府の艦娘達が海を駆け抜けて戦っている。ある者は余裕の笑みを浮かべながら突進し、ある者は死に物狂いで砲弾の雨を掻き潜る。演習や従来の訓練とは程遠く、強くなる為の方法が通常とは掛け離れている事に灰色は戸惑いを隠せず

にいた。

「どうでしょう、皆成長してますか?」

「いえ全く」

「……ごめんなさい、もう一度おねが——」「いえ全く」

鹿島のあまりにも早い否定的な即答に灰色は聞き逃したのかと勘違いして鹿島に尋ねたが、聞き逃した訳では無い事に思わず口を閉じて黙ってしまふ。

特殊な訓練を受けてまで艦娘達は全く成長していないと鹿島は断言した。

「全く……ですか？」

「全くです。まだ始めたばかりなのにそんな短時間で簡単に上がるわけないじゃないですか。夢の見すぎです」

「でも望みや兆しとかは……」

「勿論あります。ですが現段階では誰一人として成長はしてませんね」

特殊な訓練はまだ一日しか経過しておらず、成長への兆しが見えたとしても目標には未だ近づけていない。灰色も流石にそれは分かっているが、どうしても艦娘達に希望があると信じたかった故に鹿島に聞いていた。

「寧ろ短時間で上げようと思うなんて事自体、凶々しいにも程があります。そんな簡単に強くなれるのならとつくに戦争なんて終わってますよ」

「た、確かにそうですね。道のりは長い上に険しい、ような感じに思えます」

「思えます、ではなくて実際にそうなんです。そもそもエネルギー効率を上げる為に核を成長させる事自体、本来は出来るか怪しいくらい難しい事なんです。まずは地道に一步步、段階を踏まえながら成長へ導く……目標に近づく為の道に楽な近道なんてものは存在しません」

鹿島は閉じているように細く見える目で灰色の方へ振り向いた。

オウゲン

「？」と時雨の訓練が終わったのか、反省点や良かった点などを書き記された記録書を灰色に提出する。

いつも笑顔絶やさない鹿島の顔が一瞬曇っているように見えた。

灰色は記録書を受け取りながら鹿島の一瞬的な表情を見逃さず、何か過去に嫌な事でもあったのだろうかと考える。

それと同時に練習巡洋艦としての矜持を少しだけ理解出来たような気がした。

「そうなると生まれながらエネルギー効率が高かった『?』さんとかは……楽な近道では無いんですか?」

「いえ一概にそう言える訳ではありませんよ。生まれながらにエネルギー効率が高かったとしても『?』さん達は闘争本能の暴走故に強さへの執着が人一倍尋常ではありません。自分が強くなる為ならば訓練や戦闘は惜しまず参加する、限界など知るものかと毎日何かと戦っています。そもそもアレは楽な近道というよりは目標が既にスタート地点の目の前にあっても差し迫る障害が地獄そのもので通る事さえ困難な道なので、まあ『?』さん達も自身なりに頑張っていますよ」

若干擁護しているような言い方に少し不満が募るも理由自体は至極真つ当で引き下がる他は無かった。

確かに生まれながらにして天啓を授かった『?』金剛や『黝』蒼龍のような艦娘は最初から近道をしているのかもしれない。ただその天啓の代償によって生まれた歪んだ人格が本来潜んでいた闘争本能を暴走させ、戦闘で得る欲求や強さへの執着心が彼女達を強くさせていった。

それは近道というよりは進み難く思える茨の道で生半可な覚悟や根性では決して目標に辿り着く事は出来ない道。あれだけ余裕の笑みを浮かべながら戦っているが数々の修羅場を生き抜いた歴戦の艦娘でもある。

艦娘達には想像し難いような困難や苦難、逆境に悪運などを経験している為にその強さは徐々に積み上げられた素晴らしいモノになった。彼女達もまた苦勞してこの地位と場所に辿り着き維持している。

「そういうえば提督はどちらへ?」

「白さんでしたら摩耶さんと一緒に出張中ですよ。どこへ行くかは伝えてくれませんでした、恐らく大本営に向かわれたのかと」

「そうですか。ありがとうございます」

提督と摩耶はビスマルクと話が終わり次第、何処に出掛けるかも言わずに鎮守府を出ていった。

一瞬新しく着任する軍人が決まったのかと不安を過ぎだったが提督本人が否定しているのでとりあえずは安心している。

この戦況下の中で唯一打破出来るのは提督しかいない、灰色はそう思っていた。

あの手紙を読めば尚更の話だった。

「灰さくん」

鹿島と話している途中で訓練を終えた時雨と観戦していた夕立が駆け寄ってきた。

『?』^{オウゲン} 叢雲との訓練を受けてきた時雨は見るに堪えない姿で頭や口から血を流し、頬や肌には黒ずんだ砲煙の痕や砲弾による火傷の痕、右腕や右手は変な方向へ折れ曲がり正装が血で滲んでいる。

凄まじい大怪我に灰色は仰天、すぐに時雨を心配して声を掛けた。

「つてええ!!? 時雨!!? その傷は大丈夫なのか!? 痛くないのか!? 意識はあるのか!!?」

「大丈夫だよ灰さん、高速修復材使えば何とかなるし……にしても強いな、あの叢雲は」

「そ、そうだね……でも無理ないさ、地道に頑張っていくしかないよ。とりあえず早く治しに行こう、流石に見てて心が痛む」

「あはは……ごめんごめん……」

大怪我を患っているというのに笑う余裕がある時雨に灰色は若干引いてしまう。

艦娘だからと言って高速修復材さえあればどんな傷でも癒せるとはいえ、ここまでボロボロになっても生きて戦っていた事に灰色は心が苦しいのと同時に不気味に感じた。

そして『?』^{オウゲン} に対する違和感も少しだけ持ってしまった。

そこまで時雨を痛ぶる必要があるのだろうか、自問自答せずとも本当は必要だと分かっている。

確かに時雨も戦闘には善し悪しがある故に少し経験が不足してい

るのかもしれない。『?』オウゲン 叢雲も戦っている最中で色々判断をして時雨を無力化に引き込んだからこそ叢雲本人は全く悪くない。

だがそれでもやるせない気持ちに灰色の中でどよめいていた。

「ほら早く……っ?」

立つのが精一杯の時雨を抱きかかえながらまずは医療施設に行こうとしたその時だった。観戦していた夕立が真面目な眼差しで灰色と時雨を通り過ぎていく。

夕立が向かった先にいたのは鹿島だった。

「鹿島さん……相手、お願い出来ますか?」

「えっ」

夕立は見上げながら睨む様にして鹿島に訓練を申し込む。

阿賀野とノシロの件によつて艦娘達に恐怖を植え付けた鹿島に対して夕立は果敢にも立ち上がった。申し込まれた鹿島は数秒間か考える様に沈黙し、ゆっくりと夕立の方へ顔を振り向かせ口を開く。

「……私ですか? 特に構いませんが」

「お願いします」

「分かりました。ではそこにいる『?』オウゲンさん、私と夕立さんの戦闘の記録をお願いします。貴方達は早く医療施設へどうぞ」

「わ、分かりました」

何か企んでいるようにも見える不敵な笑みを浮かべた鹿島は夕立の申し入れを快く受け入れた。

戦闘の記録を『?』オウゲン 叢雲に任せ、鹿島は跳躍して艦装を展開し海へ

立つ。

「ではこの手前の所でやり合いますようか、準備はいいですか? 夕立さん」

「大丈夫です……よろしくお願いします」

夕立も鹿島と同じく跳躍して艦装を展開し海へ立つ。

二人の戦闘海域は鎮守府広場の手前にある海域。

工廠や出撃ハッチが傍に建てられており、堤防が鎮守府の両端から伸びている。

「では開始の合図をお願いしますー!」

「はいはい……じゃあ、始め！」

訓練開始の合図が『？』オウゲンの振り下ろした手によって始まり、鹿島と夕立の訓練が始まった。

「……っ？」

『緘』レイとの訓練を終えて大怪我を負った最上と、最上を支えて抱える熊野と鈴谷が入渠施設に向かう途中で鹿島と夕立の訓練を偶然見ていた。三人とも鹿島と夕立の不可解な行動に思わず立ち止まってしまふ。

鹿島と夕立は開始の合図が流れても全く動かなかった。

全くの静止状態。

何の動作もせずにひたすら互いは相手を見ていた。

まるでそれは相手の初動を伺って警戒しているかのように、一遍たりとも動く気配は無い。

呼吸を妨げるような強い緊張が辺り一帯の空気を変えていく。

ただ風が流れる音とさざ波の穏やかな音だけが耳を支配していた。

「ッ!!!」

静寂を突き破って夕立が右腕の艦装にて殴る様に砲撃。

当然鹿島は身体を反らせて回避。

夕立は左右へ動き出し、鹿島との距離を一定にする。

そしてまた数回砲撃、鹿島は避け続ける。

鹿島も夕立のように通常速度で航行。

撃ち続ける夕立を見て何かを感じ取ったのか徐々に速度を上げていく。

後方から水柱が立ち上る程までに航行速度は上昇。

すると鹿島は突然垂直に方向転換し、夕立の元へ突撃。

反応する暇なく鹿島の回し蹴りが夕立を襲う。

が――、

鹿島の回し蹴りが夕立の頭をすり抜けた。

いやすり抜けた訳ではなく、夕立は体勢を低くして鹿島の回し蹴り

を躲していた。

回避が早過ぎて残像と化している。

直後、夕立は鹿島の背後に周って体当たりを仕掛けた。

「うッ——」

それを事前に知り得ていた鹿島は残った足で夕立を蹴り飛ばしていく。

夕立は大きく仰け反って転倒。

海面を引つ掻く様に指で引き摺り、その場に立ち止まる。

無意識で防御体勢に入っていたお陰で何とか直撃は間逃れていた。

それでも軽い目眩と耐え難い腕への激痛が夕立に襲い掛かる。

交差して防御していた両腕が痛みに悶えるかのように震えていた。

一撃を防いだだけでこの威力。

夕立は緊張で息を切らしながらも鹿島から目を離さない。

「成程……面白いですね」

「……何が……っぽい」

「念の為に反撃の手を用意して正解でした。夕立さん……それは所謂
出待ち、ですよネ？」

「っ……っ！」

自身の手を見破られた夕立は動揺しながらも鹿島を睨み返す。鹿島はゆっくりと航行しながら夕立の行動について簡潔に説明していった。

近付かれる度に極度の緊迫した空気が呼吸を惑わせに来る。

それは幻覚か、鹿島の周辺で波が暴れて海が揺れているように見えた。

「自分からは一切近接に持ち込まず、ある一定での遠距離攻撃を続け、
相手をわざとこちらへ向かわせる。そして向かって近接攻撃を仕掛けた途端にカウンターで確実な一撃を与え、また一定の距離を保つて
いく……実に面白いです」

鹿島が夕立の行動を見て気付いたのは近接攻撃への誘導。

自ら相手に接近するのではなくわざとこちらへ接近させ、相手が近接攻撃を仕掛けてきた所で反撃の一手を与える。余計な追い打ちは

掛けずに確実なる一撃を与え、且つ被弾率や物理的ダメージを極力抑えられる保守的戦闘方法だ。

本来の艦隊での戦闘から派生した戦い方で、突撃型の深海棲艦に対してかなりの有効度を示す。

「ただ難点としては安定したダメージを稼ぎにくい事とカウンターを躲された時の隙、一度見破られたらおしまいな所ですかね。エネルギー効率としてはカウンター時に急速して上がると言った感じでしょうか」

「悪いけどまだまだ手はあるっぽい……生き残ってる限りではね……!!」

「ほう……それは楽しみです……それでは私も……」

夕立の挑戦的発言に感化され、鹿島は右足を一步前に踏み出し両拳を殴る様に海面へ叩きつける。

直後、鹿島の身体から包み込む様に銀色の炎光が現れ、背後にて大きな水柱が立ち上った。

「——それらを全力で受け止めてみせましょう」

162. パソコンで調べものする時は気をつける

護神厄討艦隊の艦娘達による特殊訓練が始まって二日後。

横須賀鎮守府をまとめる総責任者の■大将は最近小笠原諸島海域で活発化した深海棲艦の動きと日本海軍内にいる関係者のリストについて調査していた。

この国の何処かにいるであろう黒■という男を見つけ出す為に一人で模索し続けているが、未だに確証が得られる証拠を得られていない。

数件か、いる可能性の高い証言や場所などはあったものの何週間前や数日前となれば確実性は薄れている。何としてでも必ずこの場所にいるという確実なる証拠が欲しかった■大将は諦めずに様々な場所を調べ上げていた。

「聞いた事ありますか？」

「何をだ」

「艦娘と深海棲艦がどうやって生まれて来たのかっていう話です」

休む暇など無い多忙な状況の中、■大将が普段仕事場とする執務室にて誰かが声を掛けた。

執務室に用意された応接用のソファに堂々と寝転がり、スマホを両手にゲームをしている。

「今じゃ別次元からやってきただとか、宇宙から来ただとか、様々な仮説がこの現在やネット上でもそう騒がれています」

「確かに不明瞭な所は多過ぎるな、その不明瞭な存在を我々は扱っている訳だが」

「そうでしょうか？ まあ、私個人としては人間の進化系みたいな感じじゃないかなとは考えてますが、正直現実味は無いのであまり信じられてません」

「そうか……んで君達は何故わざわざ私に会いに来たんだ」

■大将と話をしていたのは以前潮岬町鎮守府にて鈴谷と加賀達が演習で戦った艦隊を指揮していた南方の■中尉だ。

あの鬼の大佐の血を引き継いだと言われるほど誰にも容赦はしな

い冷酷の軍人として有名で、ラバウル前衛基地を拠点にトラック泊地を根城にしている【開陽】ミザール深海日棲姫と『武曲』シーフォウス駆逐水鬼と日夜戦闘を繰り返している。

今回は■中尉を部下にしているラバウル前衛基地の責任者である■中佐の代役としてある事を報告に秘書艦の綾波と共に横須賀鎮守府までわざわざ来たようだ。

「直接会わなくても手段はあっただろうに」

「いやどうしても大将閣下に直接見てもらいたいモノがございました、報告も兼ねて来てきた次第です」

「悪いが私は忙しいんだ、手短に頼むぞ」

「はいはい、お任せ下さいな」

■中尉はポーカーフェイスで一切の感情の緩みを許さない為か真面目に見えるが、その代わりか無意識に態度で出てしまっているようで、先程寝転がってスマホを触っていたように今度は真顔でござりをしている。多忙な■大将から手短に頼まれた■中尉は指を弾かせ音を鳴らし、綾波が持っていたアタッシュケースをテーブルに置いて中身を見せる。

「……これは？」

「先々週に我々は【開陽】ミザール深海日棲姫と『武曲』シーフォウス駆逐水鬼が支配するマーシャル諸島海域にて大規模な戦闘を始めました。以前提出しました報告書でも拝見されたかと存じます」

「ああそれ等は把握している。一部の島と海域を奪取したそうだな」
その事について話すのだろうと予測していた■大将は持つてきていた資料と報告書を読みながら話を進めていく。

潮岬町鎮守府との演習を終えた後に南方の鎮守府全体を指揮する総司令官の■大佐がマーシャル諸島海域奪取作戦を実行。■中尉の艦隊に所属する『鐵』クロガネ北上が『武曲』シーフォウスに大打撃を与える事に成功し、結果マーシャル諸島海域の一部も奪取する事に成功している。

「ですがその戦闘の最中でやけに守りの堅い島が一つございまして、奪取後に■大佐の方からその一部の島に調査隊を派遣し、上陸して調べてみました」

「で、出てきたのがコレ……と」

「そうです。地下に深海棲艦の研究施設らしきモノがあり、既に中は隠滅の為か荒らされていましたが、その内壊れていないモノを回収し、分析した所……」

アタツシケースの中に入っていたのはそれぞれ違う色をした液体の瓶が三個ほど保管されていた。

手前から順に①赤、②青、③黄、④紫色に別れていて黒い粘着質のある液体のようなモノが混ざっており、小さい瓶の中をぐるぐると移動している。

「その液体の中には未知の構造体や元素、物質などが含まれており、様々な実験の結果……コレには、恐ろしい力を持った液体という可能性が出てきました」

「恐ろしい力……？ それは一体何だ？」

「それは……」

「……艦娘を人間に戻す液体……」

「っ!!？」

「驚かれるのも無理はありません。私も最初は疑いました、ですがコレの中には艦娘を人間に戻す様な仕組みが成されていて、簡潔に言うのなら艦娘のエネルギーとは真逆の……反エネルギー物質、とさえいいでしょうか。それらが身体の中にある核を弱体化させ、徐々に収縮した後に消滅。何も拒絶反応が無いまま艦娘の姿のまま人間に戻ってしまうかもしれないのです」

四つの色の液体は恐るべき事に艦娘を人間に戻してしまう能力を

持っているらしい。

艦娘の身体の中にある核が作るエネルギーとは相反し、液体の中にある反エネルギー物質というモノが核自体を弱体化させ、時間経過で収縮または消滅させてしまう。

それは深海棲艦との戦争で一番有力とされている艦娘という兵器を根本から崩壊させる恐ろしいモノだった。

「原因としては新式解体済みの艦娘から抽出して保存していた核に付けてみたところ、先程同じような現象が発生し、もしかしたら艦娘を人間に戻してしまうのではないかという仮説が有力になっています。ただ実際に艦娘を扱った実験はしていないので不確定な要素は多く、そうなるとは限定出来ませんが」

「可能性の話でも十分に危険なモノだな……他のモノもそうなのか？」

「他のモノも大体は同じ仕組みをしていましたが、それは先程説明していたモノよりも遥かに残虐性がありました」

赤色の液体は艦娘を人間に戻すだけのモノで他の色の液体も似たような構造している。

だが赤色のモノとは別に他の色の液体には身の毛もよだつ様な恐ろしいモノが仕込まれていた。

「神経毒……ですよ。艦娘を人間に戻し、そして致死性の高い毒で死に至らしめる。テトロドトキシンやコノトキシン、VXガスなどの化学物質が検出されました」

「神経毒……だと……？」

「更にそれだけではありません。もう一つのモノには艦娘を人間に戻すだけではなく炭疽菌やエボラウイルス、そしてもう一つはカドミウムやヒ素が検出され、あらかじめ細菌の感染による死亡や重金属中毒による後遺症を計算したような構成にされていました」

それは毒やウイルス、重金属による追い討ちの一撃。

艦娘を人間に戻した後に確実に殺す為の手段として様々な物質やウイルスなどが多分に含まれていた。

しかも ■■■中尉が持ってきたモノはそれ等のごく一部に過ぎず、他

には放射性物質や原子物質なども確認されているモノもある。

その報告を受けた■少尉も思わず動揺してしまう程その液体は残酷なモノで、■大将も同様に手が震えてしまう程恐怖という名の殺意を感じていた。

「■大将閣下、これは深海棲艦等が確実に我々や艦娘を殺しにかかってきています」

最早ここまで非人道的な兵器使用が確認されたとなれば、深海棲艦の人類への明らかな殺意は確定的なモノとなる。

そしてそれと同時にこれから起きる戦争が別次元の戦いへと変わり果てていく事を決めつけた決定的な証拠だった。今まで前時代に近い従来の砲雷撃戦や航空戦を続けていた深海棲艦が現代兵器を使用すれば戦争は苛烈を極めていくだろう。

決着など程遠く思える程までに。

「最早深海棲艦等に人道という言葉は存在しません。よく考えれば化け物に近い深海棲艦に戦時国際法等で成された非人道的な兵器の使用禁止など無視されて当然。毒を用いたとなれば艦娘に有効性のある毒ガスなどの化学兵器、細菌やウイルスとなれば感染する事に特化した生物兵器、そして重金属があるとすれば可能性があるのは劣化ウラン弾……最悪の場合には……核兵器……これらを所持している可能性ががあります」

突如出現して人類を脅かした深海棲艦に戦時国際法は恐らく意味を成さないだろう。

国というモノが存在せず海を一方的に支配し続ける化け物達の群れが戦時国際法を知っているのかがそもそも疑うべき事だ。

何故深海棲艦が人類に歯向かい戦い続けるのか、その理由すらも分からない。

「これだけ非人道的な兵器を作れる程の技術があるとすれば、既にこの液体を使用した攻撃方法を開発している可能性もあるでしょう。ですが個人的に私は……深海棲艦が人類に対して異常なまでの殺意がある事、そしてその殺意を実現したかのような兵器を開発出来る程の技術を深海棲艦が所有している事に懸念を唱えかねません……」

■中尉はこの液体の事よりも深海棲艦の人類に対する殺意と深海棲艦の開発技術が革命的な進歩を遂げている事に気に掛かっていた。今までの戦争にて度々激闘を繰り広げてきた艦船同士の海上戦闘を現代でもそれ等と同様な戦闘を続けている。

最近では近接格闘技術も視野に入れた新しい戦闘スタイルが生まれていく最中、深海棲艦側は禁忌とされた化学兵器や生物兵器の使用。

もし深海棲艦が使用すれば戦況など一瞬で傾く事に間違いは無いだろう。

「ここまで明確に殺意があるとなると、深海棲艦が我々を襲う理由はある程度断定できます。例えば……我々人類に強い恨みがある、とか……」

「……」

「その時に何があった、何が起こったのか。それは私も分かりません……ですが、もしそうだとするのならば……平和を脅かす者とは、一体……どちらなのでしょうね？」

■中尉は疑う様に ■大将を睨みつける。

沈黙に包まれた執務室内に身体を震わせられるほどの迸る様な緊張が辺り一帯の空気を変えた。

秘書艦の大和や赤城が思わず後退ってしまう程に緊張は高まっていく。

まるで ■大将が何かを知って隠していると考えている様に見える ■中尉は一切表情を崩さずにいた。

「……話は以上です。このサンプルは是非研究材料としてお使いいただければ幸いです。私としてはこの報告を全世界の軍に伝えてもらえたいと思っております」

「分かった。こちらで準備しておく、御苦労だった」
「いえいえ問題はありません」

■中尉の発言により沈黙と緊張は一瞬で消え去り、秘書艦の大和と赤城は安堵の声を漏らす。

わざわざ持ってきてくれた四つの液体は横須賀鎮守府の研究施設

にて取り扱う事になり、この事実を広める為に各国に連絡するよう後々で手配する予定となった。

深海棲艦の新たな脅威を目の前に軍人二人は互いにこの液体が深海棲艦と人類に関して重要性のある事を決して言う事なく話は終わる。

が――、

「先に言っておくが……余計な詮索はするなよ」

「まさか、私は鬼の大佐と同じくそんな事には関わらない主義なんで大丈夫ですよ」

「なら、ありがたいな」

「はい……ではそろそろ私も失礼しますね」

何か怪しいと踏んだ■大将は前もって■中尉に忠告する。

■中尉は大丈夫だと啖呵を切って液体と資料を■大将に提出し、南方の鎮守府へ帰還しようとして立ち上がった。

「一つだけ言うのを忘れていたが……」

■中尉がドアを開いて執務室を去ろうとしたその時、突然■大将に呼び止められる。

「……何でしょうか」

■中尉は顔を振り向かせ慎重に返事をした。

「先程のは脅しではない……忠告だ」

「……ありがとうございます」

感謝を述べた■中尉は静かに執務室内を去る。

■大将は応接間のソファに座ったまま手を組んで考え事をしているように見えた。

「提督……その……」

「大和、君にも一つ……言っておこう」

「この世界は皮肉で理不尽な悪意なき悪意によって変わってしまった」

「ほら立て……さもなれば叩き潰すぞ」

「くそっ……!!」

潮岬町鎮守府では依然として特殊訓練が立て続けに行われていた。理不尽ともいえる圧倒的な戦闘力を前に艦娘達は果敢に挑み続け、少なからず心身共に成長への眼差しが見えつつある。

鹿島や『?』オウゲン 叢雲は艦娘の生活規律を正していき、戦闘に関する相談事も時間さえあれば受けるようになった。提督や摩耶は連日出張が多く、行先は不明とされていたが灰色が言うには大本営に向かっているらしい。

「やつほー、島風ちゃん」

「っ！ ■先生……!!」

医療施設のとある病室にて島風は窓から見える艦娘達の訓練の様子を暇つぶしに眺めていた。

途中で島風の様子を伺いに来た ■■医師が手を小刻みに振りながら親切そうに声を掛けてくる。その声を聞いて振り向いた島風は少しだけ安心したような表情を見せて ■■医師の名前を呼んだ。

「今日は何しようかー?」

「今日も……外の事が知りたい、です……!!」

「オツケーー！ じゃあまたパソコン持ってくるわね」

■■医師は島風に今日は何がしたいのかを問い、調べ事がしたいと聞いてノートパソコンを取りに一旦病室を出ていく。

■■医師は毎日島風と話をして互いに信頼関係が結べるように心掛けていた。彼女の心を傷つけず癒す為に最善の努力を尽くし、一人の人間として自立できるように精一杯の支援を施している。

「今度は何を調べるの?」

「昨日ビスマルクさんが言ってた「死海」という不思議な海について知りたくて……」

「……まあ選んだのはともかく、知っておいて損は無いわね」

島風自信にも微々たるモノだが変化が見られていた。

■ 医師の支援とビスマルクの影響により、少しづつではあるものの興味を持つと努力している。

ビスマルク自身も ■ 医師と初めて出会った際に島風の事情を聞き取り組んでくれるようだ。信頼関係は完璧とは程遠いがそれでもお互いに信じ合えるように気を掛けてくれている。

「人間でも浮かべてしまう湖……そんなのがあるんだ……」

「ここにも書いてあるけど塩分濃度が高過ぎて私でも浮くらしいね」

死海という場所を検索エンジンで調べ、どのようなモノなのかを知る島風。

ビスマルクが言っていたのは自分達と同じ様に人間も浮く事が出来る湖だと聞いていた。画像や動画を見る限りでは立ちながらではないが仰向けになって浮かんでいる様子がよく分かる。もしそこに自分が行っていたらどんな気分になれるだろうか、不思議と楽しみという感情が溢れそうになった。

「行って見てみたいなあ……」

「っ……い！」

■ 医師はパソコンから見える景色を眺めていた島風が無意識に笑みを漏らしている事に気付いた。この鎮守府に来て漸く笑みを浮かべた島風を見て ■ 医師は少しばかり安堵する。行ってみたいという島風に対して誘う様に言葉を繋げた。

「……行けるといいわね」

「ん、これは……」

島風が死海について調べていたその時、ふと検索履歴に『小笠原諸島』という文字がうっかりと見えていた。

それを隣で見た ■ 医師が顔面蒼白で頬を引き攣りながら島風の方へゆつくりと視線を写す。

深夜に ■ 医師が現在の小笠原諸島がどうなっているのかを調べていたが、日々の疲れが溜まっていたのか検索履歴を消すのを忘れていたようだ。

島風はその言葉を見た途端、何秒か身体を固まらせるも手に持つマ

ウスだけを動かし興味津々に画面を見つめる。

「島風、ちゃん……？」

「今……どうなってるんだろ……」

「そ、そうね……私にも分からないわ……」

島風と■醫師がパソコンで調べ事をして六時間が経過、護神厄討艦隊の特殊訓練も終了し、空は黒く染って点々と光の粒が現れる夜になった。

提督と摩耶は夕食の時間より遅く帰還し、工廠で桃明石と確認を取った後に執務室へ向かう。

月の光に照らされた薄暗い夜の広場や海辺では艦娘達が迷惑にならない範囲で自主的に訓練を行っていた。筋トレや対人近接格闘技術などそれぞれ必要な技術を身に付ける為に訓練当日からずっとやっているようだ。

更に鎮守府の隣にある島の海域では木曾と天龍が実戦形式の剣術を学んでおり、寮では長門や加賀が資料や教術書などを読んで勉強している。

流石に全員が夜中に訓練を行うのは提督や護神厄討艦隊の艦娘達にバレてしまい、何を言われるのか分からないのでローテーションを組んでいるらしい。とつくに提督や護神厄討艦隊の艦娘達は気付いているようだが負担にならない範囲程度なら黙って見過ごしている。「……寝てるわね」

一方医療施設では既に島風が就寝していた。

手術後から五日間ほどが経った今では体調は殆ど回復し、酸素マスクもそろそろ外しても構わないと見頃を立てていた。

■醫師は自身が一度仕事を片付ける前に島風の様子を見るようにしている。

今日の夜もすやすやと深い眠りにつく島風の様子を見に■醫師は静かに病室の中へ入っていった。

「まあ自動で見張ってくれてるから余程の事が無い限りはあまり問題は無いけれど……どうしても見たくなるのよね……」

眠る島風は少しばかり寝相が悪く■醫師が時々面倒を見ていた。

今回も同じく島風の体勢を整え、白い布団を静かに被せる。空調設備の気温調整を行いながらいつも打っている点滴の量を確認。

一息つこうと■医師は島風が寝るベッドの傍にあつた椅子に座り、島風の前髪を左右に寄せて寝顔を見る。

「……はあ……今日は思いつ切りやらかした……」

■医師が思わず呟く。

まるで弱音を吐くように滅多には聞けない弱った声が聞こえた。

「ごめんね島風ちゃん……本当は貴女が一番辛いはずなのに、医者である私は貴女に対して何もしてあげられてない……」

島風の事で悩んでいた■医師は両手で頭を抱える。

弱りきつた島風に対してどう接すればいいのか、心療内科関係の様々な学書や資料などを読んで毎晩勉強していた。寝る時間を押し、島風の心を癒す為にはどんな方法が最優先かをノートに纏め、精神内科の医師をしている友人のアドバイスを参考にしながら取り組んでいる。

心療内科や精神科については医学生の時にある程度は学習済みで幾度か治療した経験もしているが、一人の患者を完全に治療出来るかと言われると難しい部分があつた。

「小笠原諸島がどうなってるかなんて簡単に言えないし、そもそも信頼関係なんてそう簡単に築ける訳じゃないのに……信じる事に意味はあるのは勿論なんだけど……それじゃまるで私が島風ちゃんに信じる事を強要してるみたいじゃない……」

島風との信頼関係をいち早く築く為にも島風本人から信じてもらわなければならない。

だが信頼関係というものはそう簡単に築けるモノではなく、長い月日を重ねて積み上がっていく地道な方法しかない。

それは当然■医師も分かりきっており、この先島風とどう関係を築けていくのか大体の示しはについても不安は余分に残っていた。

「違うの……大事なものは信じようとする勇気が必要なの……島風ちゃん自身から信じてもらわなきゃ駄目なのよ。本当の信頼関係はそこ

から始まる……指示された信頼なんて意味が無いのよ……頑張りなさい、私……努力はここからよ」

島風に信頼される為にも島風自身にストレスを与えないやり方で地道な努力を続けていく。信じる事を強要せず本人から勇気を出して動いてもらう様に精一杯頑張らなければならぬと■醫師は自分の頬を叩いて喝を入れた。

弱音を吐いている暇があるなら少しでも島風の為になる事を考える。島風が自身の価値を探している様に自分もその価値を見つけるサポートを続けると■醫師は決心した。

「……だから、これ以上島風ちゃんに辛い思いをさせないでください……お願いします……」

かつて数多の熾烈を極めた戦場で名も知らぬ敵と交戦し、身体と心を歯止めなく損傷し続け、その損傷が仇となって深い心の傷を負ってしまった一人の少女の穏やかな未来を■醫師は島風の手を優しく握って祈る。

これ以上不幸な目には会わせないでくださいと心の底から祈り続けた。

散々な程辛い目に会い続けた島風を救いたいと一心に思いながら何度でも祈る。

カーテンの隙から漏れる月の光を希望の光として島風の輝く未来へ導く為に。

「これからは……私で良ければだけど……一緒に色んな所、行って見よう……って誘ってみようかな」

祈り終わった■醫師は島風が色んな場所へ行きたいという意志を支援する為に誘ってみようかと考える。

勿論それはこの戦争が終わった後にやる事でその後もやらなければならぬ事は沢山あるものの、島風の為ならば問題無いと■醫師は軽く微笑んだ。

最後は島風に小さな声でおやすみと伝え、静かに病室を出ていく。

数十秒して島風は誰もいなくなった事を見計らって目を開いた。

「……■先生……」

「提督、いよいよ明日だな」

「ああそうだな。明石も開発がそろそろ終わるらしい、予定通り進めるぞ摩耶」

「了解した」

163. 行きたい気持ちを更に押し通せ

「……」

「来たわよ島風、今度はどこのお話が聞きたいのかしら？」

早朝からビスマルクが島風の病室を訪れる。

初めて会った時の日から島風とビスマルクは世界の話をする為に毎朝の短い時間の間だけ会う事を許されていた。

■ 医師の判断の元で島風に対するトラウマを呼び起こさない様に注意を払う事を前提にビスマルクは何気なく島風と顔を合わせる。

「今日は、その……教えてもらいたい事があって……」

「なにになに？ 何でも構わないわよ！ このビスマルクに任せなさい！」

今日の島風は何故か少しおどろおどろしく感じると思いつつも、堂々と胸を張って高らかに声を上げるビスマルク。

島風は緊張しているのか指を無茶苦茶に絡めさせ、最初の言葉を噛みながらもビスマルクへ伝える。

「ゆ、ゆゆ勇気を出せる方法を……！ 教えてください……！」

島風がビスマルクに聞きたかったのは世界の話でもなく、勇気を出せる方法。

予想外の質問にビスマルクは戸惑いを隠せずにいた。

「勇気を出せる方法？」

「そうですね……その私、とても自信が無くて目の前の不安が怖くて仕方ないんです……いつも一歩前に踏み出せなくて、どうしたら勇気が出るのか……知りたいんです！」

島風はこのビスマルクがどういう存在なのか等はよく分からない。

ただ世界を駆け巡り、様々な経験をしているビスマルクならば何か答えてくれるかもしれないと島風は単純に考えていた。

「……悪いけど島風、そんな方法は無いわ」

「え……」

「勇気を出す方法なんてあればこの世界で苦労はしないわよ。恐怖や絶望を前にして勇気を出せる方法があるなら誰もがそんな方法を知

りたいはずよね」

勇気を出す方法なんてこの世には存在しない。

ビスマルクは島風の質問を一蹴して否定的に答えた。

確かにビスマルクの言っている事はほとんどの的を得ていた。

そんな簡単な方法があるのなら、今こうして何も自信がつかない自分なんてのは存在していない。

島風自身でもそんな方法なんて無い事を心のどこかでは思っていた。

「そ、そうですね……私は……」

「……島風の言いたい事も分かっている。確かに目の前の不安が押し寄せてきて勇気を出す事など無理に等しく思えてしまう事もあるでしょう。勇気を出して得られた結果が自分にとって吉であるか凶と出るかは誰にも分からない。例えば勇気を出したとしてもそれが結果的に後悔してしまう事になるのかもしれない。考えていく内に徐々に思考は歪んでいき、勇気を出さずに生きた方が安全だと消去法で辿り着いてしまうのかもしれない。私も分かるわよ、その気持ち」

島風が過ごしているベッドの傍にある椅子に座り、足を組んで頬杖を着く。

空いた右手で島風の髪に触れて前髪を整えながら話し続けた。

勇気を出せずに先にある不安に押し潰されて立ち止まっている島風の思いを理解しつつ共感する。ビスマルクでさえも時には不安や恐怖は感じて島風のように悩んでしまう事があった。

「私だって恐怖する事はあるし、怯える事だってある。誰しも恐怖という感情から逃れる事は出来ない……だけど……それでも私は立ち向かう。命を危険に晒す様な行動だとしても、勝てる確証があるのなら私は立ち向かって動くわ」

「負けるかもしれないと分かっているけど、立ち向かうんですか……？」
「負けるかもしれないと思っただけで立ち向かうなんてのは無謀って言うのよ。本当は勝つ為にその身体を動かす事が出来るかどうかが重要な。勝つ為にやる行動が自身にとって危険を伴うモノだとしても、勝てるのなら顧みない心の強さが大事なのよ」

島風の手をビスマルクは両手で包み込む様に優しく握り、真剣な目で見つめ続けながら話していく。

「勇気とは何か、その本質を自論を並べて島風に伝えた。」

「勇気とは危険だと分かっているでもその危険を承知した上で恐怖や絶望に打ち勝つ為の行動をする心の強さ、だと私は思うわ」

ビスマルクは突然立ち上がり、右手を胸に翳し堂々とした表情と姿で語る。

その姿は数々の修羅場を乗り越え続けた勇猛たる艦娘の誉れ高き姿。

右目の眼帯と右腕の包帯は名誉の負傷、万戦千傷の覇者は凱旋にて勇気とは何かを民衆に問い謳う。ビスマルクの背後にある窓から溢れる光が後光となり、島風から見えたビスマルクはまるで憧れの存在と見える程まで神々しく感じた。

「島風、さつき貴女は緊張しつつも勇気を持って私に質問してくれた。それだけでも貴女は少しずつ変わっていく。その勇気はとても素晴らしいモノよ……言ってくれてありがとう」

「そんな……私は、ただ……！　ただ——」「ビスマルク」

ビスマルクと島風の会話を遮る様に病室のドアから摩耶がビスマルクよ名前を呼ぶ。

呼ばれたビスマルクは何かを思い出したのか「あ」と声を漏らした。

「招集だ」

「そろそろかしら、分かったわ……頑張ってるね」

摩耶に呼ばれたビスマルクは病室を出る前に島風に向かって手を振り、励ましの言葉を言ってその場を去る。

取り残された島風は顔を俯き、勇気について考え始めた。

「よし、全員集まったな」

午前七時、講堂の多目的室には殆どの艦娘が集合していた。艦娘達の前に提督と摩耶が現れ、ホワイトボードにプロジェクターの画面が

映される。ビスマルクが来たのを最後に全員が集まったのを確認した提督はホワイトボードを強く叩き視線をこちらへ集中させた。

「まあ薄々気付いていた奴もいるだろうが、今日の午前八時から俺等だけで大規模な偵察作戦を実行する」

提督は手に持っていた資料を読み上げながら艦娘達に作戦の説明をしていく。

近々何か大きな事をやる噂を耳にしていた艦娘達はいよいよその時が来たかと緊張していた。

「目的は■少尉が拠点としている海域の把握。予め限定した海域は五つで順に小笠原諸島海域、硫黄島海域、南鳥島海域、南大東島海域、マウグ島の周辺海域だ。これら五つの海域内にて偵察をしてもらう」
海域の選定については大本営の地下倉庫施設に収容されている榛名の証言と先週と今週に記録された深海棲艦の行動記録や戦闘記録、各海域の情報や提督の勘で選んでいる。

■少尉の真の目的が“全世界の艦娘を洗脳させて反逆させる”などといった破茶滅茶なモノならば必ずこの海域の島で行われるはずだと提督は確信していた。黒■とアイツという存在が関わっている以上はどうしても日本近海の海域や南方海域である可能性が十分に高い。

もしあの技術を使っているのであれば、の話だが。

「なお排他的経済水域を過ぎた海域は深海棲艦が支配する海域だが、出来る限りの戦闘は避けてもらう為にもこちらでそれぞれ島までのルートを作っておいた。深海棲艦の出現記録と戦闘報告を照らし合わせた結果だ、接敵する確率は少ないと思ってもらって構わない」

偵察作戦ゆえに極力は敵との戦闘を避けてもらう為、提督や灰色が考案した海域までのルートを作成。情報通りならば接敵する確率は少ないがゼロとは断定出来ない為、いずれも注意して欲しいと提督は忠告した。

「もう一度言うがあくまで偵察任務だ、例外を除いて無意味な戦闘は避けてもらう。これは絶対にだ、例えば肉眼で確認出来たとしてもこちらに気付かれてなければその場から離れろ」

「了解した。だが例外とはつまり……」

「そうだ、俺が一番懸念しているのは七壊星との遭遇。もし遭遇して逃げきれない場合のみは戦闘を許可する。この化け物共が来るまでの時間稼ぎをしていればいい」

提督は偵察作戦時に起こる最悪の弊害として七壊星との接敵を一番に懸念していた。

深海棲艦の艦隊だけならまだしも厄介な七壊星と接敵し、戦闘が勃発するとなれば作戦に障害をきたしてしまう。

海域までのルートは七壊星の出現記録報告書も参考にしている為、なるべく接敵する事が無いようにしているが不安な要素はまだ消えずにいた。

提督はもし遭遇してしまった場合の対応としてすぐ駆けつけられる様に護神厄討艦隊の艦娘達をそれぞれ支配海域に触れない範囲の場所まで共に艦娘達と出撃し、その場で待機してもらい遭遇時に艦隊へ向かう様に対応を考えた。

「ですが司令、直接護神厄討艦隊の方たちが出撃すればいいのではないのでしょうか？」

「出来ればそうしたい所だがそれだと少し面倒な事になる。叢雲達と七壊星は惹かれ合う関係なのか分らんが、叢雲達が出撃した際の接敵する確率は異常なまでに高いんだ」

「原因としては私達が七壊星のエネルギーを感知して戦闘に向かう様に相手もこちらのエネルギーを感知して向かってくるらしいわね。まあ実際はよく分からないけど強者同士惹かれ合うモノかもね」

「この事だ」

『?』オウゲン 叢雲が補足して護神厄討艦隊の艦娘達が容易に出撃出来ない理由を簡単に説明した。

艦娘は常にエネルギーを100%供給し続け、そのエネルギーを使って戦闘を行う。

索敵は相手のエネルギーを感知して場所を特定する性質だが、これは深海棲艦にも存在する性質で深海棲艦も艦娘のエネルギーを感知して場所を特定する。

七壊星は通常の深海棲艦と比べて索敵能力が凄まじく、護神厄討艦隊の艦娘は殲滅対象として認識しているので接敵する確率は八割を超えていた。

「だからもし七壊星と遭遇した際の戦闘は出来るだけ時間を稼げ。作戦開始時には偵察艦隊が出撃した後に深海棲艦が支配する海域の目前地点まで叢雲達も共に出撃する。分かったか叢雲？」

「オーケーよ」

「ならばよし。そして偵察時の行動だがもし何か見つけたのなら即座に俺に報告しろ。何でも構わない、深海棲艦がいっぱいいるだとか黒い砲塔を見たとか人影が見えたとか何でもいい」

偵察行動時には空母や軽空母、航空戦艦や航空巡洋艦などが偵察の要となる。

島周辺や海域内にて怪しい行動や怪しいモノが見られれば即時に報告しろと提督は伝えた。

「次に艦隊の編成を告げる。小笠原諸島海域を旗艦金剛、飛龍、蒼龍、日向、暁、青葉、『緋』^{ヒクレ}摩耶。硫黄島海域を旗艦天龍、大鳳、隼鷹、鳥海、扶桑、不知火、『？』^{オウゲン}叢雲。続いて南鳥島海域を旗艦川内、鈴谷、熊野、比叡、加古、朝潮、『？』^{ヒヨウコウ}金剛。南大東島海域を旗艦古鷹、雲龍、瑞鶴、白露、神通、最上、『緞』^{レイ}木曾。マウグ島海域を旗艦ビスマルク、祥鳳、加賀、鳳翔、足柄、響、『黝』^{アオクロ}蒼龍とする。その他は念の為に鎮守府防衛として活動してもらおう」

あらかじめ決めていた各偵察対象海域へ向かう艦隊の艦娘を発表していった。偵察艦隊に選ばれた六名と護神厄討艦隊の艦娘一人が出撃する様に仕組まれている。その他の艦娘は偵察作戦時に潮岬町鎮守府への奇襲を予想して防衛といった形で進めていくようだ。

「なお偵察作戦の為に一部の艦娘には索敵能力が向上する装備品を配布する。これらを使おうが使わまいがどちらでも構わない、自身のやり方で貢献してもらえらるならそれで結構。今までの説明を聞いて質問ある奴はいるか？ ん……？」

作戦内容のミーティングが終了間際となり、提督が質問のある艦娘へ聞き出したその時。

多目的室の両開きドアが勢いよく開き、息の荒れた島風がミーティングに割り込んできた。

急いで走って向かってきた様子で背後にいる島風を殆どの艦娘達が注目している。

「提督……その作戦……私も参加、出来ませんか……？」

「……他に質問ある奴は？」

島風の言葉を気にする事なく無視をしてそのまま自然に提督は質問があるかどうかを聞いた。非常に困惑した空気に話を聞いていた艦娘達はどういった表情をすればいいのか分からない。

「お願いします提督!! 私も——」「礼儀もろくに知らないお子様は黙っててもらおうか!!」

もう一度島風は作戦に参加したいと大声で提督へ伝える。

しかし提督はその声でさえも遮って指をさしながら怒りを露わにする。手に持っていた資料を隣の摩耶に渡す様に投げ捨て、早歩きで喋りながら島風の目の前まで向かってきた。

「なんだなんだいきなりしゃしゃり出やがって！ これは重要な偵察作戦だ！ 浮き足立った高校生の修学旅行に行くような気分で参加しようなどと図々しい程この上ない!! 自身を驕り続け慢心した結果、格上に潰された途端に現実を思い知って何もかも失ったポンコツが今更何の用だ!! 自慢の速さを見破られては、頼みの連装砲や自信も全く無い。そんな奴に与える任務や作戦などある訳がないだろう!!」

提督の威圧にひれ伏すかのように島風は徐々に後退りしていく。

島風は提督を恐怖の対象として植え付けられ、涙目になって身体を震わせながら怯えていた。

提督自身としては精神が弱りきっている且つ攻撃手段が少ない島風を作戦に参加させる訳にはいかなかった。

現状の島風は今回の偵察作戦やその他の出撃任務などに障害を及ぼしかねないほど弱体化しており、病室にて ■■■ 医師の治療を何事も無く受けていればいいと考えていた。

だが何故か今になって自分自身も参加したいなどと想定外の行動

をされて、もしかしたら命を脅かす真似なるかもしれない自身の現状を理解出来ない事に提督は怒りが湧いていた。

「精神異常をきたしたお子様はさっさと病室にこもって惨めなりハビリ生活でも送ってるがいい!! 二度とそんなしみつたれた顔を俺の前で見せる——」

窓から光が漏れた瞬間、提督の頬に金色の槍が直撃した。

かに思えたその刹那、それよりも早く動いていた摩耶が金色の槍を素手で掴み押さえる。

提督を護るようにして現れた鹿島の目線には鋭い目線で睨む『?』オウゲン

叢雲がいた。

「言い方ってモノがあるでしょうよ……流石にイラついた、もう一度黙らせてやろうかしら」

「悪いがそう来るとなればあたしも手を出させてもらうぞ」

「私も見逃せませんね」

提督の意図は理解していても余計な悪口の多さに堪忍袋の緒が切れた叢雲は敵対する摩耶と鹿島に対してメンチを切る。周辺一帯の空気を揺らすようなただならぬ緊迫した状況に艦娘達は間に入れるはずもなく傍観者として見る他無かった。

「あら、必死にだらだら叫んでた奴と本当の精神異常者が随分と私に對して強気になったわね? 本気?」

「お前がもう一度手を出せば、の話だ。流石に提督も言い過ぎた事がある。とりあえずその槍を仕舞ってくれないか」

「敵からのこのこ逃げて嘆いてた貴女が望むならやっても構いませんよ」

「あ?」

「ん? どうしました?」

「はあ……」

叢雲と鹿島の煽り合いが暴走し、思わず摩耶が頭を抱えてため息を吐く。

とりあえずこの場を丸く収める事を優先していた摩耶はこの二人が犬猿の仲である事を改めて思い知らされた。

鹿島が護神厄討艦隊に編入した当初から旗艦である叢雲とは全く相容れない存在で、唯一叢雲の指示に従わない艦隊の中でも飛びつきりの問題児だった。お互いその強さの実力は認めているものの、性格が全く噛み合わずに四六時中喧嘩して戦闘になる為に普段はそれぞれ会わないように引き離している。

「そこまでにして」

摩耶、主に鹿島と叢雲の睚み合いを割って入るように声を出したのはビスマルク。それ以上口喧嘩はしないようにしてほしいとビスマルクは咎めるように注意した。

それを聞いて叢雲は金色の槍を艤装と共に収納し、摩耶や鹿島も非戦闘状態へ艤装を周辺する。

「Admiral、質問というか提案があるんだけど……いいかしら？」

「……何だ」

「島風の件なんだけど、私が面倒を見るって形で一瞬に行かせてくれないかしら？」

ビスマルクが飄々とした表情で提督に歩み寄り、島風について提案を出してきた。

途中で叢雲の槍と摩耶の手を引き離しつつ、提案内容について話し始める。ビスマルクを敵視するが如く睨む提督は何故その提案を出したのか問い詰めた。

「本気で言ってるのかビスマルク」

「本気じゃなきゃ言わないわ……確かに島風はまだ未熟で弱体化故に戦闘であれば障害が出る事もあるでしょう。だけど島風はただ単にもう一度あの場所を自分の目で見たいだけ。今回は偵察でしょ？ Admiralが接敵しないようにルートも考えてくれた訳だし、戦闘に関わるならまだしも偵察を主体とした作戦に障害は出ないわ」

「作戦中にもし避けきれない戦闘がある場合はどうする。それこそ最悪の可能性を考えての話だ」

「それは戦って勝つし、時間稼ぎは得意だからやるわよ。勿論その際

の全責任も私が取るわ、後で煮るなり焼くなり好きにして頂戴。どうせ後先短い艦娘の生よ、最後までいい好きにしちやってもいいんじゃない？」

話を続けながらビスマルクは提督を横切って島風の元へ辿り着く。島風を自身の腹へ寄せる様に抱き、ポンポンと頭を優しく叩いた。ビスマルクは島風を連れていく事に全責任を取る形で島風の作戦加入に賛成するようだ。何故ビスマルクが島風に寄り添うのか詳しい事情は分からないが、提督はビスマルクが島風と毎朝会って話している事に対して目を瞑った事に後悔した。

「提案としては私が小笠原諸島海域担当の金剛と代わりで入るわ、金剛と入れ替わる形で先程も言ったように島風の面倒は私が見るし、責任も私が取る。あー、それと叢雲と摩耶も交換でいいかしら。何か叢雲と島風は仲良さそうだし、お互い近い方がいいわよね。ねえ構わないでしょ？ 叢雲、金剛？」

「……構わないわ」

「だ、大丈夫ネ……」

「って事で……それに私は、見る目がある方だと思ふのよ……ね？」

Admiral……？」

ビスマルクは何かを伝えるように強調した声で提督に問い掛ける。

提督が自分自身の実力や過去を知っているからこそビスマルクは提督へ頼む様にして伝えた。

右眼と左腕の傷痕に隠された真実と過去を抱えながら前を向き、栄光ある歴戦の艦娘として謳われたビスマルク。

洞察力も優れてる事から自信に溢れた表情で提督を見つめている。

「……勝手にしろ」

「Danke. Admiral」

164. 雲空の向こうに見えるのは

作戦開始時刻の朝八時の手前、鎮守府内は艦娘達が作戦の準備を進める為に装備品の装着や艀装の最終調整などを行っていた。弾薬や燃料の補給を確認し、提督から渡された作戦資料に記された所定海域までのルートを艦隊で把握していく。

『各海域に向かう際に要する時間は日を跨ぐだろう。偵察開始時間を昼にした理由もそれらを想定して考えた、くれぐれも燃料や糧食のチエツクは怠るなよ』

潮岬町鎮守府から各海域までの距離は凄まじく離れており、艦娘の通常速力だと各海域によっては日にちを超えざるを得ない。一番遙か遠くにある南鳥島海域やマウグ島海域では最低三十時間以上、小笠原諸島海域や硫黄島海域では十五時間以上の莫大な時間を要する。

特定海域から近い他の鎮守府に協力を申し入れる案もあったが、この偵察作戦自体が秘密である事や■少尉が深海棲艦の提督であるという事実を隠す為に協力は出来なかった。

全て潮岬町鎮守府が作戦の指揮や管理をやらなければいけない。艦娘達は仄かにその事を口には出さずとも考えていた。

『よしまずは……マウグ島海域第五偵察艦隊と南鳥島海域第三偵察艦隊、出撃』

『行くよ！ 皆!!』

『出撃だ!』

朝八時ちようどになり、最初にマウグ島海域と南鳥島海域を担当する偵察艦隊が出撃ハッチから各海域へ勢いよく駆け走った。艦隊の背後に一人ずつ『黝』^{アオグロ}蒼龍と『?』^{ビョウコウ}金剛が後を追っていき、緊急時の対応を随時行っていく。

『この十三時間後に小笠原諸島海域第一偵察艦隊と硫黄島海域第二偵察艦隊、そして南大東島海域第四偵察艦隊を出撃させる。準備をじつくりと整えろ』

『おう任せろ!』

『Verstand en! Admiral!』

『了解です！』

各海域を担当する艦隊の旗艦達が無線通信で了解の声を上げる。予定した偵察の展開時間をなるべく同時にする為、時間をずらしての出撃を待つ事になった。

仮の執務室では急遽設置されたモニターや電子機器などが用意されており、作戦資料を手に作戦の様子を伺っていた。

「灰、お前は南鳥島海域第三偵察艦隊と南大東島海域第四偵察艦隊の指揮を任せる。何かあったらすぐに報告する様に」

「かしこまりました！」

「こちらはその他の艦隊の指揮を執る。鎮守府防衛艦隊の方はどうだ？」

司令官候補生の灰色も偵察作戦に関わり、南鳥島海域と南大東島海域の艦隊を指揮する役割を受け持つ事になった。潮岬町鎮守府に着任して以降、初めての大規模な作戦に緊張していた灰色は両頬を叩いて落ち着きを取り戻しつつ作戦に集中していく。

提督は一人で作戦展開を進行させつつ、各海域に進む艦隊との連絡や鎮守府防衛を担う艦隊の報告を受けながら指示を出していた。

『特に問題はありません。引き続き警戒を行っていきます』

「ならばよし。それぞれ海域に辿り着くまで時間はある上に作戦時間はとてつもなく長い。気を引き締めて取り掛かるぞ」

作戦開始時刻から十二時間後、島風は工廠にて出撃する準備を整えていた。

次の出撃時間まであと一時間。

久しぶりの出撃に身体が小刻みに震える程の緊張が迸っていた。

バクバクと心臓の鼓動音が耳へ波打つように直に聞こえてくる。

自分はこれからこの海へ飛び立ち、元の本拠地であった小笠原諸島を見に行く。

土産話や画面越しではなく己の目で見納め、自分自身の中にある恐怖を取り除く為に島風は勇気を出して立ち上がった。これを機に自分が変われるように、もう踏みとどまらないように島風は震える足を無理矢理押さえて二本の足で地と海を歩む。

「艦装の装備は……61cm四連装酸素魚雷と13号式対空電探……
しかない、か……連装砲ちゃんは無いらしい、やれる事は少ないな……
痛っ！ さつきから足が痛いな……」

島風と共に出撃していた自立式拡張型連装砲は五年前の小笠原鎮
守府襲撃による轟沈時に消失。

目が覚めた時には潮岬町鎮守府の医療施設にある病室におり、既に
手元にはいなかった。

現状島風の攻撃性能は水上ではほぼ皆無であり、辛うじて使えるの
は対空電探と四連装酸素魚雷のみ。とてもまともに戦える様な装備
ではなく、攻撃手段が魚雷しかないとなれば安定したダメージも与え
られない。

島風は出来るだけ足を引っ張らないように細心の注意を払おうと
決心した。

「島風ちゃん……いる？」

「っ！ はい……！ ■先生！」

艦装の最終調整に入っていた島風の元へ■医師が駆け寄ってき
た。

声に気付いた島風はすぐさま■医師の元へ近付いて顔を見せる。

■医師はどこか不安そうな表情で島風を見つめながら視線を合
わせるように膝まづき、島風の両肩に手を置いた。

「島風ちゃん……本当に大丈夫なの？ 無理しなくてもいいのよ？」

■医師は島風の事を自身の事のように心配していた。

手術後の体調が素早く回復したとはいえ、精神面ではまだ不十分な
所がある。作戦における最悪の可能性でまた島風の身に危険が及べ
ば次は二度と立ち直れないかもしれない。

■医師は島風が作戦に参加すると聞いて何時間も悩み続けた後
に島風の本心を聞きに来ていた。

「……大丈夫です■先生。私、もう一度あの場所を見てみたいんで

す……！ 結果がどうであれ、自分の目で確認したい……」

「っ……」

「大丈夫よ doctor」

背後からビスマルクが現れ、心配する ■ 医師に声を掛ける。気付いた ■ 医師は名前を呼び、ビスマルクは話しながら島風の背後に回り島風は大丈夫だと堂々と宣言した。

「ビスマルク……」

「今回は私がいるから貴女は安心なさいな！ 確かに多少不安はあるだろうけど、私がいる限りは絶対に安心だから。大丈夫よ」

「……そうよね。貴女がいれば大丈夫よね……任せたわ、ビスマルク」
「ええこの私を頼って任せなさい！」

ビスマルクは腰に手を当てて胸を張る。

自分に自信満々な様子でそれを見た ■ 医師は島風が身を寄り添う理由が分かった気がした。

確かにビスマルクなら島風を任せられるかもしれない。あの提督の艦隊に所属していた艦娘で話を聞けば海外で目立たい活躍をしている凄まじい実力の持ち主だ。

例えば敵と接敵しても、最悪の可能性が当たったとしても、必ず彼女が導いてくれるだろう。

「……島風ちゃん……気を付けてね」

「は、はい！ 頑張ります！」

■ 医師は島風の両肩に触れていた手を離し、最後に言葉を残して二人の元を去っていった。それはまるで最後の別れを涙ぐむ様に悲しげな表情で、別れる際に振っていた手も何か躊躇っているように見えた。

「本当は……止なきやいけない、んだけどな……」

■ 医師は早歩きで医療施設に戻り、自身の部屋へ閉じこもる。

閉じた途端にドアの方へ寄り掛かりながら体育座りで落ち込む様に腕で顔を隠した。

「はぁ……」

本当は止めるべきだった。

本当は止めなければいけなかった。

だが止める事は出来なかった。

何時間も悩んだ末に島風へ作戦参加の中止を促そうとして話しかけたのに、いざ言えば頭が真っ白になって何て言えばいいのか分からない。

内心期待と不安が織り交ざっていた島風の顔を見て、参加は止めて欲しいと口に出す事が簡単には出来なかった。自ら変わろうとしている島風を無闇に止めれば、もう二度と自ら変わる事はできないのかもしれない。

逆に止めなかったとして、変わろうとしている島風の前に最大の不安が的中すれば、それこそ本当に島風は変わる事が出来なくなるかもしれない。

何時間も悩んだ。

何回も考えた。

何も出来ない自分が哀れで涙が出ながらも、脳や血管がはち切れるまで悩み、そして考え続けた。

何かもつとしてあげられていたら、何か良い言葉を掛けられていたら。

そう思うだけで苦しくなっていた。

「私は、馬鹿だなあ……」

『小笠原諸島海域第一偵察艦隊、硫黄島海域第二偵察艦隊、南大東島海域第四偵察艦隊、出撃』

『行くぜ！』

『この私についてきなさい！』

『行くよ！ 皆！』

作戦開始時刻から十三時間後に小笠原諸島海域と硫黄島海域、南大東島海域を担当する偵察艦隊が同時に出撃。

出撃時間は夜の二十一時であり、既に点滅した光が広がる夜空が広がっていた。そして暗黒に包まれた海を照らすかのように月の光が淡く海面を写している。

各艦隊はルートを見失わないように方角を確認し、指示された方向へ舵を向けた。

「灰、南鳥島海域の方はどうだ」

「敵と接敵する事無く順調に進行方向へ進んでいます。このまま行けば予定時間には辿り着くかと」

「ならばいい。そのまま見張っていてくれ」

「了解です！」

十三時間も経過しているが作戦は滞りなく順調に進んでいた。

提督が事前に決めていた各海域までのルートが運を呼び寄せたのか、全く障害の一つもなく進行出来ている。途中で艦娘達に休憩を促しつつ、警戒を怠らない様に指示をした。

「朝、ですね」

「ああ……そうだな」

「こちらの方は順調です。問題なく向かっています」

「分かった、引き続き何かあれば報告しろ」

作戦開始時刻から二十四時間が経過し、とうとう一日分の時間を超えた。

深夜中は一切の一睡も許されず、艦隊が常に敵と接敵してもおかしくないという意識で気を緩めずに見張っていた。灰色も襲い掛かる睡魔に負けない為に用意していたエナジードリンクを飲み干し、身体を動かしては艦隊に指示を出す。

この先何が起こるのか予想できない、深海棲艦との接敵や最悪の可能性が不安の種として残っている分は緊張は解けなかった。

『南鳥島海域第三偵察艦隊旗艦川内、目標地点に到着したよ』

『マウグ島海域第五偵察艦隊旗艦日向、いつでもいける』

『こちら南大東島海域第四偵察艦隊旗艦古鷹、到着しました』

『硫黄島海域第二偵察艦隊旗艦天龍、着いたぜ！』

『ビスマルクよ、こちらも目標地点に着いたわ。いつでもいけるわよ』

「よし、じゃあ予定通り作戦を第二展開へ移行するぞ。それぞれ各海域にある島内部の偵察を始める、何かあった次第俺か灰色に報告しろ」

了解と全員の声が重なり、各艦隊にいる偵察機を装備した艦隊達が一斉に発艦させていく。偵察機の大軍は空高く上昇し、目立たない様

に散らばって行動していった。深海棲艦の敵機機動部隊や対空レーダーなどに引つ掛からないように艦娘達は偵察機に乗る妖精達に指示を出していく。

「蒼龍、何か見えた？」

「いや今のところは何も……もう少し近付いて見るね」

「分かったわ。周辺に敵の反応は？」

「今のところはありません」

「なら今は大丈夫ね」

小笠原諸島海域の周辺を通常速力で進行し、島が肉眼で目を凝らさなければいけない程の距離を保ちながら偵察を行う。ビスマルクは旗艦を日向に任せ、事前に持ってきていた双眼鏡で一度島を確認した。

「島風、見えたわ」

「っ！」

持ってきていた双眼鏡を島風に手渡して教える様に島の方向へ指をさす。

島風は慣れない手つきで双眼鏡を目に翳し、約五年ぶりの小笠原諸島にある父島を確認した。

「あそこに深海棲艦がいっぱいいると思うと、悍ましいな……」

「いま現在じゃ日本から一番近い深海棲艦の前衛基地ですもんね。近々大本営も奪取作戦を計画してるようですよ」

小笠原諸島海域の中心にある父島は約五年前の深海棲艦による奇襲攻撃で拠点だった鎮守府は破壊され、深海棲艦の前衛基地として生まれ変わっていた。

五年前から島周辺には黒く禍々しい十字架の様な鉄柵が夥しく突き刺さっており、クレーターの様な爆発跡が至る所に著しく残っている。勿論住んでいる人間は誰一人として居るはずもなく、そこにあるのは常人であれば失禁しかねない程の空間すら歪ませる狂気と殺意が立ち込めていた。

「ん……？ あれは……？」

「何か、見えるね……」

向は崩せない」

『分かった。じきに』^{オウゲン}『?』とも合流できるだろう。何かあればまた報告してくれ』

帰還する途中で大きな積乱雲が光さえも遮る壁の如く目の前に聳え立っていた。積乱雲の真下は青黒く濺んでおり、波が暴れる様に荒れている。雲底が目に見えて黒み帯びており、無数の水の粒が風と共に降っているのが分かった。

その先の水平線に光が差し込んでいる事から規模自体は小さく、ものの数分で切り抜けられるかもしれない。

だが迂回すれば深海棲艦との接敵率がとてつもなく上昇する為に危険を冒してまで変更するのは面倒だ。ビスマルクはこのまま切り抜けていく方向で提督に報告し、艦隊にそれぞれ見失わぬように声を掛け合いながら嵐の中へ突入した。

「島風、多分これから始まるだろうと思うけど」

「はい、何でしょうか……?」

「恐らくまたあの島は取り戻せるわよ」

ビスマルクは自身の隣にいた島風へ話し掛ける。小笠原諸島を双眼鏡越しに見る事が出来た島風へ希望を持たせるかの様にビスマルクは勇気づけた。

雷の音がする。

「青葉が言っていたように近々奪取作戦も実行に移せる段階まで来てみたいだし、その時作戦に参加は出来ないと思う」

「それは……私も、分かっています」

横須賀鎮守府の責任者であり参謀総長の■■大将が立案した小笠原諸島海域奪還作戦が近々実行させる段階にまで来ているという。

今回は七壊星との戦闘を考慮して護神厄討艦隊を出撃させるらしく、作戦の展開と様々なイレギュラーを予想して確実に奪還出来るよう組んでいるらしい。

その時に潮岬町鎮守府の艦隊が参加出来るのかは分からないが、万

が一に参加出来たとしても現在の島風では出撃できなかつた。それは島風自身も身に染みる程理解しており、この作戦以降からは解体又は退役して身を引くつもりでいる。

黒い雲底から稲妻が放たれた。

「だからせめて取り戻した時は仲間を吊って、そして仲間の分だけ貴女は生きなさい。死んでいった仲間もきつと貴女を…… Scheisse!!!」

一瞬艦隊の前を碧色の稲妻が通り過ぎた事にビスマルクは先に気づいて叫んだ。

直後、叫んだ瞬間に大きな碧色の稲妻が積乱雲から激しく波を穿ち落ちていく。

碧色の稲妻は海を食う龍の如く落下し続け、消えた瞬間に巨大な水柱を立ち上らせた。

「ゴ機嫌ヨウ」

その声が聞こえた途端、背筋が凍る程の殺意がビスマルク達を襲った。

それはまるで地震のように、海面や波だけではなく空気さえも揺れているように感じた。

身体を動かしてはいけないような謎の恐怖が身を包んでいた。

ビスマルク達の目に映るのは特徴的な尻尾の艦装と黒いフードを被った深海棲艦。

黒いフードから覗き込むように碧色の雷眼が稲妻を迸っており、尻尾の先端にある口のような艦装から稲妻を放出させている。

その姿に誰もが戦慄を覚えた。

『『アストラファイ
』』文曲』……戦艦レ級……』

「ヤア……ドウモ」

165. 黒雲に轟く碧色の稲妻（アストラファイ）

「ヤア……ドウモ」

荒れ狂う嵐の中で稲妻を背景に『アストラファイ文曲』戦艦レ級が話し掛ける。頬が張り裂けんばかりの狂気を感じさせる笑みは恐怖や緊張を迸らせていった。戦艦レ級の周辺にはまとめていたであろう深海棲艦の艦隊が出現し、ビスマルク達を睨みつけている。

「……何ダ、折角ヒトガ話シ掛ケテルノニ無視カ」

警戒するビスマルク達を前に『アストラファイ文曲』戦艦レ級は頭にはてなマークを浮かべて戸惑い始める。

当然接敵した相手が国を滅ぼしかねないとされる深海棲艦の中でも特に危険度の高い化け物クラスの深海棲艦となれば、緊張と恐怖で身が固まるのも無理はない。

七壊星打倒の為に訓練を受けていたとしても実戦にはまだ早すぎるような状況だ。自身の攻撃が目の前にいる『アストラファイ文曲』戦艦レ級やあの七壊星相手に通じるのかすら不安に思ってしまう。

「何カ言ツタラドウダ？ 別ニ私ハマダ戦ウツモリハナイシ、今スグ

沈メル訳デモナイ……イクラナンデモ話シテクレナイト寂シイゾ？」

「……だったら即座に見逃してほしいものね」

「ソレハ無理ナ相談ダ、接敵シタ以上ハ叩キ潰スノガ私ノ個人的ナ信条ナモノデネ……」

『アストラファイ文曲』戦艦レ級は深海棲艦や七壊星の中でもトップクラスの速力を持つている。

稲妻の如く海面を駆け走り、弾速や反射速度が異常なまでに高く、接敵した艦隊を自慢の速さで翻弄し撃ち滅ぼす厄介な深海棲艦だ。

しかも不幸の連続として天候が凄まじく悪くて航空機は発艦不可能、波は唸り経つ山のように暴れ狂い、思わず海面を転んでしまうほどだった。

「Admiral. 緊急事態発生、七壊星『アストラファイ文曲』、貴女達で言う戦艦レ級と遭遇。その他重巡り級flagship二隻、軽巡へ級elite二隻、戦艦夕級一隻、合計六隻よ」

『分かった。』オウゲン『?』には既に向かってくれている、二十分ほど待てるか』
「問題無いわ。楽勝よ」

すかさずビスマルクは提督に接敵した事を敵艦隊の情報も合わせて報告する。

提督は何一つ文句は言わないまま冷静な対応で『?』オウゲン『叢雲に援護へ向かうように指示を入れた。』

予定時間では二十分、ビスマルクは余裕だと笑みを浮かべて報告を終了させる。

「ソチラの提督ニ報告カ、コノ私ヲ相手ニ援軍到着マデドレグライ持ツカナ」

ビスマルクは幾つもの戦況を乗り越えてきた歴戦の艦娘だ。

生き残る術や戦い方などは知りたくない程に知り尽くしている。

それらの方法で艦隊の旗艦として大きく貢献し、仲間と共に死線を潜り抜けた。

だからこそこの絶望的な状況も必ず乗り越えられる。例外は存在しない、ただ目の前にいる敵の事だけを考える。

ビスマルクはそう信じていた。

「ン? ヨク見タラ一隻多イナ。一、二、三、四、五、六、七隻ナノカ。ヘエ〜今ハ七隻……チョット待テ、才前……」

「ひっ……!!」

アストラファイ

『文曲』戦艦レ級がビスマルクの艦隊を一人ずつ数えていく内にある異変に気付く。艦娘は六人を一艦隊として編成されており、深海棲艦側も六人を艦隊として編成されていた。

だが今回は一人多い事に気づき、ビスマルクの影に隠れて怯えていた艦娘を目撃する。

長い金髪や特徴的な正装を見て戦艦レ級はその艦娘の名を思い出した。

「モシカシテ……アノ時ノ島風カ!!? 何デココニイルンダヨ! 確カ私ニ沈メラレタハズナンダケド……ツテアアソウカ、アイツニ再利用サレタンダツケカ。流石ニ忘レテタワ」

「何の話をしてるのかしら」

「ナアニ、チョットシタ昔話ダヨ。タダソコノ島風ヲ痛メツケテブツ殺シタダケノ話。流石ニコンナ所デ出会エルトハ思ワナカツタナア……ナア、島風」

『アストラファイ文曲』戦艦レ級を前にして島風はビスマルクの服を決して離さずに掴み続け、青ざめた表情で明らかに怯えていた。

目に沢山の涙を浮かべながら息が荒れていき、手足が小刻みに震え始める。

それはまるで恐怖から逃れる為に母親に縋って安寧を求める子供のように手も足も出ない状態だった。

「随分ト惨^{ミジ}メニナツタモンダナ。私ニボコボコニサレテ負ケタ挙句、スパイトシテ利用サレルンダカラ……私ナラ流石ニ死ニタクナルネ」

「っ……」

「ア、モウ一度味ワツテミル？　ビリビリ拷問、更ニパワーアップシテ面白クナツテルヨ？」

「嫌だツツ!!」

尻尾の様な艤装にある先端の口から放出する雷をより一層と迸らせ、『アストラファイ文曲』戦艦レ級は島風の反応を確かめる様にからかう。泣き叫ぶ島風にビスマルク一同は驚くと同時にこの深海棲艦が悪たる存在である事を再確認した。

戦艦レ級の言動から察するに島風はあの電流拷問らしきモノを受け続け、弄ばれていくうちに長年のトラウマと化したのだろう。

そんな非人道的な事など全くもって許せるはずがない、ビスマルク達は憤りを隠せずにいた。

「ハア……面白イ面白イ……ンジャ御託ハココマデニシテ、殺スカ」

「っ……来るわよ」

島風の拒絶反応を見て『アストラファイ文曲』戦艦レ級は腹が振れるかと思うくらいに身体を仰け反らせて嘲笑っていた。

そして突然殺すかという言葉を聞いた途端にビスマルク達は臨戦態勢に入る。

「才前ハ私ノ下位互換ダ、何デ生キテルノカ詳シクハ知ランガモウ一度殺シテコノ世^テハ私ガ最速^デアル事ヲ証明スル。他ノ奴ヲハ……」

興味ナイカラ適當ニ殺ルカ……——」

『アストラファイ文曲』戦艦レ級の姿が一瞬で消える。

稲妻の軌道を残して向かった先は——、

「オ、流石ニ反応スルノカ」

島風、を庇って『アストラファイ文曲』戦艦レ級の殴打を素手で防ぐビスマルク。

このビスマルクが只者では無いと感じ取っていたのか、反応は少し薄い。

戦艦レ級は即座に後方へ方向転換。

瞬間移動の様に残像と稲妻の軌跡を残し、ビスマルク達の周辺を駆け回っていく。

目では追えない速度で翻弄され、照準が上手く定まらない。

明らかに自分達を弄んでいた。

「うろた狼狽えないで私の指示に従いなさい！ 『アストラファイ文曲』は私が出来るだけ対応する、貴女達はそれ以外を相手して頂戴!!」

「わ、分かった!!」

「私一人デ十分ツテカア?? 馬鹿ナ奴ガイタモンダナアア!!!」

咆哮と共に尻尾の様な艤装で連続砲撃。

碧色の稲妻を纏う砲弾が息する間もなく艦隊に着弾する。

しかしビスマルクが着弾を包帯が巻かれた左拳で全て防ぎ切り、反撃に全門斉射。

『アストラファイ文曲』戦艦レ級は余裕で回避し、また姿を消して駆け回る。

「上カラハドウナノカナ?」

『アストラファイ文曲』戦艦レ級は艦上爆撃機「飛び魚艦爆」を複数発艦。

稲妻の様にジグザグと不自然な動きで瞬間的に飛行している。

ビスマルクの頭上まで辿り着いた途端に突然と急降下爆撃を仕掛けてきた。

艦上爆撃機だと分かり切っていたビスマルクは対空戦闘態勢に入り、次々に撃ち落としていく。

しかし全て防ぎ切れず、二発程着弾して爆発した。

その間に戦艦レ級は艦隊の真上まで大跳躍。

背中から空へ根を張る様な碧色の稲妻が放出される。

直後、落雷の如く艦隊へ急落下。

大きな水柱が立ち上り、艦隊の姿が見えなくなる。

水柱の中心には突き蹴りした『アストラファイ文曲』戦艦レ級と左片腕で押さえる

ビスマルクがいた。

そしてビスマルクの真下には島風が身を縮めて守っている。

「オッ？ 流石ニ止め、ナニツ!!？」

ビスマルクは『アストラファイ文曲』戦艦レ級の足を掴み、海面に叩きつける。

そして片足で戦艦レ級の顔を踏みつけて押さえた。

更には全砲口を戦艦レ級に向けさせ、零距离砲撃。

「貴女、かなり慢心してるわね。あれだけ突撃しておいて手足を掴まれる可能性を考えてなかったのかしら？」

「才前ツ……!!」

「さつきから島風を執拗に狙ってる様だけど、攻撃する方向さえ分かればどれだけ瞬間的な移動をしたとしても対策は余裕で出来る。貴女達七壊星特有の弱点よ」

世界各海域で数々の七壊星と戦い抜いたビスマルクは洞察力と記憶力が優れている故に様々な戦法を記憶している。

今回『アストラファイ文曲』戦艦レ級と戦闘するのは初めてだが、豊富な戦闘経験と先程までの戦闘を考えて対策を考えた。攻撃対象を一つに絞る七壊星特有の弱点と似ていたのを考慮してビスマルクは対策として戦艦レ級の手足を押さえ、零距离砲撃で確実なダメージを与えている。

「ハッ！ 確力ニ島風ヲ狙ツテイタ事ヤ才前ヲ舐メテイタノモ事実ダ、ソレハ認メルヨ……！ ダガ……私ハマダ……本気ジヤナイ……!!」

身体中から碧色の稲妻を放出させ、視界が眩しくなる。

『アストラファイ文曲』戦艦レ級はビスマルクの腹を強く蹴って脱出した。

ビスマルクは歯を食いしばるも痛みを堪えて戦艦レ級から目を離さない。

「流石ニ才前ヲ侮ドリ過ギタヨウダ。噂デハ聞イテイタガ本当ニ厄介

ナ存在ダ、ドウヤラ真面目ニヤラナイト駄目ラシイ……流石ニネ」

『アストラファイ文曲』戦艦レ級の真下で落雷が発生。

更に激しさを増す暴乱の嵐の中心で稲妻に浸かる戦艦レ級は徐々に力を溜めていく。全身の穴という穴から溢れ出るエネルギーが稲妻の様に具現化し、両腕を後方へ引いて掌てのひらを開いた。

戦艦レ級が身構えたのを確認してビスマルクも自身の艤装を再展開。手持ちの短機関銃型変形艤装を突撃銃型変形艤装に変形させ、戦艦レ級に照準を定めた。

『ビスマルク、奴は更に早くなつて縦横無尽に駆け回る。先程の手も通用するか分からない。稲妻の軌道に注目して戦え。』オウゲン『?』の到着まで後十八分、艦隊の指揮は俺が取る、蒼龍達の事は気にするな』

「Danke. Admiral」

『アストラファイ文曲』戦艦レ級の攻撃を護る様にして戦うビスマルクが日向達のすぐ背後で激闘を繰り広げる中、日向達は戦艦レ級が統率していた深海棲艦の艦隊と戦っていた。

嵐という悪天候で暴風雨が身体を打ち付けてくる中、深海棲艦に狙いを定めて砲撃。

だが悪天候故に命中率はかなり低下し、艦載機も発艦出来ずにいた。

『蒼龍と飛龍はこの悪天候の中では不利になっている、当分の発艦や観測射撃は臨めないだろう。二人は出来るだけ島風と共に損害しないように心掛ける事、そして暁、青葉、日向は複縦陣から単横陣に変更。落ち着いて慎重に戦え、お前らは決して弱くない』

「了解した」

重巡り級flagshipが偏差をつけて連続砲撃。

狙われた日向は身体を仰け反らせて回避し、カウンターとして砲撃し返す。

暁の発射した魚雷が戦艦夕級に命中し、軽巡へ級eliteが砲撃して青葉に着弾した。

互いに陣形は島風や蒼龍を除いた単縦陣、交戦状態は同航戦。

周辺ではビスマルクと『アストラファイ文曲』戦艦レ級が一对一の戦闘中で、巻き

込まれる様にビスマルクの砲撃が戦艦夕級に直撃し、戦艦レ級の砲撃が青葉に直撃した。

『青葉は中破状態で戦艦夕級は大破状態。艦装の見た目からして特化した戦術は見られない。単純な砲雷撃戦を仕掛けてくるだろう、elite 個体と flagship 個体は攻撃が安直だがブラフの可能性もある。まずは相手の艦装にダメージを与えてみる、雷撃は艦装に直撃したタイミングで撃つんだ』

「分かりました……い！」

「分かったわ！」

ビスマルクの突撃銃型変形艦装から連続して砲撃が行われる。

稲妻の軌道を予測して着弾する様に何度も砲撃した。

『アストラファイ文曲』戦艦レ級は砲弾を回避。

高速移動しながら大跳躍し、ビスマルクに狙いを定めて砲撃する。

碧色の稲妻纏う砲弾の暴風雨がビスマルクを襲った。

ビスマルクは急前進して回避、後方にて森のように水柱が立ち上る。

その水柱の奥で『アストラファイ文曲』戦艦レ級は尻尾の様な艦装を前へ出した。

何かがチャージされている様な音を響かせ、稲妻を艦装の口の中へ収束させていく。

艦装から照準機器を展開し、水柱に隠れているビスマルクとその先にいる島風ごと狙いに定めた。

「ッ!!」

その間僅か三秒、ビスマルクは背後のチャージ音に気付く。

「モウ遅イ!!!」

艦装の口が閉じたのを引き金に全門斉射。

幾つもの砲弾が一閃と化し、碧色の光線を生み出した。

空気突き破る様に衝撃波が広がり、水柱ごとビスマルクを撃ち抜こうとする。

一瞬気付くのが遅かったビスマルクは無理矢理身体を捻って回避。

直撃は間逃れたものの右艦装の装甲を掠めた。

掠めただけでも装甲は溶岩の様に融解してしまう。

光線の衝撃でビスマルクは軽く吹き飛ばされ、その先にいた島風は飛龍達に支えられて回避する。

「Scheisse!!! そっちがその気ならアア!!!」

ビスマルクは身体を駒のように回転して着水。

その間に突撃銃型変形艦装を変形させ、狙撃銃型変形艦装を展開する。

走り回る『文曲』^{アストラファイ}戦艦レ級に狙いを定めた。

「こっちだって手はあるわよ!!!」

「ソナ艦装^ニアカア〜!!!」

雷の速度で海を駆け回る深海棲艦を相手に照準機器の狙撃銃型変形艦装で立ち向かえるのか、『文曲』^{アストラファイ}戦艦レ級はビスマルクを嘲笑う。

だが――、

「ッ!?!」

一瞬、何かが『文曲』^{アストラファイ}戦艦レ級の頬を掠めた。

突然の理解し難い出来事に戦艦レ級は呆気に取られた表情でビスマルクを見返す。

今まで突撃銃型変形艦装で砲撃をしていたのは稲妻の起動を予測する為。

直後、戦艦レ級は先程の出来事はビスマルクの砲撃だと言う事を即座に把握した。

「緩めたわね」

しかし把握するのも遅く、その事に辿り着くまで『文曲』^{アストラファイ}戦艦レ級は航行速度を一瞬緩めてしまった。

それを見逃さないビスマルクは移動地点を予測して砲撃。

狙撃銃型変形艦装から放たれる砲弾はとても鋭く、貫通力のある一撃だ。

『文曲』^{アストラファイ}戦艦レ級は跳躍して回避しようとする。

間に合うかに思ったが尻尾の様な艦装の一部が掠め取られた。

初めて損害を食らい、赤い液体が外へ飛び散る。

戦艦レ級は海面に受身を取って着水。また稲妻の様な速度で海を駆け抜けた。

「凄イゾ！ ソノ戦イ方！ 厄介デアル事ニ変ワリハ無イガ、流石ダ
!!」

「貴女に褒められたって嬉しくないのよ!!」

『アストラファイ文曲』戦艦レ級は大跳躍。

艦隊の中心にいる島風に狙いを定める。

雲空に向けて砲撃し、急降下蹴撃を仕掛ける。

そこにまたビスマルクが現れ、左腕で戦艦レ級の蹴撃を防いだ。

先程と同じ様にビスマルクは足を掴んで海面に叩き付ける。

顔を片足で押さえ、もう一度零距离砲撃。

「ビスマルク!!」

『アストラファイ文曲』様!!」

二人は激しい砲煙と爆煙に包まれ、それに気付いた両艦隊が声を上げる。

降りゆく雨や轟く雷でさえも衝撃で歪む様に辺り一帯が揺れる様に感じた。

暴嵐によつて爆煙は消え去り、すぐに二人の姿が見えてくる、

「流石、ダナツ……!!」

「そのまま……大人しくしてて頂戴」

『アストラファイ文曲』戦艦レ級の両腕をビスマルクは両足で押さえ、左手で両足を掴んで拘束。

右手に持っていた狙撃銃型変形艦装を散弾銃型変形艦装に変形させ、砲口を戦艦レ級の目前に突き付ける。

更には尻尾の様な艦装も戦艦レ級の身体ごと押さえ付け、ある程度の動きを制限させた。

「私ヲ押サエツケテ時間稼ギヲシテルヨウダガ……アノ『?』ガ来ルマ
デノ時間稼ギナラ、アマリ期待シナイ方ガイイゾ？」

「つ……やはり分かったのね」

『アストラファイ文曲』戦艦レ級は遙か遠くにいる『?』オウゲン叢雲の存在を何故か認知していた。

その理由としてビスマルク達と接敵した事に違和感を感じた戦艦レ級は何処かの鎮守府が何らかの作戦を実行しており、その際には非

常事態時の対応が必ずあるはずだと考えた。戦闘を始める前に島風がいる事を考慮して『?』オウゲン 叢雲が来るのではないかと予想し、それまでの時間稼ぎだという事に気付き辿り着く。

護神厄討艦隊や『文曲』アストラファイ 戦艦レ級を含めた七壊星は互いにどちらも相手のエネルギーを感知する能力やその範囲が広い事に気付いており、七壊星や深海棲艦側も作戦展開時にはその範囲に入らない様に警戒していた。

「バレテイナイトデモ思ツタカ？ 流石ニ島風ガイルカラアイツカ ナツテ思ツタンダヨ！ 今頃ヤツハ、私ガ利用シテイタアイツノ廃棄物ト戦ツテルダロウナア……！」

「廃棄物……また厄介なモノを……！」

『文曲』アストラファイ 戦艦レ級は時間稼ぎの邪魔をする為に密かにアイツへ連絡を取り合わせ、廃棄物と称するモノ達を叢雲の方へ向かわせていた。予想外の事態にビスマルクは焦りの表情を隠せずにいる。

つまりは戦闘を始める前にビスマルク達へ話し掛けていたあの時間こそ『文曲』アストラファイ 戦艦レ級による時間稼ぎであり、予めビスマルク達が遂行している作戦の障害をする準備を進めていたのだ。

流石は七壊星の一角、速力や弾速、反射神経の速度だけ早いと思えば頭の回転の速さも並の深海棲艦と比べて尋常ではない。

更には相手のあらゆる手段を潰していく徹底的且つ狡猾な性格。

まさかそこまで読まれているとはビスマルクも予想できなかった。

決して『?』オウゲン 叢雲が七壊星や深海棲艦の索敵範囲内に入っていないと信じていた事や緊急事態時の対応も自分なら難なくこなせると過信していた訳では無い。

ビスマルクは一切の慢心など全く存在せず、自分自身で作戦における不規則且つ変則的な状況を考えて行動していた。

だが運悪くも接敵した相手は七壊星『文曲』アストラファイ 戦艦レ級、島風と関係性のある厄介な深海棲艦。

接敵した相手があまりにも悪過ぎた。

「Admiral!」オウゲン『?』は今どうなってるの」

『先程叢雲から報告を受けた。最低でも四十分は掛かるようだ、いけるか?』

「ふっ……問題無いわ、ベネトナシユ『破軍』相手に十三時間稼いだ私を舐めないでもらいたいわね」

「オオソチヲノ司令官ガ何言ツテタノカ聞ケナカッタケド、ソレハ流石ニ凄イ」

「聞こえるはずないでしょ貴女は黙ってなさい!!」

ビスマルクの声聞いていたアストラファイ『文曲』戦艦レ級が余裕そうに褒め言葉を言う。

苛立ちを覚えたビスマルクは散弾銃型変形艦装の砲口を戦艦レ級の目の前に突き付け、静止するように命令した。

「っ……? まさか……!」

その二人の姿を見ていた島風が一瞬既視感がある事に気付く。

記憶の中でそんな場面に自分が遭遇したような感覚が身体を無意識に震わせた。

「後一ツ、注意シテオコウカ」

「何よ」

「私ハモウ一度同ジ手段デ島風ヲ攻撃シヨウトシテ、マタオ前ニ拘束サレタ訳ダガ……同ジ事ガ二度通用スルト思ウカ?」

アストラファイ『文曲』戦艦レ級は砲口を突きつけられても臆せずビスマルクへ話し掛ける。

オウゲン『?』叢雲が来るまでの時間稼ぎだと分かっている、早々に来ない事を予知してからか時間を持って余す様な行動をし始めた。

先程戦艦レ級は真上からの攻撃でビスマルクに簡単に往なされ、一度海面に押さえつけられ拘束されている。今度も同じ攻撃で同じ様に拘束された事を惑わす様に煽ってきた。

「ええ貴方が何かしらしてくると思っ手足は拘束、艦装も身体ごと押さえ動けないようにしたんだから。大体尻尾の様な艦装から何か出してくるんでしょう?」

「ソレモ正解ダガ本当ハ違ウ。本当ハナ……」

ビスマルク達の真上に佇む様々な方向に歪んだ黒雲から一瞬光が煌めく。

『アストラファイ文曲』戦艦レ級の身体がコンマ程の単位で僅かに光りだし、島風はハッと気づいて叫ぶ。

「ビスマルクさん離れて!! そいつはああ!!」
「遅イ」

気付く間もなく頭上から一閃の稲妻が落下した。

金色の十字光が迫り立つ巨大な壁を目指していた。

巨大な壁は人の姿を成しており、海面に浮いて攻撃している。

右手と左手に艀装を構え、高速に航行する金色の十字光に向けて砲撃。

金色の十字光は容易く砲弾を回避していく。

「チツ!! こっちは急いでんのに!!」

『?』オウゲン叢雲が戦っている相手は深海棲艦の戦艦ル級。

しかしその戦艦ル級は通常の深海棲艦と比べて倍以上の大きさだった。

体長約十五メートルから二十メートル、動きが鈍いかと思えば案外素早く隙が少ない。

「厄介な連中ねっ!!」

巨大な戦艦ル級の周辺には複数の敵艦隊が『?』オウゲン叢雲を攻撃していた。

その深海棲艦とは似ても似つかない様な変わった姿をしており、まともに言葉が通じるとは思えない。

そう分析していた矢先、叢雲は巨大な戦艦ル級の連続砲撃を食らってしまう。

それに合わせて周辺にいた深海棲艦も砲撃を始めた。

大きな水柱が何度も立ち上り、金色の十字光が消えていった。

「邪魔するんじゃアア!!」

壁のように立ち上る水柱を真つ二つに切断。

瞬時に敵の位置を見極め一斉砲撃。

叢雲を中心に扇状へ砲撃された光芒が深海棲艦を殲滅していく。

連なる様に着弾して爆発。

巨大な戦艦ル級には足元に直撃し、一瞬だけ目を逸らした。

「ないわよッ!!」

『オウケン?』叢雲はその隙を見逃さない。

金鎗の持ち方を変え、巨大な戦艦ル級の片目に目掛けて投擲。

金鎗は瞬く間もなく戦艦ル級の片目を潰した。

片目を潰され藻掻き叫ぶ戦艦ル級。

叢雲はすかさず急発進大跳躍。

戦艦ル級の頭へ身を投げるように体当たりする。

そして戦艦ル級の目玉に刺さった金鎗を抜いて更に跳躍。

体勢が不安定となり、戦艦ル級は海面に仰向けで倒れ込む。

叢雲は空中で全砲口を戦艦ル級に向けて一斉砲撃。

砲弾が束となって光線となり、戦艦ル級の頭を穿ち爆発させた。

叢雲は難なく海面に着水し、敵艦隊の方へ前進する。

「島風!! 待ってて! 今すぐ行くから!!」

166. レランパーゴは駆け抜ける

分からなかった。

どうすればいいのかわからなかった。

大きな声で叫んで、

届くはずのない手を伸ばして、

たじろいで見る事しか出来なかったその目で。

頭の中が色んな感情で混乱していた。

まるで電源コードやイヤホンが意図せずして無駄に絡まる様に、簡単に解けないぐらいにまで思考回路は乱れていた。

目の前の恐怖に怯え続け、ただ護ってくれている仲間をひたすら見続ける事しかできない。

皆が戦ってくれているというのに、私は何一つ艦隊や仲間役に立てていない。

どうしようもなく怖かった。

あの碧色の稲妻が、

あの眼が、

過去に閉じ込めていた恐怖を甦らせていく。

身体全体の神経一つ一つを攻撃してくる稲妻の様な幻覚が出始めていた。

いくら身体を押さえても幻覚は治まらず、音を聞いただけでもビリビリとしたあの痛さが刺激してくる。

足に力が出ない。

腰も地面をもひび割れる岩の様な二度と持ち上がらないような感覚がする。

震えも止まらない。

呼吸も次第に荒れてきた。

——もう……嫌だ……。

「ヨツコラセ、ツト……ドウダイ？ 本物ノ雷ヲ味ワツタ気分ハ？」

『アストラファイ文曲』戦艦レ級がビスマルクの拘束から軽々と抜け出し、埃を払う様にして正装を叩き腕周りの関節を鳴らした。

黒雲から放たれた純粹な雷の一撃を直で受けたビスマルクは戦艦レ級が逃れた後に膝を着く。

一言も発さずに膝で立ったまま動力を失った機械の様に微動だに
しなかった。

「痛い？ 辛い？ 苦しい？ ネエネエ今ドンナ感じ？ ツ？ オツト」

膝を着いて佇むビスマルクの周りをゆっくりと航行し、返事もな
いビスマルクを煽り立てる。

すぐさまに日向達が『アストラファイ文曲』戦艦レ級を攻撃し、ビスマルクから距
離を取らせて守るように陣形を組んだ。

ビスマルクは全身に白い煙を漂わせ、正装は破れて燃えており、艤
装は右半分が砲身が曲がる程までに破壊されていた。肌には張り巡
らされた木の根のように赤い熱傷が広がっており、右頬と左腕の包帯
は焼け焦げていた。

「ビスマルク……？ どうしたのっ……!？」

「一体……何が……？」

「何が……! ……どうしたビスマルク!! 返事しろ!! 何があつ
た!!？」

ビスマルクは誰の声に対しても反応しなかった。目は虚ろで呼吸
は全くしておらず、ただ海面を見つめているばかり。

一連の光景にビスマルクが何をされたのか背後で戦っていた日向
達は全く分かっていなかった。

「マア確力ニ驚クノモ無理ハナイ。誰ダツテコレヲ見レバ最初ハ拍子
抜ケシタ顔デ棒ニナツテルンダカラナ……ソコノ島風、以外ハ」

「どういう事だ!!」

「説明シテヤロウカ、私ハ不本意ダツタガアイツニ改造シテモラツテ
雷ヲ多少操レルカヲ持ツテイル。速度ハ勿論ノ事、雷ノ莫大ナエネルギー

ギーニ耐エレルシ、雷ア攻撃スル事ダツテ出来ルンダ……今ノ様ニ避
雷針ノヨウニネ……凄イト思ワナイカイ？」

『アストラファイ文曲』戦艦レ級はある深海棲艦によって改造され、稲妻の様に凄
まじい速度で航行できる力を手に入れた。その力は並の人間や艦娘
では到底目で追いきれず、人類は戦艦レ級を最警戒対象として今でも
恐れられている。

七壊星という危険個体リストが確立された初期から今に至るまで
各々の個体がまとめられた情報では稲妻を体現したかの様な驚異的
な速度で海を駆け回るといふ情報が一般的だった。

だが『アストラファイ文曲』戦艦レ級の根本的な能力は驚異的な速度、ではない。
本当の力とは自然現象である雷をある程度まで操れるという逸脱いっだつ
した力。

上空何千メートルの雷雲から発せられる雷のエネルギーを自由に
吸収、貯蓄、放電させる事ができる。

雷という自然現象さえあればエネルギーを利用して高速航行、砲弾
の速度や威力を変える事ができる上、自ら避雷針となつて雷のエネル
ギーを供給する事ができるのだ。

手や身体に触れた相手に放電してダメージを与える事は可能だが、
雷自体を手で操つて相手に向ける事や手を広げて放電しダメージを
与える等といった攻撃は不可能で、あくまでも供給と貯蓄を目的とし
た力になっている。

更には力を最高の状態に使える条件として天候の悪い積乱雲の真
下にいなければならぬ為、晴天時には雷の力は衰えていき、貯蓄し
たエネルギーは使えても供給は不可能となり、徐々に弱体化してい
くようになっていくらしい。

「私達トオ前ラ艦娘ニハ、オ互イニ『装甲』トイウ外カラノ物理攻撃ヲ
アル程度相殺シテクレル性質ガアル。雷自体ハ物理現象ダカラ、アル
程度ハ相殺シテクレルダロウガ……」

『アストラファイ文曲』戦艦レ級は腕を露わにして指でトントンと啄き、『装甲』と
いう性質を日向達が理解している事を前提に説明していく。

戦艦レ級の腕は人体の血管の様に碧色に浮き出ており、エネルギー

が脈を打って光っていた。更には通常は見えないはずの『装甲』の膜を引つ張って日向達に見せつけていく。

それはまるでゴム手袋の様に伸び縮みしており、戦艦レ級が手を離すと肌に吸着していった。

「ダガ相殺シテデモ艦娘一人ヲ行動不能ニサセルグライノ威力ハ十分ニアル。数千万ボルトモノノ電圧ガ身体中ヲ一瞬テ駆ケ抜ケ、内蔵ヤ細胞ヲズタズタニ熱シテ傷ツケテイク……『耐久』ガアルトハイエ、十分ナダメージハ受ケテイルハズダ。心肺停止状態ノ可能性モアルシ、当分意識ガ戻ラナインジャナイカ？ ソレトモ、モシクハ……」

「っ!!」

死、を仄めかすような発言に一瞬日向達は最悪の想定を考えたしまった。

今自分達が囲って守っている行動不能状態のビスマルクがもしこのまま一生動かなかつたら、それこそ日向達でさえも戦えるのか分からない。

この雷を操るとされる化け物を相手に時間を稼げる事ができるのか、

ビスマルクでさえも持ち堪えるのに必死だった深海棲艦を相手に対応しきれるのか、

日向達は徐々に思考が不安なモノへと変わってきていた。

近接攻撃を仕掛ければ放電で行動不能にされ、遠くからの砲雷撃戦ならば稲妻の様な速さで翻弄され当たるかどうか分からない。触れようが触れまいがどの道あの『アストラファイ文曲』戦艦レ級は襲ってくるのだ。身体を打ちのめすような暴風雨が視界を濡らし、碧色の光を纏う深海棲艦を見逃さぬように腕で目を拭う。

先程まで戦闘していた影響で疲労は溜まっており、息は荒れて安定せず全身の筋肉が恐怖で怯えているが如く震えていた。

『アストラファイ文曲』様……」

「ン……？ アレ、へ級■タ級■ト■ノ二人ハ？ ドウシタンダソノ傷」

「スイマセン……アイツラノ攻撃ヲ受ケテ大破状態ニ……」

「ソウカ……コイツラヲ追イ込ムトハ、育テラレタダケ流石ダナ」

『アストラファイ文曲』戦艦レ級の元へ、従えていた深海棲艦達が戻ってきた。

重巡り級 flagship 二隻は小破状態、軽巡へ級 elite の一隻が大破状態、戦艦夕級一隻も大破状態と日向達も善戦していたようだ。

「ヨクヤツタナ、才前ラ。後ハ私ガ殺ルカラ引イテナ」

「分カリマシタ……」

「……サテ、流石ニモウ喋ラナクテイダロウ。ビスマルクガ意識ヲ取り戻スノモ時間ノ問題ダシ、サツサト片ヲツケルゾ……」

「っ——」

『アストラファイ文曲』戦艦レ級が身体を前に倒した瞬間。

碧色の稲妻を纏いながら島風へ突進する。

が——、

「オツ？ ヨク止メタナ、流石ダ」

「グツ……!!」

島風の目の前に日向が盾となって『アストラファイ文曲』戦艦レ級の攻撃を防いでいた。

腕に取り付けられた飛行甲板を盾代わりに足を踏ん張って耐え続ける。

日向は戦艦レ級が身体を動かした瞬間に無意識に身体が動いていた。

ビスマルクが動けない今は自分が守らなければと身体だけが反応していた。

「ツ……？ ン!？」

『アストラファイ文曲』戦艦レ級の片腕を日向が鷲掴みにして捕らえる。

直後、戦艦レ級は持ち上げられ海面に叩きつけられた。

「日向さんッッ!! そのまま掴んでおいてくださいッ!!」

海面へ仰向けに倒れる戦艦レ級へすかさず青葉が砲撃を仕掛ける。

砲撃は見事着弾、衝撃で海面からまた浮かされる。

日向は依然として片腕を掴み続け、離そうとはしない。

それどころか駒のように高速で振り回した。

「離して!! 私の番よ!!」

避雷針の様に雷を誘おうとしているように見えた暁は声を掛け急
発進。

日向は声を聞いて戦艦レ級を投げ飛ばした。
投げ飛ばした方向には暁。

暁は身体を回転させ、後ろ回し蹴りが戦艦レ級の腹に直撃。

戦艦レ級は勢いよく蹴り飛ばされた。

「面白イネエエ!!」

アストラファイ

『文曲』戦艦レ級は難なく受身を取って着水。

尻尾の様な艀装を日向達に定めて砲撃する。

日向達は回避しようとビスマルクを連れて動いた。

「遅イ」

「んなツ——」

撃った砲弾が来るよりも早く戦艦レ級は日向の目の前に現れる。

日向が気付いた瞬間には顎を殴り飛ばされ、身体が宙に浮いてい
た。

戦艦レ級の砲撃が身体の至る所に着弾。

日向は着弾の衝撃で海面に衝突する。

「日向!!」

「すまない……! 大破してしまった……!」

「チツ……砲弾の速度より早く動けるなんてイカれてますね……!!」

全ての動作が速いと言うのなら、砲弾の弾速より早く走れるのは考
えなくても分かる事だった。

稲妻の速度で海上を自由に航行する以上は厄介な方法で追い詰め
てくるに違いない。

この深海棲艦に普通の戦闘など最早存在しないのだ。

「くっ……! こんな悪天候じゃ航空隊が飛ばせない!!」

「仮に飛ばせたとしても当たるかどうか分からない!! しかも今は偵
察用に編成されてるんだから難しいよ!!」

「早すぎる! 目で追いつけない!」

「皆さん落ち着いて!! 『?』オウケンさんが来るまで後三十分耐えれば……

!!」

「ソレマデ耐エラレルカナアア〜!??!」

『アストラファイ文曲』戦艦レ級は艦隊の周辺を幾度となく駆け回り、日向達を翻弄し嘲笑う。

空気を斬り裂くような稲妻の閃光が通る度に肌を掠めた。

千本の針を一点に集中させて刺されたような鋭い痛みが襲ってくる。

荒れながらも辛うじて出来ていた呼吸も吸う度に喉に痛みを感じた。

幾度となく駆け抜ける稲妻に戦いたのか如く手足が震え出す。

「司令官！ 司令官!! だめ！ 何故か司令官と繋がらない!!」

「電磁パルスファイールドヲ展開シタ。本来ナラスグ展開スルハズダツタガ、アノ時ビスマルクトオウゲン『?』ノ対策デ電磁パルスニ回スエネルギーガ無カツタカラナ、私等ト同ジク連絡網ハ絶タセテモラツタヨツツ!!!」

日向達の周辺を駆け回っていた稲妻の閃光は徐々に速度を上げていく。

日向達を中心に横切る稲妻の数は増えていき、そして一瞬天へ駆け上がる。

瞬く間もなく日向達の頭上から急降下して島風を踏み潰した。

が、咄嗟に蒼龍が両腕を使って辛うじて防御する。

流星に衝撃に耐え切れず、蒼龍は頭ごと海面に踏み潰された。

『アストラファイ文曲』戦艦レ級は蒼龍を蹴って跳躍し、間合いを確保する。

高速で動けない空中をチャンスだと青葉と暁が狙いを定めて砲撃。

しかし戦艦レ級は身体を仰け反らせて砲弾を回避した。

更には回避時に砲弾の側面を蹴って海面に勢いよく垂直着水。

戦艦レ級は即座に左右へ高速航行し、左腕を引いて直進する。

その瞬間を見た飛龍は左拳で島風に殴打を仕掛けると考え、前に出た。

だがそれはフェイント。

戦艦レ級は左拳で殴る動作だけをして、尻尾のような艤装で飛龍を叩き潰す。

そして全砲口を飛龍に向けさせ零距离砲撃。

砲煙と爆煙の中から飛龍が白目を向いて倒れていく。

その影から暁が砲撃して現れ、背後には青葉も砲撃を仕掛けてきた。

戦艦レ級は身体を駒のように回転させ、艀装の先端にある口で砲弾を摘み取る。

そして左右にいる暁と青葉に向けて砲撃。

目では捉えきれない砲弾が脳天に直撃し、二人は吹き飛ばされた。

「サア後ハオ前ラダケダ、日向、島風」

「くっ……!!」

摘み取った砲弾を艀装の口で噛み砕き、『アストラファイ文曲』戦艦レ級は膝を着く日向と島風の前まで近づく。戦艦レ級の殴打と連続砲撃を受けていた日向は大破状態でまともに動ける様な状態ではなかった。

島風は戦艦レ級を恐れを為して腰が抜けたのか海面に尻餅をついている。

「うがつー や、やだあ!! やめてえ……!!」

日向が動けない事をいい事に戦艦レ級は島風の首を掴んで持ち上げる。

島風から離れさせようと日向が必死に身体を動かすも、艀装が悲鳴をあげて上手く思う様に立ち上がらずにいた。

ビスマルクも膝を着いて俯いたまま動く気配も無い。

全砲弾を受けた飛龍は仰向けになって倒れ、頭を踏み潰された蒼龍は意識が朦朧としながらも守らなければと満身創痍の身体を起こそうとしている。海面に吹き飛ばされた暁と青葉は大破状態で視界が霞みながらも海面を這いつくばって少しでも戦艦レ級に近づこうと精一杯の力を出していた。

「何ダ、島風ガ私ノ目ノ前ニイルノニ、動力ナイノカ？ 島風才守リ隊ノ皆サンハ」

「その手を……!! 離せッ……!! レ級……!!」

『アストラファイ文曲』ダ。ソコラ辺ノ私ト勘違イシナイデモライタイ、ネ!!!」

改めて『アストラファイ文曲』と名乗る戦艦レ級は腹いせに日向を尻尾の様な艀装

で薙ぎ払う。

そして島風の首を掴んだ手の握力を徐々に上げていき、絞められていく島風はまともに呼吸できず掠れた声を出した。

視界が薄れていき、口から唾液が垂れ流れていく。

「才前ハ一々怯エテイナイデ、戦ツタテミタラドウナンダ？ 島風」

「がっ……………」

「サツキカラ助ケテモラツテバツカリデ、才前ハ何一ツ仲間ノ為ニ動コウトシナイジヤナイカ。コイツヲヨリモ才能ガアリナガラ単純ナ恐怖ニ躍ラサレ、拳句ノ果テニハ仲間ヲ中途半端ニ蹴散ラサレテコウシテ今私ニ首ヲ掴マレテル……………何シニ来タンダ、島風？」

見下げ果てた目で『アストラファイ文曲』戦艦レ級は島風の首を強く絞めていく。

島風も振りほどこうと力を振り絞って戦艦レ級の腕を掴むも、僅かな抵抗も虚しくすぐに離してしまった。

それを見た戦艦レ級はフードで顔を隠し、誰にも聞こえない舌打ちをする。もはや雷の力を使う必要も無いと戦艦レ級は別れの言葉を告げた。

「……………ジャアナ。今度コソハ死ネルダロウ……………アノ世デ指デモ啞エナ

——「っ!!!」

『アストラファイ文曲』戦艦レ級の頬が歪む。

直後、戦艦レ級は殴り飛ばされ海面を引き摺って踏み留まる。

身体を仰け反らせた後に殴られた左頬に触れ、血が出ているのが分かった。

ゆつくりと殴ってきた相手に視線を移し、戦艦レ級は不敵にも嬉しそうな笑みを浮かべる。

「ヤット、目覚メタノカ……………ビスマルク」

『アストラファイ文曲』戦艦レ級の視線の先には落雷を受けて行動不能になっていたビスマルクがいた。

右拳を正面に突き出し、島風を守る様に抱えて膝を着いている。

ビスマルクの鋭い眼差しは如何にもやってくれたたと怒り心頭な感情が見て取れた。

そのビスマルクの姿を見て日向達は一掴みの希望を手にしたかの

ように嬉々とした表情で声を上げた。

「久々に痛いのが食らったわ……本当に意識が飛んじやうなんてね……」

「ビス……マルク……!」

「……ごめんなさい日向。私の所為で貴女達に痛い思いさせてしまったわ……ありがとう島風と私を守ってくれて……今度こそ私に任せ……!」

「満身創痍二見エルノハ気ノセイカナー?」

アストラファイ『文曲』戦艦レ級が聞こえるように大きな声でビスマルクを煽っていく。日向達の希望に不安を呼び寄せる様にひたすらビスマルクに声を掛けた。

現状ビスマルクはまだ身体の痺れが止まず、身体が上手く思う様に動けずにいた。

また戦艦レ級も度重なるビスマルクや日向達の攻撃によるダメーシが蓄積し、初めて口から血を流し怪我をしていた。

両者共にそれ等を把握し、わざと見栄を張って煽っていく。

「ヤットノ思いデ立ち上ガツタ様二見エルケド大丈夫ナノカナー?

心配ダナー?」

「貴女こそ、日向達にダメーシを与えられた拳句、随分とエネルギーを消費したみたいだけど大丈夫かしら?」

「アンナノハ掠り傷ニモナライサ。ソレニ私ハコノ状況下ナライツデモ供給デキル。他人ノ心配ヨリ自分ノ心配ヲシタ方ガイイト思ウ

ヨ?」デモマア……!」

アストラファイ『文曲』戦艦レ級が一瞬で姿を消す。

残像から稲妻へ移り変わり、ビスマルクへ正面から襲い掛かった。

戦艦レ級は左拳を前に出して殴打を仕掛ける。

次に右拳でビスマルクの顔を狙った。

「——ソナ事サセナイケド」

ビスマルクは戦艦レ級の左拳を右手で受け止め、右拳を左手で掴もうとする。

が、しかし右拳よりも先に艤装の先端にある怪物の様な口で左腕を噛んだ。

顔面や身体ががら空きとなり、戦艦レ級は右拳でビスマルクの顔面を殴打。

更に追い打ちで片足で腹を蹴り、ビスマルクを押し倒そうとする。そして艤装の先端にある怪物の様な口から電撃を放ち、トドメを刺した。

碧色の稲妻がビスマルクと戦艦レ級を中心に辺り一辺を駆け抜けていく。

太陽の光のように稲妻が分散し、徐々に眩しくなっていく。

『アストラファイ文曲』戦艦レ級が放つ最大の電撃か、最早二人の姿が稲光で見えなくなる。

「ツツ!!?」

稲妻の中心で『アストラファイ文曲』戦艦レ級は初めて驚きの声を上げる。

有り得もしない光景に余裕の表情が崩れた戦艦レ級。

最大の電撃を受け続けるビスマルクが何故か意識を失わず戦艦レ級を睨み続けていた。

電撃が迸る中、焼け焦げた眼帯と左腕の包帯が微塵と化して素肌や眼が露わとなる。

その内の左腕は電撃を放つ怪物の様な口ごと引き連れて――、
「グワハツツ!!」

『アストラファイ文曲』戦艦レ級は殴り飛ばされた。

167. シャンディエンの苦悩は遙か彼方のモノ
達へ

「グワハッツ!!!」

アストラファイ『文曲』戦艦レ級が空気の壁を突き破って殴り飛ばされた。

広がる衝撃波と共に海面を引き摺り、受身を取って立ち上がる。

口から漏れた血を腕で拭い、ビスマルクの姿に注目していた。

「何ダ……ソノ腕ト眼ハ……!! マルデ深海棲艦ジャナイカ……!」

眼帯によって隠された右眼は碧色に満ちた不気味な輝きを放っており、包帯によって隠された左腕は腕の付け根から深海棲艦特有の白い肌が現れ、腕を守る様に黒い鋼鉄の籠手を武装していた。

その特徴的な姿から想像出来る深海棲艦はただ一人、大西洋海域全体を支配する【アルカイド揺光】欧州水姫の姿と似通っていた。眼や腕から漏れ出すように溢れる碧色のエネルギーが若干黒みを帯びて禍々しく感じる。

戦艦レ級はビスマルクの秘めた力を見て、初めて危険だと全身が感じ取っていた。

「その通り……とある何処かの深海棲艦の腕と眼よ。どう？ この腕で殴り飛ばされる気分は……」

「……フツ……悪ク、ナイナ……流石ニ驚カサレタシ、ココ数年デ初メテ苛ツイタヨ……!!」

誰がこのビスマルクがあ【アルカイド揺光】欧州水姫の腕や眼を持っているなどと気付けただろうか。

艦隊にいた日向達の表情も拍子をつかれた様に声も出せないまま驚いている。

そして深海棲艦である自分レ級でさえも驚いている上に危険だと感じている。

深海棲艦の頂点に君臨する中枢棲姫の次に並ぶとされる欧州水姫の實力は全世界の深海棲艦に知れ渡っており、現七壊星達も【ドゥルベ天枢】ディアホルフ『貪狼』に次いで相手をしたくないと言わしめた程だ。もしその力を

一部でも有しているとすれば本気で戦わなければならないと戦艦レ級は身構える。

しかしそれと同時にわざわざ包帯で隠していた事からコンプレックスがあるのではないかと苛つきを自制して逆に煽りだした。

「ニシテモ、ソノ姿……醜イナ……ナアドウ思ウンダ？　才前ラハ……コンナ奴ガ艦娘ダゾ？　イイノカー？」

「一体……どう言う事だ……？」
「まるで……あの摩耶みたいに……」

真の姿を露わにしたビスマルクを見て日向達は理解し難い出来事に依然として呆気を取られていた。

ビスマルクの身体の一部が深海棲艦になっており、異形とも思えてしまう不気味さを放っている。それは提督と共にいる摩耶のような似た姿で、期待を寄せると同時に不安が込み上げてきていた。

「アー醜イ醜イ……ソノ腕ヲ見ラレテ恐レタ奴モイタダロウニ……可哀想ナ扱イデモ受ケタンダロウ？　同情シテヤルヨ、私達モソノナ扱イダカラナ」

『アストラファイ文曲』戦艦レ級はビスマルクの姿を不必要にけな貶して嘲笑う。

心を揺さぶる様に何度も煽っていく戦艦レ級をビスマルクは何も言葉を発さずただひたすらに睨み続けた。島風はその姿を背後から目を離さずに尻もちを着いてたじろいだままだった。

島風は一瞬で感じ取る。

ビスマルクの背中から伝わってきたのは悲愴な過去の感情、忌まわしき腕と目によって苛まれた苦痛の日々。

実際にその過去が映像となつて流れて知つた訳では無い。

ただその背中にはそう感じてしまう程、それだけの重みがあった。今まで自信に満ち溢れていたビスマルクとは無縁の感情とも思える悲しい感情が島風の身体の周りを漂い始める。

今こうして自信を失くした自分のようにビスマルクにもそういう過去があったのだろうかと感じた島風はより一層とその背中が勇ましく思えた。

黒き鋼鉄の籠手や青く澄んだ碧眼でさえも羨ましいと感じた。

だからこそ島風は考える。

今までビスマルクが自分と話してくれていたのは、自身にそういう過去があつた事を踏まえて自分と重ねたのかもしれない、と。

一方的且つ傲慢な考えだとは思う。

それでも私は今日までビスマルクのしてもらつた事が嘘だとは思えなかった。

「ビスマルク……さん……」

「ええ……そうね。昔は酷い言われようだつたわ。気持ち悪い、醜い、お前は敵だ、なんて耳が腐るほど聞いたわよ。流石に貴女みたいに落ち込んだわ……幾度となく厄介払いにされるし、虐められるので退屈しない毎日だつた……」

ビスマルクは少し躊躇いながらも自身の過去を思い出していく。頭の中に流れる映像では不気味がる大衆、腫れ物扱いの様に蔑さげすんだ目で見る司令官や軍人、表面上では何気ない対応でも裏では恐れている人間がビスマルクを追い詰めていく。

『気持ち悪い!!』

『近寄るな!』

『二度と私の目の前に現れるんじゃない』

『醜いから出ていってくれ』

『うるせー!! お前の事情なんて知った事じゃない!! 別に普段は包帯とかで隠せばいいし、やむを得ない時に出せばいい話だろうが! それでも気にするんだつたらお前は俺の摩耶より間抜けだ!! 他人の視線なんてアリよりちっぽけだぞ!! んなもん気にしてどーすんだ!!』

最後にある男の言葉を思い出してビスマルクは鼻で笑う。

直後に軍帽を簡単に整え、荒れ狂う海で腕を組み仁王立ちをした。

そして高らかに謳い始める。

「だが今! この戦艦ビスマルク!! 勝利に導く為ならば天下にこの姿を晒そうが恥もなければ怯みもない!! 仲間や敵に見られようが

大いに結構!! 見て笑え!! 聞いて驚け!! この鋼鉄の心に一切の揺るぎはない!!」

他人の目線など気にするな、前を向け。

「そんな下らない事で心が揺らぐものならばそれこそ紛うことなき弱者の証明!!! 力を求める者とは常に!! 過去を引き摺らず未来へ前進する戦人であれ!!」

振り向くな、そこに道などない。

前進する勇氣こそ勝利への一歩となるのだ。

「それでも尚!! 付き纏う過去の恐怖が巨壁となって行く先を立ち塞がるのならば!! 周りを見ろ!! 立ち向かえ!! 恐怖から勝利を勝ち取って突き破り!! 前進するのよ!!!」

世界や人々を護る為に我々はいる。

ならば立ち上がるのは我々しかない。

「その意志を人は勇氣と呼ぶ!!! ならばこそ私は勇氣を出して皆を先導しよう!!! くだばるにはまだ早いぞ艦達よ!! 勝利を掴みたくば私に!! ついてこい!!!」

いざ行かん、鋼鉄の魂で。

ビスマルクは鋼鉄の籠手を顔の目の前まで寄せて空気を掴むように握る。

籠手の隙間から碧色の光が漏れるように放出。

幾つもの十字光が何度も煌めいて輝きを放っていく。

碧色の右眼から全身へ光が伝わっていった。

『アストラファイ文曲』戦艦レ級も右足を一步前に出して両手を少し広げる。

右足から雷のエネルギーが黒雲へ昇る様に放出されていく。

戦艦レ級の頭上に尻尾の様な艤装の先端にある怪物の口が咆哮を上げた。

瞬間、二人は急発進急加速。

降り注ぐ雨粒を風速だけで退けさせ、壁のような水柱を上らせて直進。

拳が衝突する。

爆発時のような白い衝撃波が辺り一帯に広がった。

鳴り響く轟音と共に海が大地のように割れる。

その影響で日向達や戦艦夕級達が一瞬舞い上がった。

「この状況はチャンスだ!! 立ち上がるぞ青葉! 暁! 蒼龍! 飛

龍! 島風! 勝つ為に身体を動かせ!!」

「了解!!」

山のような波が周囲に広がっていく中で日向達はもう一度立ち上がる。

名前を呼び合いそれぞれ集合。

ビスマルクの元へ援護する為に爆心地へ向かう。

急いで波を乗り越えた先には爆心地にて激闘中のビスマルクと

『^{アストラファイ}文曲』戦艦レ級。その先には戦艦レ級が率いていた深海棲艦の艦

隊。

それは見た事の無い大渦だった。

大渦の中心に二人はいる。

その先には邪魔しに来るであろう深海棲艦の艦隊。

日向は先に敵艦隊を壊滅させる為、自ら艦隊に指示を出した。

「もう一度あの艦隊と交戦する! 奴らも私達を倒したら『^{アストラファイ}文曲』戦

艦レ級の援護に行くはずだ!! この大渦と悪天候の中だがやるしか

ない!!」

「この大渦の外に出たら波が大き過ぎて危険だ!! 私達はこのままつ

いてきなから島風を守るから……! 頼んだよ!!」

「任せろ!!」

ビスマルクと『^{アストラファイ}文曲』戦艦レ級の上で砲撃戦が行われた。

中心地にいる二人は依然として攻撃の手を緩めない。

殴っては砲撃、砲撃を防いでは蹴り飛ばす。

蹴り飛ばされては殴打を躲して砲撃。

「ツ!!」

二人は咄嗟に気付く。

先程の衝撃で持ち上げられた海水が頭上から押し潰すが如く落下

してきていた。

日向達や敵艦隊も攻撃しながら避難していく。

両者それを確認し、間合いを取って大渦から脱出する。

落下した海波が生きる竜の様に暴れ狂い、無作為に身長のはある大波を広がらせていた。

「クソツッ!! ヤッパリ持ッテヤガツタカ!!」

『アストラファイ文曲』戦艦レ級は海面に後退りながらビスマルクの秘めた力に苛つき始める。

予想していた最悪の事実を先程の戦闘にて体験した事で想像以上に厄介な存在だと戦艦レ級は思い知らされた。

よく見ると戦艦レ級の身体には直接殴られた傷痕や蹴られた傷痕などが目立っている。ビスマルクが真の姿を見せてから全く確認出来なかった傷跡が今になって見えた事で初めてダメージを受けたのを日向達は見定めた。

「装甲相殺の特殊エネルギー体質を持つとされる【アルカイド揺光】欧州水姫の能力!! それはこの左腕にも存在し、貴女達深海棲艦でも同じ効果を発揮する!! 覚悟しなさい『アストラファイ文曲』!!」

『アストラファイ文曲』戦艦レ級が初めて傷を負ったのにはビスマルクの腕と眼に関係している。

ビスマルクは左腕と右眼が欧州水姫の身体の部分となっており、艦娘と深海棲艦が融合したような唯一無二の存在だった。

そしてそのベースとなった深海棲艦は七壊星【アルカイド揺光】欧州水姫。

この欧州水姫には特徴なエネルギー体質で身体に触れた艦娘や深海棲艦の装甲という性質に触れた部分だけを相殺、無力化して身体に直接的なダメージを与える残酷な力を持っているのだ。

その危険性ほどの深海棲艦よりも極めて逸脱しており、深海棲艦でも恐れられ欧米諸国の軍達も欧州水姫の存在が深海棲艦の戦争において一番倒さなければならぬと断定している。

だからこそ戦艦レ級はその力を持っている可能性があると考えて危惧して戦っていた。

しかしそれでもダメージは完璧に防ぎ切る事は出来ない。

触れただけで部分的に装甲を無力化してしまう能力である以上は、
【揺光】^{アルカイト} 欧州水姫の本来の能力よりは弱体化していても十分凶悪だ。

「上等ダアアアアアア!!!」

『文曲』^{アストラファイ} 戦艦レ級が暴れる波を大跳躍して乗り越える。

空中に浮遊しながらビスマルクに目掛けて連続砲撃。

稲妻の砲弾が更なる嵐となって降り注いだ。

ビスマルクはその砲弾の嵐を高速航行しながら尽く回避し続ける。

山のような波の斜面を駆け昇り、そして戦艦レ級に向かって跳躍。

鋼鉄の籠手を前に突き出し殴り掛かる。

すかさず戦艦レ級は防御するも海面まで殴り飛ばされた。

海面に激突するも何の怯みもなく戦艦レ級は水平に高速航行。

あまりの速さに激突時の水柱が未だに立ち上っている。

戦艦レ級は高速航行した後にもう一度大跳躍した。

空中で不安定のビスマルクに目掛けて艦装で殴り掛かる。

ビスマルクは鋼鉄の籠手で戦艦レ級の殴打を防ぐ。

それを瞬時に見た戦艦レ級は艦装の先端の口で籠手を噛んで掴む。

そして身体を空中で回転させ、遠心力と共にビスマルクを投げ飛ば

した。

ビスマルクは投げ飛ばされながらも体勢を即座に整え、海面に着水するまでに連続砲撃。

海面に落ちゆく戦艦レ級も照準をビスマルクに定めて砲撃する。

空中にて砲弾が何度も衝突して炸裂。

爆煙は衝突する度に広がっていく。

その爆煙の中を掻い潜って戦艦レ級の砲弾がビスマルクに直撃する。

「命中精度ハ下ガツテイルゾビスマルク!! ヤハリソノ眼ト腕ノエネルギー消費ガ激シ過ギタカ!!」

「それまでにアナタを倒せれば充分よ!!!」

「フハハハハヤツテミロ!! コチラモ手ヲ出スマデダア!!!」

『文曲』^{アストラファイ} 戦艦レ級は海面に着水し、稲妻を纏った右拳で水面を殴る。

するとビスマルクの周辺で突然水柱が前後左右に方向性を保って

立ち上った。

水柱が立ち上った順と位置から連続して落雷が発生。

不規則な落雷の連続にビスマルクは驚きの声を上げる。

「まさか魚雷にも!!」

「ゴ名答ダ!! 私ノ魚雷ハ特別製ダカラナ!! モウ既ニツツ!! 才前ハ私ノ術中ニ嵌ッテルンダヨ!! コノマヌケガアア!!」

ビスマルクの足元で大きな水柱が立ち上り、そして落雷。

魚雷のダメージと共にまた雷を直で受けてしまった。

ビスマルクは全身に突き刺さる痛みを噛み締めながら戦艦レ級から目を離さない。

戦艦レ級がビスマルクを投げ飛ばした方向は既に魚雷の進行方向だった。

跳躍して砲撃する前に魚雷を発射させ、タイミングを見計らってビスマルクをその方向と位置まで投げ飛ばしていたのだ。

更には魚雷に仕組まれた起爆操作と落雷を誘う力。好きなタイミングで魚雷を起爆させ、爆発時に展開する小型誘雷針を発動して落雷を誘う事ができる。

「ぐっ……!!」

「二度モ落雷ヲ受ケレバ流石ニ艦娘ダロウト只デハ済マナイ!! 才前ノ身体ハ既ニ限界ヲ超エテイル!!」

二度の落雷を直で受けたビスマルクの身体は悲鳴を上げていた。意識は朦朧として視界も霞んでしまっており、膝をつかなければまともに立てないほど四肢の震えは止まらずにいる。

先程の魚雷と共に食らった落雷でさえも一瞬何回か意識を失いかけていた。

更には外部熱傷や内蔵の熱傷によって動くだけでも外側と内側の両方から激痛が迸っていた。それでもビスマルクは弱音を吐く事無く素早く駆ける『文曲』^{アストラファイ}戦艦レ級から目を離さない。微かに視界に映る碧色の稲妻を見放さず、不屈の闘志でビスマルクは立ち上がるようにする。

「終ワリダ! ビスマルク!!! コレデトドメダアア!!!」

『文曲』アストラファイ 戦艦レ級はビスマルクの方へ一気に接近。

碧色の稲妻が一閃となつて無数にある壁のような波を無理矢理突き抜けていく。

あまりの速さに衝撃波で海水が消し飛ばされた。

身体を回転させ、左拳と共に尻尾の様な艦装で殴り掛かる。

膝を着くビスマルクの目の前に尻尾の様な艦装が現れる。

殴り潰されるかに思えたその時だった。

「っ!!」

ビスマルクは突然顔を上げて立ち上がり、咆哮を上げて尻尾の様な艦装を右手で往なしていく。

往なした直後に右手裏で尻尾の様な艦装を引き摺らせ、火花を散らしていった。

そして殴り掛かってきた左拳を避けてビスマルクの右手は戦艦レ級の首を見事に掴む。

予想外の行動に戦艦レ級は驚きの声を上げた。

「何ッ!!」

先程の一連の行動で起きた時間は約三秒。

首を掴まれた事でビスマルクの背後では衝撃波によって水柱が立ち上る。

揺れた振り子の様に戦艦レ級はぶら下がり、思わず首を掴まれた右腕を掴んだ。

「これを……い… 待ってたのよ!!」

ビスマルクはあからさまに嬉しそうな表情で高らかに声を上げる。視界が霞んでいるのなら掴んで攻撃すればいいというビスマルクなりの考えでわざと待っていたのだ。

「ッ!!」

それを考えた『文曲』アストラファイ 戦艦レ級は次の一手が何なのかを察知して急に青ざめる。

ビスマルクの後方には装甲という性質を無視する防御不可の純粋な力を放つ鋼鉄の籠手が拳となつて握られ待ち構えていた。

装甲という性質によって深海棲艦や艦娘の並外れた力はほぼほぼ

防げるが、その装甲が無視されるのなら最悪の可能性がある。装甲が無ければ近接攻撃一つで腕や足などは簡単に吹っ飛ぶ上、砲撃などまともに食らえば生きているかどうか分からない。

耐久という性質はあくまで身体の再生能力だけであり、単純に身体が硬い訳ではなく生身の人間と何ら変わりはない。今まで傷がある程度まで抑えられていたのはあくまで防御した際に殴打の威力を最低限に受け流して抑えていただけだった。

つまりこのまま装甲無視の鋼鉄の籠手とビスマルクの並外れた力、そして防御が簡単に出来ないこの状況で殴られるのならば、本当に一発で仕留められる可能性があるのだ。

「食らいなさい!!! 私の一撃をツツ!!!」

ビスマルクの左腕にある鋼鉄の籠手が碧色の光をロケットエンジンの様に放出させ、周囲に飛び散る十字光を煌めかせた。

「最大出力!! 誘雷展開!! 体内放電!!! 全テヲ灼キ尽ク

セエエエエエ!!!」

『文曲』戦艦レ級は考える暇もなく自身が避雷針となつて落雷を誘導する誘雷展開と体内に蓄積された電力を触れた相手へ一気に放電する体内放電を掛け合わせた。

が――、

「グワハツツ!!!」

放電する前にビスマルクが鋼鉄の籠手で『文曲』戦艦レ級の腹を殴打。

無意識に防御しようとしていた右腕ごと潰され、一瞬腹がクレーターのように凹む。

下腹部から込み上げる熱さと痛みが戦艦レ級を襲った。初めて頬を膨らませるほどの量で吐血し、呼吸が全くまともに出来なくなる。

「ツツ!!!」

戦艦レ級は苦し紛れにも体外放電を開始。

掴まれた右手から全身へ雷と同等のエネルギーを持つ電流が流れ込んだ。

ビスマルクは歯を噛み締め怯み声を上げるも、決して右手を離そうとはしない。

「つ……!!… これで……! 終わらせるッッ!!!」

落雷まであと数秒。

意識を失うまでの刹那。

ビスマルクは体外放電で悶えるも、もう一度鋼鉄の籠手を握る。

左腕を大きく後方へ引き、一気に前方へ突き出した。

そして鋼鉄の拳は戦艦レ級の右頬へ――、

直撃。

装甲を無視された戦艦レ級の頭は歪み、そのまま海面に勢いよく叩き殴られた。

それと同時に誘雷展開によって誘われた巨大な落雷がビスマルクに直撃する。

ダブルカウンター、互いに渾身を込めた一撃が炸裂。

同時攻撃によって間欠泉の様な水柱が立ち上り、衝撃波によって雨や風が押し退けられた。

「ビスマルク!!!」

『アストロファイ文曲』様!!!』

戦闘中だった戦艦夕級達と日向達が水柱と衝撃波に気付き、無事を確認する為に互いに名前を叫ぶ。

腕や艦装で衝撃波による風圧を防ぎ、荒れ狂う波の上で体勢を保ちつつビスマルクと戦艦レ級の方角を見続けた。水柱の周辺では碧色の十字光と碧色の稲妻が空中を漂っており、白く泡を立てる水柱が収まっていくと徐々に消えていく。

するとその水柱の中心で二人の姿が見えてきた。

影となつて現れた戦艦レ級とビスマルクは両方とも海面にうつ伏せになつて倒れている。互いの渾身の一撃を食らつて共倒れしたのだろうか。名前を呼んでも互いに立ち上がる気すらない。

「ヤ、ヤッテ……クレタナ……!! ビスマルク……!」

「うぐッ……!!!」

数秒かして『アストラファイ文曲』戦艦レ級とビスマルクは腕を動かして立ち上がるろうとする。呼吸が凄まじく荒れながら口から大量に血を吐き、殴られた右頬と右頭部の半分が歪んでいる戦艦レ級は尻尾の様な艤装で身体を支えた。

身体中全体を蝕む様な痺れに抗いながら鋼鉄の籠手で起き上がらせようとするも殆ど力は残っておらず、ビスマルクは碧色の眼で戦艦レ級を睨み海面に這いつくばる事しか出来なかつた。

「流石ダヨ……コノ私ヲ、ココマデ……追イ込ムトハ……!! 賞賛二……値スルヨ……!」

尻尾の様な艤装で身体を支えた『アストラファイ文曲』戦艦レ級は仰け反つた状態で息を荒れさせながらビスマルクを賞賛する。七壊星の名だたる一角を無名の艦娘が瀕死にまで追い詰めたのは数少ないとビスマルクの実力を認めた。

半ば【アルカイド揺光】欧州水姫の力があつたとはいえ、その前の戦闘でも充分な程に『アストラファイ文曲』戦艦レ級を追い詰められる程の実力は備わつていた。

ビスマルクの以外の日向達も経験不足とはいえ七壊星相手に即座に行動出来る能力は素晴らしい。

久しぶりに手に汗握る死闘を繰り広げられたと戦艦レ級はニヤリと笑つた。

「ダガ私ハ……マダ、生キテイル!! 何秒カ意識ヲ……失ツタガ……耐久サエアレバ……修復可能ダ……!」

ビスマルクの渾身の一撃によつて歪んでいた右頬と右頭部が電気を帯びて修復されていく。

衝撃で右肩と首がボロボロに離れていようが骨から筋肉、そして皮膚から装甲へと生々しく結合していった。潰された右眼も再生能力

によって徐々に修復され、碧眼となって轟く様に稲妻のエネルギーが溢れ出る。

仰け反った身体をのめるように起こさせて必死に立ち上がるようにするビスマルクを視界に収めようと顔を上げた。

「落雷ダケデハ……行動不能ニサセテモ、直接艦娘ヲ沈メル事ハ……出来ナイ……ワザワザ手下ス必要ガアルノハ……面倒ダナ……！」

流石にビスマルクのダメージが大き過ぎたのか速く動く事は出来ていなかった。修復優先で動いているのか帯電で警戒しつつ左手で修復中の右腕を抑え、ゆつくりとビスマルクに近付こうとする。

ビスマルクの目の前まで接近した『文曲』戦艦レ級は尻尾の様な艤装を唸り立たせ、全砲口をビスマルクに向けた。

回避しようと身体を動かすも最早既に限界に到達していたビスマルク。身体は言う事を聞かず、腕で支えて起こそうとしても他の三肢は動く気配すらない。

「実ニ見事ダツタ……ビスマルク。オ前ダケハ記憶ニ覚エテオクヨ……」

ビスマルクに向けられた全砲口から碧色の稲妻が光り輝く。徐々にエネルギーが蓄積されていくようなチャージ音がテンポを速めて加速していった。先端の口の様な艤装から碧色の光に晒されビスマルクの姿が見えなくなる。

「ジャア……マタ——」「させるかああああ!!!」

砲撃する直前に『文曲』戦艦レ級は右頭を蹴り飛ばされる。

海面に転倒しながらも即座に体勢を整えて立ち上がった。

修復中の右頭部がまた複雑に歪み、戦艦レ級は怒りを露わにする。

「今更何ノ用ダ……!!」

『文曲』戦艦レ級の砲撃を邪魔した艦娘はビスマルクを護るようにして立ち構えていた。

「島風ツツ!!」

『?』オウゲン 叢雲の到着まで、あと二十五分——。

168. ザルニーツアは鳴り響いて

「今更何ノ用ダ……!! 島風ツツ!!!」

アストラファイ 『文曲』戦艦レ級との遭遇から約十五分が経過。

ビスマルクのトドメを邪魔された戦艦レ級は珍しく眼から稲妻を迸らせ怒りを露わにする。前傾姿勢の島風は緊張で息が少し荒れており、震える手足を抑えていた。

嵐は更に激しさを増し、風や雨が殴ってくるように降り掛かる。

「ま、間に合った……」

「速っ……あれが本来の……」

艦隊から一時的に抜け出した島風の行動を見て日向達は拍子つかれた表情で立ち尽くしていた。

同様に『文曲』アストラファイ戦艦レ級の艦隊にいる戦艦タ級達も島風の圧倒的な速さに呆気に取られている。

日向達と戦艦タ級達のいる地点から戦艦レ級とビスマルクの地点までの距離は約百メートル。

普通の艦娘であればスタートダッシュ込みで六〜八秒程度を島風は三秒で予備動作なく瞬時に直進して戦艦レ級を蹴り飛ばしたのだ。その強靭な脚力と莫大な加速エネルギーは凄まじく、雨や風が島風の航行速度に連られていく程だった。

「サツキマデ私ニ怯エテイタヨウナ雑魚ガ突然シャシャリ出テキヤガツテ……!! マタ殺サレタイノカ!!!」

アストラファイ 『文曲』戦艦レ級は腕を払って島風に訴える。

修復中の右頭部を攻撃された所為か戦艦レ級の顔は半分白い皮膚と筋肉が融合した様な悍ましい状態になっており、首から右肩までの筋肉は糸と糸が繋がって再生していた。更には再生中の右眼から溢れ出る様に碧色の稲妻が放出している。

戦艦レ級は漏れ出している稲妻を抑えようと左手で顔を覆った。

「イラツクンダヨ……!! 仲間ノ為ニ行動セズ保身ニ走ルヨウナ才前ミタイナ雑魚ガ!! 怯エルダケデ何モセズニ護ラレ続ケタ挙句、仲間

二迷惑ヲ掛ケテバカリデ戦意喪失カト思エバ……！ ツ攻撃シヨウガ遅インダヨ!!! 差シ出ガマシイニモ程ガアル!!!」

仲間の為という行動方針を大切にしていた『アストラファイ文曲』戦艦レ級は今までの島風を見て苛つきを抑えずにいた。散々戦艦レ級に怯えて身一つまともに動けなかつた島風が何故今更攻撃してきたのか、戦艦レ級は極端的なその凶々しさを訴える。

「ソレトモサツキノビスマルクノ言葉ニ動カサレタカ!!! 今マデ怯エテイタ才前ニ何が出来ル!!! ソウ調子良クイクト思ウナヨッ!!!」

『アストラファイ文曲』戦艦レ級の尻尾の様な艤装が威嚇する怪物の様に咆哮を放つ。

そう簡単に事ことが上手く運ぶかと否定的に言い放った。

身構える島風は手足を震わせながらも戦艦レ級から目線に外す事はなく、打たれる雨によって濡れた顔を腕で拭い睨んだ。

「……確かに私は全く駄目だよ」

島風が思い出すは黄金時代と波乱万丈の記憶。

幾多の戦場を自慢の速さで駆け抜け翻弄し、周りからは待望と期待の眼差しを受けて戦果を挙げ続け、稲妻を操る深海棲艦に蹂躪された挙句、不幸にも五年後に生き返ってしまった忘れ難い艦娘の生。

その生を生き続けた艦娘は今この瞬間まで怯える子鹿のように怯えている毎日だった。

誰も信じられない、自分もが信じられないとイジメを受け続けたイジメられっ子のように部屋の片隅で泣き叫ぶ。

現実逃避を続けていた。

「自信は無いし、自己中心的だし、非力だし、無駄に泣き喚くような駄目なやつ……」

自慢の速さは新たな存在によって消失し、命令を無視して自分の気分に合わせて戦闘し、連装砲は行方不明のまま、自信を無くした事による喪失的絶望。

そうした経験の中で自分は追い詰められて生きる屍のような存在になってしまった。

心のどこかでは変わらなきやいけないと思っていた。

自由気ままに過ごしていたとしても時にはその自由を切り離して考えなければいけない事もあった。人生甘えてばかりではいけないと神様がわざわざ苦難という名の面倒を与えてきた事に苛立ちすら覚えた。

運命とはそう都合よく回らないモノだとつくづく考えさせられる。

このまま一生楽な選択をして生き続けていればそれで良かった。

その方がずっと気は楽で生きていけるのに、何故か周りの人は苦難を受け止め生を歩もうとしている。

何故わざわざ自ら嫌な事に出そうとするのかその時までの自分には到底理解出来なかった。

「だけど……レ級の言う通りだよ。私はビスマルクさんの言葉が凄く心に響いた。ここで立ち向かわなきやこの先一生死ぬまで絶対の後悔するって思ったから、戦艦レ級という恐怖に打ち勝つ為に立ち向かって攻撃したんだ」

理解出来なかった。

そう、この時までには。

運命はとても気まぐれなモノで良い方向に運ばれるのか、悪い方向に運ばれるのかは誰にも分からない。

その中で島風はビスマルクと出会って苦難を受け止める意味を知るようになった。

誰もが皆、成長したいと願っているからだ。

身体の成長か、心の成長か、はたまた精神の成長や別々のモノか。

それは人それぞれだろう。

与えられた苦難を乗り越えた先に新しく成長した自分を手に入れられる。

人はそれを報酬として求め、わざわざ苦難を受け止めるのだ。

自分が成長する為ならばどんな苦難でも受け止めてみせようとは立ち向かう。

その成長が微力であろうと人は苦難を乗り越えようとする。
そうした心に決めた決断の意志を人は『勇氣』と呼んだ。

「緊張で胸はドキドキしてるし、身体が物凄く熱くなってる……恐怖に立ち向かう感覚が直に感じるよ……これが『勇氣』なんだ、って……私の中で勝ちたい気持ち溢れてる……」

困難に打ち勝ちたいと思う気持ちがある限り、勇氣という炎は永遠の灯火となって燃え続ける。

鋼鉄の心に炎を灯して島風は思いを叫んだ。

「勝ちたいんだ!!! 勝ちたいと心の底から思ったんだ!!! 『文曲』戦艦レ級から先に逝ってしまった仲間の仇を取る為にも!! 今ここにいるビスマルクさんを! 皆を! 護りたいと思った!!! 何故ならそれが!! 私にとつての全てだから!!!」

島風の全ては仲間。

それ以上のモノでもなくそれ以下のモノでもない。

朽ちて逝ってしまった仲間の仇討ちと大切な仲間を守りたいという純粹かつ単純な願いが島風に勇氣を引き出した。

今まで奪われた分を取り戻す為にも、これから大切な仲間を守る為にも、島風は猛獣の如く吠えた。

「お前だつて調子良くいくと思うなよ!!! 戦艦レ級!! 再戦だ!!!」

「ツツ!!!」

珍しく荒らげた口調で島風は『文曲』戦艦レ級にリベンジを申し込む。

歯を食いしばって憤怒する戦艦レ級は咆哮を上げて身体中に碧色の稲光を放出させた。

「もう私は!! 絶対に諦めない!!!」

「ツツ……!!! 上等ダツ!! ソノ腐ツタ性根叩キ潰シテヤル!!!」

『文曲』戦艦レ級はビスマルクにトドメを刺そうとした一斉砲撃を島風に浴びせた。

碧色の光線が瞬く間もなく島風に着弾。

衝撃波で海がざわつき、碧色を帯びた爆煙と稲光で見えなくなる。

「っ!!!」

爆煙に穴が空いた。

右目を金色に光らせた島風が爆煙を掻き分け急加速。

戦艦レ級も稲妻を周囲に迸らせ、急発進急加速。

島風を追い掛けるながら連続砲撃を仕掛けた。

それを見た島風は更に加速していく。

島風の後方で水柱が立ち上り、その水柱に穴が空いた。

戦艦レ級の連続砲撃で壁のような水柱を所々穿っている。

島風を追い掛けるように次々に放たれていく。

砲撃を回避し続ける島風は突然直角に方向転換。

わざと砲弾の雨へ突撃した。

が、その砲弾の雨を小柄な躰で巧みに回避していく。

その小柄な躰を活かした華麗な回避はまるで砲弾が自ら島風を避けているように見えた。

速度は落ちることなく更に増していく一方で戦艦レ級に近付くのに数秒も掛からない。

島風の蹴撃が『アストラファイ文曲』戦艦レ級の頬を掠める。

それと同時に戦艦レ級の殴打も島風の右腹を掠めた。

通り過ぎた後に島風は機転を変えてまた高速移動。

戦艦レ級は即座に振り向いて一直線に海を駆ける。

荒れ狂う水上を舞台に碧色の稲妻と金色の一閃が何度もすれ違う。

すれ違う度に二色の稲光は海面にバツ印をいくつも描いた。

轟音を響かせ空間が歪み、衝撃波が広がると同時に水柱が立ち上る。

立ちはだかる波が衝突によって凹み、衝撃で海面に亀裂が入り海水が舞った。

島風の左突き蹴りと戦艦レ級の右拳が衝突。

両者の攻撃が掠れて絹が裂かれるような金属音と共に火花を散らした。

背後を隣り合わせに両者は次の攻撃に転じる。

「外さない!!!」

「ッ!! 痺レロツッ!!」

島風は身体を高速回転させ後ろ回し蹴り。

戦艦レ級は跳躍しながら身体を回転し、右脚を天に立てて蹴り落とそうとする。

蹴り技によるクロスカウンター。

島風の蹴撃は戦艦レ級の左頬に食い込み、戦艦レ級の蹴撃は島風のこめかみに直撃する。

どちらも勢いよく蹴り飛ばされ、受け身をとって海面を引きずっていった。

攻撃を受けた島風は衝撃で思わず立ちくらみ、海面に膝を着く。

戦艦レ級は身体を仰け反らせ、頭を両手で掴み外れかかった首を元に戻す。

両者共に息が荒れており、視界から離さぬよう睨み続ける。

「アレガ……アノ、島風……」

「激し過ぎて近寄れない……!」

日向達や戦艦タ級達は二人の戦闘を見守る事しか出来なかった。

いや正確には戦闘の凄まじさに身体が固まってしまっていた。

かつては最速と謳われて深海棲艦からも危険視されていた島風と稲妻の如く駆け抜ける事から今も人類に恐れられている『文曲』アストラファイ戦艦レ級。

あの小笠原鎮守府が奇襲された時の激闘が五年後の今になって再現された。

勿論日向達や戦艦タ級等は二人の事情をよく知らない。血を流しあい、身体を震わせ、砲撃による硝煙を払い、喉を枯らして、海面を蹴り、力をぶつける。

ただ単純に相手を完膚なきまでに倒そうとする戦闘本能による意志が二人を動かしていた。

当然援護に向かおうとすれば日向達と戦艦タ級達の双方とも足手まといになるのは確実に考えている余裕もなかった。

「しま……か、ぜ……!!」

「ダメだよ! 今は動かないで!」

日向達に回収されたビスマルクは両腕を蒼龍と飛龍に担がれ、支えられながら島風の名を呼ぶ。

霞んでぼやける視界をよく凝らし、戦闘中の島風から目を離さなかつた。

初めて出会った時から自信を喪失し、現実逃避し続ける程までに怯えていた島風が目の前苦難を乗り越えようと、仲間を護ろうと一生懸命戦っている。自分がやってきた事は無駄ではなかったと安心したビスマルクは顔を俯いた。

「さて……見てないで、やるしかないですね」

「島風に続いて私達もやらなければ……」

「私達モ……動カナケレバ」

「全力デ、ヤル……」

「シイイマアアアカアアゼエエエエアアアア!!!!」

「つつうらああ!!」

お互いに咆哮を上げて一気に突進。

空気の壁を突き破るが如く衝撃波と共に激突する。

何度も一旦離れては惹かれ合う様に激突し、一瞬の隙すら逃さない。

『アストラファイ文曲』戦艦レ級が激突勝負に打ち勝ち、島風の腹を蹴り飛ばす。

勢いよく血を吐く島風は何とか態勢を整えて着水。

一瞬蹴りを入れられた際に体外へ放電した電流が島風の身体中を迸っていた。

痛みに悶えるも島風はすぐに立ち上がる。

碧色の稲妻は轟いて急発進急加速。

瞬きをした瞬間に目の前には『アストラファイ文曲』戦艦レ級がいた。

ハツと気付いた島風は戦艦レ級の殴打を跳躍で回避する。

跳躍時に身体を回転させ回し蹴りでカウンター。

戦艦レ級は怯んで二歩ほど下がるも即座に体勢を立て直す。

跳躍中の回し蹴りをした島風を尻尾の様な艤装で薙ぎ飛ばした。

島風は怯み声を上げ、水面を何回か跳ねて転倒する。

ナクテ!!! アノ世デ悔シガツテイル顔ガ目ニ浮カブゾ!!! コレデ私
ヲ超エルモノハイナイ!!! フハハハハハ!!!」

海面に倒れる島風は激しく雨に打たれていく。

耳を打ち付ける雨の音と『アストラファイ文曲』戦艦レ級の笑い声が徐々に激しく
なり、そして――、

――全てが消えた。

深い。

眩しい。

力が出ない。

眠くなってきた。

もう……このまま眠っていた方が――

『――い』

――何か聞こえる。

どこからだろうか、全く分からない。

『――て』

また何か聞こえた。

周りを見たいが振り向く力も無い。

しかしその声は少しずつ聞こえてくるようになってきた。

『し――か――』

今度は光が見えた。

あれは、海だろうか。

私は沈んでしまったのだろうか。
冷たい感覚や水の感覚が全く無い。
これが死ぬ、という事なのだろうか。

『——きてー！』

聞こえた謎の声に思わず私は力が出ないはずの手を伸ばした。

水面に見える一条の光を求める様に伸ばしたその手が視界に写る。
指と指の隙間を潜るようにして光が漏れていた。

私はその手を見た瞬間に、ハッとある事を思い出す。

あの時まで生き続けた過去と生きていた現在が映像に流れる様に鮮明に脳裏に写った。

私はどんな存在で、どんな生き方をしていたのか。

嫌に思う記憶もあれば嬉しいと思う記憶もある。

ただそれ等を掻き消す様にして一生拭い切れない後悔が私を更に奥へ引き込ませた。

あの時こうしていれば、

これをやっておけば良かった、

何でそれをしなかったんだ、

と耳を塞ぎたくなるほど周りから囁いてくる。

もう嫌だ、嫌な思いはもうしたくない。

私は早く消えたいと消滅を心の底から願った。

そうしている内にも何も見えない暗闇の海底へ吸い込まれていく。

水面に映る一条の光も微かに消えていく。

私はゆっくりと目を閉じ——、

『島風!!』

「っ!!?」

暗闇の海底へ吸い込まれていくはずが、私の名前を呼ばれた途端に徐々に水面へ上がっていくのが分かった。

背中から押し上げる様に無数の手が私を支えてくれる感覚がする。

私は誰なのかと背後を振り向いた。

「っ！ 皆……!!」

私を押し上げていたのはかつて小笠原鎮守府で共に戦った仲間達。必死に私を救おうと力を合わせて押し上げていた。

『生きて!!』

その言葉に私は涙ぐむ。

私に生きてほしいと思いのままに仲間達は伝えていた。

今まで後悔して自信を失くしていたのが申し訳なく思う。

こんなにも仲間は生きてほしいと願って見守っていたというのに、生きる事を諦めかけていた私が一番情けない。

朽ちて逝った仲間の想いすら見捨てようとしていたのだ。

「ごめん……い… 皆……!! 私、頑張るよ……!!」

私はもう絶対に諦めないと誓った。

見守ってくれていた仲間や今存在している仲間むっくもの為に生き続けようと心に誓った。

決してその想いが揺るがないようにとひたすら願ひ続ける。

私の中にある再び鋼鉄の心に灯が舞い戻った。

島風は泣きながらも仲間達に支えられ、水面のすぐ近くまで押し上げられる。

光はより一層眩しくなり、思わず目を閉じた。

その時――、

『はあく……まあこうした方がいいかな』

更なる声が聞こえた途端に島風は水面から突き出た誰か腕を引つ張られ、暗い海から一気に引き上げられる。

起き上がると音もしない白い空間が広がっており、自身は黒い水の上に座っているのが分かった。目の前にはシルエツト姿で現れた謎の人物。形は島風の衣装に殆ど似ており、まるでもう一人の自分を見ているかのようなだった。

『私に一番近い存在だし……ほら、さっさと立ってよ。時間無いんだから』

その島風に似た謎の人物はしやがむ島風の腕を掴み、再度引つ張つ

て立ち上がらせた。為されるがままに島風は理解出来ない光景に身体が固まっている。

目の前にいる人物は誰なんだと疑心暗鬼した表情で様子を伺っていた。

それを見て謎の人物は頭を搔いて面倒そうに説明する。

『あく……私たちがどういう存在か簡単には教えられないけど、私たちはいつでもこちらの世界から貴女達を見守ってるって事だけは教えてあげる』

島風は謎の人物から説明されても全く理解できなかった。

この突然とした状況も未だ理解は足らず、考える言葉すら思い浮かばなかった。

『“起源の艦達”とそちらは呼んでるらしいけどね……あ、空間の乖離はここまでみたい。じゃ……—』

『———適当に頑張つて……あ、触つちやつた……—』

169. 目覚めよ威禍津神、刹那は遅く

「島風!!」

極限にまで荒れた嵐の真下で黒く澱んだ海に浮かぶ艦達は声を上げた。

その声を掻き消すかの様に降り注ぐ雷が轟き、暴れる荒波は壁のように迫り来る。

日向達は『アストラファイ文曲』戦艦レ級の艦隊と戦闘中、『アストラファイ文曲』戦艦レ級は島風との一騎打ちで勝利を掴み取っていた。

「才前ラヲ護マモ ROUT シテイタ島風ハ死ンダ……後ハ才前ラダケ、ビスマルクモホボ無力化トナレバ後ハ容易イ……!」

戦闘レ級の足元には白目を向いて仰向けに倒れた島風がおり、心肺停止状態になったのを確認した戦闘レ級は一步ずつ日向達に近づいていく。

流星の『アストラファイ文曲』戦艦レ級もダメージは激しかったのかすぐに速く動ける様子ではなかった。

ゆっくりと接近していく戦闘レ級に日向達は再度身構える。

「シカシ時間ハ有限ダ……一気二息ノ根ヲ止メサセテモラウ……」

「っ……! そう易々とくたばってたまるか……! 何がなんでも足掻いてやるぞ……!!」

「フツ、口デ言ウノハ簡単ダ……見ルカラ大破状態ノ才前ラニ、一体何が出来る……仮ニ足掻ケタトシテモ精々十秒程度ダ……」

現状艦隊の状況は絶望的で日向は大破状態、青葉は中破状態、暁は中破状態、飛龍は大破状態、蒼龍は小破状態と深海棲艦や七壊星と戦うには不利すぎる状況だった。

残り弾薬はあと僅か、帰還用の燃料も消費して艦装もボロボロで黒煙を吐いている。

日向の言葉は単なる痩せ我慢に過ぎず、『アストラファイ文曲』戦艦レ級はそれを見抜いていた。

「息スル間モナク今スグ島風ノ元ヘ送ツテ——ッ!!」
『アストラファイ文曲』戦艦レ級が背後に異変を感じた瞬間だった。

突然戦艦レ級は謎の衝撃波で吹き飛ばされていたのだ。

その衝撃波は一瞬にして周囲に広がり、風や雨を退けていた。

『アストラファイ文曲』戦艦レ級の元へ引き連れていた深海棲艦の艦隊が駆け寄る。

戦闘レ級は受け身を取って着水した後に衝撃波の中心地を睨んだ。

「一体何ガ……!!?」

その有り得ない光景に皆が度肝を抜かれる。

衝撃波の中心地には死んだはずの島風が煌めく光を放って座り構えていた。

その煌めく光はまるで生き物のようで、何度も島風の身体から放出されては収束して吸収されていく。

それは無数の光の鎗となって吸収され、

次に丸い光の玉となって放出され、

光の玉は稲妻に変形して吸収されていった。

その煌めく光の集合体が吸収されていく度に荒れる海は地震のよう
に揺れ、怯えるが如く騒ぎ立てていく。

そして煌めく光の集合体は纏まりがついたのかももう一度衝撃波を
周囲に放った。

(何カガ……目覚メヤガツタ……!!)

空気が揺れる。

音が震えた。

島風は煌めく光を纏いながら徐々に身体を起こそうとする。

その最中では島風の周囲にある光の柱が何度も天へ昇っていた。

煌めく光の柱は突如現れては徐々に細くなって消えていき、島風の
元へ吸収されていく。

島風の持つ膨大なエネルギーを具現化しているようだった。

「映すは光、写るは雷いかずち」

「マサカ、才前!!」

「闇をも駆け穿つ……! 電光石火の霆撃を……!! 受けてみるツツ!!!」

更に煌めく光の柱は数を増していく。

森のように立ち昇る光の柱は収束し、巨大な光の柱となって島風の足元で輝きを放った。

その姿を見て『アストラファイ文曲』戦艦レ級は全身から危険信号が敏感になって反応しているのに気付き、目を限界にまで開いて驚愕する。

「島風型駆逐艦二番艦島風ツツ!!! 参るツツ!!!」

『アストラファイ文曲』戦艦レ級は即座に一斉砲撃。

放たれた碧色の光線は当たるかと思いきや何故か島風をすり抜けた。

直後、島風の姿が残像となり、水飛沫が遅れて空中を舞う。

突如水の壁が戦闘レ級達を囲った。

いや水の壁ではなく、正確には島風が通り過ぎた後の立ち上った水柱だった。

しかしそれに気付くには遅く、一瞬にして戦闘レ級の頬に島風の突き蹴りが直撃。

蹴った直後に島風は直角に何度も方向転換し戦闘レ級に攻撃する。

周囲の深海棲艦も足場にしては攻撃し、中心にいる戦闘レ級をすれ違わずに蹴撃。

何度も蹴撃、蹴撃、蹴撃、蹴撃、蹴撃、蹴撃。

あまりの速さに戦闘レ級達は反応出来ず為す術が無かった。

「ツ!! フザケ——」

今度は天高く蹴り上げられる。

すかさず島風は海面を蹴って一気に急上昇。

蹴り上げられた『アストラファイ文曲』戦艦レ級と深海棲艦を追うように天へ昇る。

周囲にいた深海棲艦達は既に空へ舞っていた。

軽巡へ級を足場に、重巡り級を足場に、戦艦ル級を足場に、戦艦夕級を足場に。

光は螺旋を描いて屈折し、黒雲を穿つが如く向う。
一番上にいた戦艦夕級を足場に真下へ急速落下。

落下する方向には『アストロファイ文曲』戦艦レ級が――、

「ッ――」

一気に『アストロファイ文曲』戦艦レ級を真下の海面へ蹴り飛ばした。

轟く稲妻を背に光を纏う島風は蹴った姿勢で空中に舞う。

空気を突き破ったような衝撃波が何数にも広がって暴風雨を斬り裂いた。

足場にされた戦闘ル級達は既に海面へ蹴り飛ばされ、大きな水柱が立っている。

その間僅か四秒。

何十数もの攻撃が直撃して光は線となって屈折し、ジグザグに描かれていく様はまるで黒雲をも穿つ雷のようだった。

一瞬にして描かれたその光景を見て日向達は数秒遅れて島風の圧倒的な戦闘能力を思い知る。

『アストロファイ文曲』戦艦レ級でさえも反応出来ない速度で素早く駆け抜け、瞬間で織り成す怒濤の連続蹴撃。

そこに一片のミスなど存在せず、全ての攻撃が会心の一撃であり、急所や弱点を的確に狙っていた。

「……っ！ 今すぐ島風の元へ行くぞ！」

纏っていた光を失って海面に落下していくの島風を見た日向は我に返って急いで落下地点まで向かう。青葉や暁達も日向の声に目覚めてすぐさま航行姿勢に入った。

「つつ……よしつと……！」

落ちていく島風を日向がクッションとなつてキャッチし、尻餅をつきながらも無事に抱きかかえる。島風は眠ったように目を閉じて意識を失っており、あの時の力を使い果たしたのか身体に力は全く無かった。

それを確認した日向達はホツと安堵の息を漏らして胸を撫で下ろす。

次第に嵐も力を弱めていき、巨大な積乱雲と晴間の境目まで到達していた。

海面では太陽の光によつて作られた境界線がグラデーションとなつて彩られ、黒く濺んでいた海も青色を取り戻していく。

「凄いんだな……島風……」

「凄いよホントに……ん？ あつ！ 通信機能が回復してる！」

アストラファイ

『文曲』戦艦レ級が放つていた電磁パルス攻撃が解除され、鎮守府との通信機能は回復。

気付けば無線から提督の怒濤の呼び掛けが鳴り響いていた。

『やつと繋がったか！ おい、どうなってる!! 応答しろ！』

アストラファイ

「すまない提督……『文曲』戦艦レ級が放つた電磁パルスのような攻撃をされて通信が出来なかった」

「現在艦隊は七名全員生存しています。日向さんと飛龍さんが大破、私と暁さんが中破、蒼龍さんが小破でビスマルクさんと島風さんがそれぞれ大破状態、意識を失っていますが一命は取り留めてます」

『電磁パルス？ あゝ……とりあえず把握した。今ビスマルクと

アストラファイ

『文曲』戦艦レ級はどうなってるんだ？』

電磁パルスが放たれた時はビスマルクが落雷を受けた直後だった為、鎮守府にいる提督はその後の戦況を全く知らない。死闘とも思える支援なき七壊星との戦闘で翻弄して翻弄され、ビスマルクや島風が死力を尽くして戦った。

情報量の多さに説明するには時間が足らず、青葉はどう簡潔に説明しようか悩み始める。

「それなんです……ビスマルクさんと島風さんの戦闘によつて瀕死

状態に近くなっています。詳細は話したいのですが時間は……」

『いや詳細は後でいい。瀕死状態か、お前らの残り弾薬はいくつだ？』
「後四、五回程度かと」

『出来ればトドメを刺した方がいいが……今は帰還が優先だな。艦装に問題があつて出来なかつたらしくなくていい、そのままその海域から逃げるんだ。後は『？』が来ればいいからな。燃料も少ないだろうから護衛艦隊と共に補給艦隊を向かわせた。合流したら連絡しろ』

七壊星『アストラファイ文曲』戦艦レ級と接敵して約十五分が経過していた。

ビスマルク達との距離まで約十五分で到着予定だったはずの『？』
《オウゲン》『アストラファイ叢雲は戦艦レ級の策略により、四十分までと大幅に支援までの時間を稼がれている。』

このまま『アストラファイ文曲』戦艦レ級にトドメを刺しても構わなかったが戦闘直後の艦装は激しく損壊しており、尚且つ長く留まれば深海棲艦の敵支援艦隊が到着する恐れがある為にあくまでも逃げる方を優先して指示を与えた。後に『オウゲン？』叢雲が一人でやってくると予見しての指示だった。

日向達は素直に提督の指示に従い、ビスマルクと島風を抱えて海域から脱出しようと航行する。

「コ、コ……コノツ、ガハツ……！」
「っ!!」

忌まわしき声の方向へ日向達は警戒して振り向く。

声の主は『アストラファイ文曲』戦艦レ級。海面にうつ伏せで倒れており、目を覚ましたのか身体を起き上がらせようとしていた。

しかし島風の渾身の攻撃が効いたのか大分弱っている。

左腕はあらぬ方向に折れ曲がっており、全身には無数の打撲跡。

艦装の砲塔は大破状態で口から大量の血を吐いて悶絶としていた。

「コノ、コ……コノツ私ガ……!! 才前ナンカニ……!!」

立ち上がる力すら無いのか片腕では身体は持ち上がらず、『アストラファイ文曲』戦艦レ級は海面を這いつくばう。艦隊の仲間は起き上がる様子もなく寧ろ海へ徐々に沈んでいき、嵐も見捨てるかのように過ぎ去っていく。島風に反応出来ない速度で息する間もなく蹂躪されたのが悔し

くて堪らず、戦闘レ級は歯を食いしばって目から涙を浮かべた。

「ヤット超エタノニ……！ ヤラレル詛ガ……！ ナインダツ……！」

ヤラレル……詛ガ……！！」

『文曲』アストラファイ 戦艦レ級は支えていた片腕を島風のいる方向まで伸ばす。

尻尾の様な艤装でゆつくりと身体を支え、攻撃を受けて震えた両足を海面に立たせた。

生まれたての子鹿のように弱々しくなっても、絶対に島風を倒すという執念たる意志は青葉や飛龍を圧倒させた。

「敵ながら……流石ですね……あれだけ攻撃を受けといてまだ……生きてるだなんて……」

「大した生命力と執念だね……耐久が異常な程あるんだろうな……きつと……」

「うつつを抜かしてる暇はない……このままだとまた追いつかれそう
だ。早くトドメを刺した方がいいな……蒼龍、そろそろ飛ばせるだろう？ 頼めるか」

「うん……分かった」

辛うじて小破状態で飛行甲板が無事だった蒼龍は念の為に用意していた艦上戦闘機の攻撃隊を発艦させる。日向は提督にトドメを刺す方向で連絡し、理由を話して攻撃許可を貰った。

重低するエンジン音を響かせ、攻撃隊は列を為して『文曲』アストラファイ 戦艦レ級へ直行する。

それを見た戦艦レ級は碧眼から稲妻を迸らせ、威嚇する様に攻撃隊と日向達に吠えた。

「私ハアア……！！ 私ハ才前ヨリ速イハズナンダアア……！！」

『文曲』アストラファイ 様……！！」

「ッ！？」
■タ級！！！！」

「逃ゲ……テ……」

偶然近くにいた轟沈寸前の戦艦タ級が海面を這いつくばって手を伸ばし、『文曲』アストラファイ 戦艦レ級でも逃げる様に掠れた声で伝える。

それを見て動揺しながら目が泳いだ戦艦レ級は昔の事を突然と思
い出し、閉じ込めていたはずの記憶が鮮明に頭の中で流れていき、そ

の度に呼吸が徐々に荒れていった。

数秒後にして戦艦レ級はハツと我に返り、日向達の方へ視線を向け
て睨む。

「ヨクモ……仲間ヲツ……!!! ツ……才前ヲヲ倒スマデハ絶対ニ……

!! 死ンデタマルカアア——」アストラファイ「待たせたわね」

『文曲』戦艦レ級の右腕を金色の一閃が貫く。

金色の一閃は戦艦レ級の背後で海面に着水。

大きな水柱が立ち上り、貫かれてもがれた右腕が空中に舞う。

戦艦レ級の瞳に映るは金色の十字光。

闇をも照らす太陽の様に輝きを放つ姿は戦艦レ級にとって絶望の
鐘を鳴らした。

「叢雲……!」

護神厄討艦隊旗艦『?』《オウゲン》叢雲。

現日本海軍最強の艦娘の一人として敵味方ともにその名を馳せた
特型駆逐艦だ。

金色の十字光は永遠に輝きを保ち続け、黄金の眼に一度でも写れば
最後。手に持つ金色の鎗は深海棲艦や艦娘のありとあらゆる装甲や
身体を破壊して穿ち、艤装の砲台から放たれる金色の一閃は触れただ
けでも融解してしまう程の威力だ。

「随分と面倒な事してくれたわね……」アストラファイ「文曲」……戦艦レ級……」

『?』オウゲン叢雲は金色の鎗を『文曲』アストラファイ戦艦レ級に突きつけ、殺意を溢れ
させて睨み付けた。

いわゆる廃棄物との戦闘後の影響か、身体の至る所に煤のような跡
や掠り傷があり、返り血のような赤い液体が付着している。援護の為
にかなり急いでいた様子で額の汗を拭いながらも呼吸が荒れていた。

叢雲は周辺を見渡しながら状況を把握していく。

ビスマルクと島風が意識不明で日向達に抱えられ、アストラファイ『文曲』戦艦レ
級と深海棲艦の艦隊はほぼ瀕死状態。

叢雲は一旦視界に映った情報を整理し、今やるべき事だけを考えて
口を開いた。

「……何があったのかは後で教えてもらおうとして、弱ってるのなら都

合がいいわ。出会った所悪いけど……トドメを刺させてもらおうよ」
金色の鎗を構えた姿勢で『?』オウゲン 叢雲は討伐宣告を言い渡す。
右腕をもぎ取られて悶絶する『文曲』アストラファイ 戦艦レ級は一気に窮地に立たされた。

このままでは確実に倒されてしまうと悟ったのか一歩ずつ退いていく。かといってこのまま撤退すれば七壊星としての傷がつく他、仲間を倒され自身のプライドにも傷つけられた以上は引くに引けなかった。

叢雲から放たれる金色の十字光が逆光となり、姿がシルエットに映し出される。

戦艦レ級は歯を食いしばって悩み続け、選んだのは――、

「ツ……チツ!!!」

撤退という苦渋の決断だった。

近くにいた戦艦夕級を尻尾の様な艤装にある口で掴んで回収し、海域から撤退していく。他の深海棲艦達は殆ど沈みかけていた為、回収する時間も無かった戦艦レ級は目を瞑って苦難の表情を浮かべた。

「ツ!! 誰がそう簡単に逃がすもんですか……!!」

撤退していく『文曲』アストラファイ 戦艦レ級の姿を見て『?』オウゲン 叢雲は激昂する。
散々島風や日向達を痛めつけといて逃げるなどと冗談にも程があると殺意を溢れさせた。

しかしその時――、

「絶対に……! 倒してや――ツ!!?」

追い掛けようと身体を動かした途端に『?』オウゲン 叢雲は突然引き止まる。

何かを感じ取ったのか焦った様子で金色の目を揺れさせ、身体が岩のように固まっていた。

「っ……」

『?』オウゲン 叢雲が感じ取ったのは身を震わせられる程の純粹な憎悪と殺意。

それは水平線の遙か先から放たれており、姿は見えずとも常人なら失神しかねない気迫が叢雲の肌をピリピリとさせていた。

まるで空から常に見下されているような、撃たれた弾丸や爆弾が周囲三百六十度を囲っている感覚。

叢雲はその瞬間に憎悪と殺意を放つ存在を垣間見た。

それは白い彼岸花。

悪魔の顔を浮かべて此方を睨む。

憎悪を纏う鋭い眼で、殺意を溢れさせた両腕を広げ、憤怒の如く髪を逆立てさせる。

禍々しい気が辺り一帯を覆って――、

「……チツ！ こちらも撤退よ！ 早く急いで!!」

「え？ わ、分かった!!」

追い討ちを中止して『?』オウゲン叢雲は日向達に撤退を促した。

身体から放たれる金色の十字光を抑えて艦隊の状況を把握し、自ら旗艦となつて日向達を先導していく。

激戦海域だった巨大な積乱雲による暴虐の嵐の下にある海域から離れていく様を日向達は後ろを振り向きながら撤退していった。微かに遠くで碧色の稲妻が見えるが恐らくあれは『文曲』アストラファイ戦艦レ級の痕跡なのだろう。

だがそれよりも日向達の視線を奪っていたのは巨大な積乱雲。

通る前に見た壁のような積乱雲とは全く違って、空を覆う鉄床雲へと渦を巻いて成長し、黒く禍々しい光や周辺の雲を巻き込んでいた。

「生きてるんだな……私達は……」

「はい……そうですね……」

七壊星『文曲』アストラファイ戦艦レ級との戦闘を終えて日向達はあの鉄床雲を見て初めて自分が今生きているという実感を改めて感じた。

たった一人で国を滅ぼしかねないとされる深海棲艦の中でもトップクラスの化け物を相手に生還したのは称えられるべき事だろう。

暴虐の嵐の中心で死闘を繰り広げたビスマルクや島風に対して感謝の気持ちで一杯だった。

それと同時に戦果を残せずに何も出来なかった自分を悔やむようになる。もつと強くならなければならぬと心の底から考えた。

「……何か感じたよね」

「うん……感じた。まさかとは思うけど……何か……いたの……？」

『?』オウゲン 叢雲と同じく蒼龍と飛龍はあの時僅かに遙か彼方から放たれた殺気と憎悪を感じ取っていた。

叢雲ほどまでに身体を立ち止まらせるほど敏感に感じてはいなかったようで、ただその先に何かがあるという正体不明の不安感を蒼龍と飛龍は持っていた。

「……ええそうね」

何かいたのかと聞かれた『?』オウゲン 叢雲は背後へ振り向かず返事をする。

余程の事なのか表情を見えずとも少し躊躇っているようにも思えた。

「アレと戦うには……今の状況じゃ……絶対に勝てない」

白い彼岸花は、風に揺られて。

170. 「前進する勇氣」

七壞星^{「アストラファイ」}『文 曲』戦艦レ級との戦闘から十三時間後に全偵察艦隊は潮岬町鎮守府に無事帰還し、全ての展開を終えて偵察作戦は終了。各艦隊旗艦が偵察内容を報告書にまとめるように指示を出した。

意識不明の重体だったビスマルクと島風はすぐさま医療施設に運ばれ、集中的な治療が施された。ビスマルクは落雷による電撃傷が至る所に激しく残っており、根を張る稲妻のような赤い火傷の痕で見ると堪えない姿だったという。

島風も一部電撃傷による傷を負っており、内臓も大きく火傷していたようだ。更には凄まじい速度を出した事で両足の骨は複雑骨折、筋肉の繊維などが焼き切れかけていたという。

いずれも高速修復材で全快させる事は可能だが、副作用の身体再生時による激痛で最悪ショック死しかねないらしく、体調を安定させた後に使用するように■**■**医師は口を酸っぱくして忠告した。

「よく寝たなあ〜……げっ、十四時!! やばっ!!」

作戦終了時に休憩するよう言われていた灰色は自身の部屋にて睡眠を軽く取っていた。

六時間程度眠っていたかと思つて目覚めれば時刻は既に昼を過ぎた十四時前後。六時間以上寝過ぎていた灰色は青ざめて急いで着替えようとする。

「つてそっぴや作戦が終わつてから白さんに一日休むように言われてそのまま寝たんだっけか……はあ……寿命が縮みそうだった……」

上半身だけ着替え終わった途端にカレンダーの日付を見た灰色はハッと我に返り、今日が休日である事を思い出した。そのまま安堵してベッドに座り込み、両手で顔を覆う。

外から艦娘達が訓練に励んでいる様子が音となって聞こえてきた。カーテンの隙間から溢れ出る光が暗い部屋を仄かに照らす。

久々の休日に灰色はそのままベッドに倒れて天井を見つめ、片腕を額に乗せて思わず独り言を話した。

「今日は休みか……白さんは大丈夫かな……島風やビスマルクも心配

だな……」

灰色は二日に渡る偵察作戦の事について思い出し出していた。何十時間もの時間を消費して艦隊を指揮し、一切の居眠りは許されない中での初めて本格的な作戦。

灰色は二つの艦隊の指揮を任せられ、細心の注意を払って挑んでいた。途中提督の艦隊でトラブルが発生し、七壊星と接敵したと聞いた時は身体が震えるほど緊張が止まらなかった。自身の担当する艦隊は何も無いか随時連絡しては確認を取ってひと時の安心を得ていた。なお七壊星と接敵したとしても提督は冷静沈着で怒るどころか的確に指示を与え、通信が途絶えた時でも即座に機転を利かせて別艦隊を向かわせていた。

その場面を見ていた灰色は提督としての能力の片鱗を垣間見る。自分はまだまだだなど力不足である事を改めて感じていた。

「おはよう灰さん。よく眠れた？」

「おはよう時雨。まあ眠れた方かな……」

気分晴らしに外を出ようと私服に着替えて部屋を出た途端、偶然時雨と出会わせた。

そのまま二人は目的が同じだった為か一緒に外まで歩いていく。自身の私服姿を見ても時雨は反応もなく元気に灰色へ話し掛けた。

「灰さん、今日は休みなんだよね」

「そうだね。白さんと交代でそれぞれ一日休むようにしてくれたんだ。色々時雨達には申し訳ないんだけど」

「いやいや、休むべきだと僕は思うよ。提督も万が一の時に何かあったら困るから休める時に適度に休めとか言ってたし」

艦娘達は今でも外で訓練に励んでいるというのに自分だけが休んでいいのかと疑問に思っていた灰色。

しかし時雨は休日である事に対してとても寛容だった。寧ろ休んでくれなければ困るといった半ば心配そうな感情で灰色の事を理解してくれている。

「これから何するの？」

「ん〜そうだな〜……今日は何もせずゆっくりしてようかな……派

手に動いたら迷惑掛けちゃうしね。ん、アレは……」

寮内の廊下からエントランスへ歩いて外へ出た二人は建物の屋上にいる艦娘に気付く。

太陽の陽射しがちようどよく差し込み、秋特有の涼しい風が流れる中で顔を仰いだ。

『?』の金剛さん、かな?」

「ああそっぴいああの金剛は今日自分の鎮守府に帰る予定らしいよ。叢雲と何か話してるね」

屋上では『?』金剛が金網柵の上に乗って頬杖をつきながら風に煽られていた。灰白く透き通る宝石のような眼で海上で戦う艦娘達をつまらなそうな表情で眺める。

その隣には金網柵に寄り掛かりながら空を見上げる『?』叢雲がいた。

「んで、話って何?」

互いに視線を合わせず、ましてや面と向かう事なく二人は話を続ける。

「まあ少しばかり貴女に伝えたい事があってネ」

「何よ、アンタにしちや珍しいじゃない」

『?』金剛は旗艦叢雲に報告したい事があって呼び寄せたようだ。普段から艦隊と妹達以外の他人に興味を示さず、報告や連絡はほとんど他人に任せていた『?』金剛が自身を呼んだ事に対して叢雲は物珍しく思っていた。

余程の事なのか陽気な口調は何処へやら、いつになく真面目な口調で叢雲に話し掛ける。

『鏢』の件についてなんだけどネ、『?』サンはどう思ってるカナ?」

「大雑把な質問ね……まあ別に、何とも思っていないけど。必ず答えろって言うのなら、あんまりいけすかない奴って事ぐらいかしら」

忽然と『?』金剛は同じ艦隊の仲間である『鏢』鹿島に対する印象について聞いてきた。

あまりにも大雑把な質問に叢雲は困惑して頬を掻きながら答える。叢雲自身は他の艦娘や人物に対して微塵も興味が無く、公平にどう

でもいいと思っっているからか鹿島に対しての印象はさほど薄いよう
だ。

だが作戦会議中に提督へ鎗を振るった時の事で鹿島に煽られた際
は流石に苛つきが収まらなかつたらしく、必ず白黒つけて言うのなら
いけ好かない奴だと叢雲は半笑い気味で答えた。

「そう……まあMeもあまり良い印象は持つてないネ」

「んで、何か進展はあったの?」

同じ艦隊の仲間である『?』ビョウコウ金剛も『鏢』シロガネ鹿島に対しては良いと思
える印象は無いらしい。どちらも捻くれた性格を持つ規格外の戦闘
狂でありながら互いの相性は最悪なようだ。

そんな鹿島について『?』ビョウコウ金剛は何かを掴んだのか意味ありげな表
情を浮かべ、叢雲はそれに気付いて話を進めていく。

「あの作戦中でちよこつと艦娘達に聞いてみたんだケド……皆誰もが
同じ事言うんだよネ……」

「——誰も……あの鹿島の姿を見てない、つて」

「っ……」

「おかしいよネ、鎮守府防衛最大の戦力が大事な作戦中にいなくな
るだなんテ……もしその最中に何かあつたらダメだし。しかも驚く
事にその消えた姿を誰も見ていない、作戦が終わればいつの間にかそ
こにいたって言うノ」

「秘密裏に何かしていた、つて事かしら」

あの偵察作戦中に鎮守府防衛艦隊の旗艦として務めていた鹿島が
ある一定時間のみ姿を消したという。独自である任務を進めていた
『?』ビョウコウ金剛は作戦展開中の鎮守府防衛を担当していた艦娘達に興味本
位で聞いてみた結果、半数の艦娘達の声が同じ言葉を揃えて『鹿島が
いなかった』と言っていた。

その証言をした艦娘達はいずれも作戦時間が長い故の交代制によ
る休憩時間かと思っっていたらしい。しかし休憩時間にしてはあまり
にも長過ぎると一部疑問に思っっていた艦娘もいた。

それらを聞いて『?』金剛は『鏢』鹿島が怪しい行動をしたのではないかと仮説を立てる。そしてその仮説は様々な艦娘の言葉によって立証された。

「Yes! 更にネ、その消えたタイミングがき……ビスマルクが『文曲』戦艦レ級と接敵した報告を受けた時、なんだよネ」
「……」

「七壊星に接敵した報告を受けた際は有り得ないほど冷静だったようだし、あの男が鹿島を艦隊に選ばなかったのにも何か理由があるのかなーなんて思ったりして、ネ……」

『鏢』鹿島の消えたタイミングはビスマルクの艦隊が七壊星『文曲』《アストラファイ》戦艦レ級と接敵して報告を受けた時だった。

また偵察作戦の艦隊に鹿島を選ばなかった事や提督のまるで接敵する事を知っていたかのような冷静沈着な指示。

それらを鑑みて『?』金剛は二人の関係を怪しんでいた。
確かにこの偵察作戦における違和感を考えれば辻褄は合う。

鎮守府防衛の任を何故深海棲艦の襲撃が予知できる能力を持つ『緋』摩耶にしなかったのか、提督が何故ビスマルクの家をすんなりと受け入れたのか。

ただ単純に出撃を拒み続けたるくに協調性のない鹿島に折れた可能性や、あのビスマルクだけは特別だということは叢雲側も把握しており、提督もそれを考慮して受け入れた可能性はある。

だとしても接敵した報告を受けたタイミングで姿が消えてしまうなどあまりにも出来すぎていた。

「まあそういう事! 大体は伝えだし、後は『?』サンの好きにして構わないネ。だけど同じ戦友として言っておくヨ……」

『?』金剛は金網柵からゆっくりと降りて屋上に立ち、正装についた埃や汚れを手で払う。

鹿島の件については叢雲に任せると任務を託した。『?』金剛は叢雲の視線まで身体を屈め、視線を合わせずに肩を掴んで忠告する。

『鏢』鹿島は何か面倒な事を企んでる」

『?』金剛は静かに殺意のこもった声で期待を膨らませているかのように笑みを漏らす。鹿島が何かしら面倒な企みを考えているのを真剣に捉えるどころか面白がっていた。

早く起こして欲しいと思わんばかりの狂った表情は流石の叢雲でさえも気味が悪いと引いてしまうほどだった。

「Bye」

『?』金剛は眩しい笑顔を作って手を振り、屋上を颯爽と去っていく。

取り残された叢雲は事の面倒さに頭を掻いて空を仰ぎながらため息を吐いた。一つ一つに群がる羊雲達が優しく吹く風に流され、何処かの空へと水平線から消えて行く。

何かを思い出したかのように黄昏ていた叢雲は訓練中の艦娘達の応援を聞いてハッと我に返った。らしくない事をすると言を呟いた後に叢雲は屋上から飛び降り、近くで訓練をしている艦娘達の元へ向かった。

『今日のニュースをお伝えします。今日■■■■が未来へ繋ぐとされる無尽蔵の新エネルギーを開発したと一部の関係者が公表しました。この新エネルギーは——』

偵察作戦終了から約三日が経過。

島風とビスマルクは■■■医師達によって応急処置と治療が成された後、講堂の空き部屋を応用した仮の医療施設の病室にて身体を安静にしている。

その二日後に意識を取り戻したビスマルクは上半身を起こした状態で設置されたテレビを見ていた。

が、ニュースがつまらなかつたのかりモコンで電源を消し、深くベッドに背を預ける。

根を張る様な雷撃傷だらけの右腕に点滴を打たれ、左腕にある鋼鉄の籠手は隙間から淡く碧色に光を放出していた。そして碧色の右眼から顔や首、胸の順に心臓の鼓動のように血管を通して光り出してい

る。

作戦終了時と比べて体調はだいぶ安定したが、それでも四肢の痺れや疼痛は微かに残っていた。

常人の何十倍もの回復力を持つ艦娘の身体と言えど『耐久』という性質だけで身体を再生させるには普段のエネルギー効率だけでは時間が掛かるようで、完全回復に至るまでは高速修復材が必要だった。

更には『揺光』アルカイト欧州水姫が備えるこの鋼鉄の籠手の力によって『装甲』という性質を相殺する代わりに自身の『装甲』を三割失っている。

故に戦闘中は常に倍以上のリスクを背負っており、力を使おうが使わまいが一切の油断は許されなかった。

『？』オウゲン叢雲や神聖なる騎士団の様なエネルギー効率を極限にまで高めた化け物達のように短い時間で再生出来るような『耐久』や高倍率でダメージを相殺する『装甲』に促すエネルギー効率などビスマルクには無い。

「……流石島風、なのかしらね。もう怪我や傷痕が治りきってる」
ビスマルクが眠るベッドの向かい先にも島風がベッドで身体を安静にしていた。

雷撃傷は微かに痕を残して消え掛けており、両足の筋肉や複雑骨折した骨は既に再生し終わっている。

ビスマルクとは逆に島風は『文曲』アストラファイ戦艦レ級を致命傷にまで追いつめた爆発的なエネルギー効率による影響で三日が過ぎた今でも全ての性質が数十倍以上も残っていた。今まで島風の中で眠っていた膨大なエネルギー効率が目を覚ましたのか、島風自身でも到底扱いきれないほどに溢れている。

その所為で両足の筋肉や骨などが爆発的なエネルギー効率による光並みの航行速度に身体が負荷に耐え切れなくなり、余計な怪我を負う羽目になってしまった。

「ごめんなさい……私のせいで……あんな事になって……」

「島風が気に病む必要は無いわ。別に運が悪い事だって誰にでもある事じゃない」

「でも……それでも私は……」

島風は顔を俯いたままビスマルクの顔を見る事なく自身の過失を謝った。

あの時『アストラファイ文曲』戦艦レ級の事は誰よりも一番自分自身が分かっていたというのに仲間との情報共有は疎か、逃げたいと思つて怯えていて守られてばかりだった。

本当は自身が率先して対抗策を伝えるべきだった。

戦艦レ級と接敵した時も、

一番初めにビスマルクが受けた落雷の時も、

日向達が己の身体と知恵を駆使して戦っていた時も、

本当は自分が戦わなければいけなかった。

「あら、もしかしてこの肌の赤い模様の事に気にしてるのかしら？」

これは落雷を受けた時に出来る傷痕よ、まあ他の人から見れば少し気持ち悪いかもしれないけど、少なくとも私は全く気にしないわ」

「……その左腕も、ですか……？」

「ええ全く」

ビスマルクが受けた落雷の数は全三回。

常人であれば死亡してもおかしくないほどの落雷を受け続け、ビスマルクは身体外や内まで火傷を負っている。身体中を蔓延るように左肩や背中から腰、右腕や右腹へと夥しく雷撃傷が今でも残っていた。

そして何よりも注目するのは鋼鉄を纏った特徴的な左腕と碧色に輝く宝石のような瞳。

ビスマルクはそれを何の躊躇いもなく島風に見せ、繊細に指を動かしてカチャカチャと金属同士が擦れ合う音を奏でた。

人間から見れば悍ましき深海棲艦と融合した醜い艦娘だと思われるもおかしくはない。

あの摩耶のように艦娘からも違和感を覚えてしまうほど、ビスマルクの姿は常識とは掛け離れていた。

それでもビスマルクは自身の姿について全く気にしないと云う。

仲間から向けられる疑惑の表情や引かれて怯えられた守るべき人間達の目を尽く受け流してきた。

それは単なる自己の強さなのか、負の感情すらも上回る圧倒的な確立された自己同一性があった。

「寧ろ貴女は誇るべきよ。あの『アストラファイ文曲』相手に挑み、そして致命傷を負わせたんだから。貴女の中に秘められた莫大なエネルギーで光のように駆け抜けてね、そんな貴女の行動に敬意を表するわ」

ビスマルクは意識を失っていた為島風の奮闘を明細に覚えていないが、後に日向達から話は聞いていた。島風の中で眠っていた莫大なエネルギー効率が目を覚まし、溢れ出るように光の柱が昇り立ち、そして全てを穿つ光線のように『アストラファイ文曲』戦艦レ級の艦隊を殲滅にまで追い込んだ。

ビスマルクは島風が強大な力を持っていた事を把握していたようで、トラウマ的存在である戦艦レ級に勇氣を持って挑んだ事や恐怖から克服しようと立ち上がった事に敬意を表した。

「いえ……私にそれらの事を誇る事は出来ません……それ以前に私は怯えてばかりで仲間の為に誰よりも早く行動出来なかった……大馬鹿モノですよ」

しかし島風は顔を俯かせたままビスマルクと視線を合わせずに話していく。

横の窓から溢れる光は一步届かず、暗い影に染められる島風。

辛うじて光に晒された右腕を見て思わず光を掴むように右手を優しく握った。

じんわりと肌に染み込む光の暖かさを感じて右腕ごと純白の布団に扇状に擦れさせる。卑下していく島風を前にビスマルクは何も言う事は無かった。

否定もせず肯定もせず聞く身になって真面目な表情で耳を傾ける。左腕にある鋼鉄の籠手が光によって輝きを放ち、碧色と白色の光が部屋を淡く照らしていた。

「この目である場所を見に行きたいと無理矢理勇氣を出して、いや……勇氣だと思ひ込んでいました。もう言ったからには引けないと

半分投げやりで、内心はとても怖くて不安でしかありませんでした」
島風は光に晒された右腕を左手で押さえ、僅かな震えを止めようとした。

恐怖に怯えていたかのように震えるその手は偵察作戦が始まる前と全く同じで、あの時本当は無理をして行った事をビスマルクに告げる。

■ 医師やビスマルクの言葉に動かされて衝動的に動いてしまった事を今更後悔しても遅い事は分かっていた。

もうこの先引き返す事は出来ない、何があろうとそれは自身の責任だと追い詰めるように思っていた。

「馬鹿だったんです、私…… ■ 先生やビスマルクさんに励まされて調子に乗ってたみたいで、見に行きたいが為に周りに迷惑を掛けて、物事を決める事は無駄に早くて、色々考えもしないままその場しのぎで首を突っ込んで、いざ接敵すればただの足手まとい。ロクに戦いもせずに行く末を見るだけ……」

「でも決断力が早いのはいい事じゃない？ 瀕死寸前だった私を助けてくれた時も貴女は即座に駆けつけた。『アストラファイ文曲』に対する策もあった。物事を決める事は無駄に早いだなんて聞こえが悪いけど、言い方を変えればそれは素早い決断力って言うのよ？ 十分素晴らしいじゃない」

自然にビスマルクは島風の言葉を受け止め、それ等を素早い決断力だと褒めていく。

褒められても尚島風はあまり心地良い気分にはなれなかった。

今思えば島風の行動が正しいとは簡単には言い切れない部分がある。

精神が不安定な状態や万全でない体調での出撃、連装砲損失による大幅な攻撃力の低下など考慮すべき点はいくらでもあった。

偵察作戦故に戦闘は無い事を前提に考えていたものの、必ずしも戦闘が起きないとは限らない。接敵する確率がある以上はある程度の武装は必要になる。事前に『アストラファイ文曲』戦艦レ級と接敵する事が分かっているのが分かっているが島風を連れていく事は慎重に考えるべき

だった。

「……実際あの時私は、半分無理してレ級に攻撃したんですよ。速さや技術は全く取り戻せていなくて、身体だけが真っ正直に動いたんです。最初は怖くて今すぐにも逃げたかった……」

本当はとてつもなく怖くて逃げたかった。

この悪夢から醒めてほしいと何度も願った。

神経を痺れさせるような幻覚が身体を震えさせていく。

だがそれでも島風は『アストラファイ文曲』戦艦レ級という恐怖の存在に立ち向かった。

それは一瞬の気の迷いか、気付けば自分は戦艦レ級を蹴り飛ばして倒れるビスマルクを守ろうと戦闘態勢に入っている。

急に頭の中が真っ白に埋め尽くされた。

何故動いたんだ、なぜ攻撃したんだと自問自答してしまうほど理解に苦しむような出来事だった。

どうすればいいのか分からない、相手は怒れる鬼の如き表情で此方を睨んでいる。

もうここまで来ては引く事も出来なかった。

「逃げたかった……でも……」

「っ……？」

でも、と最後に否定する言葉を言う島風。

それを聞いたビスマルクは顔を上げて島風の顔を見る。

窓から溢れる光が徐々に部屋の奥へと伸びていき、暗い影の中に入った島風が少しずつ胸から肩へと光に照らされた。

「頑張ってる日向さん達やビスマルクさんを見て仲間を守らなきゃ、これ以上奪わせはしないんだって強く思いました。そこで思う内に気付いたんです……『アストラファイ勇氣』とは一体何かを……」

それは島風が『アストラファイ文曲』戦艦レ級を蹴り飛ばし、ビスマルクを守った直後の事だった。

顔面蒼白でパニック状態だった島風は辺りを見渡して遠くにいる日向達や深海棲艦、そして最後に背後にいる瀕死寸前のビスマルクを見る。

その時島風の中で急に稲妻が走り、勇氣とは何かを知る事になった。

「私は今度こそ仲間を守りたい。守ってくれた仲間を、いや……皆を、一生掛けても守りたい。例え恐怖を司る悪魔が目の前にいたとしても、それが私にとって全てなんだって言いたい……あの時沈んでしまった仲間への弔いとして、私が生きなければならぬ理由として……」

■ 医師やビスマルクの言葉、『アストラファイ文曲』戦艦レ級の言葉を聞いた島風は目の前に聳え立つ壁へ立ち向かった。仲間を守りたいという気持ちを晒け出して、初めて『勇氣』というモノをその身を持って実感した。

勇ましく吠え続け、猛獣の如く戦い、身を削っても尚、前進し続ける。

しかし島風は艤装の不調や技術不足の所為で途中戦艦レ級に反撃を食らい、意識を失ってしまった。

その時だった。

それは夢なのか、逝ってしまった仲間達が生きてほしいと願って、暗海の底に沈みゆく島風の背中を押してくれていた。

会話は出来ずとも希望を託すように一人一人がその背中支えてくれていたのだ。

島風は涙が溢れて止まらなかつた。

久しく現実に蘇ってもその時の記憶から仲間の希望を踏み躪るような事をしてばかりだった。

今まで支えてくれた古き仲間の為にも、今まで守ってくれた皆の為にもこのままへこたれてはいけない。

立ち上がれ、臆するな、前を向け、立ちはだかる苦難を蹴り飛ばせと島風は組み上がった鋼鉄の心で決心したのだ。

「今まで私に価値なんて無いと思っていました……だけど、■ 先生やビスマルクさんや皆と出会って、色々教えてもらったおかげでここ

まで来れたような気がするんです」

右手を僅かに震わせ、鋼鉄の心を象るように優しく握る。全身が太陽の光に照らされた島風を前を向いて真反対にいるビスマルクの顔を見た。

ビスマルクはベッドから離れて立ち上がり、点滴スタンドを支えに島風の側までゆつくりと近づき歩く。

そこに偵察作戦が起きる前の弱々しい島風はどこにもいなく、ビスマルクの目の前には真面目な瞳で覚悟を決めた勇ましい島風がいた。ビスマルクは十数秒かけて傍まで辿り着き、島風のベッドの横にあつた椅子にゆつくりと座る。

「だから、その……何と言うか……」

ビスマルクが来た途端に緊張が綻んだのか表情が緩くなり、島風は照れくさそうに頭を掻いた。本当に伝えたい言葉が恥ずかしくて言えないのか言葉に詰まっている様子だった。

ビスマルクは自然にさりげなく無言のまま島風の頭を胸元に寄せ、右腕で包むように抱き締めながら頭を優しく撫でる。

「……無理させてしまった事を許してね。大丈夫……きっと貴女は、まだまだ立ち向かえる。その最中にまた壁に阻まれる事もあるでしょう……その時はすぐ私たちに頼みなさい、私たちはいつでも貴女を応援してるわ」

数十秒間撫で続けたビスマルクが口を開いて言った言葉はこれからも島風を支えるという励ましの言葉だった。これからも島風を応援し続けると自身の娘のように親身になって駆けつけるといふ。

抱き締められた故に頬に触れたビスマルクの胸肌がとても心暖かく感じた。優しい声を聞く度に島風は感極まって目から涙を溢れさせていく。

「ありがとうございます……」

島風は精一杯の返事としてビスマルクに言いたかった感謝の言葉を涙ぐみながら伝えた。

「……でも、その言葉はもつと伝えるべき相手がいたはずよ。ね？」

ビスマルクが目を背後に移してドア越しで聞いている誰かを呼び掛ける。

呼ばれた人物はドアを開いて姿を見せた。

「doctor」

二人の会話を聞いていたのは■醫師。

ちょうど見回りの途中だったらしく、開く前に会話を耳にした■醫師はドアに寄りかかって聞いていたようだ。

「いや／＼参ったなく……私が出る幕は無いと思ってたんだけど……」

ビスマルクに呼ばれてこの場に自分に行くべきかと少し躊躇っていた様子で、いつもの大らかな感じで振舞おうとしていたが内心は恐る恐る緊張するばかりだった。

ビスマルクによって島風が前進したのならもう出る幕は無いと■醫師は苦笑いしながら頭を掻く。島風の表情を見て一瞬■醫師は僅かな成長を実感し、島風の頭を優しく撫でた。

「……頑張ったね。私としても嬉しい限りだわ……まあ、何もしてあげられなかったけどね……」

「そ、そんな事ないです!!」

己の無力さを卑下するように■醫師は心配させまいと苦し紛れの笑みを見せる。どんな事であれ、島風が良い方向に変わっているのならこの結果なら問題はない。

そう思っていた矢先、島風がそんな事ないと大きく声を上げて否定した。

「■先生がいなければ私はあのままベッドで蹲っていました……ずっと皆に迷惑を掛けてばかりだったと思います……あの時話し掛けてくれなかったら、こうして立ち上がる事も価値を見つける事も出来ませんでした……」

■醫師がいなければ今頃自分はどうなっていたのだろうかと思うと恐ろしい気持ちだった。

暗い影に染まり続けたまま何もせず廃人になっていた事だろう。

そんな島風を救おうと■醫師は立ち上がり、懸命な献身をこれでもかとしてくれた。今の島風にとって寄り添ってくれた■醫師は

全ての原点であり、決して忘れる事のないかけがえのない存在。

「本当に■■■先生には感謝してもしきれなくらい……！！ 本当に……！！」

撫でてくれた■■■医師の手をそっと触れて、島風は顔の目の前まで寄せていき、両手で包み込むように握る。

「ありがとうございます……！！」

顔を上げて再度■■■医師に精一杯の感謝の意を伝えた。

目に涙を浮かべて嬉しそうに笑う島風を見て■■■医師は涙を見せないように白衣の腕で拭い隠す。

「また……あの時のように、手伝ってくださいますか……？」

その言葉を聞いて■■■医師は確信する。また壁に阻まれた時には頼ってもいいのかと島風は■■■医師を信じてくれていた。

感極まった■■■医師は突然笑い声を上げて目から流れ出る涙を指や腕で拭う。

島風の握られた手がとても暖かく感じた。

「……ごめんなさい、涙が出るなんて久しぶりで……ええ、勿論よ。ビスマルクが言ってたじゃない、私たちは応援してるって。頼りたい時に頼っていいのよ……頑張りましょうね」

「はー」

立ち上がる事が出来たとしてもそれはまだ明確な一步に過ぎない。

今後勇ましくなる為には更なる苦難が押し寄せるだろう。

この先の未来がどうなろうと必然的にその運命はやってくる。

ならば迎え撃つまでだと鋼鉄の心に刻んでおこう。

これからが私の道だ。

「さく報告書が揃った訳だが……」

仮執務室で机に足を乗せて堂々と座る提督。

偵察作戦後に艦娘達が提出した多くの報告書を片手に飄然とした表情で眺めていた。

「もう目的地は決まってるんだよね」

「そろそろ決着をつけようか……」

Part. 9 鳳鳴朝陽のへリオドール

171. 山登りをする時は事前の準備を怠るな

『はい！ 私達艦娘は日本という国と国民の皆さんを護る為、日夜領海内をパトロールし、領海内に侵入する深海棲艦や海外諸国の艦娘又は艦船に対して最大限の警戒を強く行っています』

偵察作戦が終了して三日が経過し、ビスマルクと島風が仮の病室で治療中の夜十八時。

着実に時が差し迫ってくる中でテレビでは軍の特集番組が放送されていた。

ここ最近で提督や潮岬町鎮守府の艦娘達による目立った行動が多過ぎたのかイメージアップを図る為か最低限に公開できる範囲で色々と紹介している。

執務を終えた提督と摩耶、休日中の灰色と共にいつてきた時雨は夕飯の時間まで食堂のでテレビ番組を見ていた。

「艦娘の特集番組やってますけど、吹雪さんが案内役だとイメージアップに良さそうですね。健気というか、穏やかというか、とても良い子に見えます」

「深海棲艦が攻めてきた時に突如現れた艦娘の中でも一番最初に現れたのが吹雪、曙、電、叢雲、五月雨だからね。現在でも日本海軍の代表的な艦娘且つ一番有名な艦娘だよ」

番組では案内役のどこかで見た事のある吹雪が横須賀鎮守府の一部を見せて満点の笑顔でリポーターのタレントに説明している。

灰色の秘書艦である時雨が説明したように艦娘の中でも他の四人を差し置いて特に認知度が高いのは吹雪であり、真面目で健気な性格からか日本海軍の顔として広報に抜擢される事が多い。

「私も軍に入る前は誰もが知っていたたくテレビの前でも堂々と日本を守ると言える意思是素晴らしいですね」

「ふん」

「どうしました？」

テレビ番組を見て世間話を語る灰色と時雨を提督はコーヒーカップを手にして馬鹿にするかのように鼻で笑った。

何かおかしい事でも言ったのかと灰色は提督の機嫌を伺う。珈琲を一飲みした提督は椅子にもたれかかって口を開いた。

「日本を守る為という御託を並べても所詮は兵器だ、感情を併せ持った兵器なんて二通りだろう。モノ扱いされているとも知らずに無能な人間の命令を聞くだけの忠実な操り人形か、己の欲を満たす為だけに命令を無視して突っ込むバグだらけの欠陥品か、さてあの案内役の艦娘は一体どっちなんだろうなあ」

テレビ番組に出ている吹雪を見て提督は誰かであるのを察したのか面白おかしく観ていた。所詮は感情を併せ持った兵器だと見下すような言い方で先程の吹雪な言っていた国を護る為という言葉を否定する。

「どちらでもないと思いますよ」

灰色はそんな事ないと速攻で否定した。

しかし提督は聞く耳を持たずにペラペラと語り出す。

「数年後には人と兵器の禁断の恋とかを美談のように語り出すか、見た目がいいからと言って性欲モンスター共の慰めものとか使われるだろうなあ、ああ全くもって反吐が出る」

「すいません摩耶さん！ この人子供の時からこうなんですか!!」

「いやあたし知らないし……」

あまりの提督の捻くれさに参った灰色は提督の隣にいた摩耶に訴えるように問い掛ける。この捻くれた性格は子供の時からそうなのかと嘆いたが摩耶は知らないと否定した。数秒後冷静になった灰色は確かに摩耶が知るはずもないと自問自答する。

「こんだけ捻くれてても無垢なる少年時代ぐらいはあったんじゃない？ 一応は人なんだし」

提督の隣の座席では叢雲がスマホをいじりながら背を預けて座っていた。先程の会話を聞いていたのか提督にも少なからずあったのではないかと半分呆れ顔で話し掛ける。

「少なくともお前らよりはまだマシな人間だと思ってるがね」

「へえ、よく言えた口ね、敵だったらぶっ飛ばしてたわ」

提督は自身が周辺の艦娘よりは人だと戯言を吐いて見下していく。

オウゲン

『?』叢雲は提督の方へ顔を振り向かせ、苛つきを自制していたが抑えられず表情に出ていた。傍に立ててあった金色の鎗を握って提督を睨んでいる。

「っていか何で叢雲はここにいるんだ？ 訓練はどうした」

「貴女と同じく私の時間はもう終わったからここで大人しく夕飯待機中。別にここにいたっていいでしょ？」

オウゲン

訓練をちやうど夜十八時に終わらせたかった『?』叢雲は模擬戦闘の相手だった浦風の隙を着いて薙ぎ倒し訓練は終了。何事も無かったかのように叢雲は鎗を片手に食堂へ来ていた。

二階の席に座っていた提督は一階で谷風と話している至る所に包帯を巻かれた浦風を見下ろしながら、隣の席にいる掠り傷が幾つかある程度の叢雲と比較して頬を引き攣る。

『鎮守府は日本領海内を守る為に各県に設置されています。有名な場所です。言いますとこの横須賀鎮守府、京都府の舞鶴鎮守府、広島県の呉鎮守府、長崎県の佐世保鎮守府、その他にもその鎮守府に属する地方鎮守府があります』

「そういえば興味半分です。白さんの出身地ってどこなんですか？」

「何故お前に他人の個人情報ベラベラと話さなければならぬ。一度ありったけのダンベルを頭に付けながら「魔の山」と恐れられたマッターホルンでも登頂してくるといい、その軽率な頭も少しはマシになるだろう」

鎮守府の事について話している案内役の吹雪を見て、ふと灰色は提督の出身地について気になったのか聞き出した。

自身の生まれた地など教える訳がないと提督は灰色を嘲笑いながら罵倒していく。

「確か――」「おいコラ摩耶ア!! 何話してんだ!!」

しかし隣に座って夕飯を食べていた摩耶が他人事のような顔でボソッと提督の出身地を言い晒した。意地を張った提督と摩耶が取っ

組み合いになり、口喧嘩となつて突然と食堂内が騒がしくなる。

「うるさいわね!! 黙つてなさい!!」

数十秒後にイライラが募つた叢雲が怒号を放ち、金色の鎗で二人の頭を叩いて喧嘩は強制終了。無言のまま床に倒れる二人の頭にはボール状のたんこぶが出来上がり、若干白い煙を放っていた。

「あく……そうだ……悪いが灰」

「な、何ですか……?」

「明日の休みは無しにしてもらいたい」

「ええ!!? 今それこの状況で言う事ですかあ!!?」

床に倒れたまま顔を振り向かせた提督は何かを思い出したのか突然灰色の休日取り消しを告げた。予想だにしない状況と展開に灰色は思わずツツコミを入れてしまう。

提督は何事も無かつたかのように忽然と立ち上がり、元の座席に座つて内ポケットから予定表を取り出した。

「と、突然ですね……何かあつたんですか?」

「まあ、少しこちらの予定が重なり過ぎた。本来は俺が行くはずだったが緊急の予定が入つてだな、お前には佐世保鎮守府の方に行つてその責任者と少し打合せをしてもらいたい。なあに簡単なお仕事だ、資材関係の話をすればいい」

提督は予定表を確認しながら灰色と話しつつ、予定表の最後にあるメモ帳を一枚破つて灰色に投げ渡した。

慌てて灰色は一枚のメモを手に取り、大雑把に書かれた内容を目に通していく。

提督曰く、本来は明日佐世保鎮守府へ訪問する予定だったが緊急の予定が入つてしまい、佐世保鎮守府の件も捨てがたいと渋つていた提督は自身の代わりに灰色を行かせれば大丈夫だろうと考えていた。

「交通費や宿泊費はこちらで負担するから気にしないでいい。早朝から迎えが来てくれるから荷物を詰めてさっさと行く事だ。指定席の都合上で四日間空きが出来たおかげで悠々自適に過ごせる訳だが、そんな余計な事はせずに帰つてこい。詳細は後で書類にして送る」

夕飯を食べ終えた提督は颯爽とお盆を持ってその場を去っていく。思い出した事をきつかけに何か忙しそうに見えた。

後半三日間空気が出来ても即座に帰ってこいと言われ、何を言っているのか理解出来なかった灰色は頭にはてなマークを浮かべて目を丸くしていた。

提督が去っていたのを切りに次々に摩耶や叢雲が食堂から出て行くこうとする。

その時過ぎ去る際に灰色は摩耶に肩を叩かれ、提督の言葉を補足して伝えた。

「話が終わったら後は三日間ぐらい空けといたから適当に休んで遊んだりして帰ってこい、って事。んじゃ、明日はよろしくな」

「は、はあ……」

夕食を食い終えた後に灰色は仮執務室に向かい、提督とミーティングを始めた。佐世保鎮守府までの大まかなルートや行程、打合せ内容や持っていく資料などの確認を行ってミーティングは終了。仮執務室の近くを通った艦娘達は時々部屋から怒号や笑い声が聞こえたりしい。

「灰さん、どうしたの？」

「ごめんね白露。時雨はいるかな？」

「時雨？　いるよ……時雨く、灰さんが呼んでるよ」

ミーティングを終えた灰色は駆逐艦寮にいる白露と時雨と夕立が住んでいる部屋を訪れていた。勉強していた時雨を白露へ廊下まで来てくれるよう呼び出してもらい、呼ばれた時雨は少し戸惑った表情で灰色の元へ歩み寄る。

「え？　僕も行けるの？」

「うん、そうみたい。秘書艦連れて行けって言われてさ」

灰色から今回の訪問についての書類を渡された時雨は一枚ずつ適当に流し読みしていく。食堂の時には伝えられなかったがどうやら秘書艦も連れて行かなければならないようだ。

灰色はとりあえず明日の日程を簡潔に伝え、その後の行動なども分かりやすく説明していく。

前に提督が複数の艦娘を連れて東京に行っていた事を思い出した時雨は今度は自分なのかと半ば心の中で期待していた。

「それでなんだけど……時雨ってこういう訪問とか泊まるやつとか大丈夫？ 何か不安な事があるなら言っただけでいいから……なんて」

「うん……大丈夫だよ。灰さんがいれば何とかなる気がするから」

「そ、そう……？ なんな何か嬉しいなく……じゃなくて、分かった！何かあったらいつでも僕に言ってくれ！」

恐らく鎮守府外での訪問などは初めてだろうと思った灰色は時雨が行けるかどうか確認を取った。

時雨は視線を渡された書類から灰色の目に合わせて暖かい笑顔で問題ないと伝える。

■少尉の件以降で時雨は次第に灰色を信頼しつつあり、徐々に友好的な関係を結べるような仲まで成長していた。

今回も灰色を信頼しているのか、完全に頼っている様子で不思議と不安は無さそうに見える。

いつもより眩しい笑顔を見た灰色は照れてしまい、思わず目を逸らして目を泳がせていた。

しかしハツと我に返って本来の自分を思い出し、胸を張って頼ってくれと言わんばかりに堂々とした表情で答える。

「あ、因みに訪問が終わったら四日間ぐらい休みがあるから、社会的な感じで時雨の行きたい所を色々回ろうと思ってるんだ。これも大丈夫かな？」

「大丈夫だよ。寧ろ楽しみにしてるし、ありがたく思ってるよ」

提督から実質的な三日間の休みをもらった灰色はこれを機に時雨に社会を知ってもらおうとちよつとした旅行を考えていた。

時雨は快くその計画を了承し、自身も楽しみだと本心を打ち明ける。

「よかった……んじゃ明日からよろしくね、おやすみ」

「うん、おやすみ灰さん」

灰色は時雨の本心を聞いてホッと安堵の息を漏らす。

明日はとても早いと寝るように促した後に灰色は駆逐艦寮を出て

いった。

誰もいない廊下に取り残された時雨は壁に寄りかかって先程流し読みしていた書類をじっくりと目に通していく。これから遠い佐世保の方まで行くのかと未だに実感があまり掴めない中、明日の事について想像していた。

「明日は話をして……で、終わったならこの場所に泊まる……そして明日が旅行……ん？」

ふと時雨は考える。

明日は佐世保鎮守府の人達との打合せで長崎の方へ行く。

話しが終わればその後の三日間はほとんど自由を約束されていて、休んでも構わない状態。

そして灰色から社会見学と称した旅行に行く予定。

しかもそれは灰色と自分の二人だけ。

「え……これって……噂に聞くデート、ってやつじゃない!!？」

時雨は思わず男女の交際時によくやる行動トップ三に入るデートを意識したのか頭の穴という穴から蒸気を出して顔を紅潮させた。あまりの恥ずかしさに両手で顔を覆い、意味もなくぴよんぴよんと飛び跳ねる。

まさか自身とは無縁とも思えた行動が明日か明後日やってくるかもしれないという時雨にとっては謎の期待をってしまった事に悶えずにはいらなかった。

「いやでも待って！ 確かに灰さんは良い人だし、あの提督に比べたら遙かに聖人で信頼してるのは分かるんだけど、惚れてるまでは流石に無いよね！ あくまで上司と部下の関係、ただ単に仲がいいだけであって僕はまだ灰さんを異性として好きになつた訳じゃ……訳じゃ……」

時雨は壁に額を思いっ切りぶつけて己慢心を自制した。喋り続けながら何度も額をぶつける度に壁がひび割れていき、照明器具の上に溜まっていたホコリが落ちていく。

自身は灰色との関係をあくまでも上司と部下の関係で異性としてとは関係ないと捉えていた。

そこに邪な考えなど存在せず、ある一定の関係を保っているだけだと正当化していく。

ただそれだけでは何か物足りないとし時雨は先程の言葉に訂正するかのようにして誰もいない廊下の中で訴えた。

「いや好きだよ!?! 勿論灰さんは特別なくらい好きだよ!?! でもそれは友達的な感覚で言ってるのであって、異性としてはまだ認めてないんだからね!! 違うからね!! 誰か見てるかもしれないから言っておくけど絶対に違うからね!!! 絶くくッ対に——」

——翌日。

「なにシケたツラしてんのよ」

「いや……別に……」

送迎車の中では助手席に灰色、そして後部座席で時雨と『?』オウゲン 叢雲と摩耶が座っていた。

「今日からよろしくお願いします、白■さん」

「こちらこそ、よろしくお願いします」

早朝四時、まだ太陽が顔を出してない暗闇の時間帯で一足先に灰色達は送迎車に乗って向かっていた。運転手はいつも提督を送迎していた面識のある人物で灰色の事もちゃんと理解してくれている。初めて会った灰色は挨拶を心掛けつつ、これからお世話になる事を考えて簡単に自己紹介をしていた。

運転手の白■は見た目はとても穏やかで優しそうな老人男性で、笑顔がとても印象に残る人だ。

灰色は思わずこの先の事を安心してしまふほど信頼していた。

海岸線沿いの道路を一台の車が前面に光を差して過ぎていく。

海は自然と落ち着いていて光に晒される度に穏やかな波を見せた。

窓から見える景色を眺める摩耶とスマホを使っていた叢雲に敷き詰められて左端に座っている時雨は不満そうな表情で自身の顔が鏡のように写るほど真つ暗な森をひたすら見ている。

それを横目で睨んでいた叢雲が何かを察したのか、ため息を吐いて

時雨に話し掛ける。

「……別にあんた達の事は邪魔しないわよ。私たちは三日目で東京に戻る予定だし」

「あたしは灰のサポートに行くだけだから、そう落ち込むなって……な？」

「ち、違う！ ベベベ別に僕は君達二人が邪魔だなんて——」「どうした時雨？ 何か忘れ物した？」

察されたくない事をよりにもよってこの二人に瞬時で察された時雨は赤面しつつ慌てて大声を出して否定する。大声に気付いた助手席に乗る灰色が後ろを振り向いて声を掛けた。

何としてでも灰色にだけは知られたくない時雨は無茶苦茶な思いを我慢し、腕で顔を隠して窓に寄り掛かる。

「い、いや……大丈夫だよ……」

「……？ そう？ まあいいや、朝早いし寝ててもいいからね」

「……ありがとう」

灰色と時雨の一連の話を聞いて摩耶と叢雲は半目にして、物言いたげな少々呆れた表情で口を開く。

「完全に娘扱いね」

「こりや繋がるのも時間がかかるだろうなあ」

「うるさい!!」

摩耶と叢雲の発言を聞いて時雨は顔を紅潮させ、声を荒げてうるさいと叫ぶ。

急な時雨の叫びように思わず度肝を抜かれた表情になった叢雲と摩耶はニヤニヤしながら奥様口調で時雨を追い詰めた。

「あらから見ました奥さん?! この娘私に向かって犬のように吠えましたわよ」

「あらまあ今どきの女の子は野蠻ねえく怖いわあ〜」

遂に怒りが込み上げた時雨は叢雲に飛び掛かろうと身体を投げ出し、互いに両手を掴んで『?』叢雲と唾み合う。流石に度が過ぎたと叢雲と摩耶は何度も謝り続け、後に夕飯を奢る事を約束に取っ組み合いは終わった。

「元気だなく三人とも」

「そ、そのように捉えますか」

「え？」

高速道路を約三時間ほど進んで新大阪駅から新幹線に乗り換え、途中下車駅である博多駅に降りてまた新幹線で新鳥栖駅に向かう。電車を三回乗り換えた先に佐世保駅に辿り着いた。

早朝四時から出発して十時間、佐世保駅に着いたのは昼の十四時。

「ふう〜長かった〜！ 遠いなく佐世保は〜」

佐世保鎮守府門前で溜まった疲れを背伸びで癒していく灰色御一行。長時間座っていた影響と何度も乗り換えたおかげで腰を回す度に関節が連鎖するように鳴る。

山に囲まれた佐世保市は地面の隆起が激しく丘の上に住宅地が並んでおり、海に面している所全てが海軍の基地、言わば鎮守府になっている。隣には造船所や港が設置されており、観光客などで賑わうシヨップングモールがあった。

「ようこそ佐世保鎮守府へ!!! お待ちしておりましたぞ!!!」

佐世保鎮守府の領地内に入った直後、爆音の様な声が響き渡った。

突然の大声に灰色御一行は全員身体を跳ねらせ、声の方向へ臍を向ける。

向けた先には高笑いしながら一歩ずつ力を入れて小走りをする巨大な身体を持つ若い軍人とその軍人の後を必死に追う大淀が疲れ気味に走っていた。灰色御一行の元へ着くなり足並みを揃えては右手で敬礼しながら自己紹介をしていく。

「私はこの佐世保鎮守府の責任者を務めております桃■■■と申します!!! 一応これでも中将であります!!! 本日はよろしく願いします!!!」

「声でかつ——痛い!!」

あまりの声の大きさに時雨が口を漏らしたが、隣にいた叢雲が本当の事でも言うなと頬を思いつ切り叩く。

潮岬町鎮守府よりも遥かに大規模な佐世保鎮守府を担うのは責任者兼総司令官桃■■■中将。

引き締まった筋肉によって構成された巨大な身体を持つ熱血漢の軍人で、常に笑顔が目立つ三白眼の男性。

年齢は三十九歳とかなり若くして高い等級に属しており、それ故に基地攻撃作戦における指揮能力は折り紙付きとされている。どんな事にも真つ直ぐで一度取り組んだ事は絶対に諦めない不屈の闘志と深海棲艦を悪として殲滅せんと人一倍強い正義を掲げ、艦娘や他の軍人にありとあらゆる情熱と熱意を叩き込む前向きな性格。

そのおかげか他の軍人や艦娘からとても良い印象を持たれており、
■中将自身も交流を深めようと他者を尊敬しつつ積極的に話し掛けている。

「は、初めまして！ 潮岬町鎮守府から参りました灰——」「貴方が候補生の灰■君ですネッ!!! んゝ何とも真面目で素晴らしい大和魂を持つている日本男児のような青年だツツ!!! 私は貴方のような方が大好きですよツツ!!! 改めて本日はよろしくお願いしますぞツツ!!!」

「アツ、ハイ……よろしく……お願いします……」

何とも情熱的な軍人を目の前に灰色は気圧されずに微笑んだ表情で自己紹介しようとするも、それすらも乗り越えて桃■中将は灰色の目の前まで屈んでまで近づき手を握って感想を述べていく。何も言う事が出来なかった灰色は気圧されてしまい、簡単に挨拶する事しか出来なかった。

「何か凄いいねあの入」

「熱心的且つ情熱に溢れた軍人で有名よね、特に声の方は」

「会議では凄いい慎重で静かに喋ってるんだけどな、此処だと何故か声が凄まじくなるんだよなあ」

叢雲と摩耶の表情から察するに感情の起伏が激しい人なのだろうか、時雨は関わったら面倒そうだと半ば閉じた目で立ち尽くしていた。灰色との会話を聞いている限りでは摩耶が言っていた会議での慎重な振る舞いが全く想像できない。隣にいる秘書艦であろう大淀も破天荒な桃■中将を前にため息を吐いて疲れている様子だった。

「おっとこれは失敬！ 少し失礼すぎましたな!! 申し訳ない限りで

あります!!! 遅れましたがこちらが……」

「私は秘書艦を務めます、大淀と申します。私達の提督が迷惑をかけると思いますが、今日は一日よろしくお願い致します」

「ふははははははは!!! 流星は大淀よ、分かっているではないか!!! ふははははははははは!!!」

桃■中将の隣にいた秘書艦の大淀が申し訳なさそうに頭を下げながら自己紹介をする。上司の絶え間ない情熱と破天荒さを伝えた途端に桃■中将は派手な笑顔で高らかに声を上げた。

随分と振り回されているのか手に負えない人物だと訴えた顔を見れば簡単に理解出来る。桃■中将ほどではないが自身の責任者も尖っている所がある事から灰色と時雨はしみじみと同情の眼差しを向けた。

「よろしくお願ひしますね大淀さん」

「挨拶も済みました事ですし早速こちらへ!!! さあさあ遠慮せずに来てください!!!」

桃■中将は高笑いしながら軍隊のパレードのように思いつ切り手足を上げて鎮守府内を案内しようとする。隣にいた大淀が持つていたクリップボードで頭を叩き、少しは落ち着いてくれと叫ぶ様に訴えた。桃■中将は素直に謝りながらも嬉々として行進をやめようとはしない。

その後ろ姿を灰色と時雨と摩耶はただついていくしかなかった。

「んじゃ、私は別の仕事があるから」

「叢雲さんは行かないんですか?」

今まで共に来てくれた叢雲が別の仕事があると灰色達の元へ離れようとした。

気にかけた灰色はすかさず叢雲に訳を聞こうと話し掛ける。

「私はあの艦隊の旗艦って事は知ってるでしょ? 今日あの艦隊に所属する艦娘と少し話をしにいく為についてきたの。話が終わり次第、そっちに行くから安心なさい」

「分かりました、では」

172. 社畜精神は身体を壊すモノ

青い空と青い海が一望出来る建物の廊下を複数の深海棲艦達が無造作に並んで歩いていった。互いの関係が悪いのか一言も喋る事無くそっぽを向くようにして目的地へ向かっている。

一人は握った両手で後頭部を支えながら面倒そうに欠伸をして大股で歩き、もう一人は廊下の窓から見える景色を眺めながら無表情で足を運ぶ。コン、コン、とヒールの踵を気持ち良く鳴らしながら腕を組み堂々と歩く者や視線を真っ直ぐに睨みつけるような表情でゆっくりと歩く者もいた。

その深海棲艦達は目的地に辿り着いたのか勢いよくドアを蹴破つて中へ入る。部屋の中は暗闇に包まれており、中央に大きな長机と新品の木椅子が目立つように下から光を浴びて用意されていた。

「久シブリダナア……何ヶ月ブリダ？」

「少ナクトモ……半年ハ経ツテイル」

「コンナ事シテル暇ガアルナラ、サツサト攻メタ方ガイイノニ」

「ア……ツタク、面倒ダナチクシヨク」

それぞれ深海棲艦達は従って決められた椅子に座る。

足を組んでは机の上に乗せている者もいれば両肘を着いて組んだ両手に顎を乗せる者、椅子の背もたれに寄りかかって腕を組みながら目を閉じて待つ者や大きな軍刀を肩に乗せて片足を閉じる者がいた。

一部は来ていないのか空席の椅子がちらほらと見える。深海棲艦がそれぞれ座る椅子の隣には秘書艦のように立っている者もあり、組んだ両手を背にかしこまった表情で待ち続けた。

「ヨオ深海日棲姫、駆逐水鬼、聞イタゾ？ 何デモ支配シテイタ海域ヲ根コソギ奪ワレタラシイジヤナイカア。全ク惨メダナア、今マデ何箆ツテタンダ？」

「黙レ南方棲戦鬼、貴様ノ方ノ任務ハ進ンデルノカ？ 私カラ見タラ随分ト手コズツテルヨウジヤナイカ」

椅子の背もたれに寄りかかって机の上に足を乗せていたのは【天璇】^{メラク}南方棲戦鬼。ニヤニヤとした表情で煽るように【開陽】^{ミザール}深海日

棲姫と『武曲』シーフォウス 駆逐水鬼へ話し掛けた。

苛立ちを覚えた駆逐水鬼が呆れた表情で南方棲戦鬼を煽る。

煽られた南方棲戦鬼も負けじと見下すような表情で煽り返した。

「無様ニ逃ゲテキタオ前ラトハ根本的ナ所カラ違ウンダヨ。精子カラ
ヤリ直セ弱者ガ」

「今スグソノ身体斬リ刻ムゾ」

「ヤツテミロヨ」

駆逐水鬼は自身の倍もある大太刀を鞘から少しだけ抜いて刀身を見せ、南方棲戦鬼に対して眉を歪ませ敵視して睨みつける。

南方棲戦鬼は更に挑発して口角を上げ、駆逐水鬼を嘲笑って見下した。

視線が衝突し合って火花を散らし、広い部屋の中がただならぬ緊張に包まれていく。

「ヤメロ」

「アア？」

「ッ……」

二人の唾み合いを【開陽】ミザール 深海日棲姫の隣の席に座っていた【玉衝】アリオト 戦艦水鬼がため息を吐いて面倒そうにやめろと声を出して止める。静かに腕を組んで待っていた戦艦水鬼は二人の無駄な言い争いにつけようの無い苛立ちを覚えていた。

「ヤメロ南方棲戦鬼……貴様モ他人ノ事ヲ強クハ言エナイダロウ。私ガ前ニ貴様ノ部下ヲ助ケテヤツタ事ヲ忘レルナヨ」

「アアソナ事アツタナア、忘レチマツテタ」

南方棲戦鬼は【玉衝】アリオト 戦艦水鬼と視線すら合わせず、面倒な事は聞きたくないと耳をほじってそっぽ向く。つくづく他人を馬鹿にするような態度に駆逐水鬼は煮えたぎった怒りを表面的には出さず、あえて常人であれば失神するであろう殺意の波動を南方棲戦鬼に浴びせた。

「少シハ道徳ヲ知レヨ、層ガ」

「ア？ ヤンノカコラ。テメエラナンゾコノ私ガ——」 「集マツたかナ、七壊星諸君」

会話を遮って先程入ってきた扉が鳴り響くような音を出してもう一度開かれた。

扉から放たれる眩しい光の先には深海棲艦の中枢的存在といえる中枢棲姫と、その側近である中間棲姫。白く美しく透き通るような肌から紅黒く禍々しい光を放ち続けている様を見て戦艦水鬼と南方棲戦鬼は口を閉じる。

深海棲艦の王たる者を前に七壊星達は動じず様子を伺っていた。

ゆっくりと歩きながら不気味な笑みを見せるその姿はまるで触れてはいけない毒のように悍ましく、刃向かつては沈めれると誰もが簡単に察してしまうほどの威厳があった。

「んじゃ、定例会……ト行こうカ」

【天枢】^{ドゥーベ}中枢棲姫が一番奥の席に座り、堂々と腕を広げて自称定例会と呼ばれた集合会議の開催を宣言した。今回久しぶりに開かれた定例会には【揺光】^{アルカイド}欧州水姫と『破軍』^{ベネトナシユ}欧州棲姫、『文曲』^{アストラファイ}戦艦レ級と『貪狼』^{デアボルフ}集積地棲姫が出席しておらず、その他の七壊星達は全員出席していた。

「今回も『貪狼』^{デアボルフ}と欧州の二人組ハ欠席か、まあいいよ遠いしネ。それよりも……」

「アノビリビリ野郎モ欠席シタノカ。マア気持チハ分カルゾ？ ナア深海鶴棲姫」

南方棲戦鬼が向かい席に座っている【天権】^{メグレズ}深海鶴棲姫に話し掛けた。

深海鶴棲姫はいかにも嫌そうな表情で眉をひそめながらも、中枢棲姫の顔を睥睨^{へいげい}して重い口をゆつくりと開く。

「……仕方ナイダロ、今ハ修復中ダ。ソレクライ見逃シテクレテモイイダロ」

「うん、いいよ。別ニ君達以外の七壊星は強制じゃナイからネ、ゆつくり休むトいいよ」

険しい表情を見せつける深海鶴棲姫に対して中枢棲姫は優しい笑顔で戦艦レ級の空席を快く許した。先程の凄まじい威厳とは裏腹に仲間の勝手な空席を許してくれた器用さが何とも不気味に感じる。

「さて今回の話は二つあるんだけど、まずは一つ目……そろそろ皆の進捗を聞きたいかなって、思ってるンダ」

「進捗？ アア任務ノ事カ」

「そう。この中に私の任務を受けた娘達が数名いたよね。各々支配海域内で色々進めてると思うけど、少し報告してほしいかな……んじやまずは【天璇】君から」

「今ントコ戦力ハ五十二%ニマデ到達シテイル。コノママ何事モナク進メバ時間ハソウカカラナイダロウ。問題トシテハアノ馬鹿ガ無駄ナ事ヲシテクルクライダナ」

深海棲艦側の戦力拡大の為に艦装の改造開発任務を請け負っていた南方棲戦鬼は至る所にいる様々な深海棲艦の艦装強化が施され、予定の数値まで問題なく進むと報告した。

「ありがトウ。悪いけど今は従っててもらいたいかな。んじや次はくほっぽちゃん！」

中枢棲姫は穏やかな声で【天璣】北方棲姫に指を指す。

指された北方棲姫は身体を勢いよく跳ねらせ、指をモジモジとさせながら震えた声で報告した。

「ハ、ハイ……！ イ、今ハ……ソノ……少シ敵側ノ戦力ガ増エテイテ……チャ、チャントヤツツケテルンダヨ!? デモ……少シ面倒ナ所ガアツテ……ソノ……モ、モウ少シ時間ハ掛カルカナ……デス……」

北方棲姫がアリューシャン列島海域の中心地にある鹵獲された太平洋深海棲姫の確保任務について進捗を簡単に述べていく。

この部屋に入った時から既に北方棲姫は人一倍誰よりも怖がつており、中枢棲姫に対しては目を合わせられないほど身体を震わせて怯えていた。相棒である『緑存』港湾棲姫が落ち着かせようと手を差し伸べ、北方棲姫は涙を堪えながらその手を抱き締める。

「分かつタ、んじや後で支援艦隊ヲ行カセルよ。報告アリガトね……まあ欧州の二人組にモ聞きたかつタけどそれは後にするカナ……ア、ソウダ【開陽】君」

左右に座る七壊星達を眺めるように奥の席で堂々座っていた中枢棲姫は各深海棲艦達の表情を伺っていた最中に【開陽】深海日棲姫の

明らか目が泳いでいたのを見て名前を呼ぶ。

深海日棲姫は呼ばれた途端に身体を僅かに跳ねらせ、恐る恐る中枢棲姫の方へ顔を向けた。

中枢棲姫は満面の笑顔を絶やさず深海日棲姫を見ており、ゆっくりと手のひらを見せて言葉が続ける。

「言い訳は聞いてアゲるから海域取られちゃった理由ヲ教えテ？」

深海日棲姫から見たその表情は顔は笑っていたとしても、目は全く笑っていないかった。自身の過失故に説明責任は必要だという事は深海日棲姫も理解している。

だが中枢棲姫の想像以上の威圧に訳を話そうとしていた口が全く動かなかった。

「……基地裏カラ回り込ンデ攻メテクルトハ思ワナカッタ。イツノ間ニカ施設内ニ潜ンデ背中ヲ撃タレタンダ……ダ、ダガアノ時私ハチャント——ツツ!!？」

過失の言い訳を少しでも良く聞こえるように補足して伝えようとした途端、深海日棲姫は自身の首を掴み掠れた声を吐き出した。突然の息苦しさと全身の迸る激痛に思わず机の上に上半身を乗せて暴れ馬のように悶え続け、深海日棲姫の身体から淡く紅黒い光が薄ら出る。

その光景を見ていた他の七壊星達はゾツと背筋を凍らして恐る恐る中枢棲姫の方へ顔を向けた。

「へえ……じゃア君ハ慢心してた訳ダあ……」

中枢棲姫は右手の平に紅黒い光の玉を浮遊させ、それを爪を突き立てて握り潰すように持っていた。紅黒い光の玉は稲妻を纏っており、中枢棲姫が右手に力を入れていく度にひび割れて火花が散る。威圧だけで部屋内が徐々に揺れ始め、心臓の鼓動音が露骨に聞こえるほど極度の緊張に包まれた。

「今度モ追い払エルだろうと慢心しながら余裕かまして戦ってたんダヨね？ 毎日ずっと戦つているのに攻めてクル敵ノ作戦一つすら予想シナカッタのかナ？ 裏から回り込まれタって普通ハ予測出来る事だと思ウンダケド？」

「ッ……！　チ、違ウ私ハ——ッ!!!」

言い訳無用と中枢棲姫は更に紅黒い光の玉に爪を食い込ませていく。深海日棲姫は苦しむ声をあげながら身体を勢いよく跳ねらせ、身体の内から細胞一つ一つが破壊されていくような激痛を味わった。

「言い訳ハそこまで。後もう少して計画で定めた最低防衛線だよ。言っておくけど次仕出したらもう無いんだけど？　いいの？　このままで」

「次……次コソ、ハッ……！　失敗……シナッ……イツ……!!　ダ、ダカラ……!!」

苦し紛れに深海日棲姫は汚名挽回をさせてくれと懇願する。

それを聞いた中枢棲姫はつまらなそうな表情で悶える深海日棲姫を見つけていた。

何か考えているのかボーっとして右手の平にある紅黒い光の玉を器用な手先で弄くり回す。何十秒間経った後に中枢棲姫は紅黒い光の玉を右手の平の中へ吸収させ、深海日棲姫は地獄の苦しみから開放された。

「……ならヨシ！　頑張つて取り返してね」

中枢棲姫は机の上に倒れる深海日棲姫に向かって応援の言葉を言つて微笑む。

一連の光景を他の七壊星達は動く事はなく、ただ他人事のように傍観していた。

「話が外れたカナ。二つ目ノ話ナシダけど……そろそろ動くヨウだよ」

中枢棲姫の二つ目の話について七壊星達全員は一斉に顔を振り向かせ、話の内容に興味を持ち出した。全員が知りたがっている事なのか中枢棲姫の話をいっになく真剣に耳を傾けている。

「私の命令で一応君たちは大人しく従っている設定だから、恐らく動員される事もアルト思う。その時モ齒向かわず従ってイテ欲しいかな、多分君たちがやりたい事もヤレると思うよ」

「シツカシダナア、イクラ何デモアレハ馬鹿過ギル。アマリニモ馬鹿過ギテ殺シタクナルナア」

「同感。本当二軍人ダツタノカ疑ウレベルダ、モウ一人ハ申し分無イガ」

突然急に交渉に來た二人の軍人について七壊星達は最低な印象を嫌そうに述べていく。

「まあまあ気持ちチは分かるケド、今回モ……ネ……？　結構面白そうな企画だし、実は成功シタラしたで良いトカ思ッテルデシヨ？」

「否定ハシナイ」

「ソレデ正当化シテイル」

本当はすぐさま消えて欲しいが計画自体は深海棲艦側にとって利益しか生まない為に、七壊星達は自身を正当化して仕方なく協力している。目障りな艦娘達が寝返って内ゲバをしてくれるなら深海棲艦側にとっては有利でしかない。戦況を大きく変えるかもしれないチャンスのみすみす手放す事は出来なかつた。

「成功しようが失敗しようが終われば後は自由ニして構ワナイよ。相当鬱憤ヲ溜めてるヨウだしネ……後は……——」

「——あノ子の様子見、カナ……」

「……」

「提督……提督？　提督！」

「……っ！　ん？　何だ」

自身の事を呼ばれたような気がした提督は眠りから覚めて周りを見渡す。半分虚ろな目で重い怠みを感じながらも何とか眠気を覚まそうと目を拭う。

隣では代役の秘書艦である古鷹が書類を片手に提督の肩を揺らして心配そうに待っていた。

「提督……その、眠ってましたけど……大丈夫ですか？」

古鷹に言われて提督は仕事中に居眠りをしてた事に気付く。時計を見ると時間は昼の十一時を過ぎていた。自身がいつ眠っていた

のか記憶に無い提督は眉間を摘んで頭を悩ませる。

「あく……マジか。珍しく眠ってたか」

「最近働き過ぎのようですし……少しの時間だけでも休憩した方が……」

「馬鹿言え、この状況で俺が休む訳にはいかないだろう。何一つ足りてないお前らポンコツ共の世話を一体誰がやると思う。ただでさえ秘書艦の仕事も手詰まり状態のお前を見離したらいつその仕事が終わるんだ？　こういう時の為に俺がいるんだよ、後々出来ませんでしたと夜中に泣き喚いたら面倒で仕方ないからな」

提督は事務仕事が上手くいかない古鷹や訓練中の艦娘達を放っておけないとしよぼしよぼした目を凝らして無理矢理にでも仕事を続行しようとする。

あからさまに寝不足な提督を見て古鷹は提督の机の前に出て訴えるように話し掛けた。

「でも最近提督は無理し過ぎです。前に無理せず適度に休めって言ってましたが、その状態では説得力がありませんよ……」

「……」

古鷹の言葉に思わず提督は手を止める。

翔鶴達との戦争による影響でまだ左腕の治療が完治しておらず、ギプスで支えている状態だった。提督は半目で包帯が巻かれた左腕から目の前にいる古鷹へ視線を移す。

「だからお願いします……一時間でもいいので休憩してくれませんか」

古鷹は書類とクリップボードを抱えて深く頭を下げた。

提督は椅子の腕掛けに寄り掛かり、面倒そうに頬杖を着いてため息を吐く。

一刻を争う事態であっても上の者が倒れていては元も子もないと古鷹は心の底から心配していた。もう二度と二人も大切な人を失いたくないと強く願っていた古鷹の姿はいつになく弱っているように見える。

提督は上を見て考える仕草をして数十秒間は一言も話さなかった。

「……はあ……ポンコツ共に心配されるとは俺も落ちたもんだな」

「提督っうわっ!!」

再度ため息を吐いた提督は何故か立ち上がり、机の上に乗せた書類をまとめていく。また仕事をするつもりだと古鷹が顔を上げた途端、大量の紙の束が古鷹の顔面に直撃した。

古鷹は顔面に張り付く紙の束を両手で持ち抱え、恐る恐る傍に立つ提督の表情を伺う。

提督は真っ直ぐ視線を崩さないまま古鷹へ今後の事を簡潔に伝えた。

「先程見直した書類とこれからやる仕事の内容だ、簡単に終わるやつだからポンコツのお前でも夕方までには終わるだろ。終わったら報告しろ、俺は少し部屋で休む」

「は、はい！ 分かりました！」

古鷹が元気よく返事をした途端、提督は一瞬視線をこちらに移して微笑んでいるように見えた。それに古鷹は気付く事無く仮執務室のドアまで共に提督とついていき、廊下に入って二人はそれぞれ別の道を歩む為に別れる。

古鷹は抱えた書類と共に全速力で現場へ向かっていった。

「提督！」

「……っ?」

173. 可愛い女の子の膝枕は素直にされておけ

「提督！」

「ん、何だお前らか。どうした訓練は」

講堂内にある仮部屋へ入ろうとドアノブに触れたその時、提督は偶然傍を彷徨っていた蒼龍と飛龍に声を掛けられる。訓練中だと思っていた提督は講堂の廊下内でふらついている二人を見てサボっているのか怪しんでいた。提督は触れたドアノブから手を離し、蒼龍と飛龍の方へ臍へそを向ける。

「休憩中。提督は？」

「お前らと同じだ……んで何だ、要件は」

二人はぎこちない笑顔で手を振り、自身の状況を伝える。自身も休憩中だと言った途端、二人の表情と声からして何か事情があるのを察した提督は面倒そうに頭を掻きながらため息を吐いた。

訳を聞けば訓練を終えて休憩中だった二人はその時間を使って提督と話したい事があつたらしい。

提督に聞かれて蒼龍は恐る恐る声を震わせて口を開いた。

「その……提督って、私たちの事……嫌いだったりする……？」

「言うまでもなく」

「……」

自身達の事が嫌いなのか、再度確認したかった蒼龍と飛龍。

予想出来ていた事とはいえ、提督の即答に返す言葉が出てこなかった。

「じゃ、じゃあ何で私たちと毎日いるのに接してくれるの……かな……？」

飛龍が指と指を合わせてたどたどしく、嫌いなのに何故接してくれるのかについて聞いてきた。提督は呆気にとられた表情をした後に顎に手を当てて考えるような仕草をする。ため息を吐いた後に飛龍の方へ手の平を見せて答えを述べた。

「……仕事の関係上、嫌いな相手だろうと時には目と目を合わせて話さなければならぬ時がある。俺はお前らにとって上司のような存

在であり、お前らは俺の部下のような存在。俺の管轄下にいる以上はどんな事でも話は聞いてやる、勿論やりたい事とかもな」

提督は真っ直ぐに瞳を据えて蒼龍と飛龍に言い伝える。その言葉には何の偽りも無くただ純粹に思っている事を口にしていただけのようだった。

蒼龍と飛龍は内心で思わず安堵の息を漏らす。話を聞いてくれるだけまだ良かったと束の間の安心を得ていた。

「だがその内に生まれる仕事以外の関係に関しては別だ。仕事に影響が出るから私情を挟み込むなどどこかのお偉いさんは言うだろう。人間関係に置ける一番の敵は感情だからな、お前らの能力以外俺は極力信じないようにしている」

艦娘の戦闘能力や作戦能力などの外面的な力は信じていても内面的な人格や精神などは全く信じないと提督は言う。かつて過去に信頼関係に関する嫌な結末を経験しているのだろうか、自分達も薬の影響とはいえ裏切るような結果をしてしまった事に蒼龍と飛龍は胸部を深く杭で打たれたような鋭い痛みに襲われた。

自身もあの忌まわしい嫌な過去は忘れ去りたい、飛龍と蒼龍も悔しいほどその気持ちは理解出来ている。本心は裏切るような事などしたくなかったのが薬の影響によって裏目に出してしまった。拭えきれない後悔はいつも蒼龍と飛龍の背中に重くのしかかっている。食いしばった歯が崩れてしまうほど深い罪の傷は残っていた。

「お前らが俺を何かと信じている理由は簡単だ、俺はこの鎮守府に着任した以上は腐れポンコツ共を強くさせなきゃならない。その仕事の過程上でお前らの関係だとか野望だとか色々復活させたり叶えさせたりした事で、俺は表では印象が悪くても中身は良い奴なんだとお前らは勝手に思い込んだ」

提督が艦娘達に施してきた事は全て仕事でやってきた事であり、個人の善意の為に行動していた訳では無いと簡略的に伝える。

酷い待遇を受け続けた艦娘達を哀れみを抱いて同情し、報いを受けるように自ら手を差し伸べるなどもつてのほかで、提督は艦娘が自身から一念発起して使える物は全て使うんだと提督も利用してまで野

望を持たなければその野望すら手伝うつもりは毛頭無かった。

艦娘達を強くさせるといふ使命がある以上はありとあらゆる手段を行使してその使命を全うしなければならぬ。

それらを艦娘達は勝手に勘違いしたと提督は答えた。

「こちらとしてはそう思ってくれた方が都合だし、何より操りやすいし扱いやすい。まあ表と裏を理解している奴も少なからずいたな、別に問題は無いが。つまりは俺がこの場にいる以上は好き嫌い関係無く話は聞いてやるけどその内の信頼関係はお前らで勝手にやってくれっていう事だ。理解出来たか？」

提督は艦娘達が勝手に信じてくれるのなら手駒として十分扱いやすいと思っている。自身の仕事や計画の為に利用される存在であり、そこに特別な感情や関係は持ち合わせていない。

それ故に提督の激しい表と裏の性格を直接言わずとも分かっていた艦娘は少なからず存在する。恩を受けたとしても違和感を感じる艦娘がいたのを思い出した蒼龍と飛龍は提督との関係が不明瞭なってしまった事に不安を感じた。

「でも、提督は……信頼してたって……言ってたよね？」

蒼龍は提督が翔鶴達との戦闘後に信頼していた事を自白した提督を思い出して問いかけた。

話を終えたと思っていた提督は部屋に入ろうとドアノブに触れた手を止める。

身体を制止させて少し顔を俯く提督はそつと蒼龍と飛龍の方へ顔を振り向かせた。

「……ああそうだな。裏切られたおかげで微塵も無くなったが」

「っ……」

「ごめん……なさい……」

提督は信頼関係があつた事を否定はせず、寧ろ事実を認めて真面目に答えた。

翔鶴達との戦争後に食堂内で提督が罰の内容を伝えた際、上辺だけの信頼関係があつた事を告白している。好嫌棄の影響によって豹変した艦娘達と話した事で自身は気付かずとも信頼関係が存在してい

た事を提督は不服でも認めざるを得なかった。

今までは全く気にならなかった艦娘達の蔑みや言葉が何故か心を突き刺してくる。

出来れば裏切られたとは認めたくはないが、胸苦しくなる感覚をあの時は久しぶりに感じていた。

「今更謝ろうが既に過ぎた事だ。ちゃんと罰は受けているからこれ以上罰を与える時間も無駄になるし、お前らが一々謝る時間も無駄だ。今は大人しく訓練に励むといい……もう長話は充分だろ」

「ま、待って提督!!」

部屋に入ろうとドアを開けた途端に蒼龍と飛龍はまた提督を呼び止める。半分ほど部屋が見えた状態で提督は深くため息を吐き、再度蒼龍と飛龍に顔だけを向けて怠そうに内容を聞いた。

「何だ」

「その……もう一度……信頼関係、作れないかな……」

飛龍がそわそわと目を泳がせて提督に信頼関係を作れないかと緊張しながら聞く。

それを聞いて提督は身体の中で何かが揺れ出し、軽い放心状態で触れていたドアノブから自然と手を離していた。目の色が冷たい蒼い色から陽の光のような橙の色に薄く変わっていたのを飛龍と蒼龍は一瞬だけ垣間見る。

「提督が私たちを信じてくれるように頑張るから……また仲間だって言ってくれるように努力するから……!」

「二度と裏切るような事は絶対にしない。提督の傍にいられるように頑張るから……!」

飛龍と蒼龍の言葉を聞いて提督は視界を目の前のドアへ移し、軍帽で顔を隠して考え込むように俯く。唯一動く右手の平を開いて目線を集中させ、数秒後に提督は飛龍と蒼龍へ顔を向けて口を開いた。

「……別にお前らの自由だ、やるなどは言わない。ただし……一度裏切ったお前らポンコツが信頼関係を作ろうと無駄に精進しようが、極めて短い時間でそう簡単に甘っちょろく上手くいくと思うなよ。分かったか?」

提督の威圧的な鋭い視線に蒼龍と飛龍は唾を飲んで首を二回ほど上下に振る。

勿論提督に言われた事は十中八九正しい事で長い月日を掛けて信頼してもらわなければならぬのは蒼龍と飛龍自身も理解していた。遠回しに言われたような気がした二人は決意を固める。

二人の決意が固まった表情を見て提督は威圧的な表情を解かせ、一瞬緩やかな笑顔を見せた後にまた部屋に入ろうと足を動かした。

「ま、待って！ 後もう一つ！」

しかしまた蒼龍に呼び止められる。

あまりのしつこさに提督はあからさまに不機嫌な表情で大声を出した。

「何だよ俺は眠いんだよ!! 部屋に入らせてくれ!! 言つとくがお前らは絶対に来るなよ!!」

蒼龍と飛龍にそれぞれ指を差して憤る提督。本来なら休憩中で今頃眠っているはずが二人に止められた事で時間は過ぎつつあった。

蒼龍と飛龍は提督を宥めようと必死に冷や汗を掻いて言葉を伝える。

「いや眠いなら膝枕してあげようかなって……思ったんだけど……」
「ぜひ頼む」

瞬時に提督はかしこまった表情で部屋に入らせるのを許可した。

「——これで潮岬町鎮守府へ送る資材の予算は以上になります。何かご質問はありますか？」

佐世保鎮守府内応接室で灰色と桃■中将が資材調達について打ち合わせをしていた。テーブルに乗せられた書類の束を手に取り、灰色と時雨は必要な事をメモに取っている。潮岬町鎮守府の司令本部や応接室と比べると明らかに設備の差が目に見えており、通る内に見える部屋を思わず見渡してしまう程だった。途中で佐世保鎮守府内を案内された灰色達は工廠設備や入渠設備の規模に圧倒され、未だ現実感を掴めずにいる。

過失を穩便に受け止めた。

すぐさま灰色は立ち上がって頭を下げる。

「す、すいません……！……でもどうして言わなかったんだろ……！」
「恐らく資材関係について、しか聞かされていないようです。言っておきますがあの提督が貴方をここへ差し込んだ本当の目的はこの為でして、私たちの提督から直々に教えて欲しいと頼まれたんですよ」

桃■中将の秘書艦である大淀は軽くため息を吐いて灰色に事情を説明する。灰色達が佐世保鎮守府に赴いた理由だった資材関係は建前であり、本当は桃■中将の講演会を受けてもらう事だった。

「そ、そうなんですか……!?」

灰色は戸惑いの表情を隠せずにいた。

あの提督が他の人達に頼むなど灰色からすれば天と地がひっくり返ってもおかしくないほど珍しく思っていた。

「はい。私たちの提督は敵の基地攻撃作戦については軍一なので、時々講演会を開かれる事は貴方も知っているかと思えます。ただこの一年は何故か深海棲艦の動きが活発化しており、開きたくても開けないといった状況にありまして、その専門知識を貴方にも身に付けて欲しかったのでしよう。特別に私たちの提督がお忙しい時間を割いて開いてくださいました」

「うむ!!… ああも頼まれたら受ける他無しと判断したぞ!!! この状況下であれば戦力強化は必須!!!…そしてそれを従える有能な司令官も必須!!…この時がちょうどいいと考えました!!…」

桃■中将はその素晴らしい能力を活かすために時々講演会を開いていたが、年々強まる深海棲艦の活発化に応じて延期する事がしばしばあった。

提督は桃■中将にこのタイミングこそが重要な時だと理由と訳を説明し、講演会を開くように依頼したらしい。

そんな事を知るはずもなく今聞いて知った灰色は隣に座る摩耶へ視線を移して訳を聞こうとした。

「摩耶さんは……何で言ってくれなかったんですか……?」

「提督に止められてた。あたしも理由は本当に知らないけど、まあ本音を吐かないタイプだから自分から言うのが恥ずかしかつたんだろ
うな」

「ええ……」

提督と共にいた摩耶自身もこの事は理解って黙っていたようで、目的の真意さえ掴めていなかった。摩耶の予想した理由が確かに分かりやすく感じても、何故自身に事実を隠したのか意図が分からない灰色は困り汗を掻いて戸惑いの表情を隠せずにいた。

「近々参謀総長であられる■大将が小笠原諸島海域奪還作戦を実行する段階まで踏み込んだと仰っております。その時の為に貴方も戦力へ加わる可能性を鑑みたと私は推測します。つまりは……」

「灰■君ッッ!!! 候補生の君は期待されている、という事だ!!!」

桃■中将が大淀と会話を合わせて灰色に指を差した。自分自身が白色に期待されているとは夢にも思わなかった灰色は無意識に笑みが零れる。何一つ平凡だった自分が潮岬町鎮守府に着任して白色や様々な艦娘達と出会った事で僅かにも成長していた。

今思えば激動の日々だった。

時雨と夕立の冤罪事件や深海棲艦化したノシロ対阿賀野と矢矧、そして鹿島の乱入。更には翔鶴達による反逆と大規模偵察作戦。

思い出として語るには長い時間が必要となるだろう。

そんな激動の中で灰色は体力や能力、精神的にも成長していた。

ヒーローになりたいという小さい頃の夢から一歩近づけたような気がした灰色は内なる喜びを噛み締める。

「早速向かうぞ!!! ついてきたまえ!!!」

「は、はい! 時雨も行くこう!」

桃■中将は高らかな笑い声を上げながら灰色と時雨を先導し、疲れた表情の大淀と共に応接室から出ていった。共についてきていた摩耶も途中の廊下から別れて灰色と時雨だけの二人となる。

講演会を開く大会議室まで歩む途中、笑い声を上げていた桃■中将が突然静かになり前だけを見て歩いていった。突然の沈黙に灰色と時雨は不安がって様子を窺う。二メートル近くはあるだろう巨体の背

中は威圧感が凄まじく、鍛えられて隆起した筋肉が軍服越しから目に見えて分かった。

「灰■■■■君……君に聞きたい事がある」

「はい、何でしょうか？」

笑い声を止めた数十秒後に桃■■中將は灰色の方へ振り向かず名前を呼ぶ。先程の情熱ある大声とは真逆に冷たく真面目な声が少し恐ろしく感じた。

何か重要な事を抱えているのか真剣な表情がああ白色を彷彿とさせる。

「率直に聞こう、あの男……いや、君の上司である白を……どう思っている？」

桃■■中將の質問は予想していたよりも簡単で白色の事をどう思っているかと言う単純なものだった。それ以上に敵の事や自身の能力について聞かれると思った灰色は内心安堵の声を漏らす。

そして頭の中で白色とはどういう人物か、今までの思い出を蘇らせて考えた。

「……私個人では不思議な人だなんて思っていました」

灰色は目線をわざとそっぽ向かせて考えた事を話していく。

最初配属された潮岬町鎮守府で出会った白色は他の人間よりも外見や内面がとても特殊で不思議な存在だった。

長い白髪に敵を思わせる白い肌、破綻した人格や振る舞いは灰色にとって不安が積もるばかりだった。決して自分の考えを曲げない傲慢さや蹴落とす為ならありとあらゆる方法で実行する躊躇の無さ、どんな相手だろうと臆する事無く全力で立ち向かう容赦の無い性格。

一見は何故いとも容易く出来るのか不思議でしかなかった灰色は徐々にその理由を知る事になった。

「最初は不安で仕方がなかったんですが、共に過ごしていく度にあの人の本音や意図が分かるようになってきました。表面的では罵詈雑言にしか聞こえないんですが、よくよく考えればちゃんと誰かの為に考えて発言していて、自分自身を差し置いて常に周りの事しか考えない、そんな人なのかなって考えてます」

「……」

「お恥ずかしながら私、皆を救えるヒーローになりたいなと思ってまして……まあ大人になった私が言えばバカにされるのは当然なんですけど……白さんは、違いました」

灰色は自身の夢を打ち明け、頬を人差し指で掻きながら苦笑いする。

深海棲艦に脅かされる日本という国とその国に住む人達を救いたいと堅い志を持っていた灰色はヒーローを夢見ていた。決して見返りは求めない、ただ単純に人々を助けて守りたいと思っていた。

「正直嬉しかったんですよ……ヒーローになりたいだなんて子供じみた夢、あの白さんならバカにされると思っていました。でも白さんは寧ろ肯定してくれて、覚悟あるのかと否定はせずに挑戦する意志を聞いてくれたんです……それが本当に、嬉しかった……」

灰色は拳を熱く握って印象に残った思い出に浸る。

初めて白色と出会ったあの時、圧迫面接のような事をやらされて緊張していた灰色は喉が詰まるような気分だった。緊張のあまりに思わず主題だけを言ってしまう、簡単に理由を述べる事が出来なかった。

当然バカにされると思い込んでいた灰色は白色の反応を見て驚く。

白色は決して否定はしなかった。

それは灰色にとって一番の嬉しかった出来事。今でも鮮明に覚えている。

だからこそあの人についていこうと思った。

「勿論日常的に罵倒するのは良くないですし、それは止めてもらいたくなって思っています。私も時々嫌になりますけど厳しい環境に身を置いて頑張ろうと毎日生きています。白さんを慕っているかと言われれば考えてしまいますが、私にとっては頼れる人であり成長する上で一番必要な人だと……そう思っています」

白色に対して思う感情は様々で言いたい事は山ほどある。

提督であるにも関わらず艦娘達に対して嫌悪感を躊躇なく示し、誰彼構わず口撃してくる性格は直して欲しいと何度も思った。

実際は仕事は誰よりも素晴らしく出来る人間で灰色にとっては頼れる人間の一人であり、今でも感謝しきれなくらい世話になっていく。教え方は横暴でも何かと面倒見がよくて優しさが捨てきれない部分も幾度か目撃した。

自分が白色を嫌いになれないのはそういった光の部分が見えたからだと思っている。

「そうか……立派な事だ。その志を忘れるなかれ、最後まで貫き通してみせよ。私も期待しているぞ」

灰色の本心がこもった答えに桃■中将は後ろを振り向かず少し顔を仰ぐ。素直に灰色を褒め称え、今後とも期待すると労いの言葉を言った。

だがその言葉が何故か冷たく感じた灰色は桃■中将という人物が不安に思ってしまう。よくない答えを言ってしまったのか不機嫌そうに見えた。

「突然ですまないが……君は横須賀鎮守府暴発事故、というのを知っているか？」

「あ、はい……それは耳にした事があります。確か開発中の兵器が実験中に暴発し、横須賀鎮守府の敷地内の約六割を火の海にしたって言う……やつですよね？」

桃■中将から話し掛けられたキーワードに灰色は簡潔に説明して答えを照らし合わせた。仮称として知られる横須賀鎮守府暴発事故とは約三年前に起きた軍が開発していた兵器の実験による出来事とされており、当時の状況や証拠から様々な都市伝説が噂されている事件である。

その事を知っていた灰色に対して桃■中将は口を閉じて顔を縦に傾き、話の続きを伝えていった。

「ああそうだ。だが君が言っている話と本当の真実は全く違う」
「え……？ どういう事ですか？」

「君の隣にいた摩耶がいただろう。あの事故は……いや、事件と言うべきか、実際はとある事で怒り狂ったあの摩耶が横須賀鎮守府へ報復し、全ての力を解放して破壊し尽くした恐ろしい事件……」

桃■中将の言葉を聞いて灰色は予想だにしない事に理解するのに時間を要した。理解するまでに身体が固まって動けなくなり、灰色は無意識に歩みを止めていた。隣にいた時雨も同様の反応で驚愕の事実戸惑う事しか出来なかった。

それに気付いた桃■中将は灰色達と同じく歩みを止め、事件の本当の真実を語り始める。

「緋い軍艦の幻影を召喚し、迎撃する横須賀鎮守府の艦娘の半数を無力化。その後は鎮守府内の施設を破壊し尽くし、後に駆けつけた『？』オウゲン叢雲が摩耶と戦闘、叢雲が勝利した事で摩耶は確保され、事件は終わっている」

「約半数を……一人で……」

あの白色と共にいる摩耶が横須賀鎮守府暴動事件の主犯人だった事に灰色と時雨は動揺を隠しきれなかった。理解し難い真実に信じる以外の理性は無く、灰色と時雨は考えが整理できないまま話を聞く。

横須賀鎮守府に所属する艦娘の半数を無力化させるほどの実力を持つ摩耶とその摩耶に勝つ『？』オウゲン叢雲が少し恐ろしく思えた。

「幸い近隣住民には被害が全く無かった。奇跡とも呼べるだろう、あれだけの被害を被っておきながら死人は誰一人いなかった。あの摩耶にも理性が残っていたのか知らんが、今はとにかく気をつけろ。奴等は——」「オイ待てよ」

桃■中将が灰色へ忠告しようとしたその時、聞き覚えのある声が灰色の正面から聞こえた。

その声の方向へ視線を移すと行き先の隣にあつた階段から当の本人である摩耶が登って現れる。

何か嫌な事をされたのか桃■中将を睨みつけ、敵視するようにとっても不機嫌な表情だった。摩耶は睨みつけながら歩み続け、桃■中将達の前へ行き先を阻む。

桃■中将はものともせず鋭い三白眼で摩耶を見下すように俯瞰していた。

「気になるから後を追って何を話すのかと思えば、つくづく面倒な事

をしてくれるよなあ……お前……」

「私は事実は教えるべきだと考えて話したただけだ。あの男の部下となれば多少訳を話しても問題無いだろう」

「だったらお前がその原因を作った大元である事も話さなきゃならぬよな」

「えっ……」

摩耶と桃■中将が目線で火花を散らし、お互い一步も譲る事なく睨み合う。

緋く鮮明に光る摩耶の眼と鋭く黒い桃■中将の目がぶつかりあつた。

傍にいた灰色と時雨は何も喋る事が出来ず、ただただその場で留まる他なかった。

「そうだな。だが私は間違っていないと断言出来る」

「は……？ んな訳ないだろ」

摩耶があからさまに嫌悪感を示して否定した。

桃■中将は摩耶の言葉を更に否定する。

「いやそうだ。何故というのなら聞かせてあげよう……深海棲艦は世界の平和を脅かす悪だからだ」

桃■中将は感情の無い声で右手の平を見せて自論を語った。摩耶は睨む事は決して止めず、頬を一瞬引き攣らせて血が滲むまで手を強く握る。

「罪も無い人々の全てを脅かし、人間ならざる姿で恐れさせるのならそれは人類の敵であり、排除するべきなのだよ。否定する理由は無いじゃないか」

「仮にそうだとしても深海棲艦の中には違う奴もいる。偏見は程々にしろよ、目の前の事実だけ見て奥にある真実から目を背けるな」

「仮ではないし私は背けてなどいない。君が言っていたように知性を持ち和平を望むモノがいたとしても確たる信頼の要素は殆ど無い。仮に深海棲艦の生まれた原因が我々人類にあったとしても、現在から未来の平和を脅かしかねない存在ならば理由問わずに殲滅すべきであり、その原因を起こした者も即刻処罰するべきだ。勿論深海棲艦化

した艦娘や加担した人間も然り」

摩耶が持論に異議を唱えても桃■中将は全く自身の持論を曲げようとはしなかった。声の感情は虚無でしかなく恨みや憎しみなどは微塵も感じなかった。

一体その揺るぎない自信はどこから湧いて出てきているのか違和感と同時に底知れない不気味さも感じた。

一度深海棲艦と会話した事のある灰色と時雨からすれば桃■中将の思想は判断に困るモノだった。

確かに戦争上において敵に情を持つ事はいかなる事であろうと許される行為では無い。敵に情を持ってしまえば戦う際に躊躇してしまふ事や裏切られて殺されるのは容易い事で本来はやってはいけない事だ。

それは灰色と時雨も分かり切っている。ただ深海棲艦を全体として悪と断定するのは何か間違っていると思ってしまった。

「私は脅かされる事の無い徹底的な平和を望んでいる。その望みを達成する為にも深海棲艦は排除されるべき存在だ、だから私は深海棲艦がどういふモノか教えてあげようと灰■君に前振りを述べただけだよ」

桃■中将の本意は誰もが脅かされる事の無い徹底的な平和を成す事。その為ならば手段は選ばず、正しい者と悪たる者の区別をつけて切り分ける。現在まで人類に牙を剥く深海棲艦達を決して許さず一人残らず駆逐すると桃■中将ははっきりと明言した。

更に目線で衝突した火花が激しさを増し、互いの気迫で建物内が揺れているように感じた。身長が高い桃■中将は一方的に摩耶を見下して睨み続け、摩耶は憎むように見上げて睨み続ける。

「あ、あのー……」

「っ?」

「っ?」

激震する緊張の最中に誰かの声が水を指した。摩耶と桃■中将は声の方向へ共に振り向き、声の主を目に収める。桃■中将の背後にて灰色が手を挙げて作り笑いで二人を見ていた。

「どうしたんですか……?」

高まる緊張の中で灰色が精一杯出した言葉を聞いて二人は気を鎮める。灰色はホッと安堵の息を漏らして胸を撫で下ろした。

「失敬……少し熱くなってしまった。さあ!!! さっさと大会議室へ行くか!!!」

「は、はい!」

不備があった事を謝った桃■中将はいつもの馬鹿でかい大きい声のテンションに戻る。突然の大声に灰色と時雨は身体を大きく跳ねらせ、桃■中将の声に釣られて大きく返事した。いつもの桃■中将とすれ違った際に摩耶は聞こえるように忠告する。

「後で後悔するんじゃないぞ……お前はまだ知らないだけだからな」

「いいでしょう、ですが私は……認めるつもりなど毛頭ありません」

174. 機会は見逃すな命短し恋せよ乙女

「調子はどう?。」

佐世保鎮守府内の岸边の先で腰を下ろして海を眺める艦娘がいた。

『?』 叢雲は鎗を片手にその艦娘へ気さくに話し掛ける。

艦娘は背後の叢雲に気付いて後ろを振り向き、感情の無い顔を叢雲に見せた。叢雲はその仕草に微笑みながら、答え通りに調子がいい事を確認して艦娘の隣に座る。

「アンタ性格とは真逆で凄く寡黙よね、ロウオウ『?』 漣さん?。」

『?』 叢雲が話し掛けてるのは護神厄討艦隊の中でも特殊な戦闘能力を持つ事から技術の漏洩を防ぐ為に秘匿されている艦娘の一人、ロウオウ『?』 漣。

『?』 吹雪と同様にひた隠しにされ続けている存在で、名前を呼ぶ事すら場所を選ばなければならぬ為、その名前を知っている者は護神厄討艦隊総司令官の■大將しか知る者はいない。

故に佐世保鎮守府に所属しているのは普通の漣としてであり、普段護神厄討艦隊のメンバーである事は隠している。桃色の可愛らしい髪の色に新調されたセーラー服、一つ違う点としては目の光が無い虚ろな状態で表情筋は全く動いていなかった。

「いつものこと。名前は呼んじゃダメ!。」

「ハイハイ分かってるわよ。アンタの過去を考えればそうなくても仕方ないんだらうけど」

『?』 漣はスケッチブックを取り出し、叢雲に伝わるような言葉を書いて見せた。

深海棲艦の非道な実験によって漣は視力がとても弱く声帯が麻痺しており、顔全体も神経麻痺によって表情筋が動かなくなっている。元々艦娘は食事を必要としないので生活において支障は出ない為かここ数年は食べ物を口にしていない。

コミュニケーション自体はスケッチブックに言葉を書く事で円滑に進んでいるものの戦闘時における旗艦の役割は到底進められない

が、戦闘能力は佐世保鎮守府内ではトップなのでサポーターとしての役割が殆どになっている。

【何しに来たの?】

「え? 何しに来たって? そりゃ勿論、艦隊の旗艦としてあなたの調子を窺いに来たのよ。この艦隊じゃあなたが一番無茶しそうだからね」

護神厄討艦隊の旗艦である叢雲は漣の様子を確認する為に灰色達と共に佐世保鎮守府へ訪れていた。艦隊に所属する艦娘のヘルスケアやカウセリングなども旗艦の仕事と考えている叢雲は■大将の代わりに働いてくれている。

漣は叢雲に聞かれて即座にスケッチブックへ伝えたい事を書いていく。

【何も問題は無いよ!!】

「問題無い、ね……まあこうやって元気にしてれば何も言う事は無いわ。任務頑張ってるね」

感情の無い無表情の顔とは裏腹にスケッチブックに書かれた言葉にはビツクリマークや絵文字、顔文字などが描かれており元気に溢れた様子だった。

それを見た叢雲は微笑んで立ち上がり、腰や太腿についた土埃を払う。

手を何回か開いて別れの言葉を言ってその場を去ろうとした。

「ま、ま……待って」

「……? 珍しいじゃない、あなたが私を呼び止めるだなんて」

酷く掠れた嗄声で漣は必死に叢雲を呼び止める。

小さな声に気付いた叢雲はきよとした表情で後ろにいる漣の方へ振り向いた。

「ん」

「何これ。メモ書き?」

漣にスケッチブックのページの一部をちぎり取ったメモ書きを渡される。

叢雲は手に取ったメモ書きを物不思議そうに何度も裏返して目を

凝らしつつその内容を見た。

『奴等も私たちも魔法を開発してる。だから……』

メモ書きに記された意味深なメッセージに叢雲の顔が曇る。魔法とは隠語の類なんだろうか、気になる部分が抽象的でよく分からなかった。

叢雲は内容の意味を聞こうと漣の方へ振り向く。

【だから死なないで】

「……」

スケッチブックに書かれた言葉はとてつもなく不穏で胸騒ぎを起こしそうな言葉だった。胸に何か深く突き刺さった感覚が唐突に現れる。

漣は顔半分をスケッチブックで隠して叢雲を見上げていた。叢雲は再度メモ書きの内容へ視線を移して考えるように顔を仰いだ。

まるで嫌な未来でも見たような気分だった。

これから起こりうる出来事を知っておきながら悠々と生きている自分を想像してしまった。

必ずしも漣の助言が予想通りになるとは限らない、逆に言えば予想通りにならないとも限らない。

考えれば考えるだけ時間を無駄にしているような気がした。何故今になって漣が自分にこんな事を伝えたのか、ため息を吐きたい気持ちでいっぱいだった。

「……大丈夫よ。私は死なないわ、安心なさい」

叢雲は小さなメモ書きを握って槍を掴み、再度横へ座って空いた左手で漣の肩を掴んだ。今この事を考えてもしようがないと叢雲は心配してくれた漣に言葉を掛けて安心させた。

これから起こる事が何であれ、叢雲は立ち向かって打ち破ると心の中で誓う。

例えその書かれた言葉がいつか現実に起きてしまう事だとしても、破滅の運命に抗い続けると意志を固めた。

「忠告ありがとね……じゃ、頑張つて」

叢雲はその場を去ろうと立ち上がって背筋を伸ばし、手を振りつつ

も漣の返事を待つ。

漣は急いでスケッチブックに伝えたい事を書き示して叢雲に見せた。

「うん、分かった。そっちも頑張つてね、あと——」

「あと?」

漣の書かれた言葉の最後に気を引かせるような一文を見た叢雲。

文字を追いつつその先を読んでみた。

【あと叢雲ちゃんの下着って編み編みの黒なんだね、エロいね】

「ぶっ飛ばすわよ」

「いや〜凄いタメになったなあ〜」

「そうだね。色々と可能性を感じたよ」

夕方の十七時過ぎ頃に灰色と時雨は桃■中将の講演会を終え、叢雲との連絡で決めた集合場所まで向かっていた。

外は夕焼け空で暖かみのある色に満ちており、日が暮れる時を告げるカラスの鳴き声がどこかで聞こえてくる。

「明日も午前と午後であるようだからこれを機にもっと頑張らなきゃね」

「僕も学ぶ事が沢山あったな……後で皆にも教えよう」

灰色と時雨が持っていたメモ帳にはずらずらと並べられた講演会の内容が書かれており、提督が桃■中将へ頼む理由も分かった気がした。後で潮岬町鎮守府にいる艦娘達にも教えようと時雨のメモ帳には一つずつ要点をまとめている。

何故自分達に直接この事を言わなかったのか分からなかったが、差し向けてくれた提督を心の中で感謝した。

「講演会は終わり?」

「はい終わりましたよ。叢雲さんは?」

「こっちも用事を済ませたわ、さっさと帰りましょ」

待ち合わせ場所には既に叢雲と摩耶が待つており、それぞれスマホなどで暇つぶしをしていたようだった。灰色と時雨が来たのを確認

した叢雲は手配してくれていた運転手の白■と合流し、提督が予約してくれた宿泊施設へ向かう。

「部屋は二つ取ってて時雨達の方は三人部屋だから大丈夫だね」

「う、うん……そうだね」

部屋は灰色と白■、時雨と叢雲と摩耶の二部屋に別れていた。

各々自身の荷物を確認してそれぞれ部屋へ共に向かう。

灰色が説明している中で何故か時雨は少し悲しげな表情をしていた。

「お疲れ様！ また明日もよろしく！」

「うんありがと灰さん、お疲れ様」

皆が部屋の中へ入っていく中、最後に灰色と時雨だけが廊下に取り残された。灰色は微笑みながら敬礼して時雨に労いの言葉をかける。

時雨は手を振って灰色と別れ、笑顔を崩すこと無く部屋の中に入った。

「おやおや時雨さくん？ 随分と不服なようで〜？」

「っ！ べ、別に僕は残念とかそういう事は思っていない！」

部屋では既に摩耶と叢雲が荷物を開きながら正装を脱いでラフな格好に着替えていた。叢雲が入ってきた不満そうな時雨を見てはからかって声を掛ける。

「ごめんって、隠さなくても馬鹿にして笑ったりしないわよ。良いじゃない、艦娘が恋する事ぐらい。おかしい事ではないし、寧ろ羨ましいくらいよ」

赤面して怒りを露わにする時雨の前に叢雲は畳んだ膝に頬を乗せては羨望の眼差しで微笑んだ顔を見せた。

「別に僕は恋なんか……!!」

時雨は頬を膨らませ、そっぽを向いて否定する。

「いやまあ……認めようが認めまいがそれは貴女の勝手だし、無理に素直になれとは言わないけど」

頑なに認めない時雨を見て叢雲は半目で若干呆れた視線を送った。

そして時雨に指を指して忠告するように言い放つ。

「後悔しないように言いたい事だけは言った方がいいわよ。あ、これ

経験者は語る的なやつね」

自称恋愛経験者の叢雲は出来る事はやった方がいいと時雨に念を押して注意させた。何か叢雲にも後悔するような出来事があったのだろうか、何故かその言葉がとても重く哀しく感じる。叢雲の元気に満ちた笑顔から悔やまれた表情が無意識に現れていた。

「……二人はした事あるの」

「勿論」

「まあな」

時雨の質問に叢雲は藍色の髪を左手で浮かして堂々と答え、摩耶ははにかんだ笑顔で少し照れながら返答した。時雨は納得いかないといった表情で荷物を確認して身支度を整えていく。

「今も付き合ってるの?」

「付き合ってるのかと言われればまあ、イエスだな」

摩耶が先に提督と共にいる事を認知されている上で時雨の質問に答えた。時雨も提督と摩耶がケツコンしている事は知っており、互いに信頼しあう関係は少し羨ましいと感じていた。

「叢雲は?」

摩耶が答えた後に時雨は叢雲へ視線を移す。

叢雲は先程の微笑みを消して真面目な表情で神妙そうに語った。

「ええそうね……恥ずかしい話、別れた」

「別れたの!?!」

「大きい声出さないで、流石に私もあまり言いたくないんだから」

予想外の答えに時雨は思わず大声を上げてしまった。

叢雲は一瞬で時雨の口を片手で塞ぎ、人差し指を自身の口に寄せて静かにと合図する。

突然の接近に焦る時雨は何回も首を縦に振って了解の意志を示した。それを見た叢雲は塞いだ手を離して静かに元いた場所へ座る。

「で、何で別れたの!?!?」

「あのねえ!!!」

どうしても気になった時雨は今までの仕返しとばかりにわざと大声を出してもう一度聞いた。

反射的に叢雲はツツコミを入れて時雨の方へ飛び掛る。

二人の取っ組み合いを遠くから見ていた摩耶は呆れた視線でため息を吐き、部屋着を抱えて一人で風呂に入ってしまった。

「何で別れたんですか」

「秘密。教えられないわ」

「ええ〜……」

取っ組み合いが始まって数分後、叢雲の力に為す術なく敗れた時雨はベッドに大の字になって寝そべっていた。敬語を使つてまで叢雲に別れ話を聞き出そうとしたものの即刻で断られ、あからさまに残念な表情で天井を見ている。

「他人の別れ話聞いたってロクな事にならないわよ。大体こんな話聞いたとしても何の為にもならないでしょ、自重なさい」

「でも他人の不幸は蜜の味ってよく言うじゃん」

「さてはアンタ性格悪いわね」

喋りながら時雨はベッドから起き上がって風呂に入る準備を進めた。

さりげない時雨の台詞に誰に似たのやらと叢雲は呆れた視線を時雨に送る。

テレビのリモコンに触れて電源を入れた叢雲はそのまま流れていたニュース番組を見続けた。

間接照明だけを照らして薄暗くなった部屋の中でテレビの画面の光が眩しく映る。ニュース番組では呑気にも恋愛関連の情報が流されており、光を浴びる叢雲は頬杖を着きながらつまらなそうに黙って見ている。

二人の会話は途端に無くなり、テレビから発せられる環境音と摩耶が隣でシャワーを浴びている音だけが部屋の中を埋めていた。

時雨はもう一度ベッドで横になりつつテレビを見続け、隣りのベッドで座っている叢雲の後ろ姿を時々目に移す。

意味も無くその姿から哀愁を感じた。

それは苦しく物悲しそうに、一緒にいるはずが叢雲だけが孤独から離れられていないような気がした。

「はあ……そうねえ……じゃあ明後日、私についてきたらその理由を教えてあげる」

「明後日？ 休みの日？」

静寂を突き破って叢雲が時雨に話し掛ける。

色々と考えていたのか少し躊躇った表情でついてきたら別れた理由を話すと伝えた。

明後日は訪問が終わって自由になる日、灰色との社会見学が待っている。

「そ。知りたければその日についてきたらどう？ って話よ。最も、知りたければの話だけど」

「……いいの？」

「いいから言ってるんでしようが。なに？ 今更悪気でも感じちゃった？ 別にこっちはそれならそれでいいんだけど」

「だって……何か悲しそうだったから……」

時雨は叢雲に背中を見せるように身体を横にして顔を隠しては不貞腐れる。何か申し訳ないような気持ちなのだろうか、素直になれず反抗的な態度を見せつけた。

流石に察されたと気が緩んでいた叢雲は時雨の方へ身体を捻って顔を見せる。

訂正しようと口を開いたが、急に面倒だと感じたのか言うのを止めた。そして再度テレビの方へ身体を戻して顔を合わせずに話し掛けた。

「……大体別れ話なんてそんなものよ。大概はどちらかの過失で起きるものだし……まあ隠しても意味無いわね、私は……悲しいわ」

叢雲に言葉に対して時雨は何も言う事が出来なかった。今までわかられた分やり返してやろうかと言った事に罪悪感を感じていたのもあって余計掛ける言葉が分からなくなる。

「とにかく、この話は明後日までお預け。今日は早く寝て仕事しなきゃならないんだから、ね？ 摩耶」

「あゝそうだな」

叢雲の見た先にはタオルを肩に掛けたシャワー上がりの摩耶がい

た。緊張が解けたような穏やかな表情で珍しく部屋着に着替えた姿は少し新鮮に見える。

摩耶は一番奥に設置された椅子に座り、背もたれに身を任せて大きくため息を吐いた。

「え？ 二人も何かあるの？」

「明日はちよつとした任務があるの。まあ訓練官を請け負う的なやつよ、潮岬町鎮守府で貴女達がやってる特殊訓練みたいな事をやる感じね」

「最強の北上様と同等の力を誇る叢雲様と対空関連のあたしなら任せられるとか言ってたからな、桃■中将は」

明日叢雲と摩耶は潮岬町鎮守府で行っている護神厄討艦隊の艦娘達による特殊訓練を大規模な軍事力を持つ佐世保鎮守府でも行うようだ。『？』と『緋』^{オウケン}という二つ名のような称号を持つ猛者となれば訓練官として抜擢されるのも理由を考えるにはそう時間も必要ない。

文字通り身を削るような地獄の訓練を受けている時雨にとっては佐世保鎮守府の艦娘達に対して少し同情の念と羨望を感じた。自分もこの二人のように強くなりたくいと常日頃から思っている分、やれる事はやっていきたいと時雨は決心していた。

しかしそれよりも気になった事が一つある。それは――、

『後で後悔するんじゃないぞ……お前はまだ知らないだけだからな』『いいでしょう、ですが私は……認めるつもりなど毛頭ありません』

「……」

シャワー上がりの摩耶を見て思わず時雨は昼時の事を思い出していた。

敵視するかのように睨みつける摩耶と派手で元気な振る舞いをガラリと変えて豹変する桃■中将。

あの時の極度に高まった緊張と胸焼けしそうな不穏な空気を時雨は鮮明に覚えていた。突然の情報とその量の多さに頭が破裂しそうな程、顔には困惑の表情しか出なかった。

「ん？ どうした時雨？ 次入っていいぞ？」
「……っ！ いや、何でもない。ありがとう、今行くよ」

175. プールの中で尿をする奴は許してはいけない

灰色達が佐世保鎮守府に向かって一日が経過し、朝陽を迎えた早朝七時。

誰もいない仮執務室で提督は一人、机の上に足を乗せて椅子の背もたれに寄りかかっていた。沈黙を破るように机に置いていたスマホの着信音が部屋内に響き渡り、提督は重い身体を持ち上げてスマホを手に取り耳に寄せる。

『灰■と時雨を受け入れてくれた。今後問題はないと思う』
「そうか」

『ただ……あの事件の事を灰■と時雨に教えてた。多分まだ桃■は根に持つてる』

連絡を繋いだ摩耶が今までの経過報告を提督に伝えていく。

桃■中将と灰色達の関係を上手く保てるか課題だった提督は喜ぶ事なく感情のこもらない声で返事をした。

しかしもう一つの課題として桃■中将と提督の関係性について摩耶は苛つきと不安を織り交ぜた感情を露わにして提督に伝える。

「大した問題じゃない。俺たちの事を目の敵にしている時点でそういう事をするのは予想の範疇だ。大抵ああいう連中には気色悪い花がばら撒かれた汚い爺共の汗じみたくソ汚い生温い淡水桶の中でビート板でも使わせて泳がせてやればいい。それほど気にする事じゃない、心配しないでいいぞ」

『分かってる、分かってるけど……あたしは心配だ。恐らく桃■や■大将も含めて上は警戒してる。あまり動ける時間は少ないと思うから出来るだけそっちも行動に移してほしい』

提督は机に乗せてあった資料を手に取りながら再度椅子の背もたれによりかて摩耶の話聞いていた。

どうやら提督が記憶を徐々に取り戻している事について上層部達は密かに警戒しているようだ。隠さずともいずれは記憶の甦りとい

う解放状態が公になる事だった以上、それらを予見していた■元帥や桃■中将はタイムリングを見計らって何かを仕掛けてくるはずだろう。

摩耶は桃■中将と出会っていち早くその考えを知り、提督がまた奪われるかもしれないという不安に襲われていた。

「そうだなあ……まあお前らが戻って来た次第で始める予定だ。摩耶も余計なマネはやめておくように、灰達にも粗相のないように言ってくれ」

『……分かった。言われた通りに今は大人しく従っておく。提督も気をつけてくれよな』

「はいはい」

摩耶との通話を切って提督はスマホを捨てるように机へ投げつけて置く。

資料のページを一枚ずつ捲って読んでいる最中にドアを数回ノックする音が聞こえた。

提督は入室を許可してノックしてきた人物へゆっくりと視線を移す。

「失礼します、司令」

仮執務室に入ってきたのは不知火、身支度を整えてかしこまった姿を提督に見せる。

今日の秘書艦担当だった不知火は艦娘の誰よりも早く起床して仕事に取り掛かるために来たようだ。律儀に挨拶をした後に黙々と秘書艦席に座って今日の仕事を確認していく。

「ここに入る前、少し耳にしたのですが……事件って……あの事ですか?」

「ああ」

部屋内の沈黙を遮って不知火が気になっていた事を提督に恐る恐る聞いてみた。

素っ気なく提督は不知火の方へ振り向かずに簡単に答えていく。

「……今でも不思議に思いますね。何故あの『?』^{オウゲン}叢雲が摩耶を庇ったのか」

不知火は無表情を貫いたまま事件について気になっていた事を知っているであろう提督に聞かせた。

「詳しくは俺も知らん。まあ大方利用価値があるとかそれぐらいの感覚だろう。あれだけ派手な戦闘能力を見せつけておいて、更に制御できる鍵があるとなれば手の内に置いておきたくなるもんだ」

しかし提督は何も知らないと期待外れの答えを言う。

飄々と提督は説明口調で伝えるも聞いていた不知火は胸に突っかかる違和感を感じた。

感じた瞬間にペンを持っていた手を止める。

事件の起きた原因が自身でありながら詳細を知らないのはおかしいと不知火は常日頃から思っていた。かつての部下である自分達にも言いたくない事なのだろうか、信頼されていないという不安を無視して不知火は思い切って提督に問い掛ける。

「憎まないのですか？ 仕掛けたのは桃■中将という男でしょう？」

「まさか。言わずともドス黒く残ってるさ……まあ俺よりも遙かに憎んでるのは摩耶、だろうな。何せ数々の拷問を受けた上に言い汲められて騙された挙句、腹を貫かれた瀕死状態で訳分からん島に磔にされたからな」

提督が説明している事件の内容は不知火も鮮明に覚えている。潮岬町鎮守府で起きた時雨と夕立の件が生温いとすら思ってしまうほど、残忍且つ惨劇な出来事で人類と艦娘の複雑な関係を身に染みて思い知らされた瞬間だった。

提督の艦娘である不知火含め皐月やガンダト達は桃■中将の行動に不信感を持ち、人間側である他鎮守府の艦娘達含め軍は摩耶の行動を危険視するような四方八方の状態。

あの時の戦況はかつてないほど荒れていた。

「もし私が摩耶さんだったら……同じく暴れていたかもしれせん。いや……誰もがそうだったと思います。大切な人を守りたいが為に自らを呈してまで救おうとする意思是生物問わずに誰にでもあると思うので」

「逆の可能性も考えてみるといい。ある一つの目標の為にありとあら

ゆる手段を投じてまで成し遂げようとする野心さを持っている事もな

まるであの人物達を指して言っているような言葉に不知火は何も言う事は出来なかった。現に人間の本性を間近で見してきた不知火にとってには善と悪の可能性について知りたくないほど知り得ている。自分自身も人間であり提督の言われた事を実行した経験がある以上は否定する事は出来なかった。

「特に桃■という奴は認めたくないが実力とその狡猾さは本物だ。現に奴は面倒な作戦で何回も深海棲艦の前衛基地や補給施設を潰してからの。さぞかしあの馬鹿やアイツも困ってるだろうねえ」

「常々話は聞いています。今度の小笠原諸島海域奪還作戦も桃■中將が関わっているそうですね」

さりげなく話を逸らした事に勘づく不知火は何も言わずに提督の話が続かせるように口を開いた。何も動じない自然を装うよう再びペンを持っていた手を動かし、簡単に事務処理をこなしていく。

「やはり司令らしいですね」

「知ったような口をするとはお前も随分と偉くなったな」

「かもしれません。私は自身の力に溺れてしまい、大切な人を失いかけました。落ち度にも程があるだろうと自省しています」

自然に話を逸らす事や平然としている姿を見て不知火は安心して微笑む。

提督が半分煽り気味に話しかけてきたが不知火はそれを受け止め、今まで起きた事を踏まえて反省の意を示した。自分自身は摩耶や川内と同じく提督の部下であり、この鎮守府の艦娘達や誰よりも強く生きてきたと思い込んでいた。

だがその思い込みが仇になるとは夢にも思わず、自身の驕りに気付くことが出来なかった。

「今こうして司令と話せている事自体、奇跡に近いものかもしれません。私は司令に酷い事をしてしまいました……オイゲンさんや川内さんを含め私たちは身を捧げる覚悟で償わなければならない。今は……そう考えて——」

抱え込むように悩んでいた事を話している途中、頭にドサツと大量の書類を叩くように乗せられた不知火。

気付くと傍には提督が不知火をつまらなそうな表情で見ている。

「お前らのそういうところが嫌いだ。一々過去の話をネチネチネチネチと引きずりながら回りくどく話しやがって……気持ちには分かりたくないが分かっちゃってしまう以上はどうやっても考えてしまうから気分を害する。もう話は聞き飽きたし面倒だ。一々聞いていてもキリがない」

「で、ですが……」

提督は話しながら元の位置に戻って堂々と座る。

追いかけるように不知火は頭に置かれた大量の書類を持ちながらどうしても聞いてもらいたいと慌てて話した。

提督の傍まで歩み寄ったその瞬間、不知火の前を遮るように左手の人差し指が現れ、思わず歩みを止める。左手の人差し指を出したのは提督で弁明したい不知火を止めたかったのか食い気味に口を開いた。「耳障りだ、これ以上過去の事を喋るな。言いたい事はもう飽きるほど理解している」

提督は不知火を黙らせようと高圧的に言い放つ。

言いそびれた不知火は一瞬ショックを受けたような表情するもバレないように無理やり無表情に戻してその場に佇んだ。提督が理解してくれていたとしても、どうしても聞いてほしかった不知火は自身の口から言えなかった事を顔を俯かせて静かに拳を熱く握る。

それを横見して気付いた提督はため息を吐いた後に仕方なく名前を呼んだ。

「不知火」

名前を呼ばれた不知火は瞬時に顔を上げる。

内心後悔していた不知火はまたとない機会だと期待して待っていた。

提督は気持ちよく指を弾き、不知火へ教えるように伝える。

「今は俺と同じく前を見ている、後ろ姿は俺が見てやるからお前は二度と後ろを振り向くな。あのポンコツ共にもそう伝えておけ……そ

ろそろ朝飯だ。今日は少し忙しくなるぞ」

「はい……分かりました」

「さてお前ら二人を呼び出した理由だが」

特殊訓練が始まってすぐに『緞』木曾に呼び出された天龍と木曾は鎮守府の港から少し離れた崖近くの場所に連れ出されていた。『緞』の背後には思わず仰いでしまうほどの巨大な岩崖が聳え立っており、呼び出された二人は内心その理由を察して不安がる。

「俺がいる内にこの突き出た崖の一部を真つ二つに斬って削いでくれ」

「……はあ?!?!」

天龍と木曾は驚愕の声を揃えて度肝を抜かれる。

「いやいやいやいや無理だろこんなデカイやつ!! 軽く10メートル近くはあるぞ!!」

「まだそこまで至るほど実力は無いってお前に言われたばかりだ!! 何故唐突に——」「うるさい」

『緞』木曾の背後に聳え立つ巨大な岩崖は軽く見ただけでも数十メートルは超えており、指定された突き出た崖の部分は高さ十メートル近くもあった。流石に無理があるだろうと二人は声を荒らげて『緞』に理由を求める。

しかしうるさいと若干苛ついた『緞』は二人の脳天を叩き殴った。

「まだ何も言っていないだろうが。つべこべ言わずに話を聞け」

「痛え……!」

「ぐっ……ぐあ!!」

軍刀の柄の先で脳天を殴られた天龍と木曾の二人は海面に横たわって頭を抱えながら鋭い痛みを悶絶していた。

「今すぐにやれとは言っていない。俺が鎮守府に帰る時までこの課題をクリアしろって言ってんだ。勿論その訓練の仕方も教えるし、無茶苦茶な発想でやろうとは思っていない」

痛みに悶える二人を余所に『緞』は軍刀を巧みに回しながら説明していく。課題の制限時間は『緞』が所属する鎮守府に戻るまでの約一

週間半。その間に巨大な岩崖の一部を斬る事が出来たら成長の眼差しは確実に見えるらしい。

「一部の艦娘が持つ近接武器、まあ刀とかサーベルとかその他諸々は共通してある特殊な能力が備わっている」

「特殊な能力？」

「そう。鹿島に教えてもらったように俺たちや深海棲艦には【装甲】っていうエネルギーで保たれた膜のようなものがある。外部からの攻撃を吸収又は緩和させ身体を守るように出来ているんだが……艦娘が持つ近接武器にはその【装甲】を打ち消す能力があるんだ」

『緞』は鞘から翡翠色に煌めく軍刀を指さして注目させ、艦娘の近接武器について簡潔に説明した。

「正確には装甲ごと身体をぶった斬る、と言った感じか。近接武器の刃にはその武器を持つ艦娘のエネルギーが常時流されている。ただそのエネルギーは途中で変換されていて、特殊な波長で出来たエネルギーになっていいるんだ。このエネルギーを纏わせる事で装甲ごと斬る事が出来る」

「速力のエネルギー変換みたいなやつと同じだな。でも何で岩崖を斬る必要があるんだ？」

『緞』の説明に天龍と木曾の二人は手に顎を乗せてなるほどと神妙そうに何度も頷く。

しかし天龍は何故その特殊なエネルギーがあるのに対して岩崖を斬る必要があるのか疑問に思った。

それを聞いた『緞』は待つてましたと言わんばかりに微笑んで翡翠色の軍刀を見せびらかしながら天龍の疑問に答える。

「先程も言ったが近接武器の刃には特殊なエネルギーが流れている。だがその流れるエネルギーは常に上じやないと斬る事ができない。例で言おうか、天龍の持つ刀のエネルギーが大体70%だとして、敵の【装甲】のエネルギーは100%流れた状態。天龍はその敵を斬ろうとしましたが、敵の身体を斬る事が出来ませんでした。つまりは……」

「エネルギーの差によって斬れる斬れないの状態が発生するんだな」

「そういう事だ」

話を理解した木曾が要約して答える。

意思が伝わった『緞』は木曾の目の前まで軍刀を突き出して褒めた。刀先を突きつけられた木曾はギョツとした表情で一瞬身体を跳ねらせる。よく凝らして見ると『緞』の持つ翡翠色の軍刀の刃先には心臓の鼓動のタイミングで血管に流れる血液のように翡翠色のエネルギーが循環していた。

「近接武器のエネルギー効率が敵の装甲のエネルギー効率より上回っていれば容易く斬り伏せられるってわけだ。だが敵の【装甲】に流れるエネルギー効率が近接武器のエネルギーより高くなっていると斬る事はおろか傷一つすらつけられない。だからこそ力の入れ方が大切になってくる」

『緞』は身体に翡翠色の光を纏わせてエネルギー効率を体現させる。

天龍と木曾は自身の近接武器を持つ手へ視線を集中させた。

柄から刀身、刃先へと視線を移動させてエネルギー効率について考え込む。

その時天龍は過去の鎮守府襲撃時に暴君と呼ばれた南方棲鬼と戦闘した事を思い出していた。

南方棲鬼へ与えた斬撃は浅い時が多く、深い一撃は一度しか与えていなかった。最後に南方棲鬼の身体を深く斬れたのは天龍が僅かに光を纏っていたからであり、鹿島が説明していたように身体が光るのはエネルギーが限界を超えて溢れ出しているからという理由も含めれば『緞』のエネルギー効率についての説明も納得がいくものだった。

「勿論エネルギー効率以外にも重要な事は沢山ある。斬る姿勢や呼吸法、声や身体的な意味の力だって必要だ。七壊星に挑むなら尚更な」

「おい、岩崖を斬る理由はなんなのか聞いてねえぞ」

「そうだな、補足しすぎたか。まあ岩崖を斬って欲しい理由としては二つ。一つ目は特殊なエネルギーを近接武器に込められているかどうか、二つ目はちゃんとエネルギー効率を駆使した近接武器が扱えているかどうかの目標だ。敵の【装甲】はこの巨大で強固な岩崖だ!!」

思ってくれ」

『緞』は背後の岩崖を思い切り裏拳で殴る。

岩崖はヒビが少し入るだけでビクともせずには佇んでいた。流石の『緞』も殴った反動で痛かったのか手を何度も振っている。

七壊星の装甲は他の深海棲艦より何十倍も固く生半可な近接武器の攻撃ではダメージを与える事すらできない。近接武器の攻撃は艦娘の「火力」に含まれない為、エネルギー効率は勿論のこと剣術や筋力などの力の入れ方も必要になってくる。

『緞』が言うには近接武器を持つ艦娘は特にエネルギー効率の成長が難しいようだ。

「ところでお前ら、砲弾を斬った事はあるか？」

「あるな」

「あるぞ」

天龍と木曾はさぞ当たり前のように同時に答える。

予想外の答えに『緞』は一瞬拍子つかれた表情になり、何か考え込むように顔を仰いで顎に手を当てた。

「ほう珍しい。どうりで力の使い方は悪くなかったわけか。そちらの提督の訓練による賜物かな」

「提督つつても、前の前の提督だけだな」

「あの時は何回も壊したな」

天龍と木曾は護神厄討艦隊の特殊訓練を受ける前に撃たれた砲弾を斬る技術を身につけていたようだ。初めて木曾と対戦した『緞』は不思議に思っていた力の使い方方の根源を知る事ができて納得する。

現に天龍と木曾は蒼色から砲弾を斬ってくれという無茶苦茶な注文され、何回も失敗して近接武器を破壊しては明石に復元してもらったの繰り返しだった。砲弾の弾速エネルギーも合わせて斬る事など通常は不可能に近く、数百日かけて会得する事が出来た彼らにとってはかけがえのない遺されたもの。

全てを教えてくれた蒼色に感謝し、元凶となる■少尉に必ず報いを受けさせると改めて誓った。

「思い出に浸る時間は無いぞ。そうだな……そういう事なら話は早

い。砲弾を斬る事を会得してるなら少し段階を変えよう」

意外にも成長していた二人を見て『緞』は考えるような仕草をした後に指を弾いて次の段階について説明した。

「撃たれた砲弾を斬るような同じ感覚で岩崖を斬ってみろ。出来なくても繰り返し続けてやり続ける事。もし斬撃が深かったら次の段階に移行させる。いいな？」

「おう！任せろ！」

「当たり前だ！」

天龍と木曾は熱気のある声で答え、早速持ち場について岩崖に斬りかかった。傍で見守っていた『緞』は自身と同じ姿である木曾を見て過去の建造したての自分自身を思い出す。思い出に浸る暇はないと言っておきながらそれすらも忘れてしまうような懐かしさがあった。「……まるであの時の俺を見てるようだな」

「ふう……終わった……」

夜の二十二時。

提督や護神厄討艦隊の艦娘にバレないよう秘密の訓練を終えた古鷹は誰にも気付かれないうちに寮の廊下を静かに歩いていた。他にも木曾や天龍などが岩崖をひたすら斬り掛かっていたが古鷹は命中精度を上げるためにペイント弾を使って訓練をしていた。

「古鷹」

「っ!!」

誰もいないはずの寮の廊下から聞き覚えのある声で名前を呼ばれた古鷹は身体を跳ねらせて驚く。

恐る恐る声の方向へゆっくり振り向くとそこには出会ってはいけない提督が立っていた。夜中に訓練をしていた事がバレたと思った古鷹は唾を飲んで話しかける。

「ど、どうされましたか提督？今日は執務室に籠る予定じゃ……」

「そうなんだが……まあそれは別として、古鷹。ちよつと執務室まで来てくれるか」

「はい……大丈夫ですけど……」

「悪いな」

淡白な対応する提督に少し違和感を感じつつも古鷹は素直に答える。提督の誘いに古鷹は拒否する事などできず、心の中で涙ぐみながら提督の後をついていった。

二人が執務室まで向かう最中、寮の廊下は歩く靴の音以外物音一つしなかった。廊下を照らす天井の照明が輝く中通り風が廊下を駆け抜け、提督の長い白髪が風に吹かれたカーテンのように光を浴びて靡く。

まるで別の人物に思えるほどの立ち振る舞いに古鷹は一瞬提督を女性なのかと見間違えた。

「安心しな。別に君達が隠れて訓練をしている事を咎めるつもりはないから」

「あ、ありがとうございます……では何故私を……？」

提督の話し方にまた変な違和感を感じながらも古鷹は執務室に呼ばれた理由を及び腰になりながら聞いていく。提督は古鷹の方へ顔を振り向かせ、珍しく穏やかな表情で意外にも素直に答えた。

「……ちよつと伝えたい事があってね。まあそれは執務室の中で話すよ」

「っ？ 分かり……ました……」

176. 世界のファッションセンスは訳分からな
い

灰色達が佐世保鎮守府に訪れてから二日が経過。

提督に実質嵌められた灰色は資材関係の打ち合わせをした後に桃
■中将の講演会を二日に別けて受けていた。司令官候補生である灰
色は貴重な機会だと快く受け入れ、桃■中将の講演会を必死に聞いて
勉強してくれている。桃■中将と摩耶との唾み合いを気にするのは
やめており、今やるべき事に集中して取り組んでいるようだ。

桃■中将の講演会を無事終えて灰色と時雨は宿泊施設に戻って身
体を休養。

一方で訓練官だった『?』オウゲン叢雲と摩耶は佐世保鎮守府の艦娘達を休
みなく相手にしたおかげで疲れていたように宿泊施設についた途端
に爆睡していた。

「さて……今日からまた休み、か」

桃■中将の講演会を二日受け終えて三日目の朝。

予定通り朝の七時に起床した灰色は欠伸をしながら背伸びをして
今日という日を確認する。

今日から自由行動を貰っていた灰色は時雨達がどこに行くのかを
考えながら旅行の準備をしていた。普段は外の世界へあまり触れる
事の無い艦娘が自由気ままに遊べるかつてない機会だ。

潮岬町鎮守府の艦娘である時雨なら尚更楽しませてあげたいと灰
色は考えていた。

「時雨、どこか行きたいところある?」

宿泊施設のエントランスの前で時雨達と集合し、灰色は時雨にどこ
へ行きたいかと聞いた。叢雲と摩耶は前から持っていたのか新鮮な
普段着の姿で周りから視線を集めてしまうほどの美少女揃いだった。

叢雲は茶色がかった白いワンピースの可愛げのある服装で、摩耶は
鼠色のジャケットにホワイトTシャツ、細長いデニムパンツで脚線美
を露わにした服装だ。

一方で何も持っていない時雨は普段の正装で二人が目立ち過ぎている所為か影が薄い。

「僕は……叢雲の所についていきたい」

「叢雲さんの所？」

灰色がどこへ行きたいか質問した時、時雨は叢雲の所へ行きたいと少し慎重そうな表情で答えた。

時雨の視線は叢雲に集中していて、それに気付いた灰色は視線を叢雲に移す。

叢雲は目を見開かせて驚いた表情でキョトンと柄にもなく茫然としていた。

「へえ、興味あるって表情ね。いいわよ、ついてきなさいな」

叢雲は時雨の眼差しを受けて微笑み、自身が行きたいと思っていた場所まで連れて行った。

運転手である白■の協力を得て自動車で走ること三十分。

住宅街の道路を延々と走り続け、山の頂上へ続く道を進んでいく。

「眺めいいですね、ここ」

「そうね街全体を眺めるにしては結構いい所よ。本当はこの山の上にも展望台はあるんだけどね」

自動車の窓から見た景色は佐世保鎮守府や町全体が見下ろせる光景で道路の傍に住宅がある事から住んでいる人達を少し羨ましく思った。天気は澄み切った青空で快晴といえる絶好の旅行日和だった。

「……降ろして」

「かしこまりました」

今まで敷き詰められたような家が徐々に少なくなっていく、疎らになってきた坂道を進んでいたその時。

生い茂る木々が目立ってきた辺りで叢雲が車を止めて欲しいと口を開く。

運転手の白■は素早く車を道路の傍に寄らせて停車させた。

目的地に着いたのか叢雲は車から降りて行く先の坂道を少し歩く。辿り着いた場所は隣に擁壁がそびえ立ち、もう一方の隣には全ての建

物を見下ろせる道の途中だった。

「……いた」

誰かを探していたのかガードレールから身を差し出し、手当り次第に首を動かす叢雲。

遂に見つけたのか安心したような声で小さく呟いた。

「今日も元気そうね……」

叢雲が珍しく穏やかな表情で安堵の息を吐く。

しかし灰色はその穏やかな表情の目が少し悲しげな様子に見えていた。

「何か……あつたんですか……?」

「そうね……時雨、あの人が私の元彼。小笠原鎮守府襲撃時に唯一生き残った人物よ」

住宅街と街全体を見下ろせる道路の端で叢雲が指をさした先には広いリビングで車椅子に乗る男性の姿。背後の姿で顔や姿はあまり見えておらず、こちらからでは目を凝らさなくても見える程度の距離だった。

あの人が叢雲の元彼氏であり、小笠原鎮守府襲撃時に生き残った唯一の人間。

それを聞いた灰色は動揺を隠せずにいた。

「あの人が……叢雲さんの……?」

「ええそうよ。今は佐世保市の住宅街にあるあの家で親と一緒に暮らしてるわ……さて、別れた理由……知りたいって言ってたでしょ?」

時雨

叢雲はガードレールに寄り掛かり、時雨に別れた理由を聞きたいか再確認した。

時雨は一言も発さずにゆっくりと頭を縦に振って真面目な視線を叢雲に送る。その時雨を見た叢雲は覚悟を決めた表情で口を開いた。

「いいわ、教えてあげる。別れた理由はね……」

太陽が輝く青空を背に叢雲は少し顔を俯かせる。

前面が暗い影に染まり、背面の藍色の髪が光によって輝きを放った。

「私が振ったのよ」

「……え？」

顔を上げて叢雲は飄々とした態度で理由を答える。

予想外の答えに理解が遅れた時雨と灰色は思わず声を漏らした。

「簡単な話よ、私が一方的に振ったの。散々付き合っておいて私の事忘れるなんてふざけてると思わない？　もう呆れに呆れたから私が振ったのよ」

「違う」

前面だけ影に染まった叢雲は理解が遅れた二人に対してもう一度補足するように答える。

しかし時雨は叢雲の表情を見て確信したのか即答で否定した。

当然叢雲は頬を引き攣らせ、苛立ちのこもった声で時雨を攻撃する。

「違うって何が？　私の言ってる事にケチつけるわけ？」

「だって君は一回あの人を見た時に安心してたじゃないか。そして今は何？　何でそんなに……悲しんでるの？」

「っ！」

時雨に言われて気付いた叢雲は思わず自身の頬を触る。叢雲は別れた理由を話した辺りから今までずっと哀愁を漂わせ、何か悔やんでいるような表情をしていた。自身を追い込むほどの悔やんでも悔やみきれない一生分の後悔を背負っているように見えた。

それを言われた叢雲は一瞬度肝を抜かれたような驚いた表情になるも、深呼吸して冷静さを取り戻す。

「……言いたくない事は隠せても表情は隠せないものね……同情されたくないから言わなかったけど……まあ……実際、言ってた事は本当よ」

「忘れられた事が？」

「ええそうね……小笠原鎮守府襲撃時に辛うじて生き残った私とあの人は最早回復する事すら無理とも思えるような状態で治療を受けた。私は持ち前の耐久と高速修復材があったからなんとか回復できたけど……あの人は状況が違った」

叢雲は覚悟を決めた表情で小笠原鎮守府襲撃時の事を語る。

叢雲があの人と呼ぶ人物と出会ったのは小笠原鎮守府が設置され、多くの艦娘や整備士、憲兵などが派遣されて間もない時期だった。

当時は小笠原鎮守府における最高戦力とされていた叢雲は配属された直後から取り返そうと襲撃する深海棲艦と日夜戦闘を行っており、身体の疲労も関係なく出撃していた事から戦うごとに徐々に荒れていくようになっていた。

周りから最強と揶揄され過度な期待を押し付けられていく叢雲は度々襲撃しにくる手も足も出ない深海棲艦を皆殺しする事をもはや単純な作業だと思い込み、感情や思考が薄れていくのを実感しながらも対策を考える事すら面倒だと後回しにして生きていた。

そんな叢雲に愚かにも手を伸ばしたのがあの人と呼ばれる後に交際する事になる人物。

新米の憲兵として小笠原鎮守府に配属された彼は日々の戦闘で心身共に疲れ果てていく叢雲を見て心配し、声を掛け始めたのがキツカケだった。

最初は叢雲も煩わしいと無視していたがそれでも諦めない彼に折れてしまい、それを機に徐々に彼と叢雲は打ち解けていった。

だがしかしその直後に特殊危険個体三体による小笠原鎮守府襲撃事件が発生する。

島風の捨て身の援護もあつてか叢雲と彼は命懸けで撤退し、横須賀鎮守府の艦隊に救助され一命は取り留めると思っていた。

が――、
「脊髄損傷による下半身不随で両足は麻痺、そして何より一番だったのは……事故のショックで高校生から現在に至るまでの記憶を失っていた」

「って事は……」

「そう。私と出会った事や付き合った事、私に関係する事全ての記憶が消えてしまっていた。あの子の記憶には私という存在は最初からいなかった事になってるのよ」

事故の影響によって彼は高校生から当時までの記憶を全て失って

いた。脳へのダメージがとても激しく一時は植物状態になりかねないほどの重体で、一命を取り留めたのはまさに奇跡だった。

それを聞いた叢雲はもう一度共に歩める押さえきれない嬉しさと同時に二度と取り戻す事のできない喪失感を実感した。

頭の中で複雑に感情が絡み合う。

涙が出てしまうほど嬉しいはずなのに何故か腰に力が出なかった。

いつの間にか膝から崩れ落ちて地べたに座っていた。直視できない現実が本当だということを実感したくなかった。

今でもその感覚が叢雲の中では鮮明に残っている。

「でも何かきっかけがあれば……あの人に接していればいつかは思い出してくれるんじゃない……」

「私も最初は考えた。だけどあんな状態にさせた私をあの人の親が許してくれなかった」

想い人の記憶喪失に絶望していてもなお叢雲は諦めなかった。

とある噂では記憶喪失になったとしても何らかのきっかけがあれば思い出すと聞いた事がある。

叢雲は僅かな希望を信じてあの人の元へ束の間の安心に浸りつつ足を動かした。

だがその希望は呆気なく打ち砕かれた。

「当たり前よね、最愛の息子が下半身不随で記憶喪失となれば誰だって心配する。あの人の親は私を目の敵にして一切の面会を許さず、そして二度と会わせない為に近付かせないよう軍に警告した。当時の軍は小笠原鎮守府襲撃の後始末や対策で手一杯だったし、面倒ごとは起こしたくなかったんでしょね。私はこっぴどく叱られたわ」

あの人の親達は息子が意識不明の重体になった原因を叢雲だと決めつけ、今後二度と近付かせないように軍を脅迫してまで警告した。小笠原鎮守府の仲間やあの人達を守れなかった原因は自分自身にあると責め続けていた叢雲は親の警告を素直に受け止めて会わないと誓った。こうなってしまったのは全て自分自身の所為だと、力に驕って慢心していた自分の所為だとそう思い込むようになった。

「でも……私は……どうしても諦めなくなかった。あの人が今も大丈夫

夫なのか心配で、直接会わなくても直接話せなくても直接あの顔が見れなくても、そこにいるっていう小さな希望だけでも欲しかった」

叢雲は顔だけ振り向いて再度あの人のいる方向へ視線を移す。

どれだけ現実には絶望しようとも、それでも叢雲は簡単に諦める事ができなかった。

一命を取り留めたとしても心配だった叢雲は見えぬ影からあの人を応援していた。

仲間や司令官の協力も得て何とか情報を得ては安堵する毎日だった。

相手側から見れば身勝手な自己満足、はた迷惑な諦めの悪い人モドキと思われてもおかしくないだろう。叢雲はどう陰口で叩かれようとも気にせずにあの人の為だけに動き続けた。

「だからこうやって遠くから見るとか方法が無いの。本来は会う事すら許されないからね、いずれはこの方法もバレるかもしれない。見に行くのも一年に一回にしてるわ」

叢雲が灰色達についてきた本当の目的は佐世保鎮守府の艦娘達の訓練官ではなくこの為だった。

普段は東京の大本営や神奈川の横須賀鎮守府で働いている叢雲は旗艦の仕事もあつてかあの人がいる遥か遠くの長崎まで簡単に行く事はできない。

唯一行けるタイミングは司令官である■■大将が佐世保鎮守府へ訪れる時のみだけであり、その内見れるだけの休憩時間を取れるのはたった三回。

一年に一回だけ見る事にしてた叢雲はその日が唯一の楽しみだった。

しかし今回は特例で潮岬町鎮守府の艦娘として灰色達と同行できた為、叢雲は使わない手はないと自ら同行を志願していた。

全てはあの人の為に。

「あら、失望した？ 巷で噂の最強の艦娘が諦めの悪い変態^{ストーリーカー}気質の女だって事に」

「違う。だって叢雲は何も悪くないじゃないか。全ては深海棲艦の所

為なのに、一方的に攻撃されて積み上げられた罪を背負って……僕だつて君みたいな状況になつたら……絶対にこうしてと思う……」

時雨は叢雲の背負う業に対して激しく同情し、もし置かれた状況が自分自身にあつたとしたら同じ行動を絶対にしてしまふと確信していた。

単にそれは叢雲を慰める為に掛けたような些細な感情ではなく、自身も思う人がいるという強い感情から生まれた言葉だつた。

「私ね、目標があるの」

「目標？」

「そう。もう二度と悲劇を起こさない為に、誰も傷つかない明るく平和な未来……大切な人が平和に暮らせる未来を……私は、創りたい……」

叢雲は灰色達に背中を見せて太陽の光を前面から満遍なく浴びる。

二度と会えないかもしれないという誓いと全ての原因は自身だという枷を背負いながらも、それでも叢雲は過酷な現実には絶望する事なく立ち上がった。生まれながらにして受けた天恵と数年掛けて培った努力で毎日鍛え続け、そして深海棲艦と戦い続けた。

全てはあの人の為に。

ごく単純な理由だつた。

あの人とあの人の親に償う為に、二人で夢見た未来を叶える為に。それだけが叢雲にとっての原動力であり、不屈の精神の根源だつた。

今の叢雲がいるのはあの人の為といつても過言ではなく、何年も想い続けた結果だつた。

「いいですね……その目標……」

「でしょ？ 悪い深海棲艦をぶっ飛ばして平和にしてあげたいの。それが私にとつての償い、叶えるべき目標よ。もう暗い世界なんて無いようにね」

灰色は叢雲の素晴らしい目標を聞いて微笑んで賛称した。

叢雲は再度時雨達の方へ振り向き、灰色の賛称に続けて目標の為の理由を簡単に話す。希望に向かって進み続ける叢雲の表情はまるで

太陽のように輝いていた。

あの絶望に打ちひしがれた時に決めたんだ。

もう誰も悲しむ事も傷つく事も無いようにと、貴方が望んだ平和な世界にしたんだと胸張って言えるように。

過去を背負いながら前に進み続け、立ちほだかる無数の壁を突破し続けて。

何年も掛けて叢雲は強さの頂点を目指し続けている。

今もずっと――、

「全部話したわ。どう？ 時雨」

「……うん、ありがとう。僕も少しだけやるべき事が見つかった気がする……それと……からかってごめんね」

叢雲の話を知ったが、張本人である時雨は何か見つけたのか満足したような心地好い表情で感謝する。それと同時に今まで何も知らずにからかった自分を反省し、少し恥ずかしそうに叢雲に謝った。

謝られた叢雲は少し驚いた表情でキョトンと一瞬理解が遅れるも時雨の表情を察して元気な声をあげた。

「全然大丈夫よ！ 共に頑張りましょう!!」

「さくして今度は時雨が主人公かしら」

叢雲のやりたい事が終わって中心街へ車で向かっている途中、叢雲は何か企んだ表情で時雨に話し掛ける。

何の事だか分からないまま慌けていた時雨は叢雲の表情を見た瞬間、嫌な予感と同時に察してしまった。

運転手の白■に場所を伝えて向かっていたのは佐世保駅の近くにある規模の大きいショッピングモール。ファッションブランドやレストランなど多くの店舗を展開しており、毎日賑わっている大型商業施設だ。

「勿論私たちは女の子なんだから化粧やおシャレの一つや二つ、知ってなきやダメでしょ？」

「えっ……？ ちよつ、あの」

早速ショツピングモールに辿り着いた途端、叢雲は時雨の腕を抱いて二手に別れて行動しようとする。

何されるか分からない時雨は底の見えない不安と戸惑いの表情を隠せずあたふたしていた。

「候補生、少しアンタの時雨借りるわ。いいでしょ?」

「え、ええ……大丈夫ですけど……え?」

灰色の承諾を得た途端に叢雲は光の速さで時雨を連れてどこかへ行ってしまった。

途中違和感のある言葉を聞いた灰色は一瞬理解が遅れる。

「聞き間違いかな……まさかな……」

「こつちもこつちでダメだな」

傍にいた摩耶は考え続ける灰色を見て深くため息を吐く。

歩き続けるのも疲れた摩耶は灰色を誘って近くにあつたベンチに座り、叢雲と時雨の買い物が終わるまで待つ事にした。

「ねーこれはどう?」

「え? 早くないですか? 別れるまでそんなに時間……」

叢雲と時雨の買い物は長くなるだろうと暇つぶしにスマホを手に出した途端、早速灰色は叢雲に話し掛けられた。灰色はあまりの速さに違和感を感じながらも声の方向へ振り向く。

そこには私服に着替えていた時雨がいた。

「あんたの司令官、何も言わずに口覆って右指をグツとあげながら何か噛み締めてるんだけど」

「ま、まあ……いい評価なのかな」

叢雲に半ば強制的に着させられた衣装は白色のパーカーにデニムショーツパンツ、黒色のセミロングタイツと今どきの女子達が着ているようなカジユアル系のスタイルだった。

「うくん、これ似合ってるのかな?……」

「アンタどうみても人より可愛くできてるんだから大概何でも似合うわよ」

「色々大雑把過ぎない?」

時雨の指摘を無視して叢雲は次に買った衣装を着させる。

「これとかどうよ」

時雨の服装を見た灰色の様子は――、

「今度は歓喜のあまりにニヤついた顔を見られたくなくて手で覆ってるわね」

「まあ……これもいいのかな」

灰色の大袈裟な反応に時雨は少しばかり頬を赤らめあからさまに照れる。

今度は淡い水色のポロシャツに黒色のフレアスカートと大人女子系に似たスタイルだった。

「これかあく……」

「アンタどうせ正装以外の服着たこと無いんだから新鮮さが前に出て何でも似合うようになってるし問題ないわよ」

「ねえそれ褒めてる？」

また叢雲は時雨の指摘を無視して次に選んだ衣装を着させる。

「これでもいいわね……」

また別の衣装を着こなす時雨を前に灰色は――、

「綺麗すぎてまともに顔見れないのかスマホの画面で感想伝えてきたわね」

「もうどれでもいいや」

まるで自分の娘のように喜ぶ灰色を見て時雨はこの際どんな服装を着ても似たような反応だろうと苦笑いした。今度は肩を露出させた肌色のワンショルダーに薄い茶色のチノパンツと色気のあるスタイルだった。

「……」

「アンタどうせ自分が可愛い事知ってるんだからこれで問題ないわよ」

「まだ何も言っていないんだけどフォローにもなっていないしなんなら馬鹿にしてるよね」

全く慣れていない際どい服装に時雨はよそよそしく自身の姿を確認していた。

そんな時雨を見て半分呆れていた叢雲は何も考えずに言いたい事

だけを時雨に伝える。馬鹿にされたような気がした時雨はすぐさま叢雲の方へ顔を向けて怒りマークを出させた。

「まあ時雨は一般の中でもかなり人気だからな。自覚無しは周りから見ればある意味ダルいぞ」

「わざわざ言わなくてもいいから。何？ 何なの？ いじめなの？ これ」

戸惑う時雨を他所に摩耶と叢雲は吟味するかのよう分析していた。あからさまな二人のイジリように時雨は渴いた怒りを露わにする。誰もつっこまないこの状況で自分がおかしいのかと一瞬正気を失いかけた。

「正直言って私は……ノーコメントで」

「え!?! 何!?! 余計気になるよそれ!!!」

「襲いたいってさ」

「摩耶さん語弊!!!」

息の詰まる状況を切り出そうと灰色が時雨の衣装を褒めようとするも語彙力が無くなったのか上手く言い出せなかった。摩耶が補足して伝えたが全く違う言葉に思わず灰色は立ち上がって訂正する。この後も叢雲と時雨の買い物は続き、夏服や冬服など予め着れるように何着か叢雲が支払って買ってくれた。

177. ベッドの上で繰り広げられる色欲心理戦

叢雲の過去話と時雨達の買い物が終わった日の夕方。

摩耶と叢雲は遙か遠くの東京にある大本営に戻らなければいけない為、駅前まで運転手の白■に送ってもらいながら荷物を用意をしていた。二人とも大きなキャリーバッグを片手に■■大将と連絡を取り合っている。

「分かったわ、んじやまた後で……って事でそろそろ私たちは行くわ」

「気を付けろよな、灰、時雨」

「はい！ 叢雲さんと摩耶さんも気を付けて」

連絡を取り終えた叢雲と摩耶は携帯電話を切って灰色達の方へ別れの挨拶をする。

摩耶は慎ましく微笑んだ表情で灰色達に言葉を掛けた。

灰色は右手で敬礼しつつ叢雲と摩耶へ別れの言葉を伝える。

「ありがとう叢雲。僕も頑張ってみるよ」

「大丈夫よ。私たちは応援してるわ……白■さんも運転ありがとうございました」

時雨は今日の事も含めてお世話になってくれた叢雲に感謝した。

過去の話や面白い物を含めて色々な事を教えてくれた叢雲を羨ましく感じていた。自分も誰かに頼られる存在になりたいとこれからの事もふくめて頑張っていきたいと叢雲に告げる。

叢雲は満面の笑みで時雨の意気込みに答えつつ、今まで送ってくれた運転手の白■に対して頭を下げて感謝した。

「しかし深夜から会議とは少しキツイな」

「仕方ないでしょ、時間限られてるんだから。飛行機の中で寝てれば大丈夫よ」

背伸びをしていた摩耶が欠伸をしながら仕事を面倒臭そうに語り始める。

叢雲は左腕の腕時計を見て時間を確認し、スマホで予定を確認して摩耶を言い聞かせた。

深夜からと聞いて灰色は苦笑いしながら叢雲と摩耶の苦労に同情

する。

「深夜からですか……お疲れ様です」

「全く大変だよなく灰く」

「あつちには二十三時ぐらいに着く予定だからかしら。今のうちにやっておきたい事でもあるんでしようよ」

摩耶が言うには■大将に呼ばれた護神厄討艦隊のメンバーのみで行われる会議らしく、叢雲と摩耶はその会議に呼ばれたようだ。

近頃■大将が小笠原諸島海域奪還作戦を実行に移す段階まできたと何回か聞いている。それに関する事なのだろうか着実にその時が迫ってきているのを灰色は改めて実感した。

「あ、時雨」

「ん？ 何？」

何か思い出したのか叢雲は時雨を呼び出し、耳を寄せるように仕草をして話しかけて来た。

時雨は大切な事なのかと叢雲の口元に耳を寄せる。

「一応勝負下着買っておいたから仕掛けるなら今日よ」

「っ……!!! 余計なお世話だ!!!」

叢雲の言葉を聞いた途端、時雨は瞬間的に顔が熱を持つほどまで紅潮させた。

叢雲のからかいを時雨は声を荒らげて怒り出す。

「ごめんごめんて！ それじゃ、また後でね……バイバイ」

「じゃあな」

怒りに震える時雨を宥めて抑えようと叢雲は謝った後に時計を見て時間だと気付き、キャリーバッグを持って駅の中へ行こうとする。摩耶も灰色にメモを渡して別れを告げた。

駅前に灰色と時雨、運転手の白■が取り残され、夕暮れ時の空が橙色に染まっっていく。

「最後に余計な事を……!!!」

「え!? そこまで怒る事されたの!？」

時雨は怒りが収まらないのか片足で地団駄を踏む。

時雨の怒りように灰色は戸惑って思わず呟いた。

「そういえば指定席の時間っていつなんだろう……」

叢雲と摩耶が帰った数時間後に泊まっていたホテルを出て、灰色達は別のビジネスホテルへチェックインしていた。叢雲と摩耶がいなくなった事で人数に空きが出来た分、部屋を変えると安くなるらしくそれぞれ一人部屋に三人ずつ別れるようだ。

部屋の中へ入って荷物を整えていた灰色は頭の中で帰りの事を思い出し、大事にしまっていた提督に渡された切符の日付けを見た。

「本当に四日間だ……ん？」

指定席の時間は今日から後三日間もの日にちがあった。

よく見れば桃■大将の講演会の二日分は含まれていない。

提督はそこまで見込んで自分達に休みを与えたと思うと提督の用意周到さに頭が下がる他なかった。

そう考えている中、灰色の持っていた携帯電話から着信が鳴り響く。灰色は急いで携帯電話を取り出して着信に応答した。

「はい、もしもし灰■です」

『白だ。少しばかり連絡の為に掛けた』

着信相手は提督だった。

あまりの珍しさに灰色は惚けそうになりつつも頭を横に振って自制する。

「お疲れ様です。何かありましたか？」

『毎日の業務報告について、だ。いつも報告は直接俺に伝えてただろうし、今回は摩耶がまとめてしてくれたからやる事はなかっただろうが、今度からは灰が報告するんだ。簡単にやった事を言えばいい。分かったか？』

「は、はい！ 分かりました！」

提督は候補生である灰色の毎日の業務報告について簡単に説明した。

今回の遠征に関しては摩耶が担ってくれていたようで、摩耶がいなくなった現在では報告するのは灰色になるらしい。提督に毎日業務報告をしていた灰色は休みをもらったのに報告するのかと内心困惑しつつも元気に返事をした。

『あくそれとだな……まあ、いいか……今回はどこかに行った程度でいい。お前らの惚気話を聞いた所で時間の無駄だからな。明日から頼むぞ』

「……？ 分かりました、失礼します」

どこか悩んでいそうな提督は言うのを諦めて業務報告の事だけを簡単に話した。

珍しく言葉に悩んでいた提督の声を聞いて灰色は違和感を持つも口には出さず電話を切った。

「何か言いたげそうだったけど……大丈夫か、白さんの事だし」

電話を切った灰色はベッドに大の字になって天井の照明をじつと見続ける。

備え付けられたエアコンの空調音以外何一つ物音のしない部屋に窓から自動車の駆け抜けていく音が微かに聞こえてくる。

今日動いた分の疲れが身体の中を駆け巡っていく感覚がした。

「時雨、一人で大丈夫かな……」

今日の事を思い出していた灰色は初めて遠征に来た時雨の事を心配していた。

「可愛かったなあ……」

叢雲と途中参加してきた摩耶と時雨の買い物で様々な私服に着替えていた時雨を思い出していた灰色は思わず無意識に呟く。

正装しか見ていない時雨が今時の女の子のようなファッションをしている姿はあまりにも可憐で美しく、一目惚れしてしまうほど美少女という言葉を体現していた。

実際の話、灰色は時雨に心を射抜かれている。

最初は信頼し合えるパートナー的存在だったはずが接していく中で徐々に異性というものを感じてしまい、灰色はそれ等を押し殺して仕事をしていた。

何故なら時雨はまだ人間への嫌悪やトラウマが残っているからだ。

時雨達が前任時代や初めて出会った時に酷い思いをしているのを知っている。仮に時雨達が自分を許しているとしてもまだその記憶が残っているうちは怖い思いをするのを防ぐ為、時雨達と話す時は異

性関係の事を意識させないように接していた。

それが彼女らにとって安心できる方法の一つだと思っている。

「ん？ 誰だ？」

今日の思い出に浸っている最中にドアをノックする音が聞こえた。

明日の予定について運転手の白■が聞いて来たのだろうか、灰色は何も警戒せずにドアを開く。

「や、やあ……灰さん……」

「や、やあ時雨。どうしたの？」

意外にも訪れて来たのは時雨だった。

可愛い部屋着を着ながら恐る恐る灰色の部屋の前まで鍵を持って来たらしい。

廊下はとても静寂としていた。

「ちよつと灰さんと……お話したいなくなんて思っ……駄目、かな？」

「あ、うん……大丈夫だよ」

時雨は少し顔を赤らめ左右の人差し指の先をツンツンと当てて灰色に話し掛ける。

灰色は廊下に吹く風が冷たく感じたのを知ってとりあえず時雨を部屋に入らせようと快く承諾した。部屋に入った時雨は短い歩幅でよそよそしく歩いていき、目に入った近くの椅子に座る。

「どうだった？ 叢雲さんとああいいう買い物は」

「ん……良かったって言いたいけど、色々と振り回されたから良かったとは言いたくないかな」

「叢雲さん、張り切ってたからね……その部屋着も選んでくれたんでしょ？」

時雨は白色の腕の丈が長い大きめのシャツとズボンとラフなルームウェアを着ていた。

灰色に言われて時雨はすぐさま立ち上がったは灰色の傍まで近寄り、着ていた部屋着を自慢するかのように見せつけていく。

「う、うん……どうかな……？」

「そりゃ勿論、時雨に似合っ……可愛いよ、いやホント

に」

灰色の隣に座り上から目線で見続ける時雨を見て灰色はある事に気づき、瞬時に口元を隠して褒め言葉を言い直す。

ある事とは時雨が着ている部屋着の胸元からふくよかな胸と大人の女性が着るような黒い下着が見えていた。普段から異性関係の意識を持つ事を抑え込んでいた灰色は時雨の可愛さを再確認した事と新鮮な部屋着姿と下着を見た事による追加攻撃で理性が揺らぎつつあった。

「そう……なら良かった」

見られるとも知らずに時雨は安心して安堵の息を漏らす。

「ん……灰さん、何で隠してるの？」

「あーいやこれは何と言うか……その……えーつと……直視できないかなーなんて」

「え？ 何で？」

『そりゃあなたがそんな格好をしていたからだよ!!!』と大声では言えない灰色。

鼻の下を伸ばしている事がバレたくない一心で灰色は答えを頭の中で考える。

その時だけ時間が急にゆっくりになるような感覚がした。

「時雨にニヤけた顔を見せたくない……」

「えっ……そ、そうなんだ……！ そうなんだね……えーつと……ありがと……」

精一杯考えて探り出した苦し紛れの答えを小さな声で伝える。

よく見れば目が泳いでおり、灰色の頬や耳が真っ赤に染まっていた。

理由を察した時雨は灰色と同じで紅潮した顔を見せないように顔を俯かせる。物音が全くしない灰色の部屋の中で互いに目を合わせる事ができないまま数十分が経過した。

「……僕ね、一度灰さんに謝りたかったんだ」

「……え？」

時雨は深く深呼吸をして自身を落ち着かせ、灰色の顔は見ないまま

神妙そうに話し掛けた。

声を聞いた灰色は時雨の方へ振り向いて耳を寄せる。

「初めて出会った時僕は灰さんを物凄く警戒してた。また何かしてくるんじゃないかって、もう人なんて絶対に信じないって。本性ばかり探ってたんだ……本当は灰さんも気付いてたでしょ？」

時雨は初めて灰色と出会った時の記憶を赤裸々に語る。

当時人間不信かつ嫌悪に感じていた時雨は灰色の事を警戒していた。

隣で仕事をする事すらストレスに感じるほど嫌っていた時雨は灰色に氣遣って嫌っている事がバレないように演技をして騙していた。

「そうだね……何となく信じられてないなってのは分かった。作り笑いとか多かったからね。でもあの鎮守府の過去を考えれば仕方のない事だと思う。時雨のした事は間違っていないよ」

時雨の嫌悪な感情を灰色は少なからず察していた。

出会った当初から感情や言葉に違和感を感じていたのもあり、灰色はなるべく怖がらせないように接していた。それは今でも続いており、異性関係の抑制も含めて時雨に気を配っている。

潮岬町鎮守府内では自身と艦娘が接していく中で一番重要な事であり、提督の考え方を参考に接し方を日夜考えていた。

「ごめんね。今思うと申し訳なく感じるんだ、こんな優しい人を信じられなかったなんて……」

「大丈夫、気にしてないよ。誰だって自分を守る為にはああいう事をするものだと思う。時雨もあまり気にしないで」

灰色は謝る時雨が気にかけないようにと緩んだ笑顔で返事した。誰しも簡単に他人を信じるのは難しい故に疑心暗鬼になるのは珍しい事じゃないと灰色は考えている。潮岬町鎮守府の艦娘であれば尚更で時雨がやってきたことを咎めるような事はしなかった。

「ありがとう……灰さん、僕も頑張ろうと思う。大切な仲間や人を守れるくらい強くなりたい、もう二度と後悔しなくて済むように」

「それは……」

時雨は強く握った拳を胸に翳し、固く心に決めた決意を灰色に伝え

る。昼頃に叢雲が最強たる所以や強靱な精神の理由を聞いていた灰色は時雨が知りたがっていた意味を理解した。

時雨も叢雲と同じように潮岬町鎮守府で姉妹や多くの仲間を失っている。春雨や村雨、そして山城が沈んでしまった話を聞いた事があつた。

その決意は時雨にとって重要なものである事を示していた。

「僕にも大切な人がまたできたんだ！ だからこそ今のままじゃダメ……死に物狂いで頑張らないと……！ 灰さんは応援してくれる、かな……？」

「勿論だよ。応援する……頑張ろうな、時雨」

決意を語る時雨の眼差しはいつになく真剣な鋭い目で今までにないほどやる気が溢れていた。時雨の揺るぎない決意を灰色は生涯を掛けて応援すると誓う。

ようやく出てきてくれた彼女の決意と目標を達成させる為にも自身が頑張らなければならぬと強く心に決めた。

「あ、そろそろ一時だ。明日に備えてもう寝ないとね」

時雨と話している内に時間は既に日を越えた深夜一時になっていた。

窓から聞こえていた車が通る音も少なくなってきた。明日も時雨の為に掛ける準備がしたいと思っていた灰色はベッドから立ち上がった。明日の予定を確認した。

「そ、そうだね……」

「……ん？ どうしたの？ 時雨」

時雨が少し躊躇ったような反応を見せた途端、灰色は数秒後に理解して後方へ振り向く。

時雨はベッドの上でまた顔を紅潮させながら目を泳がせていた。

「いや……その……今晚は一緒に寝てもいいかな……なんて」

「……」
「ご、ごめん！ やっぱ冗談！ おかしいよね……急に一緒に寝たいだなんて……」

灰色と添い寝がしたいと思っていた時雨は心臓をバクバクさせな

がら震えた声で精一杯に伝える。時雨にとつての大切な人は灰色であり、叢雲の件もあつてどうしても近付きたかつた時雨は一か八かの賭けに出ていた。灰色は時雨を見たまま何も答えずに黙り続ける。微妙な空気に耐えきれなくなった時雨は冗談だと苦笑いしながら声に出した。

「時雨」

「ん、何……—ひっ……!」

「はあ……やっぱり……無理はしちやダメだよ」

名前を呼んだ途端に灰色を見た時雨は一瞬大きな手が頭上に現れてのを見て反射神経で自身を守るかのように腕を上げて怯えていた。大きな手は灰色の右手の平で時雨の頭を撫でるように腕を伸ばしている。予想通りの反応を見た灰色はため息を吐いて時雨が無茶している事を再確認した。

「む、無理……?」

「そう。私を大切に思ってくれてるのはとても嬉しいし、距離を近付かせたいのも分かる。私だつて時雨ともつと仲良くなりたい……だけど」

灰色はベッドに座る時雨の目線まで身体を屈ませ、先程伸ばしていた右手で時雨の頭を撫でる。時雨が自分自身を信頼して頼ってくれるのは実証は無くとも把握していた。

あの■少尉の件もあつてか時雨や夕立は少しずつ前を向いて頑張っている。

その頑張っている時雨の想いを無碍むげにしたくない灰色は自身も仲良くなりたい事を打ち明けて伝えた。

「まだ時雨は完全に人に慣れてる訳じゃない。まだまだトラウマが残つてるとかで怖がる事もあると思うんだ、さっきみたいにね」

「ご、ごめん……」

「謝る事じゃない。寧ろ謝るのは私だよ、怖がらせてごめんね」

灰色は時雨を怖がらせた事を素直に謝った。

時雨が灰色と仲良くしていられるのはあくまで灰色という人間そのものを受け入れているからであり、その他の人間達には未だトラウ

マや嫌悪が残っている。それらを知っていた灰色は時雨が無理をしてまで近付こうとしてきた事が逆に不安やストレスを生まないか心配だった。

「少しずつでいいよ、少しずつ。時雨のタイミングで少しずつ近付いていこう。大丈夫、私は……っ！　こんな時間に電話？」

灰色ははにかんだ笑顔で時雨との関係を少しずつ詰めていこうと伝えた。

時雨も快く同意して撫でてくれた灰色の右手に触れる。

その時灰色の携帯から着信音が突然鳴り響いた。

急な大きい音に身体を跳ねらせ驚く二人は様子を伺って携帯を手取る。

「もしもし灰■です」

『灰、さん……です……か……？』

着信主は潮岬町鎮守府の不知火だった。

何か急いでいる様子か差し迫った声で名前を確認している。

『今、すぐ……戻って……っ……来れますっ……ぐっ……でしょうか……？』

「ど、どうしたんですか？　何かあったんですか……？」

『司令が……』

『……拐われ……ました……!!』

178. 汚れた鏝の轍はまだ見ぬ先へ

それは六時間前の夕方十七時に遡る。

灰色と時雨達が佐世保市で買い物をしている時、提督は寮の管理人である代表の艦娘と設備について話していた。少々愚痴を言いながらも艦娘の話に耳を傾けてメモを取っている。

無事に仕事を終えた提督は仮執務室へ向かう為に寮の廊下を歩いていた。

「白殿」

背後から呼ばれた提督は声の方向へ振り向く。

提督を呼んだのは憲兵隊長で小走りでこちらに向かって来ていた。

「隊長か。どうしたんだ」

「いえいえ何もありませんよ。途中まで一緒ですのでどうせなら話しながら行きたいと思って呼びました」

急ぎの用事かと思えばただ共に歩きたかっただけだと隊長は慣れない笑顔を返しながら言う。隊長の事など全く興味無い提督は隣で歩かれるのを全く気にしていなかった。

しかし何故か違和感を感じる。

隊長の声が少し痰が絡まったようないつもより低めの声に聞こえた。

「はーん……まあ別にいいが、声変わってんな。喉でも痛めたか？」

「はい、少しやらかしましたね。薬は飲んでいるのですが」

「隊長として不甲斐ないな」

「はは……善処します」

何気なく棘のある言葉を隊長は上手く受け止め、頭を抱えて苦笑いしながら答える。

隊長はこれから自身の部屋で仕事をするらしく、並ならぬ忙しさを冗談半分で伝えた。

「では私はここで」

「はいはいお疲れ様」

講堂と憲兵隊寮の分かれ道に辿り着き、隊長は憲兵隊寮の方へ身体を向け、提督は仮執務室の方へ進もうとした。

それぞれ淡白に別れの挨拶をして行き先へ向かう。

その時提督は後頭部から針で刺されたような小さな痛みを何回か感じた。

「つ……？ 気のせいかな」

ただの静電気だろうと痛みに気にする事なく提督は仮執務室の中へ入る。

仮執務室では秘書艦阿賀野が事務仕事を遅くまでこなしていた。提督が仮執務室を出る前に阿賀野が間違った項目やケアレスミスを順に伝えていくらしく、阿賀野は終業時間までに終わろうと汗水流して取り組んでいた。

仮執務室に入ってきた提督を見るやいなや、曇りのない笑みで事務仕事の成果を見せてきた。

「提督、終わりました！」

「……まあいいだろう。これでお前の仕事は終わりだ」

阿賀野が仕上げた書類の内容は提督が修正した通りに出来ており、提督は申し分ないだろうと仕事の終業を告げる。

提督の言葉を受けて阿賀野は安堵したのか深呼吸して感謝した。

「ありがとうございます！」

「返事だけバカでかい声を出すな。耳が痛くなる」

手に取った書類を机に投げて提督は椅子の背もたれに寄り掛かりながら堂々と机の上に足を乗せて座り込んだ。その後をついて隣に立つ阿賀野の声を聞いて小指で耳をほじくりながらさりげなく棘のある言葉を言う。

阿賀野は言われても全く気にしておらず能天気にも緩んだ笑顔は保っているままだった。

「そういうえば阿賀野」

「はい、何でしょうか？」

「酒匂の件なんだが、そろそろ発動する小笠原諸島奪還作戦が終わるまで延長する事にした。状況的に落ち着いた頃合いを見て酒匂をこ

ちらに送るそうだ」

翔鶴達との戦争前に■大将と話し合っていた酒匂の件について簡略的に阿賀野へ伝える。

ここ最近では翔鶴達との戦争や大規模偵察作戦で酒匂の件は常々後回しにされていた。

■大将は近頃発動する小笠原諸島奪還作戦を最優先にし、その後の経過を見て酒匂を潮岬町鎮守府へ送り返すと提督に伝えている。

「分かりました……ありがとうございます」

「……あ、そうだ」

酒匂の件を聞いた阿賀野はやっと会えるかもしれないという期待を胸に安心していた。複雑な姉妹喧嘩は既に終わっており、矢矧やノシロとも徐々にはあるが良い関係を築きつつある。

他の仲間にも認められるように友好関係を作れるような段階まで来ていた。

このままいけば安心して酒匂を迎えられる、そう思っていた。

『はい。もしも灰■です』

「白だ。少しばかり連絡の為に掛けた」

思い出したとばかりに提督は電話機で灰色を呼び出した。

素早く着信に答えた灰色に対して提督は素っ気なく掛けた理由を伝える。

『お疲れ様です。何かありましたか？』

「毎日の業務報告について、だ。いつも報告は直接俺に伝えてただろうし、今回は摩耶がまとめてしてくれたからやる事はなかっただろうが、今度からは灰が報告するんだ。簡単にやった事を言えばいい。分かったか？」

『は、はい！ 分かりました！』

常日頃から灰色は提督に直接面倒を見てもらっているおかげか業務報告は全て把握されており、毎日報告する必要は無かった。しかし今回は特例で灰色達は佐世保鎮守府にいる為、何をやっているのか大まかな情報は得いても詳細については知る事ができない。

候補生の評価や今後の課題についてまとめておきたい提督は例え

休みだろうと報告させる必要ができていた。

「あくそれとだな……まあ、いいか……今回はどこかに行つた程度でいい。お前らの惚気話を聞いた所で時間の無駄だからな。明日から頼むぞ」

『……？ 分かりました、失礼します』

今後の事について簡略的に話したかつた提督は時間を考えて話すのをやめて業務報告について話題を戻す。一々質問されて時間をかけさせられるのも面倒だと分かりやすく説明した。

灰色は素直に業務報告について理解してくれたようで自ら携帯電話を切る。

物分りが悪い奴では無いと言う事を把握している提督は文句を言わずに受話器をそつと置いた。

「阿賀野、今日の夜は執務室に籠る。誰も入れないように伝えておいてくれ」

「分かりました！ 時間は何時からですか？」

「おおよそ二十時だ。食堂の掲示板にでも貼っておけ」

灰色に伝えた直後に提督は後をついていく阿賀野と共に食堂へ向かっていった。一昨日のように今夜も執務室に籠る予定のようだ。

何をしているのか全く分からない阿賀野は何かしら大事な事をしているんだろうと軽く受け止め、掲示板に書き込む事をメモしているその時だった。

「薄気味悪いな……っ？」

「え!?! て、提督!?! どどどどうしたんですか？ 大丈夫ですか……!?!」

突然提督が足を踏み外したのか廊下へ膝を着いて転倒しそうになつていた。

提督は急な目眩と身体の内側から来た衝撃に思わず動揺している。倒れそうな提督を見て阿賀野は両手を広げて慌てながら提督の状態を心配した。

「……っ、いや……足を踏み外しただけだ。問題は無い」

「そ、それなら……いいんですけど……」

提督は何事も無かったかのように立ち上がり、床に着いた膝の埃を軽く払う。立ち上がった後も何の症状は出なかったものの、それが逆に不安を呼んでいた。

「まさかな……」

提督と阿賀野が食堂へ向かい、晩御飯を食べ終えた後の夜の二十時。

提督は間接照明で照らされた仮執務室にある応接間のソファに座り、テーブルの上にある黒い箱の中身を開ける。

中には紅い液体が入った注射器があり、淡く紅い光を帯びていた。

提督はその注射器を手にとって針を自身の腹へ向けて射つ。流し込まれていく紅い液体は皮膚に浮きでた血管の中へ縦横無尽に駆け巡っていく。

身体全体の血管が紅い光を放出させ、目は一瞬黒くなって紅い瞳が浮き彫りとなり、紅い光を纏う白髪は逆立っていた。

「後でまた……補給してもらわないと……いけないな」

順応が済んだ頃合いを見て提督は溜め込んだ息を吐き、新しい空気を肺がいっぱいになるまで深く吸う。

この紅い液体は摩耶から支給される延命剤という名の薬物。

提督はこの紅い液体を身体に補給しなければ自我を保てず身体が上手く制御できなくなるらしい。

何を隠そうこの紅い液体はとある深海棲艦の血液であり、艦娘を指揮する提督が一番見られたくない日課である。

そしてその事を提督は未だ知らずに使い続けている。

何故なら提督は――

「――記憶を操られているから」

「……誰だ」

突然の声に提督は顔を上げて警戒する。

提督の視線に映るのは銀髪のツインテールをした艦娘、鹿島が目の

前にいた。

入室厳禁の仮執務室に堂々入り込み、ましてやドアをノックせず気配を感じさせないまま提督の目の前まで来ていた。

「鹿島です。こんばんは」

鹿島はさりげなく仮執務室に入ってきた事を無視して提督に挨拶をする。

「入るなって書かれてなかったか？」

「書いてありましたね。それが何か？」

仮執務室のドアに堂々とノートの破ったページに入室禁止と書かれていたのにも関わらず、それを無視して入ってきた鹿島を提督は若干苛つきを見せて問いだした。

鹿島は私には関係無い事だと他人事で入室した事に何ら疑問を持っていない。

「何で入ってきてんだって言ってるのが分からないのか？」

「提督を救ける為です」

「救ける？ 辱めたいの間違いだろ？」

「いいえ……これだけは違いますよ」

入ってきた理由を頑なに言わない鹿島は提督にとって信じられない言葉を言い放つ。細目で常に微笑むその表情からして偽善臭く、何か面倒な事を企んでいるのは明確だった。

「何故その紅い液体を打たなければならないか、提督はご存知ですか？」

鹿島は提督が持っていた紅い液体がこびりついた注射器を指さしてそれが何なのか問いだした。

当然提督は答えるつもりはなく、鹿島を追い出そうと突っ撥ねる。

「お前に教える義理は無い。さっさと出てい——」「一時的な延命剤……とでも思っていたらそれは大間違いですよ」

「何故それを……」

しかし鹿島は被さるようにして液体の正体を呆気なく答えて更に提督の思惑を否定した。

提督は訳の分からない事を言う鹿島を睨みつけて後方へ少しずつ

後退る。鹿島はそれを追い掛けるように徐々に前へ詰めて行きながらある事を話した。

「貴方の名前は白■■■■……深海棲艦の初代提督、中枢棲姫の息子にして人間と深海棲艦の混血。中枢棲姫の血と力を受け継ぐ貴方は身体の中にある深海棲艦のエネルギー核と細胞を活性化させる為に中枢棲姫のエネルギーと血液を流し込んでいるんです」

後退っていくうちに奥の執務机まで追い込まれた提督は机に座るようにして寄り掛かる。追い詰めた鹿島は少し右に逸れて提督の右方まで歩み寄り、視線を向けずに話し続けた。

鹿島は仮執務室の間接照明の電源を切って部屋を真っ暗くする。

窓から漏れる外灯の光を背景に鹿島と暗闇や影に染まっていく提督。

二人しかいない仮執務室で緊張が一気に高まってきていた。

「何を訳の分からない事を……俺がそんな事あるはずないだろ」

「既に操作済みですか……では提督、何故私たちにこの事を隠す必要があるのですか？ 隠さなきゃいけない理由でもあるんですか？

たかが注射器一本、延命剤はともかく病気を治す為の注射とでも何も知らない艦娘達に偽っておけば何も問題は無いはずだと思いますが」

鹿島は何故提督が注射器を打つ事を誰にも見せたくないのか問い詰めていく。今の提督が手に持っているモノを延命剤だと信じているのなら艦娘達や他の人間に見られようが疑われる事は無い。

嘘や誤魔化しが得意な提督であれば尚更なはずが注射器を打つのを隠す事は疎か、その注射器が存在している事すら隠そうとする。

まるでその注射器の中にある紅い液体が後ろめたいモノとでも言っているかのような口ぶりだ。

「あともう一つ聞きたいですね……■■蒼■■少尉って誰だか知ってますか？」

■蒼■少尉の事について知らないはずもない、ましてや忘れてはいけない恩人を知っているかどうか提督へ質問を投げる。

名前を聞いた提督は静かに口を開いて答えた。

「……誰だ、そいつは」

知らなかった。

提督にとつて命の恩人とも思える相手を今までの出来事を踏まえ
て知らないなど有り得ない事だった。

明らかに提督の記憶の中で矛盾が発生しているのがよく分かる。
翔鶴達との戦争という大規模な戦闘を経験しているながら一番のルー
ツである■蒼■少尉を忘れているのなら提督の記憶は今一体どう
なっているのだろうか。

「もういいです。ここまですらばもう確かめる必要は無いですよ
……——」「っ!？」

記憶の矛盾を再確認した鹿島はゆっくりと提督に近付き、普段は全
く見せない鏢の眼を開いて睨む。

直後、警戒していた提督の鳩尾を予備動作なく一瞬で殴り、痛みに
悶絶した後は意識を失くして失くして床に倒れ込んだ。

「少し眠っていてください……■くん」

「取り囲め!!!」

「っ——」

鹿島が提督に触れようとした途端、誰かの合図の音が響いた。

仮執務室のドアから待ち伏せしていただろう艦娘達が一斉に現れ、
艦装を展開した状態で鹿島を取り囲む。鹿島を囲むのは大和、武蔵、
日向、比叡、蒼龍、飛龍、鈴谷、古鷹、加古、朝潮、荒潮、響、暁。

そして素早く駆けつけた不知火と川内が提督の傍によって鹿島に
奪われないよう身を出して堅く守りを固めた。一斉に艦娘達が出て
きた最後に『緞』木曾と『黝』蒼龍が色鮮やかな目を光らせて現れる。

「やはり『鏢』鹿島……企んでたな」

「おやおやこれは一体どういうことでしょう。仮執務室は入室厳禁な
のでは？」

「それは鹿島さんも同じ事ですよ……何故こんな事をしたんですか
!!」

全方向から艦娘達に艦装の砲口を向けられ威嚇させられても鹿島
は決して臆せずに飄々とした態度で話し掛ける。半強制的に提督を
殴って眠らせようとした場面を見られた事で艦娘達と敵対。

過去に艦隊で一緒だった不知火や川内は鹿島の行動が理解できずに説明を求めた。

「貴女達には関係の無い事です」

「答える鹿島!! 何故提督を気絶させた!! 今までの言葉も何なんだ!!」

「そこまですか……心底腹が立ちますね」

既に艀装展開している鹿島を囲っていた武蔵も同じく説明を求め

る。記憶の矛盾から既に聞かれていたと知った鹿島は表情を変えずに苛つきのこもった小声で呟いた。初めて怒りを見せた鹿島に少し動揺しながらも砲口を真っ直ぐ鹿島に向けて警戒を緩めない。

「そんなに知りたいのなら教えてあげますよ……先程も言ったように提督は深海棲艦の女王である中枢棲姫の子供であり、深海棲艦と人間から生まれた唯一無二の存在……そして真正銘世界でたった一人、深海棲艦を指揮できる唯一の人間です。散々貴女達やその仲間を苦しめ殺して沈めさせた、貴女達がもつとも憎むべき深海棲艦の総指揮官だった人ですよ」

「っ……!!」

困まれても余裕の面構えで佇む鹿島は提督の正体を惜しみなく艦娘達に晒して伝えた。

とてつもなく不気味で得体の知れない謎の存在だった提督の正体は人類を恐怖に陥れた深海棲艦の総指揮官。人智を超越した化け物たちから認められ指揮できる唯一の人間であり、そして深海棲艦の中心的存在である中枢棲姫の息子だった。

衝撃の事実には艦娘達は心臓を針で刺されるような動揺を隠せず

いた。

それと同時に何故か落ち着く事ができていた。「何を今更驚いてるんですか? 不知火さんや川内さんはともかく、愚かな貴女達だろうと薄々気づいてはいたんでしょう? この人間は明らかに何かが違うと」

潮岬町鎮守府の艦娘であれば提督の正体は自ずと誰もが分かつて

いた。長い白髪や白い肌などの深海棲艦特有の身体的特徴、徹底的に艦娘を嫌う性格などを鑑みれば簡単に気付ける事だった。

鎮守府襲撃の終盤で■■少尉が提督に殴り飛ばされた後に中枢棲姫が出てきた理由も鹿島の発言を聞けば納得できるものだった。

「大体は認めたくなかったとかそういうくだらな感情でしょうね。提督の性格や行動は別として多少は善人の心がある事を思い込んでいた愚かで浅はかな貴女達らしい考え方です」

「ああそうだね、確かに違くないよ。私たちは提督が隠したその善心を信じて疑わなかった。だけど、それが嘘偽りのモノだったとしても私たちにとっては嬉しかったんだよ」

「だから愚かなのですよ。傷を負った事で心の拠り所が全く無いから虚偽の塊に固執し依存していく。周りに頼れる者もいない、信じられる者もいない。そして不意に優しくしてもらった他人を疑わず信じられるようになる。それはやがて揚げ足を取るような事になるとも知らずに……——」

反論した飛龍を更に反論して鹿島は艦娘達を見下すかのように蔑んだ。

直後に鹿島は意識を失っている提督を奪い返そうと瞬時に身体を動かす。

しかし鹿島を見張っていた『緞』木曾がそれよりも速く前に出て鹿島の右の手甲を軍刀で貫き、杭を打つように鹿島を床に叩きつけた。

艦娘達は全員で床に倒れる鹿島を二度と立ち上がらせないように押さえつける。

「そう簡単には行かせないぞ鹿島」

「私たち二人がいる以上は逃げれないと思って」

護神厄討艦隊のメンバーである『緞』木曾と『黝』蒼龍は刹那とも思える鹿島の動きを見逃さなかった。軍刀で貫かれた右手の甲から赤く血が手袋に滲んでいく。

流星にこの二人がいると敵わないのか鹿島は大人しく抵抗もせず床に張り付いていた。

「いやはや手厳しいですね〜ここまでしますか？ もうちよつと優し

くしてもらってもいいんですよ?」

「お前だからここままでしてんだよ。暴れると分かっている猛獣をお前は野放しにでもするのかわ?」

艦娘達に押さえつけられても鹿島は余裕の表情を崩さずに『縊』^{レイ}木曾に話しかけた。通常であれば鹿島にとつて絶望的な状況なはずが意にも介せず提督の方へ視線をひたすら向けている。面倒だと感じたのか鹿島は軽いため息を吐いて呟いた。

「そうですね……ならば私はどう言いましょうか」

「っ……う?」

「それは……」

「——私を抑え込むには人数が全く足りませ〜ん♡」

一瞬で鹿島の身体から銀色の光が放出し光に包まれた。

直後、仮執務室が大爆発。

爆煙の中から提督を抱きかかえた鹿島が飛び出して現れた。地上三階から地面に着地してそのまま広場へ走っていく。

「っ——」

右側の建物の死角から天龍が現れ、刀が首の目の前まで迫り来た。

鹿島は背後に跳躍して回避。

刀の先を強く踏んで地面に埋め込ませる。

力に連られて体勢を崩した天龍。

鹿島は前蹴りで顔面ごと天龍を蹴り飛ばした。

急いで港に繋がる広場へ向かう鹿島。

提督を奪い返そうと艦娘達がぞくぞくと現れる。

鹿島の行く先に上空から飛んできた金剛が行く手を阻んだ。

「提督を!!」

走り来る鹿島を迎撃する為に金剛は右腕を後方へ引いて振りかぶる。

殴る体勢となって踏み込んだ地面にヒビが割れ、金剛は急発進。対する鹿島は勢いを止めずに前進する。

天龍を蹴り飛ばしたように前蹴りで左足を前に突き出した。

「返して!!」

金剛の右拳と鹿島の左足が衝突。

衝撃で旋風が発生し、舗装された地面が瓦礫となって舞い上がった。

鹿島は足の裏についた金剛の右拳を真下へ蹴り落とす。

体勢が崩れた金剛を残っていた右足で蹴り飛ばした。

着地狩りを狙った球磨と多摩が拳を出して鹿島を挟み撃ち。

鹿島は提督を上へ持ち上げて低空で身体を捻らせ回避。

細い身体で回避させられた球磨と多摩の拳がすれ違う。

その拳と拳の間に鹿島は着地。

身体を駒のように回転させて球磨と多摩を蹴り飛ばした。

鹿島はようやく広場へ到着。

海へ繋がる港に一直線で向かった。

だが二人の異彩な眼からは簡単に逃れられない。

鹿島の背後に強烈な殺意を放つ翡翠色の眼が輝いた。

翡翠色の光を身体に纏う『緜』は軍刀で一閃を解き放つ。

翡翠色に輝く軍刀の横薙ぎ払いが背後を見せる鹿島を襲った。

横薙ぎ払いで地面が剥がれ、突風が吹き荒れる。

鹿島は提督を両腕で抱えながら体勢を低くして回避。

そして前傾姿勢になりつつ身体の向きを背後にいる『緜』へ変えた。

『緜』木曾は容赦なく次の攻撃を仕掛ける。

薙ぎ払った軍刀を天に立たせ、腕や拳に力を込めて振り下ろした。

鹿島は即座に後方へ軽く跳躍して回避。

『緜』木曾は地面に埋まった軍刀を前進させ、地面を穿ちながら逃げる鹿島へ追い打ちを仕掛けた。

そして地面の瓦礫ごと斬り上げ、更に左右斜めに二回薙ぎ払う。

後方へ後方へと回避し続ける鹿島。

その時飛んだ瓦礫の一部が鹿島の足元に。

着地した鹿島は足を踏み外した。

『緜』木曾はその隙を逃さない。

跳躍して身体を回転させ、もう一度軍刀を振り下ろした。

鹿島は右腕の裾から隠していた脇差を召喚。

無理矢理体勢を変えながら逆手持ちに切り替えて『緞』木曾の軍刀を受け止めた。

近接武器同士の衝突による衝撃が地面に流れ、大地が隆起する。

「なんつーモノをツ……!!」

刃渡り百二十センチメートルの軍刀を物差し程度の脇差で止められた『緞』木曾。

刃同士が火花を散らして酷く擦れ合う。

流石に脇差では物足りないのか鹿島の腕は目に見えるほど震えていた。

直後、上に気付いた鹿島は『緞』木曾の軍刀を受け流し、後方へまた跳躍。

先程までいた鹿島の地点で大爆発が起きた。

上空には蝙蝠のように飛び交う艦載機の集団。広場隣の寮の屋上で『黝』蒼龍が航空隊を発艦させていた。

「全く……貴女達は提督ごと私を殺す気なんですか？」

遮蔽物の無い広々とした広場の中心で鹿島は周りを見渡す。

事前に『緞』木曾達が計画していたのだろうか、続々と艦装を展開した艦娘達が現れ鹿島を囲っていた。

鹿島は翔鶴達との戦争で提督と共に艦娘達に囲まれた時の事を思い出す。

鹿島は深くため息を吐いて自身を襲ってくる艦娘達に話し掛けた。

「提督を奪い返すとはいえ直接攻撃を仕掛けるのは些か感心しませんね。それとも何ですか？ 提督の正体が深海棲艦の提督だから恨み晴らしにいつその事提督も殺そうと思いませんか？」

「違う……！ 殺すつもりはないよ……確かに言いたい事とか聞きたい事は山ほどある……直接提督の口で本心を言っしてほしい。だから、返して……私たちの提督を……！」

「答えになってません。記憶の矛盾がある以上は対話すら不可能だと何故分からないのですか。それに提督はモノではありませんよ。勝

手に私有化するのには止めていただけませんかね。心底腹が立ちます」
提督を両腕で抱えているのにも関わらず近接攻撃を仕掛ける艦娘達を見て違和感を覚えた鹿島は苛つきを抑えながら理由を求め、代わりに鈴谷が理由を答えるも鹿島は強く否定して脅迫するかのよう
に脇差を鈴谷に向けた。

「おや着きましたね」

不意に聞いた事のない声が鹿島と艦娘達の会話を遮って聞こえた。
声の方向へ誰もが振り向く。

「船……？」

「いつの間に……？」

広場に繋がる港に見知らぬ小さなドライブ船が一隻停泊していた。
港には何一つ無かったはずがいつの間にか以前からそこにあったか
のように佇んでいた。

あまりの情報量に艦娘達は状況把握が遅れる。

何故このタイミングで不可解な現象が起きているのか理解し難い
状況だった。

「なるほど、ここが潮岬町鎮守府ですか。まあ夜なんで何も見えませ
んが、懐かしいですね」

ドライブ船からゆっくりと現れた人物は潮岬町鎮守府を訪れる為
に来たようで何かと珍しがっている。暗い夜の影響で明確な姿が分
からず、艦娘達は砲口は向けずとも警戒を維持した。

「ッ!? お前はッ……!!!」

「まさか!!? 鹿島ア!!!」

暗闇から現れたその人物を見て瑞鶴は瞳孔を開いて敵視し、『緞』木
曾は鹿島の名を叫んで怒りを露わにした。鹿島は提督を抱きかかえ
たまま何食わぬ顔で『緞』木曾の怒号を無視し、つまらなそうにその
人物を睥睨する。

周辺の艦娘達も驚きの表情を隠せなずにいたが、恐るべき敵だと把
握して一斉に砲口をその人物に向けた。

そこにいたのは――、

「いやはや皆さんお初お目にかかります。私は●●……いや今は集積地棲姫……周りからは『ディアボルフ貪狼』と呼ばれています」

災厄の側近、そして神出鬼没の大元凶。

「以後、お見知りおきを……」

『ディアボルフ貪狼』集積地棲姫だった。

179. 世界を憎めば

「以後、お見知りおきを……」

鹿島と艦娘達の提督の奪い合いが勃発している最中、突如現れた災厄の側近『貪狼』集積地棲姫。七壊星ナンバーワンの側近が潮岬町鎮守府という地方の鎮守府に現れるのは誰も予測出来なかった。

白く長い三つ編みになった白髪に深海棲艦唯一の青い眼鏡、双方にある黒く巨大な鋼鉄の籠手。

眼は闇夜の深淵に引きずり込まれるかのように深く黒かった。

「飛んだっ!?!」

「しまった!!!」

鹿島は全員の視線が集積地棲姫に引かれている隙を見て、艦娘達の包囲網を大跳躍して脱出。

集積地棲姫の手元に集合して着地し、顔を合わせずに話し掛けた。

「回収しました●ぐろ博士」

「よくやりました。船の中にベッドと毛布がありますので体調を崩さぬよう、そちらに寝かしておいてください」

「かしこまりました」

「待て鹿島!!」

鹿島は提督を連れてこれた事を集積地棲姫に報告し、指示通り船の中へ避難させようとした。しかし『緞』木曾が奥へ逃げていく鹿島を呼び止める。鹿島はゆっくりと身体を『緞』木曾の方へ向けて無表情の顔を見せた。

「これはどういう事だツツ!!! 答えろ!!!」

「どういう事も何も、見れば分かる事ではありませんか? 私は深海棲艦と繋がっていた、それだけです」

「……いつの間に繋がったの? 艦隊に入った後から?」

『緞』木曾の元に集合した『魈』蒼龍が鹿島を睨みながら問い出した。

鹿島が深海棲艦と繋がっている可能性は二人とも把握していたが、やりにもよって繋がっている深海棲艦が『貪狼』集積地棲姫だとは夢にも思わなかった。

護神厄討艦隊に所属する半数の艦娘が極秘に最終討伐目標個体として恨み憎み狙い続けている悪魔の如き存在。

この潮岬町鎮守府に突然来た訳も踏まえて『黝』蒼龍は持ち前の冷静さを保って警戒した。

「……入る前からです。入った時からはずっと貴女達を監視していました」

「元々鹿島さんは私の助手ですよ。いやはや鹿島さんには随分と働いてくださいました、それはもう感謝してもしきれない程に。貴方達二人の情報を記録するのは大変ですからね、今後の活動にとっても役立ちました」

鹿島は護神厄討艦隊に所属する前よりも既に集積地棲姫と繋がっていた。

鹿島が艦隊に所属したのは今から約二年前、護神厄討艦隊の艦娘の情報記録と提督の回収という二つの目的を達成する為に■元帥に直接交渉を仕掛けて所属する事に成功。

その後は練習巡洋艦として訓練官を務めながら各鎮守府を転々とし、同時に各鎮守府に所属する護神厄討艦隊の艦娘の情報を記録する為に動いていた。

また提督を回収する為に各鎮守府の監視目的で潮岬町鎮守府に潜入、提督の動向を伺いながら機会を待っていた。

「貴様ツ……!! 今更現れたと思えば——」「『緞』落ち着いて。気持ち分かるけど今は状況把握しよう。それに……奴がどんな存在か、分かるよね」

怒りが抑えられない『緞』木曾は軍刀を集積地棲姫に向けて威嚇する。

そこに庇うようにして『黝』蒼龍が腕を広げて前に出た。『緞』木曾本人が集積地棲姫に個人的な恨みがある事を知っている『黝』蒼龍は状況把握の為に落ち着かせた。

「この鎮守府の皆さんとは初対面ですかね。これからどうぞよろしくお願います」

「貴方が……あの……集積地棲姫……?」

「はい！ 私が正真正銘たった一人の七壊星『貪狼』ディアボルフ集積地棲姫ですよ。よろしくお願いしますね」

集積地棲姫は律儀にも潮岬町鎮守府の艦娘達に自己紹介と挨拶をして頭を下げた。

瑞鶴が確認の為にもう一度名前を呼んで本当かどうか確かめる。

集積地棲姫はぎこちない笑顔で自身が集積地棲姫である事を告白し、全く敵意のない姿を見せた。友好的に接してくる集積地棲姫の前に艦娘達は動揺の声が止まらない。

「ここへ何しに来た……！」

「金髪の子からもそうですが、鹿島さんに面白い娘達がいると聞いて少し興味が湧きましてですね、この子の回収と共にこの鎮守府を訪れたんですよ。確か……私を探している娘がいたとか何とか」

長門が敵視した表情で集積地棲姫を警戒し、何故ここへ来たのか問い掛ける。

集積地棲姫は鹿島から聞いた情報に興味が増え、わざわざ足を運んでこの潮岬町鎮守府を訪れたらしい。

自分を探し求めている艦娘がいると聞いて集積地棲姫はその艦娘を探すように辺りを見渡していた。艦娘達は心当たりのある人物の方向へゆつくりと振り向く。

「瑞鶴!!」

「待て！ 早まるな瑞鶴!!」

それを聞いた瑞鶴は睨みつけるような鋭い目を崩さず、早歩きで集積地棲姫の目の前まで近寄る。集積地棲姫に近づく度に足や手に入る力の入れ方が物凄く強くなっているのが見てわかった。

瑞鶴にとっては喉から手が出るほど探し求めているモノであり、様々な感情が渦巻く興奮を抑えながらも集積地棲姫の目の前まで辿り着く。

集積地棲姫の身長は瑞鶴よりも遥かに大きく軽く二メートル以上は超えていた。

両腕に構える巨大な黒い鋼鉄の籠手は瑞鶴の上半身を覆うほどで友好的な振舞いを払うような威圧感を感じた。

「私を探しているのは貴女ですか？」

「ええ……そうよ」

「それはお疲れ様です。さて、要件は何でしょうか？」

「……うちの翔鶴姉を……元に戻してほしい」

集積地棲姫とようやく対面できた瑞鶴は真剣な表情で対話を試みる。

集積地棲姫は自分を探していた瑞鶴に労りの言葉を入れて要件は何かと素直に聞いた。

瑞鶴の願いは勿論、空母水鬼と一体化した姉の翔鶴を元に戻す事。

飛行場姫の情報でこの『貪^{ディアボルフ}狼』集積地棲姫であれば何か知っているかもしれないという微かな希望を胸に瑞鶴は表情一つ変えず集積地棲姫を見上げる。

戦闘になるという事は覚悟していたつもりが相手があまりにも友好的に接してくる事に瑞鶴は底知れない不安を感じていた。

「翔鶴を元に戻してほしい、ですか……因みにですが何かあったんでしょうか？」

「あの男の所為で翔鶴姉の身体の中に空母水鬼が潜んでたのよ。飛行場姫からアンタなら何か分かるかもしれないって聞いた……どうなのよ」

集積地棲姫は詳細を知る為にもう一度質問する。瑞鶴は姉の翔鶴がどうい存在になってしまったのかを簡潔に説明した。

もし敵対した時に合わせてすぐ攻撃できるように艦装を構える準備は怠らない。瑞鶴は『黝^{アオグロ}』蒼龍に貸してもらった夜間攻撃が可能なた山一二型甲改を既に発艦させて集積地棲姫の動向を伺っていた。

「ああなるほど……そういう事ですか。いいですよ、優先項目として考えておきましょう」

「本当に……かしら？」

「安心してください、私は嘘をつきませんよ」

瑞鶴の願い事を集積地棲姫は何事もなく素直に受け入れた。

てつきり理不尽な条件や手段で交渉するかと思っていた瑞鶴は内心驚くも真剣な表情は動かさなかった。

だが深海棲艦という敵且つ七壊星ナンバーワンの側近という肩書きがある以上はどうしても信じきるには不安な要素があまりにも多過ぎる。何か企んでいる可能性すらある以上は簡単に信じる事を瑞鶴はしなかった。

「鹿島、翔鶴の情報について詳しく説明できますか？ もしくは資料とかあれば良いのですが」

「こちらにまとめております。ですがこの状況下でじっくり読むには時間が足りないかと」

「問題ありませんよ。大まかな情報さえあればある程度のプロセスは構築できます」

助手の鹿島に翔鶴の情報について尋ねると鹿島は正装の中から事前にまとめておいた翔鶴の経歴や戦績についての資料を提供した。集積地棲姫は巨大な鋼鉄の籠手から白い肌を露わにした素手でその資料を手に取り、青い眼鏡の縁に少し触れてまじまじと読んでいく。「……大体は把握出来ました。戻すには少々二週間ほど時間がかかりますがそれでも大丈夫でしょうか？」

「直接私も立ち会う事とかできないの？ あと何処で翔鶴姉を戻すのかも知りたい……正直な話、アンタの言ってる事がさつきから胡散臭く感じるんだけど。アンタがそう簡単に翔鶴姉を戻すとは思えない」「それは難しいですね。私が軍や艦娘と繋がってる所を他の深海棲艦に見られたらお互いに色々と手間が掛かるので……それに胡散臭く感じるのもお互い敵対しているので仕方ないかと思いますが私は絶対に嘘はつきませんよ。何せ愛する艦娘の願い事です、力のある限りは……協力したい」

集積地棲姫は鹿島から貰った資料を返して翔鶴を元に戻す事について前向きに瑞鶴へ伝えた。

あまりにもスムーズに進み過ぎている状況にどうも信じ難い瑞鶴は翔鶴を元に戻す事について疑心暗鬼に聞いていく。

集積地棲姫はお互いにこの事が公に晒されれば面倒になるのを察してか直接立ち会う事や方法を教えなかった。自身の問いに全く答えなかった所為で余計に怪しく感じた瑞鶴はある艦娘の名前を呼ぶ。

「青葉……どうなの？」

「嘘は、ついてません……全て本当です……」

「なら……いいんだけど」

集積地棲姫の言っている事は全て紛れもなく本当で互いの立場が面倒になる事や艦娘を愛している事は本気のようにらしい。

嘘のようで嘘じゃない口が達者な集積地棲姫がどういう立場なのか見分けるのに困惑するばかりだった。

突然不意に現れたと思えば大した敵意は無く、ましてや敵であるはずの艦娘達の前で友好的に接してくる始末。青葉の言っている事すら嘘に思えるほど信じ難い事だった。

「さて……大体の目星はつきました。帰りましょうか」

「分かりまし——」「ちよつと待てよ」

集積地棲姫と提督を抱きかかえた鹿島は話が着いたのを把握して潮岬町鎮守府から去ろうとする。

その時二人を呼び止める声が聞こえた。

集積地棲姫と鹿島は同時にゆっくりと振り向く。

「さりげなく帰ろうとしてんじゃねえよ……返せ、提督を」

「そう簡単に逃がさないわよ……鹿島……！」

天龍や五十鈴が艦装を展開した状態で砲口を向けて二人を呼び止めていた。

瑞鶴と話が済んだのをいい事にさりげなく帰ろうとした集積地棲姫と鹿島を艦娘達は逃さなかった。

あれだけ友好的に接してこようとも艦娘達は感覚を研ぎ澄まして心が揺らぐ事は決してなく、提督を奪い返したいという熱意を持っている。鋭い眼を光らせる艦娘達を見て集積地棲姫は不思議がりながらも状況を把握して鹿島に問い掛けた。

「おやおやおやら殺気立っていますね。鹿島、どうしますか？ 貴女の願いの為です、私も協力しますよ」

「できれば追い払いたいのですが、この状態で戦うのは少しつらいです。手伝ってくださいますか？」

「構いませんよ。貴女の願いの事です、貴女が出なくても私が相手をし

「ましようか」

「っ……!!」

鹿島は提督を連れ去ろうとする事を確固たる意思で決して止めようとはせず、力づくでも艦娘達を払い除けるつもりでいる。集積地棲姫も鹿島の願いを叶える為か積極的に協力して艦娘達の前に躍り出た。

艦娘達は最大限の警戒状態で一斉に身構える。

相手は護神厄討艦隊の艦娘と余裕で戦える底知れない戦闘能力を持つ『鏖』シロガネ鹿島と七壊星の中でもナンバーワンとされる【天枢】トウキョク中枢棲姫の側近であり正体不明の異質な存在、『貪狼』デアボルフ集積地棲姫。

言うまでもなく力の差は歴然で返り討ちにされる事すら簡単に想像できるような威圧感と緊張が辺り一帯を覆っていた。まるで身体全体の細胞が恐怖に怯えて震えているかのように、全身の危険を感じ取って警告音を発していた。

「ほう……中々素晴らしい目をしていますね。様々な感情が入り浸っている……知りたいのですが鹿島、この娘達の成長具合はどうですか？」

「最近始めたばかりですので先へ行くには程遠いですが、成長の眼差しは十分あるかと」

「なるほど……少し興味がありますね。試してみましようか」

集積地棲姫は敵視して警戒する艦娘達を見渡して、艦娘達が放つ感情の物珍しさに興味を持ち始めた。鹿島から特殊訓練による艦娘達の成長具合を聞いて集積地棲姫は顎に触れて顔を上に向け、脳を働かせるような考え込む仕草をする。

この多勢に無勢な状況下でありながら余裕を保って考えている集積地棲姫に苛つきを感じざるを得なかった。

「皆さん！ 私と一度、戦ってみませんか？」

「……は？」

「え……？」

「その言葉通りです。私と戦ってみましよう！ もし貴女達が私を殺す事が出来ればこの子は返してあげます。逆に殺せなくても時間を

置いて返してあげます。瑞鶴さん、貴女も参加して構いませんよ？
攻撃したからといって先程の願い事を無かった事にはしないので、
どんどん来てください」

集積地棲姫は警戒している艦娘達に対して期待に胸を膨らませて
戦闘を申し込んだ。

当然艦娘達は有り得ない行動に動揺して焦燥と困惑の感情で溢れ
ている。

提督を連れ去る事は簡単だと遠回しに言われているような気がし
た。

「ふざけるな……!!」

「っ?」

「またアナタはそうやって私たちの目的につけ込み、己の欲求を満た
す為だけに戦闘へ誘惑させる……! アナタがよくやる常套手段で
す、一度ならず二度までも……! 今更引つ掛かると思ってるのです
か!!」

不知火が珍しく怒りを露わにして心の奥底から湧き出る憎悪と焦
燥を集積地棲姫に声を張って訴える。一度遭遇して体験した事があ
るのか、今度こそは絶対に阻止してみせると言っているように見え
た。

『緞^{レイ}』木曾や不知火の反応を見る限りではこの集積地棲姫が如何に
度し難い存在かなど容易に理解できる。

意味もなく戦おうとすれば相手の思う壺だろう。

艦娘達は集積地棲姫の思い通りにはさせないと威嚇した。

「いえ私は本当に返そうと思ってるのですが……こればかりは
証明も難しそうですね……」

「これ以上は仕方ないかと……成長具合を確かめたいのなら私から言
いますよ」

集積地棲姫は威嚇する艦娘達に臆して鋼鉄の両手を広げて見せな
がら決して敵意は無いとアピールして一歩後退する。

本心を伝えているつもりがこの容姿では伝わらないと分かって半
ば諦めかけていた。

集積地棲姫の目的を理解していた鹿島は戦闘意欲が増幅できるよ
うに出で艦娘達に話し掛ける。

「皆さん、艦娘ってどうやって造られているか知ってますか？」

「戯言に付き合うつもりは無い……!!」

鹿島の問い掛けに長門は強く否定する。

「まあまあいいじゃないですか。艦娘が生まれる源……アンドロイド機械人形？

宇宙人？ 正解はですね……」

砲撃してきそうな艦娘達を前に鹿島は軽くあしらって宥めていく。

艦娘の源素は何なのか適当に話していった。

「意外に答えは簡単なんですよ、艦娘は元々……」

「——人間を元に造られています」

「そしてその艦娘を開発したのは、ぐろ博士……ここにいる『デアアボルフ貪狼』集
積地棲姫さんです、以上」

「え、そこまで言います？」

鹿島は艦娘の源素を簡単に伝えて後ろへ振り向き、背後を見せて集
積地棲姫の傍に行く。

鹿島の話聞いて艦娘達は魂が抜けたかのように放心していた。

その場に佇んだまま一步も動かずに艦娘の事実を受け止めている。

「……では私たちは先に」

「は、はい。気を付けてくださいね」

艦娘達が全く動かない事を他所に鹿島は提督を抱きかかえて鎮守
府から去ろうとする。

「……ッ!!? 待てッ!!」

ハッと気付いてた我に返った不知火は逃げようとする鹿島を呼び
止めた。

しかし鹿島は不知火の言葉に耳を傾けず、対岸まで提督を起こさな
いようにゆつくり歩いていく。

「司令を……!!」

その時不知火は誰よりも先に身体を動かした。

「返せっッッッ!!!」

不知火は激昂して突進。

殴るようにして鹿島に砲撃を仕掛けた。

凄まじい大爆発が起きて空に届きそうな巨大な黒煙を生む。

巨大な黒煙の中から集積地棲姫が巨大な鋼鉄の籠手を前に出して歩きながら現れた。

不知火の砲撃を庇ってわざと受け止めていたようだ。

不知火は突進した勢いで集積地棲姫にドロップキック。

集積地棲姫は不知火の攻撃を鋼鉄の籠手で受け止めるも反動すらなく微動だにしなかった。

「流石はあの子の艦娘です。鍛えられていますね」

「チッ……!!」

「もっと来てください！ まだまだこれからです、貴女達の力を見てみたい……もつと……!! もつと……!! わた——」

集積地棲姫が話している最中に不知火は鋼鉄の籠手を蹴って空中で一回転、着地。

隙だらけの顔を回し蹴りで蹴り飛ばした。

海上まで蹴り飛ばされた集積地棲姫はさぞ当たり前のように着水して浮かぶ。

そこに覆い被さるようにして天龍が刀を天に突き立て、一刀両断の如く振り下ろした。

巨大な鋼鉄の籠手で防御し、周囲に水柱が立ち上る。

鉄同士が接触し合い、水の壁の中で火花が散った。

天龍は無理矢理刀を擦れさせ、次の攻撃に移る。

刀を後方まで引いて渾身の横薙ぎを食らわせた。

受け止めるので精一杯だった集積地棲姫は衝撃に耐えきれず吹き飛ばされる。

後方へ海面を引き摺りながら後退する集積地棲姫へ跳躍した夕立や青葉が砲撃。

雨となつて降り注ぐ無数の砲弾は集積地棲姫に牙を剥く。
集積地棲姫に数発着弾、他は海面に着弾して水柱が大きく上がる。
交差する爆煙や水柱を斬るかのように集積地棲姫は巨大な鋼鉄の
籠手で払って現れた。

「後ろですか——」

背後に回っていた長門に気付くも防ぐには遅い。

背中を思いつ切り殴られた集積地棲姫は口から大量の血を吐いて
殴り飛ばされた。

海面に倒れ込む集積地棲姫を艦娘達は隙さえ逃さない。

立ち上がろうとする集積地棲姫に砲撃を食らわせて怯ませた。

体勢が不安定になった集積地棲姫の元へ顔面を叩き殴ろうと加古
が現れる。

集積地棲姫は巨大な鋼鉄の籠手を駆使して片手で砲撃を阻止して、
もう片手で加古の殴打を受け止めた。

「素晴らしい……ここまで成長しているんですね……」

加古は反撃を予測して一旦集積地棲姫から離れる。

集積地棲姫は歪んだ笑みを浮かべてひたすら笑っていた。

「もっと見せてください……!」

集積地棲姫の目の前には憎悪の眼差しで襲い掛かる艦娘達。

集積地棲姫は臆せず艦娘達を歓迎した。

「何が……どういう事だ……?」

「次から次へと……何が何だか……」

「狼狽えるな!! 俺達も行くぞ!!」

「やっちゃったからにはしようがないか」

「おつと行かせませんよ」

磯風や照月は次から次へと告げられる事実の情報量の多さに処理
し切れず戸惑っていた。『緋』^{レイ}木曾『黝』^{アオグロ}蒼龍が戦闘中の潮岬町鎮守府
の艦娘達と合流しようとして声を掛ける。

そこに巨大な黒煙の根元から手を払って鹿島がゆっくりと歩いて
現れた。

よく見れば抱えていた提督の姿がどこにもいない。

「貴女達はここにいた方が懸命かと」

「鹿島……!!」

「提督がない!?!」

「どういう事ですか鹿島さん!! 何がどうなってるんですか!?!」

「普通の艦娘であれば理解し難いのも無理はありません……あの方は

●^{くろ}博士。この世界の概念全てを変えた張本人です」

潮岬町鎮守府の艦娘達と集積地棲姫が戦っているのを背景に鹿島は艦娘の真実を語った。

金剛が吼えながら急発進急加速。

砲撃を巨大な鋼鉄の籠手を交差させ防御する集積地棲姫へ体当たり。

物凄い衝撃が集積地棲姫に伝わり、堅い防御が崩れた。

隙だらけの脇腹に目掛けて金剛は渾身の連続殴打を数発直撃させ殴り飛ばす。

「その●^{くろ}博士というのは……あの集積地棲姫の事、なのか……?」

「はいそうです。約十五年前に●^{くろ}博士は世界各国の軍と協力しい、次世代に継げる新たな兵器として人間をベースにした自律型海上生体兵器、仮称 “艦娘” を開発しました」

集積地棲姫の頭上から木曾がサーベルを突いて落下。

それに気付くには遅く、集積地棲姫は防御する暇なく腹にサーベルが突き刺さった。

落下の衝撃で海面に叩きつけられる。

その直後に集積地棲姫は無理矢理身体を起き上がらせ、身体を回転する。

凄まじい遠心力で木曾ごと払い飛ばした。

「艦娘とは文字通り艦の姿を模した人間の事を意味し、砲塔や魚雷管を手や足に兼ね備えた対海上に特化した兵器です。当初突然現れたその存在は今に至るまでその力を行使して海上の脅威から人類を守っていききました」

ダメージを負い続けて集積地棲姫は口から大量の血を吐き出す。

隙を見逃さない川内は事前に放っていた魚雷を命中しつつ急加速

して接近。

直撃した事で水柱が立ち上り、視界が遮られた集積地棲姫。

そこに水柱に穴を開けて突き蹴りをする川内が現れる。

巨大な鋼鉄の籠手に直撃して海面に打ち付けられた。

怯んだ集積地棲姫に目掛けて左足の後ろ回し蹴りで顔面を蹴撃。

川内は身体を捻って残った右足の回し蹴りでもう一度集積地棲姫の顔面を蹴る。

怯み続ける集積地棲姫よりも先に身体を駒のように回転し、渾身の回し蹴りで顔面に直撃させて蹴り飛ばした。

すかさず川内は右腕の機装にて追い打ちの砲撃をする。

「しかしその正体は人間をベースに造られた改造人間。予め取り出されたエネルギー核を身体の中に埋め込み融合させる事で艦娘という兵器が造られていきます。融合した瞬間に脳や内臓、身体全体の細胞や遺伝子、染色体などをありとあらゆる人間を構成するモノ全てを再構成再構築し、その身体に適した艦種を融合したエネルギー核が見分け、艦娘が造られます」

身体を仰け反らせながらも集積地棲姫は転倒を防いで起き上がる。

その瞬間、真正面から球磨と多摩の砲撃が顔面と両肩に着弾。

球磨と多摩の間をすり抜けた足柄が集積地棲姫に接近する。

腹を右拳で殴打した後に体勢を低くして集積地棲姫を空中へ蹴り飛ばした。

「年齢は制限されませんが性別は関係ありません。エネルギー核が融合に成功すれば身体の全てが再構成されるので本人の記憶は消去され、また元々負っていた怪我や患っていた病気なども全て無かった事になります」

「それで……周りの人達はどうするんだ……!?!」

「関係者の人達には本人が承諾した事を含めて軍が予め本人が艦娘になる事を告げ、双方が合意した上でそれぞれ誓約書を記入する事で契約が成立します。その際に艦娘となる本人は死亡した事になるので保険金や軍から多額の協力金や報酬が支給される為、公になる事は少ないです。ですが完全に抑える事は出来ず、艦娘が元々人間である事

を知る者達が漏らした事と何者かによって艦娘を無碍に扱う海軍の醜態が晒された事で艦娘は人間として扱うべきだと擁護する派閥が誕生しました。それがいわゆる今の人間派です」

集積地棲姫の飛ばされていく先には長門が殴り構えていた。日向と扶桑が集積地棲姫の先を予想して長門を投げ飛ばしていたようだ。

血を吐きながら悶える集積地棲姫は防御体勢が間に合わない。

長門は後方に砲口を向けて砲撃。

その衝撃と反動で集積地棲姫目掛けて空中突撃を仕掛けた。

長門は右拳に力を込め砲口を集積地棲姫の方へ向ける。

勢いよく落下して集積地棲姫の背面に渾身の殴打を与えた。

「つまり要約すれば艦娘である私達は元々は人間だったという事です」

二人は隕石のように海面に衝突。

衝撃で間欠泉のような水柱が立ち上り、それを囲うように水しぶきが周囲に飛び散った。

「ハア……ハア……い」

集積地棲姫を殴り飛ばした長門は息切れしながら状態を確認する。

砲撃の衝撃による落下のスピードと海面激突直後の全門斉射であればダメージは与えられたと思っていた。

殴った右拳にはまだ集積地棲姫の身体に触れている感覚がある上に動いているような仕草は一コンマたりとも全く無い。

「倒しましたか……」

鹿島が戦闘が終わったのを見て長門の方へ振り向く。

ようやく姿を確認できるまで爆煙が過ぎ去ると集積地棲姫は至る所に大量の血を流して意識を失っていた。長門の右拳が集積地棲姫の背中にめり込んで内部を歪ませるほどの衝撃で大量の血液が花の形を成している。

「っ……っ」

「ッ!! くそッッ!!」

潮岬町鎮守府の艦娘達に致命傷を受けながらも集積地棲姫は僅か

に息を取り戻していた。

少し身体を動かしたのを見て長門は悔し声を上げてもう一度全門斉射。

二度と起き上がらないように殺す気で何度も砲撃し続ける。爆煙が更に爆煙を払って生み出し続け、海面の波が荒くざわついた。

「ハア……ハア……弾切れか……？」

集積地棲姫に何度も零距离での全門斉射をし続けた結果、長門は全ての弾薬を使い切った。砲撃を受け続けた集積地棲姫は見るに堪えない姿で背骨や内蔵の一部が露出していた。

流星にここまでいけば死んだも同然と思いたかった長門。

七壊星故の謎能力がある以上は生き返る可能性があるかもしれないと油断出来なかった。

「素晴らしい」

「ッ!!？」

集積地棲姫は血が混じった声で一言長門を褒めて起き上がろうとする。

起き上がった瞬間に長門は腰を浮かせられ、背後に海面へ尻もちを着いて転倒した。

大量に出血しながらも集積地棲姫は震える足で身体を支えて立ち上がる。

「これほどまでに成長を一気に見られたのは初めてでした……実に素晴らしい……」

ひび割れた眼鏡と血まみれの顔面で長門を見続ける集積地棲姫。口から大量の血を吐きながらも一向に褒めるのを止めなかった。

長門は素早く立ち上がって後方へ跳躍し、集積地棲姫と間合いを確保する。

「艦娘の成長は無限大……様々な刺激を与えるだけで普通の艦娘さえも超越した力を身につけられる……流星は私が開発した兵器です……開発した兵器に殺されるなどこれほど幸せな事は無い……」

金剛や木曾は集積地棲姫がこれから起こす行動を予測して誰より

も早く急発進した。

後に続いて天龍や加古、朝潮達や比叡達が集積地棲姫の元へ向かう。

一番近くにいた長門も残りの燃料を消費して不穏な動きをしかけた集積地棲姫に殴り掛かった。

「アイラギ調節」……」

その言葉を発するまでの瞬間、一瞬時間が遅くなっているのが分かった。

いや集積地棲姫の行動があまりにも早すぎて、周囲の時間がついていけなくなっていた。

集積地棲姫の目の前には放たれた雨のような無数の砲弾と自身を殺そうと襲いかかる多勢の艦娘達。

回避は間に合わく直撃は間逃れず、受ければ先程の大怪我よりも凄まじくなるだろう。

だが――、

「博士……いや、『デアアボルウ貪狼』集積地棲姫が持つ能力って何だと思えますか？」

鹿島がふと問い掛ける。

その直後に集積地棲姫を中心に無数の砲弾が着弾し、巨大な爆煙が立ち上るほどの大爆発を起こした。

その凄まじい爆発で押し出された空気が広範囲に白く広がっている。

波は左右上下に荒れ果て、陸は地震のように揺れた。

「っ!!?」

「何ッッ!!?」

最上や加古、攻撃を仕掛けた艦娘達全員が驚きの声を上げる。

艦娘達の目に映っていたのは完全無傷の集積地棲姫が立っていた。

先程までに最上達や金剛に受けた攻撃による大怪我は何事も無かったかのように修復されており、砲撃による損害は全く無かった。

更には長門や金剛の拳を受け止め、天龍や木曾の近接武器の剣先が全く通っていなかったのだ。

「瞬時に身体を再生させる程の【耐久】？ 違います。鋼鉄やダイヤモンドにも勝る程の【装甲】？ それも違います。数秒先の未来をあたかも見れてしまう程の【回避】？ これも違います。『貪狼』ディアボルフ集積地棲姫の本当の力とは……」

鹿島はある艦娘達の力を例に取り上げて否定した。

艦娘には【耐久】や【装甲】などの予め決められた性質がある。

それ等を深海棲艦にもあると意味を含めて『貪狼』ディアボルフ集積地棲姫が持つ力の恐ろしさを誇張して伝えた。

「全ての性質に流れるエネルギー効率を自由に操れる力です」

集積地棲姫は攻撃を仕掛けた艦娘達の前で満面の笑みを見せる。

そして身体を一瞬紅黒く光らせた。

「貴女達には成長の眼差しがある……もう少し、試してみまじょうか……」

180. 君に憎まれて

突如潮岬町鎮守府の一带が地震のように揺れ始める。

雑木林が恐怖に怯えるが如くざわつき、枝に止まっていた鳥達が次々と逃げていった。

広場の舗装された地面は徐々にひび割れていき、海面は行き場を失っている波達が暴れている。

身体に何倍もの重りを身につけられるプレッシャーが肌をピリピリと感じさせていた。

まるでそれは終末の鐘を鳴らすかのように恐ろしく、悍ましく、心の底に眠る恐怖という感情を抉り取り出されているような感覚だった。

「逃げる!! お前らアアア!!!」

『緞』木曾の必死の勧告も虚しく、攻撃をした艦娘達は『貪狼』集積地棲姫に全員吹き飛ばされた。

巨大な鋼鉄の籠手を海面に叩き付け衝撃で吹き飛ばしていたのだ。

圧倒的な緊張を前に『緞』木曾と『黝』蒼龍は艦娘達を守ろうと前に出る。

しかしその前に鹿島が行く手を阻む。

「鹿島!! 今すぐ奴を止めろ!! アイツらが殺されてもいいのか!!?」
「……」

鹿島は何も言わずに集積地棲姫の方をひたすら見ていた。

行く手を阻むだけ何もしない鹿島を前に『緞』木曾と『黝』蒼龍は思い切って鹿島の横を通り過ぎる。

鹿島は何もせず今度はその二人を見ていた。

「艤装解放……」

集積地棲姫は紅黒い光を身に纏う。

殴る体勢で右の籠手を引いて左の籠手を前に突き出す。

その時集積地棲姫の中心からサークル状に紅黒い稲妻を帯びる輪が生まれた。

輪の内輪は海面が著しく沸騰し始め、白く光って集積地棲姫を下か

ら照らす。

「設定……天璇……」

瞬きした瞬間には集積地棲姫の姿は消えていた。

その刹那、瑞鶴の目の前に『黝』蒼龍と巨大な鋼鉄の拳が現れる。

反応する時すらなく瑞鶴と『黝』蒼龍は潮岬町鎮守府を超えた山崖まで殴り飛ばされていた。

更に追い討ちを掛けるように山崖一帯を砲撃、爆散。

凄まじい衝撃と爆発で大岩や木々が次々に辺りへ飛んでいった。

「……えっ……う？」

「今……何が……？ うわっ!!!」

刹那的戦闘にその場にいたほぼ全員が今起きた結果に理解不能に陥っていた。視界に映っていたはずの集積地棲姫が突然居なくなり、いつの間にか瑞鶴を殴り飛ばしていたのだ。

声を出した直後に刹那的戦闘に遅れた衝撃と突風が艦娘達を襲う。

身を屈まなければ転倒してしまうほどの暴風と衝撃波が海一帯に広がっていった。

「もつと……見せてください……！ 貴方達の成長を……！」

瑞鶴と『黝』蒼龍を殴り飛ばした集積地棲姫は排熱するかのように口から白い息を吐き、潮岬町鎮守府の艦娘達の成長を見たいと興奮を押しえながら言う。巨大な鋼鉄の籠手は若干熱された煙が出ており、隙間から高熱の紅黒い光が漏れていた。

「ず、ずい……か、く……？ 瑞鶴!!!」

瑞鶴の隣にいた加賀は事の状況をいち早く理解して、殴り飛ばされた瑞鶴の名前を叫んだ。大惨事となって崩れた山崖は所々炎で明るく燃えており、森のように黒煙がシルエツトとなって立ち上っていた。加賀のいる海からは瑞鶴が殴り飛ばされた陸地が全く見えない。

「まさか、そんな事が……待っ——」

加賀が陸地ばかりを見て最悪の事態に絶望している瞬間、近くにいた集積地棲姫が巨大な鋼鉄の左拳で殴り掛かる。

「ツツ!!!」

『緋』木曾が加賀を突き飛ばして前に出る。

集積地棲姫の殴打を軍刀で無理矢理受け流した。
殴り外しただけでも風圧で海水が飛び散っていく。

圧倒的威力に受け流すだけでも精一杯だった。

『緞』木曾はすぐに体勢を立て直す。

がら空きになった集積地棲姫の左腹と左腕に狙いを定めた。

(くそッ!! 浅過ぎたか!!)

軍刀で斬った傷は集積地棲姫の硬い装甲を切り崩すも身体までには浅い切り傷程度までしかいかなかった。更にはパワーアップした【耐久】で瞬時に傷は治ってしまう始末。加賀達が頑張つて戦える相手かどうかは関係なく、この集積地棲姫は自身たちでさえもまともにやり合えるかどうか分からないレベルまでに到達していた。

「こうなったらアレを使うしかねエのか……!!」

「貴女達も参加しますか? いいでしょう! 私が手掛けた傑作の力……見せてください——」

集積地棲姫の話を聞く耳を持たずに『緞』木曾は巨大な鋼鉄の籠手を足場に身体を回転させて蹴り飛ばした。

「気を付けろッ!! 俺たちでも食い止められるかどうか分からない!! 自己防衛はちゃんしておけ!!」そして決して奴を見逃すなッ!!

【速力】は俺達の何十倍だと思え!!」

『緞』木曾は翡翠色の光を身体を身に纏い、蹴り飛ばした集積地棲姫の元へ向かう。

最低限の防御体勢を取るようと艦娘達に指揮して集積地棲姫を食い止める事に専念した。

何年前かに一度集積地棲姫と戦った事がある『緞』木曾は本当の恐ろしさをその身をもって知っている。

「次は誰にしましょうか……——」

殴り飛ばされた集積地棲姫は身体を仰げ反らせながらも狂気の笑みで攻撃相手を探していく。

目に映った相手を血眼で探し尽くし、見つければ即座に急発進。

また姿が消えたように凄まじい速力で艦娘達へ一直線に向かう。

「させるかッッ!!」

向かった先には木曾と天龍。

圧倒的速度に反応出来た『緞』木曾が前に出る。

巨大な鋼鉄の右拳を咄嗟の突き蹴りで逸らしていく。

しかし逸らすには遅過ぎて間に合わず、巨大な鋼鉄の右拳が木曾の顔面に直撃。

目に映すだけでも精一杯の瞬速の殴打を掠めた瞬間、木曾は身体を回転させて殴り飛ばされる。

「チッ!!」

まずは圧倒的速度を止めるべきだと考えた『緞』木曾は体勢を低くして集積地棲姫の足を蹴って掬う。

体勢を崩された集積地棲姫は仰向けになって倒れそうになる。

そこに『緞』木曾が跳躍して集積地棲姫を上から軍刀で背中を突き刺した。

海面に叩き付けられ這うようになる集積地棲姫。

「止まれてめえッ!!! そう簡単には……!!!」

軍刀で突き刺し海面に叩きつけたのはいいものの集積地棲姫の反発で抑える力は足りてなかった。突き刺した軍刀がカタカタと武者震いのように震え、集積地棲姫は興奮が収まらずに動こうと身体を起こしていく。天龍も刀で集積地棲姫の片足を突き刺して動きを止めようとした。

「このッ……!! クソがッ……!!」

「ッ……なにッッ!!!?」

有り余る力を使って抑えようともするも集積地棲姫は徐々に起き上がっていく。

直後、集積地棲姫は巨大な鋼鉄の籠手の手の平を海面につけて、無理矢理抜け出して横移動した。

突き刺さった軍刀が勢いで集積地棲姫の脇腹や足を半分斬られていくもすり抜けていくように傷が塞がっていく。

無理矢理横移動した影響で上に乗っていた『緞』木曾と天龍は足を取られて転倒した。

「加古ッッ!!!」

「古鷹——」

集積地棲姫が向かった先には加古。

加古を狙っている事に気付いた古鷹は加古を突き飛ばして身を投げる。

瞬速の鉄拳を食らった古鷹は鎮守府の港の岸边に衝突し、そのまま貫通して地面の中から両腕が折れた状態で飛ばされた。

「古鷹ツツ!!」

岸边より遠くの位置の地面に倒れる古鷹から血の池が出来ているのが分かった。

駆けつけた谷風や浜風が悲惨な姿に青ざめてしまうほどで今すぐ治療しなければ死すらありえる状態だった。

「古鷹……！ そんな——」「よそ見しちゃダメ!!」

古鷹の深刻なダメージに加古はパニック状態で過呼吸になる。

そこに集積地棲姫が加古を殴り飛ばそうと襲いかかってきた。

が、駆けつけた金剛が現れて加古を抱きながら跳躍して殴打を回避。

不安定な体勢ながらも空中から打ち下ろすように全門斉射で攻撃した。

「今だ!! 全員撃ち方始め!!」

砲撃で動きを止めた集積地棲姫を見逃さず、長門は全員に砲撃するよう指示をする。

何十名もの艦娘達の砲撃が集積地棲姫目掛けて飛んでいった。

その間を翡翠色の光を纏う『緞』木曾が光芒となつて直進し、爆煙の中にいる集積地棲姫を止める為に急加速して軍刀を前に突き出す。

巨大な爆煙を片手で振り払い、集積地棲姫は姿を現した。

「そこね!!」

「っ!?!」

『緞』木曾の背後に誰かがいる声が聞こえた。

闇夜に光る碧眼が一つ、碧色に輝く籠手が一つ。

身に覚えのある相手に集積地棲姫は珍しく驚きの声を上げた。

「ビスマルク!!」

姿を現したのはビスマルクだ。

相手の【装甲】エネルギーを打ち消す力を持つ籠手を備えていたビスマルクは集積地棲姫に殴り掛かった。集積地棲姫は驚くあまり『^{レイ}緞』木曾の突きをまともに食らい、更にはビスマルクの渾身の殴打を顔面に食らって殴り飛ばされる。

勢いよく岸辺の壁に叩き付けられ、衝撃で空に跳ね上がる集積地棲姫。

地面に衝突して仰向けに大の字で倒れた。

「ああ……なるほど……！ 貴女もいたのですね……！！ 素晴らしい……！ ちゃんと有効活用できてるではありませんか……！」

鼻から血を出しながら集積地棲姫はビスマルクの事を褒めて立ち上がる。彼女と面識があるのか知ったような口を叩いて懐かしそうに笑っていた。殴られた事で歪んだ顔面が徐々に治っていき、止まることなく流れていた鼻血も無くなっている。

「貴女とも是非……！ 是非戦って——」「そこまでです」

集積地棲姫が戦闘態勢に入った途端に銀色の光を身に纏う鹿島が前に出て声を上げた。

更なる戦闘へ突入するかに思えた艦娘達は全員疑惑の表情を浮かべている。

何故仲間であるはずの鹿島が行動を止めるようにしたのか分からなかった。それと同時にもうあの化け物と戦わなくて済むという安心感が心の奥底に芽生えていた。あのまま戦っていれば全滅されかねない状況だと誰もが感じていたからだった。

「博士、そろそろ止めた方がいいかと。成長の眼差しならば今後の為にも放っておくべきです……それに私たちは提督の回収、戦闘目的で来た訳ではありません……怪我などは大丈夫ですか？」

「おっとそれはすいません……いやいやいや……大丈夫ですよ。つい興奮して忘れてました、いやはや不覚不覚」

「……さっさと手当てをした方がいいかと。急がないと本当に死んでしまいますよ、その三人は」

鹿島が本来の目的を改めて確認させ、集積地棲姫に戦闘行動を止め

させた。

集積地棲姫は身に纏っていた紅黒い光を抑えて先程艦娘達に負わされた怪我で顔面に濡れた血を拭う。鹿島は少し沈黙した後、艦娘達へ集積地棲姫の被害を受けた瑞鶴と古鷹と木曾を即刻修復するよう促した。

「先程は大変失礼致しました……興奮すると何かと忘れる癖がございました、皆さんには申し訳ない限りであります」

「散々暴れておいてまた馬鹿げた事を言うつもりか……！　ふざけるのも大概にしろ!!!」

自身の欲を満たす為だけに力を解放し、古鷹達を傷つけた事に長門は声を荒らげて激昂する。

潮岬町鎮守府の艦娘達は全員ぶつきたい怒りを噛み締めていた。

「全ては愛する貴女達と世界の未来のためにですよ長門。私は貴女達艦娘を心から愛している……そして私たちは貴女達が輝ける未来を作る為、そしてこの世界がより素晴らしくなる為に日夜研究に取り組んでいるのです」

「また馬鹿げた事を……!!　綺麗事並べれば善良に聞こえるとも思ってるのか!!!」

集積地棲姫の行動とは不一致なふざけたような目的に長門は力を抑えながらも吠える。本当は殴って倒したい気持ちを精一杯抑えていた。

だがあの戦闘で三人も行動不能にされた以上は動くにも動けなかった。

見たからこそ分かる、圧倒的な格の違いと力の差。

束になっても到底叶わないのを身体が知ってしまっていた。

「いえ長門さん、実際に博士は世界の発展に大きく貢献していますよ」
「どういう事だ……!!」

「ここ数年間、深海棲艦との戦争や他国間の紛争以外に何か災害や環境問題に関する事柄って起きてますか？」

長門の言葉を否定して鹿島が集積地棲姫の貢献を代わりに伝えた。拷問とも思える私利私欲の為の実験をしていた憎しみ深い集積地棲

姫が世界の為に貢献しているなどと有り得ないと誰もが思っていた。「起きていたとしても小規模なものばかりですよね……何故ならそれは、全て博士が開発したモノによる恩恵で事なきを得ているからなんですよ」

「……まさか、あの無限に補給できるエネルギーとかも、かしら」
「そうです。博士は環境破壊、エネルギー不足、食糧問題、異常気象、そして人口増加……博士はありとあらゆる問題を解決する為、実験と研究を繰り返して得た技術を駆使して貢献しています。エネルギー不足でいえばビスマルクさんが言っていたような核をベースとした無限に補給できる且つ変換可能なクリーンエネルギー、食糧問題であれば食糧複製と人工食糧の開発、異常気象であれば陸地で使用可能な気象制御装置の開発。各国が深海棲艦に襲われながらも緊急事態宣言を出さずに問題解決や経済を立て直しているのは全て博士のお陰ですよ」

「流石に褒め過ぎです、照れてしまいますね」

鹿島が言うには『貪狼』デアアボルフ集積地棲姫は多大な知識量と技術をもって、この世界のありとあらゆる問題を解決に導いていた。前のニユースで取り上げられていた無尽蔵のエネルギーを開発したのも集積地棲姫が関わっており、長年悩まされてきた日本のエネルギー不足を解決へ一歩近付かせていた。

「私は常に貴女達艦娘と世界の為に考えています。輝かしい未来の創造、いつかは実現できるその日まで私は頑張っていきたいと思つていきますよ」

「待ちなさいよ……!」

精一杯息を込めて出したような声が会話を遮って大きく聞こえる。声の方向へ振り向くとそこには『魃』アオケロ蒼龍に片腕を担がれたまま互いに支えて歩く瑞鶴がいた。集積地棲姫の刹那的殴打から瑞鶴を庇った『魃』蒼龍は辛うじて意識はあるものの頭から大量の血を流し、顔面全体から首の付け根まで赤く染まっていた。

瑞鶴も同じく流した血で顔面全体が染まっており、右腕や左脚が酷く爛れて深い火傷を負っている。痛ましい姿に誰もが青ざめた。

「立ち上がれましたか瑞鶴。やはり成長の眼差しは確定のようですね」

「うるさい……!! それよりも……どう、いう事……なのよ!! 軍の上層部は私達艦娘と深海棲艦が邪魔だからって……! 潰し合わせる『ABC計画』をやってるくせに……! 艦娘を開発したアンタが輝かしい未来の創造!!? 聞いて呆れるわ!!」

痰が絡まるような声で吐血しながら怒り心頭に訴える瑞鶴。

一度提督と摩耶、プリンツらで見た『ABC計画』の真実を知っていた瑞鶴は上層部と繋がっている集積地棲姫に対して怒りが収まらなかった。

艦娘を開発している重要な人物が上層部の計画を知らないなどと言動が明らかに真逆で、何か狙っているかのようにも思えた。

だが――、

「……何ですかその計画? 初めて聞きましたが」

集積地棲姫は『ABC計画』という言葉聞いて眉を歪ませて首を傾げていた。

まるで初めて聞いたかのように呆然とした表情で瑞鶴を見ていた。

「とぼけないで!! 上層部が考えた……計画でしょ……!!? 上層部と繋がってるなら知ってるはずよ!!」

瑞鶴は当然激昂する。

世界各国の軍の上層部達と繋がっているのなら知らないはずがないと声を荒らげて訴えた。

「いや……本当に知りません……鹿島、知ってましたか?」

「……いえ初めて聞きました」

本当に知らなかった集積地棲姫は助手の鹿島に聞いてみたものの、本人でさえも知らないと深刻そうな表情をしていた。

鹿島は指を顎に触れて考える仕草をしながら顔を俯かせている。

「ふぎ……け、る……な……!!」

更なる罵声が聞こえた。

声の方向には殴られた古鷹が両足を動かして膝を立たせ、無理矢理上半身を起こして立ち上がった。

両腕は見るに耐えないほどに複雑な方向に折れ曲がっており、突き出た骨が一部外へ露出している。頭部や鼻、口から大量の血を流して前身の殆どが赤く染まっていた。

瀕死の姿になっても古鷹は修復中の妖精達と共に不屈の精神が灯る真鍮色の鋭い眼で集積地棲姫と鹿島を睨んでいる。

『ABC計画』は艦娘を洗脳し操って深海棲艦と戦わせ、殺し合わせる……そんな高度な技術を今の人間達が開発できるとは思えない……なら、人類へ貢献したお前しか……開発できる奴はいない……!! 少なくとも情報は知っているはずだ!!」

珍しく荒れた口調で集積地棲姫に訴える古鷹。

立っているのもやっとで傍にいた浜風と谷風が興奮で血が吹き出す姿を見て慌て始める。瑞鶴は何故か摩耶とプリンツ、提督と瑞鶴以外は知らないはずの『ABC計画』を古鷹が知っていた事に驚きの表情を隠せずにいた。

周辺の艦娘達は『ABC計画』というものがどういう計画なのか分からず困惑している。嘘と聞いて天龍は青葉の名前を急いで呼んだ。

「青葉ア!!」

「……本当ならば私だって嘘だと信じたのですが……あの二人の言っていた事は全て……本音です。全て嘘偽りなく言っていました……!」

嘘か本当かを聞き分けられる青葉は苦渋に満ちた顔で拳を抑えながら見た事や聞いた事全てを告白する。

最悪な事に集積地棲姫や鹿島が今まで言っていた事は全て揺るがない事実だった。

「本当に言ってるのかそれは!! お前が嘘ついてるんじゃないのか!!?」

「仮に嘘だとしたら私だって瑞鶴さんや古鷹さんのように言ってますよ!!! でも本当に嘘じゃないから私は信じたくないって言ってるん

じゃないですか!!!」

「やめろ二人とも!! 言い争うな!!」

天龍が青葉の胸ぐらを掴んで嘘をついているのではないかと疑心暗鬼に苛つきながら訴える。

しかし全て事実を言っていた事を聞き分けた青葉も苛ついて釈明する為に何度も説明した。

言い争いが止まらない二人を長門が急いで仲裁する。

「……潰し合わせる計画。あの男とは突然深海棲艦の提督になったアレ、ですかね。あまり会ってないものでその方からは契約で艦娘を操作できる機能を開発しろとしか聞いていませんでした、私は艦娘の暴走制御の為にと思ってやっていたが……この様子だとまだ裏がありそうです。何故私に伝えなかったのかは大抵分かりますが……そうですね、少し予定を変更しますか」

集積地棲姫は事の重大さに勘づいて『ABC計画』を題に過去から現在に至るまでの全ての行動を思い出して考え込んでいた。

もし瑞鶴や古鷹の言っている事が本当であれば今後の予定に支障をきたしかねないと分析。実験や研究をしている時間じゃないと集積地棲姫は予定を変更する意思を固めた。

「瑞鶴、古鷹、私と手を組みませんか？」

「……はア……!!?」

「ん な っ ……!」

「貴女達の言う『ABC計画』、アレのような反艦娘派の危険思想組織による未曾有の殲滅計画だと見受けれます。艦娘をこよなく愛する私としてはぜひ阻止させたい……輝かしい未来の為に私と手を組めば必ず阻止させる事ができます。成功した暁には今すぐ空母水鬼と融合した翔鶴を元に戻しましょう、先程回収したこの子も万全な状態で返します。どうですか？ 悪くないと思いますか」

集積地棲姫は『ABC計画』を阻止する為に潮岬町鎮守府の艦娘達と手を組まないかと提案をしてきた。具体的な阻止案は無くとも計画の詳細と目的さえ知れば簡単に阻止できると明言する。

もし阻止する事に成功すれば翔鶴を元に戻し、提督を返しても構わ

ないと更に促していく。

集積地棲姫とは複雑な関係性であつても計画を阻止したいという気持ちは同じはずだ、確かに手を組めば阻止できる可能性は更に高くなる。また翔鶴を元に戻す事もできる上に提督も返して貰えるなら利はこちらにあるかもしれない。

だがそう目先の利益に囚われるほど瑞鶴と古鷹は甘くなかった。

「……悪いけど……断る。青葉の言葉、表情を見て聞いて冷静になれたよ……アンタは本当の善意で言っている、その取り引きは……私だけじゃなく私たちを含めて実験に参加する且つ、その計画を阻止する為ならば命を問わない事を前提に、手を組めば、必ず阻止できるって……意味なんですよ……？」

「はい！　そうですが、それでも駄目ですか？」

青葉の表情を見ていた瑞鶴は一度深呼吸をして落ち着きを取り戻す。

瑞鶴は今までの集積地棲姫の言動を考えて聞き抜き、集積地棲姫が狙っている本当の目的を述べて手を組む事を断った。

なお本当の目的を周知に知らされて手を組む事も集積地棲姫は素直に認めて笑顔でもう一度交渉に出る。

「ダメね……さつきから言ってる事が二転三転し過ぎよ、危うく騙される所だったわ……そんなの……」

「——こっちらから願ひ下げだツツ!!!」

瑞鶴と古鷹は息を合わせて互いに共通しているだろう考えを集積地棲姫に鳴いて叫ぶ。二人は精一杯の方法でボロボロになった艦装で身構え、それに連なるように艦娘達も一斉に砲口を集積地棲姫と鹿島に向けて威嚇した。

全員の考えは同じだった。

「私たちは私たちの方法で計画を止めてみせる!!」

「そして翔鶴姉を元に戻す方法も!!　前の提督さんの受け継がれた想いに報いる為にも!!　提督さんの真意やその過去も!!」

「全て私たちの力で奪い返してみせる!!!　決してお前なんかには頼らない!!!」

瑞鶴と古鷹は今まで自分達が変わってこれたようにこの先に阻む巨大な壁も突き破ってみせると断言した。

艦娘と深海棲艦を相打ちさせて殲滅させる『ABC計画』の阻止も、空母水鬼と融合してしまった翔鶴を元に戻す事も、蒼■少尉の遺した想いに報いる為にも、提督の本心や過去その全ても、自分達でやり遂げてみせると改めて誓った。

世界の概念を根本から変えた極悪なる張本人と手を組むなど言語道断。

圧倒的な力にひれ伏せられて満身創痍でもなお心に火を灯す不屈の闘志は永遠に燃え盛っている。

「なるほど……なるほど……これは面白い……」

集積地棲姫は巨大な鋼鉄の籠手で顔を覆い、抑えきれぬ笑い声を出して身体を震わせ仰け反らせた。

まるで愚策な道を選んだなど見下して嘲笑うかのように静かに笑う様はその身に潜む恐ろしい狂気を体現していた。深海棲艦の王たる中枢棲姫の側近にしてありとあらゆるモノを創造する知識と技術力、そして実験や研究の為ならばどんな相手だろうと厭わない残虐非道な性格。

今自分達が一体何を相手に戦っているのか改めて理解した。

これは——、世界の人々から掻き集めた狂気の集合体だ。

「いいでしょう。この事は無しとします……実に素晴らしいですよ、その不屈の闘志……貴女達が力づくで計画を阻止し、いずれは私を倒すというのなら……全力で応えなければなりませんね」

集積地棲姫は自身が提案した契約を無かった事にして瑞鶴と古鷹を褒め称えた。

そして再度身構える——。

「貴女達の未来が……全てを照らす太陽の如く輝かん事を……」

181. 微かな光は未だ輝きを失わず

「……」

佐世保駅を朝五時に出発し、電車と新幹線を乗り継いで新大阪駅に到着。約三時間かかる潮岬町鎮守府までの経路を運転手の白■に送ってもらっている昼の十三時だった。

岸边近くの道路を走っている最中に潮岬町鎮守府がある潮岬町が見えてきた。

しかしよく見れば所々に黒煙が立ち上っており、物々しい雰囲気は漂っている。

嫌な予感がしてならない灰色は自身を自制して落ち着きを取り戻し、潮岬町鎮守府へ向かった。

「一体何が……」

潮岬町鎮守府へ辿り着くはずだった灰色と時雨は鎮守府の門前を見て愕然としていた。まるで土砂崩れでも起きたのか道路は大量の大岩や土砂によって道が塞がれていた。木々は根こそぎ薙ぎ倒されて一部焼け焦げた跡が見える。灰色達は車から降りて土砂によって不安定になった道を歩いて潮岬町鎮守府に向かった。

「そんな……」

「壊されてる……」

更に灰色達は荒れ果てた鎮守府の凄惨な光景を見て絶望する。

艦娘達の寮や講堂は窓ガラスが割れて所々に穴が空いており、内部の部屋が簡単に見えてしまっていた。広場は酷くひび割れて隆起しており、建物や舗装された道の小さな瓦礫に埋め尽くされ、足を踏む場所が限られているほどだった。

第一倉庫から第六倉庫は鉄骨が剥き出しのまま倒壊しており、工廠は火災で天井が無くなって鎮火後には黒い煙を未だに出していた。

「来たましたか、灰さん」

灰色達を迎える為に声を掛けてきたのは不知火だった。

不知火の姿を見た灰色達は思わず青ざめる。

不知火は左腕の骨折で三角巾によつて支えられ、全身には至る所に打撲痕。潰された右目は応急処置で頭半分が包帯に覆われていて怪我の部分から赤く滲んでいた。

「不知火……その怪我は……」

「私は大丈夫です。こちらへ」

不知火の凄惨な姿を見るからに他の艦娘達もタダでは済まないだろうと思ひ知つた灰色達。

唾を飲み込んで覚悟を決めた灰色は案内してくれる不知火の後を追つた。

「状況を報告します。現在潮岬町鎮守府の戦力は七十四%から四%まで激減。全ての艦娘が中破以上の損害を負つており、今から戦える艦娘は護神厄討艦隊の艦娘と私、時雨を除いて精々……三名。資材についてはいずれも破滅的状况であり、高速修復材による修復は数が少ない為に重度の外傷または大破状態の艦娘を最優先にしています」

不知火が艦娘達のいる場所まで簡単に鎮守府の状況について説明した。

まるで廃墟と化した司令本部へ入っていき、ガラスの破片や小さな瓦礫などが簡単に片付けられた廊下内を歩いていく。

不知火が説明していくうちに徐々に血腥い臭いが鼻を刺してきた。

説明を終えた後に不知火が医療施設の扉を開く。

「白露!!… 夕立!!… なんて酷い怪我……!」

医療施設内は灰色が言葉を失うほど想像を絶する悲惨な光景が広がっていた。

応急処置を施された艦娘達が廊下や椅子に座つて更なる治療の為に待機しており、患部から滴る血が床を汚し、取り替えた血で滲んだ包帯があちらこちらにばら撒かれていた。

時雨は大怪我をした白露と夕立の元へすぐさま駆けていく。

■ 医師を始めとした憲兵と整備士達、そして看護師の医療チームが負傷した艦娘達を手当てしており、■ 医師の指示の声が常時医療施設内を木霊する。

「……何があつたのか簡単に報告できるかな」

「はい。昨日の夜二十三時十二分、鹿島が司令に対して誘拐未遂を働き、護神厄討艦隊の艦娘の指揮によって誘拐を阻止するも『貪狼』ディアボルフ集積地棲姫が出現、接触。後に戦闘となりましたが全員返り討ちに会い、司令は誘拐されてこの状況になりました」

「『貪狼』ディアボルフ集積地棲姫が!! 何でここに……!!」

「鹿島が何年も前から集積地棲姫の助手、言わばスパイとして潮岬町鎮守府の我々を監視していたらしく、司令を誘拐する為に緻密に計画を建てていました。恐らく呼び寄せた理由も取り返そうとする私たちを徹底的に叩きのめして戦意を削ぐ為かと……今、このように……」

地獄とも思える状況を見て灰色は拳を熱く握り、歯を食いしばって悔しさを胸に抱いた。自分達が遠い場所で休んでいる中で不知火達は提督を取り返す為に命を懸けて戦っていた。自身の甘さに反吐が出そうだった。

「……白さんを拐った目的は……?」

「分かりません。理由目的ともに不明です……一つ言える事があるとすれば、鹿島は提督に記憶の矛盾があると言っていました」

鹿島が提督を拐った目的は全く分からないと頭を抱えて伝える。

ただ一つ分かっている事は鹿島本人から聞いた記憶の矛盾という不可解な言葉。

確か鹿島も不知火と同じ提督の元部下だったはずだ、記憶に関する何かしらの関係があるのかもしれない。

「話を戻しますが、我々は潮岬町鎮守府の責任者が喪失した場合、新たな責任者を灰■■と認め、貴方を司令として承認する事を事前に白■司令が決めていました。前に白■司令が貴方に渡した手紙にも書かれているかと思えます。よって全ての決定権や命令権は貴方に委ねられ、そして艦隊の指揮権は貴方に付与されました」

白という提督がいなくなった事で鎮守府の責任者を務める代役として候補生である灰色が選ばれた。損害状況が絶望的である今の状況下で鎮守府の指揮系統を失えば今後の運営や艦隊指揮は困難を極める。

不知火は提督ならばこう考えるであろう対策を自身なりに導き、灰色を司令官として着任させる事を認めた。

「私が……この鎮守府の、提督に……か」

「遅かれ早かれ貴方はいつか司令となる存在。迷う余地や意味などありません……お気持ちは察しますが、我々には艦隊の指揮権を持つ司令官という存在が必要なのです。どうかご理解の程、よろしくお願いします……」

灰色は自身が突然この鎮守府の責任者となった事に実感を持たず、責任者として皆の期待に答えられるか迷っていた。

思えば今まで提督と共に歩んできた分もあって甘い汁を吸ってきたようなものであり、提督であればそろそろ独り立ちするべきだろう青二才と半分馬鹿にして言うだろう。

だがこの絶望的な状況の中で司令官になってしまった故にこの先立ち上がれるかどうか先の見えない不安に悩まされた。

不知火もこの状況下で突然司令官になってしまった灰色の心境を察している。

しかし艦娘には司令官という存在が必要不可欠である以上、否が応でも務めてもらうしか頼れる方法はなかった。

それでもしなければこの場にいる艦娘達は自我を保てず、パニック状態に陥ってしまう。

微かな希望がなければ自分達は消えてしまう、不知火はそう思っていた。

「不知火は……?」

「私はまた治療を受けなければならぬので、では……また」

不知火は■■■医師に治療を受ける為、灰色に全てを伝えてその場を去っていく。

その時不知火の顔が酷く落ち込んだ悲しい表情をしていたのを灰色は見逃さなかった。何か声を掛けて励まそうと手を伸ばして口を開いたが掛ける言葉が見つからない。

呼び止める事など出来ず、不知火は姿を消してしまふ。

灰色は伸ばした手をもう片方の手で押さえて顔を俯いた後に時雨の方へ向かった。

「白露……夕立……」

「やあ……灰色さん……戻ってきて……くれたんだね」

「大丈夫……かな……?」

「大丈夫っぽい……まだ痛むけど」

不知火に声をかけられなかった事を後悔しながら灰色は白露達の方へ向かつて名前を呼んだ。

灰色が戻ってきてくれた事に白露と夕立は目を潤わせ、か細い腕を精一杯動かして灰色の軍服を弱く掴む。

集積地棲姫との戦闘で白露は頭蓋骨骨折による頭部外傷と内臓破裂、夕立は鋼棒が腹に突き刺さった事による内臓損傷と右肩から右手までの複雑骨折。

二人の怪我姿を見ただけで『ディアボルフ貪狼』集積地棲姫が如何なる強さを持つているのか、命を脅かす恐怖よりも艦娘達を痛めつけた怒りが溢れていた。

「そこで何して、って戻ってきたのね灰■君」

「■先生。お疲れ様です」

「お疲れ様、と言いたい所だけど今はそんな事いいから貴方はこっちに來て。状況を把握してもらおうから」

「分かりました」

白露達と話している最中に背後から■醫師が灰色の名前を呼んで現れた。サボり中の憲兵か整備士だと見間違えて思ったのか相当疲れが溜まっていそうだった。

■醫師は鎮守府の提督として艦娘達の状況を把握してもらうために灰色を呼び出して医療施設の奥まで連れていった。

「四名を除いた艦娘五十五名の内、四十三名が中破以上の損害。そして瑞鶴、古鷹、木曾が意識不明の重体。いずれも命は取り留めてるけど……油断は出来ない。これがそれぞれ艦娘の容態をまとめたリストね」

「あ、ありがとうございます……」

「高速修復材についてだけど瑞鶴、古鷹、木曾の三人には使用してるわ。それ以外は誰に使うかは貴方の判断に任せる。こんな事言っておいて何なんだって話だけど……貴方の許可無しに無断で無闇に使えないし、一個人の意見で流されて欲しくないし、それで間違った事をして欲しくないから……申し訳ないけど……」

■ 医師は歩きながら説明しつつ現在の艦娘達の損害状況をまとめたリストを灰色に渡した。不安がる灰色に ■ 医師ははにかんだ笑顔でこの状況を乗り越える為に共に頑張ろうと励まし合う。

艦娘達の治療に専念する ■ 医師も不眠不休で働いているお陰か目にくまができており、足元が少しふらついていた。

灰色は今後の鎮守府の運営の為に緊急時に設置された小さな執務室へ向かう。

執務室と言っても六畳間の物置部屋を無理矢理作り替えた部屋だ、新米の提督にはおあつらえ向きだろう。部屋の中に入ると片隅に寄せられたガラクタが隙間なく敷き詰められていて、部屋の中心に学校机とパイプ椅子が用意されているだけだった。

全く使われていない所為か窓の縁やガラクタの表面には埃が溜まり、風通しも悪く空気の換気は難しい。

「さて……どうすればいいものか……」

部屋に入った灰色はパイプ椅子に座り、艦娘達のリストを机に置いて今後の事について考えた。

机には仮執務室に置かれていた資料が山積みになっていて、片付ける場所もなく平然と置いてあった。

積み上げられた資料には艦娘達の名簿や七壊星のリスト、作戦会議の議事録、過去の戦闘報告書や資材取引承諾書などが残っていた。集積地棲姫との戦闘後に不知火と川内が周囲に散らばった資料を一つずつ集めてくれたらしい。

しかし鹿島が暴走した事によって提督が考えていた計画や作戦を記した資料は燃えてしまい、黒く焦げて読めなくなっていた。

「分からない……何をすればいいのか……分からない」
灰色は悩みに悩んだ。

この絶望的な状況を打破できる方法はあるのだろうかと頭をフル回転させて考え続けた。

艦娘達の治療、慢性的な資材不足、建物の修復予算、今後の鎮守府の方針と運営、深海棲艦の襲撃してくる可能性。

悩まされる課題は穴から這い出る蟻のように増えていく。

考えれば考えるだけ時間を無駄にしているような気がした。

明日に切り替えて考えた方が楽なんじゃないかと思つてしまった。

これだから俺はダメなんだ。

肝心な時に限つて何もできやしない。

ただこうやって貴重な時間を貪り尽くしているだけの間抜けな無能者だ。

甘い汁を吸っていただけなんだ。

候補生という枠に甘んじて何も把握出来なかつた無力な奴なんだ。

もうこのまま何もせずに自分を責めれば――

「違うだろ」

提督や艦娘達の事を思い浮かべた灰色は両手で頬を思い切り叩いて目を覚ます。

痛みに痺れながらも灰色はパイプ椅子から立ち上がった。

「皆憔悴し切ってる……ここで立ち上がらなきゃ誰がこの鎮守府を建て直すんだ……！ 余計な事は考えるな、見い出せ己の意地を……！」

今鎮守府の代表である自分がいつまでも絶望していたら怪我を負っている艦娘達や■■医師達も影響して心が沈んでいく。

戦争における兵士の士気低下は情勢を左右させるほどの致命傷にもなる、司令官である自分が絶対にこの状況で躓いては行かない。

灰色は今自分が最大限できる事、最善を尽くせる事を考えた。

例え小さな事でも良い、僅かな事でも達成して進めば大きな目標へ
一歩近付ける。

机に積み上げられた資料を引つ張り出して今まで集めた情報を再
確認した。

「白露達は結構酷い怪我を負わされてるのか……今は護神厄討艦隊の
艦娘達が見張ってくれてるなら心強いな。資材は……駿河鎮守府の
先輩に話を聞いてもらえばまだ何とかなるかもしれない」

資材は駿河鎮守府にいる自分を推薦してくれた先輩がいる。話を
聞いてもらえれば一時的な資材不足は解消される可能性があるだろ
う。灰色は持っていたメモ帳のページを破ってやる事リストをまと
めた。

『ディアボルフ貪狼』集積地棲姫……もし本当に軍の上層部と繋がっているのな
ら報告はしない方がいいな。報告したとして何されるか分からない
し……艦娘を開発した人物、か……上層部の様子を見て対策しよう」

不知火がまとめた報告書には『ディアボルフ貪狼』集積地棲姫は軍の上層部を繋
がっている可能性が高く、このまま報告すれば上層部が潮岬町鎮守府
を脅かす恐れがある為に報告するのは控えるべきだと灰色は考えた。

集積地棲姫は●くろ博士という人間らしき名前を持ち、かつて艦娘
という兵器を開発した第一人者。衝撃の事実を前に灰色は動揺しな
がらも落ち着きを取り戻して現実を直視した。

「よし、やる事リストに書いて決めたぞ……そういえば摩耶さんはこ
の状況の事知ってるのかな……大本営にいるんだろうけど、もし知っ
てるならすぐ来てもおかしくないと思うし……一度連絡してみるか
……？」

ほぼほぼやる事が決まった灰色は先日にも叢雲と摩耶が大本営に
行った事を思い出した。

何せこの差し迫った緊急事態だ、あの二人も耳には届いているはず
だろう。

だが鎮守府に来る様子や気配は全く感じられない。

不知火が摩耶の事に関して喋らなかつたのも摩耶から連絡が無
かつたからなのだろうか。疑問に思った灰色は携帯電話で摩耶へ連

絡を試みた。

『摩耶だ』

「もしもし灰■です」

『灰か、掛けてきた理由は言わなくても分かるぞ。そっちに戻ってくれたならありがたいんだが』

意外にも摩耶は素早く応答して事の状況を既に把握しているようだった。

何処か海上を航行中なのか風の音や波の音が摩耶の声に被せて聞こえてくる。

「早く戻ってこれました。摩耶さん達も戻れますか？」

『すまないが……最低でも明日になる。今は灰もやるべき事をやってくれ』

「分かりました……それと白さんの事なんですけど……」

灰色は提督の事について触れないはずが思わず口が滑らせて摩耶本人に聞いしまった。

直後頭の中でハツと気付いた灰色はどう説明しようか悩む中、摩耶は乾いた笑い声をしながら口を開いて答える。

『……まあ、今更どうこう考えても時間の無駄だな。気にしないでいい……あまり気にしなくていいよ』

「分かり……ました……」

摩耶との連絡を終えた灰色は気まずくさせてしまった事を後悔した。

提督の喪失は鎮守府の誰よりも摩耶が一番悲しいはずだ。

しかも仲間だったはずの鹿島に奪われてしまうとなればそれ相應の損失は精神に来るものがあるだろう。

「やるべき事……それはちゃんとまとめてる。今は四の五の言わずに行動しよう。思い立ったら即行動、白さんがいつもやってた事だ」

「この傷……ホントに治るのかな……」

時雨は憲兵や整備士達と同じく■■医師主導の下で白露と夕立の看病をしていた。

遠出していた事で鎮守府の艦娘達の中で唯一無傷だった時雨は仲間の応急処置に尽力を注いでいた。司令官の灰色は仮執務室にて緊急事の対応に迫られていて艦娘達の事を目に掛けられなくなっている。

代わりに五体満足の自分が仲間の状況を把握しつつ応急処置をすれば効率は良いだろうと自分のやるべき事を見つけて行動していた。

「その……集積地棲姫って奴は、強い……？」

「強いどころの話じゃない……アレは次元が違う。一斉に攻撃して充分な損害を与えた、だけど何度も復活してきてた……結局誰一人手も足も出ないまま、倒す事はできなかった……」

突如潮岬町鎮守府に現れた『貪狼』集積地棲姫は戦ったどの深海棲艦よりも遥かに次元を超えた強さを持ち合わせていた。

鹿島が言っていた全ての性質に流れるエネルギー効率を自由に操る力は凄まじく、護神厄討艦隊の艦娘達でさえも戦闘に苦勞していた程だった。瞬間移動したかに見える驚異的な速度、海や大地を震わせる圧倒的な火力、どれだけ損傷を与えても何事も無かったかのように修復されてしまう耐久や装甲など何から何まで異次元だった。

あの力こそ七壊星の真の力なのだろうか、複数の艦隊を殲滅させるだけの力を持つ深海棲艦に時雨は心を突き刺すような不安が過った。

「しかもあの深海棲艦、艦娘を作ったみたいで……そもそも私たちは元々人間だったばい……」

「え？ 私たちは元々人間、だったの……？」

「鹿島が言ってたばい。エネルギー核を融合させた改造人間だとか、何とか……もう……何が何だか、訳が分からないよ……」

夕立から聞いた事実を聞いて時雨はふと包帯を持っていた手を止めてしまった。

艦娘は元々人間から生まれた改造人間であり、その艦娘を開発したのは『貪狼』集積地棲姫だと言う。

時雨も夕立と同様に情報量の多さに理解するまで多くの時間が必要だった。

「あ、時雨ちゃん！ 手が空いたならちよつと手伝ってくれないかし

ら？」

「あ、ごめんなさい！ もう少し掛かります、終わったら行きます！」

「分かったわ。急がなくていいからゆっくりね」

考え事を続けながら無性に夕立の応急処置をしていた時雨の元へ

■ ■ 医師が声を掛ける。

古鷹の応急処置を手伝って欲しかった ■ ■ 医師は時雨が手を空けているように見えたようだ。呼ばれた時雨は我に返って周囲の状況に気付き、 ■ ■ 医師の応答を拒否せず後で行く簡単に伝えた。

「……………これからどうなるんだろ……………怖いな……………」

182. 太陽の光は燦々と全てを照らす

『見事にこっぴどくやられましたね……まあ大方予想通りでしたが』

『……古鷹さん。もし提督を取り返したければ摩耶さんに伝えておいてください。あとこれは貴女達のメッセージでもあります……』

『運命とは、最もふさわしい場所へと、貴女の魂を運びます……私たちは小笠原諸島父島で待っていますよ……』

『……絶対に……絶対に提督を、救助してください……お願いします……』

「……」

瞼をゆつくりと開いて視界を開く。

窓から太陽の光が室内全体を照らしていて、白い天井が見えると言う事は自分はどうかやら医療施設に運び込まれて治療を受けていたらしい。

時計で時間を確認しようとしたが左右へ首を動かすも時計らしき物は見えない。

右には応急処置を受けた加古が自身の手を握ったまま座って眠っていた。最早何日何時間経ったかすら分からない古鷹は探すのを諦めて身体を安静にする。

「っ……」

怪我したはずの身体は案外軽くなっていて、これといって大きな痛みも感じない。ただ少しずつ身体を動かしていくと胸の一部や脇腹、両腕には鋭い痛みがあった。肋骨や内臓が酷く損傷しているのだろうか、いま無理に動かせば傷が広がるかもしれない。

恐らくこの治癒結果から見て自身の『耐久』による再生と■■医師

の応急処置による賜物だろう。七壊星である『貪^{ディアホルフ}狼』の攻撃を食らつておいてよく生きていたものだ。と自身の耐久性を自賛したい所だが、そういう余裕や考えは古鷹に全く無かった。

「くそっ……」

古鷹は寝たきりの状態で白い天井を見ながら目に涙を浮かべる。

集積地棲姫に対して全く太刀打ちできなかった事に熱く手を握りたくなるほど後悔していた。

損害は与えていたはずだった、なのにも関わらず集積地棲姫はあつという間に修復して身体能力を強化、艦娘達をいとも容易く殲滅させて去ってしまった。

あの桁外れな力こそが七壊星の所以たる意味だろう、この先その深海棲艦を相手に立ち向かえるか古鷹は不安と後悔の波に彷徨^{さまよ}った。

「っ……っ！ 古鷹！ 目を覚ましたんだな！ 良かった……」

古鷹のひ弱で微かな声を聞いた加古は前傾姿勢になっていた身体を起こす。

遠く意識を失っていた古鷹が目を覚ましたのを見て安堵の息を漏らして顔を俯いた。

加古も頭に包帯を巻いて折れた片腕はギプスで支えられ、痛ましい怪我を負っている。

「何も……できなかつた……！」

集積地棲姫に対して全く損傷を与えられなかつた事と大怪我を負っている加古の姿を見て、古鷹は目に溜めていた涙を溢れさせ震えた声で自身の無力さを嘆く。七壊星と対峙して戦闘していたはずが妹を守る事すらできなかつた自分が悔しくてたまらなかつた。

「そんな事ないよ……古鷹はあたしを庇ってくれた、もしあのまま受けていたらあたしは……死んでたと思う。あたしは古鷹が五体満足で生きていれば……何も問題無いよ……」

加古は古鷹の目に溢れた頬に伝う涙を指で払って慰めた。

加古も勿論集積地棲姫に対して何もできなかった事を悔やんでい

る。古鷹が庇ってなければ当に自分はこの世にいなかった事だろう。

自分自身も落ち着かせる為にも加古は古鷹の言う事をひたすら聞いていた。

「……あ、そうだ……■先生呼んでくるから……待つてて」

古鷹が目を覚ました事を■医師に伝える為に加古は一度病室を去る。一人となった古鷹は首を動かして窓に映る光景をまじまじと見ていた。

よく見れば瓦礫や建物の崩れた跡が著しく残っている。今日は誰一人として訓練をしていない所為か騒がしい音は全く無く物静かだった。

数分かして病室の扉から加古とクリップボードを持っていた■医師が入って来た。戦闘後から不眠不休で働いているおかげか容姿や息遣いなどで疲れているのが目に見える。しかし■医師は自身が疲労困憊している所を見せたくないようで常に笑顔を絶やさないでいた。

「脈拍も安定、呼吸も落ち着いてる、高速修復材も効いてる、か……問題無いわね」

目を覚ました古鷹の容態を事細かに確認し、クリップボードに挟められた書類に記録していく。

心電図による心拍数の安定と体温や血圧の測定、高速修復材の摂取状況を確認して問題無しと■医師は判断した。

「点滴を打つ感じだけど……一気に使えないの？」

「分かりやすく言うと古鷹さんは肝臓や腎臓などの内臓破裂、出血多量に肋骨や両腕から両肩までの複雑骨折、頭部外傷とか結構危険な状態。それ等を一気に高速修復材で修復させようとすれば細胞や組織、神経とかが再構築していく際に痛覚神経の生成による激痛があるから、それを和らげる為にはこうやって点滴に似た方法でゆっくりと摂取させていくしか、この状態だとこれしかないの」

点滴のように少しずつ高速修復材を打っていく古鷹を見て加古は何故一気に使わないのか疑問に思っていた。

■医師曰く高速修復材は艦娘に摂取させれば例え致命傷であっても瞬時に修復ができる優れ物だが、修復する際に患部全体から細胞

や神経などが一から再生していく為に凄まじい激痛が伴うらしい。

高速修復材は使う本人の意思や容態を無視した即時修復を最優先としたモノであり、尚且つ外傷や骨折、内臓破裂などの修復を目的としていないため重傷を負った艦娘には摂取が難しくなっている。

「そもそも話、艦娘は砲雷撃戦とかの戦闘で深い外傷や四肢の欠損なんてありえなかったのよね。大体は正装が破けてちよつとした切り傷とか火傷とか艤装が壊れてる程度だったし、最近は味方も敵も少しやり過ぎな所があるわ」

「確かに……最近では近接戦闘も視野に入ってるおかげか色々無理して
る感があるな……」

「まあ私人としてはあまりやってほしくないわね……それはそれとして、古鷹さんはこのままの調子でいけば後一週間ぐらいで治せそうかな。今後の容態を診て随時スケジュールを調整しましょうね」

「はい……分かりました……」

古鷹の容態を確認した■■医師はこのまま高速修復材を摂取し続ければ一週間ほどで治癒が完了する可能性を診て、今後の検査や治療のスケジュールを調整するようだ。

次もまた艦娘達を診る為に■■医師は急ぎ足で病室を出ていく。

加古と二人で病室に取り残された古鷹は今の状況について聞いてみた。

「加古、今って……どうなってるの……？」

「……提督は拐われた。奪い返そうとした皆もやられた……誰も強化したアイツに傷一つ……つけられなかった……」

「そんな……！ 皆は？！ 瑞鶴さんは？！」

古鷹も提督を奪い返そうと強化した『貪狼』ディアボルフ集積地棲姫に挑むもあえなく敗北し、その後の記憶は全く無い。

加古が言うにはその後も集積地棲姫は派手に暴れたらしく、立ち向かう艦娘達全員を相手にしていたようだ。

唯一護神厄討艦隊の艦娘である『緞』レイ木曾と『黝』アオクロ蒼龍が前線に出て集積地棲姫を圧倒し、更にはビスマルクも参戦して一時は優位に立つものの集積地棲姫は更にエネルギー効率を強化して無理矢理『緞』レイ

木曾達を殴り飛ばしていた。

「一応無事ではいる……あたしぐらいの損害を持つてる艦娘がほとんどだけど……みんな今すぐ戦えるかは分からない。特に木曾と瑞鶴はかなりの重傷だった……」

「そう、なんだ……じゃ、じゃあ……殲滅された、んだね……あの……集積地棲姫に……」

「うん……今は翠色の木曾と青黒い色の蒼龍が見張ってくれてる。元々エネルギー効率が高い分、『耐久』で治るのが早かったらしい」
現在鎮守府近海海域の哨戒は『緞』^{レイ}木曾と『黝』^{アオグロ}蒼龍が十二時間交代で担ってくれている。

護神厄討艦隊の艦娘だろうと損害の爪痕は激しく残っていたが持ち前の『耐久』で無理矢理にでも回復。

またビスマルクは修復中の身体に負荷を与え過ぎた影響で島風と共に医療施設の病室へ移動して修復中のようだ。

「あと灰司令官と時雨が戻ってきてくれたよ。今この鎮守府の最高責任者は灰司令官が代役になって、鎮守府存続と運営の為に働いてくれる」

「灰さんが代行司令官になってくれるのか……ありがたいな」

灰色と時雨がすぐ駆けつけてくれた事を加古は嬉々として教えてくれた。

責任者且つ司令官に突然なってしまった灰色としては荷が重いかもしれないだろう。

灰色は自身がこの状況でやるべき事をやって鎮守府の建て直しと艦隊の復帰にいち早く手をつけている。

「……どうなるんだろうね。これから……」

この鎮守府の誰もが思うのは先の見えない不安。

提督を奪われ、戦意を削がれ、資材を失くし、何もかも無くなってしまう。

加古自身でも弱った身体で何が出来るのかと考えれば何も思いつかない。

他の艦娘達も戦意を削がれて途方に暮れていた。

文字通り崖つぶちにいるような感覚で一步間違った事をすれば落ちていくのは目に見える。

古鷹の問いに対して何も答えることができなかつた加古は窓の景色を見ながら精一杯考えた言葉で答えた。

「さあ……分からないな……」

「……！ やつと来てくれた……！」

昼の十四時。

不穏な空気が漂う鎮守府の空に皮肉にも太陽の光が輝く満点の青空が広がっている。

海から潮風が優しく流れていく広場で灰色と時雨は永遠に続く水平線を手で影を作つて覗いていた。

よく目を凝らすと海に浮かぶ艦娘が二人と輸送船一隻が見える。あの二人を待ち侘びていた灰色は嬉しそうに声を上げて手を大きく振った。

「遅くなつて悪いわね。ちよつと色んなところ回つてたから時間掛かつちやつたわ」

「お疲れ様です……」

「お疲れ……つてまあ、これまた酷い有様ねえ……昔を思い出すわ」

ようやく潮岬町鎮守府に訪れた『？』オウゲン 叢雲と摩耶は久しい長距離航行に疲れているのが肩を回して関節を鳴らしていた。瓦礫だらけの廃屋のような鎮守府の酷い現状に叢雲は苦笑いしながら樂觀そうに見ている。

「本当にですね……あ、早速で申し訳ないんですけど、後ろにあるそれは何ですか？ 中には何が……？」

灰色は叢雲と摩耶の背後にあつた輸送船を見て何かと問い質した。聞かれた叢雲はドヤ顔で堂々と答える。

「ふっふーん……！ 聞いて驚きなさい！ 全国の鎮守府から奪つ――じやなくて貰つた資材よ！ 弾薬、鋼材、ボーキサイト全て基準以

上で揃えて来たわ！」

「え!? 本当ですか!!?」

「本当よ! 予め『白』が各地の鎮守府と談話して繋がっていたのを摩耶から聞いてね、資材を少くしお裾分けしてもらっちゃったのよ」

「勿論提督が貯めてた分もな」

潮岬町鎮守府にて秘密裏に襲撃報告があつた際、摩耶と叢雲は今後の対応について話し合っていた。そこに摩耶が提督が前から各地の鎮守府を訪れて資材を分けてくれる交渉をしていた事を打ち明ける。

二人は早速輸送船一隻を借りて一日分の時間を使い、各地の鎮守府を訪れては交渉した分の資材を貰い受けていた。

「白さんが予め……?」

「そう。聞いた話によると各地の鎮守府から無償で資材を提供してもらうよう直接出会つて交渉してたそうよ。この鎮守府の印象って最悪だから申請書とか送つても無視されたようだし、電話で聞いても聞く耳を持たせてくれなかつたようだし。訪れても責任者たちは当然突っぱねたけど、白は諦めずに頭を下げて土下座までして交渉を続けていた。見せしめに周囲から蔑まれ嘲笑われながら土下座したようだけど……それでも彼は諦めてなかつたみたい」

提督は近い内に潮岬町鎮守府が破滅的状况に陥る事を考えて万が一の為に各地の鎮守府から資材を分けてくれるように交渉していた。提督は海軍一の減らず口且つ提督の正体を知る者がいた為、身内でも敵を多く作つていて直接訪れて話し合つても交渉は難航していた。

それでも提督は決して諦めたりはせず、頭を下げて土下座をしてまで資材を分けてくれるようにせがみ続けたと言う。

まさにその姿は滑稽と嘲笑われ、一部の責任者は提督に恨みが残っていた為か大勢の艦娘や関係者達の目の前で土下座させていたらしい。

今まで積み重ねてきた恨みを買つてきた自業自得ゆえの結果だろう。

しかし提督はどれだけ嘲笑われようとも全く諦めなかつた。

「何で……そこまで……提督がそんな事を……」

「冗談抜きで感謝した方がいいわよアンタ達。彼が交渉しなければこの鎮守府は終わってたわ。何で彼がそこまでアンタ達に干渉したがるか理由は分からないけど……彼がプライドを捨ててまで掻き集めた資材、無駄にしちゃいけないわよね」

この潮岬町鎮守府が破滅的状况に陥るまでに提督が度々出掛けていたのを灰色と時雨は思い出す。出掛けていた理由がこの為だと知って灰色と時雨は熱く拳を握った。

桃■中将の件も合わせて提督は自分達に希望の光を残し、そして立ち向かえるように託していた。鹿島の事を予め予想していたのか思惑は分からなくともあらゆる状況に合わせて提督は計画していたのだ。

「じゃ早速、資材運びでも手伝ってもらおうかしら。長門たちはどこにいるの？」

「長門さん達は今医療施設で治療を受けています。今すぐ力になれるかと言えば難しいのですが……」

「別に戦う訳じゃないんだし運ぶ事ぐらい簡単でしょ？ 大丈夫よ、私たちがいるから問題無いわよ。あ、でもちよつと様子見だけしておくかしら」

輸送船に積まれた大量の資材を倉庫に移す為に叢雲は艦娘達や憲兵達を呼ぼうと居場所を聞いていく。灰色は艦娘達の容態を考えて動けるかどうか不安そうに伝えたが、叢雲は問題無いと医療施設へ歩を進めた。

「艦娘達の容態くらいまとめてるでしょ？ 見せてくれる？」

「はい、これです」

「ふーん……鹿島といい、『貪狼』ディアホルフ集積地棲姫といい、派手にやってくれたわね」

天井に青い空が見える崩れた廊下を歩きながら灰色が渡した艦娘達の治療状況を軽く読み通していく叢雲。

予想の範囲内だったのか驚く事はなく鹿島と集積地棲姫に対して挑発的な態度で不気味な笑みを浮かべていた。

「叢雲さんでもあの集積地棲姫と戦うのは厳しいですか？」

「ん〜……一人で戦うなら少し怠ダレいくらいかしらね。まあ勝つけど」

『?』オウゲン 叢雲がもし『貪ディアボルフ狼』集積地棲姫と戦えばどうなるか、叢雲自身はあまり経験がない為一人で戦って勝つには少し手間がかかるそうだ。やはり最強と呼ばれていてもあの集積地棲姫は対となる存在らしい。

「皆さん注目してください！」

医療施設に辿り着いた灰色と叢雲達へ注目させるように響かない大声で憲兵達や艦娘達を呼んでいく。奥にいる全員へ伝える為の人から人へ呼び掛け、なるべく多くの人が聞こえるように指示を出した。

「叢雲さんと摩耶さんが資材を持ってきてくれました！ これより資材を倉庫に移すので動ける方は広場の方まで来てください！ 高速修復材についても随時使う予定です、ご協力お願いします！」

灰色の呼び掛けに話を聞いた憲兵や整備士達は快く協力してくれた。

帰還した『?』オウゲン 叢雲と摩耶の存在が大きかったようで、二人の存在は艦娘達も含めて不安や心配が一瞬で消え去るほどの安心感があった。

しかし不満を漏らす者は少なからず声を上げていて灰色の代わりに憲兵隊長と白髭が庇ってそれぞれ指示を与えている。

「何よ、随分とお通夜ムードじゃない。動かない兵器は鉄屑だって誰かに言われなかったかしら？ アンタ達も手伝いなさいな、動ける奴はいるでしょ」

医療施設に残った憲兵や整備士達を置いて全く動かない艦娘達に声を掛ける叢雲。

艦娘達の治療状況を確認していた叢雲は治療中でも動ける艦娘達に呼び掛けていた。

内臓損傷や骨折、外的損傷が多い艦娘は医療施設にて引き続き治療を続行させ、少しでも動ける艦娘は働くように灰色に指示させている。大量の資材を運ぶには艦娘の超人的な力が必要となってくる以上は否が応でも呼び掛けるしかなかった。

「鉄屑か……よくもまあそんな事が言えたものだよね」

「艦娘がどういう存在か、分からな——」わたし「艦娘は元々人間だった事ぐらい私でも知ってるわよ、それが何か？」

憔悴しきった表情を見せる最上や床を見つめて光を落とす鈴谷が艦娘達の思いを代弁して伝える。

しかし叢雲が台詞に被せて代弁した言葉を察して堂々と喋った。艦娘が元々人間だったという事実を深く受け止めて心が弱っている艦娘達を淡白な対応で答えている。

「今までモノ扱いされておいて何とも思わなかったのか？」

「まあ思わなかったと言えば嘘になるけど、一々そんな事気にしてたらキリがないと思わない？」

叢雲は艦娘が現れた初期の頃から戦い続けている数少ない超古参の艦娘だ。

艦娘の歴史を間近で見てきた叢雲はその歴史の中で生まれた事柄や現象を身をもって知らされている。

艦娘兵器思想の支配や人間派達の動向、良くも悪くも人間の本性や前を向いて生きる姿を見続けてきた。当然叢雲はその歴史の中では兵器という人として扱われない支配を受け続けている。

何十年も生き抜いてきた叢雲が艦娘が元々人間だったという事実に対して淡白な表情をしていた事に艦娘達は疑問に思った。

「確かに私達は元は人間よ。だけど艦娘になる事を承諾したのは艦娘になる前の貴女達。本人が承諾した上で艦娘になるんだから、今更落ち込んだところでどうしようもないわよ。自分が選んだ人生だもの」

「後悔とか、してないの……？」

「少なくとも私は自分自身が艦娘になった事に後悔はしてない。何かしら艦娘にならなきゃいけない理由があったし、自分が変えた自分の人生に後悔はしたくないわ」

叢雲はその場にいる艦娘達の誰よりも前向きな気持ちで心に思った事を正直に伝えた。

伝えていく最中でも叢雲は傍で見掛けた暁の治療を手伝っていく。嘘偽りなく話し続けていく其の姿は希望の光を放つ太陽の如く不

安や心配など消し去るような強靱な精神力で溢れていた。

「誰かが言つてなかつたかしら？ 艦娘わたしたちの存在は艦娘わたしたち自身が決める

事だつて。もし本当に兵器だと思つてたら出ない言葉だと思つけど、アンタ達はどこの誰かが言つていた台詞を復唱して艦娘達に問い掛ける。」

叢雲はどこかの誰かが言つていた台詞を復唱して艦娘達に問い掛ける。

暁の治療を終えて叢雲は黄金に輝く鎗を手に持ちゆつくりと立ち上がった。叢雲は復唱した言葉に対して自身は当然人間だと思つている事を遠回しに伝えていく。

ならば艦娘達はどなんだと再度問い掛けて選択の余地を与えた。

「勿論、人だ」

奥の廊下からはつきりと聞こえるような声が響く。

声の方向には治療を終えた長門が早歩きで歩いて来ていた。

頭全体や腹全体に包帯を巻き付け、骨折した左腕をギプスで固定している。目にくまが出来ながらも堂々とした表情で叢雲の方へ近づいてきた。

「考える必要など無い。我々は艦娘という人間として生まれ変わったのだ、そこに深い意味は無い。もし我々が艦娘にならなければならぬ理由があつたとするならば、それは大切な誰かを守りたかつたからかもしれない。それぞれ理由は単純且つ明確なものばかりだ」

「いいんじゃない？ 元々艦娘つてのは国と人間様を守る為に生まれたようなもんだからね、そういう心意気は大切だと思つて」

長門に連れて後を追うように歩ける艦娘達が次々と列を成して歩いていく。

足などを骨折して歩けない艦娘は不安そうな表情を消して真っ直ぐと覚悟を決めた表情で叢雲の方へ視線を向けた。

「いい表情じゃない。それでいいのよ……さ、んじゃ早速手伝つてもらうわよ。動けない艦娘はそのままでもいいわ、無理しないでね」

叢雲は動ける艦娘だけを連れて医療施設から出ていく。

精々動けるのは八名、心許ない人数と思えるが艦娘となれば百人力だ。

た。

物置にしまっていたブルーシートなどを使って倉庫の屋根を覆い、道を塞ぐ瓦礫は端に寄せて人が通れるように一時的に整備をした。まだ鎮守府門前に崩れた土砂の撤去や建物内にある瓦礫の撤去などやる事は山ほどあるものの、鎮守府にいる者達は着実に前へ進んでいた。

「瓦礫の掃除もだいぶ進んだわね、前より歩きやすくなったわ。まあ崩壊した建物に関しては請け負った■■大佐が何とかしてくれるでしよ」

「だといいんですけどね……」

翔鶴達との戦争後で修築中だった寮や司令部は再び崩壊。

爆風や殴打などの衝撃で窓ガラスはほぼ破壊され、壁には突き抜けてできた穴やひび割れた痕が見える。

建設会社には灰色から念の為に現場を封鎖して一時的な休止として連絡している。修築にこれまた膨大なお金が必要になるかと思っていたが鬼の■■大佐が負担してくれるなら問題ないだろうと叢雲は楽観的に考えた。

「さて……で？ どうする？ 行く？」

叢雲は鎗を左手で持ち上げて右手の平で左腕の小さな力こぶを覆う。一旦資材を運び終えて休憩中だった艦娘達にさりげなく話し掛けた。

「え……？ どこへ……？」

「どこって……アンタ達の提督奪い返すのよ。どうするのよ行かないの？」

戸惑いを隠せなかった時雨は思わず何も考えないで問い掛ける。

叢雲はさぞ当然のように惚けた表情で提督を奪い返す事を艦娘達に逆に聞き返してきた。

「そもそも私達戦えるような状況じゃ……」

「そんなもん高速修復材でも使えば治るでしよ、これだけ資材も集まった訳だし」

「でも力的に考えると圧倒的にあっちの方があると思うよ……」

「この私と摩耶達だけじゃ不満だって言うの？ 言っておくけど作戦なしに突っ込むほど頭は悪くないわ、ちゃんと考えるわよ……まあこれからだけど」

叢雲は時雨達の不安や心配の声をものともせず溢れ出る自信を胸に堂々と言い張る。

自分と摩耶達がいれば提督を奪い返すなど容易い事だと高らかに豪語した。確かに叢雲率いる護神厄討艦隊の艦娘であれば深海棲艦はおろか、七壊星さえも相手に出来る力を有している。

共に戦えれば心強いが、時雨や最上達にはその力を持っていない。仮に戦えたとしても立ち向かえるかどうか分からなかった。

「私達は行きます」

「つ……？ 不知火、川内……！」

叢雲の背後から暗闇へ抜けるように不知火と川内が早歩きで現れる。

戦う覚悟を決めたような表情は叢雲や時雨達を圧倒させた。

「私達の司令を奪われておいて何もせずに動かないまま、他人に助けを求めるなどあってはならない事……ここで時間を食っている暇などありません、即座に作戦会議を開いて動くべきだと思います」

不知火は頭に巻き付けた包帯を破いては放り捨て、灰色と叢雲に作戦会議を開くよう意見を提示した。自身にとって大切な存在である提督を助きたい気持ちは誰よりも溢れている。今更四の五の言っている暇は無いと過ぎていく時間に焦りを見せていた。

「……俺も行く。ここで指を齧^かって待っているくらいなら、少しでも誰かの為になる事をやった方がマシだ」

「私も行くネ。提督には忘れてはいけけない恩がある、必ず返さなきゃいけないの。だから……行くよ」

水平線が永遠に続く海から涼しい風が艦娘達の身体や髪を撫でていく。

天龍や金剛も同じく不知火に続いて提督救出に参加の意を示した。

「私達も行きたい！ 司令官を助きたいわ！」

「私達も出来るだけの事は援護します！」

暁や秋月も手を挙げて同行したいと願う。

その後を追うようにして提督を助ける為に艦娘達が続々と声を挙げていった。

海から吹いていた風が徐々に強くなっていく。

「よし！　じゃあ決まりね！　灰■、早速仮執務室で作戦会議よ」

「……分かりました。やるならとことんやりましょう……」

——白さんを、救出する為に！」

183. 残された点と点が線となり、光へ導く

『いやはや実に有意義な時間でした……ここに来て正解だったようです』

『貴女達の成長を見せてくれたお礼としてですが、貴女に二つほどいい事を教えてあげましょう』

『貴女の翔鶴は今、小笠原諸島父島にいます。そこで行うつもりなのでぜひ来てください。あと……コレを差し上げます』

『中身は、そうですね……簡単に言えば融合分離体。本来は艦娘を解体する……要するに人間に戻す為に使うモノですが……』

『それには少し細工してあります……もしかすれば私の手が無くても貴女の大事な翔鶴に戻す事が出来るかもしれませんよ。試してみてもは？』

「これより作戦会議を開きます」

資材の運搬を終えて夜を越えた翌日の朝八時。

仮執務室にて提督奪還作戦の作戦会議が開かれた。集まったのは艦隊の中心的存在『？』^{オウケン}叢雲、摩耶、灰色、時雨、不知火、川内、長門。

座高の低いテーブルを中心にホワイトボードを奥に寄せて灰色が当時の状況について説明する。

「白さんが拐われたのは鹿島の誘拐未遂時刻である午後二十三時十二分より約三時間後の午前二時十五分。『貪狼』^{ディアボルフ}集積地棲姫と手を組んでおり、叢雲さんや摩耶さんの外出中を狙った計画的な犯行かと思わ

れます。鹿島さんについてですが……長門さん」

「私が話そう。鹿島は『貪狼』ディアホルフ集積地棲姫とは上下関係、つまり博士と助手の関係性だったらしい。奴は事前にこの鎮守府の港へ船舶で来ていた。その中に提督を隠して逃げたと思われる、しかしだが問題は連れ去られた場所の特定だろう。今のところ何も手掛かりは無い」
鹿島の関係性について長門は手を挙げて説明する。

長門の発言から考えて鹿島は『貪狼』ディアホルフ集積地棲姫の助手らしく、日本に設置された鎮守府の艦娘に関する情報を全て集積地棲姫に伝えていた密告者だった。護神厄討艦隊の艦娘達の情報なども全て共有されており、長い年月を掛けて暗躍していたようだ。

今回の提督誘拐の件についても事前に考えていた素振りを見せており、提督を拐った後の事について灰色達は考えていた。

「確かにそうですね……どこへ行ったのか、突き止めるのにも時間が掛かりそうです」

「いや、そうでもないわ。アイツと鹿島の事だから彼を拐った後の事や時間を考えれば、大体の居場所は絞れるかもしれないわよ」
「と、なると……どこなんだ？」

鹿島と集積地棲姫が逃げた場所について情報が少な過ぎる事に灰色達は頭を悩ませる。

そこに叢雲が日本近海の地図を引っ張り出してテーブルに叩きつけた。

逃げた場所を特定出来るかもしれないと理由を述べて叢雲はペンを手に持ち地図に書いていく。

「私の予想としては大本営地下研究施設、横須賀鎮守府地下研究施設、青島、小笠原諸島父島……ぐらいかしら。遠い場所にはそう簡単に行けないはずよ、必ず設備が整った場所が確保出来る所を選ぶはずだわ」

「そういえばアイツらは提督の容態に関して結構くどく言ってたな。もし提督の身を案じるなら俺は遠い場所を選ぶような真似はしない。ただ小笠原諸島ってのも少し怪しく思えるな」

鹿島は提督を大事そうに抱え、集積地棲姫は身を案じて保護する事

を仄めかしていた。

よほど提督に対して慎重に扱う事に違和感を覚えた木曾は自身もそうすると話している。

艦娘の航行速度ではそう簡単に遠い場所へは移動出来ない。

叢雲の予想した小笠原諸島でも半日は掛かってしまう以上、それよりも遠い南方海域や北方海域には行かないはずだ。

誰しもそう考えた。

しかし長門は叢雲が予想した地点に大本営や横須賀鎮守府などが入っている事に少しげんなりしていた。

「しかし……奴は本当に上層部と繋がっているんだな……」

「ええ繋がってるわ。アイツは艦娘を開発した元人間の成れの果て、自分自身も実験台にするような救い難い難いドグサレくそ野郎よ。アイツはその才能と技術が認められて世界各国の軍の上層部と繋がってる」

叢雲も『ディアボルフ貪狼』集積地棲姫の事については嫌でも知っていたようだ。

元は人間だったらしいが艦娘を開発する段階の実験で自らも実験体となって参加し、その実験の影響で深海棲艦になってしまったという。その後も艦娘について研究し続け、研究で得た成果を利用して様々なモノを開発し続けていた。

「それらに目をつけた上の人達はアイツとある契約を結んだ。世界の更なる発展を約束する代わりにその際に行う実験や試験など一切の責任を問わない事且つ、最優先保護対象として命の危機に瀕した際には私達護神厄討艦隊が出撃して保護する事、万が一予想外の状況で敵対した場合には司令官自ら指示をして艦隊に戦闘禁止の命令を促し、見逃さなければならぬ事などの約束があるわ」

「何だよそれ……理不尽だろ……!」

「実際アイツがあげた実績の裏はドス黒いわよ。前に発表された無尽蔵のクリーンエネルギーなんてアレは元々艦娘のエネルギー核を利用してるからね。気象制御装置も本来は国際条約違反だし、人工食糧は本当に貢献してるから別だけど」

希少な才能や技術を持つ集積地棲姫はありとあらゆる国際機関や各国の軍から手厚く保護されている。しかしそれ等は不平等条約のようなもので、集積地棲姫の行動を全て認知した上で責任を取らなくていいと言う理不尽の極みだった。

叢雲が言う限りでは集積地棲姫が挙げてきた実績の裏では凄まじい数の艦娘や人間達を犠牲にしてできた事らしい。

「んでアイツ関わってる国は伊、露、英、仏、米、芬、独、日本の八ヶ国で、オプザーバーに台、中、西、波、蘭がいる。その国々の集まりを【国際機関GPAK】……最初に●☒^{ぐろ}●博士を発見した日本が主導権を持ち、同盟国達と情報と技術を共有しているわ。そして上の人達は技術の喪失と漏洩を防ぐ為に集積地棲姫……いや、●☒^{ぐろ}●という男をひたすら隠し続けている……今もね」

集積地棲姫と関係のある国は八ヶ国、これらを同盟として国際機関【GPAK】を立ち上げ、お互いに手を取り合いながら世界の更なる発展の為に集積地棲姫と共に技術を磨いている。その他今後加入する国は傍観者として五ヶ国を招き入れており、艦娘の開発が急がれているようだ。

世界の中心で暗躍する集積地棲姫を各国は喪失を恐れて表舞台に出ないように縛り付けていた。

これが『貪^{テイアボルグ}狼』集積地棲姫が神出鬼没と言われる所以となった理由の一つである。

「だから本来この件についても『緞^{レイ}』木曾や『黝^{アオククロ}』蒼龍、貴女達は契約違反として罪に問われる可能性があるのよ。これを聞けば上層部は怒り狂うか青ざめるかのどちらかでしようね、なんとたつて世界を敵に回しかねない出来事だからタダじゃ済まないわ」

「じゃ、じゃあ僕達は……」

「うーん、まあまずこっぴどく叱られて酷い仕打ちを受ける事は間違いないわね。そしてアイツの実験体となって永遠の一生を過ごし続けるか、ぐらいかしら」

叢雲が冷めた表情で呆気なく伝えた後に、時雨達は深刻そうに顔を青ざめさせる。

「まあでもこれは、あくまでも私と■■■大将が上に報告した場合の話、
なんだけどね。命拾いしたわね」

口を止めた時雨達を見て叢雲は可能性の話だと笑いながら冗談の
ように話した。

今回の件について叢雲は護神厄討艦隊の旗艦として上層部に報告
しなければならぬ義務があるそうだが、面倒事が起きると厄介なの
で集積地棲姫の事は報告しないと明言した。

寧ろ上層部に対して良く思っていないようで表面上では素直に
従っているものの、裏では悪態着くほどストレスを溜めているらし
い。

「話がズレたわね。彼とアイツ達の居場所について少し情報が必要だ
わ、何かいい方法は無い？」

「私から提案があります。一度集積地棲姫の襲撃を受けた艦娘達の話
を一人ずつ聞いていくのはどうでしょうか」
「私達にか？」

話が脱線し掛けた所で叢雲は提督を拐った鹿島と集積地棲姫の逃
げた場所について情報不足だと断定。何か情報を集める方法が無い
か灰色と時雨達に問い掛けた。

そこに灰色が手を挙げて艦娘達に話を聞いてみるのはいかがでしょうかと提
案する。

「はい。襲撃時に長門さんや木曾さんが鹿島や集積地棲姫の話を知り
ていたように、他の娘達も何かしら聞いている可能性があります。例
えば倒されても意識がある状態で二人の会話を聞いていた、とか。話
を聞くとかだけでもやってみる価値はあるかと思えます」

「確かにそれはアリね。今話を聞く限りだとあの二人にプライベート
シーとかはそれほど無さそうに思えるわ」

「あ、あの……」

灰色と叢雲が意見を交わす中、申し訳なさそうに手を挙げて声を出
す艦娘がいた。全員が声の方向に振り向くとそこにはドアに半分身
を隠しながら恐る恐るこちらを見る伊168と伊8がいた。

「伊168？ どうしたの？」

「実は……その……」

「皆さんが戦ってる時に私達……バレないようにあの深海棲艦が乗っていた船に発信機付けたんです……」

治療を終えた伊168が背中から片手に防水パックに包まれた少し大きめの液晶画面付きのGPS発信機を灰色と時雨達に見せる。

伊168達潜水艦は不知火らが『貪狼』集積地棲姫と戦闘中の間に別行動で潜水し、誰にも気付かれなないように停泊していたドライブ船に発信機を取り付けていた。

「発信機……どこでそんなものを？」

「もし提督が拐われそうになった時の為に瑞鶴さんが以前に翔鶴さんが使っていた情報機器の一つを持ってきてくれたんです……皆さんに差し上げます」

伊168は発信機を灰色と時雨達に渡す。

伊168が使っていた発信機は元々翔鶴が提督を監視する為に使われていた物で翔鶴は■■少尉が残した物をそのまま流用していた。戦争後には不必要となった為に使わずにいたが妹の瑞鶴が念の為に潜伏行動がしやすい潜水艦達に渡して取り付けてもらうように頼んでいたらしい。

「位置からして横須賀と大本営でない事は確かね。となると……」

「小笠原諸島かその他周辺の島、になる……」

「いや確実に……小笠原諸島父島です」

仮執務室のドアの手前にいる潜水艦達の奥から加古に支えられて歩く古鷹が現れる。

高速修復材の影響で先に治療が終了した右腕を使って加古に介護してもらいながら仮執務室までわざわざ来ていた。

まだ左腕の複雑骨折や頭部外傷、内臓の損傷は完治していない分痛々しく見える。

流星に長門が心配そうに声をかけた。

「加古に古鷹……！ 大丈夫なのか、その身体で……!?!」

「問題ありません。高速修復材のおかげで歩ける程度までには回復しました……」

「……で、彼が拐われた場所が小笠原諸島父島である根拠は？」

古鷹の重傷を無視して叢雲は提督が拐われた場所が何故小笠原諸島父島だと断定出来るのか問いたです。

古鷹は少し顔を俯かせ唾を飲んだ後に口を開いた。

「鹿島が私に残した言葉です。私達は小笠原諸島父島で待っている、必ず提督を助ける、と……そして摩耶さんなら分かるはずだとう言い残しました……『運命とは、最もふさわしい場所へと、貴女の魂を運ぶ』……摩耶さん、どうでしょうか」

鹿島から伝えられたメッセージを簡潔に伝える古鷹。灰色達を試すかのように冷や汗を掻きながら緊張した視線を絶やさなかった。

そして灰色達から摩耶へ視線を移し、その言葉について確かめる。

摩耶は瞼を少し閉じて右手を見た数秒後に古鷹と目を合わせた。

「……ああそうだな。鹿島ならそうするだろうと思った……叢雲、作戦地点が分かったぞ」

「オーケー、摩耶が言うなら間違いないわ。ならコイツを出しても構わないわね！」

摩耶は鹿島のメッセージについて何か確信があったのか珍しく微笑みを見せた。

作戦地点が分かったとなつて叢雲は仮執務室の隅に置いていた筒状にまとめられた地図を手取る。意気揚々と叢雲はその地図を時雨達が囲んでいたテーブルへ勢いよく叩きつけて見せびらかした。

「これは……何だ？」

「小笠原諸島父島にある深海棲艦の巨大前衛基地の全貌、小笠原諸島奪還作戦の時に使つてる資料よ。凄いでしょ？ 確認しただけでも海岸線沿いに百二十門の沿岸砲と対空砲、ミサイルに二百個近くの対艦娘用エネルギー感知型炸裂式浮遊機雷が設置されてる。余程ここが重要な奴らは島の中を改造して巨大な軍事施設を作り上げた。注目してほしいのがこの巨大な穴、この穴には年前に見られた巨大な塔と酷似している塔のような建造物があったわ。どういう物かはまだ分からないけどね」

現在の小笠原諸島父島は深海棲艦の大規模な前衛基地として改造

されていた。

島の沿岸には無数もの無人沿岸砲、レイピアシステムを応用した地对艦誘導弾や無人対空機関砲。周辺の海域には対艦船や対艦娘に特化した機雷などと近付くことを拒ませるほどの重装備なのが伺える。

更には島南部の地下に巨大な施設を建てており、以前の偵察作戦時に飛龍と蒼龍が確認した禍々しい黒い三本の塔も地図に記されていた。

「塔のような建造物を取り囲むようにドーナツ状の地下軍事施設がある。地下にある階層は地下一階から地下三十階まで、深さは約百メートル以上よ」

「島の地下にこれだけの軍事施設があるのか……一体どこでこんな技術を……」

「一部は鎮守府の地下軍事施設を利用してるわね、これも集積地棲姫のおかげよ。金と資材は各国からたんまり貰ってるらしいし」

地図に描かれた島内部の地下軍事施設について叢雲はペンで囲みながら説明していく。

想像以上に発展を遂げていた父島の前衛基地に時雨達は作戦について悩んでいた。

「つていうか何でこんな易々と深海棲艦の前衛基地の内容が分かったんだ？ 表面上の沿岸砲や対空砲、巨大な穴や塔ならまだしも地下施設の詳細までは分からないだろ」

『^{ディアボルフ}貪狼』集積地棲姫に欲しいって言ったらくれた」

「マジで何なんだよアイツ腹立つな」

父島の全体的な地図や巨大な地下軍事施設について天龍は詳細な情報が得られる事に疑問に思った。叢雲曰く、『^{ディアボルフ}貪狼』集積地棲姫に直頼みした結果、嬉々として快く持ってきてくれたらしい。敵か味方か白黒はつきりしない集積地棲姫に対して天龍は頭を搔いて苛つきを見せた。

「さて提督を救助する上でやる事は三つ以上、この巨大な軍事施設にどうやって潜入するのか、施設のどこに提督がいるのか、救助後の脱走ルート計算、そして作戦の大まかな流れ、考える事は山ほどあるわ

よ」

「まずはそれぞれ役割を持つ艦隊で別けて考えてみてはどうでしょうか。潜入と捜索をして司令を救助する役割、殿を務める役割、陽動の役割。人数は限られますが、必要かと」

提督を救出する作戦にあたって必要な事項はいくつも存在する。

どうすれば施設に潜入しつつ提督を捜索し、救出するのか、不知火は手を挙げてそれぞれ役割を分担するように提案した。

施設に潜入して提督の居場所を突き止める捜索班や七壊星などの深海棲艦を引きつける陽動班、提督を鎮守府まで護衛する護衛班などやるべき事は沢山だ。

「それについては私が決めていきたいと思っています。仮として今は潜入捜索艦隊、陽動艦隊、護衛艦隊に別けています。それぞれ意に沿わないかもしれませんが、そこは把握しておいて下さい」

「オーケー、分かったわ」

「了解しました」

救出作戦の役割を事前に把握していた灰色は艦隊編成や役割分担を担うと決めていた。

作戦実行権限かつ救出作戦の総司令官としてやるべき事だといち早く理解している。灰色の指揮に対して叢雲や長門は意見も無く承諾した。

「ねえ確か近々小笠原諸島奪還作戦があるんだよね？　ならその作戦と同時に私達の提督を救出する作戦を並行して行えないかな？　陽動的な意味でもリスクは減らせるよ」

「確かに。深海棲艦が別鎮守府の艦隊と戦っている隙に潜入すれば敵する確率は少しでも減るね。作戦決行の日はいつなの？」

「小笠原諸島奪還作戦決行日は明明後日の深夜四時よ。まあ作戦の並行は悪くないわね、私が潮岬町鎮守府の艦隊として出撃できる理由にもなるし、万が一の事が起きても護神厄討艦隊の艦娘や味方は大勢いるから応援を呼ぶことも出来る上に七壊星相手でも対処できる」

川内や時雨が提督救出作戦について近日行われる小笠原諸島奪還作戦と並行で出来ないか論じていた。提督救出の為に欠かせない陽

動班を小笠原諸島奪還作戦に参加する艦隊に任せて潜入と搜索に割り当てる案を考えた。

叢雲は悪くない方法だと作戦日時を伝えた後に地図に丸や矢印を描いて味方艦隊と敵艦隊の同行などを示していく。

「私もその意見に賛成だ。役割の負担はより軽くなるだろうからな。作戦は並行して行った方が良さそうだ」

「でも作戦決行の日までに提督に何かあつたら……それこそ時間は無いんじゃない……」

傍で聞いていた伊168が口を手で覆いながら震えた声で不安を漏らした。

それを聞いた長門達は顔を曇らせる。

すると伊168の背後にいた古鷹が伊168の肩に触れながら真つ直ぐ摩耶を見て口を開いた。

「さつき天龍さんが言つてたように鹿島や集積地棲姫は提督の保護を最優先としてる。確かに無事ではない可能性もあるから急ぐべきだけれど……」

「かと言つて、この作戦は今すぐあたし達だけで実行できるようなモノじゃない。どうしても他の人の力が必要なんだ……だから今は……信じるしかない……」

信じる。

そこはかかない微かな希望を信じるには無謀にも思えた。

未だ鹿島が提督を攫つた本当の目的も知らないままである以上、提督が五体満足で帰つてくるとは決して限らない。

確証の無い希望を信じる他に今の状況を覆す術は無かった。

「っー」

手を叩く音が聞こえた。

音の方向へ振り向くと灰色が自信満々な表情で注目を集めていた。

「作戦会議の続きをしましょう。大丈夫です、白さんなら問題なく待っていますよ。助けに来たら嫌味でも吐いてくるに違いありません。生きている事を信じましょう！」

今は落ち込んでいる暇など無いと灰色は長門達を元気づける為に

励ました。

数々の死線を潜り抜けてきた提督であれば安否確認など必要ないだろう。

きつと余裕の表情でもしながら優雅に待っているはずだ。

灰色の言葉を聞いて長門達は元気を取り戻して再度目を覚ました。

それを見て灰色は作戦会議の進行を進めていく。

「さて……話を戻しますが作戦決行の日は明後日の十月二日深夜四時、小笠原諸島奪還作戦の決行時間と並行して行う事にします。次に潜入方法ですが、何かありますか」

次の議題は父島地下にある巨大な地下軍事施設に潜入する方法。

先程叢雲が説明したように父島沿岸には大量の沿岸砲や対空機関砲、周辺海域には炸裂式機雷が設置されている。

島内部に辿り着く事は疎か、海域に近づく事すらままならない。

どうやって弊害なく巨大な地下軍事施設に潜入するか考えていた。

「それについては私の中で思いついたいい方法があるわ」

叢雲が声を挙げて潜入する方法について醸し出すような言葉を言う。

その気になる方法について灰色は問い掛けるも叢雲は人差し指を上を指して何かを示唆した。

「……………え？　空？」

184. 鉄は叩けば叩くほど強くなる

横須賀鎮守府地下研究施設B7F。


埃一つない清潔に保たれた白い床、いくつものガラス張りの部屋に挟まれた廊下をゆっくりと歩いていく。中の部屋には誰一人として人間はおらず、歩く靴の音が響くほど閑散としていた。

「どういう訳か、説明してもらえないだろうか」


奥のガラス張りの部屋で何かが荷物を整えて出掛ける支度をしているのが見えた。


「 」

声を掛けられたのは●博士、またの名を『ディアボルフ貪狼』集積地棲姫。

横須賀鎮守府地下研究施設長である集積地棲姫は●●という仮の名前を使って横須賀鎮守府の軍事施設を専用拠点に各国の軍事施設を転々としており、軍事研究を中心に世界を裏から支える存在として暗躍している。

照明の消えたガラス張りの部屋がちらちらと並ぶ中で白く光る蛍光灯に照らされた部屋にいる集積地棲姫は休憩の為に椅子にゆっくりと座った。

「おやおやこれは■大将殿、おはようございます。この件についてですが、少し興味深い事があります。……逃がしてみました」
「貴様のろくでもない考えの所為でどれだけ迷惑がかかっていると思っっているんだ。以前のように大人してくれ」

■大将が持つ監視用タブレットには『緊急停止装置拡張型拘束檻第五十七番：LOST』と書いており、収監されていた名前は潮岬町鎮守府所属翔鶴型航空母艦一番艦翔鶴と記録されていた。

以前潮岬町鎮守府で提督の殺人未遂を謀った反逆因子を横須賀鎮守府で保護の名目の元、艦娘と深海棲艦が融合した翔鶴を貴重なサンプルとして研究していた。艦娘と深海棲艦という対となる存在をそれぞれ長所と短所を持って生まれ変わった翔鶴の存在は研究者達にとって目新しいモノであり、今後の研究を大きく発展させるモノだった。

しかし集積地棲姫の突然の気まぐれによつて収監されていた翔鶴もとい空母水鬼は集積地棲姫が仕組んだ事によつて隔離された檻から脱監。

この事を報告書に記載させていなかった集積地棲姫に対し、**■大**将は苦言を申し立てるためにわざわざ会いに来ていたのだ。

「すいませんがそれは出来かねます。これから面白い事があると分かつては動かすには無理ですね……！ 申し訳ありませんが今回の研究は一時中断、メンバー達には既に連絡しています。私は小笠原諸島父島へ向かう事にしました」

集積地棲姫は一時的に全て担当していた研究を中止させ、小笠原諸島父島へ向かう事を今更報告した。聞いていた**■大将**は何故この翔鶴に興味を持つているのか理解できずにいたが、言動からして何か企みがあるのは間違いないだろうと考える。

「……貴様、今度は何を企んでいる」

「悪い事ではありませんよ、貴方達の作戦は邪魔しません！ 私は姉妹の感動的な再会を見たいだけです……それに……『ABC計画』の阻止……って言えば貴方であればご存知ですよ。艦娘を愛する私としては阻止しなければなりません」

「誰から知った？ その情報は」

「私の助手からです。とても有能で助かりますね」

小笠原諸島奪還作戦について知っていた集積地棲姫は作戦の邪魔はしないとキツパリ明言する。『ABC計画』と声に出した途端に**■**

■大将は一瞬頬を引き攣らせながらも敵視する表情は崩さない。

「私の予想でしたら……例の組織が何年も前から動いている可能性が
ありますね。某国際機関委員長はどういうご判断で？」

「計画阻止に揺るぎはない」

「なるほど。それは素晴らしいです」

集積地棲姫はこの『ABC計画』について全ての情報を既に把握しており、計画を止める算段やその後の報復などを既に考えているようだ。世界の発展を願う国際機関GPAKは艦娘の存在を肯定的に見ている為、集積地棲姫は『ABC計画』についてどう対処するのか気

になっていた。

■ 大將は辛辣な対応で最低限の情報を集積地棲姫に教える。

「では研究員達にも言っておいてください。各自、自由にしてください、と」

二人は部屋にてすれ違う。

「私は……お前を信じるつもりはないぞ」

「これは……悲しい、と言えればいいのですかね」

「潮岬町鎮守府で何かが起きたな……」

■ 大將はタブレットの画面に提督のプロフィールを表示させ、誰もいない部屋の中で独り言を呟いた。

「ええ!? 遙か上空から落下して潜入する!!?」

廃墟のように崩れ掛けた講堂のラウンジにて治療中の瑞鶴と木曾を除いた潮岬町鎮守府に所属する艦娘全員が集合していた。灰色が地図や資料を貼り付けたホワイトボードを背に作戦について説明している。作戦の内容を聞いた五十鈴が大声を上げて驚いた。

「はいそうです。潜入搜索艦隊は高度約一万フィートから輸送機にて降下し、他の艦隊と深海棲艦が戦闘中による混乱に乗じて地下軍事施設へ潜入します」

灰色が事前にまとめた作戦内容の資料を片手にホワイトボードへ指し棒で注目させながら説明していく。

提督の救出作戦は近日行われる小笠原諸島奪還作戦を利用して行う潮岬町鎮守府限定の秘匿作戦だ。潮岬町鎮守府以外の誰にも口外は許されず、作戦中にも味方には悟られてはいけない。

提督が拐われたという事実を知られれば上層部は黙っていない可能性があり、何かしら強硬手段を投じてくるはずだ。決してミスを隠したいが為に知られたくないわけでは無い。潮岬町鎮守府に所属する全員の命を守る為に秘匿する必要性があるのだ。

「地下軍事施設に潜入する潜入捜索艦隊と護衛艦隊、陽動として小笠原諸島奪還作戦に参加する攻撃艦隊の三つに分けられます。潜入捜索艦隊は提督の捜索と救出、護衛艦隊は救出した提督の護衛、攻撃艦隊は小笠原諸島奪還作戦に参加し、この救出作戦の陽動の役割も担ってもらいます」

提督の救出作戦は三つの役割を持つ艦隊によって行われる。

地下軍事施設に潜入して提督を捜索または救助する艦隊、救助後の提督の身を護る為に身体を張って潮岬町鎮守府まで護衛する艦隊、小笠原諸島奪還作戦に参加して深海棲艦の気を引く他鎮守府との連合艦隊と組み合わせた攻撃艦隊。

それぞれの艦隊を用いた作戦の流れを灰色と不知火が交互に補足して説明していく。

「作戦のフローチャートはまず小笠原諸島奪還作戦の開始時刻■月■日午前四時に合わせ、提督救出作戦を開始。潜入艦隊は作戦開始時刻から三十分前に空軍の輸送機にて離陸し、鎮守府合同の連合艦隊と深海棲艦との戦闘を確認次第、降下」

「連合艦隊の戦闘中に施設に潜入して提督を捜索。護衛艦隊は攻撃艦隊と共に行動し、提督救助の報告が来るまで待機しててください。深海棲艦の接敵やその場の状況については灰■司令と『？』オウゲン 叢雲さんの判断を仰ぎます」

提督の救出作戦の総指揮感として灰色と『？』オウゲン 叢雲が小笠原諸島奪還作戦と並行して双方の作戦指揮を執っていく。

作戦途中では深海棲艦の接敵や提督の捜索状況について把握すべき事が沢山ある。

その際には灰色と叢雲が率先して指揮を行うようだ。

「白さんを発見した場合、場所と戦況の状況報告をしてもらってこちらで考えた脱出ルートへ案内します。連合艦隊と深海棲艦の戦況を見て護衛艦隊はどきどきに紛れて連合艦隊と離れて合流地点に待機してください。潜入捜索艦隊と合流した後に提督を抱えて施設から脱出します」

「父島周辺にはエネルギー感知型炸裂式浮遊機雷が至る所に設置され

ていますが、深海棲艦用にいくつか回避ルートが残っていますのでそのルートを利用して脱出します。ルート近くにある機雷には赤い光で分かりやすく設置されているので大丈夫かと」

提督を救出後は独自の脱出ルートへ灰色が指示をして誘導し、護衛艦隊は戦闘中に攻撃艦隊と交代して合流地点へ向かってもらう。

父島周辺海域には沢山の浮遊機雷が設置されているものの、小笠原諸島奪還作戦の為に事前に調べた偵察艦隊よって深海棲艦用に作られたルートがいくつかあるらしく、そのルートを利用して脱出する作戦だ。

「なおこれら全てはあくまでも作戦の大まかな流れです。作戦途中に七壊星との接敵や提督救助中にトラブルが発生するなどのイレギュラーが必ず起こります。各自その事を把握しつつ挑んでもらいたいと思います」

「はー!!」

灰色の呼び掛けに応じて艦娘達は一斉に声を挙げて意気込む。

小笠原諸島奪還作戦と同時に進む提督の救出作戦はこれまで以上に過酷で危険のある作戦だ。命を落とす事すら容易く行われるかもしれないほど危険度がある。

決して作戦の流れが上手く行くとは限らない。

必ず障害が立ちはだかるはずだ。

「次に艦隊編成です。潜入搜索艦隊は『?』^{オウゲン}叢雲さんと『緞』^{レイ}木曾さんが旗艦で単騎搜索や施設内にいる深海棲艦の陽動を担い、それを中心にそれぞれ二人一組のペアを組んで搜索してもらいます。時雨と古鷹、天龍と金剛、長門と不知火、摩耶と川内、以上がペアの編成です」
「護衛艦隊には旗艦を鳥海として、飛龍、蒼龍、秋月、涼月、ビスマルク。攻撃艦隊は旗艦を北上、扶桑、祥鳳、鈴谷、球磨、白露。第二攻撃艦隊の旗艦を武蔵、神通、加賀、電、雷、青葉。以後は皆さんと交代して艦隊を再編成し、連合艦隊の援護へ向かいます。何か質問はありますか?」

提督救出作戦と小笠原諸島奪還作戦における艦隊編成について灰色と不知火は一人ずつ名前を呼んでいく。順に述べた後に質問は無

いかと問い掛けると浜風が手を上げて立ち上がった。

「あれほどの損傷を受けてた古鷹さんは大丈夫なんですか？ 少し心配だなと思って……」

「大丈夫だよ、ちやちやつと高速修復材で修復させたから。それに私個人としてもこの作戦には参加したい気持ちがある。ちよつと無理言っただけだね」

「■■先生から出ても構わないという判断をもらっています。治療完了報告書と共に判断して、私としても大丈夫だろうという結果に至りました」

先日の『ディアボルフ貪狼』集積地棲姫の襲撃によって酷い損傷を受けた古鷹は

■■医師の懸命な治療や古鷹自身の努力によって完全とまではいかなくともほぼ出撃しても問題ない程までに治癒していた。

浜風の質問を代わりに答えた古鷹が腕を振り回して元氣そうに答え、それを見た加賀が手を挙げて灰色に質問した。

「瑞鶴と木曾は今も治療中、かしら？ そうなると二つの作戦参加は難しそうだと思うのだけれど」

「はい、二人は現在も各部の損傷が酷い為に治療中です。この作戦と小笠原諸島奪還作戦には参加させない方向で考えてはいます」

古鷹と同じく酷い損傷を負った木曾や瑞鶴は今もなお■■■■医師の治療を受けている。

■■■■医師から当分の出撃は不可能と判断され、二つの作戦には参加させないように灰色と二人で話し合ったようだ。

加賀自身も二人が無理してまで参加するのをあまりよく思っていなかったのか、灰色の話聞いて安堵していた。

「なら……いいけど」

「基地の潜入中に七壊星が出たらどうするのですか？ あの叢雲さんと木曾さんが出張るのですか？」

「そうですね。作戦の流れでは小笠原諸島奪還作戦が先に始まってから提督救出作戦が始まるので、恐らく七壊星は島を出て連合艦隊にいる護神厄討艦隊の艦娘と戦闘する事になるかと思えます。なので基地の中に現れる可能性は低いでしょう」

扶桑が七壊星の対策について不安げな表情で手を挙げて質問する。もし潜入中に地下軍事施設で七壊星と接敵した場合は『？』オウゲン 叢雲が対応にあたるように事前に対策はしている。

一応作戦上では小笠原諸島奪還作戦の連合艦隊と戦闘中の予定なので地下軍事施設の中で接敵する確率は低いだろう。

「でも低い、なんだね。必ず現れないとは限らない……でも上手いけば深海棲艦のチームワークを掻き乱す事が出来るわけだ。どちらにせよ覚悟は決めるべきだね」

「そうですね、覚悟をもって挑みましょう。白さんの為に、私たちのためにも……この時が……運命の分かれ目です」

灰色は二つの作戦が如何なるモノなのか、唾を飲んで真っ直ぐ目を見開き覚悟を決めた。

この二つの作戦で自分達の未来や国の未来の方向が決まる。

今まで学び鍛えた鍛錬の日々、深海棲艦と人間の混血である提督の真意、七壊星という強大な存在、鹿島の裏切り、全ての艦娘の祖を生み出した集積地棲姫。

皆の想いはこの時まで生き続けて積み上げてきた希望の証だ。

「以上でミーティングを終わります。質問がある人は私に直接聞いてください。潜入艦隊の艦娘は今夜午後十八時鎮守府門前に集合してください」

「……っ……」

夕方の十七時半。

鮮やかな橙色の光が差し込む照明の消えた寮の廊下を早歩きで歩く艦娘がいた。

歩いていく度に夕陽の光は消えては現れての繰り返しで点滅するかのように艦娘の姿を照らしていく。

「駄目ですよ」

「……」

否定する声が聞こえた。

艦娘の目線にはちようどよく曲がり角で日陰となった階段で、下る階段の踊り場には灰色が出待ちしていた。

「瑞鶴さん、何をしようとしてるんですか」

窓から漏れる夕陽の光を背に瑞鶴は踊り場にいる灰色を見下ろす。

灰色は真面目な表情を全く変えないままどこかへ行くつもり
の瑞鶴を睨んだ。

「……アンタには関係ないでしょ」

「作戦に参加する、というのなら私に直接伺ってみてはどうですか？」

瑞鶴はあからさまに嫌な表情で目を逸らして階段の一段に足を落とす。

灰色は瑞鶴の意図を知っている前提で話し掛けた。

瑞鶴は一瞬顔を揺らし、再度灰色を睨み返す。

「それを聞いて、アンタは参加させてくれるの？」

「いえ、しませんよ。勝手ながら心身共に傷を負っている貴女達を守る役目があるので、当然この作戦に参加させるつもりはありません。恐らく木曾さんも今頃摩耶さんに止められてる所でしょう……でなければ……ここで貴女達二人を待っている意味が無いですから」

瑞鶴の影に染まる灰色は瑞鶴や木曾が作戦内容を盗み聞きして身体
の無理を考えずに参加する事を予見していた。

『貪狼』テイアホルフ集積地棲姫の襲撃で破滅的大敗を決した瑞鶴や木曾は屈辱的なまでの仕打ちを受けており、提督を奪い返せなかった事や七壊星に対して無力だった事に負い目を感じていた。

「私なら大丈夫よ。姿見れば分かるでしょ？」

「どうやって修復されたんですか？ まさか……耐え抜いて修復させた、訳ではありませんよね」

瑞鶴の身体の至る所にある治癒した直後に見える傷痕を見て灰色は何かを察したのか僅かに眉を寄せる。瑞鶴は右手で左腕を掴み視線を真下に逸らして重々しく伝えた。

「アンタの言う通りよ。怪我は我慢して治した……痛過ぎて五回ぐらい意識は失ったけど」

瑞鶴が行ったのは高速修復材の直浴び、点滴による時間経過の摂取

ではなく高速修復材の原液を自ら全身に浴びて身体の傷を修復させていた。

高速修復材は艦娘の格納された損傷後の艦装や身体の傷等を全て修復させる力がある。その際に生々しく残る身体の傷の修復は高速修復材を摂取したエネルギー核が活性化する事で、細胞や神経を損傷部分から直で再構築していく為にとてつもない激痛が身体全体に伝わるようになっていく。

集積地棲姫の攻撃をまともに受けている瑞鶴は瀕死状態から■
■
医師の応急処置で一命を取り留めるも、複雑骨折や内臓破裂などの身体の損害は計り知れない。

その状態で高速修復材を直浴びで摂取すれば折れた骨は細胞や筋肉をすり抜けて外へ飛び出し、一から新しく骨が再形成されていく。破裂した内臓は損傷部分から隙間を埋めるようにして再形成されていき、不要な血液は口や肛門などから排出される。

そのような地獄とは生温いような事を瑞鶴や木曾は自力で耐え抜いて完全回復を成し遂げていた。

「そこまで無理をして……何故作戦に参加したいのか聞いてもいいですか？」

「……ただ単純に、提督さんにはお世話になってるから……せめて帰って来て、またこの鎮守府を支えてほしいと思っただけよ」

「それだけじゃない……貴女は翔鶴さんの事を気に掛けている。あの集積地棲姫に頼んだとはいえ確実に救えると言える保証はどこにもない。訳も知らず聞けば命知らずの愚か者……いや、裏切り者と揶揄されてもおかしくないんですよ……死ぬ気ですか？」

凶星を突かれた瑞鶴は頬を引き攣らせる。

灰色の言う通り、言われた事は全て本当だった。

「酷い言われようね……まあでも、間違つてないわ。私だって出来ればこんな事にはしたくなかった」

瑞鶴は赤い液体が入った注射器を持った右拳を胸に当てて顔を俯き、灰色に心情を赤裸々に語る。灰色と目を合わせずに階段を一段ずつゆつくりと降りていった。

「でも翔鶴姉を救う方法はこれしかない……多少のリスクを背負ってでもやるしかないの。确实じゃない？ 保証なんてない？ だってら少しは自分で動いて確実にするようにはやるしかないんじゃないの？ その為なら私は私を捨ててだってやってみせる……これは私個人の事情よ、皆は関係ないわ」

ようやく灰色と目を合わせた瑞鶴は踊り場まで一段の所まで降りていき、足を止めた。

瑞鶴も灰色と同じく階段の影に染まる。夕陽が陸へ吸い込まれていくように消えていった。

「だから貴方が私を止めようとあらゆる手段で動いても、私は必ず作戦に参加する……それは貴方も分かっているはずでしょ？」

今度は灰色が目線を下にそらして顔を俯かせる。凶星だったのか僅かに溜めていた息を漏らすも、臆する事なく瑞鶴に反論した。

「……いずれにせよ私は貴女を止めなければなりません。方法はともあれ、今は大人しく待ってくださいますか？ 瑞鶴さん」

止めようと瑞鶴の前に立ちはだかるも灰色は目の前まで来た瑞鶴に対して手段は何も持つていなかった。

瑞鶴の言う通り、灰色は瑞鶴を止める事が出来ずにいた。瑞鶴の人生を考えてしまえばそこから生まれる情は決して離れられないものではない。姉である翔鶴を救いたい瑞鶴の気持ちを灰色は手伝いたいと思うほど理解していた。

だが自分には白との話し合いでこの鎮守府の艦娘達を守らなければならぬ義務がある。

瑞鶴の気持ちを尊重するか、瑞鶴の気持ちを無碍にして白との約束を守り通すべきか、どちらも叶えたいと願う灰色は葛藤していた。

出来れば動かないで欲しい、またあの時のようにこれ以上失わせる訳にはいかない、止めるしかないんだ、と心の中で説得するように念じていた。

だが――、

「木曾とペアで動くわ……ごめんね。灰さん」

瑞鶴はとうとう踊り場に足底をつけ、灰色の横を通り過ぎてすれ違
いざまに伝えた。

灰色は踊り場からまた下へ降りる瑞鶴を止めようとはせず、身体を
硬直させ歩く音が過ぎるのを待つかののように佇んでいた。

「やっぱり……ダメだな……こういうの」

歩く音が聞こえなくなったのを計らって灰色は溜めていた息を大
きく吐いて肩を崩した。

瑞鶴を止められなかった事に苦笑いしながら更にため息を吐いて
腰を少し下ろす。

顔を俯かせ床を見続け、数秒後に灰色は勢いよく顔を上げて言い
放った。

「……甘いなあ、私も」

185. 地獄の島に降り立つ鋼鉄の天使達

——小笠原諸島奪還作戦攻撃開始時刻十三時間前。

「各鎮守府作戦担当指揮官に伝達。小笠原諸島奪還作戦発動、作戦に参加する全艦隊に出撃命令を下す。これより行われる全ての作戦指揮系統は横須賀鎮守府海軍大将参謀総長■■橙■■が全て担うものとする……各艦隊の戦況は旗艦と担当指揮官の判断を優先、七壊星やその他の最上位危険個体等による異常な行動が見られれば即座に作戦司令本部に報告せよ」

横須賀鎮守府にある小笠原諸島奪還作戦司令本部で一人の老人男性の声が日本各地に設置された鎮守府の司令部へ流される。作戦に参加する鎮守府の艦隊に出撃命令を下し、作戦の総指揮を担う■■大将によって小笠原諸島奪還作戦が発動された。

「連合艦隊司令長官■■■橙より連合艦隊へ伝達。連合艦隊は小笠原諸島海域に到着するまで第三戦闘航行序列を維持、空母機動艦隊は偵察機を発艦させ制空権を確保し、深海棲艦の奇襲に警戒せよ」
『了解』

■■大将は横須賀鎮守府で集めた精鋭集いの連合艦隊を指揮を執った。

作戦司令本部には沢山のオペレーターが作戦に参加する各鎮守府の艦隊と軍人から状況を共有しており、声が騒音となって本部のあちらこちらへ響き渡る。■■大将はオペレーターや主事補を担う軍人達へ命令を与え、自ら率先して作戦に関する情報を流した。

「小笠原諸島奪還作戦基地攻撃開始時刻は午前四時を目標。連合艦隊が攻撃次第、各参加艦隊も攻撃を許可する。各鎮守府艦隊指揮官には事前に共有済みだが、小笠原諸島父島は深海棲艦の巨大前衛基地となつている。沿岸砲や機雷、地对空誘導弾、地对艦誘導弾等の対艦迎撃手段に気をつけよ」

■■大将はモニターに映る小笠原諸島父島と並べられた巨大前衛基地の情報をじっと見続ける。別のモニターには連合艦隊を位置づける矢印のマークが入った太平洋の海図。

■大將は深海棲艦の動向を伺って眩いた。

「さて……どう行くのかな」

「作戦が始まって十時間が経過……そろそろ連合艦隊が小笠原諸島海域に到着する頃ね……」

小笠原諸島奪還作戦の発動から十時間が経過し、提督救出作戦を実行に移した叢雲達は既に陸地から離れており、輸送機の中でその時を待っていた。この世界における深夜の飛行は危険度が高く、運が悪ければ対空能力の高い深海棲艦に撃ち落とされるなどよくある話だ。

時間は深夜一時頃、輸送機一帯は透き通った星空とあちらこちらに雲が広がっており、真下には月に照らされた永遠に広がる白い雲海が見える。

「アンタ達、気を引き締めていくわよ。今作戦目標は白■大佐の捜索および救出。各自決められた侵入ルートに集合しペアで捜索、地下軍事施設のどこかにいる白■大佐を救出する事。限られた作戦時間および一時間。七壊星と接敵次第、撤退しつつ私に報告するのよ。いいわね？」

輸送機の中でただひたすらその時を待つ艦娘達の前に叢雲が金色の鎗を肩に乗せて作戦内容を簡潔に伝える。

飛行音が常時鳴り響く中で大きく声を張って緊張することなく自信満々な表情だった。

「灰さんから入電！ 小笠原諸島に向かった横須賀鎮守府の連合艦隊が只今小笠原諸島海域に到着、深海棲艦もそれに気付いたようで迎撃した事により、作戦予定時間より二時間早く攻撃が開始されました！！」

「やっぱりね、作戦予定時間なんて最初からアテにならないわ。こっちは予定通り午前四時に飛び込むわよ、急がず焦らずにね……そう伝えておきなさい」

横須賀鎮守府の連合艦隊と作戦に気付いた小笠原諸島父島前衛基地の深海棲艦の精鋭艦隊が衝突したと灰色から連絡が入った。作戦の戦闘予定時間より二時間ほど早く開始されたらしく、予定としてい

た前衛基地の奇襲は失敗した事になる。

しかし■大将もその事に關しては既に予測済みのようで深海棲艦の精銳艦隊に対して連合艦隊に指揮を出して適切に対応しているようだ。

「なあ……木曾、瑞鶴、大丈夫なのか？ 本当に……」

「問題ない。無理な事はしないって約束でなお且つ監視がいるんだ、なあ長門」

提督救出作戦の潜入搜索艦隊に瑞鶴と木曾が突然編入された事に天龍は心配していた。

輸送機に乗る際に平然と何気なく乗ってきた二人を止めたものの灰色の判断だと聞いて何も言わなかった天龍。

瑞鶴と木曾は元々の長門と不知火のペアを崩して瑞鶴と不知火、木曾と長門という編成で艦隊を作り直していた。天龍と同じく金剛や川内も瑞鶴や木曾は勿論のこと、早急に戦線復帰した古鷹の事も心配していた。

「私は良いとは思わないが■先生の判断なら大丈夫なのだろう。この二人には私と不知火がついている」

「寧ろ僕達は戦う訳じゃなくて提督を救出する訳だからね、本当に戦うってなら話は別だけど……大丈夫だよ、頑張ろうよ！」

「うん……ありがとね……」

長門や時雨が二人を庇うようにして問題ないと天龍や金剛達を説得させていく。

叢雲率いる潜入搜索艦隊は戦闘目的ではなく提督救出を最優先目標とした艦隊。無理な戦闘は理にかなっていないと誰しも暗黙の了解で分かりきっている。

二人の編入に対して摩耶は何も言わずに窓の景色を覗くままであまり気にしていないのか簡単に受け入れているようだった。

「横須賀鎮守府連合艦隊が敵艦隊の防衛線を突破!! 小笠原諸島父島まであと十キロメートルの所まで接近し、各鎮守府の作戦参加艦隊も次々と合流しました!! また深海棲艦も小笠原諸島父島前衛基地から精銳艦隊の出撃を確認!! 大規模戦闘が始まります!!」

「現在地点もそろそろね……降下準備!!」

横須賀鎮守府連合艦隊と深海棲艦の防衛艦隊が戦闘を始めて二時間経過し、灰色から連合艦隊が深海棲艦の防衛線を突破したと報告が入った。大規模戦闘が始まったのを見計らって叢雲はどうとう提督救出作戦を実行に移す。

艦娘達は保護ゴーグルをつけて立ち上がり、腰や肩に艤装を展開させた。輸送機の後部ハッチがゆっくりと開き出し、肌を凍らせるような冷たい突風がなだれ込んできた。

「パラシュートの動作方法は分かってるでしょ?! 最初はペアの合流を最優先に行動して頂戴!! その時の状況については各自の判断で任せるわ!!」

吹き荒れる突風と耳の奥まで突き刺すような轟音の最中に叢雲が無線を使つて必要事項を最終確認していく。長門達は目の前に見える雲海と橙色に色づく朝焼け空に圧倒されながらも叢雲の言葉に耳を傾けて声を発さずに頭を縦に降る。

「作戦開始!!」

提督の救出作戦が開始。

叢雲を初めに長門達は輸送機の後部ハッチから次々に降下していく。

真下から突き上げるような暴風に耐えながら身体を垂直にして落下速度を上げていった。

徐々に朝日が顔を出して雲海に光芒を射て刺していく。

「っ……!!」

叢雲から深い雲海へ突入。

保護ゴーグルに水滴が斑模様にくびりつく。

周りは白い雲に包まれ何も見えない。微かに海が見えてきた、地上や水上はまだ夜のようなのだ。

探照灯の光筋や列に並ぶ曳光弾の光が見えてきた。

朝を迎えた雲海に突入した叢雲達は雲海の海底を抜けて小笠原諸島父島の上空へ辿り着いた。

よく見れば小笠原諸島父島の周辺海域では横須賀鎮守府の連合艦

隊と深海棲艦の精鋭艦隊が激しい戦闘を繰り広げている。

「(これが……あの塔、なのか……!?)」

上空を滑空して飛んでいた叢雲達の視線を集めていたのは三つの巨大な塔だった。

紅黒く光る三つの巨大な塔は地上の穴から地下の奥深くまで建てられていて、中心は空を刺すような紅い光線が島ごと照らして光っていた。

「着地地点はどこだ……あそこか……!?!」

長門は周辺を確認して木曾を探し、パラシュートを下ろして降下していく。艦娘の強靱な身体であれば五十メートルの高さでも怪我なく着地できる。

長門は開いたパラシュートを早々に脱いで予め決めた着地地点まで急降下した。

「よし……着地成功……!・ 着地予定予定地点と少し外れたが……このまま木曾と合流して潜入だ」

急降下して島に無事着地した長門は土埃を払って状況を確認する。空を見上げればパラシュートで降りている仲間は見掛けない。

全員が無事に着地した事を祈って長門は木曾と合流する為に動いた。

「木曾、どこにいる? 聞こえたら応答してくれ」

『木曾だ、こっちは問題ない。森の中に降りたが近くに舗装された道路がある。今すぐ着地予定地点へ向かう』

「了解した。私も今すぐそちらへ向かう」

「……」

単独行動で塔が突き出る地上施設に着地した叢雲は巨大な三本の紅黒い塔を仰いで眺めていた。

中心の紅い光線が塔周辺一帯の森を真っ赤に染め上げ、腕で仰がなければまともに見つめる事は出来ない。黒い塔の影にて潜入場所を探していた叢雲は穴の中をゆっくりと覗く。

「深いけど……ここから行けそうかしら」

三本の黒い塔は地下の奥深くから地上、そして空の上まで伸びており、塔の根元を凝らして見ると何人か深海棲艦が急いでいる様子が観測できた。

叢雲は塔が突き出た穴の中から直接潜入、金色の鎧を壁に突き刺してぶら下がりながら次の足場を見つけて静かに行動する。

ガラス窓を偶然見つけた叢雲は振り子の運動で身体を前後に揺らして勢いよくガラス窓に突入。

突入後は即座に部屋内をクリアリングして周囲を確認する。

「よし……んじゃ早速捜しますか」

部屋のドアに耳を傾けて廊下に足音や物音がしないか耳を澄ませる。誰もいないのを確認した後にドアをゆっくりと開いて左右どちらも奥に続く廊下に出た。施設内は案外清潔で国の病院や軍事施設と何ら変わらない建築になっている。

「ここは地下一階ね、まずは最下層から行こうかしら……つとその前に」

叢雲は搜索艦隊に一度全体へ報告するのを思い出して先程出た部屋の中へもう一度入る。

片耳に装着した小型無線機を使って長門達に指針と目標を伝えた。

『各ペアに到達。それぞれ合流したなら基地に潜入して頂戴。今わたしは地下一階にいるけど、このまま最下層まで降りて下から上の順で捜すわ。アンタ達は上から虱潰ししらみに捜して。追い込み漁みたいにやっていくわよ』

『了解した』

『問題ない』

「分かりました……天龍、どう?」

叢雲の無線を受信した金剛は天龍と共に地下軍事施設の出入口と思われる建物の近くまで来ていた。出入口と思うには少し違和感を感じるもので、石レンガ造りの古い物置部屋のような建物だった。

更には周辺警戒中の深海棲艦の姿も全く見当たらない。天龍と金剛は森の茂みに隠れながら深海棲艦の動向を伺っていたが、一向に深海棲艦が来る気配は無かった。

「行けそうだが……なーにか不穩で仕方ねえ……」

「んく……なら建物の裏から行ってみよう、何かあつたらその時で対処すればいいと思うヨ」

二人は外回りして茂みに隠れながら出入口の建物の裏へ辿り着く。左右それぞれ壁を伝って周辺を警戒し、怪しい者がいないか確認する。

少しずつ足を動かして出入口の扉まで接近した二人。互いに準備万端だと頭を縦に降って天龍が突入の合図を送った。

「何も……無いネ」

「やっぱり連合艦隊と戦ってるからほとんど出撃してるのかもしれないな」

出入口の扉を蹴飛ばして部屋の中を警戒する。

部屋の中は何も置物や備品などは無く、中心に地下軍事施設へ続く階段が続いていた。若干階段の奥が光っている事から地下一階までの距離は近い方だろう。

天龍と金剛の二人は地下軍事施設へ侵入する事を決心して階段を一步ずつ降りていく。足音を立てないように背後に気を付けながらゆっくりと足を動かしていき、奇襲を予想した立ち回りを考えて階段の奥へ続く場所を覗いた。

「ここはエントランス、的な何かか……誰もいないネ……」

「さっきの出入口が南だから東と西に第二廊下、北に第一廊下、第一廊下は大穴に沿った養生金網ようじしょうかみあなの廊下だな。俺らは東側からの第二廊下を探そう、部屋っぽい所は沢山ある。それぞれ左右に分けて探そうぜ」

「オーケー、私は左から行くヨ」

天龍と金剛は手分けして西側の第二廊下を搜索する事にした。

塔を中心に円形状になっている地下軍事施設内の廊下は先程潜入したエントランスと階層ごとに繋がっている。廊下の左右には均等に割り当てられた謎の部屋がいくつも並んでいた。どの部屋に提督がいるのか確実にする為に部屋を一つずつ調べていく。

地下一階にある部屋は居住スペースばかりで、本や書類などがまと

められた書棚や机、そして二段ベッドが部屋の左右に二つずつ置かれていた。一見すれば普通の人間の部屋と何ら変わりなく、住もうと思えば何の違和感も無く簡単に過ごせるような空間だった。

深海棲艦も普通に過ごしているのではないかと内心驚いていた。

消し忘れたデスクライトが机を眩しく照らして部屋全体を淡く明るくしていた部屋や書類が床を埋めつくして足の踏み場もない粗末な部屋もあった。

「……」

天龍が床に散らばる書類の一枚を手を取って流し読む。

書類の内容は対艦娘砲撃訓練の経過報告書。

新しく配属された深海棲艦の訓練官を勤めていたらしく、よく読めば何処かの誰かに似たような厳しい指摘を欄からはみ出るほどまで書かれている。

新米の深海棲艦、と思えば少し腑に落ちない部分があった。

「深海棲艦ってのは、一体……何なんだろうな」

天龍は瞼を少し沈ませて呟く。

人類の脅威となる存在がまるで人類のように生活していた事に何か引っ掛かるような感覚があった。心にナイフでも突き刺さったかのような重く言葉に出ない感覚が天龍の中でじわじわと馴染んでいく。

手が震えているように思えた。

だが実際は全く震えておらず、書類の一枚を少し強く掴んでいただけだった。

何かに怯えているような、そんな気がした。

「ここは……天龍、来れる？」

「ん……なんだ？」

天龍のいる部屋に金剛が駆けつけて名前を呼んだ。

金剛曰く、興味深い部屋が見つかったらしい。天龍は金剛の後を追ってその部屋に向かった。

「これは……仕事部屋……？」

金剛が見つけた部屋は先程の居住部屋とは打って変わって沢山の

机が均等に並べられた大きな部屋だった。

机の上にはパソコンなどの精密機器や書類の束などが置かれている。窓には紅白い光を放つ塔の地下下部が映っており、部屋全体を紅く染めていた。

「なんか……ドラマで見たようなオフィスみたいだな……」

天龍は開いた口が塞がらないといった表情で茫然と部屋の中を見渡していた。以前に講堂で観ていた恋愛ドラマで似たような綺麗なオフィス部屋と酷似していた事に驚きを隠せずにいた。

部屋はかなり大きく設計されていて北の第一廊下に繋がっており、地下二階へ続く階段も二箇所ほど確認できた。

深海棲艦がここで何をしているのかは不明だが、明らかにこの塔や地下軍事施設に関しての資料だという事は明白だ。

金剛は提督に関する情報が無いか書類を手にとって調べようとする。

が――、

「待ッテイタゾ」

「っ!! 金――」

謎の聞き覚えのある声と天龍が気付いた瞬間だった。

金剛は両腕を交差して防御体勢のまま勢いよく部屋の奥まで吹き飛ばされていた。

均等に置かれていた机が吹き飛ばされた金剛にぶつかって部屋の奥や端に掻き集められていく。

机に置かれた資料が宙を舞い、白煙や埃が霧のように遮られた。

「金剛!!…っ――くそっ!!」

吹き飛ばされた金剛の身を案じて名前を叫ぶ天龍。

金剛の方へ振り向いた瞬間、強烈な殺意を察知した天龍は後方へ身を崩して咄嗟に走った。

天龍のいた位置には紅く照らされた巨大な黒い何かが空間を斬り裂いていた。

天龍は緊急回避の末に金剛の元まで走り寄る。

金剛も無意識に起こした防御体勢でダメージは軽減されていた。

「ヨオ……マタ会エタナ……」

「っ……!! てめえはッ……!!」

「久シイナ、天龍！ 金剛!! 才前ラガ来ルノヲ待チ侘ビタゾ!!」

部屋の手前で笑うのは二本の巨大な黒い腕と怪物を模した歯や砲塔、額に紅黒く滾った角と紅く鋭い殺気を放つ眼を持つ深海棲艦。

人は彼女を人類を最も恐怖に陥れた「最強」と呼び、その姿を見ただけで戦意を喪失させる圧倒的な力を人類に見せつけた恐怖そのもの。

『テラスティア巨門』……！ 戦艦棲鬼……!! いや……今は戦艦棲姫改、かな

……!!」

「何でてめえがここに……!!」

予測不可能な緊急事態に天龍と金剛は緊張と焦りを隠せなかった。

何故七壊星の『テラスティア巨門』戦艦棲姫が地下軍事施設の地下一階の部屋で待ち伏せしていたのか天龍と金剛は分からなかった。七壊星以外の深海棲艦が足音などを聞いて待っていたのなら説明はつくだろう。

だが小笠原諸島奪還作戦で連合艦隊の襲撃に合っている最中、七壊星自体が未だ地下軍事施設にいるのは全くもって理解できない行動だった。

それはまるで提督救出作戦を事前に知っていたかのように、ここに来る事を分かっていたかのように不可解だった。

「才前ラガコノ部屋ニ来ル事ハ察知サレテイタカラナ！ 半分疑心暗鬼ダツタガ結果オーライダ!! 馬鹿鶴ノチカラモ信ジテミルモノダナ……!!」

「知ってたのかよ……!! 俺達が来る事を!! まさか……! いやだが……」

『テラスティア巨門』戦艦棲姫の言動を聞いて天龍は何故地下軍事施設に潜入した事がバレたのか考えた。

鹿島だと考えていたが『馬鹿鶴』という変なキーワードを聞いて全く違う事に気付く。極めて少ない時間で考え込む天龍に不敵な笑みを浮かべた金剛が肩を組んで声を掛けた。

「迷ってる暇は無いヨ天龍……! 接敵したならやるべき事は一つ

……この状況じゃ太刀打ちできない、出来れば戦いたい所だけど……今は叢雲を呼んで駆けつけてくれるまで……逃げ耐えるしかない！」

「っ、だよな!! だがアレは……!!」

「フハッハッハッハッハアアアアアアア!!」

金剛の冷静な判断に耳を傾け天龍は落ち着きを取り戻す。

だが狂気的な嘲笑を叫んで巨大な黒い腕を動かして構える『巨門』テラスティア戦艦棲姫を見て焦りを露にした。

そして次の瞬間に戦艦棲姫は床を蹴って二人に殴り掛かる。

「その暇すら与えてくれ無さそうだッッ!!」

地下一階第二廊下。

凄まじい轟音と同時にドアごと後方へ跳躍する金剛と天龍が現れた。

周辺は歪んだドアと壁や床のコンクリート破片が後方へ舞う。

二人は即座に体勢を変えて『巨門』テラスティア戦艦棲姫から逃げていく。

廊下の幅は約二・五メートル前後。

巨大な艀装と腕を持つ戦艦棲姫は通れないと思えばそれは油断だ。

奴は左右の壁ごと無理矢理破壊して二人を追い掛けている。

戦艦棲姫は見境なく狭い廊下で複数砲撃。

逃げ去った二人の位置にすぐ着弾し、爆発。

衝撃で瓦礫や破片が飛び散り、背後から押し飛ばされそうだった。

目くらましに天龍は身体を回転させ、戦艦棲姫へ向いた瞬間に砲撃。

爆煙で姿が見えなくなり二人は逃げていく。

爆煙の中から紅い十字光が輝き、避けるように爆煙に穴が空いた。

天龍と金剛の逃げる先に着弾し、瓦礫が雪崩のように押し流れていく。

廊下が瓦礫で阻まれる前に二人は体勢を低くしてスライディング。

身体や艀装と紙一重になるも瓦礫の雪崩を回避して走った。

直後に戦艦棲姫が即席の瓦礫のバリケードを巨大な黒い腕で薙ぎ

飛ばして現れる。

「天龍だ!!! 現在『巨門』テラスティア戦艦棲姫と接敵!! 至急応援を頼むツツ!!!」

徐々に迫り来る戦艦棲姫に追い付かれるのも時間の問題だった。

天龍は声を荒らげて艦隊に至急の応援を伝えた。

だが誰も反応は無く、声が届いたような雰囲気は全く無い。天龍は何度も訴えて伝えるも誰も反応は無かった。

「駄目だ誰も応答しねえ!!! くそっ!! どうなってんだよ早く応えてくれ!!!」

「これだけ騒ぎになれば両方気付くはず……!! と言つても結構キツイネ!!!」

会話の最中にも戦艦棲姫は速度を速めて出鱈目に砲撃を繰り返している。

着弾で散らばる瓦礫や破片、爆発の衝撃で逃げているのがやつとだ。

このままでは確実に追い付かれて襲われる。

「ツ……なら!!!」

「っ? 金剛!!!」

金剛は逃げるのをやめてわざと戦艦棲姫の方へ身体を振り向かせた。

急な方向転換で速度を緩める為に足に火花を散りばめて構える金剛。

突然止まり始めた金剛に天龍は困惑の声を上げて名前を叫んだ。

「こうするしかない!!!」

「金剛オオオオオ!!!」

『巨門』テラスティア戦艦棲姫は半分嬉しそうに大きく腕を振って金剛に殴り掛かる。

直後、床が噴火の如く舞い上がる。

巨大な黒い拳は金剛ではなく床を殴っていた。

戦艦棲姫はすぐに金剛の姿を捉える。

金剛は巨大な黒い拳を回避して横の壁に立っていた。

「何ヲ——グツ!!!」

突き刺さった衝撃で体勢を崩して身を低くする金剛。

左肩は紅い鮮血で溢れ出している。

金剛が見た先には恐らく刀剣を投げただろう戦艦棲姫が土煙を掻き消して歩いていた。

「成程、ワザト注目ノ集マリ易イ場所ヲ選ンデ名前ヲ叫ンダカ。ドレクライ時間ハ持ツダロウナア……!」

巨大な黒い腕の従属機能を締結させた戦艦棲姫は戦闘態勢に入つて金剛と天龍に脅しを仕掛ける。この広い場所へ向かつたのは流石にまずかつたかと思つたが、いずれ追いつかれる事を予測すれば一々メリットやデメリットを考えている暇などない。

叢雲と摩耶という応援が確実に呼べないのならば少しでも応援を呼べる確率が高い方を選んだまでだ。

「大丈夫か……!? 金剛……!」

「大丈夫ネ……心配ないヨ……ツ!!」

天龍が走り駆けて金剛の様態を心配した。息が乱れる金剛は問題無いと天龍を落ち着かせる。突き刺さった刀剣の柄を掴み、痛みに耐えながらも抜いて天龍に渡して立ち上がった。

「耐久戦……かな……! 応援が来るまではここで戦つて耐えるしかない……!」

「ああそうだな……! アイツらの事だ、すぐに来てくれるに違いねえ……!!」

「行くゾツツ!!! 天龍!! 金剛ツ!!!」

186. 都合のいい操り人形は使い捨て

金剛と天龍が『テラスティア巨門』戦艦棲姫と接敵する十分前。

三本の黒い塔付近で合流した摩耶と川内は地下軍事施設へ潜入する場所まで移動し到着していた。金剛と天龍が潜入した場所とは真逆の位置で同じく石レンガ造りの古い物置部屋のような建物があった。

摩耶と川内は周囲を警戒しつつ建物の扉まで接近し、地下軍事施設に潜入。階段を真っ直ぐ降りていくとエントランスのような部屋が広がっていた。

「深海棲艦にしては凄く清潔感あるエントランスだ……本当にここにいたのかな……ねえ？　ねえ摩耶？」

エントランスのような部屋を見て物珍しそうに話し掛ける川内を余所に摩耶は真っ直ぐと先に続く廊下を指していた。

一言も喋らずゆっくりと黒い塔の下部へ続く廊下を歩いていく。何の警戒もなく突き進む摩耶を不審に思った川内は何度も名前を呼んだ。

「摩耶？　摩耶、どうした——ッ……」

黒い塔の下部へ続く廊下を歩いていた摩耶と川内の先にある人物が現れる。

「お前は……！　鹿島!!」

「お疲れ様です。摩耶さん、川内さん」

二人の目の前に現れたのは鹿島だった。艦装を展開せずここに来る事を事前に分かっていたかのように待ち構えていた。

鹿島と接敵した川内は激しい戦闘を予想して即座に身構える。

深海棲艦の七壊星『デアボル貪狼』集積地棲姫の手下であり、大切な提督を攫った裏切り者。倒したいほど憎い存在が目の前に現れて川内は怒りに溢れながらも戦闘態勢に入った。

だが——、

「っ！　何だよ摩耶!!」

戦闘態勢に入った川内を前にいた摩耶が戦闘を止めるように片腕

を広げた。

摩耶は後方にいる川内を一瞬視線を移し、その後すぐに鹿島へ顔を向けてあるジェスチャーを見せる。ジェスチャーを見た鹿島はポケットから小型端末を取り出した途端、耳につけていた無線機が変なノイズを立てて聞こえなくなった。

「……………これで大丈夫ですよ、摩耶さん」

「ああ、ありがとな……………悪いな鹿島。こんな役にさせてしまつて」

「私は大丈夫です。提督の為ならば何だつてしますよ」

「つ……………!? どういう事なの摩耶!!?」

敵意の無い両者の行動に川内は困惑の表情を隠せずに戸惑っていた。通常であれば最愛の提督を奪われた鹿島を目の敵にしてもおかしくないはずが妙に冷静で慎重な態度を見せていた。

川内の様子を半ば予想していたのか摩耶は川内を落ち着かせて口を開く。

「……………ついてきてくれ川内。訳は歩きながら話すよ」

摩耶の言われるがままに川内は二人の後を追う。

廊下の奥まで進んでいくと三本の巨大な黒い塔の下部が丸見えな穴の外側へ辿り着いた。

ふと上を見上げると星一つない雲夜空と三本の巨大な黒い塔が天までそびえ立っており、最深部へ続く穴は中心から放たれた紅い光によって照らされている。見ただけで光を浴びた皮膚が徐々に熱せられていくような感覚がした。

鹿島と摩耶はその光景に対して何もリアクションは無く、円の外周に沿った廊下をひたすら歩いていく。

「実は提督を攫うように頼んだのはあたしだ」

「え……………!? な、ななな……………何で……………?」

二人と川内がエレベーターらしき場所まで辿り着いた途端、摩耶が突然口を開けて耳を疑いたくなるような事を打ち明けた。

「またもや困惑する川内を置いて二人はエレベーターへ乗り、川内も慌てて駆け出し乗っていく。」

「……………これは私にしか知らない事だったが……………提督の頭には記憶を操

作するデバイスが埋め込まれているんだ」

「記憶を操作する……？」

「そう。提督がまだ深海棲艦の提督として大本營の地下牢獄に収容されていた時、軍の上層部は提督を貴重なサンプルとして私と同じく拷問とも思える数々の実験の実験体として扱われていた」

エレベーターの窓から見える紅い光と下から上へ登って行く影の両方を浴びながら摩耶は自分しか知らない提督の過去について神妙そうに伝えていく。

「提督の身体には人間の遺伝子と進化した深海棲艦の遺伝子の両方が共存して生きている。軍の上層部はそれを何かに役立てないかと考えて提督の身体を外から内の奥まで根こそぎ調べまくったんだ。文字通りにね」

当時人類と深海棲艦の混血児である提督は研究者達にとって喉から手が出るほど価値のある貴重な存在だった。

深海棲艦特有の白髪長髪で深紅の眼、白い肌を持ち、性別は男でありながら女々しい体格で女性器と男性器を両方兼ね備え、超人的な力と深海棲艦を指揮する力を持つ人間ならざる存在。

その貴重な存在が持つ力を人類側でもどうにかして扱えないか考えていた軍の上層部は興奮が止まらない研究者達を使って提督の身体を生きのまま解剖していた。

提督の身体の中には艦娘と同じ構成で出来た深海棲艦のエネルギー核が内蔵されており、それが体内にある限りはエネルギー核の特性でどんな怪我や病気だろうと艦娘や深海棲艦と同じく「耐久」という名の自然治癒力で治癒出来てしまう。

軍の上層部や研究者達はその特性を利用して提督の四肢や消化器等の内臓、骨や筋肉、血液に眼球などありとあらゆるモノを提督の身体から取り出し研究材料として保管していた。

もし使えなくなればまた提督の身体から再生したモノを取り出しでの繰り返しで皮膚組織や遺伝子情報、染色体や筋肉組織などを毎日抜き取られていた。

軍の上層部は愉悦に浸る為か深海棲艦の提督という存在をこの世

にいてはならない人モドキと蔑み嘲笑し、内臓や筋肉を取り出された後も身体の再生の為に休憩していた提督をひたすら犯しては黽つていた。

その時の提督にとっては死をも懇願するほどの絶望に明け暮れていただろう。

人として扱われず抵抗もできないまま内臓や血を取り出される残酷行為を受け続け、終わった後は軍人の拷問や強姦などが待ち受けている日々。

地獄とも思える日々にも心身ともに何もかも破壊され続けた提督が考えた足掻きの術は軍の上層部達を震え上がらせた。

「提督には軍の上層部にとって不都合な真実や情報を沢山持っていた。上層部は方針で散々調べ尽くした後で殺すのが最適解の処理案だと考えていた。だが提督はその案を予測して捕まる前に各地の重要人物と繋がり、自分が殺されればその情報を全世界に晒すように仕掛けていた為に何人かの軍人が結託して自己保身の為に提督の仲間のフリをして味方にしようと思っ掛けた。その時から記憶制御について既に準備していたんだろうな」

目標階に辿り着いた鹿島達はエレベーターを降りて同じような廊下をまた歩く。

鹿島達がいるのは地下一階から地下十五階の間、地下七階の所だった。廊下の奥へ進んでいくと地下一階で見た景色とはまた違ってガラス張りで部屋の中が見える所が複数確認できた。

「深海棲艦の提督は超人的な力も含まれていたが、どの軍人よりも艦隊の提督としての才能が凄まじかった。だから味方にすれば深海棲艦を滅ぼす心強い仲間となり、深海棲艦側から見れば見せしめと同時に精神攻撃になる。提督を易々と殺せないと思っ軍の上層部は提督を都合のいい手駒として扱うように考えた。それがさつき言った記憶を操作するデバイスとこの遠隔操作装置、の事な」

歩きながら摩耶が手に持ち出したのは提督の記憶を操作するデバイスの遠隔操作装置。提督が持っていたスマートフォンと同じ形のモノで映し出された画面には「ERROR」と表示され動かなかった。

摩耶曰く、提督の記憶を操作するデバイスの操作の他に心拍数や脈拍数など提督の身体の状態が事細かに表示されるらしい。

「提督の頭の中、脳内には遠隔操作が可能な高機能記憶制御端末が埋め込まれてる。軍の手駒として白中將という予め設定された人格の形成と実行、提督が深海棲艦の提督の記憶を思い出させない為、今ままであつたしや黒■が記憶を操作していた。傍にいたから辛かったよ、提督が何十回も無意識に記憶を操作されていく様は……本当に……辛かった……」

「摩耶……」

「あたしは黒■の条件を飲んで提督の監視役を今まで務めていた……そしてあたしの体内にも監視用の聴音機が埋め込まれてる。だからさつき鹿島には鹿島から半径十メートル以内を限定とした通信妨害をやってもらった、今ならアイツ聞かれずに堂々とと言える」

今まで提督の記憶を操っていたのは黒■と摩耶だった。

白中將という作られた人格を保つ為に摩耶が監視役として秘書艦となり、記憶の操作を遥か遠くにいる黒■が操っていたのだ。提督は眠っている間や無意識に記憶を改変させられる為に記憶制御端末については全く気付かない。

今まで何の話をしていたのか、今までの自分はどこへ行ったのか不明瞭になり、自分は一体何者なのかと自問自答し続ける時が何度もあつた。

何度か提督の人格が壊れた事もあつた。頭を両手で押さえてただひたすらに自問自答し続ける様は見るに堪えなかつた。

提督に対して何も出来なかつた自分自身が嫌になつた。傍にいながら何一つ提督を救う事ができない無力な自分を殺したく思えた。何も出来ない自分が嫌だつた摩耶はある決心をする。

「話を戻すけどありのままの提督を戻したいと思つたあたしは提督の頭に埋め込まれた高機能記憶制御端末を唯一取り外せる『貪欲』ディアボルフ集積地棲姫に鹿島を通して直接頼んだ。その為には集積地棲姫が持つ研究施設まで提督を連れていかなければならない。まあ色々方法はあつたんだが、急用だつたから灰色と叢雲だけ連れて後は鹿島に任せ

て強行突破という形で提督を攫ってもらったんだ。何も言わなくて悪かったな、川内」

摩耶は本来の提督を取り戻す為に深海棲艦と手を組んでいた鹿島と『貪狼』集積地棲姫に高機能記憶制御端末の取り外す依頼をしていた。

勿論この事は誰にも知られてはいけない為、鹿島以外の艦娘に口外する事は禁止され、提督を連れていく計画の上で邪魔な存在となる灰色と『？』叢雲を鎮守府から追い出すように元々から計画されていたのだ。

「事情は分かったよ……でも私は二人が許せない。提督を連れていくならば仲間が不用意に傷付けられる必要は無かったし、だったら私にも言つて欲しかった……私だって協力する事は出来たはずだよ？」

一通りの事情を聞いた川内は提督の新たな真実や摩耶の心情を聞いても許せない部分があった。

何故そんな大事な事を自分に伝えてくれなかったのか、提督が深海棲艦側だった事や酷い経験を受け続けた事は自分だって知っている。

摩耶と同じく提督を救いたいという気持ちは一緒だ、事情を教えてくださいれば協力する気持ちになれたはずだというのに。

自分も協力する立場だったら仲間が傷付けられる事も無かった。

「本当にごめん……私の事は憎んでいて構わない。どちらにせよ私はそれだけの事をいっばいしてきたからな、当然の報いだ」

「本来は戦闘を避ける予定でしたが、なにぶん博士が興奮してしまつて……あの戦闘は私も予想外でしたね。それはそれとして摩耶さんに言われたとして裏切り者になるのですか？ それは止めておいた方が良かったですね、今頃貴女は全員から目の敵にされて指名手配されていますよ、見つかったら海の底でおねえですね」

鹿島に馬鹿にされたような気がした川内は癩に障ったのか一瞬身体を素早く動かした。

摩耶が川内の前に腕を出して戦闘態勢を解いてほしいと片手でジエスチャーをする。内心不満ばかり積もる川内は鹿島に向けて質問した。

「鹿島は味方なの？ 敵なの？」

「私ですか？ れっきとした貴女達の敵ですよ。摩耶さんとの協力関係さえなければ今すぐ貴女達と戦闘してもいいくらいには」

「このっ……………」

「やめてくれ川内。お願いだから…………頼む…………」

鹿島は後方にいる川内に顔だけを向けて不気味に微笑んだ。

苛立ちを抑えきれない川内は砲口を鹿島に向けるも摩耶が立ち塞がる。

摩耶の表情を見て敵対する鹿島を庇う理由も提督が関係しているのなら仕方ないと川内は心の中で割り切るしかなかった。

「ッ!? 何この音!？」

「どうやら…………誰かが七壊星と接敵したようですね」

廊下を歩いている最中に突如凄まじい爆音と揺れが鹿島達を襲った。

天井の白い蛍光灯が激しく点滅し、何かを察知した鹿島は摩耶と川内に上の方角を見て眩く。

「接敵!? しかも七壊星だって!!？」

「これは少しばかり急いだ方がいいかもしれませんね。こちらです、走ってください」

嫌な予感がした鹿島は二人を急かして走っていく。摩耶と川内も状況を察して鹿島の後を追っていった。鹿島の案内中では先程同じく凄まじい爆音と揺れが至る所から来ており、走っていてもふらつきそうな程だ。

搜索艦隊のペアが七壊星と接敵して戦闘になってしまったのだろう。

急な事態悪化に摩耶は提督の居場所について鹿島に問い掛ける。

「提督は今どうしてる……………」

「提督は集中治療室で安静に寝ています。高機能記憶制御端末も博士が既に取り外してくれました。救出するのなら今ですよ…………着きました、この部屋です」

提督がいると思わしき場所へ辿り着く鹿島と摩耶達。

そこは鹿島の案内無しでは絶対に辿り着けないような地下軍事施設から少し離れた集積地棲姫の研究施設だった。一見は何の変哲もない書斎の中にある本棚の本を動かして隠し扉を起動。

その扉の奥に進むと集積地棲姫が研究していたと思われる部屋が廊下の左右にいくつも存在していた。ガラス越しに見える部屋の中には酷い損傷のある血塗れた遺体や何か色の着いた水に漬けられた深海棲艦の素体など見るだけで鳥肌が立つようなモノばかりだった。「……です……」

一番奥の部屋に辿り着いた鹿島と摩耶達は走るのを止めて慎重にドアを開けながら部屋へ入る。

そこにいたのは――、
「やつと着きましたか鹿島さん。それに摩耶さんに……まあ……連れの方ですかね」

「川内だ!!! お前を蹴り飛ばした艦娘だ覚えてけ!!! って……」

研究施設についた鹿島たちを見ては安心した表情をしながらも『ディアボルフ貪狼』集積地棲姫は何故か急いだ様子で提督の身体を調べていた。

中央の手術台には赤く染まった患者服に着替えられた提督が意識を失くした状態で横たわっている。部屋は手術台に眠る提督を中心ににおぞましい程の血液が花のように飛び散っており、惨劇と言っても過言ではない状況だった。

「……一体何があったんですか?」

「いやいや私が少し休憩にと休憩室で昼寝をして目覚めたらなんです……いつの間にかこの子の胸が貫かれていましたね……いま止血と応急処置を終えて縫い目を閉じているところです。時間も無いので手伝ってくださいますか?」

「分かりました」

高機能記憶制御端末を取り外した手術を終えた後に休憩していた集積地棲姫は不穏な物音で目が覚め気が付くと提督の胸が文字通り貫かれていたらしい。

脈拍低下に心電図に反応無しとの状況に集積地棲姫は咄嗟に動き出して提督の患部を急いで治療し、止血した後患部を縫い合わせる夕

イミングで鹿島達が来たようだ。

集積地棲姫が信じられない川内は真つ先に自作自演を演じたと集積地棲姫の事を疑った。

「胸を貫かれていたって……そんな誤魔化しが通じるとでも——」「疑う気持ちも分かりませんが今は冷静になつてください、お願いします」
鹿島が冷静に話しかけながらマスクと手術用のゴム手袋を装着し、集積地棲姫のアシスタントを務めていく。

提督の爆発的な自然治癒力と集積地棲姫の応急処置で間に合ったのか何とか一命を取り留めたようだ。医療知識が無い摩耶と川内は邪魔をしないように見る事しか出来なかった。

「いやいやまずいですね……よく見たらこの子の身体の中……深海棲艦を使役する司令権限の核が奪われてたんですよ」

「んな……司令権限をか!!」

「司令……権限……? 何それ」

集積地棲姫の口から出た司令権限というキーワードに摩耶は驚いた表情を隠せず、川内ははてなマークを浮かべて頭を横に傾けた。

提督について深く知らない川内に摩耶が焦りを見せながら説明していく。

「深海棲艦を操れる……まあ簡単に言えば深海棲艦に直接命令や司令を下せる力みたいなモノだ。普通は中枢棲姫しか持たない力を提督は特別に分け与えられて持っていた。他の深海棲艦が使えば感情に左右されて叛逆や暴動が起きかねないから……中枢棲姫は見込んだ者として提督と後もう一人に分け与え、深海棲艦の各勢力のパワーバランスを中立に保っていたんだ。だが……」

「その司令権限が誰かに奪われた。つまりは今まで保たれていた深海棲艦の勢力のパワーバランスが崩壊し、司令権限を奪った何者かが戦争を仕掛けてくる……非常にまずい事態ですね」

摩耶の説明を繋いだ鹿島でさえも深刻な表情をするなど状況は更に悪化しているようだ。

大多数の深海棲艦を使役する事が可能になる『司令権限』が核ごと誰かに奪われてしまった。それは戦争の引き金を引く寸前まで到達

している最悪な状況だった。

「我々深海棲艦に属さない貴女に説明しますと、深海棲艦には主に三つの勢力があります。新たな世界の革命を望む革命派、争い無しに穏便に暮らしたい和平派、全てを憎しみ人類の根絶を願う憎悪派。これらの勢力をまとめるために中枢棲姫は自身の能力である深海棲艦の司令権限を二人に分け与え、その二人に革命派と和平派を任せて自身は憎悪派に在駐するように計画しました」

「その勢力から代表として七壊星に属する深海棲艦も存在している。因みに提督は革命派、革命派の司令権限が無くなったとなれば……」「願う事なら和平派に渡ってほしい所ですが……こんな事をする時点で大抵の目星は着きますね」

鹿島と摩耶、集積地棲姫の話聞いていた川内は頭の中がパンクしそうになるもある答えに辿り着く。革命派の司令権限が無理矢理こじ開けるようにして奪われたのなら和平派のイメージとしては有り得ない。

つまり答えは憎悪派の深海棲艦が犯人となるだろう。

しかしそこである疑問が思い浮かぶ。

「もし憎悪派の七壊星が奪ってたら……どうなるの?」

「七壊星は破滅的な力を手に入れた深海棲艦を組織化したものです。元々中枢棲姫の力をもらった七壊星が司令権限を奪えば更に破滅的な力が増幅し、同胞達を思うがままに利用できます……恐らく深海棲艦の大艦隊を編成して、国を潰しに来るでしょうね……最悪は、人類の根絶……」

「強さの価値基準が一人で国を滅ぼせる事が出来る、だもんね……そりゃ出来そうだ……ヤバくない?」

七壊星に部類される深海棲艦は他の深海棲艦の艦隊に指揮や司令を出す事が出来るが、完全に意のままに深海棲艦を操れる訳では無い。

深海棲艦を完全に意のまま操れるのは中枢棲姫のみであり、七壊星は自身の思い通りに深海棲艦を操る事が出来ない。

もし七壊星が司令権限を奪えば思うがままに深海棲艦を個人から

多数まで自由に操れる他、自身の強大な力を増幅させてしまうと危険な状況になるのだ。提督の司令権限を奪った犯人が誰かも分らず、七壊星の可能性があるならば小笠原諸島奪還作戦や提督救出作戦に大きな支障ができるだろう。

「ただでさえ他の深海棲艦でも持てば危ない力だ、まさか奪われるとは夢にも思わなかった……」

「その話は後にしましょうか。取り敢えず提督の応急処置は終えました。出来ればあと一時間ほど安静にして欲しい所ですが、この状況となれば難しいですかね」

提督の貫かれた胸部を縫いで塞ぎ、応急処置を終えた集積地棲姫が疲れた表情で摩耶に伝えた。応急処置後は外部からの衝撃によって身体への負担を無くしたいと思っていた集積地棲姫は提督の救出を考えて半分諦めていた。

「いやそのままにしておこう。今は提督の容態を最優先に、あたし達は状況の対処を……この声は……!?!」

しかし摩耶は提督の容態が安定するまでこの部屋で安静にさせるよう判断した。もし運んでいる最中に提督の身に何かあれば本末転倒になりかねない。

そう思った矢先、地下軍事施設から離れた集積地棲姫の部屋まで叢雲と摩耶を大声で叫び呼ぶ声が聞こえた。

「この声は……金剛と天龍か!!」

「どうやら本当に七壊星と接敵したみたいだね……!」

「おかしいですね……本来あの娘達は連合艦隊と戦闘中の予定のはずでしたが、何故未だ地下軍事施設に待ち構えていたのでしょうか」

「明らかに連合艦隊の作戦と摩耶さん達の作戦を全て知り尽くした上での行動ですね。誰かが裏で操っている可能性があります」

七壊星の行動について不審に思った集積地棲姫と鹿島はこの最悪な状況が誰かによって導かれたのではと推測を立てた。

待ち伏せていた七壊星、提督の司令権限の強奪等を考えればおかしいと思える部分はいくつもある。

「摩耶!! 私達も行かないと金剛と天龍が!」

「ああ行こう、天龍と金剛が危ない」

「待ってください」

七壊星と接敵した天龍と金剛の援護に向かおうと地下軍事施設の方へ走る摩耶と川内。

しかし突然に集積地棲姫が二人を止めようと声を掛けた。

「何なの!! この緊急事態に!!!」

「お二人にはこの子を安全に逃がすためにも、ここにいてもらわないと困ります。それに……」

「それに……? 何なのさ!!!」

集積地棲姫は顔を少し仰いで壁に設置されたモニターから映し出された監視カメラの映像を見続ける。止められた摩耶と川内、鹿島もその映像が気になってモニターの方まで駆け寄った。

「あれは……!」

真つ暗な廊下の中央に佇む金色の十字光。

金色の鎗を片手にゆつくりと歩を進める。

金色に輝く視線のその先には――、

187. 希望の象徴となった金色の十字光

広々とした地下軍事施設の最下層、『ヘカントケイルの間』
天まで昇り立つ三つの黒い塔の根元が最下層まで伸びており、中心の紅い光が空間全体を紅く染めている。

空間の広さはおよそ半径五百メートル、方角で合わせた自動扉が四つ存在し、壁の端には幾つもの柱が立ち並んでいる。

爆煙と土埃が舞う。

コンクリート製の床が所々抉れ、踏む足場も無い。

舞い飛んだ瓦礫がガラス窓を貫き、棚に置かれた部品が吹き飛ばされる。

「ッ!!」

テラスティア

『巨門』戦艦棲姫の怒涛の連続砲撃が金剛と天龍を襲う。

回り込むようにして走る金剛の背後から砲弾が傍の壁に着弾。

戦艦棲姫は金剛の走る方向を予測して決め撃ちを仕掛けた。

放たれた砲弾は金剛の足元に着弾、爆発。

巨大な爆煙と土埃が舞う中、空中から金剛が飛び出て現れた。

双方共に力を込めて睨み付ける。

隙を見た天龍が戦艦棲姫の背後へ回り込み、身体を横回転させ大太刀の横薙ぎ。

戦艦棲姫は巨大な黒い腕で受け止め、天龍目掛けて空いた片手で殴り掛かる。

天龍は後方へ跳躍して回避。

しかし直後に戦艦棲姫の砲撃が直撃し、天龍は床に叩き落とされた。

「エネルギーが足りない……! クソツ……!」

叩き落とされた天龍は衝撃に悶え床にひれ伏す。

遮られた土煙から紅い十字光を浴びた天龍は目を見開かせ、即座に身体を動かした。

回避した直後に天龍のいた地点が突然爆発。

天龍は身体を回転させ巧みに動き回り、金剛の元まで合流する。

『巨門』^{テラスティア}戦艦棲姫は合流した二人の元まで急発進急加速。

一瞬で二人の目の前に現れ、巨大な黒い拳で殴り掛かった。咄嗟に天龍と金剛はそれぞれ左右に別れて回避。

巨大な黒い拳の殴打は床に直撃し、瓦礫や破片が宙を舞う。

戦艦棲姫は二人が回避するのを予測し、位置を確認。

跳躍中の金剛を空いた片手で殴り飛ばし、天龍を先程殴った右手で殴り飛ばした。

殴り飛ばされた二人は壁に衝突し、床に倒れ込む。

まともな殴打を食らっても尚二人は立ち上がった。

「やっぱり……強くなってやがる……!!」

戦艦棲姫は先に立ち上がった金剛の元へ一直線に接近。

金剛の目の前に巨大な黒い拳が現れた。

金剛は無意識に無理やり身体を動かして回避する。

その時足元を戦艦棲姫の巨大な黒い拳が掴み取った。

「んな——」

戦艦棲姫は掴んだ金剛を複数回床に叩き付けていく。

叩きつけられていく度にひび割れた床が血濡れていた。

戦艦棲姫は身体を回転させて金剛を天龍の方まで投げ飛ばす。

とてつもない速度で投げられた金剛を受け止められず、天龍は金剛

と共にもう一度壁に衝突した。

そして追い討ちに戦艦棲姫は全砲口を天龍と金剛に向けて一斉放射。

放たれた砲弾は同時に着弾し、上の階層の部屋ごと巻き込んで大爆発を起こした。

「大丈夫か……金剛……!」

「大丈夫……ネ……何とか……生きてる……ヨ」

「マダ生きテラレルカ……流石ダナ」

燃え盛る爆煙の中から天龍と金剛が足を引きずりながら現れる。

金剛は片腕を抱えながら顔面から胸までが血塗れになっており、天龍は爆発で火傷した脇腹や右腕を晒して生きていた。

「本来ナラ最初ノ攻撃デ簡単ニ倒セルハズダツタガ……私ト同ジクオ

前達モ成長シテイルヨウダナ」

鎮守府襲撃以降『巨門』^{テラスティア}戦艦棲姫は天龍や金剛と同じく訓練に励み、成長した事で鬼クラスから姫クラスへ戦艦棲姫改となって進化していた。進化した戦艦棲姫改は巨大な黒い腕との従属機能な強化されており、戦艦棲姫本人の意思でタイムラグ無しに従属機能を操る事が出来ていた。

更には砲撃や近接戦闘等での火力の全体的な向上、速力や装甲は成長前よりも倍以上のエネルギー効率を維持し続けている。恵まれた強化を受けた戦艦棲姫に対して対応する天龍と金剛を見て自身と同じく二人も成長している事に高揚感を覚えた。

「接敵から一分……まだカナ……」

「耐えるしかないな……」

「ダガ、ドウスルンダ？ ソノ状態デハ戦ウニハ少シキツイヨウニモ思エルガ。サア……次ハドウスル？」

話し掛ける『巨門』^{テラスティア}戦艦棲姫を余所に天龍と金剛はひたすら叢雲や摩耶が来るまでの時間稼ぎの事しか考えていなかった。

自身達が成長して戦艦棲姫の攻撃を受け止め回避出来たととしても、今のようにまるで一発一発が全力を出したかのような攻撃の猛攻を長時間耐えられるかどうかは分からない。

自身の勘と精神、成長した身体を頼る他は無かった。

「来いよ……全部躲してぶっ倒してやる……」

「覚悟しろ……『巨門』……」^{テラスティア}

天龍は大太刀の刀先を、金剛は右拳を『巨門』^{テラスティア}戦艦棲姫に向けて戦闘の意志を見せ付ける。大損害を受けてもなお立ち向かう二人の姿に戦艦棲姫は思わず笑みが零れた。

「フフフツ……！ イイジャンイカ！ ソウデナクテハ面白クナイ！！
何分稼ゲルカ見物ダ！！」

戦艦棲姫は巨大な黒い腕をうねらせ、空へ仰ぐように両腕を広げた。

戦艦棲姫の額の角が紅黒い稲妻を帯びており、心臓の鼓動のように光り出して全身に光が伝わっていく。

「サア……行クゾ!! ココガ、才前達ノハカ——」

戦艦棲姫が殴り構えて動き出した途端、死角から突如として黄金の軌跡を放つ砲弾が直撃した。

砲弾は三つの黒い塔の支柱に衝突し、戦艦棲姫は攻撃してきた相手をすぐ様に睨み付ける。

「待たせたわね」

金剛達のいる「ヘカントケイルの間」の出入り扉から歌が聞こえた。扉は既に蹴破られており、奥で何かが光っている。

「私がない間に随分と盛り上がってるじゃないの」

そこには黄金の十字光を輝かせ背に乗せる艦娘がいた。

「その姿を見る限りじゃ、結構派手に戦ったそうね」

黄金の光を纏う鎗を手に持ち、藍色の髪を靡かせ歩くその姿。

その姿に畏怖する深海棲艦は数を耐えない。

「前のアンタ達だったら瞬殺だったけど……生きてるじゃない。偉いわ」

「ヤハリ来タカ……」

黄金の十字光の眩しさに戦艦棲姫は目を研ぎ澄まして警戒する。

その艦娘の姿を見た天龍と金剛は嬉しさのあまり思わず笑みを漏らした。

「叢雲!!」

護神厄討艦隊旗艦『?』オウゲン 叢雲。

現日本海軍最強の艦娘と謳われ、深海棲艦の総撃沈数や七壊星との戦勝数は一位を保持し続け、味方敵共にその名を知らしめた圧倒的な

存在だ。

「少し遅れたわ。ある物を読んでいたら夢中になってたものでね」

『?』オウゲン 叢雲は提督の捜索中に興味深いモノを発見し読んでいたらしく、更には途中で深海棲艦と戦闘して軽々とその場所まで向かっていったようだった。

叢雲は支柱に張り付く『巨門』テラスティア 戦艦棲姫、天龍と金剛の姿を見て状況を即座に理解する。

「……金剛、天龍、まだ行けそうかしら。行けるなら作戦に移ってほしいのだけれど」

「探すには何も問題ねえよ……」

「まだ大丈夫ネ……」

叢雲は二人の容態を見て動けるかどうか確かめる。

天龍と金剛は提督を探すくらいなら大丈夫だと息を大きく吸い込みながら歩き出した。

「そう……なら早く探してきて。こっちは任せなさい、文句は後で聞くわ」

「頼んだ……」

仁王立ちする叢雲の傍を天龍と金剛が駆け抜ける。

叢雲が現れた扉の場所まで全速力で駆け走り、提督捜索のため大広間から離脱した。

「さて……アンタと戦うのは半年前かしら？ かつては最強と謳われた『巨門』テラスティア 戦艦棲姫くん」

「イツモ馬鹿ニスルソノ性格ハ直ッテイナイヨウデ安心シタヨ……ソウデナイト潰シガイガナイカラナ……!」

二人が離脱したのを見計らって壁から降りてきた戦艦棲姫に話しかける叢雲。七壊星を前にして臆せず余裕の表情で堂々と立つ姿は勇ましく思える。

自身の事をバカにされたような気がした戦艦棲姫は微かに苛立ちを見せた。叢雲は戦艦棲姫の背後に聳え立つ三本の黒い塔を見上げて半目で何かを考え込む。

「さっきこの施設をある程度調べただけけれど、アンタ達とんでもな

い事を計画してるようね。流石に止めないとまずいかも」

「止メルノモ止メナイノモ自由ダ、勝手ニシロ。私達ノ目的ハ才前ガ想像シテイルモノトハ違ウカラナ」

「へえ〜……じゃあ自由にさせてもらおうかしら」

『?』オウゲン 叢雲は身体中から黄金の光を纏う鎗を巧みに回して戦艦棲姫に突きつけて身構えた。

三本の黒い塔の中心で耀く紅白い光が燃える炎のように膨張しては収縮し、肌を焦がすような熱さと石埃を退けるような風圧が二人を襲う。

「この際ここで決着つけない？ 長引くのも面倒だし、良い提案だと思うのだけれど」

「素晴ラシイ提案ダ、寧口私ハソノツモリダツタガナ」

「あら、それは良かった。互いに気が合いそうね」

「コウモ互イニ気ガ合ウト困ルナア……ジャア……」

『巨門』テラスティア 戦艦棲姫は片腕で目を隠して微かな笑みを浮かべる。

片腕を動かした時に見えたその眼は紅く宝石のように光り輝いて見えた。

「始メヨウカツツ!!」

「ツ!!」

両者共に全砲斉射。

紅黒い軌跡を放つ砲弾と金色の軌跡を放つ砲弾が一気に大衝突を起こした。

凄まじい爆発で二人の間が黒い爆煙で包まれる。

爆発した瞬間に叢雲と戦艦棲姫が共に爆煙を掻き分けて現れた。

巨大な黒い拳と黄金の光を纏う鎗がぶつかり合う。

黒い爆煙は霧のように衝撃で消え去り、コンクリート床が宙に舞い上がった。

『巨門』テラスティア 戦艦棲姫が巨大な黒い両腕を駆使して叢雲に殴り掛かる。

叢雲は小さな躯体で無駄なく回避。

戦艦棲姫は巨大な黒い拳の連続連打に派生させ攻撃し続ける。

黄金の光を纏う鎗を使いまわして黒い拳を往なして躲し、ズラして

躲し続けた。

殴り続けている最中に砲口の奥が紅く光るのを見た叢雲は後方へ跳躍。

元いた叢雲の位置で戦艦棲姫の砲撃が着弾していた。

身体を捻って回り続け、叢雲は空中で戦艦棲姫へ砲撃を仕掛ける。

戦艦棲姫は巨大な黒い拳で砲弾を無理矢理弾き飛ばした。

叢雲の着地狩りを狙って急発進急加速。

巨大な黒い拳が紅く唸り、大きく振りかぶって殴打する。

叢雲は大きく跳躍して回避し、戦艦棲姫の背後へ着地した。

戦艦棲姫は巨大な黒い右腕を後方へ振り回して薙ぎ払い。

その薙ぎ払いを叢雲は身体を伏せて回避する。

次に巨大な黒い左腕で床を挟りながらも一度薙ぎ払い。

叢雲は低空跳躍し、身体を回転させて回避。

右手に持っていた鎗で戦艦棲姫の脇腹を殴った。

戦艦棲姫の母体へ鎗の薙ぎ払いが直撃する。

戦艦棲姫は不気味な笑みをしながら歯を食いしばった。

空中で不安定な体勢の叢雲へ巨大な黒い右腕で殴打を仕掛ける。

叢雲は防御体勢に入るも間に合わず、殴打をまともに食らって殴り

飛ばされた。

床に何度も転がっては跳ねるも体勢を変えて立ち上がる叢雲。

殴り飛ばされた衝撃で叢雲の通った跡が著しく残っている。

戦艦棲姫は息する暇すら与えないと立ち上がった叢雲へ先攻。

巨大な黒い両腕を手当たり次第振り回し続けた。

押され気味の叢雲は黄金の光を放つ鎗で次々に往なしていく。

そして戦艦棲姫は身体を駒のように回転させ巨大な黒い腕を振り

回す。

竜巻かと思える猛攻撃で叢雲の防御を突破。

「隙が出来タナ叢雲オ!!」

防御が崩れて体勢が不安定になった叢雲へ渾身の殴打を仕掛ける。

防御する暇さえ無く叢雲はまた殴打を食らって遠くの壁まで殴り

飛ばされた。

殴り飛ばされた叢雲は壁に激突、土煙で見えなくなる。そこで戦艦棲姫が追いつきに打ちに叢雲へ襲い掛かった。

巨大な黒い拳で身体を掴まれ身動きが取れない叢雲。

戦艦棲姫は掴んだ叢雲を壁に打ち付けて引き摺らせていく。

そして叢雲は投げ飛ばされ、途中の柱へ何度も衝突しては突き破った。

反撃してこない叢雲へ戦艦棲姫は一斉放射。

紅い軌跡を放つ砲弾の雨が空中でうつ伏せになった叢雲を襲う。

しかし叢雲は砲弾が目の前まで来た瞬間に身体に光を纏い呟いた

「面白くなってきた……!!」

そう微笑んで紅い軌跡を放つ砲弾の雨を一閃。

黄金の光を纏う鎗で薙ぎ払い、十字光が幾千数と輝く。

薙ぎ払いによる衝撃と砲弾の大爆発で地表もろとも周辺にある全てを穿ち崩した。

瞬間、爆炎が混ざる黒煙の中から金色の十字閃光が煌めく。

無数の星のように輝く十字閃光が巨大な黒煙へ穴を開けた。

十字光の中から叢雲が雄叫びをあげて突進。

「ウオオオオオオオツツツ!!」

『テラスティア巨門』戦艦棲姫は咄嗟に巨大な黒い腕を交差させ防御体勢に。

『オウケン?』叢雲は黄金の光を放つ鎗を前に突き出した。

直後に轟音と共に大衝突。

叢雲が放つ渾身の鎗突きは戦艦棲姫の防御を容易く破壊する。

戦艦棲姫は衝撃に耐え切れず一気に突き飛ばされた。

戦艦棲姫の後を追うように空間を貫いたが如く無数の衝撃波が飛び出る。

戦艦棲姫は一階層上の壁に激突し、その周辺の窓ガラスや壁が全て碎け散った。

濃い土煙と飛び散る瓦礫の奥で紅い光が見える。

その瞬間に叢雲の目の前へ紅い軌跡を放つ砲弾が二つ。

叢雲は砲弾の間を身体の向きを変えて回避。

そして突進してきた戦艦棲姫を鎗で迎え撃った。

巨大な黒い拳を重ねて迎え撃ってきた叢雲をゴリ押す戦艦棲姫。

叢雲は二本の足で何とか踏ん張る。

二人の通った後の床がボロボロに凹んでいた。

叢雲は巨大な黒い拳を受け流して跳躍。

跳躍中に戦艦棲姫の頭上で鎗を振り回して攻撃する。

戦艦棲姫は母体の拳や腕で叢雲の鎗を弾き返した。

叢雲は着地時に巨大な黒い右拳を踏み付ける。

床に埋まった右拳が取れなくなった戦艦棲姫へ巨大な黒い腕を踏

み台にして蹴り飛ばす。

「絶対アンタ達なんかには負けないッ!!!」

前突き蹴りの姿勢で金色の光を纏う『?』叢雲は叫ぶ。

「ッ……ンッッ!!」

蹴られた『巨門』戦艦棲姫は即座に頭を振って意識を取り戻す。視

界に映る叢雲へ残った巨大な黒い片腕で殴打を仕掛けた。叢雲は腕の力だけで小さく跳躍し、殴ってきた黒い拳を足場にして後方へ更に跳躍した。

「アイツを倒すまではッ……!! 絶対に勝つんだからッッ!!!」

「生意気ガアアア!!!」

『?』叢雲と『巨門』戦艦棲姫が間合いを詰めて突進。

互いにぶつかり合った。

188. 天魔の眷属は嘲りて

——ヘカントケイル第一支柱屋上。

「ひよえ〜……今思えば凄いところに着陸しちゃったな……」

「着陸してるかどうかすら危ういですけどね」

高さ三百メートル以上ある塔の屋上で瑞鶴と不知火は塔の調査と合わせてパラシュートの絡まりを解いていた。天高く、そして地中深くまで根付いて聳え立つ三本の塔は歪な形で刺々しく、中心では紅白い光線が雲夜空を穿いている。

火山の噴火のような爆音と生暖かい風が真下から緩く吹いていて、遠くの水平線では目を凝らせば連合艦隊と深海棲艦の艦隊が激しい戦闘を繰り広げているのが分かった。

「多分凄い騒音が聞こえるって事は誰かが戦ってるのかな。無線も誰も応答しないし……下の状況がよく分からない……」

「摩耶さん達を信じるしかありません。塔については調べても分かりませんでしたし、本来私たちはここから更に島の崖下にある脱出ルートを確認しなければなりませんから、急がないと」

地上よりも奥深く続く地下軍事施設の最下層から凄まじい爆音と衝撃音が微かに聞こえる。無線が使えない状況の中、下の様子が分からない瑞鶴と不知火は本来の目的の為にパラシュートの絡まりを解くのを急いでいた。

「そうね……脱出ルートを確認すれば提督を探す時間も出来るし……」

「それに……」

「それに……？ 何ですか？」

「あ、いや……なんでもない」

何か含みのある言い方をした瑞鶴に対して不知火はもう一度聞き返した。瑞鶴は無意識だったのか忘れていたかのように振る舞い、何も答えずパラシュートの絡まりを解いていく。何か不審に思える行動に不知火は瑞鶴の行動を注意深く見守った。

「瑞鶴さん、準備できました。私はいつでも降りれますよ」

「私もよ、すぐにも降りましょう」

パラシュートの絡まりをようやく解けた二人はパラシュートを大きく展開して塔の屋上から飛び降りた。不知火から先に飛び降りてパラシュートを展開し、瑞鶴も同じく展開しながらお互いぶつからないようにゆつくりと静かに落下していく。

地下軍事施設の最下層から聞こえる爆音の数々が徐々に騒がしくなっていく中、瑞鶴はふと雲夜空を見上げた。

「待っててね……翔鶴姉……ん？」

雲夜空を見上げた途端に何故か白く映る丸い星のような物が見えた。

この空一帯は分厚い雲で覆われているはずが白い星のような物が違和感なく存在していた。

「……まさか……！」

瑞鶴は顔面蒼白になって気付く。

その瞬間に――、

「ぐあッ……!!」

瑞鶴の頭上で連鎖状に大爆発。

爆発の衝撃で瑞鶴は着地点から大きく外れてしまった。

傘体に火が移り燃えていき、落下速度は急激に早くなっていく。

「瑞鶴さん!!」

落下制御がままならない瑞鶴へ更に追撃、傘体に着弾して爆発。

とうとうパラシュートすら粉微塵になり、瑞鶴は爆発の衝撃で吹き飛ばされる。

空中で身動きが取りずらいまま落下していく瑞鶴。

傍に見えた塔の壁へ腕を伸ばして手で無理矢理掴もうとした。

滑らかな壁に火花が散っていく。

掌や指を擦れさせながら落ちていく瑞鶴の手元に突起が現れる。

瑞鶴は壁の突起を手で掴み、何とか垂直落下を間逃れた。

「誰が……! こんな事を……!」

「アハハハハ!!」

聞いた事のある煩わしい笑い声に瑞鶴は顔を仰ぐ。

突如襲撃してきた相手を見て瑞鶴は限界まで目を見開かせた。

「空母水鬼……!!」

「まさか……!! ここですか!!」

「アハハハ!! 面白いナア!! 実ニ面白イヨ瑞鶴!!」

翔鶴の正装を着ながら怪物のような艀装に乗る空母水鬼。

飛行甲板を塔の壁に突き刺して艀装を足場に瑞鶴を嘲笑いながら見下ろしていた。

「このタイミングで現れるか……!」

「しかし何故ここが……!!」

「知りタイカ? アノ起源者ガオ前ニ会ワセルヨウ仕向ケテクレタンダ!! 更ニハオ前ヲノ動向ハ全テ『天魔』ニヨツテバレバレナンダヨ!!! 面白い!! 本当ニ居ルトハ思ワナカッタ! アハハ!!」

空母水鬼は嘲た表情をしながら『起源者』『天魔』という聞き慣れない言葉を躊躇いもなく堂々と伝え、そして半信半疑だったのか瑞鶴と不知火が塔の屋上にいた事に再度狂うように嗤った。

空母水鬼の高らかな笑い声が中心で輝く紅白い光の爆音を遮って辺り一帯に響き渡る。

翔鶴の正装を着たまま空母水鬼の姿で嘲笑うその様は瑞鶴にとって不快極まりないものだった。早くそのふざけた姿から翔鶴を取り戻したいと願う気持ちを抑えきれず思わず口から怒りの声が出そうだった。

「コノママ落ちタラ死ンジャウ? 死ンジャウノ? 落ちタラ真ツ逆サマ! 脳ミソブチマケテドバァーン!! アハハ!! ネエネエ!! ドウ? ドウナノ?! ネエネエ!!」

空母水鬼は身動きの取れない瑞鶴を見るやいなや腹立たしく煽り立てる。

何も出来ずただ塔の突起を掴んでぶら下がる瑞鶴を何度も何度も嘲笑った。

「前と比べて随分と口がうるさくなつたわね、このゲスが……!! アントは絶対に許さないんだから……!!」

塔の突起に捕まり辛うじて垂直落下を間逃れた瑞鶴の状況は依然として不利だった。

片手で突起に捕まるのが精一杯で満足に艤装を展開し、空母水鬼を攻撃する事すらままならない状態。地下軍事施設の穴から吹き出る真下の生暖かい風と横殴りの風が激しく吹き荒れ、突起を強く掴んでいなければ吹き飛ばされそうなほどだった。

下を見れば既に不知火がパラシュートを脱ぎ捨てていて、陸地に着陸しては艤装を構えて瑞鶴の名を叫んでいる。

「シヨウガナイナー、シヨウガナイナー！ ソノ姿モ惨メデ面白イケドー、可哀想ダカラー、助ケテアゲルヨー！」

腹を抱えて涙を浮かべて笑い倒れた空母水鬼は満足したのか瑞鶴にトドメを刺そうと鋼鉄の甲懸を怪物のような艤装の口から自動的に装着させる。

両足には特徴的な黒く分厚い巨大な鋼鉄の装甲があり、空母水鬼は紅い光を身に纏わせ跳躍した。

「死ネエエエエ!!!!」

真っ先に瑞鶴の方へ突き蹴り。

瑞鶴は掴んでいた手を離して両腕を交差して防御体勢に入る。

「瑞鶴さん!!」

不知火の上空で土煙と爆煙が夜雲空を隠す。

凄まじい爆音と同時に頭上から塔の瓦礫や破片が滝のように落下してきた。

二人の姿が煙に邪魔され全く見えない。

「死ぬのはアンタの方よ……！ 空母水鬼!!」

「ッ!!」

瑞鶴の声が聞こえる。

煙が強い横殴りの風に流され、二人の姿がようやく見えてきた。

よく見れば空母水鬼は右足を前に突き出しては瑞鶴を強く壁に打ち付けている。

そして瑞鶴は咄嗟の防御で直撃は間逃れたものの空母水鬼の押し込みに塔の壁にめり込んでいた。

交差する両腕から見える瑞鶴の眼は未だ輝きを放っている。

息を込めて瑞鶴は思いのまま空母水鬼へ宣戦布告した。

「絶対に翔鶴姉を……！ 取り戻してやる!!! 例え刺し違えてでもツツ!!!」

「アハツ……い・イイネ!! ヤレルモノナラヤツテ——」

何度も攻撃を食らっておいて未だに減らず口が叩けるなど感心して驕る空母水鬼は歪んだ笑みを瑞鶴に見せる。

しかし突然真下から複数の砲弾が空母水鬼の肌や艀装を掠めて夜雲空へ消えていった。

「ウワツ!!!」

突然、空母水鬼の脇腹が大爆発。

予想だにしない砲撃に空母水鬼は思わず怯み声を上げる。

空母水鬼の打ち付けから解放された瑞鶴はそのまま陸地に落下。

落下の衝撃を最小限に身体を回転させ、瑞鶴は体勢を立て直して立ち上がる。

爆炎と黒煙に穴を開けて複数の深海地獄艦爆が紅い光を纏って現れる。

瑞鶴がいた地点周辺を見境なく爆撃。

生い茂った木々を次々と薙ぎ倒して更地に変えていく。

瑞鶴は跳躍して爆撃を回避し、空中で仰向けの体勢に。

更に弓を構えて彗星一二型甲を複数発艦させた。

空母水鬼は怪物のような艀装に乗って陸地へ着陸。

瑞鶴は着地狩りを狙って空母水鬼へ爆撃する。

空母水鬼は更に深海地獄艦戦を投入し、瑞鶴の艦爆機を粉碎。

爆発で一時的に照らされていく中で艀装を発進させる。

地面を抉りながら高速で瑞鶴へ接近していく。

そこへ横から不知火がドロップキックを仕掛けた。

空母水鬼は片腕を固めて防御、不知火は片腕に乗って後方へ跳躍する。

跳躍中に二回ほど砲撃して瑞鶴の元へ戻った。

空母水鬼は鋼鉄の甲懸にある複数の穴から紅い光を放出させていく。

その事に気付いた瞬間、空母水鬼は艀装を乗り捨てて突進。

嫌な予感がした二人は咄嗟に身体を倒して回避する。

音速並みのスピードで瑞鶴と不知火の間を通り抜けていった。

「明らかに改造されてる!!! 陸地で艦装のあんな速度見た事ない!!!」

「恐らく鎮守府の時の状態は弾薬や耐久が減り続く長期戦、『?』^{オウゲン}叢雲やイカれた吹雪との対戦もあつてか弱体化していたのでしょうか……!

空母水鬼の突進は二人の背後にある木々達を薙ぎ倒し、地面には切り株しか残っていなかった。

赤く熱されて焦げたような跡が白い煙を吐いている。

不知火が冷静に空母水鬼の状態を分析した。

「ですが今は開戦に備えて充分な準備をした状態での戦闘……! 改造込みと考えれば道理でパワーアップしている訳ですネツツ!!!」

分析している最中、空母水鬼は獲物を屠る眼で二人の方へ振り向き再度突進。

突進はまた回避出来たものの、凄まじい速度に二人は怯み声を上げて吹き飛ばされた。

突進した空母水鬼の方へ振り向き、瑞鶴は大きく腕を振って艦爆隊に指示を出す。

体勢を整えて着地し、紫電改を複数発艦させた。

「グアアアアア!!!」

空母水鬼の怪物のような艦装が咆哮をあげる。

背後の砲口が紅く光出し、瑞鶴に狙いを定めた。

「んなッ叫んで——」

振り向いた直後、紅白い光芒が輝き地表は爆散。

爆撃で抉れた地面ごと陸塊が宙を舞う。

瑞鶴と不知火は陸塊の上へ一時的に着地した。

空母水鬼は走り出しながら嬉々として説明していく。

「面白いデショ!! 勝手ニ攻撃シテクレル自律システムガ備ワツテルノ!! 逃ゲ場ハナイヨ!!!」

舞い散る陸塊へ向かって大跳躍。

身体を仰向けにして何か構えた動作をする空母水鬼と陸塊で構え

る瑞鶴とで目が合った。

「サ〜ラ〜ニ〜!!!」

「ツ〜……!!」

空母水鬼の動きを見て瑞鶴は瞳孔を開かせ歯を食いしばった。

空母水鬼は飛行甲板や弓矢等を持つ翔鶴の顔と艤装を展開していたのだ。

「攻撃出来チャウンダヨネ〜!!!」

空母水鬼は紅い光を帯びた九七式艦攻を幾つも発艦していく。

瑞鶴の彗星一二型甲を次々に粉碎した。

爆煙の花が咲いていく空の戦場の最中、一つの九七式艦攻が瑞鶴の腹へ目掛けて突進、直撃。

瑞鶴は突き飛ばされ地面に叩きつけられた。

少し離れていた不知火は陸塊を蹴って跳躍し、空母水鬼へ殴り掛かる。

「性根から腐ってますね本当にアナタはアツ!!!」

「アハハハ!!!」

不知火の右拳の殴打を空母水鬼は片手で受け止める。

すかさず不知火は肩の砲塔を空母水鬼に向けて砲撃。

空母水鬼は首を傾けて砲撃を回避した。

余った片拳で不知火の顔目掛けて殴打を仕掛ける。

不知火は左肩の魚雷を一本発射。

それを見た空母水鬼は魚雷が目の前で直撃するのを察して一瞬殴打を緩める。

緩めた瞬間を逃さない不知火は発射された魚雷を手に持ち、空母水鬼の首元へぶっ刺した。

魚雷の信管が炸裂し、空中で爆発。

空母水鬼は爆発の衝撃で地面に叩きつけられ、不知火は空高く舞い飛びつつ綺麗に着地する。

「不知火!!? 大丈夫なのそれ!?!」

「私は大丈夫です……! 本来陸地での威力はさほどありませんので効いているかどうか分かりませんが……! やれるだけやってみる

のみです……!!」

不知火は自身で考えた案を伝えながら、煙を帯びた手を適当に振って動くかどうか確認する。瑞鶴は口から血を少量吐いていても充分に戦えると臨戦状態だった。

塔周辺に生い茂った森林の一部は先程の戦闘によって焼け焦げた切り株や倒木が並ぶ更地と化している。土煙を掻き分けて空母水鬼は嘲笑った表情を崩さず、二人の前へ歩きながら現れた。

「翔鶴ノ姿ニ戦ツテルノニ意外ト取り乱シタリシナインダネ……テツキリ、感情爆発サセテ襲イ掛カルモノカト思ツテタケド」

「そこまで私達も馬鹿じゃないわよゲス野郎……! 翔鶴姉を返しなさいよ!!!」

「エ〜? コンナニモ相性ノイイ身体、ミスミス手放ス訳ナイジャ〜ン。コノママイケバ……イズレハ七壊星ニ……」

太陽の光によって徐々に雲空が青色を取り戻していく最中、塔の傍で空母水鬼と敵対する不知火と瑞鶴は怒りを露わにしていた。

あまり損傷の無い空母水鬼は自身の身体を大事そうに腕を組む仕事を草にする。

「今まで貴女は……翔鶴さんの中で息を潜めていたのですか……?」

「ソウダヨ。アノ鎮守府ノ地下デ艦娘ト深海棲艦ノ融合実験ヲ繰リ返シテイタ時ニ唯一成功シタノガ翔鶴ト私……私ガ翔鶴ヲ一方的ニ取り込ンダ事デココマデ成リ上ガレタ……感謝シテルヨ」

空母水鬼は右腕を広げて自身の身体を見せびらかしながら、あの時の出来事を躊躇いなく話していく。

蒼色が殺され ■■少尉が鎮守府責任者となり、艦娘同士で仲間割れや差別意識が起きた破滅の時代で ■■少尉は鎮守府の地下で融合実験を行っていた。

数々の艦娘を犠牲にして最終的に成功した唯一の個体が翔鶴と空母水鬼。

空母水鬼は翔鶴の身体に侵入した後に翔鶴の核を一方的に飲み込んで混合させ、空母水鬼自身が操れる様に核の中に仕掛けを施していた。

「翔鶴本人ハ氣付イテナカッタミタイダケド、私ハ翔鶴ノ身体ト人格ヲ一方的ニ支配出来ル。私ハ翔鶴ノ身体ト人格ヲ翔鶴ニ譲ツタ風ニシテ、私ノ意ノママニ行動デキルヨウニ身体ノ中ノ核ニ仕掛ケタ」

空母水鬼は翔鶴に身体と人格の支配権を譲らせ、意思や行動などの精神等は全て自身で支配できるようにしていた。

傍から見れば翔鶴は翔鶴本人の姿として空母水鬼がいる事を全く知らず、内面では空母水鬼の意思や行動によって支配されている事を知る由もない。翔鶴本人は空母水鬼を取り込んだ事を知っていても自身に全て支配権があると思ひ込んでおり、また思ひ込ませているのも空母水鬼の仕業である。

故に翔鶴は空母水鬼の操り人形として自身の意思や行動とは意を反する事をし続け、空母水鬼が潮岬町鎮守府を実質的に裏で支配していた。

「面白カッタナア〜!!! 自分ノヤツテル事ガ裏目ニ出テイルハズナノニ、正シイ選択ダト信ジテ疑ワナインダモンネエ〜!! ソレ全ク部私ガ考エタ事ナノニ!! 笑ツチャウクライ上手ク進ムモンダカラ、堪エルノ大變ダツタヨク〜!!!」

終始嘲笑い続ける空母水鬼は二人を怒りへ誘ひ込むように煽り立てていく。

今まで潮岬町鎮守府で起きていた最悪の数々は空母水鬼によって引き起こされた事であり、不知火や瑞鶴達は全て手の平の上で踊らされていた。

それを知っただけで瑞鶴は堪忍袋の緒が切れて発狂していてもおかしくはなかった。

「仲間ヲ守ル? 約束ヲ守ル? アハハ!! バア〜カジヤナイノ?!」

コノ空母水鬼ガ居ル限り、ソナ事サセマセ〜ン!! 翔鶴モ含メテ一人残ラス苦シンデモライマ〜ス!!! コレカラモネ〜!!」

「黙れ……!!」

「ッ?」

言いたい放題に煽りまくる空母水鬼の行動に瑞鶴は前髪を逆立てさせ、震えた声で憤怒する。

今すぐ倒したい衝動を必死に抑えて捻り出した言葉だった。

「これ以上喋るな……!! さもないと今すぐ叩き潰すわよ!!」

「へエ〜デキルノ？ コレ翔鶴ノ身体ダヨ？ 叩キ潰スト私モ口トモ翔鶴モ死ンジャウヨ？ イイノ？」

「ぐッ……!! こっつの!!!」

「瑞鶴さん！ 抑えて!!」

空母水鬼の変わらぬ煽り様に瑞鶴は激昂し、弓矢を構えて攻撃隊を発艦させ攻撃しようとした。咄嗟に不知火が瑞鶴の攻撃を止めようと腕を広げて前へ出る。

「相手は確実に誘ってきています！ 今すぐ倒したい気持ちは凄く分かりますが、今は抑えて……!!」

「分かつてる……!! 分かつてるよ!! だけど不知火……私は黙っちゃいられない……!!」

瑞鶴は空母水鬼に対する怒りがどうにも抑えられなかった。

翔鶴や鎮守府の全てを台無しにしておきながらヘラヘラと五体満足で生きている事に腸が煮えくり返そうだった。

今すぐその舐めた態度を捻り曲げてぶん殴ってやりたいという気持ちが入り込んでいた。

その二人の姿を見て空母水鬼はニヤニヤと攻撃を誘ってきている素振りを見せている。

「あんなゲス野郎にこんな事を言われて頭にこない奴なんていないでしょ!!!」

「っ……!! ですが……!!」

瑞鶴の言っている事は不知火にとっても身に染みるほど理解できる事だった。

不知火も同じく、空母水鬼を捻り潰したい気持ちでいっぱいだった。

だが空母水鬼は煽る事で自分達の理性を失くして油断を作ろうとしているのは分かっていた事だった。少しでも自身を自制させ、周りの状況を把握していかなければ湧き上がる怒りに身体が支配されそうだった。

「ネエ」

ふと、空母水鬼が声を掛ける。

「何よ!!」

瑞鶴は怒りのこもった声で怒鳴りつけた。

「不思議ニ思ワナイ？ 何デ如何ニモ重要ソウナコノ施設ガ日本ノ連

合艦隊ニ攻メラレテイルノニ、アノ『巨門』テラスティア以外ノ七壊星ガ現レナイ

ノカ……」

空母水鬼は頭上に指をさしながら不気味な笑みを浮かべて問い掛ける。

不知火と瑞鶴は塔の屋上から降りる前にとある事に疑問を持っていた。

「一体……何処ニイルト思ウ？」

小笠原諸島奪還を目的とする護神厄討艦隊の艦娘率いる連合艦隊に対して、何故深海棲艦側の戦力が圧倒的に少ないのか。

現在確認されているのは施設内に潜伏していた『巨門』テラスティア戦艦棲姫のみであり、現在は『？』オウケン叢雲と交戦している。

それ以外の七壊星の目撃情報が全く無かった。

「まさか……」

「計画ハ、マダ……始マリニ過ギナイ……」

——仙台湾。

巨大な水柱を確認。

全員、衝撃に備えよ。

189. 絶望と破壊を司る七つの星達の国墜とし

——宮城県、仙台湾。

青い海が広がる仙台湾の中央で突然沸騰したかのように泡が噴き出す。

徐々に紅い稲妻の光が放出され、一点を集中して海を穿っていた。そして爆発、巨大な水柱を上げて大量の海水が空へ持ち上げられる。

「何だ……アレ……」

白く噴き上がる水柱の中をゆつくりと歩く巨大な影が見えた。

持ち上げられた海水を浴びながら歩くその姿を見て人々は絶望する。

「宮城県守府から緊急報告!! 仙台湾にて【玉衝】^{アリオト}戦艦水鬼の出現を確認!!」

横須賀鎮守府小笠原諸島奪還作戦司令本部にて■■大将の驚嘆の声が響き渡る。

オペレーターによると仙台湾にて七壊星【玉衝】^{アリオト}戦艦水鬼が現れたとの報告が入ったようだ。

仙台鎮守府から送られた配信映像には広い仙台湾の中央にて巨大な水柱の中から堂々と現れる戦艦水鬼の姿が確認されていた。周辺に他の深海棲艦らしき存在は見当たらず、単騎突撃で来ているのは一目瞭然だった。

「何故アイツが……仙台湾に……!」

「更に佐世保鎮守府からも報告が!! 佐世保湾に『廉貞』^{デイゲオス}重巡棲姫の出現を確認!!」

「何だと!!?」

——長崎県、佐世保湾。

佐世保湾の中央で突然海面から白銀色の光塔が空を穿つ。

巨大な水柱が立ち上り、白銀色の光が屈折して周辺の山を削った。海水の豪雨から白銀色の眼を十字光に輝かせ、遠方に見える佐世保鎮守府を睨んだ。

——京都府、若狭湾。

若狭湾の中心で凄まじい衝撃と共に巨大な水柱が立ち上る。

水柱の影で白い彼岸花を咲かす一羽の鶴が目に迸る紅い光を一点集中させた。

巨大な水柱が紅い光の輝きで跡形もなく消え去り、航空機を飛ばして鎮守府を見つめている。

「更に各鎮守府から続々と七壊星の出現報告が!!」

「舞鶴鎮守府では若狭湾に【天権】メグレス深海鶴棲姫……! 呉鎮守府では瀬

戸内海にて『文曲』アストラファイ戦艦レ級!」

日本各地の湾内で続々と七壊星の出現報告が司令本部に届く。

時間は朝の五時を過ぎたところ、朝日が昇って空が徐々に明るくなる時間帯だ。

何故このタイミングで七壊星が続々と現れるのか、予想外の出来事に司令本部内では戸惑いの声が続えなかった。

「札幌鎮守府からも入電が!! 石狩湾にて『緑存』マグニティス港湾棲姫の出現を確認!!」

「南方マーシャル諸島海域の制圧前線では【開陽】ミサール深海日棲姫と武曲』シーフォウス駆逐水鬼の侵攻を確認しました! 大艦隊を引き連れ前線を上げてきています!!」

現在アリユーション列島海域で戦闘中の筈である『緑存』マグニティス港湾棲姫が突如石狩湾にて白い稲妻のような磁力を響かせながら出現。

更には南方マーシャル諸島海域にて【開陽】ミサール深海日棲姫と『武曲』シーフォウス駆逐水鬼が奪われた海域を奪還するべく大艦隊を編成して前線を押し上げてきているらしい。

小笠原諸島奪還作戦の隙を狙った行動と考えれば簡単に理解でき

る。

■ 大将は顎に手を当てて考えるような仕草をした後にオペレーター達へ指示を出した。

「慌てるな！ こうなる事は私の方で既に対策済みだ。七壊星が出現した海域に属する鎮守府に伝達、只今をもつて一部を除いた護神厄討艦隊全員の戦闘待機を解除、無制限戦闘の出撃を命じる。各自七壊星と対応せよ、上陸だけは絶対にさせるな！ 我々はこの国と国民を守る義務がある。作戦が優先されるが今回は例外だ、七壊星の対応にあたる鎮守府は対象地域に住む人々を避難させ次第全力で守り通せ！」

作戦内容が深海棲艦側に漏洩している可能性を知った■ 大将はこの事態に備えて切り札である護神厄討艦隊の艦娘達の出撃を制限していた。

■ 元帥からの助言により、もしこの作戦の隙を狙って国を脅かす七壊星がいた場合に対処できるよう待機させていたのだ。

急いでオペレーター達は各鎮守府へ■ 大将の指示を聞きながら伝えていく。

「作戦は続行！ 関係の無い鎮守府は七壊星に気にせず戦闘を続行せよ!! 奴らの防衛線突破までもうすぐだ、気張っていけ！」

■ 大将が冷静に指示を出しつつ鼓舞を出している最中、一本の着信が専用端末から鳴り響く。

専用端末を取り出して画面を操作し、耳にそつと当てて着信主の声を聞くと鬼の■ 大佐が面倒そうな口振りで煙草を吸っていた。

『とんでもない事になつちまつたねえ■ 君……』

「あいつの予想は的中でしたよ、■ 大佐」

『まあそうさね……仕方ない、あの餓鬼二人組は私達に任せておくといい。お前は小笠原諸島奪還作戦に集中しておく事だ、分かったか』
「かしこまりました」

■ 大佐はいつも通り【開陽】と『武曲』の相手をすると鼻で笑いながら報告した。

自分達の事は気にせず今は小笠原諸島奪還作戦に集中してほしいという■ 大佐の願いだったのかいつもより声が真面目に聞こえた。

「■■大将閣下!!!」

「どうした」

「大変です!! 東京湾に凄まじいエネルギー反応が出ています!! 七壊星以上に匹敵する力です!! とてつもなくまずいですっ!!!」

巨大なモニターでは東京湾の中心に赤く広がる一つの点が映し出されていた。

線引きで『??』と何もかも不明な状態で情報が残されており、徐々に赤い点が周囲に広がっている。

「まさか……」

—— 東京都、東京湾。

青色を取り戻しつつあった空が突然反転し、まるで地獄のように紅黒く染まる。

東京湾の中心で紅黒いサークルが海面に刻印され、紅黒いエネルギーの玉が周囲に作られ宙へ浮いた。

サークルの中心から外へ紅黒い稲妻が海面を裂いて迸る火花のような音を出している。

直後、周囲に散らばっていた紅黒い玉が一気にサークルの中心へ集束する。

周りの大気や海水など全てを巻き込んで紅黒い光の玉が徐々に大きくなる。

そして紅黒い光の玉は爆発。

黒い十字光と紅い十字光を輝かせ、白い光に変貌して全てを薙ぎ飛ばす。

中から白髪白肌の若い女性が禍々しい艦装を展開させて現れた。

【^{ドゥーベ}天枢】中枢棲姫……!」

全ての災厄、深海棲艦を統べる女王。

【^{ドゥーベ}天枢】中枢棲姫が単騎で東京湾の中心に出現した。

両腕を広げて浮遊しつつ、海面にゆっくりと着水する。

出現による衝撃で空に届く巨大な水柱が立ち上り、海面が怯えるが

如く波が荒れていく。

衝撃波が遠くの高層ビル群まで隙間なく広がっていった。

一番近い所では窓ガラスが割れ、壁に亀裂が走っていく。

「本当に生きていたとはな……！」

【天枢】^{ドゥーブ} 中樞棲姫の身体が白く発光し、周辺の空間が歪み始めた。

時々輝く猩々緋色の稲妻を身に纏い、悍ましい怪物の姿した艤装が咆哮を上げる。

中樞棲姫は宝石のような紅い眼を輝かせ、微笑みながら横須賀鎮守府の方向へ振り向いた。

「楽しく……いこうか……♪」

司令本部の共有モニターにはカメラ目線で ■ 大将達を見つめ続ける【天枢】^{ドゥーブ} 中樞棲姫の姿が映し出されていた。

世界に蔓延^{はびこ}る深海棲艦を統べる女王として災厄と混沌^{もたら}を齎した白き鋼の艦姫。

その姿を見てオペレーター達は口を開いて汗を掻き青ざめ、司令本部内は驚きと畏怖の声で溢れ返る。驚くのも無理はない、中樞棲姫は五年前のマウグ島攻略作戦で連合艦隊の一斉砲撃によって討伐されていたはずだった。

だがその中樞棲姫が東京湾の中心で微笑んだ表情をしながら五体満足で居座っている。誰もが考えたくなかった中樞棲姫の復活が現実のものとなってしまうのだ。

「そんな……馬鹿な……」

「これはまずいぞ……」

「狼狽^{うろた}えるな！」

中樞棲姫の出現に青ざめるオペレーターを大きな声で一喝して場を静止させる ■ 大将。誰もが ■ 大将の声を聞いて身体を向けた。

「政府からは私が連携を取る。直ちに東京湾に接する対象地域の各自治体へ避難指示の要請！ 横須賀鎮守府にて待機中の艦隊は海岸線沿いにて対中樞棲姫の任務にあたれ！」

冷静に場の状況を判断しつつオペレーター達へ指示をする。

■ 大将はモニターに映る中樞棲姫の姿を睨みながら、ある艦娘の

二つ名を呼んで話し掛けた。

「ライティ霊」……すまないが、頼めるか」

「司令官のであれば……大丈夫です」

「任せたぞ……この国の運命はお前達にある」

「分かりました……なのです」

柱の影に隠れる艦娘は碧い眼を光らせ、碧い稲妻を一瞬身に纏う。

四色の長髪を靡かせて奥の扉へ誘われるように消えていった。

——大本営

淡く日光に照らされた雲が空を白く覆い、窓から微かに伸びる光が部屋を照らす。

壁に置かれた檜の本棚や応接用のソファ、机と背もたれの大きい黒い革の椅子が置かれたシンプルな部屋だ。

その部屋の中でキーボードの軽いタイピング音が規則よく聞こえるも突然の爆音と共に掻き消された。とてつもない爆音に何かの作業をする人物は微動だにせず、ノートパソコンの画面を見つめたままカタカタと文字を打ち続けている。

「君か」

部屋のドアから誰かが入ってくる音が聞こえた人物はノートパソコンを閉じて声を掛けた。

「お疲れ様です、■■元帥殿」

「お疲れ様。■■■■君」

部屋にいた人物の名は■■元帥、北方海域での防衛線構築やビスマルク諸島海域の鎮守府設置、五年前のマウグ島攻略作戦などで大きな功績を挙げ、今もなお小笠原諸島奪還作戦でその力を奮う日本海軍の最高位に位置する統率者。

部屋に入ってきた人物は大本営に属する陸軍大臣管轄の軍令憲兵隊隊長、■■■■大佐。

一見関わりの深い関係とは思えない二人が元帥の部屋にて実現した。

「今度は何を頼むのかね」

■元帥はノートパソコンを机の上の隅に寄せて、左手前にあった書類の束の一枚ページを手取る。真っ直ぐ自身の中央奥に立つ■大佐を視界から外して、手に取った書類にボールペンで何か書き始めた。

■大佐は話し掛けに応じず数秒ほど■元帥を見つめ続け、何か躊躇ったような表情をしながら右腕を上げた。

「……なるほど……口封じ、か」

■元帥が顔を動かさず目だけを動かして見た先には小さな銃口があった。

■大佐は右手に消音筒付きの拳銃を持って■元帥に向けていたのだ。

「どうだった？ 最高責任者である私を脅し続けてきた日々は。感想を聞かせてはくれまいか」

拳銃の銃口を自身の頭に向けられ命を握られているというのに■元帥は微動だにせず動揺も無いまま話を続ける。今まで■元帥を脅し続けて追い詰めていたのは大本営に属する憲兵隊長の■大佐だった。

「別に君に怒っていつている訳じゃない。単なる興味本位さ、深い理由は無いですよ」

書類の束から一枚ずつ取り出してはボールペンですらすらと書いていく■元帥。

■大佐は口を開く事なく沈黙を貫いたままで、部屋の中が静寂に包まれた。

「だんまりか……まあ、仕方ないね。言いたくない事の二つや三つくらいあるものか」

「……もう終いです」

ようやく口を開いた■大佐の言葉が聞こえた。

■元帥はその言葉を聞いて一瞬ボールペンの手を止め、もう一度何事もなくボールペンで書いていく。

「……で貴方を殺します。覚悟はできていますか？」

「……そっか。予想した時間帯とまあ大体合ってるな」

■大佐は元帥の暗殺宣言を堂々と冷酷な重い声で伝える。

今まで脅し続けてようやく暗殺されるのかと元帥は困惑した表情で■大佐を見つつ書類に目を通してボールペンの手を動かす。黒■から元帥の暗殺を命じられた■大佐は日本海軍元帥の暗殺を実行する為に部屋へ赴いていた。

現在時刻は朝の五時過ぎ、小笠原諸島奪還作戦で忙しい最中かつ人数の少ない大本営で暗殺するには絶好のタイミングとも言えるだろう。勿論■元帥は自身が殺される時まで長くない事を既に察していた。黒■や■少尉の計画の進行状況を考慮すれば小笠原諸島奪還作戦発動中に何かしら動きがあるのは誰でも理解できる。

「……殺さないのかい。私は無防備だ、君ならいつでもその軽い引き金は引けるだろう?」

「殺す前に幾つか聞きたい事がありますので。答えていただけますでしょうか」

「今更なにを言うかと思えばそんな事か……いいよ、何だね?」

これから暗殺されるというのに一切の動揺もしない■元帥は急かすように話し掛けてくる。

■大佐は敵視するかのような鋭い目で睨みつけ、命令口調で質問に答えるよう冷たく伝えた。

「何故貴方は何故そんなに死ぬ事に対して躊躇も何も無いのですか? 普通ならば生にしがみつくと為に命乞いをしてもおかしくはないはずです」

■元帥の妙な落ち着き様に■大佐は拭いきれない違和感と不信感が募っていた。死ぬと言う事は今後この世界に二度と生きる事は出来ない、この後の行く末を見届ける事が出来ない全ての終わりを意味する。普通の人間であればまだ生きていたいと慌てて逃げ出すか、涙を流して土下座しながら命を乞うだろう。だが■元帥にはその様子は全く見られず、まるで死ぬ事を受け入れているように見えた。

「簡単な話さ、ただの寿命だよ……私はもう八十近くでね、そろそろ引

き際が来るお歳頃なのさ。だからこうやって引導を渡してくれる人がいるなら、どうせならやつてもらおうかと思った。それだけの事だよ」

「後悔は無いのですか？ やり残した事とかは？ 家族は？ 友人は？ 遺したモノとかは無いですか？」

「これまでの後悔は全て糧にした。やり残した事もやり尽くして、後は引き継げるように全て任せたらね。家族や友人はいなくなっただし、今更遺すモノはないかな」

照れ臭く微笑みながら ■元帥は高齢を理由に死を受け入れる事を選んでいた。

長く日本海軍の軍人として日本を護り続けた元帥は歳を重ねていく度に老いて朽ち果てていく身体の限界が来た事を悟っていた。

頭脳においても自身の価値観や考え方が新しい時代に似合わない、追いつく事が出来ないなど元帥の立場に相応しくないと自ら辞めるつもりでいたようだった。家族や友人は既に先へ行ってしまった以上、遺すモノは何も無い。

失うものは無い以上は生きる事を捨てるのは容易だった。

「後は若い子達がやってくれるよ。こんな未来のない老いぼれ一人に任せるより、未来ある若者に任せれば未来はもっと明るくなるだろうからね」

自身の老いた考え方よりも現代の若者達の考えの方が未来を明るくするだろうと願いを込めて ■元帥は思った事を伝える。

■元帥は自身の事よりも優先的に国の未来を守る姿勢を一切崩さない。

何十年間も日本という国の未来と今を護り続けてきた最高責任者だからこそ、その背中を見続けた ■大佐にとって説得力のある言葉だった。

「……分かりました、ありがとうございます。次にですが……」
「今度は何かな」

「約三十年前に極秘に実行されていた海上兵器の開発計画に参加していたのは本当でしょうか？」

■■■■大佐の特定の言葉を聞いて元帥は眉を顰めて睨み返す。
目線からくるプレッシャーが針となって部屋の周囲から身体へ突き刺すように襲い掛かった。

まるで地雷源を踏んだかのように聞かれたくなかった事なのだろうか、凄まじい緊張と共に戦慄が走った。

「ああそうだよ。私もそのプロジェクトのメンバーだった」

数秒後にして■■■元帥はにっこりと再度笑顔になり、海上兵器の開発計画に参加していた事を告白する。海上兵器と称されるモノの正体は艦娘、つまり艦娘の開発計画は約三十年前から始まっていた。

「何故あんな事を……！ ああの計画が無ければこの世界は変わらなかった！ 本来なら失う事のなかった命も！ 深海棲艦に怯え続ける日々も！ 私の家族も……！ 全てああの計画で……壊されてしまった……！」

黒■■■から全てを教えられたのだろうか、■■■大佐は計画によって世界が変わってしまった事を嘆いていた。

艦娘の開発計画によって失敗作として生み出された深海棲艦が暴れ回り、人々の命が無造作に奪われ続け、艦娘が出現して以降も今日この日まで人類に牙を向き脅かし続けた。その時までには平和だった日常や培った常識は一新され、いつの間にか艦娘と深海棲艦が当たり前として存在する世界に生まれ変わっていた。

「何故ですか!!? 何故あんな計画を進めたのですか!! 貴方の娘さんを実験台にしてまで成し遂げるべき事だったのですか!!」

「……そうだよ。全ては世界の 〃発展の為に 〃なされた事だからね」
「世界の……発展の……ため……?」

海上兵器仮称 〃艦娘 〃の開発計画は全て世界の発展を進化させるための布石であり、本来は艦娘の構造技術や科学技術を利用して現代の環境問題や国際問題を解決に導くために始まったものだった。

艦娘の身体強化技術は現代において様々な可能性を含む無尽蔵のテクノロジーであり、利用すれば現代の科学や医学は凄まじい進化を促す事を当時の科学者達は考えた。

現に今世代の科学技術や医療技術は年々進んできており、水中呼吸

を可能としたマスクの開発や原因不明とされる難病の原因特定と治療方法の確立など世界中で大いに役立っている。

「そう。科学や文化、経済の発展を目的に異なる世界から取り入れた異次元のテクノロジーを使用して、現代を塗り替えた新たな時代を創造する。極めて単純な理由さ」

「その世界の発展の為に貴方の娘さんや人々が犠牲になっているのは目を瞑るのですか……?」

「目を瞑るのではないよ。犠牲という言い方は少し語弊があるけど、その身を捧げてくれた人達のことには感謝している。世界の為に、国の為に、大切な人を守る為に、戦う事を選んだ人達を私は忘れないよ」

■元帥は ■大佐の恨むかの如く鋭い目に対して決して目を逸らさず、話を伝え終わるまで穏やかな表情を崩さなかった。

世界の発展の為に身を捧げた人々の名前や顔を ■元帥は誰一人として忘れた事は無い。その尊い犠牲が圧倒的な戦力となって深海棲艦から国を護り続け、また技術となって現代の科学技術や医療技術を発展させてきた。

「強制的に個人の意見を尊重せずやらせた訳ではなく、自ら艦娘になる事を選んだ人がいると仰りたいのですか」

「うん。計画に参加する事に関しては理由は人それぞれだけど本人の意思で決意してくれてる。あまり勘違いしないでほしいな」

「それは貴方の娘さんも同じだと言うのですか?」

■元帥は ■大佐の問いを聞いて顔を少し俯かせ、認める事も拒否する事もなく沈黙を貫いて口を開かなかつた。両者共に睨み続けて視線を衝突させる。部屋の窓から徐々に自動車の走行音や鳥のさえずりが明白に聞こえてきた。

「……黒 ■ から色々聞いたようだけど、少し間違った伝え方で勘違いしているようだから、私からも教えてあげるよ。大本営内で潮岬町鎮守府の瑞鶴に会ったり、白くんに話し掛けて動向を探って色々してたけど、それについても話そうか……これから話す事が本当かどうか、信じる信じないかは君の自由だ……だけど一つ約束してほしい」

■大佐に銃口を突きつけられて数十分が経過し、 ■元帥はよ

うやくため息を吐きながら重い腰を上げて立ち上がった。

椅子と机から少し離れてゆつくり歩き、光が指す手前の窓の前で立ち止まる。

元帥は窓から見える青空へ仰いで眩しそうに話しかけてきた。

「この物語は君だけが知る物語として、誰にも語り継ぐことなく天国へ持ち帰ってほしい……真面目で正義感のある君なら守ってくれる
と思つての約束だ」

「……分かりました」

190. 揺らぐ戦場に邂逅を果たすのは

——小笠原諸島、地下軍事施設地下十五階

駆けつけてくれた『?』オウゲン 叢雲の救援により、『巨門』テラスティア 戦艦棲姫の戦場から脱出できた天龍と金剛は提督の捜索を続けていた。戦艦棲姫が現れ叢雲と戦闘中になった影響もあり、天龍と金剛は焦りを隠せず手当り次第に見つけた部屋の中を探していた。

依然として手掛かりになるような物は掴めず提督の居場所は分からない。

通信妨害を受けている状況では連絡も取れない最中、時々戦闘による衝撃や爆発音が身体を揺さぶらせる。

『?』オウゲン 叢雲が時間稼ぎをしてくれたとはいえ未だに提督に関する手掛かりは全く無い。当てずっぽうで視界に入った部屋のドアを見ては部屋の中を見て確認するしか方法はなかった。

「くそっ……！　いくら探しても手掛かりが全く無エ!!」

「時間稼ぎにも限りがあるし、早く急がないと!」

「んな事分かってる!!!　ん……?　金剛!!」

そんな中、天龍は偶然目に入った何かと嚴重で目立っている二枚扉を見て金剛に声を掛けた。

天龍は助走をつけて廊下を疾走し、大太刀を両手に身体を駒のように回転させる。

身についた遠心力と自身の腕力を大太刀に集中させ、嚴重そうな二枚扉を一刀両断。

真つ二つに切断された二枚扉を蹴飛ばして奥へ続く廊下を辿るとそこには更に左右に別れた廊下に均等に配置された幾つもの部屋のドアが見えた。

「収容施設?!!」

「っぼいな……図を見れば扇状で作られてる……金剛!　俺は部屋の錠を開けてから左から探す、右を頼めるか!」

「分かった!」

壁に貼られた案内図を見ると収容施設は輪環状の地下軍事施設を

囲うように扇状にして作られていた。収容部屋は全部で三十六部屋もあり、嚴重な二枚扉の手前に監視用のマスタールームが設置されている。部屋のドアにはマスタールームでしか開けられないセキュリティロックが施されており、ドアの小さく細い窓から部屋の内部が少しだけ見える設計だった。

天龍はマスタールームへ入って全ての収容部屋のドアのロックを解除し、金剛とは真逆の左の方向へ次々に収容部屋のドアを斬り倒しては中を様子を見る。

「見たところ、誰も収容されちゃいないようだが……所々水が散らばってたり、酷い血の跡がある……ここで俺たちを収容して尋問してたのか……!」

収容部屋の中は広々としていて成人五人が床で背伸びをして寝れるほど広く、大きなベッドと机と椅子がついているなど設備は充実していた。

しかし収容部屋の幾つかは過去に収容されていた艦娘の痕跡が残されており、壁や床にこべりついた血痕や散らばった髪の毛に剥がされた爪など見るに堪えないモノだった。ここで鹵獲した艦娘を収容して情報を聞き出す為に尋問や拷問などを行っていたのだろうか、もしかしたら捕まった提督もこの身に遭っている可能性がある。

静かに募っていた焦燥感が徐々に溢れ出して行く感覚を覚えながら天龍は収容部屋を次々に覗いていく。

「ここだけ明かりが……! ツツ!!」

収容施設にある一番奥の行き止まりの収容部屋で小さく細い窓から光が漏れているのが見えた。誰かいるかもしれないと天龍はすぐさま大太刀を構えて部屋のドアを叩き斬る。

部屋のドアを斬り伏せて入った瞬間、身に覚えのない驚いた声が二つ聞こえた。

「艦……娘……?」

「ん……!?! 人……!!? 何でこんな所に……!!」

収容部屋の中にいたのは三十代前半の女性とその親の子供と思える十代にも満たない小さな女の子がいた。収容部屋のベッドに座り

ながら母親は女の子を守るように抱え、ドアを斬り破ってきた天龍を怯えるように見ている。

「もしかして……私達の救助に、来てくれた艦娘さん……ですか？」

「いやそのっ、じゃなくて……！　おう！　そうだ！　助けに来てやったぜ！　もう安心しな!!」

母親は天龍の姿を見て自分達を救助しにきてくれた艦隊のメンバーだと嬉しそうに涙を浮かべていた。天龍は本来の目的とは少し違うものの昔に蒼色から人命救助は最優先と教えられており、咄嗟に状況を見極めて母親と小さな女の子の保護に回った。

二人の居た収容部屋は駆け回って見たどの収容部屋よりも清潔で物騒な雰囲気は全く無く、二人の健康的な姿から食事も規則正しく摂れているのが見て分かった。

「とにかく話は後だ、脱出ルートまで俺たちが援護する。ちよいと走る事になるが、大丈夫か？」

「大丈夫です。助けに来てくれてありがとうございます……！　これでやっと……夫も解放されたのですね……！」

「あ、ああ……そうだな……」

天龍はとりあえず母親と女の子の体調と状態を軽く確認する為に近付いて身体をペタペタと触る。調べた様子では身体的な異常や怪我などは全く無い事から恐らく何かしらの意味があつて収容されていたのだろう。

少し気に掛ける言葉に反応しつつ天龍は一時的に二人を安全な場所まで避難する事を優先事項として選んだ。この作戦の真つ只中で関係の無い一般人が巻き込まれては大変な事態になると予想して、提督と脱出する際に決めていた脱出ルートを利用して二人の避難を行う予定だ。

「あと……までしてくれた【不?】^{エオニオス}さんにも感謝しないと……！」

「【不?】……?　誰だそいつは」^{エオニオス}

収容部屋にいた親子は【不?】^{エオニオス}と聞いた事のない人物らしき名前を呟いて、思わず天龍は誰なのか興味本位で聞いた。

「深海棲艦でありながら私達を守ってくれた人です。白いワンピース

に口を黒いモノで隠し——」「天龍!!」

母親が「不?^{エオニオス}」について説明している途中、収容施設の右側を担当していた金剛が天龍たちの方へ戻ってきた。

金剛も収容部屋の中を捜したが提督の存在は掴めず、全て空き部屋だったようだ。

金剛は天龍の背後にいる母親と女の子の姿を見て、不思議そうに天龍に訊を尋ねた。

「その人達は？」

「一番奥の収容部屋にいた捕まってた人達だ。俺はこの人達を脱出ルートまで案内する、金剛も脱出ルートまで援護してくれ」

「分かったネー！ 早速行こう！」

天龍から理由を聞いて金剛も人命救助を優先し、張り切って堂々とした表情を親子に見せた。親子を守るように片腕を広げて収容施設を出ていき、廊下に誰かいるかどうか覗いて確認する。

天龍は母親を背中に乗せ、金剛は女の子を抱えながら敵と接敵しないように慎重に階段まで駆け走る。二人の状態を会った時から言えなかった母親は申し訳ない表情で二人に尋ねた。

「あの……すいません……自分勝手になってしまっただけ……？」
「あ……お怪我は大丈夫、なのでしようか……？」

天龍と金剛は『巨門』戦艦棲姫の奇襲と戦闘によって常人であれば致命傷になり得る怪我や負傷を負っていた。天龍は砲撃と殴打を数回受けて口から少量の血と右腕の紫がかった打撲痕、金剛は頭から胸まで流れた血で赤く染まり、左腕は戦艦棲姫によって投げられた天龍の大太刀の刺し痕が赤い血液と共に著しく残っていた。

艦娘の『耐久』によって傷はほとんど塞がっており、流血は心配なもの傍から見れば致命傷なみの大怪我だと勘違いされてもおかしくはなかった。

「大丈夫だ！ 艦娘^{おれたち}ならこんな傷なんて大した事じゃないぜ！」

「私達がいる限り心配はいらないヨ！」

天龍と金剛は親子へ不安がらないように穏やかな笑顔を見せて答えた。

一定間隔で蛍光灯に照らされた白く滑らかな漆喰の壁と床の廊下を駆け走っていく。

地下軍事施設の中央では『?』オウゲン 叢雲と『巨門』テラスティア 戦艦棲姫が激しい戦闘を繰り広げ、その衝撃が施設自体を大きく揺らしていた。時々白い蛍光灯が衝撃で点滅し、溝に溜まった埃やひび割れた壁の粒がパラパラと落ちていく。

「あつた！ 階段があるぞ！ そこから一気に八階の輸入港に向かう！」

天龍と金剛の着いた先は地下軍事施設に四つ敷設されている螺旋階段だった。

直径およそ十メートルほどの穴に地下一階まで登れる階段が螺旋状に組み込まれており、階段の段下に白い蛍光灯で周辺を明るく照らしている。

天龍と金剛は親子をそれぞれ抱えながら跳躍で段を飛ばしながら螺旋階段を登っていった。

「輸入港はこの廊下を右にいくとあるはずだ」

「待ってくれ、左から誰か来てる」

地下十五階から地下八階まで駆け走って登り着いた天龍と金剛は深海棲艦ないないか廊下内を覗いてクリアリングする。円状にループする形で繋がっている廊下はある程度の奥まで見えるが更に奥までの道は目視では見れない。

死角から音が遠くから聞こえた金剛は天龍に親子を下ろして一旦螺旋階段に避難させ、徐々に近付いてくる足音二つを迎撃する為に艦装を構えた。

「ツ!!」

「うわッ敵!!!」

足音二つが耳前まで聞こえるようになった瞬間、天龍と金剛は正体不明の足音に奇襲を仕掛ける。

足音の正体は――、

「え……? 古鷹と時雨……?」

「金剛さんと天龍さん……!?!」

八階を搜索していた同じ仲間の古鷹と時雨だった。

二人も天龍と金剛が突然現れた事に驚いて右腕に取り付けられた
艀装の砲口を向けていた。

「びっくりした……突然現れるから敵かと思ったよ……ところで、その怪我は大丈夫なの!？」

「悪いな、こつちも色々と嚴重に警戒しないといけないもんだからよ。それにこんなのは大した事じゃない、すぐに直ったぞ」

「それは良かったです……ん？ その人達はどうされたんですか、つて……ああなるほどそういう事ですか」

仲間である古鷹と時雨から砲口を降ろし、天龍は胸を撫で下ろして安堵の息を吐いた。

螺旋階段に避難していた親子も仲間だったのを覗き見て、女の子を守るようにゆっくりと金剛の背後に寄り歩く。

それに気付いた古鷹が一瞬誰なのか問い掛けるも状況を考えて察した。

「提督の搜索や救助も優先したいがこの人達の救助も必要だ。俺達はこの人達の救助を優先したい、救助が終わり次第に搜索と援護に参加しようと思ってる」

「分かりました。私達も輸入港まで援護します、確かこの先でしたよね?」

天龍の意見を聞いて理解した古鷹と時雨も囚われていた親子の救助に協力する事になった。提督の搜索と救助が最優先される作戦中とはいえ、天龍と同じく脅威に晒されている人達を見過ごす事などできなない。

古鷹は八階の輸入港までのルートを確認して天龍達と話し合った。

「確かそうだね。時雨達が通ってきた道を通るよりもそつちの方が最短で行けるはず。こんな時連絡遅ければいいんだけど、未だに電波妨害? みたいなのが続いているらしいヨ」

「仕方ないと思うよ。とりあえず今はこの人達の救助を優先しよう!」

途中で合流した古鷹と時雨を連れて天龍と金剛は親子をそれぞれ

抱えながら八階の輸入港へ走って向かう。

未だ謎の電波妨害は続いていて、無線機を操作しても他の仲間からの応答は全くなかった。地下軍事施設の最下層中心にある「ヘカントケイルの間」では今もなお『？』オウゲン叢雲と『巨門』テラスティア戦艦棲姫が激闘を繰り広げている。

その衝撃が八階でも軽い地震のように鋭く伝わってきていた。

「確か輸入港の前には塔のコントロールルームがあったはず！そこを抜ければ最短で行けるよ！でも正直そこに深海棲艦がいないとは思えない、一旦私が部屋の中を覗くから待ってて！」

「分かった、深海棲艦がいるならこの人達を一旦避難させる。時雨はこの人達の近くに、俺達は念の為に戦闘態勢に入ろう」

塔のコントロールルームの扉が見えた辺りで古鷹が部屋内に深海棲艦がいる可能性を伝え、部屋内の安全を確保するため一人で偵察を担った。

コントロールルームはとても広い場所になっているようで、最下層から天空へ聳え立つ塔を囲む穴の壁へ一部分が突き出ているほどだった。天龍と金剛は親子の護衛をする為に機装を展開して戦闘態勢に入る。

「いきますよ……」

古鷹の掛け声を聞いて天龍と金剛は口を閉じて首を縦に振る。

それを見て古鷹が扉のドアをゆっくりと開いて、その間にできた細い隙間から覗く。

見る限りでは部屋内に気配は全く存在せず、集中して研ぎ澄ましても人影や物音は無かった。コントロールルーム故に想像以上にとても広い場所なのが確認できた古鷹はゆっくりと足を踏み入れて侵入する。

「……誰も……いないですね」

コントロールルーム内は鎮守府の講堂にあったテレビで見たアニメや映画などでよく見たオペレータールームのようだった。塔を眺められる窓ガラスの壁に塔の操作をする為の操作設備がずらりと並び、壁に取り付けられた大きなモニターが幾つもある。

何か塔に関して実験を行っていたのだろうか、操作設備は訳の分からない言葉や単語がまとめられていた。

「よし、いない……いいよ！ 入ってきて！」

コントロールルーム内を見渡して何一つ気配も感じなかった古鷹は天龍達を呼ぼうと声を掛ける。

その時――、

「っ!!? 誰だ!!」

巨大な窓ガラスの壁から突如現れたシルエットが視界の端で見えた瞬間、古鷹は咄嗟に艤装を構えて吠える。

古鷹の声を聞いて天龍と金剛は扉を蹴破って古鷹の元へ駆け走った。

「これは久しぶりだな、古鷹、天龍、金剛」

「っ!!? お前は……!!」

シルエットの真相を見てその場にいた親子全員の艦娘が驚きの声をあげる。

その憎たらしい顔は誰もが忘れない。

「半年ぐらいか……また会ってしまったな」

「■■……少尉……!!」

潮岬町鎮守府をとてつもない地獄にさせて逃亡し、深海棲艦側に寝返った古鷹達にとって腸が煮えくり返るほどの怒りを湧き出させる憎むべき存在、■■少尉。

かつて古鷹達の提督として艦隊を指揮していたが、ABC計画と自身の野望の為に古鷹達を私利私欲で酷使し、その時まで築き上げてきた関係や仲間などの全てを喪失させた悪魔。

その悪魔が古鷹達の前に堂々とした態度で現れた。

「何故てめえがここに……!!」

「何故俺がここにいるんだって？ 答えてやろう、俺は今日というこの素晴らしき日の為にこの場所に居なければならぬんだ。実際お前たちでも内心では分かっていたはずだろう、俺が地下軍事施設内にいるかもしれない、と」

天龍は大太刀の柄を強く握りしめて勢いよく前に突き出し、怒りの

こもった怒号を■少尉に浴びせる。

■少尉は天龍達の方へ振り向く事はなく、最下層で戦っている
オウケン『?』テラスステイア「巨門」戦艦棲姫の戦闘を観戦しながら答えていた。

「っ……っ……っ……！ 天龍！ 金剛！ 今は救助を最優先にしよう!!
早く輸入港へ!!」

「っ……!! 早くこっちへ来てくれ!!」

驚愕と憤慨の渦に巻き込まれながらも時雨は感情を割り切つて天龍達に親子の保護を最優先するように叫ぶ。天龍や金剛も顔を横に何度も振つて自我を取り戻し、輸入港へ続く廊下の扉へ急いで向かった。

「おっと、逃がしていたのか」

自身を見て振り切ろうとする天龍達を横目に■少尉は右腕を動かしてある方向へ掌を広げる。

「ッ——」

「うわっっ!!」

輸入港へ続く廊下が突然爆発する。

襲い掛かる爆風と衝撃から親子を庇うように時雨や古鷹は身体を前に出して守る。

コントロールルーム内が土煙に包まれる中、天龍と金剛は腕を振り払って視界を広げて周りを確認した。

「入り口が……!!」

「まさかこいつ……!!」

輸入港へ続く廊下へ繋がる扉が上の天井の瓦礫ごと押し潰され塞がれていた。

何か嫌な予感がした天龍は■少尉の方へ振り向くと、■少尉の右手甲に艦娘の艦装と酷似した砲塔が備え付けられていた。

コントロールルーム内が中央の聳え立つ塔の紅い光によつて照らされている所為か、顔は見えても■少尉の全体像が薄いシルエットになっていて分からなかった。

「ああその通りだよ」

「こいつ人を捨てて深海棲艦になりやがった……!! クソ野郎が!!」

■少尉の眼が青く光を灯し、驚きの声をあげる天龍達を嘲笑う。
■少尉は感覚を確かめるかのように左手で右腕を掴み、右手を握っては広げて砲撃という感覚を噛み締める。

そしてもう一度確かめようとコンクリートで造られた窓縁を片手で握り壊した。

「初めて使ったが感覚は意外と簡単だな。やはり素晴らしいものだ、深海棲艦と艦娘の力というのは」

「厄介な力を……！」

「何が厄介な力だ、これがお前たちの力そのものだぞ。超人的な身体能力と海上を航行できる艦装を肩や手に持つ対海上特化型の陸上歩行可能な戦闘兵器。もつと利用すれば何でも捻じ伏せられる夢のようなモノじゃないか」

■少尉は天龍達の方へ臍を向かせて視界に写すも興味が無いのかすぐに右手の平を見て喋り出した。

よく凝らして見てみると黒い短髪が若干白く伸びており、肌も深海棲艦のように肌白くなっている。誰かの姿に少し似ていた■少尉を見て天龍達は■少尉の性格を考えて焦燥感を隠せずにはいられなかった。

「その力で……何を仕掛けるつもりですか」

「支配だよ。まだ不十分ではあるがこの力だけでも圧倒的な力で一方的に舐め腐った奴らを蹴って操れるこの優越感……最高に楽しくなると思わないか？」

■少尉は深海棲艦と艦娘の力を利用して誰かを一方的に操りたという単純な理由で世界の支配を目論んでいた。

自分の思い通りに事が進むように徹底的に支配して操り、操られた者達を見て優越感を得る。

たったそれだけの事のために今日この日まで計画を進めていた。

天龍達は心の底から呆れ果て蔑如した。

優越感を得たいがために平気な顔をして周りの人達や艦娘を破滅に追い込むまで利用し続け、ひたすら自分の事しか考えないその性格が気に障るほど不快だった。

今すぐそのふざけた顔を思い切り殴つてやりたい、今すぐ痛い目に合わせなければ気が済まない。感情に左右されて理性を失つてはいけないと身体の奥底から湧き出る憎悪と憤怒を抑えるが如く手を強く握り締めた。

「愚問ですね……そんなくだらない目的で人類や私達を裏切つたのですか」

「それこそ愚問だな。面白いからに決まつてるだろ、それ以上の理由なんてあるものか。なあそうだろ……？ 元優遇者」

様々な感情に揺らされ声を震わせながらも続けて問う古鷹に対し、

■少尉はくだらないと一蹴して単純な理由を言い返す。明らかに天龍達を見下しているその目は潮岬町鎮守府を地獄へと変貌させた時代の頃と全く変わっていないかった。

決して離れられない忌まわしき残酷で救いのない過去。

その過去を忘れさせやしないと心の底に眠っていた恐怖と怯えが無意識に身体全体へ伝わっていった。

「……天龍、金剛」

「何だ……？」

「さつき通つた道を戻れば遠回りにはなるけど輸入港に辿り着く。予定通りなら不知火と瑞鶴が既に確保してるところから……先に行つてて、私達がコイツを抑える」

傍にいた時雨が親子を守りながら天龍の肩に手を乗せて ■少尉に聞こえないような音を殺して静かに伝える。これ以上唾み合つても時間の無駄だと考えた時雨は親子を天龍と金剛に任せ、自分達が ■少尉の時間を稼ぐ作戦を思いついた。

「つ……分かった、後で俺達も行く……死ぬなよ」

「うん、ありがとう……」

落ち着きを若干取り戻した天龍は軽く深呼吸をして時雨の作戦を許諾した。近くで聞いていた金剛や古鷹も天龍と同じく作戦に乗る意志を固め、 ■少尉をもう一度見改める。

時雨は天龍の手を叩く合図で ■少尉へ見ええないように手の甲を強く叩き、それを察知した金剛と天龍は親子二人を抱えてコントロ―

ルルームから脱走を試みる。

しかし――、

「なに人の許可無く連れて行ってるんだ、行かせる訳ない――ツ？」

「早く行つてツツ!!!」

「後は任せましたよ!!!」

■少尉がもう一度右手の平を天龍と金剛に向け、砲撃を仕掛けたその瞬間。

時雨と古鷹が防御体勢のまま前に出て親子を抱えた二人を庇う。

■少尉の砲撃が時雨と古鷹に直撃し、爆炎と爆風がコントロールルーム内を包み込む。

視界を防いだ爆煙を利用して天龍と金剛は元来た廊下へ疾走し、急いで輸入港へ向かった。

「痛つった……!」

「威力は深海棲艦そのものだね……!」

時雨と古鷹は積もった瓦礫を押し退けて制服についた石埃を払いながら立ち上がる。

先程の砲撃の影響で天井のパネルや床のタイル等が剥がれ落ち、精密機器やモニターがひび割れて破壊されていた。この地下軍事施設の倒壊のリスクを考え無しに砲撃する無鉄砲さは面倒な部分だ。

「逃がしたか……まあ、そろそろ終わってるだろうし、問題ないだろう……それで、お前らはここに残ってどうする」

■少尉に話し掛けられるも答えない時雨と古鷹は瞳孔を開かせ、敵視するかの如く鋭い目つきで睨みつける。■少尉の砲撃を庇って受けた事により、時雨の額から血が汗と共に重力に従って頬を伝いながら落ちていくのが見えた。

■少尉の砲撃は重巡クラスの砲撃と似ていて、散々砲撃を受けてきた二人にとってこのダメージは慣れたようなもの。どれだけ砲撃を受けて怪我して血が流れようがいずれは「耐久」で治癒される。■

■少尉の問い掛けに土埃に塗れた二人は口角を上げて答えた。

「勿論……!」

「お前をぶっ飛ばしてやるのさ!!」

191. 勝つ為ならば手段は厭わない

地下軍事施設の地下三階から潜入して提督を捜索していた長門と木曾は焦燥に駆られながら廊下をひたすら走っていた。ドアを見つけては部屋の中を隅から隅まで探しては廊下へ出て次の部屋へ向かう。

天龍と金剛が『巨門』テラスティア戦艦棲姫との接敵と戦闘から約三十分が経過し、現在も代わりに時間稼ぎに対応してくれた『?』オウゲン叢雲が戦闘を続けていた。

この状況になるのは予想されていたものの想定していた時間よりも早く起きており、叢雲が七壊星との戦闘の際は半日ほどの長期戦になる事を避けたいと言っていた為に長門と木曾は急いで捜索を進めていた。

「早く探さなければ……! 長期戦になれば叢雲の損害は勿論、奴らの援軍が来る事は間違いない……!」

「ああそうだな……!! この階は粗方調べ尽くした、次の階へ行くぞ!」

長門と木曾は下の階へ続く螺旋階段まで曲線上の廊下を駆け走る。最下層から広がる凄まじい衝撃で転倒しそうになるも何とか持ち返しながらか走り続けた。

「つ……? 誰だ!」

螺旋階段の標識が見えた途端、とある影が見えた長門は滑走しながら艤装を展開する。

木曾も左腰の鞘からサーベルを取り出して戦闘態勢に入った。

「深海棲艦!? 木曾!!」

「ああ!! 行くぞ!!」

深海棲艦特有の白く透き通った肌や長髪に焰のように燃え滾る紅い眼を持つその姿は姫クラスの深海棲艦。最下層で戦闘中の『?』オウゲン叢雲と『巨門』テラスティア戦艦棲姫を眺めるように観戦していた。

駆け走る長門と木曾に気付いていない様子で二人は奇襲を仕掛けようと深海棲艦に襲い掛かった。

「待ちなさい」

「っ!？」

襲い掛かる長門と木曾に対して深海棲艦は二人の方を振り向かないまま奇襲を止めると静かな声を上げる。一瞬凄まじいプレッシャーが身体全体に痺れ渡った長門と木曾は身体を硬直させて呼び声通りに奇襲を止めた。

「何か急いでいる様子だけど、とりあえず艦装をこちらに向けるのはやめてくれないかしら」

「っ……お前は……誰だ……?!」

「私? この特徴的な姿見て分からない?」

名前を聞かれた深海棲艦は不思議そうに長門と木曾の方へようやく振り向き、他の深海棲艦には見られないある艦娘の姿に似た姿を披露した。

そして突然現れた紅黒い稲光と共に紅黒い光を身に纏わせ、長門と木曾を睨むが如く鋭い目を光らせる。

「私は深海棲艦、特殊最上位危険個体および特殊危険個体集団、通称七壊星が一人……」

「まさか……!!」

「【天権】^{メグレス}深海鶴棲姫、よ」

長門と木曾が接敵したのは計画中で一番接敵してはいけない存在、深海棲艦の中でもトップクラスの戦闘能力を有する七壊星だった。

かつては“憎悪の権化”と呼ばれ凄まじい力と共に名を馳せた深海棲艦、【天権】^{メグレス}深海鶴棲姫。

七壊星の一角として恐れられた深海鶴棲姫に放たれるプレッシャーは脳から発せられる危険信号を身体の奥底まで響き渡らせるほどだった。

「何故お前が……ここに……」

木曾が焦りを抑えきれない表情をしながら深海鶴棲姫に問い掛ける。

何故地下軍事施設の地下三階という中途半端な階層で行き通りが激しい螺旋階段の目の前にいるのか理解できなかった。

見れば分かる深海鶴棲姫の圧倒的な実力と自身達の力の天と地の差。

戦闘に巻き込もうとすれば数秒持たずに倒されるのは目に見えていた。勝てる未来など有り得はしない、砲撃の傷跡や剣先の攻撃など届きやしない。

深海棲艦の中でも格上という存在を長門と木曾は相見えた。

「……言っておくけど戦わないわよ、アンタ達とは。艦装展開できないし、なるべくならアンタ達も艦装を仕舞って欲しいんだけど」

「それは無理な相談だな。貴様を前に武装を解除するのがおかしな話だ」

艦装を展開しない深海鶴棲姫は長門と木曾を横目に見ながら面倒そうに自身に戦闘意思は無いと簡潔に伝える。出来れば戦闘はしたくないと武装解除を長門と木曾に求めるが、七壊星を前にそんな自殺行為などできないと拒否した。

「まあ確かに、それもそうね。ならそのままでもいいわ。どうせアンタ達とは会わなければならぬ訳だし、戦いたいなら私が話した後にして頂戴」

深海鶴棲姫は生氣のない表情を一切崩さず、一度ため息を吐いて身体に纏っていた紅黒い光を消滅させる。深海鶴棲姫の周辺に艦装らしきモノが確認できないのを見ると話をする為だけに自ら武装解除をしているようだった。

何故自分たちに会う事が必要になってくるのか、長門は拭えない不安を抱えながらも疑心暗鬼になって答える。

「どういう事だ……!」

「……いま私達を指揮してるアレ……元はアンタ達の提督だったんでしょ?」

「っ!?!」

深海鶴棲姫の言うアレとはつまり、人類や艦娘を裏切って深海棲艦側に寝返った■少尉の事だろう。言動を考えると現在も深海棲艦の提督として艦隊の指揮を執っているようだ。

七壊星からその男の名前が耳に入ると思わなかった木曾は戸惑い

を隠せず驚きの声を上げる。

「何故……それを知っているんだ？」

「アレが自ら話していたから確かめたかっただけ。話を戻すけど本題はそこじゃない」

■少尉について事前確認を取りたかった深海鶴棲姫は長門の問いに対して二人の方へ振り向いて簡潔に答える。

確認が取れた所で深海鶴棲姫は■少尉についての本題を長門と木曾に話した。

「そのアレは今、この階の下にある八階のコントロールルームにいる。何をされたか粗方知ってるから言うけど憎いんでしょ？ そこにいるからさっさと向かって捕まえちやいなよ」

深海鶴棲姫は地下八階のコントロールルームにいる■少尉を確保してほしいと長門と木曾へ提案した。二人と深海鶴棲姫のいる地下三階の場所から真下を見ると壁から突き出ているコントロールルームの一部が確認できた。仮にも味方の総指揮官である■少尉を快く差し出す意図が理解^{わか}らない長門は更に深海鶴棲姫へ問い掛ける。

「何故貴様がそんな事をするんだ……？ 味方じゃないのか？」

「味方じゃない、一時的な利用価値のあったゴミよ。価値が無いからアンタ達に捨て返すって言ってるの」

大きいため息を吐きながら深海鶴棲姫は■少尉が深海棲艦の提督である事を強く否定する。

ほとんどの深海棲艦は■少尉の存在を端から提督として認めず、人間以下のゴミとして見下していた深海鶴棲姫は利用価値が無くなったからと人類側へ返そうと考えていた。

まるで物のような扱いを聞く限りだと深海棲艦側でも派手に暴れていたのだろうか、長門と木曾は反応に困る表情を隠せずにいた。

「アレに酷い事されて憎んでるアンタ達なら快く受け入れてくれると思っただけど、どうなの？」

「……分かった、その事については私達が引き受ける」

深海鶴棲姫の気を引かないように警戒しながら長門が緊張した表

情で■少尉についての依頼を引き受ける。色々理由が聞けたとは言え、深海鶴棲姫の思惑が分からない以上は下手に喋り出せば何が起るか予測できない。自分たちが地下軍事施設に潜入した目的が提督の救出である故に【天権】^{メッレズ}深海鶴棲姫には悟られるわけにはいかなかった。

もし深海鶴棲姫が提督に対して何か目的があるとするならば、提督の救出を目的とする自分たちの事を知れば容赦はしないだろう。

なるべく気を引かせず悟られないまま去ってもらおうように長門は慎重に警戒する。

「そ。じゃあ後はよろしく」

長門の言葉を聞いた深海鶴棲姫は素っ気ない返事を返して背後の螺旋階段へ身体を向ける。

長門と木曾は何も起こらないようにと緊迫した表情で息さえ止めて深海鶴棲姫の姿を見逃さない。とめない緊迫した状況に深海鶴棲姫の艤装の足音が周りの騒音を掻き消すほど感強く聞こえた。

額から頬へ伝って床へ落ちていく汗の音でさえも注意し、身体を石のように固まらせて身動きを取らないように細心の注意を払う。

「あ、そうだ。もう一つあった」

「……何だ」

何か思い出したかのように深海鶴棲姫は歩みを止めて前方の螺旋階段を見ながら長門と木曾へ声を掛ける。

天井に吊るされた緑色に光る非常階段のマークに視線を移して問い掛けた。

「アンタ達は何でここに潜入してきたの？」

その一瞬、二人と深海鶴棲姫がいる空間で出来るはずのない静寂が訪れた。

まるで時が止まったかのように身体や思考が凍りついて全く動かなかった。

二人にとって言われたくなかった言葉を最後に聞き出されて動揺する暇すら無かった。

凄まじいプレッシャーに全身の穴という穴から物凄い量の汗が下

へ下へと滴っていく。

もし深海鶴棲姫が深海棲艦の総指揮官だった提督に対して何を思っているのであれば、提督を奪い返す二人は敵である事に間違いな
い。そうなれば深海鶴棲姫との戦闘は避けられないだろう。

勿論提督を救出する為に潜入したなどと簡単に言えるはずもなく、
二人は深海鶴棲姫の問い掛けに何も答えることが出来なかった。

「……まあいいよ、もう用は済んだし……っ？ ああもう来たのか、な
らそうだな……こうするか」

沈黙を貫く二人を見なくとも何かを察した深海鶴棲姫は面倒そう
に答えなくていいと遠回しに伝える。

しかし直後に何かを感知したのか三本の黒い塔の方へ顔を見上げ
た。

その後顎に手を当てて考え出した深海鶴棲姫はようやく二人と目
を合わせて螺旋階段ではなく長門と木曾の方へ歩き始めた。

「君達に有益な情報を教えてあげようか。最下層では見ての通り『オウゲン？』
叢雲と戦闘バカが戦って、アンタ達の仲間が人質を連れて地下八階
の廊下を走って輸入港へ向かってる。そしてコントロールルームに
はアンタ達の仲間がアレと遭遇中。地上では捨て駒とアンタ達の仲
間が戦闘していて、摩耶と誰かは地下十二階の隠し扉の先にある研究
施設で恐らく見つけてるでしょうね」

依然として生気のない表情を保ち続ける深海鶴棲姫はゆっくりと
長門と木曾の方へ歩み寄っていく。現在の摩耶や古鷹などの仲間の
居場所と状況を明確に且つ簡潔に伝えていた。

今この地下軍事施設には電波妨害が広がっている所為で仲間の居
場所は全く掴めない。

それを深海鶴棲姫は初めから知っていたかのように、そして長門達
は全て深海鶴棲姫の掌の上で踊らされているんだと嘲笑って伝えて
いるように見えた。

突然の行動に長門と木曾は臨戦態勢に入って迫り来る深海鶴棲姫
から有利な距離を取ろうと少しずつ後退していく。

「そしてアンタ達二人はアレの場所へ向かって直接アレと色々話す事

になり、そこで奴の奇襲が来る。その前にはアンタ達の仲間が捨て駒に勝利、最下層では既に戦闘バカは大破状態で『？』オウケン 叢雲が中破状態になっていて、数分後に奴の奇襲を仕掛けられたアンタ達とその仲間が最下層に落下、叢雲が奴と戦闘する事になる……概ねの筋書きはこうでしょう」

深海鶴棲姫は人差し指を自身の頭に向けて長門と木曾を見下しながら、今後この戦況がどうなっていくのかについて予測していく。未来予知の能力でも持っているのだろうか伝えられた詳しい情報に長門と木曾は疑心暗鬼になって苛立ちを覚えた。

接敵した時から目を合わせなかったのにも関わらず、突然何かに勘づいて目を合わせて喋り出してきたとなれば何か仕掛けてくるのは必然。

深海鶴棲姫とまでの距離は凡そ十メートル、艦装が無い状態でどういった手段に出てくるのか分からない以上、先手を打つのは危険だと考えた。

「……」
「何を言ってる——ッ!!」

突如二人の間に現れた深海鶴棲姫は長門の首を殴るように掴んだ。瞬きをした瞬間だった。

瞬きをしたあの刹那的時間で深海鶴棲姫は音すら立てずに走って二人の目の前まで接近していたのだ。

全く分からなかった。

走る予備動作すら見えなかった。

気付けば二人の間にいた。

究極に極めた速さとかいう次元の話ではなかった。

「長門ッッ!! っクソッッ!!」

ハッと我に返った木曾は長門を掴んだ左腕に向けて両手で強く握り締めたサーベルを強く振り下ろす。

しかし——、

「ッ……!?!」

木曾のサーベルは深海鶴棲姫の左腕を斬り落とせず衝突していた。

直後に耳をつんざく高い金属音が廊下内に響き渡る。

深海鶴棲姫の左腕は傷一つ付いておらず周囲に火花が飛び散った。「とてつもなく弱い。その程度の力でここに来たのか、随分と自惚^{うぬぼ}れてるな」

自身の左腕に対して切り傷一つ付けられなかった木曾を見下ろすように見下した。

その瞬間に深海鶴棲姫は木曾の両腕を掴んで持ち上げ、木曾の腹へ左脚の膝蹴りを食らわせる。

凄まじい衝撃で口から大量の血を吐く木曾の顔面を鷲掴みにし、元いた螺旋階段の方へ戻りだした。

「悪いけど私は私の為に成さなければならぬ事がある。計画の為に早速会ってもらおうよ」

両手に長門と木曾を掴んで引き摺らせたまま深海鶴棲姫は心のこもらない声で語っていく。何とか深海鶴棲姫の拘束から逃れようと二人は顔や首を掴む手に対して抵抗するも掴まれた両手の力は凄まじく、いくら殴ろうが引き剥がそうがビクともしなかった。

「やめろ……!! 手をツ……離せツ……!!」

「クソツ!! なんて力だツ……!!」

「この真下に地下八階のコントロールルームがある。このまま飛び降りて屋上を突き破って会ってほしい」

元の場所に戻った深海鶴棲姫は窓から真下に見える巨大な穴の壁に突き出たコントロールルームを確認する。そして二人を投げ飛ばして窓ガラスを砕けさせ、深海鶴棲姫は落ちていく二人を見て呟いた。

「じゃあ……よろしく」

——地下軍事施設最下層『ヘカントケイルの間』

『?』叢雲と『巨門』戦艦棲姫との戦闘は既に十五分が経過していた。

金剛と天龍は提督の搜索へ向かわせ、叢雲は戦艦棲姫と一騎打ちによる時間稼ぎ。

戦闘の影響で最下層の真っ平らな床は凹凸だらけの戦場と化して

いて、鉄骨等が剥き出しになったコンクリートの瓦礫が大小に亘って至る所に散乱していた。

依然として最下層から天空にまで聳え立つ三本の黒い塔は無傷で、制御装置がある塔の土台でさえも傷一つ付いていなかった。三本の黒い塔の中心にある紅い光線はより一層と輝き始め、戦場と化した最下層を紅く照らしていく。

「フウンンンツツツ!!」

「ツツ!!」

テラスティア『巨門』戦艦棲姫は巨大な黒い右拳で勢いよく殴り掛かる。

オウケン『?』叢雲は右手を強く握った金色の鎗で右の横薙ぎを食らわせる。

互いの攻撃が衝突し、鏝迫り合いとなって擦れる度に火花が散った。

支えていた足に力が急激に入り、削れた床がひび割れて抉れていく。

互いに負けてたまるかと更に力を解放して睨み合った。

戦艦棲姫は砲身の一部損壊と右頭部の流血、叢雲は左頬のかすり傷による流血。

それぞれ「耐久」で既に修復済みではあるものの流れた血が凝固しかけていた。

爆煙の煤で肌は荒れ、身体中から汗が流れ出る。瞬きする暇すらないと瞳孔は開き、全身に力を入れて歯を食いしばった。

「時間稼ギシヨウガ無駄ダゾ……! 計画阻止モ、才前ラノ目的モダ!!」

「ならアンタを倒せば少しは目的に近付けるって訳ね……!! 簡単な作業よ!! ツツ!!」

余裕の笑みを浮かべた叢雲は胸から右腕、右腕から右拳へと身体の奥底に眠る莫大なエネルギーを流し込む。

その瞬間に身体に纏っていた黄金の光が背後でジェット噴射のように放出され、右拳に溜まった莫大なエネルギーを金色の鎗へ集中させた。

叢雲は咆哮を上げて両腕に強く力を入れて金色の鎗を振るう。

戦艦棲姫は巨大な黒い拳で反発するも、金色の鎗に押し返されて殴り飛ばされた。

「ナニッ……!?」

巨大な黒い右拳が大きく殴り飛ばされ、身体の右半身がガラ空きになる。

透かさず叢雲は両手で鎗を振り回し、次の攻撃に転じて跳躍した。

戦艦棲姫は残った左拳で跳躍した叢雲へ殴打。

叢雲は鎗で防御するも簡単に殴り飛ばされた。

叢雲は瓦礫に塗れた戦場で受け身を取って体勢を整える。

一度後方へ跳躍して身体を回転させ、素早く動けるように着地。

そこから横へ走り出して展開し、戦艦棲姫の周囲を走り駆けた。

途中に見えた大きな瓦礫の塊を複数回、戦艦棲姫に目掛けて蹴飛ばす。

戦艦棲姫は巨大な黒い拳の甲で撃ち放たれた瓦礫の塊を受け流して弾く。

最後の放たれた瓦礫の塊から突進した叢雲が現れた。

瓦礫の塊の死角を利用して一気に戦艦棲姫の目の前まで急接近。

「ッ!!? 小癩ナツ——」

戦艦棲姫は驚きの声を上げながらも自身の左拳で叢雲に殴り掛かる。

が、それよりも先に叢雲は金色の鎗で戦艦棲姫の顎を殴り飛ばす。

凄まじい衝撃で怯む戦艦棲姫。

その一瞬の隙を叢雲は見逃さない。

戦艦棲姫の顔に目掛けて金色の鎗で左右に二回叩き殴る。

叢雲は跳躍して更に頭頂部を強く殴り、もう一度顎へ金色の鎗で殴打。

激しい猛攻の最後に戦艦棲姫の身体が浮く。

叢雲はガラ空きになった戦艦棲姫の腹へ金色の鎗で突き飛ばした。

突き飛ばされた戦艦棲姫は素早く空中で体制を整え両足で着地。

少々苛立った表情しながらも視界へ叢雲の姿を写す。

しかし叢雲の姿が見えない。

戦艦棲姫は左右を見渡して探す。

「空カツツ!!」

『?』^{オウケン} 叢雲は大跳躍で『巨門』^{テラスティア} 戦艦棲姫の頭上を取っていた。

金色の鎗へエネルギーを集中させ、背後に輝かしい黄金の十字光を放つ。

叢雲は我慢するかのように歯を食いしばる。

流星の如く戦艦棲姫へ落下し、金色の鎗を振り下ろした。

戦艦棲姫は艤装の巨大な黒い拳で咄嗟に防御するも金色の鎗の一閃が炸裂。

鋼鉄よりも硬い巨大な黒い右腕が斬り落とされた。

一閃の余波で戦艦棲姫の身体にも右肩から脇腹が斬り裂かれる。

周囲の床が瓦礫と共に衝撃で捲れて宙を舞う。

戦艦棲姫の艤装が喚く轟音を放つ。

斬り落とされた巨大な黒い右腕から紅い液体が噴射され滴り落ちる。

怯み声を上げるも戦艦棲姫は残った左拳で叢雲に殴り掛かる。

叢雲は後方へ跳躍して回避し、戦艦棲姫と距離を取った。

「貴様ツ……!! ヨクモ……!!」

「あら……! 痛そうね……! もしかして痛覚も繋がってるのかしら……?」

不意にも無事である母体の右腕を左手で掴んで片膝を着き、息を荒くさせ焦りの表情を隠せない戦艦棲姫。

対して叢雲も一連の戦闘で息遣いが少し荒くなっていたが、戦艦棲姫の状況を見て落ち着いている様子だ。叢雲は腰を低くしながら鎗を地面に突き刺し杖代わりにして、先程の戦闘と過去の戦闘を比べて思い出した。

「前とは別物とも思える程の結構なエネルギー効率ね、他の娘達でも苦労しそうなくらい強くなってる……!」

「戦闘ヲ始メタ際ニ測ツテイタカ……! ダガ貴様モ相当エネルギーヲ消費シテイルハズダ……!!」

今ここにいる『巨門』^{テラスティア} 戦艦棲姫は過去に接敵した『巨門』^{テラスティア} 戦艦棲

鬼よりも遙かに戦闘能力が成長しており、『?』^{オウゲン}叢雲でさえも苦勞してしまふほどに強くなつていた。

今までの戦闘で両者共に体力を消耗しているのはお互い分かり切っている。

他の仲間が提督を見つけるまでの時間を稼ぐとは言え、何時間も戦闘を続けていればいずれボロが出るだろう。

いつ相手が襲ってくるか分からない束の間の休憩時間を利用して互いに考えて呟いた。

「そろそろ摩耶が見つけてるところでしょ……！　いま奴の片腕を落とせたのはチャンス、討伐するなら今しかない!!」

「余裕ノ表情ヲシテハイルガ、艤装ノソレヲ見レバ奴ハ確實ニ一定以上ノダメージハ受ケテイル……!!　最モ警戒スベキ奴ヲ倒スナラ今ダ……!!」

叢雲は地面に突き刺した鎗を抜き、巧みに掌を使って回転させる。地面に勢いよく石突を衝突させ、仁王立ちで荒れた息を少しずつ整えた。

戦艦棲姫も深く息を吸つては吐いて呼吸を整えさせ、地面に着いた片膝を動かして立ち上がる。不意に右腕を掴んでいた左手を離して胸を張るように両足を両肩ほどに幅を広げて立った。

叢雲と戦艦棲姫は絶対に倒すという意味の鋭い視線を衝突させて火花を散らす。

「……ハッ……！　どうやら考えてる事はどちらも同じようね……!!」

その鋭い視線を感じ取った叢雲はつくづく気が合うと笑みを浮かべ、左掌を前に突き出し金色の鎗を右手に持つて背後に構える。

戦艦棲姫も笑みを浮かべて右手と左足を前に出し、右足と艤装の巨大な黒い左腕を後方へ殴り構える姿勢を取った。

「どちらが先に倒れるか……！　勝負よツツ!!」

叢雲と戦艦棲姫は声の合図で砲撃しながら急発進急加速。

凄まじい走行速度で放たれた砲弾と共に走り駆ける。

金色の鎗と巨大な黒い左拳を衝突させて衝撃波が周囲に広がった。

192. 片翼の鐵鶴 前編

『瑞鶴、瑞鶴?』

深い眠りの中から微かに声が聞こえた。

心地良い温もりを感じて瑞鶴は重い瞼をゆっくりと上げる。

思わず瞼を閉じてしまうほどの眠気が残っているお陰か、まだ夢と現実の区別が付かず彷徨っている感覚だった。未だ眠っていたいと心の中で思いながらも朦朧とした視界から徐々に世界が見えてくる。

そこは潮岬町鎮守府空母寮の翔鶴と自分の部屋だった。

いつも見た事のある自分達の部屋だったが、窓はカーテンに覆われて外の景色は全く見えない状態で昼か夜かも分からず、ただ雨風の吹雪く音が微かに聞こえた。

部屋の畳は何かに取り裂かれたかのように五本の引っ掻き傷が夥しく残っており、壁や机にはその引っ掻き傷と共に鉛筆や本などが無造作に散らかつて荒れている。

何かと暗いなと思った矢先には奥に置かれた机のデスクライトが部屋全体を淡く照らしていた。

『ごめんなさい……こんな事をしてしまって……本当に……ごめんなさい……』

目の前には翔鶴が半ば泣きながら必死に何度も頭を下げて私に謝っていた。

私はどうやら身動きの取れない状態のようで重い頭を動かして見上げると両手首には手錠がされており、私は今拘束されているんだという状況を掴んだ。

私は考えた。

この状況から察するにこれは私の過去が夢として反映されているのだと。

両手首が拘束されているとしたら、それは恐らく提督さんが翔鶴姉たちによつて追い詰められている時の過去だ。

翔鶴姉と龍驤さん一行は提督さんを追い詰めて消し去ろうと提督

さんを罫に嵌めて仲間を巻き込み、総力戦で挑み全力を尽くしていた。その主犯格の妹である私は提督さんが艦娘全員に嫌われた初日から、決して見た事の無かった戦慄を覚えるほどの殺気を纏う翔鶴姉によって拘束され、提督さんが艦娘たちの目を覚ますその時まで私たちの部屋に監禁されて何も出来なかった。

私はその地獄の数日間を決して忘れてはいない。

いや、忘れられない、忘れてはいけない過去なのだ。自分の頭に深く刻み込んだ。

提督さんを虐め尽くしたその毎晩に翔鶴姉は私の目の前で声を荒らげて発狂し、悶え苦しむように自身の首を絞め付けては自傷行為を続けていた。

暈は別の痛みを求めるかのように引つ掻いた爪痕が著しく残り、涙や涎で濡れて染み込んでいく。

頭を掻き毟れば長い白髪 of 髪の毛がバラバラに落ちていき、何度も身体を掻く所為で肌は荒れて血が滲んでいた。

時々落ち着いて眠りについてしまう事もあったが数十分過ぎればまた発狂して身体を壊していく。自身の姉が脆く崩れていくその見るに堪えない光景を私はただ、いつもの翔鶴姉が戻ってくる事を信じて声を掛ける事しか出来なかった。

『ごめんなさい……本当に……ごめん……なさい……』

私はひたすら謝り続ける姉に対して、何か言葉を掛けようと口を開いた。

私は大丈夫だよ、目を覚ましたなら謝ろうよ、私も一緒に謝るから言葉を出そうとした。

だけど何故か声が出ない。

口は動かせていても声だけが全く出なかった。

それはまるで寝る時に見る夢のような感覚で、不思議と身体も浮いているような感じがした。

喉の奥にある声帯が丸ごとくり抜かれている気分だ。私は声の出せない違和感に苛立ちを覚えた。

翔鶴姉は私に会わせる顔がないと俯いたまま頭を両手で抱えて眩

く。

『本当は皆さんを守りたい……守りたいのに……皆さんを守ろうと思ったその瞬間から、何もかも消す事以外考えられなくなってしまつて……その後はもう……止められなくなつちやう……』

翔鶴姉は今まで自分が引き起こした理解に苦しむ行動の数々を重々と自覚していた。

仲間を守るといふ蒼色との約束を守る為にどんな手でも使つて仲間を守り切る。その思いが強くなると目の前が見えなくなり暴走してしまう。

その暴走を自身で止める事は出来なかった。

私は知っている。その暴走の正体は翔鶴姉の身体の中に紛れ込んだ空母水鬼悪魔の所業だと。

声を大にして誰もが聞こえるように叫びたい。

何をしようと無駄な過去の追想を見せられているのだとしても、何も出来なかった過去の自分に伝えたい。

必死だった。

決して届かない無音の声で。

夢中だった。

表情筋などの使えるモノ全てに力を入れて。

舌を何度も動かし、喉の奥から絞り出すかのように声を出そうと試みた。

だかそれは全て無意味だった。

『お願い瑞鶴……もし私が私でいられなくなつてしまつたら……その時は……私を殺して……？』

翔鶴姉は身体の内側から溢れ出る痛みに耐えながら苦しそうに自分を殺してと訴えた。

私は『は？』と心の中で静かに怒りに悶えながらも聞き間違いだろうと半ば翔鶴姉の言葉が聞こえていた事を思考中の頭から放棄して、もう一度翔鶴姉の言葉を思い出しながら聞き返した。

しかし何度聞き返そうとも出てくるのは翔鶴姉の死亡願望。

この世で最も聞きたくない台詞に私は即座に拒否した。

嫌だ、殺したくない、死なせたたくない、失いたくない。
何でそんな事をしなくちやいけないんだ、翔鶴姉は悪くない。
悪いのは翔鶴姉の身体の中にいる空母水鬼だ。
何で翔鶴姉が全てを抱えて殺されなくちやいけないんだ。
私は心の中で怒りに燃えた。

『こんなお姉ちゃんでごめんね、瑞鶴……お願い』

そんな事、言わないでよ。

「キヤハハハハハ!!!」

「ッ!!」

茂みの深い森林で突如噴炎が瑞鶴を追うように立ち昇る。

青みがかった空には深海地獄艦爆と九七式艦戦が森林の上で駆け
翔んでいた。

落下した爆弾が地面を抉って爆発し、木々を破壊していく。

瑞鶴は防戦一方で上空を警戒しながら退避していた。

「逃ゲテバツカリジャ何モ出来ナイゾ〜!!」

逃げ続ける瑞鶴は木々の茂みを突破する。

そこは空母水鬼の艦装による砲撃で焼け野原となった更地。

砲撃によつて倒木は踏めば崩れるほど脆い炭と化していた。

深海地獄艦爆による急降下爆撃を瑞鶴は両腕を交差して防御体勢
に。

瑞鶴の周りで爆発し、爆炎と土煙で姿が見えなくなる。

数秒後に壁のような土煙に穴を開けて後方へ跳躍する瑞鶴の姿が
見えた。

瑞鶴が着地する寸前、土煙ごと吹き飛ばして艦装に乗る空母水鬼が
現れる。

「喰ラエツツ!!!」

空母水鬼は着地寸前の瑞鶴へ高速接近、瑞鶴の顔面へ膝蹴り。

瑞鶴は奥深くの森林へ木々を倒しながら蹴り飛ばされた。

瑞鶴の後を追おうと艦装を発進させる空母水鬼。

森林へ入る直前に不知火が左方から横向きの体勢で現れた。

「っ!!」

不知火のドロップキックは空母水鬼の顔面に直撃。

不意をつかれた空母水鬼は体勢を崩して大きく怯む。

しかし空母水鬼は衝撃に耐えてすぐさま不知火の方へ視線を移し、右拳を握る。

鬼の形相で右腕を大きく振り、不知火の脇腹へ強く殴打。

不知火は凄まじい衝撃と痛みに耐え切れず殴り飛ばされた。

「ドウシタ瑞鶴!! 攻撃シタラドウダ!!」?

森林の奥へ潜り込んだ空母水鬼は瑞鶴の姿を確認して煽り始める。

瑞鶴は近くにあった木に弓を持った右手を伸ばして身体を支えながら立っていた。左腕は付け根から正装ごと流血で赤く染まっている。

瑞鶴は高速で向かってくる空母水鬼を鋭い目付きで睨みつけ、弓を構えて戦闘態勢に入った。

(見て考えろ……!! 奴の攻撃パターンを!! 隙を見つけてこの融合分離体をアンタの身体の中に打ち込んでやるんだから!!)

瑞鶴の隠しポケットには提督誘拐の去り際に集積地棲姫が与えた融合分離体が入っている。

瑞鶴は空母水鬼の攻撃を見極めて隙を見つけることで空母水鬼の身体へ融合分離体を打ち、翔鶴を取り戻そうと敢えて攻撃せずに苛烈な攻撃から躲し続けていた。

とはいえ完全に躲し続けられるほど瑞鶴の速力は程足らず、作戦を理解した不知火の援護を借りてもなお空母水鬼の攻撃は苛烈さを増している。

もはや瑞鶴自身が倒されるのも時間の問題といえる危機的状況の中で、瑞鶴は不屈の闘志を燃やして身体全体に力を入れた。

「死ネエエツ!!」

空母水鬼の突き蹴りを瑞鶴は左肩を後ろに引いて回避。

過ぎ去った空母水鬼へ彗星一二型甲と紫電、流星改を複数発艦させる。

空母水鬼は瑞鶴の方へ身体を向け、地面を引きずりながら九七式艦

攻で応戦。

瑞鶴の前を不知火が走り抜けて跳躍する。

跳躍した不知火は空中で身体を仰向けにして狙いを定めた。

空母水鬼の九七式艦攻を二十五ミリメートル三連装機銃で援護。

そして空母水鬼の方へ体勢を変えて殴る様に拳を突き出して砲撃した。

空母水鬼は周辺の木々を遮蔽物にして直撃を回避する。

殴り構えて向かって来た不知火の殴打を右掌で受け止めた。

「っ!?!」

「才前ハ邪魔ダア!!」

空母水鬼は不知火の拳を掴んで自身の後方へ投げ飛ばす。

投げ飛ばされた先は水平線が見える崖の上。

受身を取れず身体を転倒させて崖の端に倒れる不知火。

直後、深海地獄艦爆による爆撃で不知火のいた崖端が大爆発した。

「不知火ツツ!!」

「しまっ——」

空母水鬼の爆撃によって崖端が爆煙に包まれながら崩れていく。

海面まではおよそ二百メートルの落差。

爆煙の中から岩片と共に歯を必死の形相をした不知火が落ちていく。

何とか戻ろうと手を伸ばすも間に合わず不知火は下の海面へ消えていった。

「コレデ一人キリ、ダネ……!!」

「不知火……!! くっ……!!」

空母水鬼は艦装を後方に移して瑞鶴の前に立ち、今まで邪魔だった不知火をようやく消せた事に安堵して微笑んだ。

瑞鶴は不知火の安否を案じながらも孤立して追い詰められた状況を把握して悔しさと苛立ちを見せる。

空母水鬼のいる位置は森林と岩場の境目、数十歩先には海拔二百メートル近くの絶崖があった。

観光地だった場所のようで植物に侵食された看板には千尋岩と書

かかっている。確かその千尋岩の真下には地下軍事施設と繋がる輸入港があったはずだ。不知火を消す為にわざと瑞鶴を崖近くの方まで意図して追い込んでいた可能性がある。

「ッ!!」

空母水鬼の背後で瑞鶴が発艦させた彗星一二型甲と紫電が狩られた野鳥のように火を帯びてゆつくりと墜落していくのが見えた。

空中戦は空母水鬼のもとい翔鶴の熟練された九七式艦攻によって制空権は取られてしまっていた。圧倒的な戦力によって優位な位置を取れた空母水鬼は瑞鶴を見下して静かに嘲笑う。

「モウ誰一人、来ル事ハナイヨ……!」

空母水鬼は深海地獄艦爆を大量に召喚し、瑞鶴に頭上へ目掛けて発艦。

わざと狙いを外して瑞鶴の目の前で着弾させた。

爆風と土煙で視界が遮られた瑞鶴。

前傾姿勢になった空母水鬼は黒い鋼鉄の甲懸の穴から紅い光を放出させ大跳躍。

空中で右踵を前面に出し勢いよく落下する。

狙いは爆風と土煙で視界が遮られた瑞鶴。

土煙の動きを見れば瑞鶴はまだ動いていない。

狙いを定めた空母水鬼は渾身の踵落としを食らわせる。

土煙を一刀両断して瑞鶴ごと地表を崩壊。

衝撃で土塊が円形状に宙を舞い、周辺の木々は根を出して倒れていく。

「っ……ごめん……ね……!!」

「ッッ!!」

空母水鬼は初めて戸惑いの声を上げる。

瑞鶴は一切の防御体勢に入らず、空母水鬼の踵落としを真正面から受けていた。攻撃を受けた事によって頭頂部から血が吹き出して額から鼻の端まで赤く血に染まっている。

受けても尚意識を失わず、怒りの炎を灯した眼で空母水鬼を睨んでいた。

「ごめんね……妖精さん……!」

瑞鶴が言ったその瞬間、空母水鬼の真横から一機の流星改が木々を掻き抜けて現れる。

すれ違いざまに空母水鬼の左側頭部へ雷撃用の爆弾を着弾させた。

爆発の影響で流星改は損害を食らうもすかさず妖精が脱出。

流星改は火の尾を出しながら地面へ墜落した。

突然の流星改による奇襲攻撃によって空母水鬼は大きく怯みを見せる。

踵落として低空にいた空母水鬼は体勢を崩した。

(そう、アンタは左右からの攻撃に対処し切れていない!! さつきからアンタは不知火の攻撃を受けていたけど、攻撃を食らうか辛うじて防ぐかの二択だった!!)

今だと叫んで瑞鶴は空母水鬼の足を退かして跳躍。

空母水鬼の首元を左掌で掴み、身体に片足を乗せる。

そして首元を掴んだ左掌を下に突き出して空母水鬼の頭を地面で叩き殴った。

空母水鬼は歯を食いしばって伝わる衝撃と痛覚に悶える。

地面に倒れた空母水鬼を拘束しようと瑞鶴は両足でそれぞれ手首を踏みつけ、身体全体を腹に乗せて身動きを取れなくさせた。

「何ツツ!! マサカツ!!」

急いで瑞鶴は隠しポケットに入っている注射器型の融合分離体を掴んで外に出し、空母水鬼の首元へ突き刺そうとした。

「つつ!!」

が、空母水鬼から離れていた艤装の砲撃が瑞鶴の左肩に直撃する。とてつもない威力と痛みに瑞鶴は耐え切れず声を上げて怯み、身体を浮かせ片足の位置をずらしてしまった。

空母水鬼は脱出する機会だと見て解放された右手で瑞鶴が持っていた注射器型の融合分離体を払い除けさせる。身体の上半身を起こして瑞鶴を右拳で殴り飛ばし、空母水鬼は後方へ跳躍して自身の艤装元まで戻って距離を取った。

「ハアハアハア……!! シクジツタ……! 本当二殺ラレル所ダツタ

……!! 一体瑞鶴は何ヲ……!!」

瑞鶴の思いがけない予想出来なかつた行動に理解に苦しむ空母水鬼は倒れ込む瑞鶴と何か赤い液体が入っている注射器を見て状況を考えた。

自身の隙を見極めるように自ら一切攻撃を加えず回避し続ける様子。

身体の中にいる翔鶴を取り戻したいと自身への憎しみと共に切に願っている瑞鶴の姿。

『貪^{グレイアホルフ}狼』集積地棲姫による解放と日本海軍の連合艦隊が小笠原諸島父島にある地下軍事施設の攻撃、それと同時に潜入してきた瑞鶴と運良く接敵できた事。

あまりにも偶然過ぎる流れに空母水鬼は瑞鶴と接敵する事がまるでこれから必ず起こる事のように上手く行き過ぎていた事に気付く。

そしてあからさまに怪しげな赤い球体が入った注射器を自身の首元へ刺そうとしていた。

「……成程ネ……分カツチャツタ……!」

八割ほど理解した空母水鬼は嘲笑気味に企んだ表情で赤い液体が入った注射器を手にとって瑞鶴の元へ歩いていく。

瑞鶴は空母水鬼の隙を作るためにわざと受けた踵落としと艤装の砲撃によつて痛みに悶え苦しんでいた。

露出した痛覚神経を数千本の針で刺されたような痛みにも脳が対処し切れず、空母水鬼が向かつて何をしてくるのか考える事もできない状態で立ち上がるのもままらなかつた。

それでも無意識に両膝を地面に着いて胴体だけを浮かせ、額を地面に擦れさせて何とか立ち上がると瑞鶴は動いた。

「コレデ翔鶴ヲ取り戻ソウトシタンダ……危ナカツタ、砲撃ガ無カツタラ本当ニ負ケテタヨ」

産まれたての子鹿のように立つ事すらできず身体を震わせ必死に立ち上がるとする瑞鶴を見て空母水鬼は赤い液体が入った注射器を見てほくそ笑む。

瑞鶴の計画が失敗に終わった事を知って心の底から安心し、そして

嘲諷した。

瑞鶴が手に持っていたのは恐らく自身と翔鶴を引き離す為の分離液のようなもの、以前に艦娘を解体する際の工程で使用されていた液体を見た事があり、それと酷似している事から空母水鬼は深海棲艦と艦娘を引き離す為のモノだと考え辿り着いた。

「何故ソクナニ苦シンデルノカ分カラナイケド、マア結果オーライ、カ……ソレツ！」

辿り着いた空母水鬼は瑞鶴の背中を力強く踏んでお返しとばかりに地面に叩き付けた。

立ち上がろうとしていた瑞鶴の身体が全身地面に触れて這い蹲る。

叩き付けた衝撃で地面にヒビが割れていき、瑞鶴は苦し声を上げて血を吐いた。

「……良イ事考エタ……！ フフツ……」

体勢を低くして座った空母水鬼は赤い液体が入った注射器を瑞鶴の首元へ刺して注入した。

瑞鶴は身動きが取れず反抗する事も出来ないまま、首から全体へ流れ込んでいく赤い液体を感じて呼吸が細かく乱れていく。

この赤い液体が自身と翔鶴を引き離す為の薬剤だと知った空母水鬼は仕返しに瑞鶴へ打ち込もうと考えた。

潮岬町鎮守府の艦娘達ができるだけ長く藻掻き苦しみ、そして誇りや矜持を全て踏み躪ってから惨たらしく殺す。

それは決して計画の為や鎮守府を支配しろなどの命令でやっている訳では無く、空母水鬼の純粋な残虐的性格と本当の悪意によって生み出された考えだった。

今まで翔鶴の身体を使ってそうやって来た。

不要な艦娘の旧式解体、『テラスティア巨門』戦艦棲姫への駆逐艦特攻、差別意識による惨めな仲間割れ。

絶望に明け暮れるその顔を見るだけで興奮が身体全体に駆け巡り、とてつもない快感で身体と共に心が躍ってしまう。

もはや自分自身で止める事は出来なかった。

「っ……かつ……！ が、かつ……！！」

「二体コノ液体ガ身体ノ中ニ入ッタラドウナルノカ、私ジャ怖イカラ瑞鶴デ試シテミルネ〜！ モシカシタラ人間ニ戻ツチャウカモシレナイケド〜何カ面白ソウダカラ頑張レ頑張レ〜!!」

身体の感覚が徐々に無くなっていくのを感じて次第に呼吸が出来なくなつて窒息しかける瑞鶴。

その瑞鶴を見て空母水鬼は赤らめた頬が引き裂けんはがりの笑みを浮かべて興奮が止まらなくなっていた。

特に瑞鶴に関してはもつと長く虐めて殺したいと思っていた。

身体の中にいる翔鶴には自身の視界と共有できるようにしている。身体を貸してくれた翔鶴が自身の目の前で妹が殺されていく様を眺めて絶望してくれるように徹底的に煽つてやろうと考えていた。

「全部入レチャッター！ ア〜ア、モウ終ワリダネ〜？ 可哀想ニ、唯一翔鶴ヲ取り戻ス手段ヲ奪ワレタ挙句、自分ノ身体ニ打チ込マレルンダモン。本当ニ可哀想、可哀想過ギテ見ルニ堪エナイ……」

「っ……い…ぐッ……!!」
「ネッツ!!」

空母水鬼は計画が失敗に終わった瑞鶴を惨めに見下しながら後頭部を鷲掴みにして持ち上げ、思い切り瑞鶴の背中を蹴り飛ばした。

瑞鶴は先程戦闘していた焼け野原となった更地に放り出される。地べたに這い蹲る瑞鶴は左手と左膝を地面に着いて身体を起こそうと最後の力を振り絞った。空母水鬼の艦装の砲撃によって直撃した右肩は炭化して右腕全体は感覚が無く、先程蹴られた背中への衝撃がまだ身体全体に響いている。

意識も朦朧としている中で瑞鶴は絶対に諦めない執念深い眼を放ち、まだ発艦できる弓を持って身体を起こした。

「モウ諦メナヨ。ドウ見テモ勝テル道筋ハ無イヨ？ イマ命乞イスレバ殺スノハ止メテアゲルヨ。何ナラ翔鶴ト話ヲサセテアゲヨウカ？ 翔鶴モ妹ノ最期ノ言葉、聞キタイダロウシネ」

瑞鶴がようやく上半身だけを起こして見上げた目の前には空母水鬼が右手を前に出して待ち構えていた。

空母水鬼の後方には艦装があり、全ての砲口が瑞鶴に向けられてい

る。

微かに耳から聞こえるのは深海地獄艦爆の飛行音で近くには九七式艦攻も飛んでいた。

とある用を思い出した空母水鬼は面倒を避ける為に瑞鶴を虐める計画を止めて始末しようと考えて砲撃準備を整える。

攻撃する体力や身体を動かす力も無い絶望的な状況で瑞鶴はふと優しく笑みを浮かべた。

「……大丈夫……だよ……翔鶴姉……」

「ッ……う」

予想外の表情に空母水鬼は違和感を感じた。

何故この状況で笑うのか理解不可能だった。

「絶対に……取り戻す……から……！　だか——」

瑞鶴の遺言を最後まで言わせる暇すら与えず空母水鬼の全門斉射と爆撃によって瑞鶴の位置で大爆発。

凄まじい爆音と共に地表ごと抉り切って爆発させ、巨大な黒煙と土煙を立ち昇らせた。

「……マア、イイカ」

そよ風によって掻き消された黒煙の中には瑞鶴が白目を向いた状態であつ伏せになつて倒れていた。

直後に瑞鶴の身体から赤い血が水溜まりのように広がっていく。

完全に死亡したと判断した空母水鬼は冷徹な表情で見下しながら後方へ振り向き、不知火が落とされた千尋岩の元へゆっくり歩いて向かった。

『瑞鶴』

その時、右手の小指がピクリと動く。

『明日、君のお姉さんが来るぞ。良かったな』

右手を握り、次に右腕が震えながら動き出す。

『瑞鶴が居てくれて良かった。ありがとね、瑞鶴』

ゆっくりとゆっくりと右掌を前に出して地面に着ける。

抉れた地面の土を握り潰して右肩を少しだけ上げた。

『ありがとう瑞鶴。私、すごく幸せ』

次に右膝と左膝を動かして腰を上げる。

『ごめんなさい……瑞鶴……皆さん……』

喉から大量の血を吐きながらも歯が砕けるほど食いしぼる。

頭から流れた血と涙を混ぜた血涙を流した。

『助けて……』

そうだ。

翔鶴姉はずっと誰かに助けを求めている。

提督^{着色}さんが殺されてあの男^{■少尉}が鎮守府を支配した時から。

身体の中にいる空母水鬼という己^{翔鶴姉}自身では気付く事のできない悪魔から。

口ではそんなハズないと否定していても、心の底では開放されたいと願っていたはずだ。

このままではいけない、誰かに止めてもらわなければいけない。このままじゃ仲間を殺してしまう。

守るはずの仲間がどんどんいなくなってしまう。

誰かこの手を止めて、誰か私を倒して。

誰か私を助けて。

翔鶴姉の発する全ての台詞から私はそう聞こえたんだ。

「ッ……!!」

立て。

「ッッ!!」

立て!

「ッッッ!!!」

立て!!!

「うッ……!!」

痛い。

物凄く痛い。

このまま意識を失えば楽なんじゃないかと思うほど痛い。
死ぬ事が羨ましいと思うほど痛い。

炭化した左肩から左腕の感覚が無い。頭頂部から溢れるように血が流れて出てくる度に激痛が走ってくる。身体全体の骨が今にでも折れそうなほど悲鳴を上げて軋めいている。

視界もぼやけてあやふや、身体が物凄く重い。

「違……う……!」

だけどこんな所で倒れてる場合じゃない。

私は翔鶴姉を取り戻す為にここに来たんだ。

力が奪われたとしても、力を創り出していけ。

例え人間に戻ってしまっても今までの戦いや生き方の全てが無駄になった訳じゃない。

立て。

立つんだ。

まだ手段はある。

今度こそ私が翔鶴姉を救うんだ。

だからお願い、私に最後の力を。

二分でいい、一分でいい。

奴と戦えるだけの力を私にください。

翔鶴姉を取り戻すだけの力を私にください。

過去の冴えない惨めな自分わたしは捨てた。

何も出来なかった哀れな鉄人形から私は生まれ変わろうと頑張った。

これからも頑張るから。

提督さんを、皆を、翔鶴姉を、守れるように強くなるから。

だから……、だから……——、

「頑張れ」

気付けば私の目の前で、蒼色が笑って立っていた。

「瑞鶴なら出来る」

そして私は眩い光に包まれて——、

「チツ……時間ガ無い、急ガナケレバ……」

不知火が落下した千尋岩の崖先へ木々を別けながら歩く空母水鬼。

少しばかり急いでいる様子で艀装を連れながらとある場所に向かっていた。

瑞鶴は始末したが崖下へ落下した不知火の安否が気になっていた空母水鬼は深海復讐艦攻を複数発艦させ、崖下の状況を確認しようと立ち止まったその時だった。

「サツサト合流シテ、ヤル事ヤツタラ自由ニ……マサカ——」

空母水鬼の左頬が血塗れた鉄拳によって大きく歪む。

意識が揺らぐほどの衝撃で空母水鬼は殴り飛ばされた。

193. 片翼の鐵鶴 後編

「自由ニ……マサカ——」

空母水鬼の左頬が血塗れた鉄拳によって大きく歪む。

意識が揺らぐほどの衝撃で空母水鬼は殴り飛ばされた。

「グッ……」体何方……」

殴られた左頬を左手で抱え、ゆっくりと立ち上がる空母水鬼。

背後から来た気配の感じとれない謎の殴打に戸惑っていた。

「才前ハ……!!?」

空母水鬼の目線の先には黒い塔から放出された紅い光の柱を背景に立ち尽くす片翼の鐵鶴。

ツインテールだったはずが左頭部の束ねた髪は燃え尽きて中途半端に解かれ、サイドテールになっていた。そして左眼は燃え盛る蒼い炎。

横からの風でサイドテールの髪や蒼い炎が靡き、口から蒸気を排出するような白い息を吐いた。

ただひたすらに空母水鬼を視界に落とし、翔鶴を取り戻すという執念の籠った鋭い目付きで空母水鬼を睨む。

それはまるでどこかの空母に似たような姿をしており、空母水鬼は感じた事の無い謎の戦慄を覚えた。

「馬鹿ナ真似ヲシタナ……ソコデ倒レテレバイイモノヲ、再度立ち向かうカ……!」

初めて攻撃を受けた空母水鬼は口の中に溜まった血を地べたに吐き出して左腕で口を拭う。

殺したはずの瑞鶴がまだ生きていた事に少し憤りを感じるも普段とは違う様子の雰囲気空母水鬼は警戒した。

左眼で燃え盛る蒼い炎がその一因だ、艦娘の中であんな変化は見た事がない。

左肩が炭化して左腕全体が使えない状態でいつ失血死してもおかしくはない瀕死に近いというのにふてぶてしく立ち上がる。

再度虐められたのかと空母水鬼は身構えた。

「イクラ戦オウガ、オ前ジャア私ニ勝テナイ……！ ソウ！ 勝テナ
インダヨ!!」

空母水鬼の振り下ろした手と同時に瑞鶴の頭上を飛行していた深
海地獄艦爆が蝙蝠の大群のように一斉に急降下爆撃。

瑞鶴の位置で周辺の木々が吹っ飛ばすほどの大爆発が起きた。

瑞鶴の身体に直撃した感覚を得た空母水鬼はもう立ち上がれない
だろうと瑞鶴の死亡を確信する。

だがしかし、爆煙の中から突然穴が空いた。

「何ダツ——」

その瞬間を見た直後、空母水鬼は左頬に鉄拳を受けてもう一度殴り
飛ばされた。

千尋岩の崖先まで殴り飛ばされ、空母水鬼の倒れた先で彗星一二型
甲による急降下爆撃。

崖先は爆煙と土煙で包まれた。

深い森林の中から蒼い炎を左眼に灯し、口に弓を啞えた瑞鶴が現れ
た。

瑞鶴は空母水鬼が倒れた土煙の方へ走り駆け、再度右拳を構えて殴
り掛かる。

「ウグッ……!!」

土煙の中から黒い鋼鉄の甲懸が現れ、瑞鶴は後方へ蹴り飛ばされ
た。

直後、土煙を払って空母水鬼が走りながら現れる。

「調子ニ乗ルナヨ!! 苦シメルノハコツチナダ!!」

空母水鬼は真っ先に瑞鶴に近付き、右拳を握って殴打を仕掛けた。

蹴り飛ばされた瑞鶴は空中に浮いたまま、左足の底で空母水鬼の殴
打を受け止める。

左脚全体に衝撃が伝わり、至る所から血が噴き出た。

それでも瑞鶴の執念深い鋭い表情は変わらない。

空母水鬼も譲らずと殺意を込めた眼付きで瑞鶴を睨む。

空母水鬼は両足を使って瑞鶴の身体を挟み掴んで拘束。

拘束した瑞鶴を投げ飛ばして空母水鬼は跳躍する。

そして空中に浮いた瑞鶴を崖先へ蹴り落とす。千尋岩の崖先が大きく崩れ、瑞鶴は二百メートルの崖下へ落下していく。

しかし瑞鶴は諦めない。

残り僅かの彗星一二型甲の爆撃で着地した空母水鬼の地面ごと爆発させ、空母水鬼を崖下までの落下へ巻き込んだ。

「クソッ!! 私ノ艦装ガ!!」

海拔二百メートルの崖から落下していく二人。

爆撃で砕けた岩塊と共に空母水鬼が落下しながら現れる。

瑞鶴は海拔百七十メートルで海面に仰向けた状態。

空母水鬼は海拔百九十メートルで海面にうつ伏せた状態。

完全に有利なのは瑞鶴の頭上にいる空母水鬼だった。

空母水鬼はより下の方へ落下する瑞鶴へ深海地獄艦爆改を発艦させ、爆撃。

左肩、右脇腹、左額に直撃し、瑞鶴は更に距離を付けられ落ちていく。

急所を尽く当てられた瑞鶴は意識を失いかけ、右手に持っていた弓を手放した。

「コレデ終ワリダ!! 瑞鶴ツッ!!!」

もはや動けない状態だと見た空母水鬼はトドメを刺そうと背後の岩塊を蹴って急速落下。

一気に瑞鶴との距離を詰めて、突き蹴りを仕掛ける。

違う。

まだ終わってなんかいない。

まだ失ってなんかいない。

翔鶴姉はまだ取り戻せる。

『もし、私が私でいられなくなったら……』

翔鶴姉が一番辛いのは妹の私が知ってる。

流した涙の熱も、血に染まった指先も、全部知ってる。
事情を教えれば皆も理解してくれる。

だから……………、

『その時は……………私を……………殺して……………』

——大丈夫だよ、翔鶴姉。

「絶対……………！」

今まで動かなかった左腕と左手が微かに動きを見せる。

震えながら細かく指を動かし、弓を掴んだ。

「ツ……………!?!」

「取り戻すから……………！」

瑞鶴は自身の上空にいる空母水鬼へ覚悟を決めた表情で優しく笑みを浮かべた。

そして右拳を握り、姉の名前を叫ぶ。

「翔鶴姉エエエエアアアツツツ!!!」

「ツツツ!! ナツツ——」

姉の名前を叫んだ瞬間、その声に反応するかのように空母水鬼は身体の内側から来た謎の痺れに怯んだ。

渾身の突き蹴りが逸れ、瑞鶴の脇腹辺りを通過。

それに合わせてカウンターするように瑞鶴の右拳の殴打が空母水鬼の鳩尾へ直撃した。

海面まであと百二十メートル。

空母水鬼は身体表面の血管を浮かばせ、殴打による衝撃に耐える。

空中で互いに決死の表情で相手を睨んだ。

瑞鶴は弓を使って爆撃機を発艦しようとして構える。

空母水鬼は共に落ちてきた岩塊を蹴って瑞鶴の発艦を阻止。

岩塊が弓を持つ左手に直撃し、瑞鶴は弓を離した。

海面まであと七十メートル。

互いに同じ位置で海面へ落下していく。

無防備になった瑞鶴の左手を掴む。

空母水鬼は黒い鋼鉄の甲懸の右脚を紅く光らせた。

「二度ト……！私ノ前ニ現レルナッツ!!!」

瑞鶴の胸腹へ渾身の前蹴りを食らわせる。

凄まじい衝撃に瑞鶴は口から大量の血を吐いた。

が――、

「つつ!!」

瑞鶴は右手に持っていた注射器を空母水鬼の首元へ突き刺す。

空母水鬼はその光景を見て瞳孔を開かせ目を疑った。

瑞鶴が刺した注射器が先程自分が刺した注射器と酷似していたのだ。

「あれ、偽物だから……!!」

瑞鶴が血を吐きながら口を開く。

注射器の中に入っているのは『紅い』液体。

先程刺した注射器の赤い液体より色鮮かな『紅い』。

「マサカツツ……!!」

空母水鬼の推測通り、一本目の注射器はブラフだった。

瑞鶴は空母水鬼を欺く為に一本目の注射器には自身の血液を入れている。

この血液は集積地棲姫の襲撃後に高速修復剤で無理やり治療した際に身体の外から出てきた不要な血液。

それを瑞鶴は違う注射器に入れて、本物と見間違おうようにわざと持っていたのだ。

そしてそれを最初に空母水鬼へ見せて刺そうと工作し自演。

二本目の本物である融合分離体が入った注射器を隠して、騙せるように仕組んでいた。

海面まであと五十メートル。

瑞鶴は空母水鬼の上に乗って別れを告げる。

「アンタはちよつと……黙ってて」

「クソ女アアアアアアアアア!!!」

直後、二人は勢いよく海面に衝突。

落下していく岩塊を巻き込んで大きな水柱が立ち上った。

水柱の中から瑞鶴が飛んで現れ、海面にゴロゴロと転倒していく。

水柱は小雨となって落ちていき、次第に空母水鬼の姿が見えてきた。

空母水鬼は海面にうつ伏せた状態で大の字に倒れていた。

融合分離体を注入された事で痺れが身体中を襲っている所為で、動きが全く取れなくなっている。融合分離体の効果は既に目に見えるほど現れており、徐々に空母水鬼から翔鶴の姿に取り戻しつつある状態だった。

「クソツ……コノ私ガ、才前ナンカニ……!」

徐々に翔鶴の身体から切り離されようとしている最中で空母水鬼は何としても抗おうと反発し、制御できなくなりつつある身体を震えながらも無理やり起こしていく。

自分自身をこんな追い込んだ憎き瑞鶴を殺してやると躍起になって歯を食いしばって手を伸ばした。

「才前ダケハ……! 才前ダケデモ……!!」

伸ばした腕や手でさえも力が入らなくなり、空母水鬼は瑞鶴を攻撃しようとする醜くも左肩や右肩を動かした。

が、もはや身体の制御も不能となって再度海面へ倒れる。

身体感覚や意識が身体の中へ吸い込まれていくように遠のいていき、空母水鬼の姿は完全に無くなって目を瞑った翔鶴の姿が戻ってきていた。

「っ……翔鶴姉……!」

地べたを這い蹲るように海面でうつ伏せの状態のまま辛うじて動く右腕で身体を引っぱり、翔鶴の元へ向かおうとする瑞鶴。

先程の謎の一時的な覚醒による戦闘の反動で全身に耐え難い激痛と感覚麻痺に襲われており、両足や左腕は感覚が全く無く右腕に力を入れるのが精一杯だった。

それでも瑞鶴は取り戻した翔鶴の顔を見ようと必死になって歯を

食いしばりながら身体を引っ張っていく。

「翔鶴姉……へっ?」

数分掛けて翔鶴の元へ辿り着いた瑞鶴はいつも見ていた本当の姉の姿を目に収めて安堵した。

その時翔鶴の身体に変化が起こり始め、身体の上半身が大きく反らされる。

すると胸の間にある鳩尾から紅黒く鮮やかに輝く球体が身体をすり抜けるように現れた。

まるで宝石のような輝きに瑞鶴は一瞬見蕩れそうになる。数秒後にして翔鶴の身体は海面に仰向けに倒れ、紅黒い球体は身体の上でゆっくりと静かに乗った。

「これは……」

「恐らく……空母水鬼の核となるモノです」

「その声は……! 不知火!」

翔鶴の身体の中から現れた紅黒い球体に困惑する瑞鶴へ話し掛けたのは不知火だった。

よく見れば右頭部や右腕から右手血が流れて正装が赤く染まっており、左手で損傷した右腕を抱えている。

「無事、だったのね……」

「はい……崖から落とされた時、無理やり右腕で掴もうと引きずったので。何とか致命傷は間逃れました」

空母水鬼に崖から落とされた際に不知火は凹凸だらけの崖に手を伸ばして無理やり掴み、引きずらせて落下していく速度を最小限に抑えて海面に着水していた。

例え艦娘であろうと高さ二百メートルの崖から落下しすれば大損害は間逃れない。瑞鶴も空母水鬼の身体の上に乗った事でそれがクッションとなり、墜落時の衝撃を緩和させて身体へのダメージを抑えていた。

「よかった……それで、不知火。これが空母水鬼の核、なの……?」

「はい。恐らくですが。これを破壊すれば空母水鬼は討伐した事になります……瑞鶴さん……頑張ったんですね……凄いです……!」

不知火は海面にうつ伏せた綺麗な翔鶴の身体と紅黒い空母水鬼の核、瑞鶴の痛ましい損傷の姿を見て瑞鶴が成し遂げた事に思わず嬉し
笑みが口に出た。

瑞鶴は潮岬町鎮守府を地獄へと変えた元凶である空母水鬼を討ち
取り、翔鶴を取り戻す事に成功したのだ。

空母水鬼が翔鶴の身体を奪って鎮守府に猛威を齎した時から既に
五年以上の歳月が経過、瑞鶴達は空母水鬼の呪いの鎖からようやく解
き放たれる。

思わず瑞鶴や不知火は報われた気持ちから涙が出てしまった。

長い年月を掛けて過ごした残酷な日々から白い提督のお陰で解放
され、巡り巡ってやつとの思いで空母水鬼を倒す所に辿り着いた。

本当に五年も経った。

五年も経っていた。

長い時間だった。

もう誰も苦しむ必要は無くなったのだ。

「ごめん不知火……核は不知火が破壊して頂戴……私は今、あまり動
けそうにないや……」

「っ……分かりました、瑞鶴さんも無理をなさらずそのままいてく
ださい」

感傷に浸っている最中で瑞鶴は空母水鬼の核が微妙に動いている
のに気付き、代わりに不知火に破壊してもらおうよう頼んだ。

不知火は目に溜まった涙を拭い、無傷な左手で空母水鬼の核を掴ん
だ。

そして――、

「っ!!」

硝子の割れた音と共に空母水鬼の核は飴細工のように砕け散った。
砕けた瞬間に一瞬紅く光り始めて核の中から紅黒い煙が空へと上
り、頭を抱えた空母水鬼の姿が煙に現れて耳をつんざくほどの金切り
声をあげながら霧となって消えていく。

核の破片らしきものも霧となり、風に流され消えていく。

これまでの凄惨な過去の全ても二度と思い出さないように消し去

り、犠牲になってしまった仲間への弔いを忘れず、瑞鶴と不知火は霧がなくなるその最後まで空を見上げた。

「っ……」

「っ！ 翔鶴姉が目を覚ましたー！」

空母水鬼の核が不知火によって砕けた直後、翔鶴が深い眠りから目覚めるように声を出した。瞑っていた瞼を少しずつ開きながら声のする方向へ耳を傾ける。

「この声は……」

「翔鶴姉！ 瑞鶴だよ！ 分かる？」

「……ええ、分かるわ……瑞鶴……」

ぼやけた視界から鮮明に映ってきたのは血まみれの右腕を左手で抱えて座る不知火と海面にうつ伏せの状態で顔面が血まみれの瑞鶴だった。

翔鶴は瑞鶴の顔を見て思わず笑みを零した。

「……水を差すように申し訳ないのですが、お二人とも身体に重大な損害を抱えています。今後の戦闘は不可能と言って間違いはないでしょう」

顔に浮かんだ笑みを無理やり消して不知火は二人へ今後の行動について話し掛けた。

瑞鶴は頭部や右腕の大量出血と炭化した左肩で見えての通り何故沈まないのか不思議に思えるほどの轟沈寸前の状態で、翔鶴は空母水鬼から開放された直後の反動で身体があまり動けそうにない状態。

逆に不知火は右腕と右手が擦り傷と骨折で出血と内出血を起こしているものの「耐久」によって既に完治済み。

状況から考えて二人とも今後の作戦においては戦闘は不可能と不知火は判断した。

「ですので動ける私が輸入港の確保を行います。お二人は提督救出時と同時にこれから合流予定の護衛艦隊と一緒に鎮守府へ帰還してください。それまでは輸入港の足場で待機していきましょう。有無は聞きません、必ずです」

「わ、分かったわ……」

戦闘に参加したいと反発しそうな瑞鶴を見て不知火は恐ろしい戦艦の眼光で睨みつけ無理やり決定させる。

瑞鶴はかつてないほどの視線に言う事を聞くしかなかった。

これからはまだ戦闘可能な不知火が輸入港の確保を行い、制圧が終わって安全になった次第に瑞鶴と翔鶴は合流予定の護衛艦隊が来るまで輸入港で待機する事になった。

現時点ではこれが最善策として瑞鶴と翔鶴も受け入れる。

「お願いします。帰還時ですが私が瑞鶴さんを抱えますので翔鶴さんは——」

「不知火……？ どうしたの、って……え……」

「わた……し——」

194. 積もり積もった憎悪は鳴り止まず

——地下軍事施設地下八階、コントロールルーム

戦闘の衝撃で壁に設置されたキャビネットが転倒し、資料や本が床に散らばる。机や椅子が玩具のように転がっていき、白い天井材が雪のように埃と落ちていった。

古鷹は目の前にある複数の机を跳躍して越えて■少尉に回し蹴り。

古鷹の回し蹴りを■少尉は右腕で受け止めた。

■少尉の左方から散らばる紙束を影に時雨が姿勢を低くして現れる。

時雨の殴打を■少尉は左手で掴んで受け止めた。

「私は元軍人だ、対人訓練はちゃんと受けてるんでね」

視線が時雨の方へ向いたのを隙と見た古鷹。

回し蹴りを受け止められた後に着地し、ガラ空きになった■少尉の腹へ向けて右拳を握る。

「ッ!!」

■少尉は古鷹の行動に気付くも対応しきれず、腹を殴られて背後へ後退させられた。時雨は古鷹の方へ駆け寄って戦闘体勢に入る。

「やはり成長していたか……!」

「当たり前でしょう、馬鹿にしないで」

腹を右手で抱える■少尉は不快感を隠しきれないような歪んだ笑みを浮かべて古鷹と時雨を紅く染まった眼で睨む。

拳を強く握り締めながら深く息を吸っては吐いて呼吸を整え、古鷹と時雨は完全に開いた瞳孔で睨み返した。

「あの時は人間時代の私にさえ刃向かえなかった屑鉄が今や殺意を向けて殴り掛かるか……不快だな」

「不快? ならもつと不快にさせてあげる……」

■少尉は成長した時雨と古鷹を見て素直にとてつもない不快感を表にする。あの時までろくに立ち向かう事も出来なかった出来損ないが生意気な事を言う心奥底から抑えきれない苛立ちが湧き

始めた。

体勢を整える際に支えとして転倒していた机の掴んだ部分が変に歪んでいる。

不意に拳にまで感情が漏れ出ていたのを確認した■少尉は手首を振って時雨と古鷹へ煽るように言い返した。

「言うようになったな屑鉄、この私を倒せると本気で思ってるのか？」
「なに勘違いしてるのか分からないけど、僕達はお前を倒そうとは思ってない。ちゃんと捕まえて今までしてきた事分だけ罰を受けようよ」

■少尉の言葉に時雨は睨みつつも冷静に落ち着いた様子で反論する。

崩壊した姉妹の絆や逆転不可能に思えた冤罪、忘れたい残酷な日々などを自ら体験し、どうすれば抗えるのかを提督や灰色から見て学んだ時雨や古鷹は憎き相手の前でも冷静沈着に考えを口に出して答えた。

敵対して憎しみによる殺意や怒りを前面に出せば奴の思う壺だ。

■少尉の主な攻撃手段は相手の負の感情をつく事であり、少しでも感情を露にすれば奴はその隙について自分達の連携を取り乱しに来る。

「くだらない。お前を黽つて殺してやる、ならまだしも罰を受けてもらうとかほざきやがって……生ぬるい。もう少し期待してたんだけどな」

意に介さない時雨の言葉を聞いて■少尉は笑っていた目が真剣な眼と移り変わり、明らかに苛立ちを募らせているのがよく見えた。

■少尉は少しずつ時雨と古鷹との距離を縮めようとゆっくり歩き始める。

時雨と古鷹は■少尉の間合いを取らせないようにと一歩ずつ後退して攻撃を警戒した。

「どれだけの月日が過ぎようとも本質ってのはそう変わらない……何か変わるような出来事があったとしてもだ。何があったのか知らんが、そう簡単に変われたと思うなよ。所詮は人間の操り人形、ただ命

令を聞くだけの機械人形だ。出しゃばるんじゃない……今すぐ——」
喋りながら歩み寄る ■■少尉が時雨と古鷹に近付いていくその時だった。

■■少尉から見て左方の五メートルの位置で天井がいきなり崩落し始めた。

鋼棒が敷き詰まったコンクリートの破片と何かが零れ落ち、瓦礫の粉塵が崩落した場所一帯を包み込む。

崩落した天井の穴から紅い光が薄明光線となって差し出し、粉塵の一部が粒となって可視化されていった。恐らく何かが上空から落ちてきたのだろうと ■■少尉と時雨達は崩落した天井の穴の位置を注目する。

そこにいたのは——、

「長門!? 木曾!?!」

「何だと……!?!」

時雨や古鷹と同様に提督を搜索中の長門と木曾が突然天井を突き破って現れた。

予想外の出来事に時雨や ■■少尉でさえも驚きの表情を隠せずにいる。

粉塵塗れになりながら木曾と長門は攻撃された患部に手を当て深海鶴棲姫の事について思わず呟いた。

「痛つつ……!! クソっ、太刀打ち出来なかったツ……!!」

「まんまと奴に動かされた……ここは、って貴様は……!?!」

木曾と長門は頭や肩に乗った粉塵やコンクリートの粒塊を手で除けて払い、周囲を確認する為に立ち上がって周りを見眺める。

木曾と長門が落ちた場所は地下七階の塔のコントロールルーム、そこにいたのは戦闘態勢の時雨と古鷹、そして深海棲艦化した憎き ■■少尉の姿があった。

「……久しく珍しい奴が現れたものだ」

「本当にいやがった……!!」

木曾と長門も鎮守府を地獄へと変貌させた憎き悪魔である ■■少尉と邂逅を果たした。

途中で接敵した深海鶴棲姫の意味不明な発言を半ば信じていなかった木曾と長門は、本当に存在していた改めて■少尉の姿を見て敵意を剥き出しに睨みつける。

「長門！ 木曾！ 奴は深海棲艦化してる！ それに何か企んでるから注意して!!」

「ああ見りや分かるぜ……何つー気色悪い姿だ、反吐が出る」

忘れはしない、地獄と化したあの日々と落ちぶれた自分達を見下し続けて嘲笑ったその顔。

見るだけでも不快感を溢れ出させてくる姿は木曾と長門の敵意を増幅させた。今すぐその顔をぶん殴ってやりたいという気持ちがいまならない、理性を超えて殺意すら芽生えてしまうほど憎い存在が目の前にいる。

状況から察するに時雨と古鷹は自分達が来る前に既に接敵していたのだろう。考えれば考えるほど深海鶴棲姫の言っていた事が全て本当になりつつある。

そう考えながら木曾と長門は血が滲み出るほど強く拳を握りして■少尉を前に戦闘態勢に入った。目で地下七階のコントロールルームが地下軍事施設の巨大な穴にある三本の黒い塔の中心から放たれた紅い光によって室内全体が照らされ、時雨達と■少尉はその光を浴びながら拮抗状態を続けていた。

「なるほど、大勢でこの施設に潜り込んでいるのか。大抵目的は私の確保又は計画阻止の双方どちらか。まあお前達が来た所で何も状況は変わらないよ」

「いいや変わる。お前が思い浮かぶ私達はもういない、今まで何の障害もなく上手くいってるようだけど……もうそんな事は無いよ」

長門と木曾と遭遇した事で■少尉は顎に手を当てながら、この四人以外にも数名の艦娘が地下軍事施設に潜入しているのを察した。

時雨達は■少尉の言動を聞いて地下軍事施設のどこかにいる提督の存在については知らない事について考える。■少尉があの

『貪狼』集積地棲姫と繋がっているかどうかは現時点で明確に示す事はできない。

故に集積地棲姫との関係はさほど深くまで繋がっている訳でないようだ。

鋭く睨む古鷹に言い返された ■■少尉は眉を少し歪ませて僅かな苛立ちを見せた。

「どこかの馬鹿に似たのか知らんが生意気な口を叩くなよ。どんな事言われようがお前らの向かう先は一方的な支配だ」

「やはりまた何か企んでるな貴様……この塔と何か関係があるのか……？」

■■少尉の少し口角を上げたような企んだ表情を見て長門は過去の経験から直接的に嫌な予感がしていた。

鎮守府襲撃以降から全く姿を現わす事が無かった ■■少尉がこの地下軍事施設にいたのであれば、地下軍事施設の中心に存在する三本の黒い塔と関係性があるのではないかと疑っていた。

地下軍事施設の象徴的存在として建てられた三本の黒い塔は依然として謎に包まれており、その塔の中心では紅白い焰のような光が雲空を貫こうとしている。目的や仕組みは一切不明、何故小笠原諸島の前衛基地に建てられたのか全く分からなかった。

「ああそうさ、どうせ操れるだろうからこの際教えてやるよ。この地下軍事施設の堅穴中心に設置された三つの黒い塔の名は『ヘカントケイル』、全世界の艦娘を一方的に操れる洗脳波を発信可能な巨大洗脳装置だ」

■■少尉は誇らしげに堂々と黒い塔の秘密について語り出した。

三つの黒い塔の名は海外神話に登場する三人の巨人の名前である『ヘカトンケイル』を利用して一部書き換えて名付けられた塔。

全長は最下層から塔上までおよそ百二十メートル、正三角形の頂点にそれぞれ均等に三本の黒い塔が建ち並んでいる。黒い塔は薔薇の棘のように刺々しい突起やワイヤーやコンクリートなどで補強された細い支柱があり、塔の出力調整をする為に囲うように設けられた仮設の足場などが残されていた。

そして一番目につくのが三つの黒い塔が囲うようにして中心で紅い輝きを放つ紅い炎光の柱。

レーザービームの如く紅く燃え盛る光は地下軍事施設全体を照らしていた。

「洗脳装置……だと……!?」

「このヘカントケイルは約五年前に発動したマウグ島攻略作戦にて確認された塔を模倣し造られたものだ……奴らはあの時既に人類を操ろうと計画していたようだが失敗した、だから今度は俺がそれを利用してもう一度成功させる為に造らせたのさ!!」

■少尉は右拳を握り締めて前に出し、自信満々に堂々とした表情で語り始める。

時雨達と長門達はそれを聞いてかつて五年前に発動したマウグ島攻略作戦の事を思い出した。

猛威を奮う深海棲艦の提督らしき存在が発見され、深海棲艦との戦争に決着をつけようと本拠点を叩く為に発動した作戦。

そこでは確かにマウグ島攻略作戦時でマウグ島の中心にあった黒い巨大な機械のような塔や禍々しく天を貫いていた紅い光線があった。

それを思い出して現在の三本の黒い塔を見比べれば酷似しているのは明白だった。

■少尉の発言から考えるにかつての黒い巨大な機械のようなモノは人類を操る為に造られた洗脳装置だったらしい。その装置を利用する背筋が凍るような末恐ろしい計画の術に一瞬気圧されるも長門は調子に乗り始める

■少尉の馬鹿げた言動に激昂した。

「そんな事ができると思っているのか!! ふざけるな!!」

「馬鹿が! 俺はふざけてなどいない! この巨大な洗脳装置を使って俺は全世界の艦娘を洗脳して操り、深海棲艦と共に叛逆を行う!! さすれば世界の支配など容易い事だ!!」

長門の反抗を蔑んだ

■少尉は両腕を広げて仰ぐ。

■少尉の真の目的は巨大な洗脳装置「ヘカントケイル」で全世界の艦娘を洗脳して操作し、深海棲艦と共に世界を支配するという恐ろしい計画だった。

艦娘と深海棲艦という超人的な力を持つ存在を利用して世界に戦

争を仕掛け、自分自身が何もかもできる支配の象徴的存在を目指していたのだ。

あまりにも幼稚で非現実的な ■■少尉の計画に木曾は怒鳴りつける。

「馬鹿げてやがる……！ 本当にそんな事ができると思ってるのか……?!」

「ああ出来るとも。一体だけで国一つを滅ぼす事のできる『七壊星』、それらに対抗するべく造られた日本海軍の最高戦力である『護神厄討艦隊』、そして国際機関『GPAK』によつて作られ極秘とされている世界最高戦力の『神聖なる騎士団』……これだけの戦力があれば世界の支配など容易いだらう」

「ツ……！」

■■少尉は嬉々揚々と語りながら最下層で戦う『巨門』戦艦棲姫とオウゲン
『?』叢雲の戦闘を観戦するかのようになから眺める。『?』叢雲や鹿島の実力を身をもって理解させられた時雨達は嫌にでも納得せざるを得なかった。

確かに叢雲の所属する護神厄討艦隊の連中は誰もが歴戦中の歴戦で、既に超人的な力を持つ艦娘の誰もが羨むような凄まじい戦闘能力を持つている。

更には一体だけで国一つを滅ぼす事のできるとてつもない強大な戦闘能力を持つ深海棲艦の集団である『七壊星』、そして国際機関GPAKが七壊星に対抗するべく世界各国の海軍から編成した極秘艦隊『神聖なる騎士団』。

これだけの戦力があれば人類など一捻りなのは目に見えていた。

「まあ、本来の目的は艦娘を操って深海棲艦と相討ちにさせてこの世から艦娘と深海棲艦という存在を削除する、という『ABC計画』に沿って行動したが……利用させてもらったよ、こんなチャンスは無いからな」

『ABC計画』……?! 古鷹や瑞鶴が言葉にしていたモノか……!!

一体次から次へと……何なんだそれは……!!

「私達を消す為だよ」

■少尉はつまらなそうに耳穴を小指でほじくり返し、爪に溜まった耳垢を捨てて愉快に『ABC計画』について話していく。

先程から意味不明なキーワードを聞かされた長門は戸惑うも、古鷹が苛立ちと焦りを隠せず口を開いた。

「この世界から私達と深海棲艦を消し去る計画……！ 何故かは分からないけど私達を良く思わない人達が私達と深海棲艦を戦わせて意図的に相討ちにさせ、この世から完全消滅を謀る為に計画した……その計画の初めとして私達たちを利用したんだよ!! しかもその計画さえも己の野望の為に利用して!! より悪い方向に使ったんだ!!!」

古鷹が長門達へ簡潔に『ABC計画』について抑えきれない怒りを右拳に集めて握り締めながら話していく。

過去に地獄のような日々を過ごしてきたのは全て『ABC計画』の過程によるものであり、尚且つ■少尉自身の野望の為に古鷹達は■少尉が逃げるその時まで利用され続けていた。

その事を知る由もない長門達は今その事実を伝えられ、己の無知とあまりの悔しさに何も言う事が出来なかった。あの時落ち着いて相手の事について何か調べる事が出来たのならとチャンスがあったと思うと、長門達にとっては筆舌に尽くし難い屈辱そのもので今にでも身が爆発しそうなほどだった。

「ああそうだ！ 随分と詳しいな古鷹！ 『ABC計画』ってのは艦娘に関する条約や規定を取り決める国際機関『GPAK』に対し、艦娘と深海棲艦を排除すべき異分子と認定して元の世界に戻す事を目的とした組織『GOTE』が考案したもの、今は日本海軍を中心に世界各国の海軍が動いている」

悍ましい『ABC計画』の考案をしたのは世界を変えた艦娘と深海棲艦という存在を消して元の世界へ戻す為に同じ考えを持つ世界各国の中將階級以上の軍人達によって作られた組織『GOTE』が考えたものだった。

極秘裏に編成された組織として目的の為に決して正体を現さず裏で手を回すように活動している。

「十何年か前に現れた艦娘と深海棲艦という存在はこの世界に混乱と絶望を引き起こした諸悪の根源だと断定し、その存在を消す事で世界は平和に保たれる、という嘘の方針で大体の奴らは騙されて動いている。本当は自分達の犯した非人道的な実験の数々を隠蔽したいが為にやっているのにな……この組織は世界各国の要人や政府関係者、軍人やメディア、一般人など多くの者たちが組織に属し、本当の目的を知る奴は嘘の方針に騙された奴を使って艦娘と深海棲艦を消そうと暗躍しているんだ」

現在の『GOTE』は何百人何千人と人員を増やして勢力を伸ばしており、世界中の至る所に組織の一員が蔓延っているらしい。

国会議員や大企業の執行役員、大佐階級以上の軍人に大手メディア、専業主婦やサラリーマンなど多くの者が組織に属して動いているようだ。

全ては元の平和な世界を取り戻す為、二度と怯える事の無い世界を取り戻す為にといい偽りの目的を果たそうとありとあらゆる手を使って艦娘と深海棲艦を滅ぼす計画を考え続けた。

それが『ABC計画』だった。

「何か不自然に思う事は無かったか？ 例えば……たかがモノごとき艦娘と人間のくだらないケンカ程度の問題で大袈裟に世間に広められ、異常なまでの誹謗中傷や暴力を受けた挙げ句、旧式解体するのが当たり前だという風潮があった事とか」

「ッ!!？」

■少尉が取り上げた事例を誰よりも先に時雨は勘づいて驚きの声を上げる。

その事例は正しく本当に起こった出来事であり、時雨は夕立と共に一般人に暴行を加えたなどの冤罪を背負わされ、駿河鎮守府の■少尉の罠に嵌って凄惨な拷問を受け続け、精神を破壊され生死を彷徨う事があった。

冤罪だったこの事件は全国で話題になり、時雨と夕立に対しての誹謗中傷は勿論の事、潮岬町鎮守府に対しても尋常ではないほどの批判を受けていた事がある。

何とか灰色と白露の潜入工作と提督自身の弁護により、結果的に時雨と夕立は解体を間逃れ救われたがそれでも尚批判は今でも続いている。

「アレも『GOTTE』による艦娘消滅を謀る工作の一環だ。奴らは艦娘を消せるチャンスがあると見れば即座に仲間を集めて見境なく袋叩きにする。また艦娘や深海棲艦を擁護する者や計画を邪魔する者が現れれば即座に消し去り、徹底的に裏から計画を進めていくんだ……あ、そういうえばそんな奴がいたなあ……蒼■中尉、だったかな？」

時雨と古鷹の方へ振り向き話す■少尉から、久しく懐かしき君主の名前を聞いて動揺の声を漏らす時雨達。

人権派に所属する潮岬町鎮守府の初代司令官であり、艦娘兵器思想の真っ只中で誰であろうと人間として仲良く接してくれた時雨達にとっては神様のような存在。

一生にして忘れる事のない存在である蒼色はかつて操られた翔鶴に殺されたが、その殺された原因が『ABC計画』に参与していた事に時雨達は鳥肌が止まらなかった。

「まさか提督は……！」

「勿論『ABC計画』を知って黒■■を問い詰めたから邪魔者と判断され殺すようにしたのさ。いや正確には操られた翔鶴に殺された、だってかあ？　なあ？　操られてたんだもんなあ……!!　馬鹿だよなあ……!!」

■少尉は惨めだと煽るように時雨達を見下し蔑んでいく。

時雨達は身体の奥底から溢れ出る怒りを静かに拳に込めて血が滲むほど握り締めた。髪が重力を失ったかのように逆立ち、全身に青筋を立てて殺意を眼に込める。

優しい蒼色が殺されたのは翔鶴だけではなく、■少尉や日本海軍の上層部、そして世界的組織『GOTTE』が仕掛けていた。

何故あんなにも優しい蒼色が世界によって殺さなければならぬのか、とてつもない理不尽に時雨達は心の中で怒りを込めながら嘆いた。

「許せない……!!　絶対に許せない!!」

「とんでもない怒りっぷりだな。まあ全て話したが理解出来ただろうか？　いくらキレようがどうせお前らは俺に操られる都合のいい人形なんだ、大人しくしてもらおうか……ッ!!?」

「うわッ!!」

周囲から向けられる極上の殺意に■少尉はヘラヘラと面白がつて小さな砲口を時雨達に向ける。

その時耳を破壊するかのような凄まじい爆音と衝撃が最下層から響き渡り、■少尉と時雨達は思わず身を屈んで耳を塞いだ。

嫌な予感がした■少尉は恐る恐る最下層で戦闘しているはずの

『テラス・アイア巨門』戦艦棲姫と『オウゲン?』叢雲の状況を覗いて確かめた。

「まさか……!!」

195. 犬や虎さえ屠る鐵の叡智

時雨達と■少尉が話している最中で地下軍事施設最下層の「ヘカントケイルの間」では『巨門』戦艦棲姫と『?』叢雲の戦闘は更に苛烈さを増していた。

「ツッ!!」

金色の閃斬が濃い土煙の中で妙に輝く。

土煙から戦艦棲姫が現れ、巨大な黒い拳を振るった。

土煙が振るった風圧で晴れて目の前には叢雲が待ち構えている。

叢雲は巨大な黒い拳の殴打を金色の鎗で受け流した。

金色の鎗と巨大な黒い腕が擦れ違つて火花を散らせる。

そのまま金色の鎗を無理矢理に押し出して戦艦棲姫の顔目掛けて殴り掛かった。

戦艦棲姫は身体を少し仰け反らせて回避。

残った自身の右腕で叢雲を殴り飛ばす。

「効くわね……! やっぱ片腕落としても力は変わらないか……」

叢雲は辛うじて鎗の柄で巨大な黒い拳の殴打を受け止めていたが、想定以上の衝撃で後方まで殴り飛ばされていた。金色の鎗を持っていた手から腕全体が衝撃の影響によって軽く痺れて震えているのが見える。戦艦棲姫は鋭く叢雲を睨みながらも話し掛けに応じず、汗を拭いで荒れた呼吸を落ち着かせていた。

叢雲は戦艦棲姫の巨大な黒い拳の殴打を食らつて左頭部の額から大きく血を流して一部の砲塔が破損、左前腕に青みがかつた打撲痕が著しく残っている。

戦艦棲姫は攻撃の要である巨大な黒い腕の左腕が切断されて使用不可能な状態、顔面や腕に打撲痕や斬り傷が斑に残っていた。

「……」

「このままじゃ埒が明かないわ……だから……」

叢雲は金色の鎗を片手で持つて帯刀するかのように構え、左足を前に右足を後ろにして居合の体勢に入った。焰のように燃える眼から稲妻と化したエネルギーが溢れ出させ、身体中から黄金色のエネルギー

ギーを身に纏わせる。

戦艦棲姫は必殺技らしき行動に出たと予測してようやく落ち着いた呼吸を維持しながら巨大な黒い拳を前に出して警戒態勢に入った。

「悪いけどこっから本気でやるから……」

叢雲がそう言った途端、舞う小さな瓦礫を残して姿を消す。

戦艦棲姫は無意識に背後を振り向き、限界まで目を見開き驚愕した。

「ッ!？」

戦艦棲姫は身体を無理矢理動かす。

瞬間、金色の鎗が頬を掠めて突然目の前に現れた。

「覚悟してよね」

背後には空中でうつ伏せの状態で金色の鎗を突き出す叢雲がいた。

叢雲はあの一瞬で戦艦棲姫の背後まで跳躍し、金色の鎗の突きで穿とうとしていた。

無理矢理回避した所為で不安定な体勢になった戦艦棲姫。

隙を見逃さない叢雲は空中で体勢を変えて身体を回転させる。

戦艦棲姫の脇腹に目掛けて重い蹴撃を食らわせた。

歯を食いしばった口から赤い血を吐く戦艦棲姫は蹴り飛ばされながらも両足を強く床に着いて体勢を整える。

そして更に後方へ跳躍して逆さまの状態に。

空中で不安定な体勢になった叢雲に砲口を向けて複数砲撃。

砲撃の雨を叢雲は無理矢理金色の鎗で弾き飛ばすも衝撃に耐え切れず地面に激突。

激突後、瞬時に後転して降り注ぐ砲弾を金色の鎗で弾き飛ばした。

叢雲の周囲で弾き飛ばした砲弾が爆発する。

「解せないわね……こんなに激しく戦ってるのに互いに誰も援護にこないだなんて。まるで誰かがチャンスを伺ってるように見られてる気分だわ」

金色の鎗を巧みに振り回して柄頭を地面に突き刺し、仁王立ちで独り言を話す叢雲。

戦艦棲姫と戦闘を始めておおよそ三十分、叢雲は戦闘の最中で戦艦棲

姫の他にとつともない殺気とエネルギーを感じ取っていた。まるで誰かに気を伺って傍観されているような不愉快で気が散りそうな感覚。

気の所為にしたいところだが徐々に深く濃くなっていく感覚に叢雲は強制的に焦燥感を感じていた。

「ソレハ気ノ所為ダロウ。ドウセコノ時間モ互イノ目的ノ為ニヨル時間稼ギダ……」

「そう……アンタ達の計画、今頃なら他の七壊星が日本の各海域に現れて私たちの仲間と戦闘中の予定よね。だけど何故かしら、気が散るほどの物凄い殺意を込めたアンタぐらいの実力を持つ奴のエネルギーをどこからか感じるわ」

戦艦棲姫が何か知ってないかと叢雲は話しかけながら地下軍事施設の中心に聳え立つ三本の黒い塔「ヘカントケイル」を仰いで眺める。

未だに無線が使えない事を確認した叢雲は戦艦棲姫の他に誰かが妨害工作をして待ち構えている事を確信した。

「ソウカ？ 私ハ感ジナイナ。潜入シテイル仲間ト勘違イシテルンジヤナイノカ？」

「やっぱり……潜入してる事分かってるのね。何か胡散臭くなってきたわ」

地下軍事施設の提督救出作戦に参加している金剛と天龍を知っているのならまだしも、他に潜入している時雨や瑞鶴達の事を戦艦棲姫は知っているようだ。

明らかにこちらの作戦が完璧にバレている事を察した叢雲は湧き上がる焦燥感を抑え、金色の鎗の矛先を戦艦棲姫に向けて戦闘態勢に入る。

「アイツラモ、オ前ノ仲間ト同様ニ皆殺シテヤロウ……五年前ノヨウニナ。今度ハ守レルカ？ ソレトモ仲間ヲ見捨テテ逃ゲルカ？ 自己保身ニ走ツタ臆病者」

『テラスニエイア巨門』戦艦棲姫の言葉を聞いて『オウゲン?』叢雲は一瞬だけ身体を揺らし、数秒後には戦闘態勢を解いて棒立ちのまま顔を俯かせていた。

その言葉とは叢雲からすれば地雷そのもの、五年前に起きた深海棲

艦の連合艦隊による奇襲作戦で小笠原鎮守府が壊滅した出来事。

共に戦った大切な仲間をほとんど失ってしまい、大切な人でさえも致命傷を負わせてしまうほど無力な自分自身を痛感させられた叢雲にとつて一生忘れる事のない凄惨な過去だった。その過去を間近で観察していた戦艦棲姫は叢雲の理性を荒れさせて隙を見抜こうと狙って煽っているのは明白。

それでも叢雲には冷静を保とうとも捨てきれない感情があった。

「よく言っただね戦艦棲姫……」

声を震わせてようやく口を開く叢雲。

金色の鎗を持つ右手と腕を小刻みに震わせ、静かな怒りを戦艦棲姫に見せつけた。

「いいわ……全力でぶっ潰してあげる」

こんな事を言われて頭に来ない奴なんていないだろう、と頭の中で溢れ出す怒りを抑えながら叢雲は顔を上げて戦艦棲姫に撃墜を宣言する。

その金色に輝く眼の奥では凄まじい怒りの炎が燃え盛っていた。

叢雲は後方へ大きく跳躍して戦艦棲姫と距離を取る。

そして左足を前に出して右足を後ろに。

鎗を右手に持って水平にし、上半身をが左足の膝へ着くまで体勢を低くした。

「私が持つこの鎗……打撃や斬撃の両方を持ち合わせる近接武器だけど……」

「ッ？」

突然叢雲が戦艦棲姫に話し掛ける。

「使い方次第じゃ鋼鉄を貫き抉るほどの必殺の一撃にもなるのよ」

戦艦棲姫は警戒して巨大な黒い左腕を前に身構えた。

「行くわよ……その言葉を言った事、あの世で後悔するといいわ」
言ったその瞬間、叢雲は強く地面を蹴って急発進。

凄まじい速度にドーナツ状の衝撃波が幾つも生まれていく。

地面ごと抉りながら走行し、そして大跳躍。

空中で金色の鎗を持つ右手の持ち方を変えた。

「アア知ツテルサ……本来ソノ金色ノ鎗ハ近接デ使ウモノデハナク……投擲スル事デ最大威力ヲ發揮スル、トイウ事ヲ……!」

叢雲の鎗が金色の光を纏って一層に輝きを増していく。

叢雲の核から右腕、そして右手へ大量のエネルギーが流れている。

艦装の砲口の奥から金色の光が見えてきた。

(投ゲルツモリダロウ、叢雲……!　ダガ私ニダツテ秘策ハアル……!!)

戦艦棲姫は巨大な黒い左拳を後方へ引き、右足を前に左足を後ろにして前傾姿勢になった。

(削ガレタ右腕分ノエネルギーハ、コノ艦装ノ左拳ヘト蓄積サレテイク……!　ツマリ、コノ艦装ノ左拳ノ殴打ハ通常ヨリモ数十倍ノ威力ヲ持ツテイルンダ……!)

戦艦棲姫は叢雲に艦装にある巨大な黒い右腕を斬り落とされた際、本来であれば巨大な黒い右腕に回るはずのエネルギーを同じ黒い左腕の方へ溜めていた。

エネルギーを有効活用した事で戦艦棲姫の巨大な黒い左腕には【耐久】や【装甲】は勿論、【火力】も数十倍以上に膨れ上がっている。さすれば叢雲の金色の鎗も破壊可能と考え、戦艦棲姫はそのエネルギーと力を左拳に込めて金色の鎗を破壊するチャンスを作っていた。

「祈れ……!」

『?』叢雲は金色の鎗を持つ右手に力を入れて強く握る。

(来イ叢雲ツツ!!　貴様ノ武器ヲ破壊シテ身一ツニナツタトコロヲ殺シテヤルツツ!!!)

『テラスティア巨門』戦艦棲姫は巨大な黒い左拳をより強く握り締めて叢雲の攻撃に備えた。

「——鳳鳴朝陽!!!」

空中にて叢雲は金色の鎗を投擲。

衝撃で地面の瓦礫や石屑が宙を舞う。

金色の鎗は破壊光線となつて一直線に戦艦棲姫へ。

戦艦棲姫は光速で放たれた叢雲の必殺一撃である金色の鎗の投擲に対し、巨大な黒い左拳で殴り掛かり叫んだ。

直後、大衝突。

金色の鎗の矛先と巨大な黒い左拳が凄まじい轟音と共にぶつかり合う。

地下軍事施設自体が地震のように激しく揺れ、その衝撃波は地上や海にまで身体を揺さぶるほど強く広がった。

衝突の中心では空間が歪み、エネルギーが金色と紅黒い稲妻となつて反発し合う。

戦艦棲姫の背後で流れた衝撃が床や壁、ガラス等が破片となつて碎けていく。

戦艦棲姫は歯を砕けるまで食いしばり、金色の鎗の矛先を破壊しようと左拳を強く押していく。

僅かに金色の鎗よりも力を入れて押しているように見えた。

だが――、

「ツッ!!!」

更にダメ押しと叢雲は急降下。

金色の鎗の柄頭を強く蹴つて押し返した。

その衝撃でまた更に地下軍事施設が揺れて瓦礫が破片となり空へ舞う。

凄まじいエネルギーの衝突。

身を屈んで何かに掴まっていなければ吹き飛ばされてしまうほどの爆風、

腕で隠さなければ見る事すらできない閃光の数々、

頭の奥まで響き渡らせる耳をつんざく轟音。

叢雲の金色の鎗の矛先が僅かに戦艦棲姫の巨大な黒い左拳を突き刺す。

その斬り口からひび割れていくように線が細かく入っていく。

しかし金色の鎗の矛も先端から徐々にひび割れて壊れているのが見えた。

叢雲は思う。

抉り切るまで力の解放は止めない。

例えこの鎗が使い物にならない可能性があっても、戦艦棲姫の拳を砕き抉るまでは押し込んでやる。

力を緩めるな、声を上げて身体を騙せ。

ただ貫く事だけを考えるんだ。

「もつとオオオオオ力をオオオオオアアア!!!」

全身の力を脚全体へ叢雲の金色の鎗が一步、戦艦棲姫を押し返す。

戦艦棲姫は地面に強く踏ん張り耐え抜こうとするも徐々に後方へ下がって引きずっていく。

叢雲はその瞬間を見て限界以上に足へ力を込めて咆哮を上げた。

(エネルギーヲ倍以上ニシテモ尚……! 奴ノ鎗ヲ碎クノハ難シイノカツ……!!!)

遂に金色の鎗のボロボロになった矛先が巨大な黒い左拳をゆつくりと深く突き刺していく。

戦艦棲姫も咆哮を上げて押し返そうと左拳に力を入れたが――、

瞬間、大爆発を起こして巨大な爆煙と土煙が巻き起こる。

衝撃波が過ぎた瞬間にガラスの破片やコンクリートの塊が雨のように降り注いだ。

周辺に佇んでいた瓦礫が吹っ飛び、廊下に繋がる扉も耐え切れず破壊されていく。

三本の黒い塔は強固で微動だにせず、舞い上がってぶつかってきた瓦礫を破壊した。

「ハア……ハア……ハア……ハア……ハア……」

数分後にして爆音は勢いを無くして少しずつ止んでいく。

爆心地はクレーターとなつて周辺のコクリート床を抉っていた。クレーターからは粉塵や土煙が上へ上へと立ち昇っている。その中で一つの枯れた喉から精一杯の呼吸が聞こえた。

「ッ……私……」

濃い土煙から徐々にシルエットが見えていく。

横たわる者と立ち尽くす者、どちらが勝っているのかは一目瞭然。呼吸を落ち着かせようと冷たい空気と唾を飲んで立つ者は口を開いた。

「私の……勝ち、よ……」

鎗と拳の激突を勝したのは叢雲だった。

叢雲は足りなくなつた酸素を取り込もうと何度も呼吸する。

戦艦棲姫は艤装の上で横になつて意識の無いまま倒れていた。

叢雲の鎗は巨大な黒い左拳を貫き、地面に深く突き刺さっていた。

叢雲は力を出し切つたのか身体を纏つていた金色の光を失い、今まで抑え込んでいた疲労や痛みに一気に解放され、とてつもない身体の重さに襲われていた。意識を保ちながら呼吸をして立つので精一杯、艤装の砲台も紅く熱を放っており戦闘続行は不可能に近い。

一方で戦艦棲姫は艤装の上で白目を向いたまま意識を失つて倒れていた。巨大な黒い左拳は叢雲の鎗によって中指と薬指の間から一気に肘まで貫かれている。戦艦棲姫の本体は衝撃の反動で左腕全体が黒く焼け焦げた傷跡をしており、ありとあらゆる所から血が吹き出していた。

「馬鹿な……!! 奴を倒したのか……!!?」

八階の塔のコントロールルームにて観戦していた■少尉は凄まじい爆音と衝撃が止んだ後に爆心地を見下ろし驚いていた。

視界には立ち尽くす叢雲と倒れる戦艦棲姫、思いがけない有り得ない結果に■少尉は頭を抱え髪を掻き毟つて混乱状態に陥っていた。

「有り得ない……!! 奴は強化されたばかりだぞ!! あの化け物め!!!」

「いきなり叫ぶなんて、らしくないな」

「ッ……い！」

強化改修を受けて強くなつたはずの戦艦棲姫が『？』オウゲン 叢雲によつて倒された事に■少尉は納得がいかず叢雲を憎み始めたその時だった。背後で忌々しい餓鬼たちの声が聞こえた■少尉は強く拳を握り締め、唇を噛みながら声の方向へ顔と身体を向ける。

「戦況は大きく変わったようだね……！」

「流石は叢雲……あの『巨門』テラスティア 戦艦棲姫を倒したのか……我々も見習わなければいけないな」

「おいおい余裕の笑みはどうしたクソ野郎。何か言ってみたらどうだ？」

そこには時雨と古鷹、長門と木曾が■少尉を囲うように砲口や剣先を向けて立っていた。

恐らく最下層で時間稼ぎという目的での戦闘中だった叢雲が『巨門』テラスティア 戦艦棲姫を倒したのだろう。

■少尉の慌て様を見て戦況が変わつたのを察し、理性を揺さぶらせようと感想や皮肉を込めて話し掛けた。

「お前からそ奴を倒したからと言って良い気になるなよ……！」 所詮

は虎の威を借る狐だ、お前らなんか簡単に潰せるんだからな……！」

「私達が狐ならお前は犬だ、それは負け犬の遠吠えって言うんだよ。追い詰められた気分はどう？ クズ野郎」

「ッ……鉄屑如きがふざけるな!! お前ら全員捻り潰して——」

どこかの誰かに似たような古鷹の煽りを聞いて■少尉は激昂し、深海棲艦の艦装を展開して古鷹に襲いかかった。

しかし横から長門が跳躍して古鷹を庇うように現れ、■少尉の首を左手で掴み無理矢理床に叩き付ける。

■少尉の両手の付け根を長門は両足で踏んで拘束し、残った両足は古鷹と時雨が身動きが取れないように身体を乗せた。木曾は深海棲艦の艦装を斬り刻んで破壊し、■少尉の首元にサーベルの刃先を触れさせている。

「深海棲艦の力を持って驕っていたようだが貴様の力では無駄だ……

！ 私達に勝つ事はできない!!」

「クソがああああ!!!」

「教えろ！ この施設のどこに通信妨害装置があるんだ!!! そして提督はどこにいる!!! 早く教えろ!!!」

何がなんでも脱出しようと全身に力を入れて暴れる ■■少尉。

艦娘の超人的な力を前に為す術なく身動きが取れなくなった最悪な状況に声を上げて叫喚した。

叢雲の勝利によって有利な状況を掴んだ長門は今がチャンスだとこの施設を一带に放っている通信妨害装置の場所や未だ分からない攫われた提督の居場所などを吐くように問い掛けた。

「何を言っている……!? 通信妨害……? そんな事を指示した覚えは無いぞ……!!!」

「とぼけるな!! 全て貴様が指示したんだろう!! 早く言え!!」

「うるさい黙れ!! そんなの知った事か!!! 私は計画の為にやっていただけだ!!! 通信妨害だか、提督の場所だかそんなのは知らねえよ!!!

早く離せゴミ共が!!」

■■少尉は強気な姿勢を崩さずに一徹して通信妨害装置や提督の居場所などを知らないと言った。艦娘を支配する計画の主導者や深海棲艦の総司令官でありながら何も知らないと言うのはあまりにも不可解だった。

嘘をついているに違いないと長門は何度も問い掛けるが ■■少尉は全く知らないと言った。

突然の行き詰まった状況に長門達は焦りの表情を隠せずにはいられなかった。

「どういう事だ……? 本当に知らないのか!? 何故だ……何が一体どうなって……」

長門は考える。

提督救出作戦から約四十分が経過したこの状況で違和感を感じていた長門は今までの行動を振り返った。

七壊星『テラスティア巨門』戦艦棲姫の待ち伏せによる天龍と金剛との強制戦

闘、そして叢雲との衝突、地下軍事施設に潜入してから突然発生した通信妨害、途中で何故か接敵した七壊星『メグレズ天権』深海鶴棲姫との会話。

何故こちらの作戦が簡単にバレているのか。

まるで全て起こる事が事前に分かっていたかのように上手く出来すぎています。

誰かに操られているような強い違和感、もし■少尉と接敵する事さえ分かって仕組まれているのだとしたら。

『悪いけど私は私の為に成さなければならぬ事がある。計画の為に会ってもらおうよ』

ふと思いつ出したのはとある七壊星の深海棲艦の言葉だった。

「……………まさか……………!!」

長門は考えた末に辿り着いた。

かつてないほどまでに迫られた状況を前に戦慄を覚えた。

一気に全身の穴という穴から汗が吹き出し、手足が恐怖に怯えて震えているのが目に見えて分かった。

追い詰められていたのは『巨門』テラスティア戦艦棲姫や■少尉ではなく、この地下軍事施設に潜入した自分達と攫われた提督である事に。

「提督と叢雲が……………危ない……………」

「モウ出ルゾ……………貴様ラノ遊ビニ付キ合ッテラレルカ、ウンザリダ……………」

「ッ!? 誰だ!!」

何も照らされず暗闇に包まれたコントロールルームの奥で聞き覚えの無い声が聞こえた。

時雨と古鷹は声の方向へ即座に振り向き砲口を向けて威嚇した。

金属同士が擦れ合う金切り音と装置が合体する機械音を発している声の正体はそのそとゆっくり近づいていく。時雨の呼び掛けに答えた声の正体は苛立ちながら答えた。

「誰カッテ……………? 今カラ殺サレル雑魚ニ教エル名前ハ無イダロ……………耳障リダ黙ッテロ」

暗闇の中で畝るように光る白い肌の身体の中に斑についた紅い光筋、三本の黒い塔の中心に光る紅い光線によって淡く照らされる黒い

刺々しい艷装、そして胸の間で宝石のように光る紅い球体。

その禍々しい光を時雨達が見た途端、突然ガシヤンガシヤンと金属音を鳴らせながら艷装を複雑に組み合わせさせて火花を散らす。

そして胸の間で輝かしく光る紅い球体を中心に背後から猩々緋色の十字光を展開し、口を開いた。

「サア……パーティーノ始マリト行コウカ……——」

その瞬間、時雨達は紅い光を浴びて視界が真っ暗になった。

196. 戦場に運命は舞い降りる

「ハア……ハア……」

『巨門』テラスティア戦艦棲姫との戦闘で巨大な黒い片腕を切断し、渾身の槍投げで戦艦棲姫を打倒した叢雲は瓦礫の山で突き立てた鎗を支えに立ち尽くしていた。

戦艦棲姫を打倒した際に使用した槍投げの反動で身体全体の筋肉や骨が伝播した衝撃で悲鳴を上げ、顔を俯かせて荒れた呼吸を落ち着かせ意識を保つので精一杯だった。

「これで……少しは、落ち着いた……かしら……」

叢雲と戦艦棲姫がいたのは地下軍事施設の最下層中心のフロア、『ヘカントケイルの間』と呼ばれた広い円柱状の空間。円柱状の中心ではヘカントケイルと呼ばれた三本の黒い塔が地上を突き抜けて空まで伸びている。

戦闘する前は自身の身体が薄く映るほど綺麗だったフロアタイルの床は跡形もなく破壊し尽くされ、コンクリートの破片や塊が床を埋めつくしていた。

変に歪んだ鉄筋や一階層上の部屋のガラスの破片が辺りに散らばっている。

「後は……これを、止めないと……」

次第に呼吸が落ち着いてきた叢雲は深呼吸して身体を整え、俯いた顔を上げてフロアの中心に立つ三本の黒い塔、通称『ヘカントケイル』を眺めた。ヘカントケイルの中心で熱線のように燃え盛る紅白い光の柱が噴火の如く轟音を鳴らしながらフロア全体を紅く照らしている。

先程の戦艦棲姫との戦闘で傷ついているかに思えたヘカントケイルは一切の傷跡が無く、破損しているような箇所など全く見えなかった。傷一つないまま稼働し続けるヘカントケイルを見て叢雲は謎の不気味さを感じた。

「流石に……支援が欲しい、わね……白提督の救出状況……摩耶から

の連絡はまだ、かしら……後は時雨たちも上手くやってくれてるといい……っ!？」

顔を仰いでヘカントケイルを眺め続ける叢雲が独り言を呟いていたその時、頭上から砲撃音と爆発音が混ざり合う轟音が響き渡った。轟音の場所を視線を移すと上の階層の突き出た建物の窓から黒煙が昇っているのが見える。

確認した直後にガラスの破片やコンクリートの塊が雨のように最下層のフロアへ降り注いだ。

「一体何が……ッ!?! どうしたのよ!!」

右腕や金色の鎧で降り注ぐ破片を壊して上の状況を確認していた途端、叢雲の傍で長門が頭部や腹から出血しながら白目を向いて意識を失ったまま落下してきた。それを皮切りに長門と同じような大破に近い状態で木曾や古鷹、時雨が落下して瓦礫だらけの床に墜落していく。

更には見た事の無い深海棲艦に似た姿の男まで同じく墜落して現れた。

仲間の心配をした瞬間に殺気を感じ取った叢雲はすぐさまに金色の鎧を構えて警戒する。

「っ——」

直後、叢雲の後方で少し遠くの位置からガシャンという機械音と共に何かに着地した。

その瞬間に場の空気が怯えるかのように震え出し、とてつもないプレッシャーと殺意がフロア全体を包み込む。

着地した際に舞う大きい土煙から紅い光が淡く輝いた。

叢雲はゆっくりと顔を振り向かせ、後方の少し遠くの位置にいる存在を確認していく。

その存在を見た叢雲は一瞬で殺意と憎悪を膨らませ、限界にまで目を見開かせた。

その存在はまさに絶望に等しく。

その存在はまさに無敵に等しく。
その存在はまさに最凶に等しく。
その存在はまさに禁忌に等しく。

黒い鋼鉄の鉤爪で肉体を斬り裂き、黒い鋼鉄の鉄拳で全てを叩き潰す。

艦装展開された全十六門の砲口からなる紅黒く禍々しい光を帯びた砲弾の雨は艦娘達を死の恐怖へと陥れる。

見敵必殺を背負うその姿。

目に見えるもの全てを塵一つ残さず破壊し尽くし、健気にも立ち向かってきた敵を圧倒的な力で振じ伏せた。

そしてその存在は『殺戮機姫』という異名を持って君臨する。

七壊星きつての戦闘狂、【天璇^{メラク}】南方棲戦鬼が現れた。

「ッ……!!」

叢雲は背後の方へ振り向いて急発進急加速。

南方棲戦鬼も瞬時に動きを合わせる。

互いに低く跳躍して顔を合わせて相対。

決死な表情の叢雲は鎗を背後に構えて。

笑みを浮かべる南方棲戦鬼は右の鉄拳を後方へ引いて。

先に動いて鎗のリーチがある叢雲の攻撃が当たるかに思えた。

しかしそれよりも後に動いたはずの南方棲戦鬼の鉄拳が叢雲の顔面にめり込む。

鉄拳の殴打を受けた叢雲は後方の壁まで殴り飛ばされた。

壁に衝突して部屋へ突き抜け、巨大な土煙に包まれる。

直後、南方棲戦鬼の殴打した鉄拳の砲口から紅黒い十字光が。

殴り飛ばされた叢雲の位置で着弾、大爆発を起こす。

数秒後に叢雲は崩れかけの壁を手に掴んで支えに身体の上に乗った瓦礫を除けて重い身体を持ち上げる。

金色の鎗を杖にしてゆつくりと歩き出した。

土煙と爆煙の中から姿を見せ、赤く霞んだ視界から南方棲戦鬼を睨む。

(まづい……【性質】が崩壊し始めた……)

頭部から止まらぬ流血を左手で触れて確認する叢雲。

自身の「耐久」が想定外のダメージを受けて崩壊している事に気付く。

性質の崩壊とは身体の中の核から送られるエネルギーの供給速度が間に合っていない証。

たった一発の殴打だけで一つの性質が崩壊するほどの威力になる。

「何故……南方棲戦鬼が……ここに……！」

出血して赤く染まる左眼を左手で隠しながら叢雲は震えた声で南方棲戦鬼に訴えた。

意識が若干朦朧としていて視界が鮮明に保てず南方棲戦鬼の姿がぼやけて見える。

金色の鎧を支えに立っているのもやっとで未だ先程の受けた殴打の衝撃が身体全体に駆け巡っている最中だった。

「ソリヤア勿論、叢雲ニ会ウ為ダ……ナア——」

笑みが止まらない南方棲戦鬼がようやく口を開いて叢雲の問いに答えた。

満身創痕に近い叢雲の姿を見て南方棲戦鬼は煽るように話し掛ける。

「——調子ハ……ドウダ？」

叢雲の前にいるのはかつて殺戮機姫の異名を持つ最凶の深海棲艦、七壊星「天璇」南方棲戦鬼。

長い白髪のスインテールに胸の間に輝く赤い球体が特徴で、怪物の口のような艦装に搭乗して海上を航行し、両腕には黒い鋼鉄の砲塔を装着した装甲を身に付けている。

深海棲艦が出現してから七ヶ月を過ぎて確認された鬼クラスの深海棲艦として登録された。

戦闘に対して異常なまでの執着心を持っており、海上に存在するモノ敵味方含めて全てを己の力で叩き潰す。戦闘中に全身赤い血に塗れながら高らかな笑い声を上げて艦娘や深海棲艦を引きちぎり殴り潰すその様から最凶の深海棲艦として恐れられた。

そして何よりも重要な事は「天璇」南方棲戦鬼はかつて叢雲が所属

していた小笠原鎮守府を奇襲し、軍関係者や島風以外の仲間を全員叩き潰した首謀者である事。

それは叢雲にとつて一番憎悪を膨らませ、誰よりも先に復讐を遂げたい唯一の存在だった。

「つ……最悪……!!」

今までにない最悪の状況に叢雲は喉から絞り出した声で答える。

パワーアップした『巨門』^{デラスティア}戦艦棲姫を打倒して有利に立っていたはずがそれは序章に過ぎなかった。

南方棲戦鬼は叢雲と戦艦棲姫との戦闘を影から見待伏せし、終わるまで出るタイミングを見計らいながら様子を窺っていた。

叢雲は警戒していても分からなかった。

地下軍施設内で漂っていた複数の殺意の一つが【天璇】^{メラク}南方棲戦鬼という、よりにもよって戦況を一変させるほどの力を持つ最凶の存在だという事を。戦闘狂であるならば南方棲戦鬼は今すぐにでも叢雲と戦艦棲姫との戦闘に迷わず参加してくるはずだと思っていた。

だがその戦闘狂が刃向かえない誰かに命令されたかのように従順になって待ち伏せしていた事に叢雲は不審に考えた。

『天魔』カラ、才前ヲ潰スヨウニ言ワレタ。出来レバ全力ノ才前ト戦イタカツタンダガ、ソレハモウ……出来ナサソウ、ダナ」

南方棲戦鬼の口から出た『天魔』という聞き慣れない言葉を聞いて叢雲は身体と目をピクリと動かす。過去の戦闘で耳にした事がある叢雲はこの一連の作戦の妨害は『天魔』によるモノだと考え着いた。

「マ、アイツニ指図サレルノハ些^{イササ}カ気ニ障ルガ……才前ト戦エレバソナ事ドウデモイイ。私ハ再ビ会エテ嬉シイゾ……叢雲」

『?』叢雲に再度出会えた事に南方棲戦鬼は両腕を広げて嬉しさを滲み出すような微笑みを続けた。相当叢雲に会いたがっていたようで、その夢が叶った今この瞬間を時間を余すことなく噛み締めている。

叢雲は自身の身体の状態や南方棲戦鬼の戦闘能力を考えて、とてつもないほど不利な状況である事を改めて把握した。

自身の【耐久】が崩壊しかけている現状から考慮すれば仲間の支援

は必須に近い。

しかし長門と木曾、時雨と古鷹は既に南方棲戦鬼の奇襲によって意識を失い倒れている戦闘不能な状態。瑞鶴と不知火は八階の輸入港の制圧と確保、天龍・金剛と摩耶・川内は提督の搜索を担っている。

叢雲は同じ護神厄討艦隊の仲間である『緋』の名を持つ摩耶ならば援護に来れるだろうと僅かに首を動かして見える周囲を探した。

「無駄ダゾ」

「っ……………！ 何が……………よ……………！」

「摩耶ダヨ。アノ摩耶ノ援護ニハ期待シナイ方ガイイ。奴モ今ゴロ接敵シテイル所ダ」

「じゃあ……………通信妨害の件も、『天魔』の仕業……………？」

「アアソウサ。ナンデモ、叢雲ヲ孤立サセル為ラシイ……………ア、コレヲ聞イテ絶望ナンカシテクレルナヨ？ コレカラ楽シクナルンダカラサ」
作戦内容を話していく【天璇】南方棲戦鬼は黒い鋼鉄の拳を二回ほど合わせて火花を散らす。

両側に装着された怪物の口のような砲塔から突き出た三門の砲口を全て叢雲に照準を合わせ、鋼鉄の右掌を前に鋼鉄の左掌を後方へ引いて戦闘態勢に入った。

損害を負っている叢雲に対して慈愛の文字は一切無く、早く戦えるという気持ちで舞い上がっている。

まさに絶体絶命、孤立無援と思える状況で叢雲は左眼を左手で覆いながら俯いて口を開いた。

「……………私……………あの時まで一度も絶望なんてした事はないわ……………！」

自身の頭から落ちていく赤い滴血とボコボコになった瓦礫だらけの床を見つめる叢雲。

小笠原鎮守府が奇襲された時の記憶を思い出しながら語る。

「私はただアンタを追い求めてきた……………！ あの時の屈辱を……………！」

あの時の後悔を……………！ あの時の約束を……………！ その全てを果たす為に！！ 護神厄討艦隊の旗艦まで来たツ！！」

血に染まった左眼を覆っていた左手を震えながらもゆっくりと動

かし、あの時誓った決意を語って左拳を強く握る。

小笠原鎮守府が襲撃され筆舌に尽くし難い屈辱と後悔を受けたあの時から、叢雲は誰よりも強くなつて【天璇^{メラク}】南方棲戦鬼を打ち倒す為に人一倍の訓練と戦闘を重ね続けた。五年間毎日訓練と戦闘を繰り返した血の滲むような努力で、叢雲は護神厄討艦隊旗艦という最強の艦娘にしか与えられない名誉ある地位まで辿り着いた。

「どれだけ殴られようが蹴られようが撃ち込まれようが私は屈しない……！ 運命に操作された絶望が来ようとも！ 私の決意は絶対に折れない!!」

瞳孔を開かせ決死の表情で叢雲は顔を上げて南方棲戦鬼の姿を目に映し、徐々に声を大きく喋りながら握った左拳の隙間から金色の光を放出させていく。そして左拳から溢れるように放出された金色の光を一気に身体全体に纏わせ、南方棲戦鬼に対して不撓不屈の闘志を見せつけた。

「怪我してるからって舐めてかかると痛い目エ見るわよ【天璇^{メラク}】南方棲戦鬼……!! 私の本当の力はここからだ!!!」

叢雲の荒らげた声と同時に両者動き出す。

地面を抉る威力で蹴って急発進急加速。

瞬時に目と鼻の先まで急速接近し、猛攻が始まる。

南方棲戦鬼は黒い鋼鉄の両拳で連続乱打。

叢雲は金色の鎗で弾いて受け流し続けていく。

南方棲戦鬼の連続乱打を弾きながら叢雲は金色の鎗を素早く振り下ろす。

南方棲戦鬼は後方へ引き下がって回避。

すかさず叢雲は砲撃で追い打ちをかける。

金色の軌跡を放つ砲弾を南方棲戦鬼は黒い鋼鉄の装甲を持つ腕で弾いて躲した。

その間に叢雲は南方棲戦鬼の奇襲を受けて意識を失った長門と木曾の身体を抱え、遮蔽物となる瓦礫の山の裏まで避難させた。時雨と古鷹の墜落した位置は南方棲戦鬼から約五メートルの場所にある。

叢雲は昂る感情を抑えながらも冷静に彼女達の身の安全を優先す

る事を考え行動に移していく。瓦礫の山の裏へ意識を失った長門と木曾を座らせ、叢雲は跳躍して瓦礫の山の頂点に立ち南方棲戦鬼の前に姿を現した。

金色の鎧を両手で構え次の攻撃体勢に入る。

「前ト比ベテ凄イジヤナイカ叢雲。アノ時ト全ク違ウ……！ 成長シタンダナ……才前モ」

「勝手に親目線になって感傷に浸るのは不快極まりないから止めてくれないかしら。アンタに褒められたって嬉しくないのよ……！」

南方棲戦鬼は小笠原鎮守府奇襲時に接敵した叢雲との戦闘を思い出して、今の叢雲が過去よりも遥かに戦闘能力が向上している事に歓楽する。

叢雲は南方棲戦鬼の戦闘に対する異常性を見て身体の中から湧き上がる不快感を感じ、苛立ちを募らせた言葉を送った。

「ソレハ傷ツクナア、人ガ純粹ニ褒メテルノニナツツ!!」

南方棲戦鬼は黒い鋼鉄の右腕から砲口全てを叢雲に向けて砲撃。

砲弾は紅黒い破壊光線となって叢雲へ一直線に穿つ。

叢雲は金色の鎧を薙ぐように振って砲弾の側面を殴った。

砲弾の方向を鎧でズラして背後の壁へ着弾させる。

叢雲の横で紅黒い一閃が輝き、背後の壁が大爆発。

背後から巨大な土煙が叢雲を包んでいく。

土煙に包まれながら叢雲は金色の鎧を持つ両手を震わせ、俯いて嘆くように喋った。

「くそっ……！ ついカツとなって戦っちゃったけど……これはあくまでも時間稼ぎ、時間稼ぎなの……！ 作戦に私怨を持ち込んだじゃいけない……！ しつかりしないと……！」

提督救出作戦にどんな敵が現れようと私情を持ち込んではいけないと叢雲は自分に言い聞かせていた。

例えば目の前の敵が凄惨な過去の元凶である憎き七壊星の【天璇】^{メラク}南方棲戦鬼だとしても、作戦の支障になるのであれば無理矢理にでも割り切らなければいけない。日本海軍の兵器として、深海棲艦に対抗で

きる艦娘として、最強の称号を持つ者として何一つ弱みを見せる事は決してあつてはならないと■大将に教え込まれた。

その教えを守るのではなく常に意識して叢雲は戦っていた。

だが――、

「っ……だけど……！ どうしても倒したい奴が目の前にいる……！

もう手や足が疼いて止まらない……！ 気持ちも抑えきれなくなってきた……！！ ぐっ……！ ううっ……！！ うううっ……！！」

叢雲は震える両手で強く握った金色の鎗の柄を額に寄せ、自身の隠れた甘さに打ちひしがれながら葛藤して喚き声を上げた。

今の叢雲にその教えを捨てるのはとても容易いものだった。

過去の自分の栄光や仲間、恋人など全てを奪った元凶が五年間の長い年月を経て、自分の目の前に憎たらしく笑みを浮かべて現れた。

今まで追い求めていた存在がこうして邂逅を果たしているのであれば、これはまたとない千載一遇の機会だ。

今すぐにも奴を倒したい、その見下すかのような歪んだ笑みを消してやりたいという気持ちでいっぱいだった。提督の救出作戦や作戦に参加している傷ついた仲間など忘れて全身全霊で南方棲戦鬼を倒したいと思ってしまった。

「うううっ……！！ つ……！！ ハア……ハア……っ……！！ でも……！！ でも!!!」

喚き嘆く叢雲はふと背後にいる遮蔽物に避難させた長門と木曾の姿を見て、葛藤して私情に持ち込んでいた自分を無理矢理押し殺した。できるだけ大きく声を出して私情を忘れるように何回も同じ言葉を発していく。

今までの想いを取り敢えず心の奥底に閉じ込め、叢雲は俯いた顔を上げて金色の鎗を振り回して戦闘体勢を組んだ。

そして土煙の先にいる南方棲戦鬼を鋭く睨む。

「今は……！ 今は仲間の回収と時間稼ぎが優先……！ 頭を冷静にして状況を把握しなきゃ……！」

やがて土煙が晴れると前方には叢雲の姿を見て歓を尽くし、その場から一步も動かず佇む南方棲戦鬼が見えた。

どうやら叢雲が土煙の中から奇襲を仕掛けると思って待ち構えていたのだろう。

叢雲は金色の鎗を背後へ引いて殴り構える態勢にして出方を窺う。うかが
今の自分出来る事は意識の無い時雨と古鷹の回収、そして提督の搜索から目を逸らす為と搜索時間の延長の為に囷として七壊星と戦う事。

叢雲が掲げているのは提督の救出成功と全員が無事帰還するといパーフエクトゲーム
う完全勝利。護神厄討艦隊旗艦として仲間は絶対に失わせやしない、これ以上犠牲になる仲間を増やさないという決意の元で叢雲は金色の鎗を強く握る。

「任せて……！ 私も頑張るから……！ だからせめて……摩耶達の状況と提督の搜索状況だけでも……知れば……！」

遡ること数分前。

摩耶と川内は集積地棲姫の部屋から応急処置済みの提督を担いで八階の輸入港に向かって走っていた。瀕死の提督を見つけてから既に一時間以上が経過し、応急処置をしてもらった集積地棲姫から脱出していい頃合いだと提督を返してもらっていた。

提督の救出に成功して作戦が成功しつつある状況の中、叢雲が『巨門』^{テラスティイア}戦艦棲姫を撃破。

希望の光が見えたその時、摩耶は突然走っていた足を止める。

「何でお前がここにいるんだよ」

摩耶が相對した人物に対して顔を^{ひそ}顰め、苛つきを言葉に乗せて名前を呼んだ。

「^{メグレス}天権」深海鶴棲姫……!」

摩耶と川内の行く道を塞ぐように突然前方から現れたのは^{メグレス}「天権」深海鶴棲姫。

名前を呼ばれた摩耶と川内に対して振り向きもせず、最下層で戦艦棲姫を撃破した叢雲の状況を眺めていた。

「……摩耶にちよつとした話がしたくて会うのを待っていた、と言え
ば信じてくれるかしら」

「信じる訳無エだろ、嘘つき野郎が……またあたし達を騙せるとでも
思ってるのか?」

深海鶴棲姫は摩耶との遭遇と会話を望んで七階の螺旋階段前に待ち伏せしていた。

生気のない表情で振り向きもせず返答する深海鶴棲姫を見て信じられるはずがないと摩耶は過去の因縁を仄めかして訝^{いぶか}しむ。底知れない不穏な気配を醸し出す深海鶴棲姫は身体を動かさず、横目で摩耶と川内の方へ視界を移した。

「酷い言い草ね。まあ別に何言われようと気にしないけど、取り敢えず話だけでも聞いてくれないかな」

「そいつは出来ない相談だ。あたし達は暇なお前と違って急いでる、今お前と話なんてしてられないんだよ！ さっさとあたし達の前から消えてくれ」

「じゃあ私もそれは出来ない相談だな。この状況は必ず成すべき事の一つ、絶対に避ける事は許さない」

摩耶の要求に対して一步も食い下がらない深海鶴棲姫は半ば強制的にでも話をしようと脅迫じみた言動を見せる。

その瞬間、地下軍事施設内が大きく揺れ始め、凄まじい轟音が鳴り響いた。

「何だ……!?! 今の音は!?!」

「ぐっ……摩耶！ 下！ 下を見て!!」

提督を抱えていた川内がバランスを崩して割れた窓に寄りかかり、最下層の状況が見えた途端に摩耶へ下を見るように促す。

そこにいたのは――、

「【天璇】南方棲戦鬼……だと!?!」

「やっとなれたか」

殺戮機姫と恐れられた戦闘狂の七壊星【天璇】南方棲戦鬼だった。

紅黒い稲妻や十字光を輝かせながら黒い鋼鉄の艦装を何度も擦れ合わせ、火花を散らし白く細い躯体で動かす様はまさに絶望そのものの。

『巨門』戦艦棲姫の戦闘によって損害を受けていた叢雲にとって厳しい相手である事を摩耶は悟った。

南方棲戦鬼の戦闘能力は他の深海棲艦や七壊星よりも遥かに高く、陸上戦闘や砲雷撃戦などのありとあらゆる戦況に対して柔軟に対応出来る特殊な変形艦装を持ち合わせている。

更に南方棲戦鬼は護神厄討艦隊の艦娘全員の戦闘形態を記憶しており、それぞれの艦娘に対して一番効果のある戦闘方法を編み出している為、言わば対護神厄討艦隊の深海棲艦と警戒されていた。

「まずい……援護にいかないと――」「本当にいいのか？ 行つて」

摩耶が叢雲の援護へ向かおうと窓枠に身を乗り出したその時、深海鶴棲姫が止めるように声を掛ける。

その声を聞いて摩耶はハッと我に返って深海鶴棲姫の方へ顔を振り向いた。

深海鶴棲姫は初めて摩耶達の方へ身体を向けて光の無い目で合わせ、感情のこもらない声で思いがけない脅迫を仕掛ける。

「アナタが叢雲の援護に行けば取り残された川内とそこで死にかけている提督は私に殺されるかもしれない。逆にアナタがその川内と提督を逃がして叢雲の援護に行つたとしても、私が川内と提督を追い掛けて殺すかもしれない。一人の仲間の為に他の仲間を見捨てたいと言ふのなら、援護に行つても構わないけど」

「お前……！ まさか……！！」

「何を悟つたのかは知らないけど、話を聞くつもりはなつた？」

川内の前に出て守るように腕を広げた摩耶はその脅迫を聞いて深海鶴棲姫の本当の目的を知つた事により顔を青ざめさせる。

「あたし達の前に現れた理由は叢雲を孤立させる為……深海^{お前}棲^ら艦にとつて一番邪魔な叢雲を潰す為か……！ そしてお前も私を引きつける為に現れたんだな!!? そうだろ!!」

「半分正解で半分不正解。私は既に本来の目的は終えているし、確かに『?』^{オウゲン}叢雲は計画の中で一番妨げとなるからここで潰しておく必要がある上で【天璇】^{メラク}南方棲戦鬼を用意しただけ。摩耶との話については別よ、今の事とは関係無い全く別の話……孤立させる為でもあるけど目的と違う」

静かに無表情を続ける深海鶴棲姫は焦りを見せる摩耶に対し、落ちて着いた様子で答えていく。

摩耶と話がしたい事に一心で今の状況がこれからどうなろうと頑なにその意思を譲らず押し通してきた。

深海鶴棲姫はゆっくりと一歩ずつ前に進み、後退する摩耶と川内に歩み寄っていく。

足底全体がフローリングの床を踏む度に心臓を直に撫でられたようなプレッシャーが身体の芯の奥まで染み渡つた。

摩耶の背後で提督を背負っていた川内はこの深海鶴棲姫という存在が他の深海棲艦よりも逸脱した存在だと言ふ事に自身の身体が先

に気付き、計り知れない力とプレッシャーの前にたじろいでしまいうだった。

「そーいやアナタたちは知らないだろうけど、アナタたちの仲間がここを攻めている最中で日本は大パニックになっているよ」

「どういう事だ……！」

「この塔の起動の為にどうやら日本やマーシャル諸島の各主要湾に私たち七壊星を展開させている。仙台湾だったら「玉衝」^{アリオト}戦艦水鬼、石狩湾だったら「禄存」^{マグニティス}港湾棲姫、東京湾だったら「天枢」^{ドゥーベ}中枢棲姫っていう風に」

「何だどつ……!?!」

深海鶴棲姫は他人事のように七壊星が日本の主要湾やマーシャル諸島海域へ出撃している事を伝える。

小笠原諸島父島の地下軍事施設に潜入している摩耶たちは当然この事を知らない。

一人で一つの国を潰す事が出来る七壊星が日本の各湾に出撃しているという絶望的な戦況に摩耶たちは驚愕の声を上げた。

「そ、そんな……!! 日本が……！」

「まあ安心するといい。別に国を滅ぼす程の力が出さない、いわゆる陽動みたいなものよ。アレの計画が漏れていたのか知らないけど何故か出撃を制限された君達の仲間が戦闘してるから、わざわざ君達が心配する必要は無い」

自分達が地下軍事施設に潜入している間に日本が危険な状態に陥っている事に動揺を隠せず不安がる川内を見て深海鶴棲姫は付け加えるように説明していく。

アレの計画と言って地下軍事施設の中心に聳え立つ塔『ヘカントケイル』を横目で見ていた。

「……さて、そろそろ話がしたいんだけど、そんなに引き下がられても困る。来てくれないなら私から近付くよ……！」

ゆっくりと近付く深海鶴棲姫から距離を取ろうと摩耶と川内は一歩ずつ後退る。

深海鶴棲姫は引き下がる摩耶たちな痺れを切らして川内の眼を見

た。

川内が瞬きの為に瞼を閉じた瞬間――、

「――えっ」

瞬きし終えたその刹那には深海鶴棲姫の右掌が川内の顔全体を覆っていた。

僅かに反応できた川内にはその一部始終が全て遅く見えていた。映画で見たスローモーションのように身体や深海鶴棲姫の姿、周辺の状況が鈍く動いていた。

思わず川内は掌の指の隙間から深海鶴棲姫の生気のない眼を見る。眼は澄んだ橙色をしているはずが、その眼の奥にはドス黒い憎悪と殺意を込めて研ぎ澄ませた一閃の光が薄らに輝いていた。

「ツッ!!!」

その刹那、深海鶴棲姫の右掌を無理やり摩耶が素早く左手で受け止めて握る。

川内は後方にバランスを崩すも背負っている提督に負担が掛からないようにうつ伏せに倒れた。

深海鶴棲姫は残った左手で拳を作り、摩耶へ殴打を仕掛ける。

しかしそれよりも先に摩耶が深海鶴棲の左頬を強く叩き殴った。

そして殴られて怯む深海鶴棲姫の腹へ前蹴りで蹴り飛ばす。

蹴り飛ばされた深海鶴棲姫は空中で体勢を整えて綺麗に着地した。

「反応するのか……流石あの人の血をコントロールしているだけあるな」

先程の摩耶の攻撃が何事も無かったかのように無傷だった深海鶴棲姫は平然とした表情で立ち上がる。摩耶に蹴られた腹部の埃を手で払い除け、それぞれの腕の関節を鳴らして摩耶達を見た。

摩耶は深海鶴棲姫の攻撃を受け止めた拳を開いては握って感覚を確かめ、こちらに歩み寄る深海鶴棲姫を警戒しつつ背後にいる川内へ声を掛けた。

「……川内、立てるか」

「う、うん……大丈夫……」

「良かった。なら今すぐ立ってこれから言う事を聞いて提督と逃げて

くれ。遠回りにはなるけどさつき通った道から逆戻りして真反対の螺旋階段で八階に登れば輸入港まで辿り着ける。出来るか？」

「出来るけど……摩耶は!？」

「あたしはコイツと一回ケリをつけてから向かう。心配しなくていい、あたしも叢雲と同じ艦隊の一人……コイツらと戦うのは慣れている」

摩耶は提督を背負った川内が無事に地下軍事施設内から脱出できるように深海鶴棲姫の引き付ける役になる事を考えた。『?』^{オウゲン}叢雲と同じ護神厄討艦隊に所属する『緋』^{ヒグレ}摩耶であれば七壊星^{メグレックス}【天権】深海鶴棲姫に対応できる戦闘能力がある。

しかし川内は前に起きた提督の誘拐を目的とした鹿島と集積地棲姫の襲撃に摩耶が関わっていた件で摩耶に対して一抹の不安を抱いていた。

もしかしたらまた裏で何か隠しているかもしれないという摩耶の秘密主義に近い性格を完全に信じる事は今の川内にとって難しいものだった。

「……っ……分かった……今度こそ信じるよ……! だから、無理しないで……!」

「ああ任せろ。だから川内……提督を任せろ」

「うん……!」

悩みに悩んだ末に川内は摩耶を信じて今まで通ってきた道に戻って走り駆ける。

摩耶を一人にして迫り来る深海鶴棲姫の脅威から逃げる為に後ろを振り返らず全力で走った。

川内は考えた。

摩耶の原動力の全ては提督にある。

ならば提督を背負う自分を騙して危険を冒すような真似はしないだろうと摩耶の心を信じた。

摩耶の過去と真実を数少なく知っている川内はそう断言できる確証があったからだ。

川内は喉を枯らして足の筋肉が千切れるまで走るのを止めない。

叢雲や摩耶が身を呈して傷付いてまで戦っている最中、提督の救出と脱出という作戦の成功を担っているのは自分なんだと自覚して川内は足を精一杯動かした。

「さて……お前の望み通りに動いてやったんだ、悪いけど時間無いから手短に済ませるぞ。なに企んでるのか知らないが、痛い目を見る覚悟は出来てんだろうな」

「様子が……変わった……」

川内の走る後ろ姿が見えなくなるまで見届けた摩耶は深海鶴棲姫と一対一になった瞬間、身体に紅い光を纏わせて深海棲艦化した紅い右眼から深海鶴棲姫を鋭く睨む。

普段の様子から豹変したその姿を見て深海鶴棲姫はいつもより警戒し、攻撃しようと前方に伸ばしていた右手を下ろした。

場の空気が鉄のように重くなって肩に押し掛けるような感覚が深海鶴棲姫に襲う。

摩耶の紅い右眼から放出される紅い十字光は身体の奥底に刻まれた永遠の従属という縛りを思い出して身体が僅かに痺れていた。

「全て上手くいくと思うなよ、深海鶴棲姫……言っておくが叢雲は簡単にヤラれるような奴タマじゃない。あたしが見るに叢雲は……唯一中枢棲姫に対抗できる艦娘だ、舐めてかかれば足を取られるのは深海棲艦側そつちだぞ」

「……ならば私も一つ、摩耶が気になる事でも言っておこう」

臨戦態勢の摩耶の警告を受けて深海鶴棲姫は自身も同乗して言葉を返し、摩耶の眼を強く見た。

摩耶は深海鶴棲姫の姿を見て僅かに身体を動かす。

摩耶が瞬きした瞬間、目の前には右拳で殴り構えた深海鶴棲姫。

それは瞬間移動、対応できる者は誰一人いな――

「ッ!!」

目の前に現れても摩耶は左足を前に出して強く床を踏み、右拳を握る。

右眼から紅い光の光線を出しながら深海鶴棲姫の眼を睨み返した。予想以上の反応に深海鶴棲姫は目を見張るも冷静に話を続ける。

「黒■は——」

互いの拳がすれ違って頬に触れるまで、あと数センチメートル。それぞれ睨み付け、深海鶴棲姫は口を開く。

「——私だよ」

その後、重く鈍い音が重なって響いた。

——大本営

「——もしこの世界の他に、別の世界が存在しているとしたら……君は信じれるかい？」

元帥ほ部屋にて窓の景色を眺めながら一人の老人が若き軍人に対して異質な質問を投げ掛ける。若き軍人の■大佐は拳銃を向けながらも当然■元帥の質問を理解できず質問を投げ返した。

「どういう事でしょうか。私の解釈ではこの世界とは別次元の世界と呼ばれた並行世界、つまりはパラレルワールドがあると仰っているように聞こえましたか」

「そう、それさ。それがもし本当に実在しているとしたら君は信じれるかい」

並行世界やパラレルワールドと言った普段から聞き慣れない言葉を耳にして大佐は沈黙を続けて深く考えた。

パラレルワールドとは現実世界と並行して存在する決して干渉する事のない別世界。

現実世界では平凡な会社員の主人公が別世界では大企業の執行役員になっている等と相互の世界がそれぞれ違って存在している可能性があるという考え方である。

SFの映画やアニメ、漫画でしか有り得ないような空想上の設定が大佐が生きている世界で起きている事に若干の恐怖を感じた。

「……俄には信じ難いのですが、もしその世界を立証できる確かな証拠さえ確認できれば……私は信じます」

「そうか」

脂汗を流す大佐の返答に元帥は淡白な返事をする。

その返答に満足したのか元帥は大きく息を吸って目を瞑り、慎重に全ての過去について語った。

「最初は一人の男と女が突然現れた時からだった」

それは今から約三十年前の話だった。

現代と呼ばれたこの世界はかつて平和が保たれていた。

各地で起きた無数の戦いや過去に起きた二度の大戦を乗り越え、国と国同士が協力し合い国際問題や環境問題について考えていく平和的な世界。

その世界で突然、決して起きる事が無い異次元の現象が日本で始まった。

「日本国の神奈川県横須賀市楠ヶ浦町横須賀海軍施設の敷地内の山で突然轟音が発生、近くにいた関係者が現場を確認した地点で国籍不明の男性と女性が意識不明の状態で見えられた」

救助されて手当を受けた男性はその日から一週間後に状態が回復、意識を取り戻し自力で立てる程まで回復した。

女性については何故か既に状態や体調共に回復していて意識も取り戻していたので男性の手当てを手伝っていたという。

何故海軍施設の敷地内に突然現れて倒れていたのか、二人の素性について調査しても日本国籍が不明だった為、直接二人へ話を聞く事にした。

「その男はこう言ったという……『時が止まる退屈な世界から逃げてきた』……とな」

彼等は別の世界から来た、と訳の分からない事をひたすら声に出して言っていた。

当時の調査班は当然その内容を信じられず、現れた時間帯は嵐が吹

き荒れていた事から最初は落雷に打たれたショックによる記憶喪失と診断していた。

しかしもう一人の女性の身体が明らかに人間とは掛け離れている身体をしており、その事実が判明したのを皮切りに男性の戯言が現実味を帯びていくようになった。

「もう一人の女性は普通の人間の身体とは構造や組織など身体を構成するモノ全てが違っていた。更には海上を浮遊する装置と過去の戦艦を模倣した艤装……」

「それが最初の艦娘……!」

「そうだ」

その存在は正に異質。

見た目は華奢で可愛い女の子が全身に艤装を身に纏まとって海上を颯爽さつそうと航行して砲撃し、数十メートルの壁を飛び越えてコンクリートの壁を簡単に破壊してしまうほどの超人的な力を持っていた。

その力はまるでゲームや漫画から現代から飛び込んできたような逸脱した力で、世界の常識を根本から覆ってしまうほど影響を及ぼしかねないと有識者達は口を揃えてそう言った。

更に男は艦娘を開発できる術を知っていると告げ、艦娘の開発技術を応用すれば様々な問題を解決に導く事ができると誘い囁く。

現代では実現不可能な技術が宝の山のように溢れており、日本政府と米政府はこの情報を秘匿する事に決定。

そして数々の協議の末、米軍と協力して艦娘の開発計画が始まった。

「まずは男……いや、●の所持品を全て返却し、●を主導とした仮称“艦娘”と呼ばれた海上兵器の開発計画を始動。今から十二年前だったか、艦娘と深海棲艦が表向きに現れたのは……開発計画はそれよりも前の十八年前、今から三十年前に始まった計画になる」

「三十年前も前から……!?!」

当時の開発計画には元帥や元帥の娘、黒■もプロジェクトメンバーとして参加していた。

●の所持品から繰り出される解析不能に近い超越技術を教わり

ながら開発に手を回し、艦娘を開発する上で必要な課題を年月を掛けて攻略。

最初はエネルギー核と呼ばれる艦娘の根本的な力となるモノを開発し、エネルギー核を埋め込む事で艦娘の開発が出来るという。そこでアンドロイド又は人型機体を使用しての開発実験を開始したものの全て失敗に終わり、計画に難航の兆しが見えていた。

「そこで黒■がアンドロイドではなく生身の人間の方が成功率は上がるはずだと女性死刑囚を複数人連れて実験体として連れてきており、計画メンバーの有無を聞かずに実験を何度も行った。言い訳に聞こえるが私は反対だった、死刑囚と言えど人権は保障されている。いくら計画の為とは言え倫理に欠けている行為だと訴えたが、黒■や●☒、その他のメンバーは耳も傾けず実験を続けていった」

しかし艦娘の開発実験はそう簡単に上手く行くモノでは無かった。アンドロイドではなく生身の人間で実験を行っても尽く失敗。実験体となった人間は酷く身体が漂白化して禍々しい黒い臙装を身に付けたまま死亡しており、要らぬ失敗作として処分されていた。

女性死刑囚にも限りがあると貴重な実験体を無駄に費やすばかりで計画の進行が一切進まない中、ある事件が起きる。

「艦娘の開発装置の調整をやっていた私の娘が誤って装置の中に入ってしまった、それに合わせて動いたかのように装置が起動。私は何とか助けようと思いとあらゆる手段を使って装置を止めようとしたが、黒■に押さえられ止める事が出来なかった」

「え……？ いや、まさか……！」

当時は中尉だった元帥は装置の中で悲鳴を上げて苦しむ自身の娘を何も出来ないまま見つめる事しか出来なかった。

何度止めると叫んでも計画メンバーは聞く耳を持たず、自身の娘が実験体となって作り替えられていく様を嬉々揚々として眺めていた。「そして実験は終了。装置の中を開けると大量の白煙と共に赤い液体が溢れ出し、開発装置が置かれた部屋一帯を赤い液体で水浸しにさせた。実験はいつも通り失敗だと思ったその矢先、装置の中から白い手が伸びているのが見えた」

「っ……い！」

その時、その場にいた全員は●☒^{ぐろ}を除いて驚きのあまりに言葉を失った。

開発装置の中からゆっくりと現れたのは全身白い肌の人間と禍々しい怪物の口のような艷装。

長い白髪に紅い宝石のように輝く目、所々片腕や脇腹などに黒くひび割れた痕が残っており、その痕から紅い光が放出されていた。

「そう……現れたのは私の娘……いや……今は深海棲艦を司る存在

……【天枢^{ドゥーレス}】中枢棲姫だ」

198. 希望掻き消す殺意のメタモルフオーゼ

——過去、小笠原鎮守府奇襲時。

建物を灼き尽くす紅い炎。

崩れ落ちゆく壁の煉瓦。

瓦礫の隙間から垂れる赤い液体。

資材倉庫が爆発し、周辺の建物や木々に火を纏った瓦礫が降り注ぐ。

炎は周辺の木々にまで燃え盛り、留まる事を知らない。

曇り空には森のように黒煙が幾つも立ち上る^{のぼ}。

火の粉が舞い、屋根が焼け落ち、血溜まりに炎の光が煌めいて反射する。

汗が顎から一滴、下へ落ちていった。

身を焦がす熱さが肌に染み渡り、喉の奥を火の粉が突き刺す。

呼吸は荒れ、煤に塗れたボロボロの身体は悲鳴を上げていた。

『コノ私デモ渡り会エルノカ……天才ダナ、叢雲……！』

槍を構えて臨戦態勢に入る叢雲を一人の深海棲艦が物珍しい目で此方を見下ろしている。

叢雲の身長を越す逞しく細い躯体と怪物の口のような黒い臙装。溢れ出すエネルギーが紅い炎となって具現化し、身体の至る所に小さく現れて燃えていた。

白く透き通った肌に長い白髪のアインテール、女性でありながら堂々と胸を晒している。

『舐めんじやないわよ……！ 殺戮機姫』

荒れた呼吸の中で乾いた喉を唾液で潤し、精一杯振り絞った声で威

嚇する。頭から流れ出た血で顔全体が赤く染まり、右前腕や左腕の付け根は痛々しい濃い青紫色の痣。

長年戦ってきた叢雲からすればどの深海棲艦よりも凶暴を体現したかのような強さだった。

戦っているだけで自分の事で精一杯、他の仲間や民間人の事を気にしている暇は無い。

初めて叢雲の中で敗北という字が見えてきた相手だった。

『イイゾ、モットダ……叢雲。モット私ヲ楽シマセロツツ!!』

殺戮機姫こと南方棲戦姫は両腕の黒い艦装を複雑に変形させ、ガシヤンガシヤンという機械音と共に急突進。

黒い鉤爪の拳の隙間から放たれる紅い光の鉄拳で叢雲に殴り掛かった。

「ツ!!」

過去から現在へ変わって今。

南方棲戦鬼の鉄拳を叢雲は跳躍して回避。

跳躍で空中にいる叢雲は金色の鎗を振り下ろした。

南方棲戦鬼は空いた片腕の鉄拳で鎗を弾き飛ばし、再度右の鉄拳で殴打。

叢雲は鎗の柄で防御、衝撃で殴り飛ばされた。

小笠原諸島地下軍事施設の最下層にて叢雲と【天璇】^{メラク}南方棲戦鬼の戦闘は熾烈を極めていた。

最下層の中心に地上を超えた空まで聳え立つ三本の黒い塔「ヘカントケイル」の周辺でぶつかり合う度に爆音と衝撃波が広がる。埃一つ無かったタイル床は跡形もなく崩れており、隆起した地面や削れた瓦礫で埋め尽くされていた。

三本の黒い塔「ヘカントケイル」の中心から放出される紅い光線によって最下層全体は紅く照らされている。

南方棲戦鬼は笑い声をあげながら連続砲撃。拳を前に突き出して殴るように砲撃していく。叢雲は走り駆けながら放たれた砲弾を躲し、鎗で弾き飛ばす。紅黒い軌跡を放つ砲弾を次々と躲して行く叢雲。南方棲戦鬼は両腕艦装の砲塔だけでなく腰艦装の砲塔も展開。軽機関銃のような凄まじい連射速度で砲撃した。今まで一定間隔で向かってきた砲弾が束となって突如一斉に叢雲の目の前へ。

叢雲は金色に目を輝かせ鎗を握り締める。

右足を前に出して瓦礫の破片が舞うほど強く踏み、そして――、「ツツツ!!」

金色の鎗で迫り来る砲弾の数々を瞬速で斬り刻み、弾き飛ばす。火花が散り、金色の光が煌めく。

全ての砲弾を捌き切った直後に急発進。

瞬く間もなく叢雲の突進による鎗の突きが南方棲戦鬼を襲う。

南方棲戦鬼の背後でドーナツ状の衝撃波が重なり、瓦礫が舞った。しかし鎗の刃先は右腕の黒い鋼鉄の装甲。

突きの深さはかなり浅く、損傷はあまり見られない。

南方棲戦鬼は黒い鋼鉄の左拳で叢雲に殴打。

叢雲は直ぐに金色の鎗を抜いて南方棲戦鬼の殴打を弾いて往なす。

次に黒い鋼鉄の右拳で叢雲に殴り掛かった。

弾いて往なした直後、軽く跳躍して回避する。

左足を前に突き出して南方棲戦鬼の右頬を蹴り飛ばし、更に砲撃。

爆煙で互いの姿が見えなくなる。

その隙に叢雲は南方棲戦鬼の近くで倒れていた古鷹と時雨を回収しようとして走り出して手を伸ばした。

が、南方棲戦鬼は灰黒い爆煙の隙間から紅い眼光を滾らせ即座に叢雲の位置を掴み取る。

叢雲の背後を取った南方棲戦鬼は灰黒い爆煙を掻き分けて突進。

黒い鋼鉄の鉤爪を持つ左手で捕まえようと左腕ごと薙ぎ払う。

反応に遅れた叢雲は無理やり高く跳躍して回避。

空中で不安定な体勢のまま地面に不時着する。

何度か転倒して地面を引き摺りながらも体勢を整えて立ち上がる。鎗を地面に突き刺して身体を支え、気付けば回収済みの長門と木曾の場所に戻っていた。

「そう簡単に……上手くは行かないか……！」

軽い息切れを起こして決死な表情を崩せない叢雲は鉤爪で金属音を鳴らす南方棲戦鬼から視線を外さなかった。

七壊星きつての戦闘狂である【天璇】^{メラク}南方棲戦鬼の実力は護神厄討艦隊の艦娘であろうと厳しい戦いを強いられる。それは護神厄討艦隊旗艦の称号を得た叢雲といえど例外ではなく、『巨門』^{テラスティア}戦艦棲姫との戦闘が終わった直後の身体の怪我や艦装の損害は南方棲戦鬼の連戦に深く影響を及ぼしていた。

頭部損傷による出血と血が滲んで視界が不良な左目、筋肉や骨に残った疲労が蓄積して限界を迎えている。艦装の砲身は一部折れ曲がって黒煙をあげ、エネルギー効率は徐々に低下していく状態。

南方棲戦鬼と戦うには最悪ともいえる身体の状態だった。

「ソクニ仲間ガ大切カ叢雲。ソリヤソウダロウナア、モウ二度ト失ウ訳ニハイカナイモンナア……！ 失イタクナイヨナア……！！」

黒い怪物の口のような艦装に乗り込み動いている南方棲戦鬼は肩を何度も浮かして薄ら笑いを両手の黒い装甲で隠す。

叢雲の見離せない性格や暗い事情を事細かに五年前から知っている南方棲戦鬼はそれを利用して戦闘で優位に立ち、叢雲の行動が制限されている事に対して存分に嘲笑った。

「今度モ誰カニ任セテ逃ゲル、ナクンテ馬鹿ナ真似ハシナイデクレルナヨ叢雲……！ コレカラ楽シクナルンダカラナア……！ マタアノ時ノヨウニ、目ノ前デ叩キ潰シテヤルヨツ！！ 今度ハ叢雲ノ大切ナ仲間ヲナアア！！」

「ツツ！！」

南方棲戦鬼に煽られ続けて遂に頭にきた叢雲は目の周辺に血管を浮き出して限界にまで瞳孔を開かせた。

「フヒヒツ……ドウヤツテオ前ヲ焚キ付ケラレルカ分カツタンダ。コ

ウスレバ良インダ——」

南方棲戦鬼が右手の艦装の砲口を時雨に向けた途端、何か衝突して照準がズレた。

衝突した勢いで右腕全体が後方へ持っていられる。

その間僅か一秒、右手の艦装に重みを感じた南方棲戦鬼は思わず振り向く。

そこには右手の艦装の上に乗る叢雲がいた。

「ッ!? 早ッ——」

気付いた瞬間には叢雲の左脚の蹴りが南方棲戦鬼の右頬を歪ませていた。

直後に南方棲戦鬼は蹴り飛ばされ、地面に何度も転倒する。

南方棲戦鬼は側転して跳躍し、空中で体勢を整え着地。

倒れている古鷹と時雨の場所を確認した。

「イナイ……!?」

残っていたのは土埃と砂煙の過ぎ去っていく跡と金光の残穢。

そこに古鷹と時雨、叢雲の姿は全く見えなかった。

周辺を見渡しても姿は見当たらない。

「消エタ……!? 叢雲ハ何処——」

右腕の黒い艦装の装甲の陰から金色の一閃が南方棲戦鬼の胸を穿つ。

か、に思えたが南方棲戦鬼は左手で鎗の穂を掴んで防いでいた。

鎗を持つ好敵手の顔は殺意に溢れた鬼の形相をしている。

「ッ……!!」

「ヤルジャンカー……!! ホウラ!!」

戦闘に専念する叢雲の姿を見て南方棲戦鬼はニヤリと口角を上げる。

その直後に南方棲戦鬼は掴んだ鎗の穂を引っ張った。

鎗を持つ叢雲ごと内側へ引き寄せ、空いた右拳で殴打を仕掛ける。

それよりも先に叢雲は引っ張られながら南方棲戦鬼の艦装を足場にして跳躍。

南方棲戦鬼の顎に渾身の膝蹴りを食らわせた。

南方棲戦鬼は大きく怯み、後方へ仰け反る。

「くたばれッッ!!」

左拳を強く握り、叢雲は南方棲戦鬼の右頬を殴打。

そのまま力を入れて遠くの壁の奥まで一気に殴り飛ばした。

南方棲戦鬼は壁に衝突し、大きな穴が開く。

粉塵と土煙が舞って小さな瓦礫が天井から零れ落ちた。

それを確認した叢雲は回収した長門たちの方へ跳躍して向かう。

「長門、起きてる?」

「すまない……! ついさつき……戻った、所だ……」

「なら良かった。その様子を見た限りじゃ立てそうね、時間が無いから端的に言うわよ」

叢雲は地面に横たわる長門達の隣に膝を着いた姿勢で突き刺さった鎗を支え、壁の穴の奥まで南方棲戦鬼の方向を見て長門へ話し掛けた。

八階のコントロールルームで南方棲戦鬼の奇襲に遭い、長門達は強い衝撃で意識を失っていたが叢雲が戦闘中の所で長門だけ意識を取り戻していた。

南方棲戦鬼の奇襲により長門は息頭部から血を流して胴体や腕へ斑に酷い焼け焦げた痕があり、若干身体は小刻みに震えている。

「木曾と古鷹、時雨を連れてここから脱出しなさい。作戦の失敗は考えないで、貴女達の命が最優先よ」

「だが、提督が……」

「提督については恐らく既に摩耶たちが保護してる可能性があるわ。さつき上で弱い光が一つ見えた、今はそれに賭けて」

叢雲は作戦変更を話しながら長門の方を一切見ずに殴り飛ばした南方棲戦鬼の方を見逃さない。

作戦の状況を鑑みた叢雲は長門たちに地下軍事施設からの脱出を命令した。提督救出作戦が突如現れた『天魔』によって全て掌握されていた事実と【天璇^{メラク}】南方棲戦鬼というトラブル予想の範疇を超えた危険極まりない存在の接敵。

作戦の障害があまりにも危険過ぎる事から叢雲は脱出を最優先す

る方向に考えた。

提督については叢雲自身の索敵感知内で二人の艦娘の反応の他に小さな反応が見えている。提督は限らなくとも可能性はゼロではないという事を長門達に伝えた。

「私が南方棲戦鬼を惹き付けるから早く脱出して。すぐに私もタイミングを見てここを抜ける、私の事は気にせず早く脱出なさい……！」

「へエ、逃ゲルノカア」

「っ……！」

声の方向へ振り向く長門と金色の鎗を構えて戦闘態勢にはいる叢雲。

壁の奥を突き抜けた照明の無い暗い部屋から紅い円球の光が際どくかんじよ緩徐に光る。

紅い円球の光を中心にエネルギーを具現化した紅白い炎が左右にゆらゆらと動いて燃え輝いた。

まるで歩いているかのように左右に揺れ、コンクリートの床を穿つ音が一つずつ聞こえてくる。

「構ワナイゾ逃ゲテモ。元々貧弱ナ才前等ニ興味ハ無イカラナ、死ニタクナカツタラ逃ゲタ方ガ身ノ為ダ」

「アレが……【天璇】南方棲戦鬼……！」

「ッ……!! いや、違うわ……！」

壁の奥で輝く紅い光を見て叢雲は険しい表情で歯を食いしばった。

それは【天璇】南方棲戦鬼が、殺戮機姫メラクッという異名を持つ意味を示したのがハッキリと分かる姿だった。とてつもない凶暴性と残酷無比な性格を表したその姿は七壊星に相応しく、本当の意味を持って現れる。

「ソレニシテモ叢雲。今ノハ凄カツタゾ？ 前ノ私ヤ変身前ナラ確實ニ反応デキナカツタ、前ダツタラナ」

「やっぱり変わったのね……!!」

最悪の事態になってしまった叢雲は普段は出さない焦燥感を露わにした。

【天璇^{メラク}】南方棲戦鬼という名前は正式名称として取り扱われていない。

理由は接敵や戦闘をする度に相手の戦い方に応じて艤装が複雑に変形し、他の深海棲艦に似てしまうほどありとあらゆる性質や力に特化した姿に生まれ変わっている事からだった。

その集合体の仮の名前として【天璇^{メラク}】南方棲戦鬼と名付けられ、普段はその姿で確認される事が多い事から名称では鬼クラスとして記されている。

だが――、

「アアソウサ。今ノ叢雲ノチカラナラバ多少本気ヲ出シテモ充分ト見タ。ココカラガ本番ダゾ……！ ナア!!!」

【天璇^{メラク}】南方棲戦鬼、対艦娘殲滅戦闘形態。

鬼クラスから姫クラスへ一気に戦闘能力が上昇した南方棲戦鬼の本当の姿。

先程搭乘していた黒い怪物の口のような艤装は左右に別れて腰艤装や腕艤装の一部となり、先程は艤装で隠れていた両足が生えて堂々と立っている。

身体の装甲は剥がれて白い肌の裸体が晒されており、前よりもエネルギーが具現化された紅い炎は紅白い炎となって燃えて輝いていた。

「コノ姿ニナルノモクシブリダア！ 流石ハ唯一ノ好敵手、ヤツテクレルト信ジテイタゾ!! サア思ウ存分戦オウジヤナイカ!!」

『?』叢雲との戦闘という永遠に湧き続ける興奮を抑えるのにも限界が来た【天璇^{メラク}】南方棲戦鬼は呼吸を荒くして目を見開かせ叫ぶ。

髪留めや身体に至る所で燃え盛る紅白い炎がより一層と燃え盛り、黒い鋼鉄の艤装を擦れ合わせて火花を散らし甲高い音を上げた。

南方棲戦鬼は白く細い右足を前に出して地面を踏む。

踏んだ地面の地表がひび割れて衝撃と共に舞い上がった。

「早く逃げて……!! 巻き込まれる前に早く!!!」

「ぐっ、ああ……!!」

「逃ゲレルカナアアアアアアア!!!」

叢雲が叫び、長門が起き上がる瞬間だった。

南方棲戦鬼は紅白い幻影を残して急発進急加速。

叢雲も迎撃の為に金色の光を身に纏い、鎗を構えて走り駆ける。金色の鎗と黒い艤装の鉄拳が衝突。

互いの攻撃を武器で弾き返し、火花が散る。

叢雲の鎗を持つ右手全体が後方へ、南方棲戦姫の右鉄拳も後方へ。体勢が不安定になるも即座に次の攻撃手段に移る。

その間、一秒。

弾き返された瞬間に無理やり腕を動かして攻撃する。

金色の鎗と鉄拳の攻防は激しさを増し、互いに寄せ付けない。

目に止まらぬ瞬速の攻撃による猛攻。

「ぐっ!!」

その猛攻に勝ったのは南方棲戦姫。

叢雲の金色の鎗を弾いて出来た隙を狙って前蹴りを食らわせた。

蹴り飛ばされた叢雲は頬が膨らむほどの吐血をして長門の地点を通り過ぎ、奥の壁に衝突。

濃い土煙と共に壁に大きな穴が出来た。

「叢雲ッ!!」

意識不明の古鷹と時雨を両腕に抱え、木曾を背中に乗せた長門は思わず蹴り飛ばされた叢雲を見て名前を叫んだ。

意識が揺らぐ頭とボヤけた視界、とてつもない激痛が広がる両足で立っているのが精一杯の長門は歯を食いしばって何とか歩き始める。

摩耶と川内による提督救助の成功を頼りに叢雲の命令に従って一歩進めた。

「くそッ……いー行かなく——」

大勢を抱えた長門がその一步を歩んだ瞬間、右方から瞬間移動のように殴り構えた南方棲戦姫が現れる。

気付いた時には既に黒い装甲の鉄拳が目前まで来ていた。

「させるかッッ!!」

大きな穴に佇む濃い土煙を掻き分け、金色の光を身に纏う叢雲が突進。

それに反応した南方棲戦姫は即座に身体を叢雲の方へ振り向かせ、

殴り構えた鉄拳を長門から叢雲へ変えた。

「来タナツツ!!」

クロスカウンター。

叢雲の金色の鎗は南方棲戦姫の左肩に深く刺さり、南方棲戦姫の鉄拳は叢雲の左脇腹に直撃していた。

互いの攻撃による衝撃が身体を伝って地面に伝播し、転がる瓦礫が吹き飛ばされる。

叢雲は鉄拳の殴打を食らって更に吐血し、顔を俯かせて膝を着いた。

一方で南方棲戦姫は鎗が右肩に突き刺さろうとも何事も無く左の鉄拳で殴り掛かる。

顔を上げた叢雲は高く跳躍して回避。

南方棲戦姫の鉄拳で地面が抉り取られ、瓦礫が空に舞う。

「行かなく……ては……!」

叢雲と南方棲戦姫の激しい戦闘を背景に三人を抱えた長門は唯一出口として機能している扉まで歩いていった。疲労が限界まで蓄積された両足をゆつくりと一歩ずつ動かし、喉が涸れるほど息を切らして汗を垂らす。

出口である扉は半分瓦礫で半壊し、自動開閉機能は壊されてしまっただが中途半端に開いて通行可能だった。

一刻の猶予も許されない状況下で長門は叢雲と南方棲戦姫の戦闘による衝撃で身を揺さぶられながらも扉だけを見て歩き続ける。

「早く……! 八階まで……!!」

199. 天魔の虚翼は全てを覆う

突如現れた空母水鬼と接敵し、その戦闘に勝利して翔鶴を取り戻した瑞鶴と不知火は地下軍事施設唯一の出口となる輸入港の安全を確保する為、徘徊中の可能性がある深海棲艦を警戒しながら動いていた。空母水鬼との戦闘によって瑞鶴は指一本足りとも動けないような大破状態であり、空母水鬼の束縛から解放された翔鶴も意識が無い状態になっている。

その為か現在動けるのは損害の少ない不知火のみであり、動けない瑞鶴と翔鶴は岩陰に身を潜めて不知火だけが行動していた。

「大きい……」

輸入港の扉は輸送艦一隻が丸々入れるほど大きく硬い鉄の装甲が何枚も重ねられて出来ているのが分かった。扉の両脇には人が出入りする専用のドアと足場が用意されている。

不知火は戦闘になる事を前提に身構えてドアを蹴破ろうとしたその時だった。

「っ!? まずいですね……!」

予備動作なく輸入港の扉がガガガと重い音を鳴らしてゆっくりと動き始めた。扉のすぐ側にあったパトライトが回転しながら黄色い光を放って点滅し、重く開かれる扉の隙間から海水が水飛沫を上げてなだれ込んでいく。

不知火は敵の深海棲艦が開けたと考えて速やかに近くの岩場へ身を隠した。

完全に開き切った重い鉄の扉が最後に響き渡るような衝突音を出して止まる。なだれ込んでいた海水が徐々に落ち着きを取り戻して灘らかになり、点滅していたパトライトが光を失った。

不知火はゆっくりと岩陰から扉の奥の全貌を覗き見る。

「何も見えませんか……少し近付きますか」

扉の奥は非常照明で照らされているものの、詳細が全く分からなかった不知火は音を立てないよう忍び足で接近を試みる。

扉が開いた以上は何か出てきてもおかしくないと細心の注意を払いなから扉の奥を覗いた。

扉の奥には貿易港湾に似た小さな港があった。

三つの航路と防波堤、黄色いダウンライトに照らされて貨物を引き出す軽量のガントリークレーンが設置されていた。

「開いたな。さて、後は不知火達と護衛艦隊を待つだけか……」

聞き覚えのある声が聞こえた不知火は姿を目に映すまで身体を少しずつ動かして視界を広げる。

そこにいたのは――、

「天龍さん！」

地下軍事施設に潜入していた天龍だった。

味方だと確信して身を乗り出した不知火は輸入港の中へ入り、防波堤まで跳躍して天龍の元へ近付く。

「不知火！ よかった、先にいなかったからどうしたものかと思つたぜ」

「すいません、こちら側で少しトラブルがありました……互いに戦闘は避けられないようですね」

右腕や脇腹に火傷跡を残した天龍を見て激しい戦闘を繰り広げた痕跡が確認できた。

天龍から聞いた話では搜索中に待ち伏せしていた【テラスティア巨門】戦艦棲姫と接敵し、『？』オウゲン叢雲の応援が来るまで戦闘して耐えていたと言う。

不知火は作戦の状況が思った以上に危機的である事を察した。

今ここに天龍がいるという事は叢雲は七壊星の戦艦棲姫と戦闘しており、提督の搜索時間が逼迫しつつあるという事になる。

何か不吉な予感がした不知火は手に顎を乗せて考える姿勢を見せた。

「そつちも何かあつたみたいだな……酷え怪我だ。大丈夫なのか？」

瑞鶴はどうしたんだ？」

「現在は外を出た崖の岩陰にて休んでもらっています。何せ輸入港へ向かう途中にあの翔鶴の身体を奪った空母水鬼と接敵し、戦闘になつたので。最初は危うい状況になりましたが瑞鶴さんが決死の覚悟で

空母水鬼を打倒し、翔鶴さんを取り戻す事に成功しました。ですが……」

自身の右腕全体が流血によって赤く染まっているのを心配がる天龍へ不知火は今まで起きた出来事を簡単に説明した。突然空母水鬼の襲撃を受けて戦闘が勃発し、瑞鶴が一人で翔鶴を取り戻さんと勇敢に戦った事を。

翔鶴に扮した空母水鬼の襲撃やその後の戦闘の話聞いて天龍は驚きの声を隠せなかった。

「翔鶴って……まさかウチの翔鶴か!? 何で奴がここに……ってそれよりも、ああもう情報量が多過ぎるな!! 頭がイカれそうだ」

「とりあえず今は作戦に集中しましょう。金剛さんはどうしました？」

「金剛? ああ、金剛ならあの馬鹿デカイ扉のレバーを引いて、このコンテナ倉庫の奥にある輸入港のコントロール室から来るぞ」

唯一外へ繋がる輸入港の重い扉を開いてくれたのは金剛のようだ。

輸入港から地下軍事施設の間にある広々とした地下コンテナ倉庫の角に輸入港全体を仕切るコントロール室があったらしい。

幸い地下コンテナ倉庫や輸入港には深海棲艦の姿は無く、照明も閉ざされたまま放置されていたようだ。天龍の背後には両脇に巨大なコンテナが淡く黄色く照らされて積み上げられており、一番奥には地下軍事施設へ繋がる扉が小さく見えた。

「それはよかったです。しかし何故天龍さんと金剛さんがこちらに？」

司令の搜索中かと思いますが」

輸入港に現れたのが天龍と金剛の二人という事に不知火は一瞬頭の中で提督が見つかったのかと淡い気持ちを抱いていた。

だが天龍の表情から察するに提督に関する事ではない事を不知火は内心気付いており、提督について言おうとした言葉が喉に引っ掛かる。天龍は視線を背後に移してコンテナ倉庫のコンテナの陰に母親と娘の親子二人が隠れていた。

「搜索中に收容施設で拘束されていた人達を見つけたからな。作戦中とはいえ、捕らえられている人達を見捨てる事なんて出来ない。例

外つて事で俺たちはこの人達を保護する事にしたんだ」

「なるほど、そのコンテナ陰に隠れている人達が捕らえられていたのですね……少し不吉ですね、一般人の捕虜など戦争勃発当時から数々の深海棲艦の施設を占拠しても全く無かったのに」

天龍の傍へ不安そうに寄る親子二人を見て不知火は手に顎を乗せて顔を俯く。

一般人の捕虜は今この地下軍事施設で確認されたのは初めてであり、拭えない一抹の不安が頭の中を過ぎっていた。長い深海棲艦の戦争史の中においても一般人の捕虜の事例は全く前例が無く、人類の滅亡を狙う深海棲艦が一般人を捕虜にするのは珍しい。

不知火は何か嫌な予感がしてならないと心をざわつかせていた。

「確かにな……この地下軍事施設も何か胡散臭いし、戦艦棲姫の奇襲も含め色々と怪し過ぎる」

「天龍！ 不知火！」

二人が話している最中にコンテナ倉庫の端から金剛が名前を呼びながら手を振って走ってきた。

不知火と合流出来たのが嬉しかったのか安堵した表情で天龍の元へ合流する。

「金剛さん！ 大丈夫ですか？ その怪我は？」

「私は大丈夫ネ！ それよりこの人達を外へ——」「皆!!」

金剛が親子二人を急いで外へ脱出させようとしたその時、コンテナ倉庫の奥から聞いた事のある声が聞こえた。

三人が振り向くとそこには意識を失った提督を背負い込んで走る川内がいた。提督の姿を久しぶりに見て笑みをこぼした三人は川内の元まで急いで走り飛ばす。川内も急いで走って来た様子で汗を流して息を切らしながらやつとの思いで輸入港に来たようだ。

「川内!! 見つけたんだな!! 流石だぜ!!」

「よかった、やっと提督の姿が見れた……川内、ナイス！」

「意識は無いようですが呼吸はしていますね……よかった……！」

三人へ合流した川内は両手を両膝に乗せて何度も大きく呼吸し、乾いた喉を潤そうと唾を飲む。川内の背中に乗る提督の姿を見て三人

は安堵した表情を隠せずにいた。反応が無い提督の容態を確認すると、どうやら意識を失ったまま身体が動かない状態のようだ。

走って疲れきっている川内の負担を少なくしようと金剛が川内の代わりに提督を抱え、また提督の負担にもならないよう細心の注意を払ってゆつくりと背中に乗せる。

身が軽くなった川内は荒れた呼吸を徐々に落ち着かせ、金剛たちの顔を見るやいなや必死の表情で大声を上げた。

「緊急事態だよ!! 早く提督を救出してこの施設から脱出しないと大変な事になる!!」

「ど、どうした川内!!? 何があったんだ!」

「この救出作戦は最初から奴に全て読まれていた!! 私達の潜入ルートや分担場所、通信内容まで全て把握していたんだ!! 今起こってるこの状況も奴の掌の上、急がないと!!」

川内はこの作戦と状況が逼迫しつつある事を伝えようと頭の中に出てきた言葉で精一杯伝えた。もう立ち止まっている余裕など無いと川内は不知火の顔を見て肩に手を乗せ、急かして何度も身体を揺らす。見た事のない慌て様に不知火は慌てる川内を落ち着かせようと冷静に声を掛けて話を聞いた。

「お、落ち着いてください川内さん! 奴って誰ですか? 摩耶さんはどこへ……?」

「メグレス【天権】深海鶴棲姫……! この作戦に関わる支障は全て奴の仕業だよ……!! 通信障害、七壊星との接敵は奴が仕組んだモノだった!

摩耶は今、奴と戦って時間を稼いでくれる……! 叢雲も危ない!!

叢雲は『テラスティア巨門』戦艦棲姫を倒した直後に『メラク天璇】南方棲戦姫と連戦してるんだ!!」

川内の恐るべき陰謀の内容を聞いて三人は同時に動揺して驚きの声を上げた。

この提督救出作戦中に起きた『テラスティア巨門』戦艦棲姫との接敵や各ペアとの通信障害は全て七壊星の一人として恐れられている『メグレス天権】深海鶴棲姫の仕業だと言う。

外では日本の各海域にて七壊星と思われる深海棲艦が出現し、担当

の鎮守府が対応にあたっているようだ。

更には摩耶や叢雲が七壊星と戦闘中だと聞いて作戦の状況が予想以上に差し迫っていた事に焦燥感を覚えた。

「……分かった……色々考えてはみたが……今俺たちに来るのは提督と親子の救出だけだろ。摩耶と叢雲の援護に行つたところで足手まといになるのは目に見えてる……」

「そうネ……それで私達はこれだけの怪我を負ってしまったタ……まだまだ力の差はある」

出来れば加勢に行きたかつた天龍と金剛は最初に接敵して戦闘となつた『巨門』テラスティア戦艦棲姫の事を思いだして歯を食いしばつて拳を強く握つた。

力不足の自分たちが摩耶や叢雲の加勢に入れば却つて邪魔になつてしまうのは明らかだ。

七壊星との力の差は未だ歴然であり、今ここに生きている事さえ奇跡としか思えない。提督の救出が完全に成功するまでは戦つてもらうしかないと力不足故の悔しさと分かつていながら見て見ぬふりをしてしまう罪悪感に飲まれながら提督の救出だけを考えて。

「そうですね……今はとりあえず提督と親子の救出を最優先に動きましょう。貴女がたは天龍さんと金剛さんについていくように。外へ出ましょう！」

不知火たちの目的は提督と親子二人を安全に保護し、この地下軍事施設から一刻も早く脱出する事。四人の目に映るのは輸入港の扉から見える朝日が徐々に登つて青みと明るみを取り戻しつつある水平線。

天龍と金剛が親子二人を抱えて川内が提督を背負い、不知火が前に出て護衛を担当する。

不知火たちはコンテナ倉庫の中央を駆け走り、輸入港の扉へと向かつた。

「誰だ!!」

不吉な声が聞こえた。

その声は敵意を剥き出しにした警戒を周辺に促す声。気付けば輸

入港の扉周辺には深海棲艦の水雷戦隊が帰還してきていた。

「艦娘ダト!？」

「ナゼ奴等ガ此処ニ!？」

不知火たちを見た深海棲艦は起きるはずのない地下軍事施設への侵入に驚き、咄嗟に艀装の砲口を向けて威嚇した。

予想外の出来事に更に焦燥感に苛まれた天龍と金剛は親子二人を降ろして背後へ守るように誘導し、艀装の調子を見ながら深海棲艦の方へ視線を移して戦闘態勢に入る。

深海棲艦の水雷戦隊は輸入港の扉を潜り、コンテナ倉庫の手前にいる不知火たちへじわじわと追い詰めていく。

「まずいな……! 連合艦隊のここから補給してきた奴等が戻ってきたぞ」

「ざつと見た数は十二隻……どれも手負いっぱいネ」

「とはいえ状況は変わらない……外で隠れている瑞鶴さんが心配です」

戦闘になる事は避けられないと悟った川内は親子二人に意識を失った提督を任せ、コンテナ倉庫の積み上げられたコンテナの陰へ避難させる。

金剛の言った通りに現れた深海棲艦は十二隻、恐らく連合艦隊との戦闘から離脱して補給や修復を目的にここへ来たのだろう。

どの深海棲艦も赤い血を流しており、腰や腕の艀装が黒煙を上げている。

「こうなったらもうやるしかないようだな」

「私達だって手負いだけど死ぬつもりはないヨ」

「早く摩耶達を助けたいんだ! こんなところで躓いてられない!」

「そうですね……では……」

天龍は艀装の大大刀を持って刀先を深海棲艦に向けて構え、金剛は拳を握って殴り構える体勢になる。

川内は口元まで隠していた白いマフラーを首元に全て寄せ体勢を低くし、不知火は左手へ白い手袋を再度身に付けて拳を握った。

「奴等ハボロボロダ! マトメテカカレ!!」

「行きましようかッ!!」

——地下軍事施設最下層、ヘカントケイルの間。

「ツタク……運命ツテノハ理不尽デシカナイナヨナ」

頭上の景色を仰ぐ【天璇^{メラク}】南方棲戦姫が物珍しく施設の状況を見て眺めている。

三本の黒い塔「ヘカントケイル」の中心で輝く紅白い光に照らされながら戦闘相手の叢雲の方へ振り向いた。

「何事モ無ク順調ニ進ンデイタハズガ突然降り掛カツタ災厄ニヨツテ全テガ壊サレル……ソウ思ツタ事ハ無イカ？」

叢雲は必死の形相で金色の鎗を横にして南方棲戦姫の脚撃を受けて防いでいた。

無理やり押し潰し潰そうとする南方棲戦姫の力があまりにも強過ぎて叢雲は力を踏ん張るのにも精一杯で押されていく一方だった。

既に呼吸は荒れて左目は流血によってほぼ見えないような状態であり、全身の至る所に紫がかった打撲跡が夥しく残っていた。

「ナア……叢雲？」

声を掛けた南方棲戦姫は踏み潰されそうな叢雲を更に踏み潰そうと力を込める。

その瞬間に叢雲の周囲の地面が隆起して凹み、コンクリート床の破壊音が轟いた。

二人の辺り一帯が地震の如く激しい揺れを起こし、叢雲は赤く染まる歯を食いしばって踏み潰されないように全身に力を入れる。南方棲戦姫の放つ凄まじい衝撃で身体全体の筋肉や骨が赤子のように悲鳴の声を上げているのが分かった。

「そりや……！ 勿論ツ……！ 嫌なほど……経験してきたわ……!!」

それでも叢雲は南方棲戦姫の力に反発して全ての腕と脚に力を込めて徐々に低くなっていた腰を上げていく。

金色の光を身に纏い始め、叢雲の足の周囲で更に地面が割れて隆起

した。

「でもね……！　その運命のお陰で……！　私はッ……！！　ここまで来れたッ……！！」

段々と反発する力が増幅していく事に気付いた南方棲戦姫は嬉しそうに口角を上げて笑みを浮かべる。

対して叢雲も南方棲戦姫を見上げて余裕そうに嘲笑した。

「簡単だったわ……！　アンタの攻撃……！！　今ならやれそうね……！！」

実際に叢雲にそんな余裕はない。

ただの痩せ我慢に過ぎず、南方棲戦姫の気分を少しでも崩そうと嫌味を込めて煽った。

「ヘエ……ソウカ。ジャア、コウイウノハドウダ？」

腕艦装と腰艦装全て合わせた計十六門の砲口が叢雲の目前に向けられた。

叢雲が息を飲んだその刹那、大爆発。

その大爆発の黒煙から叢雲と【天璇】^{メラク}南方棲戦姫が並行して現れた。互いに走り駆けながら隙を与えぬ攻撃を挟んでいく。

叢雲の金色の鎗による斬撃と南方棲戦姫の黒い鋼鉄の拳による打撃が交差する。

擦れ合い、弾き往なし、受け流す度に火花が散っていく。

超人同士の剣戟のように目に追えぬ乱撃が続いた。

が、南方棲戦姫は叢雲の金色の鎗の斬撃を弾き、大きい隙が出来た叢雲を蹴り飛ばす。

広間の壁に激突し、南方棲戦姫を覆うように土煙が立ち上った。

土煙の頂点から金色の十字光が穴を開けて現れる。

叢雲は身体を回転させ、金色の鎗を片手で持つて勢いよく振り下ろした。

南方棲戦姫は黒い鋼鉄の腕艦装で防御。

瞬時に叢雲は稼働可能な砲塔で至近距離から砲撃。

金色の光を浴びた南方棲戦姫は直後に砲撃を食らう。

その衝撃で南方棲戦姫は後方へ撃ち飛ばされた。

南方棲戦姫から距離を取れた叢雲は出方を探って金色の鎗を構える。

叢雲の視線の先には黒煙に包まれた南方棲戦姫の姿が見えていた。残り少ない砲撃を至近距離で食らえば南方棲戦姫だろうと無傷では済まされない。

先程の叢雲の砲撃で南方棲戦姫の脇腹と左頬が浅い火傷跡が残っていた。

「戦う事二夢中ナノハ構ワナイガ……オカシイト思ワナイカ？」

「何が言いたいのよ……！」

黒い鋼鉄の艤装の左腕を上げると南方棲戦姫の顔は企んだような表情で叢雲に話し掛ける。

突然何を言い出したのかと思えばと苛つきを露わにする叢雲は荒れた呼吸を落ち着かせながらも周辺を見渡した。

奇襲を受けて損害を受けた長門達は逃がせているはずだ、近くにいるのは自分が倒した【巨門】テラスティア戦艦棲姫が横たわっている。

が――、

「まさか……!!」

「私二夢中ニナルバカリ周りニ気ヲ配レテナカツタヨウダナ」

この大きな広間の中に自分が倒したはずの【巨門】テラスティア戦艦棲姫の姿が全く見えなかった。

何度も左右を振り向いて辺りをくまなく探してもその姿が全く見当たらない。

これから起こりうる最悪の運命を予測した叢雲は初めて顔を青ざめるような戦慄した表情を見せて声を上げる。

「まずいッ……!! 早く――」

声を上げたその時、プツンと何かが途切れたかのように叢雲は身体を仰け反らせる。

直後、叢雲は膝を着くも金色の鎗を地面に突き刺して杖代わりに何とか倒れるのを我慢した。

叢雲の口や鼻から大量の血が溢れ出し、嗚咽と吐血を何度も繰り返す。様子がおかしい叢雲を見た南方棲戦姫は不思議そうに声を掛け

「ん？ た。
ドウシタ叢雲……？
アア……成程、ソウイウ事カ……」